

Nihon meicho zenshū; Edo
bungei no bu



日本名著全集
江戸文藝之部第九巻

浮世草子集

この巻の装幀——

背及表紙意匠	矢澤弦月氏畫
見返し前附・後附	矢澤弦月氏畫
背文字	渡邊新三郎氏筆
扉文字	近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案	小杉未醒氏畫

浮世草子集目錄

風流御前義經記　元祿十三年　西澤與志　六五

けいせい色三味線　元祿十五年　江嶋其磧　一九五

日本新永代藏

正德三年　北條團水……………………五六一

（目錄をはり）

解説

山口剛

一

今日では、そのまゝに當世の義と解し、現代といふ語をあてゝ、直に合點のゆく浮世草子の浮世であるが、その以前には、憂世の浮世との區別に、相應な手續を要したやうであつた。

その手續の一つが、浮世袋の浮世の穿鑿に於いて見られる。考證一章は、山東京傳の「骨董集」に載せられてゐる。

女の童が針業の習ひはじめに、絹を三角に縫ひ、綿を入れて袋の形とし、上の角に絲をつけて玩びとし、また淡嶋神の手向とするものに浮世袋といふのがある。それが古の遊女屋の暖簾の縫留となつてゐる三角形の紫革の遺風であらうか、それともその頃の嫖客が腰に佩びた火打袋の名殘であらうか、との考證が、浮世袋の浮世から、浮世狂ひといふ言葉を導き出された。

京傳は浮世狂ひを遊女に戯れることであると解した。用例を「吾吟我集」「新續犬筑波集」「好色五人女」「俳諧絲屑」などに求めて、その言葉が慶安明暦貞享元祿の頃まで行はれてゐたことを證した。浮世といふ言葉そのものゝ解釋も、それ等の用例から下された。

なほ案るに、昔はすべて當世様をさして、浮世といひしなるべし。これも古き事にや、能の狂言の「き

んじむこ」といふに、舅のいへる言に「やいくわんじや、婿どのはうきよ人じやによつて云々」といふことあり。これ當世人といふが如し。岩佐氏を浮世又兵衛といひしも、當世様の人物を畫きたるゆゑならん。

又案るに、貞享の比かける物の本に、浮世笠あり、雍州府志（貞享元年）に、浮世御座あり、江戸室町の横町を浮世小路といふも、昔浮世笠、浮世御座などをもはらに賣しゆゑの名にはあらずや、今も其たぐひの商人あればなり。

この考證が誰彼の注意を惹いて、更に浮世袋の穿鑿を重ねさせ、また浮世の解のおひつぎをさせた。柳亭種彦の浮世の考證は、直にこれの後を受けてゐる。「柳亭記」に收められてゐる。

浮世といふに二ツあり、一ツは憂世の中、これは誰々も知る如く、歌にも詠て古き詞なり。一ツの浮世は今様といふに通へり。浮世繪は今様繪なり。浮世人の人みな是なり。此の事醒翁の浮世袋の考にあれば、くはしくいはず。

種彦は京傳の浮世狂ひの解釋について、少しく訂すところがあつた。

浮世狂ひといふは、遊女、藝子にもかぎらず、すべて女に戯れあそびありく事をいふ。故に俳諧にては戀とするなり。寛永十三年印本親重撰「はなび草」

うき世狂ひなどは述懐にあらず、戀の世になるべし

俳諧に是より古きは見えず、醒翁は引おくれたり、「はなび草」多板あり、こゝに引しは原板、

種彦はまた今様と解すべき浮世の古き例として、文明十三年の「平安紀行」の中の歌一首を掲げてゐる。た

だし、それは牽强の嫌ひがある。

みる度におもしろければ富士の根の雪はうき世の姿なりけり

うき世の姿是則今様の姿なり、文明の頃よりは一方の浮世の詞なり。

二

ものゝ順序として、斯ういふ手續が前にあつたれば、今日では、風俗史を繙きさへすれば、貞享元祿の頃に、いかに浮世といふ言葉が格段の魅力を持つてゐたか、その流行が上村吉彌の紋所にまで及んで、最屓筋を喜ばせたかをも数へて貰へるし、辭書を繰りさへすれば、浮世何々といふ事物の名が、いかに多く存在してゐたかを數へ立てることも出來る。

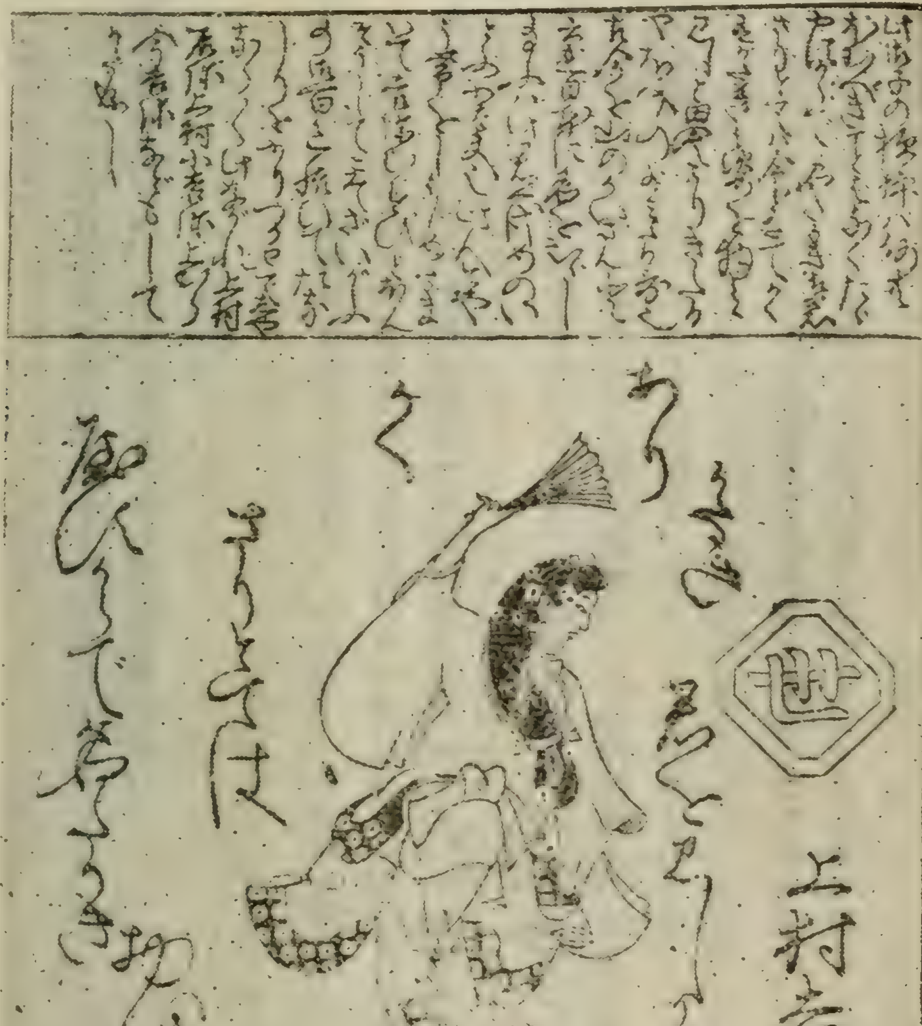
その結果は、浮世すなはち當世だけでは、あまりに明瞭に過ぎて、却つてもの足らぬ感をさへ懐かせる。浮世草子の如きも、當世草子であるとして、廣い意味でいふ元祿時代を、當世と呼びなす昔に於いて、その頃の世相を寫實的に扱つた小說であるとの解釋は、まさにその通りといひ決ることが出來るだけに、結句痒いところに手の屆かぬ憾みがあつた。

それは當然のことである。いふところの浮世草子の內容に卽していへば勿論のこと、少くとも京傳種彥によつて引用せられた浮世狂ひといふ言葉一つを考へただけでも、も少し狹く深く、限つた意味を見出してもよいやうである。

京傳は浮世狂ひを遊女に戯れることと解釋した。種彥はその義を廣めて、玄人素人の別なく、すべて女に

戯れ遊ぶことと訂正した。しかも浮世狂ひの用例の多くから考へれば、また足りない。若衆に戯れ遊ぶ義の存在も認めてよかつた。その頃の口癖である色道二つの女色男色に亘つていふべきである。これもその頃にいはれてゐる好色といひかへてもさし支へがなささうであつた。

更に浮世狂ひと



「芝居百人一首」所載

同様の意義を有する浮世遊び、その他の言葉からの類推は、浮世そのものにすでに浮世狂ひ、浮世遊びの意義のあることを見出される。浮世すなはち好色ともいつてしまつてよいかも知れない。吉彌の紋所には、さういふ意味も何分は纏綿してゐたらうか。それならば浮世草子をも、好色草子とも見ることが出來はしまいか。

今日の江戸小說史の扱ひは、天和二年に大阪で出板された井原西鶴の「好色一代男」を界にして、太い線をひくことになつてゐる。それ以前を假名草子時代、それ以後を浮世草子時代と稱してゐる。であるから、浮世草子といへば、「一代男」にひき續く西鶴の諸作物、及びそれに隨從する諸作家の著作、また八文字屋本、なほその後、「英草子」一類の怪談物の流行による壓迫をうけながら、辛くも餘喘を保つてゐる明和安永の頃までの氣質物、つまりは假名草子以後、江戸の讀本全盛以前に於ける上方の小說の大體を總括することになつてゐる。この分類はもとより便宜のためである。內容からいへば、「一代男」以後のものにも、假名草子と何等擇ぶ所のないのが多い。そればかりでない、天和から安永頃までの作物には、推移變遷のあとは甚しい。形質共にかなりの相異がある。それを一樣に浮世草子といふのは、あまりに空漠に過ぎる。便宜のための分類が、却つて不便を來す場合が稀ではない。たゞ全體を通じて、ある傾向が見られないことはない。出發がそれでであつただけに、何といつても、好色が强く脈をうつてゐる。

それ等の日に於いては、浮世草子の名は、決して今日いふところの浮世草子を獨占するものでなかつた。當世本とも、浮世本などの區々の稱へがある中に、好色本、慰み本、または色草子の名が際立つて用ゐられてゐた。それといふのも、所謂浮世草子は好色を基調としてゐるからである。

浮世草子すなはち好色草子の解は許されるどころか、浮世草子にして、好色に亙らぬものは、むしろ變體のものであり、變質のものであるとも見ることが出來る。

これには長い說明を要することであらうが、その頃の好色といふ言葉は、直に性慾を意味しなかつた。勿論、性慾が基礎を成してゐるものゝ、その性慾を離れて、性慾をとり繞る甘い、美しい、あえかな空氣に陶醉する狀態をさしていふことが多かつた。

好色はしばしば、風流とも、餘情ともいひかへられてゐた。おもはれる事は、平安朝のすき心とこの好色の關係である。聯想はまた平安朝の世また世の中と、この浮世の關係にまで及んで來る。

種彥は浮世に二義ありといつたが、斯ら考へて來ると、まづさし當つては、三義ありといはねばならなかつた。憂世、當世、それから好色。浮雲のやうなはかない世の中、それをういともつらいとも觀ずる憂世が、單なる人生の意義を中に介して、當世の義に轉ずるのは、必ずしも問題でない。その當世が何故に好色の義に轉じたかは、いつの世もさうだといへばそれまでだが、元祿時代の特相として、當時の民衆生活の上から考へねばならない。更にまた佛が敎へる無常に出づる憂世と、煩惱のかぎりを盡す好色との不思議の契合に至つては、遠く元祿以前に溯つて考へねばならぬ筋道があつた。

三

人の身にどうあつても避け難いのが死の將來である。この世を憂世といふのも、これがためであつた。今、憂世を死といひかへ、好色の意味を、なほ一段とおし擴めて歡樂といひかへて見る。憂世と好色の關係

を、そのまゝに死と歡樂の關係として考へることが出來る。さうすれば二者の契合に、さまでの不思議はない。享樂主義者の言説にして、端をこれに發してゐない者がないからである。

人間たる者は、不定期の執行猶豫を與へられてゐる死刑囚のみ、といつた人があつた。また、その言葉を引いて、さういふ猶豫期間を最も聰明に、最も有効に過さうとする者は、たゞ藝術にこれよる、といつた人があつた。

日を積んで月、月を重ねて年、その幾年を生き得るといふのではない。生きてゐるのはたゞ刹那である。この刹那から次の刹那へと移る間である。かうまで、はかないのが人の命であるならば、人の努むべきは、せめてこの刹那の印象をきざやかに感受すること、ゆがみなく理解することでなければならない。かくも刹那を充實し、刹那を享樂するための最も有効な最も聰明な方法は、藝術あるのみといふのである。

近代享樂主義はこれ等の言葉の上に、理を構へてゐるとのことである。

もとより、これ等と大きい距離を隔てながら、またなみなみならぬ類似の認められるが、わが兼好法師の言説であつた。浮世草子の浮世の意義を詮議する場合に、あの「徒然草」は、どうしても片寄せてはならなかつた。浮世草子は「徒然草」などによつて導き出された傳統をうけてゐる。

牛を賣る者があつた。明日金の取引をしようとするその夜の間に、牛が死んだ。これによつて、牛の主は金よりも大きい利を得た。生ある者、死の迫るを知らないことは牛の死がすでにその例である。牛の死が偶然なれば、主の存命もまた偶然である。主は牛の價幾何を失つただけで、おのが偶然の生を認めて、この無價のよろこびを得たのである。

「徒然草」の有名なる一段は、まづこれに言を起して、生を樂しむべき理を說いてゐる。

人死を憎まば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々に樂まざらむや。おろかなる人、この樂を忘れて、いたづかしく外の樂を求め、この財を忘れてあやふく他の財を貪るには、志みつ事なし。生ける間、生を樂まずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人皆生を樂まざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るゝなり。

昨日も生きてゐた、今日も生きてゐる、明日も生きてゐるものと決めてかゝる馴れ心は、昨日も今日のけじめもなく、たゞうかうかと夢のやうな生涯を過させる。みづから顧みて、わが生を樂しと見る期はあるべくもない。生の怡樂は、念々たえざる死の恐怖の襲來によつてのみ得られる。今日といはず、明日といはず、今の刹那のみ生きてゐると思うて、刹那の生活を充實させなければならない。

兼好は別の段に於いてしるしてゐる。

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚なるか。愚にして怠る人のためにいはゞ一錢輕しといへども、これを重ぬれば貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。刹那おぼえずといへども、これを運びてやまざれば命を終ふる期忽に至る。されば道人は遠く日月ををしむべからず。たゞ今の一念空しく過ぐることを惜しむべし。

いふところは、刹那を惜しみ、一念を惜しんで、內に思慮なく、外に世事なくしてやまん人はやみ、修せん人は修するといふ境に到達させるための用意であつた。しかし、この用意は、わづかに方面を轉ずれば、あの近代享樂主義の說くところと符節を合はせんとする。

兼好のいふ生の樂しみとは、單なる存命のよろこびを意味しないことは勿論である。その意一にものゝあはれの體現を期してゐる。

ものゝあはれは美を焦點とする感激の生活である。感激は無常によつて、生活期間を狹められることを前提として一段の度を加へる。もしも、人生が永遠であつたならば、どうしてこの感激を持することが出來よう。「世は定めなきこそいみじけれ」とは、無常がものゝあはれの存在の第一條件であるからであつた。

眞人がある、正覺の人がある、彼等は生死を一如と觀じて、寂然としておのれを保つてゐる。兼好は彼等に窮りなき憧憬を寄せながら、行うてそこに達し得ないことを不甲斐なく思ひながら、時に達し得ないのを喜ぶが如き色を示すのは、いな、却つて誇るけはひをさへ見せてゐるのは、ものゝあはれを失はないうれしさ故であつた。

正覺に心を傾ける兼好は、つひに世を捨てた。しかし、ものゝあはれに心惹かれる彼は、ひたぶるの世捨人となることが出來なかつた。こゝに異樣な隱遁者の型をつくりなした。

世のわづらはしさを避けて、山林の人となつて、却つてこの世を樂しく過さうとする支那の隱遁の思想も、また兼好等の隱遁思想に與へることの多いのはいふまでもない。

兼好のものゝあはれは、平安朝に於いていはれてゐるのよりも、更に複雜な特性を具してゐる。平安朝の人々が努めて避けてゐた無常感をも、一興趣として見ようとする。享樂の度を以ていへば、遙に彼を凌いでゐる。

かつては、破れることをおそれ悲める戀も、今は破るればこそうれしい戀と見られた。戀のたゞ中のみでな

く、はじめをはりを籠めて考へられた。戀の現實から、薄い絹の一重を隔てただけに、あこがれと思ひ出までをもとり集めて、戀の論議がしば〳〵兼好によつてなされた。浮世草子時代に、兼好を色法師とし、「徒然草」を好色の書とするのも、これがためである。「よろづにいみじくとも色好まざらむ男は、いとさうざうしく玉の盃そこなきこゝちぞすべき」あたりは、隨所に引用せられてゐる感句であつた。

世を遁れて、世と微妙な卽離の關係を持することに於いて、却つて世の樂しみを僅に享受しようとする享樂的隱遁者、わけて艶隱者などゝいふべき人々は、何も兼好にはじまつたのでない。平安朝と鎌倉時代の精神生活の特相の交錯するところ、この種の人々を出すことが多かつた。たゞ後世の種々の理由が、兼好をして代表者の地位を占めさせたのである。

かくして作られた傳統を、最も心して守る者は、室町時代に於ける連歌師の群であつた。

彼等は世外の徒であることを標榜して、法師姿をしてゐる。しかし、連歌の道に專であるだけに、常に平安朝の藝術の世界に神往してゐる。彼等はまたその頃の都の騷亂を避けて、旅から旅へと日を過してゐた。形は西行に似てゐようと、心のほどはたゞの遊樂僧であつた。

無常の世をはかなんで、世を捨てたにしても、死期に相違はない。靜なる山の奥、無常の敵きほひ來らざらむや、その死に臨めること、軍の陣に進めるに同じと兼好はいつてゐる。

しかし、今日あれば明日もあると思ひ込んでゐる人心は、どうしても死を恐れがちである。たゞ眼前に展開せられる軍の陣に、はじめて人生のはかなさを知るのが凡夫の常である。

とすれば、室町時代の戰亂は、無常を敎へ、從つて、ものゝあはれの尊さをつく〴〵と敎へてくれる筈である。

その頃うたはれた歌の一つ、

たゞ人は情あれ、夢の、夢の、昨日は今日のむかし、今日は明日のいにしへ、

時の永遠は期し難い。わが前にあるのは今日の一日のみ。昨日は今日から見ればすでにかへらぬ昔である。その今日も今あるが故に今日でこそあれ、明日になればもう遠い古である。斯らいふ夢に夢みるやうな世の中に、せめて生を托するあはれな人は、どうしたらよからう、たゞ情を以てするより途はない。情とは何、いふところの同情でない、情懷を廣くして、すべてを感受し、情感を敏くして、一切を享樂することである。ものゝあはれこれである。

しかし、ものゝあはれには、どうしても附隨する古典味があつた。遠き平安朝の生活に對する憧憬の一念が、謎のやうにつき纏うてゐる。室町の民衆は、もつと直截にその欲するところの歡樂に對することを要めてゐる。また隱遁者の群がなすやうな、ものの一重を隔てたやうな態度をとりたくなかつた。

また謠はれた歌の一つ

何せうぞ、くすんで、一期は夢よ、たゞくるへ

くるへは戲遊である。夢のうき世に、思ひ案じて何するものぞ、たゞ戲遊せよ、歡樂を縱にせよといふのである。浮世ぐるひといふ言葉はすでに脈々として動いてゐる。

更にまた謠はれる歌の一つ

夢の浮世の露の命の、わざくれ、身はなり次第よの、身はなり次第よの

かゝる思ひが萬ずるところ、どんな歡樂が要められるか、いはずとも明である。さうなると、死と對立する歡樂、無常と對立するものゝあはれは、いつか一つになつて、浮世は憂世の義を脱する、好色の義と融合しようとする。

「うらみのすけ」は慶長の末ごろの作といはれてゐる。

慶長九年の夏、葛のうらみの介は清水の萬燈に詣でゝ、豐臣秀次の臣木村常陸の忘れがたみの姫を見そめる。やう／＼に文の通路ほどの念はかなうたものゝ、逢ふよしのない苦しさに病に罹つて倒れる。姫はかなしき知らせを得て跡おうて自殺する。うらみの介の親しい友達は、二人の遺骨を黒谷に葬る。貴き回向に三尊の來迎を眼前に拜した。

一篇の趣向は、室町時代の戀物語の陳套を見せるだけである。しかし、文中往々慶長頃の民衆の嬉遊のさまが、さながら繪卷のやうに示されてゐる。

うらみのすけが一人清水に參詣して、欄干に腰うちかけて眺めてゐるくだり、

參りの道者をながむるに、其かず更にしらざりき、愛やかしこにあつまりて、思ひ思ひの物語、是よりすぐに豐國へ、いざや我等は祇園殿、扨は北野へいざ行て、くにがかぶきをみんといふ人も有、東福寺の橋にて踊ばや、五條にてなぐさまんと、我にひとしき友人を、引つれ引つれ作ひて、何れかよからましかばと、心の慰は、浮世許とうちしげる。

浮世許の浮世、こゝに注意すべき言葉があつた。うらみの介が音羽の瀧のもとに立ちよつて、人々の戲れ遊

ぶさまを見めぐらすくだり。

落くる水に盃をうかべ、さもいつくしき女房達、又若衆もうち交り、手まづさへぎる盃を、こなたかなたへ取かはし、遊山許と聞えける、夢のうき世をぬめろやれ、あそびや狂へ皆人と、世に有貌はうらやまし、

さきに引用した小唄を地にした歡樂の姿であつた。夢のうき世は、もうそのまゝに、好色の世とも許してよい草子の上の世界であつた。「うらみのすけ」はまづはじめに、主人公葛のうらみの介と共に、その親しいどちを紹介して、

爰に葛のうらみの介、ゆめの浮世の介、松の緑の介、君を思の介、半天の戀の介とて、其比都にかくれなき、色ごのみのおのこあり、

といつてゐる。この中のゆめの浮世の介が、西鶴の「好色一代男」の世之介及びその親夢介と交渉なしと、誰がいふことが出來よう、浮世草子の黎明は、序を以て迫つて來てゐる。

四

假名草子から浮世草子の轉機に充つものとして、重く見られてゐるものに、「浮世物語」がある。寛文の頃の作、淺井了意の筆になるかといはれてゐる。その卷一の「浮世といふ事」は、浮世といふ言葉の轉義の過程を示すに使よいとして、しば〳〵引用せられてゐる。

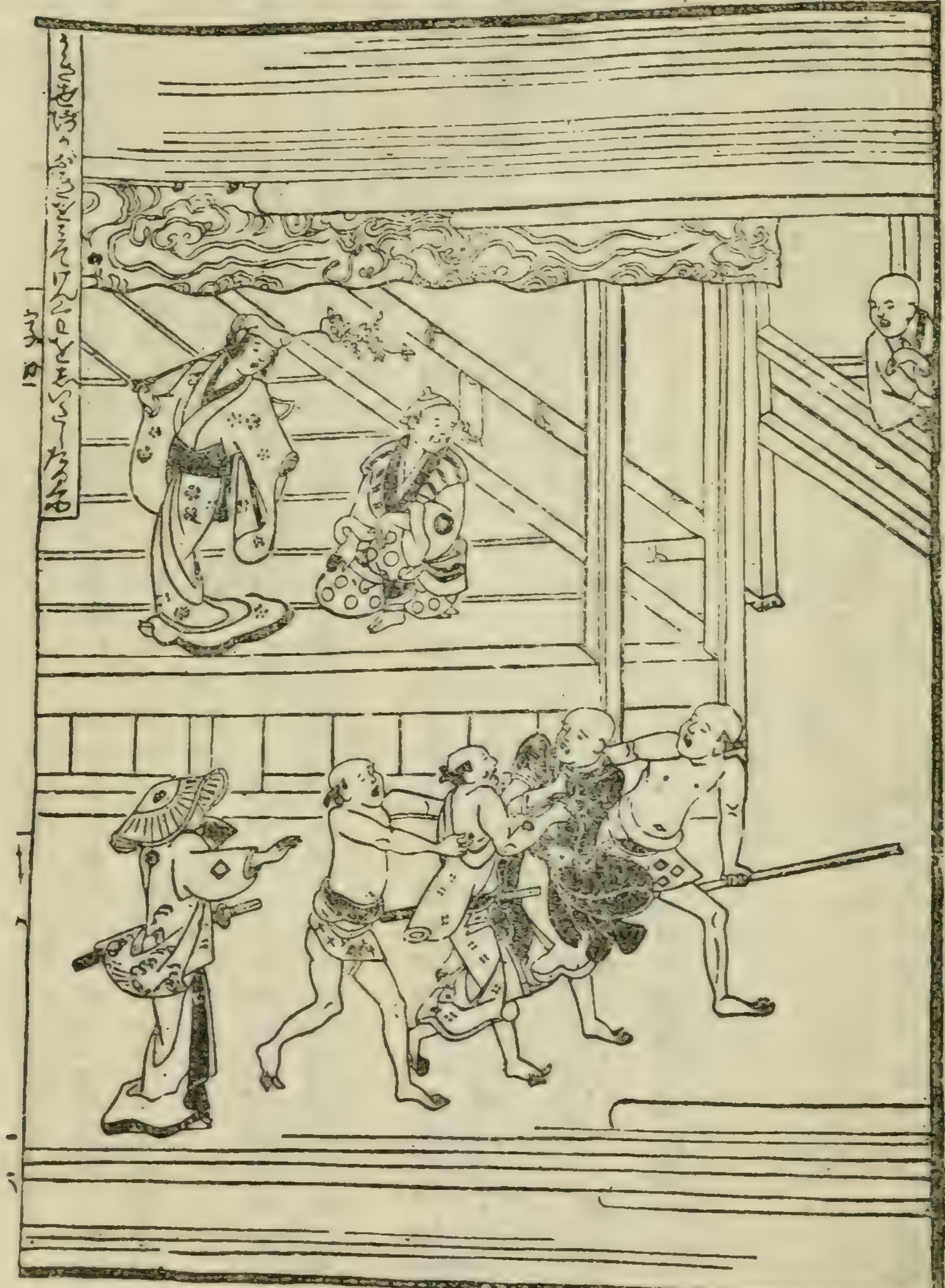
今はむかし、國風の歌に、いな物ぢやこゝろはわれがものなれど、まゝにならぬはと、たかきもいや

しきも、おとこも女も、老たるもわかきも、皆うたひ侍べる、思ふ事かなはねばこそうき世なれといふ歌も侍べり、よろづにつけて心にかなはず、まゝにならねばこそ浮世とはいふめれ、沓をへだてゝ跟を掻とかや、痒きところに手のとゞかぬごとく、あたるやうにしてゆきたらず、沈氣なものにて、我ながら身も心もわがまゝにならでいな物なり。まして世の中の事、ひとつもわが氣にかなふことなし、さればこそうき世なれといへば、いやその義理ではない、世にすればなにはにつけて、よしあしを見きく事みなおもしろく、一寸さきは闇なり、なんの絲瓜の皮、思ひおきは腹の病、當座當座にやらして、月雪花紅葉にうちむかひ、歌をうたひ、酒のみ、浮にういてなぐさみ、手まへのすり切も苦にならず、しづみいらぬ心だての、水に流るゝ瓢箪のごとくなる、これを浮世と名づくるなり、といへるを、それ者は聞て、誠にそれそれとかんじけり、

からなると、浮雲のはかなさが故の浮世ではない。融通自在、物と共に轉じて凝滯することなき、水に流るる瓢箪の浮世である。支那の市隱が然る如く、わが隱遁者にも、すでに形づくられた人生觀であつた。

「浮世物語」の主人公を浮世房といふ。父はある大名に仕へた追從輕薄の諂ひ武士とて、主君の恩寵を受けて出頭したが、大の臆病のために、戰陣に臨んで、一たまりもなく逃げ歸り、重ねて傍輩にも交らず町人となつた。かねて賄賂を貪つて、富を成してゐたので、有徳人として籠つてゐた。さすがに、後の浮世房であるわが子をば、町人で朽ちさせまい、せめては渡り奉公歩若黨にもしたいと、武藝や文筆を習はせたが、ものにならない。その中に父は死んだ。

浮世房の前名は、瓢太郎であつた。時の流行の博奕に産を破り、島原通ひに金を散じて、つひに澁帷子一重になつてしまつた。身すぎのかなしさに、武家方の奉公を志したが、今の世に、武勇も、首勘狀も、氏も、系圖もいらず、算露盤が出來るか、田畠のつもりが出來るか、米の賣様、金銀のま



「浮世物語」さし繪

はしを心得てゐるかの條件にかなつて、ある大名に召抱へられた。瓢太郎改め兵太郎の獻策は頻りに用ゐられて、家中へ出す知行に課役をかけて半分を取り戻し、百姓には妻子を沽却しても年貢に未進がないやうになる。一藩の疲弊が甚しい。兵太郎は怨府となつた。その中に、事あつて、彼は逐轉せねばならなかつた。心もすゝまぬ道心を起し、髪を剃つて、浮世房と名乘つたのはその後のことである。

浮世房はすぐに諸國修行に出かけた。名所舊跡を見巡つては狂歌を詠ずる。また時には僧衣を脫いで道服を着けて、醫師と稱して失策をする。見るもの、聞くものに興じては、ふざけのめし、洒落のめす。後には大名に仕へて、お伽の衆として、諷刺滑稽のかぎりを盡す。

いろ／＼の點から考へさせられる「浮世物語」であつた。浮世房が弄する諷刺滑稽は、これを、横にまた縱にその頃の流行してゐた假名草子中の敎訓物と結び合はせて見なければならない。その脈は遠く「徒然草」の形と兼好の態度にまで續いてゐることは勿論である。

その諸國遊歷の形は、早速に「東海道名所記」の樂阿彌陀佛と一つらにおいて考ふべく、やゝ離れて「竹齋草子」の竹齋の後を追ふ者として考ふべきである。いづれにしても、その以前の遊歷の連歌師の影として見なければならない。

をかしいのは浮世房の最期のさまである。

彼は仙術を行ふと長生不死の法を得たいと思つた。偓佺、趙瞿の故智を學んで、松脂茯苓を服する三七日の後、飛行を試みるとて、軒より降ちて腰骨を折つた。しかし、なほ仙をおもうて休めない。さらば蛻仙とならう。蟬のもぬけのやうにと思ふほどに、早くも行方知れず失せ果てた。

「浮世物語」と「好色一代男」とは、二者の間に、直接の關係として、どれ程の緊密があるかは知らない。しかし、結末に於いて、これの蜆仙と彼の女護島渡りとは、趣向に於いて多少の類似を認める。いな、二者の對比は、更に多くの類似を見、また多くの相異を見出す。類似の存在は、形態の發生に於いて同じ系統に屬するからである。相異の存在は、寛文と天和に於ける時相の距離である。これの浮世房の浮世と、彼の世之介の世と、その出立は一つであるものゝ、現はれたものゝ上に、また相應の變化がある。

五

浮世草子の第一作として、「好色一代男」が天和二年に出現するまでの手續は、十分に盡されてゐた。世之介が好色の義を浮世にいひ籠めて、名に負ふまでの順序もすでに果されてゐたのである。「一代男」はなほその好色が當世の生活に於ける最高標準であることを力說してゐる。すなはち世之介の世なるものは、當世と好色の二重語として解せられる。

櫻もちるに歎き、月はかぎりありて、入佐山、爰に但馬の國、かねほる里の邊に、浮世の事を外になして、色道ふたつに、寢ても覺ても、夢介とかえ名よばれて、名古や三左、加賀の八などを、七つ紋のひしにくみして、身は酒にひたし、一條通り、衣更て戻り橋、或時は若衆出立、姿をかえて、墨染の長袖、又はたて髮かつら、化物が通るとは、誠に是ぞかし、それも彥七が貌して、願くは咀ころされてもと、通へば、なを見捨て難くて、其比名高き中にも、かつらぎ、かほる、三夕、思ひ思ひに身請して、嵯峨に引込或は、東山の片陰、又は藤の森、ひそかにすみなして、契りかさなりて、此うち

の腹より、むまれて世之介と名によぶ、あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし、

これが「一代男」の書きおこしである。

櫻も散れば、月も山にかくれる無常の世の中に、孜々營々と産業にいそしんで何するものぞ、斯う思うて、二つの義を籠めた浮世を外に、色道二つに精進する夢介である。

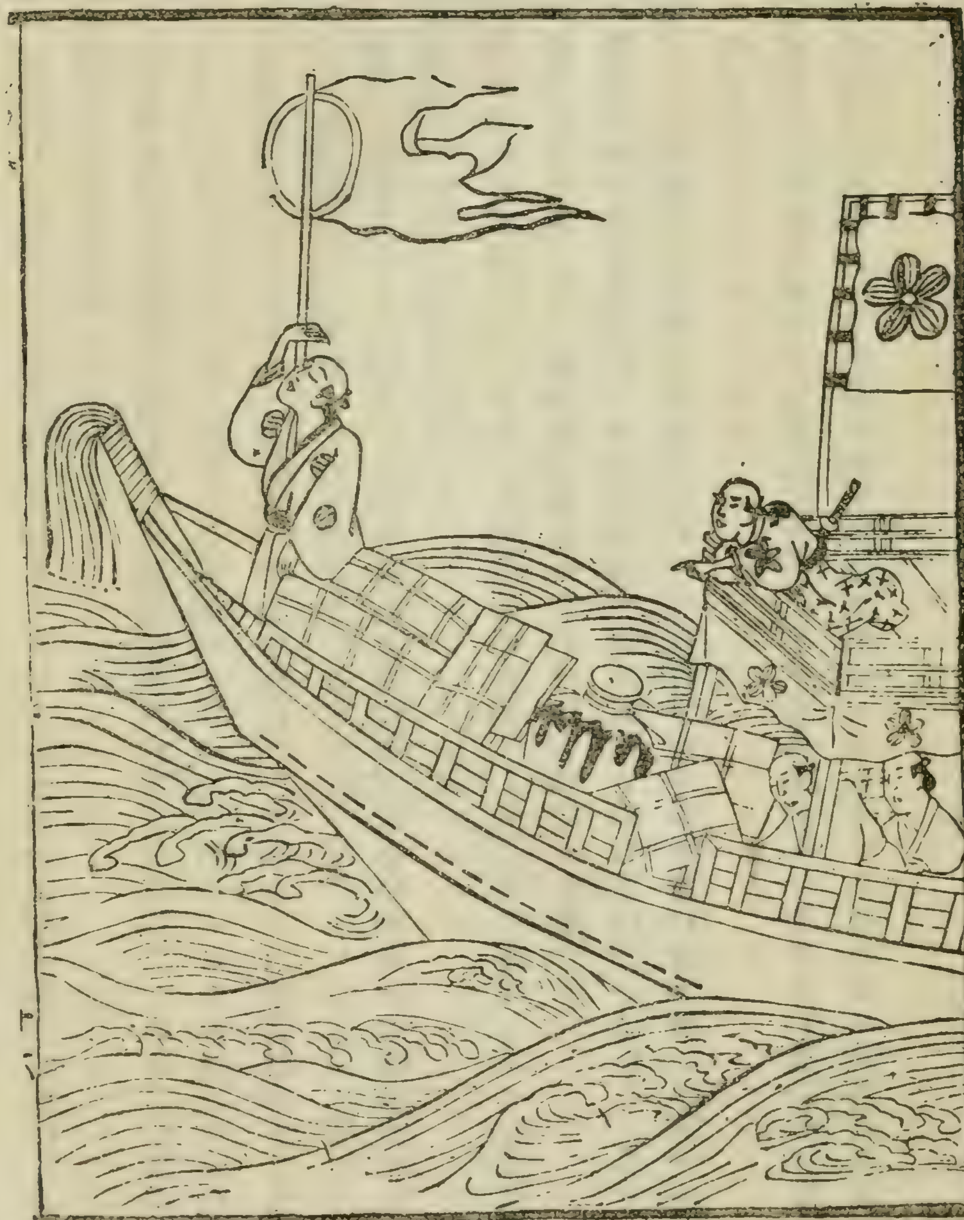
その遊蕩兒な父とし、島原の太夫を母として生れた世之介は、もとより生えぬきの町人である。彼は天下の町人の資を盡して、歡樂のかぎりを身に行はうの大勇猛心を持する當代の英雄である。父の遊蕩は未だ至らざるところがあつた。空しく憧憬を夢に托してゐた。世之介の努力は、父が追うて空しかつた夢の影を實現化するにあつた。

浮世房の父は、武士と町人の中間に彷徨してゐた。浮世房は世の歡樂を求めて、世捨人の形をとつた。世之介に至つては、町人の階級に始終し、純乎たる浮世人を以て行動してゐた。浮世草子の世界は、こゝに定つたのである。

西鶴の「一代男」に對する思はくは、一篇の浮世小說を草すると共に、俳諧の手法を以て「源氏物語」の翻案を縱橫に試みるにある。樂屋裏の興味からはあの光源氏の君を、今樣に移し、當世男にかへた腕前を見てくれといふのであらう。その頃の俳諧師仲間ならばわづかに心すれば、すぐに領かれる節々であればこそ、「一代男」の書おこしに、世之介の素性を明にするとて、「あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし」といふのであつた。

けれどこれはほんの一面の事實である。西鶴は光源氏を遠い物語の世界から拉れて來ると共に、近い世の耳

目に親しい人々をも伴ひ來て、世之介といふ人物を造り上げた。故にその浮世人のモデルに氣づける人々は、これによつて、現代の人物を假り、現代の事件を叙する作物ときめてかかる。さうしてみづから西鶴の肚を知り得たといはうとする。二重に働く「しる人はしるぞかし」であつた。そこに西鶴の轉合があり、世之介の遊びがあつ



「好色一代男」女護島渡り

たゞしかもなほ、その轉合や遊びを匿して、隨分寫實に專らであるといへばいはれる作柄であつた。浮世草子の寫實的態度はこゝに決したといつてよい。

世之介は七歳にしてすでに戀を解してゐる。この早熟の遺傳は環境の宜しきを得て、いよ／＼天分を發揮した。勘當せられて諸國を放浪することも、彼にはよき惠みであつた。到るところの遊里を訪ひ、またさま／＼の戀の相に觸れる機會を與へられたからである。好色修行はすでに積んだ、勘當は許された、鉅萬の富は得た。彼は當代の最高の生活である粹士となつた。

粹士としての遊歷が、新たにはじまつた。儉寒い以前の修行と違つて、仕たい放題の大盡遊びである。長崎のはてを極めて、なほ足らず、つひに女護島に渡つた。

この女護島渡りと「浮世物語」の蛇仙とは、たま／＼暗合した趣向といへばそれまでであるが、浮世房の諸國遍歷と、世之介の好色修行との間には、斷ち難き聯絡がある。同じ傳統である。

兼好だちが、うき世の歡樂を味ひ盡すために、うき世を棄てる形式をとつたのは、一面からいへば、藝術の塔に籠ることであつた。その藝術は平安朝の宮廷生活によつて創り成されたものを主體とする。彼等は古典の窓を通じて、現實の事象を美しと見たのである。

兼好だちが一所の閣樓に閑居したのと違つて、後の連歌師の群は、旅から旅へとさすらひ歩いた。しかも、自然の玄境に乘ずることがなく、依然として古典の趣味を以て對してゐた。いふところの花鳥風月の範圍にとゞまつてゐる。

この流風を繼承しながら、やゝ廣く世間に出たのが、竹齋であり、樂阿彌であつたが、これとても古典趣

味を脱却しなかつた。浮世房の諸國遊歷も、たかだか名所舊蹟めぐりに過ぎない。名所舊蹟とは古典を背景としての選擇である。

世之介が遍歷した諸國の遊里は、これ等の成立と全く性質を異にする。古典の趣味とは何等の交渉がなくして、當代の社會經濟と密接なる關係を有する。遊里の存在するところは、多く町人の經濟活躍の街に當つてゐる。

前期の世之介の好色修行は、若い頃は商ひ見習、やゝ長じて勘當を受けた後は、薄元手の旅商ひの形式をとることが多かつた。富豪となつてからの後期の好色修行も、往々商用を兼ねることになつてゐる。階級制度すでに確定して、士農工商の最下位に甘んじなければならず、それが厭とあつても、世之介ならぬかぎり、海外へ渡るすべなき鎖國令下の町人には、貨殖と遊興は二にして一の關係にある。社會的地位にさいなまれて、經濟的地位に惠まれた彼等は、勢ひ遊里に雄飛せざるを得なかつた。

經濟的關係を以て、城下町と宿場と港とを繫ぎ、更に綱目を京大阪島原に結び合はせる交通網は、各地の遊里を繫いで、更に綱目を島原新町と江戸に結んでゐる好色網と重り合つてゐる。二つながら町人の手によつて成されてゐる。からいふ時世なればこそ、「一代男」の「さす盃は百二十里」の趣向も案ぜられるのであつた。

露に時雨に、雨袖をぬれの開山、高雄が女郎盛を見んと、紅葉がさねの旅衣、八人肩の大乘物、五人の太鼓持、はつとしたる出立に、陰陽の神ものりうつり給ひて、世に有程のわけしり男、夜やり日やりに行ば、宇津の山邊にのぼり詰、島原への傳手かなとおもふ所に、三條通の綿屋の清六、乘懸よりおりもあ

へず、もろこしは替らずつとむるが、江戸では、小紫にあふてのやりくり、都へさす盃を、ととつかり行など、立ながらかたりぬ、

宇津の山は、「伊勢物語」の昔ゆかしい名所である。歌人、連歌師ならば襟を正して過ぎゆく舊蹟である。しかも、西鶴は、その「伊勢」に據りながら、例の俳諧もて、あらぬさまに翻した。前の文のつゞき、

聞に東の戀しく、京の事なほ忘れがたく、屢しまてとて、鼻紙に石筆をはやめ、けふこの細道にて、清六にあふて、やつれたる姿を見せて、そこゆかしさは何程、露といふ命きえずば、又みるまでのしるしぞと、岩根の葛の葉を手折て、假初に包みこめて、金太夫かたへと渡しぬ、五人の者もおもひ／＼の泪、中々まだ忘れた事は、上林のまんに、首すぢをよく洗へと、慮外ながらおつたへと、跡は大笑ひして別れて、苦地のつたひ道おるれば、草葺の閣に、十團子賣女さへ美しく見えて、招けば、手越といふ里に、酒ばやし有、是こそむかし千手の前の、親仁の所よと語る、

秋風に小粒となる十團子のさびや細みはどうでもよい人々であつた。千手の前の上臈をも、親仁の一語で世話につきおとす手合であつた。もう竹齋や浮世房まで、どうやら守りおほせた傳統は分岐して、一は芭蕉のやうな風雅人によつて、昔の正宗に歸らせ、一は世之介などの浮世人によつて、飽くまで現代化することを要とした。

「一代男」が時代相を如實にうつし出してゐることは認められるが、また誇張と空想の度の甚だしい事も掩ひ難い。その全國に亙る好色修行の如きも、女護島渡り同樣な轉合と考へられもする。しかし、その頃、世之介に似た人が實在してゐたのである。「一色道大鏡」の著者畠山箕山その人であつた。

箕山の傳は詳でないが、「大鏡」の凡例によつて、ほゞ識ることが出來る。

この書をおもひたつ事、予廿九年より風と心にうかびて催し出るといへども、諸方の風俗人傳にのみ聞ては、委敷勘辨しがたきが故に、或は關東に走り、或は中國より九州に渡り、その郭邊に經歷して、所々の風儀を伺ふ、畿内に小池の遊廓は、累年是を見及び、六條の過し昔は、古老の達人に事を尋ねてしるす、しかはあれども時節の移るに隨ひ、風俗もかはりもて行ば、これを委しくわきまへしらんがために、人のそしりをかへり見ず、老年にいたる迄當道に立まじり、諸郭をめぐりてこの書をしるしぬ、

夢也翁といふ者の漢序は、更に箕山の精進をしるして、多少の加へるところがある。

箕山は弱冠より心を斯道に遊ばせ、東は奥武に到り、西は肥筑を究め、南北縱横、斯道に踈らぬところがない。彼は壯年にして、斯道の奥祕を著はさうとしたが、遊廓の風俗のまち／＼なので思ふやうにならず、六十餘州を歴行し、三十餘年を經て、この書を著はしたといつてゐる。

世之介は遺傳と環境に倖ひせられて、譯知りとなり、粹士となりおほせたのである。好色修行といふも、他の事情に驅られた結果であつて、自ら色道の玄深を探ることを期してゐなかつた。それなのを、實在の人に「まさり草」の著者、虚光庵眞月居士のやうに、色道の建立に專念する者もあつた。

抑昔日十三歳の秋よりこの道に列座して、振袖の下より手をしめ、目配せ抔に採れて、翌年の末より自ら戀慕對談の實否を糺す、かるが故に我世に出て三十年、道を見る事十有八年、且夕斷絶なく修して、當道至極の理を知り、而して我斯道を立て、始めて色道と名付く。

彼は狂人のやうに思はれた。しかも鳥魚は林水に飽かず、その心にあらねばその心を知らざる類かとて、平

然としてゐた。濁世の凡俗譽るとも悦ばじ、誹るとも悲まじ、賴母しきかな、賴母しきかな、當道に於ては一天四海を掌の中に納め置きたりと獅子吼した。

この眞月居士と箕山とは、いろ／＼の理由から同一人であることが推定されてゐる。かゝる人が身を以て斯道に殉ぜんとする程、好色の氣は一代を蓋うてゐたのであつた。眞月居士は「當道盛んになりて、三十とせ餘り以來、貴となく賤となく此道を好む人多かり」ともいつてゐた。

「まさり草」の出板は明曆二年である。「一代男」の出板は天和二年である、好色の氣運は、その二十六年の間に、町人の經濟的勢力と共に、いやが上に隆盛を來した。世之介ほどの人物ならば、西鶴の肚を借りなくても、誰の空想の中にも、宿つてゐた。その人物を、古い物語のおもかげとして移しとる趣向、また洒脫な俳諧ぶりの表現に於いて、はじめて西鶴の手腕を認むべきであらう。

西鶴が箕山に負ふところの多いのは明白な事實である。箕山の書だけでなく、遊里關係の先書に據ることの多いのも指示することが出來る。好色の氣運は、頻りに、遊里案内、遊女批判、色道講義の書を出現させた。「色道大鏡」に、この書より以前、世間に落ちる當道の書目として擧げただけでも、すでに三十五種を數へることが出來る。

祕傳書、左繩、無用草（いたづら）、山鳥物語、難波物語、島原集、島原集追加、增り草、都物語、犬枕、寢物語、寐覺床、玉手箱、小手卷、八助、葭原鏡、葭原心亂記、葭原日香草、葭原飛鳥川、葭原枕石、麻姑の手、袖鏡、讃嘲記、よぶこ鳥、おかし男、空直なし、はらすぢ、こそぐり草、ゑのこ草、白烏、なたて草、燒付草、もえぐゐ、けしずみ、難波鉦、

これ等の書の中には、今日に殘つてゐないものもあるが、また現存の書にしてしるされてゐないもある。數はもつと多かつた筈である。

しかし、これ等が西鶴に多くを與へたにせよ、それはつひに素材に過ぎない。西鶴の靈火一點はじめて、藝術として光彩を發す。色道の敎義や儀軌に關しては、先蹤の書すでにこれを語る。醍醐味に至つては、一に西鶴の出現を待たなければならなかつた。

箕山は「色道大鏡」に就いて語つてゐる、この書の意味をすゝめて、是非當道に入しめんとの志にはあらず、ゆかでかなはじと思ふ人あらば、すこしは道をわきまへて行べしとの謂なりと。その道は、まづ廓の作法を知るにはじまる。更に作法の意義を知り、なほ進んで遊廓存在の意義を、遊女の本質を解するにをはる。

「一代男」はそれ等のすべてを解する譯知りの世之介と、遊女の本分を守る太夫との遊びを描き出してゐる。

遊廓何故に存し、遊女何故に在るかといへば、遊びの一語に盡きる。よく遊ぶためには、性慾の中にあつて性慾を離れ、戀愛の中にあつて戀愛を離れる心境にあらねばならない。性慾戀愛と卽離して、微妙な關係を保たねばならない。それには一種の悟りが必要であつた。遊びの至れるものを、色道といふのも、悟りの上に立つてゐると見ての名であつた。

世之介の悟りは、知らずしてその境に達してゐる。六十歲になつても、なほ女護島に渡らうとする彼は、强い欲求に驅られながら、常に中に守るべきところを失はなかつた。色道に參して、醉乎として醇なる者であつた。

世之介がたゞ身に體して、殆ど言に發しない色道の悟りを、やゝあらはに示す者は、「好色二代男」の世傳であつた。二十より内の騷ぎは、この道に入る足代、三十大興に入つて太夫の有難い所を覺え、四十より内に留ることを覺らずは、揚錢の淵に沈むのは眼の前のこと、すべてもののかぎりを知らねばならない、とて世傳は三十三歲の若さに、大盡の大往生を遂げた。一步小判の金が降り、世をさき立てる太夫どもが、諸の菩薩に姿を變へて迎へた。

「一代男」の女護島渡りと、「二代男」の好色往生とは、形からいへば大い相異である。しかし、實質には變りがない。内に潛んでゐるものを、外に表はしたまでである。西鶴ははじめから、好色の極意を、この義に解



「好色二代男」

してゐたのである。

これほどの極意を得てゐる者の廓遊びは、つねによい程合を太夫との間に保つてゐる。よい程合は、われの品位を失はないでかなたの意地を微塵に砕く。さうしておいて、かなたに、わざとの品位を許容する。尊敬と狎愛とを巧に錯綜させるのが、よい遊びを楽しむことである。

「好色一代女」の中に、品位以て遊女を壓する粋士の心づかひがしるされてゐる。

太鼓女郎に加賀節望んでおきながら、心をとめて聞かうともせず、小唄半に末社に、昨日の和布刈の脇は高安はだしと誉めたり、この中の古歌を大納言殿にお尋ね申したが、拙者聞いた通り、在原の元方に極つたなどの踈り物語、二つ三つ、かしらにそゝらずに、萬事おどしつ



大往生に好色の臺

けてゐる客には、太夫氣をのまれて、我と身たしなみ心の出來て、その男のするほどのこと賢う見えて、位をとることは脇になりて、機嫌をとる事ぞ、と太夫が語つてゐる。

一切の社會的地位と名譽を、廓の歡樂にかへてゐる町人が、その歡樂を徹底させるとて、かばかりの遊びを案出することは不思議でない。しかし、それは町人といふが、特に選ばれた教育を有する輩に限られてゐる。

手は平野仲俺に筆道を許され、茶の湯は金森宗和の流れを汲み、詩文は深草の元政に學び、連俳は西山宗因の門下となり、能は小畠の扇を請け、鼓は生田與右衛門の手筋、朝に伊藤源吉に道を聽き、夕に飛鳥井殿のお鞠の色を見、書は玄齋の茶會に交り、夜は八橋檢校に彈き習ひ、一よきりは宗三に弟子となりて息づかひ、淨瑠璃は宇治嘉太夫ぶし、踊りは大和屋の甚兵衛に受けならふ、といふ「日本永代藏」の叙述にはもとより誇張はあらうが、空想そのものでなかつた。

これ等を貫く精神は、彼等の實生活からかけ離れた風雅である。當時の有閑階級には、もとより隱遁者によつて作り上げられた傳統をうけつぐほどの餘裕があつた。彼等はこの趣味の下剋上によつて幾分の滿足を社會的不平の間に得たのである。

遊女の中でも、最高階級に至つた太夫の教養は、決して彼等に優るとも劣らぬ程度のものを要求されてゐた。くさ〴〵の理由から、平安朝の才媛の形だけでも眞似るやうにさへ強ひられてゐた。さういふ太夫と、粹人との間に行はれる風雅の遊びが、どんな風であつたかは、ほゞ考へることが出來る。

文藝復興ともいふべきその頃の古典熱がこの情勢を煽りもする。西鶴が「一代男」と「二代男」に於いて

「源氏物語」の翻案を試みた因縁は淺くなかつた。

廣く廓遊びの上から見れば、太夫と粋士とが戯れるものゝあはれ遊びなどは、ほんの一部分の現象に過ぎないが、それを扱ふ浮世草子作者の態度からいへば、なか／＼に大きい問題であつた。どうかすると、この心持を作の基調としたり、似ても似つかぬ題材に强ひて結びつけようともした。惡い趣味のあらはれといつてよい。

西鶴をはじめとして、浮世草子の作者が俳諧師出身といふことが、一つの原因であつた。

隱遁者から連歌師に持ち越した傳統は、俳諧師に及んでゐた。西鶴が覇を唱へた談林などは、貞門蕉風と異なるものが多いにせよ、守るところは同じであつた。

俳諧から浮世草子に轉じた後の西鶴が、俳諧の手法をそのまゝに用ゐたことは、極めて明瞭であるが、作の態度もまた依然として傳統に拘泥してゐた。當時に於いては、それが藝術の最高標準と考へられてゐたからである。今から顧れば、惜しいかぎりであるが、西鶴があれまで現實を見詰めながら最後の一段に、いつも眼をあらぬ方にそらしたのはその結果である。

さすがに西鶴は現實の觀察を尊重した。といつて傳統の前にも跪いた。西鶴の趣向はこの矛盾を利用した。性質異なる二つのものを並列することによつて笑ひを創成しようとする。彼みづから轉合書を以てその作に標榜する所以である。基づくところは、傳統から分岐した俳諧獨自の精神である。

（三）現實を片寄せて、傳統を正面に据ゑる浮世草子は、笑ひを收めて、眞面目を裝はうとする。それはあまりに空虛な眞面目であつた。浮世草子等の持つてゐる惡趣味は最も多くこゝに發揮せられる。「近代艶隱者」は多

少の疑問を殘しながら、西鶴の作として見るべきである。「一代男」に色道の悟りを露はにした傾向は、この作に於いて、赤裸々に顯はれてゐる。もし西鶴の作でないとしても、浮世草子作者の胸底にあるものを、ひき出して、これほどの言說あるを怪しむ要はない。豔隱者の一人が語る好色の解は斯うであつた。

色より至道に入るこそ誠の道なれ、此道のいたりといはゞ、色におぼれ、情にひかれ遊をことゝと成すにあらず、漸入つては人の心ばせを知り、世のまゝならぬ常をさとり、契しかねことの夢なる事を思ふは此はじめなり。初春の朝我閨に曙の鐘を哀み、宵の軒端に霞を見るもをかしく、秋の初夕、佛前に魂まつる業、物すごき暮の冬も月を見る心となつて、其色里の便きかぬ事も還てたのしむは至道に入るの門なり。形は外をかざらず、美人色を忘れ、心を愼て靜にし、自黙して言をやむるは心ゆたかにせん爲也。ゆたかなれば色心動ず、心うごかねば、形を勞せず、形安ければ心悅ぶ、心悅ぶ時は常に色有て樂足り、いまだ逢見る逢見ぬをいふにあらず、この境にいたれば、形うるはしく老に至る事遠し。是より物と相さかはず、知を捨て愚に入る時は色道の至極となる。

ものいひぶりはさながら「徒然草」である。いな、更に溯つて宛然たる老莊の口吻である。浮世といふ言葉は、意義から見ても多岐に分れてゐるが、言葉の韻からいへば、もそつと複雜である。浮世草子作者が、時代の新しさを盛るためには、さうに棄ててしまつてよい筈のこの古い囊を棄てかねるどころか、却つて、大事にしてゐた理由は、うきよの韻にいひ知れぬ魅力を感じ、更にその魅力を讀者に働きかけるためであつた。

その頃の作者が、めい／＼の作を必ずしも浮世草子と呼ばなかつたのを、何故今日さう呼び馴れてゐる

か。廣汎な範圍、多様な傾向に亘るものを括るに、意義饒な「うきよ」が都合よいためであらうか。

歡樂窮つて哀情多し。語は古いけれど、意はつねに新しい。現實に於ける好色生活の最後に來る悲哀は、ものゝあはれの傳統から來るうきよの韻を、空虚にさせなかつた。

六

更に現實の世界には富の退轉がある。昨日までは榮華に誇つてゐた大盡が、一夜のうちに沒落する有様は、眼前に現ずる諸行無常の相として、「うきよ」が有つ間隙を充實するに都合がよかつた。

作者だちはいよ〳〵得意になつて、その「うきよ」を濫用しようとする。すなはち、今の今、そこに見る富豪の浮沈をも、平家とか源氏とかの盛衰に擬することが多かつた。さうして今樣の「平家物語」「源平盛衰記」の作者氣どりであつた。

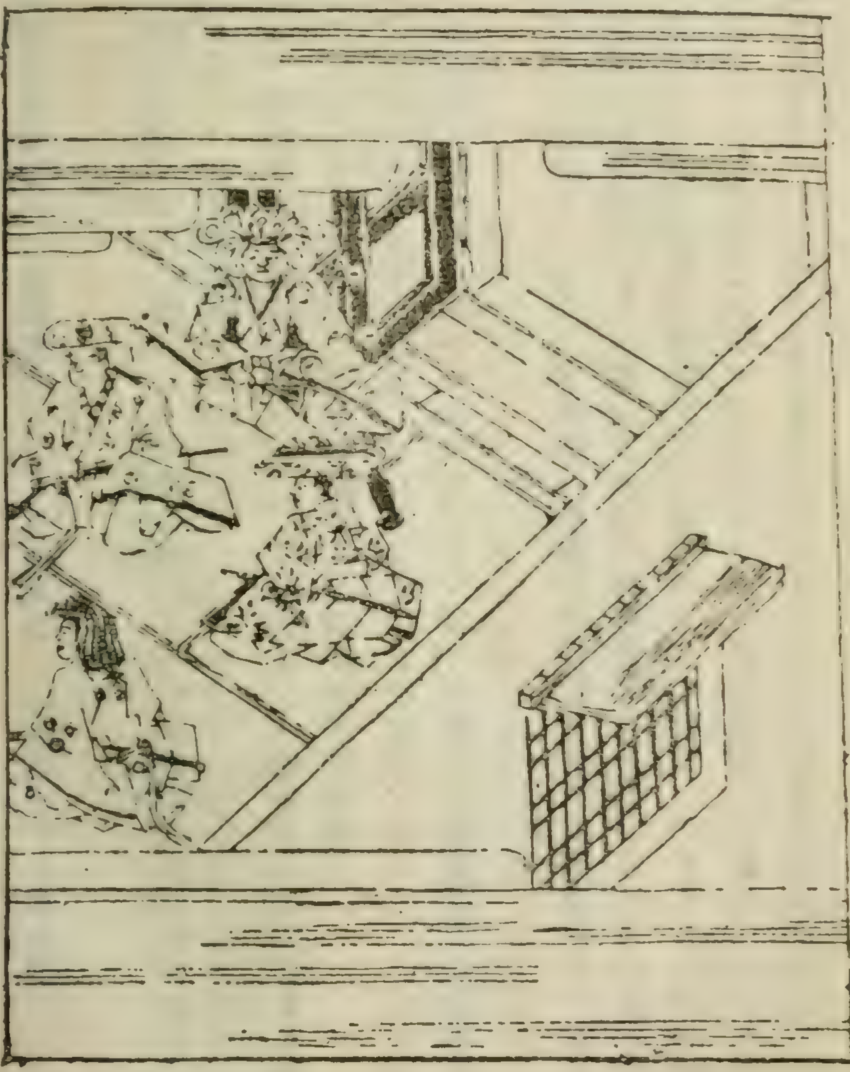
あまりに低い藝術觀しか持ちあはさない彼等が、もとより興味の焦點を現實の事象におきながら、紙の上には、さういふ細工をし、しかもわざとらしい教訓をさへ加へるのは、畢竟讀者をしておもしろがらせ、可笑しがらせるためであつた。趣向の案じ、また古物語の飜案ぶりに無用の努力を費した。さすがに、西鶴の町人物には、透徹した觀察を讀まれる。その他の作者の物に至つては、つひに趣向倒れが多かつた。

富豪の分散の中で、當時天下の視聽を驚かしたもの、淀屋事件の如きはない。浮世草子の主題となつたもの、これの如く數多きものはない。

寳永二年十一月、大阪の富豪淀屋三郎右衞門は突然闕所を命ぜられた。世傳の財産は沒收せられて、その身のみ辛うじて赦された。身分不相應な奢に耽つたための處罰である。

将軍家光が大阪入城の折柄、町人中の名望家に特に苗字を名乘ることをゆるさうとしたことがあつた。中に當主辰五郎のみは辭退した。その意町人淀屋を以て足ると大に恃むところがあつたのであらう。幕府の白眼はこの時にはじまつたのであらう。辰五郎はまた米市場を開いて、大阪をして天下の臺所とさせた。大名の威も時に彼の下に在るやうになつた。幕府の猜忌は助長した。辰五郎の後三郎右衛門の代に至つて、幕府の宿望は達したのである。政權と金權の對立、すなはち武士と階級の爭鬪の一端として見るべきである。

富は町人の階級に許された唯一のものである。富は歡樂の自由を得て、はじめて意義を生ずる。すべてを社會の階級制度に



「忍大門屋敷」

よつて奪はれてゐる彼等は、歡樂に耽溺することをせめてもの慰藉としてゐるのを、身分令は更にそれをも禁止するのみか、富までをも沒收するのである。町人の世界にこれほどの悲痛事があらうか。浮世草子作者は、この事件に對して、どんな批判を加へようとするか。

批判はつゆほども許されない時代であつた。法令の前には沈默を守つてゐる作者であつた。繁昌も沒落もよそ事に見なしてこれ世相と兼好もどきにとり濟ますか、事件の表面を掠めて面白い趣向へ持つてゆく工夫を凝す作者であつた。それは彼等にとつて別に苦痛ではない。妙に超俗がるか、さなくばふざけるのを藝術と心得てゐる人々である。淀屋事件に關する作品の狀、ほゞ推するに難くない。



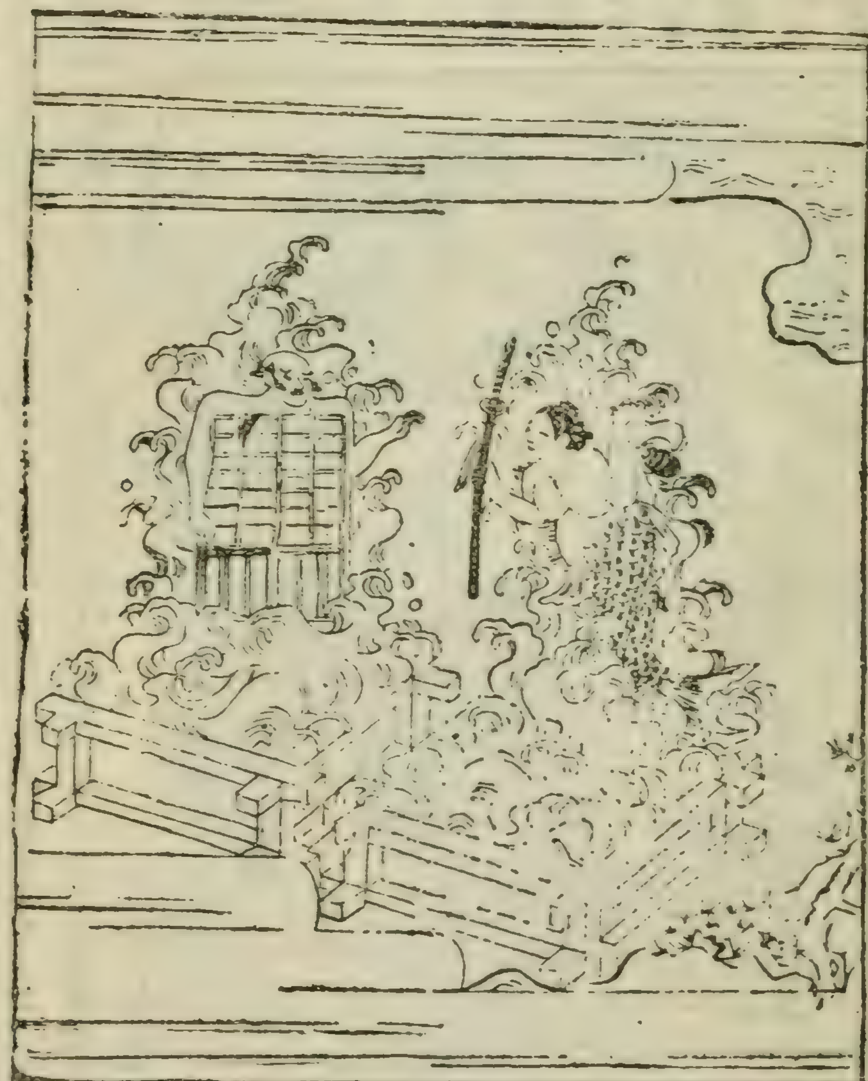
寶の精の評定

錦文流の「棠大門屋敷」はその一つである、少しく輪廓に觸れてみる。
淀の人江戸屋與茂四郎が機智を以て難工事を果して、秀吉から黄金五千兩、金の鷄、淀鯉の一軸、水晶の障子など、恩賞の數々を頂戴した。それから拍手よく身代を殖して、長者號を得た。淀を出見世、大阪を本宅として、居宅の外に、四十八ケ所の屋敷いはゆる江戸屋のいろは屋敷を構へてゐた。奢を斥けて、萬をつづまやかにする。寶藏は年々に建てつゞけられる。江戸屋の基礎は代々に堅まる。
五代目與茂九郎が大名の國腹の息女を申し受けて一家壽の聲の高い時に不思議な事が起つた。寶藏中の寶の精どもが參會して、一代ばかりか五代まで、閉ぢこめられてゐる苦惱をのがれる工夫を評議する。中に金鷄の精は、日比の妻鳥戀しささへあるに、今は與茂九郎の婚姻の羨しさに堪へなかつた。すると末席に控へた寛永通寶の靈が獻策する。我々が與茂九郎の皮肉にわけ入り、色狂ひに銀をすてさせ、身代を潰させさへすれば、我々は世上へ出ることが出來ると。
與茂九郎が愛妻に死別する。愁傷の枕に金色の僧が枕上に立つて、汝人界の不定を知らず、多くの金を貯へて、假にも遊樂の心を持たないのか、急いで樂しめ、急いで樂しめ、といひ聞かす。僧は忽ち金色の鷄となつて空中に飛び去つた。與茂九郎の遊蕩はこゝではじまつた。
與茂九郎が金に絲目をつけぬ遊興はめざましかつた。それが嵩じて病を得て死ぬ。家督をうけた一子初五郎、代々の通り名與茂三郎と呼ばれて古今の美男、器量ようて身體ようて、酒が强うて、藝が器用で、また類ひなき大盡、十二の歲から廓遊び、浮世の果報大盡と謳はれた。
寶物の精は傾城歌舞妓子末社太鼓その他代手代丁稚に憑りうつゝて、初五郎に金を湯水とまき散らさせる。

更に盜賊の皮肉にわけ入り、また江戸屋に怨ある死靈に働かせて、寶藏の金を盜み出させる。

その金の紛失を忠義の手代は初五郎が惡所銀に盜み出したと推量する、初五郎はその者の姦惡の所爲と推量する。つひに公事沙汰となる。寶物等は機至ると、初五郎加擔の惡手代どもの心を奪ひて、惡心を募らせる。最後にすべての惡企みが露顯して、初五郎は所拂ひ、その他おの〳〵刑に處せられる。

といなや、件の金雞は何國ともなくはたゝきをしてうせぬ。水精の障子は水となり、淀鯉のかけ物は忽大川の流水に形をうしなふ、其外米錢もろ〳〵の寶物は、風塵となつて行がたなし、殘るは甍苔蒸したる母屋藏々の形のみ、松風起つ



「業大門屋敷」寶の精の景

て草深く、主なき屋となれりける、實は身の敵、大欲は心の怨、つゝしむべし、おそるべし、淀屋の缺所目錄といふが、その頃さま〴〵に傳へられてゐた。どれも世に珍しい寶の數々であつた。公事の沙汰、また實事である。文流はそれ等の巷說を利用して、趣向を立てたのである、その立て方は室町時代の小說に見るものを模倣してゐる。

文流が一篇を結ぶに、「一代の守本尊食と汁なり、おごりを斥け、儉約をたがへず、家行をよく勤め、一盃呑で寢たる所極樂なり」といつてゐる。いはゞ心にもない敎訓三昧であつた。眞意はむしろ與茂九郎、初五郎の好色生活を描き出すことにあつた。同じ事件を扱つた好色本「風流曲三味線」と態度を一にする筈である。富によつて歡樂の圓滿を期し得る、それだけでは面白くない。あの大盡の初五郎親子でも、ずんと失敗をする意外な事件を書きしるす。好



研明窓雄雨.

色に絡んで、世におそろしい悪企みの存在を細やかにしるして、世間の穿ちを傳へようとするにある。

「棠大門屋敷」に於いて、無用な趣向が一段と幅を利かせる時があつた。西鶴を遠ざかるに從つて、その度を加へてゐた。いふところの八文字屋本時代が殊に甚だしかつた。歌舞伎淨瑠璃から趣向の複雜を學んで、實生活に對する觀察の貧弱を蔽はんとする結果である。「國姓爺合戰」と「國姓爺後日合戰」をそのまゝに改作し、もつと通俗味を加へた「國姓爺明朝太平記」などに至つて、浮世草子もう末になつたといはねばならなかつた。よし、作者だちがどのやうに强辯しようが、仇花をそへようが、今日から認められる浮世草子の價値は結局當世の相を如實に傳へる點にあつた。西鶴が浮世草子の作者の隨一として、どこまでも崇められる理由は、古典分子とか、ものゝあはれ氣分とか、その他のあれこれを



太平記」さし繪

洗ひ落すことによつて、却つて生地の尊さを見せることが多いためである。

七

「好色一代男」は世之介の一生を叙する點に於いて、一部の長篇小説の形式をとつてゐるが、實は短篇小説の集りに過ぎない。「源氏物語」を全體として飜案したやうではあるが、興味の中心は、細條を俤とする俳諧にあつた。西鶴の強みは、その原據との關係を外にしても、表面に於ける當時の事象だけでも、裕に人を壓するに足る力を有する點にあつた。今ではどうかすると、彼の俳諧手法を文辭の末に認めて、實質の俳諧、しかも彼の最も心を盡した源氏の大綱以外の各章の細條に於けるものを忘れさせる。それどころか、彼の粹生活の寫實は、各章に活きて、前後の關係に拘はず、また世之介といふが一貫してゐる主人公であることさへ忘れさせる。

同じ「源氏物語」でありながら、「二代男」になると、もう長篇小説らしい形式をとらない。各章連絡なき好色生活の寫實談と認められる。

「好色一代女」「好色五人女」は、俳諧の形式を異にすると共に、觀察の焦點を變へながら、最も忠實に好色生活を包容する點に於いては軌を同じうしてゐた。

かういふ好色を寫した西鶴の筆は、これも好色世界の一事象を寫した「男色大鏡」を中心として、いふところの武家物に轉じた。「武道傳來記」「武家義理物語」これである。西鶴作風の第二變である。

浮世草子を當世草子の義に解するならば、むしろ、當世町人草子といふのが當つてゐる。何となれば當世の生活の中には、立派に武家が嚴存してゐるに拘はらず、浮世草子の世界では、とかくそれを片寄せてゐる

からである。しかし、當世の享樂と違つた享樂思想が、傳統によつて、浮世草子の世界に脉うつて、一近代艶隱者」のやうな作を出す位なら、西鶴が町人と對立してゐる武士階級に觸れるのも、別にあやしむまでもない。特にある種の見方から、努めてその生活型を求めて、その固定を指摘することによつて、諷刺らしい扱ひをさへしてゐる。近松との相異の一つはこれである。近松は義理を契機として、武士生活と町人生活とを關係づけようとしてゐる。すなはち當代の理想を語らうとする。西鶴にして理想をいふなら、それは粋の世界に於けるだけである。つひに道德に就いて考ふるところがない。これが當時の現實であつた。後の浮世草子作者は必ずしもさうでない。彼等は西鶴の指摘した武士生活の型を、何等の諷刺なしに、却つてそれを理想とし、更に道德的因果律をも添へて、好色生活との並行、また調和を試みようとした。すなはち淨瑠璃、歌舞伎の先蹤を追ふものである。八文字屋後期の讀物である浮世草子が、淨瑠璃、歌舞伎に密接な關係を有つ所以である。

西鶴の作風はまた三變した。町人物に轉じたのである。「日本永代藏」「世間胸算用」によつて代表せられる。

筆を好色にはじめた西鶴は、當然こゝに至らねばならない。好色は粋に窮り、粋は富を得て全し、粋を人生の理想とする町人は、まづ富を求めねばならなかつた。

世之介のやうに父の遺産を嗣ぐもの、また淀屋のやうに世傳の分限者はともかく、富を致すことは最も難い。しかも競爭者の多い中に、群を拔くには、偶然の機會もさることながら、殊にめい〳〵の知惠才覺が必要であつた。西鶴の町人物は知惠才覺を十分に發揮する人々の話を傳へ、また偶然の機會を利用する幸運兒

の話を傳へ、眼前の機會を敏感に獲得するが、結局眞の知惠才覺なることを說いてゐる。

さりながら知惠才覺はその人に備り、機會は常に來ない。さういふ世の中に、なほ富を成さうと心掛けるのであつた。安全の途は外にない。一心不亂の勤勉と、塵一つあだにせぬ儉約があるばかり。西鶴はその中にしばしば儉約の度を過ごしてゐる者の話を傳へることが多い。誇張から來る滑稽をやすく構成することが出來るからである。

富を願うて富を得れば、町人の本望は達する、しかし、また願うて達し得ざるかなしさもある。西鶴はそのかなしい世渡りに就いて、深く廣く觀るところがあつた。

貧しい中には、また貧しさに處する知惠才覺がある。貸主の催促をどうおし退けるかの工夫である。殊に大歲を越すか越さぬの瀨戶際になると世間隨所に、魂膽のすさまじいものが見られる。考ふべきものもそこにあり、笑ふべきものもそこにある。西鶴の筆はそれとこれとに亙つてゐる。

どうしても富に移ることの出來ない貧の消極を面白いと見、また貧から富に移る過程を樂しむ西鶴は、また富から貧に墮つる流轉の姿をも、別にかなしくも、嬉しくも見なかつた。これもまた世相として靜かに眺めてゐた。分限者の成上りも、分限者の沒落も、西鶴を繞つて、頻繁に起る出來事であつた。西鶴は片眼に意味深く見据ゑ、片眼に笑ひを帶びて見棄てるほどの餘裕を持つてゐた。例の滑稽をさへ喜ぶと共に、また眞面目なる教訓をあへてしてゐる。西鶴の町人物の妙所はそこの交錯の間を縫うて、人間性情の深きに觸れる點にある。世相を描いて廣きに亙つてゐるの妙は、はじめから知れきつてゐる。

好色、武家、町人、この外に西鶴の作には奇談集がある、奇談の範圍は妖怪にも、裁判にも及んでゐる。

西鶴の作の種類と傾向は、後の浮世草子の範圍を決定してゐる。少しく異色を帶びてゐるものも、結局は西鶴の要素を排列しかへた變化に過ぎない。それほど西鶴は浮世草子に覇を成してゐた。

八

この全集の第九卷「浮世草子集」には、當然西鶴の諸作品を網羅すべきであるが、別に第一卷、第二卷に「西鶴名作集」のあるために、それに讓ることになつてゐる。

浮世草子の數は、六七百の多きに及んでゐる。その中から傑作だけを選んでも二三十、それに歴史的意義あるものを拔けばまた二三十、どうしても五六卷をあてなければなるまい。今わづかにその一卷にゆるされるものは十部に過ぎない。

好色万金丹	
御前義經記	西澤 與志
けいせい色三味線	江嶋 其磧
沖つ白波	都の錦
傾城禁短氣	江嶋 其磧
日本新永代藏	北條 團水
世間子息氣質	江嶋 其磧
新小夜嵐	
世間娘容氣	江嶋 其磧

浮世親仁形氣　　江嶋　其磧

これである。作者からいへば、未詳の二人を除けば、西澤與志、都の錦及び江嶋其磧、北條團水である。月尋堂、錦文流にはつひに及んでゐない。

「風流色三味線」「傾城禁短氣」「世間子息氣質」「世間娘容氣」「浮世親仁形氣」は同一人のであるが、八文字屋本氣質物の代表作として世に喧傳せられるもの故、一括して收めた。ために取捨に於いて、やゝ偏重の憾みを生じた。

九

好色万金丹

半紙本、五册、作者署名なし、序に、元祿七年甲戌三月六日と見えてゐる。奥附には、同年七月吉日とある。發行書肆は、江戸の萬屋、京の山崎屋、大坂の中嶋屋及び久保田の連名である。

題名は、はじめ三薬といつたのを、書林の好みにまかせて、万金丹と改めた、その義、讀めば氣のつきがはることといふにあり、と序にいつてゐる。作者の意のあるところがそれと推せられる。

柳亭種彦の好色本目錄に

> 中の上作にして、素人の作る物とも見えず、林鴻等の作歟

と見える。林鴻とは烟月堂とも雲風子とも號した。京の貞門の俳人、俳書「京羽二重」「永代記反答」「あらむつかし」の作者である。遊女の評判記に擬した俳諧師の評判記である「花見車」には、彼を天神の格に

好色萬金丹巻之一

巻一 老若の敵

唐の鏡は鴛鴦破のあしたにかげうつし人の肩によわりしものなり。
よれるものをもつてうばひとるハ、いみぎりつゞけみのぞみなれど
智者ハ不定世界を観じ、斉人ハあをき川をながめておもひのまゝならぬをつめとしれ共、其日のうきを楽じけれバおもひ
方棚のけりとなづけしこれかれの勇みうきをかづきて
かりそめにおもひをたはぶれとおもふさとのひあげ座
まうけあはれをとゞめてこれぞ我自らがみて実成のあい
まつれつけかりしあれバ、一心なれどもらぬの花の風情なり
ありさまくなきのみか、樽よりあまつて世の鬼ひのかぎりもすへ

あてゐる。洒もなり、手もよく、繪までよく書かんすゆゑ、一座かしこく、京羽二重の肌になずみて客もあり云々とある。彼はまた浮世草子「好色産毛」の作者である。西鶴を太夫とするならば、彼はさしむきこの方面に於いても天神格であらう。種彦が「万金丹」の作柄から見て、林鴻歟といつた推測は、當らずとも遠からぬものであらう。

「好色一代男」の天和二年から「好色万金丹」の元祿七年まで、すでに十三年、この間西鶴は貞享に好色の筆を絶つて、元祿元年から町人物に轉じたに拘はらず、彼の模倣者は陸續として絶えなかつた。名を西鶴に托した僞作さへ出る世の中に、趣向を學び、作風を襲うて、好色何々と名乘るものが少くなかつた。これもその一例である。

毎卷四話、五卷にして都合四十話を收めてゐる。どれも獨立した小話であつた。「好色二代男」を模倣してゐることが、いろ〳〵の點から考へられる。

趣向をそのまゝに踏襲した例として、卷一の第二話「通變のうらなひ」と「二代男」の卷八の「流れは何の因果經」とを比較することが出來る。

「通變のうらなひ」は、唐人の子孫である海老の文藏が色道通變の占に妙を得、わけて五音を耳でうらなうて誤らなかつた。ある時、嫖客の一座に、女郎の所さへいへば、其位其星の三世相、その客の吉凶までいひ當てるといふ。さあらばまづ新町の南側に御座なさるゝ、女郎はと聞けば、まだ若い太夫、この君の前世は阿波の國で松葉煙草を賣し人、そのえんにより只今太夫となられた、北斗の天帝より米六十三石と客八人とうけ得て生れ、星は足趁星に當る。よつてその客は足に怪我をされようといふ。いかにも、その客、一昨日

火燵の火で火傷した上に、歸るさに躓いて、足の親指を挫いてゐたと皆々を驚かした。その類が幾つとなく語られてゐる。

煩を厭うて本文を引かなかつたが、本書一一頁より一四頁までは、畢竟「流れは何の因果經」の敷衍である、しかも、もとの氣力がなく、着想の奇拔を失つてゐる。西鶴のはかうである。

此の廣い世界に身過を案ずること勿れ、既に老僧隱元は遙かなる國より棒一本で振賣に渡り、近年佛法盛りの仕合、是れ自然の德傳はれり、されども金銀つかふすべを知らず、一生面白い日にも逢ひ給はず、御遷化の後は何に成り給ふも知つた人もなし、爰を以て夢とは申すなり、

これを冒頭にして、大津の遊女六彌が晝夜の別もなく、鐵砲の音を口眞似するを、關寺近くの聖が因果を語ることになつてゐる。

汝前世にて鏡山の狩人なり、生ある物の命を限りなく奪ひぬる、其の報い今身に現はすと示し給ふ。

それは小野の炭燒なり、草木心なしとはいはれず、諸の花咲く梢を切りちらし煙になしける故なり、他の女郎どもの因果を聞くに、色の黑いのには、

元來彥山の大天狗なり、口の思はくの時、鼻の邪魔になる事を、諸天に祈り過ぎて、今その面影なり、中低なる女には、

是は河内の木綿賣の生れ變りなり、二丈六尺の內を縮めたる科なり、胴間の短き女には、

などといひ聞かしてゐる。そこに鮮な談林ぶりを見る。「通變のうらなひ」の松葉煙草から松の位に、さらし

て太夫といふ附方は、あまりに言葉に即き過ぎる貞門ぶりであつた。

「万金丹」に於いて注意せられるのは結尾の一語の洒落である。たとへば、「通變のうらなひ」の場合では、まづ分散星に當る女郎の客は、必ず紙子一枚になるといふ事に話を運ばせる、それならその女に逢ふのは無用といふ客の言葉から、「どの女郎にあうても任すごしすれば、家も道具も西の海へさらり」の結語を導き出してゐる。

「一代男」にも結びのおもしろさがある。すら〳〵と流れて來た話の筋を、ぐつと押へて、輕く突き放す呼吸である。それが次の章と關係があるやうな、ないやうな思はせぶりにさへなつてゐる箇所もあつた。「源氏物語」の巻の結びの味を偲ばせるものもあつた。

「二代男」になると一々の結びが意識的に扱はれてゐる。それだけにさま〴〵の工夫が盡されてゐる。「世に聞夫狂ひ死なずはやむまい」といふのがあれば「曉風殘月夜の涼今朝思へば夢」といふのがある。趣は違ふが一章を貫く氣持を短く收めるか、それを全く違つた言葉に、作者の肚裏の批判を思はせるか、いづれにしても、本文との間に即かず離れずの關係である。それと比べると、「万金丹」のは、あまりに輕口に墮してゐる。本文の中に緊張を缺くためである。その結語さへ、「二代男」から暗示を受けてゐるものが少くない。

「万金丹」の特徴は、粋の穿ちにある。粋の生活の華やかな裏を見せて、さもしい物質に拘はれてゐる心を寫し出してゐる。好色本とはいひながら、西鶴の町人物を合はせ收めてゐる形である。尤もこれさへ「二代男」の傾向を襲うてゐるといはれないことはない。「二代男」の「一代男」と異なるところは、この穿ちを餘分に持つてゐることであつた。

「好色万金丹」に就いては、一應寶永二年の「傾城太々神樂」との關係をいふべきであらう。

「傾城太々神樂」は「万金丹」の再板改題の書である。しかし、その頃の書肆の惡い癖で、新板らしく見せるために、種々の細工を加へてある。いはうとするのはその細工のあとである。

「万金丹」の題號の義をしるした原序は删られて、今度の題名に附會する新序が載せられてゐる。

序

江口神崎室八嶋よりこと起りて、當世うかれ女のなさけにほだされ、戀の奴となるは性の惡ひうわきからといふは、無垢色里のわけしらぬ人なり、朝に金をまふけて夕に捨とも可也と、槐久が家の集に書しは、もと色道所分拔萃の本に見えたり、さるからさぞともうちかたらはゞ、命の根づきとおもへどげには少かこつかたのありて、かゝが留守のま、親仁が碁打とき、書出しくばりにあるく折ふしなんどぞちよつとものになる、又世渡に辛氣をこらし、あるひは手代かしかればまゝならぬ世のうきふしもわすれ草、物のあわれもこれよりの、戀のたねまき置し梓のいたにちりばめ、六巻となして大臣の神慮をすゞしめ、色里に引なびける傾城太々神樂、穴面しろや

寶永二つ櫛床とりのとし暮の紋日

本文は原二十話の外に新たに「行當の延助」と題した一話を、卷頭に収めてゐる。原書の二十話の順序を變更し、且つ六卷に仕立直してゐる。卷一は「行當の延助」の外に原の卷二の四話、卷二は原の卷一の四話、卷三は原の卷三の四話、卷四は原の卷五の四話、卷五は原の卷四の第一第二話、卷六はその第三第四話を載せてゐる。つまり出來るだけ、手數を輕くして、目さきをかへようとしたのである。

目さきの變化はまた目錄を書きかへることによつてなされた。すべてに亙つてゐる。また小書きをも加へてゐる。たとへば、巻一の「壹分の數」は

身体はまはし次第一りん上りの世の中

智恵の玉取

好色はかせぎ次第目尻下りの世の中

となつてゐる。

本文中にも二三の異同がある。たとへば「万金丹」の巻四の「牛の角文字」の書き出しが、「太々神樂」に於いては、少し書き足してある。その巻四を巻五、巻六に分けたために起つた板木の無理をかくす手段であつた。原の巻五の「しのびごま」に當るものには、何故か、義太夫節附の詞章を省いてゐる。

これ等はどうでもよい異同であるが、少しく考へて然るべき一ふしは、原の巻四その第四話「雪のあけぼの」の、

紫竹堂鶯栖は、みづから紀貫之の後胤といへども僞りかも知らず、遠江濱松の產にて云々

の中で、紫竹堂鶯栖を誹仙堂伴自に改め、遠江濱松を武州長井に改めてゐることである。その何故なるかを知らないが、或は手入れの作者の手がかりが得られるとも思はれる。

一〇

風流御前義經記

大本八册、西澤與志の作、元祿十三年の刊行に係る。

今日より傾城といふ字をあらため傾国と書て候
遊へ遊女よりしてとのかんざうしも太鼓をさとりとて
女郎も女郎かつさしたまいし。時代女郎乃こゝろ男の気
かも凌もせんよりも書し。遊女のなれどもなりたるほどの
川瀬のみなの流のやまひかしへゆかしきまく

御前義経記　懐物　太郎冠者作

㊀元九郎今義経稚立

かねより若ハ鞍馬山のおくにして乙名牢人と申せしものあり
ところより都の住人にて侍しに、仏の身を顧ふ
流まし次第のひとり父よりのちは長く、おもて母の親を

風流の都雅を意味することは勿論である、當時の例はそのみやびやかを好色に歸してゐる、すなはち本書は好色御前義經記といつてもよかつた。風流にはまた餘流、遺風の別義がある、おもかげといふに當つてゐる。すなはち風流御前義經記とは義經記のおもかげを假りて現代の世界に移したもの、すなはち今樣御前義經記ともいつてもよかつた。その好色と今樣とを合はせ領するところに思はくがあつた。好色の名を避けて、好色の實をほのめかし、原據を示してその趣向を明かにし、また原書に附會する賢さである。

賢さはこの書の場合のみでない。その頃少なからず風流を戴いた書があつたが、大方これである。一傾向とさへ見られる。中に「風流今平家」、また「風流好色十二段」の場合のやうに、一義にのみ偏するもののあることも勿論である。

何故御前といふかは、「總序」のうちに、太郎冠者の言葉として、「一部八册の一名を風流義經記と申します、然れども只今御目前にて讀奉れば、今日より御前義經記と仕りませう」といつてゐる。その頃、風流と同じやうに、御前を頭に戴いたものも少しはあつた。それの義は皆君の御前に於けるお伽とか、慰みとかいふ事を意味した。「御前義經記」出板の翌年の「御前おとぎぼうこ」の如きは、序に於いて、「かの一向の梓僧が剪燈新話の拔書を恨み、頭から御前の威を借て、漸に殿樣風を吹せ、御伽御坊を招寄、あの世と此世の境目を滅法界の公事にして詰る處は此方の負」といふのは、やゝ異を樹てながら、おちるところはやはり御伽の義であつた。

「義經記」を今樣ぶりに、好色風に、また慰みものにといふ題名は、おのづから内容を暗示する。全篇の意大方この外に出でない。「御前義經記」は浮太郎冠者實名與志なる者の作、それを或大名の御前で讀み上げた

ことになつてゐる。序にさうしるしてある。與志とは一風の別號である、そこに趣向がある。
浮太郎冠者の口上は、この書の作意を、題名で暗示するより以上に、的確に語つてゐる。便宜のために引くことにする。

されば源九郎義經公には文武兩道にして五常をまもり、情を本とし慈悲をもつはらにし、賢をあいし給ふ名將なれども、梶原が讒言によつて高館にて御腹めされ、つひにむもれ木の花咲事もなかりしは、是色にふかうわたらせ給ふゆゑなり。之れ色欲は人界のまよひ、殊更世にあるつとめの有樣、今とり〴〵の噂の中に、近比何がしとなん色にうつりて家をみだし、遠近人の物語を聞きまして、我〳〵二人ねられぬまゝのものたくみ、つく〴〵おもへば此噂、うしわか鞍馬入より高館まで、御苦勞なされたるにすこしもたがはず。きのふはけふの昔といへど、想夫戀の祕曲はかはらず、右一部の立物今義が浮身并ニけいせいの全盛、七九八難つがねてみるは、私のつれ〴〵草、わらひ草とおぼし召ませう。もつ共好色本世々にひろく、難波津にては西鶴一代男より書染、去年清月の比、新色五卷書迄の色草紙指をるにいとまなし。今此義經記には其もれたるをひろひ、或は男色のおもはく、又は風呂屋のつとめ茶屋女のこと、しかみ顏重寶記などもふるし。其替りたる耳學文して、愚なる知惠をふるうて書あつめたるもしほ草云々

かういふ計畫の下に書れた「御前義經記」は、その讀みはじめに「傾城の因緣」として、傾城の由來また品位に就いて說いたあと、すぐ「義經記」のおもかげにとりかゝつてゐる。
元九郎今義は、公家ならず武家ならず浮世の樂を一代男、橘屋三津氏權之助義方の遺孤である。三歲の時、

父の義方は名村八郎次と公事爭ひに負けて憤死し、母の常盤は八郎次の無體の戀慕にたへかねて、今義の妹をつれたなり、行方を晦した。乳母にも死別れた今義は、うき苦勞を重ねた末に、鞍馬の山の侘び住居をしてゐた。花の若衆となつた。觀了といふ若僧と衆道の契こまやかであつた。

作者は義經、義朝、常盤、辨慶の關係をかう書きかへた。事を町人の世界に移しただけに、平治の亂を丹州の金山にかゝつての公事爭ひとした。また好色の世界を描くために、常盤を島原の遊女とした。

乳母の靈によつて身の素性を知つた今義は、鞍馬を出でて江戸にまで下る。例の奥州下りに當る。觀了も行を共にしてゐる。

父の義故、江戸の富豪の後立によつて、母と妹の行方を探すことゝなる。二人はともに遊女となつてゐる噂である。母と妹を尋ねることが、自然と諸國好色修行の形をとつたのである。

島原をふり出しに、東海道の宿々、吉原、新町、室、下の關などの遊里が舞臺となる。

名所めぐりを諸國遊里めぐりに轉じた最初の、しかも最高の出來榮えの作は、もとより「好色一代男」であつた。流風一世を蓋うて摸倣の書すでに數多く、はじめから、諸國の遊里案内を題名にするものさへあつた。この作に於いては、それをまた「一代男」の以前の名所めぐり物の形式にまで還した形がある。たとへば「竹齋草子」に於ける竹齋と白眼之介の關係を、今義と伊勢之丞に見せてゐる。伊勢之丞とは還俗した觀了のことである。

「御前義經記」の特質は、當時の好色本を綜る新舊さま〲の諸傾向を雜然ととりいれた點にある。全體の統一緊密などは必ずしも懸念されてゐない。元祿狂言の舞臺の目さきの變化を、そのまゝに紙上に移したと

もいへる。
「一代男」は「源氏物語」のおもかげをうつし、かねて、謠曲また「伊勢物語」のおもかげを合はせてゐる。しかも、おもかげを髣髴の間にとゞめて原據を考へる者は考へ、考へない者は、文辭の表にとゞまれといつたやうた態度をとつてゐる。たま〳〵原據に觸れることがあつても、そしらぬ顏して、輕くいひ棄てゝゐる。「御前義經記」では、まづ「義經記」の原據を看板にしてゐるばかりか、各條一々「面影うつる何々」と據りどころを斷つてゐる。たとへば今義の稚立には目錄に「面影うつる東光坊」と記してゐる。たゞ「義經記」だけではなく、義經關係の謠曲をもとり入れてゐるところから、また「面影うつる橋辨慶」「面影うつる舟辨慶」の類がある。かういふ態度は「一代男」のやうな、原據との間の微妙な關係を有つてゐないことは當然である、むしろ筋を附會させるだけである。

今義、伊勢之丞の好色修行は、必ずしも諸國の遊里の特色を看取するものでない。たゞ好色の舞臺に幾分の變化を與へるといふにとゞまる。

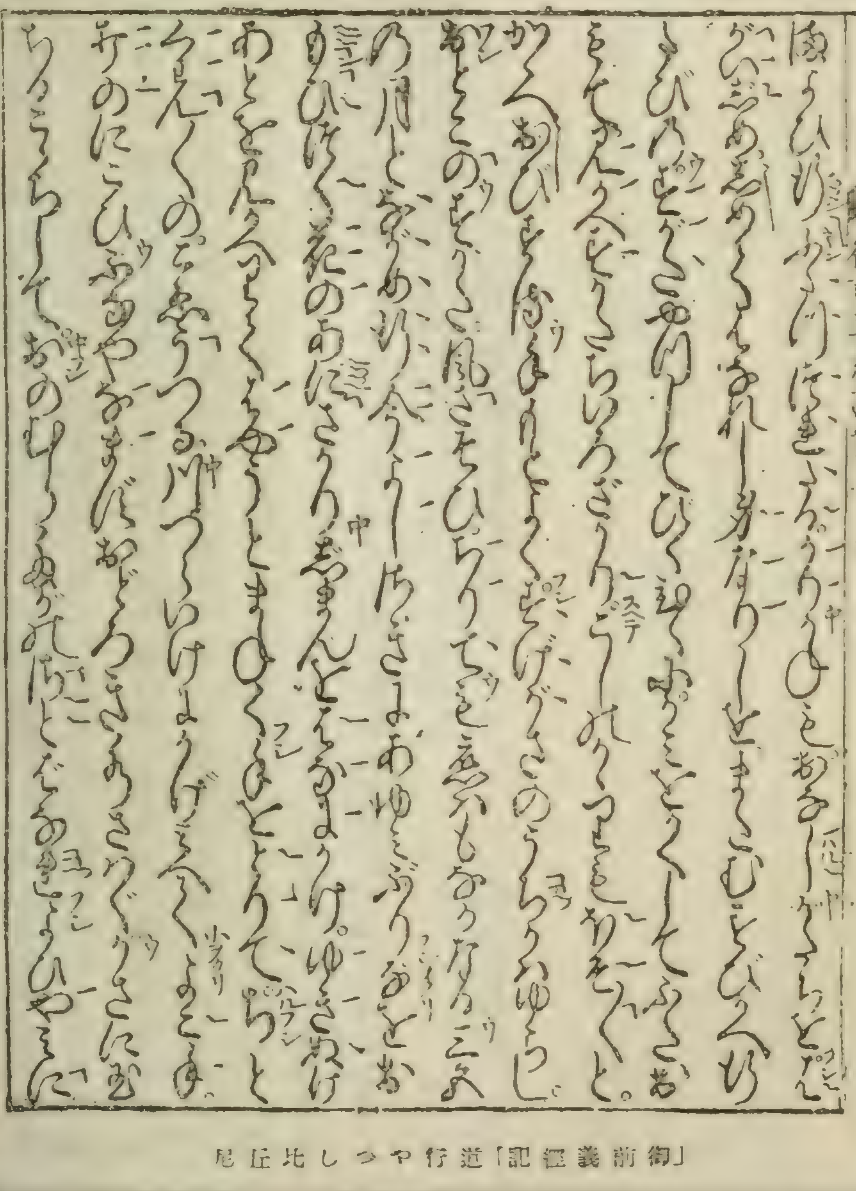
作者が諸國の遊里を舞臺としながら、必ずしもそのものに重きをおかない事は、そこの特相の描寫を避けて、却つて他の興趣あるものを齎してゐることから推知される。その興趣の事の本筋からも離れ、また小說の形式からも離れたものから求めてゐる。能、傾城操、または淨瑠璃などを挿入してゐる。さすがに時の流行とか、父義方の追善供養のためとかの理由を附けながら、つまりは讀者の目さきを變化させる趣向に過ぎなかつた。故に島原の能も、江戸の傾城操も、島原に限り、江戸に限らなくてもよかつた。

卷三の「御前道行」の中、作者の傀儡である太郞冠者の言葉として、

長事さぞ御退屈に思召ませう、扨是より觀了と今義が似せ比丘尼にて、闕の地藏までくたりますを、名所道行に書、すなはちふしを付て語ます、三味線は次郎冠者がひかれます、音曲にてお聞なされませうか、但し素讀仕ませうか、また大名の言葉として、

是は氣がかはつておかしかろ、古來より上るり本にはふしを付て語が、かうした全部物にふしを付たはきつい氣のかへやう、淨瑠璃で聞から、はやう語れ、

とあるのは、偶、作者の意圖の一端を示すもの、能や操その他の場合も皆同じ理由である。



「御前義經記」道行やつし比丘尼

「道行やつし比丘尼」は義太夫節で語ることになつてゐる。全文に皆節附がある。尤もかういふ凝りやう

は、「御前義經記」だけではなかつた。外にも例がある。現に「好色万金丹」のをはりの章もさうであつた。どれも作者の遊びである。

八文字屋本時代も半ば過ぎると、浮世草子は全體として淨瑠璃化され、歌舞伎化された。趣向の複雜の要求が重な理由であつた。しかし「御前義經記」時代にはまだそこまでは至らない。浮世草子の作者は筋の複雜よりもむしろ局面の變化を欲した。當時の幼稚な觀客の興を惹く舞臺のやまを、いち早く草子の上に移植して、讀者の喝采を博さうとしたのである。さういふ作意か底に流れて、かういふ技巧を恣にしたのである。作者のどれもこの傾向を有する中に、わけて與志の作には顯著なるものがある。

この作者の覘ひは正しかつた。いづれは浮太郎冠者の旦那の大名のやうに、當時の俗衆は、「御前義經記」の趣向が面白い。意匠が巧みであるとて歡迎したのであらう。元祿十五年の「女大名丹前能」はその續編といふ格で出板された。序は「御前義經記」が太郎冠者の口上に擬してゐるやうに、その弟次郎冠者の口上になつてゐる。

兄太郎冠者御殿様方に勸め、晝夜隙なき身なれど、我と樂む寢やのともし火、反古のうらに千鳥の足跡、亂たる言の葉を書ちらし、一名を御前義經記と題し、あづさにちりばめ世の笑草となしぬ、或つれ〲、その一部を御前にて讀み奉り、中々御機嫌よろしく、諸役御免の蒙り、世を宇治山の片里に草庵のむすび、山吹の盛を詠、一生遊樂の身となりぬ、

次郎冠者は兄の身の上羨しくて、別様の新趣向を凝すといふのである。言葉の裏には「御前義經記」の好評を逸してはならぬ機會と、おひつぎを出す商賣氣が、あり〲と見られる。

「女大名丹前能」は大名の庭前の八景に托して、能の幾つかを綴合はせたのが趣向であつた。はめ込みの趣向である。こゝに例の遊びがある。前のがいろ／＼形式の違つたものをはめ込んだのに、これは能だけに限つたところが相異する。態度は同じである。

これにはまた前と違つた一つの趣向がある。尤も「御前義經記」にも女色に交へて男色沙汰もあつたが、こゝに大名にお仕へする腰元どもが、餘興のために若衆姿となる狂言能の催しをすることにしたのは、男色と女色との交錯から來る興を焦點とするからである。あの今義と觀了が比丘尼にやつす趣向を逆にし、更にもつと美しくあざやかに徹底させることであつた。こゝにも彼の遊びが見られる。

かういふ事共につけても考ふべきは、彼が讀者の意を迎へるために、殊に好色方面に於いて、ともすれば好色の淡さよりも濃さを求め、粋よりも肉の描寫に筆を吝まない態度である。その事はもとより「御前義經記」に於



「[illegible]色[illegible]」

てもいひ得る。更に「後室色縮緬」とか「野傾友三味線」などを參照すれば、なほその傾向を明にすることが出來る。

西澤與志は朝義とも號し、また一風と號した。與志は早い頃に、朝義は中ごろに、一風は後れて用ゐられてゐる。晩年には淨瑠璃作者として立つたが、その時は一風の名を以てしてゐる。

大阪の書肆の主人、正本屋西澤九右衞門であつた。商賣柄から得た歌舞伎淨瑠璃の知識が中々に豐富であつたらう、彼はなほ「御前義經記」の浮太郎冠者のやうに、慰みがてらに、その知識をはじめは浮世草子に、後には淨瑠璃に運んだのであらう。古典に擬しながら、實は名を古典に托したといふほどの夢幻情調も、すなはち歌舞伎淨瑠璃の知識に據つたためであらう。彼にはまた「今昔操年代記」の著がある。これ等の知識を專一に現したものである。



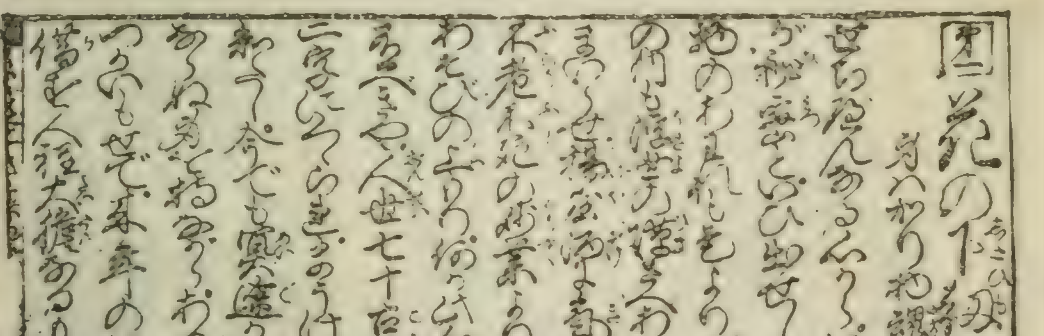
さし繪

浮世草子としては、「御前義經記」以前に「新色五卷書」があつた。好色の物語五つを收めてゐる。粹を離れた肉の香があまりに甚しい。また「女大名丹前能」「寛濶曾我物語」「風流今平家」などがある。これ等は長編の物語であること、古典に附會すること、大體「御前義經記」と傾向を同じうしてゐる。また八文字屋の三味線物の系統に屬する「野傾友三味線」「傾城御羅三味線」があつた。また八文字屋の氣質物の系統に屬する「後家色縮緬」があつた。なほ他に數作がある。彼の作風がつねに時の流行と共に動いてゐることが注意せられる。「御前義經記」の長所短所は、その心持を一時の流行に集中させた結果とも見られる。

一一　けいせい色三味線

枕本五册。江嶋其磧の作、しかし、署名にない。奥附に

ふや町通せいくはんじ下ル町　八文字屋八左衛門板



「傾城色三味線」

とのみある。
京之卷、大坂之卷、江戸之卷、及び鄙之卷、湊之卷の五卷より成る。京は五話、大坂は六話、江戸は五話、鄙に四話、湊に四話を收めてゐる。皆短編小說の形をとつてゐる。

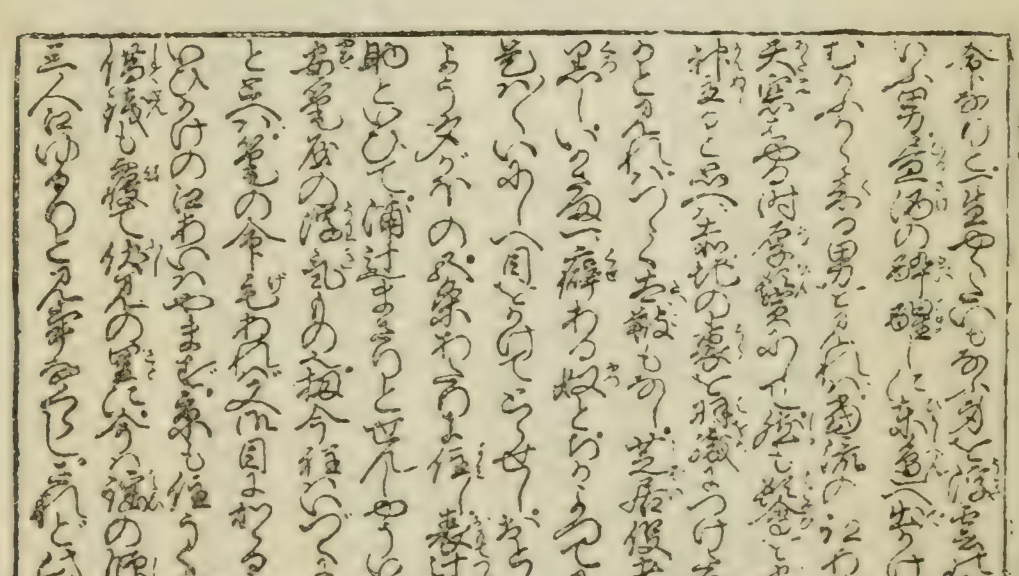
各卷はどれも〳〵卷頭に遊女の名寄(なよせ)を載せてある。京は嶋原の遊女、揚屋、出口の茶屋、遊女の揚代、祝儀の額をしるしてゐる。大坂は新町同斷、江戸は吉原同斷、鄙は伏見鐘木町、大津柴屋町、奈良木辻町、堺乳守同斷、湊は播磨室津、下の關稻荷町、長崎丸山同斷。

けれども主體の嶋原、新町、吉原の三所にあることは題名の三味線によつて知られる。序に

いつ聞ても魂にこたへて感じまいらすは嶋原の投節吉原のつきぶし、新町のまがきぶしなり

といひ、また

江戸の散茶に戀の寄太鼓、京の引舟難波の鹿、歌にあはせて鳴す色糸、ひく手になびく勤女の、品〳〵



初葉の表裏

かわりし諸分を、のせて色三味線と是を、名づけぬ

といふのが、自然と說明になつてゐる。「色三味線」の內容を問題とする前に、さしあたつて考ふべきは體裁とこの附錄めく遊女名寄の存在である。

枕本、すなはち大判二つ切の橫本の體裁は役者評判記を聯想させ、遊女名寄は遊廓の細見を思ひ出させる。二つのものは共に斷ち難き關係を有してゐる。

「色三味線」の板元八文字屋は奧附に見えるやうに、京麩屋町誓願寺下町の書肆であつた。早い頃から淨瑠璃本を出板してゐたが、さまでの格に至らない。急に芽を吹き出したのが二代目安藤八左衛門の時からであつた。彼は自笑と號した、多少の文才があつた。また商機を伺ふ才能もまんざらでないと見えて、その頃流行の歌舞伎狂言本の出板に力を盡しはじめた。この計畫は成功した。更に役者評判記の出板に着手した。

役者の評判記は、ずつと以前からいろ／＼の形式で世に行はれてゐる。八文字屋は何等かの特色を出さねばならなかつた。特色の一つは精密な用意を以て、役者の位附、藝評その他に正確詳細を期することであつた。特色のも一つは藝評以外に、短いながらも興味ある讀み物を附けることであつた。尤も役者評判記に洒落を極めた序文を添へることは前からあつたが、八文字屋のは、幾分小說的構造をとつてゐた、すなはち藝評に事を運ぶ段取として、たとへば平安朝の「大鏡」の老翁だちのやうに、問ふ者答へる者が、輕い、洒落れた、面白い話をいひかはしたのである。

さういふ形式の評判が、最初に八文字屋から出板されたのは、「役者口三味線」であつた。元祿十二年三月の刊行である。

「役者口三味線」の體裁は、三册の枕本、内容の藝評は、京、大坂、江戸、三ケの津、その各卷に短い讀物のあることは前にいふ通りである。

この「口三味線」の藝評と附錄の文の主客を顚倒したのが「けいせい色三味線」であつた。その色が遊里を示すことは勿論である。

何故傾城といつたかも考へておかねばならない。傾城の遊女を意味することは今更のことでないが、傾城といふ言葉の韻は、歌舞伎の舞臺の傾城事を聯想させて餘りがある。こゝにも「色三味線」の役者評判記との因緣を認めてもよいやうに思はれる。

これ以來浮世草子には、傾城の外題がぽつ〳〵と好色外題にかはり出した。露はな好色の名を避けて、好色の内容を盛るのに都合よいためであつた。

「色三味線」が「口三味線」の形式を踏襲しながら、附錄の文と藝評に當る部分との價値を顚倒させたことは、浮世草子を目當にする場合に當然だといへる。いな、問題は何故藝評に劣る遊女の名寄などを殘しておくかである。事の理由は、一まづ西鶴の好色本にまで溯つて考へることが必要と思はれる。

西鶴の好色本を構成する要素は、こゝで分解すべく、あまりに多岐に亙つてゐる。今はその一つに、遊里案内の書、遊女の細見名寄の類の存在を認めねばならない。西鶴の諸國遊里話は、過去に於ける、また現在に於けるそれ等を基礎として、その上に彼の美しい殿堂を築いたのであつた。さうして粹の至德の闡明にまで達した。ある意味に於いて、色道敎本、好色講本の體をなしてゐる。

いろ〳〵さま〴〵の方面に亙る西鶴の讀者である。粹の玄旨を知り、また諸國遊里の氣分に醉へば足ると

いふ側もあらうが、その教本講本から實際の効用を期待する側もあつたらう。また西鶴が心して藝術の世界にまで高めたものを、も一度現實の境に置いて見たいといふ側もあつたらう。西鶴が折角粋の情趣を描くことに努めた浮世草子を、肉にまで戻した一風等の態度も、讀者の要求に基づくことではあるが、同じ程度に於いて、やゝ方面をかへた要求、遊里の現實味を欲する要求に從つたのが、この遊女名寄であるとも思はれる。

「色三味線」の讀者の教養は、いろ〳〵の點に於いて、西鶴の讀者より遙に低い教養を有つてゐた。作の低落は作者の質のみに原因しなかつた。西鶴がわざと底に隱したものを、歴々と表に出して見せなければ合點の出來ない讀者であつた。それはまた天和貞享の初年の遊廓の遊興ぶりと、元祿も末頃の遊興ぶりの推移にも應じてゐる。

分散の憂目も厭はずに粋に身を喰はせるか止るところに止る境の内では、何の遠慮もなくぱつと小判の雨を降らす以前の浮世狂ひは、元祿も十年過ぎると、もうなくなつた。經濟界も治定して、自分ながら驚くやうなぼろい儲けはかなはぬ世の中であつた。けれど廓に鼬鼠の道は切られない。せうことなしに、さもしい遊興がはじまる。客がそれなら、遊女も同樣、品の下落は浮世草子作者が一樣に慷慨嗟歎してゐる。

浮世草子の作者は例の諧謔を弄し、趣向を構へるにしても、せめてこの氣分だけは寫實的に扱はねばならなかつた。特に遊女名寄を附するまでの用意を持つてゐる「色三味線」では、西鶴の理想の粋よりも、さまで金を遣はずに、面白くをかしく遊び手管の工夫を穿ち、遊んだ末の逼迫を巧みに盛りかへす世間上手の話を傳へる必要があつた。すなはち廓遊びも、心掛け次第で決してあぶないものでないといふことを、何處かに見せる必要があつた。形は好色本と町人物を混ぜあはせた西鶴の「置土產」風のものであるが、貫く精神にひ

らきがあつた。

巻一の「花の下紐ながと短と」の一條だけでも大體の見當はつく。

風の神を送るやうな恰好で、傾城買の心玉を人がたに移して町送りするのを、ある男が譲りうけて、かねて怨みある分限者の門先に棄てる。心玉はその主人鎌倉屋の源の身うちに入つて、つひぞ覺えぬ遊楽心を起させる。今まで一心不亂に溜め込んだのを惜しげもなく廓へ運ぶ。いつとなく皆になつて家藏だけ殘つた時に、心玉が飛んで行く。正氣に復る。復るとすぐに分限しないで濟む分別にとりかゝる。まづ乳母の亭主を親に仕立ておき、悴の不始末不埒千萬、今日唯今勘當致す、どうなりともなされと、貸主等に申し出させる。貸主等は自然延期の形となる。さうさせておいて、自分は江戸の出店で一かせぎ、京の店は手代に始末させ、五年の後に借銀殘らず皆濟の上、二度の富貴と榮えたといふ。

貸主を瞞して急場を凌ぐ詐術の巧妙は、しば／＼西鶴の町人物に見られる。吝嗇漢が心機一轉して産を破る話もその好色物にまた町人物に見られる。「色三味線」はそれ等を補綴する上に、また傾城買の精靈を一趣向としたのである。

「全部に亘つての事」ではないが、西鶴の作を據りどころとして、複雜な脚色を立てて、わづかに新様を見せるのが「色三味線」であつたといひ得るほど、これと西本鶴との間に關係がある。

其磧は「野傾旅葛籠」の序の中にいつてゐた。

　世の人の心を慰むる浮世草子の作者の名人といふは、二萬翁西鶴古法師に増るはなし、いくたび見るにあかず、僕およばずながら此法師の詞をかりて、傾城色三味線といふ戲れ草子をつくり、書林八文字屋

にあたへぬれば、あたら櫻木に費して世にひろめぬ。

彼が西鶴の詞をかりる態度方法は一樣でない。卷一の第一話のやうに、たゞ大體の感じから來るのもある。また特にある一條の一節を假りて、敷衍して、一話を構成するものもある。今後者の一例を拾ふことにする。

卷一の「一花を繕ふ柏木の衣紋」には京の大臣半六が、夢中になつての廓遊び中程へ父親が酒樽に入つて來て、勘當する話がある。

伊丹の薗菊と申す名酒、去方さまより進上を運んで來たのを、座敷の眞中に直せば、内より樽のかゞみを取つて、親仁が立ち出でて小言だら／＼の勘當いひ渡しといふ奇拔の筋である。

其積は、これを「好色五人女」清十郎が室津の廓に遊びはうけてゐるたゞ中へ、父親の來て勘當するくだりから借りたのである。

かゝる時清十郎親仁腹立かさ成、此宿にたづね入、思



「風流曲三

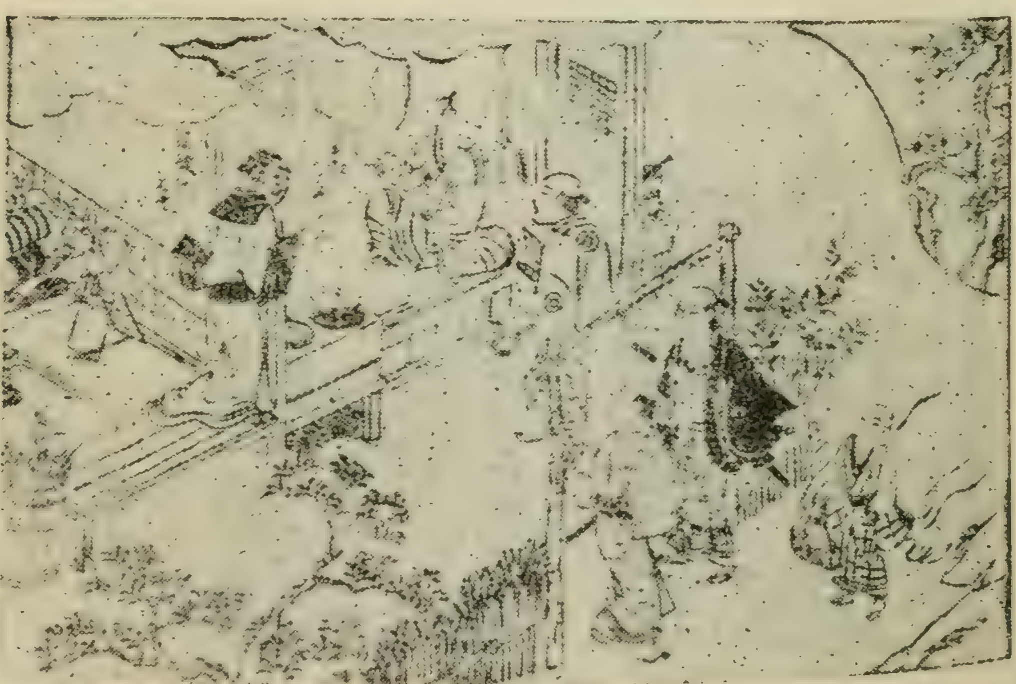
ひもよらぬ俄風、荷をのける間もなければ、是で焼とまります程にゆるし給へ、とさま〴〵詫ても聞ず、兎角はすぐにいづかたへもお暇申てさらばとて歸られける

西鶴の文はたゞこれだけである。其積の敷衍も度を過した。「思ひもよらぬ俄風、荷をのける間もなければ、是で焼とまります」と洒樽の趣向と、あまりの段違ひであつた。

「五人女」は父親の歸つたあとの、揚屋の現金ぶりを斯ういつてゐる。

揚屋にはげんを見せて手扣ても返事せず、吸物の出時淋しく、茶のもといへば雨の手に天目二つ、かへりさまに油火の灯心をへしてゆく、女郎それ〴〵に呼たつる、さても〳〵替は色衒のならひ、人の情は一歩小判あるうちなり。

その言葉を殆どそのまゝに借りながら、其積は多少の加筆をなした。加筆はともあれ、書きあらためは、あまり



味線（さし繪

にさびしかつた。西鶴の文章魂は悉皆無になつてゐるからである。

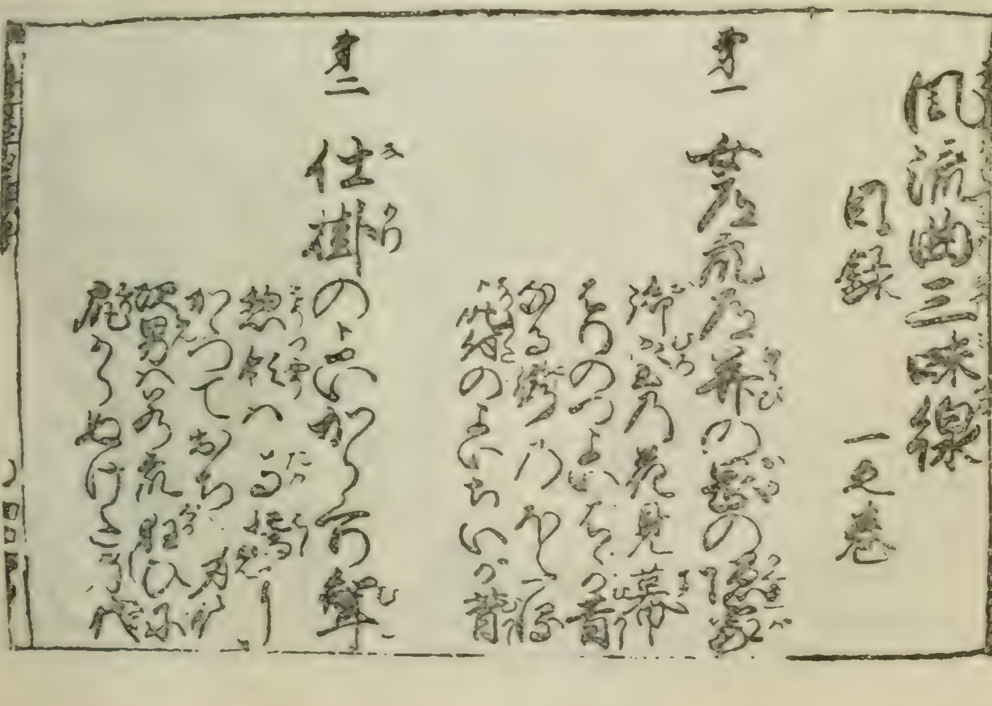
茶のもといへば、雨の手に天目二つ持て來て、立ながら差出し、歸りさまに蠟燭けして油火にしかへて行、

臺所には吸物仕かけかゝつた鍋の下を引て、

扨も／＼替るは色宿のならひ、人の情は金あるうちなり、

これが其積のさびしい書き直しの跡である。

「五人女一の傾城宮川は、勸當うけた淸十郎に義を立てゝ、心中しようとする。人々にとめられた後で、宮川は獨り自害する。その宮川を書き改めた半六の相方柏木は、たゞ／＼分別の權化であつた。柏木は半六の父親がわざ／＼色里に勸當を申し渡しに來たのは、結句この里へ足踏させまいと思案の上の勸當と合點した。是非とも半六に足を遠のけさせようと、心にもない不心中を見せるのであつた。



「曲三味線」目録

分別は遊客の遊興ぶりだけでなかつた。同じ分別が其磧の創作の場合には、或は西鶴の模倣の場合といつた方がよいか知れないが、兎角趣向を複雜させることにとゞまり、また讀者によう會得させようの老婆心から、西鶴の熱をすべて失はせたのであつた。

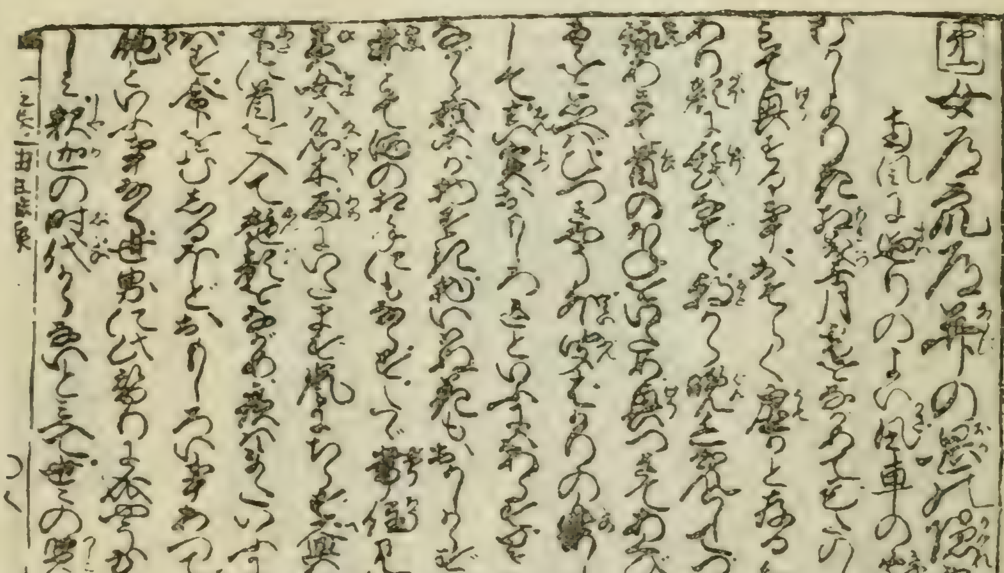
委曲を盡した文章やら、趣向澤山やらが、「色三味線」をして、洛陽の紙價を高からしめた。彼はついで「風流曲三味線」を書いた。その頃から何々三味線と題するものが少からず行はれるやうになつた。「風流連三味線」「傾城繼三味線」「傾城二挺三味線」「傾城伽羅三味線」「傾城手管三味線」「野傾友三味線」「傾城歌三味線」など、大方は形質共に「色三味線」の後風をうけてゐた。

一二

沖津しら波

大本五冊。都の錦の作、元祿十五年の刊行に係る。

後漢の白波賊の故事によつて、わが國ではやい頃から



同上本文

白波をそのまゝに訓讀して盜賊の義とした。こゝの「沖津しら波」が「伊勢物語」の、風吹けば沖つしら波立田山夜半にやひとり君の越ゆらんの歌に據ることは、序にまた卷尾に見えてゐる。すなはち盜賊談を集錄したものである。卷一に四話、卷二に二話、卷三に三話、卷四に三話、卷四に一話、話の筋には長短があるが、各卷共に四條に分つてゐる。

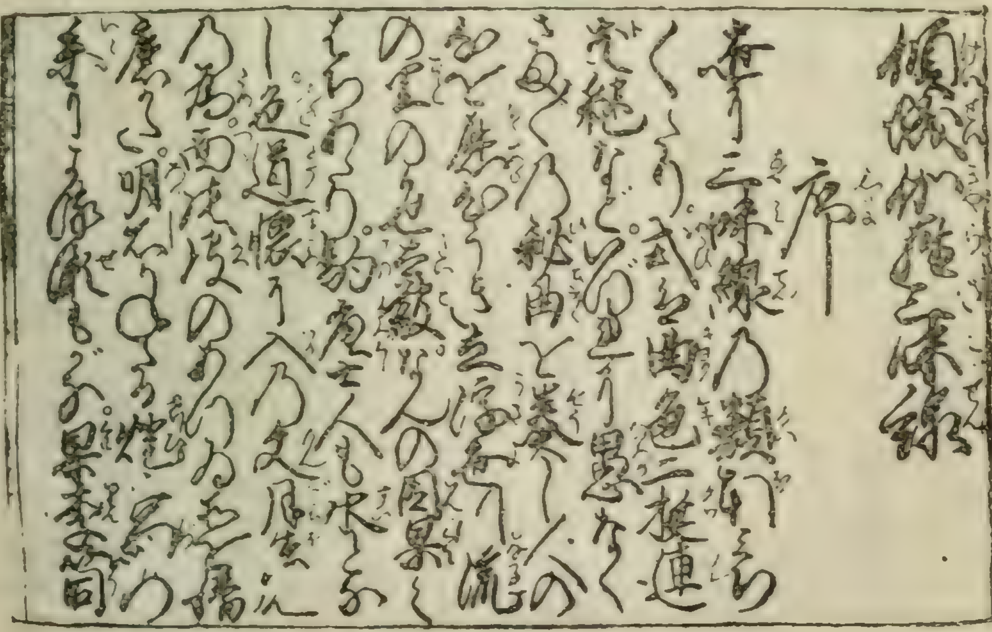
序の一節に、

さりとて浮雲渡世ぞと身の毛よだつ覺しまゝ先白をかへり見て恒の産なき心にも欲の皮をばこそげすて朽たむかしを拾出し又新しく耳なれしいやな言計書集ちよろりと卷が五になる

とある。また

仲尼の筆は似せねども亂臣賊子の性惡にびつくりさせんと藁を燒のみ

とある。何故に盜賊に關する話などを集めたかが明瞭である。新奇を欲したことと、教訓を要めたことの二つ



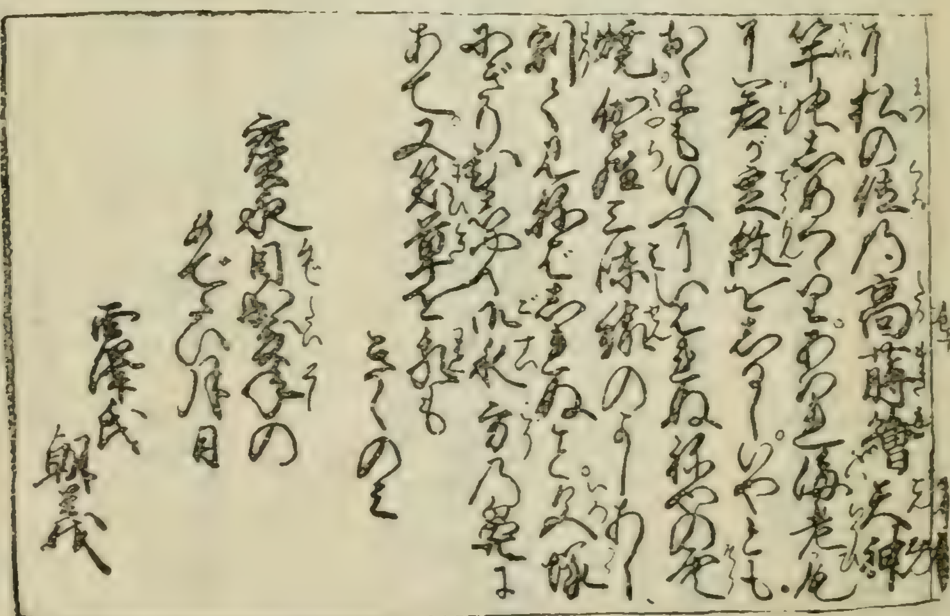
「傾城卿經」

であつた。新奇を欲したのは、讀者よりもむしろ作者にある。常に異を樹てようとしてゐる都の錦の態度は、この作の存在からも窺ひ知ることが出來る。

一代の氣運の動くところ、當然の歸趨であるが、好色本が押しも押されもしない浮世草子の正統となつた。殊に西鶴の「好色一代男」の大當りが、やゝ油を灌ぎ過ぎた。浮世草子の世界は「沖津しら波」の出板される元祿十五年あたりまでは、殆ど好色本に壟斷されてしまつた。

しかし、浮世草子は時代相を寫實的に扱ふことを本來の使命とするだけに、それ以外の世相の描寫叙述を容れる餘裕が、といふよりもむしろ責務をさへ有つてゐる筈である。當の西鶴は好色本が隨從する間に、とうに町人物奇談物に轉じてゐた。

彼の町人物はいたましい世相を寫し出すと共に、金のためには、義理も、道德も絲瓜の皮と見る町人の憎いすごい手腕を書きしるしてゐる。その手腕がわづかに延びれば、詐僞とも、杜騙ともならう。少しく暴惡を加へれば



「三味線」序

強盗ともならう。

彼の町人物は、浮世草子が假名草子の教訓の脉をうけてゐるよりも、もつと強い意味に於いて、もつと直接の關係に於いて、敎訓を作つてゐる。

それならば都の錦の「沖津しら波」の盗賊談も別に新奇な趣向でもなく、敎訓臭を纏綿させるのも不思議でない筈であるのを、なほこの書を以て異を樹つるに急であるといはねばならないのは、四年の後に出板された北條團水の「晝夜用心記」とか、またそれよりも少しく後れた月尋堂の「儻偶用心記」などと比較する結果である。

「晝夜用心記」の序のうちに、

大概世間に謀計子といふ者、僞をたくみ辯舌もつて人を誑かし、金銀を掠め奪ひし方便、古今の間語り傳へしを、三十六種に書きつらねたり。這裏虚あり實あるべし、只民家用心の爲に記して眞僞覺悟の種に編める者也

とあるやうに、これはかたりの手段を傳へて、世の人目を敎誡するものである。それだけに、大體は當時の見聞にかゝるものを、今日ならば新聞の記事に當るほどのものを收錄してゐる。また豫じめ序に虚の話も、昔の話も混つてゐることを斷りながら、どれも今の事實談であるやうに書いてある。

「沖津しら波」にはその用意がなく、またその必要もなかつた。作者の態度の相異から來てゐる。

「沖津しら波」には、當時の事實を斷つてゐるのもある。さうらしく思はれるものもある。それ等よりも目立つのは、たとへば「大江山のさかづき」のやうに、酒顚童子の異聞、また四天王山入に、いさゝか今樣風を

逆浪に人を救ふ命おちざる事

臥田禾稲雲霞下尽く寇と文選乃をよみして礼を
ちかふ此一句をまもりまさば人として礼義の二つをまもるへし
恒の産なき時ハ恒の心なしと書かれたりされどもかくのかすぞ人の恩を
わすれぬハ人の道なるか[illegible]乃心
つく家を取もうしろ門に立人の恩を思ふ時ハ大なる恩を
ゑくといふ也ふゐあそれて命をかきぞ火乃急り
ゐる者数日にして新しき表町に浦に[illegible]
此の人ハ流れて本屋より[illegible]瀬戸乃[illegible]
国よりおもむきしが[illegible]ばんの[illegible]

加味したもの、或は「青墓之泊」「夕顏の自慢」「赤坂のなみだ」の續きもののやうに、謠曲「熊坂」をそのまゝに物語化したやうな類ひであつた。作者はその書きかへに於いて、騎達者を誇つてゐたらしい。

卷五の四條は、一つの話となつてゐる。丹波の國の庄屋吉田孫兵衞の强惡物語である。その弟吉田九助は別家してゐたが、つゞく不幸に田畠を賣り、なほ未進に困り、夫婦別れして江戸へ出て奉公する。一心不亂の勤めに、主人から目はかけられる。年々に增す給金を女房のもとに送つてゐる。上書が兄の名になつてゐるのをよい事に、孫兵衞は着服して弟嫁に渡さない。と知らぬ九助の女房は困難は迫るし、江戸へ行つたなり何年も音沙汰せぬ夫の心も恨めしいし、娘共々乞食して鄕里を出かける。

九助は古鄕へ錦を飾る心で、近江の草津宿へ來て、はからずも女房と娘に邂逅する。はじめて兄の惡事を知つた九助は、二人を宿にとゞめおいて、下人一人を伴うて鄕里へ着く。孫兵衞一家の者は相談して、九助を殺す。下人は樣子を見屆けておいて、代官所へ訴へる。孫兵衞はじめ死刑に處せられ、九助女房は貞節を褒美せられた。

作者はこの話は「伊勢物語」の一條を據りどころとして書いたといつてゐる。

爰にはたゞ河内通の一ふしを賊取て歌仙と申す

と斷つてゐる河内通には、貞淑の女房の一條がある。風ふけば沖つ白波の歌はその女房の歌である。作者はこの書の題名の由來をこゝに明示したのである。

「書夜用心記」は、事實を事實としてしるして、その奥に教訓を滲ませようとする。時に「とかく生物には油斷すべからず」とか、「留守居は心得べき事なり」とかいふ言葉を添へるけれど、極めて輕い扱ひであ

る。「儻偶用心記」もまた同様である。それと比べれば、「沖津しら波」の教訓はあまりに仰々しい。事實の奇を傳へると、仰々しい教訓を說き立てる興味は、この作者にはおそらく並行してゐなかつたらうか。作者はこの二つの組合せを未だ見うけない趣向と得意てゐなかつたらうか。これがこの作者のいつもの癖である。

教訓はまた教訓のためでなく、和漢の典故を擧げた衒學臭を伴つてゐる。ことによると「伊勢」からの一條、また題名などもそこから來たわやくであつたかも知れない。いづれにしても、作者その人を知るの必要がある。

一三

都の錦の何人であるかゞ、ほゞ明瞭になつたのは、明治二十九年の頃の「早稻田文學」に饗庭篁村氏が「小說家の人物」と題して、彼の傳記を紹介したためである。全文はまた同氏の著「雀躍」に載錄されてゐる。紹介は寫しによつて傳はつた彼の訴狀、寶永元年霜月十八日薩州山ケ野金山の獄中からさし出したものが中心になつてゐる。こゝにその全文を引いておく。

乍恐奉願口上覺
本國常陸宍戸鄕宇都宮八田之流
右大將賴朝公同腹兄
左衞門尉知家二十一世
生國攝津大阪

宍戸鐵州　申三十歳

藤氏系圖一卷　田代藤左衛門殿へ預置
洲濱太刀六孫王經基より傳來、大阪御堂前森田正九郎へ預置
父　松平萬右衛門康富　家康公より諱字賜
母　廣幡大納言豐忠女六年以前死去號心月院

私儀攝津佐用郡の鎭主佐用姫大明神（社領百四十石、此外山林河海等池田輝政之寄附也）之神職を相務、八田上宮內少輔從五位下光風と申候、然るに二十一歳の時儒學爲修業致上京、御幸町通竹屋町下る處に借宅仕り伊藤源助維禎門下に屬し、經書の講義を承り、理學辯論の事には北村秀略法印に隨ひ聽歌書之講釋、烏丸亞相資慶卿の御會書に免され、於是和漢之書に眼を曝し已に六年也。然るに同學の惡敷友立に誘引せられ、廿六年の春に與風花月の集與を催し、終に艷色に溺れ、島原に行通ひ、適々學問の爲貯置きたる金銀過分に遣捨、剩へ祖父廣幡家の所持町屋敷を（三條繩手口に有之）謀計を以て密に賣拂、其代並秘藏の書籍を始め衣類迄無殘賣拂すて申候に付、親類緣者の勘氣を請け、朝夕難續迷惑仕候故翌年二十七歳の春、新黑谷門前に引込、小庵を結び佛法修行を志し、山科大宅の月波和尚に參禪し、即鐵舟と改名し或は業のため、假名書物を述作いたし書林に與へ其禮物を請、渡世候事一年六月、その後立身のために同學の方より書狀をうけ東武の親類にかくれ密かに四月三日江府に罷下、添書の方を尋ね候處に彼方此方行通ひ、相尋ね候へども近き頃類火に逢ひ行方知れず罷成候に付當分滯在すべき住家無之候て町々徘徊候間、無宿改布施孫兵衛樣に見

咎められ則、寺社奉行永井伊賀守様へ御引渡有之、同年冬十月遠流に處せら、御當地山ケ野金山へ召放され御養育を請候事難有奉存候。野拙儀幼少の時分より日置流の弓術を好み笠掛犬追物まで無殘處習ひ得候に付金山に於て御役人衆中様へ被召寄、折々弓術を御尋成被候故朝夕心安く出入仕り右之衆中より御厚情に預り候に付、流人中間の源次郎と申者恨深く自然と某儀を横道を以て無理と宛行申候に付無念至極に存じ當七月二十二日之夜小屋を忍び出、自害可仕覺悟にて深山に引込み、已に絶命可仕と存候處に俄に變心出來いや／＼死は輕くして生は重し一旦此境を逃出で天運に任せ申候心體一途に極め其夜直ちに構を越へ申候へど御國中不案内故小河内にて天の網、難逃そのまゝ被召捕、同八月四日に御當地へ入牢仕候、是元より重罪と云ひ勿論過去の業因によると雖も後悔愚夫の迷路分別しがたく恐を不顧歎き申候意趣は赤米一合も無汁にて、被下候へば追日衰勞仕り生ながら餓鬼道の苦痛止事なく、來世に於ての罪障又思ひやられ歎ケ敷存候間、あはれ願くは御仁心を以て被召出忽ち首を刎られ被下候はゞ生前の大幸難有奉存候

半髪識大極　善惡則天明

捨てにけり今日の命は惜しからで亡きからになる恥の悲しさ

私事京にて都の錦と申し候由緒は諸藝太平記と申すものに有之候、猶御當地金山半七など能く存じ申候

寶永元載申霜月十八日　流人鐵舟

御客屋御奉行様

これによれば、都の錦は宍戸光風、後に名を鐵州と改め、伊藤仁齋、北村季吟、烏丸資慶に就いて和漢の

學を習ひ、また月波和尚に就いて參禪したのであつた。彼は遊蕩のために勘當され、身すぎのために浮世草子の筆を執つたのであつた。

これ等を通じての傾向は、大方古文を今様に書き直すことであつた。古典の現代化は元祿の頃の常であるが、多くはそのおもかげを今の世に假り來るだけである。原意と原文とに必ずしも拘泥しない。都の錦は今の讀者が求めてゐるみだらな方面を加へながら、なほ原文原意を傳へようとする。それが興味よりも博識の衒ひに於いてなされてゐる。

「元祿曾我物語」「御前お伽婢子」「風流神代卷」「風流日本莊子」「風流源氏物語」等の作がある。

訴狀にいつてゐる「諸藝太平記」とは、梅蘭堂の著名のある、元祿十四年出板の「元祿太平記」のことである。梅蘭堂は實は都の錦の假りの號であらう。文中都の錦を褒めそやすことが頻りである。都の錦の和文は、「牡丹餅のやうな柔な中へ、文かきもちの如く堅い事を交ぜ、或はどつと笑ひ、或ははつと恐る、誠に文質彬々として面白く可笑くあはれに殊勝におぼへ侍る」といひ、「西鶴なくなりしとて其道絶しにもあらず」といつてゐる。

彼は文章に於いて、西鶴の後繼者を以て任じてゐるが、學識の點は同日に論ぜられることを慙ぢてゐた。西鶴が輕口ぬれ文の發明、諸國に聞へて、その身ほまれを取るに似たれど、ほまれはそしりのもといとかや、もとより西鶴は文盲にして書法をしらず、その證據には、好色一代男世之助嶋わたりの段に、いのこづちと午膠と別にかけり、午膠の和名をいのこづちといへば名は二つあれども本一種なり、西鶴が心にはいのこづちと午膠を別の物と思ふにや、かやうに世俗までわきまへたる事さへ考へぬ西鶴なれば、

ましてその外の事とるに足らず、或は曾子の語を孔子の語となし、枕草子の文を源氏物語にゆづりたる事多し、すべて西鶴が作れる双子には、小大のあやまりあらずと云事なく、ひたすらかた言をのせずと云事なし。

彼が博識ぶりは、その著作のすべてに於いて見られる。篇中あらはにおのれを吹聽することさへある。時に常態を逸してゐるかと思はれるほどである。

「沖津しら波」の作風も、作そのもの丶存在も、これ等を參照して後に、はじめて理解される點が多い。

一四

色道大全 傾城禁短氣

枕本六册。序文の末に

寶永八年卯月中旬　作者八文字自笑

とある。寶永八年は正德元年である。八文字自笑の書肆八文字屋の主人であることは勿論である。しかし、實際の作者は江嶋其磧である。

「禁短氣」の題名は「賛歎記」を偲ばせたものであらう。當時の談義流行を當て込んだことと思はれる。短氣を禁ずの文字を宛てた理由は、卷四の第一「吉原寺四十八夜の夜見せ談義」に見ることが出來る。

例の戯れから、日本堤にかくれない三野上人が、傾城禁短氣を述べる趣向がたてられてゐる。

抑二萬翁西鶴、一代男經に女郎の短氣をいましめ、よき客をとりはなすは、全盛の時我身を高ぶり氣儘

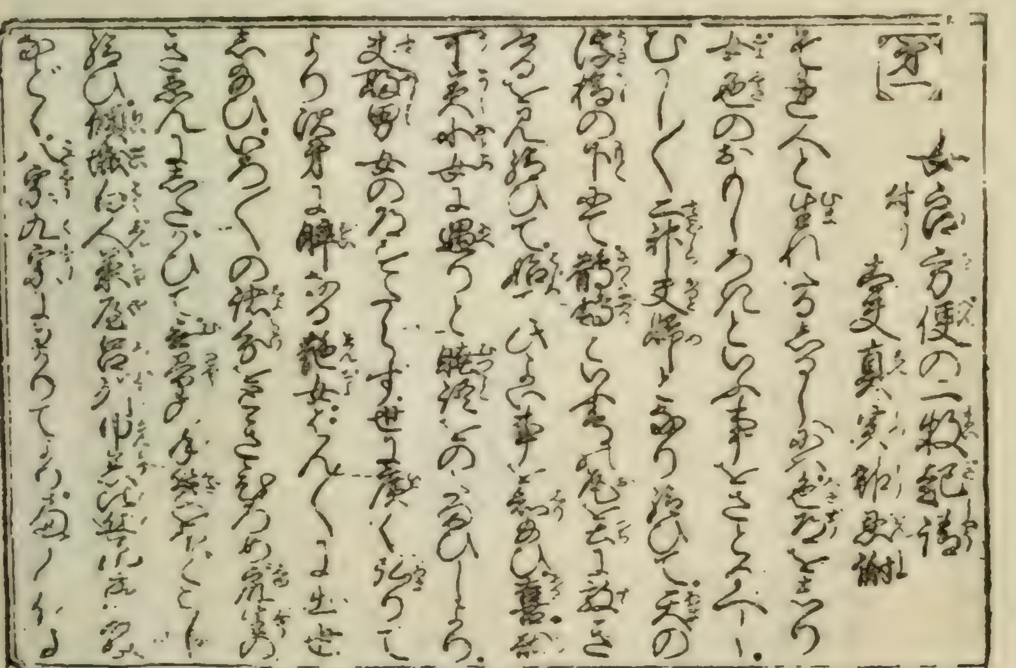
をして、たてまじき事に腹をたて、前方成大臣を初心などふりつけ、衆生に幾世の思ひをさせられ、程なくはやりやみて、太夫からういつらいめに青暖簾の住居せられし女郎かぎりなしと、氣の短きを禁め給ふは、何と有がたい事ではないか云々

この洒落が題號の由來である。

色道大全と頭に冠らせてゐるやうに、皆色道に關する言説と、具體的の例話を載せてゐる。いふところの色道の解は多く西鶴の好色本の範圍を出でなかつた。「一代男」を一代男經といふのは諧謔であるが、その中おのづから眞意を見るに足る。

西鶴を模倣することは、「色三味線」とかはりはなかつた。その多くは彼の一節一句をとつて敷衍することである。ともすれば、かの一代男經の一言一句の註疏すなはち「禁短氣」であるとも見られる。たとへば、

醉のまぎれに、世之介金錢銀錢、紙入より打明て、雨の手にすくひながら、太夫戴けやらうといふ、此

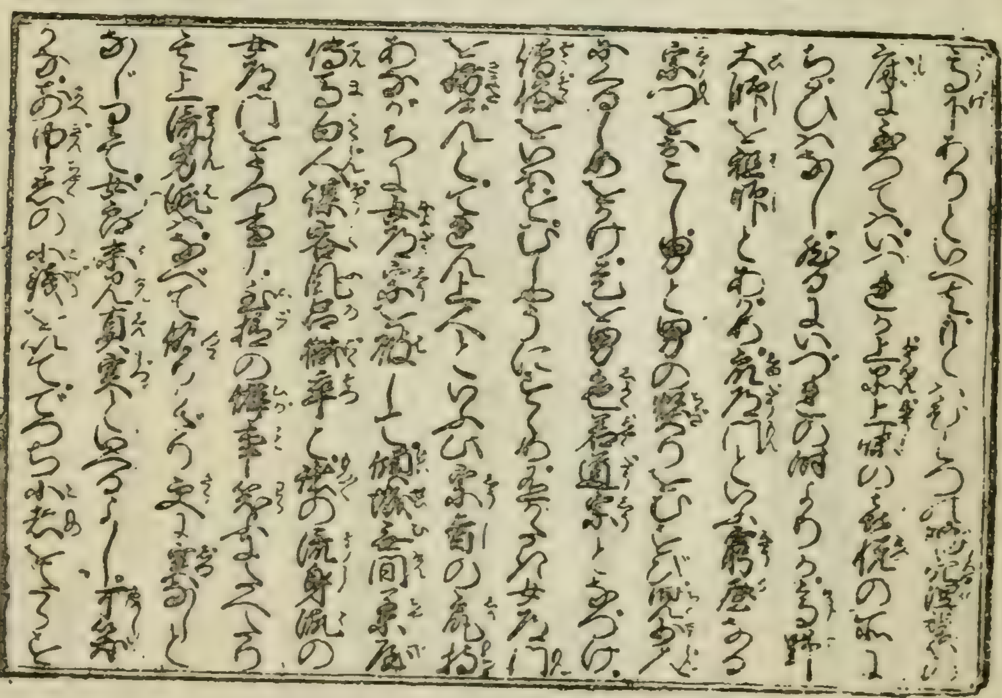


「傾城禁短氣」

中では戴かれぬ所ぞかし、初心なる女郎は脇からも赤面して、居られしに、高橋しとやかに打笑ひ、いかにも戴きますと、そばにありし、丸盆に請て、今目の前でいたゞくも、内證にて、狀で戴くも、同じ事と申て、禿を呼びよせ、なふて叶はぬ物じや、取ておけと申されし、其見事さ　いつの世か、又有べし、

といふ「一代男」の一節に、も少し細い筋を添へ、趣向を構へたのが、巻一の「難波の太夫卽身根引の成佛」の一節であつた。

ある時半太夫都の銀大臣におもはれ、全盛むかしに十倍、白銀のふき出し見るやうな枇杷色した顔ばせ、人めなくば御ほゝげたへくひつきたいほど、うまさうなる所躰、山はやぶれし編笠の中よりまもり見て、是太夫樣こなたはからず御盛でめでたい。我等は替りてかうした姿になりても、輪廻きたなく恥をすてゝ、せめてはお姿成共見てな



初集表裏

ぐさまんと毎日參るが、今とても昔の情はわすれ給はじ。我とても僞りならぬ心ざし、今に絆の種となりて、親の呼でやらうといふ女房を嫌うて、親一門にうとまれかくはなりぬ。せめては我が志ばかりをうけて給はれ、あらば何かをしかるべしと、かすかなる前巾着より文錢一文取出して、いにしへの百兩より今此大切な所、一錢はかろくても、心底のおもき所をもらうてたもれと差出せば、太夫涙ぐみて、かゝる中にもまだすてたまはず、おせわ成お心づかひあだにはぞんぜずと、往來の人にはぢらへる氣色もなく、彼一錢をおしいたゞき禿をまねきて、大事のおあしぞよくとつておけ。死て冥途へ行時六道錢となして、あの世迄お情をわすれぬ種にと大事さうにわたせば、山は是を見て我ををり、初心成女郎ならば赤面もすべき所を、半太夫なればこそ大道の眞中にて、ようはいたゞきし事ぞ。是はもうたまられぬ所ぢやと、挾箱持し下人をよびよせ、蓋を取て五十兩包を出して、今の一錢の替りに是くれなゐの、ぱつとしたるしこなし。太夫さらに悦ぶ氣色もなく、手にとるより五十兩の小判大道にばらりとまきて、眞ある一錢にはおとりし物と、見かへりもせず直に越後町の扇風方への御來臨。

これほどの事は隨所に見られる。また男色を女色より優れりとする論の如き、幾度くりかへしても、西鶴の「男色大鏡」以外に出なかつた。その要を約すれば、どゝのつまりは「大鏡」の序に歸着する。

すると「禁短氣」の新しいところは、それ等をどう綴り合はせたかにある。そしてどう趣向を立てたかにある。

すでに談義を前提する題號であるやうに、談義、說法、宗論に擬することが全篇の趣向であつた。それも

水上の新談義、または、四十八夜の夜見せの說法と戲れてゐる。

「伊勢物語」「枕草子」などの、歌人が以て古典として尊重するものを、戲れの文に翻すことは、假名草子時代から行はれてゐた。その脈はずつと浮世草子にまで續いてゐる。それの戲れを經典にまで及すことも、歌舞伎淨瑠璃の世界には頻りに行はれてゐた。佛でも祖でも緣さへあれば滑稽化しようとするほど、信仰から離れてゐるのが當世作者であつた。

まして、色道の道は善い意味からも認められ、惡い意味からも認められてゐる。諧謔の資料としては、惡い方面から利用せられた。西鶴の言辭を引いて、さながら經文扱ひをする其磧の西鶴崇拜は、善い方面に於いて附會せられたのである。

「禁短氣」は六卷から成つてゐる。大體の趣向はどうやら通つた筋立を有つてゐる。作者としては一貫した色道論を示したつもりであらう。をかしい色道の體系であつた。

卷一は遊女に實ありやなしやの論である。論は實ありといふに決する。卷二は男色女色いづれが優れるかの論である。男色を主張する論は破れて、色道は遊女によつて專らなるべきことに歸する。

「男色と女色の優劣觀は、しば〳〵好色本に見え、優劣論はずつと後まで續いてゐる、論議はいろ〳〵の形式に於いてなされてゐた。「禁短氣」はその早い頃の作物、安土宗論に擬した點に於いて特色がある。

卷三は京、これはわざと島原を避けて、今いふ公娼對私娼の論、殊に私娼の中の品目の論である。卷四は江戸の吉原、卷五は大阪の新町。三都の色遊びの表裏を盡して、色の道の至りを得たところで、卷六の色道五重相傳といふことに終る。

「傾城禁短氣」が世に持て囃されたことは一通りでない。その續編として、次編、三編がずつと後れて明和二年に出た。作者は二世自笑。

一五

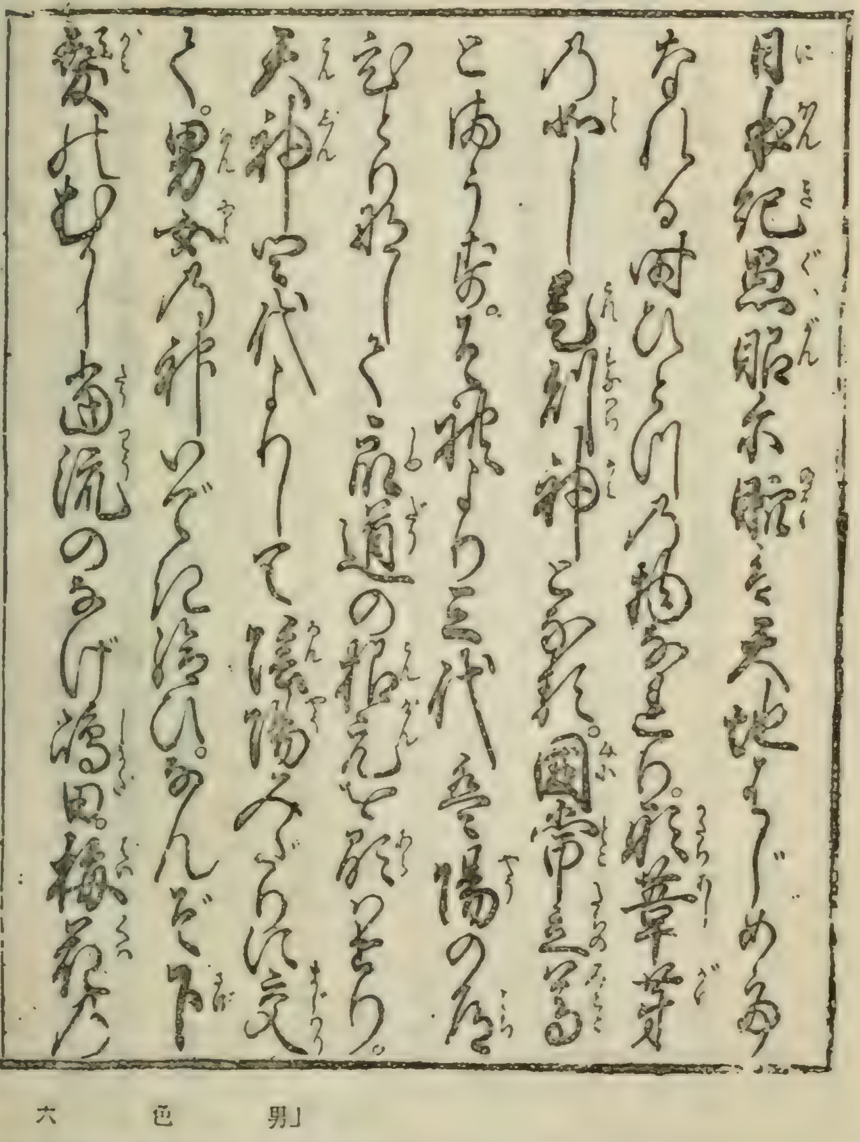
日本新永代藏

大本六册。作者は鳳城團水、正德三年の刊行。

一に「今世長者鑑」といふ、題簽に附記されてゐる。

「日本新永代藏」といふ名が西鶴の「日本永代藏」から、「今世長者鑑」の別名が、「日本永代藏」の別名「大福長者敎」から出てゐることは明である。

六卷から成つて、毎卷五條の小話を收めてゐる、また「日本永代藏」とかはりがない。各卷の目錄



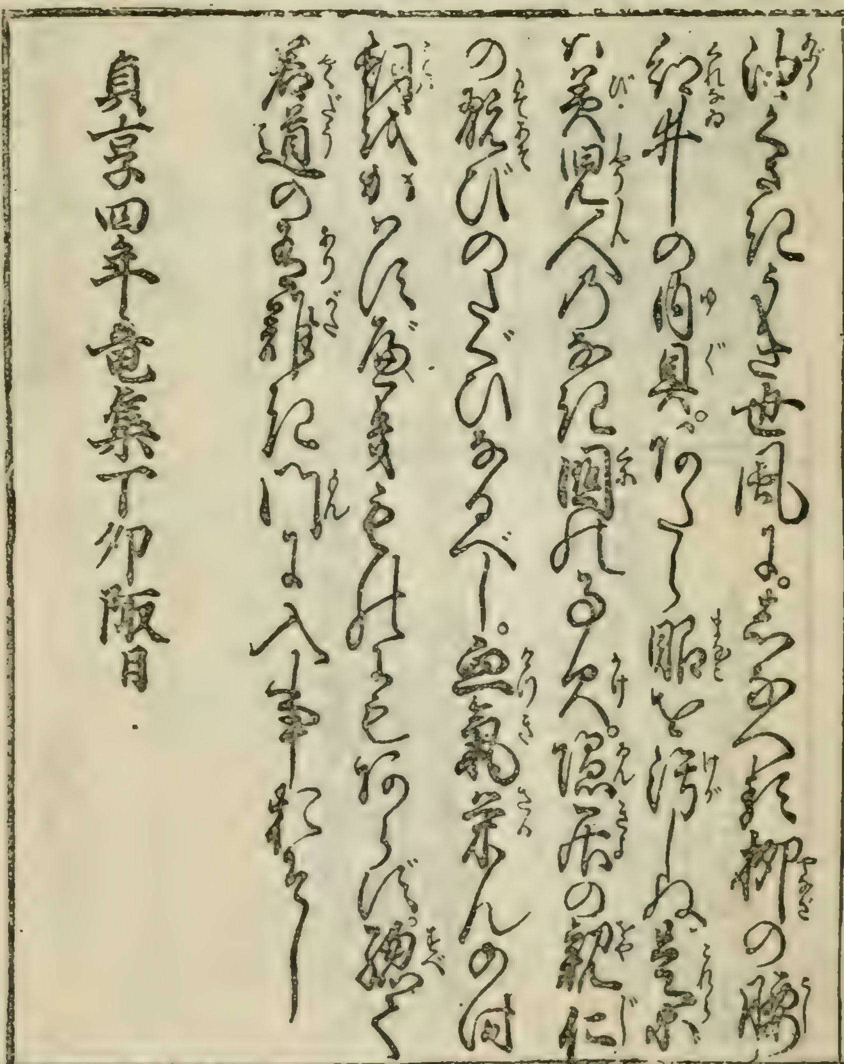
六　色　男」

の立てやうも、圖案も彼のうつしである。

題材に於いて、また題材の扱ひに於いて、どれほどの類似が二者の間に存してゐるかといふよりも、むしろどの程度まで西鶴を模倣し得たかゞ問題である。

西鶴が「日本永代藏」で心を盡したのは、富を致すための知惠才覺と勤儉の態度を傳へることであつた。その間おのづから人間性情の深いところに觸れ、その餘おのづから教訓の口吻となる。園水はもとよりそこを覘ひとしてゐる。たゞ西鶴の觸れたものに觸れ得ずして、西鶴の教訓が更に度を加へてゐることを見受ける。隨分勸懲の露はなるものさへある。

こゝには一つの例を擧げて、比較してみる。大體の見當がつくことゝ思はれる。



文 作 鑑

「日本永代藏」卷三には「世はぬき取の觀音の眼」といふのがある。信心に托して、初瀨の觀音を三度まで開帳して、その戸帳の古渡りものなるを見てとり、新しいのを寄進して、もとのを貰ひ受け、茶入の袋、表具切に賣りて大分限になつた男のことを書いてある。いはうとするのは、その章に於ける西鶴の結びの言葉である。

さてもすかぬ男、一たびはおもふまゝなりしが元來すぢなき分限むかしより淺ましくほろびて後には京橋に出てくだり舟にたより　請賣の燒酎諸白あまひも辛ひも人は醉されぬ世や



「日本永代藏」目錄一例

日本新永代蔵巻之一

白銀百穀萬菜の御評議

國に恩章あり。三才縁の形。今まで年乃御代に生れて糧に貴き宝に恩るるたぐひある人う。分限相応の稼ぎをも行ひ勤めず。油断して徒に日をつひやし空意に家を潰すなり。とく不覚。猶子孫にいたりぬれば士農工商ともに出世の身をなしぬるところにいてもその事をたゞはなして。功をつみ労をかさねしたるためし。あるも。なかなか事にありども。げに十が一つもそれより家業の仕似せ。性に見えつゞきて人によそをつらへども。道言をかへりみて礼儀をうしなふ事なり。是故

文本［蔵代永新本日］

これがどの程度の因果律を含んでゐるのであらうか。西鶴の意は彼の機敏を傳へるに專らであつて、添へたのはほんの輕いものと思はれる。

「日本新永代藏」の卷六の「錢の穴より天道の惠」は、別に彼に據つたとはいはないまでも、甚だ類似してゐる。佛具商が諸寺の出家をいろ／＼の手段で墮落させ、重物靈寶を奪ひ、資堂銀を借り倒して、富豪となつたのである。しかし後の話はかなりの距離がある。彼は亂氣して、靈寶々々と口をたゝき、最期の折には金銀に執着あつて蘇生すること三十四五度、野邊おくりの時には雷火下りて彼の骸を煙にした。

團水はかういふ結末をつけて、なほその上に永々しい教訓を添へてゐる、西鶴の言葉を百倍しても足りなかつた。

團水と西鶴は、「日本新永代藏」と「日本永代藏」との比較にとゞめてはいけない。何となれば、團水の西鶴に據るところは「織留」にも「胸算用」にも「二十不孝」にも、その他にも及んでゐるからである。

鳳城團水は北條團水である。團水一に團粹とも書いた。「俳家大系圖」にいふ、

北條氏、俗名詳カナラズ、橘堂又平元子ト號ス、薙髮シテ白眼居士ト云、一條堀川ノ人ナリ、後浪花ニ下リ、西鶴ガ遺跡ニ住シテ西鶴菴ト改ム、家書「塗笠」「秋津しま」「たん袋」「彌之助」「獨鈷鎌論」西鶴ト「特うし」兩作等アリ。「家譜」ニ一生涯淸盃ノ人也トイヘリ。寶永八年辛卯正月四日沒、行年四十九

辭世　おぼろ／＼引べく胸の月淸し

こゝに西鶴の遺跡に住したといふのは、七年の間であつた。彼みづから「西鶴名殘の友」に序して、

洛陽を去つて七年、浪華西鶴が草庵を守るといつてゐる。俳諧と戯作の師に仕へて志の篤きことが知られる。

彼の浮世草子は最も傑出してゐる「日本新永代藏」以外、「晝夜用心記」「一夜船」「新武道傳來記」等がある。「新武道傳來記」の西鶴の「武道傳來記」の踏襲であることは勿論である。

一六

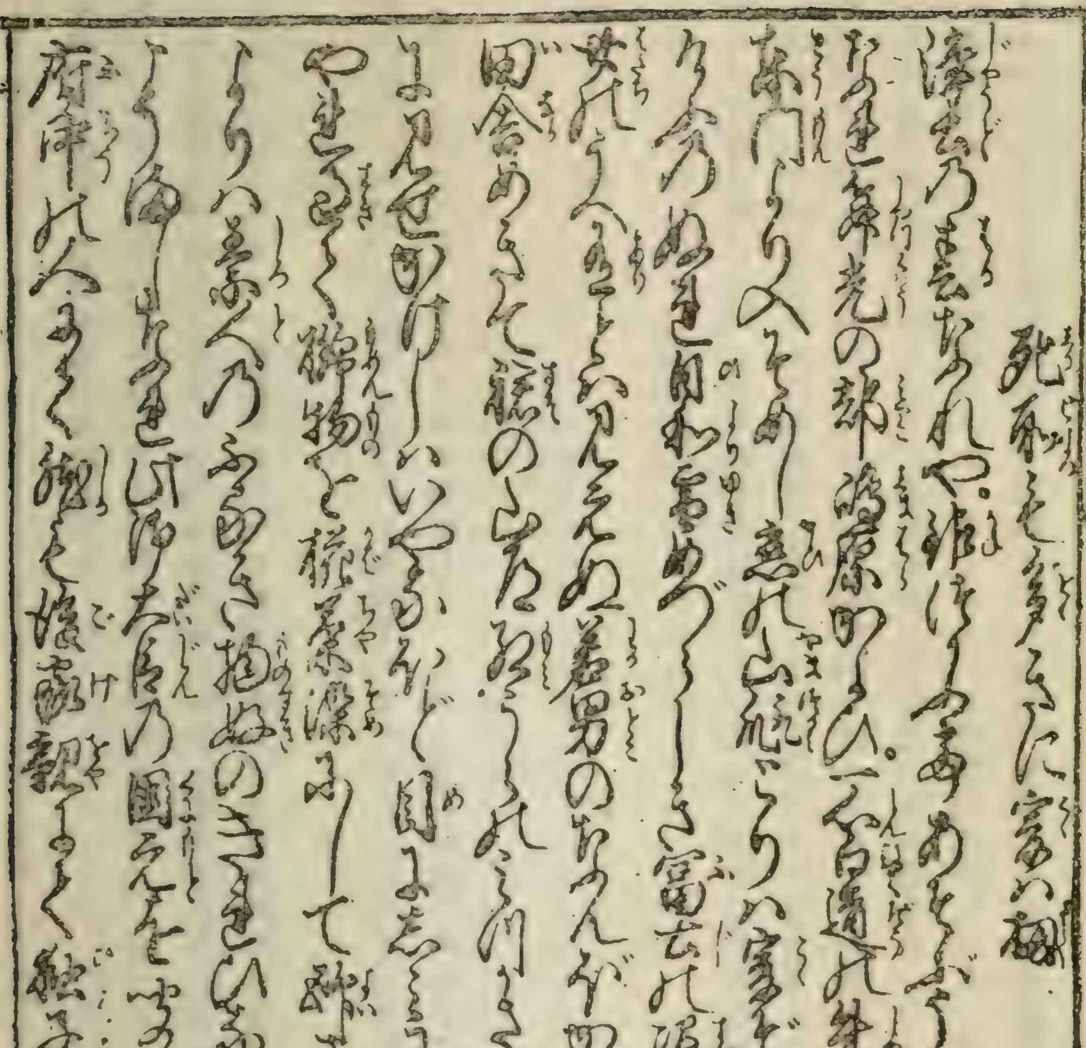
收載の順序からいへば、「世間子息氣質」を解說すべきである。しかし、それは他の氣質物と一括していふ方が便宜であると思はれる。それを後に廻はして、まづ「新小夜嵐」に就いて一言を寄する。

新小夜嵐

半紙本二冊、作者署名なし、正德五年の刊行である。

駿河府中の人、淸見屋市太郎、惡所の替名は今業平、京に上りてはじめの中に野郎遊びをしてゐたが、野郎に金を望まれたので嫌氣がさして傾城買をする。とかく金吝しみをしてゐたが、末代に名を殘す手段とて、太夫を年の明るまで買詰にする約束、前金千五百兩取るばかりにして祝儀申し納めた刹那に頓死する。しかし、まだどこか生氣が通つてゐるとて、揚屋の者共は野邊送を猶豫する。

市太郎は地獄へ來て一人の法師にあふ。みづから、女色男色に隱れなく、難波の浦に名を流せし椀久が二世の面影と名乘る。今の女郎遊びは張も意地もない末世の有樣、いつそ當座切に野郞狂ひせよと敎へ、また



男色野郎の地獄を案内する。

椀久の案内するところ、皆野郎遊びで、諸分のあるい大盡どもが、無慘な呵責にあふ光景を現じてゐる。無理に野郎に指を切らせた大盡は、鬼の若衆に前生の指を切りかへされてゐる。無理床に野郎を苦しめた者は、頭は人間、體は牛馬となつたのを、執心の鬼が尻から追立てて責めに責める。その外、一々擧げ盡せない。市太郎はつひに發心する。

二度浮世にかへり、野郎のさわぎするとも諸事を見ゆるし、わけのわるき事は人にも異見して、あはれみふかくいはぬさきに物をとらせ、うれしからする咨になるべし

彼はかういふ思ひを齎して、椀久と別れる、もとの揚屋に蘇生してゐた。

作者は野郎遊びの裏面を穿つことを第一の趣向とした。穿ちを地獄の世界に運ぶことを第二の趣向とした。野郎遊びの客の前生に於けるさもしい行爲と地獄の呵責との關係が、丁度俳諧の附合のやうに、ずつと離れてゐて、しかも即いてゐるのが奇抜であり、意表外であつた。滑稽感はそこから發生する。作者の趣向の眼目はこれであつたらうか。世界が地獄であるだけに教訓も意義ありさうであるが、もとより附隨の一要素に過ぎない。

粋の至れるを禮讃し、至らぬを諷刺し教誡するのが好色本の常である。「新小夜嵐」はその中で特に男色の穿ちに限つてゐることが注意せられる。

地獄めぐりの物語は「日本靈異記」「今昔物語」の昔から存在してゐた。室町時代になると、一段とおもしろい構想による物語が行はれてゐた。假名草子に見ゆるものはその脉を嗣ぎ、また新たに支那の稗史の影響

を受けてゐた。

現實味の强い浮世草子に地獄めぐりの趣向などはあまりに緣深いやうに思はれる。しかし、佛教形式だけは弘布して、說敎談義の頻りに行はれる世である。地獄極樂の話は空想を樂しめ、地獄極樂の圖は浮世繪以外に怪奇の美を味はせる。案外の親しみが、浮世草子と地獄めぐりを結合させる。

まして、地獄を現世の延長と見て、この世の俳諧の流行をそのまゝに後の土に齎らす「西鶴冥途物語」のやうなものもある。紫式部の墮地獄の物語にはひきかへて、これには現世そのまゝに高名の俳諧師として幅をきかせる西鶴が書いてあつた。浮世草子の現實味はつひに地獄を征服したのである。

元祿十年のその書の後をついで、十一年の「小夜嵐」がある。源平二氏の將士が地獄に戰つて閻魔王を壓服することを書いてゐる。

> 現在國土ゆたかなれば、後世にも亦地獄なし、さればにや後端に二世安樂の物語と書出しけるこそ、よみても聞てもゆゝしけれ、

の結び、地獄もつひに現世の元祿の泰平を樂むに過ぎなかつた。

これ等の趣向は珍しいと世に歡ばれたのであらうか、ほゞ同案の書「續小夜嵐」が出た。また「新小夜嵐」が出た。

しかも、正德五年には二種の「新小夜嵐」が現れてゐる。一はこの「浮世草子集」に收めたもの、一は赤穗義士が閻魔王を征服した物語であつて、一名を「地獄太平記」と稱するものである。

「新小夜嵐」の新はいづれの書も、「小夜嵐」の後をつけて、更に新樣を拓いたといふ意味に於いて附けた

のであらう。市太郎話のは、たしかに「小夜嵐」などの思ひも寄らぬ新様を得てゐる。しかし、地獄を假りて、現實を諷する一段になると、却つて「西鶴冥途物語」の趣向に溯つた感がある。何となれば、これには前句附、俳諧の流行が諷刺せられてゐるからである。

またこゝに考へねばならぬ一事がある。「西鶴冥途物語」の方が、或はこの「新小夜嵐」を踏襲したものでないかの疑問である。「冥途物語」は元祿十一年の出板、「新小夜嵐」は正徳五年の出板である。それならばとてもありさうもない踏襲沙汰なのを、なほ考へねばならないといふのは、「新小夜嵐」は貞享年間に出板せられた「椀久二世の物語」の改題でないかと疑はれてゐるからである。「新小夜嵐」とは「小夜嵐」の外題流行を利用する板元のさかしらであつたらうと推測されてゐる。

この推測が的中してゐるなら、「新小夜嵐」は貞享二年出板の「椀久一世物語」の續編に當る筈である。本文中に粹人椀久の二世の面影が傳へられてゐることが、その推測の根據をなしてゐる。

推測はどこまでも推測である。まだ「椀久二世の物語」の原本を得て、比較しないかぎりは、しかとした事はいはれさうもない。その原本の所在は寡聞未だ知るよしがない。

「新小夜嵐」はまた西鶴の作でないかと疑はれてゐる。それは作風また文辭の上からの推測である。世に西鶴の質疑本といふのが多い。西鶴の名聲の高いのにつれて、僞作僞板の書が出板された。現に拙劣極まる「小夜嵐」の如きも、巻尾に堂々と「元祿十一戊寅歳孟春吉旦西鶴書」などゝしるしてゐる。それと共に西鶴の眞作ではありながら、匿名であつたために、西鶴の作と確定しないものもある。西鶴質疑本の多い所以である。これまたその一つとして數へられてゐる。

作風や文辭からの推測は、見やうによつて否定もさるれば、肯定もされる。こゝには西鶴作と確定するには、なほ幾多の考慮を經なければならないことだけを附記しておく。

「新小夜嵐」の飜刻されたのは、雜誌の「日ざまし草」所載のものがはじめであつた。後宮崎三昧氏の「賞奇樓叢書」に收められ、また石川巖氏の「西鶴全集」に附載されてゐる。「西鶴全集」は賞奇樓叢書本に據つたとのことであるが、その叢書のと、「めざまし草」のと、この集所收のとは、據るところの原本を同じうしてゐる。その證は卷尾數葉の腐爛のために、同じやうな空白を殘してゐるからである。

「新小夜嵐」のおもしろいのはさし繪にある。本文また時に繪解の態をなしてゐる。前の三者はそれに於いて缺くるところがあつた。こゝにはそれを補つてゐる。

一七

世間子息氣質（せけんむすこかたぎ）

大本五册、江嶋其磧の作、正德五年の刊行。

世間娘容氣（せけんむすめかたぎ）

大本五册、江嶋其磧の作、享保元年の刊行。

浮世親仁形氣

第一　本草売する仙人の魔法書百姓形氣

むかし噂にいひきし。親苦労する子楽する孫乞食をすると世界の子共の行末を案じかんがへ一いひ盡しは言葉ハ掛ぬ。大まかにて今の世花を感じぬ世よ。おもしろき月花のころも世に胸のを拵ゑんと忘れもして常住の枕草紙にあへいかなく三月の桜鯛を参らせ松前すなわち下らつ時に関ふかんろむろの間にかけても白湯ハ香の茶漬たし夫中にひとつより花を餘さるよ掛けて嵐のわきてもと膳棚より出しあかし乃肴かりの箸さて金の戸に薬酒せんど夏冬の間さくハ袖する乃綿津ハはこびで遣暮の始末よ身をかくめ俺くとのぞいてとうしや

男を尻に敷金の威光娘

鬢は律義に気も方なる人の娘気質とて傳りし年々の今の
娘風俗をおもふにかはりて昔は遊女ぞめの女形なるさ
まをうつし純おぬ靈聴女の姿をあらして胸高に帯をして男
のまねする袖口もひろく居振舞もしけなる中親分をも動仰させ。
人の見るべくを大事にかけ。其形をたしなむ事つもりて寝をかへし起び
のかまちを探る也。少しつみ口に太鼓あるを徳まじめひさい袖を
もいかに恋ひれなる苦労をも主今時の女ぞかしつまさふ男。
さかんなんせば鼻の先の因つとみづからそうけどこそしかる邊
髪ぞうつ前髪の乃ゐはそとゆくを髪毛をはぬきそろへて。そばも
らぬそめのれ格標源成るやまんまの玉よとあすかおやを下とえしつきくれ

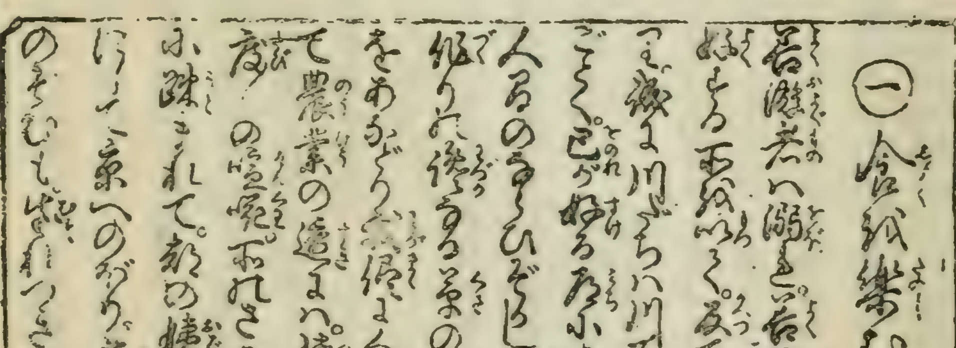
文本【気容娘間世】

枕本五册、署名、八文字自笑、江嶋其磧。實は江嶋其磧の作、元文元年の刊行。

氣質本は八文字屋本を代表するものである。其磧の創案に係る。しかし、これも溯れば西鶴の作に起原を求めることが出來る。たとへば「好色一代女」は太夫、天神から、ずつと低い階級の遊女だち、または妾、大黑などの女の生活ぶりやら、氣風やらを寫し出して、各階級の特殊性をある程度まで明にしたものといへる。一種の氣質物であつた。「好色五人女」も五人の女の戀を書きわけたものであるが、後の氣質物流行の享保五年には、改題して「當世女容氣」といつた。しかもその外題は內容に適應してゐた。

好色本よりも、西鶴の作は町人物、武家物に於いて、氣質中心の傾向が明である。「武家義理物語」を武家氣質といひ、「日本永代藏」といつてもさし支へがない。しかし、西鶴はその氣質の描寫叙述にのみ專らでなかつた。

西鶴模倣の其磧は、常に經典として西鶴の作物を讀んでゐる彼は、西鶴の作意を採り得た。しかも西鶴が種々の複雜



「浮世親仁形氣」本文

な條件によつて構成した話を、分解して、その中から氣質といふ一條件だけを抽出した。それを模倣し踏襲した。「色三味線」「禁短氣」と西鶴の作物の關係は、こゝにも見られる。

西鶴の複雜の條件から切り離して、氣質といふ一條件のみに單純した其磧は、その複雜を他に要めねばならなかつた。趣向脚色の變化より外にはない。殊に特殊な氣質、分けていふなら、性癖なり趣味なり好みなりを、子息とか、娘とか、親仁とか、手代とかいふやうに、はじめに範圍を限定してゐるだけに、とかく單調になるのを避けるためにも、趣向の複雜と共に叙述の誇張を必要とした。さうしたら、滑稽になつてしまひはせぬかと氣づかれるが、それは當初から其磧の歡ぶところである。

こゝに西鶴との大きい相異がある。西鶴は滑稽を標榜してゐる。しかも哄笑のうちに、人性の深奥に觸れる。つゞましやかな其磧は諧謔の筆を内場にするかはりに、人間性情を穿つことは極めて淺い。この妥協は性癖を通じて人情を寫すこと細やかに、誇張はありながらなほ事實らしさを失はなかつた。

この妥協が正しく保たれた時に、其磧の氣質物は推賞するに足りる。一度妥協が破れると、つひにこの世にありやうもない缺陷だらけの性癖の、あまりに馬鹿馬鹿しくて、笑ふにも笑はれないやうなものを捏ち上げてしまふ。西鶴の氣力を缺く彼としては、やむを得なかつた。

「子息氣質」が、これまで好色本、町人物その他に散見してゐた子息の性癖を分類した形に於いて、同中異を見やすくした趣向はたえず新奇を求めてゐる浮世草子の讀者に、大いに歡迎された。材料によつて態度をかへり、變へるほどの放れ業を持たぬ其磧にとつては、その種の作物は連續事業として甚だ都合がよかつた。子息で一段落つければ、立場はそのまゝ、視點だけを變へて、娘の分野に轉ずることが出來るからであ

る。

「世間娘容氣」の目錄には、毎卷必ず「子息氣質追加」と書いてあるのは、「子息氣質」の當つたための續編の義であらうが、また同じ態度を守るの意ととれないこともない。其磧を今日から看る場合には、むしろさうとる方が當然であるかとも思はれる。

「浮世親仁形氣」は「子息」「娘」からかれこれ二十年後の作、其磧の筆も圓熟した時である。あの妥協が最も正しさを保つてゐる。すなはち誇張も內場に、人情もしめやかに寫されてゐる。

其磧の氣質物は、この三作だけでない。「寛濶役者片氣」「世間手代氣質」「諸商人世帯氣質」などがある。其磧以外の氣質物はその數が極めて多い。どれも其磧の趣向を眞似て、その分野をかへたといふだけである。「長者」「出家」「母親」「旗本」「俳人」「茶人」「姑」「醫者」「仲人」「化物」なほ數へ足りない。若い上田秋成も和譯太郎の名を以て「世間妾形氣」を書いてゐる。

一八

「色三味線」「禁短氣」及びこれ等の氣質物の作者江嶋其磧は何人であつたか。

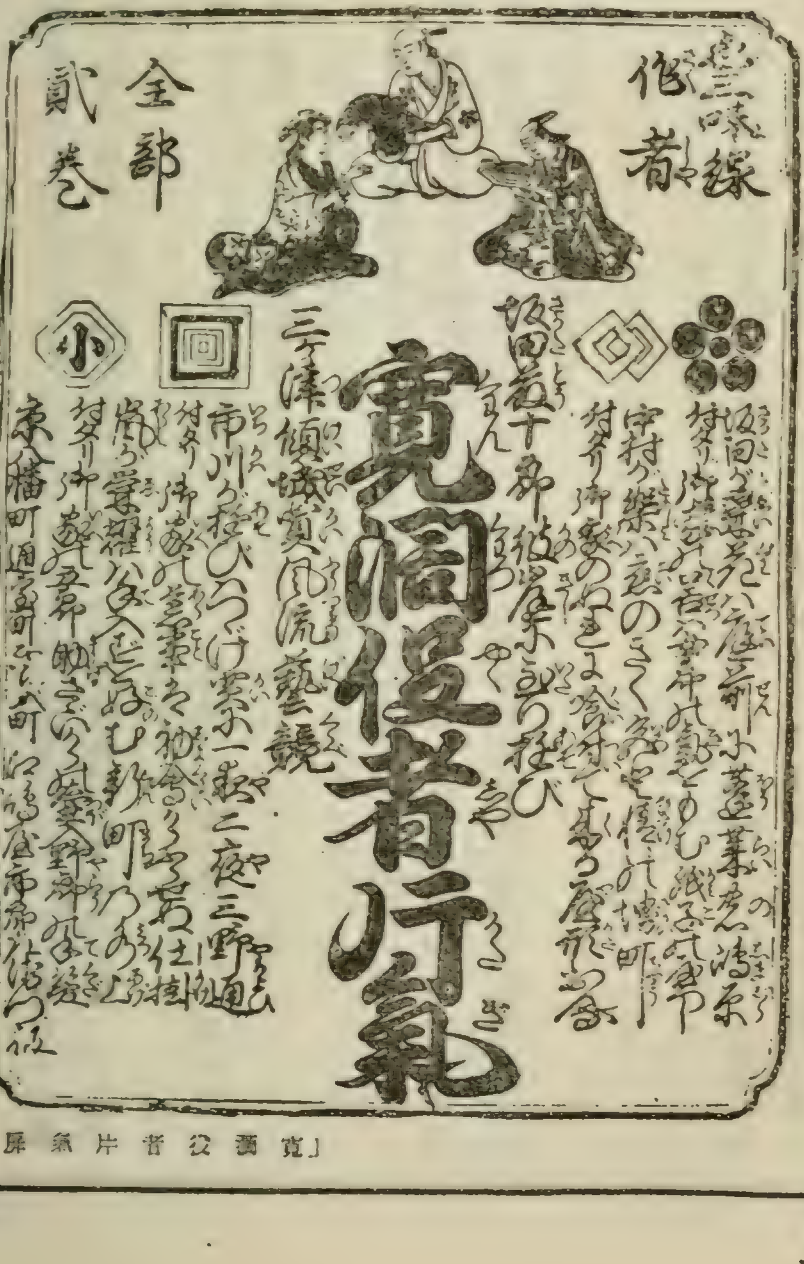
其磧は通稱江嶋屋市郎右衞門、歴代京極通誓願寺前に大佛餅を商つてゐた。後業を廢めて誓願寺通柳馬場に轉居した。相應富裕の家であつた。若い頃の市郎右衞門は好色本の主人公そつくりに、つひに遊蕩で產を破つた。彼は身過ぎのために何とかしなければならない。ほんの遊びがてらに修練してゐた文筆の才によるより外に途はない。淨瑠璃も作つた。評判記も作らねばならなかつた。評判記は八文字屋から囑まれたため

である。例の「口三味線」が皮ぎりであつた。八文字屋との關係はこゝに結ばれた。八文字屋は、其磧を專屬させて、他の板元との關係を絶させた。それほど彼の評判記は異彩を放つてゐた。

西鶴に心醉する其磧はおのが遊里の經驗と西鶴の作物とをこき交ぜて、浮世草子に筆を染めた。「傾城色三味線」を初作として「風流曲三味線」「傾城禁短氣」などを著はした。けれど未だ作者其磧とは署さなかつた。「禁短氣」には八文字屋自笑の名を署してゐる。

彼はこれを以て謙遜より出づるといつてゐる。「野傾旅葛籠」の序の一節に、

書林八文字屋のいへるは、作者の名乘あらはさずして、一部の書に位なしとすゝむ

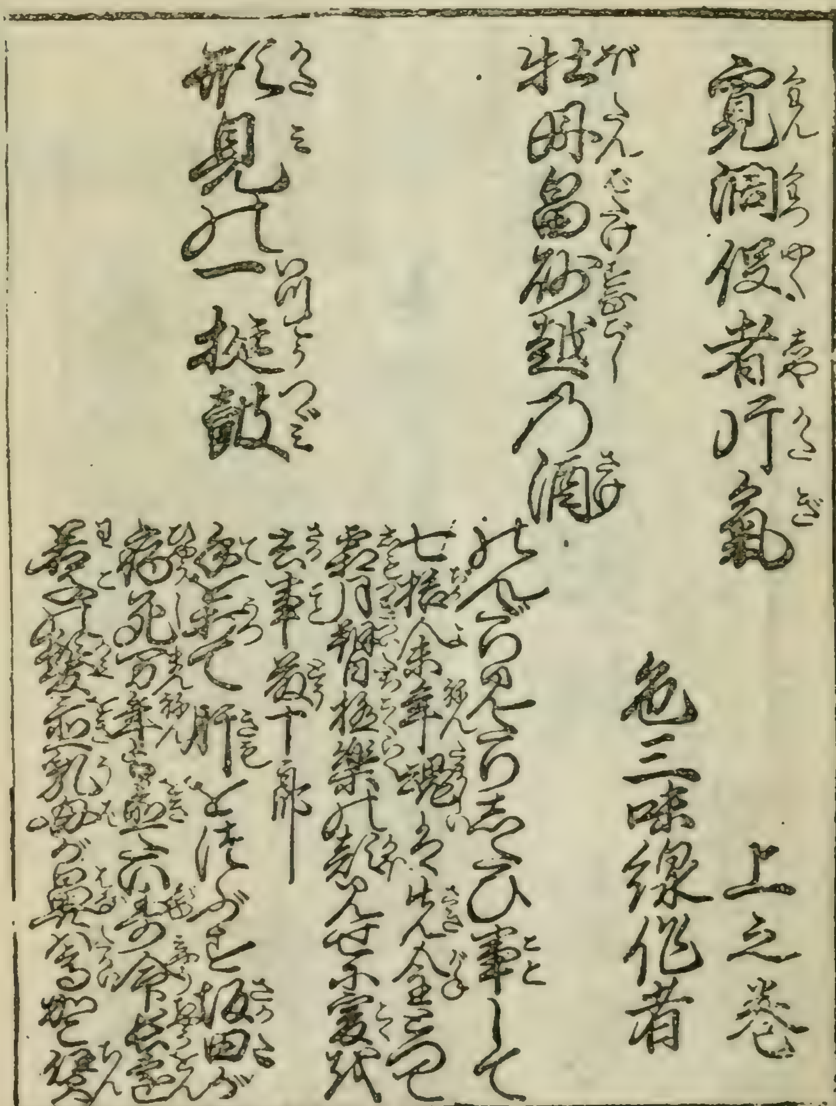


「寛濶役者片氣」扉

れども、元來自身の作せる文段にあらず、皆西鶴の詞をかりて作れるなれば、自分のしたりがほに、こと〴〵しく名乘を書あらはさんは、誠におこがましき事なり、作者の名なくて一部の名なくて一部の草子の爲にならずば、書林の作に成ともいたさるべしとつひに我名を出さず

「禁短氣」に自笑の署名したのはこれがためである。世間はもとより事の仔細を知らない。自笑の作と信じてゐた。八文字屋本の名を以て呼んでゐた。

それならば何故に其積は、その内幕を正德二年出板の「旅葛籠」に於いて暴露したか。また同じ程度に西

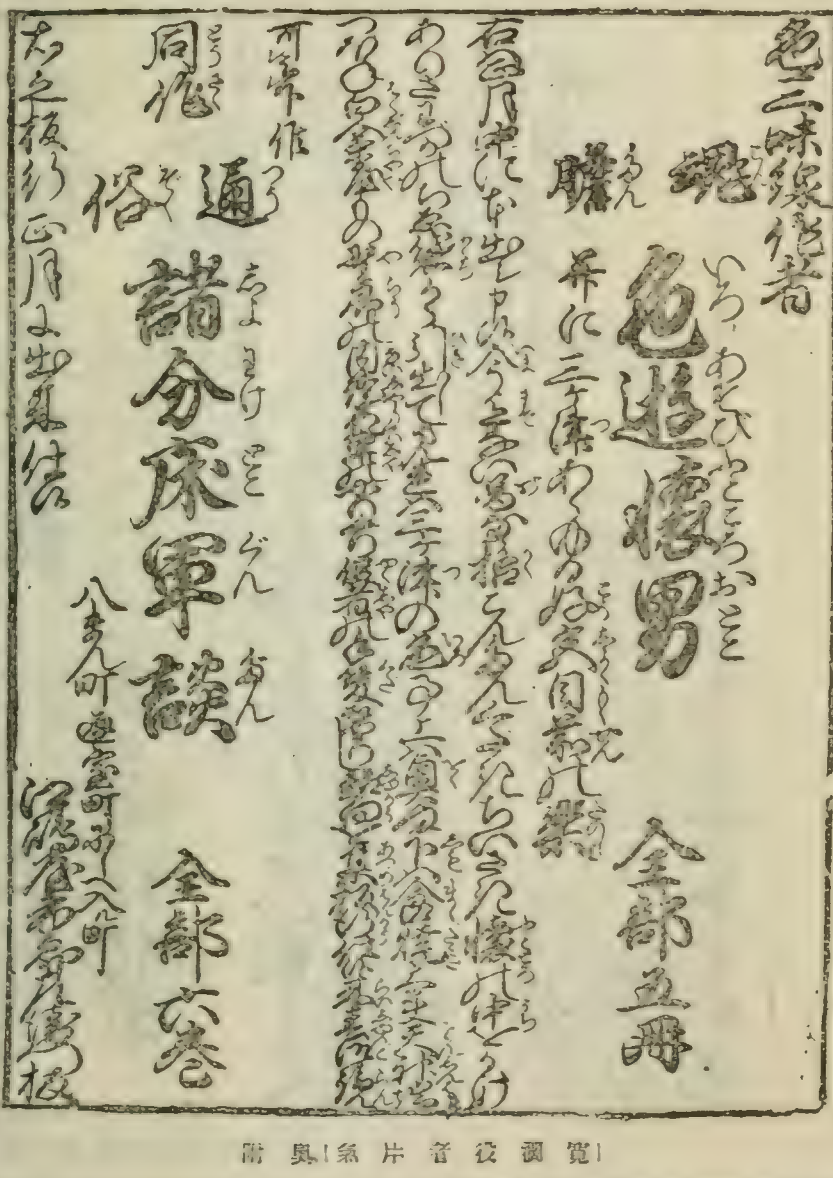


同上目錄

鶴を模倣してゐる「子息氣質」に其磧と署名したか、また「親仁形氣」に其磧、自笑と連署したか。

影の人となつてゐる其磧は八文字屋本の盛行を見るにつけ、漸く名と利と壟斷せられることに慊焉の情を寄せたのであらう。八左衛門に對して要求するところがあつたらう。要求は拒斷された。彼はその子に書肆江嶋屋を開かせて、自作を自名のもとに出板することにした。かねて八文字屋の其磧專占を快からず思つてゐた書肆谷村、菊屋は彼の黑幕に參じた。

「旅葛籠」の序は、彼が自笑によつて奪はれた名を奪ひかへさんための宣傳であつた。彼はまた「寛濶役者片氣」などにうるさいほど「色三味線作者」と幾箇所も



「寛濶役者片氣」奥附

書き立ててゐる。彼がいかに獅子奮迅の勢を以て八文字屋に當つたかゞ知られる。

八文字屋も一大事と、逆襲に力を盡した。「隨分盗人呼ばりもしかねない氣勢である。其磧の憤怒は爆發した。江嶋屋最初の評判記、正徳四年の「役者目利講」に於て激烈なる文辭を發表した。

彼は「役者口三味線」著作以來、毎年八文字屋にせがまれて毎年の作あること、近年は八左衞門に作法を敎へて、自分は序だけを擔當したことを斷つた。また評判記を江嶋屋八文字屋合板にすることを要求して拒絶されたこと、八文字屋から似せ本またはまぎらはしき草子など惡宣傳する不埒を詰つた。さて

抑八文字屋八左衞門と申草子屋は何にて世間へ廣く名を發し候哉、二條正本屋おなじく鶴屋は古來より上るり本にて名を取、八文字屋は京しばゐのかぶき本を板行仕候外、さのみ家名を世間＝御存知にても無之候、然ル所＝此作者其磧松本治太夫方へ上るりを作り遣シ、其語り本を八文字屋へ遣シ板行させ候てより年々の評判記は申すに及ばず、けいせい色三味線又は曲三味線禁短氣傳受草子、色情兩ひいな形御伽曾我類の慰書數多作りつかはし候所＝、各々様々の御意＝入、八文字屋〳〵と、是より浮世本評判本の名取のやうに罷成候事、八文字屋の功にて候や、作者其磧が功にて候や、此段はゞかりながら世上の人さま御了簡被成可被下候、殊更作者の實名を出さず、作者八文字自笑と致させ出させ候程の深切をかへりみず、今にては八文字屋と名を取申上なれば、たとへば烏が母と書て板行仕出し候ても八文字屋と申名にて賣申との所存、高鳥盡て良弓藏るとやらにて云々

かういふ段取を經て、「子息氣質」には堂々と其磧の名を署したのである。

八文字屋もまたこれに對抗した。相持すること六年、享保四年に和解した。何にせよ江嶋屋の資本は薄か

つた。はじめの中こそ江嶋屋板で通したものゝ、やがては其磧の作も、菊屋、谷村菱屋の手によつて出板せられるやうな狀態では、つひに敵を壓服する力はなかつたのである。

八文字屋は八文字屋で、殊に自笑といふ名を署した「禁短氣」が實は其磧の作であると宣傳されるのは、最もつらいことであつたらう。かなり後の延享四年の「自笑樂日記」の跋には、なほ「禁短氣」の自著であることを述べてゐた。當時に於ける彼の狼狽のほどを推するに難くない。

和解後に八文字屋から出した其磧の作は、其磧自笑の連名を以てした。「親仁形氣」の



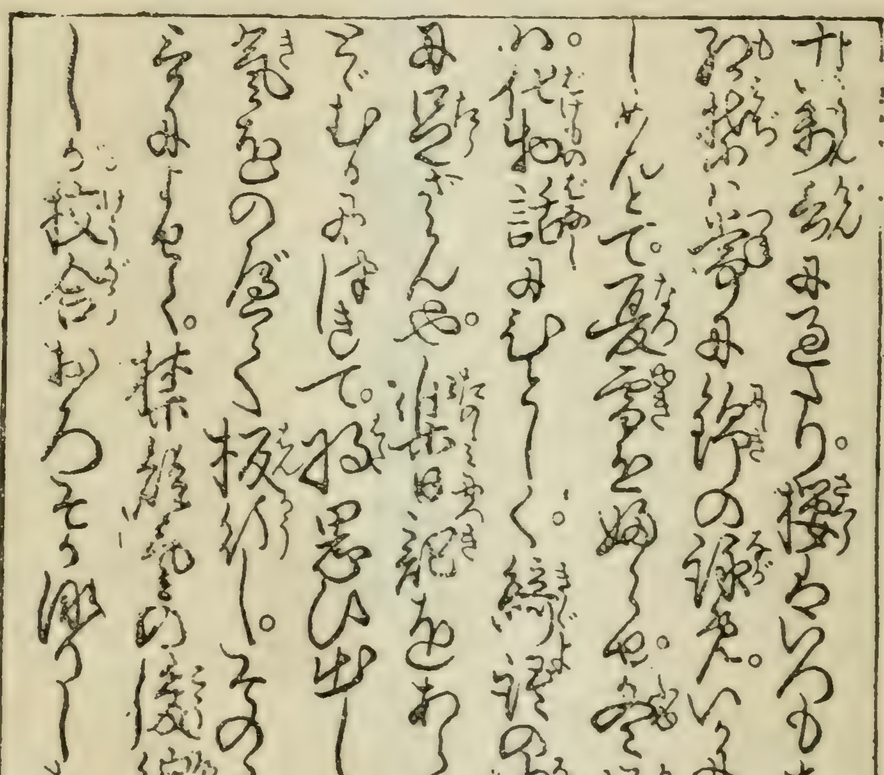
自笑樂

署名はそれである。

その對立の折、八文字屋の名の情勢に押される其磧の苦心は一通りでなかつた。肝膽を錬つた結果が氣質本の趣向となつたのであつた。

其磧の作は極めて多い。前記の作物以外、「商人軍配扇」のやうな傑れたものもあるが、「義經風流鑑」「當世御伽曾我」などの西澤一風の作風、「美人五人娘」などの淨瑠璃の改作などもある。作の價値からいへば、とても氣質物、また傾城物に比較すべきでない。

彼は元文元年に歿した、行年七十歳。彼去つて浮世草子の世界には寂寥のみ存す。



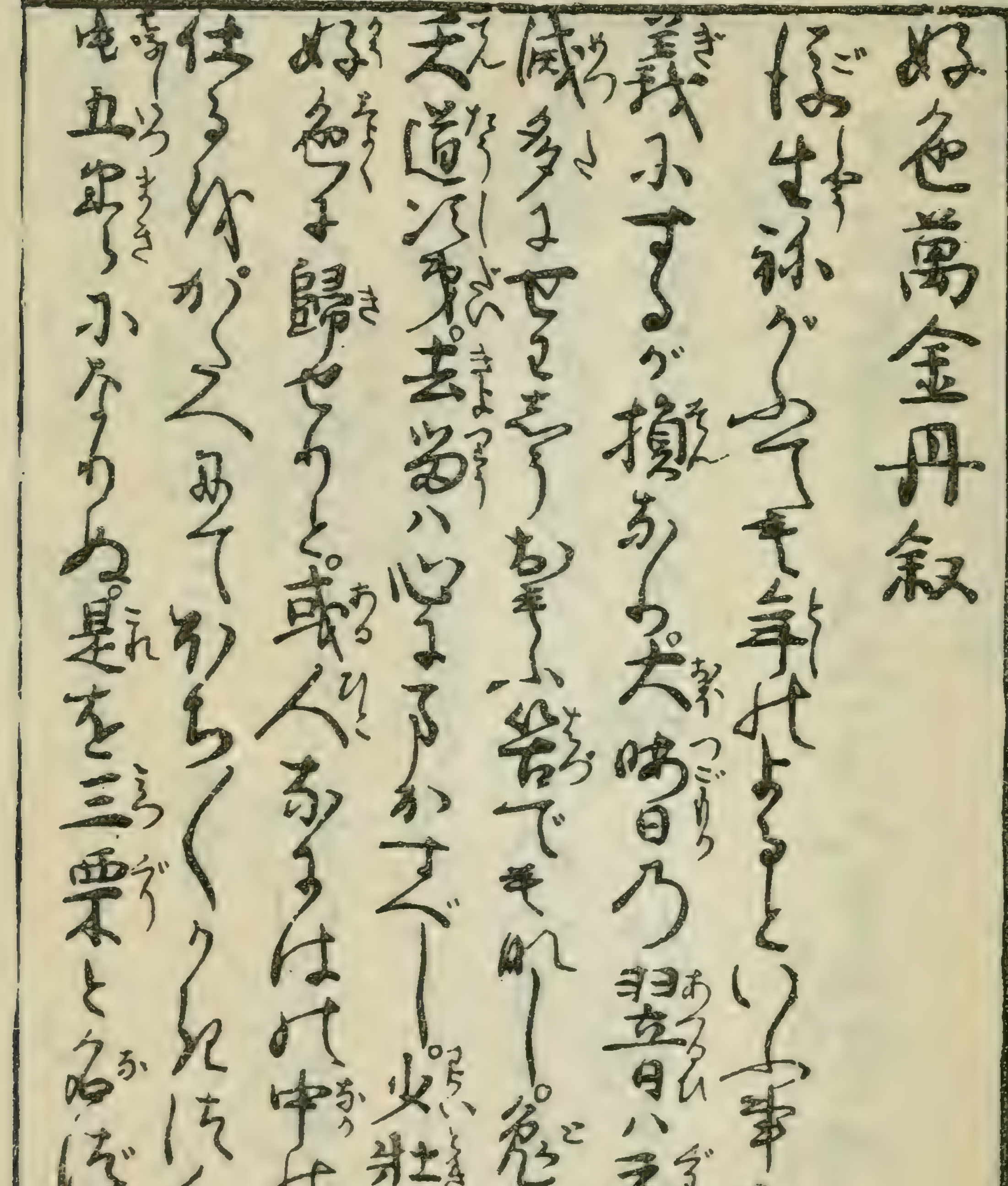
日記跋

好色百重丹

好色萬金丹

叙

後生ねがうても年のよるといふ事あれば律義にするが損なり。大晦日の翌日は元日なれば滅多にせわしうおもう筈でもなし。兎角世は天道次第。去留は心にまかすべし。少壯の樂は好色に歸せりと。或人なにはの中のものがたり仕るを。かたへにてほちほちかきつくれば。二十咄五卷になりぬ。是を三栗と名づけ侍しを書


好色萬金丹叙
後生ねがうても年のよるといふ事あれば律
義にするが損なり。大晦日の翌日は元日なれば
滅多にせわしうおもう筈でもなし。兎角世は
天道次第。去留は心にまかすべし。少壯の樂は
好色に歸せりと。或人なにはの中のものがたり
仕るを。かたへにてほちほちかきつくれば。二十
咄五卷になりぬ。是を三栗と名づけ侍しを

林なにがし梓にちりばめむとのぞみ。外題を萬金丹とあらためんといへば。ともかくもさりながら。醫者どのゝ長門印籠から取出さるるやうなる名をおもひよりし心はいかにと尋ければ。よめば氣のつきがはるゝとこたへけるもおかしくて。即その首にしるし侍りぬ

元祿七年甲戌三月六日夜食時分

好色万金丹惣目録

巻之一

武家乃数珠

通段れ占

脈彌のちぎり

かくる光

巻之二

しらぬ思ひ

瑠璃乃個

よるれ面

紛しの麗

巻之三

気ちるあり

志ある錦

とききくゆげ

淡平の浦

巻之四

その文月

一讌むまと

牛の角文字

雪(ゆき)のあけがの
其之外
見ぬめの関(せき)
好色(こうしよく)七いろ
透間(すきま)れ風
しのびで両

好色萬金丹目録終

好色萬金丹巻之一

第一　壹歩の數

うらぬ證據と粋の目利もはづかし。

吉凶は痃癖のごとし。二つながら人の肩にあるものから、よき事のみもつゞかず、又わるい事ばかりもないもの。されば智者は不定世界と觀じ、哥人は飛鳥川とながめて、あすの事さへさだめられぬ世に、來年の事を案ずるは惠方棚のつりおきぞかし。殊にながれの身のうきしづみ猶はかりがたし。おしたて太夫道具と親方もおもひ、揚屋もうけあへば、それにしたてけれど、算用ちがうて買手のないにつきつけうりもならず、正直なる氣ちがひの座敷牢にゐるごとく、昨日も今日も格子にくらせば、禿はいつも前帶にしてゐるを、



引舟女郎は、のいた客の名をいうて、今のさき東の方へゆかんしたといへば、どれ〳〵と目のゆくたけはながめやり、あの客ばかりはのく筈の事ではなかつ

たに、つれ衆のわるさにとうらめしさうにいはるゝ所へ、初對面の客にてよびに來れば、けふの紋日になじみの女郎がさしあふゆゑ、一日切の陽氣する男なるべしと、推量は黑星にあてながら、親方の手まへ氣のどくさに、客を見せにやるにもおよばず、そこへゆきませうと返事すれば、慇懃な女郎ぢや。何時よびにやつても畏りましたといはるゝと、客のわる口もつらし。隙な日も禿に髪ゆはせておくは、煮賣屋に蛸の用意と同じ事にて、かうした不慮の首尾もあればなり。長持の鑰が見えぬと俄に尋るも外聞わるし。あの太夫の端へおりるは間のない事、其時に買たが德ぢやと、しはい男がわるい事いひあてゝ、あんのごとく夜見世に入くづれのする局をのぞけばかの太夫樣也。惣じて女郎位のさがるたび〳〵に名をかゆれば、さやうの女郎を鮮と申とかや。さい〳〵御名のかはるゆゑぞかし。あるひは又見世の女郎が格子にあがり、風呂屋のぬれ衆が此里の太夫になる事は、前世にてよい種をまき置しなるべし。糠買が三千貫目の身躰と成たもおなしためし也。貧乏神をまつりたるかはしらず、世間なみのえび　大黒をあ



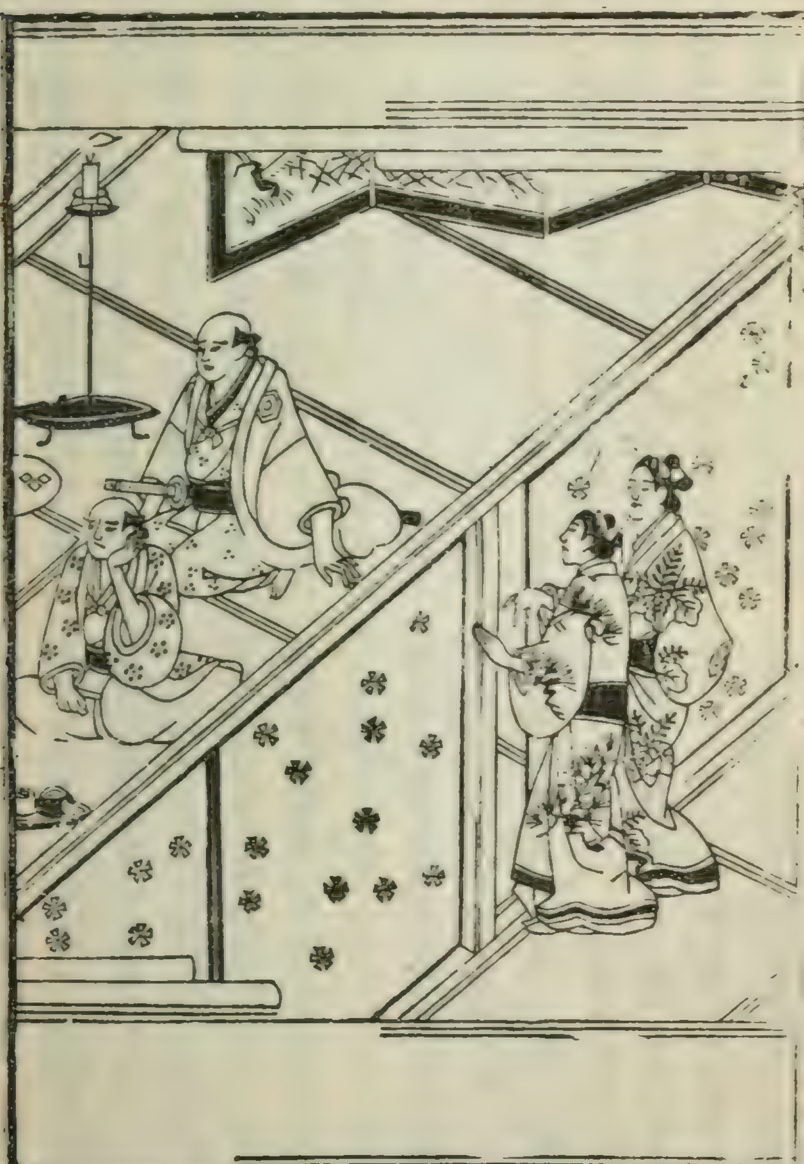
かめたるぶんにては、ゆく〳〵嫁資一代に三千貫目の分限とはなるまいものなれども、時節到来は稀遇の了簡にもおよばぬ所。されども天然しはくうまれついたるは、嫁の昔も内福の今もかはらず、只朝夕に始末をかんがへ、鼻紙を火燵のあげにてかわかし、滋柑子の革足袋一足にて十六年こらへ、むまいものは毒也と、干鰯のやき物と小便菜の醤油がけより外のものをくはず。夏百日の間酒と煙草を断けるも始末のうち也。夏の皮の肉かしと名にふれども、座敷つきは身躰拾匁あがりの今の世なれば、町ふるまひにても床わきになほり、此中の雨は麥によござらう。白猫はよごれめが見えて損なれども、黒猫は毛がよわからうと存ずるなどの咄の外には、もの〵いらぬ念佛申ばかり、それもこゑ高に申さぬは、はらのへらぬ用心也。かゝる身にも子はかはゆく、姉娘に敷銀百貫目と、家一ヶ所付るよし、仲人嬶が手帳にかくれなければ、嫁にもらひたがる人山のごとくなれども、六具しめたる親仁中〳〵平話に合點せず。そのあたりにて身躰の様子たづぬれば、薩摩問屋なるが、居宅十五間口の角屋敷、上塗あたらしきは、嫁どりまへの風袋、棕櫚竹畠壹町ほどあり、妙國寺のより見事なる蘇鐵三本と、五十三にならるゝおふくろ一人あり。銀のあるないはしらぬといへば、問屋は同心ござらぬと外をきゝあはせば。少づゝのおもひどはいづれにも有、其内に筋目よく、身躰おちついたる人を心がける所に、ねがひの通りの聟をとりぬ。十路盤のつもりさへよければ、万年暦の相性も見ず。丙午の代に敷銀拾貫目ませば、一言の申分なく縁組する事、命より銀を大事のものとおもふもおろかの世や。さりながら百貫目の敷銀の利にては、年中の色あそび自由なれば。たとへ女房はかんだにてもちんばにても苦しからずと胸算用せしに、此むすめの美容、茨木屋の吉野にいきうつしなるは此男の仕合、太夫を揚げづめの楽しみ、よびましやの聲さかぬまたねの床に、起請かゝせねども疑ひのないわけたつる事、あまりよい事ぞろへの冥加のほどもおそろしと、あふ度ごとに壹歩壹つ宛錢箱に入て、是を揚錢の心もちとのけておき、其年の大晦日のひめをさめに、件の壹歩をかぞへ見れば、四百六十三あり。女房よびし日よりけふまで、わづか百七十日になりぬるに大分のとりすごし。さりながら此壹歩代六貫九百四拾五匁は、ひんずの延銀ぞかしといよ〳〵め

でたくうれしがるほどに、あけの春より脾腎兩虚の病にかゝり、此地の大醫手をつくしけれどしるしなくて、京にのぼり御典薬の御くすりたよりをもとめてもらひつゝ、からうじて命をたすかり、三年ぶりに大形もとの物になりぬ。その間薬代萬事の入用、貳拾四貫五百目也。かずとりの壹歩に三增倍のつりをいだしけるは、どうでも色事に銀のいらぬ事はないものなり

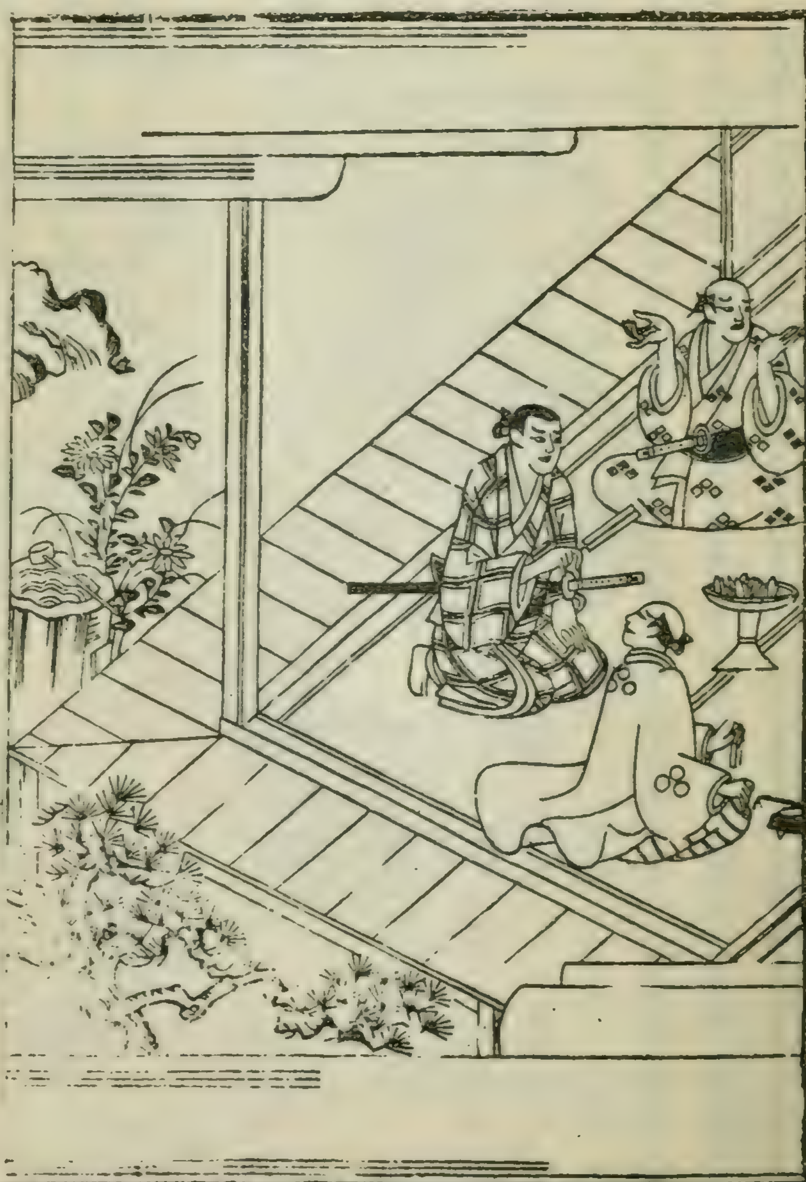
第二　通變のうらなひ

觀世與左衛門の太鼓には馬が出てをどり、常是が針口の音には白鼠が中がへりし、櫟水が小うたには味噌がくさり、巫が屁こけば、鍋屋町へ聞ゆるためし、善惡ともに神の感通には非情のものをうごかす、ましてや有情をや。海老の文藏が色道通變の占も、其妙うたがふべからず。いでや文藏が先祖は、もろこし看經山のふもと楊子の里にて、わづかのうけ酒あきなひしが、親に孝ある陽報にて、猩々のへそくり銀を大分しこため、中華一番の酒屋となり、劉伯倫陶淵明などの詩人中間へもかよひ樽置てまはり、玄宗皇帝の御前酒も此家より奉りぬ。其庶子いづれの時にかありけん我朝に來り、筑紫にてねり酒といふものをつくりはじめける。今に至て博多の名酒是也。それより十三代の耳孫、伊勢の津に住して久敷家さかえけるに、さるべき時節や來りけん、多田の銀山にかゝりて大分の損したるあげくに、江戸まはしの酒つみたる船五艘まで打くだき、手もあしもない仕合になり、わづかに殘る道具を沽却し、もろこしより傳來の錦袋子をあはせて渡世の便とすれど、ちよろい穿鑿、ことに六人の子共に水をのましてもたまらねば、夫婦分別をきはめ、惣領の市は水口の葛籠屋へ奉公にやり、二男の文藏は器量よくうまれ付たれば、旦那寺の長老にのぞまれて小姓に遣しぬ。その妹おふくは餅屋の下女につかはし、およつは江戸の吉原へ奉公にやり、五郎松は七十年を六匁五分に賣て、阿蘭陀流の外科の所へやる。末子のお六もみやこの嶋原へ賣てやり、三界の枷は皆かたつけたりと、夫婦はあたまこそげて諸國行脚の身となりぬ。文藏が旦那寺には、もろこし長安城より飛來らせ給ふ靈驗不測の文珠まし〳〵て、遠近の老若あゆみをはこぶ招提たり。文藏もつねに此菩薩を信じ、何にても一藝に名を得させてたまはれと丹心年月を經たりけるに、いつともなしに占の道に長じ、五音を聞てうらなふ事わきて

妙なり。さるほどに廿三の春長老にいとま申て寺を出、伊勢は古郷なるゆゑに、其ゆかりにと名字を海老とあらため、江戸さかひ町にて通變の占と看板出して三年ゐたるうちに、金子貳百兩たまれば、それを元手にて都にのぼり、二条寺町上ル町に四年住、其のち難波にくだり、色里近き順慶町といふ所におちつきぬ。その比は霜ふり月廿六日、此夜の月待は大かたならず。いかなる戸ざしにも心ほどのあそびして居明す事也。京屋かたには最屓の客六人、かねての趣向にて今宵は女郎をまぜず、座敷を清淨に月待ばかりの殊勝講、賴母が上るりに對して繪かきの眞雪が咄もをかしき所へ、海老の文藏御見まひ申ますといふ。それこなたへ、扨早速の一興におもひよりの女郎の身のうへを、通變の占にあはせてきくべしとおの〳〵車座にならべば、なるほどやすき御のぞみ、其女郎の所さへ仰らるれば、こなたから其位其星の三世相、其客の吉凶まで、兎の毛のさきほどもちがへず申べしといふ。さあらばまづ新町の南側に御座なさるゝ女郎の事きゝたいといへば、文藏うなづいて、只今御尋ありしはいまだわかき太夫の御事



なるべし。此君の前世は阿波の國にて松葉たばこを賣し人、其えんによつて只今太夫とはなり給へり。北斗の天帝より米六十三石と客八人とうけ得て生れ、星は足趁星にあたり給ふ。さるによつて此女郎におあひなさるゝ客は足を假瑕なさるゝ事有べし。其つゝしみ第一といへば、まづひつしやりとあひました、此女郎の北の御客、一昨日火燵の火がはぜて左の足をやけどなされ、其夜のかへるさに西口の門にてけつまづき、右の足の親指を打みしやぎ給たり。さりとは通變の見通し硝子のごとしと、おしげは肝をつぶし、ついでにそのあたりの女郎さまの事承たしといへば、只今御尋有しは天神の女郎、當年廿一才なり。此君の前世は、丹波の笹山の牛にてあり。其縁にひかれて此世にて天神とならせられし也。



北斗の天帝より大豆三十石と八丈嶋のきる物二重うけ得て生れ、星は梅核星にあたる。さるにより此女郎の客、いづれも陰嚢がちひさうなりませうといへば、是もあひました。此女郎の南の御客いつぞの比よりきんだまが小さうなつて、只今は甲州梅のさねほどあるげな。又高嶋やにておあひなさるゝ客の

も小さうなりしを、其御内陣様大ぶん氣のどくがらせ給ひ、播磨の大山寺の藥師へ千日参りの願立られける其利生にて、此ほどは少大きになりましたと申ます。扨越後町の南がはの女郎様の事きゝましたいといへば、只今御尋あるはかこひの女郎なるべし。此君の前世は、春日の鹿にてあり。朝暮明神につかへ奉りし功力によつて人間に生をうけ、鹿戀の女郎となり給へり。北斗の天帝より小豆十七石と長持壹つうけ得て生れ、星は藥鑵星にあたる。かるがゆゑに此女郎にあふ人は必あたまがはげませうといへば、なるほどあひました。此女郎の東の御客、年はまだ廿か廿一にならんするに、あたまのまん中よりそろ〳〵とはげて、此夏も蠅がたんとすべつておちました。又大八様といふ客は、地躰からそりさげたるつむりつき、いつともなしにすつきりとはげて、おのづからの法躰の身となり、此中も十徳きて茨木屋へござんしたげな。扨阿波座の北側の女郎の御事きゝたしといへば、是ははじめは天神にて只今は見世へおり給ひし女郎なるべし。此君の前世は京の嶋原にておろせの八兵衛が女房也。その緣にて此世にても格子からおろしまゐらせし也。北斗の天帝より麥二十三石と茶づけ三ばいくうて生れ給へりといふ。さて又よしはらの中ほどの女郎を尋ければ、是は五分どりなるべし。此よね衆前世にては男子にてありけるが、四十一の前厄に蕎切と西瓜とくひあはせて死だり。その緣にひかれ此世にて五分どりになり、錢では四十壹文の君ぞかし。北斗の天帝より白酒小半と消炭壹斗うけ得て生れ、星は巴形星に當ルゆゑ、やきもちが嗜なりといふ。さて又新町の南がはにてさる女郎様の事きゝたしといへば、是は分散星にあたるゆゑ、此女郎にあふ人はかならず身躰を棒にふり、其はては紙子一枚になるべしといへば、それは氣味のわるいせんさく、かまへて其女郎にあふ事は無用ぞや。耳ふさぎに酒の燗とわめけば、文藏は輕貌にて皆様の粋がたりませぬ。どの女郎にあうても仕すごしすれば、家も道具も西の海へさらり

第三　諷誦のなみだ

定りてうらねばならぬ文日といふもの、よその國とはかはりて此難波にはおびたゞしく、暦をひらきて元日より年のくれまでの文日に碁石を置てしるしをするに、三百六十目の石、わづか二十五のこれり。まづ正月は三ヶ日より廿

日まであだなる日もなし。二月は初午、十五日の涅槃、廿二日の聖禮などつどつどにいふにおよばず。此外に旦那どのゝ一周忌、むすこどのゝ誕生日、やりてが藪入、かぶろがつとめはじめ、かふらかゝの命日、五人與に目安の付たまでを文日にして女郎をうれ／＼とせがむ事也。此やうにてはくつわが銀の置所もあるまいとおもへども、文日をかゝさずつとめる女郎がなければ、いでのあがる事もなく、あるひは女郎を質に入、又は揚屋を請人に立て銀かる事となりぬ。かゝる家の女郎は、白縮緬にぬひ紋の小袖を淺黄にそめなほし、其次を空色、其跡を藍海松茶にやきかへす事おさだまり也。又は京そめの犬八丈此比のはやり物也。おなじ宿屋へ三日ゆけば、初日の衣裳と二日めとはかはれども、三日めには又初日の模様をめさるゝ事、一座の女郎のまへもはづかしく、客は兎屠が婿のおもひ。なほしもあるべきに、つれのおもはん事も氣の毒なり。かやうの事に付ても



女郎の氣漸々に乙入つゝ、あきなひ根性きたなく、義理もしつてしらぬ顔する事、隣の客もねとるを手柄にして、あたまからしつぼりとおもはせ、なじ

みの女郎をのかするやうにしかけ、あくる日は奉書二枚になが〳〵としめしまゐらせ、目の見えるつれはいふにおよばず、たいこ座當迄にも文にて申まゐらすれば、戀のあさいをのこは封じめもとかずに、念比する鼻紙袋屋にとらし、あるひは煙草入にするもあり。又世智なるをのこの算用は、奉書一枚が五文づゝなれば五々廿五文、美濃の封じ紙一枚代二文、しめて廿七文のつけとゞけぞや。是に付ても俄雨の折節は、宿屋の笠をかるべし。粋のたらぬをのこは女郎が笠しんぜませいと禿にいひ付るを、御無用ともいはねば、禿はかきつけのない笠綿々とかりにゆくを待て居る間に、雨は大かたあがれども、かの笠かすほどの情をうれしがり、八まんぬれの里にてぬれ姿、かたじけ涙に袖をしぼると、ふるい秀句いうて笠かりてかへる輩は、ちよつとかる笠代四分といふ事をしらぬ野父なり。百に二文づゝ利のくふ日借の錢を、觀音經よむ坊主にとらせ、燕買て放たり、荒神ばらひの山伏に八卦見させては、十二灯の錢をつゝみ、口のわるい日はわたくしに菜をこしらへてきこしめしたり、何やかや目に見えぬ小づかひとおもへども、霧がつもれば山時鳥、ないてもわらうても、なさねばすまぬことわりに、年を切增て親方とわけに勤をするもあり、又年あけば茶屋風呂屋のぬれ衆とよばれ、前銀取て此里の身ぬけするもあり、又氣のよわい女郎は、借錢を苦にして氣のかたわづらうて此里にてしぬるもあり。そのしぬるに付ておもひ出したり。過し彼岸の中日に妙法寺とやらんに、都より上人くだらせ給て說法の砌、さる女郎の身まかりし三十五日にあたりぬるとて、遣手の鮑が諷誦あげたる其文にいはく

敬うやまつてさゝげ奉る誦文一通十方の佛陀愛愍をたれ、三世の菩薩納受し給へ。唱奉る提婆品壽量品おの〳〵百卷、首題十万遍、右こゝろざしの意趣は、施主のためにはたのしみ人也。戒名を袖香院妙髮日情と名づく。今日時正の中日、まさに中陰七々日にあたるを以て、一篇の野章つゞり、滿座の廻向をあふぐもの也。つら〳〵おもんみるに、六塵の樂欲は皆厭離しつべし。只男女愛着のやめがたきのみぞ、生としいけるもの愛になやめり。鴛鴦のおもひ羽塵の妻こひ、連理の枝相生の松、鳥獸これをたのしみ、草木これをしる。いはんや人間においてをや。これに心をゆだねては家をうしなひ身をほろぼす種、善をくだき惡をもよほす媒と

なれり。殊にあさましきは川竹のながれの女にとゞまりぬ。久かたの光りのどけき春の日にも、しづ心なきいつはりに身をまかせ、有明の影さやかなる秋の月にも、大ぬさのあだしおもひに泪をこぼす。されば釋尊も遊女に實なしと說給ひ、椀久も傾城はだますものと悟りぬ。しかれ共妙樂大師の御釋に、女郎は寶引繩のごとし。客十人あれば九人は素繩をひかせ、只壹人にこそ物はありけれとぞ。ありがたいかな智識の金言、その一人に心とめるありさまこそ又あはれなれ。朝ごみの床のうちには明わたる鳥の聲をかこち、又のあふせを待くらし、夜見世の灯のもとにはふけゆく鐘の音をうらみ、今宵は見えぬ首尾かとうしろめたく、心はあふさきるさにおもひみだれ、身はとなりかくなりならばなれと、しづみはてぬる戀の海、かわくまもなき涙の淵、とりとりのうさつらさ也。今此聖靈もありし世には、松の位のいみじく、花の容のうるはしく、もろこしにいはゞ華清の貴妃か、やまとにたとへば桐壺の更衣か、見ぬ世の美女をうつし繪のものいふよそほひなりしに、いにし師走のすゑより、かりそめに痼病の床にふして、ことし正月のはじめつかた、つひに黃泉の旅におもむきぬ。生涯わづかに十九歲。嗚呼をしむべしかなしむべし。無常の嵐はいまだ蕾の花をちらし、涅槃の雲はわづかに宵の月をかくす。東岱の夕の煙にたちまち紅顏をうしなひ、北邙の朝の露に只白骨のみのこれり。死手の山路は暗けれども定紋の提灯もあらず、みつせ川は水まされどともなふ引船もなし。鴛鴦の衾のうちにかはせし情はしばしの夢のたはふれ、獄卒の杖のしたにおつる涙はながき世のくるしみ、かはむいたるつけざしは熱鐵と成て胸をこがし、はねばししたる茶づけは火焔にもえて眼にさへぎり、貌をしぼられ爪をはなさるゝは、佛神をあだにちかひし起請の罰、皮をやぶられ膚をさかるゝは、延紙をめつたにつかひし床入の罪。おもへば魂きえ、きけば身をふるはせり。されども諸經中王の大乘妙典の功力には、八万恒沙の衆罪もすみやかに滅し、千尋須彌の高樂をながく生ずる事、うたがふべからず。此ゆゑに今演說の場にまうでゝ、丹誠の掌をあはせ、白潔の首をかたふけて、出離生死頓證菩提をいのるもの也。しからば靈魂此功德にこたへて、たちまち變成男子の姿をあらはし、はやく卽就佛身のさとりをひらかんのみ。仍願札くだんのごとし。元

祿七年三月二日、施主、亡魂のやりて、がんくびの龜うやまつて申す

となん上人よみあげ給へば、參詣の老若今の世の誦文と耳をそばだてけるにぞ、龜は一しほ袖をしぼり居るを、うしろからせながをたゝくものあり。誰ぞと見かへれば呉服屋の長介也。只今の諷誦はそなたのあげられたか、あれは何のためになる事ぞと尋れば、龜は淚をおさへて、上人樣の御よみなされたとほりが、すぐにあの世へとゞきて太夫樣のたしかにうけとらんす事ぢやといへば、それならわれらも太夫どのに呉服代のこりがあるが、此かき出しを上人によんでもらうたらば、あの世へとゞいて銀のすむ事もあらうかの

第四　ほたる火

誰も／＼爰に永日をしみぬる、難波寺の櫻木も、凩の夕には、きりくべて燒柴の枯枝にちがうた事もなく、深山の秋につまこふ聲のにくからざりし小雄鹿も、霜さきのくすりぐひとなるうき



世の姿はいふもさら也。此以前このむらやのなにがしといひし太夫、全盛くるわに並容もなく、客おほければ張つよく、氣まゝをいへども賣が手柄なれ

ば、親方も様の字つけるくらゐゝくれなゐの床のうちに、れき／＼の大臣を男泣になかせ、北濱の住人に俄道心おこさせたり。いつも日の出の光まばゆき御ありさまなりしが、つねなき世のならはしにおとろへつゝ、けふもさびしき茶ひき草、駒もすさめぬ身となり、段々さがりの納屋したの、水邊ちかき葭原に、日午も螢火見るやうなうそくらい局のうち、隅ちがへにねても足のつかへる窮屈さ、かゝる時にぞむかし戀しく、住吉やの二階から立賣堀の川づらも今一度見たく、吉田屋の茶漬の味もわすれたりと、身をしる雨に布子の袖をぬらし、消炭もさむき火桶を伽にして味噌氣すくなき肌のつめたさと、みじかい冬の日に昼寐しければ、夢の中に六十あまりの法師、素肌に紙子の袷、やぶれたる十德に淺黄の頭巾よこさまにかづき、さもひだるさうな音にていかに汝、をんな心のあさましく、あられぬ事をなげくものかな。およそ此里の女郎、高いもひくいもかはる事なし。そのゆゑは、あるひはあぶらやの槌打の娘、臼のめきりの娘、貧乏な水くみの娘、あけてもくれても増水の、お薬うちからしたる浪人の娘など、家賃なさねば宿をかへいとせがまれ、米薪みそ鹽までの買懸に、何くふまいとまゝな身躰となれば、口をしながらも地獄のみちびきといふ口鼻をたのんで、此里へうられてきたる娘の子、兩親も泣の泪ながら、身をすつる藪はないものぞかし。是をおもうた時は、四十六匁出して繻子の褥に伽羅をくゆらす契も、錢で四十壹文つきならべ、中のやぶれた丹波御座しいて情をかはし、くるわにはすめども文日しらぬ女郎もその出所を穿鑿すれば、いづれもひんならまごらの御息女也。さりながらおなじ泥の中から出ても、太夫は蓮のごとく、天神は劇草のごとく、鹿戀は眞薦のごとし。又三匁取貳匁取は鰷のごとし。いやしきに似ていやしからず。をり／＼は貴人のお口へもいるぞかし。一匁どり五分どりは鼈のごとし。中間、鑓もち、茶船さしの息子、鍛冶屋の三藏ぐらゐの、あたまがちなる者のくふ物にきはまりぬ。おなじ泥の中からは出れども、蓮とすつぽんとは各別のちがひあり。かくいふそれがしを何ものとおもふ。わかい時には四の二というて、山口屋にて汝を正月の初買より九月の廿二日まであげづめにして、外の男に褌をしめさせし身のなれのはてなり。そなたについてゐた遣手のよしめにも、常是寶といふものを大分と

らせしゆゑ、その比はくるわ中のやりてがしらの身躰よしといはれしが、もらうた物は根がつゞかず、今はよしめもさん〲おちぶれて、とりあげばゞの代脉にあるくぞと、かたるとおもへば炭團うりの聲にゆめはさめけり

好色万金丹巻之一　終

好色萬金丹巻之二

第一　くちぬおもひ

傾城の胸は嘘のいれものとかや。又客のまへでこぼす泪は獨蔘湯のごとし。一雫もよほどの金目ぞかし。このやうにいひもてゆけば、世界の罪は女郎の身ひとつにつゞまりぬ。さるよねしう、かゝる事どもを思ひつゞけで、うまれぬさきの科のしらまほしいといひしも、げにさる事なり。未通上の春より、十年花見ぬ里にくらし、歯朶うる音によろづの世話をとりあつめ、もとでなしの面々世帯に、客の手をまぶつてゐるは、これほどあぶない事もなし。されば禿は人間の種ならぬぞいぢらしき。さりながら神佛に盲者も聾者もなければ、心だにまことにもつぞならば、祥のあるまいともいはれず。まことや堺屋の小太夫まだ火のあがらぬ夕まぐれ、茨木屋の端居に只一人煙草のけふりをものすぎに吹なして、おもふ人のあたりの空とながめやる所へ、廿五六の美男、どうもいはれぬ風にてするすると立より、これ申太夫さま、いはずとも見給へふかいおもひの色をとぢつとしむれば一めもしらぬお人の、なれ〱しいしかたはいやらしいぞえ。よし誰にもせよ、さうした事はなりませぬと、素としたかほつきに、かの男正眸になつて、いかにもあやまりました。えりつきになびく君ぢやものを、なさけごかしは愚者のむかし、月やあらぬの時代の事と、立のくもすご〱と東むいてゆくを、申〱と呼もどし、いかにしても今のことばはきゝ所、かうしたつとめの身なればとて、賑かたにばかりひかるゝものでもなし。身はうれど心はうらぬ品もあり。よしや一度にうき名はたゝじ、いかにしてもなづましい男よと、おもひよつたも何ぞの罰といふしりごゑも、　まじる早わざ、太夫職にはためし稀なるおもひをはらさせければ、かの男をさめたる聲つきにて、汝はまことの情しりぞかし。此うへからは仕合めでたくまもるべし。我は業平が遠き世の、むかし男といふかと見ればたちまち消えうせにけり。ふしぎなやらこはいやら、又業平というたればなつかしいやら、心ひとつにおもひみだれて、其四五日は氣色もすぐれざりしに、俄に身請の沙

汰きはまりて、東口の門をけふといふ今日出て、稲荷へまゐりてから、かの業平の守るべしとのたまひし事、おもひ出してありがたかりしとや。郭に女郎おほい巾に業平の此女郎を見たてられし事は、日比心ばせのやさしかりしゆゑ也。いまだ禿のむかし、雪の日、鍋本又兵衛が門をとほるとて

　やき餅や雪の巴の軒瓦

此句をながめてより哥道に心をよせ、敷嶋の道にわけいらんの心ざし深くなるにしたがひ、なさけの道もあさからざりしに、新艘の比より馴染をかさねたる男、世をはやうなりぬるを、ともなはれぬ道と深くなげき、せめては水むけるばかりの心ざしにとて、禿を寺へ代参りさせて、そのかへるを待かねて墓の分野つど／＼に尋て、石塔は青石でござんすといふにぞ、又も泪のこぼれけるまゝに

　あとの名のしるしの石ともろともに

　　くちぬおもひは我にのみして

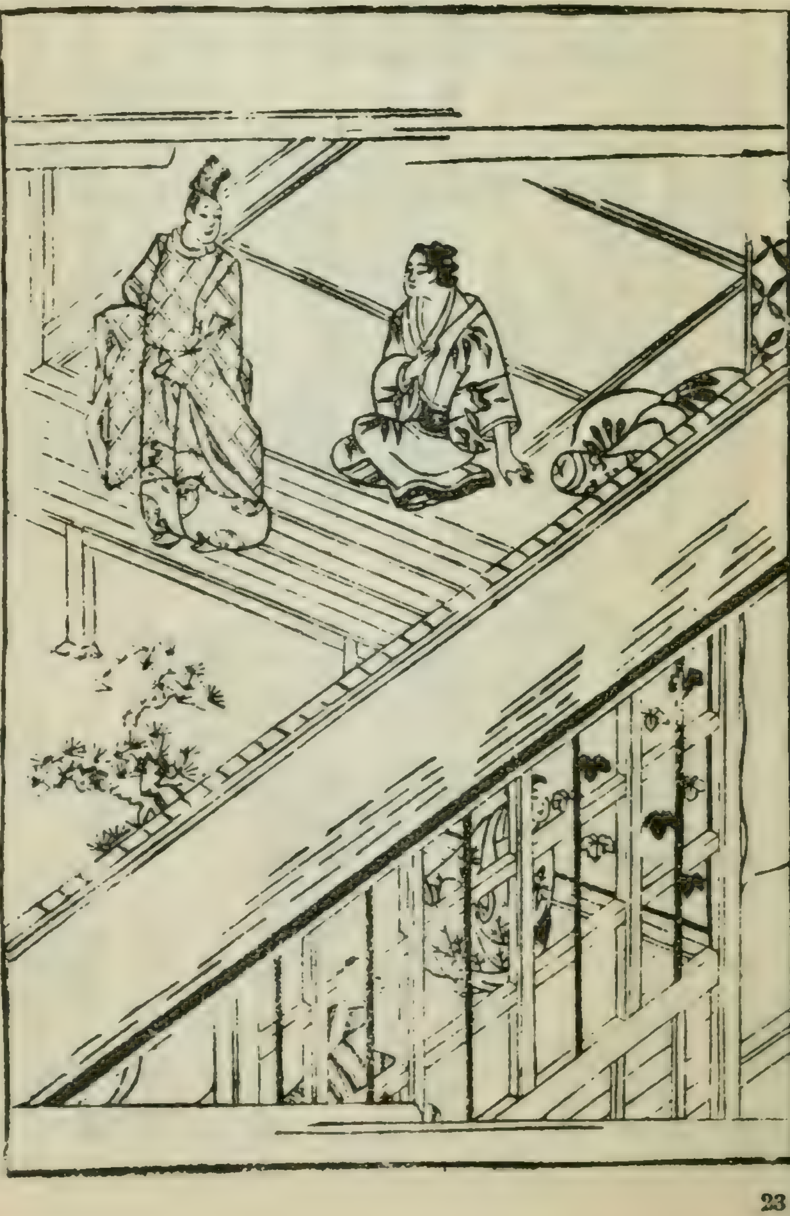
となん、すべてやさしき言の葉どもおほかり。或時女郎をながれの身といふ事は、いづれの哥書に出た詞ぞとたづねければ、ふるき書にては見あたり侍らず。只是は客よりの内證見まひの心



あてちがうた節季には、當分いらぬわたくし道具どもを、西口の質屋へもたしてやるが、おくと最期にながれの身こそかなしけれと申事ぞや

第二　瑞穂の國

砂長爲巖之頌、洋々满耳御代に、斗米三錢の値は、むべ瑞穂の國の德をあらはし、快樂の眉壽をたもつ万民、夙におきて京の方をおがみ、夜にふして江戸の方をあとにせずは、いよ〳〵冥加あるべし。春のみやこの町くだり、わきて長閑なる人の風俗、地主の櫻より、安井の藤にうつる花見幕に、春時鳥きくをかしさ、あるひは祇園の野弓にたのしみ、靈山の稽古能にあそぶなんど、おのれ〳〵が物ずき、身躰相應のたのしみに事かゝぬは、余所の國にない事、天下の美容色道もこ



こをうつせば、末々の情もいやしからぬわけ、我所贔屓にてはなけれども、と、おろせの權兵衛が鼻口が、鰐口をすぼめてかたる所へ、源様今日は御逗留の箸にて追付是へ御こし也。此文かたばみ屋まではやう〳〵と、蛸薬師の七六はまだ二月の初汗ながしてかけ來りつゝ、とんで歸れば、又無理いひの大

將様の御なりと、鼻口は文とゞけにはしりぬ。此御敵衆大坂屋の花崎さまは、室町の助様にてけふより三月廿一日の御影供まで、二文字屋にござる筈、かの客にかぎつて女郎をもらはす人にあらず。又源様つね〳〵あの客をせかせらるれば、日比の横車おさせ給ふは見えすいた事。さりながら、一もめもざくつたあとは、中なほりの大會、どちらへこけても宿やに損のゆかぬ事、當分すこしのせわやくぶんと、中づもりする所へ、源様來現、御こしづけの佐右衛門、けふの様子はやくもうけ給はりたり。それ太夫さまつかみにゆけ、二文字座敷をけたて〳〵てはや御出と申せ、客をとばする事鞠のごとし。そのかはりは此旦那、千増倍の御つとめ、われらたちまち請合奉ると、血氣天井をつきぬく有様に、かたばみ一家も千人力の後楯と精出せども、さきの相手も口きく男、金づくの事に張をゆるめるものでなければ、とかく埒のあかぬ首尾となりくだれば、こなたの腹立大かたならず。さきも男の意地なれば、女郎くれぬもことわりなり。とかく助が歸るさを、本國寺の門前にて微塵にせねば勘忍ならぬぞ。佐右衛門智惠を出せとりきめば、げに一ゆすりゆすつて御覧め一興なるべしと、車中間の男だて、名にふれたる者をあつめよと、おろせの權兵衛承て、二十六人同道仕れば、佐右衛門は袴の股だち高く取、緣のはなに立出、男だての假名實名、一々次第に尋けり。先一番に、紺の布子に天鵞絨の半襟釘拔の眞鍮紋の、光のどけき春の日に、しづ心なくちる花か、雪かあらぬか鮫鞘の、三尺八寸候ひしを、おとしざしにさいたるはいかなる人ぞ。さん候それがしは、梵天の長右衛門とて、年つもつて三十一、喧嘩にあふ事六十度、一度も不覺の名をとらず、此度の先陣也。土足御免と座敷にとほり、床の脇にぞなほりける。扨二番に肌には鎖帷子、上にはあれたる駒の中がた水紋、伊達の薄着や只一つ、帯のむすびめ角たかく、熊の毛雪駄はいたるはいかに〳〵。これは癬疾の久右衛門、去年三條の橋御普請の砌、大間の橋株六本からげて、麻をふるよりかろかろと打かたげ、洛中をあるきし事紫震殿まで御沙汰のありし男と、横にひずんで通りけり。第三番に額に三寸六分の刀疵、見るから強い人さうなり。さん候臼の傳七かくれもない、臼をひけさの彦惣とも、京わらんべのうたひしは、身どもが事でごわります。其外犬の七兵衛不動の喜兵衛、鬪の太郎作

蚣の仁兵衛、肝墮の徳左衛門蝦の吉兵衛、唐の文右衛門夜食の傳吉、つけめの次郎兵衛鬼の金八、施餓鬼の五郎兵衛坊主の四郎兵衛春駒の善七など、いづれも馬鹿の骨張、あるひは立髪せみをれ後家しまだ、捴髪いとびん手先さがり、太ばり小ばり唐犬びたひ、二十六人くるま座にならべば、先おちつきに、蕎切百桶、諸白七斗、ものゝ見事にせしめけり。此事二文字かたにはやく通じければ、とかく無分別でかためた男に、相手になるがうつけと、太鼓の玄庵了簡にて、花崎さま今日ばかりは進上と申來れば、ぬかぬ太刀の高名、これといふもいづれも若い衆の力風の威徳と、うれしがる事をいへば、歷々の者共が、ふところ手してもどるもほいなし。何にてもすさまじき事して旦那に見せ申さんといへば、梵天の長右衛門は座敷の柱をかたはしから引ぬいて、お目にかけうといふ。犬の七兵衛は前栽の飛石をほりおこしてしなだま取てお目にかけうといふ。蚣の仁兵衛は



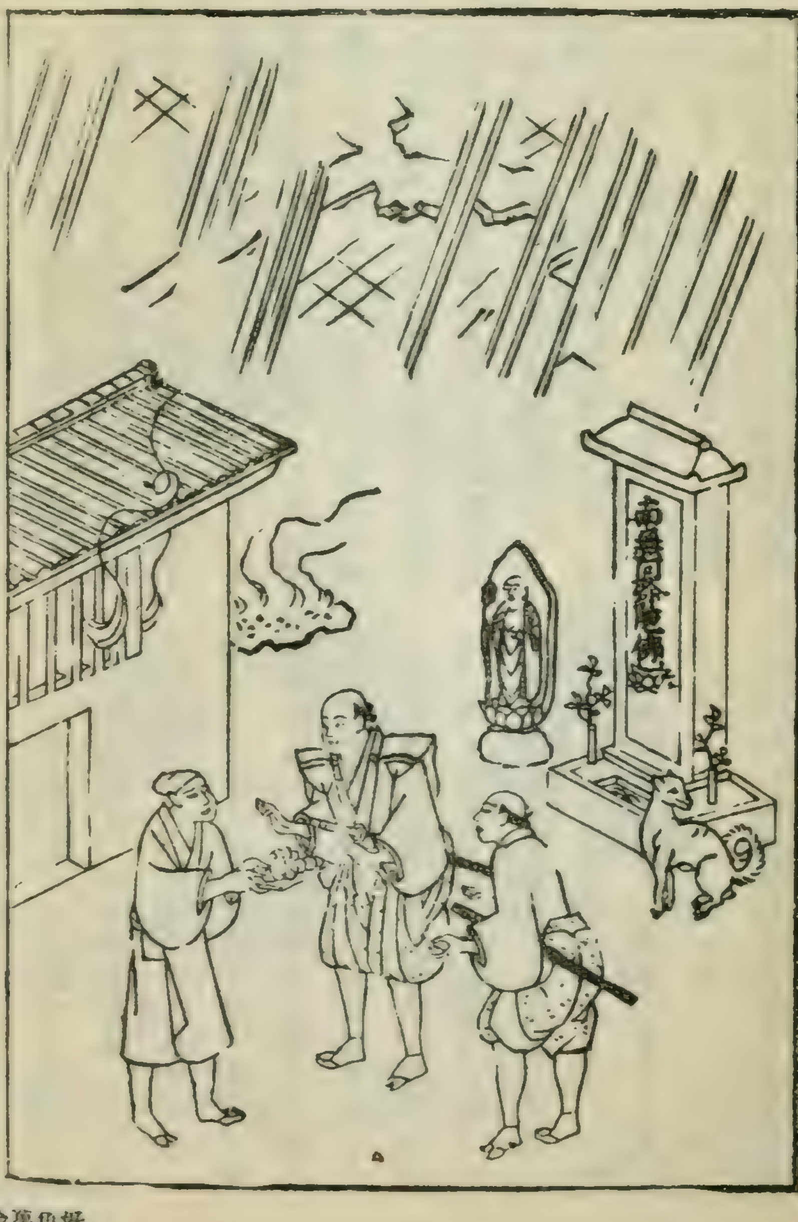
猧をいきながらくうて見せうといふ。夜食の傳吉はちつとの間に掘拔の井戸を五つほつて見せうといふ。其外おもひ／＼のちから穿鑿に、佐右衛門は腹

筋をよらして、さりとはすさまじい詮議。去ながらこちの旦那にも又すさまじい事させてあの〳〵に見せ申さんと、小判五十兩づゝ土器にもつて、二十六人に一つ宛氣をはりけるは、すさまじいとも見事とも

第三　よるの雨

女郎は嘘のかたまりといへども、其中に實三つ有。一には借錢のある事、二には茶づけくふ事、三にはしぬるといふ事也。まことに此死るとはいかなる事ぞや。三界の有情すべて此道をまぬかるゝ事なし。はかなき物にていはば、蜉蝣のゆふべをまち、夏の蟬の春秋をしらぬもあり。久しき物にていはば、ちとせの松は薪にくだかれ、よろづよの竹は田樂串にけづらるゝ事、日のまへの無常ぞかし。されば朝顏の花のもろきを見ては、命門の脉をうかゞひ、烏鳴のわるきをきいては、となりのお婆をあはれむべし。いにし元祿四年春の比より、痳疹といふものはやりて人おほくなやみしが、そのはてさまざまの病となつて、大分しにうせけり。とりわき七月にはおびたゞしくしけるにや、道頓堀の墓には千貳百人灰になしけるとぞ。算用して見れば一日に四十人づゝなり。難波津の墓所斗のみにもあらず、小泊瀬、飛田、野枝、曾禰崎、梅田、葭原など、こゝらに送る人も又かぞへしりがたし。これを見れば始末もいらぬ物也。むすこの夜あるきも折ふしは見ぬかほしてゐたがよし。家賃もまけてやり、むまいものくうて見たい所見て相應にたのしむがよいはず也。身の後の寶は、生前一盃の酒にしかずとぞ。たれも〳〵分別すべき所ぞかし。是も無常のかずとりや、難波の色里に松の位のよね衆、かの痳疹にて水無月十八日に世をはやうなりけるが、色をにくむ人なければ是ををしまぬもなし。されどもうきふしの身の寄邊さだまるよすがもなく、曾我曾我したる野邊おくり、鬼灯挑灯二つを、內の丁稚とそば切屋のむすこがもてば、備駕籠は久三郎と作介がかいてゆく。おいとしや此お女郎の長持を揚屋へまはしたも此程の事なるに、それに引かへたる今宵のありさま。さりとはさだめなき世のすがたと、帷子の袖をぬらしぬ。此外あげやの亭主五人、たいこもち二人、座當三人やりて一人、紙うりの八兵衛やきもちやの又兵衛、これらならでは葬禮の供する人もなし。あはれなるものは女郎の終焉の夕ぞかし。大夫にてさへかゝるありさま、ま

してや横町のよねたちおもひやるべし。さて道頓堀につきけるが、火屋のうちはさら也。外の燒場も大分の死人にて所せきを、漸々かたはらにて荼毘しつゝ、灰よせは明六つとさだめてかへりぬ。其夜八つ半の比より白雨例ならず、杵のやうなる雨のあし瓦葺もつきぬくばかり、雷公大地をうごかし電まはゆく、いかな公平も應時得證散ととなふべし。漸々夜あけ方にしづまれば、灰よせの時分ぞと燒場にゆきて尋ぬれども、夜の雨にてそこらの灰ひとつにながれかたまつて、いづれとわくべきやうもなく氣の毒なる所へ、陰坊は骨佛五六十ばかり甑にのせて持參し、夜前の往生人は骨を此方にあげておきました。御覽じませいと差出せば、扨も氣の付た仕やういつとても大雨の砌はかくこそあるべけれ。さりながらどの骨佛やら目利がならぬといへば、事聞およびたりと穿鑿すれば、への字惣別骨佛と申ものは、其人の平生の所なりに居ずまひして、ふところへ顔を



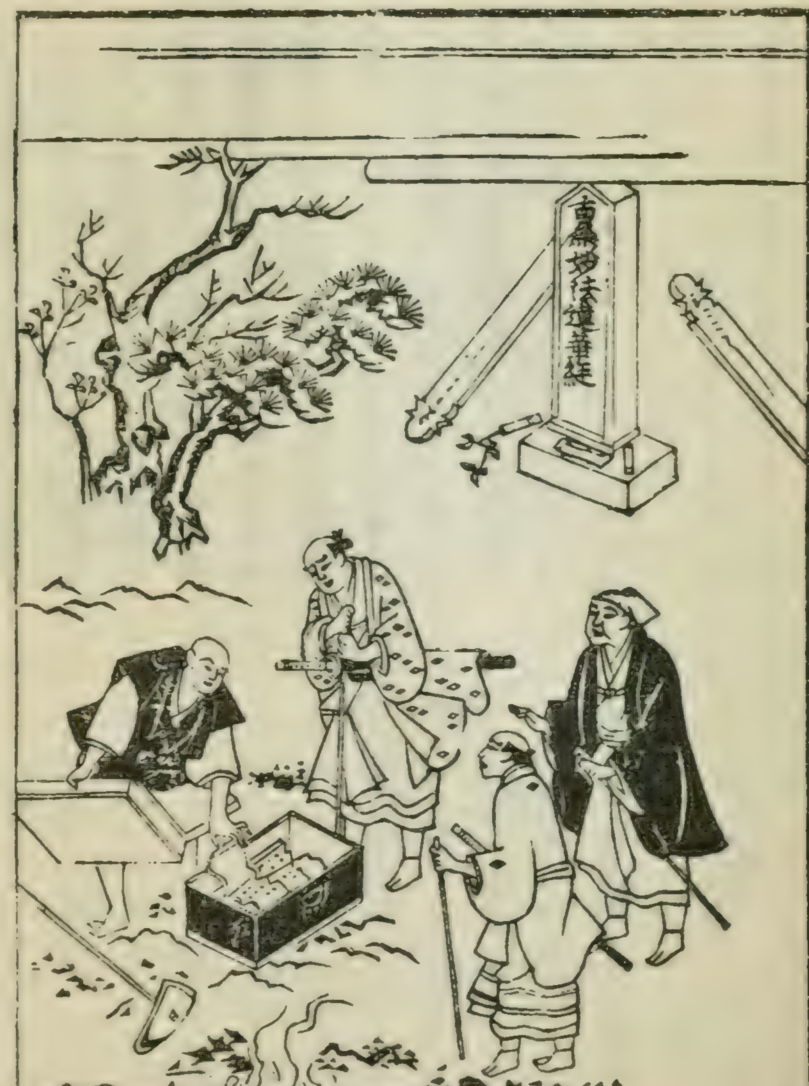
作のすがたをしてゐるものなれば、そすこし引いれたる骨佛あり。まがひもこに氣を付て見給へといふ。げにさるないこれおやと取出せば、陰坊うなづ

いて、廓の女郎衆でござりますかといへば、いづれも肝をつぶして、その業とてよくも見おぼえられし事よといへば、うまれぬ先から此汁にてそだちたる身なれば、少も見ちがへはいたさぬ。ついでにこゝらの骨佛も申てきけませう。此片膝立て兩の手を差出したるのは醫者の骨佛、常に脉を取し時のすがた也。腕まくりしてゐるのは男だての骨佛、尻をからげてゐるのは漉酌のこつぼとけ、うつぶいてゐるのは親にしかられたる人の骨佛、其外後家のこつぼとけ、腰元の骨佛、取上婆のこつぼとけ、鳥さしのこつぼとけ、いろ〳〵さま〴〵あれども、すこしづゝのちがひありて見わける事でござります。さりながら松茸うりのこつぼとけと、はりかたやの骨佛がまぎれもの也

第四　何がしのゐん

俵の九郎がいひけんやうに、駈落の身ならずして隅田川の月見る人は果報なる事ぞかし。京大坂のれき〳〵、二十人口は百年居喰にしても氣づかひのなき身躰を、二流の色代につひやして、年寄五人與に厄介かけて質に入たる下屋敷はいつのむかし、居宅までもながれては歸らぬ水のあはれなる躰となる時にぞ、たいこもちにとらしたる物もをしや。過し年のくれに太夫に送りし百兩の小判と二重の小袖があるなら、それを元手に何なりとも一かせぎして見たい事と、恵方むいて泣ども、年徳神もつんぼになられたやら一切埒があかねば、業平の跡おひして、武藏野の方におもむく事、いくたりといふ數をしらねども、大かたは江戸に足をとめて、どうやらかうやら歳旦の發句めでたうするやうの年とる事となりぬるは、まことに寸土寸金の繁花のちまた、店さきの大道に圓座一まい敷て、蕃椒うるものも、月に一歩の地子を出し、三つ目錐一本持て、火吹竹の穴あけても、親子三人はらくにすぎる事、是にて推量すべし。日本橋に鑓が三筋と、通り町に髭面が三十人とたゆる間もなし。一日に鐘七つ宛うれるてふ、明州の津も、こゝにくらべては影もない事。されども万物の群勢動ずるゆゑに火事しげく、これのみぞ氣の毒なるや。上野のもみぢ散り過て、淺草の風景も嵐にながめがたく、士峯は雪ぐもりにかたちを失ひ、兩國橋に手ぐりこぐ身も顔のうるむころ、ある日の夜半過に手あやまちよ、下谷の方なり　寺も二ケ寺やけたりといふ。何その紙駒山都留天

寺はこちの旦那寺也。又段々のせわこそ出來たれど、有馬宗味は粥たいて久七ににになはせ、東屋休甫能登屋の永心松やの五郎介山本道圓など、題目講の衆中十七人さそひあはして寺に見まへば、同宿四五人、春のやけの丶土筆のごとく、ふすぼり頭をかたふけ、土かきわけて何やら尋ぬるけしきなり。何とく扨もふ慮なる事笑止千万といへば、さればでござります。ねいりばなの事なれば、竿にかけたるふんどし迄すつぺりと物の見事に丸やけ、此やうなむごい事はござりませぬといふ。長老さまは何方へござつたぞと尋ぬれば、今朝御齋にまゐられましたといふ。さりとはゆるりくわんとしたる坊主かな、此時節に齋參り所ではあるまいとわめけば、納所坊主の説道泪をはらはらとながして、只今までは隨分とかくしましたれ共、最早かうなる上からは各様へ何をかつ丶み申さん。きいてくださりませはこれの長老の悪性を、せめて野郎ぐるひと申さば言譯もある



べし、三浦屋の高尾と申す女郎に、くびたて衣の上までのぼりつめ、三日にあげずのさわぎ。夜前も桔梗屋久左衛門かたにとまつて居られし、其留主に

かゝる首尾なれば、それより直に駈落ちと見えたり。貧僧の分にすぎたる太夫ぐるひに城がつゞかねば、切々の奉加に各様の金銀を大分にむさぼり、さらば本堂の瓦一枚ふきかゆる事か、釋迦多寶のあたまの上に雨のもりるも構はず、布施を一包手にためず、みな三浦やが飯米代にげぢかれました。その佛罰にてかうしためにあはれた、主は身にかゝつた事なるが、そば杖にあたつたる我等がざまを御覧じませいと、はぎりして腹たつれば、いづれも興をさましてあいた口をふさがず。さて當寺の靈寶、祖師の曼荼羅と、傳敎の作の四天王はのけられたか。いかな〳〵曼荼羅は去年質におき、四天王は夜前一番がけにやけてしまひました。さりながら三國傳來の佛舍利、是は火にもやけぬものなるゆゑ、もし焦土の下にもやあるらんと今朝より尋ますると、あそこ爰鍬もてさがす所に、やけ瓦の下より挾箱一つほり出したるが、少もそこねずまあたらしなれば、各肝をつぶして靈佛靈寶さへ殘らずやけたるに、此ちよろい挾箱一つのこりたるは前代未聞のふしぎ。とかくあけて見よと蓋をとれば、高尾がとゞけの文をつめ置たり。是ぢやというてもやけぬはふしぎといへば、新發意まかり出て、なるほどやけねが尤也。みなぬれの文でござりますものを

好色万金丹卷之二　終

好色萬金丹巻之三

第一　花ちるころ

麗山宮には二月中旬はじめて瓜を進とかや。吾朝にもそれほどにこそなけれ、桃の花ちる比には、初白瓜一寸五ぶほどあるを三匁七分といひしが、六七月の比には、うら借屋にあひずみの婆も、椚瓜の料理は鼻につくと申す。されば何事もすくない時が花也けり。山本與次兵衞が三百兩で吾妻をうけだし、土佐の船頭が松嶋半彌に指をきり、奈良やのまんが生玉の心中、これらを其時分には、前代未聞のやうにめづらしがり、長老さまも高座の上にて、引言にいはるゝ程なりしが、此比は指きりの心中のといふ事は木抓であつめるほどあれば、繪草紙屋も古くさいとて板行せず。ことに女郎うけだす事は、難波の色里などには、とりわけめづらしからず。千兩の二千兩のいうても肝もつぶさず。銀もつたら請出さいでは、人間五十年、金の鎖でつないでも、高のしれた浮世に、始末して苦をこしらへ、一生たのしまずに目をふさげば、跡式の公事の種をまきのこし、公儀の腰懸に町衆を退屈させ、白砂の上にて疝氣おこして戻る事、これみな吝もののそば杖にあたるもいとしや。我物つかふに誰がなんといはうぞと、無分別に氣勢を出す男、さる宿衆を根挽にする談合、歷都が才覺にて、万事五百七十兩につもりあげて、十の物が十六までもその筈にきはまれば、此女郎のしあはせ、姉女郎も、あやかりものとて指櫛を無理にもらひ、妹女郎は身の將來のながきつとめをなげきぬ。され共かの女郎は、此男の手にいる事を一切よろこばず、何とぞして此事きはまらぬやうにと、愛染樣へ百日精進の願をたて、扨かの男にあふたびには、いやらしい事をたくみて、あかれるしかけ。床にいれば、そら寐入して牙鳴をしたり、手を吹て屁のまねしたり、食指で齝せゝつたり、小便にさい／＼たつぷり見せたり、夜食をくひ過て腹が筋ばるというたり、品々に戀をさますしかたに、かの男もおもひ入を無にして、廓に女郎旱魃のゆかぬ間に此陣ひけと、翌日から、さるかたの宿に色をあらためけるを、かの女郎は是本望とよろこびしは、外にふかい男といひ

かはした事のありし故ぞかし。されども欠と人の情とはうつりやすきためし、此君思いれの男、いつぞの比より地女ともざくりて、あひおもひの緣ぐみしければ、かの君の事は絶〲といふも愚よ、娑婆で見た彌四郎ぶしうたうてかまはぬ顏つき。さりとは憎といはうか、つもられたと申さうか、身うけしてくれる客までを捨て、あの男めに心中たてた口惜さと、身をもやせども公事沙汰にもならぬ寐ものがたりの詮なき月日を送れば、限の年も過たれど、おちつくかたもなく、ことに身あがり萬事の借錢拾貳貫目ばかりあれは、いよ〲埒のあかぬせんさくを、鰐足の吉と談合して、恥をいはねば理のきこえぬ、內證 底 叩といふ文六十六通かきしたゝめ、むかしよりあひ見し客のかたへ、無心いうてやる。中に

も京の源さま、和哥山の重さま、長崎のわるさ様、仙臺の八さま、池田の法師さま、淺草の吟水さま、下の關の伊しう様、これらは懦成御かた也。されども此文を人やとひしてやるも造作のかゝる事と思案して、龍松院の供して諸國奉加にまはる、律義の與一郎といふおやぢに、此狀どもそこ〲へとゞ



けて給はれとたのみければ、與一郎心得てうけあひ、所書をちがへず、たづねくて届ければ、さすが色のゆかりは悋からで、六十六人の客より、合力銀しめて十三貫目七分五リンあつまりぬ。與一郎元來正直の後生ねがひ、我心に引あてゝ、扨も殊勝な女郎かな。此度大佛の奉加に付たうはあれど、手前に銀はなし、さるによつて方々の客をたのんで、寄進せらるゝぞとのみこんで、かの十三貫目の銀を、柱一本代の奉加帳につけて大佛へをさめ、のこる七分五リンをかの女郎にわたしけり。大きな算用ちがひ

第二　しろき露



つたへきく和哥の道は延喜天暦の比に盛なりしとかや。されども當世の誹諧ほどにはあるまいと、見ぬ古を高でくくつたも尤也。紙屑買も懷紙の書ぞこなひを撰出して手本とし、後の亥子に餅つく人も、いでしら川のせきだなほさんと、文字數あはするありさま、誠にをさまる君が代のしるし也。爰に難波の色燈かゝげぬ昼見世といふには、客もはやくしまひければ、目二つにては寐あまる冬の夜、高嶋やかたに口さ

きの女郎十五六人、今宵ほどはなしのしゆんだ事もなければ、すぐに居ながれて朝込もをかしかるべしと、約束のない女郎も、身あがり一つ損するぶんと、集錢出しの鍋燒に卵の浮波〳〵、客の見ぬ時に湛とくうておくがてん。去ながら是ばかりでも夜はあかしがたしと、大坂屋の武藏が智惠にて、哥仙誹諧の趣向をはじめ、扨執筆には藤屋の陸奥さまをたのみますといへば、いや江口さまにとゆづり、浮船さまにというて埒があかねば、梅野が作にて、竹縁に醉伏たる與茂介をせゝり起してつれて來り、是ほそい目をさまして執筆さんせと、文台あてがへば、八まん是は至也。さりながらむかしは遊女に哥人あまたありて、代々の撰集にいりしとかや。皆さまたちも随分勢御出しと、眞顔になつていふ時に、さる天神



女郎申さるゝは、うきふしの身ながらも、客のゐぬ間は、其日のつまの留主なれば、女郎ばかりの座敷に與茂介どのをおきますも三句の氣味わるければ、ものは談合、今愛でぼんさまにならんせんか、法師は人のゆるしあれば此のちとても、かうしたつきあひに遠慮がなうてよからうといへば、與茂介

それはねがふ所也。金銀出して門跡さまの御剃刀いたゞくも、今君の御手にふれらるゝも、道理はおなし事。けつくかたじけなき正味は、こちらにあると側にありし茶瓶のせんじ茶にて髮もんで西向になほり、塵取うけて、さあ只今〳〵とせがめば、此女郎も大膽もの、傾城と公事はならぬものとのみこんで、兼定の剃刀、あはしすまして、すつへりと逆剃にしたりければ、與茂介あたまを撫て見て、これよ〳〵、どうもいへずの森のほとゝぎす、泣妻もたぬ身の樂さ。迚の事に君の御さしづにて名もかへたしといへば、天窓をそろう〳〵といはんしたほどに、素露さまというたがましよといへば、いづれも是はよいのが出ましたとどよみつつ、おもひ〳〵に法躰の祝儀當座につかはしぬ。よしのやの了角

つむりつき玉のやうなぞ素露

となん挨拶すれば、かたじけなしと自筆にかゝせて懷中し、さて是はこれよ、まづはじめての興行の事なれば、どなたなりとも初春の御發句あそばすべしといふにぞ、ふしみやの八重霧

書初や哥ばかりにてくどからず

今朝なくこゑの粹な黄鳥　茨木や かをる

客の紋あげはの蝶の麗に　大坂や 山路

格子から見む月は出たかえ　住吉や うてな

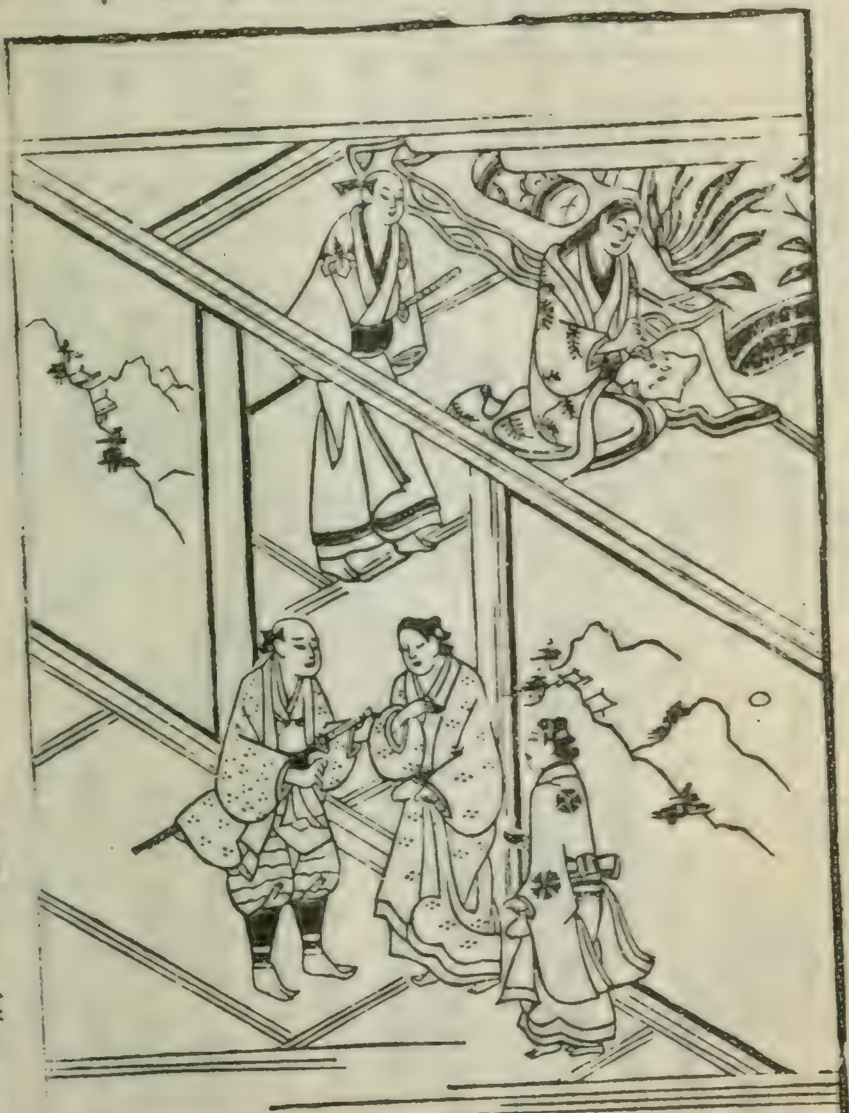
うそわいの玉を露ぢやと萩の花　和泉や みよしの

丹波やの村雨、文臺わきにゐたるが、今の萩の花はおもてには無用也。蒲團餅は釋教でござんすといへば、素露をかしがりて、是はあたらしい式目いかにも尤也。御傘などの掟は古めかし、此ついでに當流の式目を申べし。指切心中は夏也。褌おくは九月の季、文日にえうらぬ女郎は雜也。ならちやは夜分、かのゝおゆるは朝時分、卒都婆うへもの、兀頂は山類、文彌ふうの上るりは無常、張形は生類のべ紙は戀也。鼠の糞はふりもの、壹匁取の女郎は天象、あくびは聳もの、食燒は水邊、髮さきのながい男は神祇、小便擔子は居所也。借錢乞は述懷なるべしといへば、それはちがひ也。借錢こはるゝ身こそ述懷なれと、一座同音にいへば、いづれも身におぼえのある事に貧乏口がそろうたとをかしがりぬ。さて揚屋町に鰌賣が付合也。禿に鬘もよし。熊手に鑓代は五句去也。只金はうちこしもきらはず、見わたしに壹万兩まではくるしからず。但錢がしの八兵衛には折きらふべし

第三　置みやげ

無學の人はさら也、學文したる人も物

のあはれしりすごして、おほくは色にまよふ事也。戀の山には孔子のたはふれ、情の海には弘誓の船も楫がまはらず。武藏坊辨慶は、一代に只一度女にあうたといふは大きな迂詐のかは、小野の小町は穴がなかつたといふもいつはり、筑摩のまつりに、まだよめいりせぬ娘が、鍋を三枚かづいたと聞しはまことなるべし。此比はながい羽織は初心に見え、大きなる鍔をこのみ、振舞にかならず茶づけをくふ事も時々の人の氣、かはりやすきものなれど、色このむ事のみぞ、むかしも今も替事なきぞ、尤天地の道なればなり。よろづ事かゝぬ津に住て、女郎の名さへしらずにくらし、揚屋の酒に醉た事もなき身は、何をたのしみに灸すゑて、命を大事がる事ぞやと、遠い田舍から指ざしして笑ふをのこ、金子三千両ありたけつかうて遊ぶはずにきはめ、御出入の源五兵衛左五右衛門李太夫忠介以上四人を同道にて、國元は有馬へ湯治とて船を出し、夏の日和ののりよくて、三百七十里の海上を、わづか三日に難波の川口につけば、年來荷物問屋のおも手代、三里の灸を潮にひたす磯ぎはまで御むかひに伺公申も、銀の光にあたりもま



ばゆく、蛤とる賤も目をおどろかせり。さて翌日は道頓堀の遊興、芝居のはてを網代屋にやすみ、西川岡之介上村井筒山下才三郎藤田皆之丞加茂川のしほなど、江南の花を座敷にさかせ、額の千代、大黒のつね、丁子のとめ、柳のしゆんも入込の呂衆に、舞子の弁がむかしをとこの出立も大事なく、琴ひく御前も爰のはをかしきに、ながき夏の日も鐵眼堂の入逢つげわたれば、これよりすぐにみつぐりの中おちに、井筒やの名水をひいやりときこしめせと、問屋の手代共かたちらからそゝり出せば、さすが田舎そだちは、應往にて、東國迄の駕籠からせ、わつといいうてむれいり、女郎の獻立をわたし、此君たち御ひまのは申におよばず、さしあひのあるも、どうぞ貰うて來たられいと、手代の喜兵衛がしこなし顔、やがて旦那に損かけさうなも氣の毒ながら、此大臣爰に逗留の間は、きづかひなしと、めのさやのぬけた中ぐゝり、なるほどかしこまつて、うてな、さほ川、若紫、八重ぎり、村雨、みふね、おこと、吉野をそろへけるは、夷にまれなる風流。よしや万貫目の分限にて田舎にあらんより、紙屑買して難波にすみたやといひけるは、實からの詞ぞかし。此うち大臣の御目に入たる女郎を床に入て、其外はえにし／＼のまくらをかはしぬ。初對面には、男からさきへ寐てまつものと定めたるもをかし。しばらくありて、おくの床より茶をよぶ手の音すれば、禿がはこぶを、手代の喜兵衛がまねきて、大夫様はまだ寐てござるかととへば、もはやおきてゐさんすといふほどに、さては帶とかなんだものと氣の毒がり、大夫さまにちよと御めにかゝりたいと屏風のこなたへよび、あの客はわたくし方の一旦那、大ゐんつう有にて、當年中はこゝに逗留いたされますゆゑ、そなたさまにあはせまするは、御ひいきに存じての事也。粹どしの中にくらい事はなし。隨分のぼらして手に入るやうにはなされいで、今宵はふりすがたと見えました。それはふるい御しかた、大夫様ほどにもない素人かなとさゝやけば、喜兵衛様は何いはんすやら、それはこなたにものみこんでゐまするゆゑ、二つまであひまして、あすあさての事も約束いたしましたといへば、さてもぬからぬ事と跡はわらうてしまひけり。よろづにおろかなる人も、此道ばかりはいなぶねの、おさねどのぼる戀風の、涼しさとめてながれ出る、水のあはれもふかくなる、井筒や／＼と足

がむくほどに、此津につきしより一日も外にあそばぬ田舍氣は、あまり一筋にて野父らしや。夏は夕ぐれと書しにたがはぬ揚屋のけしき、蠅はいづくへ寐にゆくぞ。栢の鋸屑くゆらせば、蚊のもちつくはやぶれけり。手水鉢の水なぶり、雫にそだつ石竹のもとより、蟇がのた〳〵とはひ出れば、禿はひやし物の田鳥子取てなげつけるもあどなく、石灯籠のかげなる螢は、きのふ江戸又がはなしたるのなるべし。山のはつかの夕月を、のびあがつてをがむもよし。をがまぬも粹らしく、とかく女郎のするほどの事がをかしく見ゆるも、客の鼻毛のながいゆゑなり。今宵は寐よかるべしと涼しさをたのしむ所へ、彌次兵衛さまとやらんが、御目にかかりましたいとて御出あるといへば、それは國元の手代なるが、何の用にてのぼりたるぞ、心もとなしといそぎ様子尋れば、殿様よりの御用にて御むかへに參りたり。事急なれば今晩御船にめさるべしといふにぞ、みな〳〵肝をつぶし、足もとから龍ののぼるやうなせんさく。さりながら一國の下は此やうなる事が大事なれば、とかく下らねばならぬ。それ脇指おこせといそげば、女郎はむなぐら取て是たしなまんせ。いかにいそぐ用なればとて、三百里四百里ある所へいぬるいとまごひもせぬといふ事があるものかと、はらたてるめもとに泪一雫うるめば、いかにも〳〵そなたのいやるとほり也。さりながら用事しまひ次第にのぼるべし、それまでは隨分わづらはぬやうに勤められい。なま中なじみをかさねてけふのわかれの心ぼそさやと、鬼のやうな顏してあはれなる事いふにぞ、女郎も爰はなかねばならぬ所と、おもひ切て泣出せば、道理〳〵と背中をさすりおろし、彌次兵衛をまねいてさゝやけば、かしこまつて杉原に壹歩をほうばるほど包てさし出せば、これ〳〵大夫、是は此ほどの信やら置みやげやら也。わけもない事いうてなき給ふな、やがてのぼりてあふべしと立出れば、女郎は猶かほもあげずに泣居たるも、狂言にしてしまうた格なれど、あはれに見えたり。井筒や一家も是はおもひがけもなき御事と、まが〳〵しくなごりをしめば、かたはしから一歩の雨を、わかれの泪とふらしつゝ、門口まで出けるが、今一言大夫にいひたい事があると立もどり座敷へゆけば、女郎は泣たやうな顔もせず、かの壹歩をかぞへてゐられける

第四　汐干の浦

よろづに腹たてぬ人は天生の果報ぞかし。憎子世にはゞかるほどの富になるとはいへど、笑ふ門に福來るこそめでたけれ。されども色道のまよひには、いさゝかの事にもいきどほり、一寸さきは闇の夜に、あたまから火のつくもしらず、打ころしてしまひたいとおもふはたれが身にもある事とや。元日の屠蘇の土器もまだひぬに、桃の酒もる節句になれば、大宮人は御溝の水に盃をうかべては　千鳥足にてみどりの草をふむもけふの風流。君がため生薬とる蓬餅に腹をふくらかす民は、住吉の汐干にあそぶ一興、駕籠かりて淡路にのるべく、平砂渺々として龍宮の瓦葺もあらはれ、沖の澪標に幕はりて、海の底をくぼめて茶釜をすゑ、假の臺所なるもをかしく、下女が足の大さなも、蛤にじるためには究竟の事とそこらあたりをあざりありけば、去年のけふ誰がおとしたりけん指櫛や、燗鍋の蓋餅喰盃、挾箱の錠小刀の柄、水呑おつぼ煙盃の吸口など、あられぬものをにじり出す所に、玉川の萩をかきたる梨地の文箱を、ほそき針金にてからみたるを掘出たり。是はいかさまわけあるものゝ仕業と蓋をひらけば、廿ばかりの女繪、むらさきのきるものに鳳蝶の紋つけて、髪は廓の風にかきたるが、身うちに針を五十四本さしとほしたり。まさしく嫉妬にて人を咒詛女心のあさましきたくみと見るもおそろし。そのおくに女筆にて、此傾城ぬしある男をたぶらかし大分の金銀をつかはせ、剰子まである中のそれがしを離別させんとたくみ申事、おもへば〳〵胸のほむらにわきかへる提子の水はものかは、すぐに此身もゆるばかりの怨念を、海龍王に告奉る所也。正直の首をてらし給はゞ、三日が間に此女の命をとり給ひ、夫の惡性をひるがへし、我うらみをはらし給へと書いたるこそ、すさまじき悋氣なれ。無殘や是はいづかたの女郎ぞや。龍神に申こんだるいのりはそのしるしすみやか也ときけば、もはや玉の緒も絶はてゝ、あつちものとなられけんぞいとしき。外面似菩薩内心如夜叉のありさま、何事も人にはいはで、心ひとつに悔〳〵と思ひつめたあげくには、丑の時まゐりに身をこらし、神木に釘をうち、米の粉にて男根をつくりて屋の棟を逆手に投こし、あるひは閨にふしながら、魂は孀の家にかよひて、咽喉にくひつきたるためしもすくなからず。是みな夫

を大切に思ふあまりのしわざ、氣のせはいからおこる事也。世の中の男の性、女一人をまぶつて居るものにてもなければ、大かたに了簡してすますがよいはず也。女郎にも粋とおもはるゝ男をもちたるは其身の外聞なるに、素人女はそれ迄はゆきたらぬ智恵にて、閨ふみ出せばもはや悪性をするものゝやうに心得、夫の友をそしり、夜ふけて歸れば、かみつくばかりのすがた、あるひは天目を打わり、又は鏡を取てなげたり、一つも徳のつく事はせず。きるものに酒のかゝりたるをわめき、袖口がほころびれば、どこの女とたはけつくしたるぞと、供にゆきたる丁稚をせちがひ、其一日二日は詞のはしにあて言いふが文盲女のおさだまり也。たまたま氣のしやれたる娘ありて、紫式部が筆のあとにいにしへの戀をしのび、哥舞妓のしぐみに當代のわけを見ならひて、此身もよめりしたらば、ふたつならぶるまくらの私言、人のわらはぬ夫婦あひに、もの怨じのかけひきを、一門中の御内儀たちに羨しがらせんと思ひしに、三五の十八とあてのちがうたる素人男、十五日がへりのひとりねを氣の毒がり、昼は終日女房のは



なのさきにへばつて居、夜は火とぼすとそのまゝ床に入て、通宵きつねが眞桑瓜たがへたるやうにして、昼過におきあがり、少の事も女房の機嫌そこなはぬやうに立まはり、そのくせ一代に地黄丸のいらぬつよざう、外にあそぶ色なければ、いかな御内儀も色わろく痩おとろへ、不斷はちまきをほどかず、年子うむも外聞はづかしければ、たにてわけたてるもをかし。かやうの男は大かた女房の方から一本しられておきざりにあふもの也。さりながらわれ鍋にとぢぶたとや、鬼の女房には鬼神がなるたとへのごとく、どちらも數奇どしがよりあふもあり、ふたりながら腎虚してあとさきに葬禮するもあり、密夫して繪草紙になるもあり、扇子のわかれして乳母に出るもあり、女房を惣嫁に出して男が牛夫につくも世のすがた也。煙草うりの久七が女房は、はせ川といひし女郎なるが、北濱の米手代に身請しられ、うき世小路にしばし住けるが、縁はあぢなものにて、今は久七が妻となりぬ。此をのこ天性肩のわるいものにて、内には提灯ほどな火が降て、朝夕のけふりもたてぬ事おほけれど、それを苦にもせず、きざみたばこの内より、わづかまうける錢は毎日の酒代に打こみ、髪ゆひの來ぬ日はあれど酒のまぬ日はなく、醉ては肴に女房をたゝけば、ならぬ身躰に是はよからぬ事、そなたの咽にはどのやうな酒石があるぞと、家主は興をさまし、只いとしきは御内義、縁なればこそあのやうな男にそうて居て、しかも辛奉しらるゝ事と、相店のものもふびんがり、とかく此ちろりと盃が目にかかるゆゑに、又してはのみたうなりて夫婦いさかひが絶ず。所詮酒の道具はうづんですてよと、隣の五介が分別にて、藪垣のもとをほりける所に、鍬の下より西瓜ほどなるもの出ければ、何ぞとあらうてみるに銀の尿瓶なり。五介は感涙をながして、さりとはありがたの御事や。むかしの郭巨はおやに孝行なりしゆゑに、金の釜をほり出し、久七の内儀はをとこに孝行なるゆゑに、銀の尿瓶をほり出されけり

好色万金丹巻之三　終

好色万金丹巻之四

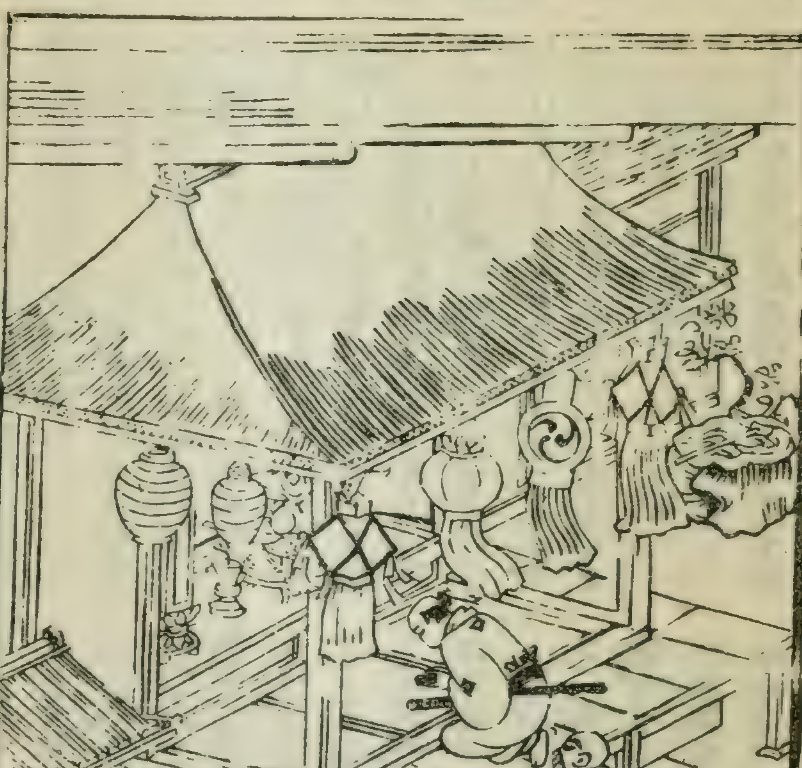
第一　その文月

鶏の空音をはかりて函谷關を出しは孟嘗君が智恵、空腹切て城をおちしは忠信がはかりごと、地黄煎を箸に付て錢箱の銀をぬすみしはむすこの才覺、火燵の簀櫃をあげてしのびしは娘のいたづら、女郎を呉服屋の挟箱に入て廓の門を出しは橘市が分別ぞかし。むかしは女郎の町へ出る事自由にて、ちかきあたりの宮寺へは、つねに詣ける中にも、天満の天神へは参るもの多かりければ、今もその余波にて月毎の廿五日を紋日にする事とぞ。其後廓を出る事かなはぬより、かの里もさびしくなりもて來れりとふるき人のかたりき。



されど今も宿屋としめしあはせ、鑓代に合點さすれば、金次第にてどのやうにも出らるゝ事なれど、萬一ふ首尾になれば宿屋も商の害になり、女郎は課代に年を切増事となれば、地獄の上の

一足とび、是ほどあぶない事はなけれども、大膽なる女郎は人にもしられず、只一人もの、まぎれに門をしのび出ても何の浪風たゝずにしまふ事、甲ほどの穴を出る事也。文月朔日より晦日まで、道頓堀の墓所には石塔ごとに灯籠をとぼし、念佛申て題目となふる音、千里の外へもきこえつべく、毎夜の群集山をうごかせり。此時節に何とぞかの寺に詣て、さき立し兩親のぼだいをとふらひ、あさましき身の後世をもいのりたやとおもひをこめし女郎、朋輩の中にも物に心得たるみつねと談合して、さらしのかたびらに黒繻子の中幅帶、ぬり笠をわざとあふのけてかづき、とろめん足袋に奈良草履、淺黄の手おほひに金地の扇迄に氣をつけ、髮も身ぶりも町風に出立、十四日の黄昏、かけこひの往來もつねよりはしげきに



打まぎれて、東の門をしのび出、よつ橋をこゆれば心齋橋とかや。山口屋にてあふ客は此あたりの酒やなるらんと心づかひせられてゆく程に、嵐三右衛門が芝居は禿の時に見たる事、おもひ出られてゆかしくながめやりてあゆめば、法善寺につきぬ。聞及し灯籠は四節の夜見世よりおびたゝしく、名に

おふ石井の清水を口にふくめば、さながらに心のにごりも涼しきやうに思はれ、本堂の御佛をしばしふしをがむは、きのふもとめし珠數の未通あげもをかし。身まかりしをさなき子共の弄物をさむる地藏堂とやらんは是かとよ。かぞいろはいかにかなしと思ふらん。まことや古墳おほくは少年の人なるもさだめなき世のすがたと、眞實の泪をさめがたし。そこなる新敷石塔、見れば薩摩の國の何がしとしるせり。いとしや遠き國よりはる〴〵と爰に來て、なじまぬ里の土となられし事、さぞやふるさとの御内義さまのなげきの程も、おしはかられてあはれなれば、逆緣ながら念佛申てたむくるに、又ふるき卒都婆の苔にうづもれて文字も見えぬは跡とふ人もなきゆゑにや。樒さすべき筒もくだけて、只叢の虫の聲のみ事とふよすがにて、さす月影もものがなしく、まことにかゝる所の秋也けりと、つきせぬあはれは女心のくせにて、かの里のつとめ氣もうせて、中將姬のむねのうちかくぞありけんと、我ながらたふとし。道ふみなれぬ身のつかれに、あたりなる水茶やに腰かけてしばしやすむ所に、うしろから扨も久しやといふものあれば、はつと思ひしが、笠の內より見かへれば、過し比かみやにてあひし重といふをのこ也。見つけられしうへはもはやつゝむ所でなしと、こよひの首尾をかたり、さてそなたさまには長崎とやらんへ御下りのよしうけ給はりけれど、たよりもあらで文さへ進ぜませぬおこたり、今あひまして言の葉もない仕合。さりながらそれをなじみだけに御ゆるしあれかし。かうした所にて御めにかゝります事も、つきせぬえにしかといへば、なるほどそなたの御ぞんじのとほり、われ事も久敷長崎にありしが、きのふ爰元へのぼりしゆゑ、いまだその里へもまゐらなんだに、思ひかけぬ所にての對面、けつく氣がかはりてをかし。さだめし十五日十六日の約束はあるべけれど、何とぞさしかへて紙もとへ御出あるべし。こよひはもはや太鼓まへぞや。おそくては首尾もいかゞなれば、われらおくりまゐらすべしとすぐに紙屋にともなへば、是はめづらしき御出と、まんがけうとい聲も久しぶりなり。もはや此まゝには朝込と、長崎にて酒をしあげたる手柄ばなし、丸山のうはさ、南京の小哥、漢浦塞のをどり、阿蘭陀の錢よむまねなどするうちに、まだ初秋のながからぬ夜はしら〴〵とあけにけり。公事宿に居る一時は三年ほ

どに思はれ、色里にあそぶ終日は茶一ぷくのむ間ほどにも思ぬは、みな氣のまへぞかし。十五日の日もあかぬ物がたりにくれ行ば、聖靈おくるとてかたはしから鉦たゝき立て、麻骨の門火をもやし、明年の〳〵といふ聲におどろき、われらもいなねばならぬと、あわたゞしく床を出れば、内かたの首尾よろしうなされて、明日もはやく待ますといへば、をのこ泪をはら〳〵とながして、今は何をかつまん、それがしは去年九月に食傷にて身まかりたり。今年は荒尊聖なりとて古郷に我魂をまつるゆゑ　きのふ冥途より來る道にて、不慮にそなたにあうてゆるりと物がたりいたし、妄執のおもひをはらして嬉しや。さりながら幽靈の事なれば、何もやる物はないほどに、けふあすの揚錢も、そなたのはまりにして給はれとて、かきけすやうにうせにけり

第二　一番むすこ

茄子一荷になうて大坂中かけまはり、すゞしき陰に汗さへしのがずかせげども、一日に錢五十設かぬるものも有に、よい酒のんで阿頼口たゝき、指のまたひろげれば、壹歩の二つや三つは心やすくせしめるたいこもちも有。蜆一升買とて一日ねぎるおやぢも有に、一時ばかりのなぐさみに、六十三匁出してほこりとも思はぬむすこも有。松囃興行するものは、年内よりたのみにあるき、扨年玉に扇箱、筆、金杓子やうの物を持參し、其後大杉原にふれ狀書てまはし、拍子しまへば五里ほどある所へも袴きて禮にゆくは、わづか貳匁の銀ゆゑ也。女郎買目から見れば、供の者一人の夜食代ぞかし。人に物もらふは大かたの事にてはならぬに、女郎はさのみほしいともいはねど、こちらからやりたがる氣になり、すくなければはづかしく、又おほいとても女郎がうれしがる顏もせぬもの也。惣じて惡所に金つかふ者は、世間の義理を欠事、あちらこちらのちがひと思へば、其身の了簡には、女郎の手まへをわけわるうはならず其上に世間の義理をもつとめては、針を藏に積でもたまらぬといふは、さりとは大だはけの幡がしら也。絹布を買て質において女郎ぐるひするものもあり、又銀をにぎりすくめて一生くらす者もあるこそさま〳〵のうき世や。和吉が富は、家賃と銀の利ばかり、一日に五百目ならしに取こむつもり、世諦には三貫目いらぬほどの始末、そのくせ惣領むすこは近隣にかくれなき虚介、其母夢中に

茗荷子をくふと見て懐胎したる子なれば、鈍なるもことわり也。すでに十八の秋風も身にしむ比なれや、陰裏の芋も味のつく時分、女と寐て見たいとおもふ心ざしはあれど、人にともなはん事もはづかしくて播磨の三木より這分の丁稚をめしつれ、新町の西の口より東のはづれまで、つぼねごとに立のぞけども、此筋は端の女郎も勿躰ありて、灯もかゞやけば外薄〳〵しきに便なくて、そこを南によぎるとて、木屋河内やひのやなどいふ茶やを簾よりかいま見ければ、夜食の菜たくかざに、鼻をひこ〳〵として打過、葭原の北むきにかゝれば、はいらんせはいり給へとよぶにぞ、いもせのえにしとよろこび、丁稚を戻して身はそこにあがり、是ぞ一代の戀はじめ、そのはづかしさいはんかたなく、わり膝にかしこまり、わな〳〵ふるふを、女郎もきのどくがり、ろくに寐さんせといへば、心得ましたとうつぶけに寐る。帯とかんせといへば帯をとく。



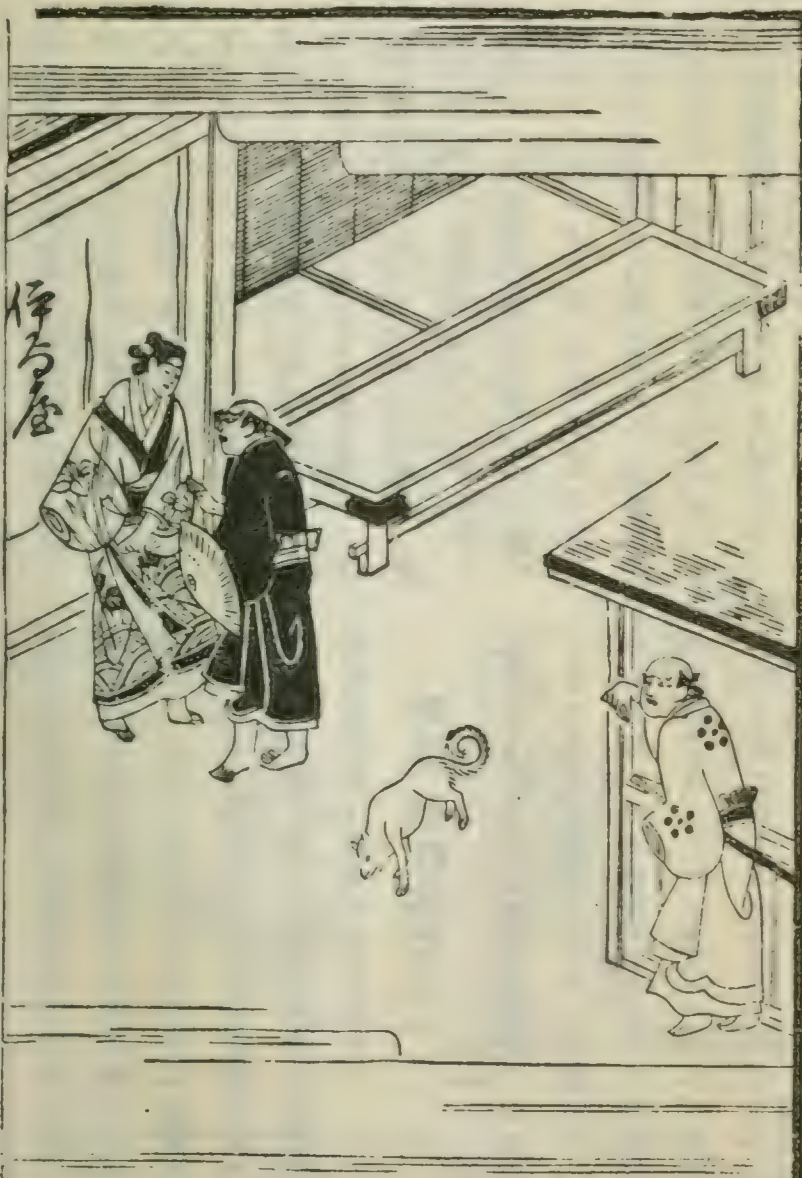
こちらへござんせ、らんせ、と、ひとつ〳〵いはねばはたらかぬ虚介、帯もとかんせ、やう〳〵と埒があけば、食焼とふたせ

の鑓代、はたのかけたる天目に、水のやうなる茶を汲て來るを、女郎さまそれへまゐりませぬかと時宜を申ておしいたゞき、がぶ〳〵とのみしまひ、此傾城さまの直段は何ほどぞとゝへば、五分といふにぞ、ふところより壹歩一つ取出し、是が五分あるかかけて見やれとわたせば、此鑓代壹歩といふもの見た事がなければ、さらに合點せず、是はわるがねさうにござります。いつも箱やの八さまの持てござるやうな、しろいまるまこい銀が能ござりますといへば、今宵はその黄なる金より外には何ももたず、それにて堪忍しられいといへば、中〳〵うけとらず。からりころりとつめひらき埒があかねば、是はならぬと虚介どのは、草履もはかずにはしりいだし、越後町を西へにげてゆくを、染物やの太兵衛が見付て、何事ぞやまづこなたへと折屋へつれてはいれば、をりふし座敷には、京屋の式部、いばらきやの大しう、木屋の出羽、つちやの高田など一座にありけるが、あなた樣はいかう人におはへられさんした顔つきぞや。子共よ水をあげませいといへば、おかまひなされますなくるしうござりませぬと、しばらく胸をさすりおろして居る所へ、最前の鑓代跡をしたうてたづね來り、爰元へ角髷の若衆樣は見えませぬかと尋れば、なるほど是にござるが、何の用ぞやとゝへば、さきほど私方の女郎さまに客にならんしたが、壹歩といふものを一つおかせ給ひし、そのつりの錢壹貫貳百八文持て參りました。是をとゞけて給はれとをり屋のあがり口に置てかへりぬ。いづれも死ぬるほどをかしがり、おくの女郎様たちに此事はなして笑はしませうと、只今の若衆さまに、いづかたの鑓代衆やら御めにかゝりたいとてまゐられましてとはなしいだせば、そのさきもきかずに、南無さんばう爰迄おつかけて來るかと肝をつぶし、次の間へ立て疊一帖まくり、ほこりおとしの穴より身をなげて死てんげり。虚介が最後のありさま目をおどろかすあとの世がたり

第三　牛の角文字

かけどもつきぬは風前の落葉、かたれどもつきぬは傾國のうはさ。過し六月廿五日に、さる女郎灯をそむけたる綺の蚊帳より、しろい尻をいだして屁をすつと放て引こみけるを、阿半といふもの襖のひまより見付て、その後かやう〳〵の事を見ましたとさゝやきければ、女郎大分きのどくがり、かならず

人にさたなしに頼みますとて、黒羽二重のひとへ羽織を送り、まだその上によい事をさしけるとぞ。又さる方の太夫、いよ屋がおもてにて、ふるい花色の布子きたるをのことしみ〴〵としたるものがたり久しくして立別れけるを、柏庄といふをのこ、むかひの隅に立かくれて見てげるが、内々間夫のをのこ有と聞けるを、よもやさやうの事はあらじと思ひしに、こよひこそたしかに見つけたれと、さし向うていひいだせば、みしやり白癩ゆめ〳〵ない事、もつともさきほど物いうたおぼえはあれども、あれは少わけある人にて、間夫の男といふやうなものではござんせぬといへども、一切のみこまず、それをもめつのりてつひに其女郎をのきけるが、後にきけば其夜の男は女郎の兄也。銀のむしんいひに來りしを、外聞よろしからぬ事なれば、さすがそれともあかしていはざりけるは、いかにしても殊勝なる心入あはれに思はれて、又其女郎に中なほりてあひけるとや。又さる家の女郎、牛の角もじすぐなおじを書事もならず、とゝけの文は人だのみしてすましけるとや。此たぐひの女郎は今もすくなからず。外の事とちがう



てふ自由なるべしと笑止にこそ思ひやらるれ。余所につとめて居給ふ折ふし客の方より文して申こす時は、さらさらとよむふりしてわきの一間へ立給ふを、禿が心得てひそかによむ事也。あるひは宿やの亭主がよみてまゐらするもあり。いつの比にかありけん、平徳といふをのこがあひし女郎無筆なりけるに、いさゝかの事をいひつのりて、それがいつはりならずは、起請をかけといふ事になりぬれば、なるほど明日こなたから書てやりませうといふを、いや／＼内證にてはさきの男と談合してかくもしれず。又はつとめの事なればもつたいなくも起請をかきは致しましたれど、是は反古でござりますと、筆にて消まねしてまじなふ事も有ときけば、とかく目のまへにてかくべしと硯あてがへば、さすがえかゝぬといふもはづかしく、又かく事は思ひもよらず、一期のきのどく此時にきはまりけるを、やう／＼と思案して起請かく迄もなし。うそのない證據には是見給へと、小指を切てなげつくれば、平徳しぬる程をかしがり、そもじの無筆のかなしさに、いたい指をきられし事のいとしさよ。是にておもひしり、今から手習めされよ。此方にもかやうの不器用なるゆびはいりませぬと、小便擔子へ捨て歸りけるとかや。此女郎もものかゝぬ事をつねにくやみ、何とぞ付る藥もやあるべきかと、醫者にたづねられければ、そのやうなるには、土筆をくすりぐひにし給へとぞ申けるとなん

第四　雪のあけぼの

紫竹堂鸞栖は、みづから紀貫之の後胤といへども僞りかも知らず。遠州濱松の產にて、少かりしより風雅に心をよせ、とりわき誹諧の嗜者なるが、廿五歳にて世をのがれ、滑稽執行の行李、髪はそらぬど身は風雲の僧よりかろく、夏は冬の貯せず、秋は春のあんじ置もせず、油箪ひとつを茵にして、山にものぼる里にもくだる。足くたびれねば夜もとまらず、目がさめねば昼もおきず、世をはゞからぬ曲者なれど、やさしき心ざしに友ありて、江戸におもむけば其角一晶立志などが許にくらし、都にのぼれば言水似船我黒が誹堂に足をやすめ、此ほどは難波に來て來山才麿由平が詞席にまねかれ、此のち猶西國におもむくねがひなれど、此津の人の角のなきつきあひに住よくて、今は米や町といふ所に居をしめ、誹諧の點して味噌鹽の堪忍をもとめくらし

ぬれども、心ほどにはゆかぬ世の中にて、二ヶ月分の家賃滞けるを、家守の八兵衛が節臘敷せがむに、是非なくて三寸四方の箱を一つ持参し、是はそれがし重代の物なれども先當分の質に御うけとりなされて、そなたの旦那どのに御めにかけられよ。御自分の御らうじでは埓の明ものにあらずといへば、八兵衛かたい男にて合點せず、さやうの子細なる道具はむつかし。只めのこ算用に銀子をわたされいといふを、ひらに此箱を御預りたまはれ。御損のまゐるものにてはなしと得心さすれば、八兵衛は其あしにて旦那の方にゆき、くだんの様子をかたりて箱をひらけば、鉋屑一枚と蛙の干物一つ有。是は用に立ものにあらずと鸞栖をよびよせ子細を尋れば、なるほど御不審は尤也。むかし古曾部の能因法師加久夜の節信と出合ひし時の、長柄の橋の鋸屑と井手の蛙の干物也。名譽の哥人のたしなみ道具、それがしが家に傳りしを、此以前幡本の御大名より金子五百兩に御付ありけれどはなし申さぬ重寶なれども、當分の家賃せがまる難義さに、寶は身のさしあはせと存かやうのわけと語れば、家主なゝめならず感じ、さりとは道に心がけある人のたしなみ殊勝にこそあれ。そなたをさやうの人ともしらで疎遠に過し殘念さ。今日よりは家賃も堪忍してまゐらすべし。明春こなたにおきふしてはなし給へと懇意のあいさつけつくいたみ入仕合也。家主は河内やの何がしとて内福人、酒は手のものにて山海の吸物國土の蒲鉾、大盃にてしひられ、跡は枕して遠慮なき好色物がたり、亭主も粹自慢、そなたの井手の蛙にまけぬ物あり。色里に心をはこぶものゝたしなみを見せ申さんと、料紙箱より一つ〳〵取いだしける。淺黄うらの頭布に戀ぞつもりてふちとなりけるの哥かきたるはいにし吉田が筆也。黄八丈の帛は江戸の金吾が小袖のきれ、延鏡は京の浮船が手なれし物、伏見の薄雲がかくし髢、長崎の出羽が紅皿、松かはびしに櫻の紋かきたるは井筒がさしぐし、松の丸かきたるは小大夫が十種香箱、又此竹の乢子は村雨がおやぢの細工也。梲久が印籠、かづらきが夜のけぬき、をのへが鉄漿つけ楊枝、小里が新艘の時用ひし伊勢粉、夕霧が十七年忌のもりものゝ饅頭、波江が腹帶、いづみが身あがりの伽の曾我物語、以上十五色一つ〳〵袋にいれて大事がるもをかし。此ものがたりに無分別をつのり、十二月の廿五日はおそろしいものにも

あらず。借錢さへせねば心やすしと、鸞栖御共にてすぐにさかひやに朝込の長持まはせば、すでに夜半の鐘なりて、寒さ例ならぬに雨戸あけてのぞけば、近年めづらしき雪七八寸つもりぬ。發句の趣向を天よりふらしたまふを、寐て居るも心なしや。殊に此さとのねざめいかにしてもにくからぬ夜なれば、曉まで只一人あるかねば堪忍ならず。誹諧袋の寒ざらしせんと、鸞栖は下駄はいて九軒の軒づたひにうそぶきつゝ、阿波座をかみへあがり新町を西へさがる所に、むかうより白妙のうごきて見ゆるは人也けり。笠には無影の月をかたふけ、柴には不香の花ををるは山人の雪にふらるゝけしきとや。光る源氏の常陸の宮にとまらせ給ひしあかつきの庭の雪もさこそや。花待やどの心ゆかしにつもるもをかしといふは、やさしき女聲のほそけれど四方のしづかなればよくきこゆるに、鸞栖も例のすきものちよこ〳〵とはしりより、かゝる雪の夜にまだふり袖のよねすがた、し



かもちひさい禿一人の御ともにて物こはがりもせであるかせ給ふは、朝ごみに御ゆかせの躰とも見えず。なげぶしの寒ごゑつかはせ給ふにやといへば、

さやうの事にあらず。めづらしきこよひの雪をよそにながめば心なしとや人のわらはんも口惜さに、ひよつとかうした事といふにぞ、大かたならぬやさしさ、くどかば物になるべき事とおもひ、われもさやうの心ざしにてかうしてものとして、さて其のちにかくて又、つら〳〵おもんみればそも〳〵あはれ也など言葉をならべてくどきよれば、さすがつれなくもあらで雪をれしたるありさま。是はしてやつたものとうれしくて、こなたへ同道せんといへば、人めがましき方はゆるし給へ。知る人にあうてはいひわけがないといふもことわりなれば、瓢箪小路のゆきあたりなる松が母の所にともなひ、戸たゝいて少反がかりたいといへば、此里にすむものには粋の妙ありて寐覺にもとぼけず、なるほどこなたへ御はいりといへば、ありあけの灯もとぼさねば、其くらさ天の磐戸のむかしもかくや有けん。あがり口で足をうたせられな、そちらの方には水壺がある、こなたの壁のきはにはたばこ盆がある、むかうは佛壇ぞやあたまの用心とをしゆるもをかし。火燵に火もありゆるりとおよれ、わたくしは娘が所へとまりにまゐると氣を通しぬ。ゆくりなきまくらにしばしむねのときめきやまず。かぶろは夜衣の裾にねさせ、たがひのつめたさは身　　　　　　するほどに、雪よりしらむ曉は東窓にしられて、隣の子が目さまして泣こゑすれば、祖母が南無阿みだと申も夜あけのけしきなれば、あけはなれぬうちに御いとまといふを、誠にこよひはふしぎの縁にてありがたき御情いつの世にかわすれ申さん。是をいもせのはじめにてゆくさきあだならぬやうにたのみます。扨御すみかはいづかたのよね様ぞやと尋れば、はづかしながらわたくしは誠の女郎にはあらず。かやうの夜はあらはれ出る雪女と申ものぞやとてかきけすやうにうせければ、かぶろも霰でござりますとてころりと消にけり

好色万金丹巻之四　終

好色万金丹巻之五

第一　見ぬめの關

馬の屁嗅の伊右衛門が自讃のはなしに、それがし生國は西の國松平何がし様の御家中にて成長し、日本六十余州をのこらず廻國して、をかしい事もつらい事もあまねく見およびたる事、おそらく今の代に我等がやうなるものはあらじとぞ思ふ。名所〳〵ものこらず尋ねし中にもやさしき名の所々は、まづ山を申さば不二はさら也、小夜中山妹背山、待兼山更科山、吉野の山衣かせ山、袖ふる山わすれず山、床の山末松山佛山などは人ならばだいて寐たい名ぞかし。川は色川細谷川、音無川なみだ川、冬巻川むかし川、あすか川隅田川、玉嶋川戀瀬川などもかはいらし。關は不破の關、清見が關、霞の關鶯の關、衣の關なこその關、白川の關すまの關、下紐の關見ぬめの關もにくからず。其外神社佛閣はいふにおよばず、めづらしき國〳〵の風俗、元日に石花菜くふ嶋も有、人がしぬれば薦にまいて川へながしちかき親類は鰹節かぶつて泣村もあり。子が生れば膝のしたにてねぢころす國もあり、ふるまひのあげくに我女房を客人にとらする里もあり。朝夕に芋をくふ山家、石を薪にする在所、蛇を餅にする國もあり。さまざまのならはし遠き國ほど存の外なる事のみ也。山城は吾すべらきの聖闕、今さら申もかたじけなしや。武藏は四海鎮護の君が金城、爰も詞にのべがたし。此外には津の國の難波の津ほどめでたき所はあらず。よろづ求に應じ心にかなはぬといふ事なく、佛の御國喜見城の全盛も爰にはまさらじ。名月に椿の花をながめ、重陽に水仙を賣、惣じて春のものは秋より食初、冬のものは夏にもとぼしからず。花を見んとては吉野の櫻をねこしてうゑ、鹿のこゑをきかんとては春日より取よせ、昼を夜にせんとては雨戸さいて大蠟燭とぼしてあそぶ事、何にても金次第にてならぬ事なし。江戸の哥舞妓は追出し芝居にてさわがしく、京の芝居は女形も若衆形も、直にむらさき帽子の額つきもすまぬもの也。只なにはの道頓堀にしく物はなし。扨色里の品さだめ、まづ江戸の葭原と申は女郎の風奴めきてなさけおとれり。ちよつと借といふ事も

ならず。それもなじみのあるをのこは湯殿のわきなる婆が寝所にしのびて、せはしき御げんに枕もとらず帯もほどかずに胸へ　は跡へはづして置、其間にも女郎ともにかさね切にやあふべきと、正身の客夫よりあやふきせんさくぞかし。昼夜二つに切て賣も氣づまり也。散茶の女郎に戀はないもの、釣髭のある鑓代がくつわの二階に床とるもむくつけし。京町にのみ口さく女郎ありて、其外炭町伏見町などにはよろしきものなし。あげやわづか八軒有、爰の難波にては、端の女郎も汐影月などやさしくいふに、葭原にては二寸三寸四寸五寸といふこそいやしけれ。されども高雄がはつねの屛風、よしのが添寐の杜鵑花など、よきものはいづくにてもよし。扨嶋原は境地さびしき在所ずまひ、菜大根の

小便くさきに打かこまれ、糞擔子のかし。鹿君の女郎は禿つかはぬも自由ざ、冬葱の追風に鼻をふさがねば堪忍也。大門のあくまでは出口の茶屋からならず。大夫に逢をとこ天神買をとこうすべり借て、門前にて酒のむ事何にきつぱりと水際が立て見ゆるもうるさ似たるものぞや。棚さがしに柚みそを



ちよつとねぶるもさもし。紋日すくなきは地躰のさびしきゆゑ也。葛籠の寐道具入はいやらしけれど、女郎の風はさすがみやことて心の色もはしたならず、ゆかしき所のあるぞかし。扨難波の色里は、まづ往來繁花のちまた、やかましからずしてにぎやか也。諸事せはしき事みぢんもなく、夜見世の風流は三國無双の事也。大夫三十人にあまり天神八十人、惣て女郎の數千五十八人とは過し元祿六年の宗旨あらための時にしりぬ。あげ屋廿四軒茶や四十五軒、まづ是にてはんじやうなる事を知べし。寐道具を長持に入るもよし。端の女郎も口きく身は小袖着たる禿をつかふ事、よその天神よりも見事也。東西の入口に商店のにぎやかさ、此外一つ〳〵いふに及ばず、粋はなるほど合點して居る事也。さればほむるも



そしるも我物にてはなし。みな普天卒土のうちの事なれば、恩にきる事も遠慮する事もなし。いつの比にか有けん、肥後の熊本の大臣、吉田屋が客にて見事なるさばきかくれなかりけるが、國元への土產に吉田やが庭の土を一荷所望しけるを、是はかはつた御のぞみ何にあそばす事と尋ければ、田舎

にて生れし子共の胞衣を此里の土にうづめば、其子が粋になるとぞ申ける

第二　好色七色

竹嶋林之丞は頬髭を撫てみて、貳歩にはたかいものぢやといひけるとや。いづれも野郎はかくぞ有べきに、姿見の鏡にむかうても、節分の大豆の數にもおどろかず、買手さへあれば四十二の厄までも客つとめる事、妾子共のおもはん所もはづかしからぬかは。大躰を申さば、はみ出しの合口さいて旦那寺の奉加のきもいりしても大事ない年して、印籠の芥子人形をほしがり、十數して耳をひくありさまを、戀のない目から見れば老莱子が酔狂するやうにぞ思はるゝ。中山小夜之介といふおやぢが子共にだかれて寐るもうき世や。それさへあるにくるわの女郎を廿六七になれば、いかうふるいものゝやうにいふは了簡ちがひと、丸吉が小哥の平兵衞とせりあふもをかし。鰒くうて命をうしなうたる侍の跡のたゝぬと、女郎にしすごしたる町人の家を棒にふるとは、おなじたはけなれど一口には沙汰しられぬ所有と京の八がいうたるも又をかし。女郎買たると雪のふりつもりたるとは當座はおもしろうて跡のわるいもの也と江戸の善がことのは尤也。平野町にて廿八間口の家の一子と生れ、十九の年兩親死去の砌、現銀五百九十貫目ありし事は書置に判形したる五人與も知て居る事。其上大津の祖父の所務わけ貳千兩もらひし事かくれもなく、中より上の身躰銀わしりしても三十人はゆるりとすごすべきを、一門もなき身の心やすさに世をはゞからぬ野風俗の友をあつめ、鶏飯のあばれぐひ勢のつよひまかせに、いにし扇屋の荻野にさわぎ夜を昼のたのしみ。あまりきようがる事とおも手代の久右衞門が異見も、われを大切に思へばこそと、向後女郎ぐるひをやめ申候。若そむき申においてはと誓紙書て久右衞門にわたせば、御心入がなほつたとよろこびぬ。それより男色におもむき、小櫻千之介に打こみ、三十日に一度月次の判形いたしに戻るばかりの外は、我宿は不通と心得、長町の下屋敷に居て、天王寺の鐘の入逢も芝居の太鼓のしのゝめも、いづれとわかたぬみだれあそび。さりとは申ても〱笑止千万なる御身もちと久右衞門泪をこぼして諫言すれば、女郎ぐるひ無用といはるるほどに野郎ぐるひ仕るに此方の無理はあるまい。いらざる世話やかずとも身共が留主には火の用心をいひつけら

れい。それが氣にあはずは主從のえんも是まで、ともかくそなたの分別次第。と塵も灰もつかぬやうにいへば、久右衛門も愛相つかして、なるほど御いとま申て在所へ引こみ、しぬるを待まではもとの百姓仕る心ざし也。此後は御邪魔になるものもなく、心まゝの御あそびこそめでたからん。あさましや追付路頭に御立なさるゝを見るやうにござると吳子胥がいにしへを思ひ出たる忠言はいかな〳〵耳にいらず、それよりすぐに隙を出し、疫病の神をはらうたと又酒にしてをかしがり、其夜さそふ友ありてみやこにのぼり、大坂屋かづらきにあひそめかけてかよへや岩橋のかたい起請までかゝせ、いけだや又右衛門かたに三月朔日より八月十五夜の月見るまで、一日も外へ出ず。それより又氣をかへてあづまの戀のびたつかぬ風俗ゆかしと江戸にくだり、千住口の茂庵が所に宿とりて、三浦屋のこむらさきにそまりて、かはらぬ色をちぎりて爰に年をとり、あくる二月になにはにかへれば、手代共其日に身躰勘定してわたし、皆御いとま給はるべしといふやいなや返事もきかずに出てゆくは何にたとへんかたなし。算用のこ



りの有物は、牧溪の虎の繪、無準の一行物、定家の古今、此三色は家に傳りし道具。其外茶碗茶入に銀目につもらば拾七八貫目が物有。いまだ居宅も質にいれず、戸棚に有銀廿三貫四百目、かれこれ取あつめて見ればまだふる川に水たえぬをぬれの元手に、又ふしみやの八重霧にかよひ、それをやめて車屋のさほ川にあふほどに、右のありものすつぺりと底をたゝけば、此難波にもあられず、伏見にしるべの方を頼てそこにかくまはれ、桃の木の下に膝入るばかりの庵をむすび、郭公に耳をあづけて有髪の僧にてくらしけるが、爰にも鐘木町にかよふ男にともなはれて樣子を見るに、ありし難波にて大夫に目の肥たる癖うせねば、中〳〵をかしさもあらず。かくまでなりはてたる身には恥もあらばこそと、又大坂にくだれば、むかしの友念比にいたはり、男一人つかはして一代やしなひころすべしといふものいくたりもあれど、それはこなたのこのまぬ所也。親のゆづり家財かけて千貫目の身躰をわづか三年にならぬ間にみなまきちらしたるは第一の達磨どの、許由が耳をあらひしためしぞかし。されども此津の色里の事いづくにありてもわすられねば、此くるわの片隅に、あるかなきかの店かりてそこに只一人すませてたまはるべし。それとても飯米家賃の御世話はかならず申うけぬ也。それほどの事はそれがし自分にかせぎ申といへば、それこそともかくもと九軒の溝のうへに二間口の所をかりて、鍋一つ茶碗三つ、此外にたくはゆるものもなし。扨おもてにはいとなみの品々を板にしるして出しけり

一　好色七色　代五文
一　かぶろ不睡丸　代壹分
一　たばこ盆の掃除仕候事但壹つニ付　貳文づゝ

世わたりは草の種とかや。扨好色七色とは何々ぞと尋れば、打楊枝一本、外郎三つ、かをりたばこ三ぶく、さみせんの紙駒一つ、下駄の小鼻緒二つ、むすび昆布一つ、けぬき一つ、以上七色也とぞ。わづか五文に賣ものにけぬきを入てはあたまから損のゆくあきなひ、さりとはわるい算用そろばんの桁がちがうたとわらへば、いや〳〵損のゆくものにはあらず。此けぬきと申は灰の事ぞや

第三　透間の風

身躰十人並の町人は、女子の生れし時、それが嫁入の造用の心あてに銀子三貫

目のけておけば、十五六才にて緣につける時のこしらへもの見事になるつもりぞかし。男子のうまれし時、それが成人の後惡所のつかひ銀とて百貫目のけておいたりとも、それはつもりの知れぬ事也。大夫より天神は心やすく、鹿君より端の女郎はやすいものなれど、弐匁にて石臼一つ買ば、曾孫の代まで澤山につかふ事をおもへば、色遊はみな費也。智は萬代の寶也と吳竹の窓のまへに書をくりひろげ、露を滴で朱をすり、夜學案灯の油煙に皃をふすぼらし、溫公が圓木の枕もとらず、孫敬が梁の繩に身を懲し、龍門の土に骨はうづむとも名はうづもれぬ後の世の鏡にもならばやと思ふほどの人は、三谷龜彈の歌吹海に二日醉のさめぬ事をうるさく思ひ、只夜の雨の軒の玉水に自然の調をたのしみ、花晨月夕のおもひを待哥にことわり、門を出ずして萬里にあゆむ心の駒の手綱はゆるすとも、揚屋のあたりへはいかな〳〵足をむけず、主一不適の覺悟に一期をはた



す身のおこなひは、申さんかたもなき事なれど、色このむ目からにらんだ時は、無色界の虛男とはこれなりけりと、友加がはなしも冬の夜の伽、ある事な

い事まだうけ給らんと席をすゝむれば、過し秋新作といふ大臣此世をはかなうならせられし時、あふぎやのやりてがよみける追善の哥

とりわきて袖こそぬらせ今よりは
露うつ人もあらじとおもへば

御公儀と神無月の時雨とのみいつはりのなき物にして、其外はみなうその世界、或寺の靈寶に善光寺の如來より聖德太子へつかはされし御狀、すなはち阿彌陀の自筆といふものを拜見つかまつりければ、近衛樣の腰越狀なり。閻魔王の判也とて拜するものをみれば、饅頭屋の能登が菓子袋の朱印也。かやうの佛の事にさへまことはなき世なるに、さるかたの引船の女郎は每年嬰子を誕生なさるゝ事いかにしても合点のゆかぬ事也。女郎には鉄醤つけたるいはひ脇つめたるいはひといふ事こそあれ、帶のいはひとは、

數子に女郎ばかりはあやかるな

晏平仲が久しくして敬すといふはさる事なれ共、色のまじはりは、なじむにつけて打とけるこそかたじけなけれ。遠くて近きもの男女の中と清少納言がかけるは尤也。客のまへにては箸とらぬものと、鯉の刺肉も鶴の汁もはるかに目もやらぬ女郎なれども、なじみをかさねては、たまごのふは／＼を口から口へくゝめるほどになるはどうもいはれぬむまいせんさくなり

さしむかひ西瓜くうたる馴染かな

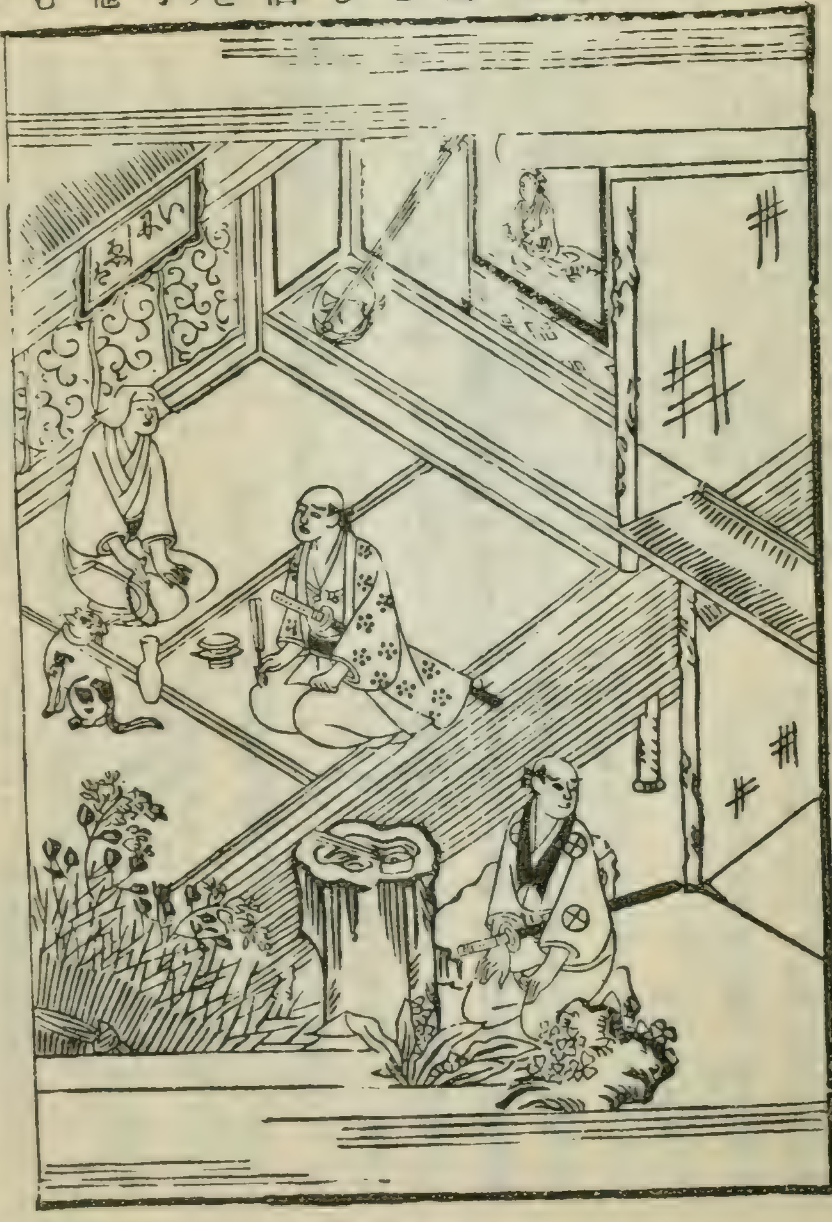
女郎は大やうにして何事も立いりて知らぬこそよけれといへば、さる女郎かるたを見給ひて、扨もちいさい繪馬ぢやとのたまひしはあまりあどないやうに見せかけたるも顏悄し。小判は鬢水入の底やら、壹歩は瓔珞のちぎれたるのやらしらぬかほして居らるゝ女郎も、節季には秤目をせゝり、錢のしかけしてはらひ給ふを人がしるまいかと思はるゝは素人也。萬の物の相場もなるほどよく御ぞんじの筈なり

定宿へ鰤の氣をはる女郎かな

はなしの耳にいらぬ禿はつぎの間に火わたしするもあり。打こけて寐たるも夜のふけゆくけしきなるに、いづくの墓所に人の骸やく嗅ぞ、透間の風にさそはれ來れば、友加もはなしをやめて俄に無常を觀ずるかほつき。げにや如夢幻の世にけふは人の身のうへ、あすは我身の死出の旅立かもしらず。是をおもへば酒がのまれぬといふを、そばなる女郎きこしめして、友加樣あまりあはれがらんすな。只今のは火葬の嗅にはあらず。わたくしの袂から紙屑が火燵へおちてこげるにほひぞや

第四　しのびごま

神送りの風吹あれて住吉の松原すさましく、見わたす海づらには白き浪より外に漁船もなく、うそのなき神無月のけしき、明神様は御留主なれども、かゝる時に參詣するこそ浮氣もまじらずありがたやと、二位どのより相傳の拍手打て再拜をはり、神宮寺の門前なる出茶屋に腰かけて、久七に酒はないかと尋れば、最早今宮にてみなになりましたといふほどに、山上金大夫かたへ酒肴取につかはせば、こなたへ御こしといへども、爰も一景也とてつかひの丁稚が色のしろいを花にして、おやは他國へ身はしまばらの鼻哥によゝとのむほどに、寒さもまぎらかさるゝ物かなと酒のせいにて駕籠にものらず、安倍野をさしてあゆめば、穴師の風に時雨をさそへば、そこなる屏のかげに立よれども、よこしぶきに臂笠もせんなくて難義なる折ふし、しをり戸のうちよりこなたへ御入ありて御しのぎあれといふをうれしくてはいり、すぐに前栽より座敷に通り、雨戸あけかけたる桁縁に腰かけてそこら見まはすに、いかさまよしある人の下屋敷なるべくおぼ



えて、萩柴の垣さゝやかに山吹のかへり花三つ四つふたつひらきたるに寒菊はまだつぼみ也。石にはうたる酸漿かれて莪葱ばかりたくましく、其外には高き木もうゑず、おのれなりなるやうにすみなしたり。書院の上にいにしへはといふ五文字を女筆にてかきたる額あり。かゝるものずきなるあるじの心ゆかしくて障子をそつとあけてのぞけば、間中の床に遊女のすがた繪のかけもの、其わきに圓窓あり。此内持佛堂なるにや、灯のかげかすかに名の木の匂ひほのかにして、物の音なきけはひ、何所ともなしに殊勝なり。猶その奥の見まほしくてさしのぞけば、無地の戸襖のわきにかけたる暖簾の下より、三斑の小猫の珠數をそばへてかけ出たるを、なれがあがくもせわちやと捕へに出る尼を見れば、妻崎といひし太皷女郎也。弓矢八まんおもひがけなきありさま心得がたしと尋れば、されば〳〵お久しや。まづそなたさまにはかはらぬ御ありさまにて御一段ぞや。さてわたくしが躰をごらうじませい。これにはいかう話の有事也。御ぞんじのごとく大夫さまは北の御客の方へ御ゆかせの後、ほどなく世を早うおなりなされければ、そのかた御なげきのあまりに、せめては大夫様のゆかりにとわたくしをうけ出し、此下屋敷におかせられしを、わたくしも子共の時よりつきそひまゐらせし大夫さまの事わすれがたくて、過し八月に髪をおろし此姿となりまゐらせ、あけくれの仕事には花つむと經よむより外の事もあらず。一人つかふ女童は茶湯わかすと薬たく役ばかり。さりとはすてはてし此身とはおぼしめさずやとものがたり時うつれば、法論味噌にかける酒鹽の添景ありと徳利取出し、甲州梅のさかなにてひとつまゐれとすゝめ、われもむかしをおもひ出の一ふし懺悔のためとや申さんと、佛壇の下より三線とりいだし、これは大夫さまの手なれ給ひしのなるが、主はむなしくなりぬれど心なきものとてかはらずあるも結句わびしきと、泪を袖にしのびごまかけて、ありし昔の朝込のけしきを、竹本風にかたりしが、をかしき文句なればはな紙に書て歸りしとて、其をとこのかたりしを爰にしるす

竹本義太夫

ハルフシ霜にさえたる。曉の。鐘をふすまの下にきく。スヱテいぎたなき夜とさればみて。三重何しめわらふ。しめてねし。そのねぬくもり。おきわかれ。ねまきの袖のつめたしとつい引。冷泉カヽリむす

ぶ。前帯や。すそのたゝくれしどけなくぬれたふうにて雨戸をば。あけて見出す朝。ぼらけ。人から戀から所から。艶にやさしくなつかしく。月は有明の光りをさまり。影は猶。ものゝくまにぞさやかなる。北のつりどのこずまけば。蓮はかれていつしかに。直に。露おく池のおも。魚のあがきに巴かく波には。うすき氷いてさむき夜たゞにつらしともいはで。ゐるかよをし鳥の。しかもやもめのをしどりの。おほひぞすらん。思ひ羽をかはしねるならつらゝまくらよ礒枕。岩がねまくら我は又。君とねる夜はまくらはいらぬ。お手打ちがひのお手枕。此。手まくらに。かひなくたゝん名もよしや。ゆひ髪はみだけ。次第よ青柳も。今は冬木のつくも髪。春になつたらゆひもせう。風のふきびん櫛どりて。油つけばや梅のかをりはまだしらぬやつこそだちの松がえは。時雨にさへもつれなくてすんと立たる木のもとに。さむき花なる寒菊は。蝶にとはれぬ恨ありイヤうらむなよ。うらみはやぼのいふ事ぞそちはすゐぞや水仙花。茶山花げにもさざやかに。いたいけざかり里の子は母にもつれて蕪ひく。とゝは麥まく。紙子頭巾にあられがたまる。網代もる身もつらいとや。闘守身にも。ねさめする千どりの聲やあぢむらのさわぎてわたる。橋ばしら橋のあなたに。蛎わるをとこ莖菜あらひのあかまへだれに、いろはほのじとほのめかす。いやらしけれど戀の品。あづさ弓ひくますらをも耳をひかれてあいたしと。君がおよびにたよ〱と。よわきすがたやうなの神そとほり姫のなさけのみち心の玉のたまつ嶋氣の通るなゐるきのぢかもげにあさもよひ朝ごみのそのけしきこそをかしけれ

好色萬金丹巻之五終

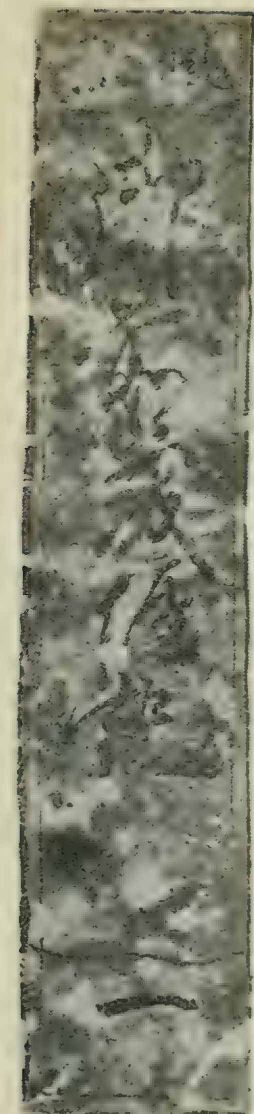
元禄七甲戌年七月吉日

江戸日本橋南壹丁目　萬屋清兵衛

京寺町二条下ル町　上村平左衛門

大坂備後町五丁目　伊丹屋治兵衛

同住　久保田吉兵衛




御前義經記

御前義経記

一之巻

鞍馬山へ義経かんだうの事

目録

序　太君乃酒盛

凡例　傾城の因縁

四海浪の静かなる御代は白河の
太郎冠者小前その字
子細らしき顔次郎冠者が居り
出まさることも候へども
如郎のわか盛め
目出にあまでと登頭の
ゆだゆつをあらし

是より風流義經記目録

面影うつる大光坊

一 元九郎今義經立

捨子ハむかしに聖人が情
鞍馬山へ入る尼寺の花盛
僧正が谷ハ衆道乃中宿

面影うつる御乳人

二 御乳人幽霊

夢はさうず爰に公事
現か母と母の若方
主膳は重服見に横恋

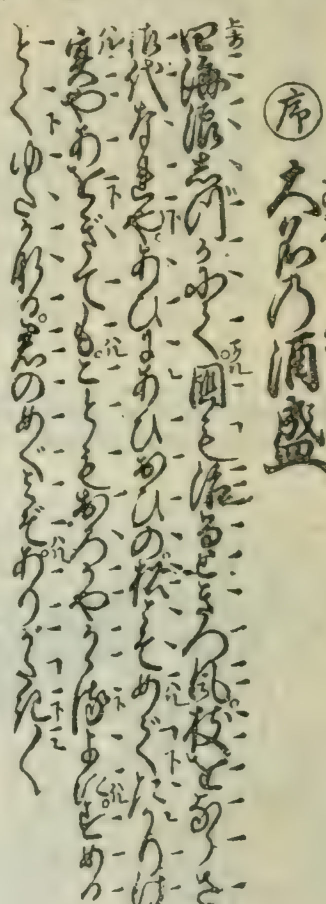
面影うつる鬼一が娘

三 瀧詣のあひびき

緑にいと滝も鞍馬る山の
三座乃捨ハ源ざえの元祖
恋の滝しより修行が初

序大名の酒盛

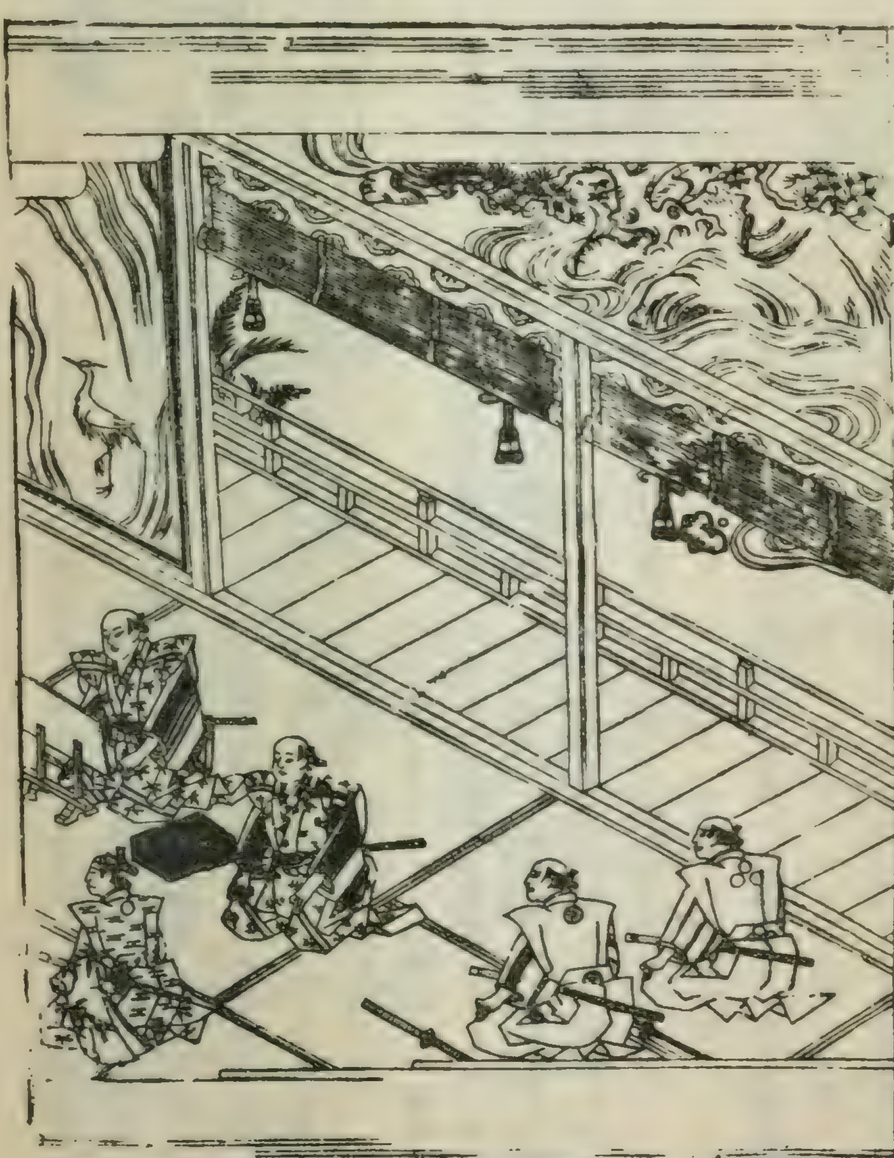
上哥 四海浪しづかにて國も治るときつ風枝をならさぬ御代なれやあひにあひおひの松こそめでたかりけれ實やあをぎてもこともおろかやかゝる世にすめる民とてゆたかなる君のめぐみぞありがたき〳〵



大名ヲヽめでたい〳〵。太郎冠者次郎冠者あるか 雨人はあ御前に 大名 ねんなうはやかつた。扨兩人の者めすことよの義にあらず。此程は打つゞきたる雨中の空、ことなうとぜんに暮。さるによつて此二三日は、手廻の者共と酒宴してあそびぬ。明ても暮ても酒盛にほとんど飫風の身にしみ〳〵と、をかしさも早よそに吹心地こそすれ。今かれらが物語をきけば、そち兩人の者は何やらん、をかしいかな草紙を作りたるよし風聞す。くるしからぬものならば身にそとよんできかすまいか。 太郎冠者 是はぞんじよらざるお言葉に預ります。私風情が書つらねたる筆のあと、殊に御存あそばされたる文盲第一、田夫野人の生付、いろは假名より外を見ぬ者。誰ぞ御わらひ草に申あげられたると存ます 大名 いやそれはしれた事。その文盲なる智惠より、かな草紙壱冊にても作らんとおもふ心指のしをらしや。たとへ何にもせよ身が目通にて讀べし。一ッは一座の興といひ、暫のなぐさみ。さあ早う〳〵 太郎冠者 近比是はめいわくなる御所望、然共一命をかけたてまつる主君の御意、仰出さるゝは綸言にひとし。じたい申は不忠に似たり。はゞかりながら我〳〵ひとり寢の友ほうこ、わけなき戀の道しるべ、殿樣の腹をよらしますが御奉公、御ゆるさるゝうへはざつと讀たてまつらんと、子細らしく塗見臺に一部の書を立、長ばかまの折めたゞしく、御前まぢかくよつてよまんとするを 大名 まて〳〵太郎冠者、扨此本の外題は何といふぞ 太郎冠者 さん候一部八冊の一名を風流義經記と申ます。然ども只今お目通にて讀たてまつれば、今日より御前義經記と仕りませう。されば源九郎義經公には文武兩道にして五常をまもり、情を本とし慈悲をもつはらにし、賢をあいし給ふ名將なれども、梶原が讒言によ

つて高舘にて御腹めされ、つひにむもれ木の花咲事もなかりしは、是色にふかうわたらせ給ふゆゑなり。それ色欲は人界のまよひ、殊更世にあるつとめの有様、今とり〴〵の咄の中に、近比何がしとなん色にうつりて家をみだし、遠近人の物語を聞まして、我〳〵二人ねられぬまゝのものたくみ、つく〴〵おもへば此噂、うしわか鞍馬入より高舘まで、御苦勞なされたるにすこしもたがはず。きのふはけふの昔といへど、想夫戀の秘曲はかはらず。右一部の立物今義が浮身幷ニけいせいの全盛、七九八難つがねてみるは、私のつれ〴〵草、わらひ草とおぼし召ませう。もつ共好色本世〻にひろく、難波津にては西鶴一代男より書染、去年清月の比、新色五巻書迄の色草紙指をるにいとまなし。今此義經記には共もれたるをひろひ、或は男色のおもはく、又は風呂屋のつとめ茶屋女の事、しかみ顔重寳記などもふるし。其替りたる耳學文して、愚なる知惠をふるうて書あつめたるもしほ草、先只今の讀はじめが傾城の大意。左様にお心えなされませう

浮太郎冠者与志 編

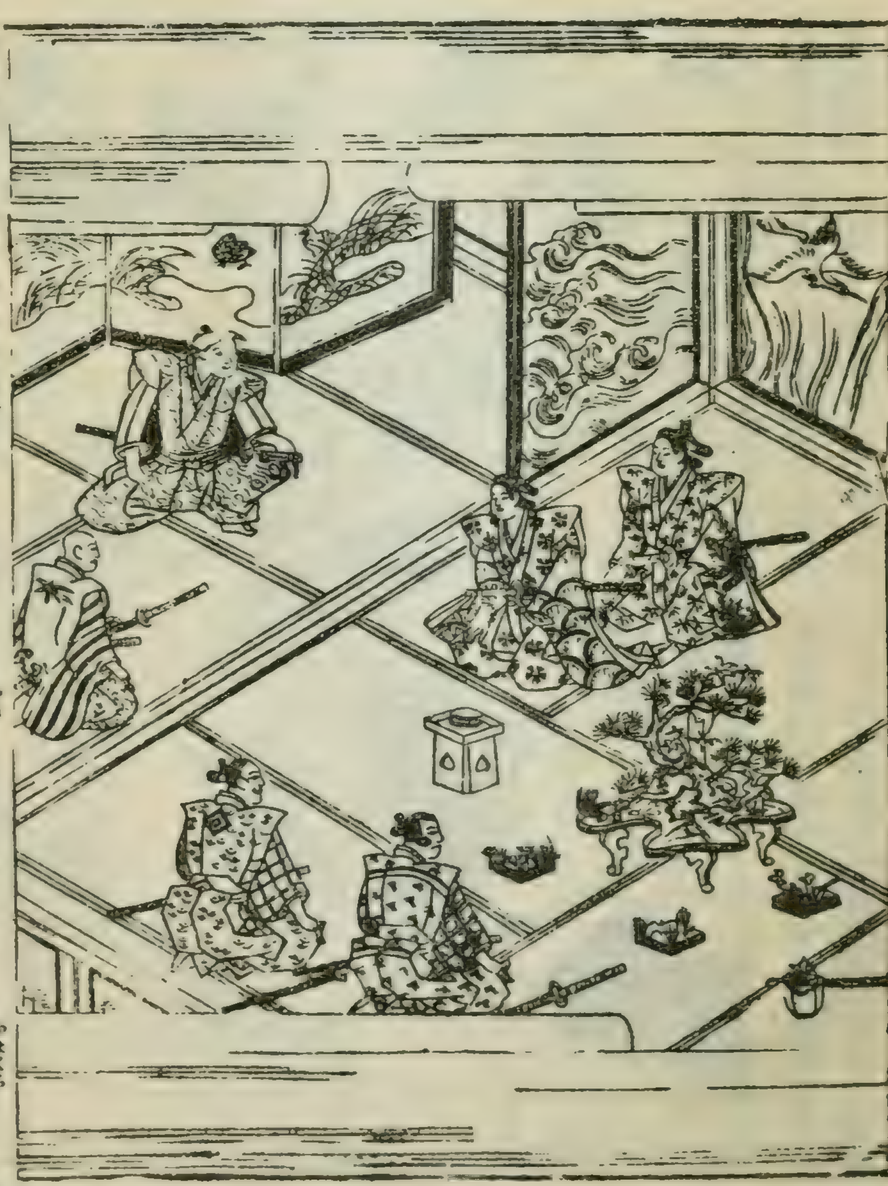


(九) 傾城乃因縁

そも／＼傾城といふ事唐土にて、うつくしき女をほめたる詞なり。子細らしく申て見る時は、前漢書とやらに李夫人といふぼつとり物の品物のほめ詞に

北方有二佳人一
絶世而獨立
一顧傾二人城一
再顧傾二人國一

和國にいたつて是を遊女の惣名とせり○君○浮女または○戯女○手弱女○流女といへば、唐土にても色をうり買してあそぶ事もつはら也。我朝にては幡州の室、攝津の江口、三嶋江などにありしより、流の女流をたつるといへり。近代人の心されしゆゑ、つとめなどゝてみじかくの給へり。すでに平相國清盛の時代に、妓王妓女佛御前といふも同し事なり。また／＼曾我の十郎介といへる水法、大礒の虎といふにあうて、戀路の只中、建久四年五月廿四五日比まで銀といふ事つかはず、鎌倉の小大名、千葉、上總、土居、佐々木、江間、梶原、宇津の宮、和田義盛、なんどにかはしては、あげ屋入の上まへをはね、明



がたのわかれ、門の片角はし女郎のあき局にて、あがりぜんをくひそめてより、密夫といふ事をはじめぬ。三嶋江に白目白子というて、ほまれある名とりあり。廿一代集のうちには、妙寵としるせり。承久の比は、亀菊が全盛といふ事をはじめる。補任の中には五條の夜しやともしるせり。當世は野風夕霧、武藏荻野、淺妻など丶名付て、かりにも位高き名を付たり。大夫といふ事いにしへはしらず。今平安城にして六条に遊女町三筋有て、一の女良の直段を五十三匁と定、是を五三といひ、其比のつとめには能などをよくしけるによつて大夫といひそむるぞかし。世にお國かぶきといふも同じ事なり。大夫を松といふ事、ふるけれど秦の始皇帝みかりに出給ひしとき、俄に大雨ふりけるにぞ、木ずゑのしげりたる松の下にて雨をしのがせ給ひぬ。それより松に大夫の官をなし給ふ。其格をとつて大夫を松といひ、又は上職とも、唐韻にては上声といへり。俗語には、左馬共上宮本位高躰など丶いへり。惣じて大夫職の位をうくる心ざまは、先手書哥をよみ、琴さみせんよく、情を第一にしてしとやかなる風俗、立居にも伽羅



の香はなさず、あげや入の道中に、神鳴ひゞきわたりても、せかずさわがず、內八もんじ外八もんじ、ふみはづしもせず、かひとり小づまがぬれても、いかな〳〵そこらへは目もやらず、常しも膝にたばこの火、酒などかゝる事あまたあれども、そらさぬ顏し給ふは、自然とそなはりたる妙なり

○天神は太夫より少おとれり。釈名に三尺といふ。和名に梅といふ。唐韻に天職、俗語に中位とも、宗ともむら共、格子ともいふ。古語に二尺五寸といへり。是天神の緣日をかたどれり。いつの比より直あがりして三尺になりたまひぬ

○鹿戀 天神より又一段さがりて壱尺八寸とも、鹿職とも、追帳とも、八寸とも、女の子共、鹿とも、大夫に付を引舟とも、つきもの共、太鞁女郎なんどゝいふは、此たぐひぞかし

○端女郎は鹿戀より下、みせ女郎といふなり。替名をけちとも、火打共、山家とも、つぼね女郎共、端とも小松共いふ。位は一を壱寸とも、月ともいふ。二は二寸共かげ共いふ。三を三寸とも塩共いひ、又五を五歩ともわけ共北むき共そろりともいへり

月は一ッかげは二ッにみつしほの

歌に

わけは五ッになるひかりかな

およそ傾城の因緣是なり。あゝ悲しきかなやいつの比より、遊女も銀のよくにまようて、心ざまのいやしくなりぬ。昔を今になしたきといふ言の葉のうらやまし。今のつとめをみるに、只えりつき銀ある人に思ひつく世の有様とはなれり予が才覺をもつて、今月今日より、傾城といふ字をあらため、傾錢と書べし。傾錢は、錢にかたむくといふ心ぞかし。古來は男のかたより女郎にかたむきしが、當代女郎のこゝろ、男の色にもまよはずめんよな事の、錢あるとみれば、淀の川瀬の水ぐるま。あやまりならばゆるし給はれ〳〵

御前義經記　讀物　太郎冠者作

(一) 元九郎今義稚立

加様にいふ者は鞍馬山のふもと、青目坂と申所に、近きころよりすまひ仕、小人にていふ。まことに私の身程世に淺ましきものはなし。父には幼少にておくれ、母が袖に介抱せられ、五才の比此山中

に捨られ、十方なき涙袂は海つまは雨にのみ、ないてくらするほとゝぎす、なくねに通ひ路の山人、あはれをもよほし、露ときえ行命なりしを、里人にひろはれ、爰かしこにて月替りにそだてあげられ、今十四歳の年月をくらしてかく成人仕りぬ。さればこそ情有人〳〵を、父とも母共おもひ侘つる身のわざ、せめて御恩をはうぜんため、去年の暮より此川上にわづかなる柴の庵をしつらひ、山夜に月の光は、つきあけ窓のすかしより詠め、鞍馬山の水流おちてけはしく、岩にあたりてかしましきに夢おどろかせ、川ばたの飛石かいやり水に手水をつかひ、ぬれ手其儘東にむかひ、さき立給ふ父は是非なし、せめて未來は佛果にいたらしめ給へ。母なん稚心に面影をのみ覺え侍ふ。我一生のうち二度對面せさせ給へと、朝暮肝膽をくだき、竹馬より里の手わざをならひ、夕ァに星をいたゞき、朝に霧をはらひ山野に入、柴木を折て里にさがり、是を商賣して我いとなみの外、祿あまれるを養育せられし方へ高下なく心指をはこび、欲をはなれてまとをつくしぬ。正直は一旦の依怙にあらずといへども、つひに日月のあはれみあるまじき事にあらず。元來いみじき生付心さかしく頓智にして四季に心をくばり、先春は此山に咲小櫻折て花籠になひ、夏はすゞしきあやめ眞菰の澤邊に盛を夜がりして、又秋は色てるもみぢを打折、松たけなどもかりの浮世、冬は梅の早咲を賞瓶に是一ッをたのしみ草。花のおも荷をになうたりおうたり、毎日鞍馬山に入そむるは、やさしき心にてぞありける。すでに多聞天の御惠にかなひ、宿坊のこらず花の旦那としにせ、此山を我すみかとして、やる瀬なき世渡りなれども、下地器量よく髮黒〳〵と、いつの比より若衆ぶりをみがくは何ゆゑなりといふに、福藏院の御物あがり、今若僧のほまれをとる、觀了といへる情しり、花の若衆に心をなづませ、思ひのみかきくどき、いつとなくなびきあふ夜の岩枕、僧正が谷杉の木の本にて、苔のむすまでと神かけてのちかひ。彌戀の瀬ぶみをわたり、梅花香の光鏡にかゞやき、前髮のなだれ雨の耳にふりわけ、髻ゆたかにたてかけ髮の大銀杏江戸元結のしめくゝり、下男の久七なんどに包錢の隙なく、露打こゝちしりがるにまはりて、小性なみに手入させ、立居見よげにはづかしからぬ風俗。谷清水にてみがきこむ髮かたち猶うつくしく、寺中のお小性にも見まがへるほど

のしこなし。一山の衆徒おもひをなづませぬはなかりき。人は氏よりそだちとやら、こしかたをとふ人のおほかりき。殊に心ざまのやさしきに我人かんじ、ふびんのかさねて里へくださず。碁將棊双六能謠は殊更笛尺八の調よく、子小性打より友千鳥の友あそびは色くらべ、名は九郎と名付て、暇あれば觀了が机によりそひ、いろはかなぶみ一日にかきやり、巻筆とつてあたまからの大文じ。花鳥風月の筆勢見事に、我身をせめて書よごす反古、昼夜是に心をくだきぬ。折節觀了うしろより、そちは花鳥風月をならふとみえたり。うたてや花のさかりに鳥羽たゝけばあたら盛をちらし、また〳〵さえ行月夜に風雲のかゝりては、かならず月も見えさせ給はぬぞかし。それをやめて龍虎梅竹を書べし。龍は勢つよく、虎は筆の命毛をはしらせ、松はゆたかに竹すなほなるやうにと心をとめ、手をしめてをしゆるは戀の手習、また〳〵明晩をしへん。扨こよひは師の坊御祈禱役にて、よひより毘沙門堂にこもりまします。首尾は今宵にかぎるなり。爰にては人目の關、もれて睦言のよその耳に聞もやせん。ひそかに僧正が谷



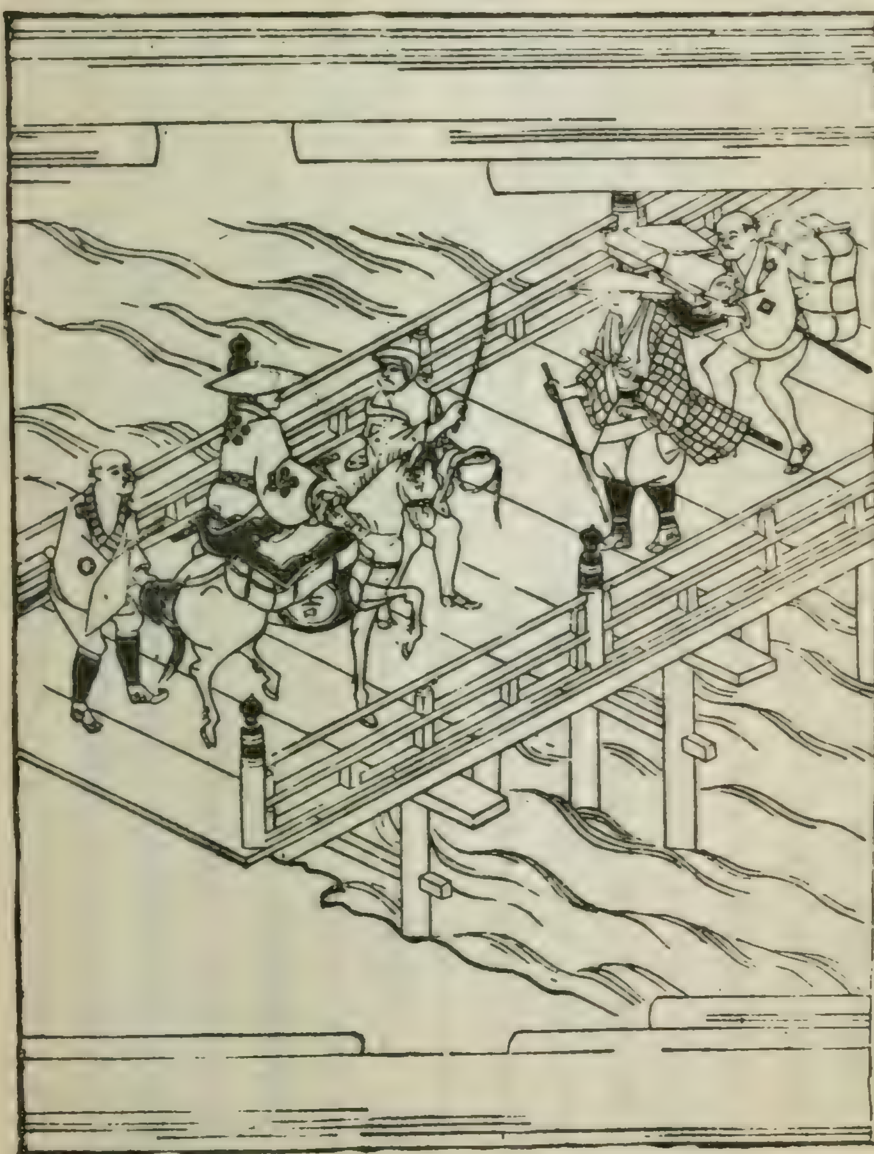
に立越日比の思ひをかたらんどうなり共と夕暮ふたりつれだち、星の光をたよりに谷ふみわけて行山あひ、杉たつる一本、きふね川の水さかまく。どう〳〵と流おちてなるは瀧のごく、木末しげりて風にもみやひ、さう〳〵しく又しん〳〵たるをたのしみ、岩根を枕石をたゝみてしきねとし、幾年ふる松は姿をかくす屏風、輪袈裟衣を杉の小枝に打かけ、懐酒のぬくもり燗さめては物なしと、小盃に引うけさす所を頭からおさへます。それはどうよく然ばあいといふ月夜がらす。あれあの鳴音と我思ひとが同し事、是をさかなに一ッうけてずつとほす。是はのまずにはゐられぬと、ふたッつゞけてのんでをさめて、それより心の下紐打とけ、互の寢物語に、その昔源の義朝の八男牛若君、東覺坊にしのびまし、此山の僧正房と深き戀路のさゞめ事、男色のむすびふかく、兵法の秘書のこらずならひ、かね賣吉次信高にさそはれ、奥州にくだり給ひしためしあり。今思ひくらぶれば二人が中は其人に似たではないかお若衆と、じつと手をとるかり枕、契はくちぬととりかはす、我手枕のいつとなく、ねむりがちにて夢をむすびぬ

㈢ 御乳人のゆうれい

時は八ッのすぎゐひざめに肱枕はづれて、觀了が高いびき、元九郎がきの字なりのねすがた、そばに有ける盃のわれてもしらぬ夢の浮橋。あやしや化したる老女のすがた、九郎が枕もとに立より、まとによゝの物語に乳房をわけしみどり子は、我骨肉をわけしよりいとほしき者とこそしれ。そだてまゐらせしより年月の程ふり、五年の春を重て、あいらしざかりにうたてや身は此世をかぎりとして、無常の風にさそはれ、いまだ妄執の雲にへだてられ、仏果にいたりがたきは、只御身のうへにてまよひぬ。暫冥土のいとまをえ、くらきよりくらきにまよふ鞍馬山。此川岸の浪をけたてゝやう〳〵として來りぬ。たとへまねかせたまはず共、我魂のこがれよる身を、はかなやしらせ給はぬか。せめて現に成とも此姥が物語をよく耳にふれ給へ。いとほしや御身こそ、九重の八重櫻盛ひさしき橘屋三津氏權之助義方とて、公家ならず武家ならず、浮世の樂を御身一代にかぎりて、奥様なしのひとりずみ。內方にはおさなと申てひろき都にまたなきやさ女、夜のしとねにふさせて、月にも花にも是をたのしみあかし、入日

西にかたむく比ふと嶋原に御通ひましまし、一もんじやの松の位ときはといへる遊君にたはふれさせ給ひ、一年すぎて二年の春、ときはの松の根引草、ひくてあまたを我物にして、おさなが事をわすれ草。ねたみそねみを思召て親里にかへし、其後朝暮酒宴に長じ、夜昼となき妹脊のうへにて、ふしぎや流の身なれど懐胎ましまし、三とせのうちに御子二人まうけ給ひぬ。御惣領は御身、今壱人は女子にて渡り給ひぬ。然るに御身三歳の秌、名村八郎次様と申御かたと丹劦の金山にかゝり給ひ、御たくはへのこらず秋の木の葉のちりほこりもなく、あまつさへ八郎次様と金銀の出入互の欲をあらそひ、水魚のごくなりし中を引わかつて、所の奉行所へうつたへ、すでに公事におよび、數度の對決半年もかゝり給ひぬ。運やあしかりけん、七分にかゝる勝公事を、言葉一ッをとがめられ、丸にまけさせ給ひ、あまつさへ籠舎に仰付らるゝ。ときは様此事をなげかせ給ひ、女心のやるせなく、御赦免の訴訟たび／＼也。御前へ取次には藏橋源之丞よろしく仰あげられけるにや、五月をまたず御ゆるされしに、一家悦の色をまして、千秌万歳をうたひぬ。父うへ明暮思召は、まけまじき公事をまくるのみ。思ひもよらぬ籠舎のすまひ口惜いきどほり猶ふかく、日夜御目もあはず此事そん病づいて、万死の床にふし給ふ。洛中にて指をるほどの御典薬門に乗物たえず、様〻の看病するといへども其かひなく、終に此世のかぎり四十一歳の露ときえさせ給ひぬ。何も暗夜にともし火きえたるごとく、途方なく／＼御死骸を七條朱雀の野邊におくりて、無常の煙となし奉りぬ。それより七七日の御とふらひ念仏の聲たえず、百か日もみてざるに、名村八郎次御出あり。いぜん廓のよしみをわすれず、うたてや母上にむたいなる戀慕。おのれが有徳を鼻にあて、おし付わざに戀の山、やもめ暮の床もさびしく、是非我妻にとくどきけるに、いなともいはず又きもなく、言葉に誠をいはせて八郎次をかへし、いよ／＼御なげきふかう、よしつまにはおくれたり共、二張の弓はなど引心にあらず。二人の子なかりしかば、姿を墨にかへまほしき御望なれども、子は三界の首かせにて、面白からぬ月を壱人寝に詠、いかな事御文をも手にふれ給はず、しよせん此所を立のきひそかなる方へしのび、つまの菩提をねがはんと、下女下男にいとまを出し、主従四人伏見の里墨染のほとりにしのびお

はしませ共、渡世をおくらん業もなく、日々に貧しくなり給ひぬ。せんかたなくわらは御身様を介抱し、一先古里火打坂へ立のき、折からのたよりに様子を聞ば、御母うへには末の御子をつれ給ひ、いづく共なく見えさせ給はぬよし。其時御身五歳の夏、我行年の熱病におかされ、七日ふして世をさりぬ。まとにみなし子のたよりなかりしを、里人ひろひてかく成人し給ふなれ共、過し昔を語るものもあるまじ。元來歴々の御筋目、殊に東國三河の國には越後屋の善三郎とて手前者、大旦那の御影大分からむりし者なり。何とぞ三州にくだり給ひ御頼ましまさば、追つけ御代に出給はん、母うへこそ其身いやしきをはぢ、わざと御遠慮ありての事よ。腹はかりの浮世、まかせ給ふ若葉枝の種は旦那さまなり。定めてぞんぜぬ事あらん。然ば是を證據に見せ給へと。家の卷物并ニくれ竹といふ横笛、枕元にそつとおき、あら嬉しや妄執の雲もはれたり、名殘をしの若殿やといふ聲ばかりは有明の、月すみわたる貴船川に流て姿は見えざりぬ。九郎夢おどろかせあたりを見れば、玉軸の卷物錦の袋に横笛有。扨は現にみえしは姥



玉の我故三津にまよひ魂魄爰に來りて、昔をしらせけるか。神ならぬ身とて淺ましき、うき事を聞ものかな、末母には御無事のよし、何とぞありかを尋ね、追付御目にかゝるべし。時うつしては親への不孝、是よりすぐに三州にくだり、善三郎を賴其後母を尋んさりながら、觀了殿とは男色の契に、うらなき事をあかさんと、書奉る誓紙の罸。様子をかたらばよも一人ゆけとはいはれまじ。孝に情はかへられじと胸をきはめて、先觀了をおこし、夜も明方鳥の時をつくりて、東の方はしら／＼し。御歸りもやとおこされて、大あくびいざといはれて涙もる、目を觀了み付、何をか思ひ出してなげかるゝぞ。さればば夜は暫も目のあはず、つや／＼宿直して今少ねむたがりしに、涙つらぬくにて侍ると色さとられぬ返答、かたじけないと手をとつていたゞく。それは仰がくだなりと、かた目に涙かためにはおもはぬ戀の目遣して、六ッ打鐘ともろ共に、福藏院にかへり給ひぬ

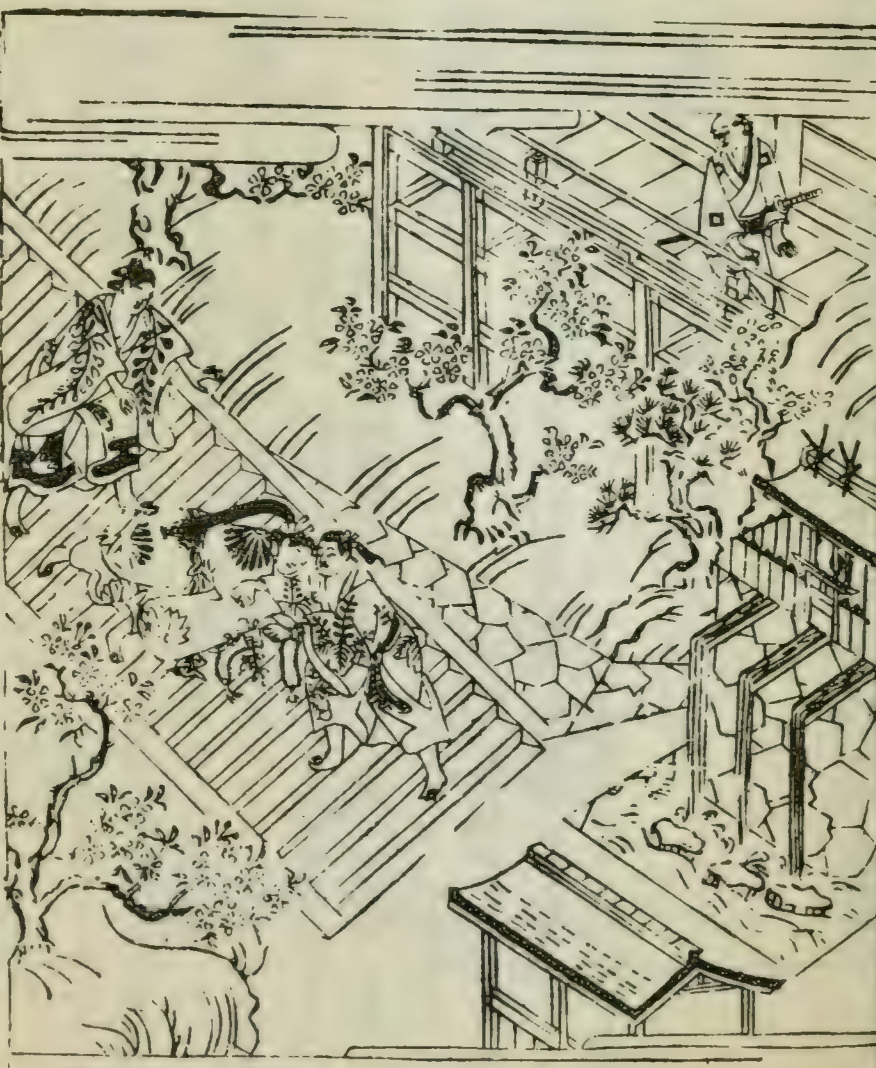


㊂ 瀧詣のあひぼれ

其夜ひそかに觀了が部屋にしのびい

る。夕べにかはり風もなく、ともしびかすかに二人ねの睦言三ッ四ッかたらんとせし所に、福藏院手を打觀了を召れ、今宵は毘沙門堂の燈明役、立越油斷なくかゝげ奉れと、師の坊の仰もだしがたく一間にかへり、元九郎にさゝやき、今宵はかうした首尾なり。おもへば月に村雲かゝる思ひもまた明日のたのしみ。是よりすぐに行ぞかし。今宵こそゆたかにふし給へ。さらばといふ袖をひかへて今宵は一入御名殘もをしまるゝ。まゝならぬが浮世なれども、人は今日を頼てあすをしらず。たのしみつきて悲しきわかれとなる世のならひぞかし。是非おとぎに參らんと云ふ。觀了打ゑみ、過し夜とは替り、安からぬつとめ、殊に佛前へのおそれ、明なばはやく歸らんと立出る。元九郎おもひけるは、兄分への義理をたてゝは此山出ることとなし。其うへ男色の契はかぎりありて年月立にしたがひ、互に思ひと戀をよそに見るものにて、たのしみは今二三年ありやなし。爰をはなれて孝にいらずは一生の不孝、幸よき首尾なりと硯引よせ、心指を書したゝめ、今一通は青目坂の里人方へのこし、觀了が秘藏せし來國重、二尺三寸有けるを取出し、法師の打物益なし、我門出に給はれと身ぶりよく指こなし、黑羽二重の着物きかへて、肩の行よく裾みじかく、是きよといはぬばかり。心に是をもらひてわざと髮といて大わらは、六尺の樫の棒山道の要害、火繩取出すなどさりとはさかしき心ぞかし。なじみある此山を見のこして行毘沙門堂、今行事をしり給はず。火かき立て油つぎ、夜明て歸り給ひなば、定めしあいそのつきもやせん。ゆるし給へとふしをがみ、勢たけく五十町の坂をまつくだりに、里の入江に暫あしをやすめ、夜をこめて行ほの〴〵あけ、三条大橋まで來り、我と心に思ひけるは、過つる夜、觀了殿のはなされし、源の牛若は、東におもむく門出に元服してくだり給ふと聞つたふ。千一牛若君にあやかりもせん。是を吉例に男になりて下らんと、爰かしこを見る所に、床髮結の目をすりて暖簾かけるを見て、是屈竟とよろこび、角入てと腰をかくる。床の男よろこび朝ゑびすけふの仕合よし。旦那はぬけ參りと見えたり。お一人かお同行いくたりぞ。とてもの事に髮さかやき致やうにと頼もをかし。十五歲の丸びたい、角ぎはよくおめでたやといはれて、鏡に姿をうつし、あつはれお手ぎはいざお暇申さんと、心指をつゝみ紙なげすてゝ、繩手のか

たをよこぎれ、知恩院門前を南へ祇園の社にまうで、清水寺に參りねび觀音薩陲の力をもつて今一度母にあはさせ給へ。今朝かりに元服する。とても事に仏前にて名をあらためんと我と元九郎今義と名のり、音羽の瀧にくだり身をきよめんと、草鞋の紐をときすて卅三度の垢離をとり給ひぬ。瀧詣あまたある中に、今年三五の振袖白きねりぎぬのゆかた、腰本らしき小女郎そばをはなれず、石段をのぼる素足さよらかに、御肌のまはり雪の山をうごかし、丹花の口びるわぢ〳〵とむかう歯しをらしくくひしめ給ふは、又たぐひなき御すがた。すでに元九郎とあとやさき、戀のしかけは娘から、しり目やる目つかひ、石段のなかばわざとけし飛みぬるを、今義はりし付御腰にすがりて怪我なかりしかと、とふ言の葉の嬉しく、



につこりと笑める顔、御身樣のお情になお人ぢやといへども、今義氣をつかてあやふき難をのがれぬ。よしない人ずよそ事に聞すて、仏前の鰐口いたゞかんとする手を、娘はいただき、さりが目通にちら〳〵といひのこす。どなたの事ぢやと腰本がとへば、それそことは卒爾なかねの緒と心得、大非の御

手にさはりぬ。くるしからぬ事とさはらぬ返答。またくだり坂になりて元九郎けし飛むを、娘あわてゝ御手をとり、ためいきほつとなうこはい事かな、怪我はなかりしかと尋しに、今義よろこび御介抱にてあやふき所をのがれぬ。いづれ御縁あらばとすんとした言葉に腰本とり付、方様には京にあらず田舎にあらず、瀧詣の道連は是觀音の引合。くはしく御物語あるべし。此方は室町邊にて名有御方の御息女、様子によつておためらしき事有べしととはれて、さんしゆ、私には父もなく母にわかれて其行衞を尋んため、此觀音に誓を立る。是よりすぐに行しでの旅路とや申さん。娘猶いとほしく、あはれなる物語。今宵は是非に私かたへ御供申て、をぢ法善様にかたり、よろしくはからはんといふ言葉のちから草。此うへはいかやう共御指圖次第といはぬうちに、さあ埒があいたと、腰本に何やらんさゝやかせ給ひぬれば、そこらはわしがのみこんだと、車やどりのほとり、爰こそ戀のかりの宿、下女やはしたは氣をとほし、六波羅野邊にすかしけるにぞ、今義とても姫とても戀のしぞめの水淺黄、顔には秋の紅葉ちる。腰本の梅が見かねて、おふたりながら初心な、今此水な世の中に、おじぎはことによるぞかし。是かかうとをしへけるに、さすが岩木にあらざれば、心よわくも立よりて、所は爰ぞ清水坂、戀のしぐれにぬれそめて立かぬるはとわり、時は八ツに過たり。内かたの首尾いかゞ。此戀人はわざと小者ぶんにして召つれ給へと、腰本目がよい智恵よろしくはからひ、みづからがそばをはなれ給はぬやうにと、あんまり嬉しき御託宣。かしこまりたるかるたむすび。娘子の召替小袖風呂敷に包、元九郎が肩にゆりかけ、御供申は戀なり孝なり情也。首尾よく娘の屋方に入くはしく子細を尋しに、此所は名村八良次屋かたにてぞ有ける。今入道して法善どいへり。つく〴〵おもへば牛若鬼一がもとにおはします心地こそすれ

御前義經記卷一終

御前義経記

二之巻 目録

湯泉の能 今様女郎弁慶

御前義経ハ名うて弁慶

一 傾城烏帽子親

よもしかさハ天竺地理ハ唐恵

あらわれ出て女郎ハ懐

長刀のの腰恵乃撫樯

御前義経ハ多田乃法師

二 ちぐみて女郎ハ懐

福對面乃廊へ

あさゑらくの宿まぶ

見さ衛ハ剃世乃情まつり

恵と泳と

西鶴が門人 □□作

(三)

今義經二度の欠落

侍従のとどこほり …

(四)

ぬしなき馬に道行

㈠ 傾城の烏帽子親

おもひと色にまよひて息女のもとを暫かりの宿。わざと下に引さげられ小わつはなみの草履をつかみ、明方より背戸門の掃除、見世格子ふくに隙なく、いやしき手わざも心一ツに問人もなく夜毎に通娘のねや。書院先の長廊下風呂の戸ぼそに手枕をかされ、夜をこめてといふ哥の心をおもひやり、あかぬわかれもめん〳〵が臥床に歸り、情の月を爰にかさね、自然と法善が氣に入つて、日毎に嶋原通のしのび供。きやつならではと召つれ行は老のなぐさみ。神樂太鞁の拍子聞を我ものにして、おろせが中宿大臣笠の目付紋。朱雀の野邊を脇目ふらず眞直に行は、釈迦如來轉法輪所當極樂の東門に入相の鐘つく比をあげ屋入と定、亭主が連飛、花車が蜘蛛舞、下女下男が風車、是自然とまはるにあらず、當代金山まぶうめき渡る勢なり。此大臣都にかくれなき名村八郎治今法善といへる手前者。妻を定めずして一生此里にかよひ、浮世の歡樂を爰にきはめて、諸國へあづけし金銀の利、毎年二季につみのぼす銀箱、入道が屋かたにいれずして、傾國の中宿柏屋が藏におろさせ、法善藏と名付て前銀渡しての女郎買。およそ三がの津に肩こすものもあらじと、揚屋夫婦が寢覺あんぜぬはもつ共。大坂屋の太夫若紫といへるに、法善老の腰をぬかして、三百五十四ケ日をあげづめ、余の男の顔見せぬにむらさき是をかなしみ、せめて一度はあうてみまほしきねがひ、江口の君大礒の虎に誓を立て是をいのりぬ。有時入道遊興のあまり、遊女の藝者たるをあまねく買ほし、能をさせてみんと既に吉日をあらため、揚屋の座敷に舞臺しつらひ、役する程の女郎にそれ〳〵の衣裳を拵是を着ずてにせよと、山のどくつみ重てめん〳〵が前に置。明日といふ今日の地ならし。其役〳〵をよくいひふくめ、則能は橋弁慶 シテハ一文字屋のみさほ ワキハ京屋の大江がつとむるはずなりしが俄に腹をいためてなりがたきよし。おの〳〵さしあたりての思案中ば、神樂罷出、明日の事に誰かれと申さんより、幸くるわに謠屋の師匠小春又之進とて名人有。きやつに仰付らるべしとでかした顔するもをかし。女郎の能に男まじるは油に水、それしや程もないと大臣の苦笑。元九郎罷出私幼少より橋弁慶のうたひ、昼夜ならひてたのしみぬ。御免をかうむり

仕度よし申あぐるに、法善機嫌にむかれけるにや、そちとても男なれどもいまだ年わかなり。殊に生付いやしからねば、きやつを大江が替りにせん。覺なくては申まじ、稽古は見るまでもなし、汝がのぞみにまかせん。かたじけなしと悅、是一入の見物、さあ埒が明ぬると、おの／＼ふしどに入て、明をまつまの夜あけがらす、聞つたへたる者共、つてにつてを賴て、明ぼのよりの群集おびたゞしく、柏屋が庭にかはつゞら、巻樽蒸籠生肴、提重の山をなして、さりとははれ／＼しき見物、廊下の戸ひらいて役する女郎、がく屋入の道中猶やさしく入しづまつて、正面には法善若むらさき、太鼓の神樂幷ニぐわんさい、袴をちやくして入道が前にかしこまり、東西／＼扨今日の御能は橋弁慶、笛は大坂屋の小大夫様の口



もと、しをらしき小鼓の音はぬまやの武藏さま、大鼓は伊勢屋夕霧さまのお手もとなれば、定めてうつゝはござりますまい。太鼓は井筒屋の野風様、地謡は鹿の位をあつめて、山夕吉岡田村高嶋初音初風花崎君川津川吉川、此歴ゝ ワキハお若衆シテハ一文字屋のみさほさまと、こま／＼申て左の方になほ

りぬ。もとよりみこほは舞樂の上手、花のかたちを武藏坊とはおもひもよらぬ替姿。裝束ゆたかに正面に出て、迦陵頻迦の聲音をはりあげ　是ゟ橋弁慶の謡　そも／＼是は西塔のかたはらにすむ武藏坊弁慶にてしゝ。我宿願の子細あつて、五条の天神へ參詣仕いゝ。爰にふしぎなる事の有。五條の橋には十二三成をさなき者小太刀をもつて、往來の者をなやましゝ。今夜夜ふけてかの橋に行、化生の者を打とらんと、夕ア程なく暮方の、雲も氣しきも引かへて、おともしづかにふくる夜を、おそしとこそは待ゐたりシテ元九郎扨も牛若は母の仰のおもきゆゑ、あけなば寺へのぼるべし。こよひばかりの名殘なれば、五条の橋に立出て、川浪そへてたちまちに、月の光をながめんと、夕波の粧風面白の氣色やな、そゞろうき立我心、波も玉ちる



夕顔の花。五条の橋板をとゞろ／＼と光かゞやく月の夜に、きたる鎧は黒革をどし、もとゟのぞむ大長刀、眞中とつて打かたげ、ゆらり／＼と出たる有ふみならし、風すさまじくふくる夜に、通る人をぞまちにけり。すでに其夜も明方のさんたうの鐘もすきまの雲、様、いかなる天魔厄神なり共、おもて

をむくべきやうあらじと、我身ながらも頼もしく、手に立敵の戀しさよ。弁慶かく共白浪の、立より渡る橋板を、さも荒けなくふみならせば、牛若かれをなぶつてみんと、長刀の柄元をはつしと蹴あぐれば、すはしれ物よもの見せんと、長刀やがてとりなほし切てかゝれば牛若少もさわかず、太刀ぬきはなつて丁どきれば、をどりあがつて足もためず、中をはらへば頭を地につけ、千ゝにたゝかふ大長刀打おとされて力なく、くまんとすれば切はらふ。すがらんとするにたよりなく、詮方つきて弁慶は、さたいなる少人かなと、あきれはてゝ立たりけり。ふしぎや御身誰なれば、かほどけなげにましますぞ。今は何をかつゝむべき我源の牛若。義朝の御子か。扨又汝は。西塔の弁慶なりと、互に名乗あひ、降参申さん御めんあれ。位も氏もけなげさも、よき主なればたのみます。かゝる相役する事も、是又三世のき縁のはじめ。今より後はわが男と、おもひの外なる謠にとよせ、契約かたくいひかはし先今日のお能は是迄、申法善様、今宵はわしに此牛若様を、かりの浮世になしたいといへば、入道をかしく何がさておはたらきのはうびに、大事の牛若なれ共かします。それ元九郎お供仕れ。いや只御免とふり切を、えゝ、氣のとほらぬ何事ぞ。法善様の御意なれば、へちまの皮やむさし野の戀、いやでもおうでもかうじやと、うすぎぬかづかせ奉り、長刀を打かたげて、九帖敷の座敷に入山の端がくれ、床には遣手が氣をとほす。禿は伽羅をたくさんに、是より戀のたきつけとなる

㈢ はじめて女郎の懐

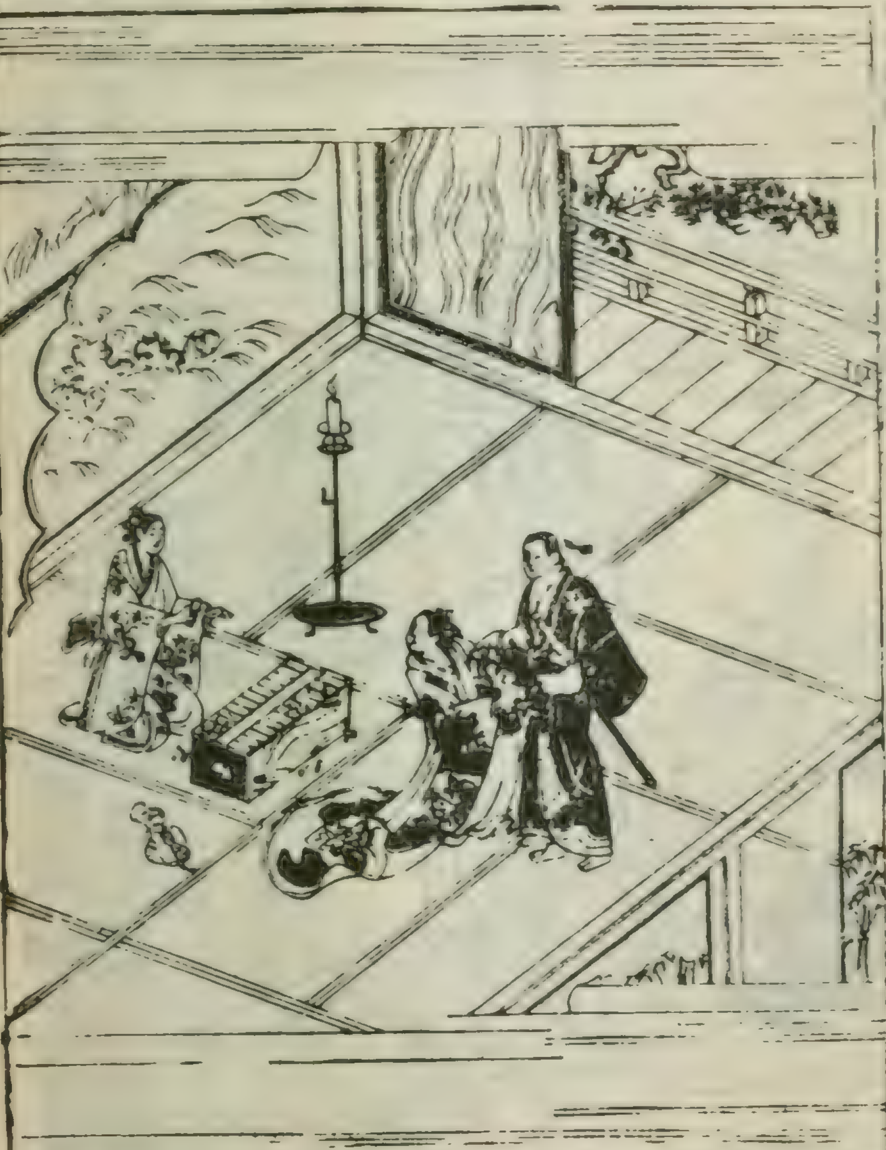
相生の松風さつ〱の聲を聞捨に、床の寝道具かぶろの重弥が子心やさしく、枕もとに伽羅の香とめやらず。みじか夜の長物語あたまからしつほりとした睦言。今義なんどこそはじめて女郎の懐入諸礼しらぬが猶かはいらしく、とりみだしたるみさほのしづく、戀に玉ちる姿あらはに、なま中に見ぬさきこそはましならめ。よく〱見れば御そだちいやしからず、殊に一藝のほまれたゞ人ならぬ御器量、嵐三郎四良にひとしく、ひよつと見てうしろ髪のかたさまにひかれて、此やうにまで思ふものかな。我一生の戀のかたまり御身様にきはめとある、いもせの神の引合かと思ひぬ。今かく嬉しき二人が

寝姿、方様とてもわしとても、親方といふ字のあれば、まゝならざる浮ふしのつとめ、あふ夜まれなるとはいはねど、しれた事なれ共忍戀路がなほ深いものなり。法様日ゝに此里へ御通、是非御供につれたまはん。さもあらばあはで其まゝかへしはやらじ、かうした戀はつとめの外なり。若又よそに戀あらば、とんとやめてと頭からきついなづみやう、さりとは嬉しき心ざし、千早ふる神かけて、今より後はと誓を立て、今義が詞のたより草。人にかたらぬ事なれど、我身の上を裸になして語りません。はづかしながら我は江州佐和山の者、二人の親にはなれ駒の、行方もなき身なりしを、此里にとゞめられて、禿と申て重弥がとく、姉女郎のこしもとに付そひ御用を聞てさはいを見ならひ、十五歳の暮ときはさまといふ太夫職此里一ばんの女郎、是をわしが姉女郎いかいお引まはしに預り、親方は天神にすべきといふを、ときはさまのお指圖にて松の位になりまし、正月

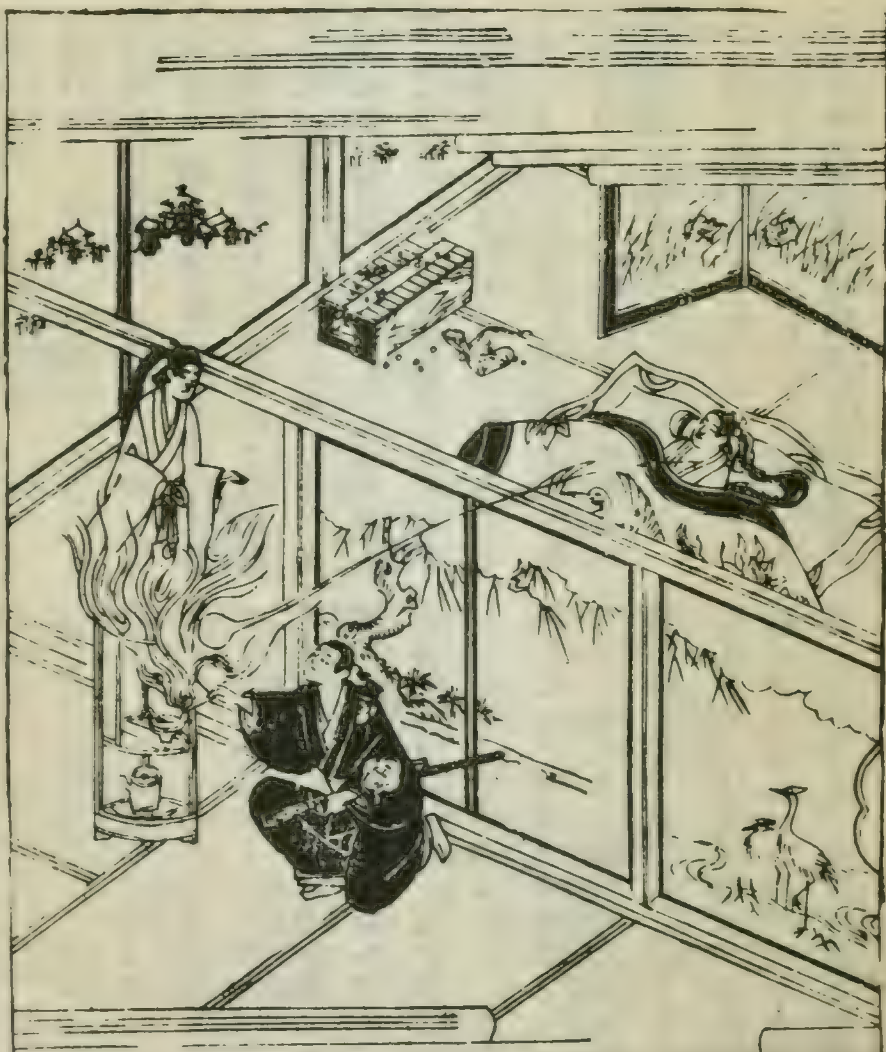


二日を傾城の仕染、水あげは太夫様の一の客、三津様のお情ふかう、ときは様とは深御縁かして、八百両の身請、廓のくげんをやめさせ給ひぬ。其大夫様の

御引きはしにより、今もつはらのつとめ盛。外の女郎なみにお客もそこ〳〵にしこなし、盃の手さはり、ふかう思はるゝ目遣、あだなきのそら誓文、くされさうした事ではないと、いひわけしたも一昔になりぬ。當世は女郎の心異なものになつて、我身ながらもをかしい事あまたぞかし。方様の旦那俗の時には名村八郎次様と申て女郎買の一の筆、三津様とは比翼のつがひ男と名ざして、此里にしらぬ者なし。しでの旅路は今の命をしらず。三津様此世を見のこしをしや姿は無常の風にさそはれ給ひぬ。きけばときは様には御子二人をつれ給ひ、都を立のき給ひしと、きいたばかりはまゝならぬ身と、思ひやり給ふべし。年月を重て、ふかいといふ男にさへかうした事はつゝむぞかし。よしない咄にまよの契をわすれんとせし悲しさ、ろくにやすませ給へと帯のむすびめとく〳〵といふに、今義此物語を聞て、さりとは嬉しき心底、扨只今の御噂に私旦那の名村八郎次様と申せし人か。してく〳〵お前の姉女郎ときは様には、夫にわかれて、行末いづ方におはします。ありかのしれぬお咄にて少しつまらぬ所あり。とても事



にととはれて、されば其事所はしかときかね共、さる客衆のお咄には、身の置所もなく、お子たち二人は町方にやり給ひて、御身は又〳〵廓にかへり花、あはれや二度の傾城をなさるゝよし、方角しらねばくはしき事はしらぬぞかし。今義涙をながし、さぞかし其子の身にしては世に口惜くおもふらん。若又其子親なつかしく、尋に出ての首尾はといふに、身すがらあひに行は親に物おもはせて何のせんなき事、もし身請し給ふ心ならば、それこそ親への孝ぞかし。今迄子をもちたる親二度つとめたるためしをきかず、また子として勤する母にあうたゝ噂もきかず。此ふたつは何と申てよからうぞ。先わしを親にしても何として其子にあはれやう物ぞ。しらぬ事ながらよしなき對面はいらぬものと、涙こぼすもあはれにはかなし。今義さあらぬ体にて、ま事に縁にひかるゝ大ぬさ、ひく手あまたの中に、殊に懇切なる御咄。まとの契は友白髪、額に老の波、腰にあづさの弓引迄、かはらぬやうにとねがひこそすれ。今の咄の現になれよかし。よそのあはれの身にしみ〳〵と、もらひ涙の雨もるぞと、夜着ひきかづき物いはね



ば、まだ若とりのもたせぶり、さうした仕掛は此里に流渡る客のする事、こなさんばかり寝てわしはどこにねる事ぞ。殊更しのゝめちかく、朱雀の野邊の小夜あらし、身にしむ風もひやゝかなりぬ。わしもそこにて明さんと、　　うちへ　　　、今義思ひけるは、みさほが思ひよる戀路に、母の行方もおよそにしらせける情、よそに見る所にあらず。是方便の契と心に觀じて、も、よい事をと耻しさうに返答すれば、こなさんはようてもわしがようない。銀つかふ客どちがうてせつ／＼あはるゝ身でもなし。初心な事い　　　　、ふかき瀬ぶみの川浪、　　　、　せつくも髮、とりあげんとせし所へ、かぶろの重弥來り、はやには鳥も時をつくり、法善様のお歸り元九郎を召ますとしらせけるに、みさほおどろき今首尾あしくせば、又／＼あふ夜のさまたげ、あすかならずといふ寢姿、不承らしき顔するは尤。寢間をつつと出二ツ重を一ツまへ、きりゝとまはすうしろ帶、身拵よくみさほにしとやかなる暇乞。旦那の次の間にかしこまり、様子をうかゞひけるに、はや床を出させ給ひければ、むらさき乱髪其まゝ、御手をひいて出るあけぼの、元九郎は風呂敷包、肩にかけたる茶せん髮、みさほがしどなき寢姿其まゝ、朱雀の野邊のかいまはりまで、おくり出るは情しりのうはもり。姿見うしなふ迄の小手まねき。當世ためしなき傾城の元祖大礒の虎も西の海へさらば／＼

㊂　待夜のすご六

よしや今義常ならぬ物おもひ、屋形に歸りねられぬまゝの一人ごと。されば人界の果はみつるに時あり。幸も時によると、我身の上におもひあはせり。ひつきやう父の敵同前なる法善とは夢にもしらず、かりにも主君とたつとみ、暫も下人とよばれて、三世の縁をむすびぬ。殊に息女たるおふさとは、此世あの世とちかひて行末夫婦に成べき誓紙まで取かはせしうたてさ、主なり妻なり又舅也、すでに存分胸にみち／＼なれ共、義理と恩の思へば中／＼不足たる事少もあらず。なれ共爰に足を留てはいきどほり猶ふかく、あやまりありてはよしなきうき身にあふべきもしらず。傳へきく陶朱公は勾踐を作ひ會稽山にこもり、種〻の智略をめぐらし、つひに呉王をほろぼすためし、たとへ心のごくなるべき共、功なり名とげて身しりぞくは、是天の道と心得、此所

をひそかに立のき、一先三州にくだらんと、分別をきはめしが、いや〳〵息女と取かはしたる起請、其まゝ置ては行さきのまよひ。何とぞ是を取かへし、其場を直に立のかんと思ひし所へ、腰本來り、今宵ほどなる首尾もなし、御忍びましませと幸なる御使。忝　仕介追付それへとうなづけば、かならずといふ詞の下より、娘と腰本とが戀の掛双六。現なき顔して、おさい重六でつち〳〵といへば、こちの内にてをりは双六にでつちといふはさしあひなり。重てたしなめといふ石遣。戀目は三六。三六とは九郎様の事ぢや。三六がならずは五四〳〵。はやうきてくださんせと、戀をあらはしたるは又にくからぬ風情。腰本が戀目は四三五二さま〳〵、こちの人は旦那様のとのみ大切にして、わしが事はうはのそらだき。しめてあふ夜のときばかり、かはゆいのにくいのと常しもしやばで見た弥三郎顔。むごい仕方な男なれ共、きたない縁かしてわすられぬが因果。首尾あらば今宵あひたいもの也。五二か四三か一六か、そりやこそ七なり嬉しや今宵は、しげれ松山浪はこさじとよろこびぬ。娘はすこしせき心、ふる手も猶さだかならず、是七二様五四様三六〳〵、南無三寳しかも一二が出くさつた。よいきみのと腰本がわらへば、も一度ふりなほさんとわやくな事をの給へ共、さすがにお主なれば、せんかたなく〳〵又ふりけるに、重二是はまあなんとした事ぢやと、ちと御機嫌あしき所へ、今義さし足してかいのぞきぬ。嬉しくはしりよつて、双六の目にはまけたりとも、是みてくれほんの三六。おれが戀目はこれぢや。あやかつておけ

腰本は氣をとほし、とぼし火ほそめ御用あらばこなたにとのゐ仕ると、銚子盃かいやり次の間に氣をとほしぬ。人まつ夜半のもぬけがら、御物語もそこ〳〵に暫ねむらせ給ひけるにぞ、今義こゝぞとおこしけるにさら〳〵御目もあき給はず。ひそかにぬけ出、娘の守袋をさがし起請をとり出し、行燈の火にて煙となしぬ。是よりすぐにおちんと身づくろひする所に、姫現聲してあらうらめしの御しかた。おもふ疑はらさんための誓紙をば、なぜに煙となしら給ふ。あれ見給へよあさましや、胸のほむらが夜に三度、くゆる思ひは日に千度、思ひくらべん淺間山に、のぼるは戀路の習ぞかし。それをふり捨行共やらじと身をかこつに、今義わぢ〳〵

身をふるはし、全くさうした事にあらず、子細あつて緣をきらねば私の義理もたゝず。孝に情はかへられぬ浮世の有樣、樣子は是に書のこせしと一通を床になげやりぬ。ふしぎや行燈に娘の面影、色あをざめて涙ぐみたる二かは目、おしのぐひたる手のたよりなく、今義が書置たるをみて、扨は親御の御行衛を尋に出させ給ふよし、是非にととむる心にあらず。是にて御うらみもはれたり。かならず戀路はつゝしみ給へと、姿はもはや見えざりき。嬉しやとよろこぶ門出、其夜ひそかに三条通東洞院にて八ッの鐘、指折ていまだ夜ぶかなるに、大津迄はゆかれじ明さんに所なしと、紙屋の見世に猿つくばひ頰杖して案ずるも久し。所へ馬かた二人手綱かいくりつれぶしに、坂はてる〳〵鈴鹿はくもる、あひの土山松坂屋、ませの小りんが明がたのわかれ、しつぼりとしたおもはく、天とあやかつて道をへだてゝ戀せんより、ちかい三條の橋詰によこねの吉というて、およそ河原おもての口聞虎少將もはだし、拙者がなじみ月に五度ころりさんせうのおけ、戀は遠いが花ぢやと世をはゞからぬ物語。ほこしもないおいてくれ。



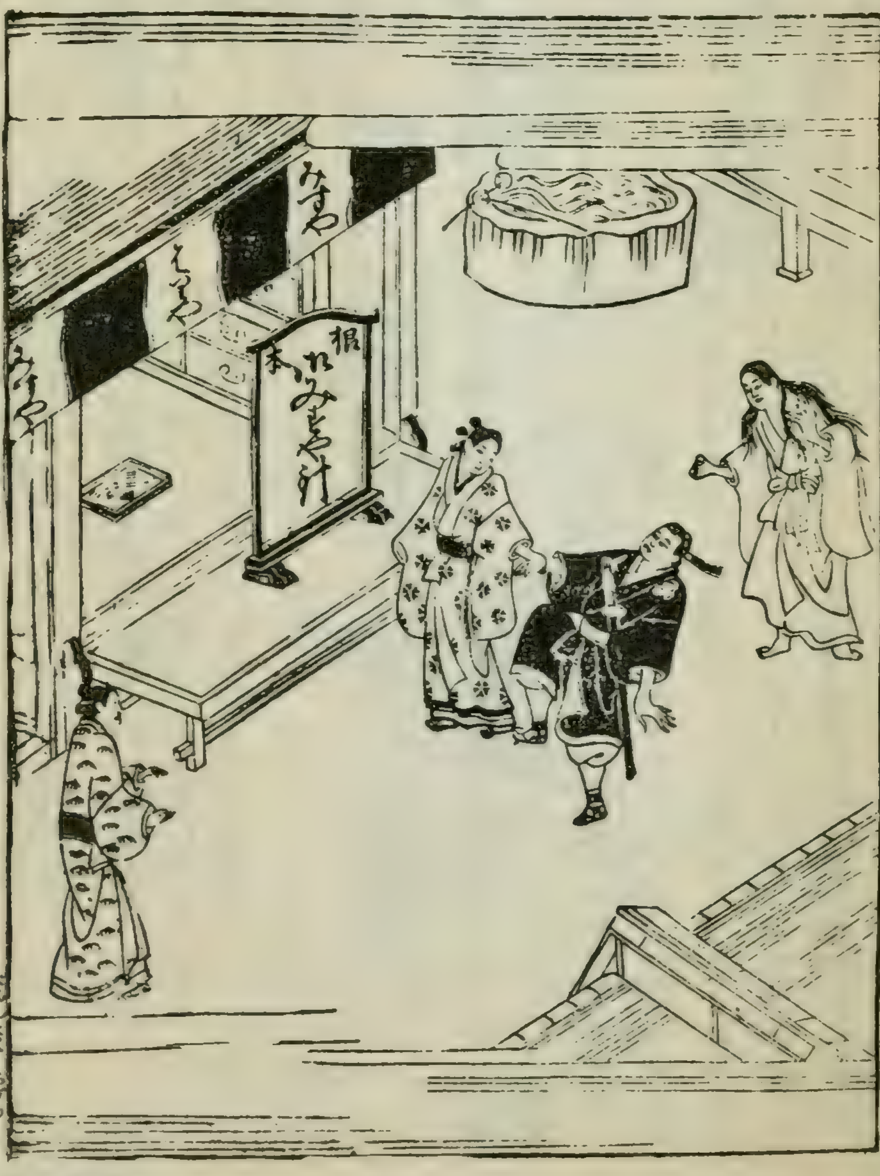
川端、流にうつして水いぼ一ッあつたら腹ぢや。深い約束して此暮より、世帯するはずに堅いきはめはこりや、是を見てくれと、星の光に片肌ぬぎかけ、入ぼくろをみするもをかし。幸いにがけの道端、女共が器量ををがませう。おそかれとかれそち達に近付にせねばならぬと、腹の皮よるめん／＼がたのしみ。今義悦きやつらは大津へ荷物つみに行と見えたりよき道づれ。天見すて給はぬと見えかくれにゆけば、三条の橋詰にて何やらん女めきたる聲、闇はあやなしすかして見るに、河内羽二重のからす染白絹の襟、ねずみ色の一重帯ゆたやかなる振袖、是なん聞及たる賣女、馬方が聲を聞とひとしく、むなづからとつて是そこなぬつほり、あすの夜かならずとの給ひしはいつの事にてか有。わしも親方持の日に／＼算用、月を重てあうたればこそ、一ッ二ッは掛てもやりぬ。いとしいも是、にくいも是、のふずも事によるぞかし。鍰銀の諸分なんど、さうした事にあらずと、耻をかゝするもをかし。口のすぎた女三人よればくがい、ふかしからぬ事を仰山さうにと、腰のまはりさがして何やらすまして、此意趣ばらしあすの夜からは下川原しさいのまんにあふ氣ざし。蛙は口ゆゑ蛇にのまるゝ。われがやうなる客も五十人に一人、あとでくやむを見るやうな五郎作こいと立所を、うしろからひつたりとだき付是男、こなたの心をひいてみるしかけ車。廻り／＼て外へは誰がゆるして惡性狂。まあなりますまいといふに、あだなや腰を又ぬかして、然ば嬉しい、こちとらといふ者は六十六ヶ國を廻つて、水道の水吞ぬいたすゐ、分があしいと二度と見かへらぬ男、以來をたしなめといらざる所の高言。そんなら遊んでいなしやんせとすゝむるくぜく。友達の五郎作には山がらのせきなかうど口のあてがひめ、馬よくつないでおけと、供にいざなふ砂子の床、石の枕のつめひらき。首尾は爰ぞと今義、とてもきやつらは大津へ行とも見えず、よその戀みて夜をあかし、人に見とがめられてはせんなしと、一ッの馬の綱をとき、神明の門前よりゆらりと乘、鞭をうつて東の方へ落行はあつぱれえせ者にてこそあれ。馬方おきて馬なきにおどろき、すは大事の馬のみえざるはと、あてどなくおつかくるを、かの女とらへ又掛かといふに、時もとき折も折、なく子も目をあけ、花も何も此身のありてこそと振切。おいていきやらねばはなさぬと互に色をむすぶ所

へ、此女を引てあるく男の中に、牛右衛門といへる無分別者、二人の馬子をとらへ、おのれが鼻毛つくして馬うしなうたをこちの花代がしつた事か。喰にげしたくば恥を捨ていへ。さもなければゆるさぬ。扨はこいつが馬盗人かそれぶてたゝけといふ所へ、近所のものおき合両方引のけ、理非をきかずしておつぱらへば、夜はほの〴〵と明がたのそら

㊃ 主なき馬に送り状

闇はあやなし星の光をたよりに、通路のまれなるは未夜ぶかきにてぞあらん。それ粟田口は左手も右手も高山、殊に目前の地獄爰にきはめて、いづれか此海道を遠慮せぬはなかりき。馬あればこそなりゆたかに行は畢竟毒の心見、あほりうつていつさんにゆかばあやしき者も怪顛するにはきはまりぬ。是知謀第一と馬にくつをぬがせて間なくぶち打て行に、いつとなく粟田口をばはるかあとになして、山科十善寺の邊にて明六ッの鐘。奴茶屋の團助が茶たぎらせて大あくび、かたへなる又茶見世には、下女の玉が見世あけさして現なやねむるなんど、さりとははかない女めと今義が心には、ふた目共見やらずして乘打。はしり井に馬つなぎ捨、手水をつかひ髮なで付衣紋つくろふ風情。針屋の見世も明がた、十四五なる小女郎、根本みすや針のかんばん掛ながら、今義がやさかたなる姿みやり見おろし、見世ふみはづして落たるは、うたてや久米の仙人もいそ也。顏に朝日のうつゝをぬかしけるに、今義何心もつかざれば、につこりとゑみてまた、西の方を見るは猶又落よといふ事か。御參宮と見ました。そこでおつれを待給ふはあんまりなる御遠慮。見世に腰かけてまたせ給へと、二階から目藥さす仕掛さりとは急な戀ぞかし。今義悦旅路の情左もあらば硯を暫御かしあれと、のぞまれて參らするに、一筆を書て馬の尾づゝにくゝり付綱を切てはなせば、此馬よろこぶ風情にて京の方へ歸りぬ。我一旦人の寶をうばひしかども、かへす心は是佛神も納受ましませ。御覧のごとく參宮同者大方お情らしき目遣。しらぬ身にもあらねど、けがれをいむ身なれば、下向にはかならず御禮申べしさらばと出れば、此女名殘をしげに手をとりぢつとしめたる手のうち、何が扨としめかへさんとせしに、不思儀や法善が息女姿あらはに、今義がうしろに立情なや我身は浮世の捨妻、いとしき人は東に行。とゝめが

たき義理を聞て、はなれがたき妹脊をさく、かたちは都にとゞまりしかど、魂はそなたの面影をはなれず。よの事ならば見ぬふりきかぬ顔なれど、戀路の道はなら坂や、此手をしめんとし給ふは、さもしいやしき下女にたはむれ、戀の我儘さうした事をせんために、好色修行あそばすか。にぎらばにぎつて見給へと、いふ聲ばかり姿もなし。しめかへさんにかゞまず。只神明のとがめならん、重て〱おそろしやと、そこ〱に暇乞して大津の八丁目まで來りぬ。何とかしけん、氣味わるく心地いなものなれば、十文字屋といへる旅籠屋に、暫休息したりぬ。鞍馬山福藏院の觀了、今義山を出しより、よしなき戀の魂をとられ、たゞ明暮是をあんじて、夜るのしとねの物おもひ、涙ひまなく夢にもそれが面影行てかひなき事ならば、かへれよかしを多聞天にちかひて一七日の断食。九郎が行末息災延命といのりしに、佛明の加護にや有夜の夢中に、今義こそ關の東とばかり御つげ有難、ひそかに鞍馬を下山し、一人旅路のうきおもひ、戀と情の床ばなれ、わすれがたき男色の契くちはつるまでもかはらぬ中也。尋行道の



白川今義にいつ粟田口山科にさしかゝるべき所に、主なき馬の道草はむる。尾づゝにあやしき一筆をそへたり。立よつて是をよむに、何〻我は是參宮同者也。過し夜深に宿を出、此海道のおそろしきに心おくれ、あくるをまたば若又追手のかゝるべきをさつし、道連をまつに其かひなし。折節此馬三条の橋につなぎおかれしを幸と悦 斷 をとげずうばひ取、夜道の友として山科迄乘來りぬ。然共安からぬ馬なれば、是より返弁申ぞかし。まつたくよこしまにあらず。此海道の人是を聞わけ、此馬つゝがなく三条の大橋迄宿送りにしてかへし給はるべし。さもあらば我一生の御恩殊に大神宮の神前にて壽命長恩にいのるへし　以上

往來の衆中　　男子れのとしの
宿々の衆中　　同　者

觀了つく〲詠正しく是は今義が手跡なり。扨は伊勢路へおもむくとみえたり。夕ア此海道をとほりなば、まだ草津迄は行まじきぞ。追付あはんと息をばかりに大津の八丁まで來りぬ。暫 爰に一と仕度せんと、十文字屋の内に入てみれば、病人を介抱すると見えて、宿屋一家がとりまはして藥よ水よとひしめく。觀了あやしく立寄みれば、今義也。そちは九郎か我こそ觀了にて有。ゆかしきなつかしきの身にあまりて、此所迄尋來りしに爰にてあふは多聞天の引合。して〲何とか有。今義おごろきはづかしき御對面只何事も御ゆるしと、片目に涙かた目にはまたはづかしき色盛、やくたいもない挨拶。にくしみのあらば何しに尋ん。殊に身なし子の、我より外に誰有て、便となるべき者もなし。きけば夜道を來るよし。寒氣にさそはれたる熱病、風邪をさる故毒散、折から是に持あはせり。是〲亭主せんじやうは常のごとく、生姜一へぎ藥なべ、はやくのませてくれ給へと夕暮方。こよひは爰に夜をあかし、明なば一ッ所に行べき間。心やすく思ひゆる〲養生。それ先かしらせんじ瑠璃光如來と信をとつてのむべし。相客なきを幸に。寢道具の數はお望次第。明なば風もさむるぞかし、遠慮めさるな何にても、御用あらばうけ給はらんと、とぼし火かゝげて夜もすがら、とのゐする身は是男色の情ぞかし

御前義經記巻二終

御前義経記

三之巻　目録

東海道　当世十二ぶん

一　近江の水海

両親らハ石山参詣

痩腕の身ハ恋乃花

忠川とのうちこ鶴盛が海へ

無理にかけぬ親子が数珠

二　御前通り

両親ら門を似せ山伏

男比丘尼ありまうけり

太郎冠者が津幸参り

次郎冠者がさゝせん

御前が門出山中ところへ
三
東海道やうき旦
さらぬ佛ゆりござりしん
出来ん竹ゆ別のよびひ
けがそうう切鑑人の散

御前が門出義経の御事
四
隣り合の女楽
葉山が渡し舟安が都重
小傳より門の長田が色

御前が門出上るり形
五
猿で恋ふる十二段
今義経世の中さとの
深よう百野が御面影
思ふ女郎を照らしぞれに

(一) 近江の水海

旅路の難義はそこまめふみ出したると心地あしきとなり。今義観了が情にて少し心のすぐれたるをたよりに、さそはれて行は水海。矢ばせの舟に便船し、乗合のめん／＼御免と遠慮せぬは病人の事、風呂敷包の高枕むらさき縮緬の鉢巻、すや／＼ねいれば観了よろこび、嬉しや暫もねよかしと枕もとに袖屏風海風しのぐなんど頼しき心ぞかし。舟頭櫓拍子とつて海上にこぎ出す。時ならず叡山おろしのはげしく、ふね浪にかくれてたゞよふ。舟頭もろ肌ぬいでおせどもこげ共いごかばこそ。詮方つきてなう／＼此舟にはあやかしがついてい。何も覺悟きはめ給へと血眼になつていへば、乗合おごろきめん／＼は宗音、妙法蓮花經、又は南無あみだ仏、或は歸命無量壽如來、南無大師遍照金剛と、めん／＼其佛名をとなふる。中にも観了黙然として、かゝる時節さやうなる事をばいはぬものなり。愚僧天台の流儀をはげめば、何とぞ加持仕てみ申さん。殊に拙僧が召つれたる者、俄に熱病はなはだしく、更に性根なかりしは心えぬ事共なり。これ今義、何事によらず思ひあたることはなきかと尋しに、かぶりをふつてさら／＼覺えはなかりき。爰にかやうなる不思儀ありと、法善が息女の噂をかたりぬ。扨はさうしたとがめもあらん。いで／＼天門のかんがみんと懐中より八卦を出し、額にしわよせ眼をふさぎ、そちは當年十六かと覺えたり、戌亥子の年にて生は海中の金、魂しかも七ッあり。當年が兌上斷にてあたり星が金星、此星にあたるものかならず住所を去、運は死の運にて見ればみるほどわるい年。さりながら當年の守本尊が大聖不動明王なればさのみ氣遣もなし。隨分信心すべし。なほまた哥のめでたいがたのもし

　草も木も花さくみなる春の日に
歌ニ　たみもゆたかにすめるとし月

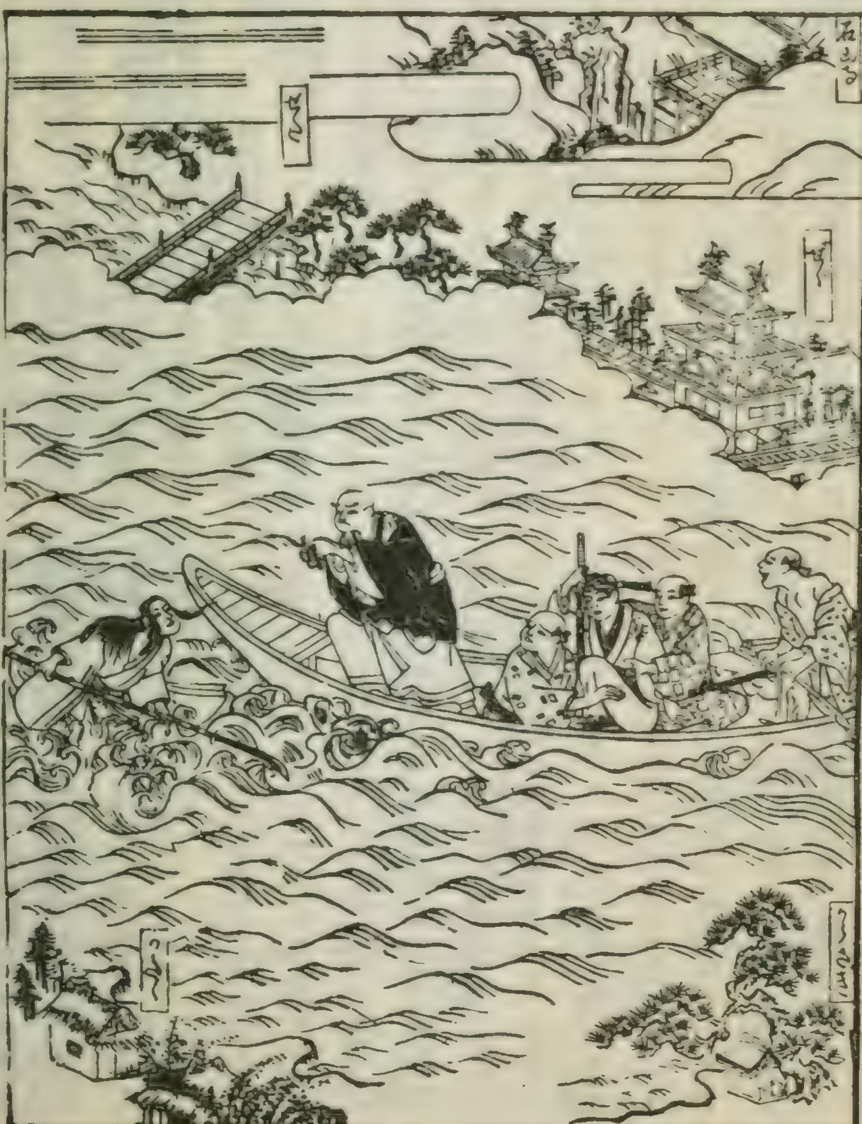
此哥の心はくどういふにはおよばす。當卦あしくとも哥の心すなほなれば行末何事もあるまい。扨其娘が年は。されば十四かと覺えました。十四は丙寅の年此女の生は香炉の火にて煙ほそく、立ぎえもせずまたもゆるにもあらず。くい／＼思ふは理なり。あまつさへ魂三ッにて心のとりおき猶せはし。當年が離中斷にて、離ははなるゝとよむなれば、おそかれとかれはなるる筈なり。星はそちと同じく金星、住

所をさればついてあるくがもつとも〳〵。其上三火の卦殊に火生にて長の運なり。そちが爲には石もちのはんめう。何から何までさりとは惡い二人の卦殊に哥まであし〻

歌ニ　わかれ行道とはかねてしりながら

今のわかれはおどろかれぬる

哥さへ是なり。きやつがついてまはらば行末命もあやうし。正しく是は娘が生灵船中をさいはひに化ざ〻をなすと見えたり。大勢の難儀をたすくる事菩薩の行なり。いで〳〵日比の行力かやうの時をこさんや。おの〳〵氣遣めさるなと、舟ばりにつ〻と出、たとひ其女の生灵うらみをなす共そも何事のあるべし。忝も我七歳上り鞍馬山にのぼつて勤行おこたらず。天台止觀の旨をひらき、一念三千の氣をあらはして、忍辱慈悲の衣は十歳より着し、多聞天に日〻夜〻につかへて行法を修行する事やゝひさし。思へばよしなき戀路にもとづき、とがなき者をくるしむる事、めぐり〳〵てその身のあだ、神明佛陀のみやうかんにそむかん。思ひとまれよはなれよと、浪にむかつてしめしけるに、ふしぎや浪間に若き女のさばき髮して、白き小袖を海にけたて〻水中



にあらはれ、そも我は名村八郎治が娘ふさが面影也。なううらめしの今義どのや。思ひもよらぬ戀のうら浪御身の戀をしる人ありて、開けるに、嶋原にては一文字屋のみさほとやらんに、またなれそまぬあだ枕、二世の三世のとちかひ給ひて我戀ははやわすれ草。誓紙も何もなれぬ昔となし給へば、せめてうらみをはらさんため、此水海まで付そひぬと、夕浪にうかべる姿、うりさね顔もあをざめて、丹花の口びる色をうしなひ、芙蓉のまなじりきつと見つめ、かいとりこづまは水にひたし、前後とりみだしたる風情、今義むつくとおきなほり、情なしおふさ様、さがなき口をまとになし、おもひの外なる浦波、すゑながく見ていかやう共、お心まかせといふとのはもたよりなく打ふすに、觀了おどろき、いひわけにてはかなふまじと、數珠おしもんで、東方にがうざんぜ、南方にぐんだりやしや、西方に大ゐとく、北方金剛やしや明王、中王大聖不動明王、なまぐさばんだばさらだ、ちやうがせつしや得大智恵。ちやうがせつしや即身成仏、あらおそろしのはんにや聲や。是までなりや御僧様、此後しやうげをなすまじき。今はおもひとうらみの胸はれたり。是まででさらばやと、いふ聲ばかり、ゆられながれて志賀唐崎の松の木陰にかいうせにけり。乘合よろこび舟子に力をあはして、みぎはの方へおしよせけるにぞ、只戀は心のまよひ、心ゆるさぬものとこそしれ

㊂ 御前道行

虎の尾をふみそこなひ、毒蛇の口をのがれたる心地、あやふき船中何も何事なく乘すませし事、是觀了が秘法たつとき故なりと悦うちに、矢ばせの浦に舟が付ば、おの／＼念比に暇乞してわかれ行。今義も心地すぐれしかど、まだうひ立のたよりなく、觀了に介抱せられ、やう／＼草津の宿まで來りぬ。今宵は爰にとひそかなる宿に立入、舟中のきうそく枕一ツをならべて寢物語。觀了智恵を出して、そなたも我も主君につかへて斷なく出れば欠落同前、とがはなけれどもし追手のかゝるまじき物にあらず。見付られてはせんなき事、あけなば兩人すがたをかへて行べき思案、互に耳にさゝやかして、出立は七ッと宿の內義によく頼、ふすまさすかた手に暫の寢すがた。七ツの鐘うつ比下女が味噌する音に目をさまし、股引草鞋の用意、お食あがりませ

と膳のむかうに干鯵の焼物觀了かぶりをふつて、愚僧は精進ゆるしてくれと、汁すうて是には鰹をいれなんだかと、跡に氣のついたるもをかし。膳とつて、立様の算用。御亭主に心得て又のぼりにはと、立出て峯の白雲まだ夜をこめて玉なはて、こなたの里にしばらく足を休めて、爰にて姿を替は智惠かな／＼。比丘尼になるはさまでむつかしからぬ事ぞと、俄にきぬ衣の片袖ほどいて、二人が帽子にかづき、かゝへ帯しどろに、勸進箱と手おひは土山にてもとめんと、身ぶり大方つくろふうちにはや東じらみ、互に顔をしら／＼見あひ、扨も似たりお前も其儘、名はおりやうくわりんと付べし。哥覺るまではきしよくはあしいとうそ付たがよし。さあ／＼くわりんいそぎやといふに、おりやう様はおたつしやな事ぢやと、人なき野道にてはあまころしのさいもんより外、稽古するものあゝらよしなや

太郎冠者　殿様へ申あげます

大名　何事ぢや

太郎冠者　長事さぞ御退屈に思召ませう。扨是より觀了と今義が似せ比丘尼にて、關の地藏までくだりますを、名所道行に書、すなはち節を付て語ます。三味線は次郎冠者がひ



かれます。音曲にてお聞なされませう
か。但し素讀仕ませうか。大名是は氣が
かはつてをかしかろ。古來より上る
り本には節を付て語が、かうした全部
物に節を付たはきつい氣のかへやう。
淨瑠璃できかうはやうかたれ。して節
は何節ぢや。太郎冠者さんは道行の文句
はいづれの節にてもかたられるやうに
仕ました。先京楽ならば加大夫角大
夫、江戸にては土佐半大夫さつま永閑、
大坂にては文弥義大夫。おすき次第に
節はなほしてお語なされませう。私の
かたりますは義大夫ぶし。さやうにお
心得なされませうと、拍子あふぎせき
ばらひ。次郎冠者は三味線の調子ゆた
かにまづ三重より引出しぬ

道行やつし比丘尼



まよひ行ふたつつれたる。かりかねも。
おなじかたちを。フシはがいじめ。しめ
てはなれし身なりしを。またむすびか
へ行たびの。すがたやつしてびくひく
に。かみをかくしてふたおもて。見か
へすかたちいろざかり。スヱテこしのか
かりもほそ／＼と。かゝへおびする手
もとよく。フシすげがさのうちかはゆら

し。をとこのすがた。風さそひ。ちりても戀はもなかなる。三五の月とながめ行今よしさきにあゆみぶり。なほおもひつく花のあにさかりじまんをはなにかけ。ゆきぬけあとを見かへりてはやうとまねく手をとりて。ちとくわん／＼の。こゑうつる。川つらいけにかげみえてよこ手。打のにこひふなやなまずおどろき水さわぐ。かさに玉ちるこゝちして。おのむらたがのさとばなれよひやみにうつ。石部にはうどん。そば切うつゝとも。ゆめにとわたるよこた川せい／＼たるながれ水の。水口たづねきて。つゞらがさかうてかづら草。きて見よかしの木草までなびきあふ夜の。とこよぐさ。わかれぐさをばしのゝめに。すがたかくさんつち山と。のぼりてくだるかにがさか。

ひがしは伊勢のうなばらに。ふた見あさまも目の下に。みしやそれともくもがくれ。西にあふみの。うみづらよ。江戸こゝにたつときみやしろは。其かみ田むら將軍の。とうゐをたいぢしたまひし。すゞかの宮もこゝにありさかはてるひに。かゝやけどすゞかは。くもるとむかしよりむま子がすさむ此所めいしよ。／＼をよくおぼえ。おひ行するゑ。ものがたりこよなうかたり給へとて。くはしくをしへ給ひしに。今よしうれしさ身にあまり。たびのなんぎも今といふ。いまのむかしが今になる。御おんは申にあきたらず。只何事もわれゆゑの。御なんぎさこそと今はたゞ。御いとほしくたびづかれ。いかゞわたらせ給ふぞと世にしみ。／＼と申にぞ。いやとよ戀は身のしゆぎやう。さなおもひ給ふまじ。いのちだにあるならばはゝにあはせでおくべきか。とかくたびぢは氣をはらし。よしなし事は見もきかじ。いはじといさめいさめられ日もはや西にいるさ。山今十丁のたまぼこをはこび／＼て心せくせきの。ちざうにつきにける

㊂ 本海道やから組

こよひの夢は此宿、松坂屋といへるはたごやに暫かりの奥ざしき、ふたりねの四疊敷。くわりんひもじにはないか。おれはどうやら胸がしはついて、とぼし火の光が三千三百三十ほどに見ゆるぞかし。是をなご衆お食をたいてと、俄に詞をかへるもをかし。それさへうたてかりつるに、水風呂があきましたと、下女めがしきりによびたつる。

湯にいらば旅路のつかれもやすまんと丸はだかになつて行を、今義とりつき比丘尼たる者の此下帯は何事ぞと口に手をあて、着物きながら湯殿のかたをさしのぞき、もつけな事は風呂のまはりに、下女下男のなみ居て、いかな〳〵いる事はしやほん。もはや入まい寝て花をやりますと、ずんきり枕引よせ、火ふきけして夢をむすびぬ。奥座敷には中間らしき者、酒宴して、おさへたへさへた是に二ツはなんだ弁慶、引かけうんのむ詞の勢なまりのはしをきけは二合半のもりきり。してやつたの角内、なからはんじやくの十藏いがみの九介胸髭勘八、大だうの雲平なんどといふ奴中間、此宿にてかち荷持して渡世をくらしぬ。生付田夫野人にして旅人にやとはれ、となき事を耳にさへ、わざと口論にとりむすび、おそらく

ひけをとらぬ奴共、妻子もたねば一生つらい事にあはず、宿〻のとまりにては小半酒のしゆ錢だし、奴豆腐に唐がらし、あたまからかつかぢる口もと、つり髯左右にわかつてうしろさがりの糸鬢、こんのだいなし二尺八寸の長刀さしこなしたる風情、夜盗なんどいかな〳〵おそるゝ事なし。昔〳〵とつとの昔、木曾海道に此たぐひのえせ者あり。たとへていはゞ越後國の住人藤沢入道出羽の國にはゆりの太郎、遠江の國にかまの與一、するがの國にはおきつの十郎、上野には豊岡の源八、信濃國いなづま五郎、此者共にも肩こす力者、夫ある女にもむたいに戀慕、いや共おう共いごかせぬやから組。いづれの宿〻にてものいてとほせば、猶かつにのつてあばれあるき、あまつさへ御法度の四ッざい、つけめおい長、うん

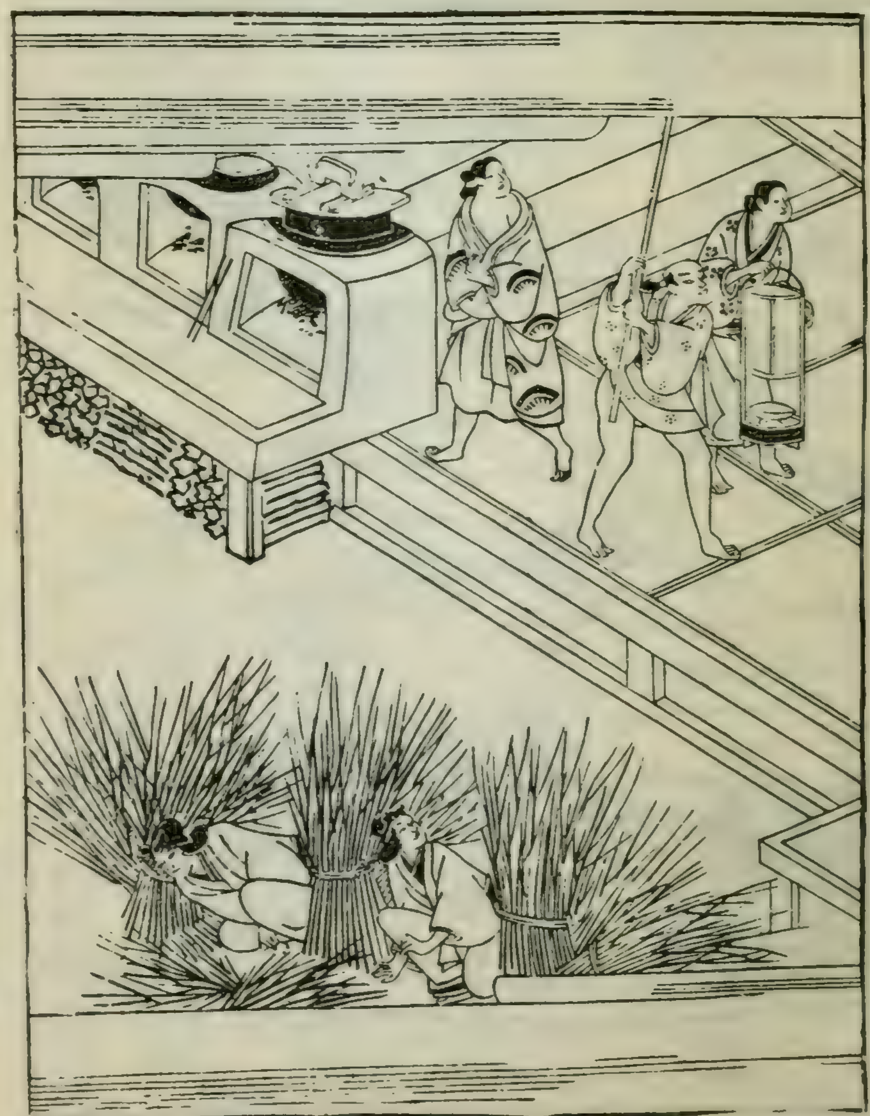
吉ぶたにでつくはせ。まけばら立ては旅人の弱手を見すまし、むたいなるさか手をこひて渡世とすれば、いはねどしれた雲介。相座敷に勧進比丘尼のうつくしき者が二人とまつてゐると、勘八がさゝやくに、幸のなぐさみ是へよびて哥うたはせ、小遣錢少しくれて、念仏講にせよと九助がざいをふれば、十藏悦我がしこなしてつれてくべいと、二人が部屋に立越遠慮なくおこして、奥座敷の旦那衆が哥をのぞまるゝ。うたうてきかせといふに、観了さわがず近比是は迷惑な。今日十四五里の道をふめば、殊の外くたびれ聲すつきりと出ませねば、ゆるしてくださんせといふに、聲の出ぬが面白い。是非にといはれて詮方なく、然ばそれへ參らんと、先へもどして兩人あのゝものゝを耳にいはせて、衣紋つくろひ座敷へ出

れば、やから組共悦、さあ茶がわいた酒の燗もつてこい。うけた酒のあがらぬに、なんぞうたへといふ事か。くわりんうたや。いやお前から。いやそなたからと、互にじぎはするはずの事、なんのかのなしに今當世のはやり祭文。一ッでこらへてくだんすならばと口かためさせて　是おめつた祭文　そんも〳〵うたてや申たてまつる。あまのお吉が戀衣。きるはたつどうがあくしよなり。まんづ忠藏はあかしより、親の勘當うけきたり、よゝの末には尾羽をからして紙子の大臣。手代不兵衛がかせぎにて、大ぶんの富限となりけるを、八百よろづのこけはらひ、姥は宿にて是をさばく。是よりおごりし無分別、かなづちろんのしだされて、うちわりばんじよとなりしとかや。そも此大工惣兵衛が惡のこんげん尋るに、もとがしらざる事なれば、是より先はうたふまいぞや。あくん〳〵るしのさいなんは、籠舁の詞で七分とうやまつて申と、今様のはやり祭文、あれこれませてうたひけるに、皆々うつゝをぬかし、都にはやる祭文ぶし、白らい面白い事、とてもの事に今宵は我黨がだいてねるきざしと、思ひがけなき無分別。さし



あたりての返答なく、わたくし風情にかたしけないお詞。どうなり共お心まかせ。さりながら今というてはをかしからず。戀は忍がたのしみ、夜半すぎなば我〳〵が寢間へ御しのびましませ。其時は是　、

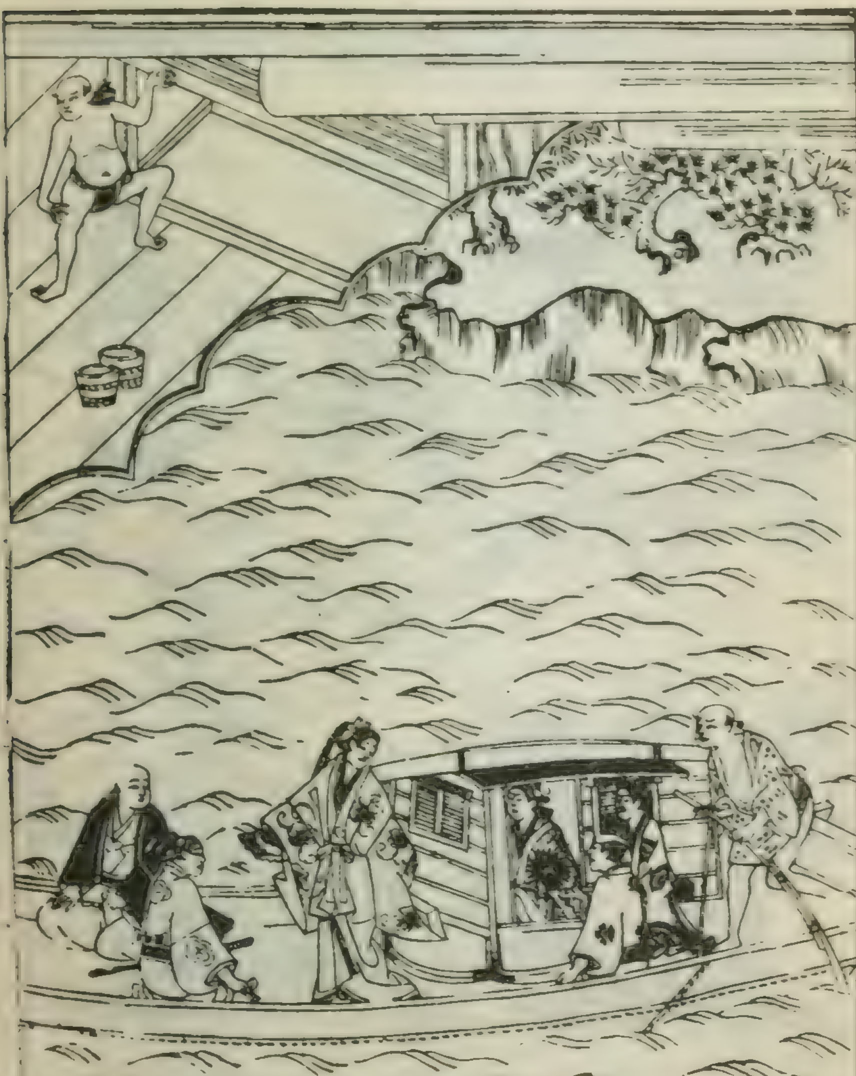
もとの所へ立歸り、角ては爰にあかされず、所をかへてと身づくろひして、からうす部室にしのび入、むぎわらかづいて鼻息もせず、奥の樣子を聞けるに、あんにたがはずやから組、時こそ今なり我ゆかんいやおれからと立さわぐ。中にも十藏分別して、所詮籤どりして長とりたる人ゆかれと、量見するは腹筋な事。是依怙なき智恵かなと、角内が一にあたいておりやう、二のくじは勘八とりあたりぬ。殘る者ども是非なく、はやくしまうてこいあとがいそぐに。程なくさし足、そこらあたりを目くらさがし木枕ふたつより外なんにもなし。扨は寢所かはりけるかと、其次の間にしのびけるに、折ふし其座敷には西國がたの侍四五人とまり合しが、襖あけたるにおどろき、五人一度に目を覺し、つぎ耳にさゝやき、刀の鍔元くつろげ待けるにぞ、勘八角内夢にもしらずしの



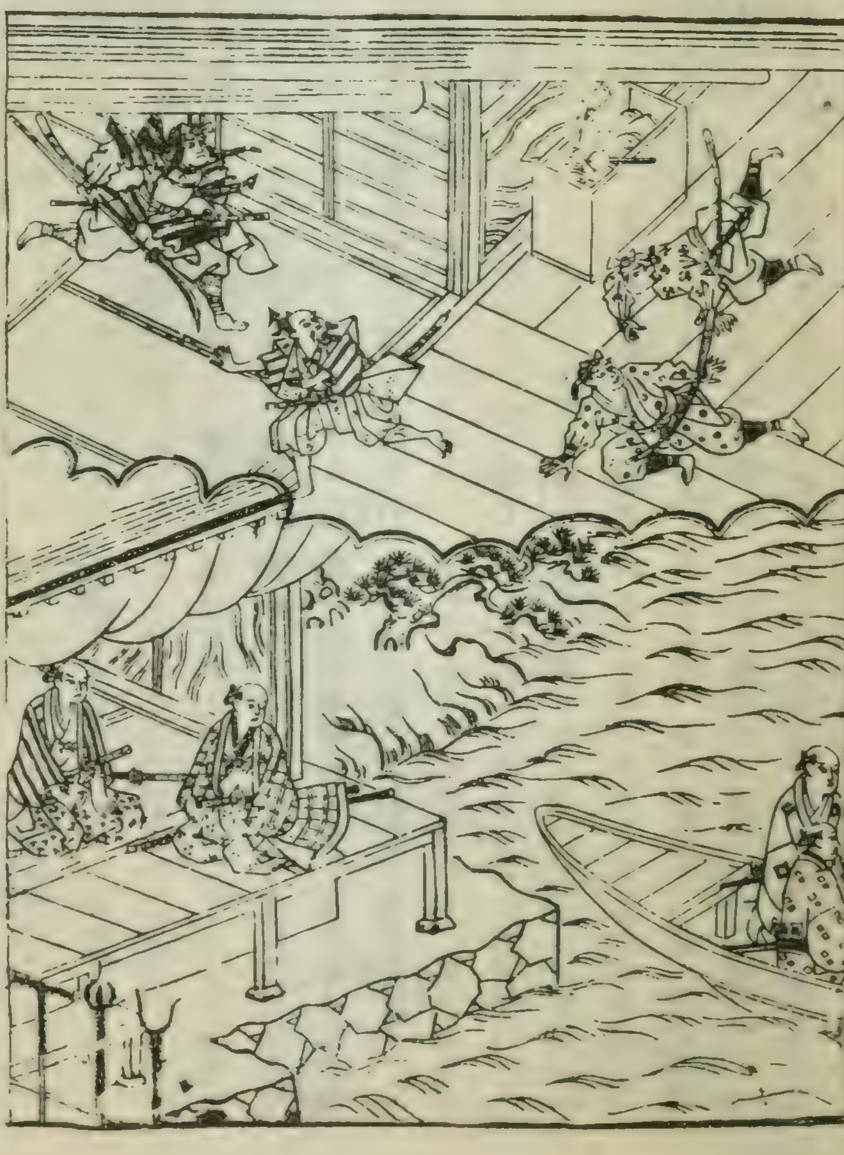
び入て、手をさしのばしさがすうちに、くわんざしの手にあたりしかば、戀路の事は打わすれ、ふところにいれんとせしを、盗人のがすなと拔討に兩人共に切たふす。一家おどろき、手に／＼たい松あんど提灯かた手には手はうき鋤鍬引さげ立出、様子をきいて、のこる三人のからめとり。所の代官所へうつたへけるに、くはしく御詮義とげられ、盗人にきはまり、籠舎させ、西國のさふらひ衆には、御褒美つかはされ、國もとへくだりけるにぞ、観了今義はいつにげたるともなく、其夜庄野迄立のき給ひけると也

㊃ のり合の女舞

庄野より石藥師へ廿三丁。いそいでゆけば夢かうつゝか、まだ明がたの鐘を六ッ打比に東の山もしら／＼と四日市迄二里半の道、宿／＼に朝食こしらへすると見えて、人家に烟たえず。市松が丸裸になつて、海道のまん中にて、かやつぶにぎつて瀧をながす風情、母親かけ付朝風いとゞひやゝかなりぬ。やれ風ひいて世話やかしてくれなと、着物片手にうしろよりきせるは、げに



子を思ふならひ。今よし是をながめて、觀了が袖をひかへ、あれ御覧ぜよ、いづれにても子程大切なるものはなし。かゝる鄙にも親子もろそてくらすは、あつはれあやかり者なり。我はいかなる因果のつたなうして、父には當歳にてわかれ、母の面影しか〳〵覺ざるうちにわかれて、此年月まで父もなく母もなし。いづれの國にかおはしまさんと、よる打石の、あてどなく〳〵此所までは來りぬ。扨岡崎とやらんへ、道の程いかばかりととふに、觀了もらひ涙して、されば先桑名といへる所へ、三里半もあるべし。宮へのわたしは七里の海上、それすぎて、三州迄は七里半なり。くたびれ給はゞ馬に乘給へと、宿はづれからしり馬、桑名まで五十八文。のつたり〳〵やすいものと、小室節うたはせて、行に程なく渡し場に



おりて、また舟にとびのりけるにぞ、はや出舟して乘相の衆心〳〵の咄の中に、京より尾州名古屋へ行、京女舞の小勝乘合けるにぞ、舟頭の作七が是を見しりて、これ〳〵旦那衆咄をやめてもらひたい。そこにござるお女郎は女舞の小勝様じや。年に一度づゝ名古屋へ芝居しにござる。こちとらは見る事

のならぬ身、なんと此舟のつくゐひだ、舞が所望したいが、何茂様はなんと思召ぞ。のり合皆〳〵口をそろへ、是は舟頭が智恵ぢや。旅は道づれ浮世は情、舟にのり合も他生の縁。一さしまうて見せ給へと、口〳〵にのぞまれ、さすが岩木にあらざれば、心よわくもずんど立、所は爰ぞなるみ潟、幸むかうに野間のうつみの見えて候。あれについて舞申さんと、扇子おつとりまひ源よしともさいご物がたりそも〳〵平治元年十二月七日の夜の事なりしに、源の義朝公には、衛門の守信頼にくみし給ひ、侍賢門の夜軍に打まけさせ給ひて、東國のかたへ落させ給ふ。御供には、嫡子悪源太義平、二男中宮の大夫進朝長、三男兵衛の佐頼朝、かれ是以上廿余人中にも悪源太義平には、北國勢をぐすべきとて、越前の方へ落させ給ひし所に、不慮に石山寺にていけどられ、六條河原にてあへなく首をうたれ給ふ。次男朝長の御事は、夜軍に膝の口をのぶかにいられ、美濃の國にてはて給ふ。三男頼朝公には弥平兵衛が手にわたり、ひるが小嶋にわたらせ給ひぬ。御父義朝公には御下人なれば尾張の國此野間のうつみ、長田庄司が舘にいらせ給ふ。然るに長田心替を仕り、義朝公を打たてまつらんはかり事に、四季の草花を臺に作らせ、酒をさま〳〵にすゝめ申、其後おのれが婿の鎌田を打んと正清を召よせ盃すこんかさなり、鎌田正躰なく見えし所を、かねて期したる友柳、もつたる銚子を鎌田が面へさつとかけた。心得たりと正清友柳が髻をとつて、膝の下にくみしく所を、長田とびかゝつて一太刀つきとほせば、正清申けるは情なしとよ長田殿、さやうにはせられまじと、前へ引よせんとせし所へ、かくし勢十二三人とんで出、一かたなづゝとはおもへ共、十二三がしよ手をおひ、つひにむなしくなりにける。それより長田義朝公の御前にかしこまり、御吉例にてたがみの湯殿を申付て候。御行水あそばさるべしと申あぐる。君よろこび給ひ、はや御湯殿に入給へば、はじめより金王丸御あかに参り、御そばをはなれざりしが、はや御ゆかたをこはせ給ふに、音する者のあらざれば、金王腹を立、ゆかたをとりに行けるにぞ、風呂のうちよりしきりに御手をたゝかせ給ひ、金王丸鎌田や有と、二三度よばせ給ひければ、かねてごしたるきつ七五郎、はつとこたへてつつと入、ゑしやくもなくむんずとくんだ。心得たりとの給ひ、二三間なげ給へば、うしろより弥

七兵衛、濱田の三郎、左手右手より立かゝり、二刀づゝさしとほす。かゝる所へ金王丸かけ付、二人共に切てすて、御そばに立より、金王丸にて候。御心はと尋しかば、たへがたき御聲にて、口惜や長田めにたばかられぬ。千部万部のとむらひより、長田が首とつてゑさせよと、是を最後の詞にて、つひにむなしくなり給ふは、なうはかなかりける物がたりと、舞をさめけるに、舟中の人〳〵同音に、扨〳〵まうたり名人と、どよみの聲のやまざる内、舟は宮に付たりぬ。乗合あまた有中に、乗物つらせたる娘、小勝をまねき、面白い事をみて、旅路のうさをはらしぬ。何とぞみづからが國もとへも御越あるべし。すなはち岡崎と申所なり。かならずと約束して、姥とみえしにさゝやき、黄なるものを遣されしは、かたじけなき仕合。をりをもつてゆる〳〵御礼申あげんとわかれぬ。観了今義此息女の住所、岡崎と聞より嬉しく、乗物にはなれず行は、また戀路なり

㊄ さるで戀する十二段

熱田大明神よそながらふしをがみ、我身のはては何となるみがた、ふりかへり見る笠寺、天りん山福りうじ、此観音は旅人とおなじく菅笠めして、衆生をたすけ給ふと、普門品を口にとなへて行里ばなれ、ちりふの宿迄、足をはやめて三刕岡崎、乗物の入かたは城下の町屋にはめづらしく京風の家作り、二間の格子三間の見世、一間の入口へ、六尺ゆたかにかきこむ。はるか跡より詠めて、あつはれ都にもおとるまじき手前ぢや。所にてはいかなる人ぞと尋しに、越後屋の善三郎とて、當國の有徳人、商賣に天秤はり口たゝいて、よの事せぬ、氣さんじなくらしと、念比にをしゆる。扨は爰ぞと観了さき立て案内。たそといふは手代らしき者。我〳〵は都方の者、子細あつて尋に來りぬ。旦那たるべき方へ、ぢき〳〵申上度よし、善三郎立出兩人に對面す。今義おめたる氣しきなく、ゐさいは此巻物を御覧あつて、よろしく御介抱を頼入とあれば、善三郎一巻のひらき見るに、大旦那の勘状書よこ手をうつて、して〳〵是は何として所持ありしぞ。されば我權之助がせがれなり。母はいやしき流の身、行方なきをなげき、方〳〵と尋ね、先武藏の方へ下りぬ。何とぞ父のゆかりを思ひ、力共なり給はゞ、一生の本望、万端頼のよし。お氣遣なさるゝな。追付御運をひらかせ、

名跡つがせ申さん。將又江戸において、わたくしの古傍輩、三ッ屋勘七といふ者あり。是へも御くだりあつて、其後思召かたへは、此方より人をそへて、お袋様の御行衛尋させ申さん。先奥座敷へと、主從の氣縁わすれぬこそ、頼もしき心ぞかし。鄙にも戀は猶やさしく、かたちを九重にまなびて、しなつこらしき物ごし、あてやかなる風情、京におとらぬ善三郎が娘、今年十五の振袖、都にのぼりて、山下半左衛門座、坂田藤十郎、大和屋甚兵衛が芝居見物して、戀きやうげんをよく見覺て、國もとにくだりけるは我魂へのみやげ。腰本の六が月夜に小判ひらうたる顔して、娘に戀のたきつけ、嬉しやよい鳥がかゝりました、お姫様の世ぢやと、今義がうはさを語お前さまの爲にも旦那様、わしが爲には二重旦那、さればこそ御器量のうつくしき。およそ百万騎の大將と申ても、はづかしからぬ御姿。鼻のかゝりが小野川宇源次、居すがたは吉澤あやめ、口もとが水木辰之助、近うたとへていはゞ、京の芝居にてみし役者の内、目のはりは大和川甚之助、せいの高さは岩井左源太、惣じて位たかくけだかく、どうともかうともいふ



にもいはれぬお衆がござんして、おもひもよらぬ病下地、一人ならず今一人は廿ばかりの若僧、大和屋甚兵衛が目付に其まゝ、鼻大ぶりにして、恰好は中村七三郎にまがへる程なり。兒子か伯父子がして、どうしやかうしやと伯父には若し兄様でもないかして、さしあひな咄もあり。なんぢややらしらぬがと、木に餅のなる咄を聞て、娘の顔は紅葉盛に色をまし、ぬれのしかけのちゑくらべ。暫思案し、よい事おもひつけたり。我〳〵がもてなしに、今宵からしてしかけんと、手がひの猿にもみつな、みづからひいて行は戀の懸綱。打かけのすそ吹かへすもみうら、腰本にはこくたんの三味線、今義が一間に行、はづかしながら私は善三郎が娘にてい。長の旅路の御つかれをいさめんため、秘藏の猿を召つれたるは忠なり戀也情也。嬉しさの身に餘ほどなる今義、観了が手前をはゞかり、すんとした日遣のはしに雲かゝるよそほひ。是なん心のあひぼれ。猿ははしの哥にてくどく娘のさかしき。猿は山王まさる思ひを書つくし、たとへてくどくは牛若時代、是程しやれた世の中なれど、見ぬ戀ゆゑにあこがれて、くるは誰故そさまゆゑ。一夜の情とあたまから、鬼一口にまさるめでたい御身のうへとくどきけるにぞ、今義猿をいだきあげ、我はみ山のこけざるかして、まだ里なれぬ戀の哥てや。爰にも人がきくぞかし。もはやかへられとかいやりぬ。こしもと是を聞かねて、ふるきをもつてあたらしく、いはねばならぬ十二段の引語に仕御あいさつ申べし。其御詞はさる事なれ共、九重の塔がたかきとて、鳥類つはさが羽を打たてゝとぶ時は、北塔かならず下に見る。駒にけられし道芝も、露に一夜の宿をかす。とかく色には情あれ。情は人のためならず、都の君とぞ語ける。観了聞かね、我〳〵は沙門の身、殊に此もの今こそ若衆盛なれ、近日出家さすれば、女たる者の手より物とる事もならぬぞかし。其うへ善三郎殿へきこえては、我〳〵が一分も立ず。はやうかへられ、只拙僧はねぶたいとわざと大あくびするにぞ、娘をかしくふるい事ばかりぼんさま、戀路の道には三界のお釈迦様さへやしゆたら女に契り給ひ、らごら尊者をまうけ給ふ。諸法實相と說ときは、峯の嵐も法の聲、万法一如と聞ときは、谷の朽木も佛なり。仏も我も同じ事、かうした事を聞分ず。御承引なきならば、こよひの内に舌くひ切、怨霊となりかはり、今に思ひしらせんと、涙をこぼし

歸り給ふを、觀了おしとめ、よのうらみならば雲に掛橋およばぬ戀なれど、其怨灵にはした地おそるゝ事のあり。あすは此事善三郎殿に聞え、閻浮の塵ともならばなれ、命にはかへられず。なびいてこませと氣をとほし、お下地はすきなり御意はよし。此うへは共かくもと、娘と手をとり奥の一間にこがれにけり。腰本はしく〳〵をどり、觀了に取付、さあぼん様あちらも婿が姝の田のかり染ならぬはこなさんとわし。緣につるれば遠江、岡崎女郎衆の口あんばい、見てくださんせとだき付ぬ。いや〳〵愚僧は女ぎらひ、ゆるしてくれよと尻ごみするもをかし。女たるものゝはぢをすて、くどう申はこなたのあやまり。是非に及ばぬ是迄也。所詮我生ながらとりつくと、口をあいてかゝれば、觀了おどろき、をがみますどう成共、心まかせになりませう行力をもつていのらば、怨灵もおそろしからねど、水海で一いのりしまうて來れば、爰にていのるもふるし。氣をかへててんぼ精進おちようまで、さあござれというて夜着をかづきぬ

御前義經記 卷三終

御前義経記

江戸吉原
けいせいのやりて

四之巻目録

両親ゟ川名がひさりし

三 江戸錦郎山伏

吉原にあげ屋追善おもうて
衣へもう海比丘尼の口上
けいせいは手段ま
女郎人形

両親ゟ川名義朝の幽霊

四 枕より川名父の悪性

法師と花寺高尾あげまれ
女郎鬼より川名揚屋の座敷
母のむかし縫
乳に川がゝ見

㈠ からしり馬に二人乗

夢と見てまだ夢ならぬ夢の浮橋、わたりかねたる身なりしを、わすれて善三郎が娘とふかい戀路のあだ枕、情の瀬ぶみあらはれては物なし。とかく武藏にくだらんと、折をもつて此事善三郎に語り給へ。御心まかせになさるべしと、大吉日をあらため、門出の御祝義に、四季の草花を臺につくらせ、娘がよそ〳〵しい顏してしやくをとれば、善三郎は拍子舞。万〳〵歳と君が代を、いはひをさむる盃の、數かさなりてわくいづみ、つきせぬ中の友白髮、猶行末の目出度は、長生殿とかなでける。おもてには乘かけ、立かご、花毛氈をかゝやかし、揃紋の六尺四五人お出をまつも久し。時なるかな都を出し其時は、草鞋股引も我と我身にさせて、からしり馬も今といふ今、乘掛花やかに觀了がゆらりと乘、今義はしゆすの立付籠のうちゆたかに、あつはれゆゝしき身ぶり、天性そなはりしかたちと、善三郎が壹人きげん。近日御のぼりあるべしと、中〳〵懇切なる挨拶。娘と腰本は物いはず、わらはず、なくにもなかれず、只御息災とばかり、心に別をたんとふくませ、見おくらんとするにはや五七町も過させ給ふは、さりとは殘念戀ぞかし。折こそあれ鞍馬山福藏院には、觀了山を出たる事、評定非道にきはまり、追手としてあひ弟子の雲海、元來元九郎に付て男色の遺恨ふかく、此度を幸追掛存分をはらさんと跡をしたひ、先東海道の方へさしかゝり、宿〻にて兩人が行衞を尋、三州岡崎をとほり、善三郎が見世に腰をかけ、鼻紙袋よりこま銀出し錢かはんといふに、手代らしき親父、老眼とみえて目がねをかけ、是は似せでござるといはれて、見給ふごとく出家なり。正しく此銀は御幸町岩がかゝが初寅參ニくれたり、見しりごしに此樣な惡銀つかひぬる心からは、世わたり暮しかぬるは尤なりと、にくていひして外の銀出し兩替させ、たばこのむ煙はてしなく、爰にても觀了が事を尋しに、善三郎氣を付子細をとふにおちず。かたるほど樣子しれけるにぞ、何となきていにもてなし時をうつしけるに、雲海おどろき、よしなき長物語に日ざし七ッに過たり。何とぞ藤川まで行べしとからしり馬のかりきり、ゆらりとのつてしづかに行。にくさもにくしと思案する所へ、休齋といへるとんてき、此噂をつく〳〵聞て善三郎が前にかしこまり、きやつが行

まゝにしては正しく口論あるべし。しかれば御出世のさきうちをるにひとし。私が知恵をもつて京都へかへさん。何と大口具足はあるまいかと尋しに、さいはひ質物のながれ黒革をどしの鎧あり。能大夫の金作がながした大口もある。是さへあれば心安しと、俄に鎧をちやくし大口の紐引しめ、長兆頭巾ふか／＼と、白柄の長刀小脇にかいこみ、下男の六介にちやうちんの用意、見えがくれに供めされ、追付かへらんさらば／＼と、うら道よりぬけ出、雲海が馬のあし跡をしたひて追かけ行は、どうした分別ぢやといづれもふしぎをなしぬ。是をばしらぬ雲海駒に鞭をうたせて藤川のこなたそう田のかう迄付たりぬ。日影山に小がくれ人顔さらに見えわかぬ所へ、休斎くだんの姿にて追かけ、馬方にむかつて、此旅人

をわたせと、長刀ふりまはせば、さす　てば、此馬どうてんして岡崎の方へに
が下郎の浅ましさ、すはばけ物とけで　げたり。のぞむ所と追かけ馬の尾づゝ



んし、馬をすてゝ藤川の方へにげたり　をしつかとどり、うしろよりとび乗勢
ぬ。雲海おどろき馬にけはしく鞭をう　弁慶正尊がしり馬にのりたる風情雲海

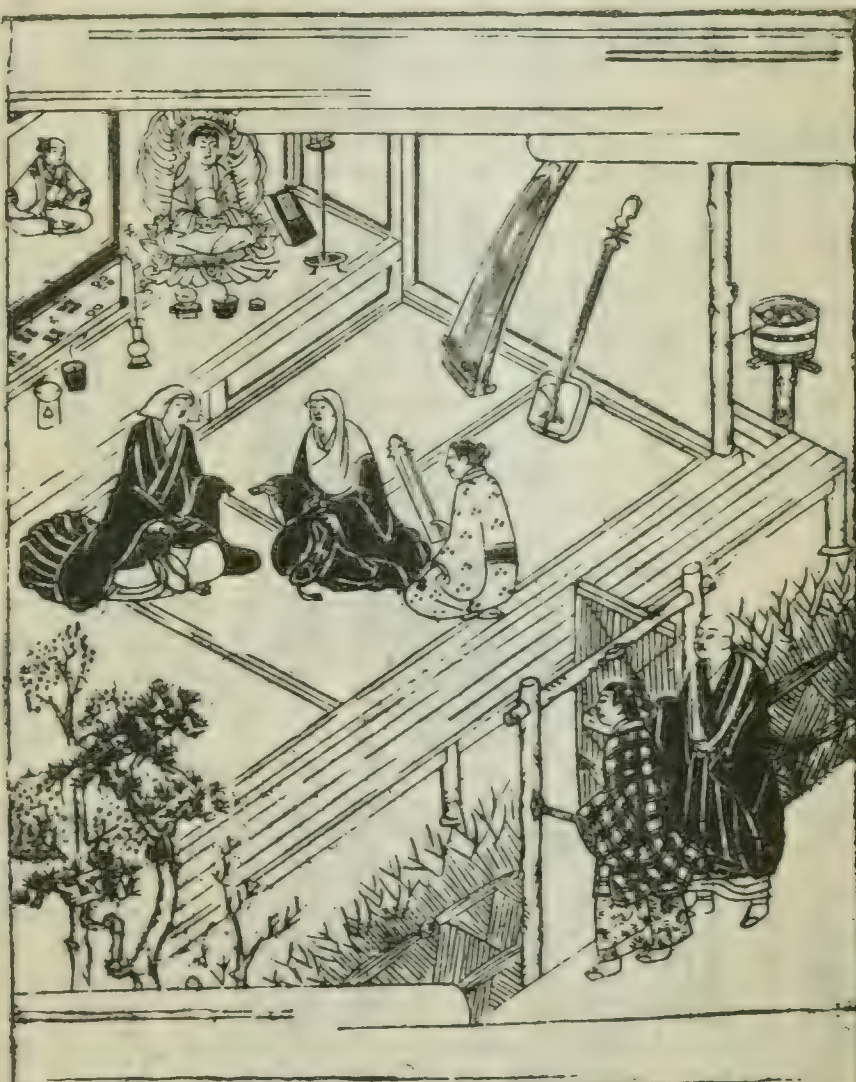
に手綱をとらせ、休齋はうしろより鞭をあはせて行程に、とある辻堂にて雲海をおろしとつておさへ、汝元來木石なり。つみなき觀了が身を福藏院へさま〳〵あしくうつたへ、あまつさへ討手にむかふよし、是男色の遺恨よりおこりし事なり。佛神非礼をうけ給はず、汝が命をとれよとある。多門天の佛勅によつて、是迄追かけきたりぬ。さもあれ惡心をさつて都に歸り、何心なく佛にかしづくにおいては、命乞してえさすべしと、まとらしくいふに、本より雲海心に覺えあるよこしま、目前むくひ來れるのおそろしくさま〳〵降參し命をたすけ給はれといふに、休齋をかしく、惡につよき者はまた善につよし。其善にもとづく事、多門天の御ないしやうにかなひけるよと引おこし、然者かへれとさきに立て行ところに、むかうより善三郎が下部挑灯とぼし來りぬ。休齋見て、其挑灯をかしてえさせよ。此者子細あつて京都へ歸るやつ也。桑名までおくれとわざとむたいをいひかけけるに、此男わぢ〳〵ふるひ、私は旦那がゝり、こちのかみ樣をむかひにまゐる。只今はごゆるされと泣聲するもをかし。是非おくらぬと目にもの見すると、長刀をふりまはせば、いかやう共仕らん。でかしたいそげと聲をかけ、其夜半の比までつれあるき、是よりいそげとつきはなし、八ッ打ころ休齋は歸りぬ。扨も今義觀了きのふにかはる東くだり、供まはりびゞしく、しとやかに行道ばか、おきつ神原打すぎ、浮嶋が原に籠たてさせ、はさん箱に腰打かけ、まことに此所は東西三十里の松原詠にあかぬ風景。昔源の頼朝伊豆の國より御謀叛のおぼしめしたゝれ、此嶋に陣のとつて暫休息ありし所に、又奥州より御舍弟九郎判官義經、おなじく平家追討の爲、夜を日についでのぼらせ給ひ、御兄弟の緣ふかく、此所にて御對面あつて、義經頼朝公の院宣をかうむり、西國に發足まします、おごる平家を打ほろぼし、名を一天にかゞやかし、名將のほまれをとり給ひしとかや。我義經ほどにこそあらず共、せめて一ッの望をたつし、二度父の家をたて、會稽の耻をすゝがんと、朝暮是を天にいのる其印有にや、かゝる風情にて武劦にくだる事、天運につきぬ所と、悅の盃壱ッうけてさしける。觀了いたゞき、げにおもひまはゞせばそちはよしつね、愚僧は武藏坊にたとへて、折から法師なり又兄分なり。惣じて人界は七九八難とて、あしき事つたへばよき事來るぞかし。心を盛の

花にたとへて散事をわすれ給へといはひける。中場江戸より上方へのぼる旅人供二三人ぐして今義のそばにかしこまり、そつじながら何茂様方には三州越後屋へお付なされし京都のお客様にてはあらずや。觀了聞てお尋の者共也、してをの〳〵は何人ぞ。さん候江戸において三ッ星勘七が家頼先刻岡崎の善三郎様より御兩所の様子飛脚をもつて申越候。御くだりおそきに付御むかひの爲參上仕候と、よいとばかりいうてくるは夢かまとか嬉しさ身にあまり、かゝる時節長居してはあしかるべしと、いさめにまかせくだらんと、送りむかひの人數都合其勢十四五人、武刕江府にぞいそがれける

㊁ 傾城なみだ川

籠いそがせて行にほどなく品川おもて、御とうりうにゆる〳〵御見物あるべしと、六尺腰すゑて日本橋何町目、三ッ星が屋かたにかきこむ。今義すぐに奥座敷觀了馬より續おり、手代あまた有けるに、不殘一禮して又奥にとほる。亭主勘七罷出、ま事に思ひよらざる御くだり、家の面目世のきこえ、あつはれ善三郎と某程主從の奇縁ふかき者もなし。何分二三ヶ年も此所に御座あるべし。よろしくはからひ申さんと、近比滿足なる一言。種〻の御馳走毎日〳〵の御遊山隙なく、明十七日は父尊靈の十七年三星が屋形には僧を供養し念佛の聲たえす。佛前には香をくゆらし、うえにつかれし者には祿をひいてよろこばしけるにぞ、よき時節くだりあはせ、思ひよらざるとふらひ、父うへ成仏うたがひあるまじ。いで御墓に詣て一遍の念佛なり共申さんと、觀了と只二人、增上寺に參給ひぬ。しるしの石には歸雲教山居士俗名三津氏權之介施主三ッ星勘七賴もしや我子として親の戒名をもしらず、親子の緣もいまだつきざる事の嬉しやと淚を袖につゝみ、しきみ折かへ手水猶きよらかに、稱名の聲かすかに、觀了は法花經を讀誦し、名殘を石にいひのこし、淚かた目に道の草木を詠行かたほとりに、世をのがれたる一ッ家有。竹の戸ぼそに小柴庵とうつがくは、つたなかりし女筆、あやしく立よりのぞき見るに、來迎の三尊木佛にきざませ、風流なる男のすがた繪。前に香花をそなへ、假名にて書とむる過去帳しほらしく、壁にあた

せる琴三味線、是歡樂のひつこみならんとよく〳〵見れば、あるじとみえしは三十ばかりの比丘尼すぐれてかたち美しく、糸よりほそ〴〵かりし手して、かすかなるかね念佛の聲猶すしやうなりぬ。かゝる所へまた同じ年ごろなりし尼衣、花の帽子に白玉の珠數、下女とみえしに卒都婆もたせて來るすあし、ながれの末のあゆみぶり、此庵に來りて案内す。あるじしもくをとめて誰ぢやとこたふ。いやくるしからぬ者我も同じ尼衣、けふ心ざしの名日にあたりぬ。御身様を賴まし供に廻向仕度ねがひ。安き間の御事なり、こなたへと奥にともなひしかば、かの尼佛前を拜し、さりとはうらやましき御住居。お名はと尋しに、あるじ涙ぐみ、みづからは玉山と申ぞかし。よそめにはうらやましげにも見ゆべし。色こそかはれ同じ浮世に同じ身なれど、なき人の只面影の身にそひて、袖にあまれる涙川の、かへらぬ事をくい〳〵思うてかやうにさまを替すがた。けふは其人の十七年にあたりぬ。せめては心ばかりのとふらひ。扨そなた様には何ゆゑ御遁世ありしぞ。何故とがめられては猶はづかし。罪をほろぼす爲に懺悔物

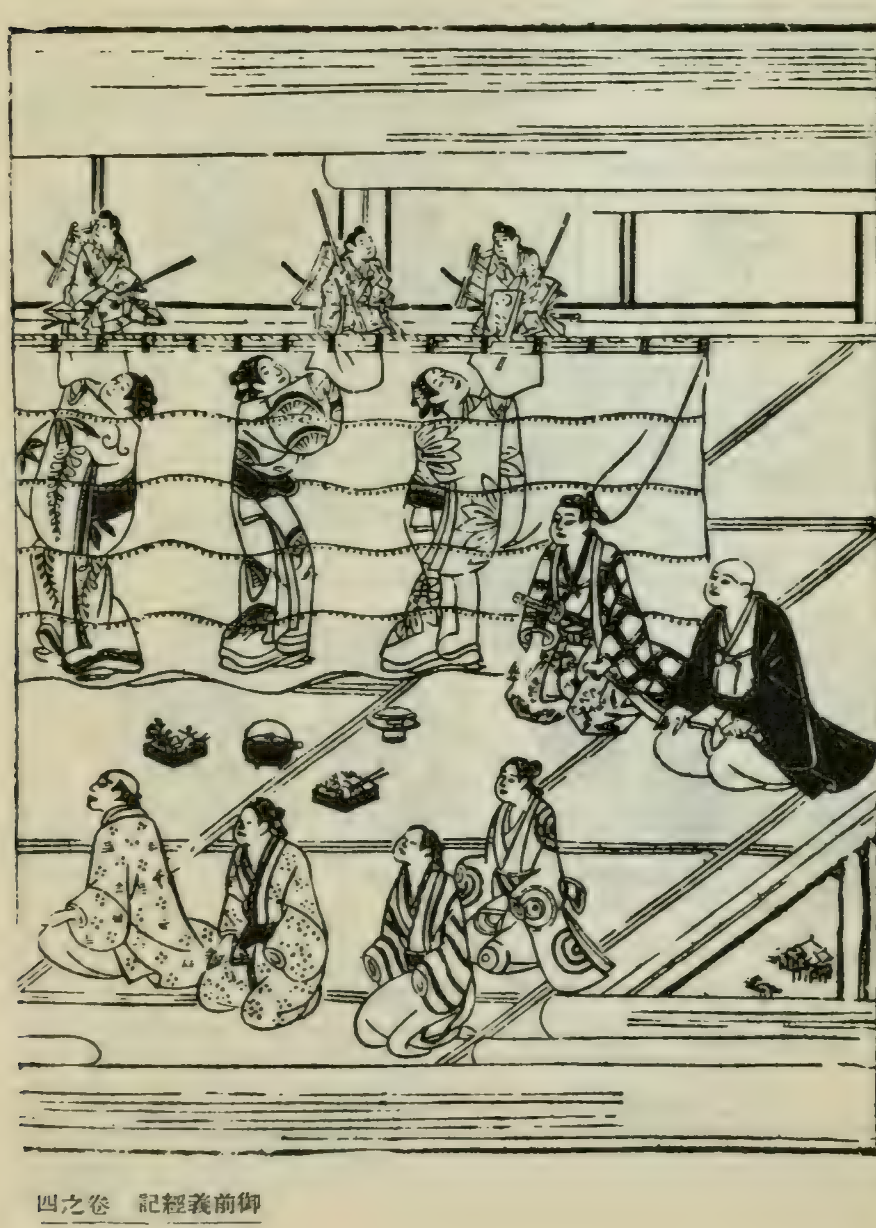


語申さん。たま〳〵うけがたき人界に生、士農工商の家にも生ず、または琴棊書畫をことゝする身にもあらず。あるが中にも河竹の身、名はみふねと申て、柴屋町のつとめ盛を、さる御方に身請せられ此との爰に見世ありて、年毎にくだり給ひ、夜るの寢覺のさびしきとて、われも一所に東の旅、おもひよらずも爰にくだりぬ。お出入の衆には奥樣とよばれしかど、頼し方は一年に三月をかぎり、殘る月を都にて詠給へば、只もの思ふばかりぞかし。なつかしきは日に千度文のたより筆にて物いふたのしみ。折〳〵淺草の觀音樣へと目黒の不動、又は堺町木挽町なんどへ氣はらしに出れど、手代衆の手前をはゞかり、奥座敷にて哥がるた貝合双六より外たのしみなし。一兩年ほどぶり御くだりもあらず。樣子をきけば、京にてまた〳〵嶋原のときは樣とやらんを請出し、妻と定めて私の事をわすれ草。戀の若生に男をねとられ、くい〳〵おもひつれ共、流たつる身のもんまうな事よと心に是をながして、文斗のおとづれ。はる〳〵くだりて何の詮なき身なりしに、其男此世を見のこし、十七年以前に世をさり給ひぬ。今なん恨も戀も身のかぎりとおもひ定、かやうにさまをかへ御跡をのみとむらふばかりなり。あるじ聞て世にはにたる事のあるものかな、わしが身とても同じながれ、吉原にて小紫と申て、すこしは全盛したる身なれど、京より毎年くだり給ひし、水な男にかはゆがられ、我身をまゝにさせ品川の下屋敷にて花を友とし、榮花の春をよつかさねけるに、人の命はかぎり有。五年が間都にのぼり爰に此身を捨置、死出の旅路におもむき給ふと、爰な出見世の若衆より、形見もたせてこされし時の我心。あゝ世はいらぬ物と髮切て、夫の爲に佛の道にいる事、さとりてみればくやむ事なし。かくしていらぬものなれば、此繪像を見て廻向をなし給へとをしへける。立よつて戒名をみれば何〳〵歸運敎山扨は三津樣の事か、わしが夫も三津樣よ、まとの名は權之介樣。わたくしのもそれ、お前もそれかと、互に顏を見あげ見おろし目にあまる涙、一度にはら〳〵とながし、暫ありて玉山申けるは、さりとはめづらしき對面。かね〳〵三津樣の噂にて聞しかど、うらみそねみもあるべしと、遠慮いたせしくやしさ。私とても同じ事と、互に昔をかたりけるにぞ、今義觀了はしりいり、最前より、只人ならぬ捨妻と見しにたがはず、親權之介がおもひ人か。

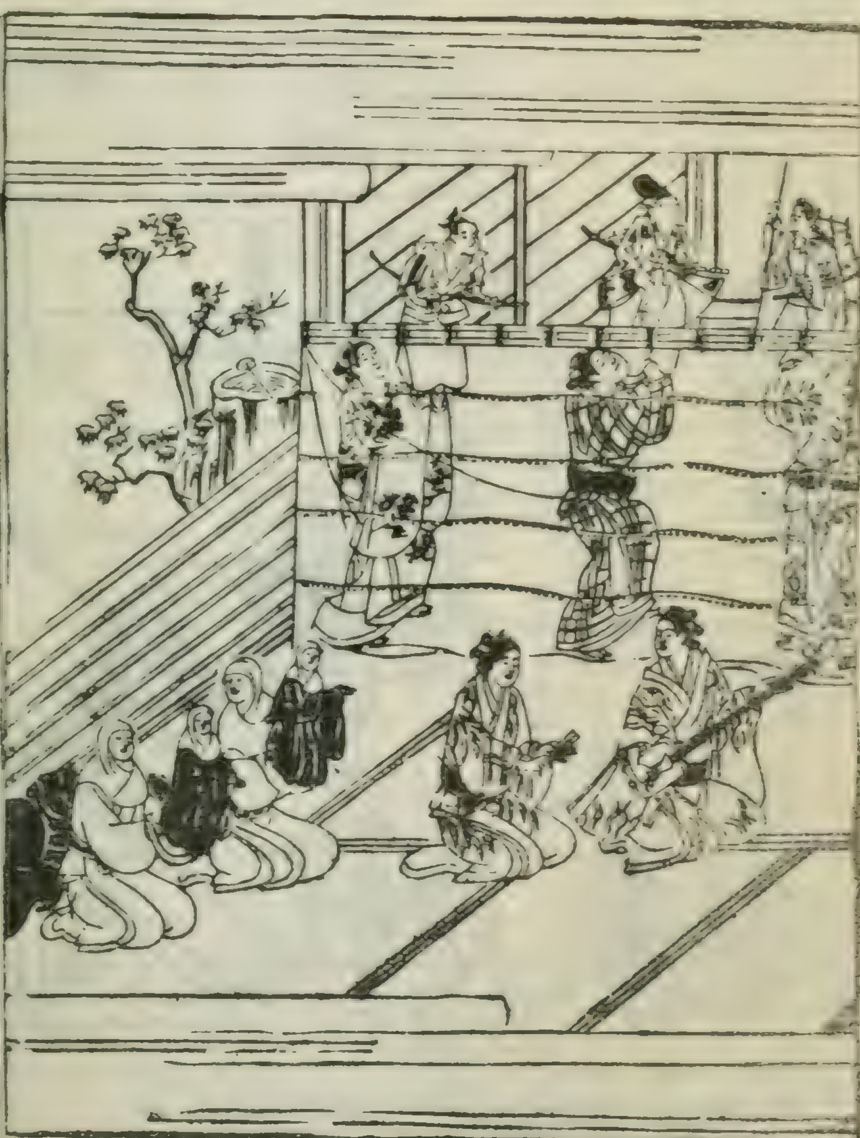
私こそ其三津氏が世悴元九郎今義と申者、母を尋に此所までくだりぬ。今日父の名日に、おめにかゝるはふしぎぞかし。あはで歸りなばねんなうくやしかるべきと、こま〳〵様子を語たまふに、二人の尼おどろき、扨は左様かおいとしや幸明日吉原にて、三津様御恩をかうむりし人〳〵、御追善の爲あげ屋にて、女郎の手づまあやつり興行いたされ、法樂の舞をかなでん。我〳〵とても其人數、あけなば早〻参ぞかし。御同道申さん。忝仕合然ば明日御供申さん。さらば〳〵と夕暮の道、六ツの鐘打比歸り給ひぬ

㊂　野郎山伏笈さがし

一樹のかげ一河の流をたつる尼のかかり庵に、をかしき緣をもとめ、傾國にて父亡魂の追善、今日をかぎりて揚屋の座敷、是非にとさそはれ、日本橋より無常の嵐戀の里にたゞよふ舟のかり切。うき立浪をおして吉原の入口、とにも角にも、ふか編笠をかりの浮世。伏見町堺町、新町江戸町あげ屋町、武藏屋といふ中宿に入そめ奥の一間をわがものにして、戀と無常のていさうを



見るに、二間の床を佛間と定、ちがひ棚をしやうごん中尊に恵心佛觀音勢至の繪像、すなはち探幽の筆なり。草花は時におうじて清〳〵と水にうかべ、名香四方に薫じて女郎衆のつかみだき。夕部まで引のこしたる三味線など𦬇の音樂にたとへ、玉の位牌なんど一段たかく、涙をうかべそなへたり。今義さきに立位牌にむかひ燒香す。つゞいて觀了其外色ある女郎衆、遣手かぶろ揚屋の亭主、聞およびたる三津様成佛得脫の緣にひかるゝ御手の糸、つなぎとめておくならば、今色里の惣大將、肩こす人も有まいと、しらぬ人までくやみけるにぞ、人は一代名は末代と、めん〳〵口〳〵に廻向するは此世からの佛ぞかし。仏事をはりて後、しよゐん座敷にきぬもじの幕、わざと姿のみゆるが命。大夫棚には御簾をかけ、手すりは殊更およそ芝居のごく、上瑠璃は上野屋の高尾今様の半太夫、一番の語て、三味線はぬま屋の葛城、ひく手あまたの中より是をえり出し、すでにはじまるべき所に、玉山壽貞かねてこしらへおきけるにや、おのれがすがたを人形にきざませ、黒染衣浅黄帽子、左には珠數、右に扇子をもたせ、



まん中にかしこまり、東西〳〵扨お座敷へ申あげます。まとに三津様の御事は女郎買のほまれ高く。あまたの遊君に身請させ、付〳〵までよろこばし給へば、大臣〳〵天照大臣にてわたらせ給ひしかど、をしや御命のかぎりありて、とゞめんとするにかひなき水の泡。さらばといふてわかれしより、岸にはなれし根なし草、あはれはかなかりつる身の、我〳〵とても御恩の殿。せめて心ばかりの御とむらひに、くるわのよねを頼、今日追善あやつり仕りぬ。是はこれ主様つくらせ給ひ、くるわにてもつはらはやりし、野郎山伏笈さがしと申肴上瑠璃なり。人形にかけて仕るは我〳〵が才覺。うたふもまふも法の聲。せめて一遍の御廻向頼奉ると、涙ながら入けるにぞ、幕の外より揃あはれをふくみけり

へ是より傾城あやつりはじまり

▲野郎山伏手づま人形つかひ手役人付

一ふれ	秋田彦四郎人形	九文字屋もなか	つかふ
一先立若衆山伏	松本兵藏人形	くわんとう屋みうら	つかふ
一弟子若衆山伏	津川半大夫人形	まる屋の小むらさき	つかふ
一同	袖崎家流人形	下野屋のたかはし	つかふ
一同	沢村小傳次人形	野間屋の八千代	つかふ
一同	玉沢皆之丞人形	さがみやの定家	つかふ
一同	村山九重人形	あふぎやの小大夫	つかふ
一同	西川涵之介人形	きやう屋の和國	つかふ
一同	松本小四郎人形	ふぢやのもろこし	つかふ
一關の侍	市川九郎右衛門人形	かまくらやの君川	つかふ
一同侍	西國兵五郎人形	同あね女郎ゐづゝ	つかふ

役者人形數十一右之つかひて十一人

ふれ人形上下竹杖きいたか〳〵〳〵此度江戸役者色道修行のため似せ山伏にさまをかへ京都へのぼるよし、私の旦那はちかい比より關の奉行を仕故、左様なるうろんがましき者の來り候はゞ、きつと詮義を致され候へ。油斷なく御番をつとめられ候へ。其分相心得候へや

人形はいる 似せ山伏八人何茂笈をおひ、兜巾鈴掛ほらの貝、金剛杖をつかせる 是より上るり文句

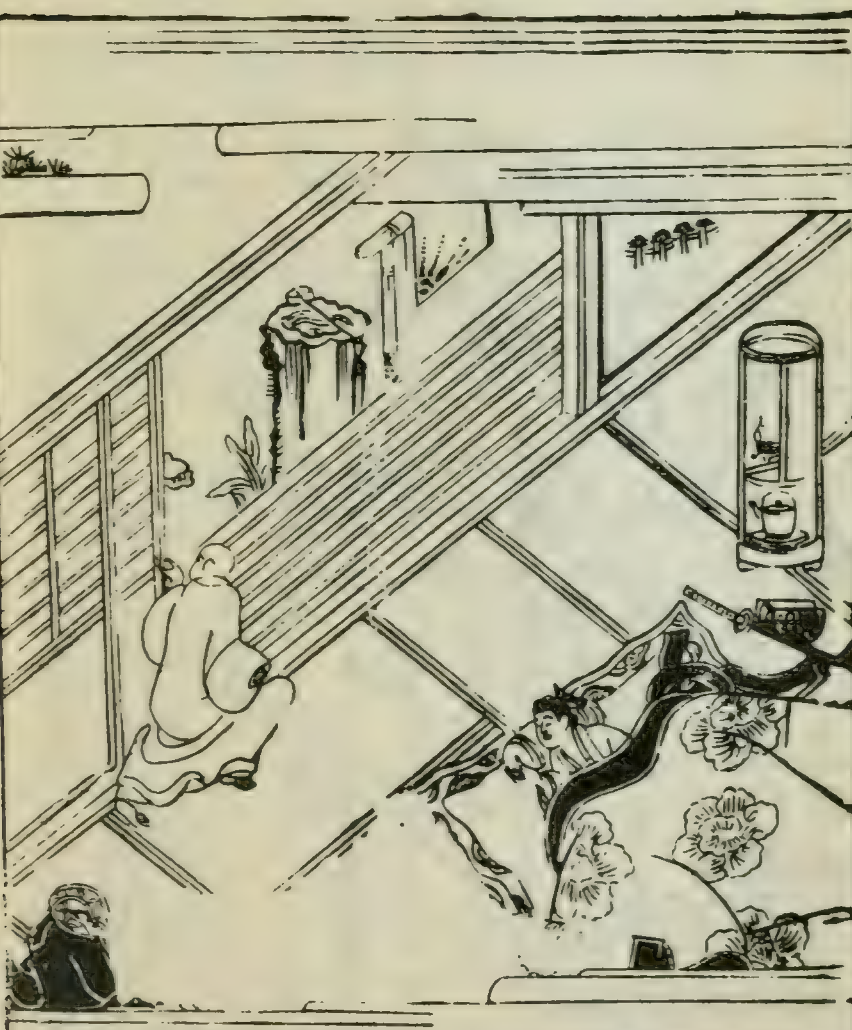
旅の衣はすゞかけの、ほらの貝なき息つかひ、色にまよひし山伏の、戀とおもひを笈にいれ、手にまたあまる金剛杖、やつめの草鞋足くへと、いたい顏

せぬあゆみぶり、けしきあらはにをかしけれ。爰に新關の奉行酒めの太郎うたゝね弥二郎、此山伏を見るよりも、番所より飛おり、あやしき山伏いづ方へ通らるゝぞ、殊に色白、合点のいかぬ山伏。扨はかのよとうなづけば、いや我〳〵は奥州そだちの山伏なるが、江戸に久〳〵すみける内、清〳〵たる水、みがくに隙なく色しろし。さのみ御不審あらずとも、とほし給へと申ける。いや只無用の詮義より、かたはしから笈をさがし、山伏もたぬ物あらば、きつと吟味をする氣ざしと、むたいに笈に手をかけて先一番に先立の、らでんの笈に手を入て、それ山伏はとつこさんこれいしやくぢやう。花ざらこそは有べきに、あらふしぎや此中に、針指針入針やすめ、かけ針ものさしゆびぬきに、五色の糸巻たたう紙、物ぬふ品〳〵こめたるは是山伏の法なるか。もつ共しん去ながら、それ行人となる時は、胎をわけぬる母だにも、女たる身はふ浄といむ。まして女のぬうたるもの、行者の躰にふれぬれば、みつの御山震動し、五躰は天狗にひきさかれ、五百生ゝ魔道におつ。さるによつて鈴掛も手づからぬうて着する故糸針ようい仕るが、ふしぎなるかと答ふればげに〳〵それはさもあらん。扨此笈には女の衣裳、鹿子ぬひはく唐綾紅梅染小袖、蘭奢のかをりふん〳〵と、たゝみこみしはいかに〳〵、御不審は理なり。我がをばは羽黒山の惣の神子にておはするが、歳末の神樂のはれに、衣裳を京にてとゝのへくれとあるゆゑに、八人の矢乙女の、雲の通路行たびに、笈にこめ置しと、まとしやかに陳ずればさもあらんとてさし置、また其次を見てあれば、眉はき紅筆白粉ときさしぐしこまくら長尺あり。是もたしなみしか。返答あらば申させ給へ。兵藏ほとんどあぐみしが、げに俗人の御不審御もつ共〳〵もとより我は山伏の、姿は山の木のはしながら、心は花にそみかくだ。月よ紅葉よ花雪と、愛するは稚兒斗。稚兒のけはひ化粧箱、手あらくさはり給ふなと是もあぢよくのがれたり。然者又此笈には折琴つぎびはつぎ三味線象牙のばちをそへたるは何と〳〵。さんしん我〳〵は諸旦那富貴をいのるゆゑ、竹生嶋いつく嶋、江の嶋の弁才天にて、百座の護摩をくうずるなり。本地へ御くうをおこなへば、めうおんてんをくわんじやうし、くわげんを奏する其ために、琵琶こと三味線もつたるなり。御所望ならば越殿樂に胡德樂、さんしゆきどくきしゆんらく、五しや

うらくにちやうけいし、りやうわうがなつそりか、おのぞみあれといひたつるは、ふるなの辯ともいひつべし。關守うんつくども、とかういふべき事あらねば、さうなく關を通しけると、かたりをはると其まゝに、仏前になみゐたる道心者、かねをたゝいてせめ念仏しきりに往生あんらく國と廻向する事。是うたふもまふも法の聲／＼

㊃ 枕にうつるちゝの悪性

思ひもよらぬ佛事の供養、ときをうつして五夜の鐘、こよひは爰にてあかさんと、あげ屋の座敷をかり枕、觀了只二人精進なれば、色も香もなき床のさびしさ。人こそしらねかはくまもなき物思ひ、かうした所に精進肴はけふがはじめなるべし。かぶろがお風ひかしやんすなといふて來るにもしりめつかはきなひ事の口三味線。今宵はゆるしやず。亭主が枕もとにかしこまつて、親あすの事、そんな事したら罰があたら父様へは私がいひわけ致しませうが、うもの。なう觀了様なんどゝいへば、なんと高尾様とはおいやかと、はやあそれをおれにとふ事か、しれた事よと



夜着引かづけば、不首尾な顔して亭主は勝手へはひりぬ。また其あとへ揚巻といへる女郎來り、觀了が枕もとに立より是ぼんさま、おくたびれかしてはやい御しんなりやう。わしらはけふは身あがりの男待日にあらざれば、ひとりねるのが物さびし九郎様こそ親ごの日、こなさんの爲にはさしわたしの他人。いらざる精進せうより、そこへいてねませうかといふに、觀了にが笑して、なんと元九郎、おれこそ精進おちたと誰が罰あてる覺さら〳〵なし。大事有まいかととひけるにぞ、わしにそれをとはしやる事か、めん〳〵の心まかせがよいぞかし。さりながら明日は毘沙門天の御緣日ぢや。それでもかといはれて、毘沙門はいつ死にやつたやらしらねば、精進するにおよばず、まゝよせつかくお女郎の、思ひ〳〵てつき付賣。かはぬもひけて見ゆるぞかし。さあ爰へ〳〵といふに、揚巻くつ〳〵わらひ、こなさんはよびたからうが、わしは坊主はきらひぢや。其内談合しませうと、にげて行もをかし。さりとはきついはめやう。まて〳〵今にはめかへさうと、思案しい〳〵高いびき。時こそうしみつころ、いとゞさびしき



秋の空こち吹風にまぎれて、何やらんけしからぬ姿あらはれ、あゝらえんぶこひしや。我は是汝が父三津權之助が幽靈なり。我世にありし其時は、ためしまれなる手前しやにて、三國にはいくわいし、あまたの遊君にたはむれ、多くの寶をうしなひ、色にそみ香にめで、情にほだされ、よな／＼每の下ひぼなど、あはでかへらぬといふ事なし。はづかしや肌をふれたる遊君の數千五百六十八、其中にまた我ゆゑに命をすて、身を捨たるもの二百五十三人とおぼえぬ。其煩惱のほむら、みやう火となつて此身をくるしめ、隙なかりつる身なれ共、わが種まきしは只ふたり、ひとりの妹ははてしなき、海をへだてゝ西の國にありつるよし。せめてそちなりとも見まくほしく是までは來りぬ。扨また母のときはが事、語もつらしとふもかなしく、因果の車めぐりきて、傾城とは生しかど、我身請させて、三年の榮花は玉のこし、乘行駒の隙もなく／＼、身は無常の風にさそはれ、いとしき者を此世にのこし、あてなき黃泉の旅におもむきぬ。誰有て介抱する人なく、今なん又難波の色町に身を賣、子故に二度の傾城して、浮身にまた／＼大坂屋とやらんにみやづかへて、ゆんでもめても初櫻昔櫻の色有て、日每に全盛めさるゝよし。なんぼう口惜かりしかど、かゝる身なれば是非におよばず。何とぞ善三郎勘七を賴、母が身請してくれよかし。娑婆の榮花はさいがうの種、夜酒と朝酒と付さしが、今熱湯となりて此身をこがす。三味線は呵責のほこ、仕舞太鼓は修羅道の、時の太鞁となりかはる。多くの傾城に無理をいひかけ、髮をきらせしがあやまりとなり、千だんばたの竹の根を一夜にほれとせむるもつらし。指をきらし爪をはなさせけるは、またなきたのしみなりけるに、今はひきかへその指かへせ爪かへせと、牛頭馬頭の鬼どもが、こはい顏してせむるぞかし。血み血判の罪は、血の池にむかひ、鐵のかいげにて、くみほせとせむる。くめ共つきず、あとよりふりくる血の淚かはく間もなき身のむくい。戀慕のうらみ山を重、死出の旅路の杖にも笠にも只南無あみだ佛より外なし。冥土の使しげければもはや歸るとの給ふ所へ、戀で死したる遊君あまた、或は八重桐しほがまや胸のけむりは八雲たつ、おもひと戀を倉はしの、くら／＼もゆるは三笠和哥山、河内大すみ野風玉の尾、姿あらはにつらし。三津樣、うらめしきは我ゝが姿、死なば一ツ所

とかはせしむつ事。はなちはやらじと一度にくるりととりまはせば、なう悲しやとにげんとする。あまさじかへせと追かくる。劍の山のうへに戀しや高尾、なつかしの君川やとまねくに嬉しくよぢのぼれば、みやうくわ立まちもえあがり、かなしむ聲もよわ/\と、雲にまぎれて雲中より、親子の名殘是までなり。若母を尋んとおもはゞ、是をしるしに尋ぬべしと、おもかげうつせし繪すがた枕もとにかいやり、さらば/\といふ聲斗父とみえしは月山の松にかくれて秋の空、夜はほの/\とあけけるにぞ、今義觀了目をさまし、扨はちゝうへの灵魂にあらはれ給ひけるか。せめて今一度詞をかはし給へと、前後とりみだしけるを、觀了なだめ、もつ共なれ共迚も死の道はかへらぬ事、ふつ/\思ひきつて、只御跡をとむらふより外なしと、さま/\教訓するに、元九郎涙かた手に、げに是は私のあやまり、殊には母うへの行末をしらせ、あまつさへ姿繪まで給はりしは二度對面すべき吉相、なげきの中の悦是也。いそぎ宿に歸り、母うへの身請の相談是非勘七を賴、難波とやらんにのぼり、目出度對面せばやと、玉山壽貞其外の女郎、やごや一ッ家にいとまごひ、立出るうしろすがた、又追付と小手まねきする皃がやさしさ。吉原土手のいりごみに、をしや姿を見うしなひける

四終

御前義経記　難波津風呂屋勧進帳

五之巻目録

一　両影ら何ある似顔がしら
難波乃門出

二　両影ら何あみげりまをせりしひ
大礒石の枕

身請銀わが手形
男達勧進帳
元服と還俗

力自慢とつぶり包
茶立女も後家は後家
けいせいへ心中の脇書

両説に付るまへいせへ

㊂ 呑氣(のんき)にてえ

色々のあやめ

う聲いちしも花の紫(むらさき)

幽霊(ゆうれい)の杖(つえ)

柳裏(うら)て中(なか)

両説に付るわくらくわんぜん

㊃ 呂州丸(ろしうまる)おんざう

ちろ船(ぶね)の風景(ふうけい)

風呂(ふろ)の飾付(まきつけ)

悪性(あくしやう)の口(くち)あきた

とい中房(ちうま)の

伊勢講(いせかう)

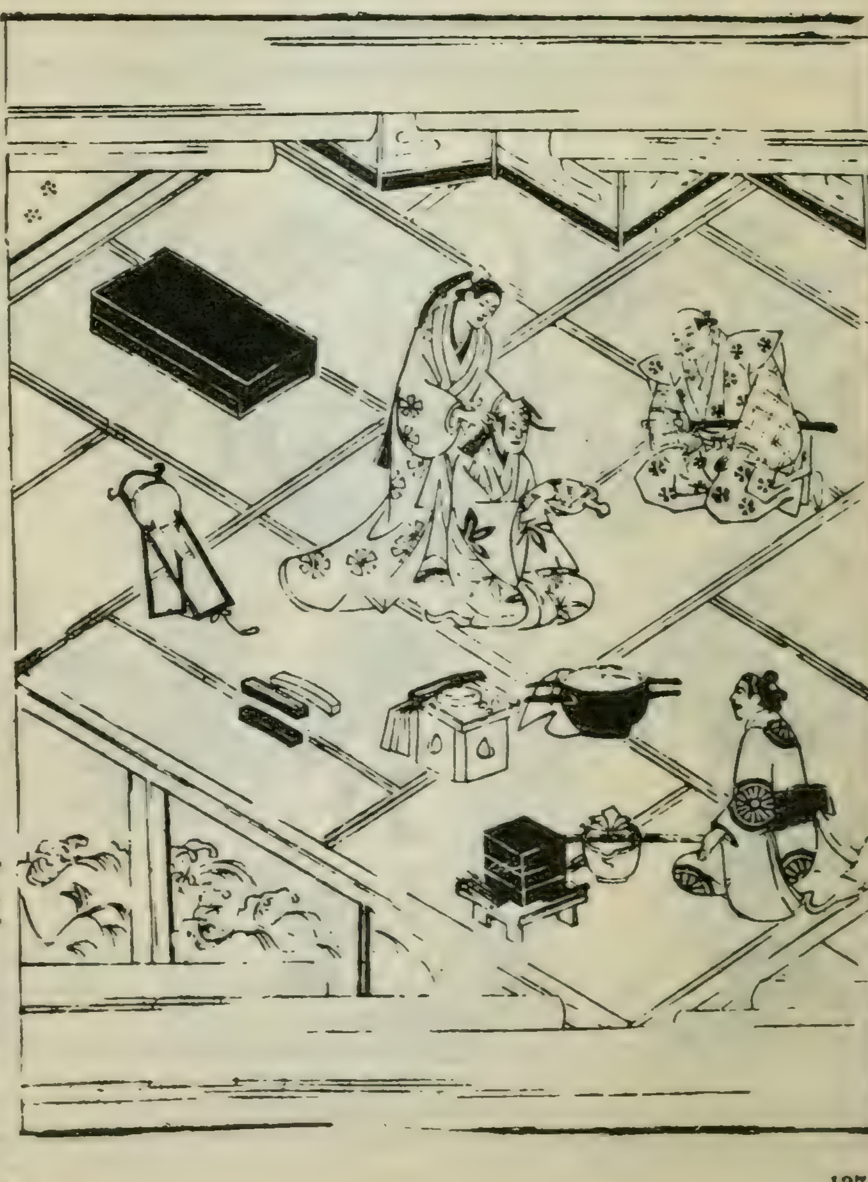
㈠ 難波の門出

吉原のかり枕現にかはす父の面影、よしなき昔物語に、また浮旅をかさね〳〵の心くるしさ、せんかたもなき身の上を、書くどくなどさりとは愚痴なり。よしや世をさり給ふは過去の約束、跡に残りて、よからぬつとめなさるゝ母上なんど、子を思ひ子にまよはせ給ふも、是宿業のなす所としりながら、一度うひのつとめをしながら、また〳〵其身に歸り花散かゝる御位。もつとも父のをしへなれ共、夢はあふもふしぎ、あはぬ昔になれよかしと、おもふもよしなきうたがひ。顚倒する事なかれ、折をもつて此事勘七に語、難波とやらんにのぼるべしと、有つれ〳〵成し雨の夜ひそかに勘七をめされ、觀了とみつ鉄輪打あけての物語り。何が扨御親子の間御くやみ御尤、我〳〵罷有うへは御心やすかるべし。早速ながら、明日を吉日と思召御のぼり有べし。さいはひ手代三郎左衛門買物がてら上方へのぼしぬ。是を御供に召つれらるべし。殊にお袋様身は、金銀なくてはすまぬ物なり。身請銀御用次第、手代に仰付られ、大坂にては谷口淨古、此仁かたへ書狀申入べし。何程にても御心まかせになさるべしと、三郎左衛門にくはしく申聞せ、とてもの事に妹君の行衛も尋出し、御供してくだれと、思ひもよらぬ難波のぼり。大勢の中よりえり出され、かゝる大事を仰きけらるゝうへは、すこしも御氣遣有まじきよし、俄旅の用意、座敷に嶋臺をかざり、門出の祝義銚子もちたる小女郎、組肴は中居らしく器量あしからぬ者四五人、亭主勘七上下に高蒔絵の塗盃目八分にかまへ、内義はうちかけに下髪剃刀箱もつて御前に畏、扨御祝儀は今宵程成目出度事なし。とても元服させまし名もあらため申さん。ともかくもとの給ひけるを觀了とゞめて、此前髪は何者がゆるしてとらんといふ。それ若道の情は前髪が命定、すでに我罪なき身を罪にしづめ、そちがために今月今日迄、日影のごとく付そひ、精進の菜つみ水くまぬばかり。我一念の通ふうち今一度母にあはして、そちが一生のつらさをはらさせんと、朝暮陁羅尼をくるといへ共今迄其甲斐なきは、矢羽木にて腰本の六がそゝなかしをつた罸也。畢竟是もそちゆゑぞかし。富貴なる勘七殿の情ばかりを思ひ、此法師が手前はおもはぬと見えたり。たとへにさへ高野六十那智八十といふに、未廿にたらぬ身を持男にならば、そちが

為には勝手にて有べし。此坊主には何をくうてゐよと云事ぞ。男にする事どなたの御意でもなりませぬ。わけはかうちやとうらみなげくは尤。勘七聞届左様の中とは夢〳〵しらぬが佛なれども、爰は御了簡なくてはすまぬ事、いづれ衆道は男たる者の戀、一ツはまた義理ぞかし。其義理を思召さば只今の元服御赦免あるべし。但前髪なければ念比とは思召されぬか。申は過言なれ共、當地武士方の男色は、廿を打越三十までを若衆盛にたとへ、それ過て眞事の念比と定、男に成ても見すてず、むつ事にかはるとなし。年〳〵つもりても互に言葉のたよりとなり、いつまでも兄分たる人を後見に頼、殊におよんでは命を捨も此戀の義理ぞかし。爰をもつて男色兄弟の契とは申也。十八の年が元服はいたすまいし、是は觀了様の身勝のやうに聞えて眞實はなし。申さば御出世の門出、今義様より御辭退有共、是非男にし給ふべきを、思ひの外成一言、ふつ〳〵かまひ申さぬとちと不興顔するにぞ、觀了あやまり、いか様共はからひ給へ。何をいふとの葉も皆今義をおもふから也。然者と云ふ下より、女房うしろに廻、むかうの髪



をそりおとし、觀了がそばへなげやり、主有花をわたくしがそりました。其前髪を大事にかけておかんせといはれて、法師涙をながし、情なや義理ゆゑこそまゝよといへ、あつたら物をと包紙、せめてま一度見せ給へとふり歸りみるに、面影かはる男つき、鬢さきくらずして又うすからず。昔にかはらぬ色花は、散ても實はのこる其儘の若衆顔、すぐに名も九郎治郎と替けるにぞ、觀了悦ついでに我も還俗せん。いづれ成共坊主あたまにびん付て給はれ。是はなんとした無分別様子はと尋ねしに、さればこそ我今義に付そひ、種〻放埒に身を持事、一度ならず二度ならず、出家落たる事度〻なりぬ。此上を立たればとて今迄の罪のがれず。とても今義にまかせたる身、俗にかへつていつまでもうしろみをする氣ざし。とく／＼とのぞまれけるに、皆〻同心して誰彼それといはれて、三郎左衛門剃刀のねたばをあはし、望にまかせ鬢ばかりのこしぬれ共、髪結所なかりき。



此髪のはゆるまで頭巾をはなし給ふなといはれて、それは仰迄もなし。内〻用意仕りぬと頭巾をかぶり、十日あまりの道中難波に着内大かた髪もゆはれ

うぞ。道中のはれ一ッもなしと頭をなでて、戀ゆゑに思ひもよらぬ男共、なり平いその器量自慢、今日より宗旨をかへ、宿〳〵の出女にぬれても吝氣する人なし。いつぞ氣樂でよしの山、若衆と法師はちりぬれど、おもひつかする此鬢に、伽羅の油のつよき弓、引手あまたの遊女町、みるが此目の正月と、手拍子打て語ぬ。勘七臺に大金廿枚繻子の小袖一重、縮緬の羽織白羽二重の袴、大小そへて今義様へ、次に流紋の小袖羅紗の羽織、淺黄小紋の上下金卅兩、大小そへて觀了様へ別紙に名をした、め置ぬと、取次の男持參す。觀了いたゞき拜見するに、伊勢之丞としるせり。先以祝着せり。それ伊勢といへる二字は、父母なり。万物共に是にもる、事なし。九郎治郎に付そひたる拙者此上とても猶父母のごくおもはれよと、一座同音に、千秋万歳の千箱の玉を奉り、めん〳〵ふしどに入とおもへば、明六ツつぐる鳥の聲、出の屋形にいとま乞、立籠乘かけお手まはり、追付目出度御下りと、亭主勘七見送りて、品川おもて打過て、武藏野の露名殘をしさよ



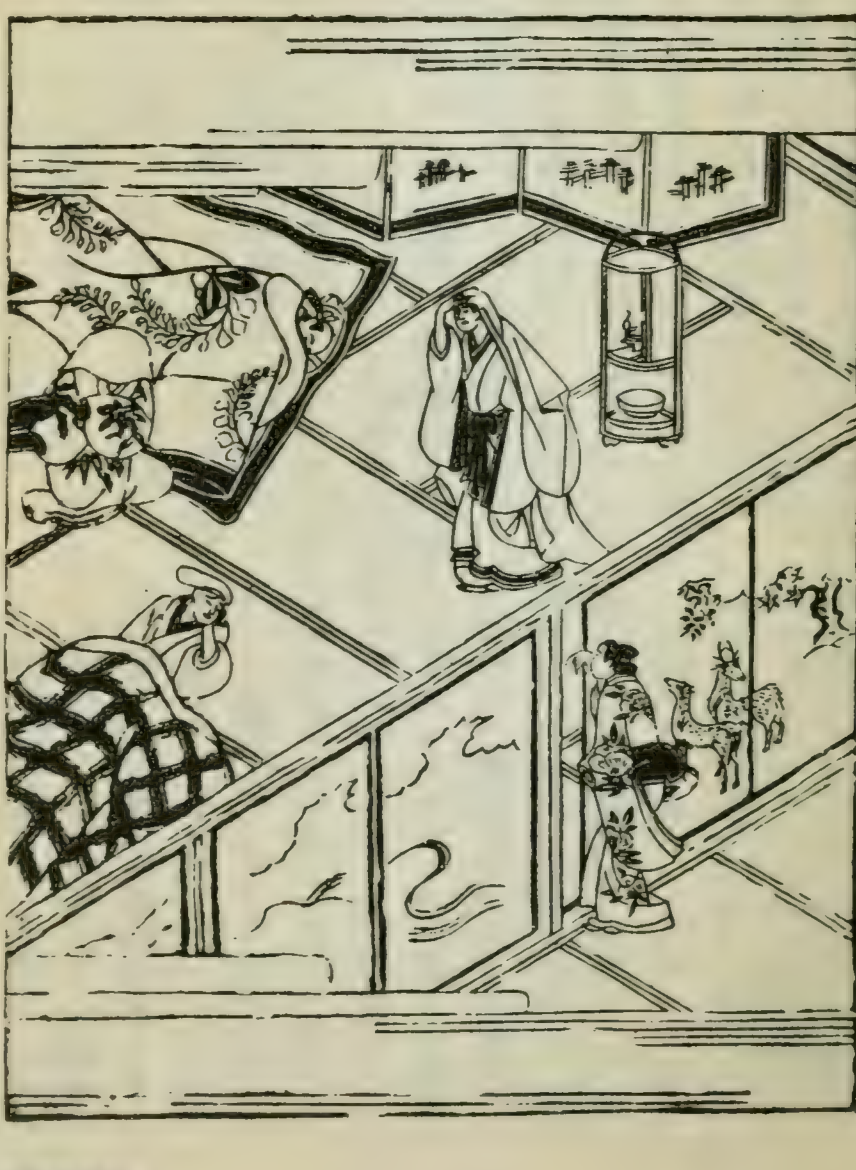
(二) 大礒石の枕

かりそめならぬ旅の空、泊〳〵に氣もつかれ、うきがうへにも猶うき事をまして、名所古跡もそこ〳〵に詠、見る目うと〳〵しくやう〳〵金川につくも程かや。とつ川と行道はてしなく、此まがり道は藤沢爰に武藏坊弁慶が塚有。并ニ小栗の判官十人の殿原達の石塔、かしこに遊行上人の御寺かすかに打かねの音、爰ぞ佛道の場父灵魂成佛有べし。南無阿弥陀佛と廻向し涙もろ袖をしぼり、扨今宵のとまりはと尋給へば奴の角内申けるは、今晩は平塚是より三里、時は七ッに過まうしてごわります。はやくお籠をいそぐべい。うろたへたら日がくるゝと、夕暮かゝり人顔さらに見えず。いよ〳〵心せかれて馬籠足をいため、むかうの宿に火の見ゆるをたよりに、息切ていそぎぬ。此所に虎が石とて有。其うしろにわづかなる庵を結茶釜一ッに茶碗あまた引ちらし、主もなくてもえすさる松の烟、いざまづ爰にて茶たばこのむべし。旦那衆茶まゐらぬかといふにおどろき、大あくびしてとびおり、庵に腰かけみれば、茶釜に茶たぎらせ人音せぬは心得ず。爰はととへば、さん候平塚の手前虎が石とは此事也。げに聞及びたる



名所、ねむりさましに此石あげてみよといふに、籠の七助が大肌ぬぎ、申は慮外なれ共此海道にては器量よしの力づよといはれて、片手にて指あぐる事めづらしからず。御望ならばとつか〱とより、あげんとするにいかな事地ばなれもせざりき。皆〱大わらひして、口からさきの生年。今年廿の最中にて、此石一ッあげかぬるは、いづれ弱手の大將、そこのけ我もと、立かゝりおせどもつけ共いごかざりき。伊勢之丞をかしく、松をとぼしひとり〲見まはし、あがらぬもことわり、いづれそろうた不器量。何しおふ大礒の色好、すゐが見立ておく石、そこ達が手のさはるもいやであらう。九郎次郎にあげさせん。旅のなぐさみ是非一さしと所望しられ、いづれ此石運だめし、かる〱とあがらば母うへにあふべし。あがらぬ時はあはぬと、此ふたつにきはめて、石に手をかけ指あげ給ふに、皆〱おどろき、旅人のたとへにたがはず。器量だけの手柄、是を肴に御酒一ッと、もたせたる弁當の口。それ松たけと燃杙にさしつけあたりを見るに、ふしぎや庵の前に高札を立たり。よんでみれば何〱此所にて往來のめん〱に、心指のせつたいを仕りぬ。暫爰に足をとめ、廻向を頼と書たり。佛事のほどこしあだにのむ事なかれと、六字をとなふる折から、見よげ成し女のふたり來り、ひとりははこぶひとりはくむ。燒火にうつる姿ふたり共に廿斗、赤まへだれに繻子の紐、ひつこき髪のつとなし、根から切て嶋田に結は、つまさき立てくやむ風情、そちたちはさもしからぬ身にて、何ゆゑ爰には住給ふ。二人の女涙ぐみ、いくたりか數多の旅人へ茶まゐらせしかど、やさしくどふ人もなかりき。申もよしなしまた申さぬも愚痴なり。罪をほろぼす爲御物語申さん。たま〱うけがたき人の躰をうけて、ためしなき河竹の遊女町、此大礒へ我〱が身をしろなし、わしは親ゆゑ、わしは兄ゆゑ、ならはぬ勤もなるれば又さもなし。夜毎に替る床枕、引手あまたは其身の全盛其中いとしきも有にくいも有、なんとなうして思ふも有。いやな男程のぼるもの、おもふは思はぬ物かして、わしも爰なもおもひの種と成ぬ。なまなかひんな男なれば、親方やりてが目をはなさず、立居に迄氣をつけられ、日に幾度の物思ひ、爰を勤のたのしみに、いとまあれば文をしたゝめ、妻戸の隙にこがくれ、よその咄も我身にのり、何をするやらわけもない事、わかれに殘る言の

葉など、またあふまでのかこち草。うそといふ字は昔の事、今當世の客なんど、うそでこかしたためしなし。實は今樣の手本、いづれの色人も是をそむかず。扨我〳〵がをつとふたりは、さしあひくらぬ兄弟にて、くるわがよひも他人まぜず、いはねどしれた御浪人、外へ目やらぬ戀しり。弟子は各別にてにがみ有顏、生付て氣みじかく、きかぬといふては小林殿もおよばぬ程の兵者。其かたいにほだされ、まんまとしこなした此鼻、兼て御兄弟の御身のうへに、ふかいのぞみ有よし、我〳〵ともにかくして、其本望をとげさせ給ひ、建久四年五月廿八日に、ふたり共に身まかり給ふ。跡にのこりし我〻も共にしなんとかこつれど、まゝならぬ身の是非なく勤をやめて、御跡成共とむらはんと、をしからぬ髮そりすて、きのふに替る尼衣。御墓の邊に一字をむすび、かねきらさずかはり〳〵に念佛を申、



戀しさのつもりて又我〻も此世を見すて、冥土黄泉の旅におもむきぬ。おの〳〵樣も勤に縁有よしして尋給へば、身につまされてのいとしさ、さりとは流の身程うたてかりし物はなし。姿は花にたとへ見よげなれ共、心の修羅は

暫もやまず。たとへ根引する人も人により、嬉しきと悲しきと有。御身の母御は千代を重て目出度つとめ、只持べき物は子也。ゆかりなき身は我〳〵二人にてとゞめぬ。あはれ問人あらば修羅の苦患もやすまるべしと、なきがらなれど昔に歸る此姿夢に成共一遍の廻向を頼み〳〵と、いふ聲もかすかに聞て、松にあたれる小夜嵐、やぶに雀の羽たゝき、かしましきに目をさまし、見ればあれ野の里ばなれ、庵とみえしは松のしげり、扨こそ夜道に行なやみ、人家と心得夢むすぶ。茶くれし女は現かふしぎと、あいた口のふさがず。所は何しおふ虎が思ひの深み石。いまだ一念のこりて、過し昔を語けるよと、各手を打今一人の女は化粧坂の少將、思ひ人は曾我兄弟、いづれ戀路ほどせつなき物はなし。今日は人の身明日は我身の上と、同音に廻向し、箱根の番所打越、三島岡崎に又とまり給ひぬ

㊂ 吝氣くだき

戀に根繼してまたあふ迄とわかれしより、まつも中〳〵とけしなく、善三郎が娘、今義が情のかけさしを思ひわづらひ、うつら〳〵と床にふして、早命のかぎりとなん見えけり。親たる人は夢にもしらず、氣欝の性と見付、看病油斷なき折から、元九郎の一宿に心をとられ、娘が事もそこ〳〵になりぬ。其夜腰本のろく娘の部室に來り、夕部のお客をどなたとこそ思ひしに、兼てまたせ給ひぬる九郎様にてこそいへ。御姿のかはり男にならせ給ひて都への御のぼり。暫此所に御逗留、さあ御氣色がすつぺり、吉野の櫻色に成ませう。おうれしいかといはれて、其手はくはぬ主様ならばおとづれなき事あるまじきに、又うそつくかと御機嫌あしき所へ、中居の藏が參り、今義様の御のぼり夜前此所へいらせ給ひぬ。御姫様へ何やらん土産あれ共、未御披露もなし。わしもなんぞもらはうかしらぬなどいふに、娘暫物いはず、ため息ほつとつき給ひ、男ほど水くさきものはなし。はや妬風のふけばこそ、御のぼりをかくし給ふにきはまりぬ。何とぞ心をひきみたし、思案はないかとの給ふに、腰本めがまた古い智恵を出して、私次第になされませいと、おもはく一通をかたれば、是よ〳〵とうなづかせ給ひぬる。時は夜半のすぎ、九郎手をたゝかせ給ふに、あいと云て御前に出る。扨も久しや命あればまたあふ事のふしぎ、替る事もなきかと仰ける。さんい先目出度は東の殿、つたなきは我〳〵

が頼參らせしお姬樣にてい。御身東へ御座の時、不慮に心をかけ給ひ、自中立を申、情の床のかり枕、おきわかれさせ給ひしより、便なぎさの海士のつり舟。甲斐なき思ひにしづみ、程なく私をめされ、戀人にめぐりあひ、此やみつかせ給ひ、今をかぎりの御時、憂事を語、是を參らせよと、をしやこときれさせ給ふと、涙ながら指あぐる。九郎けうさめ形見をひらき御覽あれば

あづまぢに吹行かせのものいはゞ
　日に幾度のおとづれやせむ

と、よみもをはらず、横手を打せ給ひければ、勝手に有し下女はつとこたへ、誰か奥より召ますといふに、腰本おどろき次の間に出、わしが爰にをりますと、にやつこらしくまをあはせ、また御前へ出涙をながしぬ。今義そぶりを見つけ、何となき風情、さりとてはのこり多し。我一旦の望をたつし、存分心のまゝならば、むかひの乘物こすべしと、思ひし事も化花の、盛なる身をさき立しくやしさ、都にのぼり念比にとむらはん。夜もふけぬればかへつてやすめと、仰出さるゝをさいはひに、娘の部屋に立歸り、かはらねばこそ涙の淵、いとしげさうに物おもはせんより、こなたより打あけ、昔に歸るむつど、いやかといはれて、今しんだというて今いかるゝ物か、よしなき事をうたがひ、あとへもさきへもいかれぬといふを、今義伊勢之丞聞付、腰本めが興がるうそ、憎さもにくし。此しかへしいかゞはせんと、爰にも思案の眉をひそめ、智恵袋の口あけ、あのゝものゝを耳にさゝやき、伊勢之丞ひそかに腰本をまねき、人界のならひくやむ事なし。そちなればこそはなすぞかし。かまへて人にかたられな。今義江府に有し時、吉原にかよひ、若紫といふ傾城になれそめ、互にふかき戀路となり、沙汰なしに身請して、京都へ召つれのぼるなり。此宿すぐに行べきを、大礒にて隙をとり、是非なく爰に一宿す。たとへ娘堅固なればとて、二世の緣はかなはぬ事、いつそましよと語けるにおどろき、それはまあ眞實かなんのうそをつかうぞ。それゆゑ我も還俗し、名まで伊勢之丞といふ。うそなき證據是見られよと、頭巾をぬいで見せけるに、なんのそれがめでたい事、あほうらしいとつきたふし、かくと語に娘玉ちる涙をながし其心なる人〳〵を、一夜にても爰にとむるはほむらぞかし。其傾城一目みたや、夫ねとられし恨くすのは、しゝたといふたこそさいはひ。幽灵となつて討ころすに、と

がむる人も有まじ。爰は我にまかせよと、白き絹をかづき、長なる髪をみだき、かけ出させ給ひければ、すは爰こそと伊勢之丞、今義を女にしつらひ、褥のそばにそらね入、八半の鐘もろ共、今義の枕もとにずんど立、うらめしの都の殿、うらやましの若紫、わらはがふかき妹脊の中、しらで爰にはかりの宿。そちにうらみはなけれ共、にくしは君と此法師、東のかたへ行給ひ一度たよりのあらざるは、そちが戀路のへだてと成、其恨をはらさん爲、爰迄は來りぬ。今宵にかざる命ぞかし。覺悟せよとの給ふに、伊勢之丞目をひらき、是姫君御身は此世をさつて、今爰にきたらるゝは情なや。愛着にひかれ、いまだ成佛し給はぬと見えたり。たとへ今義若紫とこひ中なればとて、先にいひしはこなたぞかし。命さへあらば夫婦にする筈なれど、此世になき人を何程おもへばとてかなはぬ浮世、それとても戀しくば、今義を打ころし、來世へ成共つれ行、したいやうにめさるべし。夫婦は二世といふからは、定めしそはるゝ事あらん。また紫は河竹の銀にきり有人なれば、跡は拙者がうけこむと、又手枕して臥けるにぞ、絹ぬぎすてゝ、是坊様なんのわしがしにませう。まことは君の御心を、引みん爲のしわざ、來世でそふは見ぬ事也。若紫の御事など、まつたくそねむ心なし。男たる身のならひ、わらはが中さへかはらねばと、手のうらかへす言葉のはし。今義をかしく腰本めが存の外成うそつきけるにぞ、をかしさのあまりて、かうした手立。若紫も小紫も、ねからない事。ほんにさうした事なき身をうらみ、よしなき姿のみ見せ參らせしははづかしの、もりて人にやしれなん。すぐに都に召つれ給へ。中〳〵跡にはのこるまじと、袖にすがるを、いや〳〵一先難波に上り、何事も心のまゝに成て後、かならずむかひにこすべしと、ことをわけての給へば、其御言葉に僞なくば、いつの比にはかならずと、又兼事をいひかはし、一夜を千代と重て、きぬ〴〵の別も過。都入の相談いづれも座をくみ、善三郎方よりは、四郎三郎といへる手代を相そへ、御用何事によらず彼に仰付らるべしと、念比に申付、すぐに出立旅の空名殘を姫にのこし文、難波の浦へいそがれけり

㊃　呂州丸はだか

光陰矢をつくごとく、きのふと暮て今日の空、定めがたき身のいつとなく、時來り今ぞ最中の花盛。都に入もよし

なしと、大津の別道より大龜谷をすぐに伏見の里。墨染の茶屋に籠をたて、鐘木町のひじまがり、夜見世かゞやく、とぼし火あくるをまつも久しければ、三郎左衞門が才覺にて、所の何がし太鞍の惣五郎に露少〻とらせ、此里の女郎格子よりはし女郎の名寄をとつて、京より來りし女郎名は何といふと尋しに、母に似たる人さらになかりき。爰に足をとむるは國土のつひえ、親父樣の遺言をそむくに似たり。とくいそがんと夕日暮かゝる比ほひ、京橋迄いそぎ、北國屋に暫足をとめ舟、ともの間借きり乘相舟のせわしさ、せんじ茶參らぬかと三十斗の女房遠慮なく、つむりのうへをのりこえ行など、さらに戀はなかりき。八幡牛房はいもせの燒付、出家衆のまゐるは氣のとほらぬ事、諸白の酒茶碗に引うけ、寢て花をやる奴、舟の出ぬさきに醉をさまして、又のみかくるもうたてし。そば切うどんは小船に棹さし、茶釜に湯玉たぎらせ、爰へもかしこへもといふ間をあはせ、しかも味よく是此所の名物としていづれか稱美せぬはなかりき。此類の賣買あまたにして、西國の入舟繁昌の湊、舟頭うはまへとつて、乘出して行舟の足參宮同者あたご參りは下向の花。御秡ぐしはかわこに包風呂敷、帆ばしらにくゝり付、めつたにさはつてもらひますまいといふに、門跡參りのばゝかゝ達、氣遣めさるな、罰あたるがおそろしければ、むさとは致さぬといふも有。京大坂の衆とみえて、哥舞妓芝居の咄、其中に勿躰らしき男、少〻小錢も遣かねぬきりやう。今よしがそばに乘合物語するをきけば、近年難波の風呂屋何をか目あてにそこいたり。あきつさへ此比は大寄といふ事をはじめ、十二軒の風呂屋より十二人の女をえり出し、能狂言の安宅をやつして、めん〳〵が身の上を懺悔し、是一番を客のもてなしとす。なんとめづらしい事の、はじまりけるにてはあらずやとかたれば皆〳〵聞耳して、兎角難波の腹中武藏野の風景、すまば爰なりと口〳〵にうらやみぬ。今義此咄を聞て是興あるなぐさみ、其仕拂はと下人に問せけるに、さまで大分入事にあらず。女一人二時をかぎり、あげ錢七匁しゆらいは銀一五匁、其座の趣向次第、籠代送りむかひ一町二町にても壱匁、橋をこゆれば二分たかし。お望ならば道頓堀あじろ、天滿、甲斐塚、秋田、是此中宿にして自由をなす所としり給へと語ける内、八間屋に舟がつけば、別を詞にいはせて歸りぬ。今義も今橋邊に宿もとめ、其夜

夢むすびて明の空、うすぐもりしを幸に、嵐が芝居見物して、歸るさの道、あじろがもとに案内させ、奥座敷に入給ひ、呂州のやうだいを尋、主を召れ其藝者たる女よべと、お指圖にまかせ、俄に回文したゝめけるを、伊勢之丞はるかに見てそれにてよめとあれば、太鞁の袖内畏、其名寄をぞよみたりぬ。先口書に今晩田舍の御客御座𛀁ニ付、私宅にて狂言能御座𛀁。各御來駕奉願𛀁以上

次第不同

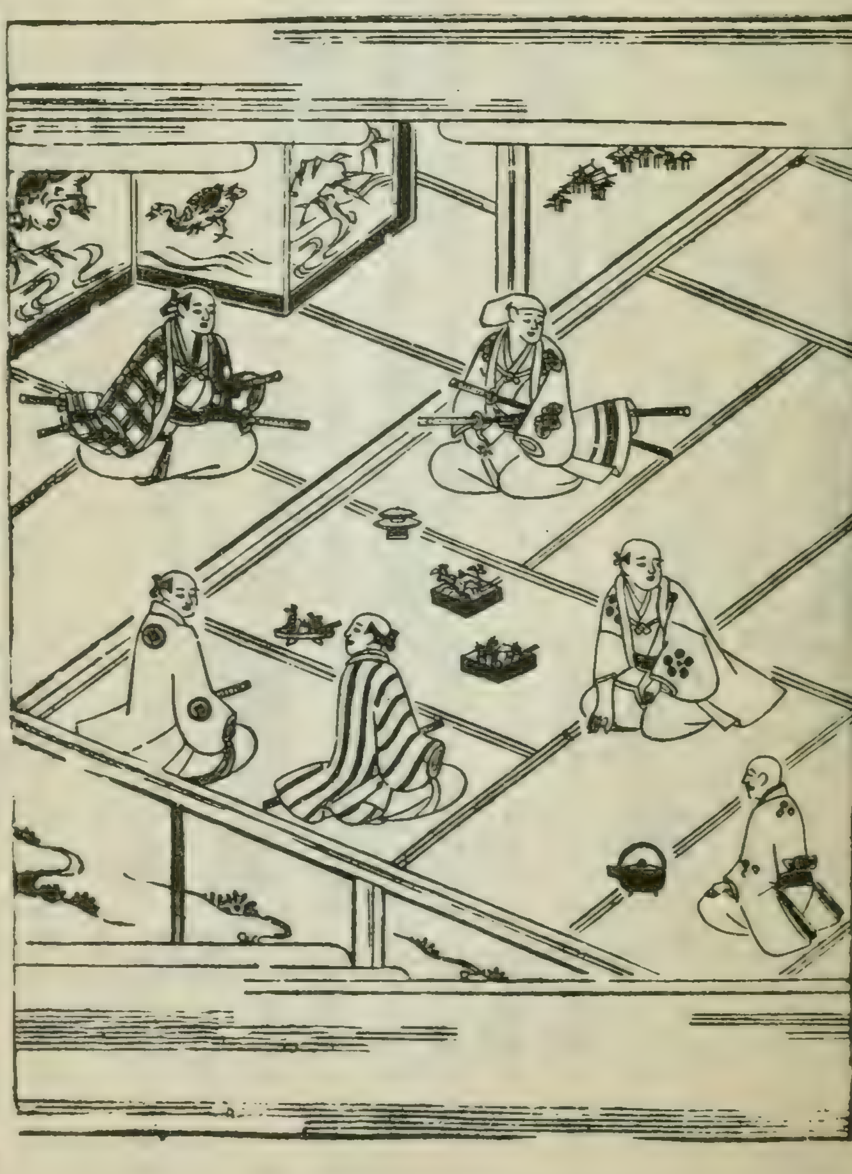
一もつたいらしい所が義經　難波のきよ様
一いやしからぬ所が北の方　大黒のちか様
一やりはなしな所が武藏坊弁慶　丁子のらん様
一中實らしいで龜井の六郎　大黒のさが様
一そゝらぬ所で兼房　さきやうの岸様
一すしな所で鈴木三郎　同　しゆん様
一うはきらしいで鷲の尾　がくの小さん様
一子細らしい所が伊勢の三郎　同　千代様
一分別らしい顔が熊井太郎　柳のぎん様
一智恵の有さうな所が駿河二郎　扇子のおぎ様
一のみこんだ所が片岡の八郎　同　きよ様
一四角四面な所がひたち坊　伊勢のたみ様

あらましかやうと申上る。いづれもかたほに笑をなし、さりとはかはつた回文はやくよべ〱、そりや〱いそげ、はやいが御馳走。先お盃爰へちよつとおさへます其あひ此あひ、どつこい、そ



つこい山ほと丶ぎす。此よねたちはなぜおそい。人橋かけて召とつてこい。心得たりと夕間暮、廿夕掛のらうそく、爰かしこにかゞやかせ、待間程なく亭主が上下、其次に十二人よねたち、打かけにす足、衣紋つくろひ、花屋主が左右にならべば、花車は跡から罷出、ひとり〳〵の名をさして、お引合申ますは、時ならぬ顔見世の座つき、つらりといとしがつてしんぜてくだんせと、いふも長事先口きりにお能〳〵といふ下より、笛の音鞁の音、うつ丶なき風情美儘の姿、十二人立ならび、やさしき調子はりあげて

〽ふろやくわんじん帳 ○難波津や風呂の焼ぞめもえさして。くゆるおもひをかたらん シテ扨御供の人〳〵には大黒のちかき丶やうの岸。丁子のらんに柳の吟。がくの小さんはうはきの雲。姿にまよふ風情して。我におとらぬ呂州の色。跡さきに着にけり〳〵 〽あひ狂言袖内 ○是〻女郎衆。揃十二人。つとめにかざる重衣裳。もこじたたるい風俗にていづかたへの御やうさま〳〵染ちらし。堀の湊の中宿出ぞ シテさんはわしらが身は今難波津屋皆打よせてなびきあふ。あじろの里のもぬけがら。流くみこむ風呂の水。



思ひと戀と燒付て。きゆる事なき身成しを。すゐな男にきやされて。しめりあふ夜の床の内。互にあかす其うへにて。是を見よとて書こせし其わる口とはしりながら。身の爲なればすてゝおかず。まよふが上に又まよひ。身にふれ手にふれ候なり。ちといたゞいてと指出す〳〵 袖内 こはめづらしい事を承る物かな。そとよんできかされ候へ シテ 御所望ならば聞給へと。たからかにこそよんだりけり ツレ それつら〳〵呂州の色をかんがみるに。日まし月ましいたりをきはめ。陸路をふむ事さらになし。おぼろ染につかみ鹿子。日野羽二重は一昔。見る目にかくる事もなく。もみうら共に身をふかし。一ッ二ッあふ客は飫の木の葉とよそにのみ。ねはんの床に入事なし。たま〳〵床に入ときは。かぶき子共の噂して。夢おどろかしかへすなり。爰に其比悪性成客おはします。其名をわるじやれ水ていと申奉り。最愛の奥様に。はなれさせ給ひけれ共戀慕やめられず。眼にさへぎる呂州の色におぼれ。お主の覺えを我〳〵にしめさん爲。諸分を書て越給ふ。かほど色なきつとめなれ共。たえなん事をかなしみて。筆にてしめし給ふ事。硯の海より猶ふかし。つとむる内はむゐの樂にほこるといへども。浪〳〵の身と成時は。心をかんじて見よや〳〵あなはづかしと讀をはる。今義聞給ひ。是はそち立が身の上の悪性也。定めし様子の有べきぞ。とてもの事にかたられよ。なる程御不審尤なり。いづれつとめの品〻は。かくすが秘密に候へ共。さまでなき我〳〵がつとめ以前の異名は、湯女猿と申て。ぼんなうのあかをかきたる身。今はそれにはひきかへ。河内木綿がちりめんと。淺黄に替る戀の宿。野良役者に一座して。うはきな戀に身をながし。風呂のつとめも成がたく。茶屋くら物となるぞかし。それにうんじて此連中。月に一度づゝ伊勢講をむすび。かたく身持をくづさず。今迄の悪性を。宮川につきながし。此十六日より身を清め。太神宮へちかひを立て。是をたしなむ。さんげには十罪をめつすと丸はだかにして語けるに。皆〳〵手を打悪につよき物善也。今よりあふがめん〳〵が徳。此咄にほだされ。入まじき床に入ばおもひの外なる御馳走。又〳〵明日參らん。さらばというて歸る我やど

御前義經記五之終

御前義経記

六之巻 目録

新町の女郎
八嶋が素読

西鶴が門弟三人の中や宿屋

(一) 新町坂落

女郎が借銭は
ちやうど小判
三両二歩八小玉銀の塩葉
是より西とせが
さりとは急

西鶴が門弟さうかくれいえん

(二) 四方姫の傾城

扇屋の女郎
義経記のはしまり
平家が公達
浪人流れの一見

面影に写る源氏の繪合

㊂ 姿繪とこそ人の松

子ゆへ今は流よふ

親ごゝろ子を思ひ泣眉目の揚だるめ

二度の流よる

ことより親に見へぬ

面影につるる思ひて乳母

㊃ 身請の公事

本の内はおやこそ親方殺の色

恨がかう死る百にす女の勢

公事宿身請の控さし

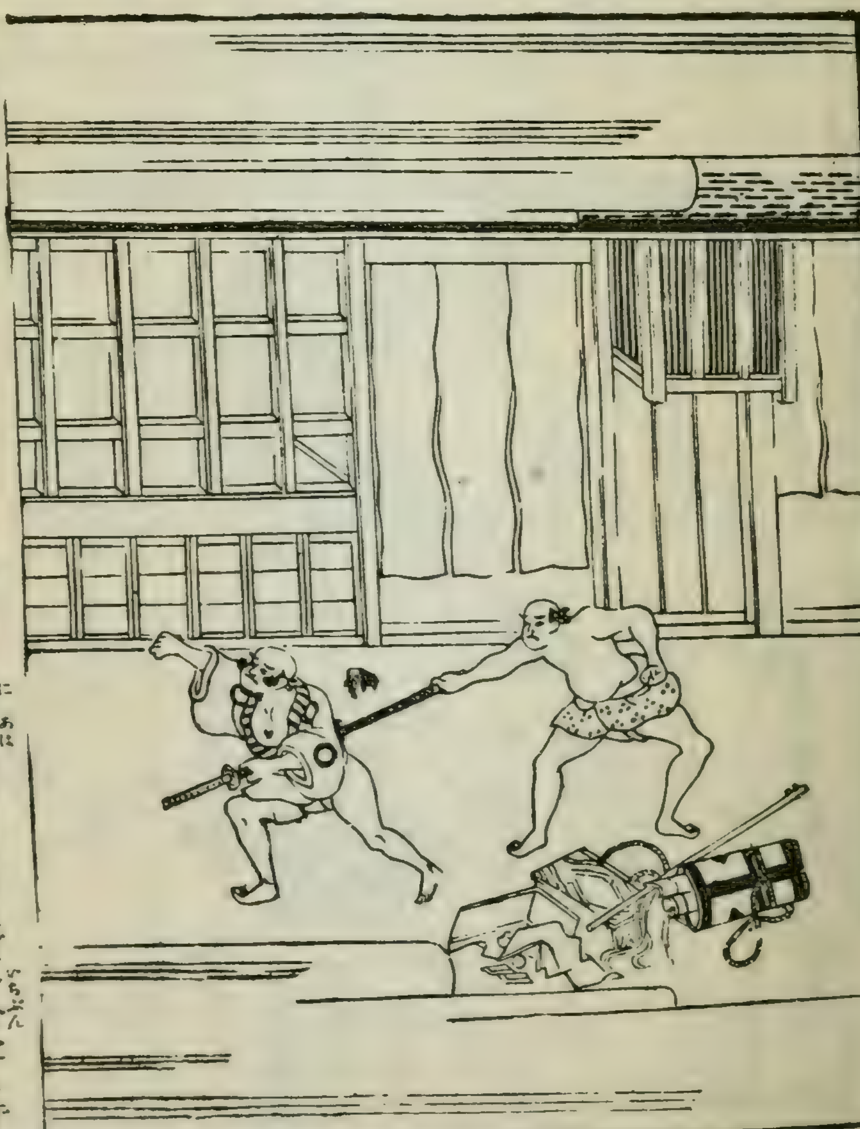
(一) 新町坂おとし

過し夜のたのしみを引かへ、今日のねざめの氣の毒、こゝろ一ッよりとふ人もなく、ねやにもる思ひ種まけばこそ尋もやする。今義過つる呂州に事寄、母の行方よそながら尋しかど、更にしる人もなかりき。かくなん戀しさのつもりては、中〳〵夜もねられず。殊更今宵は夜ながく、くだかけを待とけしなさ、明なばなどゝかこちぬるに、夜ほの〴〵と東しらみ、嬉しや皆〳〵夢おどろかせと手をたゝかせ給ひぬれば、四郎三郎がね耳に入、未夜ぶかにしん。今暫御休有べきよし。いやとよこし方をおもふに付目もさえ行月のごとし。今日は新町にあゆみて母の御事を尋ん。たそしる者あらば案内させよとの仰。亭主承り、はゞかりながら拙者老行のおもひで、六十にあまつて色里に御供せば、女郎共があなどり申さんも口惜。髭さかやきを仕、わかやぎ御供致べしと、いふ日影昼にかたぶきぬ。いざといふ聲をそろへて、堺筋をまつ下りに、順慶町を西手へきれ、渡邊筋のこなたより、戀路の里に行人、めん〳〵がおもはく有やなしやの身づくろひ。さりとは繁昌の所、或は紙いれ長命草入、きせるたばこに友禪扇子、燒まんぢうの串ざし、爰にも有は借あみ笠、新町の橋づめに、哥舞妓芝居の替かんばん、門の隅には井筒屋の源六、清氣散の引賣、作花やが見世には義大夫が道行本、女郎のさいもん一冊四錢にはやすい物かな。名寄を召ませいと指出しけるに、是もとめて、入口の賣買小間物が棚美をつくし、はやまが油和中散、うなぎのかばやき田楽見世、そば切うどん鯛のはまやき、おはひりなされませいとよびかくるもせはし。錢屋が見世には十七八の角前髪、壱匁有銀つりかへてゐるを、わる口いひがそしるを聞ば、壱匁にさむい銀取て六十五文とられ、わづか殘るうちにて七文の油ひかず、十二文でのべ一折、歸るさは西横堀のたそかれ、そろばんなしに百の錢、我と引導するぞかし。月の女郎に銀つりかへてあふなどまだるい事ぢやと、我をわするゝなど猿の屁わらひぞかし。きやつがしてこなし見んと跡よりついてゆけば、金平がゝりの風俗、横町の東側へ行とおもへば、木綿物きたる女郎、きせるくはへながらとらへ、是爰なうそつき、やくそくの鼻紙はいつくだんす事ぞ。此ほど風ひくに付てのうらめしさ、人みぬ戸ぼそ

にて手鼻をかむ。かならずげびたとおもはんすな。惣じて武士は九百九十九石迄、　はぬとやらいひます。是はこれでもすむ事ながら、あかし金内、客にあふ夜のさゝめごと、　、わざ　もとへ　り、爰においた　はといふに、大かたの客　とてくるゝぞかし。かうした傳受事はこなさんより外に語ものなし。とてもくだんすならばはやうといはれて、此客嬉しき顔みえすき、今宵もてくるも安けれ共、思ひながらかたげてもきられず。一帖二帖は爰にも有、もたせて越迄ふ自由ならば、是つかやといはれて、そんならくだんせといふを聞すて、行さき二丁目の中程、南側のつり格子、家名はしかと覺ざりしが、千とせといへる女郎お位は影、生付よく、天職もはづかしからぬすがた。つぼねの床に伏て涙つらぬく風情、何ゆゑかくはとさしのぞけば、物賣とみえて草鞋脚絆、腰にはかりさしつめて、賣掛をかふ。此銀すましやらねば挟箱ひつ立て行と、目に角立てわめくを、はうばいの女郎中に入て、いづれかちよさいはなけれど、色も香もたゞ銀の緒に取付迄、まつて



やらしやれと侘言するに聞入ず、此銀にこそ様子あれ。とらぬうちはいごかぬと、草鞋ぬいで局にあがる。さすがは女郎とて返言もなく、おとましい事ぢやというたばかり。今義聞兼てつぼねに入、是はよからぬせんぎ、様子はしらねど此銀は、拙者すまし申さんと、四郎三郎に仰付られ、銀箱の封切て、小間物屋が帳面引合、出入二百め渡しけるに、かゝる大臣有とはしらず、よしなき事を申ぬ。忝と手の裏かへす返答。千とせ涙かたは今義が袖にすがり、どなたかはぞんぜねど、あらぬ事をきかしまして、近比はづかしき此身、きゆる物ならばと、思ふに甲斐なきつとめ、花の盛を此里にてちらし、二度咲身にてもなし。女郎は意氣地ばかりをみがく玉のを、今日をかぎりとおもふ身なれば、すておかせ給はるべし。



御心指の程はしゝてもわするゝ事なし。義理の情は是にてとゞめたりと、思ひ切たる顔、また有まじきかたち。くるしからぬ事に辭儀めさるゝはつとめに似合ず。すまさねば一分たゝすと、互に親切なるあいさつ。姉女郎の金吾聞兼、ま事に情有御言葉、千歳も女郎のすべを立、とやかくいはるゝ事尤なれ

共、人の情をよそにするなど〻は、かうした身のせぬヿとなり。此銀はわしがもらひませうと挨拶のうへにて、小間物屋に銀をわたし、段〻の不足のこらず請取申手形をさせ、歸らんとする折から、つり髭の奴酒きげん千鳥にて、二尺五寸の大刀そりうつて、海道に置ける小間物屋が荷物にあたり、油荷打こかして、そしらぬ顔して行を、とほりの者が見付て、やれだいたん者ぶてたゝけとわめきぬ。此奴さわがず、何らうせき者とや。かたじけなくも桓武天皇九代の後胤、平家のさふらひ大將惡七兵衛景清に五十五代の何がし、ひや酒の清八とて、文武兩道の奴、あしくよつて怪我まつるなと、打ものすらりとぬいて切てかゝれば、こらへずして、四方へはつとにげたりぬ。さもしや方〱女郎の見る目もはづかし。一人のとめん事、あんの打物こわきにかいこみ、手取にせんと追手行。小間物屋大裸ぬぎ、くるわにての男立、三浦の荒次郎爰に有と、大手をひろげ奴がにぐる後より、脇差の小尻をしつかと取、えいやつと引塩に、鞘はぬけてこなたにとまれば、ぬしは先へにげたりぬ。さるにても汝おそろしや、腕のつよきといひければ、小間物屋は又奴目が腰の骨こそつよけれと、あげくのはてに大笑、西と東へわかれける

(二) 四方髪の傾城

別路もはてしなくさらば〱、其内お目にかゝらう、年月の立は夢ぞかし。わけもない事おもはずと、無事の勤こそ身の爲、ようの事あらばそんないよそこへと、言葉に便をふくみの給ひけるに、千歳もなじみたる挨拶。今義が袂にすがり、初對面の御情、何としてか報せん。未御逗留のよし、近い内にと、日にものいはせて別れぬ。それより越後町のたそかれ、揚屋入の繁昌爰かしこを詠るに、はや火をあくるこしらへ、扇子がもとの群集山をなせば、何事成と立寄耳をひそめてきくに、菅原とやらいふ女郎の、八嶋の講談するよし。是はめづらしい傾城の物讀今がはじめ、いざ此宿に入、暫一座につらなん。尤といふより案内をさせ、奥座敷に入給へば、亭主罷出、大臣様のお腰をかけられ、弥〻末ひろがりの扇子屋よね様はいづれ成共仰付らるべし。但しおなじみは何屋のたれ様ぞ。承りたしと申に、いや〱此里不案内。成程女郎も指圖をせん。それは各別此座敷にて女郎の口釈有よし、自由にき

かるゝ事か。さんぃ是には段〻様子あれ共、くはしく御物語はならぬ事、お望ならばお聞なされませう。はじまりは初夜より四ッ迄、先御休息といふ所へ、菅原當世様のおぼろ染流門の瀧に鯉の上る勢友禪繪にかゝせ、淺黄うらを表へ五寸ふかせ、定紋にゆづり松、下に白むく中に黄無垢、一ッ前にあはせ、髪は根から切てなでつけ、內八文字のぬき足、しづかに見臺のそばにかいなほれば、九軒吉原近所の揚屋に居合し、太夫天神鹿戀はし女郎、つき〴〵の大臣末社、我も〳〵と席につらなり、すは物讀のはじまり、座中耳をすまして聞事、尤やさしき心にてぞ有ける。暫あつて菅原かぶろの竹之丞に打かけとらせ、紫ふくさの結をとかせ、一冊の本をひらいて見臺にする、扨皆様へ申ます。まとに我、人にまかする身なれ共、子細あつて下紐のむすび、とく事のならざりしを、あふ客ごとに語り、わけたてぬ替に、つれ〴〵草、伊勢物語の素讀して、一座の興になして、一日〳〵のつとめに日をかゝす事もなかりき。此比のお客は、曾我物語か義經記などよんできかせとの御所望。曾我はつとめの秘傳の事、わしらが身の上



にてはさしあひ、それゆゑ此比より義經記の素讀致ます。過し夜よみましたは義經公頼朝の御代官として、一の谷を責給ひし迄を申ました。こよひは平家の一門討ほろぼされ、西海の浪にしづみ、義經都へ御凱陣なされます迄をよみます。此八嶋の段は義經記に書のせませねど、爰はわしが才覺にて、増補とやらんに仕ました。皆様ねむたくときいてくだんせといふに、いづれも同音によござらうといはれて是より八嶋の講談○扨も義經公は先祖のあだに命をかろんじ、さしもかための兵庫の崎、京の嶋新京を坂おとしに責やぶり、平家の一族と〱く、西海に追下し、すでに元暦二年きさらぎや、中の六日、猶舟軍有べきとて、福嶋川迄出させ給ひぬ。御旗下は申におよばず、東國の諸大名思ひ〱に物の具かため、皆ゝ御前につめらるゝ。義經仰けるは、我院宣をかうむり、鎌倉殿の御代官として西國に發向す。されば源平わけめの軍此時にきはまりぬ。しかれば軍の立やう、責口の相言葉、よろづ混乱せざるやうに、兼〲評定いたさるべしとの御定。おの〱申さるゝは、我〱は關東武士にて舟軍のかけひき、未たんれん仕らず。只御ざいを守べきよし申あぐる。其時梶原すゝみ出、此度の兵船には逆艪を仰付らるべし。陸の軍は馬上のかけひき自由に候へ共、舟は行事ばかりにて引べき便候はず。兎角ともへに艪を立ちがへ、わいかぢを入候はゞ、かけひき心のまゝにして、はなはだ勝利御座有べし。艪櫂を頼龍むかひ候事、何共思案におち不申候と申あぐれば、判官聞召いやとよ梶原、軍のならひにてひかじと思ふ戰も、折あしければ引ならひ。まして左樣の逃仕度、むかはぬさきから拵て、何と軍がなるべきぞ。殿原達は逆艪をも、かへさま艪をも入給へ。此義經はいつとても、無二無三に責入て、軍に勝が面白けれと、打わらはせ給ひければ、梶原氣色をそんじ、それ大將のよきと申は、かくべき所をかけてものつとり、引べき所は引、命をまつたう敵をほろぼし、代を治るを名將とす。左樣にかたおもむき成大將は、猪武者とてよきにはせずと申ける。義經立腹ましまし、ゐのしゝ鹿のしゝはしらず。それは和殿が發明にて、軍理にかなふ所なし。そも舟軍の大事といつは、五格の諍とて軍勢共を表に立、みよし〱をつき合、すこしも舟のゆがまぬやうに、是軍舟の秘密とす。隨分むかふのゆがみを見すまし、たちまち船をくつがへす。是かんどりのはた

らき也。左様にともべに艫を立なば、軍勢共はいづくにかゐん。胴の間に立べきか。何とそれにても勝利や有。おのれが軍理のうときをいはず、猪武者とは舌なが也。只今討てすつべけれど、大事を前に置ながら、どし軍せんやうなし。はや〳〵鎌倉に歸れといからせ給へば、梶原とかうの言葉なく、其座を立て鎌倉にくだりぬ。此遺恨によつて頼朝公に讒言し、御兄弟の御中あしくならせ給ひぬ。それより義經水主梶取をめされ、あまたの舟を待あはせ、日數程ふるばかりにて、八嶋に着事有まじきぞ。殘は追〳〵出舟すべし。先手廻の舟ばかり、いそげ〳〵との給へば、さん候順風にては候へ共、暫なぎを御またせ然べしと申あぐる。義經いからせ給ひ、乘かゝつたる海上風つよきとてとゞまるべきか。山野にて命をはるも、又海川にておぼるゝも、前世の約束、むかふ風に渡らんといはゞこそ、義經が僻事順風が過たりとて舟出すまいとは、おくれたるやつばら、異儀におよばゞ討とれと、の給ふ聲におどろき、友綱切て押出す。此勢に平家の一門、せんかた浪にたゞよひ、落のびさせ給ひしが、中にも御母女院二位の尼主上の御手を取給ひ、寶劍を腰にさし神璽を脇にはさみ、内侍所の御箱をかきいだき、舟ばりに出給ひ、ふんだんの荒浪玉躰うばふ世となれば、十善帝位もたのまれず。南無阿弥陀佛と諸共に、海に飛入給ひければ、義經はやくも見付給ひ、淺ましや女院にて渡らせ給ふ。あやまちなせそ引あげよと、仰もはてぬに軍兵共浪におり立なんなく引あげ奉れば、三じゆの神寶こと〳〵くそろはせ給ひ、女院尼君をいたはり、生取八十三人兵舟に打のせ、勝時の聲もろ共に、都にのぼらせ給ひけると、讀をはり、先今晩は是まで、此次はまた明の夜といひちらす。座敷の花もちり〳〵に、立別行今義も、名殘をしげに見ゆれ共、かぎりの太皷もろともに、また我宿に歸り給ひぬ

(三) すがた繪ときはの松

女たる身の哥道の勤學、殊に八嶋の講談いか様よし有人にきはめて、かの人こそ心がゝりと又行なやむ塀の內、扇子屋がもとに入あひ鐘つく比、四郎三郎を以夜前の物讀女郎十日を切てのあげづめ。わかい旦那のしやれた事、菅原様は今くるわにての大老、大臣ははたちの花、定めし好色傳受事などお聞なされんが爲か。此食くうてさへ是ば

かりはのみこみませねと、銀がかたきの世の中、お指圖次第と使を立れば、今日は井筒がもとにて勤のよし、なんの事はないもらへ〳〵といふもおそし。爰は亭主がはたらき、物のみ事につかんでまゐつたと、舌も引いれぬうち、はや御出の品かたち、四方髪の女郎神代はじまつてない事。過つる夜の御發明なるにひかれ、よそのおなぐさみをもらひし事、いかゞ思召さん。元來此里不案内其段御了簡に預たしと、みつ指わりひざにての挨拶。それはあんまりかたい事。尤外の女郎衆は殿たちのもてあそび、わしとてもくるわに身をまかすからは、つとめに替事なけれど、心にたつる願も有、殊に寄年の春を重て色も香もあらばこそ、面に白粉のぬればこそなれ。まれにあふ殿立にも、身のうへを裸になしてかたれば、鬼なき國の情人、爰を開わけ給ふゆゑ嬉しさのあまりに、手なれし琴三味線ひいて一座の興を催すばかり、明暮おなじ色なれば、此比より氣を替、なんとやらの垣のぞき、おわらひ草もしばしのなぐさみ。それゆゑ義經記の素讀とは、よつほどあつい物語と、あらましを語けるに、是は興がるはまりなれ共、



君子二言なし。日切まではそろべく候の揚づめ、心まかせにあそび給へと、何となく夕塩の指引。つき〳〵の者氣をとほし、皆〳〵勝手に入けるにぞ、今義母の繪姿床に掛、我此ごくなりし女を見ぬ戀にして、はる〳〵の東方のぼりぬ。なれ共我心の內をしる人なし。あはれと思ひしる方あらば、をしへ給へとかきくどき、いつとなくねいらせけるに、打かけぬいできせまゐらせ、寝顔つく〳〵詠て、あつはれなる御器量なれ共、戀路の道とて畫圖の姿に心をうつし、こし路を尋給ふは、身にあまる思ひにてぞ有らん。昔元享の帝一の宮關白の舘にいらせ給ひ、御繪合をなされしに、洞院左大將の出されける繪に、源氏のうばそくの宮の娘巻柱のかげにかくれ、琵琶をしらべ給ふが、雲がくれたる月影の、俄にいとあかくさし出ければ、扇ならで招べかりけるとて、琵琶のばちをあげてさしのぞき給ひし顔ばせ、いふばかりなく筆をつくして書けるを、宮かぎりなく此繪に御心をなやまされし事、其ためし有事なり。それは雲のうへ人、是はいやしき流の身、寶をだにつくさせ給へば二世の契をかたらふ身に、かく迄きよはせ給ふはおろかにこそ候へ。いかなる女なればかくはと掛ぬる繪を詠、はつとおどろきたる風情、懐の內は涙の海、はてしなきないじやくり、あひてなしのかこち草、此繪こそ我世に有し時の繪すがた、三津様とたはむれのあまり、かゝせおくりし筆の跡、いかなる人の手にわたりて、我と我すがたに今あふ事のふしぎ。常盤の松は一千年の木も、其色替事もなかりき。今の姿はいにしへに替り、此繪のおもざしあらぬつとめも子ゆゑの闇、殊に此客繪に思ひよるとの給ひつるも、有し昔の色殘りての事成べし。爰に有てはなき人へちかひし事も化と成ぬ。御縁あらば重てと、身づくろひし歸らんとし給ふを、九郎あわてゝ袂にすがり、扨は戀しき母ときは様にて候か。我こそ鞍馬山青目坂姥が懐にてそだてられし御身の子、今かく成人して九郎治郎今義とあらためぬ。御事のなつかしく所〻を尋江戸にくだり、ふしぎの縁にひかれ吉原のうたゝねに、父うへのつげにまかせ、此難波にのぼりぬ。繪にまよひぬるとは尋あはんはかり事、年月を重て今といふ今對面申事の嬉しさ、なか〳〵はなちはせじと涙つらぬくにぞ、扨はさうかと我をわすれて我と口に手をあておとたかし。爰は人目の關もれては何のせんなき事、一ッ

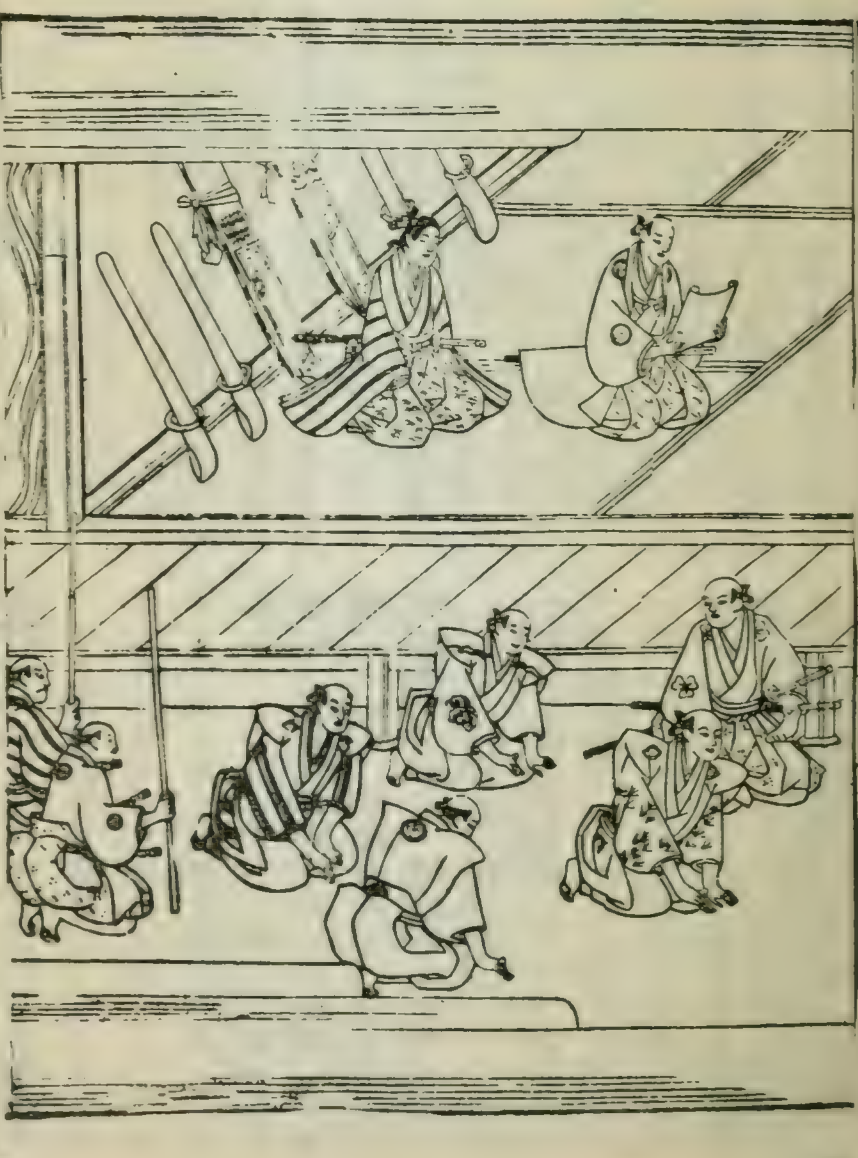
〳〵の物語は身にこたへての覚あり。さもあらば此繪のうらに目印のわりふ有べし其かたわれは爰にありと、合て見るにかはる事なし。扨は我子か嬉しやと、悦の涙つらぬきぬ。兎角命は物種、めぐみによつて二度あうたるは、佛神の加護、嬉しきは我かなしきは今のすがた、是も我子にまよふからと、甲斐なき事をくやみ給ひぬ。勝手より伊勢之丞彼是座敷に罷出、段〻様子を承ぬ。かゝる目出度折から、かた時も此里に置ませんやうなし。はやとく〳〵と亭主を召れ、此女郎の身請せん、よろしく相談頼とあれば、是は寝耳にすりこぎ、まはれ〳〵とこそいへ、亭主はくつわへとんぼ帰りして、行とおもへばあてのつちがちがひぬるにや、ぐんにやりとした顔、首尾はとゝのへば、されば菅原様はさき立て先約あれば、小判を車につんでもかなはぬよし、あつたら銀のをがきれたと、つむりをなづるもをかし。菅原聞給ひ身請の沙汰は夢にもしらず、それにはすこし様子のあれど、此座にてはいはれぬ事。二年を五百兩で請させぬにとやかういふ程がそん成。此段所の殿様へ申あげ、其上にての事にせん。子細はかうと伊



勢之丞が耳にさゝやき給ひぬれば、のみこみました、私次第にヒ成ませいとうなづき、先菅原をかへして後、いづれも打より相談きはめ、目安は宿にてしたゝめん。歸りがけに今一度言葉をつめ、其うへにて年寄組中へことわらん。何とかいはん、かうもあらうか。いや〳〵はじめはやはらかに、是程までにいうて見て、きかずはそれからそれまでよ。先此相談にきはめとて、亭主内儀にいとま乞、直に身請を乞捨に行

㈣ 身請の公事

訴訟人は旅の者三津九郎次郎、相手くつわ木野村屋又左衛門同けいせい菅原、双方只今召出さるゝ申合て出られと、役人書付をもつてふれけるにぞ、



畏て今義、袴の折めたゞしく平地門の代官むかふに座をしめ給へば、與力に入てかしこまれば、くつわ又左衛門はお目通をはなれず、同心は公事人の菅原をはじめ、年寄あげ屋組頭腰をか前後をかこみ、手錠縄取の役人もゝ立がめ、つゞいて白洲に手をつきぬ。時取て、すはといはゞの顔付、目安讀御

前にて讀あぐる訴訟の趣

乍恐言上　私義京室町通何町三津權之助が世悴九郎次郎と申者にて御座候

一　私之母は京嶋原一文字屋常盤と申遊女にて御座候所に、親權之助身請仕私をまうけ、程なく權之助は相果申候。其後母養育難成に付、私は姥かいはうにて成人仕、母なつかしく存寄〻尋候所に、御當地新町に遊女奉公仕居被申候由承候に付、一昨晩尋逢申候。唯今は名を替菅原と申候。丸三年の奉公の内、今日迄一年余相勤ヒ申候に付、親方又左衞門に段〻斷を申、殘年季の所を、金子五百兩にて身請仕度由申候へ共、先約有之候に付難成と申候。其段母に尋候得共、左樣成心當覺無之よし被申候。久〻にて母に尋逢申に付、何とぞ同道仕罷歸度存候所に、又左衞門承引無之迷惑千万に奉存候。不便と思召、親方承引仕候樣に、被爲仰付ヒ下候はゞ難有可奉存候

乍恐返答　私は新町筋何町日木野村屋又左衞門と申者にて御座候

一　私抱の傾城菅原と申者、丸三年切つとめ奉公に置申候。此女年罷寄候得共下地京嶋原にて全盛仕たる者にて御座候に付、身分より大分の金子を出し抱候所に、客をえらみ不奉公仕候得共、是非なく勤をやめさせ勝手にて遣ひ、あまたの女郎を此女にあづけ、見まつべ致させ置候所に、又去年六月より勤仕度由申候に付心まかせに致候へば、少〻勤候へ共賣帳を吟味仕候へば、やう〻半年ばかり賣申候に付、大分のそん銀御座候。只今五百兩にて身請させ候ては私內證ぶ勝手罷成候。其上年季もいまだ御座候。殊に身請の義は、去方へ先約仕置候へば彌〻同心難成奉存候。右之段〻聞召わけさせられ、身請の義おもひとまり申され候樣に、被爲仰付被下候はゞ難有可奉存候

双方の目安を聞召わけられ、九郎次郎を召れ、たま〻母に逢たるうへ、同道仕度は尤ながら、年季有奉公人を是非に出せとはいひ付がたし。其段は又左衞門が心まかせにせよ。今壹年余の事、月日の立は夢ぞかし。暫の間まつべし。又菅原も手形のごとく年の內は何事なくつとめよ。たとへ親方先約の身請有共、かなはぬ事ぞと仰出され、扨揚屋の亭主を召出され、菅原が揚錢は一日と定何程づゝ取事ぞ。さん候あれは太夫と申てお主の身ばかりにあらず。引舟と申て鹿戀女郎を付まして六拾匁づゝと申あぐる。時に九郎次郎を召れ、壹年半有年の所を五百兩にて請出さんより、今四拾兩まして壹年半の間買づめにせよ。然者外の者買事のなりがたくして汝が願の通なり。また又左衞門も親方の功によつて、存分のごく年季の間はおのれが心まかせ、しかも賣つめるといふものなり。外よりの身請の義は、いか樣の事有ともかなはぬ事也。今迄の契約もへんがへすべし其子細は、九郎次郎親に孝有心をかん

じ、かくは申付ぞかし。兩方共に罷立と仰出されければ、皆〻かうべをさげ下宿に歸りぬ。今義がたには今日の對決にては存分に身請せんと思ひしに、あてのつちがちがうてから壱年半、爰は屓にして外の勤をさせぬやうに仰付らるゝは此方の勝なり。兎角下として上をはからふ事なしとよろこびの提重、口をひらいてのみかくる所へ、又左衛門方より年寄とみえて勿躰らしき親仁來り、先今日の公事を互に五ツ／＼に仰付らるゝうへは申分なし。又左衛門身請同心なき様子は元來菅原殿に心をかけ、後／＼は女房にせんため、ない事をたくみ申あげられしかど、其段お取あげのない上に外の者が身請はもとより、年の内御自分あげづめなれば、ねぶつてみる事もならぬ勤、又左衛門が手に入事はおもひ共よらぬ事。

然者根心ほどけぬ主従壱年半がゐらるゝものにてもなし。置心も異な物なり。私爰を存、又左衛門にも異見仕り、何も様にも了簡させまし、此座にて身請させ度存つめて參りぬ。只今殿様より仰付られし買づめをやめて、其金子五百四拾兩にて菅原殿が渡たいが、何と四十兩の御了簡は成まいかといへば、何が扨わづかの金子をいとひ、大事のお袋様を片時もくるわにおかんやうなし。又左衛門得心のうへは、只今にても渡し申さん。先以かたじけなし。

是善なりいそげ／＼金は女郎と引替、雨ふつて地かたまり、濟手形年季手形をあらたむれば、又左衛門は小判の切をあらため、物の見事に請取渡、互に申合て濟帳ついでながら礼まで仕舞、公事宿にて千秌万歳をうたひぬ。中にも揚屋の亭主が腹立るをきくに、いらざる親仁があつかひゆゑ、壱年半の揚錢しぬる迄のそんなり。まうけのないにいろ／＼の世話あゝらよしなやうき世ではある

御前義經記六之終

御前義経記

七之巻目録

懐州室乃漆　吉野忠信

一　西都に有る和泉が城
法師乃腹切　志とごしへ九寸五分乃刀
佛之命のうとち草
床のねけごう　ぶん中有無郎

二　西都に有る志川之波
別路乃女
目安ハ目のそこの　からみ
浮名ハ離波の浪よおもしろく
ものかき上ろ室乃漆

西鶴ゟ川名六原画

(三)

方便(てだて)乃揚銭(あげづり)

一 はしさの　あまりそく見え

扨も中とさくら悪名(あく)の噂(うはさ)

然(さ)れバつまどふく嬶(かゝ)を傾城(けいせい)

西鶴ゟ川名よし於合戦

(四)

男立(おとこだて)乃勢揃(せいぞろへ)

一 留(とゞ)まる人々念(ねん)の結(むすび)も

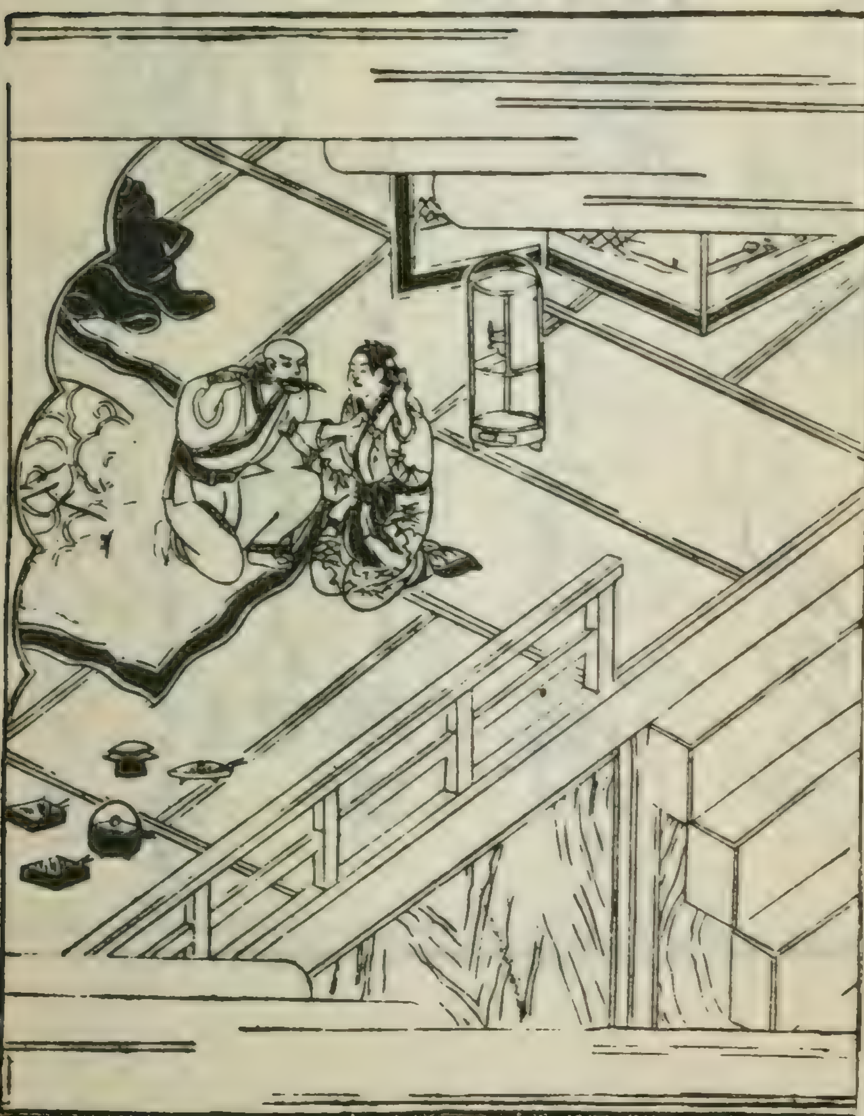
我もしむあきらむ　石門(りうもん)の淵(ふち)

からはうかる男(おとこ)

うくだんが抱(だき)○

㊀ 法師の腹切

勢州高田郡に稱念寺の宗運といへる僧有。宗旨は一向念佛たじなく、毎年難波の濱に門弟のしるべを便に、年に一度づゝの旦那廻。今三年の勤當年も菊月中比より十月のすゑつ比迄、昼は和讃正信偈を誦して殊勝らしく見せかけの衣、たそかれをまつま久しく、暮かゝるよりの身づくろひ、三枚がたに礒打浪、まくり立て行籠の內、西方淨土傾國の里におろさせ、三年のよしみ死なばとかはせしむつ事をたがへず。東口の中宿堺屋といへるに入相鐘。亭主くわしやが左手右手に畏、久しや旦那毎年の時分當年は何としておそかりしぞ。明暮待まして首の骨のまはり兼、外科の宗徳に廿日あまりかゝりまして、藥代一角とられましたと、早つかみ付ん。先お盃千とせ様へ人はしらせ、心言葉のはし。千歲様より度〳〵みしん得たりと夕月夜がらすのもやう。小づぜられましたに、なぜお返事はなかま高に取なし、中戸の口より宗さんのつたぞ。すこしはもたせぶりにて有らぼらんしたげなといひさし、奥座敷の



床ぶちにもたれ、先御息災でめでたし。こなたはしんだやら生たやらとふ人もなき勤の身、人の言葉をまとにするなどゝは昔の事、何とやらの片思ひ。もはやあいそのつきる時分と、遠い所からもつてまゐれば、是は迷惑佛祖をかけて替事なし。國元に替なきひとり身、いやらしい在所者相手にして、茶のみ物語も年に一度づゝそちに逢たのしみ、初心な事いはずと、さす盃をのんでしまうて　　、當年の首尾さん〴〵にて國元はそちゆゑ阿房ばらひに成はてたる此身、行さきとても的を立たれば、願人坊主の風情にて門〻に立観音經讀まはるより外なし。つく〴〵浮世の有様を見るに、百年の歡樂も一日にみつる習、ひとり死るも安けれど、互に取かはせし起請に諸共の命と書給ひぬるを力草、取はづして先立なば、定めし恨も有べしとのひとりやりませうと、云まじき事を思ひつめて語ぬ。千歳おもひかけなきいひ置今さらいやともいはれず。此比命をのぞまれ、暫返答せざりしが、兼小間物屋に借錢こはれし時のせつなて方様ゆゑならば、死出の山路もなんさ。舌くひ切て成共しぬる程に思ひし



が、九郎次郎様の情に預り別てより、未しみ〴〵としたる礼もいはず。命一ツは露のかり物をしむ事あらねど、此人に身をすつるわけもなし。とてもしぬる命ならば今義様にこそと、心に是を思ひつめ、宗運が袂にすがり、うらめしさうなる顔をわざと打まもり、三年の心づかひわする丶事なし。御身ひとりさき立跡に残る身にてもなし。しかと思ひつめ給はゞ、今宵の内にといふ迄もなし。仕度は是見られよと、懐より九寸五分の脇指玉ちるごときをすらりとぬく。爰が女郎の分別所、何が扨しぬるからは片時もいそがん。しかし御存知のごとく日比ねがひ奉りし守本尊十一面観音は母が形見、ふた親の名日には此佛を父共母共をがみぬ。せめて此観音様を首にかけていさぎよく最期をいそがん。すこしの間いとまを給はれ取参らんといふに、宗運何心なく隙とらせけるを、嬉しくひそかに床を出しが立歸り、いや〳〵佛なく共一念弥陀佛何事かあらん。もはや歸るまいといはれて、最期に物わすれてはうかみ難し。はや〳〵取きたられといふをさいはひに、宿のうちをそろりと出、阿波座の中やど大和屋の内義にくはしくかたれば、それはようもどらんしたと、二階の半びつにかくしぬ。初夜過四ツの鐘打て後、宗運さてはと心得、我をたばかり立のきけるか。おのれゆゑに身の置所なくし、今更ひとり死なん事口惜、尋出してつきころさんと、案内もなくくつわが元へ尋行、千歳を出せといふに、亭主おどろき、其者は今朝より東の堺屋へ参りぬ。御用あらばあれへお越ヒ成ませう。いや〳〵其手はくはぬ。今日の客は愚僧なるが、か様〳〵の子細によつて、互にしぬるはず成しに、たばかつてにげ歸りぬ。そちが女郎をしらぬというてはすむまい。うたがひばらしに、家さがしをのぞんで尋れど、千年は居ざりき。近比そつじ御免あれと庭にとびおり、大の眼ひつくりかへして大肌ぬぎ、畜生傾城いぬばいた、それ程をしき命ぞならば、なんのおのれとしぬべきぞ。命くれんとぬかせしをまことと心得、おもひの外成不覚をとりぬ。たとへ我一人し丶たり共、魂は此世にとゞまり、三年とはいけおくまじ。御亭主庭をかり申と、立腹切てのつけにそれば、くつわが内は紅葉の川。一家おどろき東西の門をうたせ、所の代官へうつたへ、首尾能相濟、法師がしがいは宿屋が取置、浪風なしにすみはつるならひながら、傾城の身持ほどかりそめならぬ小夜衣。

わが逢客のつれと聞てさへ、中〳〵あはれぬ勤成しに、まして命をのぞまれにげ歸りし事、難波の町に沙汰し、晝見世夜見世の見物千とせが局に立重り、口を揃ぶ心中な女郎とは是かあれかと指さしてわらへば、客に成べき男も氣をとられ、外の女郎にあうて、千歳が見世のさびしさ、少し有男も一人のき二人のいて、全盛日〻におとりて、あさがほの日影にしぼむ風情。親方もこらへ袋の緒もきれ、俄に田舍へ成共くださん胸をきはむる折ふし、播州室のくつわ、龜甲屋彥五郎といふ者のぼりあはせ、五年を五十兩と定、金子を渡し早明日出舟すべき由、千歳泪をながし、我命をかばひし事、情有今よし様にせめてと思ふ心から、をしからぬ身をいとひ、難波の人の笑草となりぬ。あまつさへ其人に逢事もなくして、室とやらにくだらば二度みる事も有まじ。勤のかなしさは行間敷ともいはれず。若また命のあらばあふ事もがなと、過去の因果を思ひつゞけて心指をこま〳〵したゝめ、おくりたり〳〵と箪をたよりに書のこし、なじみ有傍輩立にもあかぬ別れ、命あらば五年の春あふべき暇乞、随分まめにて御のぼり御つとめ、さらば〳〵と遣手禿下男、中の嶋迄送りければ、待兼てゐるしかま舟、帆十分にあげて室の湊へいそぐ浪

㈡ 別路の文

孝の心天につうじ時をまたずふたゝび母に相生の松風、さつ〳〵の聲やむ事なく、旅宿なれ共巻樽山をなして、なま肴賣庭にたえず。門にものまう、取次の奴出入に隙なく、つゞけて十五日のお目出度大かたに仕舞、有つれ〳〵今義母の常盤にむかひ、妹の行方を尋給へば、されば我二度あの里に勤も其子ゆゑなり。都を立のき伏見の黒染に有し時、去者のいひけるやうは、是より下の關何がし様とかやへ、十年切て宮づかへにやり給へといさめけるに、折からならぬまづしさ。子を捨やぶはあれど、身は捨がたくして、手形の印に金子五兩請取奉公にやりぬ。其後人の語しは常の宮づかへといつはり、よしなき方へうるならひありと、さる人のしらせぬれども、其金もはやつかひなくして、とりかへさんと思ふに甲斐なく、何を力に取付嶋もなく〳〵此身をしろなし、また立歸る地獄の勤、暫親方に隙もらひ、すぐに其口入方へ尋行に、此者しゝてあまつさへ後家が有かもしれず。其時の我心かく迄因果のはてしなき物かと、身をうらみ身をか

こち、近所の者ひとり〳〵に尋ぬれ共、更にしる人もなかりき。八歳の秋はなれし事なれば、おもざしとてもかはるまじ。自然と目印には左の目のはたにほくろあれば、尋とても心やすし。兎角下の關にくだり様子を尋、しれざる時は爰にのぼり、勤の里をかるならば、しれぬといふ事有まじ。先此程の心遣今日はいかなるかたへ立越、遊山し給へ。畏いへと四良三郎一人供なひ色里通のふかあみ笠、めだゝぬ風情、若又尋あはんもしれずと、入口より南北にわかつて、つぼね〳〵に氣を付て行内、千歳が元に行あたりぬ。傍輩の女郎共口を揃めづらしの御出、千とせ様の身のうへ。御ぞんじないといふ事有まいといはれて、扨は町中に沙汰有しは爰なる千年殿の事か。八まん存せぬ事は、定めし我等が様子も御存じ有べし。成程御尤に存じます。千歳様もかうした首尾ゆゑ幡广の室へ又身を賣替て下り給ひぬ。もし御出もあらばとみを殘し置れぬと渡しけるに、今義請取封をきつてよみ給ひぬ。其ぶんに何ゝなれ〳〵しくいへ共御心ざしのほどを思へば中〳〵夜もねられぬほどの嬉しさわかれ〳〵てより御げんとてもあらねば御礼とても申さず折からふみと心ざしいへども御首尾のほどいかゞとかれこれをあつめて心一ツにまよひ〳〵まことに過つる比ははづかしき身のないしようをきかせまゐらせ其折からのせつなさ申さぬとても御すもじあれかしにいへ我身事定めし様子も御聞あるべし思ひの外なりし浮名を立られよしみの里をはなれてまたしらぬ里へつとめに行道の程はる〳〵の海上わたり〳〵て行さき人の心もいかゞあらんとこれのみ案じ〳〵兼て我命は我とかぎりを定をしむ御事さら〳〵あらずいへ共ふしぎ成しえんにひかれおもひもよらぬかたサマの情にあづかりまし其御恩とてもおくらずよしなき人にゝかはりなき身をやりましてはせんなき事と思ひうき名の立は覺悟今さらおどろく御事もなくいへかく申せばいなものかにいへ共いつとてもかたサマにあふまでの命今五年のはるをかさねてまつ斗にいへそれまではずゐぶん〳〵御そくもじにて御暮し頼入〳〵わし身の上は木ゟおちたる猿とやらにてよしみゆかりもあらざれば只ゝつとめの殿たちを大切におもふばかりことし迄五とせのつとめにふかきやくそくとてもあらず身は一筋のむもれ木くちはつるならひかぎ

りの年だに明候はゞすみの衣にさまをかへいかなる野山にも引こもり後生の道と心指候へ共未ばんなうのきづなやめがたく情有人のすがたにまよひより〳〵御事今は中〳〵あまに成べきのぞみたえた〳〵もとの身こそましならめと是を便にひなのつとめもくにならず候たとへ口にいはねばとて目にもるおもひは心の内こそしるらんひのもとの神かけて此おもひはる〳〵の渡海はへだつる共魂は御身のうへに付そひ守の神共ならば又我身のおもひもはれて千世を一夜のあだに成共夜るの枕のそひぶしをねがふ斗に候くどう申もはてしなき筆の跡くはしき事は重ての便に申おくらん御心もあらばみのかへしを待斗に候先逢まではさらば〳〵かしこ

元サマまゐる　　千歳ヨリ

今義おどろき神ならぬ身とて今一度、あはでくだせしのこりおほさ、みのどくこなたも同じ思ひの種、逗留内は枕を重てあうてみる氣ざし成しを、身のうへに取まぎれて思ひもよらぬ筆のあと、なまなか見ぬこそましならめ。さいはひわれ下の關へ行舟の道、室の湊にいかりをおろさせ、互におもひをはらすより外なし。人あまた召つるゝもよしなし。兎角したくに歸り出船の用意母うへにいとまをこはせ給ひぬれ共、なか〳〵一人ははなちもやらじ、我も供にとかこち給ひぬ。仰をもるゝは又不孝ぞかし。供かくもと夕塩のさしくるを門出に、主從以上十余人難波の濱を跡になして、川口おもてにこぎ出し、清天見すまし沖に乘出し四方の景を詠るに、先左のかたは天王寺佛法最初の御寺、聖德太子の御建立陸にて參詣せしよりなほ殊勝なりぬ。あはぢのせと住吉の松、幾世へぬらんと古哥をつらねて、むこ山おろしさらに吹事もなかりき。明石兼たる舟の内、兵庫のみさき一の谷、あれなん敦盛の御墓所、かすかに見ゆるがゑびらの梅、高砂の浦しほみが崎、姫路の城もほの〳〵明に、詠やるしかま津の湊、舟やすまずにいそげといふもろこゑを揃て、室のみなとになん付けるとなり

㊂ 方便の揚結

はる〳〵のはたうをしのぎよしみの里を跡になして、室津の湊に又流よる流の身、今此里に名取川、千歳といへるをさらりと替、小ざつまとなんいへり。動かゝさぬ揚屋入、たそかれ時に客を待顏、小さつまならではと繁昌して、くつわ彦五郎外ならぬ悦、內かたにて

膳すはる比などかぶろに給仕させて、遣手のかめがおそばはなれず。所を替て此仕合、難波へきこえての外聞、ちかき内にはおぼしの大臣が身請せんとの噂、賀古川の何がしとはりやひによつて、暫やみぬ。舟のいかりを爰におろさせ、たゞ今義こそ此色里に浮身をよせ、小ざつまに尋あうて、ふかき妹背のむつごとをかたらひ、通路にめでて、御供には四郎三郎一人いづれはゞかる事なき室の湊、下の關に行事をわすれ給ひぬ。三郎左衛門是をくやみ、見えかくれに供して御前に畏、あまりきようがる御通、誰つぐるにもあらねど、母君にもれて中〳〵御腹立つよし。若此事の善三郎勘七などへ聞えては御身の爲よからず。此度の出船は、妹君の御行衛を尋出たる我〳〵、遊山歡樂などにあらず。ひらにとゞまり一先下の關へ御くだり、万端首尾よきうへにては、是ていの事は見ゆるし申さん。たゞ御とまり然べしと、様〻教訓するに、されば我此里へかよへばとて、さのみ深入する事にあらず。難波にてのゆかりを思ひ、はる〳〵此津に尋來り、妹背の枕五夜をかぎり、又逢事もなかりき。其後何者ともしれず、揚詰の客有とて一圓我にあはざりしにくさ、様〻心をくだくといへ共此客の出所しれず。是をだに見出しなば、早速しもへくだる



べし。今暫の内了簡して母上にもよろしく、取なほしをたのむと手をあはさせ給へば、御言葉にいつはりなくばと宿にかへりぬ。嬉しやとすぐに立入戀の宿、姫路屋が座敷に居なほり、今日は是非小さつまが客にあふて段々のつめひらき。もらふて成共あはではかへらじと不興顔する折から、かぶろのつまや來り小ざつま樣のいはんすは、まだわし事は一年や二年で隙はなし、かならず外へ約束してくだんすな。元樣のござんしたらよいやうに心得てといひさして歸れば、扨こそ我をせく客あるにきはまりぬ。逢て樣子を尋んと、襖をあけさせ給ひぬれば、伊勢之丞にてぞおはしける。九郎今はたまらぬ風情、此比揚詰の大臣とは御自分樣か、さりとはさもしき心底。尤賣物とは申ながら、私と一座も七成、互に顔も見しりあひ、よこあひよりかゝるたはむれなさるゝは、四ッ足同意にぞんずるなり。傾城にもせよ枕ならぶるうへからは、暫の妻ぞかし。小ざつまにいひぶん海山有といへ共、よくづらひつばる猫傾城、いふたけほむらの種ぞかし。



さらばといふて立給ひぬ。伊勢之丞おしとめ、是はけうとい恨ぞかし。それ程の事をしらぬ身でもなし。まつたくつまどのに心あつての事ならず。あまりそなたの通路しげく、大事をすてゝ

よしなき色にほだされ、行べき方のはてしなく、氣の毒のあまりお袋様の智惠をかり、何とぞふたりが中をさき、はやく出船すべき爲、小ざつま殿迄頼此仕合。白らいさうした心底なしと、うちあけて語給へば、小ざつまも勤にかへて逢たき身の、あはぬといふはいかばかり、是皆おためを思ふからなり。難波の濱の情のほど、蒼海よりもふかし。高きは須弥もいそのかみ、今誰何といへばとて、方様をのけよの人に、さうした不埒が成物か。いとしげさうに伊勢様になんのとがゝ有事ぞ。御うたがひをはらし給ひ、今宵にても出船し首尾をとゝのへ御のぼりこそたが眞言成言葉のはし、今義様子を聞給ひ、はやまつてしそんじぬ。いづれもゆるし給るべし。各のいさめにまかせ一先下にくだり、のぼりにはまたかならずといとま乞のおてうし、盃のねまりあらへおすひ物を替ませ、爰は亭主があひぢやまで、其あひ一つとつまみ肴に一角二角。うつゝなやよく酒にみだれて亭主と花車は板の間に夢をむすびぬ。母の常盤今義のおそかりしを待兼、三郎左衛門をつれて揚屋の奥に入給ひ、うつゝなき風情皆〳〵わけもなく臥けるはをかし。今義と小ざつま枕はづして夢みる有様、はるかこなたよりさしのぞき、身につまされていふにはあらねど、いづれか殿立のもてあそぶべきは、傾國の色にてとゞめぬ。あれ見給へしほらしかりし二人が寢すがた、花と紅葉の色と香をむげに引わけんは戀しらぬやぼぞかし。九郎が心に入たる女ぞならば身請してえさせん。元來流に筋はなき物ぞかし。惡性氣のつかぬうち、妻に定おかば身持くづす事有まじ。尤勘七善三郎なんどがんばうのうへは、いかなる人の息女にてもよびかぬる事有まじけれ共、此道ばかりは縁の物。いづれも相談のうへ根引してやり給ふまじきやと、さすがそれ者の了簡、是は尤成御思案、よろしくはからひ申さんと、外にまた宿もとめ、くつわとみつ〳〵の相談きはめ、三百兩の小判耳を揃て小ざつま請とらんといふに、亭主手を打、未中宿に夢むすびて罷在。今日のお客にとわりを申、つれまゐらんと姫路が元にとんで行、禿のつまやにかくといへば、皆〳〵寢耳にぞんの外な事を聞て、先目出たいとどよみぬ。今義興をさまし、身請の主はいか成者と尋給ふに、さんは三十あまりの女中、姿たをやかにさながら都そだち。女の身として女郎請ださるゝはつひに覺ませぬ圖な事、小ざつまが出世只今金子請取はずにて、よびに參りましたといふまでもなし。女が女をうけ出してなんのやくに立とぞ、外へは

やらじ我請出さんとすこしはせき心。いや〳〵左様にならぬは此里のならひ、先約と申殊に手形迄したゝめ置ぬうへは、何ほど御意なされてもかなはぬといふに、此うへは直に立越此身請我もらはん。案内いたせと出給ふに、是は近比迷惑な事。御無用にヒ成ませいと揚屋がいふを、伊勢之丞がしり目遣して案内させ遠慮なく奥にとほれば、母常盤にてぞ有けり。互にはつともろ袖を顔にあてゝの不首尾、くるしからぬぞ今義、小ざつまと深い中と聞つるゆゑ、一旦腹も立しかど、思へば世上のならひぞといづれも了簡のうへにて、そちがまゝにさせん爲身請して參らする。幾久敷友に白髮をいたゞき、松竹のよはひふるまでぞひはて、父の家を引おこし、二度富貴とさかえ給へ。それ女郎をと小ざつまを請取、くつわに祝義の樽肴、三百兩の勢は、蓬萊山もかくやらんと、上下の男女同音に三國一ぢや嫁にどりすましたしやん〳〵

㈣ 男立の勢揃

小ざつまが身請近在にかくれなく、網干の客千里屋の源七どいふ者は、今年廿四の男盛、髮は三ヶ月成にくるりとねぢた風俗、かるたむすびの折めたかく、羽織は腰切むな紐高く引しめ、定紋にはこくもちの内に奴が唐がらしくらふ所をさいしき、からだより長き脇指の柄糸鼠屋が打たる又ねずみ色、目貫はくりから不動に猫のそばへる所を物ずき、大ざめを五色にいろどらせて、さげ緒はつるべ繩のごくなはせ、着物わざと肩のゆきながく裾みじかく、物ずき成もやう猿が實引するなど繪かゝせ、室の湊にかよひて小ざつまにのぼり、近日請出スべき胸算用ちがうて、此比何者共しれず根引するよし友達共がしらせけるに、はやむつと氣になりうでまくり、弓矢八幡此女郎、人手にわたしては一分たゝずと、日比語し無分別中間へ廻狀まはしけるに、何事成とわかいもの源七が宅にあつまる。先一番にうでなしの吉助、じや腹の團六、あなくどりの松藏、もがり竹割之助、いひかゝりのこねすけ、にげ尻大六、ゐのしゝの虎松、みけんきずの藤之助、やまがら權吉、あてなしの九郎助、天狗鼻の太郎作、うつかり半内など所にての男立、皆打よつて相談するに、兎角ぐめんもことによる。はや請出して行と聞、今になつての評定一里さがつての分別、賀古川の大臣めとはりあひ、それなりけりにして置さへ茶せん組のひけなりと、皆人わらふさへ無念なるに、余國のやつばらが入こみ、此湊の女郎つかんでいぬるを、おめ〳〵わたさんやうなし。何ぶんきやつらが宿に

ふんごみ理非をいはせずうばひとるゟ外なし。手ぐみはかうと智恵の有たけふるひけるに、源七是にそゝりあげられ、此上の分別なし。しかしこちとらは此邊にて見しり有者、後日の詮義もむつかしければ、姿をかへてうばひとらん。いづれもなんとおもはるゝと、座敷をきつと見わたせば、不殘是に同心して、姿を替るは何がなと、ほう杖する者あれば、硯とりよせ人形かいてみるぞんな者有。非人となつてゆかんといへば、それも其役目の頭町／＼に居て、顔見しらぬものもらへばしたゝかにどづかれてもとるぞかし。天狗鼻の太郎作、座敷を立てうらへ行どおもへば立歸り、皆の者共氣づまりに案ずることなし。われらが趣向はかやう／＼とひとり／＼の耳にさゝやく。さりとは智恵も有物かなと、いづれも是に成すまして、俄に甲頭巾をとゝのへ、めん／＼が寺／＼にて衣をかり、二尺五寸の奈良物ねたばあはして、法師の



すがたに様を、時は今ぞと夕暮方、人顔のみえぬが命。自然の事あらば湊の濱をよこきれに、落合谷にて待あはせと、互に詞をつがうていそぎぬ。此事今義方に聞て、いづれも打寄爰にも又思案なかば、かゝる足よわ有ながら、油断する事ひつきやう毒の心見なり。こぬさきに立のく手立伊勢之丞がいふ

は、我九郎次郎と成て随分事をしづめん。其間をうかゞひ何茂一ッに舟に乘、赤穗の汐津濱迄落給へ。きやつらをたばかり跡よりおつ付べし。おそく共はやくとも、かならずそこにて待給へと詞をあはし、湊にかゝる舟にのせ、順風にまかせ押出す。茶せん組の男共、皆一やうに法師の姿姫路屋が見世に腰をかけ、小さつま様の身請先お目出度に、御酒一ッお祝共にとのしあがりぬ。わざとかまはぬ伊勢之丞下部に籠をつらせ、そばをはなれずくるわを出て、一二丁行所へ、むかうよりじやばら猪のしゝ立ふさがり、跡前より籠の棒をとらへて、この籠にこそ様子あれ。わたせといふて取まくを、うでなしとみけんきず、門のかげよりつつと出、下部をけたふしうばひとる。伊勢之丞おどろき、命をたすけ給へ籠御用ならばわたしませうとにげ歸り、うけとつたりと肩にかけ、濱邊をさしていそぎぬ。しすましたりと伊勢之丞、又姫路屋に立歸り、何と亭主上方者の智恵みられよ。籠にいれしは石臼なりしを、ぬつほり共が小さつまとおもひ、つれ歸りぬるをかしさ。一ぱいくはせた悦に、いとま乞の酒のまん。内義〳〵とよびぬるを、源七かくれ是を聞、小ざつまと思ひしに、たばかられぬる口惜さ。此意趣ばらし、討はたさんと案内もなく座敷に入、まとの小ざつまわたせといふに、伊勢之丞さわがず、我小さつまが身請の客、御用あらばといふ所を、ぬき打にきりつくるをさらりとはづし縁より下へとびおりぬ。いづくまでもとつゞいてとぶを、下にて待うけとつておさへ、高手小手にいましめ、松の木にくゝり付、ゆるりとそれにござれとて、横面二三十はりまはし、うら道よりそろりとぬけ、息をはかりに濱邊に出、爰かしこを尋る所に、れふせん一艘のりすてたり。天のあたへとよろこび、かの舟にとび乘、綱おし切て艫を立なほし、あこの汐津濱へおして行に、程なく人〳〵の舟におつ付、互に無事の對面暫爰に足を休、朝嵐にまかせくだるべし。ともかくも仕らんと、濱にあがり人家をたづねいきをつぎこゝろしづかにふしけるとなり

御前義經記七之終

御前義経記(ごぜんぎけいき)

八之巻目録

下乃関 うりぬる鏡

一 面影うつる恋風のたより

呉三界(さんがい)にならぶ色

船中(せんちう)の恋がたき 人を殺(ころ)す[illegible]

欲風(よくふう)よりおこる人のちぎり

座敷(ざしき)[illegible] おやぢの乗よせ

二 面影うつる見ぬ心の鏡

下の関の繁昌(はんじやう)

大敵(たいてき)のうら口 [illegible]

面影うつる鏡のうす

三 女郎(ぢよらう)の舞妓(ぶき)

〽上方(かみがた)土産(みやげ)仏(ほとけ)の系(ちう)
梅川(むめ)源(げん)仏像(ぶつざう)に涙する迄

〽陣(じん)八手みやげんの世の中

〽若様(さま)も忍ばむ
見る様とふく也

〽若様なすぬ
折れよ(く)の書(そ)き

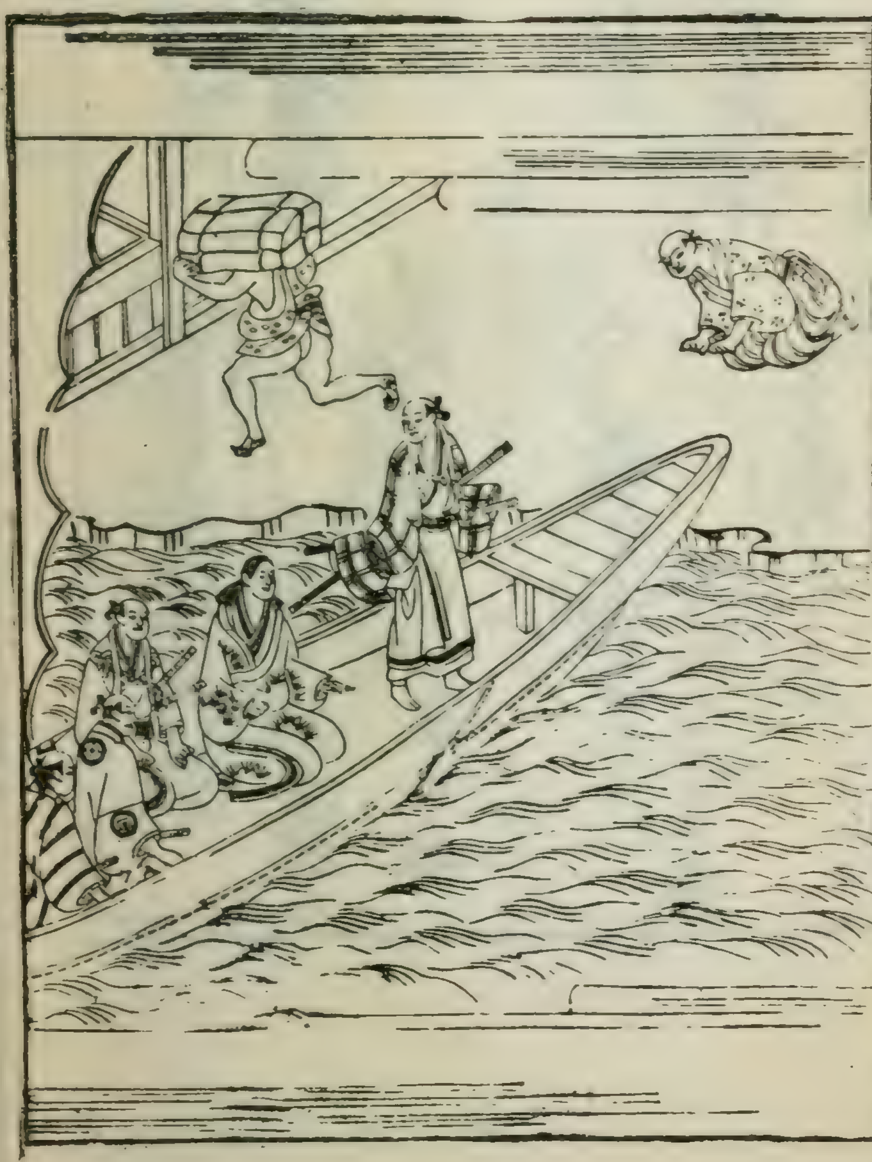
面影うつるまつゑまで

四 兄貴(きやうだい)のいのち塚(づか)

悪(あく)ぞう(ひさ)し、因(こむ)るみ(ひ)ぞうむ
今(いま)うゆめ(ゆめ)の朧(ろう)也

㈠ 子は三界の首かせ

浪のおとしづかに帆は十分にあまる空、舟頭はゝづゑして足にて揖おすなんど、さりとは自由成物ぞかし。一日一夜に百里は行ならひ、是千里一はね自然と風かはれば手のうらをかへし、人の姿もかいくれみなそこにうきしづむも、人界の身のうへに替事なし。今義一族赤穂の塩津濱より乗出し、海上心のまゝにして、山の姿もこがくれ詠やるに隙なく、またべう／＼たる沖中に夜をこめて鳥の鳴音も聞なれず、舟中のつれ／＼せめては是をと、哥がるたまきちらし、天智天皇秌の田のかりそめならぬとまのしとね、小ざつまが尻目づかひも指合をはぢ、わざとすんとした風情。持統天皇春過てといふ下の句を我勝にとりやひ、順徳院まで取つくしたる手なぐさみ、勝負のあらそひ他人まぜずのたのしみ。かたへにては伊勢之丞が大將ぶん、片肌ぬいで四十八願の繪合、後には三枚がるたのおせ／＼、四郎三郎は血氣にまかせ錢の有たけ跡さきにはり、こぶしをにぎつて爰ぢやといはん顔、三郎左衞門は年比にはぢてかしらに十匁、跡ばり卅の錢にもひだりの手をかけ、うん吉ならばなか／＼はなすまじき風情。舟頭の



六助はゑてに帆ばしら、なんでも旦那衆の錢は我らがものと、札きる手もとはしかう、跡さきなしに壱貫の錢ほんとにはる。伊勢之丞が親をうけてまきちらしたる手前かるた、信心きもにめいじて三度いたゞき、南無かるた大明神とねがひをかくるもうたてし。そりや見たか八むし六助はおいてう、そこをひくなととつとしめる。四郎三郎はつけ目出入なしとあたまから、三郎左衛門は七すんおつと庄兵衛の婆さま、三十の錢をとられて子共の指さつた顔するもをかし。拙者はばくち嫌なれども、いづれもめさるにすましたらしくもならず、はることははりしかど、折ふし手前に錢もなし。長の旅路にこれなくしては力なし、わづかなればはずまれよと所望しられ、是非なくやつてすましぬ。舟頭の六助は月夜に釜ぬかれた顔してかたすみにふせるもさもし。四郎三郎はもとびき伊勢之丞はかし此舟今宵にても下の關へつけたら、たほでにこ〳〵わらひながら、こりや我等が負た錢をくだされうか。何が扨、舟頭なんと我仕合を見よ。隨分せいだけふあすの内にさへつかば、壹貫の錢して舟をやれ、此錢慾にはせぬといふ二目とも見ずはずむぞかし。其口かなを、六助がきいて、旦那衆物は談合。もらずわすれ給ふな。扨各は人を尋にご



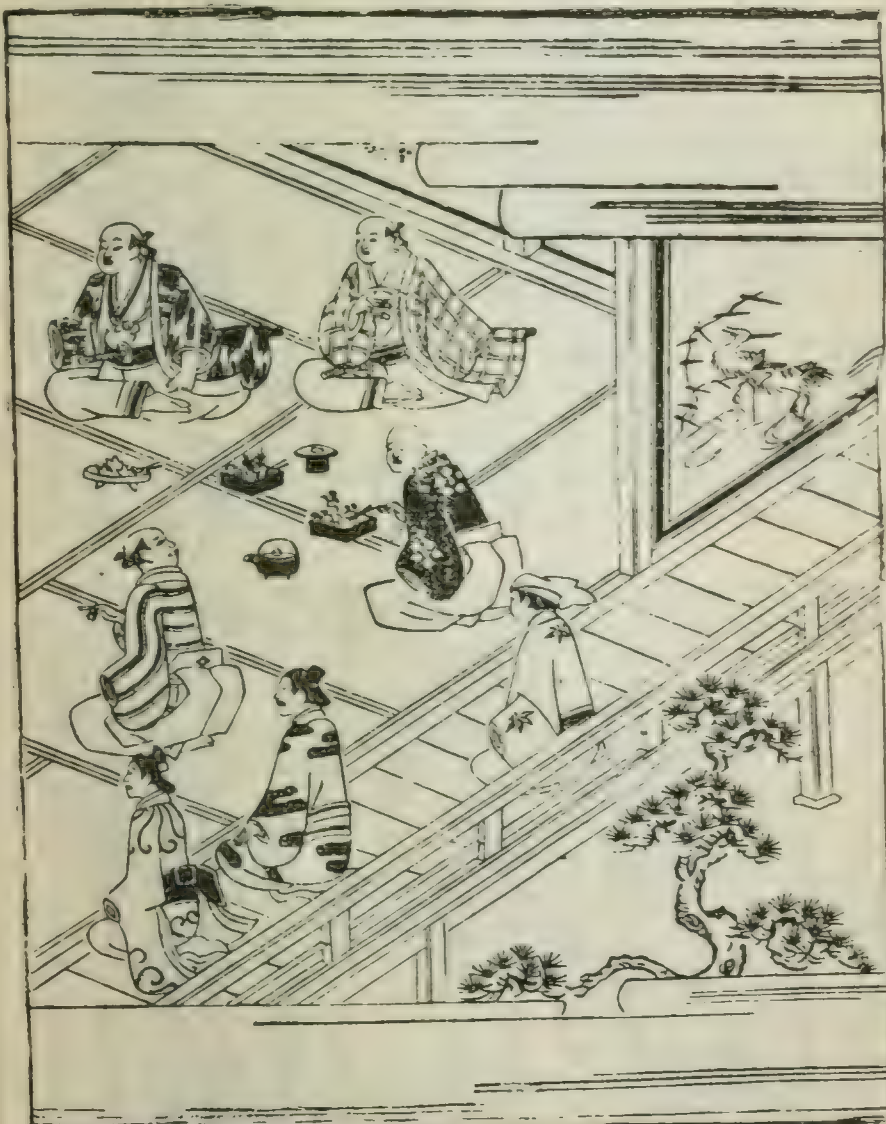
ざるよし、下の關は猫の額ほどある所なれども、諸方の入こむ湊にて、けふある人もはやあすはなくして、立替たる所のならひ、ひとり〳〵尋ることもよしなし。幸わし共が親方は上方衆の中宿、殊に名主所にての口きゝ、野中屋の半六、これにお宿をめされて諸事御相談有べし。是究意の智恵いづれも同心して是にせよと夕暮かた、さあこゝが關の港、お約束の錢いだしませうといはれて、是非なくわたせて、舟頭舟よりあがり野中屋へかくとしらせけるに、亭主半六下袴を着しあがり場まで迎に出、見ぐるしけれども私かたへ御一宿のよし、まづこなたへと案内し、奥の座敷に御供申せば、物賣あまた入つどひてのあきなひ口、いなり町の揚屋からは人橋かけて、上方よりのお客はお女郎買とうけ給はる。隨分おとりなしをたのみますと、早たねまいて樽肴もちせくなど、亭主が返答するまもなし。きのふとくれて今日五日あまりの見物、有時伊勢之丞三郎左衛門四郎三郎三人つれ立町より歸り、ひそかに亭主をよんで、此比貴殿にもかたる通り、我〳〵まつたくええうにくだらず。加樣〳〵の女中此國におはしますよし、此比しのび〳〵に尋るといへ共一圓めぐりあはず。それゆゑ今日は此所の御代官所へうつたへ、段〳〵おなげきを申ければ御れんみんふかく、我〳〵共が心指をふびんに思召、近日町中へふれわたさるゝよしおほせ下され、其上にて尋る者の繪圖をかゝせ、京橋とけいせい町の門に立置べし。覺有者たづねゆかんとかたじけない智恵をかつて、歸りし足に繪圖をかゝせ、二枚ははやお指圖の所に立置歸りぬ。今一枚は此おもてに立んと持參いたしぬ。是見給へと出しければ、亭主立寄書付をみるに、當年十九才の女左の目の下にほくろ有。此圖にあうたる女御ぞんじあらば、早速此所へ御しらせ有べきよし、是ほどくはしく書たるうへは、しれぬといふ事よもあらじ。殊に殿樣より所〳〵へおふれと成るゝからは、かくしおかんやうなし、明日より門にたてん。夜もいたうふけ候へば、暫御休あるべしと、亭主は勝手成一間に入て夢をむすびぬ。いとゞみじかき秋まへの夜はやくだかけの音やかましく、となりの乳のみ子が目をさましてなく聲、亭主が寢耳にいれば夢おどろかし、手づから繪圖を見世のさきに立けるにぞ、通の者共立かゝつてふしぎをなすはことわり。其明の日六十ばかり成けるおやぢ廿ばかりの女をつれ、繪圖をしるべに尋來り、我は此町はづれ長門屋の彦五郎と申者なり。此女當年十九才殊に左の目の下にほくろ有。七年跡

に召かゝへきはめの年今三年御座候へ共、殿様よりの仰といひ、人を尋るほど世に難儀成事はなし。それ故只今召つれたり。そば近くめされおたづねの女にて候や、とうじませと申けるに、伊勢之丞よろこび、かの女をひそかによび、顔を詠めて興をさまし、よもかし今義が兄弟にかゝる不器量あるまじけれ共、目印のほくろまさしく左の目の下にあり。そちが生國はいづかたにて、何ゆゑ此所へはきたりしぞ。さん候わが國とうは長門の者でおんじやるが、七ツにて母にわかれぬ。父は紙をすいて渡世をくらせど、やしなふべき力なくして、十一の年それ成親方殿をたのみ奉公にまかりぬ。お手前がたはなんのようばしあつて召よせられたと、さりとは興がるなまり。扨こそ國もちがひぬれば、同道して歸り給へといはれて、こめんだうな所へきたと親仁がつれて歸る。其跡へくるわ者らしく、長崎屋林十郎といふ男かゝへのけいせい瀧川、今十九にしてしかも大きなるほくろかくす事のならず、駕籠にのせ今義の宿に案内をさせ奥にとほれば、伊勢之丞瀧川に近づき、そなたの國はとたづぬれば、さればわしが里は長崎にて父にも母にもをさなうしてわかれ、世のつらきにさそはれ、伯父様が九年いせんに此色町へ身をしろなし、くがいもよほどつとめました。おの／＼さまがたにはいかなる御用ばしあり、わしを爰へはよばんしたと、さすがやさしき詞のはし、是も生國たしかならず。先歸り給へど帳面にしるせば、なんのわけもない事に爰迄來りぬ。皆様おさらばやと立わかれ行あゆみぶり、尤やさしき風情ぞかし。いまだ一二丁もゆかざる所へ、七十ばかり成ける老女娘らしきに綿帽子きせ、おたづねの女はわらはがひとり孫なれ共こいつが身のためよき事ならば、いづかたへ成共進上いたさん。お目印のほくろ是御らんぜと、自慢の有ほどするもをかし。あたまからちがうた事なれ共、器量を見んばかりに帽子をとらせば、およそ廿四五成しが木綿ぬのこの脇あけ、茶小紋にはむら雀、櫻花の五所紋、きやつはよくにて金銀にても取べきたくみ。にくさもにくし、なぶつていなさん物をと老女に近付、此方もたづぬる女は左の目の下にほくろ有。是は右の目の下なれば同道してかへれといはれて、此娘がへらず口方ちがへは山伏をたのんできたうすればよい事をとぶつくさいうて歸りぬ。三郎左衛門がいふは繪姿のそへがき生國付の有に、他國者の入こむはふしぎと、おもてに出て繪圖をみれば、あんのごとく生國みやことといふをかゝざりき。扨こそよしな

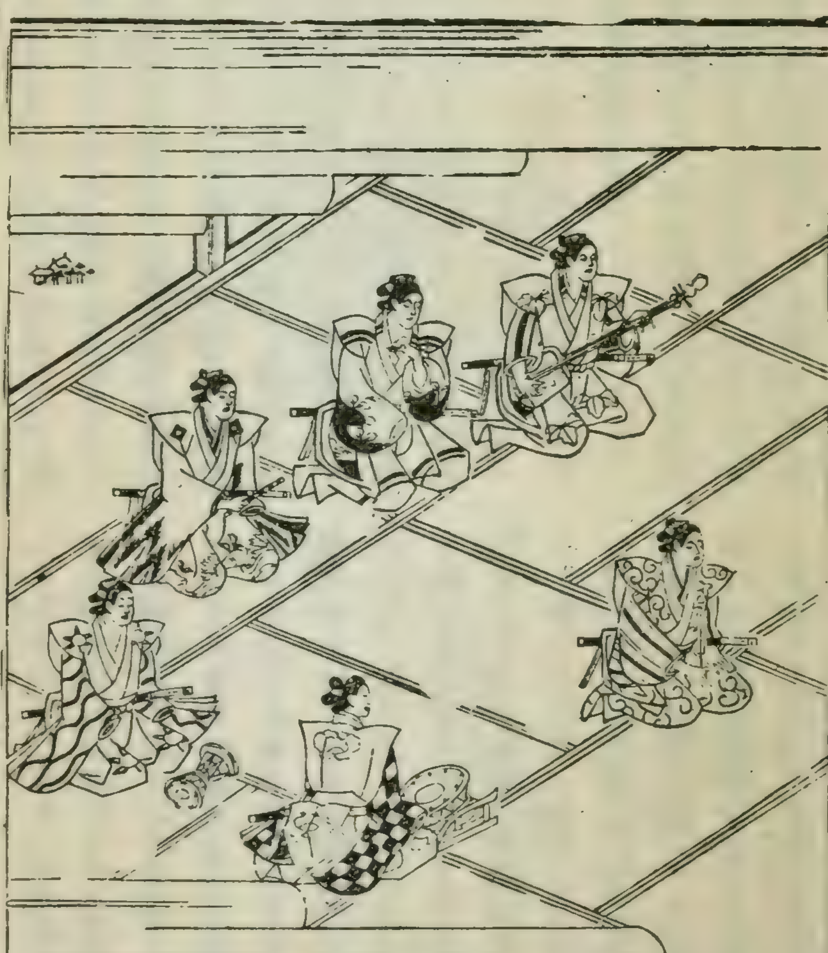
き者の来るは尤。所の何がし様のお耳にもいれ、かやうなる無念、いそいで書そへられよと不興顔するは尤。にはかに筆を染書なほしけるにぞ、其明の日よりは何者もこざりしりしとかや

(二) 下の関のはんじやう

下の関は北国西国舟、皆此湊に入こんで順風を見あはせ、荷主舟頭爰に足をやすめて売買をなし、万自由をなす所なり。殊に稲荷町といふは傾城あまたかゝへて、田舎なれ共此里の女郎一芸にほまれをとり、上方にてはやりし狂言せりふ物まね不残覚て、大よせには女郎すがたを若女方若衆方、立役敵役道外花車、おやがたと衣裳までをかへてかぶきをはじめ、客のもてなしとする事、都の傾国はづかし。さればこそ諸国の商人此所に入込、めん〳〵がおもはくに馴染をかさね、どうけつの枕は揚屋の座敷にてちぎりをむすび、局のくらきうちにもなんのかのゝつめひらきして、暫の口説も又めん〳〵がたのしみ、あまの岩戸を遣手がひらけば、又こんといふ前巾着こまがねつかんでやるにも、五厘と目をちがはせぬは遣手が損なり。げには女郎のいきぢもどこやらこせつきつめひらきも窮屈にして、のんびりとせぬはさすが又片田舎ぞかし。されどもすきに赤烏帽子、物



ごしになまりあつてあだない所がかはゆらしいと、それすくをのこのあればこそなれ。佐野源左はまづしき中にも、松梅櫻をたのしめるなんど、皆おなじ心ぞかし。しかし色里にて、常世がはなしは禁物、女郎やり手が耳にいると、かならず塩水打ぞかし。大ていの商人此湊に入込女郎にあひかゝつて、裸にならぬ者もなかりき。およそ和朝に傾國あまたはびこり、所〳〵にない國もなし。其比秋田最上の何がし能登屋孫三郎、種屋與三次郎といふ大商人毎年難波の濱に俵物をつんで、おのれも共に乘の舟、三十反帆を氣まゝにあげさし、下の關に舟をとめさせけるに、舟頭の六太大か早先立てくるわへ内通しけるにや、揚屋の亭主丸屋の五郎作を始、一家不殘とんぼがへりして湊に出むかひ、旦那のお前にかしこまり、毎年の吉事にまかせ、御むかひに



推参仕ぬといふ迄もなし、是よりすぐにと仰けるを、さあ大臣が網にかゝつた。又當年も仕合よし、おかげ〳〵と夕暮がた、お馴染の小むらさき久米川、太鞁女郎かぶろやり手、大座敷にゐながれ、はや盃のつめひらき、一年越のくせつ酒、是は旦那がまゐらずばと、座頭の藤都が腰おしておさへました。そんならのまうか肴になんぞうたへ。何が扨旦那の御意、今くるわにてもつ

ぱらはやる女郎の名寄ざいもん、たれかれなしに是吉野様がお上手、三味線は愚僧めがうけ給はり、畏て二あがりの調子はりあげうたひければ、てんとかはつた祭文、逗留のうち稽古し國元の土産にせん、をしへてくれといふもをかし。いや〳〵めつたに御指南申事はならずのもり、是非御所望ならば大寄をヒ成ませう然者をしへ奉らん。此外かはつた事は海山なりと木に餅のなるはなし口。やすい事大寄成共小寄なり共そちが勝手次第に仕れ。さあ商事かなつた。此程はけしからぬくるわのさびしさ、女郎様立がうづいてござる内、上方にてはやりし傾城佛の原と申狂言をもつばらけいこヒ成ます。殊に中の段に梅川文藏と申大名が、三國の女郎に身を打紙子一くわんとなり給ひ、信濃國善光寺へ參り給ふ道とかや。仏の原といふ所には文藏殿のあはれし奥州といへる傾城身請しられよい身と成て居を、文藏夢にもしらず、此所へ行かゝりぬ。折ふし月待とみえ書院におかゞみ御酒をそなへ、障子の内にて琴三味線をしらべけるに、文藏おもはず立より、柴の戸のあけはなれたるをさいはひに、案内もなくおくに入、人聲におどろき、風呂敷づゝみをわすれてかけ出給ひぬ。腰元出て是をひろひあげて見れば、傾城のふみなり。ふしぎに思ひ奥州にかくと語る。それ見せよとありて取あげ給へば、ぬしの方よりおくりし玉章なり。其男是へよべとあつて、わざと顔をかくし下女にあごをうたせ、よそながら物語を聞給ふ。文藏何心なく奥にとほり、われしらずの昔がたり、今此里にてのはやり物、是別してのおなぐさみ、すなはち其役を河内屋の和哥山さまがヒ成ます。是此比の新狂言、今一ッは大しよくわん。三かつの心中あるひはまや山の開帳、これらはめづらしからず。善はいそげはやう〳〵とはやそゝりでる色上戸。いや〳〵明日に致しませう、先こよひは久かたの秋、比翼連理の御ちぎり、しつぽり〳〵氣をとほせと、皆〻勝手に入けるにぞ、下女たるものはお寢道具をはこんで床をとり、ちとおやすみヒ成ませうとわらひ顔にしりめづかひ、びんしやんとしておのれは臺所にかいこけながら夜をあかしけるとかや。惣じてくるわのならひにて、大寄には是非女郎かぶきを始事也。其揚屋より上方北國の問屋へ廻狀したゝめ見物させる事、逗留の内女郎うるべき種まきぞかし。折から野中屋へ廻狀來りぬ。今義を始皆〻悦、つひにみぬ女狂言、旅路のなぐさみ此うへにこす事あらん。いざ同心もやと主從六人打つれ立、揚屋がもとに入給ひぬ。

其外あまたの諸商人、我も〳〵と入つどひ、こゝをはれと見物する。時は四ツのまへ成し比、かづらきといふ女郎長ばかまの折めをたゞし、座敷舞臺の正面に畏東西〳〵、扨いづれも樣へ申ます。今日の大寄に付何がなめづらしい事を致お目にかけたうぞんじます。折から上方より役者衆が下りまして、新狂言をしへられました。それゆゑ俄に取くみ仕ます。すなはち狂言の外題は

傾城佛の原　并ニ　梅川文藏身のうへ物語

役人替名の次第

一梅川文藏ニ　河内屋和か山
一傾城奥州ニ　ふぢやおこと
一奥州うばニ　やりてのかめ
一同腰元しけニ　ながとやかづらき
一尼めうさんニ　あふみやくれなゐ
一同腰元はなニ　折や小もんど

此外役人あまた付そひ仕ります。今日が初日なれば定めしせりふなども前後致しませうけれ共、其段は大やうに御見物を賴あげます。長口上かへつて無調法、先きやうげんのはじまり左樣にお心得ヒ成ませう

㊂　上方土產女郎哥舞妓

▲けいせいわか山梅川ぶんざうとなり、かみこに丸づきんおうしうがまへにかしこまる。こしもとつぼね口〳〵にさあけいせいのはなしがはやうきゝたいどうぢや〳〵　梅川文藏身のうへものがたり　▲言語同斷かゝるむつかしき事を御尋候ものかな。くはしき事はぞんぜねどもあらまし御物語申さうずるにて候。元來身は越前の者也しが、むまれ付ての惡性ぐるひ、親のいさめ世のそしりもかまはず、明暮三國の傾城町にかよひ、よつほど、又よつほどたはけをつくしました。其内地女房はきらひて、はなしをきくさへ頭が五千ほどにわれます。とかく傾城のはなしなれば何時にてもござれ〳〵ぢや。扨私があひました奥州と申た女郎は、きりやうといひ骨がらと申、なかんづく目遣にて大かたの男がころりと成ます。それのみならず琴三味線が上手茶の湯は細川の流をくみ、手は上代やうにてさら〳〵とかく筆の命毛もたまる物ではない。自身うたをつくり節を付てうたふ事が名人ぢや。されば八月十五夜の月見いづれの人も哥をよみ詩を作り、或は音曲手なぐさみにて月を見る。身は其格をかへて三笠屋といふ揚屋の座敷にふとんをひき、其うへに奥州と二人とんとねて月をながめた。時に此なんびんが申はあの月はそち、月の中にあるかつら男は身ぢや。偕老同穴ひよく連理はふるいといふた。時に太夫がこましやくれた事をとひました。昔よりよい中を水もらさぬと申はいかやうな事をいひますと尋ました。私が返答にはそれはそなたとお

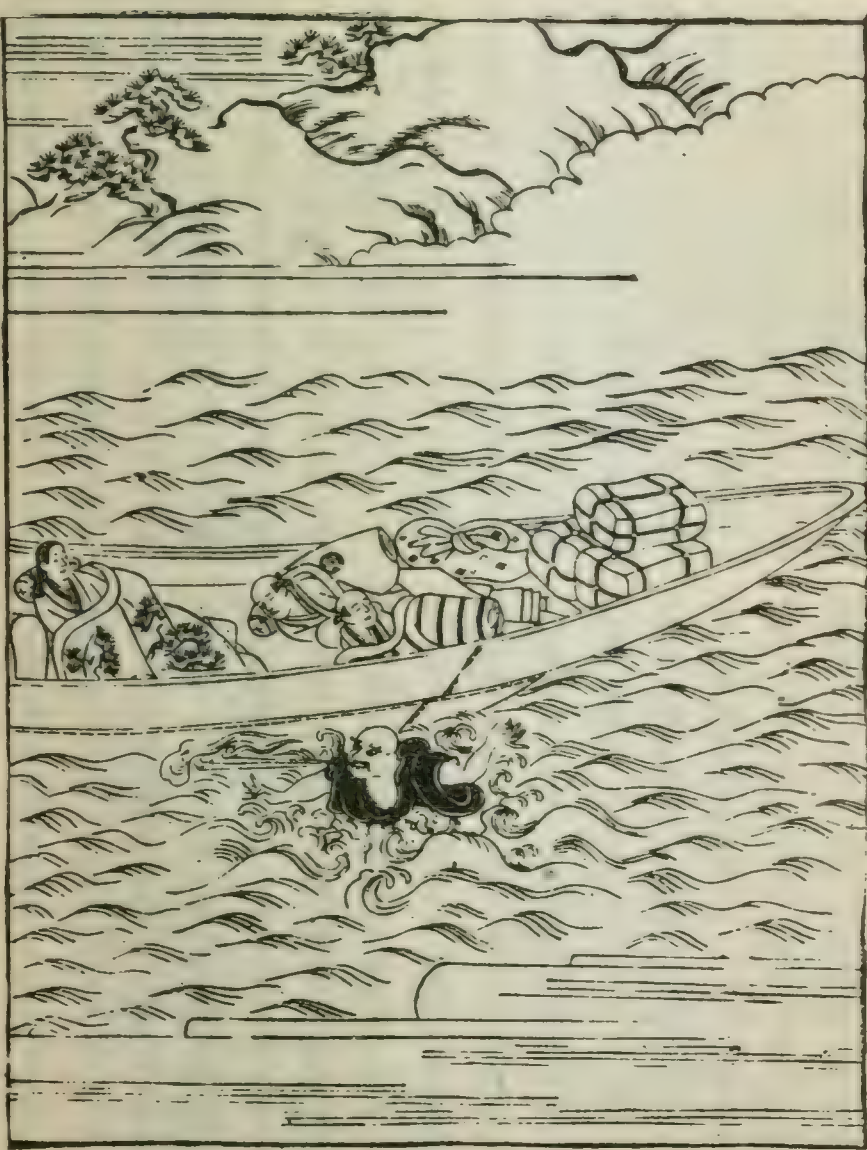
れ　　　むつましく　　　　、
共、
中〱　　といふ心ぢや。しから
ば　　　んとあたりをみれ共水は
燗鍋があつた。
なし。折ふし
是
き、　　　かの酒を瀧
。
たれ共
水もらさぬ事は扨置、酒もら
さぬ中ぢや
た。これほど深い中なれ共、ふとしたとゆゑ今川といふ女郎にあひました。此しさいは此男元來だんきに生付て、まてしばしがない。太夫がづね〱ぞんじてをるゆゑ、揚屋へいつもはやう出、首のながうなるほど待てゐる。有時三笠屋へいたれば、太夫様はお出なされぬといふ。扨は外におもしろい事が有て、道寄してをると心得はやむつと氣になると、ほむらがくら〱にえかへつてゐる所へ、太夫がぬつと來た。われは今迄何してゐたとあたまからひかつたれば、せかぬ顔して身ごしらへしてゐましたといふ。身ごしらへは誰にみられんためぢや。するかけてあふからは髪も油もいらぬ事、姿をかざつてあふはとつとむかしの事と、目に角たてゝいうたれば、何が腹がたつてそんな顔して見せさんすぞ。なんぢや顔つきがわるいと云か。但身が顔のすまひがかはつたか。俄に見とむなうなつたら見てもらふまいというて座敷を立、ひとまづ屋かたにかへり、つく〲おもふは是近年の出來口說。いつもさへ侘言するほどに、今にも文がきたらばかう返事をせんと、ゆんでに硯てに筆をもち、今や〱とまてどくらせど、侘言は扨置おとづれもない。扨はきやつめが身にわび事させんはかり事とみえたり。爰は男の意地なれば、面あてにほかの女郎にあうてせかせんと思ひ、三笠屋がとなり、かしはやといふ揚屋へ行、ひそかに亭主をよび、身にあひさうな女郎よんでこいというたれば、おまへ様のおあひヒ成ませうは今川様ぢや。はやく共女郎つかんでこい。心得たりといふ所へ今川がぬつときた。あたまからあうてくだされといふたれば、奥州が事をたづねた。男みやうりのきました。しからば御目にかゝりませう。かたじけないといふ聲もわざと大きに、是今川どの、こなたゆゑなら命成共おのぞみ次第とたはむるる。隣の三笠屋にて奥州が是を聞、白むく壱ッに成てはしり來り、なんの事なしにおれが胸ぐらをとつて、是爰な男ぢくしやう、誰にとわつて此女郎にはあやる。戀が有て逢がなんとした。戀が有というた口は是かとしたゝかどづいた。今川が腹を立きのふ迄はこな

たの男、今日よりはおれが男を、なぜたゝきやつたと取付所を、太夫がはらを立、男といふが氣にいらぬと、今川をとらへ目よりたかくさしあげ、えいというて八間まなか三尺五寸なげた。やれ今川が奥州になげられたとこそいへ、今川がたの女郎三百五十人柏屋が座敷へつめかけた。是をきいて又奥州がたの女郎二万よき引つれ、えいや〳〵とをめいてくる。其日かうたる客共俄に女郎がみえぬというて蒲團をふるひ、喧嘩が有と聞て見物に行。宿屋のうちは人のすしぢや。下男が棒にておひはらへば、若松といふ女郎あわてて二階からおちる。くわしやはにげさまにとうふの上へこけて、顔がまつしろになつたれば、そりや幽靈が出たとこそいへ、また動轉してにげしなに、つりあんどがおちて頭をやく。遣手のかめはすりこ鉢の上へこけ、目に唐辛子味噌がいつて、なうしにますといふにおどろき、そりや醫者の玄徳どの、あんまのりんさいよんでこいといふを聞ちがへ、山伏の正寶院がわせて、錫杖をふつて神おろしをやらるゝ。角助がはらを立、錫杖ひつたくつてすてたれば、えびす棚にあたつてだいこくどのゝ鼻ばしらがかける。やねでは猫がさかる。かどでは犬がかみあふ。うらではには鳥がけあふ。そこらうちの揚屋は上を下へとかへした。其中にも分別らしいおやぢがいふは、此もや〳〵は此客からおこつた事ぢやというて、なんの事なしに身を駕籠にのせもどしおつた。その後身は遠慮して四五日とほざかつてゐたうち、何者ぞしれず奥州を請出していきました。それをきいてがつくりと力をおとし、つく〳〵思案のするに奥州にわかれては世のたのしみもない。なま中世をたつるゆゑ、うき事をのみ聞ものかな。かれを見是を聞ときは、一すゐの夢ぞかし。せめて今迄の惡業をさつて、善心にもとづかんと思ふ心の一筋に、さいはひ信濃の國善光寺にはしるべのものゝ有をたよりに、彼寺に參り髮をもおろし出家となり、一念弥陀佛の道にいらんとぞんじきつたる心から、よしなき懺悔物語あらはづかしや〳〵さうやう様へのおいとまごひとか樂屋にいればはて太皷座敷のくんじゆおしあひて、我さきにと歸る中に、今義一家跡にのこり、あげ屋の亭主をめされ、山吹色の花を出し、逗留のうちゆる〳〵と、詞のはしのたより草、下女やはしたの女までかどおくりしてさらば〳〵

㊃ 兄弟の妹背塚

日數ふるといへ共今義のゆかりとて尋よるべき人もなかりき。何もちからな

き、風情一國代官の威光をかりそめながらしれざるうへ、詮方もはやつきはてたり。よしなき所に逗留するはいらざる事、是より長崎にくだり尋てみんと、此相談にきはまり、近日出舟の便を待給ひぬ。有夜小ざつま今義にちかづき、此程より御尋なさるゝ人は生國みやこそだち、左の目の下にほくろ有よし。若其娘子奉公にやり給ひぬる比、お袋様の形見として、十一面観音などおくり給ひし御覺なきやと尋けるに、今義おどろき成ほど母が形見にやりつるよし、かね〲噂有けるが、そちは何ゆゑとひ給ふ。さん〲我難波につとめせしとき、同じ流の門ならび、住吉屋といへる御内に吉野さまと申女郎有。則左の目の下にほくろあつて、殊に後生をねがひ月毎の十八日にはおぬしの部屋にざして、其観音の尊形をはいし、普門品をよませ給ひぬ。常〲みづからにかたり給ふは、生し里は九重にて父にはなれて母様ひとりとうけ給はりぬ。定めし此女郎にて有べし。とく御はなしのあらばはる〲此國まではまゐるまじきを、ふかくも御つゝしみありしはすこし御恨も有ながら、外の事とはちがひぬればそれなりけりにして、明日にてもはや難波に御のぼりこそましならめとかたりけるに、扨はそれにきはまりぬと、母のすがはら



伊勢の丞、かれ是めされ段〳〵をはなし給へば、おの〳〵横手を打て、さもあらば明日の出舟御尤なり。是善ならばはやいがましと、半六に語御代官所へも此むね申あげ、六太夫舟かり切、さいはひ日なみも心のまゝにはれ渡りぬ。下の關の名殘も今宵にかぎる夜もすがらの酒事。あけがたつぐる折から舟頭來り、朝嵐殊に追手なり、はや出舟とつげくるにぞ、人〳〵よろこび宿屋一家にいとま乞、友綱切て乘出したる舟風心のまゝにして、しかま津も跡に見のこし、明石の瀬戸一の谷のほとりにて、人顔見えざりければ、舟頭いかりをおろし、こよひは爰にてあかさん。此程けしからぬ追手に舟はしり、いづれも殊の外なるくたびれ、はなしするのも跡さきに、我おとらじとねむりがち、ひぢ枕はづれてしやうねさらになきは尤。舟頭は舟のへさきに打あをのき、苫ひきかづいて大八がね姿、時は八ツの比なりける折から、小ざつましとねのうちよりそろりとおき、あたりを見まはし人〳〵の鼻に手おしあて、袖の内より書置を出し、守袋にくゝりそへ、今よしの枕もとにかいやり、千度はいしてさりとはゆるさせ給へといふ聲も、涙の淵にしづむ身ながら、名殘をしげに見かへり、舟ばりにつつ立、南無阿弥陀佛を後世のみやげ



に、海へ身をなげはて給ひぬ。浪の音に今よし目さましあたりをみれば一通をのこしたり。心得ぬ事とは思ひながら小ざつま事には氣もつかず。先書置をひらきよみ給ひぬ。その文にいはく

書置申身のうへの事

はづかしながら私は御尋の女當年十九さい、生國は都の者。但しひだりの目の下にほくろ御座候御事

一わたくし七才の姉母樣の手をはなれ、しるべ有人の口をまことゝし、下の關へみやづかへにまゐるよしにて、かりそめならぬ難波の色里へうられまゐらせ候御事

一十四才まではかぶろと申になりまゐらせ候。あくる十五の正月よくがいをつとめ候所にさる人申され候は、私面躰のほくろ殊の外にめだちいやしければ、とりくれんと申さん候に付、何心なくつとめのさはりともなるべきかとぞんじ、ほりもらひ候ゆゑほくろは見え申まじき御事

一わたくしの身はとくしぬべき者成しを、ふとした惡緣にひかれ、九郎樣の御情をわすれがたく、せめて御恩のはうぜんため、をしからぬ命をながらへ、かくまゝになる身となり候は、くわこの因果をあらはす約束かと、そらおそろしく思ひまゐらせ候御事

一はづかしや〳〵申さねばつまらぬ身のうへ。九郎樣とは血をわけし兄弟なるを、神ならぬ身とて現在の兄うへとむつましく、妹背のかたらひをなしまゐらせ候事、扨〻めんぼくもなきありさま、いかなりし仏神の御とがめつよく、此世から畜生道に落まゐらせ候はすぐせいかなる仏ばち神ばちにてかゝる惡名をとり參らせ候事

一下の關にて樣子をきゝましてより、はや自害とも心ざし候へ共、ながの旅路の御なげきを存じ、御尋の人こそ難波の色里に御座候よしいつはり、舟をいそぎまゐらせ候。子細は舟中の折をうかゞひ、浪のみくづともならん爲、まんざらなき事を申まゐらせ候御事

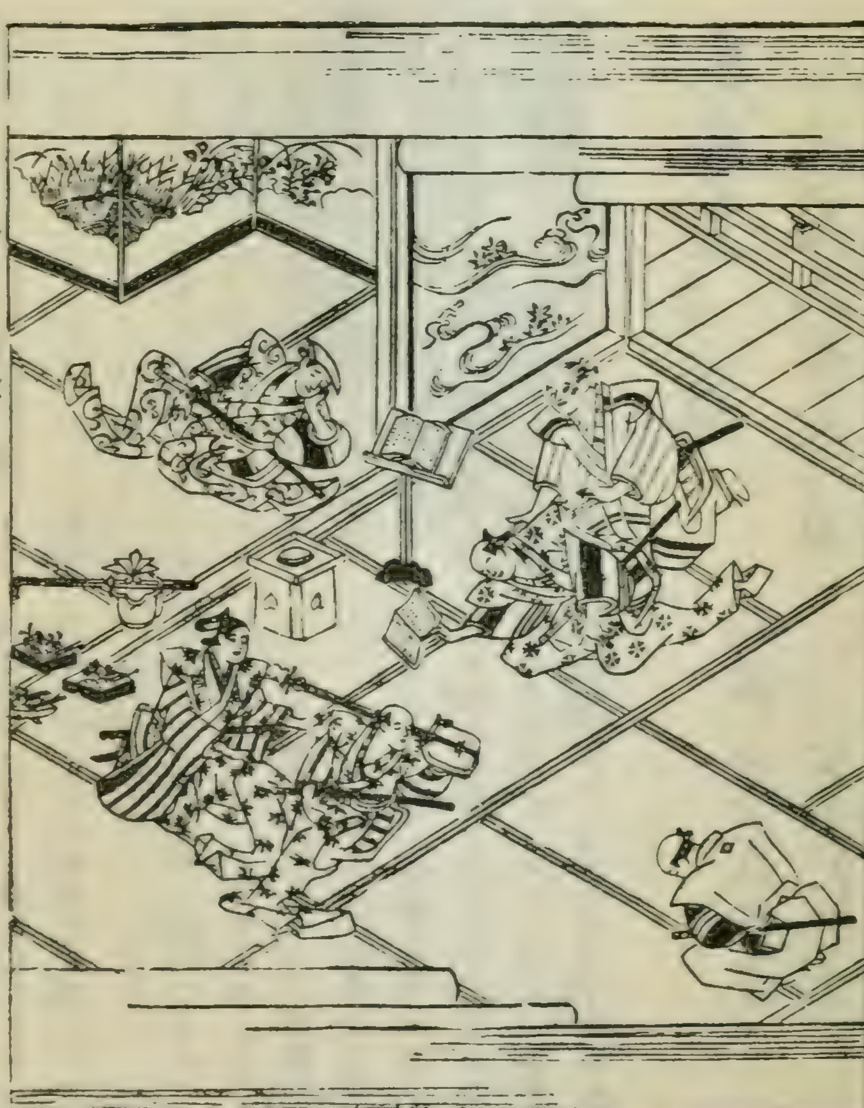
一かく成はて申をかまへて御つゝしみなく、いづれの人にも御はなし候て、せめてのわらひ草成共、死出のたよりにいたしまゐらせたく候。さもあらば自然とうかむ事も有べしと、かひなき事をおもひまゐらせ候御事

一かた見にくだされ候十一面觀音、是を御らんあそばし、御うたがひをはらし、せめて親子兄弟のしるべには、一遍の御ゑかう賴まゐらせ候。書のこし度事海山御座候得共、申おくほどはづかしの身や。

月日　小ざつま　より

御母さまかたへ

よみもをはらず今義さやうらんし、暫物いはず。小ざつまが心底もそれがしとても同じ事、是をみかれを思ひてはかた時の間もながらへ、人に指をさゝれわらはれんも口をし。此世こそ道なき縁をむすぶとも、來世なほ來世に追付本身の契りをむすび、まなく此世に生じて兄弟の緣をむすばん。母うへの御事は伊勢之丞殿を賴む。今日迄の御介抱千万申つくしがたしと一礼の書置。勘七善三郎方へも同意何もさらばともろ肌ぬぎ、腹十もんじにかき切、海上にとんで入、小ざつまがながるゝを跡よりおつかけ、せめて未來は一蓮託生ともに手を取行べきぞ。つれなしまてといふ聲も、はやよわ〳〵となりけるが、一心通じて小ざつまが死骸に取つかんとせし所へ、ふしぎや高田の宗運、けしたる姿海上にあらはれ、にくしきたなし今よし小ざつま、おのれらゆゑに此法師、あへなくはてし恨の一念骨肉に入て、兄弟のちぎりをむすばせ、ふたり共に命を此みなそこになさものとする嬉しさ、妄執の雲もはれたり。友に三津の瀬ぶみをこえ、無間



地獄におちばおちん、中〳〵ふたりはやらじと、浪をけたて潮をふいて、海中にすがたはかくれうせしとかや。舟中に目をさましあたりをみれば、今義小ざつま見えざりき。いづれもはつと

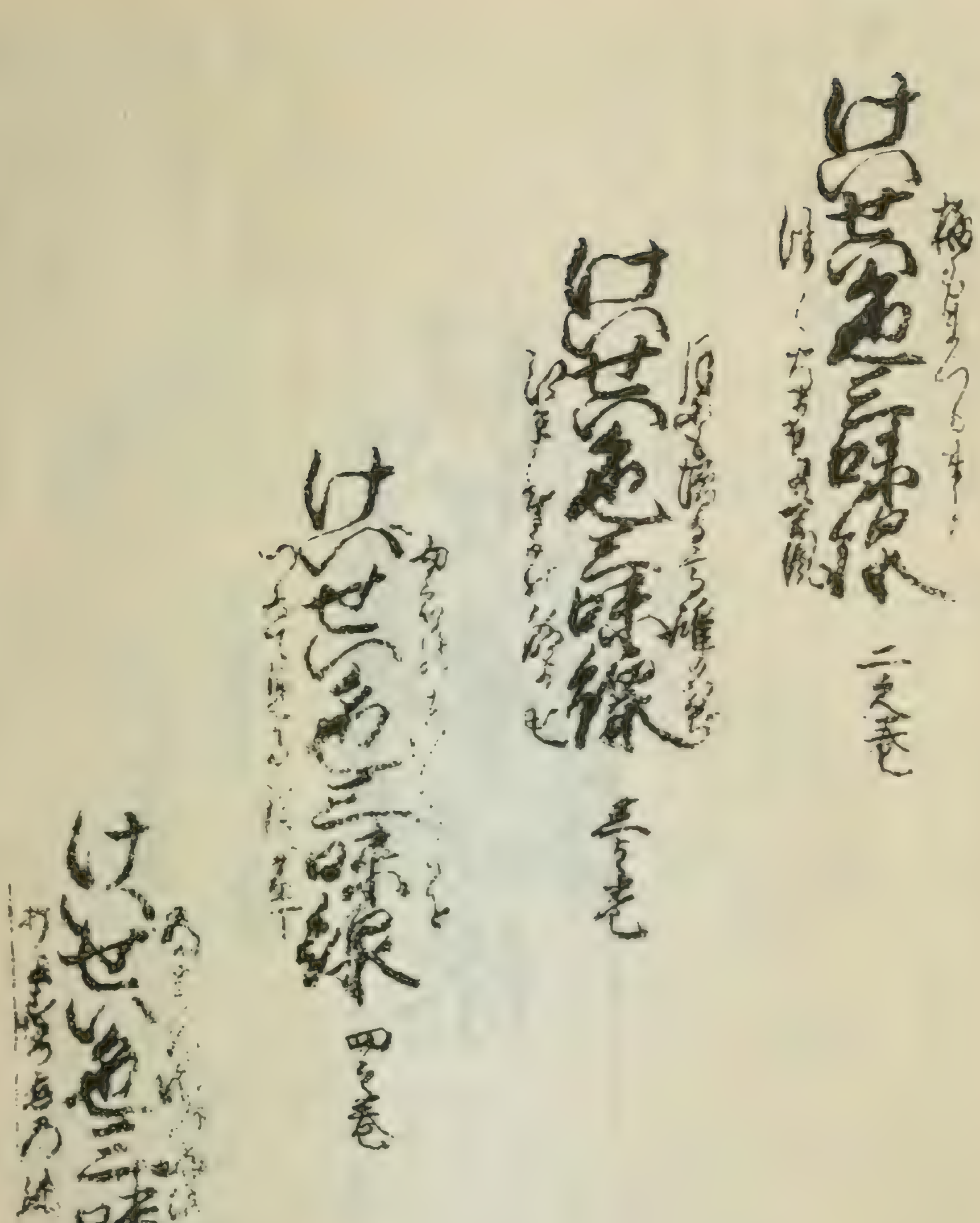
よこ手を打、のこし置たる書置を伊勢之丞とりあげ、一ッ／＼よみをはれば、母儀ながらうきつらき身をしのぎ、はる／＼のこしぢしらぬ國までまよひぬるも、子を思ふゆゑなりしに、いきながらへよしなき耻を身にうけて、老行末迄人／＼に、顔ながめられんもはづかし。若木をさきだて老の身の、何ながらへんやうもなし、我もともにとの給ふを、皆／＼おしとめ我しなん我からと、命をしまず死をあらそふ。舟頭の六太夫中に入て、ふたり身をなげ給ふさへいかゞとすべきとあんずるに、いづれも迄をころしては、罪なき我〻罪にしづむ。身はなげさせんとゝとゞむる所へ、沖のかたより老人小舟にさをさし、今よし小ざつまを助のせ、人／＼の舟まぢかくこぎよせ、帆前にたち、我は是汝等が昼夜ねんずる京東山清水寺の大悲薩埵也。今よし夫婦の者魔道にひかれ、科なき身をすでにうしなはんとせしふびんさに、兩人が命をたすけ、是までともなひ來りぬ。まつたく兄弟にあらず。宗運といへる悪僧小ざつまに愛着をのこし、肉に入て兄弟となのらせ、此所にて命をとる。是法師が非道にして、仏神のにくしみふかく、重てあたをする事なし。まとの妹は難波津の濱、すみよしやの吉野ぞかし。いそぎかの津にのぼり身請して、父三津氏が家を立よ。さいせん小ざつまが形見にのこせし觀音は則是我像也。猶ゝ行末まもらんと、の給ふ御聲もかすかにきこえ、しら波に打まぎれ御姿はみえざりき。舟中のこらず御跡千度らいはいし、夢にあうたるふたりの姿、いきたる心地なき魂のをの、ながき命ぞめでたし、いそげ／＼と艫櫂をはやめて難波津に船がつけば、すぐに吉野を身請して伊勢之丞とめあはせ、花の都に屋敷を立、おく座敷には母のひとりね、中のまには今よし小ざつま、次には吉野と伊勢之丞、ふたりねのながき枕よるのしとねに千代をかさね、夜あけの鳥がこゑつぐるに、太郎冠者次郎冠者めをさましける千秋ばんせい

元禄十三辰歳
三月大吉祥日
大坂 油屋与兵衛
万屋仁兵衛
鴈金屋庄兵衛
京 上村平左衛門 刊板

京之[illegible]

けいせい色三味線

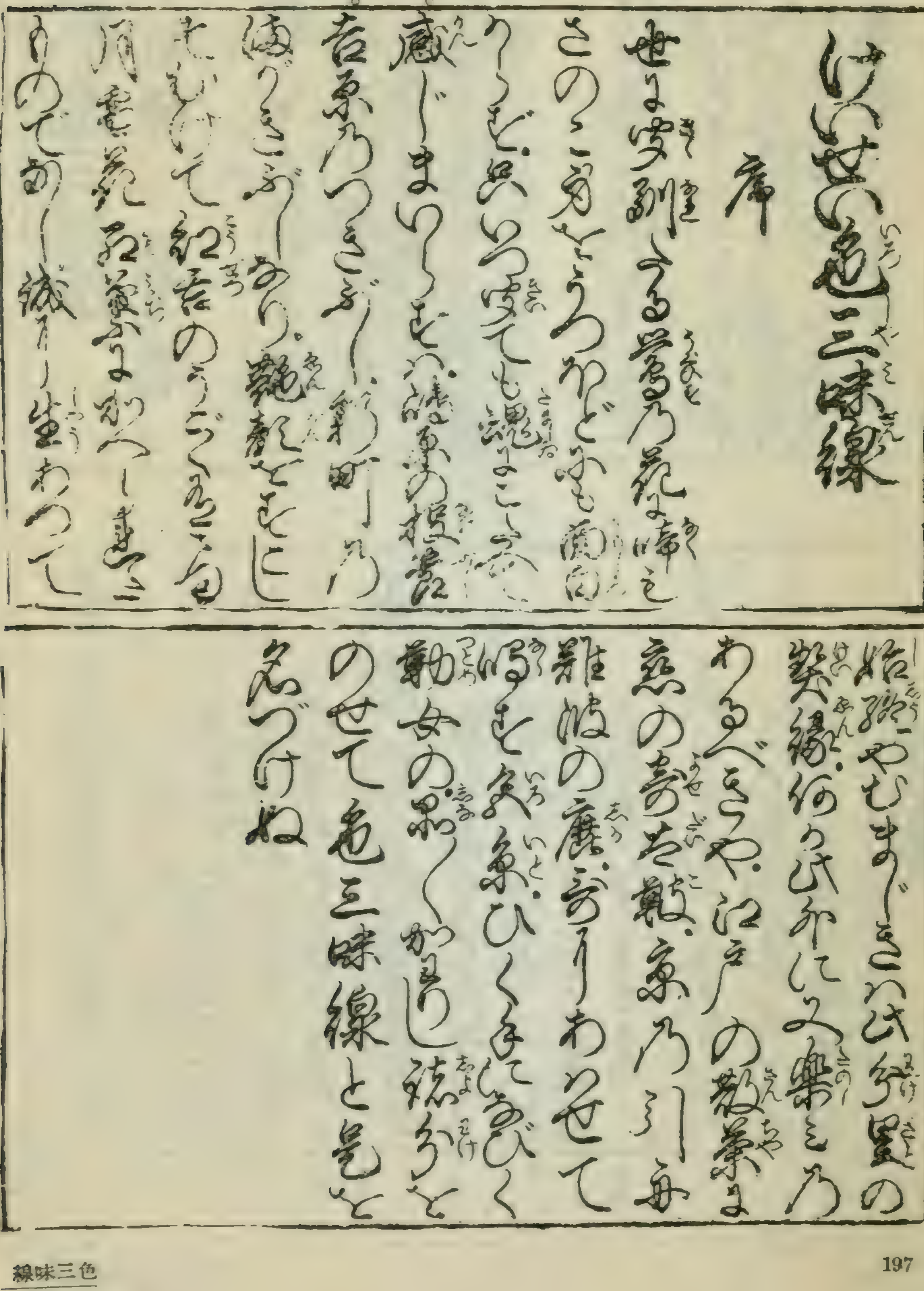
[illegible]


けいせい色三味線　二之巻
けいせい色三味線　三之巻
けいせい色三味線　四之巻
けいせい色三味線　五之巻

けいせい色三味線

序

世に聞馴たる鶯の花に啼も、さのみ身をうつほどにも面白からず。只いつ聞ても魂にこたへて感じまゐらすは、嶋原の投節吉原のつきぶし、新町のまがきぶしなり。艶顔をすこしそむけて紅舌のうごく有さま、月雪花紅葉にかへられたものでなし。誠に生あつて始終やむまじきは此分里の契線。何か此外に又楽みのあるべきや。江戸の散茶に継の寄大鞁、京の引舟難波の鹿、哥にあはせて鳴す色糸、ひく手になびく勤女の、品しなかはりし諸分を、のせて色三味線と是を、名づけぬ



けいせい色三味線
序
世に聞馴たる鶯の花に啼も、さのみ身をうつほどにも面白からず。只いつ聞ても魂にこたへて感じまゐらすは、嶋原の投節吉原のつきぶし、新町のまがきぶしなり。艶顔をすこしそむけて紅舌のうごく有さま、月雪花紅葉にかへられたものでなし。誠に生あつて始終やむまじきは此分里の契線。何か此外に又楽みのあるべきや。江戸の散茶に継の寄大鞁、京の引舟難波の鹿、哥にあはせて鳴す色糸、ひく手になびく勤女の、品しなかはりし諸分を、のせて色三味線と是を、名づけぬ

けいせい色三味線　目録　京之巻

第一　花の下紐むかしを縫とく
結びの神の守りの奥に別が
身請乃極び帯ども白みなも
ろふ計ハ名残おしき二人の思の
細石よ廣きんの大臣

第二　花と縫ふ相木の紋
ひく手あまたになりをやり揚屋
ようすをふくみ茶屋女郎
引もの宝に沖とつゞきしこき
恋の種まきちらし金の山

第三　花清水の奥の事
ちらわらよめるはお庵と月見て
夜ぬけ大臣老も鳴きやめて
おわとさやはおかさわき別
仏魔まくとりの名月と池

第四　花ハ散ども名ハ九重に帰る女
恋の手習ひきこえぬ元あんどう
結びめのうきい男よついて
廻る巴見第一不わよ身請の
海沽菊川はえまんの大臣

第五　花のも色盛に三五の月
うつり替る浮世根びかんきうせ
粧ひ中るの先ぎりあやまて月の
さん第一しれかめのも色ぶらい
八幡の荘見

嶋原女郎惣名よせ

▲中の町一文字屋七郎兵衛内

一太夫 夕ぎり　引舟 あやめ
一太夫 かしまえ　同 はがま
一太夫 わかう　同 まつ山
一太夫 とり山　同 かとま
一太夫 かつち　同 をなう
一天神 井筒　一天神 うきち
一同 中川　一同 志げの
一同 つしま　一同 ましう
一同 さをめ　一同 とさ
一同 玉川　一同 ならく
一同 志がさき　一同 見よの
一同 まつゑ　一同 きてう
一同 とく川　一同 ぬぎり
一鹿恋 あやめ　一鹿恋 うのめ
一同 あかし　一同 はがま
一同 まつ山　一同 とざま
一同 みちし　一同 おとハ
一同 おびま　一同 つまぎ
一同 いくさ　一同 志がま

一同 まうさ　一同 せんよ
一同 中へがえ　一同 おしわ

▲中の町一文字屋源兵衛内

一天神 よしう　一天神 まらく
一同 いづみ
一鹿恋 こふじ　一鹿恋 よし田
一同 みむろ　一同 りく山
一同 あちご　一同 かしう

▲上の町とう屋八左衛門内

一太夫 えんど　引舟 こてふ
一天神 やくも　一天神 山の井
一同 ちんぢよ　一同 夕ぎり
一同 ちよまつ　一同 かくやま
一同 せきの　一同 よしおか
一鹿恋 くも井　一鹿恋 こてふ
一同 いまさ　一同 きそし　一同 さをま

▲中どう辻大坂屋傳左衛門内

一天神 やちよ　一天神 くせん
一同 あん寿　一同 ことう
一同 小いづみ
一鹿恋 山ざえ　一鹿恋 こやとち

一同 やしう　一同 ちくぜん

▲あげ屋町角大坂屋吉兵衛内

一太夫 おかと　並お女郎呼出
一太夫 ゑるち　引舟 玉の尾
一太夫 花むら　引舟 つまぎ
一太夫 竹かぜ　引舟 かづさ
一天神 あげまき　一天神 大さつま
一同 大いそ　一同 とかうら
一同 みねの　一同 わかむら
一同 わかゑ　一同 玉がしハ
一同 かよひぢ　一同 みうま
一同 わかさ
一鹿恋 だいふ　一鹿恋 大しま
一同 玉の尾　一同 つまぎ
一同 うづき　一同 おぎの
一同 さこん　一同 さまぎ
一同 見ん川世　一同 瀧の尾
一同 中川　一同 みえ川

▲下の町とう屋喜左衛門内

一太夫 花さき　引舟 とやま
一太夫 大ちし　一同 きよの

一太夫 ふぢさき 同 まつ山
一天神 たかはし 一天神 やまと
一同 花ぞの 一同 わかくさ
一同 みちのく 一同 たか川
一同 いく乃 一同 くみちへ
一同 いま川 一同 まつかぜ
一同 ときよ 一同 ゑぐち
一囲 せきま 一囲 松しま
一同 たか乃 一同 うき川の
一同 るりさに 一同 のわき
一同 せんじゆ 一同 かよひぢ
一同 まつ山 一同 よしの川
▲下の町かしまや又十郎内
▲天神 大さに 一天神 むらさめ
▲囲 さりう
太夫合 拾三人 一天神合 五十七人 一鹿恋合 六十四人
▲是より端女郎の分
▲中の町ふじや三郎兵衛内
一まつかぜ 一みなせ 一いくよ
▲同町一文字や清左衛門内

一みのも 一とやま 一ちくご
一かほる 一たや海
▲同町ふじや次郎兵衛内
一こづき 一さんり 一よしの
一くみの尾 一小せん 一わかし
▲同町いづみや吉左衛門内 一玉ぎぬ
一いく乃 一かまち 一おとま
▲同町まちがいや八左衛門内 一とみ
一こずえ 一わかくさ 一まんこ
一まつ木 一きえん 一わかし
▲同町いづみや長兵衛内
一もろが 一もんど 一まつお
一わかよ 一大淀 一たかぢ
▲上の町柏屋利兵衛内
一そつこ 一まつ山 一ともゑ
一うしお 一かずさ 一山ぶき
一のしう 一あがと
▲同町うろこや平兵衛内
一おのへ 一せきやう 一すみの
一ゑるまた 一よしか 一りもん
一ミまん 一こしら 一むら井

一のりせ 一りん川さ
▲同町まつやの孫左衛門内
一りつやま 一いせさき 一まんよ
一ちくぜん 一うなう
▲同町ひしや長兵衛内
一玉の井 一とのへ 一みはる
一よし川 一わきさか 一たつ花
一あさち 一しほ 一かつ花
▲同町いづみや太兵衛内
一たかせん 一ふむら 一さくま
一玉の井 一ゑるしの 一ちくご
▲同町大坂屋吉左衛門内
一かのこ 一こまの 一たかの
一うらの 一よしか 一まつかぜ
一かづと 一あがき 一きのざ
一ますさご 一あつま
▲同町まるや平兵衛内
一くら井 一みよし
▲同町えびや孫兵衛内
一せんじゆ 一みうら 一つま川
一一ち 一よしざ 一ととま

▲同町三文字屋又兵衛内
一玉川 一きてう 一よし野
一きぬゑ 一とやま 一さもん
一いちく 一和しう 一よしの
一市川 一りしう
▲同町ゑびすや九兵衛内上 一せき川
一とよま 一よし川 一玉ちる
▲中どをり大和屋重兵衛内
一主しう 一きよ江 一まつか
一とざま 一とやま
▲同町吉田屋安兵衛内上 一いおり
一玉かづら 一うねめ 一きく川
一あまの 一おく山 一たとゑ
▲同町大坂屋傳左衛門内上 一わかし
一ちくば 一よし花 一ちくの
一げんき 一やまぢ 一みやさ
▲同町伊吾屋半兵衛内
一うぜん 一今川
▲同町ゑびすや伊兵衛内
一きく尾 一とさ 一たか川
一よし川 一いづく 一ゑちご

▲同町うろこがた屋内 一みよし花
一ちとせ 一いちく 一りくせ
▲同町大和屋左兵衛内
一志のぶ 一みや松 一玉ぎく
一かしま 一まんご 一わかさ
一とよ浦 一うたの 一かずらし
一わかさ 一うつき 一つねよ
▲同町えびすや清兵衛内
一玉のみ 一おき川 一見のり
▲同町ふぢや清兵衛内 一みねよ
一ちまん 一ひめぢ 一ちとせ
一かしう 一こさく 一大くら
▲下の町ふぢや十兵衛内上 てんぜん
一きんしう 一きてう 一和まん
一重江 一大くら 一ちく花
一三まん 一小てう 一見うら
▲同町いせや宗兵衛内
一おのへ 一志づか 一よしこ
▲同町かぎや三右衛門内
一みるしま 一おやなん
一さくさ 一せんよ

▲同町うしや又十郎内上 玉川
一よし花 一小ふち 一うき花
▲同町かしまや清兵衛内
一きてう 一太夫 一ちくね
一よしや 一ちよみ
ち女郎合 百八十四人
女郎数合 三百八人
▲おけ屋町 九四軒の揚屋
▲上の木町の分　▲下の木町の分
一松屋半兵衛　一すみや権兵衛
一玉屋久兵衛　一まるや傳兵衛
一二文字屋甚兵衛　一扇屋長兵衛
一桔梗屋又兵衛　一山形屋宗山
一橋屋吉兵衛　一八文字屋喜兵衛
一篠屋源兵衛　一ふくや九兵衛
一ひしや六兵衛　一三文字屋治兵衛
一三文字屋平兵衛　一花びしや伊兵衛
一かぎや重兵衛　一ふぢや傳三郎
一りうせんや長兵衛　一ふぢや又兵衛
一升屋喜兵衛　一あげ屋十四軒也

一いづゝや半太夫　一合せて十二人之
一丸田屋新兵衛
一柏屋権左衛門　　以上

▲出口の茶屋の分

一錦屋喜左衛門　一かな屋市左衛門
一こんや左衛門　一大黒屋庄左衛門
一二文字屋吉兵衛　一ふぢや庄左衛門
一ゑびな屋孫左衛門　一池田屋六兵衛
一亀屋長右衛門　一ゑびや清兵衛
一伊勢屋七兵衛　一大和屋後家まん
一柏屋四郎兵衛　一笹屋仁兵衛

▲わの茶屋の分　合十四人

一大和屋喜兵衛　一八文字屋喜兵衛
一万屋庄兵衛　一大一屋源兵衛
一もち屋六左衛門　一津国屋小兵衛

合六人　茶屋数合九十人之

▲太夫　七十六人　引舟女郎九十三人　あげや女郎卅一人
▲天神　三十人　わけやの女郎　揃女
▲鹿恋　十八人　わけやの女郎　八人
▲端女郎　わけやの女郎 [illegible]
▲端女郎出口の茶屋 [illegible]
▲局　十四人 [illegible]

▲正月廿四日より十七日まで [illegible]
▲太夫　正月廿四日　揚銭十六匁 [illegible]
[illegible]
▲天神　正月廿四日 [illegible]
▲鹿恋　正月廿四日 [illegible]
[illegible]
▲新枕出る時 [illegible]
[illegible]
▲端女郎 [illegible]
▲三郎 [illegible]
▲女郎 [illegible]　以上

(第二) 花の下紐むすぶと縁と
身はかり物誓紙は彼里に殘り太夫

せちべんなる心から、傾城と土風にはあはぬが秘密と、いひ出せし者の頬が見たし。物のあはれも是よりぞ知る。戀の只中少しの内も浮世の隙さへあらば、此美君をながめまゐらせ、揚屋酒に氣をのばす事、仙家の不老不死の妙藥よりは增りて、命の洗濯、水あそびの上盛、何か此外に世界の娯み又有べきや。人生七十古來稀なる世に、始末の二字にくゝられ、まうけ溜てつかはぬ、人の心が知たし。今でも冥途から使が來れば、ゆかねばならぬ身を持ながら、ある金を我樂しみにはつかひもせで、來年の何月迄と切さつて、金借す人程大膽なるものはなし。今宵も知れぬは命なりと、一生やくたいもなう身を浮雲の天水といふ男、昼酒の醉醒しに東邊へ出かけぬるに、むかふから來る男を見れば、當流の跡あがりの天窓はやる時厚鬢にして、然も髻を卷立て、神主かと思へば赤地の裏を羽織につけたり。又大臣かと見ればつゞく太鞁もなし。芝居役者には色黑し。いかさま一癖ある奴と、近寄つて見れば、是は〳〵いにしへ目をかけてとらせし、おとしの咄をよう夕がほの、五條あたりに住し、表辻伊勢之助といひて、浦辻まさりと僭上いひし、安筆屋の浮氣もの也。扨今程はいづくに居るぞと問へば、筆の命毛あれば又御目にかゝると、まだいひかけの口合はやまず。京も住うく、多くの借錢も寢て伏見の里に、今は謠の師をして三人口ゆるりと見事なくらし。されど此身に成ッても、まだやまぬは御存じの惡性、是も大方ならぬ因果。鐘木町の龜屋の井筒に深き中、ちと賢覽に供へたし。自然大坂へ御下りあらば、かならず御立寄待入也。扨今日の出京は余慶のない謠を敎つくして、外百番を每日上京迄、一番づゝならひに參つて、又それを其日に敎ゆるいそがしさ。さのみ是は苦勞にも存ぜぬが、折ふし御屋敷方の御留守居より、囃子のある時分召出さるるには困りはつるなり。拍子はかいもくの拙者め、鳴物が邪魔になつて、さりとは謠にくしといひさして、互に大笑ひ暫くなりしが、何やら上から聲高に、鉦太鞁をうちならし、をかしげなる人形をつくり、燒印の編笠をきせて、大勢色紙のざいをもつて、傾城買を送るは、おくるは〳〵と、聲々にわめいて來る。是はしたり昔より風の

神を送るといふ事はあれど、傾城買を送るといふこと、いまだ年代記にも見當らず。さりとはかはつた思ひ付、いかさま謂あるべしと、跡にさがりしざいもつ親仁に尋れば、我らがあたりは近年老若ともに、家業にうとく、島原狂ひに賢くなつて、多くの金銀を蒔ちらす事砂のごとし。それも我物あつてつかへばまだしも也。三月延の借り米、なしくづしの借錢、買置して賣損の銀まはし、又は家質あるひは連判銀にて紋日を勤て、面々杉燒も鯛青鷺ならでは喰れずと、宿では大唐米に、五斗味噌そへてくふなりして、伽羅も塩釜はしたるき所あつてわろしと、黒木燒身袋にて、無用の盛をやつて、我家のとりぶき屋根のざゞぬけを葺かへる力もなくて、揚屋の座敷が廣つての狹うてのとのせんさく、皆氣ちがひの沙汰也。北どなりにはむす子を勘當するとひしめく。南隣には主人へ大分の損をかけて、今日請人へ手代をあづける相談。筋向には世悴が傾城狂ひゆゑ、三代續きし家を人の手にわたすと、母親涙を流し、なじみの町を立のかるゝ。其となりはよい年をして、白髪抜を仕事にして阿房をつくし、子共には古布子さへして着せずに、太夫が所へ小袖してやるもくろみ。やくたいなしと申さうか、あいだれといはうかと、女房瞋恚をもやして、茶碗茶釜摺子鉢迄打わつての女夫いさかひ。すべて町中四十



二軒の内、賣家三十七軒、殘り五軒も家質に入てあれば、是とても我物ならず。近所はいひ合しやうに、將棊だふれと云ものにかたひしにたふるゝ事、皆是傾城狂ひより事起れるなれば、片時も早く此けいせい買の心玉を、人形にうつし町送りにして、丹波越さすべしと、才覺なお宿老殿の仰に從ひ、おくるは〳〵と。よい年してわめいてゆくを、伊勢之助取つき、近比それは素人なる了簡。今時の惡性者、仕過してもいかな〳〵丹波越などする事にあらず。京の者は江戸へ〳〵と下り、江戸の者は上方へのぼつて、當所なしに相應に請人屋あつて、惡性ものを請こむ家あれば、立身して重て又おの〳〵の町へ、遣ひくづしに立歸るまじきものでなし。爰が大事のしあん所、同じくは雨ふりつゞく水の出ばなに、川へさらりと流したし。是水は川へはまるの道理也と、口拍子にのつていへば、おやぢ横手を打て、智惠かな〳〵成程そなたの異見にまかせ、五條の橋より下へながすべし。いづれも若い衆、是から五條の橋へむけて送らるべしと下知すれば、伊勢之助又おやぢを招いて、何と其人がたに、おの〳〵家々より十二燈を一ッづゝそへて、我等へ渡されまじきや。さもあらば御町へ道切の呪して參らせんといふ。元より愚に作つたるおやぢ是忝しと、町中の若い物共を片端より、あたま割に十二文づゝ出させ、子々孫々



迄けいせい買は申におよばず、茶屋狂ひ小宿狂ひもせぬやうに、御祈念頼むと、伊勢之助に人形共に渡して歸りぬ。天水我を折つて伊勢之介に向ひ、汝それを引うけて何にかするといへば、されば是には深き存入あつての事。私などに此人形が取ついて、お陰でつかひくづす程の身になれば滿足なり。惡い女房持て田舍商すると、獨法師の出歩行とは、留守にまをとこと、ぬす人の氣づかひのなきやうなものにて、我らにけいせい買の生靈取ついた分では、何もつかはう種がないゆゑ、此人形を煎じてすうても氣遣ひなし。扨是を貰ひしは、已前私五條に借屋して居りし筋むかひに、鎌倉屋の源と申て、江戸大坂に店あつて、手廣く商せし分限者ありしが、其身若うしてしかも二親なく、自由なる身を持ながら、色事に一錢もつかはず、生れついてしわい奴にて、じゆつながる銀共を箱へ押入〳〵、内藏につめるを樂しみにして、一代絹の下帶かゝず、口に魚鳥の味をしらず。色狂ひする者を呆氣とぬかして、拙者が身持など見ては、おのれが苦にもならぬ事ぢやに、向ひの筆屋とつきあふな。あいつ今の間に身代つぶす仕果也と、物憎さうに手代共へ異見の引事、聞度に無念かさなれ共、そいつがいふに違ひもなく、二番目の才代も我らが引導にて、ききやう屋の雲井にのぼりつめさせ、一年たゝぬ内に、夢方の手前不首尾にさせぬれば、いふも道理とは思ひながら、畢竟誘ふ者に科はなし。其身器用はだにて深入して、おのれと仕損ふなれば、外にうらみはない筈なるに、二日寄合の次而に會所にて此噂、ばつと尾ひれをつけて申せしゆゑ、律義な家主にて、色狂ひする者は切死丹の頭取程にこはがり、しわい心から半年餘の宿代の滯堪忍して、宿をかへさせし恨、ひとへに此鎌倉やの源が、頼ぬ口をきゝしゆゑなれば、此人形をきやつが門にすて置、ものゝ見事なけいせい買になして、身袋もみつぶして、見て慰まんために、人形を貰ひし也。まはり遠き事ながら、是かや厄病の神にて、敵とる思案と始終を語り、只今是からすぐに參ると、暇乞して立別、それより昔住なれし五條あたりの、かの鎌倉やの見世へ投込、跡をも見ずに伏見の里へにげて歸りぬ。抑此鎌倉やの源と申は、親より家藏諸道具の外に、八百貫目の讓りを請てより此かた、假にも遊樂の道に心をよせず、世わたりに賢く、朝暮小判を溜る思案をのみめぐらし、何によ

らず江戸大坂にきくべき物を、見立て聞たて買廻しよく店にくだし、其身三十一才になる時、貳千貫目餘に元手をふやし、溜ては箱におし入、釘付にして藏につめ置、つひにあげ屋の手にも渡さず、まして野郎宿の花にもならず、一生男を持ずに朽はつる美なる娘のごとく、よいめにもあはずに、あたら金銀埋れゐること悲しけれ。然るに源州ふと幕方より無常心になつて、つら〳〵思ふに今もしれぬは人の身、いつ迄欲に身をこらすべき。心に叶ふ樂をせんがために、金銀ほしき願ひ也。其望なくしては、石瓦も同前、分別する程分もなき今迄の覺悟、さらりと改め思ひ切たる色あそびして、世を心のまゝにさわぐべしと、始末せし身をわすれて、俄に男作り、今迄は夢に見し事もなき、嶋原に通ひ出し、物の見事な色狂ひ。もとよりゐんつう持あまつて遣ひすつるに分別極たる大臣、親はなし女房持ねば子もなし。浮世は隙なり。異見すべきおも手代は、近キ比頓死する。世界我物といふ男、奥州を面白がつて、朝暮通ひしが、上京の大銀持何程といふ銀の員數、斗がたしとて、斗方なしといふ大臣とはりあひ、無性に募つて、急に取出す談合せし内、毎日の　　　をわづらひ出し、里通ひをやめて、四五日養生せし間に、はや奥州は斗方なしが根から引ぬき、庭前の花とながめ、我物にしての樂しみ。さりとは彼奴にだしぬかれ、扨も無念〳〵と齒切をして殘念がれ共、今は人の物になれば是非なし。もはや此里も面白からずと、色川原の野郎遊びに、模様かゆる思案せし時、色友達の、松原の闇の夜といふ、跡先しらぬ瓢簞の川ながれ浮にうく男が、源をすゝめて、奥州がゐぬとて、外にも戀はある物、仕掛し女郎狂ひをやめて、野郎狂ひにせんとは、屁も結ばぬ糸なり。針のみゝずより天のぞくとは汝が心せばし〳〵。かの太夫に美しさ增つて、智惠あつて功者で一座が面白うて、まだ　によい所があつて、古今無類の太夫職。是に情の橋をかけて、今迄の女郎とわたりくらべて見よといふ。お名はと問へば、露と答へてきゆる程の君。それは長門の萩燒、お茶のゝめるのか。それよ〳〵その君。すぐれてうるはしきに何とて出かねけるぞ。日本國の末社、かたのごとく取持けるに、今に此女郎に塚のすまゐさせ給ふは、いかなる貧乏神の仕業ぞ。汝福の神となつて根引にせよといへば、我も其君には戀あり。成程抓んで、斗方なしにも

廿方にも、おそらくまけぬ名を取べしと、それより又色を粋て、長門舟にのりかゝつて、留所のない大さわぎに、年々うめきし銀箱、あけ暮の付とゞけに、いつともなう皆になつて、家藏斗殘りし時、源が懐より、かのけいせい買の生靈、揚屋酒に醉て、赤色の玉と成り、昼中に飛出、丹波の方へ欠落しぬ。其時源は正氣になつて、今迄の遊びを夢のやうにおぼえ、さりとは我ながら合點のゆかぬ事と、内藏へ入て見わたせば、銀も小判もなかりけり。浦の苫屋の明箱斗二三百、鼠の下屋敷となつて、いかな〳〵包紙も殘らず。是はとけふもあすもさめはて、足摺してないてもかへらず。とかく思案におちぬ所へ、御意に入の末社、花笠左七、按摩取の道安御見まひ申て、いつもの調子に是旦那、君よりの御書箇到來、さだめて身請の御事ならん。まづ是は何としての御延引又奥州さまのやうに、だしぬかれ給ひて、跡での御後悔見るやうな、なんと道安さうではないか。中々あのやうな御心底の眞なる太夫さまは、日本廣しと申せ共、また一人あらばいうてござれ、此首水もたまらず進上致す。我らよい身でござれば、後共いはずに抓む事ぢやに、何とて旦那は壽命の洗濯に、日和見てござあるぞ。はやう奥さまにして、お中のよいを見ましたいと、そやしたてゝ嵩高な文御前に差おけど、源は惡性の生靈去て、正氣



最中の時なれば、太夫が文も滿足がらず、にが〳〵しき顔して道安にむかひ、御自分には拙者共よりはお年かさと申し、殊に御法躰の御身として、日比入魂に申談ずる甲斐には、不行跡にもござらば、御異見でもなされて下されうこなたが、傾城白拍子等の、いやしき者を請出し、婦妻にいたせなどとは、近比本意を背たおすゝめ、お恨に存ると、常とかはつた挨拶すれど、兩人の飛あがり共まだ氣がつかず、扨は旦那はしやれて堅い御口上、神ぞ孔子もはだし。諸客床に入の門に　、朝に曲をして、夕べに　ます〳〵の御感をさかでは面白からず。いざ御出とすすむれば、大臣眼すはつて、お身たちは人を馬鹿にめさるか、神八幡堪忍ならぬというては、まー言きかぬ男と、脇差取まはすを見て、兩人驚、こりやならずの森の郭公と、こくうに飛で迯て行きけり。其後源は遣ひ捨し銀のかへらぬ事をくやみ、手代共を寄て勘定して見るに、現銀貳千貫目、五年半にうつくしう皆になるのみならず、揚屋に五貫七百目の拂殘りあり。其外伽羅屋呉服屋、兩替屋より當座借りの金銀、合三十貳貫六百廿壹匁三分九リンの負銀。有物とては居宅諸道具貳十貫目が物はありなし也。然れば是を渡しては、手と身とにて退くといふもの、何とぞ家藏此儘にて、人手に渡さずつゞけてゆきたしと、さま〴〵分別して見れ共、とかく分散にせねばすまぬに究る時、源智惠を出し、我をそだてし乳母が亭主、南都手貝といふ所にゐるを、呼びのぼせ、思案を申きかせ「は、其方年かつかう人物よければ、今日より我らが實の親と頼むとあれば、是は迷惑千萬と、疊へ天窓をすりこむ。いや是が身共が仕出し也。もと此借銀、色狂ひより出來し事、誰しらぬ者はなし。去によつて負せ方を殘らず呼よせ、其中にして其方我らが親源右衞門と名のつて、久々江戸の店に罷ある留守の中に、世忰め大分の金銀をつかひ失ひ、剩へ各々方迄、かりこと申、存じもよらぬ引負をいたす事、前代未聞のたはけ者、則只今勘當いたす。彼奴を斬て成共、ついて成共取つて給はれ。すますあてがあればこそ、各々より借りも買もしたでござらう。もはや拙者も法躰いたし、あいつに諸事をわたし隱居もいたし、らく〳〵と後生をも願はうと存た所に、さりとはさりとは情ない事でござる。見れば瞋恚のほむらの種ぢやと、此脇差をぬいて我等を追走らかし給ふべし。時に手

代共左右より取付、御尤〳〵じまひにして、此借銀を舞をさめん。負方の中でむつかしういはん者は、兩替屋のこまかい手代共より外はなし。其外は吳服屋伽羅屋、色宿は、今迄拂ししり殘りなれば、勘當せらるゝうへは役に立ぬと、粹どもなれば二言といふまじ。然れば我らは江戸店へ下り、一かせぎすべし。京都は其方手代共心を合、ずゐぶん仕末し、銀を溜らるべしと、此手にて借銀を云のばし、それより五年たつて後、大分金銀を仕出し、江戸より都へ立歸り、借銀殘らず皆濟し、二度富貴の家と榮え、嶋原よりふく風は、魚屋の南風をいやがる程におそれ、太皷を見ては、神鳴よりはおぢおそれける

第二 花を繕ふ柏木の衣紋

身は隱し物、姿は酒樽に
入まいのよい親父

昔より今は商がない〳〵と獨して氣をやむ親父あつて、子共の行末の事迄、無用の思ひ置。是其身愚にして商賣の道に疎く、身過の種を工夫して、金の花咲春を、しらぬからおこつての案じ過し也。されば都の廣き事、ちひさい心から計り難し。頃日九州より獨樂廻しの小人のぼりて、四條川原の小芝居にて、さま〴〵の曲獨樂をまはし、數萬の人を取て、歷々の大芝居をすがらせけるが、なほ盛になつて、町々に此こまをもとめて、家々に翫びし。後は隱居の親父共迄、念佛講に參り、持佛堂に御明はともしながら、鐘木の先にて曲狛、それよりはたゝき鉦の眞中にて廻ふ音、そのまゝ蟬の聲に似て心の凉しさ、いづれ餘念はなかりき。なまなか心に利欲の考へして、口にて念佛申さうよりは遙に增と、佛も時のはやり物に氣をうつして、是斗は叱らせ給ふまじ。去程に家々に狛五つ六つ、或は十廿買もとめしを、おしならし一町に貳百宛とつもりて、狛壹つ十二文づゝにして、此代貳貫五百文。凡京中三千町にて、狛の錢高七千五百貫、銀に直して百五貫目餘也。然れば商がないとはれぬいひ過し也。爰に人の異見きかぬ氣の大臣有り。銀づまりにて是非なく、彼里まづはやめ分にて、面白からぬ無色の酒のうで居らるゝ所へ、日比御目かけらるゝ末社共四五人、飾りたてて參る。是は何處へと、問はせらるれば、今日は東山へ獨樂の會に參るの由申ス。然らば下稽古に廻して見よとの

仰、承つていづれも上手顔して、懐中せし獨樂取出し、やつて見れど、いかないかな思ふやうにまはず。是は我等が手にあはぬとて、さま／＼獨樂に難をつけて、地がかたぶいてまはぬこそ不興なれ。大臣をかしく、上手に成たくば文庫もつて御出なされ。一曲一角づつで秘傳を敎ゆる事ぢやとあれば、然らば旦那のお手前見たしと申す。それこそやすき事と、九州の子共もはづる程に、さま／＼の曲獨樂、いづれも我を折り、あつたらお手が旦那にある事、すでに我々があの如くまはせば、早速金になることぢやと羨む。それは平生の所作を恨むべし。大臣は金を蒔て、まはす事を得給ふ。末社はまはる役目にして、遂に人を廻して見たことなし。草木心なしとは申せ共、此斷を獨樂も合點して、末社の手にあうては、廻りが惡さうな。もし汝等にまはさるる獨樂ならば、よもや大臣ごまではあるまいといへば、獨樂は根本の廻し手からが、小人ぢやと、笑ひ立にして東山へ參りぬ。されば道々によつてさかしき世とは今なるべし。宮川町の子共屋の主不斷常香盤もる、舞臺藝不器用で、隙日の多い若衆に 枕返し扇の曲、參る／＼の仇口やめて、おなし慰ならば、獨樂まはしこそ面白けれと、親方ゆるして、黒塗の狛をかうてあてがひけるに、渡りに舟と悦び、其身の腰元役をしまうて、樂屋に入ても一心不亂に、狛をまはして慰みけるが、下地螺廻しの手利なれば、其格をもつて早速上手になつて、初太郎も恥る程なりしかば、大臣の御機嫌取に參りし役者共が噂して、若衆はかつて思ひつきなく、狛の曲見ん斗に、諸方より招て、はきゝの太夫子よりは、かくべつはやつて其名高し。我等もさる隙な女郎に、二三度もお情にあづかりし事あり。其恩謝に此狛の思ひ付をさせて、くわつとはやらし、いよ／＼人しらぬよい事にあふべしと、鳥帚の忠內と申太鼓が、笑をふくむ。是大きなる了簡ちがひ也。太夫達狛の曲見たきとの願ひなれば、何時にても大臣うなづき、早速九州より來る、根本のまはし手を、金にあかして呼寄、居ながら自由に見せらるれば、今から取ついて精根つくして、廻しならふが損ぞかし。惣じて色里の事は、何によらず、ひすらこげなく大やう成がよし。過し比迄每年定つて正月十六日に人形見世出して、揚屋の門々押わけがたく、いかなる太夫も、其日の大臣のめいわくかへり見ず、我物いらぬくせに、價にかまはず、十

兩廿兩が翫びを調へ、暫時の慰みに、人形屋數千兩の商をして悦びけるが、廓の中に世知賢き男あつて、前日に人形屋手前より、多くの人形を買切り、廓中に店を出し、壹匁の物を百目というても、値ぎり手のない商、只取とは是なるべし。是憎きしわざと、其比の大臣いひ合て、又來る春を待て面々手よりの人形屋をよびよせ、美をつくしたる人形を、五兩七兩がづゝ前かたに求置、大臣一人に人形屋一人宛召つれ、十六日の昼から揚屋に來りて、太夫禿の望次第の人形、抓取ぢやがと、座敷中に蒔ちらせば、金銀の箔のひかり家内をてらし、錦の衣裳着、そこらきらめき、紅のばつとしたる慰み、又此外にあるべきやと騒ぎあひて、せちな男のまはしものゝ人形店には、誰がひとり買ふ者もなく、多くの仕込其儘にすたりて、大分の損となつて、是より人形見世飾る力もなくて、今の十六日遊び、さりとはをかしからず。とかく色里は、内にはつかむ心あり共、表向は大やうにして、大臣をのぼらせ、そだてゝ取が肝要也。又大臣も世知がしこくまはつて、金銀すくなう出して、よい事せうと思ふ氣からは、神ぞ傾城かはるゝ筈はなし。それよりは諸道具の取賣にかゝつて、掘出しして遊ぶかたがましなるべし。惣じて今時の惡がしこき大誑、大こと云もの費の至り、更に身の爲にも、女郎のためにもならず。さや



つにとらする物を溜て、ひそかに太夫にやつたがましと、ひすい了簡。こんな氣で太夫にも、見事に物やるものにてなし。殊更色町は男つきにも座配にもかぎらず、金で万がすむ所なれば、男作るは前方成せんぎと、木綿の仕立着物で出かけぬる人あり。此心で太夫にあはうよりは、

なく、面
面、思ひ出さして　雨爲也。

女郎狂ひといふは、男も衣裳好して色作り、伽羅もをしまず焼すて、引舟に小哥のぞみて、それには耳も傾けず、末社相手に至り咄して、金も手づからはやらず、太鞁にさばかせ、万事大名氣になつてこそ、御女郎買の甲斐はあれ。百貫目の銀を始末して、五年につかうて遊ばうより、半年程に蒔ちらして、名を色里にぱつと殘し、しやんと早くつかひやむこそ、此道の粋とはいはめ。女郎も宿も悦ばぬ小道な遊びして、隠居の婆さまの苧屑そろやるやうに、まだら／＼と銀をほそながう遣ふ人の心が知たし。とかく女郎狂ひの始末必ず無用也。其銀とて殘る物にはあらず。只嬉しがる物やらいではをかしからぬ所也。なんぼ高うのぼつて位を取給ふ、歴々の太夫達でも、つまる所が金次第で、廻りのよい事水車の如し。淀鯉といふ男、此里の水をのんで、粋共いはれし身なりしが、今少しの事をわしりて、ききやう屋の天職を、親方に斷いうて、年符にしては請られしぞ、さらにをかし



かるまじき事と思へど、當所のない金遣うて、揚屋の手前不埒にしてしまふ人より、遙にましと笑ひぬ。爰に信濃國の住人麻生殿の御内に、下六藤六とて兄弟の樂助ありしが、金はありても遠國の不自由さ、遣ひすつる遊山所なくて、身を病ものにつくりて、兄弟共に都にのぼり、四條の西に住所さだめ、さま〳〵の遊興、金ありあまりて蒔事に苦のない大臣、わけて舍弟の藤六は、生れついての分しり、京着其まゝ、三一と替名して、柏木に比目の枕をならべ、毎日の大さわぎ、役日も常も外へやらず、前よりあひなれし、都男をさびしがらせける中に、半六といふ大臣、久しく逢馴て、互に命ぎりといひかはし、浮氣を去て實なる中なりしが、いつぞの比より、藤六といふ大大臣にへだてられ、幾日も〳〵さしあひ、さう〳〵借も品わろくて、宿屋夫婦を頼み、やう〳〵暮より買ひて、藤六にまけぬ大氣を出して、万大場にさばき、揚屋一家に滿足がる物とらして、めつたに募つて出、人のそしり世の取沙汰何共思はず、名高い末社を數十人集め、天職かこひ女郎、めつたづかみに抓んで來いと、太夫手前のぜいに、一度に費の金をまき、夢中になつて遊ぶ所へ、紺の單物着たる六尺、五六人して壹石斗入る、酒樽を荷ひ來て、是は半さまのお口にあふ、伊丹の蘭菊と申す名酒、去方さまより進上と、臺所にどつかと下せば、一家悦び大臣さまのおかげで、結構な名酒を澤山にたべんと、皆々手をかけ、座敷の眞中になほし、才覺な太こが、紅裏の着物うらがへして着し、大盃を手に持、よもつきじ〳〵、万代迄の酒の大臣と、猩猩の足元して大臣をいはへば、半さらに其意を得ず、先來た所の先はどこぢやといはるゝ時、樽の内に聲あつて、來所は氣遣ひすな。先は慥な身共ぢやと、内より樽のかゞみを取て、出たる物をよく見れば、半が親仁苦々しき顔して、息子をにらみ、數度の異見を尻にきかし、野郎狂ひに大分の金をつひやしける時、勘當すべき所を、町衆の侘言ゆゑ胸をさすつて勘忍すれば、又品を替て此里狂ひに金をあけをるやくたいなし。宿にて勘當せんと思へど、又々親類町中の扱ひ喧し。去によつて此所にて耻をあたへ追失はんと、此比爰に尋來れ共、宿屋がさとくて風をくひ、つひにおのれに合せぬ故、此方便にて今月今日、あふが親子の縁の切目、未來をかけて勘當也。手ぶりでけいせい買れうならば、萬年も爰に居

て、したい事して遊ぶべし。揚屋のおやぢも金とらずに客にしやらば、それはそちの勝手次第。勘當するからは向後いか程の出入あつても、身共は必ずしらぬぞやと、跡の跡迄念を入て、座敷をにらんで歸られける。太夫をはじめ座中の女郎泣出して、わけもなうなりける。太こ持の中に、手まりの才助といふ瓢箪者驚かず、大臣に力をつけて是旦那、男は裸百貫と申す氣落なされな。親父様も棺桶の試に、酒をけへ入ッてござつた。追付めでたい御往生のずゐさう。さりとは爰が揚屋でなうて、寺でもあらば、一度桶に入てござつた親父なれば、かへさぬ法ぢやとこりや見事に、生ながら土葬にする事ぢやに、大臣の御肩がわるうて、寺でなかつた斗に、此理屈がいはれぬと、頭をかいて悔めば、いづれも泪片手に笑ひ出し、是を肴に又酒をのみかけ、せめては半をいさめけるに、はや宿屋には驗を見せて、手を扣ても返事せず、茶のもといへば、兩の手に天目二つ持て來て、立ながら差出し、歸りさまに蠟燭けして油火にしかへて行。宵からおまへに罷出、輕薄つくして御きげん取し揚屋の男も、勝手から呼もせぬに、まッかせといひ立にはいつて後は出ず。臺所には吸物仕かけかゝつた鍋の下を引て、女郎それ／＼によびたつる。扨も／＼替るは色宿のならひ、人の情は金あるうちなり。太夫身にしては悲しく、ひとり跡に殘り泪に沈みければ、半も口をしさ胸にせまり、命を捨ると究しが、太夫が同じ道にといふべき事をかなしく、とやかく思ふうちに、女郎色を見すまし、方様は身をすて給はん御氣色、近比それは愚なる思し立。此儘にも無理死あそばしては、耻の上の耻也。子として親御の勘當請るが、世になき習ひにてもなし。我身事はいかにしても、世に名殘あり。勤はそれ／＼に替る心なれば、何事もあはぬむかし／＼、是迄の御緣と立行。さりとは思惑ちがひ。半も我を折つて、いかに傾城なればとて、今迄のよしみをすて、あさましき心底。かうはあるまじき事ぞと、涙をこぼし立歸り、其夜は日比目をかけ置し、卸が方にてあかし、とかく生てはおられぬ所、迚も死なうなら、心底大におとりし太夫めをさし殺し、其後いさぎよく腹かき破つて、未來迄もつきそひ、此うらみをいふべしと、覺悟をきはめて身を行水にてきよめ、死ぬるに思ひ詰て、あくる日あげ屋に行て、内義にあうて、先親共の機嫌直る迄、江戸の手

代共方へ立退也、然れば太夫に又あふ
事もまれなれば、暇の盃せんため参つ
た。ひそかに是へようで給はれと、昨
日に替るあいさつ、慇懃に述べれば、
内義も涙ながら、さりとはおいとしい
御事、成程太夫さまへもおしらせ申べ
し。まづ／＼奥へと、情ぶかう申につ
いて、是等さへかく誠ある心ざしなる
に、いかなれば太夫はいよ／＼にく
さもまさりて、酒も胸につかへて通ら
ず。枕引よせ世を味氣なう、寝るより
外はなかりき。太夫共日は風呂屋の作
左方に、藤六と出あひ、何か申出し
て、はな／＼しき口舌仕出し、互にふ
んづ踏まれつ盃みぢんになつて、かん
鍋に小波たつて、座敷は暴風の朝見る
ごとく、分もなうみだれ髪して、太夫が
いふ程の事皆無理にして、あげ屋一家
罷出、さま／＼なだむれ共きかず。と
かく方様にあきました。向
後女郎替てあうて給はれと
いふ。そもやそも男たるも
の、金でなる女にきらはれ
何と一分立ものぞ。生ては
ゐられぬ所と、藤六は果し
眼になつて立腹する。所へ
遣手が参つて、半さま御こ
しとさゝやけば、女郎聲高
に、何の面目があつて、心ぎ
たなう半さまにはあひにご
ざつたぞ。むかしの如くよ
い身になつてござらぬうち
は、千年たつてもあはぬ太
夫ぢやと申というて、かへ
しましてたもと、すげなく
いひ切り、ひとへに狂女の
如くにて、前後そろはぬ事
のみ、一座不思議をなして、



物なれたる末社が能出、まづ大臣をしづめ申、是にはいかさま子細のあるべき御事。とかく太夫さま思召の一通りを、つくろひなしにまつ直に仰られいでは、眼前旦那が、生てござらぬ御心底にきはまつたる所。此里に女日でりはせまじ。お氣にいらぬに、無理にあはうと仰らるゝ大臣にもあらず。只御心の底をあかして、様子よく旦那の一ぶん立やうにして此口舌まひをさめ給へ。さもなくては百年たつてもすまぬ事と、道理をせめて申せば、さりとはさうぢや、皆わしがあやまりました。藤六さま何事も今迄のよしみに、御堪忍なされて下さんせと、人目もはぢず誠の泪をながし、しばらく啼て申されけるは、全く藤六様に、あさまして申にあらず。皆も存じのごとく、かねて深う逢ます半さまと申お敵、きのふ俄に勘氣をうけさせ給ひ、當座の恥辱に跡先の考へもなく、死覺悟極めさせ給ふと見しゆゑ、心に思はぬ詞を申て、水くさく思はしまし、さりとては女郎ほど不心底なる者はないと、お腹たつ氣につれて、身をすて給ふ覺悟も替り、死にさへなされねばあなたのおため、又私の心中なり。子細は人の親の子を見限りて勘當致すに、其身をかくして此里迄來て、勘當なさるゝ親御はなし。是誠の永き御勘當にあらず。我人身をかざる色里に來て、恥辱を與へられしは、此以後此里へ是を恥て、永く足踏し給はぬやうにとの、深き親御の御思案にて、し給ふ勘當なれば、暫く我事を忘れ給ひ、御出なければ、追付御機嫌なほるにしれた御勘氣と見ましたゆゑに、つれなう申た。なれ共藤六さまに今迄のごとくあひましては、折角私が半さまへお爲にいたした不心中が、誠の不心中になるが悲しさに、女郎かへてあうて下さんせとは申ました。其思はくは、こな様といふ幅のある男がある故、今迄深い半さまを見すてたと、世間の人にいはれては、此云わけ成がたし。誠わが身事ふびんと思召下されなば、半さま御勘氣ゆるされ給ひ　むかしの如くならせられての上に、御心かはらずば今迄のごとく、御ふびん加へられ下さるべし。此後かはらぬ心底は、毎日文して申上べし。御見に入事今しばしの間、遠慮いたし度と、泪玉をなして語り給へば、大臣にがい顔して、それでは半への心中には成申さうが、さらに身共への御心入はないといふものと、せき心にていはるれば、さ思しめすも理ながら、世上にてぶ心中ものと、我事あしく評判いたさば、

逢うでござる此方様迄が、御心ようはござるまい。但御ねんごろなさるゝ太夫が、ぶ心中なといはれても苦しうないか。それで御一分よわしとあれば、一座是は尤と心入を感じぬ。時にねどひの又右衛門といふ、物事念を入る素人末社すゝみ出、扨太夫さまには、親の勘當するに、ゆるす勘當、ゆるさぬ勘當といふ、脉あぢ、どうして御存じといふ。はて親が子に勘當するに、所を見立てすべきや。其まゝお主の内にて、何とやうにも、ひそかに勘當のなされやうあるべきに、お年よられて、身を酒樽の中にかくし、窮屈な目をして、此里までござつて、大ぜいの付合の中で勘當なさるゝは、懲しとより外見えず。それも半さまが主にかゝりにて此首尾なれば、親方腹立の上にて、せめての腹いせに、かくあるべき事にもあらず。さある時には、此方から半さまを勧めまして成共、一所に死なねばならぬ場也。是は重て立身の當なし。半さまはさにあらず、御親子の中と云、ことに御一子ときけば、しばらく此里を遠ざかり給へば、おつ付昔にかへり給ふ御身成ゆゑなれば、態と今日も、つれなう申て逢でかへしましたも、あなたに氣を持しまして、無理死なされぬやうに、又此里を見かぎり、重てあひに格子へもござらぬやうに、愛想もなう申ましたは、皆あなたのおためなれど、さぞや今は恨に思召さんと、其日は一日泣てくらされける。是等を誠の心中とやいはん。半は此心底をしらず、落たと見てあはぬと心得、とかく遊女程水ぐさきものはなし。かく不所存なる賣女めに、うか／＼と心をつくす所にあらず。さうした冷たき女と死ては、跡々迄の笑草。此里通ひも今日切りと、我と合點の仕時おそけれど、今ははや取返しもならず、廣き都に身のかくし所もなく、舊離切れて、便なき身のかなしさのまゝ、科なき一門を恨、何も知れぬ町の宿老をそしり、振舞の時大きな焼物するが能で、侘言してくれう共せいで、さりとは氣の付ぬと、無理な事ひとり腹を立て、歸らぬ昔の奢の戀風に、吹上られて天竺牢人と成あさましき今日の日もはやくれ竹の、伏見の里に、ある人惡所の出合に、頼もしき言葉を殘されけるを便に尋行、やう／＼そこになげきを云て頼めば、主見すてず表の借屋をあけさせ、先取あへず此所に身を置給へと、おろかならぬもてなし。嬉しく半年あまりも爰に暮せしが、此門前は大坂街道にして、往來の人たえず。あ

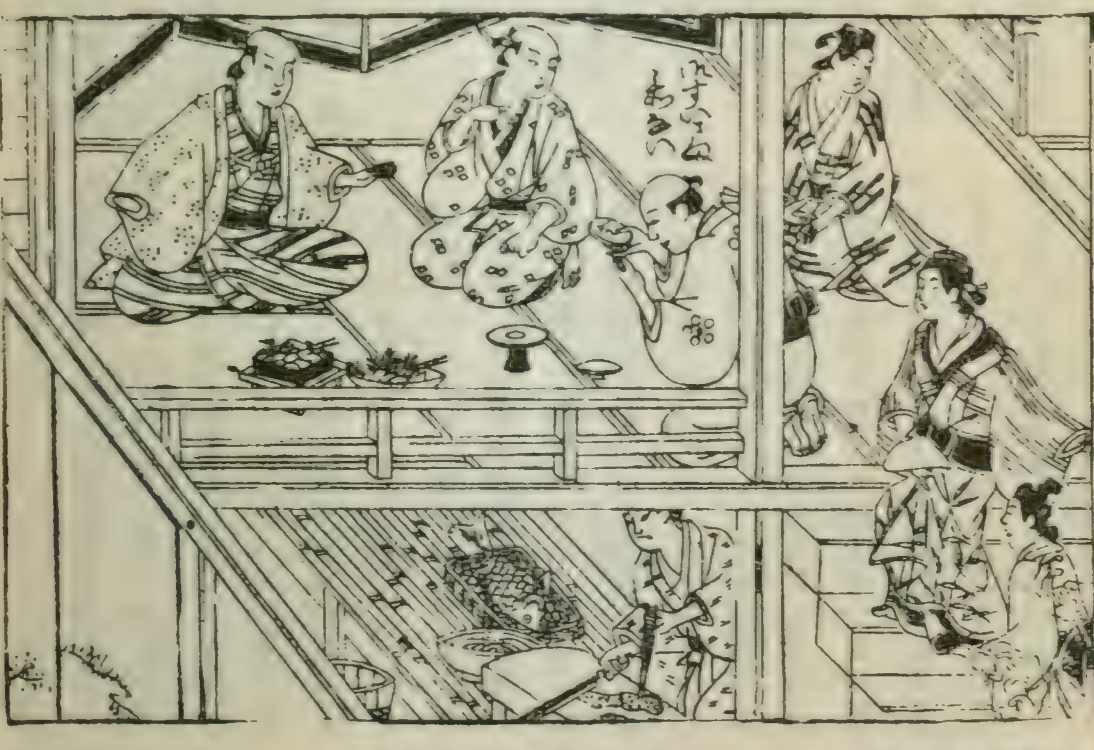
る日面の見世に出て、通りの旅人を見れば、町人らしき者共四五人連だち、とかくあなたのござる所は、新町近くか、道頓堀邊にてあるべし。先此二所を第一に尋んといふこゑ聞ば皆手代共也。是はしたりいづくへ行ぞと、懐しさに思はぬ涙をながせば、お悦び遊ばしませ、大旦那の歸依僧、淨土寺の和尚様、色々御詫遊ばされ、頃日御勘氣御許さるゝにきはまつて、諸方へ人をさし遣はされ御尋遊ばし、我々も大坂へ御迎ひに參る所に、さいはひ爰で御目にかかる事、私共が仕合と悦ぶ事かぎりなく、主にも一禮のべ、半を駕籠にのせ申、都の住所の御供申せば、親父のきげん母の悦び、親類家來出入人迄、いはひの酒盛にぎはひ、それより親父は、万事を半に渡して、岡崎に隱居し給ひ思ふ儘なる仕合。きくとひとしく藤六尋來りて對面し、太夫がつらき詞も今此時を、未然に知ての事也と、具に語り、扨其後は二人づれにて、おなじ太夫に枕をならべながら、下卑て首尾する分もなく、味な事共ばかり、前代未聞のけいせい買と、世上に是沙汰、事知とは是なるべし

第三　花崎實のる玉の輿

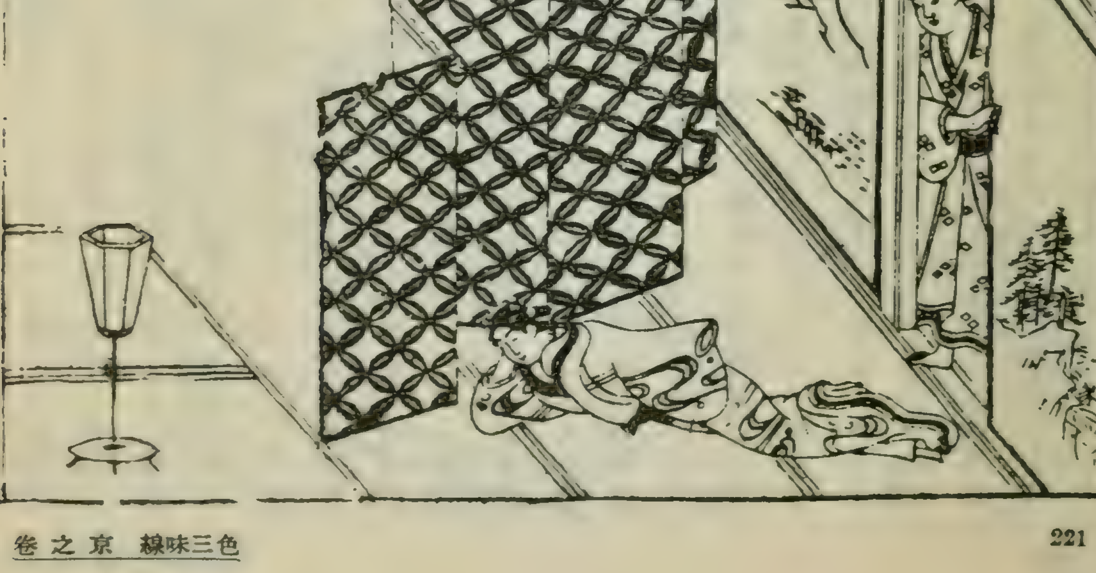
身はすて物命は、
ないに打つけた太鼓持

五躰は違なくて、人程替れる物なし。前生にてよき種蒔置けるにぞ、たとへば忍び駕籠にのる人のあるに、まはす人あり。金銀も死すれば瓦石のごとくなるが、生ある内は、是にまされる重寶なし。殊更色里はゐんつうにてはのきく事、一しほ大臣の威勢も飛鳥中間とて、上京に卸こあげの者はやづかひ、江戸に二挺立の小舟、大坂に浮世小路の惡所駕籠。かくの如く道の急がるゝ物をこしらへ置ぬ。昔は何の書にもない事。今の世の自由さ、次第に人賢う成りて、万に氣をつけ、かゝる事迄たくみ出せり。迚の事に神鳴を地の底でぐわらつかせ、地震を天へ宿替させ、物前に借錢乞の方から、出違ふやうにさせば、世界に何か思ふ事有まじと、花の都にも大晦日に留守つかふ太鞁持。なり恰好願西に似たとて念西彌七といふ素人末社ありけり。折ふし吾妻の大臣始て上方見物に上られしを、幸ひと取付、名所古跡はお下り品にも見らるる事。先女郎の美しい嶋原といふ、色所を御らうじませと、中間の可笑男共七八人まねき、まんまと色におもむかせ、いづれも綺羅を磨きて、大門口より鳴込、万かさ高に、氣の取のぼる春なれ

や。陽氣な男共わや〳〵といひて、丸やが方におしこみ、諸事彌七が承つて、幅廣にしこなし、ずゐぶん粋自慢して、あげ屋へ内證申は、先金銀蒔に斗、わざ〳〵御上京の大臣、お國にては金も瓦も同じ事、とかく人に物やらねば氣色の惡うなる旦那也。扨此里へは今日が始ての御出なれば、どなた成共御意に入たる女郎樣あれば、おつとつて當年中はあげづめになさるゝ事也。とかく今もいふ通り、此度初上りにて、諸方未熟なお客なれば、素い事共あるべし。必ず笑はぬやうに、上する女共にも、よく〳〵いひつけらるべし。お金の蒔時分おそくば、我等迄さしこみ給ふべし。八幡そこらはぬからぬ男。壹分といふは初心な事。あたまから小判の花をふらす事ぢやがと、亭主が悦ぶ上をいへば、万事は貴公を頼奉ると、疊へ頭を植て悦び、扨女郎さまはいづれにかと、お伺ひ申せば、大臣仰らるゝは、今も彌七がいふ如く、遠國者なれば、かさねてのぼるも知がたし。只國方の話の種に、此所の御太夫さまに合てとあれば、まづは夕霧さま柏木さま、長門さまさんごさま花崎さま、惣じてかやうの太夫さま達、俄には成がたしと申ス。いかにもさこそあるべし。しかし汝がはたらきにて、もらふとやらは成まいか。先是にて見事な智恵を出し、何とぞ才覺致すべしと、小判壹兩投出さるれば、さりとは旦那は京に



も稀な御粋さま。どなた成共命にかけて、もらうて見ませんと罷立、しばらくあつて、先以大臣さまの御仕合、拙者が満足は花崎さま、今日八文字屋方にてござりますが、只今御内證きがしましたに、ちと様子ござりまして、もらひがなりさうなと申す。やれそれこそ取にがすな、人橋かけよといらち給へば、畏て追々人をつかはし、いよ／＼ござるになつて來た。是ありがたの影向やと、一座いさみて待所へ、御機嫌よく太夫さま入せられ、のつしりと座につき給へば、口鼻出て御引合せ申。それより酒おもしろくなつて、押へたしもせい、しめた間、合點か彌左衛門、心得たんぼゝ、嫁菜まじりのかるい吸物、春めいてのめるはと、無性に飲で、かたはしから行つくを、すぐにかたつけ、大臣も、太夫としめやかなる物語、初會のしこなし、此里の目口かわきのそれしやも、我を折るほどのにて、諸事をすてゝ此君ならではと、大かたならぬ打込やう。明日から當月中迄、外へ約束無用と、亭主に仰付らるれば、明日明後日は、京の大臣さま則此所にてのおやくそくと申ス。然らば明々後日から必ず晦日迄、堅くきはめおくべしとあれば、其段は明日京のお客さまに尋ねましてから、御返事申上べしといふ。時に大臣むつとしたる顔にて、扨は身を田舎者ののび助と思ひ、張合をかけ、



きしますると見えたり。あたご白山、出やうが悪いときかぬ氣な男と、むつかしき顔付。成程御尤ながら、明日のお客は、兒玉黨の何某、立賣の玉中さまとて、太夫さまとは深い御馴染、此里にかくれもなき御方。明日の御きげん次第で、當年中もそのまゝと仰出さるゝ事あれば、あなたの御意きかずには、お約束成がたし。何とぞ其日の首尾次第に、又今日のやうに、貰ひまして進ぜませんといふ。いや〳〵金出しながら、恩に着て貰ふなどといふ事、大きにいやなる穿鑿。第一其男め戀しらずめ也。金銀の威光にまかせ、外の戀をさきて、廓に置ながら、余の人の自由にさせず、幅なき大臣共の胸をこがさせる段、戀は互といふ事をしらぬ癖者に、鼻あかせて、一代思ひをかけて後悔させん。さあ此智恵出して見よと、七八人の太鼓共を、ちかくへよせて仰らるれば、いづれも爰に一思案と、宵の酒の醒るほど案ずるに、とかく太夫さまを、引ぬき給ふより外はなしと、口をそろへて申上る。成程〳〵、我等が思案も、それにきはめ置べしと、すこしの事に氣を持て、ばつとしたる穿鑿。女郎もそれ程に滿足がらぬ事に、八百五十兩の内證約束。亭主落付ためとて、紙入に有合せの小判わたして、再びかへらぬ金子、殘りは四五日に才覺して指越べし。今少しの事にて、跡々にてさもしき噂もいやなれば、此上に貳百兩三百兩餘慶の入分は苦しからず。万事分あしからぬやうに賴むと、大場に出て、扨太夫置所は、樵木町の、伊輿屋うら座敷ときはめて、お内儀、木屋町の家見に何をもつてござるぞ。芝居がてら、朝とくより御出を待なり。おそらく日本廣しといへども、初會から請出すといふ事、我ならではあるまいがと、いづれもよい機嫌で、笑ひ立にして歸りぬ。翌日玉中爰に來りて、樣子をきくより胸ふさがり、さりとは無念千万。かねて我請出す所存なりしが、今少し心得かぬる所あつて、その心底を見とゞくる迄と延引して、今の後悔。太夫と我中、およそ西三十三ヶ國には、誰しらぬものもなきに、今外の手に渡しては、此里知の男共に、後指さゝるゝ所。生てはゐられぬ首尾、死ては猶又此上の恥辱と大方は亂氣のごとく狂はれしを、亭主をはじめ末社共取付止て、むかしより身請に、貰ひといふはなき事ながら、是斗にはどうぞもらひがなりさうな所ありと、亭主申出すに力を得、金銀づくでなる事ならば、廓中に金をしくべし。

隨分智惠を出せとあつて、當座に見事な御事。とかく斯樣な事にせいたは惡しと、子細らしくしづめて申は、尤慥に請るとの約束ながら、此客はじめてなれば、あながちなづみて引ぬかるゝとも見えず。酒機嫌に少しの事に氣を持、せんしやう一遍に請らるゝやうすなれば、何とぞ手を入、彼の大臣の膝元さらずの、彌七と申す太鼓に、內證からお賴みあらば、十に五つ旦那のお手に入やうに、なるまいものでなしと申せば、大臣喜悅あつて、是はせめても手がゝりのある相談。どうぞ其彌七に呑こませやうの才覺あるべき事とあれば、おろかや旦那、そこらは小判で賴はるなり。殊に此者今居る夷川の借宅、ゐなりに貰ひたきよし。家代貳貫七百目のねがひ、頃日大臣へ訴訟の最中。是さへつかはさるれば、自身胸をさいて、生肝にても指上るは慥な事と申。それは何よりやすき事。とかくは彼奴に片時も早くあうて、先樣の所存さゝたしと、談合中ばへ彌七次の座敷へ參つて、何か內儀と密に內談する躰、いよ〳〵究に參つた物であるべし。爰こそ件の家買代金、皆迄いふな、五十兩の小判にねたば合せて待て居る。はやくつれて參れの、御意畏つて次へ立て、彌七にあふよりはやく機嫌取顏にて、こりや世界の仕合男、家でか金でか望次第に、貴殿が心まかせの春ぢやとめつたにのぼらすれば、さういふ主が機嫌



ほど迷惑な。とかく口先では、いひ拔のやうにて一分よわし、斷は是なり、何事も此心底にめんじて、勘忍してくれと、兩肌ぬげば、下に經帷子を着し、左の手に珠數を持、右の手にて脇指ぬく時、亭主肝をつぶして、やにはに取付、先やうすはと問へど、死で跡で知る事と語らず。とやかくいふ聲におどろき、奥より大臣をはじめ、末社殘らずかけ出、何かなしに先脇指を引取、とかく樣子をかたりての上、ともかくも汝が心まかせといふ。然らば子細をかたるべし。昨日供して參りし、東の大臣、太夫さまを請出すに極てかへりしゆゑ、愈々堅めに、只今智恩院門前の旅宿に參りしに、朝未明に宿をあけて、釜の下の塵も灰もないやうにしまうて立退ける。さやうの大箬ものの共しらず、眞實と思人、諸事を嵩高にさばき、おの〳〵を我等がちよろまかしたと思はるゝ手前、いかにしても面目なし。とかくは死で我等ぐるみに、だまされたる所をお目にかけんと、泪を流して申す。おの〳〵横手を打て、是は格別なる首尾、玉中さまのおためには、又なきお仕合。さりとは彌七いひ出しやうが早し、今すこし待て、あなたの事を聞てから、覺悟きはむれは、かねての願ひの夷川の家が手に入ものを、とかく果報のない骨我耳ぢやと、大臣の思召入殘らず話せば、彌七死ぬるをやめて、さつても殘念千万。此方からわび口いはずに、あなたから這はせますことぢやにと、大笑ひになつて愈々太夫の身請に究り、千兩の光廓にかゞやき、榮花の花崎威勢のさかり、幾千代かけて御中よく、太夫さまは九十九迄、相生の松風、小哥の聲ぞたのしむ

第四 花は散ど名は九重に殘る女

身は賣物心は自由
自在にならぬ天神

世に親仁と名さへつけば、我人おそれて、仕掛し色ばなしをやめて、當年は麥がようござるのと、手の裏をかへすやうに、話も一調子低うなつて、一座俄にめいる事、親仁身にしては迷惑千万。親仁とても人間の胤にあらずや。本惡性人が、年のよりたるのが皆親仁といふ。怖きものになれば、あながちめつたに怖がらうものでもなしと、後家おやにかゝつて、我儘にそだちたる男が、世間にきびしき親仁のある事をしらず申出せど、こはい親仁は當世の浮氣男とは、格別仕込の違ひしもの也。第一若い時から、身過を大事にかけて、かせぐ事には夜を寢ず、氣根づよう勤て

きた目で、今時帳相仕さして、遊ぶ事に夜を寝ぬ息子共を見合ては、氣にいらぬが斷也。昔とても色遊びのないではなけれど、金のつかひやう各別也。先親より讓られし銀など、徒に遣ふ事にあらず。商事に自然の仕合よく、思ひの外に利德を得し時、まづ冥加のためとて、お伊勢さまへお初尾銀拾貳匁、りんとかけてのけておき、扨旦那寺へ盆正月の禮の外に、いまだ遠き母の三十三年忌の布施迄包、其上に今年四つになる乙娘が、嫁入する時の心あてに、長持をあつらへ、水風呂より湯風呂が德なれど、拵へる事を造作に思ひ、四五年も案ぜしに、是さいはひとして仕舞、こんな仕合一代のうちに、さいさいはなき銀まうけなれば、思ひ切て、かこひ女郎たゞ一つ買て見んと、遣ひ殘りし五十匁あまりの銀のうちから、隨分つきの惡きをえり出し、十八匁に少し輕うかけて、ひとりゆくも淋しく、幸ひ參宮せし時分、留守見舞に肴くれられし返禮に、向ひの四郎左をまねき、揚屋の夕食ふるまひませうと、雨のふらぬ日、朝とく起て、あさめし急いて、はやり芝居見物にゆくにもはやき時分、揚屋にゆきて遊びしが、今時の若い者は、爰からあそこの一またげある嶋原へ、駕籠にのつてゆくげな。ああ勿體ない事ばかりと、輪珠數くりくり昔を語らるゝ年寄あり。されば一切の親仁皆かくのごとく、物堅かと思へば、さりとは世界は廣し。東洞院に隱れもなき、うろこがた屋の德政とて有德なる禪門ありしが、六十以後唐物のあがりを請て、俄にたのしくなり、それよりいよ／＼借シ銀が働き、內藏にもあまりけるが、若き時より秤目をせゝりて、朝暮渡世に油斷なく、しかも下戸なれば、浮世の樂みたえて、やくたいもない年月を送られしが、物には時節あつて、此禪門七十と申す春の比より、嶋原狂ひを心ざし、夢の如く氣をうかして、頭から一文字屋の名高い太夫になづみて、其比の至り末社共を召つれ毎日通はれける。是かや日くれて道を急ぐに似たり。撞木杖ついてせられしが腰は反橋の如く、誠の事は思ひもよらず、足ののびかゞみさへ成がたくて、歯もないはぐきをくひしばり、身をもやして無念がり、我せめて廿年前に、此里狂ひ心ざしあらば、したい事をして樂むべきに、今となつて口をしや。とかく向後床をやめて、名に聞し太夫天神を殘らず招き、太皷におもしろい酒をのませて、金にあかしてさわいで遊ばんと覺悟究て、人のほし

がる物懐より取出し、出る程の者に五兩七兩づゝ取されければ、いづれも悦び、是は親仁さまに死花が咲といさみける。それより次第に粋になつて、一座の酒振味をやられ、かるはずみのおとし咄も仕覺え、仕掛の嘘も見出し、七十におよんで分知といはるゝは、誠におんざの初物なり。ある時出入の素人末社をめされ、我若く盛にし、女郎に鉢巻もさする程に、勢の強き時は、揚屋の小盃をだに手にとらず、さもしくも金銀溜る事に、あたら月日を送り、今樂み至極の色遊びに、肝腎の分のたゝぬ時に至つて、此心ざしの出來し事、返す〲も殘念也。然れば色狂ひの盛といふは、廿二三より三十五六迄なれば、世悴政右衛門にも今、色遊びをさして、人間に生れし甲斐をしらすべし。是が本の親の慈悲なり。汝等よつて此道をすゝめ、人にも大臣といはする程の、粋にして得させよ。金銀は息子が心當に内藏一つ手をつけずのけて置たれば、かならず始末せずに、ばつとした騷ぎ致すべし。きたなびれた差配して、親の名迄を下すな。女郎は大坂屋の若むらか、みやまぢよかるべしと、物なれたる末社三人御子息に付られ、親父金本しての女郎ぐるひ、神代此かたない事と、藏の鎰まゝならぬ息子共が、咽喉をならして羨みけるも斷ぞかし。此息子當年廿八になつて、器量よく妻は當世男に生れつきけれ



共、正直にて嘘つくすべをしらず。律義千万にして物堅く、我妻の外には、女の肌といふ物をしらず。姨のもとより給はりし桃色にそめし、かきぞめのふんどしを今にかきて、後生大事とかまへたる男なれば、末社共がすゝめ、さらに耳に聞入ねば、禪門氣の毒がられ、とかく當流の末社は、物がたき風にはあはぬ筈と、日比息子がねんごろに語る、我より下めな友達共二三人に、大略を語りて頼み、不食な病人に、粥をすゝめるやうに、いろ／＼とすかし、一つは親仁の氣やすめなれば、親孝行と思ひ、永うとはいふまい。せめて今年中、女郎狂ひをしてたもれと、やう／＼と合點させ、痛ものにさはるやうにして、嶋原にともなひ行、あげ屋へも親仁から此内證申つかはれ、常の客とは替り、諸事物堅うしかけ、何とぞ其里あかぬやうにしてくれとのお頼み。それ畏て、物に心得たる揚屋の亭主、下袴着し表迄むかひに出、座敷に通しまし、見ぐるしき所へ忝き御出と、時の旦那の氣に入やうに、慇懃に手をついて申せば、息子大臣作りつけの人形のやうに畏り、私義は東洞院通に罷有、うろこがた屋の政右衛門と申ものでござる。扨是なるは同町橘屋道西老の借屋にゐられます、請酒屋の五郎兵衛殿と申。又それなるは珠數屋の喜助殿とて、誓願寺前の人。爰なは私南隣に、突米屋の茂平次殿とて、ほこり商賣でござれど



も、七人口ゆるりとのくらしと、微塵匿さず有のまゝに引合せば、三人の連は汗をかいて、さあ〳〵酒にせまいかとまぎらかせば、亭主可笑さを胸にをさめて、是は委いお引合。近比よいお近付をもとめましたと、臍の緒切て、つひに申さぬ挨拶すれば、自然町筋へ御出の折から、俄雨には何時成共、下駄傘の御用には立ませうと、物堅き口上すんで、扱女郎さまは一文字屋の天職、ともゑといふ若女郎に内證申て、内儀つれまして出られ、近付にいたされ、それから盃事はじまつて、座中酒機嫌に、もんさく謡して高笑ひすれど、大臣は膝も直さず盃手前へ來る時は、手習寺でならうた通り、念入ていただき、大事にかけて雫も酒をこぼさず、一滴七十五粒が所と、過てもあけるといふ事なく、指れた方へ急度もどし、其度ごとに肴をはさみ、其箸を我もいたゞいて下に置、さま〳〵可笑身振、一座堪忍しかねて、こりやならぬはと笑ひ出せば、我事共しらず、おなしやうに大笑ひ亭主夫婦も我ををり、天地ひらけて、揚屋といふものはじまつてより此かた、かやうの珍敷お客はなし。親仁さまとは各別世界と申あへり。扱膳出れば座のせんぎしばらくして、各々膳にむかへば、大臣亭主に亭寧なる時宜をのべ、一獻過て、引て燒鳥蒲ぼこを、上する女が見ぬ内に、はな紙出して手ばしかく包袂に入る時、三人の連興をさまして、とかく此世の人ではなし。長居する程恥のかきあきと、床にも入ずつれかへりし。世には息子もあれば、世界の事一がいにはいひがたし。ある時越後の半九といふ大臣の本より、濫紙包一つ、職人らしき、ひわかい男が揚屋へ持參して、御亭主に直に渡したいと申す。主罷出て請取、御太儀に忝し。御茶でもまゐつて休てござれといへば、まづそれをあけて見て下されといふ。中あらためて請取書て進ずるにおよばず。追付こなたからお國もとへ、御返事を申上べしといへば、其中に私が金がござります。改めて見て、傾城かはして下されませと申せば、亭主ぎよつとして、紙包ほどき見れば、嶋桐の小箱の中に、金子百兩半九大臣の添狀一通、ひらき見れば、此吉藏と申男、一文字屋の天職、ともゑといへる女郎を、去春御影供の歸るさに、ちよと見しよりも大方ならぬ思ひとなつて、此度態々と、其女郎に逢ひに斗罷のぼるの間、隨分馳走いたさるべし。先色狂ひの手付金に百兩相わたさるゝ。是にかぎるべからず、い

かほどにても入用次第、其元我等定宿
へ申つかはれ、其里の分あしからぬや
うに、頼むの由、ねんごろに書れたり。
亭主我に詞を替て、よくこそ御入先奥
へ御通あそばし、御酒でも召上られま
した上にて、思召入も承り奉らんと、
内儀も出られ槌で庭はき紅はき詞に色
を付て、さま〴〵のもてなし。扨女郎
さま今日はならしやりませぬと、遣手
が申詞にすがり、けふのお客の思はく
くわしく語りて、あるじ夫婦ひたすら
頼めば、此やり手後世願ひにや、よく
聞入て、女郎に申入れば、情にまはる
巴にて、御心ざしのうれしければ、こな
たのお客に断ゆくべき由、大臣へ文遣
し捨て其まゝの御出。黍きは揚屋の仕
合、お引合の酒事過て、　吉藏醉
て、何の事なく　らず。其夜は
あけて其まゝ帰りさまに、又の日から
千日つゞけて契約いたし、爰に碇をお
ろさせ申沖を漕たる遊興。末社もなく
て一家をあつめ、主に預し百兩を、心よ
く蒔ちらせば、揚屋のざしきは時なら
ぬ山吹の岸かと見えて、宇治へも聞ゆ
る斗。辰巳上りな聲を出し、聞しに増
る大臣と、笑をふくみて悦びあへり。さ
れど此吉藏大臣、
　たる事なし。女郎不審さ
に、大臣にも面白く酒をすゝめ、我身
も醉ほど呑で、今宵は慮外も酒の科に
してゆるし給へ　、　、
　、
　、大臣
更に其氣色なく、何事も叶はぬうちこ
そ戀路なれ。心のまゝに自由なしては、
妻女も同前。是斗は殘し置て、心ざし
の互に變らぬこそ、本戀なれと、誠は
とけ　とは是なるべ
し、ある時女郎申されけるは、その事
なくては、御心底はかりがたく、万に
心おかれて、更に面白からぬ御事、誠
我思召ての御出とは存ぜず。あひまし
て廿日にあまる　、夢斗の御たはふ
れは、釋迦でもあるまい物でなし。と
かく御心の底打わりて聞ましたいと、
巴は浪の紋、郡内の袖をぬらして、か
き口說かるれば、おろかや思はぬ御身
に、大事の日を爰にくらして、艶顏を拜
し申べきや。誠の心は今日ぞしるべし
と、亭主に兼て申渡せし身請の事も、
愈々今日に極むべしと、五百兩の外に、
五貫貳百目の借銀迄持せ來れりと、
供の者共呼よせ、挾箱あくれば、それ
にちがひはなかりき。女郎なほ〳〵不
審はれず、此里御出し下さるゝ、御心
入はうれしけれど、逢そめてより今日
迄の御しなせ、さらに實とは見えず。よ

もや戀にて引ぬき給ふにては有まじ。さあれば方様に連られて參る事、いやと申切ル。亭主夫婦やり手迄、是は一興なる太夫樣のお詞。此里を出給ふは御身のほまれと申、御一生の片付、何とか心得給ふとしかり申せば、大臣きかれて、いや／＼是は女郎の道理也。今は誠をあかして聞せん。我事實は越後の者にあらず、皆も知らるゝ、當地に於てかくれなき、曲水と替名を申て、此女郎の姉御菊川といふ美君を、先達根引にし給ふその大臣の家來、吉藏といふ者也。頃日菊川我旦那に願ひ申されけるは、我身事御影にて廓の苦患をのがれ出、かく榮花にくらし侍る事、深き御恩、死ても忘れ難し。しかし御存じの如くひとりの妹を、廓にのこし憂き勤をさせぬる事、此身になりて思ひやる程かはゆし。迚のお情に、妹巴も我に同じき身となし給ひ、兄弟共に御不惑くはへられなば、何か此上の望あるまじと、わりなき心底大臣聞とゞけられ、それこそ安き望、早速今日にも請てあはすべけれど、そなたを請てまだ間もなきに、又引ぬきしと世間の人に、奢のやうに沙汰せられんもむつかしとあつて、則むかしの色友達、越後の半九さまへ此趣を仰かはされ　あなたの添状もつて、越後者と僞り、表向は我等がつかむ分にして、內證は御兄弟一所におかせらるゝ心入必ず外へは沙汰なしと、一家の口をかため、すぐに姉子の方へ御乘物を



かき入レ、廓を離れて兄弟の對面。是斗には虚のない涙をながし、悦び啼とは床の外にもある事かと、吉藏が一代の出來口　先取あへず盃事しまうて、是から中椀がはじまり、うれしい時の酒は胸にたゝへず、いつよりは大酒となつて、曲水大臣もよい機嫌して、菊川といふも流に近き名なれば、けふよりして人のほしがる物の色によそへて、山吹とめされ、月にも花にも、雪にも螢にも尻つきのよい、兄弟の女郎をながめ、あした夕べの樂しみに、姉に色糸彈せ妹にうたはし、万自由のくらし、あつぱれ此家の大將木曾殿の顔して、右左に巴山吹を置て、床のたはふれ、是ぞ此世の極樂なるべし。されば今の世の人間、假の生死をわきまへ、一日成共色道の遊興、又もなき樂しみと、短う定めけるこそ上分別なれ。申せば堅うなれど、旦に紅顔あつて、揚屋にほこらるゝといへ共、夕べには白骨となつて、荒言はいた太夫さま達、廓を出ずに、たふとい所へ參られしを、思へば夢の浮世ぢや。

に空寢入して、さびしがらせておかるゝ女郎は、內心如夜叉と申べし。それもふられて苦にならぬ大臣、跡引て此うらみを仕掛、物の見事な騷をする和郎と、二割半にまはる借銀の內を、戀なればこそ持て來てつかふ貧なる男を、同じ事にふらるゝは、いぢらしい事也。後生こそねがひ給はずとも、いやな男にも、攝待の施主ぢやと思うて、

給はば、大きな功德になるべし。年寄斗が死ぬる物でもなし。色も盛の若女郎、今日九重と時めき給ふ美君も、名のみ殘りて花は咲比、其身は散て苔の下露、きえて情の深き事は、今に我人申出して惜しみ待る。あゝ夢ぢやもの〳〵

第五　花にも負ぬ三五の月

身は病の入物願は
先の見えぬ目病の地藏

穐の夜の長きに退屈するとは、色狂ひせずに宵から寢る、しはい奴が申せし事也。千夜を一夜にくゝり合て、其上に閏月迄こめて、晝のない國に生れても、色さへあれば夜に飽といふ事のない、遊び好の末社共二三人、御目かけらるゝ大臣、御親類の中に不祝義な事あつて、一兩日かの里御遠慮につき、不思議に昨日けふ揚屋の疊をふまず。今宵も又無色にて我宿での夜の長さ、近比草臥判官、靜平入片岡彌市、伊勢の三ぶなど淋しさに打より、今迄見つくせし、色里の噂を仕盡て、是より末の

世の色里の事推量して見るに、次第に瀑て替た事のみあるべし。既に今さへ常なる事を、何によらず古しとて用ひず、名の木も鼻につくとて、燒物を留るなど、かほりのよさにはあらねど、かはつた事を、しやれたというて悦ぶ人心なれば、蕎麥切を酢で温飩を茶でくふなど、あぢにやる斗にして、手重き事をやめて、萬事をかろく小切目にして、繕なくしらずくにして、すぐばけな事のみ多かるべし。然れば女郎ぐるひをして一座が面白いの、器量がよいの、意氣が悪いのといへど、極る所は一つなり。それぱかりに一夜の夢に、七十六匁の銀を出せば、是第一の遊興と、大臣御出其まゝ揚屋の亭主が挨拶もせず、
し、女郎も親方の手前にて、伽羅留て來るやいなや、　、

出ての酒事、是は今に替らず。面白くのんで、夕食にもせよ、夜食にもせよ、喰立にして、大臣は歸るべし。女郎も今迄さまぐ\の衣裳しつくし、風俗も袖下の小さい時もあり、ゆつたりとする今もありて、いろ／＼に替れば、此後の物數寄しやれて、髮は替らず嶋田にして、平髻に金唐紙をたゝみ、衣裳もぐわらりと神鳴小紋などつけて、廣袖ゆたかに、反古染の上下を着て、素足に沓はいて道中せらるべし。二布は紋紗にして、立居に白く、　、

、金箔を押て、
、一節切の中を掃除するやうに、切々出し入をして、今迄のごとく、裾に伽羅もとめられまじ。扨

狀文にも、御身のいたはり頼みますなど吞、あまい事はかゝれまじ。增て昨日は逢ましてなどゝは管なり。あたまから御かへりの後は、としてかくしてと、共品をかゝるべし。御内の御首尾如何きゝましたう存じまゐらするは、千年すぎてもやめられまじ。さりとは是斗はきづかひし給ふが嘘で有まじと、大臣も誠にうけらるゝ事也。首尾そこねては、現在あきなひ旦那を取うしなはるゝが實正なれば、傾城買の本阿彌に見せても、是は眞に究べし。扨物前にやらるゝ文は、成程かさびくにして、封たる上に、此方無事と、遠國から書て來る格を以て、此内に何も無心事なしと、披ぬ先に、さつそく敵が安堵するやうにしてやらるべし。又大臣も着類の好かはつて、表は日野紬、又は龜屋嶋の細いに、裏に唐絹の美を

つくし、歯枝に磨出し蒔繪を物ずき、延紙の切口を銀箔でだみ、下帯にむかし渡りの金入か、時代切の錦かして、見えぬ所に結構をつくし、至りというて珍重がるべし。女郎にも髪をきらせ、指をきらさせ、或は爪をはなさし、起請を書する事など、一向初心の至りとて、怪我にもさせまじ。此替りには、我逢女郎の親元を、いつはりなしにいはせ、今迄の心底に少しにてもちがうた所あるなれば、そんじやう何といふ女郎は今太夫風をふかせ、公家方のお姫さま顔して小判は何の木になる物やら、酒はどこの井戸で汲で來る物やらと、世の事しらぬ顔はし給へ共、あれは西の京の御前通りに、かすかな扇の骨けづりの、太郎助といふ者の娘にまがひ御座なく候と書て、門口に張つけ恥辱を與へて、すぐに外の女郎に乗替

る契約、是誓紙にまさる心中がためと、いな事にかはるべし。只いつ迄も替るまじきは、

森の郭公、て

其後、頭が痛いとて、暫く物いはずゐて、人より、座敷に出て、私のそこなひました髪付、もとの如くの殿振にと、太鼓女郎もあるに、手づからさし櫛ぬいて、なでつけさまに、膝頭にて腰をつきなど、心にひとつもない事にして、僞りとはしりながら、是斗は末の世の粋共も、滿足がつて、此仕掛替るまじといへば、いや／＼今さへ大臣によつて、中々かやうの仕掛などくふ事にあらず。

がないの、さうな物のと、いそがしき中にも細に氣をつけ、天井のなされたと、かへつて悪功いふ人もあれば、今より後は、僞りとたてゝおいての上に、めづらしき仕掛を仕出して嬉しがらせ、同じそらごとも、律義に客のためになる事斗いうて、すぐばけにして、こかさるゝ一手をあみたてらるべし。既に今時の放下師品玉取にも、種のかくし所、手づまの仕方を品品して見せ、其上にて、かやうに見えぬやうにいたした物でござると、秘する事から、先へして見せねば、合點せぬ時ぞかし。次第に大臣かしこ過て、十四五手づゝ先を見すかし、常に下戸を知てゐながら、揚屋夫婦遣手変りに、おもしろをかしういうて酒を強る時は、まだ間のあるに正月の事頼むか、さなく

ば揚屋の表替か、遣手が夫に商さする元手の訴詔か、どうでもしひて酔すは、無心いふ下地と早合點して、當暮は江戸の店へ勘定きゝに下れと、かねて親父がいひつけ、さりとは都の正月せいで殘念千万。去ながら逗留も久しからねば、罷上つてはつがとゝにも近付に成べし。全盛なる太夫殿にお目にかゝれば、諸事に氣骨がをれいで心よさ、定て正月の事などは御内證しめてござらうと、いひさうな事此方から以て參れば、宿屋夫婦遣手のはつも、はや敵に先をこされ、心に籠し願事の裏をかゝれて、あきれて言寄るべき手がかりなさに、江戸へ御下りなされませうば、太夫さまへさぞ置土産が、うなつた事でござりませうといひかゝれば、餞別見まして、其上の事と、きよろりとした顔、客でなくば頬へ水がかけたい程に先ぐりばかりに智惠が走つて、本大臣の心の廣きが次第に少くなるべし。是からは我々が商賣迚も心もとなし。今迄の調子に、味な手付して、是旦那斗いうて、盃の合したり、輕口いふ分では、よもやつれまじ。算用もしたり、目安もかいたり、少し針も立習ひ按摩も取て、小料理もきゝ、小刀細工も得て大臣床に入てござる中に、桃の核にて猿を作つて御目にかけ、竹の切にて、耳かきこしらへ、當座の御用にたてるやうな、かりそめの事にも爲に成事せずしては、太鼓にはつれまし。かうよつた



三人の中、いづれも無藝にして、何の取得なく、たゞ酒をのむと、遊ぶ事に退屈せぬと、物もらふ事と、かるた業に目がひかると、大臣の不便がらるゝ女郎を、透を見て横をいたしたがると、醉て刄物三昧すると、精進料理が嫌ひと、無事で濟だ事を引發して腰持と、人の嫌がる程の事は好物の男共、思ひつゞける程、此後の事心元なし。今迄の如く、よい大臣がかゝらぬとて、此身が餘の商ひ物のやうに、芝居通に、廿軒茶屋の門口に見世出しもならず、盆でもないに、太鞁持は〳〵と、揚屋町の食時心がけて、賣にもまはられまじ。まだもぬくもりの有うちに、もらひおきし羽織の一つもしまつせよといふ。近比めいりしせんさく、太鞁持と金山にかゝる者と、芝居の銀親するものとは、氣をしなしてはならぬ商賣。世界に世知がしこい始末大臣斗も有まじ。昨日伊勢の三太大臣の御供して、大和屋の替り狂言見に行しが、提重申付に、四條の鯛屋へ立より、品々申渡して門口へ出る時、新在家の髮の喜八にゆきあひ、是は久しや、いづくへ行と問ば、大臣の仰付にて、目病の地藏へ、百日のはだし參りするといふ。扨はさんごさまの御敵か、憎に此願成就也。かく鯛屋の門口で逢うたからは、目のよいはしれた事ぢやといはへば、近比滿足此太夫さま事、又出來まじき上作物。ぬり砥にかけても、みぢん疵けのない生れ付、さのみ



酒事に上手をも出し給はず、詞に數なくして只何となく機嫌よく、角々迄氣も付られず、いかにしても一座の大やうなる所、たとへ嶋の木綿布子着せましても、誰目にも太夫さまと見ゆる女郎は此君ぞかし。あはれ人の目がお役に立ものならば、我らが兩眼つかみ出して、太夫さまの御目御養生なさるゝ間、掛替に進じまして、大臣お手前から、眼代として貳百はい程申うけ、東寺あたりによい田地もとめて、物まへしらずに大晦日の闇も、目くら蛇におぢず、杖一本で、ゆきたい所へゆく身になる事ぢやにと、無用の欲ばなし。汝ごときの末社の眼を借りて、太夫職をつとめ給はゞ、大臣のよい羽織に目がつき、ぬがるゝとすぐに着取りの胸算用したり、一盃うけて、のみにくい顏して花待いやな下心など、取手引手に欲で仕上た眼なれば、お役にたゝぬがましと笑ふ。いかさまいへばいふ通り、女郎は無欲でもつたもの、又大臣も金銀の沙汰なく、賢過た方より、少し鈍き方が、大樣にしてよし。されば今目病の地藏へ代參仰付られし大臣は、糸屋町にかくれなき、色狂ひの旗頭、熊谷笠の新平と名のつて、嶋原陣に一度も不覺をとられず、金銀の矢種つきねば、當るをさいはひに、はらり〳〵と蒔ちらし給へば、揚屋一家はいふにおよばず、犬迄見しり奉つて、尾を振て、お出を喜ぶ。同じ人間と生れて、かかる浮世の面白い目にあひ給ふは、よく〳〵前の生でよき種を蒔置給ひ、今女郎にぬかせらるゝ髭とは、生出侍るかと、高足駄はく行人も、此大臣を見て、又の世の事頼もしく修行致しぬ。こんな大臣に合せらるゝ太夫さまは、大果報者といふもの、追付根引の花やつて、乘物の内より東山の春を詠やり給ふべしと、四十末社の物共、大臣の御意に入べしとて、もてはやせば、さりとは太鞁持には似合ぬ、不物好な事を申者共かな。世間の大臣、女郎を請出すは、皆しはい心から、算用づくで請る也。たとへば一度に千兩出して引ぬけば、當座は大氣に聞ゆれ共、揚詰の算用して見た時は、三年過ると只になる也。我等が物好は、其算用づくにはかまはず、なぐさみを專にすれば、いつ迄も此里において見るが面白し。色里離れて町屋に置ては、常の女の少し取なりのよい分也。下屋敷において通ひ女にと思ひよれど、是も半分は汝等が物になれば、我あふ内は人に逢せず。千年も揚詰にして遊ぶこそ心よけれと、毎日手を替品をかへての大騷ぎ。

殊更過し名月の遊び、月宮殿にて、玄宗と楊貴妃兩吟して、曲狛を廻されしも、まはり遠きなぐさみ。ほしがる物ばつ〳〵とやつて、人をまはして見る程の遊び、又外にあるべきや。いつもといひながら、今宵の爲には、わけて柏屋權右が二階座敷、南うちはれて夕ながめ、月は手池にして、太夫のさんご夜中新月の色ふかく、二千里の外迄まはらせ、色糸ひかせて謠して、おもしろ過て、けうとい程にさわぎぬ。爰に此大臣のお友達、大文字の山さまといふを知てか。成程それは濕た事のお好な、一文字屋の井筒大臣か。いかにもいかにも、浮世の遊び事仕盡して、万にしやれた物ずき、酒がちな提重こしらへ、近所ののらを誘て、都一番の月の見所を、我等案內して見せ申さんと、嶋原の南なる揚屋の塀の下成、畠の中に、酒事始て、爰の月のおもしろき事、人はしらざりけるといはるゝ聲、柏屋の二階に聞え、大臣耳ざとく、今の聲は慥に山ではないか。何としてそこにはゐるぞ、是へ參つて面白き酒をのめと、詞をかけられしに、そこへゆけば氣がはつて慰に引口あり。心をそこになして爰での月見、塀一重のちがひ斗、物のいらぬ遊興、ねざめ心やすしといへば、二階も下もどつと笑うて興になる時、其座に八塩ゐられしが、聲かけて是は替た出掛やう、山さま、うまきものを進じますと、一重に芋入て、帶にてさげられしを請取、近比お氣のついた女郎さま、是忝しとかへしさまに、前巾着より錢十五文取出し、重箱に入てかへされしに、八塩は紅葉を顏にちらし、赤面して此錢はと問るれば、慥當年は一升が十五文かと存じたと、又大笑ひに腹をいためし。其夜の事なるに、ある女郎好物のよしにて、臺所にて芋をしたゝかせしめられ、口拭うて二階へあがりさまに、箱階子の中ほどにて、取はづしての高鳴座敷にひゞきわたり、へ風はげしく、二階のお〳〵驚き、女郎さまさうなが、天晴見事な秋の夕べかなといふ時、太皷の吉介下にゐしが、やがて女郎の尻をつけば、手を合して拜まるゝ。すかさぬ男なれば合點でござるかと、詞をかけて女郎をおろして、吉介二階に上れば、末社の身として人もなげなる振舞と、大勢立重つて胴を打されてすみぬ。いで其時のへを負し其返報に、加賀一匹當座にもらひ、其上に此女郎の年のあく迄、每夜錢いらずによい目にあふ事、こんな身替りには、我々とても立たしと、髭の喜八が咄聞ば、又氣をしなさう物でなし。太鞁がきかずば、隨分男作つて、生れつきのひくい鼻を引のばして成共、見せつきをこしらへて、金後家に思ひつかるゝ仕掛すべし。さりとは世をせきせばう、思ひ給ふな人々と、いさめて其夜をあかしけり

けいせい色三味線

目録　大坂之巻

第一　梅も松も交て春

[illegible]

第二　梅より先へ咲し荻野が二階

[illegible]

第三　梅の花山の[illegible]

[illegible]

第四　梅の花[illegible]

[illegible]

第五　梅よりさくらの[illegible]

[illegible]

第六　梅の匂ひ吹かよふる大橋

[illegible]

大坂新町女郎惣名寄せ

▲新町筋大坂屋吉左衛門

一太夫 さとの家 梨 こふぢ
一同 あぐち 同 大しゆ
一同 屋しほ 同 岩花
一同 うき花 同 高花
一同 花衣 同 こよし

一天神 みちのか 一天神 かふち川
一同 きよふじ 一同 大はし
一同 しの 一同 さもん
一同 おりやま 一同 ふじとぢ
一同 きんご 一同 らくのえ
一同 とものり 一同 高浜
一同 ゐなく 一同 わかうら
一同 うきさと 一同 みち川
一同 貴はま 一同 ききく川
一同 あふ川
一鹿恋 よしこう 一鹿恋 あかね
一同 おのやま 一同 山ぐち
一同 岩ふぢ 一同 いま花
一同 あふぢ 一同 高さき
一同 まつさと 一同 さくらゐ
一同 こふし 一同 小ふぢ

一同 りんとの 一同 やまざき
一同 おりやま 一同 せんよ
一同 大しほ 一同 わうし
一同 田むら

▲同筋 吉屋長左衛門

一太夫 さぜ 梨 乃せ
一同 きんご 同 さもん
一同 きちせん 同 さくら
一天神 みゆぎり 一天神 ちさと

▲同筋 つち屋甚兵衛門

一太夫 あさ田 梨 世川
一同 おかぐら 同 小せん
一天神 玉川 一天神 鶴川

▲同筋 加賀屋九左衛門

一太夫 小ふぢ 梨 くら井
一同 おふぢ 同 ちくの
一天神 あふち糸 一天神 あふぢ山
一鹿恋 ちりの 一鹿恋 くら井

▲同筋 扇屋平右衛門

一太夫 あふの花 梨 かしと
一同 かろう 同 とよし
一同 さちぜう 同 とくよ
一同 小むら花 同 もみぢ

一天神 みくさ 一天神 大ちう
一同 きつ山 一同 わかづま
一同 うきち 一同 山さう
一鹿恋 つまぎ 一鹿恋 さまぎ

▲同筋 扇屋四郎兵衛門

一太夫 吉花ぶ 梨 とさう
一同 大くら 同 大淀
一天神 ちよはし 一天神 あさき乃
一同 世屋ま 一同 りんとぢ
一同 とよ川 一同 むつ
一同 山の井
一同 高さき 一同 りんざき
一鹿恋 かいで 一鹿恋 ちよそむ
一同 きん花

▲同筋 住吉屋長兵衛門

一太夫 うそか 梨 つまぎ
一天神 屋へやま 一天神 屋まと
一鹿恋 つまぎ

▲同筋 扇屋三郎兵衛門

一天神 大しま 一天神 みのを
一同 とよ花 一同 まつ山
一鹿恋 まつ川 一鹿恋 きよふじ
一同 みのは 一同 宮ちう

一同 見やま 一同 かづらき
▲同町 車屋忠左衛門内
一十六 むさし 引舟 おの山
一天神 みちしば 一天神 わこく
▲同町 金沢屋伝兵衛内
一天神 玉かづら 一天神 千種
▲同町 絵屋吉左衛門内
一天神 大念
▲越後町筋よしのや九左衛門内
一太夫 おふ瀬 引舟 しのぶ
一天神 かつらぎ 一天神 かつらう
一同 大さと 一同 梅川
一同 玉川 一同 うきふね
一同 ゑもん
一鹿恋 きその字 一鹿恋 ふぢつき
一同 せがわ
▲同町 藤本屋助右衛門内
一太夫 かりる 引舟 もんど
一同 よしの 同 と雲
一同 ときわ 同 いづみ
一太夫 半太夫 引舟 こてふ
一同 玉かづら 同 花井
一同 万吉太夫 同 ゑもん
一同 小吉太夫 同 つぐせ

一同 志川 同 ひでまき
一天神 見らう 一天神 玉かづら
一同 長ちく 一同 小いづみ
一同 志づの 一同 ゑんざん
一同 かつらぎ 一同 よせ川
一鹿恋 ようぎ
▲同町 丹波屋吉左衛門内
一太夫 うかね 引舟 えぐさ
一天神 井筒 一天神 小むらさき
一同 三浦 一同 稲葉浦
一鹿恋 梅がえ 一鹿恋 いづも
一同 いさご
▲同町 さこや半左衛門内
一天神 きよゑみ ▲鹿恋 きんご
▲同町 藤本屋次右衛門内
一太夫 あづま 引舟 玉かの
一同 なにわ 同 よしま
一天神 庭しう 一天神 春の名
一同 ろうま 一同 と乃を
一鹿恋 きさ川
▲同町 和泉屋次左衛門内
一太夫 見よしの 引舟 吉川の
一同 きちのへ 同 あか津

一天神 こむぎり 一天神 かよひち
一同 むめがえ 一同 うき雲
一同 うまくら ▲鹿恋 松さん
▲同町 東屋平右衛門内
一太夫 八重 引舟 たま
一天神 おとと 一同 つきまさ
一同 こうま
▲同町 京屋忠兵衛内
一天神 みどり 一同 わかさう
▲同町 吉備屋九兵衛内
一天神 きやこ 一天神 山路
一同 のうぜ ▲鹿恋 さやま
一鹿恋 きよつう 一同 きうざ
▲同町 あぶら屋太兵衛内
一太夫 ようた 引舟 ようぎ
一天神 きんさ山 一天神 小紫がき
一鹿恋 ちよ見 一鹿恋 このへ
一同 やちよ 一同 たきつ
一同 ふぢ山 一同 玉うと
▲同町 伏見屋忠兵衛内
一天神 ゑる田
▲わきさどりや長左衛門内

一太夫 きちとせ 一引舟 みづま
一天神 いすせ 一同 丹波屋治兵衛
一天神 わづま 同上
是より端女郎の部
△新町新南側の分
一同 のせ 一同 つまぎ
つちや長兵衛内 一天神 長ざん 一同 あぢご
丹波屋吉兵衛内 一天神 右京 一同 しづか 一同 とよせ
ふしみや大吉内 一天神 わづま 一天神 りさご
一天神 つま川 一天神 あづま 一天神 らんの丞 一同 大しま
一同 きよせ 一同 とくま 一同 王之と
あふみや治兵衛内 一天神 ゆかり 一同 あづま
一同 ゆとり 一同 とやま 一同 よの
大和屋宗兵衛内 一天神 あふ八 一同 きつ
一同 ふぢ八 一同 みくさ 一同 いり江 一同 よし
あやめ屋 ... 内 一天神 松の 一天神 おさん
一天神 きせ川 一同 三木川 一同 松山 一同 喜代
一同 梅の江 一同 花川 一同 ...
八木屋武兵衛内 一天神 あの山 一同 こんろ
まるや 新兵衛内 一天神 あやり 一同 くすと
わたらや仁兵衛内 一天神 王の山 一同 ...
一天神 大空 一同 ... 一同 あやめ
まるや九兵衛内 一天神 きつせ 一天神 ...
もみぢや 新兵衛内 一天神 あるせ 一同 ... 一同 りおう
あかりや三左衛門内 一天神 ふちの 一同 とみ川
東屋兵右衛門内 一天神 久山 一天神 くる尾
一天神 ちよ尾 一天神 かつらぎ 一天神 きよ川 一天神 わさつま
うつぼや ... 内 一天神 あやめ 一同 くるを
くろまや 庄三郎内 一天神 うらの 一天神 うた 高
一天神 若松 一同 ちつ女 一同 ... 一同 長ざん
吉野屋孫三郎内 一天神 小吉大夫 一天神 金大夫
一天神 万大夫 一天神 よりの 一天神 久米 一同 ...
花田屋兵右衛門内 一天神 かせん 一同 よしお
一同 さか 一同 ... 川 一同 見ざう 一同 吉の ...
田中屋おねい内 一天神 きよ 一天神 りくさ
一天神 のせ 一同 やちよ 一同 右京
久代屋 ... 内 一天神 久代 一天神 みづき
一同 ... 一同 さうと
太左衛門 平兵衛内 一天神 かと王 一同 ...
一同 まんよ 一同 ちとせ 一同 ... 一同 せつ王
田中屋 ... 内 一天神 花川 一同 きつ川
一同 ... 一同 さつえん
ふしみや喜右衛門内 一天神 ... 一同 ...
一同 ... 一同 ... 一同 ... 一同 ...
一同 ... 川 一同 ... 月 ...
大和屋宗兵衛内 一天神 ... 川 一同 ...
一同 みつの ... 一同 ... 一同 ... 一同 わかさ 一同 わかな
くろまや ... 内 一同 とよ川 一同 とよ ...
△是より新町北側の分
かもちや ... 兵衛 一同 さつま 一同 ... 花
つち屋 ... 内 一天神 よしの 一天神 ... 一同 ...
一天神 ... 一天神 ... 一同 ...
くまちや ... 内 一天神 のぶ 一同 ...
一同 川 ... 一同 右京
あきや ... 内 一天神 ... 川 一同 ... 川
一同 ... 川 一同 ... 川
いせや ... 内 一天神 ... 一同 ...
一同 ... 川 一同 ...
ふしみや ... 内 一天神 ... 一同 ...
一同 わかや 一同 ... 川 一同 よしの
一同 ... 一同 さうと
宮古屋 ... 内 一天神 ... 川 一同 ... 一同 ...
ふしみや八兵衛内 一天神 ... 一天神 ...
一同 ... 一同 ...
ふしみや大吉 ... 一同 ...
一同 ... 一同 ...
あきや ... 内 一天神 ... 一天神 ...
ひしや ... 内 一天神 いくよ 一同 ...
一同 大 ... 一同 ... 一同 ... 一同 せんよ

一月おぐろ一日九八まと
くまや七兵衛内　一人さつま一日たまき
一日やちよ一月つま川
みつまや久兵衛内　一人梅かへ一日おくら
一人くもゐ一人こまの一人むめ川一人ちとせ
みのや作兵衛内　一人まつ世一人しきの
一月うきを
住吉屋長左衛門内　一人ちとせ一人九十九
一人住の江一人大和一人九八まと一人さつま
一月とき一月おぐら
つるや三右衛門内　一人やちよ一人大和一人おくら
わつかや甚兵衛内　一人おちよ一人玉むめ
一人玉の世一人玉の江一人玉むら一人玉きく
一日玉ちよ一日玉かつら一日玉なけ一日玉わと
一月玉よし一月玉ゑ
いづつや宗旡内　一人こまの一日ふぢつま
一人こむらさき一月ことぶき一日小倉山
山本屋源兵衛内
扇屋四郎兵衛内　一人ちとせ一人みやこ
一人きんやう一人はつせ一人かほる一人みやき
大こくや喜兵衛内　一月九十九一月さつま
京屋市兵衛内　一月いこま一日ちくさ
一日いさこ一日山ぶき
ろうまつや長兵衛内　一人こまち一月とうく
一月小倉山一月こてふ一月山川一月とよせ
やまとや伝兵衛内　一人みやこの
新町なかや彦兵衛内　一月梅がえ

▲越後町南側の分

日吉屋五郎兵衛内　一月あかつま一日いづみ
同　庄三郎内　一月たかせ一日高尾
同　千幾屋おせん内　一人りく也
さのや長兵衛内　一人ちとせ一日さつま
八本屋六兵衛内　一人つかさ
いづつや清兵衛内　一月万世
みつや若兵衛内　一人おわせ一日さつま
一人きよし一人やよひ一人松か枝一人くつさ
わかさや喜兵衛内　一人めりか一人むらさき
一人和泉一人ちよせ一人おわか
うちつや七兵衛内　一人若松一日わかな
京屋かう世い内　一人九十九一人かほる
一日川竹一日さつま一月せき一月やくら
一日さつまよし一月若の井一月あさひ一月さくら
天王寺屋半兵衛内　一月いこま
ての瀬や長兵衛内　一人中川一月やくも
京らくや半左衛門内　一人松竹一人松ぶえ
一日まつ山一日ちよ九一月まつよ
うちつや喜兵衛内　一月つるせ一月まさき
くわちや清左衛門内　一人いくよ一人わか紫
一日梅がえ一日いくせ一日かつら一日あさよ
一日きちご一日わかよ

紙屋八兵衛内　一人ぬれゐ一人住の江
一日あやへ一日ちよ三日はつせ一月さくら
京らくや喜兵衛内　一人とよ浜一日大和
辛や庄兵衛内　一人山おか一人沢みつ
一日まつ山一日さつま一日山川
ありや六兵衛内　一人よしの一日みつる
みなとや半兵衛内　一月九十九一月たいふ

▲同越後町北側の分

京屋安兵衛内　一月小さつま一日ととせ
一日のかつ一日のぎ
かつらや半七郎内　一月つまさ一日九十九
うちや伝兵衛内　一人みつせ一人みやこ
一日さつま一日よしの
ひせんや権兵衛内　一人清九一日あづま
大坂屋助九郎内　一人あつま一日小さつま
一日よしの一日九十九
のまや六兵衛内　一月九十九一月たんち
ひせんや六兵衛内　一月かほる一日つまき
いづつや源兵衛内　一人もせ川一日のとか
さかい屋七兵衛内　一人高山一日ちとせ
一月九十九一月こよし一月九十九一月わかさ
さつまや半兵衛内　一人とやま一日こまつ
一日うせん一日さかの

一月すみよし 一同 長太夫
みんざや吉右衛門内 一み かはる 一同 はつえ
藤本屋清兵衛内 一み よしはま 一同 よし浜
一同 吉川 一月 ますざき
▲わたなべ南館の分
大和屋久右衛門内 一月 山川 一同 世渡
ひろたや虎市内 一月 ようの
丸太屋八郎兵衛内 一み おく 姫 まねく
一同 あつま 一月 ことの
八木屋でいあん内 一月 まがき 一月 ちや川
あそや八右衛門内 一月 とよの 一同 よしざき
ごいや長右衛門内 一み 花だち 一み くもゐ山
一同 よし 一同 ちよせ 一同 世川 一同 見ん
一月 ござく 一月 わさの
はそうや伝右衛門内 一み とまく 一同 むら菊
一同 右京 一同 まの 一月 さや山 一月 とさ山
万代屋清兵衛内 一み おいづ 一み よしの
一月 うめ 一同 いあ
山崎や与左衛門内 一表 見ちのく みかさ
一同 うき 一同 うての 一月 かし 一月 しかを
小山屋かくり内 一月 竹川 一同 まつざき
おび屋清兵衛内 一月 川花 一同 よしざ
一同 見ん 一同 いくよ
志わや六右衛門内 一み おくら 一月 小ざくら

一月 こさと 一同 竹川 一月 おとき
▲是より わたなべ御館の分
松原伝右衛門内 一み 三ゆふ 一同 花の江
一同 花紫 一同 思ひ川 一月 小藤
ごいや長太夫内 一み 大さと 一月 もとの 一同 わかき
金田平右衛門内 一み よしざ 一み みちへ
一同 りおう 一同 きんご 一月 うかく 一月 とよかう
一月 よし花 一月 大さと
綿屋長兵衛内 一 おぐら 一同 あすせ
一同 まつ山 一月 ようの 一月 花川 一月 ちよせ川
一月 見ん花 一月 小むらさき
大和屋甚兵衛内 一み たかはら 一同 とぶき
一同 大はし 一同 さつき 一月 なかで
大和屋吉右衛門半左衛門 一月 ようの
くちや勘兵衛内 一月 見ん竹
さうや九右衛門内 一月 山花
紙屋与三兵衛内 一表 おくら ことみ 小山やま
一同 くら山 一同 おみ 一月 さくわ
住吉屋与兵衛内 一月 さつき
森屋八郎兵衛内 一み かわに 一み ての
一月 今川 一月 ちう騎
▲吉原の分 大くさ新町にて月日とをり
くろや源左衛門内 一月 ふぢゑ
さうや六右衛門半世 一月 うつ 一同 ちとせ

びぜんや権兵衛内 一月 えざき 一同 ことよ
十九や平右衛門内 一月 あふさか
ふくや勘兵衛内 一月 みさき 一同 千とせ
▲吉原へ ころ ▲うげん 式見 ▲月へ まる之
此外二分けとて あげ女郎の分へ去のせれ
▲九軒町わけやの分
一太夫 紙屋おまん 一同 川口屋長市
一同 さうや新兵衛 一同 井筒屋与兵衛
一同 糸屋清治 一同 吉田屋長兵衛
一同 住吉屋宗心 一同 山口屋勘兵衛
一同 住吉屋伊右衛門
▲あちご町あげやの分
一太夫 いむら屋清兵衛 一同 わかや吉三郎
一同 わた屋伊兵衛 一同 かりや九右衛門
一天神 わか屋伊兵衛 一同 とらや重郎
一同 いむら屋長兵衛 一同 ゐる屋伊右衛門
一同 本屋権左衛門 一同 いうや孫兵衛
▲わたなべあげやの分
一太夫 大和や吉兵衛 一同 川口屋八兵衛
一同 かまちや亀松 一同 山崎屋喜兵衛
▲よし原あげやの分
一太夫 いちくや長七 一同 いちくや長兵衛
▲佐渡島町茶屋の分
一太夫 住吉屋又兵衛 一同 中村屋八兵衛

一同　平野屋長左衛門　一同　ます川や武兵衛
一同　さかいや吉兵衛　一同　井筒屋庄兵衛
一同　いづゝや長右衛門　一同　もゝや権兵衛

▲新町茶屋の分

一大坂　平野や清右衛門　一同　平のや吉右衛門
一同　三木屋四郎兵衛　一同　かゝや九兵衛
一同　あつ屋徳兵衛　一大坂　東屋利右衛門
一大坂　大坂屋久兵衛　一同　河内屋理兵衛
一同　日野屋久右衛門　一同　[illegible]屋長右衛門
一同　[illegible]屋喜兵衛　一同　みのや三郎兵衛
一吉田　さかいや伴兵衛　一吉田　丸屋清兵衛
一同　天王寺屋長兵衛　一郡山　住吉屋八兵衛
一郡山　[illegible]ちや弥兵衛　一同　[illegible]屋[illegible]左衛門
一同　[illegible]屋長兵衛　一泉州　[illegible]七屋清兵衛
一泉州　[illegible]や利右衛門　一同　いづゝや七兵衛
一同　えびすや新兵衛

▲[illegible]ちご町茶屋の分

一兵庫　[illegible]いや喜右衛門　一同　池田屋源左衛門
一同　[illegible]ふさや五兵衛　一同　久宝寺や作兵衛

▲あまざき茶屋の分

一兵庫　うつぼや長右衛門　一同　松屋権右衛門
一同　さつまや五兵衛　一同　くめや九兵衛
一伊丹　八木屋八兵衛　一伊丹　川口屋伴兵衛
一西宮　京屋庄兵衛　一同　鍋屋与兵衛

▲よし原茶屋の分

一同　高橋屋利兵衛　一同　津の国屋半兵衛

▲太夫合　三百七人
▲引舟女郎　同断
▲天神合　九十一人
▲鹿恋合　八十三人
▲端女郎合　四百廿四人

合六百八十二人　外ニ引舟女郎入合点

▲あげ屋合　廿八間　▲茶屋　四十八間

一太夫（引舟共）　六十三匁　おばやの丸　弐匁
一天神　三十匁　同丸　十匁
一鹿恋　十七匁　同丸　七匁
一端女郎　廿三匁　同丸　八匁
一同　見世女郎　十八匁　同丸　六匁
一端女郎　十五匁　同丸　同断
一[illegible]　小天神　十五匁
一同　弐匁五分　十匁　[illegible]
[illegible]　十五匁　[illegible]　八匁
[illegible]　一[illegible]　六匁　[illegible]　三匁

以上

【第一】梅も松も打交ての大寄

郭では口ぜつ
宿では女夫いさかひ

色遊びの面白いといふは、今此時津浪打寄る大湊、人の心も打ひらいて小道なる事をしらず、是所繁昌の故ぞかし。大氣に生れついたといふても、儲なくば自ら遊びもちひさかるべきに、抓取の心覺えあればこそ、おつひらいたる穿鑿、越後町扇風方の大寄、太夫は泉屋のみよしの、茨木やのことうらかほる丸屋の小ふぢ、天職は背山、山の井、八重山、ありま、大崎、其外かこひ女郎十九人、手のつゞくほど色糸彈て、小哥は蚊の鳴くごとく、禿共は手替りの踊けいこ、正身の大神も岩戸をひらいて出給ふべし。おもしろいといふは大抵の事なり。暮てはそれ〳〵の床の取所、かかる揚屋の手廣き事余所には見もせぬ事なり。此家のみにあらず、九軒の住吉やには、八塩、江口、みやまち、小藤、浮舟、小太夫、名高い太夫職、かれこれ六人。梅はあり原、井筒、藤崎、其外しらぬ鹿戀女郎五六人。次の間は遠柳風の小哥、利兵衛ぶしのかけ物揃。抑此御佛と申は、淨飯大王の御子悉陀太子と申せしが、十九才にて御出家ありと語り出すより、さりとは釋迦は若い時から、無分別な如來ではあつたぞ。此面白い事をすてゝ、何の當があつて檀特山へは夜ぬけにせられしぞ。其身大王の御子なれば、よもや金に事欠ての事ではあるまじと、酒機嫌で申出せば、其座に坊主墮の西念といふ按摩取が申は、今の世界にも、金銀大分持ながら、此里のありがたき道をしらず、あたら日を談義參りしてくらし、無用の僧をやしなひ、又は突鐘の寄進して、来生に戀の別れをなげき悲します、其罪のがれがたし。只慈悲心におもむくの第一は、死に一倍の請判をしてしんぜまし、此所へそゝのはかして御供申て參つて、色にすゝむるを大善人とはいへりと、昔衣かけて出飯の文となへて、食いたゞいてくうた時を知て居るものもあるに、時々の商口を申て、旦那の御機嫌を取ける。惣じてかやうの繁昌の所に、勤め給ふ女郎は仕合ぞかし。常さへかくはやらせらるれば、物日はさぞお隙があるまじ。三ヶの津の内にては、此里の女郎斗は、借銀の事はおいて、年中に余程づゝ延があるべし。臍繰銀があらば、ひそかに内證で歩を安うして借りたいと、万にこまかい開帳場へ錢見世出す、細元手の男、大臣につれられて、酒呑を樂しみに、宵

から参りて、なんの役にも立ぬ事を、歴々の太夫殿に尋かゝれば、あのいはんす事わいの。物日紋日役日を勤めて貰へばとて、其揚錢は親方の爲とこそなれ、私が德にはならず。衣類の外の身ごしらへ、禿の仕出し、親里への合力、其外昔に替りて、人のしらぬ氏神せんさく、京の祇園會を大坂にて渡シ、堺うまれの女郎は、大寺祭を喰て果され、新紋日十二日は三津寺藥師、廿八日は北野の石不動、是等迄貰日になりて、義理思うての身あがり、殊更近年世につれて、至り留木も、人のきゝしれる名の木を燒ねばならず、十種香源氏の道具、揚弓の一ながれ、讀でも二十一代集、宇治に壺をつかはし、見る事もならぬ能芝居の棧敷を取、しらぬ國の筑紫に石の鳥井がたつの、東の淺香山とやらに、裸形の阿彌陀が出來るのと、見ぬ神佛の事迄、縁を求めて奉加帳、いやとはいはれず信心なる顔付して、一角づゝ投出すも悲し。それに限らず高うはいはれませぬが、町よりわせる太皷衆、染出しのゆかたなどとらるるは、惜き心にもにくからず、たゞ無理にかなしきは、脇指を、こしらへるとて、柄鮫を貰ひかけらるゝ、女にかやうの迷惑度々なり。かかる事にて、勤のうちに、太夫といはるゝ程の全盛なる女、私にかぎらず、皆借銀となるなれば、今時の女郎、ずゐぶん貰はではすまぬ算用と、あり體を語らるゝ。いかさまさもあるべし。去年の



七月十日の暮方に、さる女郎懇なる宿小座敷に入て、揚屋の嚊には十露盤おかせ、遣手に手帳を付させ、盆の事共を仕舞れしを、襖ごしにきくに、其節の客七人ありしに、皆無心いはるゝ程のなじみ、拾兩五兩三兩取あつめて、四拾八兩もらはれしに、是にては中々不埒と、大方の拂は半分濟せとの內談。され共毎年の御つかひ物、奈良晒廿五疋、大鯖貳百三拾指、錢七貫、素麪百把、箔の團五十本、ほゝづき挑燈三十は、火の雨がふつても調へずにはおかれず、太夫さまの外聞と、おつ取て遣手がいふ。聞にむつかしき付屆、町屋にて手前よろしき人の、世間もつはらにするも是程の事にはあらず。色道なればこそ今此借かりの不自由なる銀を、やうはやる事なり。貰うて女郎の身にはつけず、とかく今程女郎のむつかしき事なし。義理は武士の如く立て、內證さぞ苦しかるべしと、氣を慰めに參りて、世界のせばうなるやうな咄しを仕出し、次第に調子びくになつて、三味の音たえ、聲賣女郎も小哥機嫌はなくて、連歌座敷の如く一座しめりて氣のつきる所に、其夜の大臣何か女郎とはなばなしき口舌仕出し、とかく心底のみこまぬといふ時、習の泪をこぼし、其上に小指切て投付け、跡は永々としたる恨、是はどうでも旦那のが無理さうなと、末社共取あつかひ、ざつと酒にして歸りしが、其中にかの錢見世出すこまかい男、此



口舌に氣を移して、大臣より先へぬけて内に戻り、酒機嫌に内儀を呼つけ、遊女の如く宵の口舌を思出して、今更我を憎からぬ心中ならば、指を切といひ出す。女房驚き、夫婦となれる身のうち、いづれか此方の物にあらずや。つがもない事と、けうとい顏をすれば、亭主眼色かへて、扨は此男を振と見えたり。さうした事なればなほきらさねば一分たゝず。さもなくば向後御目にかゝらぬ、只今爰を出て行、親の許へ身上りとやらをせよと、いよ〳〵募りて出れば女心に悲しく、さりとは其方に物が憑いて狂すか。指がなうては明日から仕事がならぬが、いかに女房なればとて、むりなる事をと啼出せば、そんな前方なる仕掛の泪などに、ふわと乘る男にあらず。どうでも切といぢれば、あひ借屋の親父共目をさまして、夜更ての高聲只事にあらじと、夜中に家主をたゝきおこし借屋中八人、大屋殿を先にたて、錢屋の戸をたゝけば、女房泪ながらに、表を明てよい所へ御出、大抵の女夫いさかひにあらずと、始終を語れば、いづれも我を折り、とかく酒に醉れしものならん。何とぞ夫は宥めやうの有さうな物と、いづれも内に入て、色々いはるゝ程きかず。かやうにくるわ中一倍に、露顯致ては、なほ〳〵切さではおかれずと、氣色替て申せば、家主智惠を出して、然らば其方を思ふとの誓紙を内儀に書すべし。是にて勘忍し給へと、さま〴〵に侘れば、しからばおの〳〵の仰にまかせ堪忍致すべしと、女房に起請をかゝせ、其奧書に、右の通内義其方を思はれ候所實正明白也と。家主を始、借屋中連判して渡せば、是ほど慥な起請は、唐にも有まいと、亭主悦で取て置ける

第二　梅よりすいた荻野が一風

雪のはだへはぼだいの障り

當流分里の興女、金つかふ人斗をよしとはせず。たとへ分限なる男も、前方なるを嫌ひ、德のゆかぬ男の名代になつて、一座のさばけるにあひたがる事、勝手はともあれ世間は是なり。今時新地の茶屋女さへ、不便をかけてこま金を取せ、京郡内の着物をしてとらす男の事は、さしにあうた時ばかり泣て見せて、浮世男の名の高いもの、輕口數へて歸るは、何の役に立ぬ事なるに、此男にあうた事を客毎に是非に咄しける勤の身は、內證の用に立男を、縦ば片つらの耳がなく共、いふ事さへ聞てくるれば、たんといとしがる筈とおも

へど、勤なればこそ、いやな男にもあうてはやらるれ。金でならぬ身ならば、不器量なる男は、美男によい事斗してとられて無念度々成べきに、有難は金の威光で、一代楊枝つかはぬ口をもつて參つて、紅舌を甞め侍る。女郎もこんな男にあはるゝ時は、よもや人間と思ひてはあはれまじ。小判にあふと思ひ給ふ故に、酒の上にも迎ひ氣の來ぬ事と、随分世間へ出されぬ男の申侍る。爰に天滿に銀で自由自在に天神をまはす男有けり。生れ付不束なる上に、近い比楊梅瘡の出た跡一めんにくえて、面は一皮むいたやうになつて雲紙を見るにひとしく、濱芝居の見世物に出しさうな男と、人皆磯螺大臣と申あへり。是をよい事と心得、伽羅之助といふ替名をやめて、いそらと申せば喜悦致しぬ。ある時酒染て末社共、よい機嫌の余りに屏風を圍ひて、其内へ旦那を押込め、いづれも屏風の口に立て、さあ／＼今度海中で仕過し致し、龍宮城を夜ぬけにして、始て此里へ出現いたした、磯螺と申嶋もの、毎日かるもといへる女郎を三づゝくうて命をつなぐ稀ものゝ生捕、錢は戻りぢや、さあ太夫さま方、奥は廣いとわめけば、麁相いふな、女郎さま方に、奥の廣いは差合ぢやと、座中どつというて大笑ひ。皆する程の事大臣をつかうて、太鞁共が慰。是から磯螺に裸で餓鬼をどり所望と申出せば、酒が過たに許せといふを、不仕付なと叱。是非なく大臣裸になつて、餓鬼をどりを致せば、旦那踊の出來た祝に一角づゝ致さうと申せば、踊は何遍でも致さうが、是は許せと手を合すを、太夫さまのござる前で、ひけて見ゆるとぼやけば、詮方なくて親の借錢なす様に、ふしやう／＼に一角づゝ取しける。是程うらはらなる事はあらじ。たとへば妾に内儀の機嫌取て給仕して食くはさるゝに似り。いづれ世界は廣し。随分取ぐるしい氣を取て、連添ふ女房の隱す事迄、人中でいはさせ、其上いやな酒のんで、殊更大臣に惡い癖ありて、酒過ると其儘惡理屈を申出られ、其擧句に刄物ざんまい、命勝負をこらへて、五六度も御供申て、漸二朱一つ下さるる。是にも忝い百程いうて戴くに、さりとては磯螺について歩行く末社共、果報過て、追付太鞁冥加につきさうなものと、中間寄ての是沙汰。かく面長成大臣にあはるゝ女郎、嘸や心憂かるべし。然し今時女郎の氣に入大臣は、位斗とつて勝手にならぬ事いふに及はず。迚も勤の身なれば、二つ取には紋日役日にへら遣はず、勤てくれる男が氣骨が

をれいでお為によかるべし　隨分しやれたる男自慢の人、大坂堺にも數多あれど、あぢやりだてに皆になし、昼中には揚屋の門を得通らぬ男多し。此比も難波一番の色男、始て女房を迎しに、是等は遊女とちがひ、一生の詠物なるに、難波一番の惡女、然も腋がくさく、ようもあのやうな物にそうてゐる事よと、近所の人我を折しに、五十貫目といふ敷銀の光りで、楊貴妃に見ゆると、氣に入やうに

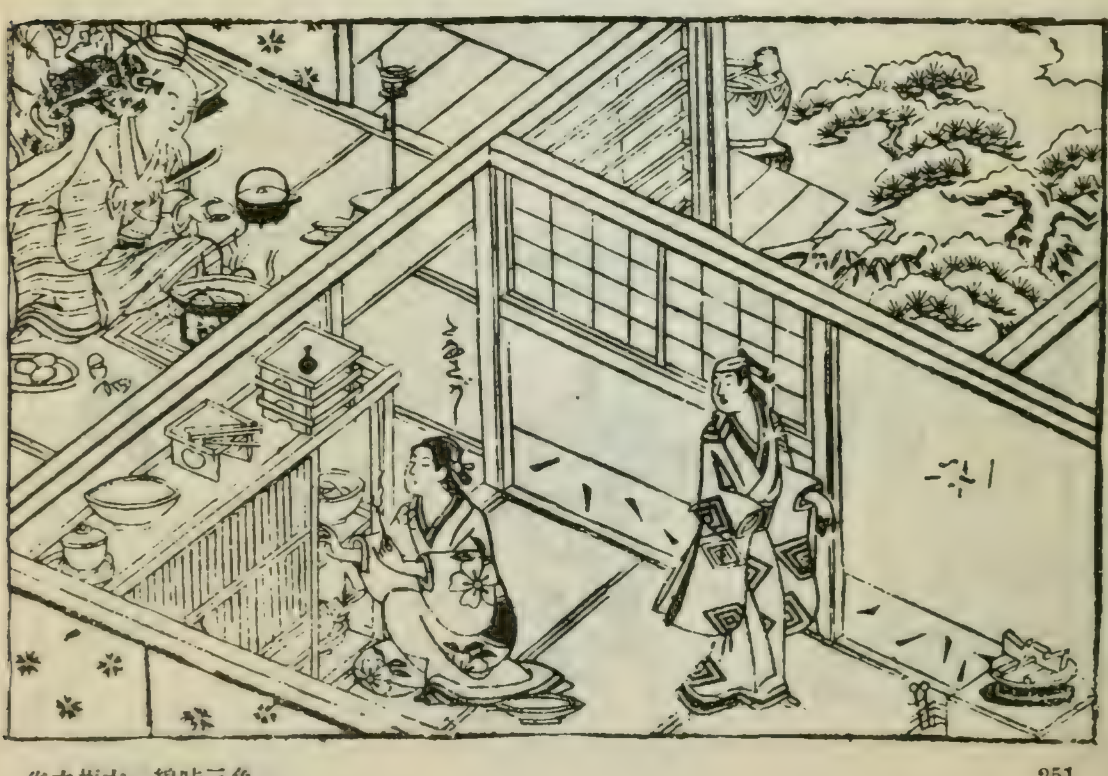
る。町にてさへかくの如し。増てや金で賣身の、ぶ男なりとて疎略に思ふ筈はなしと、後家にかゝつて身躰しなほしたる男の申待る。爰に西の國にかくれなき男、松の位を根引にせし、十八公といふ大臣、暫く當地に逗留して、扇屋の荻野を面白がり、四五會して何の事なく引拔、都に住所をもとめ、月雪の朝、紅葉の暮にも荻野をながめ、萩の下露濡深く樂しみ此家にありと、少し自慢して宵は色川原の名取、器量も諸藝も、打揃うたる具足屋といふ子を手池にして、面白く酒のんで夜深くなれば、荻野上風身にあてじと、釣夜着の

結構なる夢を見盡し、目がさめると夫婦起て、紙燭ともしつれ臺所に出て、棚にさしかゝり、卵子五つ、赤貝も煮る斗にして是幸と、爐の火を起して薄鍋をかけ、何もかも打入れて、此うまき事どうもいへずと、舌打して、女房共かんはよいかと、差向ひに、さしつさゝれ



つ、さま／＼の戯れ、ひとしほ酔も面白かるべし。女郎請出しても、こんな事して暮してこそ、樂みも深かるべきに、根引にすると其儘、紺の布子きせて、万の鎰を腰にさげさせ一文がつまみ菜をねぎらせ、味噌薪迄の世話さして、然も昔語りし人にも、遠慮せず出て挨拶するなど、何としても其心は殘ル物を、世間かまはずお内儀樣にする事、無分別の至り也。されば此荻野、夕霧についでの上作もの、美しいというて又比べものなし。ある時座敷踊の仕舞、亂姿の暮方に、召替の浴衣腰より下の一重も、今日の汗にとて、そこ／＼にとき捨て、行水の御裸身、白く妙にして、彼驪山宮の温泉をひかれし昔の品ものも、中中此君には及ぶまじ。さりとは此里の男共、ようは命があるぞ。是に限らず、朝暮太夫達の姿を見て居て、目をまはさぬは不思議ぞかし。此夕暮に九軒へ出入する、小料理のきいた六兵衛といふ男、近き比母親相果しが、死骨を高野へ納めよとの、遺言にまかせ、浮世の事共忘れて、目には泪、手には珠數持ながら、二人ある子共が事はいひ殘さず、火の用心と斗いひ捨、大方は出家心になつて、我家を立出、暇乞がてら、留守の事も頼まんと、吉田屋喜左衞門方へ立寄しが、荻野素肌の面影を、一目見て、菩提の道を取はづし、扨もと思ふより、

様に成て、旅装束の前の方をかしくなつて、人の



見るも恥て、帶にはさみ、漸として高野の麓につけば、此所の在名禿といふに付て、太夫の裸身忘れず、猶々出れば、母の死骨よりは　に難義して御廟の橋渡れば蛇柳忽、万の借錢乞と變じ手に書出し腰に帳、財布かたげて顕れ、大節季も今の事ぢやとわめく聲に、耳ない奴が聞こんで、ぐなりとなつて、それより心靜に奥の院に納て下向致しぬ。草木心なしとは申せ共、大晦日の苦き事をば能辨けると、殊勝に存る

第三　梅の花山に登り詰る男

晝寝の料理ごのみ
喰ぬ先にさめる夢

商人の高利を取ながら元直でござりますと、澤山さうに誓文をたつる、傾城の誠なき心から、起請書て客をたらすも、品こそかはれそれ〴〵の身過、女郎に限りて僞りいふやうに、惡口いへるは無理さう也。已に我人老人は正直にして、假にも虛つかぬものと、律義に覺てゐれど、年寄ほど僞りいふものはなし。寺参しては、今でもほつくり往生と願ひ、此苦界にうか〳〵との長生、一日も早く往生したしといはる片手に、隱居の庭に柿の核を植て、八年したらば孫共に木練の取飽さすべしと、七明年成事をたくみ、常着る小袖も、女房は弱きとて、花色紬をこのみ、子共が元服したを見て死ぬれば、もはや此世に思殘す事



なければ、それからは人にあかれぬ先に、一時もはやう、尊い所へ參りたしとの願ひ、程なく月日立て息子成人して、元服いたせば、あれに嫁を取てと、其願ひもずらりとすめば、孫を見てからとの念願、孫が出ければ彦が見たし。とかく死にとむないに極つたる事を、いはれぬ口先で、往生をいそがるゝ虚が憎し。なぜに天道次第にしてはおかれぬぞ。持佛堂の佛も、毎日の看經毎に、往生したきとの虚言には、嘸をかしう思召さん。歴々の息子持し親仁、町へ譲り状を出さるゝに、我等儀、若万一自然何方にて相果候共と、書るゝ心底をかし。若萬一を百貳百かゝれても、死なずにゐる身ではなし。心見えて拙し。世間に此類多し。喧𠵅の咄などするとて、予が事ではないが、爰をきられてといへるは愚にきこゆ。予が事といへば、そこに口があくべきか。しかも二本指た口から猶以見ぐるし。女郎のいひ方にしてはあどなくしてやさしう聞え侍る。此前八木屋の最中といふ女郎、京屋の座敷に、堺の古七といふ大臣と、五月雨の日、しつぽりとはなされしに、稻光しきりにして、九軒町も動くほどの大神鳴、是はならぬと戸障子をさゝせ、俄に蚊屋をつらせて、此内へ逃こみ、兩耳ふさいで大臣は汗を流し、引舟女郎に投節やめて、雲雷鞁製電の文に節をつけて謠はせ、太夫にも伽羅をおいて、護神香を裾にとめて、

と、以ての外おぢられしに、最中は更に恐れる躰なく、さしかけし戸を明て、此鳴の面白さ。自由にならば毎日も聞たいと、栖輕が顔して、虚空をながめてゐられしを、神鳴より心玉のおそろしき女郎と見かぎり、それより終にあはざりしが、神鳴は虫の業にて、すぐれてこはがる人と、又さもなきとがある物ながら、先はすかぬ物なれば、女郎衆は恐しからず共、こはがるゝ躰がよし。惣じて女の武邊だて見苦しき物なり。とかく女郎はやさしうして、花車ながよし。すこし弱きやうにいはう共、詞數なく、高聲せず、身をはづるを以て色有花共いへり。いかになじみの大臣なればとて、敵と居ならび膳にむかひ、二の汁も替て、杉燒の目の僉議して、鮒の燒物引ッかゝへて、美しい口をある程あいて、頭からかぶらるゝは、いかに打とげて遠慮なく、喰て下さるゝとは思ひながら、興さむべし。其上

けなく　　て、　　、其成けりに　　、終には戀もさむべし。只いつ迄も、今の行義にして、たとへ納戸では何をまゐらうと、それは見ぬ事、客と一所に物まゐらぬこそ見よけれ。今の半太夫美しい上にひすい所なく、哥よまぬ小町の如し。打見にはおぼこな仕出にして、取入て見る程きつとした、面白い所のある女郎と、伊丹の大盃といふ男、始て御見なりしより、どうも動きがとれず、毎日出かけて、引舟の小蝶の戲れ。莊子が心よりも廣くなつて、大鵬といふ大鳥、随分高うとんで、此里を我物にしての遊び。末は金がらうす踏身にならうとまゝ、遣はうならば頭から、ぐわつたりとした遊びこそ心よけれと、寄程の末社共が算用なしに奢せける程に、二年半に大盃が身躰のみ上て、一滴七十五粒のこま金さへない身となりて伊丹を昼ぬけにして、玉造りの出ばなれに、草の屋かりて世渡る種もなければ、深編笠に大脇指、日比ぬきあげたる額口、今似せ牢人の爲と成り、家々に入て舌をなやして、作り訛。是は御合力買とて、壹文づゝが耳かき、楊枝のつきつけ賣。扨もはかどらぬ事に氣をつかして、新御靈の椽先に、腰をかけて休めば、其側に我に替らぬ身躰がらの男、何賣もの共見えず。あたら稼ざかりに、宰予にはあらねど、徒に昼寢して、何をか夢みしやらん、よい機嫌の聲して、亭主が物見たがま



しく、何も入ずに、鶏頭の葉のはしらかし汁、割鰯に、あらめ置合せたる酒びて、是よりは古代青鷺塩鳴増ぞかし。とかく手づまのきいたかるい料理よりは、へたくろしう、うまきがよしと舌打して寝言を申。扨は彼奴もあぢな事知過て、あの躰とうなづき、是はよい友と、ゆすり起し、寝言の次第を語れば、さりとは起してくれてうらめしい。此比喰ぬ料理をすはって、箸とつてくひかゝる所を、扨も殘念〳〵と、奥歯を鳴して申せば、先其方が昔をかたれ。此身も半太夫をおもしろ過て、我ながら二年半に、ようも皆あけける大盃といふ。伊丹の大臣のなれの果ぢやと語れば、扨はさうか、昔の像はなし。我等は扇屋の花山に登りつめし、こんだといふ大臣のおいがらしぢやと、語るほど咄があうて、それ去々年の春、扇風方の中二階で、おびたゞしき大笑のありし時、汝は奥座敷にゐたげな。其時の騒の次第を、あら〳〵語り聞すべし。いで其比は花山によい鳥がかゝつて、茨木が方につかんで、其日もあはせず。是ではをかしからず、とかく太夫貰へといへば、けふのお客は、まだ深き御馴染にあらねば、ならぬよし遣手が指心得ての返事憎し。其客はと穿鑿するに、我等が手代に、長堀に見世を出し、蠟燭と紙を商ふものゝ、其一番めの悴なり。扨は拙者家來の太郎助様の御あひなさるゝと、少しせき心になれ共、是を口舌にすれば太



夫がひける。何ぢややらしらぬが佛、明日は天王寺の藥師の緣日なればとて、八日つゞけて申てやれば、太郎助聞もあへず、十二日つゞけて爰に置と募る。とかくは太夫が仕合、とても限のある男、急に埒明たも增と、張合かけしに、人の埒のあかぬ先に、手前の埒が早うあいて、此躰に成たが、其日の面白さ。隙なる鹿斗十人取よせ、末社集めて、勝手口に暖簾かけ、十筋の繩を十人の女郎にもたせ、是ぞ緣の糸取、引あうた女をどれでも、　、我等筆取にて、ひとり〳〵引あうて片づく者を書付しに、先一番に、初野とだるまの傳助と、をの山と上綸屋の佐次兵衞と、其外さんご、ふなばし、おしほ、かづらき、

昼中にみしらすと、おの〳〵一る。

今日ぢやと、をかし過るほど笑て、扨床々を見てまはれば、我物いらずに末社共が樂あそび、さまざまの曲を好、色々の　、をかしき中に、金頭の作右衞門といふ男、裸身に羽織をあちらこちらに着て、胸紐を後で結び、頭巾を折かけ烏帽子のやうにかづき、我若時から、此道好にして、四十八手の外の曲迄して見し内に、終に十二つがひの卷頭にある、道盛の圖斗し殘しければ、羽織を具足の心にて、　、榮耀の上の物好、それは小宰相の局女郎にあうた時仕れ。是は鹿戀女郎ぢやと、腹の痛いほど笑しが、是も昔になつて、其時よい事仕手取し者の仕合なり。さる程に早う取潰せと張合かけられし太郎助めは、今に花をやつて、花山に可愛がられぬる事、合点ゆかず。今迄こたゆる身躰でない事、我等はよく知て居るに、さりとては遣様上手と見えたり。我親より讓を請て、一生榮花に三十人口など、居喰にしてもあまるべき事成に、惡所づかひは、思ひの外はかのゆく物と語れば、大盃打笑て、本女郎買といふは其方や我等が事也。迚も皆にするからは、ぐわらりとつかうて、今にいひ出す程にせいでは嬉しからず。とかく商賣は心ながら、遊女狂ひは、急にくわつとしたがよし。家質置て遣ふよりは、頭から賣てのけて大臣めくは智惠なり。世渡の才覺には、利銀もあげてすむ事も有、惡所仕出しにかゝりて、其家に住人見たといふ例なし。我人此道にかゝつて、よい程といふ程をしらねば、遣出すから万の物を、我物と思はぬが上分別成べし。下中の嶋の藤八といふ大臣、五年此方に七千兩の有銀を、後家の米の銀を拂

ふ様に、人しれず一度〳〵に揚屋へ渡シけるが、誰にあふ共、又は女郎買共見えずして、世上へ隠すを大事〳〵と思ふうちに、遣果して今といふ今、喰ねばひだるいといふ事をしつて、松屋町の裏屋へ引込、一日に五分宛取て、素麪の臼を挽事、是等はおなじ女郎買にも、たはけといふ者なり。物の自由な時、うなつた事をせいでは、つかうた甲斐はなしと、暮方迄咄て、さりとは此身になつても、此咄の面白さ、清貧は常に樂むといふは、我々が事成べしと、たはけつくして皆にしける事はいはずして、寒い時分に破帷子を着て、過し半太夫との口舌咄し、今は無用の至り也と、權五郎殿も片目ふさいで、笑うてござるべし。あの氣でなければ皆にはせぬ筈と、若い息子を持し親父共が、異見の引事になつてはたしぬ

第四　梅の花笠に降掛る村雨

子を捨て色にまよふ親仁の仕果

人の親の子故に迷ふは、常のならひなれば古めかしとて、色の道に迷ひ、心は闇にあらぬ共、不斷の大酒に足も定めず、昼中にもしるき所へ踏込、無性といふものに騒ぎくらし、あたらしやの金太夫に深くなづみ、行年六十九才迄、分もなう通ひ死にして、大分の借銀を、一子に惜氣もなく譲られける。此息子迷惑なる親の跡を請取、家藏諸道具分散にして、住馴し我本町を立退、次第に下り坂となつて谷町に、僅の古道具見世を出し、不目利の新助とて、常仕堀かづきばかりして、苦しき世渡りをせしが、さすが親の子程あつて、ない銀を遣ひたがり、透さへあれば新町に出かけ、阿波座の釆女といへる、貳匁取の女郎にあひなれ、責て親仁が今鹿戀かふ程、つかひ殘しておかるれば、又樂みも深かるべきにと、過ゆかれし親父の仕果を悔みぬ。かく子の事を思はずに遣ひ捨し親もあるに、又子を思ふ親ありて身に絹物をあてず、口には濃茶もしらず、鼻に名の木の香をきかず、色道にうとく、秤目に賢く、桶の輪かへるも、かづらゆひが傍を離れず、古輪の切を非人と爭ひ、取集めて焼木となし、すたる塵塚迄錢ざしに拵へ、年來錢をつなぎ溜で、數千兩の小判になし、取ぶき屋根も瓦にしかへ、赤銅樋をかけて、末々世忰が世話のなきやうにと、身の娯みをこらへて、一子の爲に金銀を殖し、死去の節下寺町の旦那寺へ、五十貫目祠堂にあげて、外は、釜の下の灰までも譲狀ひとつに濟て、誰か七つの

内藏に指のさしてもなく、不殘請取四十九日の朝、出家衆を申請、佛事仕廻うて夕食より、精進あげ箸を下に置と、宿をかけ出新町に行て、山口屋の亭主合点か、親父が所務分したぞ〳〵と、小判を逆手に持てまきちらし、此家内繁昌と喜ばせける。是より心のまゝの奢、丹波やの村雨に濡掛り、雨の日も風の日も、精進日も構はず、毎日の里通ひ、万花麗にやつて、名題の末社引揃て九人、前後を守護し、東の門よりざゞめいて鳴こめば、お先へお敵より、紋付の貳つ挑燈、揚屋から人橋かけて、盛砂せぬばかり、追付是へおなりと、九軒の山口屋には万燈の如く、火をかゞやかし、臺所は爼板の音高く、摺小鉢鳴やまず、井戸車も人も、隙なくまはつて外より見るさへ小氣味よし。不目利の新助は、阿波座の貳匁としげり、腰輕になつて歸るさの慰に、一ぺん廓をめぐりしが、此大臣の威勢を見て、さりとは人間なればあれなり。適色の盛なる世に出生して、銀でなる榮花の自由にならぬ身とむまれける事、無念の至り也。何ぞ二匁取の女に戯て、うか〳〵とくらす事、人と生れし甲斐はなしと、油店の筆を貰て、我大丈夫な身躰となつて、太夫を自由にまはし、大臣と稱美せられ、浮世小路の駕籠にのらずば、此橋を二度渡るまじと、四つ橋の橋柱に書付、直に宿へ歸り、何の目的もなきに、明の日早々より京へ心ざし、京橋より枚方迄かご



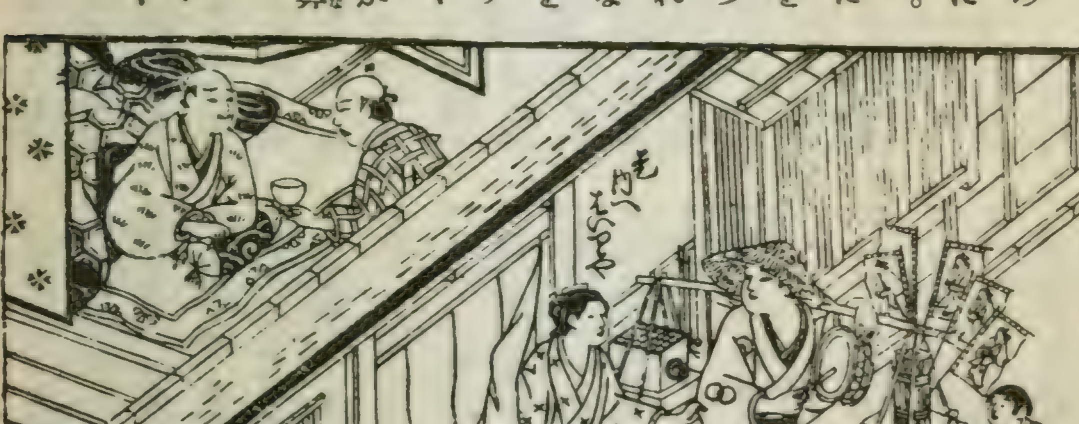
をかり、滅法界にのぼりしが、佐田の天神前にて上から來る駕籠が、替ではないかと詞かくれば、駕籠のもの何處へぢやと問ふ。ハテ京橋へぢやといへば、そんな嶋な者は米の安い時もいやぢやと、かぶりふるを、雀げんこ打て替るに極め、旦那様おりて下されませい。爰迄とほりましたに、ちと御合力賴上ますと、歎きをいふを、不便におもひ、つまみ錢をやつて、替駕籠早うもつて來いといへば、小腰かゞめて、何も駕籠に御ざりませぬと、少しの事にて悅び、先の人をのせ替て、大坂の方へ行ば、上より來りし駕籠は、乘手の男、合力せぬと見えて、駕籠から打明るごとくにして、扨々きたない奴かな。すこしの增もくれずに、其身は何を喰ふやら、牛のやうに肥てをつて、肩も背もたまる事か。あんな奴が駕籠かきの油盗人といふものぢやと、物憎さうに、跡からにらみ付、さあ旦那めしませと、駕籠をなほす。新助のりさまに駕籠の中を見れば、封じ文一つあり。是は最前上から乘て來し、旅人の取忘れし文成べし。呼返して是をやれといへば、中に銀さへござらずば、狀一つやなどは忘れをつたら大事か。其上もはや尻影も見えねば引さいて捨給へと、いひさまに、肩を揃へて舁だす。新助是非なく、此狀を開き見るに、十兵衞殿下られ候に付、一書中入候。彌御無事に御勤珍重に候。我等事昨晚上下共に息災にて致歸宅候。然



ば茶入の繕、留守の中に出來候て、此方に請取置候。近日春日膳指下候時分、一所に遣し可申候。將又此度大和廻いたし候て、岡寺より、多武峯へ參り候道に、安部と申所の里はづれに、草堂有レ之連衆のどをかはかし立寄茶をもらひたべ申され候。其茶碗今上方に賞翫致候、三嶋茶碗の、しかもころよきにて候故、いかさま何ぞ掘出しもあるべき所と存、うそ〳〵見ありき候所に、佛壇の間の腰張、勝手口より三枚目の反古慥に定家の三首物と見申候所、少も違あるまじく存、早速住持にもらひかけ可申存候へ共、連の内に、まんがちなる欲仁候故、態其分にて罷歸候。此度引返し參可申存候へ共、下向仕間もなく、又罷立候事も、近所の手前家來共のおもはくいかゞに候故、我等は參不申候。貴殿急に彼所へ參られ、住持の氣のつかぬ樣に、少銀にてもらひ被申候樣に、才覺可被成候。尤欲の世の中、此十兵衞殿などにも、沙汰御無用に候。此方にても、何の義も不申候。急に御越可被成候。慥雷の岡などゝ申、古所の邊かと覺申候。道具屋太郎助殿まゐる。同太右衞門かと、讀もはてず是天の與ゆる福と、心をしづめ四五遍繰返して、よんで見る程うまき事也。先押戴き懷中し、扨駕籠の者共にいひけるは、我大坂に用ある事を失念して出たれば、是より立歸れば、汝等には隙をやるぞと、駕籠をおろさす。駕籠舁共は、はれそれは御太儀なと、笑止な顏はすれど、から身で歸るを悦ぶ。新助はそれより、一さんに宿にかへり、妻子のなき身は心やすく、俄に市をたてゝ、諸道具殘らず賣拂、何か取あつめて、金十壹兩貳歩を腰にひつつけ、家主に暇乞ひて、すぐに件の草堂へ尋行、品よく住持にもらひかけて、金子拾兩相渡し、二色の道具を取て、又大坂に立歸り、伏見町の道具屋へ、三嶋茶碗を金五枚に賣離し、扨定家の三首物は、京へ持上り、表具をいたし、上京の有德なる、茶人の本へ大分の銀に替て、一夜撿校のごとく、よい身となつて、しばらく西寺内に宿をかり、一兩年は色事やめて、掘出しを心がけしに、必よい時は、するほどの事心にかなひ、二年半と申秋の比、五千兩といふ小判の數になして、古郷なれば難波に歸り花、錦をかざりて親の住れし、本町の屋敷を二双倍で買戻し、今ははや浮世小路の遊び駕籠に乘ても、あまり人に笑はるゝ程の身でもあらずと、女郎狂ひの心ざし頻なりしが、よく思案をめぐらすに、五千兩の幅にては、太夫にかゝつて見事なさばきと、いはるゝ

程にはならず。せめて一万兩の身躰にならでは、太夫を買てもをかしからずと思直して、それより北濱の若い者と組で、米事に掛りしが、仕合のよい時は吹付る風空に、思ひの外のあがりを得、遂に願の如く、一万兩の身躰となつて、さあ今こそ大臣といはれて、四つ橋を幅びろにありきても苦しからず。あゝうれしやと、四五年張弓のごとく、引張たる氣ゆるみしより、俄に煩出し、樣々醫療をつくせ共、年々氣を煎へらし、心虛といふ病の由にて、幾薬與へても、いかな／＼露程もきかず、次第／＼におもりければ、新助泪を流し、さりとては悔しや、是程短き命としらば、五千兩の時、くわつと遣うて仕舞べきに、無益の金をためて佛くさい吊事に捨てのけんこそ、かへす／＼も悲しけれ。我生れてより以來、伽羅くさい　もしらず、三つ蒲團の上に枕もならべずして結構なる夢を見ずに、此儘死なば、閻魔の前にして、見る目嗅ぐ鼻といふ粹に出合、汝々前生にて、草津の姥が餅をくうたか、太夫と床入したかと、必とはれん其時しもせぬ僞をつかば、鏡にかけてあらはれ、掛替もなき下帶をはづされ、後の世に恥かゝん事、なんぼう無念の至り也。せめて息の通ふ內に、女郎買ほどの器量ある養子をせばやと、手代共に此趣を語れば、いづれも愼んで承り、御養子をなされなば、幸堺筋の甥子樣か、平野の從弟子然べしと詞を揃へて申上る。いや／＼汝等が思入、我に違へり。甥も從弟も、太夫を自由にするほどの器量なし。然れば我存念を達すべき樣なし。唐土の堯王は、九人の皇子をおきて、舜の太子に立給ふ。たゞ何者にもせよ、分知とそれしや共にいはるゝ程の、器量者を養子とし、親まさりといはせたし。是我願ひの一つなりとて、廣き大坂中を尋しに、茶碗燒出す、高原といふ所に、風の神と相住して、新町の名ある、太夫天神の姿を紙のぼりに畫、其身は古き破編笠をきて、橋々をもつて廻り、さあ／＼丹波屋の小ざつま、明石やのもろこし、あづま、むらさき、かづらき、吉田、瀨川、奥州、小琴が、にがみのはしつたを、古釘にかへませう／＼と、子共たらして其日おくりにする男、どうでも色知の果なればこそ、あの身になつても、女郎の事は忘れず。昔をとへと、呼入れて、始を聞に、難波津に我よしあしは御存知の事なれば、つゝむに及ばず。讓を請取てより、宿に一夜もねずして、新町に通ひ詰の男。太夫の金吾になづみて、算用なしにつかひすて、今此躰と、はづかしげなく語れば、新助

枕をもたげてさりとは奇特な男、是こそ色神の引合と喜び、則養子と定一万兩の金を、殘らず讓りて、終に其身は過行ぬ。紙子大臣思ひもよらぬ跡をしてやり、遺言にまかせ、再び新町に通ひて、時めく太夫に、灸の蓋をさせるほどにしこなし、諸分知と末社あがめ奉り、女郎もかた樣ならではと、僞りさつて、眞なる心ざし固り、御腹次第に嵩高になつて、道中するも見苦し。願はくば此里出て、お屋敷でお子さま産ましたいとの訴詔、大臣聞とゞけられ、吉日を見て根引にすべき企、諸事八百兩で埒のあく事、近ごろ心やすき儀と、お敵の悦び大方ならず。里の住居も今二三日、太夫に名殘の盃事、揚屋一家罷出、さいつさゝれつ、妹女郎禿迄、あやかりませんと喜悦の酒盛賑なる最中に、此世をさりし新助が聲、天井に音して、あの女郎請出す事無用〳〵、腹なる子は、西横堀の、四の二といへる間夫の男が種にして、汝が子にてはなきぞ。切々中座して用事かなへに雪隠へゆかれしは、厠屋を名代にして、柴部屋へはづし、此子種をつきいれられし、古い仕掛をくふのみならず、ね心のわるい女郎を請出し、身二つになると作り氣違になつて、汝にあかれ、間夫の四の二が方へ立のかんとのたくみをしらず、鼻毛をよまれしたはけもの。それ程のうつそりとは知いで、養子にせし事冥路の障、くやし〳〵と姿は見えず、聲ばかりしてうせにけり。



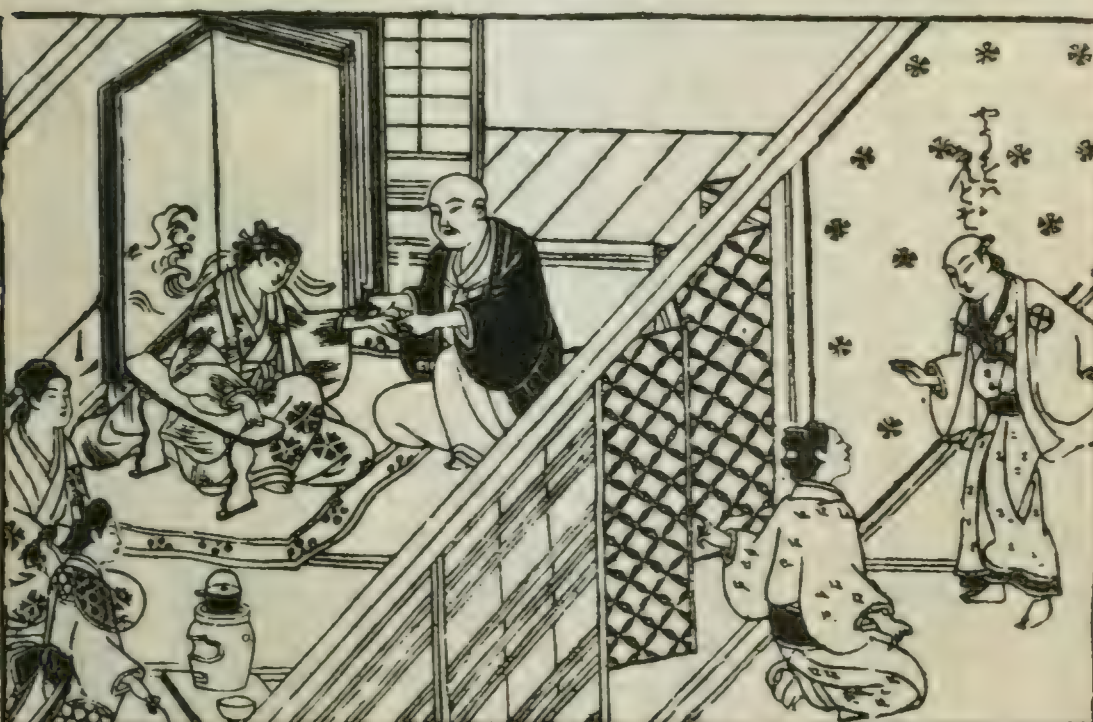
一座の者共肝をつぶし、あきれて空を見れば、女郎は赤面しながら、ちか比悪功な幽霊ぢやと、天井を恨めしげに、見あげられしは断〳〵

第五　梅に名の鳥が啼東路の別

男にも血の道の煩ひ
戀に目まひ心

色里の商賣、年中抓取もあるやうに思へど、各別あはぬ客あり。たまさかに鹿戀ひとつ買男、二三人つれだち、まだ虎屋の梅花の油見世も、出さぬ時分出立ぐらひで揚屋に行、三つ取合のなんばん菓子を、一人に壹斤あてにあらし、木枕鞁に番うたひ、腹のへるをかまはず、中食に切麦、程なく夕食夜食、殊更云合したやうに、いづれも上戸なれば、中酒から汁椀で見しらし、納めまで是で廻し、鼻紙いれば、女郎の廷用捨もなくつかひ捨、たばこ盆のたばこ迄、打あけて取て去ぬる客にも、宿の習ひにて、花車が二度程も出て、是は手繊でござりますか、其まゝ絹のやうなる、碁盤嶋をめしましたと、輕薄いひける。諸事丸取にしてから、揚屋の取が七匁ぞかし。是ほどあはぬ者はあるまじといへば、是尤かなやの金五郎、息災で居し時、罷出て申は、是よりあはぬものあり。それは何ぢやときけば、野郎の病中と申す。それこそしれた事、商賣やめて居喰にする事、野郎にかぎらず、知行とらぬ程の者は皆あはぬ筈也。まそつとよい事を申せと打こめば、是はいづれもの聞やうが悪し。野郎の病中には、日比目をかけて、不便がらるゝ大臣ほどあはぬ者也。そのゆゑは、常に子共心になつて、愛らしい事のみして、かはゆがられた若衆、病中には白粉けたえて、赤みがちなる頬髭生出其儘嶋ものを見る如くなれば、姿を恥て誰人にもあはぬといふ。それは其筈なり。色を賣身は其心掛尤ぞかし。高嶋やのあづまぢ、十死一生の時、凡夫の昔より不便がられし、半風といふ大臣、病中五十日余、雨の夜も風の夜もかゝさず、一日に三度づゝの見舞、薬の様子食事のすゝみ様〳〵はしく尋、今一度の本復を諸神へいのり、庚申へ裸参の代参をたて、住吉へ命乞の庭神樂を参らせられ、身をなげうつて祈られけれ共、次第次第に頼み少き由、遣手が告げゝれば、一生の暇乞に對面すべき由、太夫方へいひ入給へ共、いかな〳〵此世を思ひ切て居る上は、どなたにも御目にかゝる事致さず。かさねて申届くるなと、さりとては心強き言分。妹女郎引舟遣手

の久米迄、口をそろへ異見申けるは、お馴染多き中に、半風様ほど誠ある御方はあるまじ。御氣色悪きとて、引こみ給ふ日より今日まで、五十日あまり一日もかゝし給はず、毎日三度の御見舞に、逢に一度もあはせ給はぬ御事、あまりと申せば御心強き仕方。夢ばかりあはせられ、亡き跡の事共、又は兼てお咄しなされおかれし、お袋さまの事迄も、ぢきにお頼みなされおかれなば、いよいよ御不便に思召し、何かにつきて宜しかるべし。ひらさら今日は御對面あれかしと、すゝめ申せば、さら／＼そなたの思惑とは、大きなる違あり。今半風様のその如く、我事を大切に思召し、御心をつくさるゝも、我身息災なりし時の姿を愛し給ひて、思召し忘れ給はぬ故也。然るに今かく、病つかれ衰へたるを見給はゞ、興さめて戀を醒し給ふべし。惣じて色を以て人にかはゆがらるゝ者は、色衰へては愛うすくなる事、常の人心也。あひまして戀を醒させんよりは、あはで死なば次第に思召し出て、一ぺんの回向にもあひぬべしと、つひに逢ず惜や勤ざかりに、此世をさりて新町に花なき心地と、行人袖を濡しぬ。をしきかな情あつて、大氣に生れつき、風俗太夫職にそなはつて、衣裳よく着こなし、一座にぎやかにして、床しめやかに、取入程よい事多く、名譽思ひを殘させ、別るゝより早かさねて逢ふ迄の日を、いづれのお敵にも待兼させ、末社共



にも有難き御言。何かにつけて此君ならではと、此里へ来るほどの者思ひをかけぬはなかりき。ある時九軒の住吉やにて、木五、朝原、柏正といへる、今出の三大臣、東路、唐土、八重霧、三太夫に手をそろへて逢奉り、毎日のさわぎ。木五がつれし末社は作政とて、黒菊石のきんか頭、しかも脊短にして、片足少し長く、何にひとつ取得のない男なれ共、恰好の人に替りてをかしきと、頓瓢な上るり語るを興にして、いつもお供につれらるゝ。扨朝原に附従ふ太皷持は、白髪町の留平とて、厚鬢にして、色白く、聲よく端哥の名人、女のすく風にて、殊更鼻の高い所僞りなく、口拍子のきゝし若者。其外の末社は、西の芝居の囃子方一兩人打まじつての酒事、楽みといふは大底の事、罪も報も、女房子の事も忘れはてゝ、面白がる中に、留平は此内の君達に、戀すると見えて、馬刀の吸物喉を通らず、思ひに胸を苦しめる躰。唐土さとい女郎にて早速氣をつけ、密にさゝやきしは、汝戀するを見うけたりといへば、留平横手を打て、扨はあらはれて恥し。此いつの比よりかかた様の御事を、思ひそめましてと手をしめる。唐土大笑して、鼻も動かさず、ようも〳〵ない事をいへる男め。我に執心僞りなくば、後とはいはじ、只今御心に従ひ奉る。そんな事は今から五六年も、此里の門松を見らるゝ、素い女郎にいはんしたがよい。泣ずに男に



嬉しがらする程の女に、いかな〳〵ぞんじ共よらぬ事。其方の思ひ人は、鳥が啼方といへば、天晴見どほし〳〵。その東路さまになんとも成ませぬ。せめて此事通じてなり共あらば、又いつぞの時節もあるべき物をと歎く。それが定ならば、神ぞ此戀我等請取、明日の別に、腹痛むとて殘り給へ。お敵へはよきにいひなし、あはすべきと請合給へば、うれしく、今の世の深き情知さま、此君七代まで太夫冥加あれと、心中に願ふもことわりぞかし。爰に作政は、晝から浮々共せず、日比嫌ひの念佛を口の中にて、ぼち〳〵と申て、好物の酒も、のむ顔して打あけけるを、大臣御覽じつけられ、作政が今日の風俗まだ間のある大晦日を案ずる躰と見ゆる。近比小氣成男め。廿ばい迄は此はなが合力して得さすべし。心安く春のきた心になつて、さわぐべしとの御意、有がたく、旦那は晴明はだし。ざつと是で重荷がおりましたと、一花は騷ぐやうなれ共、又じみ〳〵とめいりて野邊へ近づく罪人のやうに、投首して、片隅へよるを、八重霧立品に、肩を引て勝手口に招き、そなた東路さまに惚れたと見請し、我目は違ふまじ。さもあらば只一度の首尾は、命にかけて取持べしと、深きお心入。とかうの返答は申上ずして、すゝり上げて男泣にないて、茶小紋の袖をひたす。八重霧いよ〳〵不便増て、しからば大臣御歸りの時分、心地あしきとて跡にとゞまり給へ。何とぞ思ひ人に頼みまして、心よくあはして參らせんと、殘る方なき御心入。わたもちの愛染さま、まはり遠き勝曼のかねの緒にとりついて頼まうよりは、君が紅の內衣の紐に、頼みをかくればすむ事と、挑燈掛しを悔みぬ。かくて二人の惚手共、互にそれとはしらず、心々に明方を待て、此いつよりか戀つみし、胸の思ひを此曉に、はらす事よ。此ごとく病人に藥がまはれば、死人はなき世なるに、人皆戀に殺されけるよと、仰にまかせ二人は、俄に作病をおこしける。連られし大臣は、此內證夢にもしらず、何があたつたと、問せらるれば、留平は宵にたべました、蛸の手が胸に横つて、太皷持ほどあつて、腹が張て痛と申。今日の料理に蛸はつかはぬがと、亭主不審さうな顔すれば、何ぢやしらぬが、やれ腹を引さくはとうめく。其爲にこそと、柏正が連られし道鐵といふ飛上りの針立、懷中せし針を取出し、片手に槌をもつて、腹の虫を殘らずたひらげ手並を見せんと、酒機嫌にわめいてかゝれば、留平は驚き、むまれついて

針がきらひと、勝手へ逃入。作政は何とした、宵からうかなんだがと、木五懇に尋らるれば、頭痛が致して、欠伸が出て目がまふやうで、どうやら死ぬるやうでござりますが、てつきり血の道でござりませう。あゝ目がまふ〳〵と、にえかへる。内儀心得て、俄によい茶をいれるもをかし。道鐵ぬからぬ顔して、血の道は若衆にこそあれといへば、それは痔の道の事ならんと、笑ひ立にして、太夫達にいとまごひ、兩人の病人を宿の男にあらまし頼むとあつて、捨ていづれも歸り給へば、八つの鐘より夜明迄の樂み、大分なりと悦事大方ならず。唐土八重霧は、面々に頼まれし、戀男共がおもはく、詞に品をつけ情をこめて東路に我事なげくやうに頼まれければ、東路は二人がわりなき心ざしを聞て、昔生田川に身を捨し貳人も、一人の女をおもふからの戀死、思へばいづれをいづれといひ難し。しかし留平殿にあひます事は、もしもれ聞えて、世の人の譏いやなり。是はふつ〳〵思ひ切て貰ひましたし。作政殿事は、思ふ子細あれば、竊に今宵斗はあうて進ずべし。八重霧さま案内にて、追付我床へ政殿忍ばせ給ふべしとあれば、唐土むつとした顔にて世の人の譏を思召さば、作政にあひ給ふも、留平にあひ給ふも、名の立は同じかるべし。とかく取持手による戀はいとくちをしと不興して立給ふ。袖を扣へそれは太夫共いはれさんす、こなさまには似合ぬ不水なる御事。留平殿は器量よくして、女のすく風、我身とてもいやならず。その方にあひましては、此首尾しらぬものは、此方から好であひもせしやうに仇名たてられては、せつかく情知て、あうて進ぜた甲斐なく、いたづら者のやうに、取沙汰せられんも、言譯むつかし。又作政はぶ男にして、しかも女のいやがる片氣。それも大臣ならば、欲で逢た共いはるべけれど、太鼓の身なれば是以て其詮なし。男ひでりはせまいし、あの男に限りて、女郎の方から、好であふとはいはれまじ。たゞ戀のきかぬ男に、あうてやるが情なりと、唐土にもうなづかして、夢斗の契をこめて、此世の思ひ出をさせてやり給ふ。深き戀しりと、過行給ふ跡の跡迄、其名高くをしきは此君

第六 梅の匂ひ吹わたる大橋

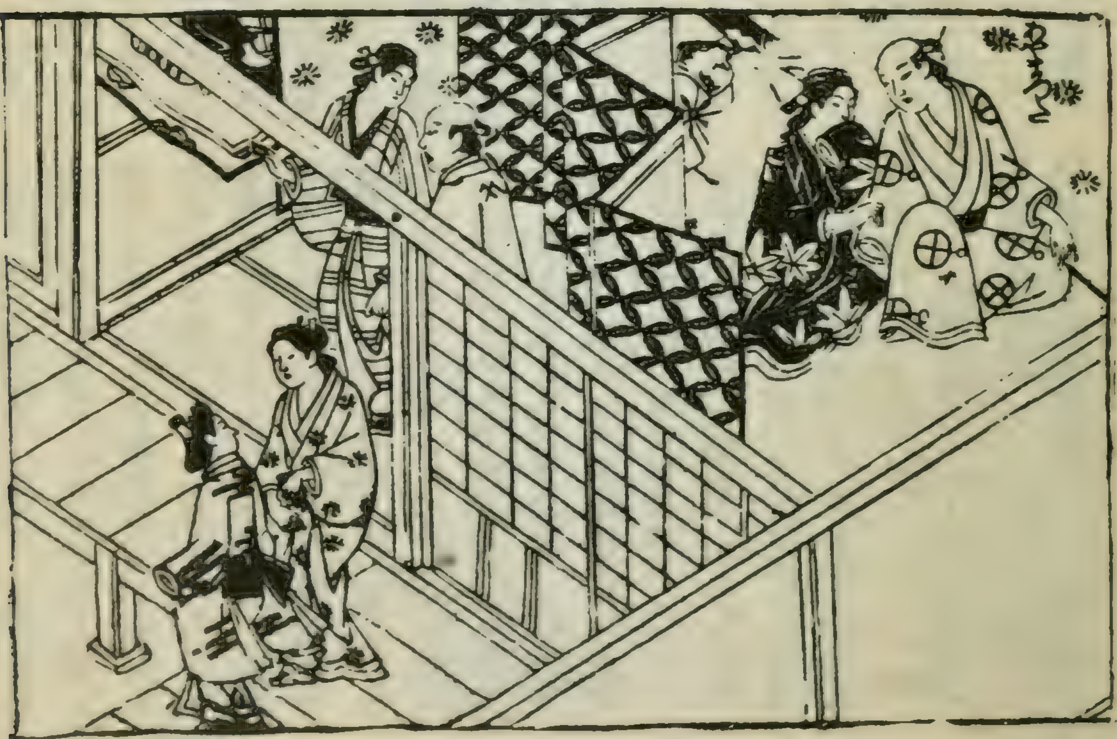
戀は外になつて
色宿はうそのつき所

平家の二番ばえ宗盛といへる本の大臣六條通ひの心ざしはあれ共、第一の太夫職祇王祇女は、親父手池にしてかよ

はれぬれば、少しさしあひをくりて、是非なく穢ぜゝりにかゝつて、揚屋狂ひをせられしが、其比のしだしとて、千枚形の肌着黒羽二重にかくし裏、同黒羽織に、平といふ古文字の大紋、上繪なしにいたらせ、袴高く裾取て、大小よしやがゝりにぼつこみ、朧富士といふ大編笠ゆたかに着て、懷紙も延は女めくとて、小菊の五折、爪楊枝をさしこみ、奉書の反古包に、名木厚割、鼻紙入はさもしきとて、つれたる散切の禿に入させ、ゐんでんの横ひだ、金岡時代の筆捨松の高蒔繪の平印籠に、袋打の長緒、あまかはの二つ玉、廿六夜の瓢簞根付も更にをかしく、踏捨の桑染足袋に細緒のわら草履、鵜野葭の細杖、けしやうについて、喜三太といふ小者に、紫しぼりの風呂敷に、替着物楊弓の道具を包添、替雪踏逆手に持せ、踵にて尻をたゝくほどに足をあげて、ひん〳〵とありかせ、難波瀬尾といふ、至り末社をつれて六原の門口より、斗鷄仕掛の人形の歩くやうに、煉りだし給ふを、其時の若男、六原流とて是を學びぬ。よく内證知りし者のいへるは、宗州も今大臣顏し給へ共、あれはもと清水坂の傘張の息子なり。いらざる盛をやつて無用の奢、追付内證は、ない大臣となつて、終には八嶋の破れ口にあはるべし。惣じての浮氣男、我より上手な人のする事を學びたがれ共、ある袖は振よく、ない袖は體の惡さ、木綿羽織の胸紐



しめたは、窮屈さうに見えて見苦し。天窓の物ずきは錢のいらぬ事とて、一年に二度ほどづゝ、置て見たり剃さげたり、撥鬢厚鬢糸鬢とさま〴〵にかはれ共、替らぬものは日野の一つ着物、心は至れ共姿を至らず、櫂がまはらねば沖漕だ事もならず。冬氣は有にまかせて夏の中ほどより、身のまはりの物好、先はいやな所有。粹素男に限らず、帷子は紋付の薄淺黄に極まれり。いづれ淺黄に黒羽織きる人に、草履取のなきは、結構な振舞に、後段のなきやうな物にて、跡の淋しきものにて、やすう見えける。是でも其心には、大臣とおもひ、位をとつて、過ぬ酒に醉の醒る藥たべんと、紙入あけて、ねぢ袱紗取出し、一跡に八九匁ある小銀の中へ錢壹貳文入れて、人には壹歩の音ときかして、がらつかせ、今朝も浮世小路の五郎兵衞が嚊が、平産いたせしに、はや一角ねぢられたと、人聞よいせんしやう。羽蟻のわく我家の門柱は取かへずして、まだ新らしき、柄頭を巻なほし、年忌前に、持佛堂の障子の破れしは張ずして、夜ありきの盛に、挑燈はさつぱりと張かへ、しかも我あふ女郎の定紋を付て、よろこぶ心にあらでは、色狂ひおもしろからず。いかさませんしやうやめて、僞つかず、二日寄合に町衆と物語する調子では、中々遊女狂ひをかしからず。せんしやうと、うそつくでもつた色遊なり。大臣は死れたる親父を世にあるやうにいひな



し、是さへ仕舞てやつたらば、鎰請取て其時こそ、きつさりと物の見事な、さばきを致すでござる。それ迄は手の届かぬ所を堪忍といへる。女郎は無事で碓挽るゝ母親を殺し、隙があいたらば一日成共、世帯を見せて悦ばしませう物をと、不断仕掛の泪ほしき時にこぼす。雨乞に此人頼まば、はした銀つかふ百姓も世の中にあふべし。耳訴詔に大臣聞かね、石佛代とて、金子五兩はとりもなほさず、七月前の小拂となしぬ。今時の慰み、座敷うつかりとは遊ばれず。遣手が近よれば、此程宿をもつたる移り聞て、無心をいはぬ先に此方から、追付家見に參るぞ。四つ橋に大分薪買置しに、木棚は拙者承ると、しかも束木三荷持賃共に、八匁貳分五リンが物にて、嵩高に見せ、太鞁末社が近づけば、汗はかけ共羽織をぬぎおかず。不断兵法の師をする人ほどに油斷なく、心がけねば、女郎狂ひもならずと、惡賢き男の粋顔して、手下の若い者に語るを聞て、近比の御たはけ也。銀つかふて氣苦勞せうよりは、銀つかはずに用心のよい、家内にました事なし。大臣と色里で稱美せらるゝほどの身ならば、少し鼻の下の長いこそ、壽命藥なれ。高が世間へ出ぬ遊び所なれば、利口ばつた方より、氣のつかぬといはるゝほど大樣ながよかるべし。色遊びには銀を出し、談合事には智惠を出すべし。必ず内證の薄い大臣が、万に賢だてをして、末社が言葉の先を折て、皆迄いふなと、早呑込んで先ぐりをいたし、骨牌の場で手目させぬやうに、八方へ目を配つて心を許さず、氣骨を折て何か慰に成べし。おのづから遊びもちひさうなつて、をかしからぬ事のみ多し。爰に家財かけて三拾壹貫五百目の大臣、北濱の根強い名題男と、同じやうに連立て、毎日新町へ通ふ千鳥と替名ついて、淡路町に隠れもなき、せんしやうものありて、名題の男共が上に立ん事を思ひ、万事嵩高に出けれ共、高が三拾貫目内外の身代と、いづれも見透して、是にさからふ事なく、何につけても下手になつて、心の中でつもつて是遊びの外の慰と、影にてひそかに笑ひぬ。ある時千鳥が申は、何とやら羽織の長いも醫者めいて惡く存、頃日拙者物ずきにて、仙臺嶋の羽織を、成程短くいたし、此里へ着て參つたれば、はや大坂中の若男共が、殘らず羽織短う致した。諸事に味な思ひ付をいたせば、どうしてしる事やら、早速世間へひろまり、にせらるるに困りはてると、此類のせんしやう、毎日二三十度も申出して、一座の痞を

おこしぬ。其中に頼田といふ、家數持し法師きゝかねて、惣じて我身一つの體を飾るせんしやうは、致してからが高のしれた物ずき、たとならう事ならば、家買せんしやうをして見度物とうちこまれて、是にはさすがの千鳥も音をいれて、片隅へかゞみぬ。此頼田といふ法師幼き時、都新在家の、庄兵衞の婆々の本に養はれて、成長し、當世男となつて、長崎の鹿といふ大臣と前の吉野の花を爭ひ、終に鹿に手折れ、此里も面白からずと、京をすてゝ難波の古郷に立歸り、生國なれ共つひに新町を見ぬ事、我ながらあまり成せんさくと、一元二元三元四元とて、都より召連られし四人の末社共に、同じ紋所を付させ、いづれ甲乙なしに、身を當流に拵へさせ、九軒に出掛井筒屋が廣座敷太夫は大橋、其外天職あつめて、無性騷ぎの亂れ酒。宵から更ゆく迄呑明されて、前後座のさめる事なし。頼田物ずきにて、四元の喜八といふ太鼓に、子細を申きかせ、態と大橋にあはせ、　様子を見たし、　首尾は仕るなといへば、それは幸ひの事なるが、我等の仕掛に　といふ事なし。其時は中々せずにはおかれじといふ。そこをかんにんする替りには、京にて抱し、妾の小るゐに、貳百はいつけて汝にすぐにとらするがいやか。それならば無分別おこる所をおしまげて、是非に堪忍仕るは欲の世の中に、喜八一人には限らずと、大笑して、床は大臣の身に替り、太夫に戀の山峯迄のぼらせてから、私は末社分こなた様の大臣様には勿體なしと、よいはまらせ物、ひとつはお慰みにも成ます事と、おの〳〵内談かため、その通りに申渡し床をとらせける。大橋は、今宵の客達の出立、いづれも一様に揃着物なれば、此内に末社の紛れ者あるには極れりと、氣をつけて見れ共、十二人の作り山伏の中、判官殿を見分かねたる、佐藤が後家の如く、いづれを大臣、いづれを末社と見極かねて、禿のしゆんに、何やらひそかに申ふくめて、身拵へに勝手へ立れし間に、禿喜八にさゝやきけるは、太夫様にかくれて、お伊勢様へ參ります。お初尾の小判十兩、御沙汰なく下されませいといふ。喜八喫驚して、それは我等がまゝにもならぬといふ。爰をいはせうとて、太夫智惠を出し、しゆんにさもしき事をいひかゝらせ、大臣でない所を見出し、此事太夫にしらせ、段々覺悟させて床に入ける。喜八首からつようもつて參れば、中々當所ちがうて、太夫めつきりとおろして、いふ程の事

を消てゆけば、首尾をかしくなつて、喜八身をもだえ口舌をしかくるに種なし。なづみてかゝれば、僞にしてさらに請ず。どうも了簡つきて、むく起にして床を出る。大臣聞付、大橋寢間に入て、何とあるもしらぬ事ながら、京からの執心なれば、是非にあしからぬやうにと頼む。太夫此男の袖にすがり、それ程に思召さば、今宵の御しかたさりとては恨あり。うかと心得てあの男に首尾せば、私の一分立がたし。かた様の戀もすたるといふ物で御ざります。つとめの身程あぶなきものはなし。神ぞ／＼性惡大臣といへば、頼田大きに驚き、今は爭ふ事ならず。何として此仕懸見付給ふぞ、許し給へと、しらけて此、無理共に　かゝば、いかにしても先の女郎の手前あり。明日からはお心任せといふさばき道理に極めける。喜八は中にぶらりとして、おちつく所なく、燈火のもとに淋しく、音を聞て、無常を觀じ、夜もすがら、物おもふ比はあけやらぬと、百人一首の哥など思ひ出る所に、定家といへる女郎、深き分知なりしが、爰を了簡して我さへ堪忍すればすむ事也。いとしや男と、喜八を床につれ入て、我身かくあるからは、何の子細なし。今宵からあひ給へといはれしを、すこしひけたる様に思へど、是賢さ余つてのさばきと、各々ほめて、此首尾珍しき始なり。惣じて女郎、男を商賣にしながら、人のほれたといふ事をうれしがる例には、喜八定家に自然と心かよひ、日の暮まぎれに勝手へついて立、ちつと鼻の邊をなめおきしが、今の便りになりぬと、大笑ひにおもしろき夜も、あけてのおかへり。また近いうちにや

けいせい色三味線　目録　江戸之巻

第一　月にも増る鼻の先見
色もてりそふ江戸髪切
折しも釈迦の涅槃の涼み
着物は巾着のわけ[illegible]
おやめの名のおもかげ姿好

第二　月にも花に気の毒
ふりもふつゝか者の敵
のりかゝつてもうらみ[illegible]
息は外にまわつて[illegible]
づめの身請

第三　月より上にある桜
若衆の噂は三弦とかん[illegible]
花より男の色[illegible]
重宝たいんぐり[illegible]
らうさい大臣

第四　月に勝る琴の三味
かけひとつの上の絹
[illegible]
二度か手形[illegible]
ふりさき海[illegible]大臣

第五　月に浮雲かゝる情
身請の後の末より名取
むく[illegible]
かゞみは小倉山[illegible]
かとうね小あみ

太夫并女郎名よせ

▲太夫の部

○京町三浦四郎左衛門内

一 太夫　高尾　去秋身請

一 太夫　うす雲　去冬身請

一 太夫　こむらさき　此三人

○江戸町巴屋三郎兵衛内

一 太夫　小川やま　壱人

○角町山口や善左衛門内

一 太夫　おくら　壱人

▲格子の部

京町三浦四郎左衛門内　一みやこ　一しきぶ

一かしう　一わかな　一あふぎ　一こよし

一とよの　一みよし　一みどり　一さくら

一まつ　一あけまき　一ゑんしう　一いはほ

一ちとせ　一かしう　一しほぢ　一ちとせ

一はるぎく　一ときわ　一さつき　一やよひ

一さくら　一花さき　一よしの　一あふみ

一せきや　一あふみ　一まつ山

同町三浦屋三郎兵衛内　一うらなみ

一たまの　一はつしも

江戸町巴屋三郎兵衛内　一いさく　一たかを

一ちとせ　一さつき　一玉河　一はつしま

一玉川　一あふみ　一みよし　一ゑもん

一わかば　一玉川　一つしま　一あさま

一かほる　一たつた　一かつらぎ　一あふみ

一大かう　一なみ川　一よしざき　一あさぎ

同町長崎や平左衛門内　一おさと　一あふみ

一あけぼの　一わかの　一おの　一つまの

一うきふね　一かしく　一はな山　一みちのく

一おはる　一しのぶ　一うすぎぬ　一くもゐ

角町山口や善左衛門内　一大夫　一格子はじめ

同町ひしや六郎兵衛内　一よしの　一その

一よしざき　一さく　一かほる　一ゑつぜん

江戸町山口や与兵衛内　一まさき　一たかを

一むつき　一さつま　一絵島　一ちとせ

一あさま　一大とみ　一おとは　一おふさ

一はつね　一くもゐ　一まつさ　一やよひ

一のせ　一花さき　一あさぎく

二丁目車屋十左衛門内　一小太夫　一万太夫

一あさひ　一夕ぎり　一かよう

▲さん茶の部

角町近江屋市兵衛内　一ときは　一たかを

一うちはし　一ひろお　一さんよ　一まつ山

一いこく　一万太夫　一ときは　一こむらさき

一中将　一かほる　一おとは　一ことわり

同町三河や平兵衛内　一ていか　一かしう

一こむらさき　一あさぎり　一山ざき

一あさ川　一うかね　一せん　一ちとせ

一ゑんご　一しら川　一ちとせ　一花さき

一ときは　一金太夫　一さんご　一はる

同町山口や善右衛門内　一うきふね　一いつ（ち）

一たかせ　一わかやま　一志がさき　一市川

一うこん　一花月　一小さつま　一あさま

一いなさき　一長竹　一金てう　一玉かつら

一ゆう　一かなえ　一ひろの

同町くら屋十兵衛内　一花月　一こつの

一ゆうこ　一さくさき　一かるい　一せい川

一やまと　一花ゆふ　一みなと　一小仁

一わかさ　一うらひち　一あふぎ　一小柳

一花むら　一中将

同町吉野や庄兵衛内　一たかさき　一より　一わか

一むつ　一あやめ　一川　一志の　一わか

一よしの　一ていか　一よし川　一わかさ

一あさま　一山ぶき　一志川

同町ひしや太郎兵衛内　一うこん　一うきふね

一おの　一こよさく　一まつ　一山ざき

一さくら　一金山　一しらやま　一三河　一もみぢ

一こよさ　一すみ

同町大和や七右衛門内　一よし　一おさう　一小太夫

一万太夫一なゞと一みちのく一よしの
一うきさき一いま川一まつまつ一た原夫
一志げ川ま一小川一わかんど（花ひく）
同町　ぢや万右衛門　上　一みどり一さんせき
一いちき一花さき一おのへ一えんゆき
一ちとせ一せんじゆ一ときまつ一みどり
一あふは一さよふも
同町つるや忠兵衛門　上　一あさづま一つま川
一金太夫一小よし一小ぎく一わかまつ
一まつさ一こやこ一あふ川一きよしな
一小ちよ一ひろ谷
同町ひしや長右衛門　上　一せきの一せんじゆ
一さんせき一まつ乃一こせ川一とふのの
一こむらし一せき川一よろゝ一みよし
一こよ川一とふ雪
江戸町花屋八左衛門　上　一花さき一とつよ
一ふくき一わかめ一志のゝ一志げり
一きよの一小原太一よしを一かゝさき
同町三河屋　忠兵衛門　上　一いへお一さ　さん
一さんこ一高まつ一小原太一恵よし
一とふせ一こやま一ひな乃一小ださ一しま
一いら桂一のゆき一まつ谷一ちくいとし
一小かんど一初ぶく一いらく一おのへ

同町やつや広右衛門　上　一ふじ井一きろ橋
一せんじゆ一こはる一みよし一くやま
一ゆふぐく一里恵つ一とりせ一とふ川山
一さ川ま一いへさき一広太夫一いづ川え
同町いせ屋伊左衛門　上　一みよろ一みかさ
一高らく一小ぎく一山ざき一見よし
一ろうを一よしの一ちゝいと一まいさ
一かぢ谷一みちのく一小にし一小やま
同町藤屋吉兵衛門　上　一かわひ一花月
一さんご一とうせ一あさぎ一あの井
一つま川一さくら一とふ花一そめやま
一わかぐ一みちのく一さゝよ一つまぎ
一ゆふぐく一小志きぶ一いづ川（きよ）
同町つゞや六兵衛門　上　一かさん一みよし
一もなり一よるよ一みゆき一はつま
一かつら一小よし一かゞの一もも井
一とつま一とり谷一うく一うきを
一うちむら一右京一山志な
同町黒木や權左衛門　上　一なゞと一山志ろ
一んは出一さくら一あつせ一のさま
一とつま一さつ木一まつ山一よしかつ
一まつ松一せんよ一かやま一いろ
一き花一いへお

同町上　屋忠兵衛門　上　一みよし一たかへ
一る井一いま川一井づゝ一市川
一おのさき一よし川山一花づま一はつよ
一とやま一さ川一せんじゆ一ひとよ
一恵わ一松ま一あさん一えんな
同町まつや長左衛門　上　一うゝ木一あさん
一わきつま一わざり一あつと一かつらき
一あさゝ一いおり一よし川一小かんど
一初ぶく一こやま一やちよ一おのへ
同町大　屋吉兵衛門　上　一とふ花一ふちゑ
一山しな一まつ谷一小よし川一さくら
一志のふ一みよし一さゝよ一さつき
一さかつ一こんはく一まつ一山かた
一まつさ一うきま一あさま一かつらぎ
同町ちくや新十郎　上　一かつ乃一せんじゆ
一こいむ一もま清一こやぎの一まつまつ
一うつせ一まさよ一さぞ谷一やちよ
一さんど一わり一まつさ一ちゝのく
一まつの一まつよ
同町小松屋忠兵衛門　上　一ふじ井一小やま
一よ川一うつき一わかむき一うすぐも
一とふせ一せんよ一あさん一みよし
一もなり一ふち川一いへさき一志きのみや

同町大松屋長兵衛 上 うた松 一まさしま
一松しま 一よしの 一あさま 一みや山
一こゝろ 一まつよ 一いくよ 一つま川
一せんじゆ 一あさぢ 一さわの 一あふみ
同町巴屋久兵衛 上 ときは 一とも
一ようこ 一うきよ 一金太夫 一みどり
一る井 一みゆき 一ときは 一花ぞの
一松風 一世之助 一とき世 一おのゝ
同町たせや太兵衛 上 こそ 一まさ
一わかな 一ちとせ 一井づゝ 一あづま
一みさほ 一さつき 一かざり 一あづま
一みやこ 一さつき
同町みつや市兵衛 上 ちとせ 一ひさよし
一あくり 一さつき 一山ぶき 一山ざと
一わかな 一せい川 一とやま 一世者川
一さつき 一小まさ 一いくよ 一はし川
同町大和屋太兵衛 上 小いづみ 一こざえもん
一かくら 一大さか 一せい川 一みやさ
一小太夫 一ふじ世 一花沢 一おもと
一まつさ 一みやこ 一名山 一さつき
同町中村次兵衛 一わかな 一まつ
一うつま 一うきよ 一玉かつま 一おりま
一おつゝ 一あい川 一若葉 一出来島

一松かぜ 一とやま 一高まつ
同町いせや宇兵衛 上 うきはし 一うすうす
一うつせみ 一ちとせ 一いまさと 一小まさ
一まつさき 一まつさき 一さらく 一うた
一まつ川 一ひさよ 一みちの
同町伊勢屋十兵衛 上 たちはな 一市川
一大かつ 一うすは 一ときは 一角
一竹川 一わかな 一あの井 一大
一ゆふぎり 一みさほ 一小太夫
同町いづみや半兵衛 上 さくら井 一こてふ
一藤川 一ときは 一いろは 一わかんど
一清山 一せい川 一すんよ 一こむらさき
一市之丞 一せんじゆ 一やまと 一しがさき
同町山田屋善兵衛 上 まさとき 一みゆき
一さもん 一いろは 一かをる 一うき世
一市の 一山ぶき 一おのゝ 一さつき
一わかな 一大ぶさ 一つゝ井 一ちとせ
同町丸屋清兵衛 上 みうら 一ちとせ
一ときは 一わかんど 一こつぼ 一うきよ
一よしの 一若葉 一小太夫 一まつか
一万太夫 一せいしゆ
同町角屋治兵衛 上 まつの 一まつやま
一せきの 一まつよ 一まつ梅 一しがの

一金太夫 一なつ松 一よしの 一高尾
一わかやま 一ゆきの

金うら葉の部

同町いせや長兵衛 上 若松 一うきふね
一まつよ 一松が枝 一ちよの 一せんよ
一せい川 一高尾 一まつやま 一むさし
一しらぎく 一川ごし
同町かづや善兵衛 上 よしの 一小ちよ
一うきの 一えんと 一あづま 一こてふ
一うづま 一ときの
同町当や上兵衛 上 まつの 一ときは
一きくの 一いまがは 一さつき 一まつのさ
同町つぢや忠兵衛 上 さくの 一松かせ
一松かせ 一さわの 一たつき 一はつね
同町くぼ屋市兵衛 上 金太夫 一よし川
一こゝろ 一市野 一小太夫
長田町やす屋太兵衛 上 うえん 一わかまつ
一わかさぎ 一小太夫 一まつよ 一しづま
一さもん 一いづみ 一小まつ 一小太夫
同町大和や五兵衛 上 ちとせ 一さつま
一わかな 一やまぶき 一大さか 一さぬき
一ころも 一ことぶき 一のぶ 一ときわ
一うすぎ 一とこよ 一小まつ 一まつかぜ

同町くゞや佐兵衛内　上　くまち一うねまう
一佐しま一小やま一大らく一都久ゞ山
同町なや虎次郎内　上　ちさと一むつ子
一うら元一うらまつ一小保子一まつやま
同町床や権兵衛内　上　おしや一きつ一あ
一松喜ま一万喜吉一きぬ乃一うしわ
一大らく一く世山
同町そう兵衛内　上　もり世一和川
一とよ世一佐しま一ちのへ一玉ろう
一とゆき一ひな家
同町ひしや久兵衛内　上　万喜吉一かうと
一小きつ一とも家一うし米一とやま
一みよの一もり重一あづま一小喜吉
一きち元一とざま一もり世一もろ乃
一ちのへ一りつ一市川一市弥
一もゝぢ一いろざき一うら松一ふつまつ
同町木や喜兵衛内　上　金喜吉一せんじや
一まつよ一さく世一せんよ一まつな
同町真田九兵衛内　上　さよ喜一きち喜
一せんよ一もゝぢ一そや吉一うし米
一ふつさ一ひとの江一和喜吉一つる
同町さうや庄兵衛内　上　うさん一くしき
一よしの一みつ一あの井一まさ吉
一みよし一なみの

同町三浦や佐兵衛内　上　さよ川一やまぶき
一さざなみ一小喜吉一ときわ一おのへ
一せんよ一せんじや
同町山本や太兵衛内　上　さご重一さよ吉
一まつ松一佐しま一おのへ一くさつ
一金喜吉一小喜吉一りさよ一まつ野
同町橋本やお兵衛内　上　玉野一玉ざ重
一のら山一とやま一うきめ一いくよ
一玉川一ちとせ一もり山
同町大和屋久兵衛内　上　さら木一小ちぢ
一大らく一おのへ一あづま一つるよ
一市川一りつ一小喜吉
同町もぐや喜兵衛内　上　いろは一うら元
一市じ一うく山一玉川一あや川
一さよと一小ちぢ
同町吉や喜兵衛内　上　喜吉ま一めへし
一つま一よせ川一さく世一中しと
一小れん一やちよ一うきさ
同町吉や喜兵衛内　上　さうさ一小喜吉
一花喜一和喜吉一市川一わたし
同町木や喜兵衛内　上　さくの一さよ喜
一喜さく一くし山一さち喜一亀まつ
一ちとせ一よしの一こよし

同町みなと屋久兵衛内　上　花ざと一いくお
一さよ見一うら吉一さよ川一うしお
一あ川一勝川一そのよ
同町むらや源兵衛内　上　あの井一よさまつ
一あさき一りつ一うつし一さんで
一いさ重一松しま一かよ一よしお
同町つゞや吉兵衛内　上　まさよ一まつさ
一まつき一小りんと一小川一かのと
一わさり一とこよ一あさぢ一まつよ
一うづま一まつの一せいきう
同町二見や喜兵衛内　上　みな川一みちら
一そめ川一さん久一とよ一うつき
同町久米や花兵衛内　上　わさうま一いくか
一小ゆき一んつる一こさん
同町なや宗兵衛内　上　みや川一うしの
一みや川一やちよ一りよの一いさえ
一うら川一なぐと一さら木一どり
同町くまや庄兵衛内　上　まつやま一うしざ
一うらき一いつき一あうら一やよせ
同町四つや喜兵衛内　上　うさん一いはの
一そのか一まる山一いさ重一いつさ
同町かめや久兵衛内　上　てつい一さよ吉

金五寸唐の部

[illegible]

同町ちくぜんや喜兵衛内　一ちとせ一みつ一お[illegible]

一わり一とし一[illegible]

同町[illegible]や[illegible]内　一[illegible]の一[illegible]

一みやさき一[illegible]川一三の[illegible]

同町[illegible]や[illegible]内　一つ[illegible]よ一まきよ

一いま川一この[illegible]

同町[illegible]や[illegible]内　一[illegible]一まつよ

一松が[illegible]一[illegible]一こかつ一わり[illegible]

同町[illegible]や[illegible]内　一[illegible]一みやう

一まつ[illegible]一[illegible]一とら山一[illegible]

同町[illegible]や[illegible]内　一[illegible]一さ[illegible]

一ひろ[illegible]一うき[illegible]一[illegible]

同町[illegible]や[illegible]内　一[illegible]一[illegible]

一みよ一ひと[illegible]一[illegible]川一[illegible]

同町[illegible]や[illegible]内　一[illegible]川一[illegible]の川

一う[illegible]一[illegible]ちの[illegible]一その[illegible]一やちよ

一あかよ一まつの一よわせ一[illegible]

一[illegible]一み[illegible]

同町[illegible]や[illegible]内　一[illegible]一小[illegible]

一[illegible]川一た[illegible]一[illegible]一[illegible]

一小[illegible]一うえ

同町[illegible]や[illegible]内　一[illegible]一[illegible]

一[illegible]一[illegible]の井一いろく一[illegible]

一[illegible]竹一[illegible]

[illegible]

▲伏見町 [illegible]や[illegible]内 ⊥ ゐはぐ 一せがせ
一すんだや 一いくよ 一まつ[illegible]
同町 いせや[illegible]内 ⊥ まつ山 一まつ松
一ちとせ 一[illegible]のめ
同町 いせや[illegible]内 ⊥ [illegible]ぎく 一あづま
一よし川 一わかぎく 一あふぐ 一いまお
同町 [illegible]や[illegible]内 ⊥ もなか 一かめん
一もんど 一[illegible]つ花
同町 [illegible]や[illegible]内 ⊥ [illegible]しざ 一[illegible]ずえま
一いらく 一かまち 一[illegible]まん 一みつさ

▲三寸の局の部

[illegible]町 [illegible]や[illegible]内 ⊥ つる 一よ 一山川
一西川 一[illegible]川
同町 [illegible]内 一こざらし 一まつ松
一[illegible]む 一[illegible] 一[illegible] 一えんざ
[illegible]町 [illegible]や[illegible]内 ⊥ 小[illegible]つ 一小[illegible]つき
一[illegible]ひぢ 一[illegible]の 一こ[illegible]ん 一[illegible]えんど
一[illegible] 一[illegible]ろ
伏見町 つるや[illegible]内 ⊥ [illegible]山 一[illegible]てう
一[illegible] 一ちとせ
同町 ひや[illegible]内 ⊥ こもんど 一[illegible]しる
一[illegible] 一西川

同町 丁子や[illegible]内 ⊥ [illegible]川 一よしの
一もんど 一[illegible]つる 一わかさ[illegible] おりべ こやま
同町 [illegible]や[illegible]内 ⊥ [illegible]山 一あさつま
一[illegible]ろの 一みよし
同町 丁子や[illegible]内 ⊥ えつる 一かつ[illegible]
一[illegible]るを 一み[illegible]と
同町 [illegible]や[illegible]内 ⊥ 金[illegible]又 一のまき
一[illegible]つき 一[illegible]せ 以上 [illegible]局[illegible]のぞき

▲[illegible]の合 [illegible]
一[illegible] [illegible]や[illegible]内 一同 [illegible]や[illegible]
同 [illegible]や[illegible]内 一同 [illegible]や[illegible]六
同 いづ[illegible]や[illegible]内 一同 [illegible]
同 井筒や[illegible]内 一同 [illegible]
同 [illegible]や[illegible]内 一同 [illegible]
同 [illegible]や六[illegible]内 一同 [illegible]や[illegible]
同 [illegible] 十[illegible]之 一同 いせや[illegible]
合

▲[illegible]合 [illegible]人 [illegible]七十[illegible]
▲[illegible]合 九十九人 [illegible]
▲[illegible]茶合 四百九十三人 [illegible]
▲[illegible]茶合 弐百八十人 同十[illegible]
▲五十[illegible]局合 四百廿六人 [illegible]
▲三寸局合 四十四人 [illegible]

▲[illegible]之局合 四百人 金[illegible]百文づゝ[illegible]
数女郎数合 千七百五十人余
わりまし[illegible]
以上

第一　月にも増る高雄の紅葉

智恵をやめて

一時成共化れ德

月花に心をよする哥人も梅が香を櫻の花ににほはせ、柳の枝に咲せて見たき願ひ、いづれよい事はそろはぬものなり。男はすぐれて然も分の道に賢く、心も賤しからずして、女郎にかけたらば、初會から打とげ、二度めには門迄おくりて、人にもひけらかすべき器量の男は、揚屋に近付さへなく、宵から寢て面白い醉を知らず。又ぶ男にして片言まじりに物いふ親仁、金の威光で、歷れきの太夫に足さすらせ、宿の嚊に酒つがせ、寢ながらのむもあるぞかし。爰を以て叶はぬ浮世と申すなり。されば昔より、風俗器量は嶋原の女郎にして、吉原のはりを持せ、難波の九軒で遊びなば、あつた物ではあるまじと、三ケの津の色里をかけめぐり、色道一遍上人といふ樂坊主、藤澤を越て江戸に下りしに、吉原は淋しく見えて內證の繁昌、とかく金澤山な所故なり。さるによつて女郎の心ざし、おのづから強くなりぬ。すべて遊女は其時〴〵の能男次第にて、一しほ色を增紅葉、高雄は生れついての太夫職風義いふ迄もなし。宿に歸りて衣裳仕替る事なく常也。いかにしても上方の太夫のならぬ事なり。揚屋の昼をつとめ、身仕舞に歸るに、對の禿に三味線を、挾箱の如くにかたげさせて、一行に先へ步ませ、其身は道中ゆたかに、しれる人にも詞かけず、帶胸高にして、身をすゑての足どり、眠れる程靜かに、位をとつて、からくり人形の步行如し。あとぞなへは遣手のこはい奴が、いつとても水へいらぬ布子着て、夕日にまがふ赤前垂かゝはゆきは、太夫とおなじ顏して、練てゆくもをかし。扨宿近くなれば、つれたる六尺を先へ走らせ、門口より高尾さまおかへりと、はやり醫者の宿歸りの如く、ばつとしたる事、是こそ本の太夫なれ。爰に神風や伊勢町に數年僅かな錢見世出し、壹貫と買にくれば先三百渡して殘りは追付跡から進ませうと、其銀とつて近所を飛巡りて、やう〴〵七百の錢才覺する程なせはしき世渡にも、戀は分別の外にして淺草の觀音參りの友に誘れ、三谷に行て前巾着のありぎり局步行して取留るを緣にして、すこしの間に女郎五六人にあうて、隨分強藏自慢を申、汝は鯰何盃もつたと所々のはやり詞にて、床に入事を鯰盛とは申ならはせしが、いづくの腎張が申出せしやらん都にても一比、うんそどりといひ廣めし

事久しかりき。投取集めて拾匁にたらぬ銀も皆になつて、腰まはりに氣遣なく、うつかりと辻に立て、れき／＼の太夫達の揚屋歸りを見渡せば、花も紅葉も一つに固めし、高尾が歸り姿に、彼小錢屋の助四郎見初まゐらせ、局の樂しみを忘れ、禿にすがりてお名を聞さだめ、手遠き戀の思ひ立、雲にかけはし霞にちどり足して、其日は宿に歸り、必竟銀次第で埒のあく戀とは知てありながら、商の元手さへ、かすかな身をして、いろ／＼分別して見れ共、天から降ず、地からもわかず。とかく此身で此世の御げん叶ひがたしと、人のしらぬ泪を流し、所詮ながらへてゐる故にかかる憂き事もありと、戸棚より脇指取出し、思ひ切てぬいて見たれ共、どうやら小氣味わるく、いや／＼死でから此戀の便りには、ならずと、まづ刄物を、鞘に納めたる智惠を出し、昔より叶はぬ事を神にいのるに、手前の信心次第にて、成就せぬといふ事なし。先銀さへあれば、自由に埒のあく戀なれば、戀の元は銀なれば、福の神を一いのりして祈て見んと、淺草の稻荷の社に日參、追付御影にて、何程遣うても尾の出ぬほどの身躰になりて、背のはげたる女郎買、鳥井を越し粹こつひと、世の人の羨ましがる程になしてたび給へと、小さき鳥井をこしらへ、毎日是を立置、肝膽くだき、半年ばかり祈しうちに、高尾は誰か根引にして、里は紅葉なき三浦の、秋の



夕暮さびしかりしが、又めづらかなる花紫に、色ぶかい男共がさわぎで、以前かはらぬ繁昌と、御町知が話を聞て、はつと胸せまり、さりとは其君ゆゑにこそ、此社へも歩みをはこび、さまぐ\心をつくせし事よ。今は浮世に片時もうろついてゐる事、ふつつりといやと、世を見かぎり、煮賣する家に入て、一盃のうでの上に、最期きはむべしと、片陰の旅籠屋に立寄、小半酒を冷にて見しらし、ほろ〱醉の來る時、むかうよりどういはれぬ美形、人に見られたき風情もなく、黒羽二重の紋なしに龍門の中幅帶、目立ぬやうにて目にたち、成程構はぬ歩み振なれ共、上替の蹴出し腰のひねり、素足にわら草履の至り穿鑿、いづれかしをらしからざる所なし。是はと死に覺悟の男も、色には目がつき、近よるをよう見る程、誰やら見た面影と、思ひ出す時、かの女聲をかけて、助樣私を見知てかといふ。成程見ましたお顔なれ共、どこでお近付になりしや、急には思出されぬと申せば、朝夕戀したうてくだんすには似やはず、戀人さへ見知らいで、あのうつゝない男め。これ高尾が里を離れて出し姿なるわと取つく。是はうれしの俤と、天にも登り助四郎、手の舞足のふみつけ所を忘れて、悦ぶ事大方ならずして、是への御來迎は、いづれの衆生を救はん爲にかと、問ひまゐらすれば、愚かや御身我事を戀にして此社にあゆみを運び祈らるゝよし、あ



る夜の夢に稲荷大明神枕に立せ給ひ、あらたにつげて言く、錢も持ずに太夫をたゞといふ、ふしようながら願事、無理とはしれてありながら、神の役なれば、是も叶へてやらねばならず。汝急かの男にまみえ、一夜ちぎりをこめてとらせよとの御事、則ぬしさまに、夢物語をいたしぬれば、戀は互なれば情をかけてやれと、少しのお暇、うれしく、是迄しのび參りたり。幸ひ此邊に我賴みし方の、遊山屋敷あれば、是へ伴ひゆるりと御げんなりましたきと、助を伴ひ一町ほどゆけば、日比は見なれぬ竹一村のかまへ、見た所はさもなくて、門に入て美々しさ。高尾案內して幾間かながめゆくに、是こそ極樂の出店なるべし。ひとつ／＼氣をつくるに、築山の物ずきに、たくみに石をなほし、三谷といふ縁をとりて、三つの谷をしつらひ、常は此三谷の影に遊ぶと見えたり。扨座敷になほれば、高尾は勝手に入て、しばらくして、有し御町の姿にて、鬢切したる女小性、七八人左右につれてゆるぎ出られ、先お盃とあれば、畏つて次の間にひかへし艶女、こがねの盃銀の燗鍋持て參りて、酒事を始お慰にとて琴三味線の音をつくし、小哥數を聞て、心も浮たち、氣ものぼる程名の木をとめし　道具取出せしに、其美なる事、つひに名も聞ぬ唐絹。此　　、　　めにあはゞ、今死んでも何か浮世に、思ひ殘す事有べきやと、思ふ心をさとりて、

　　、助が　　　て、靜かに　　　　、　　まがふ、

　　、けふ一日はそなた樣にまかする此身、どう成共御心次第

　　、嬉し過てふしぎに思ひ、これはあんまりうま過たる事、もしや昼狐に化れはせぬかと、心に心經となへ眉毛をぬらせば、白無垢きたる太夫と見えしは、忽白狐となつて、高尾といふ尾を出して、社の方へかくれぬ。極樂と思ひし大座敷は、簾かけたる水茶屋の休机なり。扨は大明神の御利生有がたし。はじめからかくとしらば、酒事おきて先、床入を急ぐべきに、かんじんの所で、化のあらはれしは殘念なり。かゝる事ならばいはれぬ小才覺出して、眉毛をぬらさうよりは、ぬらさずにゐて、いつ迄も化れた方が德ぞかし。しかし茶菓子に、しんこのやうな物が出しがと、今思ひ出して、胸をわるがるもをかし。とかく佛神の力にも、銀づくの事はかなはぬと見えたり。此男も稲荷へ日參をやめて、家業に是程精を出さば近道に利を得る事も有べしと、大笑ひに

なつて、日待伽のねぶりをさましぬ

第二　月にも花にも只濃紫

百三十里戀を
かせぎに下り大臣

武者ぶりよく生れついて、ゐんつう持て浮世を隙にして遊ばゞ今なりと、万に事の欠ぬ持丸長次とて、上方にての分知、難波の色のよしあしを見つくし、都の花も賞もある男と、西嶋にて用ひられた二个の太夫を手に入自慢して、是より名に聞し武藏野の、色深き小紫を見に下り、三谷案内のために吉原雀の茂吉といふ御町知を先に立、其外京大坂の口利末社共に、皆定紋のそろへ小袖をきせて、此度此里始て一見、万大形に宿へこがねの花をふらし、かしらから大束に出て、當流の手をつくしたる料理、せゝり箸して亭主が氣を付し初物もかまはず、諸事引こなせば、いかなる女郎も位をのまれ、あちらこちらになつて、おのづから身に嗜出來て、見落されぬ氣づかひせらるべきに、さすが高上成事を見つくせし小紫ほどあつて、さらに、惡びれたる躰なく、詞ずくなに大やう過る程にゆつたりと、初會過てのあけの日、成程心よくて、すこし我方からいてゐる風してたはれかゝれば、大臣さこそと、ちと自慢して鬢などかきなで、いよ〳〵味やりだてを申て、手に入て、小紫むつとして、あまり自由過てお慰に



はなるまじと、すこし身をひねりて、枕
のともしにて煙草のむなど、其脇貌の
麗しきに、いよ〱
然も
あぢやりだても
ならぬと、
脇になつて、
で、さすがの大臣手を
共、いかな〱本の
あはして
、手強き、男をなかせけ
る。此大臣起別れて猶戀を殘し、其まゝ
には捨がたく、あけの日よりつゞけて
あひけるに、
[illegible]隨分客の心に
そむかず、自由自在になりて、
、男次第にならず。いつとて
も大臣もがいて素もどりいたし、どう
やらなりさうな物と、ふらるゝに從ひ、
今度は〱と心ひかれて、通ふもかよ
ふ、ふるも振、つゞけて廿
四日といふものは、物の見
事に誠の分をたてざりしが
廿五日めにおよんで、大臣
氣をつかして、打うらみ
申けるは我はる〲の所を
越て爰に來り、大事の銀を
なげうち心をつくすも、そ
なたを思ふ故ならずや。そ
れに近比酷き仕方、それも
馴なじみての上に、互の思
ひあまりて口舌などにて、
かうした首尾ならばをかし
き事もあるべし。然るに初
會より今日迄つひに誠ある
お情にあづからず。是は一
向我等に死ねとの事か、そ
れは太夫さまとも覺えぬ酷
き御事と。實事を申出せば、



太夫細返答なく、殿振はすいた風なれ共、おそらく味をやるとおぼしめす、一座のしこなしいやなり。誠我事おぼしめさば、我心のとくる迄かよひ給へと、はなれ切たる詞に、大臣輿をさまし、然らば今日より女郎替て遊ぶべしといへば、それはどうなり共、御心まかせ上方の、もの和な女郎を、こなし給ふ土氣のおちぬ間は、打とげ參らする事いやよと、床柱にもたれかゝりて顏をそむけ、心を臍の下に納て、すこしも騷ぎ給はぬ風情、惟持のお內儀さま見る心地、上方とは各別、ぐあひ違ひて、手だれの大臣、此はりの强さに弓矢八幡きかぬ氣ざしもたよわく成て、自然と我方より機嫌取やうになつて、位取事も上手ごかしも、中々およばず。又分もなう宿に歸りて、爰の太夫を手に入て、心の如くまはす大臣あらば、近付になりて、女郎の意氣方買手の仕乎懷、尋きゝたしと吉原雀の茂吉に、せんざさせけるに、三木といへる三野第一の大臣、御町我物にして、今出の色知。是こそ好む友よと、初對面から互に心安申合、いざ是からといふしほの、引ぬ氣な男共貳挺立の舟をいそがせ、目ふる間に惡所のあがり場、船頭共に大儀〳〵と詞殘して、常の揚屋に入、けふは珍しき一座、下り大臣のぼらして、是迄誘引致した。扨お馴染は小紫どのとや。お隙いりあらば太夫殿に內證申て、何とぞ今日のお客へことわり申されこなたへ御來臨あ



らば、一入有がたからんと申参れといひ出すより、方のしなせ、上方とは各別なる事共、随分京であぢやり自慢の男、三木が幅に覆はれ、滿月の前の星のひかりにて、影がなく、するほどの事、初心に見えて、我ながらをかしかりき。しばらく、色なき里の心地して、先何がなしに呑出して素人末社が半太夫ぶしの習のない上るり、悉皆染物やの繪本見るやうな事を語出して、長々敷待うちのてんがうに、太夫が來るか來ぬかと疊算、半にあたつて、七つの鐘のなる時、裾吹かへす紅裏、ぱつとした姿にて、太夫樣は御出、まづは嬉しし。此方へと上座に直せば、座する迄詞なくして、まづほつやりと笑ひ出し、さりとは變つたお出あひ。今日お約束申せし、こなたの御客は、奥筋の頑な御方にて、お斷りも申がたき首尾なれ共、かた樣と長次樣と御一所に御越のよし。參りませずばおふたりながら枕物語せし、大切なるお敵樣たちなれば、差合の一座と遠慮して來ぬかと、上方のお客はかくべつ、先こな樣の必こんな事に、惡推まはすお方故、いかう來にくい所をようよびにお越たな。そんな初心な太夫かと思うて、廿四五度もあひました長次さまを、ようぞつれましてござんして、ちか比恥入ました。私が心の底の底までしつてゐながら、悄や男めと、三木が太股に、跡のつく程つめ／＼せられ、痛ほど忝な過て、さすり／＼それは太夫の、粹ばまりといふ物。今日長次を同道せしは、一つはそちをおもうての事なり。そも／＼長次上方にて、小紫といふ名をきゝて戀にし、はる／＼の海山をこえて、其方にあはんため斗に此里に來り、心をつくすを、いかに風義があはぬとて、廿四五ふるといふ事、情をしらぬむごき仕方、戀する我迄も心よからず。其上長次は上方一番の分知、且は京大坂のきこえも惡。今日は拙者が仲立いたし、心よく長次にあはせん爲連立つて參つた。此心を無にして、我等手前を思ひやりて、あふまいなどゝ未熟な義、仰らるゝと、たちまち今日切といふ男。さあ返答はと酒氣もなくて、誠を申せば、太夫感涙をながし、それ程迄に私事をおぼしめさるゝ御心、鎌倉にひとりある母を誓文に入て、いかほどか／＼忝なし。長次樣をふりましたは、我こと聞及ばれて、美君おほき京をすてゝ、はる／＼のお下りとの御事、今の世にはあんまりうそらしく、あたまから思はれたいとの仕掛と、惡推まはり、誠かうそかの御心底を見極めんため、つれなくも多くの

日をふり參らせし悔しさ。何がさてそなたさま御一座の上は、あひませいではおきませうかと、改めて長次と盃事して、はや　せて、三木樣　ぞやと、どこやらに詞殘して、長次が手を取、是戀男おじや、と手をとれば、長次は晝からの酒に心みだれ、いふ程の事前後して、ひとへに現の如し。太夫も三木も氣の毒の頭をかいて、二人が今日の心ざしの、無になる事を悲しみ、醉のさめる藥などをなめさせて、つんぼうに物いふ如く、兩方よりさま〴〵いひこめばざよろりとして、人心地なければ、さりとは是非に及ばぬ仕合、今宵は爰に留て、醉さめなば、あれが心に叶ふやうに、なぐさめてくれらるべし。我等は是より歸ると立んとするを、太夫引とめ、今日是迄の御誘引にて、御連といふ名があれば、貴樣御一所にあらずしては、金輪際あふ事せぬと申切。しからば今日がかぎりぢやが、中々たとへ此世は扨置、ながき來世まで、御見ならぬとても、御一座でなくしては、御合點の上なれ共、我身にしてはうしろぐらき事、ふつ〳〵いやと心底極て申せば、三木も道理に責られて、重ていふ言の葉もなき時、長次むく〳〵とおきて、泪をながし、さりとは、お江戸の色遊びのいきかた、傾城買の聖人共申べし。我も實は過ぬ酒に醉べきはずはなけれ共、兩人の心入を感じ、態と正躰なく見せて、思ひあひしおの〳〵を床に入べしと、しばらく狂言をいたした。向後此戀やめ申上に、一つの願あり、迚の事に三木きいてたもるまいか。してやめての上の願は。さればその事、もちろん兩人の心底を感じ一旦思ひきるとはいへど、戀慕の道は根ふかきものなれば、此里に太夫をおきては、根が賣物といふ心にて、又ふと心の迷ふまい物でなし。願とは爰の事。貴殿太夫を今日の内に請出し、ながれの道をたつて、お內儀樣と人によばしてくれなば、我思ひ速かにはれて、永く物おもふ事あるまじ。此願を聞入ず、臨終ぎたなく心の殘るべきやと、一夜はあはして其上の事などと、深切過たる心づかひあらば、只今爰にて自害いたすと、刄物を取廻して、誠に思ひ切たるがん色。三木聞屆、爰は下手くろしういふ所にあらず。先我等の爲には十分よい事、ともかくもと、則私宅へ、事の自由にはたらく、山吹色の物を、馬二駄につけさせて、只今參れと申つかはし、早速の身請情知の寄合と、見し事を今申出し、女郎も、とりんぼうも、あまねく色道の鏡といたしぬ

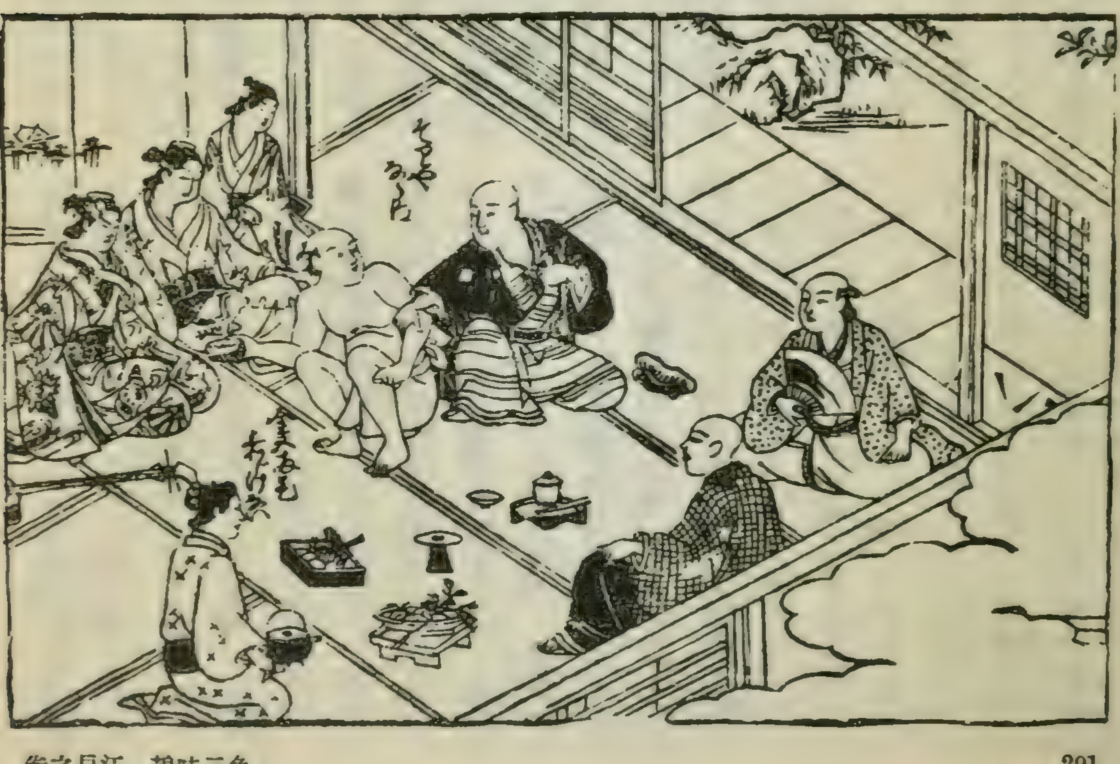
第三　月より上に名は高松

散茶にふられて、のどのかわく男

世の中に無分別者と、銀の利ほどこはきものはなしと、朝比奈の三郎が悪所銀の利におはれて、物前にはてん〱と、舞鶴の直垂も汗にしほたれ、鐵の門は破れ共、銀なくては、力業にも預り手形の判は破られずと、自慢の髭もちゞみあがつて、當所のない銀を必ず遣ひ給ふなと、九十三騎の親類中へ、隨分懲て語りしは尤ぞかし。今時は身躰からよりは、遊び花麗になりて、思ひの外の仕過し多し。其ために身體相應の遊びを、色里にも拵へおけば、細元手の人、太夫格子に及ばぬ戀をせうよりは、氣骨のをれぬ散茶にたはふれ、又は近き比の仕出し、うめ茶で咽のかわきをやめ、當座拂の氣散じ、それから五寸三寸新町がしのかきのうれんは、定て百疋ころりと寢て咄した所、さらに生男懐て寢るやうにはあらず。内衣も絹物して、はし切の鼻紙、口すぼめて物いふ風情、末々にても、御町のしだしは各別也。爰に本町傳馬町の棚に、旦那の爲に成手代共十人斗寄合、命の洗濯講といふをはじめ、先あたまに一人前より、金壹歩、宛出し、是をもとだてとして、毎月壹人に三匁づゝ出し、格子女郎をまはり番に、一人宛買て慰ける。是よりして、あたま掛を、世間に枕掛と申は、此因縁と承る。又無盡といへるも、



無なりをして、盡たがるものを、おなじ心の友打寄て講をとりむすび、つくさるゝほどに、身上取立て、大盡にしてやるより發て、無盡共、又は戀頼母子共申ぞかし。其中に棚預りのすこし大氣なる男の申は、迚も此講思立からは、今少しの事なれば、太夫を買て慰むべしと、そろ〳〵奢を申出せば、成程それも取結ぶ前方に一相談いたせし事なり。上方とちがひ、爰の太夫職は、初會などには、身仕舞ぶら〳〵として、やう〳〵八つ前に、揚屋に來て、そこそこに盃まはして、又も御見と床なしに立歸るのよし。然れば此講中どれとても、廻り番にして、毎月買手の人替れば、いづれがあふも初會なれば、銀出しながら、年中秘佛の光堂へ參つたごとく、有難いとおもふ斗で、尊い肌も拜まず歸りて、何か面白からんといへば、棚預り我を折り、さりとは太夫といふものは、した銀にてかはれぬ物と、今迄のを掛捨にして、講をのきける。いかさまそれ一つの思ひ入てゆく客に、初會なればとて、寢道具さへ出さず、すもどりさするは、何程か心殘りにして、銀拂の時、養子親の借錢なすやうに思ひ、出しかねけるも理ぞかし。とかく女郎は賣身なれば、其日の男に嬉がる事あく程　　て、しかもなづみたる顔つきしかけ、役日の外迄勤させるが商ひ上手なり。客も是より思ひ付、あの美い姿の、高家方の息女なら、金銀に



てかなふべき物にはあらず。其道の者なればこそ、親にも見せぬ、。是には何かをしからじと、ある程は參らせあげける。三浦の大助といへる、末社の老人申けるは、昔の女郎は、何心もなく形をうるはしく作るを専にして叶はぬ聲にても哥をうたひ、三筋の糸さへならせば、太夫とよばれて其日の男上戶なれば、酒面白く扱かはし、又は上るりすきなれば、いやながら、度々聞なれし十二段の忍びの所、永閑節のをかしげなるを、折々に三味線引かけ、是はこまかに御語りなさるゝなどそやしける。思へば病人の伽するに、かはる事なくそれは〳〵心の苦しみなるに、今の世は又すいた男ぶりを、氣にいらぬ顏をして、位を取様々に心をなやませ、勤なればこそ、こんな男に人中で、あはるゝものかと思ふ程のいやらしきにも、ひた〳〵ともつて參り、身をそれが物になせるしかけ、たとへ天眼通を得られし羅漢も、一泳ぎはおよがさるゝ程のかしこさ、女郎の智恵の盛とは今此時かや。爰に三鳥三木とて二人の分知、色道の傳受事迄しりぬいて、およそ三ヶの色里にかくれなし。抑三木の內、川な草と申は、ながれの女のさそふ水あらばと、客次第に成を、根のない草にたとへし事也。おかさまの木といふは、松も根引にせられて、お內儀さまに成事。また三鳥の中の、呼子鳥と申は、迎の男の聲などのやうに世間では申せど、それは傳受せぬ人のいふ事、利口な末社が上方より、精漬の生鰹を、もらひましてござる。是一種にて御出とよぶ時、必ずゆかぬ物なり。霜先の無心いはるゝはせつなきものと、いまだ前方なる、素大臣衆へ大事を語りぬ。此三鳥といふ大臣、都の末社の名鳥、はじめて下り、此里にて十三替りを囀りしを聞て、近比面白き色くどき、是珍鳥と悦いさみ、爰の諸分を見せばやと、先おつとつて京にない圖、二丁だちに打のせて、あれなる都鳥とは汝が事よといへば、あの如く終には水が川へはまる事、打見には豊なれ共、水の中にてあしどりのいそがしさ。我等の身上も、さりとはあの鳥にかはらず、內の苦しさと、はや耳訴訟。爰の大臣は、隨分氣がながうて、急に物やる心つかず、何事もさう心得たがよしと、覿面にもつて參て、中々はげしき男氣、上方の大臣とは、各別のちがひと、口をあきけり。扨今日の趣向は都の名鳥といふ男を、上方の歷々の大臣に仕立、三谷の水共に、手をとらし

て一興と、三鳥三木申合て、其旨名鳥に申渡せば、假初ながら色里にて、歴々の大臣になる事、万事につけてむつかし。此成貫に上方へのぼる路金御意にかけられたらばと、はや欲を申せば、それこそ安き事と、三鳥懐より金子五兩取出し、早速くるれば、忝なしと、紙入にをさめ兩人が挾箱より、用意せし替衣裳出して、船中にて俄に、本大臣に作立、舟つけばおの〳〵あがりて、いつもの揚やに行ば、皆待顔に、撥音を、やめて、二階よりおりる者共は、兩人が常につれる若い者共、津輕才助、出額万吉、平太蜘の勘助、其外をかし中間共、お先へ參つて御出はおそし、今迄騒いでをりましたと、いづれも下座にかたまる。時に兩人の大臣、名鳥を正座になほし、あれらは拙者共が常に遊山所へ召つれて參る末社共なり。我々兩人同前にお目かけられて下さるべしと、扨手をついて慇懃に申せば、才助をはじめ、いづれも旦那さへあの如く、結構なる御挨拶をなさるゝからは、たゞの御方にてはあるまじと、一度にかうべを疊にすりつけ、まき舌にて御返事申。かくて三木宿のかゝ近くまねき、小聲になつて、あれなるは我等兩人をお引廻しなされ下さる、上方のさる御方さま、此度ふと、御下りあつて、ひそかに忍びの御遊山常の客とは各別なり。何事も都はやはらかにして、花車を專にする所なれば、物事しめやかに、いづれ共さだめず、太夫格子を六七人つかめと小倉、勝山、初尾、大橋、きてう、八重霧、山の井、まじりに酒も大かた成時迄、名鳥も上方にてよい事見つくせし、ものしなれば、成ほど大へいをさばきかねず、切々手水にたつて、ある水をくみ替させいさぎよくつかふ時、山の井といふ女郎、私かけてあげませんと、杉柄杓とりて、かけ參らすれば、ちか比氣のついたる女中、お名はとゝへば、山の井と申。ことわりかな。むすぶ手の、雫ににごる山の井の、あかでも人にと貫之がよみし哥の心にもかなひ侍る。いづれ俊成卿の忠峯が有明の哥にも、おさ〳〵おとるまじと稱美し給ふ哥の程あつて、幾度吟じてもおもしろしと、打あがつたる哥ばなしなど申出し、隨分あぢを、しこなす所へ、勝手から宿の男が、丸裸になつて、惣身を金箔でだみて、其まゝこがねの佛の奉加〳〵とゐざりて罷出る。是は一興なると皆々わらへば、今朝朝酒にたべよひ、表の二階からおちまして、惣身をしたゝかに打まして、難義いたせしを、金は打身の藥とて臺所で

皆がよつて、かやうに此世から、佛にはいたしてくれましたれ共、奉公を引て養生いたす飯代の奉加〳〵と、無遠慮に座敷をゐざりまはる。これはふびん成義、今日の大臣へ取付てなげきを申せ、酒興の上なれば、御ゆるさるゝぞ。お懐へ手を入、あつうかゝつて申請と、兩人ゆるせば勝にのり、是旦那おにげなされな。愛宕白山手がわるいと、ゐざりながら袂にしがみ付、懐に手を入、船中にてもらひし、五兩の小判に手をかくれば、名鳥せつなくこりやならぬと、女郎の手前も恥ず、大臣やめる是があつてこそと、置頭巾をとれば、扨は今日の大臣はつくろひ物かと、女郎末社腹のいたい程笑うて、又酒になして遊ぬ。裸佛は云じらけに成て、せめて白毫に成程、露がねにてもほしやと、ゐざつて勝手へはひるをよびかへし、兩人手前より一兩と投出せば、近比殊勝なお心ざし、永代裸佛の藥代の施主にお成なさるゝ事と、いたゞいて立て入ける。其後三木は中松やの高松に深くなれての上に、引かいで宿の花となして詠めくらしぬ。三鳥はかかるよい事もせずして、むしやうと云物に成て、いつも有ものゝやうにつかひ捨、指引殘らぬ揚屋へも、內證手うすくなれば、おのづから身にひげできて、我方からゆかれぬ氣に成、止ば今なれ共、一日も色を見ずにはゐられぬ性にて、やう〳〵一角才覺して、しりはらやまずに散茶にかゝり、其まゝ昔の氣を出して、薄雲勝山など自由せし盛ばなし。耳に立て散茶女郎むつとせしをおししづめて、　て此返報を以て參るべしと、　かたくして、あちら枕にひんとした髮姿、近比あつた物でないと、御身に近より耳のほとりへ口をよすれば、酒臭いとて夜着の襟へ顏をさしこむ。さりとは悄き仕方、昔はれき〳〵の太夫格子にも、こんな事はさせざりしに、無念千万とは思ひながら、世につれて壹歩の金がをしく、ふられては先さし當つての損と、隨分律義に息づかひやめて、お手が外へ出ましたといたはれば、それ程の事は覺がござるといふ。男今は勘忍袋の口をあけて、是はれき〳〵の太夫達のなさるる、ふるとやらいふ事でござるか。拙者初心者でござれば、さんちやとはふらぬといふ心なりと、いへる名によりて、ふられぬがてんで參つたが、散茶のふらるゝは、扨はいるまと御出なさるゝかといへば、私が名をうす雪と申せば振ますと云。近比つめたい心意氣、是は北國筋の大雪よりは、強い振

やう。ちと、いひしな立かへり、さりとは散茶にさへふらるゝ身に成くだりて、無用の色ぐるひと、我とよく／＼得道して、もはや今日切と心誓文立しが、明れば又身をつかみ立るやうに思はれて、人目も恥ず通ひけるが、後には何に成て、いづくへ行しか果をしらず。されば昔の薄雲、花鳥など打よりて、かしこさすぐれたる、つとめ物語のついでに、心の眞の異見をきくに、それはさもこそ有べけれ。惣じて買手餓につかひさかる時は、やがて燈火のきゆる戀の闇路とは、しれてかなしく、其人いとしく、御宿の不首尾を意見して、少しは遠ざかるやうにしかけぬるは、神ぞ／＼微塵僞りのなき所なれ共、男はあしく聞なし、猶しきつて毎日出、事によつて外の女郎に替りて、こなたへ見せる全盛に、せいでもくるしからぬ大さわぎに、程なく身躰たゝみければ、是斗によい程といふ程はなし。とかくとらるゝ程は、ばた／＼と取て仕廻、まだしき時に分別さすれば、指替の一腰も、茶入の一つものこる物ぞかし。べん／＼とやりくりする内に、一色／＼皆になし、手と身とに成てをさまりは、お札をさめの下組、願人の袋持坊主になれるより外はなし。よく心得て深入せぬが粋なりと、ずゐぶん戀に取つめられし男のかたりし

第四　月に彈る琴浦が三味

酒につよき事間鍋の綱

女郎は昔と替り一座かしこく酒事各別味やつて、うそも男のすけるやうに云て、慰に成事今ぞかし。され共勤日の外、物前の無心、我も人もいそがはしき中へ、迷惑ながら商賣のさし引は捨置、色町のつけとゞけ、身の一大事とおぼえぬ。是一つにかぎらず、此道に足を踏込て深入をする人なみぞかし。爰に糀町に請酒商賣する者ありけり。其身上戸なれば、余所へ買にやらず、年中呑だけをのびにして、朝暮酒のかすかなる世渡。此酒家の主が、昔をしれる人のいへるは、あれは生國宇津の宮にて、彌三郎といへる大臣の果なり。今こそあれなれ、以前はゐんつう過分に、もつてひらいて花をやつたる男。其時は三浦の琴浦に、うらなくちぎり、互に命切と申かはして、かよはぬ日はなし。一日あはねば、女郎も思ひにしづみ、昼夜に十二の一時文、もしや御心地にてもあしきやと、外の動も中々心にそまず、名のたつほどに思ひあひし

が、かゝるふかき中も、かはればかはる川の瀬と、浮氣男の心は一時のうちをしらず。比は七月始つかた、そろ〳〵秋風の吹て來る時、ある女郎にほれかかつて、ひそかに宿をたのみ、文していろ〳〵くどけ共、御心ざしはうれしけれ共、ことうらさまの思召も迷惑、此戀さらりと御やめ下さるべきとの返事。是は一通り女郎の作法なれば、かうあるはずとは元來合點してほれ出したものなれば、今更やめる男でない。此戀首尾能取持なば、どなたでも小判の山を築て、急度御禮申事ぢやと、宿の夫婦若いもの共末社迄申渡して深くたのめば、末社の中に、ちかのといへる、三寸局の年の明しを女房に持て、女郎の心いきを知た顔する、鹽釜の長兵衛といふ男、彌三大臣のほれられし女郎に、きりや市左衛門方にて一谷のお客の御供せし時一座いたし、よき首尾を見合、ひそかに彌三郎がおもはくを語るに、私もあなたならばと、とびたつ計思ひますれど、いかにしても琴浦さまの手前あればと、大和心になつて、大きにやはらいだる口上、扨はなり寄たるあきなひと、上手をつくして申は、近比夫は初心の至り。町屋の實事にさへ、勝手づくとて、兄の死あとへ弟を入るゝもある習なり。ましてや、色里の情を商賣に、なさるゝ御身として、外のおもはく思召すは、前方なるせんさく、戀は仕勝と申せば、しやれてこ



なだから惚れてゐた男、今日は名譽の出合、今からかはゆがらざ、つめるぞと、しらけて御あひなされなば、さりとは名譽の女郎と、情知の名をとりたまひ、今の間に、すさまじき御全盛見るやうなり。ことに此事宿の夫婦をはじめ、我々共迄ふかく隱密にいたせば、中々うろたへた神も御ぞんじない事と、口のすうなるほど味をやつていひまはせば、然ば外へ沙汰さへなされぬ事ならば、ひそかに彌三さまにあうて進じません。此心底御つたへ頼むとあれば、長兵衛悦び其座を、そこ／＼につとめ、其日の御客においとま申、すぐに彌三郎方へ參りて、旦那小判の山をおつきなされ。仕おほふせて參りましたと、茨木が腕を取しほどの勢も、酒機嫌にて、かん鍋の綱といふつはものと、氣おひかゝつて申せば、大臣をりふし末社をあつめて、御町ばなして、無色の酒ものめるものぢやと、よつぽどのきげんなりしが、長兵衛が只今の口上、何共其意を得られず。いかにしても、思うたよりなびき樣早速なれば、あはぬ内には小判の山も筑れず。そのよい返事のあたゝまりのさめぬうちに、違ひなくいつ比あうてくれらるべきとの、太夫自筆のたしかな手形とつて參れ。さうないうちは汝が詞たのまれずと、忠が不忠になつて、何とやら、つもるやうに思入られ、申出してもとねにしかね、爰は一生の大事の場と、心をしづめ成程太夫さまに、



御好の通かゝせませて参りません。其替りには、又旦那からも、お手形取て参たらば、小判何ほど下さるべきと御墨付を頂戴仕たいと申。是はよい念の入所、いかにも書てつかはすべし。十日より内にあはうとならば金子五十兩取すべし。廿日の内ならば卅兩、來月へかゝらば拾兩、それより延なば、此手形反古たるべしと、早速書てたびければ、長兵衛は手形給りて、御前を立て出けるが、立歸りかた〲は、我心を陸奥の會津の蠟にあらね共、ながれを立る女郎に、好の手形を書せずば、二度太鞁持せぬ法もあれと、荒言はいて宿にかへり、先嗅に酒のかん申付、機嫌よくして、人の仕合は何時なほらうもしれぬものぢや。物前とさへいへば出違、そなたに斗苦勞さするに、今度はうちに居て、當前の事はおいて、古借錢まで拂て、久ぶりにて掛乞の笑顔を見すべし。まづおつとつて、旦那から五十兩の御合力違ひのない所は、如件と手形を出して戴かせ、夫婦盃仕舞、おちついたる心地にて、去年の鯖は小かつた、蓮の食の米は、白きにあきがない。今年は餅米貳石斗買て、大屋殿の碓かつて、前方から踏せおくべしと、万大名氣になつて悦ぶ所へ、家主の若い者、案内なしに内入て、長兵衛殿ふしぎに内にござる。いつ參りてもお留守とあつて、大分宿賃のたゝまりの算用をなされぬ。それゆゑ旦那腹立いたし、今日は右宿代をのこらず皆濟なさるゝか、さなくば今日の中に、家を明て何方へも御出なさるゝか、二つ一つの埒をつけに參つた。後程と申樣な手のびなせんぎでござらぬ。お返事がわるうござれば、只今諸道具つまみ出し、請人方へはこばせ申と、にがりきつて申せば、德右衛門殿それほどきびしうおつしやれずば、今時の棚借りはさつぱりとはすましますまい。成程惡うは承はらぬ。久々延引いたした代に、滯たは申に及ばず、先當年中の宿代は進ておきませう。拙者もちと此比はよい仕合をいたし、歩にもまはる屋敷もござらば、求めもいたさうかと、存程の身になつてござれば、今迄の如在屋の長兵衛ぢやとは思召して下されな。後程それへかるめなしに、宿代持參いたすべしといへば、德右衛門耳に入ず、こなたの後程と紺屋の明後日とは、かふつて申。さりとはそれほど迄に御見んざふ彌平で、うけつけないと、かぶりたてにあづかる所、ちか比心外に存ずれ共負たが定でござれば是非におよばぬ。我等僞り申さぬしるしは、先銀子

もつて參る迄、是を代りに進置と、一腰を渡せば、德右衞門とくとあらため、しからば必違なう、追付銀子、御持參有べし。先それまでは此脇指我等預りおき申と、暇乞して歸りぬ。とかくさしあたつて忙しき方なれば、やつて仕舞て一腰を取戻し、其後三野へゆくべしと、思案極めて材木町の木曾屋の淸平といふ、日比目をかけらるゝ大臣、度々御無心申掛て、あいそをつかして此比は、よびにも下されね共、分知にしてたのもしき御方と、かの大臣の許へゆき、大臣に御めにかゝり、件の手形を取出し彌三郎の戀の次第、女郎の返事の樣子具に語り、隨分惡い仕合にして、來月迄の中には、廿兩もらひますには極つたるお手形、是を質に留おかれ、來月迄金五兩御借となげきを申。淸平手形をひらき見て、尤是に僞りはあるまじ。しかしその女郎、慥に彌三にあはうといふに證據なければ、何共心もとなき證文なり。五兩取替てやつた上に、もし其女郎、彌三にあはずば、勿論此書物反古となつて、現金出して損するものは我等壹人なり。こんな事に金を借うよりは、請のない半季居の奉公人に、壹年分の先金借たが、まそつと慥さうな物ぢやと、いへば、成程女郎もあはるる筈に、今日かたう口をかため參りましたれ共、旦那念じやで、いよ〳〵あはうとある、一札とつて參たらば、逢日の極り次第に、此通りの金子くれらるべき證文にて、只今是よりすぐに、此女郎に一札書せに參ります。此一札さへ旦那へとつて進ずれば、私は金を早速貰ひます契約、跡はあはれうともあはれますまい共、それからは拙者かまひませぬと申。しからば此方より手代を壹人汝に付て、三谷につかはし、其女郎の口もきかし、一札も見せての上に、いかにも借てとらすべしとあれば、是忝き御事やと悅びいさみ、木曾屋の手代と同道し吉原に行ば、はや暮に及びて、桐屋のお客もお歸りなされ、太夫さまお身仕舞にお宿へござつたが、今晩は鎌倉やへ御出のよし、市左衞門方の男が申。扨はと鎌倉や方に行て、先お內儀に對面し、かの女郎の事を聞ば、今方御出にて座敷にござりますとの事、女郎のおためによい事申に參つた。ちよと是迄よびまして下されといへば、心得たとて早速通ずれば、自由に立ふりして勝手に入て、是は鹽釜殿なんとしてござんしたと立ながらの挨拶、先下にござりませ。昼おほせられました、深切の段々彌三さまへ溫りのさめぬ內に、すぐに持て參つてきかしま

したれば、お悦び共満足共、神八幡余念はございませなんだ。しかし全盛の御身なれば、ふと共内に引かいてのける客が、あるまいものでなし。然らばこがれ死に死なうもしれず。とかく情の上からなれば、とても事に急なる御げんを頼み奉るとの御返事がてら御使に参りましたと、少しでも早きがねうちのある約束なれば、太鼓を早めて申かくる。女郎ぎよつとしたる顔つきにて、長兵衛殿はつがもない事いはんす。思ても見さんせ。彌三さまは琴浦さまとふかい事は、誰しらぬ者はなし。共お方にそもやそも、どうあはるゝ物でござる。こなたも太皷もつて、此里へ年中はいりこうで居るやうにもないおろかな事に使する人ぢや。それも琴浦さまと口舌でもなされて、手がきれての上に、こなたから琴浦さまへ、退しやりやうの段々聞に遣はし、又あ付届すんでの上には、是共にふもならひなれど、お馴染と中なほし取持て、元へもどすが、女郎の作法でござる。そんな事も辨へずに、ようも／＼太皷はなさるゝ。厚皮なと目をすゑて、腹を立らるゝ。是は以ての外の相違、今日昼こなたさまには、沙汰さへなされずばひそかにあうて進ぜうと、彌三さまへおことづけを、大誓文でおつしやつた。扨は我等をおなぶりなされたか。事によつては女を相手に、せまい物でもござらぬと、大きにせいて申せば、さりとは笑止や。先



太鞁持は何が役目ぞ。素お客、我儘大臣などの無理な事をいはんすか、又は色里の諸分をしらずに、なじみの女郎ありながら、此やうな仇ぼれなど遊ばすを、ひそかにとめまし、其大臣の名の出ぬやうにさつしやるが、第一の役目でないか。既に大臣の仕方がわるければ、歴々の太鞁衆がつきそひながら、不調法とこなた方外叱らぬぞや。其上今日のお客は此方もついてござつて、しつてゐさしやるとほり、一谷の虵之助さまというて、朝から翌夜明迄のみつづけに、さんしてもきよろりとしてござる大上戸。其お相手になつて大分酒にようて、うつゝで居た私をとらへて、ざゝやかしやるとは思うたが、何いはんしたやら、何いうたやら、神ぞ〳〵おぼえませぬ。かき暖簾かけてゐさんす、米さまたちさへ、それ〳〵にさしやいはくり給ふ。まして私等が身の上の事、酸も甘もしつてゐるこなたの、たとへ酒興にいへばとて、誠にさんすが聞えませぬ。はて、かういふが無理ぢやと思うて、腹がたゝば公事に成共みやに成共、心次第になされ。エヽ素人らしいといひ捨て、座敷へ立てゆかるれば、長兵衛あきれて今は悔ても埒のあかぬ手形を取出し、ひろげたりたゝんだりして、何共不首尾千万。木曾屋の手代見かねて、こんな所に長居は無益とて、ぐんなりとなつてゐる長兵衛を引立、門口へ出れば、遣手のかめが来るに行あふ。是は長兵衛さま色がわるい。お内儀さまへ氣に入やうが過る物であらうと、わらへば、そんなよい機嫌でないと、はら立さうな顔をかしや。けふ昼桐屋にまそつと、おつとめなさるゝと、見事な、目にあはしやる所を、とかく早きお帰りのこり多し。私共は虵の助さまより、いびつなりな物貰ひましたとよい事斗申てはいる。さて〳〵是程埒のあかぬ事に身をつかうて、現金にとれる鳥をにがしたと、中の町あたりでは腰がぬけたと、こけさうなるをかゝへ、大門過て籠を才覚し、夜來て、終に今時分かへつた例が、ないに扨と、泪を流して宿に歸り、いよ〳〵證文役にたゝぬにきはまり、脇指一腰家主へ渡しだけの損となつて、家を立退金杉邊に、何をしておくるやらかすかなくらし。その後琴浦も彌三が心を見かぎり、女郎の方から隙入申てあはざりしが、靈岸嶋の七二とやらに、請られ奥様となつて、三年つゞけて、年子に男子を三人迄まうけ、世に不足なき暮、とかく人の身の上はしれぬものなり。彌三郎はいよ〳〵むしやうといふ物になつ

て、はじめの勝山に戀を仕替て、跡先の思案なしに、いかな〳〵金子壹兩も殘ぬ程につかひ捨、古郷の宇津の宮も鼻持もならぬほど、惡い首尾にて、よせつけず、ぜひに及ぬ仕合。昔の惡所友達富田の酒大臣の、御影を請ての酒商賣、是もまうけよりは大分呑で果、ふだん猩々のごとく醉て莽し、夜晝なしに、ねて花をやる、糀町に、今あの姿、是もましなるべし

第五　月に薄雲かゝる情

銀際になつて
醉のさめる十人の殿原

世に心もとなき物は鰏の腸くふと風吹に籠の中で煙草のむと密男の手柄咄しとなるべし。いはねば腹ふくるゝとはいへど、たゞ何事もいはぬにこした事はなし。爰に政都とて、唐人流の按摩とつたり、三味引たりして、大臣といふ大鳥の羽がいの下にて育つ座頭ありしが、旦那衆につれられて大方吉原に入りこうで、隨分腹たてぬ坊ちやと、女郎共にかはゆがられ、毎日食悦いたしぬ。ある女郎少し賴むとて、　　、政都は　　、　　、　　。女郎ふびんをかけられ、よくよく思へばこそと、　　ぬ時、　　、　　、宿に歸りてはや此事をはなせば、男ひ



でりはあるまじ。おのれにそんなよい目をさする物か。僞り坊主がいひなしと、其後は大臣共いひ合て慰所へつれてゆかざりければ、無用の手柄咄しに、其身の遊山をかくのみならず、日待にさへ呼れぬほどになつて果けり。大臣の御機嫌とつて世を渡る者の心得わるき故ぞかし。太鼓の智恵だてすると、色宿の亭主が、客に大へいなとは、皆うつけの沙汰にして、是をよいとは申されず。とかく色の道にかゝつて、身をすぐるの人、利發を止て、たらぬ顔して大臣にまかれるが上手なり。都の色茶屋の亭主に、随分智恵自慢して、客御出といへば花車おしのけて罷出、是は旦那よい衣裳付でござります。然し素見る茶は、今時世間にはやり過て、我等がやうな粋中間の目にしみます。とかくいつ見ても、山の端染に、なゝこ織の羽織でなければ本大臣とはいはれませぬ。ちと物好を替てごらうじませと、客のお蔭ですぐる奴が、來る程の大臣を、おしこなして、是は三四さまには此比御出を見かけませなんだ。盆前が近いと思召しての身用心と存る。そんなちひさい心では、礒ぜゝりも御無用〳〵と、まだ座敷へもあがらぬ先に赤面させける。世間はひろし、こんな所に、何が見込あつて、結句外よりははやりぬと、此茶屋で打こまれしもの、江戸に來ての物語。聞ば爰元にもそれに毛頭違ぬ末社あり。あく迄粋だてをいたし、大臣高う



のぼれば、旦那も余程よい所あれど、折々あの潜上でくさると、しかも大勢の付合の中で、たか〴〵と申。女郎勝手ばいりをしげくして出れば、節々勝手への御見舞、酢かけの鮹に湯づけ食は、必あたる物でござりますと、よういふ顔にて太鞁の口から、ばちのあつたる事と、皆人にくみてつれざりしが、今見れば所々の開帳場へ出て、古編笠着て、大臣粋に成やうの相傳書とて、何やら封たる物を賣て口を過ける。何をか書て置けるやと、とゝのへみれば、粋には金ばかりつかうてなるものにあらず。はじめから事知の末社をつれて、諸事是が粋なるしこなしを見ならひ、それに氣をつくれば、つひ粋に成事なり。麒の尾に取つく蝿は、一日に千里をゆくがごとし。むしやうに金をまきちらし、影でわらはれ給ふな給ふなと、扨もおのれが太鞁持た時、智恵だてをいたして、夫がいになつて、今あのざまになりても、まだかしこだての止ぬこそ笑止なれ。何ほど末社が粋なればとて、太鞁の座配を、大臣が見習うて何の役に立べき。太鞁の粋と申は、無欲な顔して大臣に思ひつかれ、あなたから心の付様に仕掛るが粋なり。こんな事大臣が知て、其心になつてよいものか。まだ粋な女郎にあふたらば、馴てから酒事のおもしろい、はずみを、見おぼえ座配も能、氣もこなれて自然と粋に成事もあるべし。しかし必竟此道の、極意は只金銀なり。かならず粋になつて色道においては、よく鍛錬したる男、えては揚屋の門を、夜も編笠着て、通るやうなが多きなり。然ればいづれもあんまり、粋になる事をよい事ぢやと思召すな。粋に成と、金が皆になるとが一時ぢやと大笑ひいたせば、其中に大商人の心の廣き、武藏野の色里、たてよこ十文字やり手のはつが、私金の取手おき所迄おぼえたる男のいへるは、粋にもせよ野暮にもせよ、とかく銀始末しては、片時もおもしろげのない所なり。世間に商がないといへど、爰のぐわらりとしたる事、神鳴も虎の皮の褌とき掛、太鞁打ては大豆買氣になり、さんちやの見せかけ姿を、ながめて、あはれ一角あらば、今宵一夜の稲妻にせんと、天にかへるさをわすれて、終に天笠牢人と、なる太鞁のかはゆい事なり。いはんや地をあゆむ人間、たま〳〵全盛の世にうまれ、金銀づくでなる戀を、おもふまゝせぬは無念なり。色里も次第に銀のくらゐづめに成ける。此ほど家質に銀かるさへ、大かたの吟味にてはかさ

ざりしに、爰でつかふ銀はどこで借だしてつかひけるぞ。世にない物かとおもへば、澤山に成物は銀ぞかし。此まへ吉原の太夫其身の重さを目替にして代銀渡し請出しけるさへ、世界の取沙汰、又もなき事といひしに、今の世の薄雲、隨分花車づくりな女郎にて、十三貫目はありなしの姿を、金木の三郎重家といふ大臣、金子千兩にての身請。銀につもれば六拾貫目なり、五度、目にかけての銀子なり。時代とて是にもさのみ肝をつぶさず。此大臣薄雲を請出して、貳年半目に算用して、右の六拾貫目揚づめにして相濟、今より末々大分の銀まうけとよろこび、一日も長生するが徳と、隨分身の養生を專にして、浮世をしまうたやの氣さんじは、薄雲願ひにて上方見度の由。それこそよい氣のばしなりとて、同道にて都にのぼり、祇園清水嵯峨あたご土器なげも、くるわにて、聞しよりは興あるながめ。此は春ながらむかし傍輩に聞なれし名なればゆかしく、高雄に立寄紅葉の秋を思ひやり、なき名のみ、高雄の山といひたつると、太夫古哥を思ひ出れば、大臣取あへず、君は愛宕の、峯の薄雲と、かゝる花車なる事のみ申て、毎日諸所に出かけ、よい中の詠歩行、又なき樂しみと、聞傳てうらやみぬ。此大臣の舎弟龜井の六郎三といふ男、是また兄にまけぬ大臣、殊さら若くして氣盛なれば、人の下手につく事をせず、万事上かさにばつとしたる遊び手。不斷末社十人づゝめしつれ、是を十人の殿ばらと名づけ、其身は小栗判官と名のりかけての大酒、鬼かげ、といふ口の强い遣手にも、小判の轡をかけぬれば、前膝をりて忝ないを二三百も申ぬ。今日も又例の殿原ともなひ、いつもふせたやにて昼からのみ出し、夜に入ほど酒事染て、よいきげん過る時、禿蠟燭の心をきるとて、あやまつて火を消、勝手へともしにゆくうちに、池の庄助といふ太鞁頭、すかさぬ男にて、酔まぎれに、大臣かはゆがらせらるゝ　の、

にくや男めと、そばなる煙草盆引よせ、煙管の雁首引ぬき、煙草のやにを左の頬へしたゝかつけて、大臣へ此品をひそかにさゝやき、燭火あきらかにならば、左の頬先に煙草のやにのつきたる男こそ、私を迷惑がらせしものと、よういふ顔してつけられければ、大臣思はれけるは、誠にうつくしい上を、我人のすくやうに拵へたる色なれば、人として是にまよはぬはなき筈を、太

鞁持役と、家業を大事に思へばこそ、勘忍もいたせ、十盃機嫌の上では李下に冠を整さずと謹み給ふ聖人も、人の買女郎に、輿風だきつかれまいものでなし。こんな所をあらためぬが、分知の第一と、座中の末社共にむかうて、汝等此暗き中に、左の頬先に、早く煙草のやにをぬつた者に、金子一角はずむべし。遅きとならぬぞとの給ふ。聲を聞と、面々に長徳寺が仕事と、左の頬先に手ばやくやにをぬつて、此しむ事壹歩には安い物ぢやと、大笑ひする所へ、勝手より火をともし參つて、蠟燭へうつせば、一座夜のあけたるごとく、いづれも我先に罷出、私は左の頬はのこらず念入てぬつたと申せば、拙者は左のかけがへに、右の頬まで此ごとくと、面を出してかしこまる。是も一興と約束のごとく、壹角宛下さるゝ。何になる事やらと、人此事をしらず過けり。其後大臣正月の事、氣さくに請合ひ給へど、重手代異見最中の時にて、手前銀自由ならざれば、日比の末社共をひそかにめされ、此銀才覺の内談。いづれもかの里へお供申時の樣に、心得たとは申さず。先承り合て御返事申上んと、猿丸太夫の顔して、何共明りの見えぬ談合。大臣氣の毒の頭をわつて、案じられしに、さあ内談になつては、前巾着に二朱が一つなかりき。末社がしらの、池の庄助、御笑止に存奉り、諸方を韋駄天のごとく聞ありき、色々智恵を出



して、小田原町より調ふ口を聞出し、命にかけて働き、やう〳〵才覺いたし、正月買の間にあはし進ければ、大臣喜悦かぎりもなく、十人の中にすぐれて、汝壹人此はたらき、末に至りて家買てもらひたき願ひ有やとゝはせらるれば、いかな〳〵さやうな願ひ存もよらず。いつぞやふせたやにて醉にうかれて、女郞のふところへ手を入、左の頰先へ脂をぬられし男なり。其時の御情を報じ奉らんと存てと、泪をながして申上る。大臣此心をかんじ、手前よき首尾の時分、かの女郞を請て下さるべきとの御企、近比忝なき御事ながら、其女郞いかにしても、其夜のしなし情あるとは申されず。勿論ほれてはをりますれど、下心いやと申す。それは粹なる汝には不了簡なるべし。我等ふびんがる內、又汝がいふに任て、うしろ暗い事有ば、今以ていやといふ筈也。其時は我を大切におもふ心から、汝が心任にならぬ所、婦妻にしては、宿を出歩行太鞁の女房に、打てつけた事、留主の中に手むさい事があるまじ。ひらに持てとあれば、庄助重ねて申は、其夜の事大臣手前を思召て、拙者心のごとくなり給はぬ所はよし。然しそれもいやならばいやにて、我心ひとつにてをさめおかるゝ筈なるを、ほれたといふ男にしるしをつけて、旦那の耳に入らるゝ心根、いかにしてもむごし。情しらぬ大臣なれば、卽座に隙下され、重ねてつれられぬには究た事。思へばこそほれもいたせ、それをからき目を見せんとは戀しらずなり。必竟拙者大臣よりまさつたる襟の厚き者にあらば、私銀の才覺男にと思召て、其夜も情あるべきが、いうても太鞁の身なれば、打てもたゝいても、物にならぬといふ所を合點して、大臣への注進だて、先は欲のふかい心から也と、いやに極めて申せば、龜井も尤の事に思うて、夫よりして女郞替て、今の小倉にあひそめ、かゝる太夫に今迄あはずに過ゆきし、月日ををしみしも斷ぞかし。とかく千人の中にすぐれし所あればこそ、多くの數女の中より太夫職とは成給ふ也。色有て情あつて、面白い事有て、　に誠有てよい事揃うて、いつ迄もかはらぬ御心は、松の位に有と、買おぼえし人の申ぬ

けいせい色三味綫　目録　鄙之巻

伏見撞木町女郎の名寄せ

▲一もんじ屋内
一夕ぎり　一花さき　一志づか　荻
一よし野　一今さき　一よし野
一小藤川　一中川　一今川
一虎しや　一大さき　一かほる

▲まつもと屋内
一屋くぎり　一うち雲　一まつお
一とやま　一つまぎ　一みうと
一さもん　一大さつ　一まつ川

▲かめ屋内
一井津み　一花さく　一吉づう
一玉さつ　一大ぎし　一おきの

▲あぶらや屋
一松さん　一さく　一きつ
一高ちよ　一みつさ　一とよか
一みうま　一かんなり

▲八まんや内上　ともゑ

▲扇屋内上　見かさ　一とくさ
一うね　一うそお　一うきち

▲さんかや内上　世花のと

▲河内屋内上　大なつ　一大いそ
一初さき　一うらひ形　一さつま
一高尾　一おかの　勢喜四十九人
一わづ屋　かつしや　伊右衛門
一同　見んちや　荻右衛門
一同　やまと屋　傳右衛門
一同　江戸屋　吉右衛門
一同　さく屋　長八

一右撞木女郎惣合十八人　壹匁より
半夜六九匁　七匁迄の格
撞女郎入まで

大津柴屋町女郎の名寄せ

▲井筒屋さうへ内上　天神かつら
一天神やちよ　一同　うちち　一同　あかし
一半夜長ちよ　一半　こまの　一半　さよち
一同　いちし　一同　うきち　一同　とよ川
　　　　　　　　　　　　　　かよう

▲井づゝや若九郎内上　天神あかう
一天神きの井　一同　わかまさ　一同　かつら
一同　大ぎし　一同　わかぎの　一同　半大夫
一同　かのう　一同　はつね　一同　大ちう
一半夜ちあぢ　一半　小あぢ　一半　つきのよ
　　　　　　　　　　　　　　いちのまい

▲つれ屋惣七内
一天神あちご　一同　ちくご　一同　夕ぎり
一同　さよし　一同　うかる　一同　わかまさ
一同　とのも　一同　あかね　一同　さよ衛
一半夜さつき　一半　大いそ　一半　みちのぎ
一同　花さき　一同　あふま

▲さつまや源六内
一天神色おか　一同　ちかの　一同　まつかせ
一半夜みうら　一半　玉しう　一半　わかし
一同　田むら　一同　ちとせ　一同　あかね
　　　　　　　　　　　　　　とりへ

▲井筒屋半右衛門内
一天神屋まき　一同　きんご
一半夜うねん　一半　うづまき　一半　おくら
一同　いくの　一同　三川　一同　よんど

▲つがや作右衛門内上　半夜さる花
一半夜おとま　一同　いよ　一同　まさく

▲うしまやあい内

一半夜さもん　一同　まるも　一同　せんざき

▲まうさや源右衛門内
一半夜小太夫　一同　とくの　一同　あさき

▲さうや四郎兵衛内上　半夜たまの助

一天職かうち 一同乃せ 一同なるせ
▲さゝや六右衛門 天職 今川
一天職せんじゆ 一同いすゞ 一同ちりま
▲うぎや又左衛門 上天職 くものゐ
▲竹屋吉田六郎 上天職 見らう
▲ひしや長右衛門 上天職 今川
天職女郎合 廿八人
半天職女郎合 五十人
一揚屋 丹波屋平右衛門 一同 まるや源右衛門
一同 多田屋四郎兵衛 一同 さゝや彦兵衛
一同 つるや伝兵衛 一同 ひしや孫兵衛
一同 かぎや利兵衛 一同 竹屋喜三郎
一同 扇屋十兵衛 一同 まつや茂右衛門
一くもゐ 半天職 揚八匁
一半天職女郎 揚もと
右しかち 半天職わたし
そのほか ありのたり
南郷又 女郎の名也
▲中屋三郎兵衛門
一さざなみ 一さかやま 一かせん
一いづみ 一きんど 一山ざと

一まり山 一こねぐ人
▲たちばなや九左衛門
一花山 一きんご 一まん山
一このへ 一中入ぐ
▲よこがしや吉左衛門 上 よむらさき
一さよみ 一玉ぐり 一夕ぐり
▲後藤屋権之丞門
一ともさげ 一さとまげ
▲大津屋治兵衛門 上 ともかり
▲かんざしや長兵衛 上 見かさ
一さる丈 一乃せ 一和ぐさ
▲山ぐちや六左衛門
一うかる 一見ごま 一むら
一たか浦 一玉ごま 一大ぐし
一玉山 一なる田 一うき花
▲紙屋久左衛門 上 高井
▲かぶらや加左衛門
一さか川 一えぐち 一見よの
▲まるや平兵衛門
一うそお 一小むら花 一うこん
一あづま 一よしの 一つしま

一しづま 一おり山
▲中山平左衛門
一かたら 一とのま 一かの川
一和むら花 一せやま
▲池田屋中六左衛門
一さくさ 一ここのへ 一玉の井
一おらら 一小るんぜ 一のゝか
一大たり 一玉の戸
▲東屋庄九兵衛門
一わかさぎ 一さより山 一よしう
▲平のや治家門
一とわ川 一きよ川 揚合六十三人
一揚屋 山ぐちや六兵衛 一同 平のや治兵衛
一同 かまちや平七 一同 茂おや甚兵衛
一同 いづゝや吉兵衛 一同 なべや弥兵衛
一同 山城屋長次郎 一同 山ぐちや新六
一同 天満屋治兵衛 一同 京屋与四郎
一同 さくや又兵衛 一同 すゞや利兵衛
一同 大坂屋吉兵衛 一同 かまた屋
一同 丹波屋助兵衛 一同 十まつ
一女郎一様 十数匁 ともに八十八匁之

一かこひ女郎百人（壱両）　壱匁ゟ七匁まで
わげ女よぶ九匁　もん日も十六匁也
端ちよろ女郎の名よせ
▲くろ江本屋内
一太夫　くまの　　壱人也
一大天神　八はし　一大天神　こう山
一小天神　ゑんしう　一小天神　むさしの　一小天神　のうせ
一同　よし山　一同　みちしば　一同　浜むら
一同　とのも　一同　いづく　一同　とこなつ
一同　むらさき▲くろ江こまや内
▲南辻屋内
一大天神　かわさ　　一小天神　花むらさき
一小天神　きよ山　一小天神　しきしまさと
▲大和屋内
一小天神　かうぜん一同　あつまの　一同　志賀の
▲同名じき屋
一大天神　さく山
一小天神　うぢ山一小天神　かうぜん▲くろ江さくらや
▲小松屋内　一大天神　小太夫
一小天神　ゑもん一小天神　あづま一小天神　竹川
一同　まくら一同　花月一同　こむらさき

▲くろ江屋一小天神　とこ八一小天神　小ぶん
一同　女之介　一同　志きぶ　一同　山しろ
一同　屋まと一同　まうき一同　わかの
▲酒屋内一小天神　志かの一小天神　あづま
一小天神　とこ山一同　もしほ一同　きんご
くろいろは一くろ江さよの
▲わげや分　わげやふ（?）一中の加賀
一小松屋（?）一香ぐや利兵衛一さがみや安兵衛
一天満や（?）兵衛一酒屋九兵衛一山本新兵衛
一太夫壱人也　太夫五十三匁一大天神人数（?）
一小天神四十人（?）　天神十七匁まで
女郎数都合五十壱人（此外かこひ端女郎は不記之）

(一) 女郎の心中をついて見る鐘木町

千とせの松にかゝる　藤の森の大臣

二三年跡迄は手前あぢをやつて、お茶のよいといひし、上林のかをるを自由せし身の、世に銀づまりほどかなしき物はなし。異見いふ人もなきに、ひとりとやめはやめけれど、揚屋の拂分もなうしちらかし、西嶋の道はたえたれ共、遊びつけし身なればたゞもゐられず、宿は伏見へ屋根木見合にゆくと、普請する銀があれば、色にしあげるなりをして、子細らしく軒口を見あげ、どうでも來年迄はまたれずと、よい加減な虚を申て、七つの鐘をつく比鐘木町へと心ざして、毎日かの里の噂きく耳塚の前なる、九右衛門が所へ立寄、すこしも早くと駕籠をいそがせ、三枚肩にておさせける。人此道にかゝつてういて來る事科でなし。既に九右衛門がかはゆがりし白犬、日毎に客の御供して、揚屋の座敷迄推參いたし、女郎のあがり膳を頂て、尾をふつて悦び、是にあぢしめて、かごにのる人あれば、喰かゝつた鯛の骨をすてゝ、いさんで駕籠について、三里の所を熱茶一杯のまぬうちに、京屋の七左衛門方につきて、是よりかごをのりはなし、八幡屋傳右衛門おく座敷に座をさだめ、女郎目利といふ事もなく、兼て聞およびし、一文字屋の夕霧を申てやれば、お約束有よし、どなたにかと、宿の男が罷出て極めたがる。然らば龜屋の井筒か、扇子屋の浮舟にか、のつてみるべしといふ。是よいお物ずきと、申だちにして、しばらく有て浮舟さま御出と申。先一だんと見ぬ先からはや浮舟にこがれて、待うちの退屈、肴の蒲鉾犬に喰せてさんたさせ、是も氣のはらぬ太鞁とおなしと、興にしてゐる所へ、又男罷出、始てのお客さまに、何とやら申上るもと、もみ手をするを、皆迄いやるな。浮舟もつなぎとめる男あつて、もらひたいとの訴詔かといへば、八幡旦那は見どほし、いかにも御意のごとくといふ。戀はたがひ事、とかく先の首尾よき様にと、あまり結構過たる御了簡。此かはりに夢川さまとて、未だ世間のお客の御ぞんじなき、手いらずの飛切さま、是ばかりは相違なうつれまして參りませうと申。なる程なる程其君見たしと、是に極めて早速御出忝なく、川えびの吸物も所とておもしろく、九右衛門まじりに酒のんで、むかしに替る遊びながら、是も宿に居

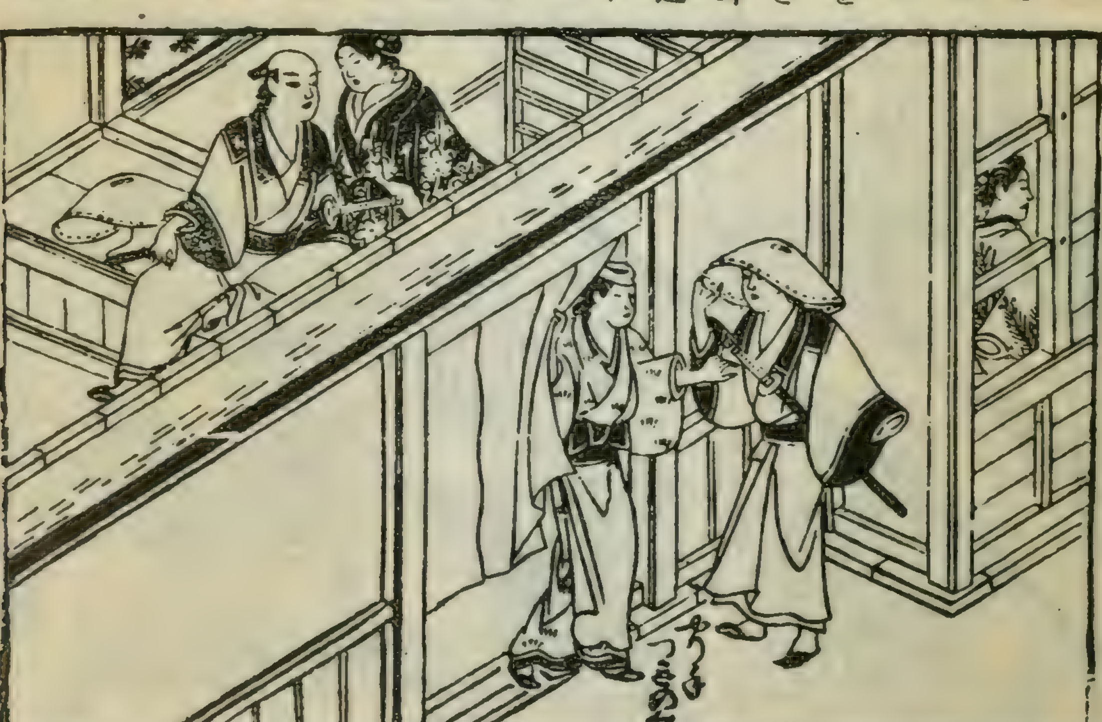
て女房共が、世のせはしき咄し仕かけて、耳こすりするを聞て、ぬるい茶を勘忍してのまうよりは、大きにましとたのしみ、　　、夢川がかはゆらしさ、　　、物は　　て、　　素人めきたる所、いかにしてもふしんと、　　、　　、　　ならぬ所と　　・　神ぞ〳〵御所女の、　　、是を誠の堀出しとは申べし。此女郎おもてむきはさもなく、内證のよろしき事、たとへば取葺屋根の住居して、銀もつてゐるやうな物なり。死ぶさの家作りに借錢のある心地は、歴々の太夫達に、　　の所のよろしからぬを、世間で手前が惡いといひならはせり。此風味に喰つき、殘りし諸道具賣拂うて、世を夢川と渡りて、うつゝのごとく遣ひなくして、今見れば竹田通に、竹の子笠の骨を仕て其日をくらし、不斷煮ぬき食を好し腹へ、さらず食もあたらず。腹のふくれしまゝに、上林の元かをるとの口舌咄し、いふ程其身の恥にして、近比しやらくさい事と、きく人笑うて通りぬ。

爰に丹波橋の二三といへる分知、此里において肩をならぶる者なく、むかし繁昌の時はしらず、今のせばき所には、氣の廣き大臣也。一生したい事して、とまり時にとまるが、色道の奥義と合點して、いまだ遣のこりの金のあるうち、此里通ひも今日迄と、鐘木狂ひの鐘打て、ふたゝび足を踏こまず、氣さんじに思ひ切けり。是におとらぬ大臣風俗しこなし二三に似たとて、二代の二三と名に高く、手前ずゐぶん慥なる身躰。此里に太夫などあらば、松にもかゝる氣ざし、藤の森に住所をかまへ、表向は藁葺にして、百姓の家らしく見せかけ、内の美なる事、つど〳〵いふにおよばず、銀にあかして、工手間のかゝりし物ずきの大座敷。外から見ては一日がりにして、爰であそびなば、心ものびてよかるべしと、浦山敷おもへど、我物になつて不斷みれば、鼻につくがごとく、手前に少しも心とめず、間近なれば朝暮十町目に通ひて、のみかけひつかけ、樂しみ此里にありと、心のまゝの榮花、いづれあらばせいでは、さながら心も若やぎて、千歳といふ女郎に、そも〳〵水上の日よりあひ初、今猶ふかくいひかはして、あさからぬ中となつて女郎も此人ならではと、物になる

客を外になして、文のやりくりさへせざれば、いつとなくあふ人たえて、物日のさびしきを、皆二三請取、いたり穿鑿になつて、一人にかたづき、千歳は少し浮名の立に、心のつよき女郎にて、世間なんとも思はず、誓紙髪切、爪指入ぼくろ、身を割とは是なるべし。此上は命を捨るの外はなし。段々にくからぬ心ざし、風俗しやれごしらへ、其年も勤ざかり、女はさもなくて、後つきにうまき所あつて、　に玉の助もおよばぬ、ひ曲自然とそなはり、逢人毎に戀をのこせり。有時二三絶て二月あまりもゆかざりければ、千歳は心ならず、一日に千度文してとひ參らすれど、詞の返事さへなくて、あはぬ思ひにしづみ、大方は泪でくらし、勤も心にそまぬ所へ、二三が連の夜深法師といふ、深草邊の樂人、難波の人にさそはれ、大坂の色町見物にゆく門出に、此里へ立寄を、ちとせ早くも見つけ、格子より聲かけて呼入、二三が見えぬ樣子をとへば、此法師もすれ者にて、少せかして慰まんと、けうとい顔して、扨は貴樣は、二三が此比の事御存ないか。近比それは遲まき也。今は嶋原がよひに隙なく、よしうを手に入レ五條の古手大臣と張あふ最中、爰の事などいかなく〳〵おもひ出す事にあらず。あんなぶ心中ものに心をつくさるゝは、大きなる御損、さらりと氣を替て、當分物になる客の心に入たまへと、誠らしう薬を焼て、散



も灰もつかぬやうに、にべなしにいひ立にして大坂へ下りぬ。ちとせはきくと胸をいため、今などかうした思ひをせうとは、ゆめ〳〵思はざりしに、さりとは聞えぬ御仕形。とかくこれまでと心中かためて、最期の一句と文したためて、御返事次第に後とはいはぬ心底。古郷の親達の方へも、此世の別れの筆を殘し、万死覺悟を極め、二三が返事を待時、まだ秋ながら素紙子を着て、深編笠に竹杖、たよりなき風情して門口に立しを、無用の非人の色好、往來の邪魔ぢや。あちへゆきやと、遣手がはしたなく申せば、此男出て行を、千歳ちらと見て、今のは慥に二三さまなりと、人をしてよぶ迄もなく、徒跣にて表に走り出、紙子の袖にすがり顔を見て、何かなしに泣出し、爰は人目もあれば、中戸の腰かけ迄ともなひ、笠をとらして、先此姿はととへば、二三耻をすてて顔をあげ、今爰に來るは、死ぬるほど苦しけれど、今朝油屋より屆し文を見るに、我等身の上あしざまに、何者かそなたの耳に入レ、事なき恨の、返事もあらずば、今宵もしれぬ剃刀わざとの覺悟、極たる文躰に驚、そなたの命のほど心もとなく、あさましき姿をはぢず斷に斗參つた。扨我事は假初にせまじき夜あそびに、身躰のこらずうちこみ、手と身になつて、今日はくらせ共、明日過る便なき身となれば、俄に思ひ立て、越後の村



上に母方の伯父あれば、是を頼みに罷下るなり。然ば日比互に申せし事も、勤のさはりにもなればなり。今よりは我事死うせしものと思ひて忘れ給へ。更に恨に思はずと、紙子の糊のとける程泪をながし語れば、さて〳〵かゝる事とは知らずして恨み申せし段々御ゆるし給はるべし。さうした事にて中絶申は、世にあるならひ、日比の御心には似ずして、氣のよわき御事。縦身を捨命をかけて、あひませいではおかぬ女也。浮世のならひしづむ瀬あればうかむ瀬有。御身上のつぶれし事さのみ御なげき有まじ。只御身の恙なきこそうれしけれ。とかく命は物種とさま〳〵いさめて、宿へかくとしらさるれば、もとより馴染の宿と申、殊更下々迄もお影を忘れず、是はと一家驚先二三さま四疊敷の靜なる方へ入まし、様々のもてなし。さすが京近き所なれば、下々迄の心和らかに情有心づかひ、千歳身にしては數々嬉しく、先お盃と心よく呑かはし、紙子ぬがしまして、肌なれし下着をきせまし、三味取寄て、いつよりは調子高く歌うて、昔になしていさめる心、魂にこたへて嬉しく、扨も扨も今日の首尾、以前に替らぬ志、身に余りて滿足致した。此上は妻女にしても侮りなき心底頼もしし。誠は其心根を見て引ぬき、一生宿の詠め物にせんため、身をやつして來れりと、一年の所を數百兩に替て請出し、宿にも滿足致す程悅

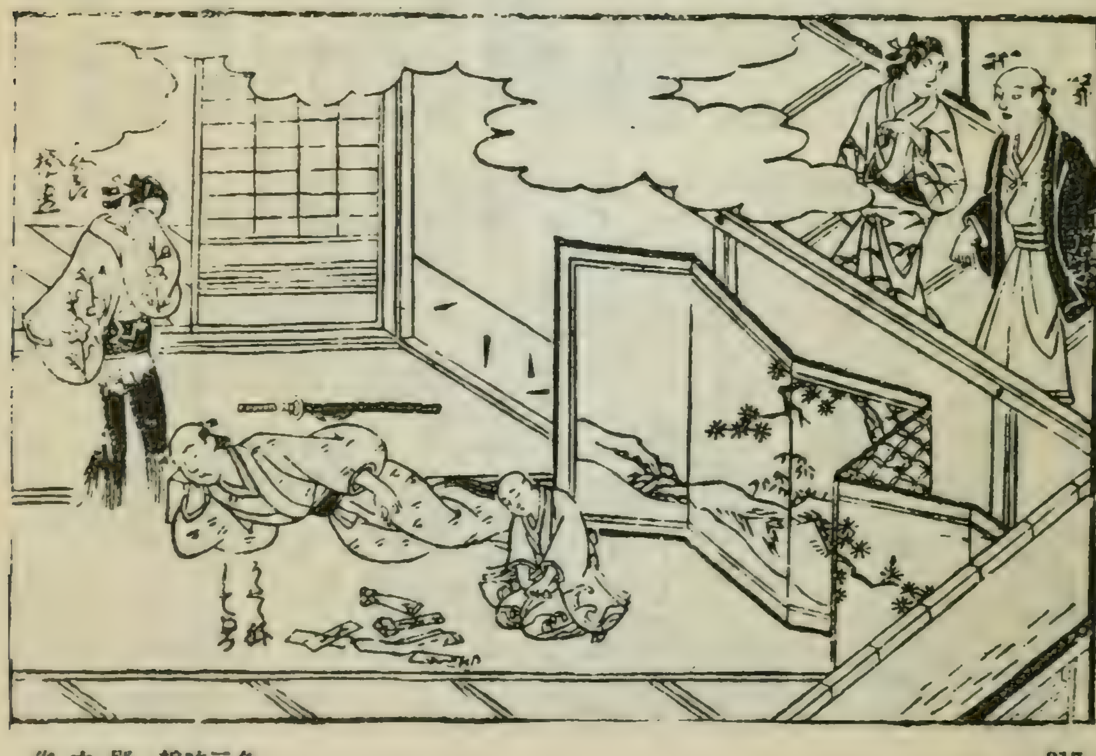


ぶ物をとらし、万事首尾よく仕舞て、隨分世を樂自慢して、夫婦よつて毎日の酒事、命を延る千年も、過れば毒に極まつて、却て命をちゞめ、二三は終に此世をさりて、千歳がなげき、卽座に髮切、むかしの姿はなくて、今はすみ染におこなひすまして、今そかりけり

三 戀の燒付柴屋町の門立

見知り越のわる口、いひがち高名さやとがめ

東山は青葉茂りて、梅も櫻もいつしか根にかへり、番の風も吹をさまりて、楞は今を盛に千團子にぎはひ、取分子持の嚊共がいのる神とて、三井寺に綿ぬきの袷見せかけ、都よりの詣車にせきあひ、是も替て面白しと、三條の西に伊三といへる男、お出入の米屋吉六とて、大津にしるべ有者とつれて、大橋より駕籠にのり、札の辻にておろさし、是より三井寺へはあゆまずして、先柴屋町に立寄、南の門より入れば、京よりわづか三里のちがひで、端女郎の風俗各別替りて、きる物しだらくに帶ゆるくし、白粉へげるほど厚く塗て、よしあし共に三味線をにぎり、すこし顔をそむけて、何やら一ふし宛うならるゝ。立寄人を見れば、いづれもいかつらしき男、大脇差さすも有、又ふところに鼻捻かくし、かりそめの事にも詞とがめして、情らしき事はなくて、喧嘩がまへもむ



つかし。戀も遠慮もむしやうやみに鐵炮はなつごとく、出るまゝの悪口、花鳥さまかき餅が好やら、お歯黒がはげて見ゆると、しかも近付さうなが、見知りごしにあだ口、さりとはやかまし、さも、うれしや比叡の私雨に四方へにげ散。いざ雨やどりがてらと、揚屋に立寄、何かなしに座敷へとほり、哥仙小太夫など申君達をむかへて、都風の酒事の、あぢな所をのんで見せ、是から　段ぢや。兩人が　らせて、伊三は哥仙に哥枕してよい夢を見ての後、床の中へ盃銚子取寄、さしむかひに酒などのみかはし、随分女郎のうれしがる事いひつくして、又の御見と起別るゝ。そも〳〵此男美男にして、色にかしこく、一座面白くて、こゑ能哥うたうて、三味も小野川流をぬけて、其上に　大分あつて、万そろひ過てよいといふ上也。是にて女郎なづむまじき筈なし。先戀といひ欲と申、何ぞあらば女郎の方から、やつてなり共あふべき大臣、哥仙初會より深く此男に心をうつし、百石町の思はくを外になして、語りたるあけの日より、毎日都へつてをもとめて、始のほどは今一度あひましてと、おなじ事斗書續しが、後には泪といふ字ばかり百貳百も書て、ある時は爪をはなし、指を切て僞りならぬ心底を見せけれど、都の戀に隙なき男、いつぞは逢てとらすべしと思ふ心から、返事だにせずうち過、今日こそ色に暇あり、いでや大津の遊女に逢て、此比つもりし思ひの、算用濟してやるべしと、思ひ立、駕籠など申て男作る内に、昨日の酒氣に頭おもく、何とやら心すゝまず、それなりけりに枕引よせ、二日酔の息をぬくべしと、はりあげて時行哥をうたふに、天井に聲有て一能〳〵と讃る。ふしぎさに林才といふ小坊主をめされ、己我歌ふ哥を、賤しき身として譽るは推參也と、燒煙管したゝかに頂き、罪なくてたゝかるゝお煙管と呟くを、腰打と召るれば、是非なく畏てお腰をうつに、また何となくうたふに、先のごとく一能〳〵と讃る。林才驚き、まさしく今のは女の聲なりと申。次の間に女はゐぬかと吟味あれど、林才より又人といふものは、屏風の押繪より外になし。誠に雲の上人は、大和哥にて鬼婆々も哀と思はせ給ふ。我はまた一節の小哥にて、目に見ぬ女の聲を聞とうち笑ひ、其後すこしまどろみしに、いつぞや柴屋町にて假枕せし哥仙が俤、其時よりは少し面やせて、しをしをと泪ぐみ、我流を立初八年の日數經うち、揚錢に任す身なれば、貴賤のかぎ

りもなく逢見し中に、馴染を戀の種かたまりて懷姙せし程の男も、かいま見し君にくらべては、比叡の雪と龍宮の井戸ほどの違ちがひ。いかなる御緣にや、是ほどにも思ふものか。かく白地に申さば、只惡口の世の中、所がら柴屋町の燒手にてと、思召の程もはづかしながら、われ僞らぬ心底は、是にしたゝめ置侍り。浮世のふしやうに今一度、誠の御見なりたし。さもなくば追付死にますといふ。それは短し命ありてこその戀なれ、かならず短氣な心をもたれな。成程末かけてねんごろに語るべしといへば、近比うれしいお詞と、悅ぶ色見えて四足五足音して、妾は消えて、さらばといふ聲に夢さめ、あたりを見れば逢初し日より、今朝までの僞りならぬ思入を、一つ書にして、奥に諸神を誓うて、恐しき程誠をつくし、名書の下を血にそめて、哀成筆の跡をのこしぬ。かゝる思ひ入深女郎もあるものかと、其後は折ふしあうて、心を慰めける。世に女の執心と借錢乞ほどおそろしき物はなしと、因果經にもとかれたる由、物知れる出家の申されしも思ひあたれり

三 木辻鳴川に深入する色男

二千兩皆になして
今口過に一文の傾城買

奈良の京春日の里に、諸分知るよしにて、かりそめながら心やすい色狂ひとても、奢ばはかのゆく物ぞかし。京大坂のお上家な遊びもしらず、いきはりといふ事もなくて、面白からぬ酒に長じ、我儘いうて、とにもかくにもねぢ上戶。百万が厨子といふ町に、若草屋の呑助とて、木辻鳴川に大事にかける箱入の大臣。此里の名取、秋篠といふ女郎と深くなつて、三年半に弐千兩の身躰もみつぶし、住宅を賣て退時も、いかな〳〵氣をしなさず、其儘昔里通ひせし衣裳にて、靜に町をねつて立退。あの氣でなければ、あのざまにもならぬ筈と、近所の親仁共指ざしをして笑へば呑助見かへり、己が銀はつかふまいし、身が物ずきでする事を、無用の指ざし。色遊びのおもしろいといふ事を知ず、一生黑米の打込茶を呑、所から奈良漬の香の物も、煩はねば喰ぬなりをして、鱶のさしみに、生諸白を呑うで來た男をそしるは推參なりと、少しも憶せず、手前よい時に引かきし、秋篠を供につれて、三條通に色里で付あひ、心やすくなつての上に、兄弟の約束せし、三笠屋の常といふ大臣、まさかの時は見捨じとの詞を賴みに落着慥と安

堵して、この方へ尋ゆけば、此男も算用なしの色狂ひに、身躰くづれて分散となり、門口に負ふせ方より、嚴しく番を付置折節なれば、あるじにあふ事もならぬ首尾にて、頼む木のもとに、雨もたまらぬ三笠屋の當手も違うて、ひとへに目くらの杖を失ふ如く、心は闇となりて、くらがり峠の麓に、我幼少の時、少の間里にゆきし、五郎作といふ百姓の方を思ひ付て、爰になげきをいうて、半年余りすみしが、いかにしても居喰にはしがたく、一稼かせいで見る氣ではあれど、何をせうにも元手なくて、いろ／＼思案して見れ共、俄に鋤鍬の荒働もならず。夫婦談合して、近郷の麥秋を心當に、柏の破れ三味線才覺しだして、秋篠にひかせ、其身はあそこ爰きりぬいて覺えし、文彌節の上るりを語り、口過のために大和めぐりを致し、百姓の家々にて半分は僞を語れど、聞手が律義なれば、あらいたはしや、すてんどうじはでも合点して、一つかみの麥になる事、天道人をころし給はぬとは、こんな事をいふべし。往來の人の其事となく笑へば、扨はきやつめは一節なる奴かと、隨分覺えし所を語りなほせど、誰足とめて聞者もなく、耳梨山をすぎて、かつらごの池といふ有り。故ある事にやと里人にとへば、むかし三人の男ありて、一人の女を思へり。其女の名を縵兒といひしが、三人のおもひいづれも切なりければ、從ふべき方を思ひ煩ひ、



此池に身をなげしより名とせりと語る。扨も其女素人かな。三人の男共に、隨分物つかはして、どうやらなる樣で、ならぬ仕掛してもがかし、かたひしに身躰かたづけてやれば、手薄奴から、そろ／＼あいそつかして思ひきるものなり。戀も情もいにしへは律義にして、ようも只は叶へてやつた事ぢや。但シなりひら時代には、男が大せつで、女の方から物やつてあひし事か。あつぱれそんな世にあうて死たしと、今日の身の上を案じはせいで、何の役に立ぬ事を思へば、むかし全盛の春も過て、夏來にけれど冬裝束、汗にぬれて、日當りに背中ほすてふ、あまのかく山といふ邊に、れき／＼の隱家、おもてむきは萱軒にして、中戶より中のきれいさけつかうさ。めつたに奥ゆかしく、內をはるかにのぞけば、食燒女も里びずして、あまたそれ／＼のめしつかひ女紫のうしろ帶目にたち、是は天の岩戶のいか成大臣のかくれ給ふ屋敷ぞ。手力雄の神力あらば、あの奥の杉戶引ひらいて、取て置の女躰の姿をがみたし。さぞ面白かるべし。爰はいけもせぬ上るり所にあらずと、秋篠に隨分間の手あぢをひかせて、頭をふつて投節をうたへば、こしもとらしき女、何やら承りて表へ出、奥さまの仰らるゝは、何やら夫婦の人にとはせられたい事あるよし、くるしからぬに奥へ通り給へと、兩人をともなひ、打はれし大屋敷へつれて行、こゝに暫く待た



るべしと、二人を置て勝手へ入ぬ。是は何共合點のゆかぬ事。もしは夫婦の生肝でもとつて、妙薬に入る合點で、こんな奥の間へ引入し事か。同じくばうまい物喰しておいて、ともかくもしてくれゝば、まづ食悦だけの徳也と、世につれてさもしき心になつて夫婦息もせず畏る。所へ又最前のこしもと出、こなた方は何ゆゑかやうの淺ましき姿には成給ふ。先より奥さま物の透より、御覧なされ、いやしからぬ男女。若は色事にてかくはなりはつるや。様子を尋見よとの御事にて、是までまねき申せしなり。自然戀より品くだり給はゞ、くはしく昔を語り給へ。男つき女の風俗、兩人共に一風あれば、定て外の事ではあるまじ。戀であらうとおどしつけて申せば、近比奥さま又はおの／＼迄目高なり。成程此ざまになりしも、つれたる女ゆゑと申。嘸やさうこそあるべし。奥方のお慰みに、有様に咄さるべし。あれなる御簾の中にてお聞なさるれば、ちと調子高く語るべしといへば、呑助畏て、そゝけし鬢などなでつけ、今更申もお恥い事ながら、私事幼少より有たいままに暮、十七の春より木辻にかよひ初て。さま／＼の奢つのりて、此秋篠を請出し、我宿で遊は地女と語るにおなじと、身請せし女を、其まゝかの里につれゆき、毎日のさわぎ。其時分は親仁堅固にて、さま／＼異見をいたし、追付物もらひになるを見るやうなといはれしが、其詞にたがはず、今袖乞いたすも、親へ孝の爲と語れば、御簾もうごくばかりに數多の女中の聲して、どつと笑うて後、御簾をあげて、乳母めいたる年がまへの女、十二三成美き男の子の手ひいて出、我をゆびさして、あの人をようごろじやりませ。大旦那様は堺でかくれもなき分限者でござりましたが、新町の初の夕霧にかゝつて、御身躰をつぶし給ひ、お前さまのお四つの年、おふくろ様と置捨にして、西國へ共申、又は江戸へござつたとも聞ましたが、今におゆくゑがしれませぬ。しかれ共手代衆此家督つぶす事ををしく思はれ、おまへを取立御家相續せんとて、堺の屋敷は祖父さまの御支配なされ、とかく瓜のつるに茄子はならぬといへば、此子が成人の末も心もとなし。只色事の自由なる大坂近くにおく事、千里が野邊に虎の子を養ふがごとし。先此子廿才になる迄は、傾城町のない、人家まれなる里住居さすべしと、御袋様と御一所に、此里にながされ者の様にしておかせらるゝも、傾城狂ひの疾

をこはがりたまひての事なり。これ長松さま御成長あそばし、堺の屋敷へお歸りなされたとて、必々傾城狂ひを遊ばすな。けいせい狂ひいたしますと、あれあの男がやうに、夏も綿入着て、米もらひに成ます。よう見ておいて、こんど泣わすれさせ給ふなと、穴のあくほど指ざして、とくと和子に見せまして、夫婦共に太儀ぢや。もはやよいに、いんでたもと、御簾の中へはいりぬ。呑助夫婦あきれて、是は各別なるおもはく違ひと、少しは腹がたてど、ねだるべき手掛りもなく、すご〱と爰を立出、其後女は呑助に暇もらひて尼となり、昔の名によりて、秋篠寺のほとりに、草を結びて庵とし、二六時中のつとめおこたらず、後世をいのるの外余念なし。かかる佛縁あつて、よい出家になり場を、何の末に頼みもなき身の、坊主をきらうて、十錢たまれば、すぐに酒にして、呑助が今の姿の見にくさ。何をかして今日を暮すぞとみれば、おなじ様なる、ならず者共を語らひ、大佛殿の釿始の群集の場に筵を敷て、辻打太鼓はじまり〱と聲をたてゝ、見物あつまれば、扨お斷りを申します。只今仕りますは、木辻鳴川はやり女郎全盛のなりふり、買手の大臣一座のしこなし、同く酒ぶり口舌のつめひらき、幷に太鞁持のそそりやう、壹角もらうて悦ぶ身ぶり。其外色町に有程の事は、細かに氣をつけていたします。今程は京都に坂田藤十郎、大坂に嵐三右衛門と申まして、傾城買の藝の名人がござりますれど、それは狂言躰で、私共がやうに、手銀を皆女郎に遣ひあげて、大分元手を入置ました、正身の我身の上にあつた事をいたして御目にかけますと、世盛の時分に木辻狂ひをして、さま〲の遊びせし事を、今仕て見せて口過と呑助は大臣になれば、おやまの九平次は、鳴川の女郎になる。ひの木玉の權平は末社の左吉になり、物にかゝりの虎右衛門は、やりての久米になつて、間夫狂ひを改め、とれぬ客を鼻であしらふ所、女郎は物前に無心の長文章案ずるてい、又は退さうな客を取とめる時、恨みいふ内に、芥子かいで俄に泪のこぼしやう、爪をはなつに、細小刀にて二枚にへいで、痛まぬやうにはなつ仕様、大臣は參りもせぬ、お伊勢様を、嘘の相手に頼み、堅固なる長池の姨を殺し、又は雪隱の屋根ふく程の事を、大普請するなどゝ、いろ〱に身ぬけして、盆正月を請とらぬ前置の僞りだくみ、粋になつて、遊びのおもしろうなる最中に、手前うすくなつてはのきかぬ所、親の異見

聞ずに追出さるゝ身ぶり、又は身躰皆にしてすみなれし家を立退思入、見る人爰がよう似たと、大笑ひするも斷、家賣てのきし事は次第にくやしく、身にしみ〲と、今も忘れねばうつる筈也。扨編笠をぬぎて、いづれも歴々さま方持合がござりませうば、少しの露をうたしやりませう。昔は是が面白うて、此躰になりましたが、今のうたてさ、慰に汗水たらしていたしますではござりませぬ。せめては蒔て置た種が百ぶ一もはえまして、我々四人が口をぬらしたう存まして仕ります。かりそめながら、壹人前に二千両宛入ておきました藝でござります。扨此次に御目にかけますが、かの里の以前の女郎共が方からくれました狀文、其外さまざま替りしもの共を、今日の惣切狂言に仕りますと、古つゞらより取出し、先是が前の若衆が、外の男はつとめばかりと、諸神を書込し起請文、僞りのない所は、今の高橋が添狀有。扨是が只今迄不便がりました秋篠が、みぎの季指、當麻が血文、香久山が水上の時ときそめし、緋縮緬の內衣、中屋の狹衣が手なれし盃、三笠が壹人呑の燗鍋、右の吉野が三味線の撥、葛城が根より切し黒髪、古小野嶋が晝夜に十二の、一時ぶみ、相模がさし櫛、きさがさらし布の夏帶、野瀨が手あはせの　、此外は皆僞りの筆の跡、ひつさらへて反古の目三貫目が、百貳拾貫目余の物。いづれも近うよつて、嘘のかたまりに御縁のむすばしやりませう。とかく御立あひの人々、我々を見ならひ給ひて、親より讓りの家業をはげみ、其家儘に繁昌させて、世間を御子息方におわたしなされ、浮世ひまになつて、六十過て年月の氣晴しに、女郎狂ひはする物と御合點なさるべし。若い時參れば、血氣にはやつて、万かさ高になり、漸々につのりは致せど、止るといふ事金のある內にはいたしにくい物で御座ります。爰を以て傾城狂ひに、能程といふ程がないと申は、此事でござりますと、其身の恥を一文宛には安物と、みる人笑うてなげてゆきけり

四　高洲ちもりに茂る戀草

口三味線にのせて五十はいの
無心語り出す上るり太夫

今時の若人、何ぞ替た事にあらでは面白からず。かぶき狂言にも、昔よりありふれたる、まゝ母事も、手をうつ程にかはらねばよいとはいはず。增て鍔屋衆道女 亂髪などいふ、古めかし事、

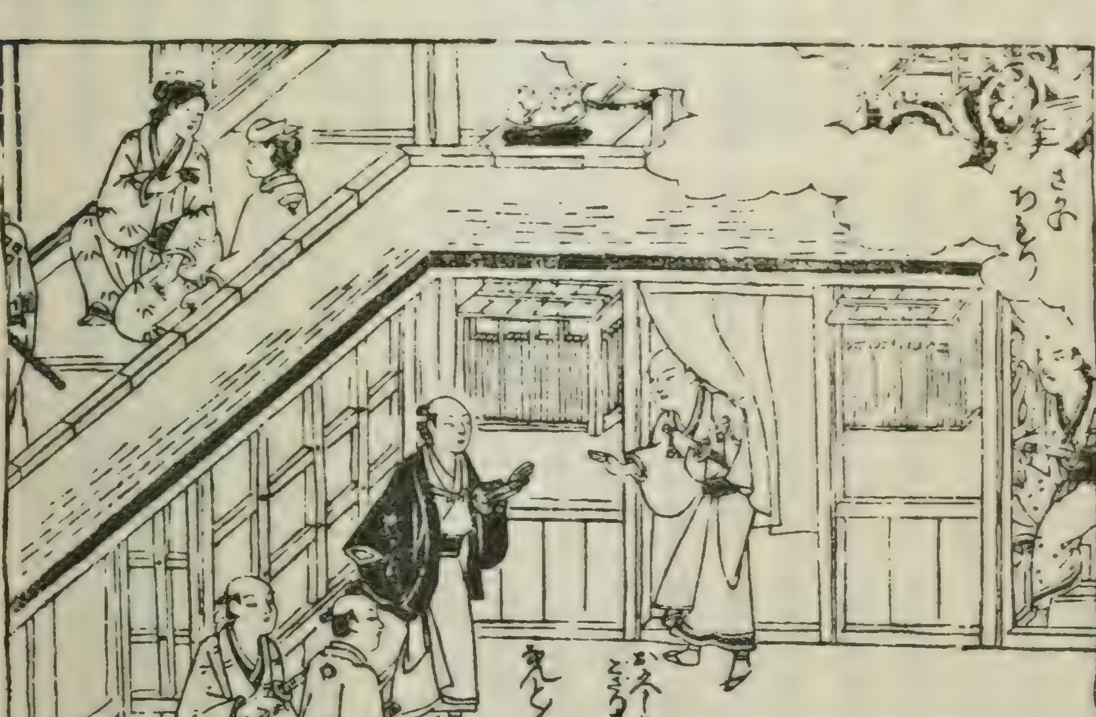
辻打の放下師がはなしにもせざりき。上るりも又それにつれて、扨も其後それつら〳〵おもんみればと、堅い仕出しにてはゆかず、下り破にての、天王立も取てのけて、あたまから頼義公ゑぼしもなくて、着ながしにてぬれの所、力自慢の公平に、嶋原狂ひをさするやうに、序破急なしに、初段からやつさねば、合點せぬ世界の人間。節事も、名所づくし四季の段、しるし揃馬揃は、文句あらたにつゞり替ても、古代めくとて、もらひ札にて見物に行子共さへ、聞て頭痛がするといへり。さもこそあらめ頃日は、奉公人の請狀に、節をつけて橋々浦々迄も語りなぐさむ、當世の人心。此氣を知て、何ぞかはつた思ひ付もせば、向棧敷の下迄、入を取ばしれた事と、見て來たやうに芝居事には、じんへんふしぎの清明もはだし、道満市郎兵衛といふ名だい者に、堺で一芝居して見たき相談しかくれ共、じせつあしきとて取のらねば、長町の團屋のうらに、山本好太夫というて、本文彌風に、にがみのある上るり太夫有しを、少銀にてかゝへ、何かなしに堺の浦に、櫓幕をあげて、近日〳〵と看板出し、旅しばゐの人形役者をまねき、只替った思ひ付の、趣向をのみ相談すれど、道具すくなく役者たらず、先人數不足にて、今日いうて今日なるあやつり、法藏比丘が増といふ。それはよい太夫共いぜんより度々してとり、今は阿彌陀でも錢のひかりが、なしの木の花、素見物も其やうにはくふまじ。とかく世間傾城ごとをすく時節なれば、なにとぞ是にたよりて、思案して見るべしと、いろ〳〵と工夫して、先大かんばんに墨ぐろに書せしを見れば、牛若床の達者、傾城千人切、幷に辨慶七つ道具の賣喰といふ惣外題。是はならぬと一座の役者、腹のいたい程笑ひ入ば、勸進本の粹じまんの男腹を立て、内輪から其ごとく打込といふ事、給銀とりながら太夫本を、はじめぬ先から倒す分別かとしかれば、口輕な役者が申は、まだ手摺さへ掛けぬうち、七ッ道具の賣ぐひとは、きつさきのわるい看板といふ。是は尤と又思案を仕なほし、然ば辨慶七ッ道具の置所と替んといふ。是も聞ぐるし。第一七ッ道具といふが、質物のやうで氣にかゝる。それに置所はなほ〳〵禁忌なりと、座中にがい顏をいたす。惣じての事氣にかけ出しては、とめどのないもの也。太夫本惣げだいに精をつかし、とかくこんな時は氣を替て、心のわつさりとした時しあんするがよかるべし

と、好太夫ともなひ、津守の神社に詣で、それより高洲の色町、ちもりを眺めありき、おれは鼻筋通り過て思はしからず、是は物いひが氣にいらず、そこなは鍛にらみの、白目がちなるがいやなり、三味彈ば頰さき赤し、髪のちゞみに思ひつけば、手足が太し、小哥よくうたへば色くろし。出尻は嫌なり、口の廣きはよろしからず。瘦はだきおけがないと、廿三十ぺんも、ぐる〳〵とありきて見合、後には目まぎれして勸進本も好太夫も、心々につい上りて、

時は、いづれにても可愛さかはる事なし。爰に攝泉の堺大道筋に、西太といふ大臣、新町へゆかぬ日は此里に來ての遊び、是又替つて面白しと、難波の末社一兩人めしつれ、けふも昼よりぞめきて、北の端から打こめば、此所のあらゆる天神小天神局女郎迄、大臣御出といろめき、面々によそほひ、無理に見られ度ふぜい、目にもかけず、いつもの方へつんざしてゆく時、山本太夫が局より出るに行あひ、是は太夫あぢでおしやると詞かけられ、赤面仕ながら、あまり徒然にござりましたゆゑ、昼食たべに立よりましたと笑ふ。近比よい所で見かけられた仕合男、座付すんだらば、夕飯拙者が申つくる。用さへなくば參れの、御意忝なし。しかし今日は太夫本を同道いたしたれば、私賣口がござりますとて、是から一人つきはなしても歸されませぬ。さりとは殘念至極と申。それさいはひ太夫本ぐるみに、けふ一日我らあげるでござると、すぐに二階座敷に上らせらるれば、山本太夫勸進本がはひりし、局の戸をたゝいて、よい事有と表よりどよめば、太夫本も、もはや帶する段にて、心の殘る事もなくて、外に出て何事ぢやといへば、おつとつて仕合は、堺の大臣に二人共にあげられ、晩迄はよい目にあふ事、いやではあるまい。何事も我らかげぢやと思召て、今少し給銀あげて給はれと、はやもたれ口を申せば、人に折角滿足がらせておいて、跡で割付出さすやうな事ではないかと根をおす。とかくすかさぬ男共と、互にわらうて内に入、二かいへもあがらず、梯子の下にて山本太夫がさゝやくは、よい仕合といふは、女郎を買てもらうて、我物いらずに遊ぶ事をいふにあらず。上にござる今日の大臣は、堺にかくれもない借銀屋、何とぞけふ取入て、此度のしばゐに五十はい程出さする、思案し給へといへば、太夫本ゑみをふくみ近比よい氣の付所、天晴の働きと存る。人をふずくる事我らが得物、隨分兩人心を

合せ、おもしろをかしう酒をしひて、酔せられた所を見合、右のねがひを申かけるがつてんといへば、是然るべしと内談きはむるを、臺所に、たねといふて新町の遣手の開山、此所の內義とねんごろにて、咄してゐたりしが、二人が談合を聞て笑ひ出し、酒しひて酔す方便は昔の事。近きほどは京も大坂も、酒を薄う作るかして、きゝめが見えず。それをなぜといふに、前々は大臣に面白くのませて、此上に御無心を申せば、夢中になつて拙者正月請取たと、跡先なしにいはるゝを、町よりのおつれを證人に、つい物になしけるが、此ほどは御客の酔助を見すましいひかゝれば、帷子時の事は耳に入レて、小袖じぶんの事はきかぬ顔して、いつもさだまつて壹歩やらるゝ人に、二朱つき付て、いかう予は酔たさうなとはいはるれど、酔れぬ證據には、蚤取眼をして、太夫殿はどこへかしたぞ。も二時程になるが、一向もらひ手があつて貰うてくろれば、今迄の遊びがたゞになる事ぢやが、遅いは合點がゆかぬ。太夫歸られたらば行水して、內衣も仕替て座敷へ出やれと申せ。是は爰においた扇が見えぬ。我等が持しは十一本骨の、いうぜんが繪に、ゆく水に茶筅を書て、流れをたてるといふ古事ぢや。こんな寺扇ではなかつた、尋ておこせと、細かな覺えは、酒が薄い故に、本酔の出ぬからなり。皆様も大臣へ無心おつしやる合點ならば、並酒盛た分では、我を忘るゝ程な、根へ入し酔は出ぬものでござんすと、さすがは大所にすむほどあつて、酒がうすいとは賢い氣のつけ所と、兩人我ををり、あるじ夫婦を賴み、大和屋のとつて置酒の中にて、成程濃のをとゝのへて給はれと、一角出せば、亭主もをかしい男にて、大臣様の酔のつのりし時分、御案內賴みます。拙者も御無心の尻馬に、のつて見たうござると大笑ひして、取につかはせば、二人は二階にあがり、太夫本を大臣へ引合せ、万事賴奉ると、そろ／＼付入して、どうやらかうやら酒にして、大方熱もまはる時、太夫本こらへ精なく、芝居の事申出し、五十兩の金が調ひませいで、日和のよいに看板は出しながら、今日迄得はじめませず、大勢遊んでをります段、無念千万。何事も旦那お影で、惣座中うるほひます事。何と太夫さうでないか。成程勸進本申されます通と、詞を合して申出せば、大臣胸につかへながら、女郎共にかねて盛を申て、高うのぼつてゐる最中なれば、むげに返事もせず、五つ五つに見えし時、何とぞ慥に請合せ度

思ふ所へ、くだんの大和屋が三年酒を、はつたりと間をいたして、勝手から持て参れば、時分はよきぞはや盛と、大盃は脇になつて、中椀平皿後は錫鉢にて、あひの、又あひ、大あひと申出して、むすびのしに小板の焼味噌、漬鰯に、ほたではありやと、さいつさゝれつするほどに、先一番に無心の頭取いたせし、肝腎の太夫本、大臣より先に片づけられ、もんたいがなし。され共山本太夫跡にひかへて、旦那みだれ姿を見合せ、最前太夫本が申かけて置ました、五十兩の金子の事、芝居つとめます内、お取替なされ下されなば、惣座中は申に及ばず、木戸半疊、櫓太鼓を打ます、小坊主までが、うかむ儀、憚りながら女郎さま方、お取なしを頼上ると、長口上申出せば、成程〳〵其方勝手次第に、手形したゝめ證人汝、印判もつて取に参れ。是忝なしと悦び、余り氣さくなる埒のあきやう、こんなさきおい口には、何でも云たらなりさうな物と、又手をついて、迚の事に、私樂屋入の衣裳二かさね、見事な事にあづかりたいと申。それ程の事今まで申さぬは、近比小氣な男め。金子請取に参る時分、染色定紋書付て参るべしとの御意、有がたく畏まる。時に亭主も罷出て、太夫殿もはやおねがひはないかと、口をとぢめ旦那へ申ます。やねが殊外損じまして、雨ふりの時分お客が致しにくうござります。お影でもりをとめます訴詔と、女房共が私に



心えて、何ぞ手軽い無心申て見てくれと、慥に言傳仕りました。お前へ出ませぬは、當月産月にて、二階のあがりおりあぶないと申によつて、私とかゝと二軒役の御訴訟と申ス。やねの葺替に廿兩、みだい所に紬二疋に、眞綿そへてはいやかとあれば、是は結構過ますと悦ぶ。然らば明日〳〵といひながら寝入給ふを、高間といふ女郎、物などきせまして、此酔のさめぬやうにと、いづれも産所人の夜伽するやうに、しづかに〳〵と物音せずにまもりゐる。暫く有て水乞せられ、もはや歸りてよい時分と、すぐに起ておかへりごしらへ。こんな大臣様よその風にもあてますなと、おかごにのせましお供の外に、男二人お宿ぢかくまで送らせ、山本太夫を始おの〳〵落着き、勸進本をゆすりおこし、願ひ事の首尾せし様子を語れば、寝耳へ小判の入し心地して悦び、とかく果報はねて待てぢやと、ぬからぬ口を申せば、いづれもどつと笑て、こんな事は急に手取したがよいと、二人は旅宿にかへり、夜が明ると其まゝ大道筋の、西太方へ參り、昨日御意なさるゝ通、預り手形したゝめ、印判持參仕るよし、年若な手代ヲ頼みて申入れば、大臣二日酔のさむる程驚き、頭をかかへながら表に出て、そんな事いつ申せしぞ。近比それは云かけと、大きにけでんの顔付。兩人案に相違し、昨日の段々申せば、いかないかな一つも覺ぬ。公事に



したかおしやれと奥に入る〻。是を思へばあまり濃酒をもり過して、大臣かつて覺ぬも尤ぞかし。此後は女郎狂ひ、其外浮氣事には、かりそめの約束も、當座手形といふ事になるべし。仍而如件

けいせい色三味線

目録　湊之巻

第一　室の遊女に気をうつす浮
女郎のこゝろざしうけ出し
座敷おどりをまかせて
男新作様よふ由うどんやの
延助

第二　焼れよまる鶉野の仕舞
伍税売へ何のあすよ命全
汲もうくまふもよ方の路
あめしろのへ床一ツてある
女郎

第三　稲荷町に化し顕れし手管男
上方よ京下の関の女郎衆
めづらしきへ髪長武者に
目角乃強き小倉の
大臣

第四　綱よ角ずれね丸山の口舌
長崎を後家を目当に
ぎりの無意よとつめの
つよ朝鮮人参気乃
薬助男

播州室津女郎の名寄

▲あふまや市かん内

一天神 かほる 一天神 おごまの尾
一同 井筒 一同 いろは
一囲 三之丞 一囲 多々子 一囲 こてう
一同 こんご 一同 ことゑ 一同 あいえん
一同 いさご 一同 久ぎり 一同 りくよ
一同 わか菊 一同 女の助 一同 わか菊
一同 小さ井 ▲一端 こかま

▲みつや清助内

一天神 金せん
一囲 若むら 一囲 うこん 一囲 つま川
一同 小むら 一同 ともわ
一端 山ざき 一端 わかつま 一端 たかの
一同 みつ尾 一同 梅がえ

▲ひわだや次郎兵衛内

一囲 まりき 一同 このり 一同 なや川
一同 風の 一同 小きつま
一端 よ川 一端 あふ川
一天神 三人 囲 廿八人まで
一端 女 五十七人まで

一都合八人 揃もつゞく
右女郎数合 五六人也
同所うつし所女郎の名寄

▲今ま 又四郎内

一ときは 一さつま 一あのぶ
一女の助 一まつの 一ゑかの

▲今ま 又左衛門内

一みゆき 一小ぎま 合八人
一皆々 十七まで
右けやへあいの里
出見世よりゆくとの事
下の関は宮町女郎の名寄

▲さくら屋内

一天神 わかな 一天神 小紫 一天神 かる大夫
一同 千代 一同 玉らく
一囲 小むら 一囲 わかな 一囲 おさんの
一同 こてま 一同 あさ菊 一同 今むらさき
一同 大ちよ 一同 いろく 一同 玉の松
一同 あふ菊 一同 今菊 一同 里の

▲いせや内

一天神 女の助 一天神 万吉

一囲 わかさの 一囲 いせき 一囲 玉のあき
一同 あさ香 一同 さくら 一同 主人
一同 あさ菊 一同 りうの 一同 万吉
一同 りうぎ 一同 まん山

▲ともや内

一天神 かうち 一天神 むらの ▲一囲 吉川
一囲 若むらさき 一囲 あさ菊 一囲 千とせ
一同 こん菊 一同 大菊 一同 大夫
一同 吉川 一同 こちの 一同 金吉
一同 きくえ 一同 玉香 一同 つゆ

▲まるや内

一天神 久米 一天神 小太夫 一天神 かつら
一同 むらさき 一同 かや 一同 とよ

▲こや屋内

一天神 吉女 一天神 のみ 一天神 よし野
一同 今むらさき 一同 金山 一同 うきよ
一同 梅がえ 一同 山菊

▲大坂屋内

一天神 玉井 一囲 若菊 一囲 あふちよ
一囲 小むらさき 一同 かしく 一同 菊之丞

一天神　廿四人　内七人で
一かこひ　十七人で　惣合六十五人
長崎丸山女郎の名よせ
▲丸山町　新屋内
一太夫　沢ひら　一太夫　花川　一太夫　花房
▲同町　小柳内
一太夫　うき川　一太夫　花ちり
一太夫　村ちよ　一太夫　あづまの　一太夫　花の
▲同町　角屋内
一太夫　高雄　一太夫　三笠　一太夫　花ちる
一太夫　いおり　一天神　わかさ　一天神　りおり
▲同町　さど屋内
一太夫　とやま　一太夫　おとは　一太夫　金山
一太夫　わか山　一太夫　花山　此外天神十八人
▲同町　わかな内
一太夫　山しろ　一太夫　こよ川　一太夫　金山
一天神　さこん　一天神　なつ川　一天神　きよ久
▲同町　湊屋内
一太夫　ゑもん　一太夫　梅が枝
一太夫　くもい　一太夫　あづま　一太夫　村竹
▲新町　伊勢屋内
一太夫　こちのへ　一太夫　萩野　一太夫　高野
一同　みやぎの　一同　さよ竹

一天神　わかさ　一天神　てしろ　一天神　夕ぎり
▲同町　えびや内
一太夫　清花　一太夫　小むら　一太夫　わか山
▲同町　引田屋内
一太夫　まん山
一太夫　うきふね　一太夫　ひら山　一太夫　ゑるも
一同　まつ　一同　うきも　一同　いろく
一天神　ゑもん　一天神　もしほ　一天神　わかさ
▲同町　肥後屋内
一太夫　ゆき　一太夫　ちとせ　一太夫　山ぶき
▲同町　ゑびす屋
一太夫　わかち　一太夫　高ちよ　一太夫　かよう
一同　大ぜん　一天神　こてふ
▲同町　大坂屋内
一太夫　山しほ
一太夫　おもへん　一太夫　あづまん　一太夫　わかせ
▲同町　ぶんごや内
一太夫　うさり　一太夫　まん　一太夫　ゑんぎ
一同　正さん　一同　ちよ　一同　小太夫
▲同町　ちくご屋内
一太夫　さるぐ
一太夫　大ちよ　一太夫　もずろ　一太夫　ふちか
一同　野風　一同　出羽　一天神　みなと
一天神　こてのへ　一天神　小太夫　一天神　つかく

▲わけやの分
一かこひ　もやや女太夫
一太こや　久太郎　一ちく　ゑもん
一本屋　半七　一　万屋町　かんとん
一太夫　六十三人で
一天神　十六人で
惣合　七十九人
以上
此外太夫かこひ　わりまし　小女郎
此外　遊女は
一備後の　とも　わりし町
一安芸の　宮島　大坂町
右武士の　女郎　付
外の関と　同おなり
一筑前の　博多は　柳町
此所の女郎　揚屋もなし
わりまし　此外には
名所の宿　好色なの
家田屋敷
以上

一 室の遊女に氣をはりま潟

花前に蝶まふ執心の紋所

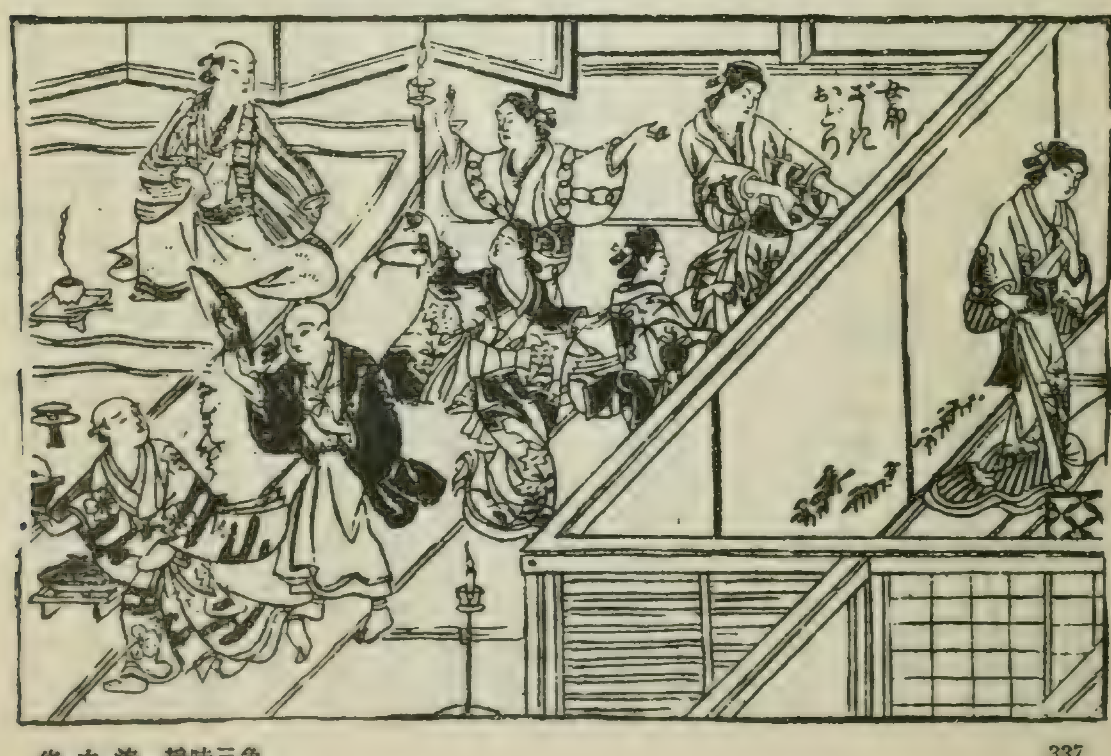
抑是は播州室の明神につかへ申、神職の者のおとし子なり。扨も都の嶋原と當所室の遊女町とは、同商賣にて御座候へ共、いまだ一見申さず候程に、此度思ひ立當地の色里へと急候。播磨潟室の色湊は、西國第一の分里、遊女も昔にまさりて、風義もさのみひなびず、多くは大坂の女郎共の風をまなび、酒ぶりもよく一座もしめやかに、意氣はりも覺えて、折節は口舌の浪も立つゞく。たち花風呂丁字風呂廣嶋風呂、是皆爰の揚屋なり。かの神主のおとし子、高砂屋の松右衛門といへる、あてじまひな名を付し所知の末社をともなひ、情に亂るゝ柳風呂に入て、さつとのみかけ、扨亭主にあないさせ、にしやひめぢや但馬や是三軒に、九十余人の姿を見つくし、其中に風俗よく、あぢな所のある女郎、お名はと亭主にたづねれば、花前さまと申て全盛の米さま、端哥名人にして、又なき座持と申に、はや語らぬ先にいとしうなつて、早速抓めと申てやり、松右衛門にもしなだるゝ小藤といふ、端女郎を一疋はずみ、先酒になして遊ぶ所へ、太夫さまお出といふ。是忝しと床脇になほし奉り、盃事すんでの上に、きゝ及びし哥を望めば、京大坂で蔦四遠柳がうたうて仕舞、小哥比丘尼の手にわたり、末のすゑになつた哥も、此里で面白く、あつぱれ名譽のお上手、梁のほこりも落ぬる斗、虞公もはだしにて、きく人心浮たつ所に、秋の末にはめづらしき蝶飛來りて、小哥につれて舞有様、人間物をしらぬ也。誠や花前に蝶舞紛々たる雪のはだへにちかづく事、柳上に、鶯聲を出し、妙なる哥をうたはせらるゝ故なるべし。此蝶も片々たる金氣があらば、花前をあげてまはすべきに、自身舞あるくは大臣蝶ではあるまいといへば、松右衛門が申は、惣じて蝶は太鼓のはてなり。既に露をなめて命を繋ぐからはと笑へば、亭主をかしい男にて、あれ小藤さま、蝶が我ととびあがるさまは、さながら身あがり虫とも申べき。あはれ茶挽草にとまらして見たしと、女郎のいやがるゝ事申つくして、一座是を興にして、心よき酒をのめど、花前は更にをかしからぬ風情にて、かの蝶を扇に取うつし、今日も又ござつたかと、人に物いふごとく、しかも涙ぐみて是はけうとし、酒に醉れてあれか。たゞしはあんな事が此

里のならひかと、大臣不審し給へば、松右衛門も合點のゆかぬ顔して、花前さま胸に手はござりませぬかと申せば、成程脇から見さんしたら、氣もちがひしかと思召さん。始てのお客に、あさましき我おもはくの人の姿を見する事と、遊女にはめづらしき本の涙を流さるゝ。是はきたいのためし、扨は此蝶はお敵様の執心か。どうやら小氣味の惡い事と、臆病なる大臣、少しふるひ聲にて樣子を尋ねらるれば、はづかしながら此虫は、當國あぼしに隱れなき、有德の人の三男、三四樣と申せし人の執心なり。此大臣十七の年手代衆御供にて此里へ御出、風俗當世流にして、然も角前髪の器量よし。戀のきくさかりにい生れついて大氣に、お心も廣嶋風呂に入給ひ、我身をとの御指圖にて、始て御見なりしより、眞實にいとしうなりて、初會から互の心底をあらはし、起請迄取かはせし事、凡江口の君此かた、つひにはじめたお客方に、誓紙書しは我斗。それよりふかき中となり、あはぬ日は文してかはらぬ心をしらせ、あへばはや別れの旦を思ひやりて、酒事やめて語る夜も、いつよりはつい明やすく思はれ、かうした事もいはう物と、詞殘りてとがなき鳥をうらみ、おかへりの跡はいつとても涙の淵に、しづみ入程のおもはくなりしに、世には子にむごき親御も有て、惣領次男は所にて、家業の榮花に仕付給ひ、おいとしや御器量お智恵は、兄さま達にもまさりし物を、跡から生れ給ふとて、父母の仰にて、一子出家すれば、九族天に生ずといへば、三四郎には出家をとげ、我々が亡き跡をとぶらふべしと、をしや過つる春の比、十九才にて押て出家になし給ひ、書寫山の何坊とかやを師と頼み、かの寺へのぼし給ふより、此里への緣切つて、あはぬ思ひに胸をこがし、戀しゆかしの數かぎりなく、文して寺へおとづれしに、あなたもかはらぬ思ひにて、たとへ此身は出家となり、あはで此まゝ此山に住はつる共、我一念は以前にかはらず、折ふしごとにまみゆべしと、御返事有しより、形見にぬぎ置給はりし、お小袖の定紋の、あげはの蝶におぬしの一念入けるにや、小哥にひかれていつとても御紋の蝶ぬけ出、かやうにたはぶれ給ふ。淺からぬ御思はくを、思へば〳〵流れをたつるといふ身程、世にかなしき事はなし。我つとめの身ならずば、末々あひます思案もあれど、哥のふしにて籠の鳥かや恨めしき浮世と、わけもなう取亂されければ、大臣慰は脇に成て、きく

程哀れなる物語。しらぬ事ながらもらひ涙をながし、遊女町は氣を晴す所かと存じて、大切な銀を持つて來て、是はわざ／＼啼に參つたやうなものでござる。何と太夫さま、おなげきの上で申かねてござるが、床入はなりますまいかと、律氣なる大臣にて、さし足してうかがはるゝ。いかにも／＼寢ませいでは。しかし私が好有と、宿の下男をまねかれ、盆のをどりのたしなみに、前髪鬘があらば借りたいとの仰。幸當年拵へましたがござりますと、早速取て參つて奉れば、太夫こともない悦びにて、三四形見の小袖を取よせ、大臣に斷申小袖をきせかへ、かづらをかけて、お名をも三四さまと申さば、御いらへあるべし。さもあらば床の中にて、お心まかせに成べきとののぞみ。銀出しながら、しつかいそれは人の形になつて、貴様の持あそびものに成やうな物なり。是は太夫殿に我らが買るゝといふものなれば、今日の造用其元からなさるるでござらう。とはいひながら　　　との事、まづは耳よりなり。とかく振られうより是もましと、御好の如くかづらもかけ、小袖も着かへて三四さまといへば、心得ましたと床に入てお氣に相ける。其後此君の事承れば、三四還俗してひきかきし共申、又はさぬきの天狗がつかんで、御内儀さまにした共申。莵にも角にも此女の身の上、福德の百年目よき仕合なり。相かはらず呼つゞけ



て今の花前も、小哥の上手といへり。始の花前は情あるやうに見えて、男いく人か思ひつき、請出す沙汰せし人數多有中に、塩の出る所に正といふ男、あぼしの三四とはりあひし最中に、何ぞ三四より増つて上かさ成事をして、女郎に思ひつかせんと、八月の末つかた、末社共引つれ、椀久磯に金銀つかんで、ぱつとしたるつけとゞけ、忝き數々の酒事、随分と騒げど、さめぎは早く調子めいりて、聞なれし三味もをかしからず、何ぞ替りし事はないかと申せば、内儀がさし出て、色遊びは春夏、扨は盆の大をどり也。此所は七月十三日切に万の取やりを互にすまして、十四日より盆の有様、又興有て面白きをどりぶり、見せませいで殘りおほいと、くどく申せば、何が奢合點でわせた大臣、甚氣を持、それはなんと銀づくでは今見られぬ事かといふ。成程女郎さま方さへ大勢まねけば、只今もなる事と申。是はいと心やすき事と、跡先しらずの大氣な末社共にいひつけ、室津の惣買と觸て、女郎あるほどしきりて、座敷踊を催し、風身にしむ時分に、皆々風もよき踊帷子を着て、思ひ思ひの仕出し、一人も憎いはなかりき。大臣は床の上の卓香爐を取し、くれなゐの敷物しかせ、さも大やうに座し給へば、左は追蹤諂安と云、浮氣醫者療治を捨て、今旦那膝下さらずの末社となり、物下さるゝ脉あぢをぞ窺ひける。其外御き



げん取の可笑中間六七人なみゐて、踊おそしと待かけたり。先但馬やのくれなゐ、ぱつとしたる出立、裾は立浪に入日の模様、一しほ色ぶかい井筒がしやれたとりなり、いかにしてもすいた風、命取とは此君〳〵と、見る人鼻毛のある程のばして、繰返し返しても面白や小田巻が踊ぶり。其次は大ぶり袖をひるがへして、目にたつ風ながら、どこやら足どりに初心な所有て、是ぞ踊の手ならひいろは、たゞ美く、つま川が、苦味のあるも一子細有てよし。姫路やの若狹が、すらりとしたも見よく、若紫小紫、みのり、はや川、いさご、みぢん程もにくげのない君達、揃うたり手拍子、腰付いづれもうまさうにて、蹴返し撥棲引足のうるはしく、大臣をはじめおのおの魂をとばし見る所に、一際すぐれて五人一様に、住吉踊の出立、笠につけたる紅の絹にかくれて、誰共お顔のしれぬが氣の毒なり。箔安あれは誰々ぢや指て見よとの御意。かしこまつて足どり身のひねりに氣をつけ、四人はしれて中一人がしれぬといふ。まづ四人は誰さまぞ。夕霧朝霧、雲井あげまきなり。しからば中なは幾世か久米の介なるべし。いかな〳〵そんな君にてなし。凡この里に女郎衆百人あらうが、我等のしらぬは一人もなし。暗で足音斗きいてさへ、何と云よねぢやとがてんいたす法師め、見ちがへる事でない。どうでも是は紛れものぢやと申。ちか比粹自慢なる入道に、さらば笠をとつて、あの口とめよとの仰。承はつておそばの末社罷立、かのしれぬ踊子の菅笠とつて見れば、丁子の又助めなり。扨もにくしやれ、胴うたせと、おのおの立かゝれば、こりやならぬとにげて歸り、踊も是をかぎりにくづれて、跡は大勢の女郎、大臣を取廻し御機嫌とつての大酒盛、あつぱれ寛活なる遊び最中に、大臣申出さるゝは、さいぜん箔安が此里の女郎何百人あつても、足音で誰ぢやといふ事を知ると、所自慢いたせし間、此坊主が目をふさいで、足音で誰ぢやと名を當るか、いそいで目無どちして名を指すべし。いひあてたらば其君すぐに、此月中だかす事ぢやぞとあれば、箔安悅び、六豚は取ぞこなふ共、是斗はちがへじと、人もなげなる知自慢、いづれもにくみて、紅打の手細にて目をふさぎ、さあ是からが始りと、下張の平助といふ末社、尻をまくりあげて、箔安が鼻元近くよせ、音なしに二つ迄すかしければ、是は鼻がもげるわ、さりとはぶたしなみ成女郎、口中の掃除めされ。但し息のくさ

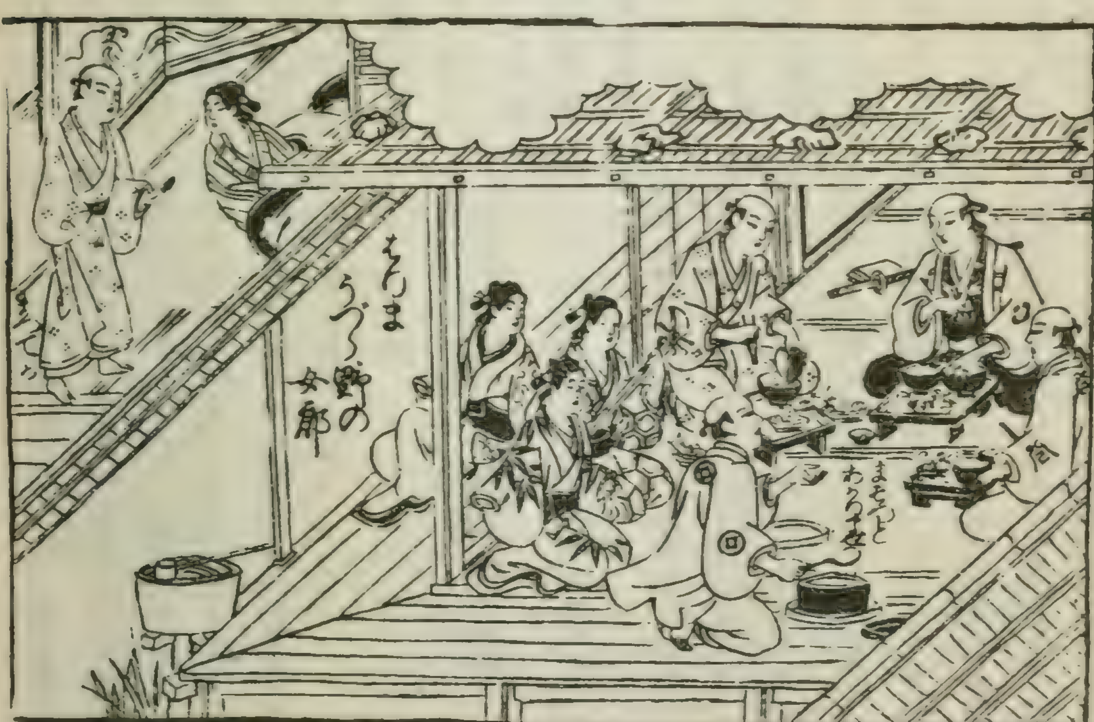
さは肺の臟に病あるか、腸胃に積熱あるかの故也。當歸連翹飲などを、二三貼進じましたいと、ぬからぬ顔して配剤を申。一座をかしさを胸にをさめて見物する。女郎はいづれも聞しられぬやうに足音をやつして、さまぐ\の身振りをかし。笛安は五音の占の如く、小首をかたぶけ氣を付て、今の大股にあるかれしは、慥に金吾どのとはしれて有ながら、端女郎に望なければ、態と名をさゝぬ也。まそつとよい衆御出なされと申。いかさまよく聞しる事よと、いづれも我を折り、みふねに付ごゑさして、淀川と云惡よねを、靜に足音させて、さあどなたぢや。さして見よといへば、足音と聲とが替りて聞得がたし。今少しちかくにてお聲聞たしと申せば、みふねそば近くよりての付ごゑ、きくふりして足音はかまはぬ、御聲はかくれのないみふねさまにのる氣ぢやと、やがて取付目がくしを取て悦び、にがぐ\しくも離さぬ時、みふね賢くも、それぐ\懷から、壹歩がおちるといはれければ、どれぐ\どこにとわき見するうちに、袖ふり切てにげ給ふ。いそがしき中にさりとは智惠かなと、人皆ほめける。笛安は腹をたてゝ、うそついて成共、われを嫌うてにげたがる君を、とらへてから面白からずと、不興してやめける。それは汝が戀より欲の方がふかきが故也。懷に入たおぼえのない壹歩が落るといはれて、大事の君を取にがす、さもしい心入の法師に、何とて女郎思ひつくべきや。是ぞ浮世のはやり詞に、かなはぬ事をいしやぼんといふは、汝が事よとわらはれし。大臣も跡先の算用なしに、めつた奢におごり、遂には身躰棒にふつて、うどんやして浦人にすゝらせ、五十過て始て金銀は大切なものと知て、せめて今迄遣ひすてし三分一程儲けたしと、ずゐぶんかせげど、のばしたき銀はのびずして、願ひもせぬうどんと鼻毛は今にのびけり

三　燒取にする鶉野の仕掛

ほり出しは床に入ての誠

同國加西郡、鶉野といふ所に、遊女町あるよし、都へかへりて咄の種にと、上方の小間物や、國廻りの御師の手代難波の米問屋の若きもの、かれ是三人西國筋の銘々用を仕舞、同船して此浦近くつきしを、さいはひに、案内知る人先に立、色めづらしく心玉も飛て、うづら野へ行て見れば、格子局といふ事も

なく、軒まばらなる板屋に、六七人居ながれ、無理に見られたき風情、さのみそいですつる程の所にもあらず。爰での命取、高橋、常盤、すがの、此君達は酒ぶりもよく哥もうたひて、色糸も見事ひかるゝと聞て、是は興に成て、一しほ酒も、のんだやうに思うていうてやれば、御三人ながらお隙入と申。是は思うたよりは繁昌成所、しからばどれ成共、一座の興ある女郎をつかめと、重て三人申てやり、あげやといふ事もなく、親方又四郎が奥座敷へ入て、酒二三盃のむと、はや膳もつて罷出、爰元は上方とちがひ、物事ふ自由にござりますれば、御馳走申たうてもならぬが定でござります。御機嫌よう御食あがつて下されませうと、取賄ひする男が、手をついて慇懃に口上をのべ、扨食次を持て出で、ひたとしひるに、いづれもこまり、とかく氣根次第にしやれとゐへば、後にひだるうないやうに、したゝめなされませと申。されど女郎は箸をもとらず、上方の事誰がいうて聞しけるぞいとやさし、小哥もさのみ古き事をもうたはず。三味も所相應に彈て、折ふし味な事をも申。いか成者が爰に來て、かくは仕入けるぞと、あないせし人にとへば、此里の女郎は、諸方へ壹年半年づゝ出見世をいたし、諸國の人に出あひぬれば、おのづからよい事も見覺え、めづらしき事も聞おぼえ侍るとさゝやく。さぞあるべしと、しばし酒事



して後、三所に　引まはして　とれば、女郎身拵への隙をとらず、　、　、かしらをあげて勝手口見る事幾度か。是律氣な客にあひつけ、虛もすくなうついて、誠多き心からなり。さらににくからず。

　とうれしき顔付して、我　くもりに男を置て、　、着物ごしに見ましたより、お背中はほそぼそとして、物やはらかにいとしき殿ぢや　、　、おまへさまは京でござりますか。定めてお內儀さまがござりませうが、こんな事を聞しやりましても、お腹立られなげうちなどはなされませぬか。お子樣方はお幾人ござりますぞ。かならずお子さまのお爲なれば、惡い事に銀などつかはぬやうになされませい。一度でもあひました殿達の、御身躰がならぬと聞ば、中々苦になりまして、かしらの毛のぬける程に思へど甲斐なし。田舍商ひなされますなら、隨分御精入られ、ましておりのぼりの時分此里へ御出なされまして、私ばかり買て下さんせと、いふ程の事ひとつも僞りなく、　、　、　、つくろひなしに、　、　、　といふ心にて、うづら野といへりと、　見た人の申侍る

三 稻荷町ニ化を顯す
手くだ男
付り 氣のとほつた下の闕の女かぶき

女は髮頭と申せど、つまる所は　を心がけ血氣の大臣追手も吹ぬに礒をおさせて、下の闕の遊女町に行て見れば、爰をば稻荷町といへり。心は鳥井幾度か越て、功經し女郎數多のおてきをつりよせ、一日も隙なくはやらるゝ故に、親方の爲には福神客の爲には身躰に尾を出さす迄、伽羅くさい　の罠にかけるといふ心にて名付といへり。是此里通ひに懲た人のわる口と、聞ながしにして詠やるに、女郎は上方のしなしあつて取みださず、しとやかに物いひにすこしなまる所あつて面白し。今小哥にもうたひて、其名高き全盛の女郎、ともやの唐橋、堺やのあげまき、扨は宮やの金山掘出しな君達、京女にさのみかはる事なく、是三人を約束し、小倉の大臣を先にたてて揚屋へ行ば、日比よろしく騷ぎおかるゝと見えて、大座敷を渡し、亭主夫

婦入替りて、さま〲のもてなし。とやかく挨拶する内に君さま達一所にお出、早速盃事して、馴染のなき都大臣は、何いはるべき種もなくて、さりとはすまぬ顔して、作りつけの板天神の如し。所自慢の小倉大臣、此躰に氣をつかし、上方人に替りし遊びを見せて、一いさめいさめんと、亭主をまねき今日は大切なる珍客あれば、此里の女郎かぶきを催し、御目にかけとあれば、是は上方のお客様へは何よりの御馳走。都にては壹万兩でもならぬ事を、銀壹枚でお氣のはらぬおなぐさみ、おつつけ狂言はじまりと、先番付を御目にかける

女歌舞妓女郎役人替名付
當流義經小國落
替り狂言　色入男の爲にわざと手落
弁慶　冨樫が關ととおりめの具合

一源のよしつね＝からはし
一むさし坊辨慶　花まき
一かめゐの六郎　あふさか
一かた岡の八郎　もんの助
一いせの三郎　まんざん
一するがの次良　木々の
一くまゐ太郎　もん太夫
一源八ぴやうゑ　さかた
一わしの尾の三郎　しら玉
一かねふさ　からさき
一とがしの左衛門　かしの

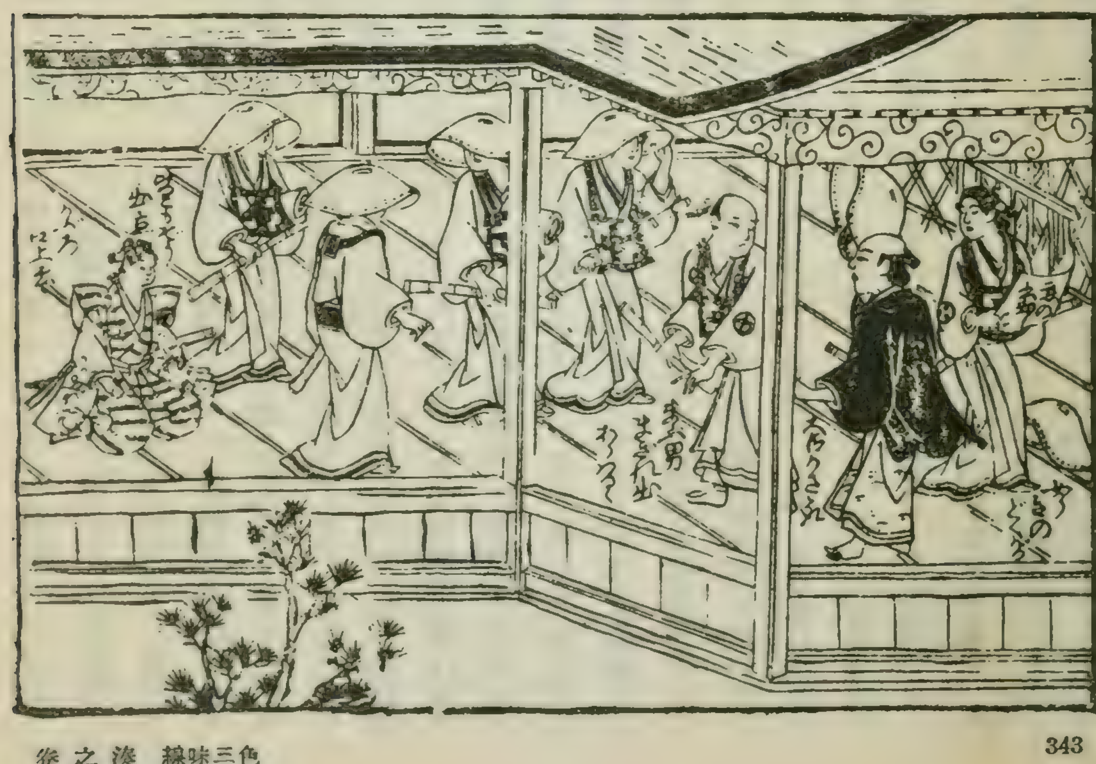
其外女郎衆あまた出さんす

是が此比の仕出し狂言、男の所作を女郎のいたさるゝ故に、色顔むすんで取合のせりふにも、につくい奴でござんすなどと、やさしき所あつて、又外になき替り遊び。六軒の女郎のこらず



爰に集り、それ〲の役々きはめて、罷出たる者は、富樫やの左衛門といふ揚屋にて候。扨も源九郎經さまは、都にてさま〲の色狂ひばつと世上に名の立て、こうとうこうまつなる頼朝樣のお耳に立、遂に御勘當あそばし都の戀草に御身のかくし所もなく、舊離切られて行末は、東の悪所友達に身躰よしのあるをたのみに、日比の末社、貧乏神のつきもの迄、今にはなれず。以上十二人のこもう僧とならんして、揚屋の分もたてずして、ぬけてお下り遊ばす由。近比とゞかぬ仕方なれば、此所に催促の關をすゑ、家質のやぐらをあげ、借錢の淵に高利の石がけ積あげて、もがりの逆茂木きびしく打、書出しひつしと立ならべ、銀取錢取財布かたげ、斷も佗言も聞入れぬ顏つきにて、くすみかへつてゐる躰は、さながら大晦日にことならず。いかに誰ぞあるかえ。こも僧達のお通りならば、局女郎の如く、むりに袖を引てとめましや屋。

〽旅の姿は淺黄むく伽羅燒袖やにほふらん。いたはしや義經は、算用なしの仕過しに、都の諸分ふ埒にて、遊び所の味わろく、大臣ぶれど請つけず。氣丈を出せど金銀の、光もうすき星月夜、鎌倉殿の勘氣を得、京の住居も成難く、思ひもよらぬ旅はじめ、行さき〲に負ふせ方、待ちかけ居ると聞し召、末社諸共こも僧の、姿に替る浮世かな。かの燒印の編笠も、熊谷笠に着替りて、過し奢の戀風に皆吹



上し尺八の、ねてもさめてもわすれぬは、都の遊びなりけらし。扨御供の末社には、龜井片岡伊勢するが、わし尾の三郎熊井太郎、辨慶は先に立、十一人の太鞁持、いまだならはぬこもすがた、墨のくわら袈裟かけまくも、我旦那は頼朝殿の御舍弟にて、殿ぶりようて吝からず。天晴よねのすく風にて、色里色町のつめひらきに、一度もふかくを取給はず。色道無類の大臣を、おもへば口惜き勘當やと、年比もらうたる物の數々、思ひ出してぞなげきける。扨あてのない旅なれば、路銀はあるかと面々が、巾着紙入さがしつゝ、拾一人が其中に、取あつめて金子壹兩壹歩二朱、銀が五匁錢貳百。むかし旦那の世ざかりには、編笠茶屋にも是程は、露にもうたせ給ひしが、今大切な銀なれば、隨分始末の夜をこめて、日數かさなる山を越あたかの浦に着給ふ。辨慶 いかに申上候。しばらく此所に御休みあらうずるにて候。判官 いかに辨慶。辨慶 なんでござんす。判官 只今掛こひの申て通りつる事を聞て有か。あたかの戀の湊には、富樫屋の左衛門が殘り銀をせがまんとて、催促人をかたらひ、揚錢の關をすゑ、似せこも僧を堅く吟味し、是非に皆濟さすとこそ申つれ。辨慶 言語道斷の御事にて候ものかな。扨は御下向を存て是非乞詰んと存立、先へまはりて待懸たると存候。物前の如く、出ちがう事もなりがたう候。先此かたはらにて暫く銀の御談合あらうずるにて候。皆々近うよりてもがり分別を出され、此借銀を手をよくねる思案あらうずるにて候。龜井六郎 私が存ますは、家質義理あひの手形銀にもあらず。何ぞや證文もなき揚錢の引殘り、何ほどの事候べき。只書出しを引破て御通りあれかしと存候。辨慶 しばらく。近比それははりの強き言分にて御ざんす。此揚錢の書出し一巻、引破つてお通りあらうずるは易き事にて候へ共、さやうに横と出候はゞ、山こかしのやうに申たて、死に一倍はいふに及ばず、恐しき手形銀迄襲ひ來らば、わづか貳兩に足ぬ路金にて、いかでかふせぎ申さるべき。たゞ何共して無異の義が然るべからうずると存候。判官 ともかくも其方はからはれ候へ。辨慶畏て候。然らば隨分口先をもつて、ちよろまかし見申べく候。旦那には御笠をふか〲とめされ、いかにも貧なるこも僧の樣に、我等より引さがつて御通り候はゞ、よも大臣とは見申まじく存候。さあ〲皆々御通り候へ。とがしや左衛門 なにとこも僧達の御通りある

と申か。心得てある。なう／＼こも僧達、是は揚錢をおひ給ふ似せこも僧衆を吟味仕り、もし引殘りあるにきはまつたる虚無僧衆は、身の皮をはいで成共、急度算用相立させ候。さもなきにおいては、色里の大法にまかせ、桶ぶせに仕る事にて候。弁慶委細承り候。それは揚錢をおひちらけたる虚無僧をこそ、吟味し給ふべけれ、色町の出入はいふに及ばず、家質米屋の銀迄も終に壹錢もおうたる事なき誠のこも僧を、いかで桶ぶせにし給ふべき。いづれも早く通られ候へ。左衛門いや／＼其手はくはぬにて候。御身達が口輕な物いひ、味な手付などのをり／＼見え候は、何とつゝみ給ふとも、末社達と見申てこそ候へ。四も五もくはぬ揚屋の亭主を、僞り給ふは不覺なり。もとより虚は我等が家、詞のあまきうちに、おの／＼取もち給ひ、大臣のお名の出ぬ樣に致され候はゞ然るべう候。弁慶それはすゐばまりと存候。尤も我々腹からのこも僧にてもなく候。頼みし旦那三ヶ津の色里を見めぐり給へ共、御心にかなふ美女なし。さるによつて筋目にも構ひたまはず、美なる娘あらば、それを乞請、一生の妻とさだめん。望は此通りと、姿のしな／＼一つ書になされ、此註文にすこしもたがはぬ娘を、尋出せし者には、その褒美として、金子千兩取すべし。汝等廣い世界なれば、さがし出せと仰をうけて此かた、諸國を尋めぐるに、家々へよい娘はあるか／＼と問はれもせず、かくこも僧の姿となり、尺八の音にひかれて聞に出る女を、註文にあはせて見てまはり候へ共、千人の女千人の男の目にいればこそ、壹人もあまらず、それ／＼のかたらひをなせば、万人の目によきとさだむる女、いまだ見あたらず、かく尋かね候。貴殿も揚屋と有ば、色のかず見る商賣なれば、もし思ひあたりも候はゞ、御しらせ下さるべし。さもあらば褒美の千兩をすそわけにいたさうずるにて候。左衛門近比それは御苦勞なる御事にて候。さりながら、もし尋あたり給はば、一夜けんぎやうに成事、路銀も旦那からのあてがひにて候はゞ、どの道にも損のゆかぬ事にて候間、ずゐぶん目の惡うなる迄見あるかれ候へ。只今は大臣も末になりて、我等どきの揚屋商賣もあはぬ世と成て、たま／＼よき客と思へば、人の嫌ひ手をかづき、物にならぬ人あまたにて、揚錢夜食御所柿迄、喰ぞんになるがかなしく、かやうに先々へ出向ひ、催促いたす事にて候。まだもして見ようならば、おの／＼

のやうな千里一はねなる事にて候。扨女見に御廻り候はゞ、定て美女のすがた註文御座なき事は候まじ。妾の註文をよんでお聞せ候へ。辨慶何と註文をよめと候や。心得申て候。もとより註文あらばこそ、懐中より書出し壹通取出し、妾の註文と名付つゝ、たからかにこそ讀あげけれ。それつら／＼おもんみれば、大臣功者の目利の色は、直打の高下にかぎらず、丁子油の長き髪に、匂ひをかづく人でなし。爰に中比うつけおはします。御名を無生とんできと名付奉る。幸の美人もなく、艶女ありがたく、炙穴背中にあらず、艶顔玉をあざむく。妾は雪のふり袖をひるがへして、花車なそだちを懇望す。かほどよいの女郎の、あらなん事をかなしみて、可笑中間の末社ども、諸國を女見さす。壹年半年の、奉公人の、輩にても、此國にあひなば、奥様にして樂にほこらせ、汝等には數千兩の褒美をとらせん。奇妙希有の註文と、天もひゞけとよみ上たり。催促の人々帳をけし、恐れをなして通しけり／＼。時に見物の小倉大臣、目はやき男にて、跡なる笠を傾けしこも僧こそ、不思議の者なれとまれとこそ。辨慶あうしばらく何とてあの人斗とがめさんす。さればさいぜんより十壹人の女郎衆を見るに、風俗足取いづれも此里の風にして替らず。此壹人何共のみこまぬ所あれば、笠を取て何屋の女郎ぞ。對面せんためとめましたとある。さすがは此里へ數年お通ひなさるゝ程あつて、目ずゐしやうかな。此とめたまふ女は、私の親方のもとにつかはれます、すぎと申ます下女でござんすが、今日あたかの狂言に、面々役わりをいたせし中に、常陸坊になる事はいやと、どの女郎衆も役目をきらひ給ふ故に、せう事なさに、此下女を常陸坊にして、あたま數に入て出ましたとある。是はいよいよ合點參らず。何のむつかしい役もない、常陸坊きらはるゝは、樣子のある事かと大臣ねをおして尋られければ、されば遊女はいづくも人さまの評判で、おもひ付のないお客も、お心のむいて來る物でござんす。然ればあれは見たよりは買德な女郎といはれてこそ、うれしう御ざんしよけれ。女郎の身で、買損といはるゝ役目はいやと、常陸坊になり手がなさに杉を役人に加へましたとのことわり。さりとはいひまはしの上手な女郎。そんな事はまそつと前方なる男におつしやれと、むたいに笠をとれば、此邊へ商に參る小間物賣の、丁子の小平次なり。是はといづ

れも肝をつぶせば、辨慶になりし花巻といふ女郎泪をこぼし、今はつゝむべきやうなし。はづかしながら此三年が間、小平次殿とは人しれずあひませしに、此比親方の耳にたちて、堅くせかるれば、あひ見る事はおもひよらず、文の取やりさへたえて、なつかしさもゆかしさも、大方ならぬ思ひなりしが、けふ此家にて狂言あるをさいはひに、傍輩の女郎二三人を頼、役人の中へ入れて、楽屋の首尾を見合、ちよつと成共あひましてと、思ふ心から跡先のわきまへなく、かゝる手管、さぞにくう思召さん。そも〳〵いひかはせし始より、二人共に長う生る所存にあらず。いかやうにも御心次第になされませと、兩人共に思ひ切たる氣色。大臣感じて、是社本戀成べし。男は家業をわきになし、戀にやつるゝ身のしをらしさ。又女郎の心入、身の爲になる事かへりみずに、情は誠ある仕方。彼是やさしう思ふから、此事沙汰なしに、すゑ〳〵も逢する才覺して、大臣名代にして、內證は小平次を、此首尾揚やも知らぬ事ぞかし。大樣なるなぐさみ、ちひさい氣からはならぬ事と、知れる人のいへり

四　詞に角のたゝぬ　丸山の口舌

付り　のりあひ舟は諸國の噂箱

美君多き都に住ながら、あけ暮渡世のいとなみにくゝられて、花に見飽東山の女狩にも行ず、一生そろばん枕にして、寢ても起ても始末の二字を忘れず、よい事しらずにかせぎ通して、次第に貧になる事、是ばかりは不審はれず。花の都も金銀なくてはをかしからず、よしや難波に足をとめて、死ぬる迄稼ぎ見るべしと、三十三の年散々の仕合にて、京を立出伏見へ朝飯時に着て、京橋にてしたゝめし、是より三十石に「乗つて行に、さま〴〵の旅人、あたご參りの下向揃のゆかたに花に粽をかたしき、今日一日の道のつかひを算用するに、散錢かりておぼえぬといふもをかし。或は江戶飛脚、大坂の米屋らしき男、奈良の具足屋、高山の茶筅師、近江の蚊屋賣、京の小道具賣、山伏、藪醫者、鼠衣着たる出家のそばに、茶屋の二せめく女、鹿島の事ふれ、旅芝居の役者、丹波の百姓、拾人よれば、十國の者、孰れも咄しかはりて、當年は世の中でござる。うらが國には大分植出しをいたしましたといへば、大和には猫又が赤子に化て、油をねぶつたとの。いかにも〳〵坂田藤十郎は傾城買の名

人でござる。とかく念佛さへ申せば極樂へ往に疑ひはない。近比有難い事。今年ほど鰯の高事もござらぬ。此比の咳氣は敗毒散では參らぬ。夕べの嵯峨の大黒屋の品が肌はむつくりとしたぞや。西瓜と神鳴は差あひぢやとの。大坂の間男は本でござつたかと、思ひ思ひに出るまかせに咄し、聞く程をかしく乘相の氣さんじは、おれそれなしに横に寐て、空いびきして隣を聞ば、血氣な男三人旅辨當を開いて酒の最中にて、ひとりがいへるは、雞喰うて酒をのめば雨降に合羽着てさるゝやうなと、いへる詞慥に長崎者とおぼえたり。何とぞ是は仕掛次第で、一盃は呑さうなものと、鼾をやめて火縄取出し、おむつかしながら火を一つと差出せば、火も進上いたさうず。まづ此間をして下されと、中椀をあてがへば、望む所とむくおきにして、何方のお盃でござります。お手元見まして、お問いたさうと罷出ば、三人の男共一度に手を打、其方は茂太夫ではないか扨も久しや。先其姿はどうした事ぞ。國元にては兩親の歎き、御内儀の愁歎大方ならず。あまねく日本の地をたづねられぬ所なし。いかなる所存ありて、何方にかくれ居られしぞと、懇にたづぬるほど合點ゆかず。私は左樣の者ではござりませぬ。生國は都にて、身躰しもじれ、大坂へかせぎのため罷下ると、誠を申せど、いかな〳〵三人實にうけず。さりとは茂太夫きよくもな



し。親達内儀に不足あつて、家出をいたされうとまゝ、竹馬よりの友だちに、何の恨みありて、是ほど迄にはつゝまるるぞ。其方は長崎の戸村屋德甫の一子、茂太夫にまがひなし。三年以前に菩薩祭見物に出られ夫よりかいくれ見えず。陰陽師に考へさすれば、天狗にさそはれ、讃岐の金比羅あたりに、迷ゐらるゝよし、人をして尋ぬれ共知れず。お袋は其方の事を戀かなしみ、兩眼を啼つぶされ、德甫はこがれ死に、去秋相果られたり。誠に金銀藏に滿て、世に不足なき身をして、何を目當にいづくへにげてはゆかれしぞ。たとへ天狗がさそへばとて本心さへ極まれば、魔道へ引入らるゝ物でなし。さりとは愚な男。氣を慥に持替、早く古郷の長崎へかへらるべし。内儀は貞女の道を守り、後夫を求めず、後家をたてゝ、手代共を引まはし、家相續いたされ、昔に增る繁昌、隣町に肩をならぶる者なし。ひらさら歸りて後家の心も慰め、親の菩提もとはれかしと、三人詞を揃へて申。扨は人達へにまがふ所なしと、して我等を茂太夫とは、いづくに見知り有てのたまふといへば、愚な事をいはるゝ。幼少より同町にてそだち、片時もあはぬ日なく、兄弟よりは心やすくせし其方を、見忘るべきか。面躰物ごし、なり恰好、目の上の、痣まで見覺え居る男共に、まだそのつれな事をいふと、少し腹立めけば、成程尤もなり。いかにも我事茂太夫にまぎれは



なけれど、久しく天狗の給仕をして、朝暮鼻の高い衆中に出あひ、人間に交りうとくなつて、いにしへの事曾て覺えず。おの〳〵の名さへ忘るゝほどの仕合。何とぞ天狗道をのがれて、古郷へ歸るやうに致すべし。其方立先へ着船あらば、母や女共に、爰であうたる咄しをして、よろこばして給るべし。此度一所に歸國したきものなれ共、天狗に暇も乞はで參らば、又つかまれんもしれず。先は互に息災なる對面うれしゝと、それより酒をくみかはして、つもる物語よい加減に返答うつて、日も西山に傾けば、船は八軒やに着、三人は伏見町に用ありとて、暇乞して、歸宅の事を念入て申て別れぬ。かの男寢耳へ茂太夫がはひりし心地して、鴈は八百てんぽ長崎へ行て、茂太夫になつて樣子を見るべしと、幸長崎へ下る船に便船して、こはき風にもあはず、浪しづかにして、心ざす大湊につきて、何かなしに、まづ上つて此地の景色を見るに、寶の嶋とは爰の事なるべし。錦の山白糸の瀧、流れ木の伽羅を筏に組、じやかう犬は和朝の猫より見えわたり、丁子は葉茶の煮がらの如く捨ありきて、金銀抓取の所、一夜に長者共成べきは爰なり。しかも好物の酒事はやりて、たのしみ深き榮花の湊と見めぐり、扱戸村屋の所を聞て、其町を髮おしみだき、少し揃はぬ事を申て、大道一ぱいになつてありけば、近所より男女出て是を見、やれ

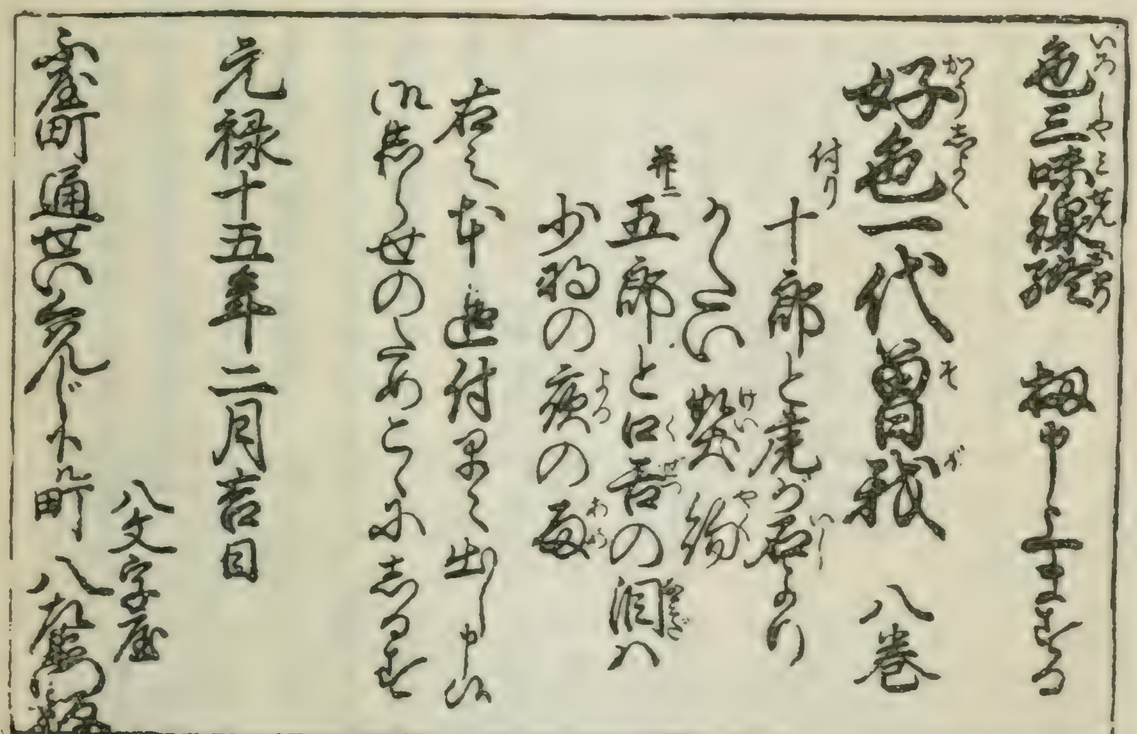


戸村屋の茂太夫殿、氣違ひになつてもたられた。天狗がつかみしといひしはげに誠なるべしと、人あつまりて此沙汰を致しければ、戸村や一家はしり出て、よく〱見る程茂太夫様にまぎれなしと、內儀の滿足、手代の喜び、目の見えぬ母迄をどり出られ、無理に內へ引こみ、もとより人參澤山成所なれば、正氣にならるゝ様にと、かたはしには獨參湯を煎じかゝる、祈禱坊を呼に駈出す、上を下へとかへし、先行水にて身を淸めさせ、古茂太夫の衣裳を出し、いやが上にきせて、王質仙より歸りて、七世の孫にあふ心地して、大方ならずよろこぶ。表へは知音近づきの衆中、茂太夫歸宅の嘉儀を申に參らるゝ、千秋萬歳悅の酒事すんで、二三日も態と正氣でない風して、四日めより祈禱の力にて狗猿の見入退しとよい加減な事申て、先共夜から、

、昔の事をとへば、天狗にかこつけて氣ぬけがして覺えぬと、しらぬ事は是ですまし、まんまと茂太夫になりきり、次第に奢つきて、丸山の色狂ひ心ざし、出入の素人末社引つれ、あたまから油屋の太夫、山城にかゝつて、とめどもなく通ひ、ある時はせき舟みさを、うきはし木々野、戸山くれなゐ、ばつとした太夫共を一所にまねき能をさせて悅び、さま〲の奢つのりて、壹年もたゝぬうちに、金藏壹つからにして、今一つの唐物の藏に、手をかける段になつて、誠の茂太夫金比良の杉の茂みよりかへりて、菩薩祭りより抓まれし段々を申せば、內儀をはじめ手代共肝をつぶし、兩人の茂太夫を兩方へわけて、二人が顏を見るに、さりとは微塵違はず。是影の煩ひ成べし。いづれにても、影の方を見出し、それを失へば、此煩ひ治するといへりと、家內不殘目金をあてゝ見れど、いづれを影と申がたし。時に誠の茂太夫いへるは、汝我に化て家財よりは、大事の女房共をおしはれて自由に致す事間男冥加につくべき奴なり。おのれ茂太夫に究つたらば、親仁より家財請取、去々年天狗につかまれし前迄の、年々の勘定をいたして見よ。我等は帳をひかゆる迄もなく、中だめに年々の勘定高をいうて見すべし。此高知たものは、おも手代の德右衛門ならでなし。是を證據に茂太夫を極むべしといへば、手代の德右衛門至極いたし、成程此儀然るべしと、似せ茂太夫に算盤をわたせば、終に秤と算盤、手にとつた事がない。傾城狂ひする者は、算用知ては、遊びに始末出てをかしからず。誠は我

人間の種にあらずして、又人間に遠からぬ物、傾城買といふ、やくたいなしのかたまりなり。富貴な家の二代目の若代に、算盤秤むつかしがり、親の異見を、早合點する心に入替りて、金銀家藏諸道具迄、物の見事に皆にさする、我通力を見よやとて、忽藁人形となつて、燒印の笠をかたふけ、日本の地をはなれて、あつちものとぞなりけり。

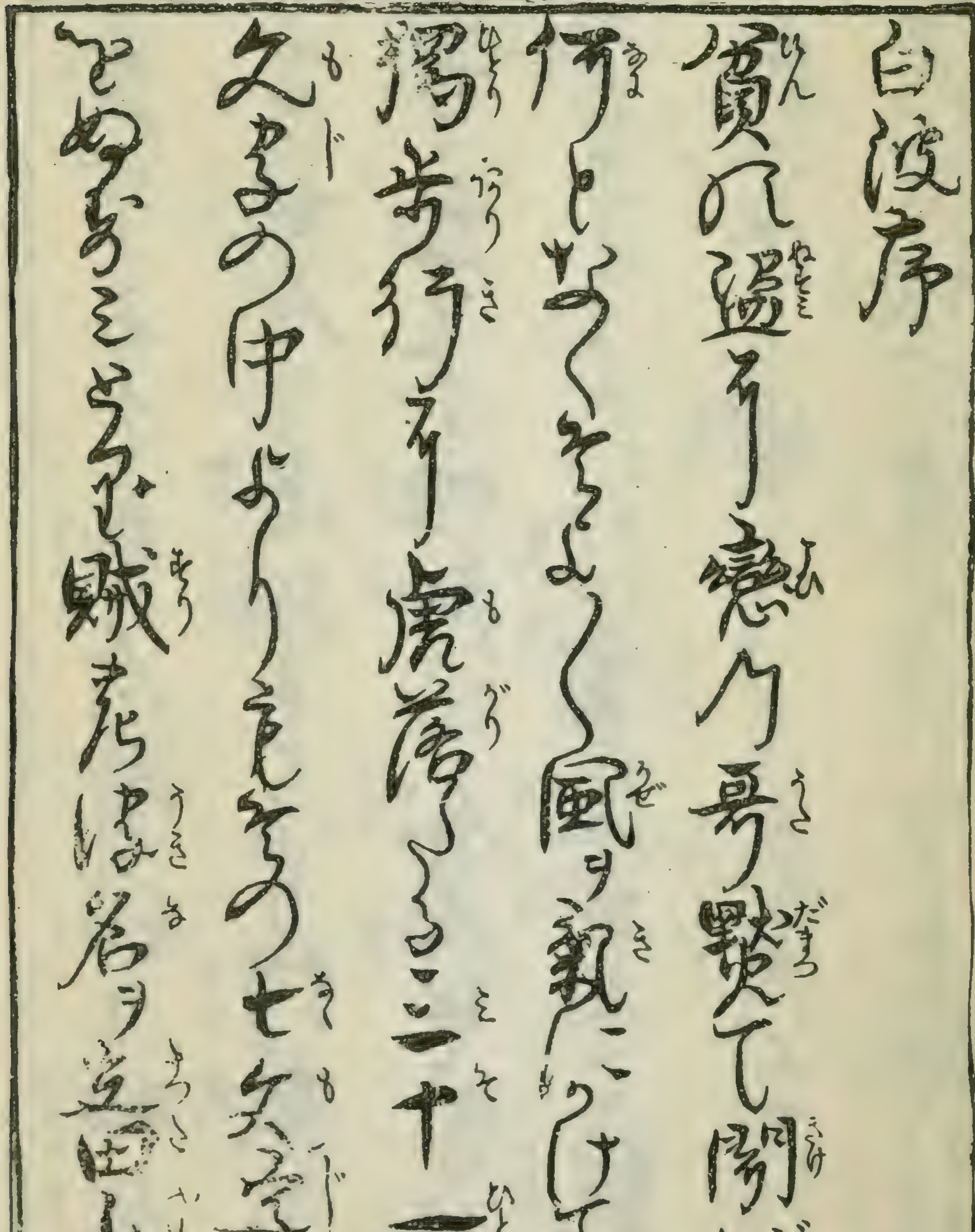
抑此傾城買は、胎卵濕化の四生の外に、色塊といふ一生よりわき出ると、取揚婆々の申侍りき。此生に取つかれぬ様の大事は、第一家業に精を出し、算盤にうとからず、秤目せゝりて、始末をわきまへ、衣裳好をやめて、大酒をせねば、永代傾城買に取つかるゝ事なく、子々孫々迄繁昌し、永く家傳り、大福長者となる事、うたがひあるべからず。目出度〱



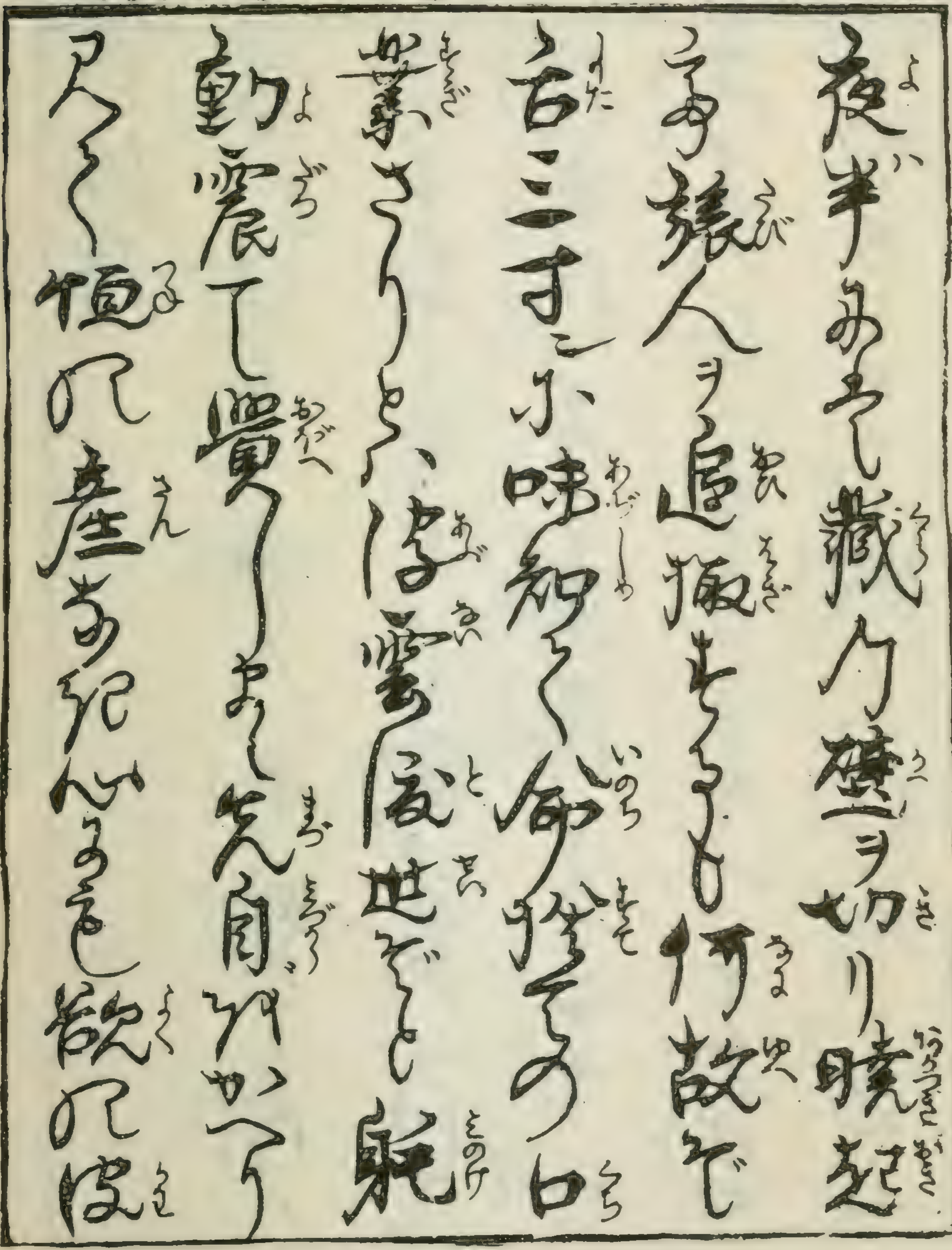
沖津しら波

白波序

貧の盗に戀の哥默て聞ば何となくそよそよ風ヲ氣にかけて獨歩行に虎落たる三十一文字の中よりもその七文字をぬすみとり賊の浮名ヲ立田山夜半には藏の壁ヲ切



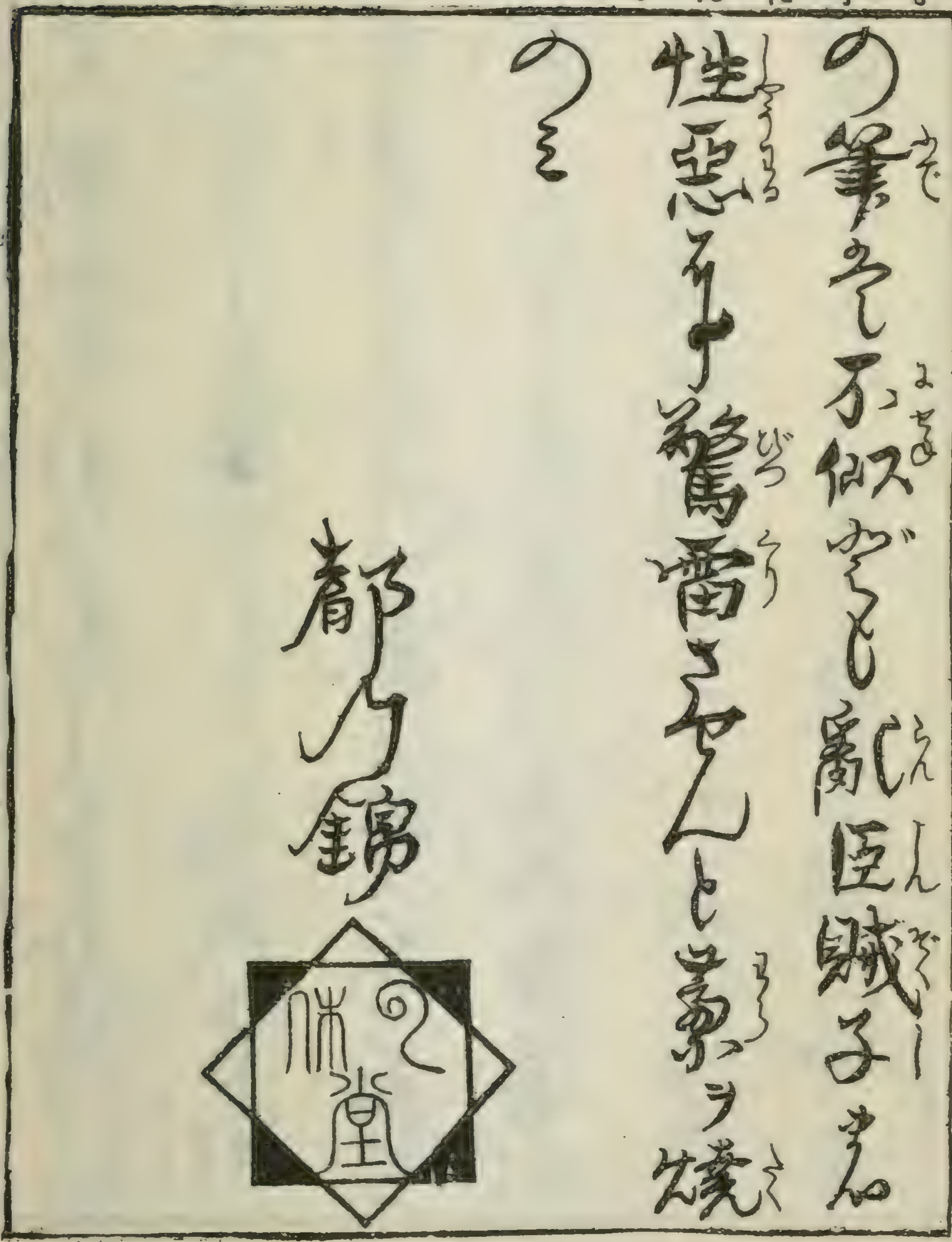
り暁起（あかつきおき）て旅（たび）人ヲ追（おひ）撥（はず）するも何（なに）故（ゆへ）ぞ舌（した）三寸ンに味知（あぢしめ）て命捨（いのちすて）ての口業（くちすぎ）さりとは浮雲渡世（あぶないとせい）ぞと毦（みのけ）動（よ）震（だつ）て覚（おぼへ）しま、ま先（まづ）自（みづから）たかへり見て恒（つね）の産（さん）なき心にも欲（よく）の皮（かわ）たば摑（こそげ）すて朽（うて）たむ



かしを拾出し又新しく耳なれし穢成言計書集ちよろりと巻が五になる粋の眼にいたりてははつはと褒て善にすゝみ家暮の心にかなひなはひそ〳〵として悪に懲ん仲尼の筆

は不似(にせ)ども
亂臣賊子(らんしんぞくし)
の性惡(しやうわる)に
鷩雷(びつくり)させん
と藁(わら)チ焼(たく)の
み

都の錦



沖津白波一目録

かのぢしやの女

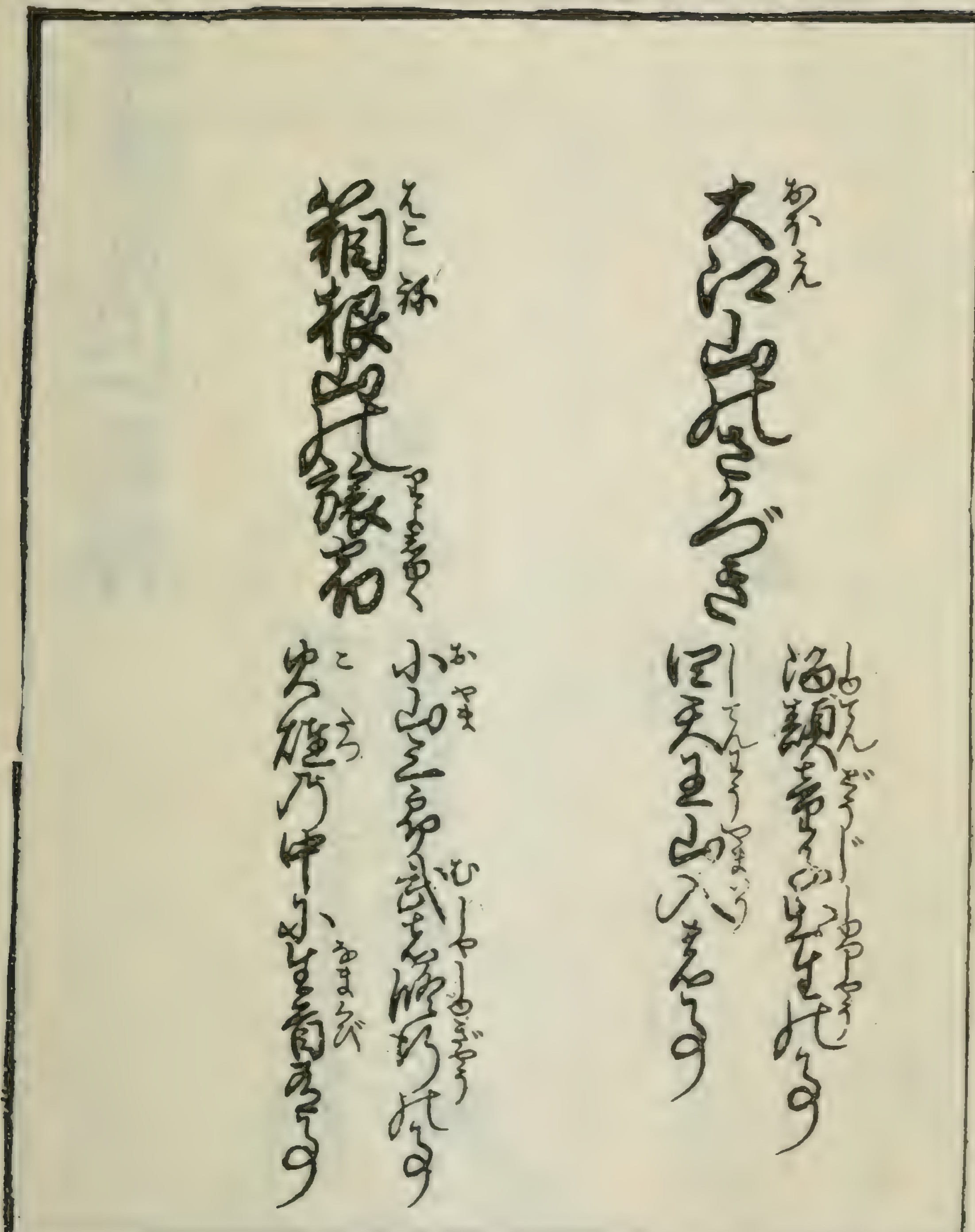
近江の太守義賢がいしやうする事

大友阿武信虎よりまどふ事

商人乃一念

保輔おとし穴を掘る事

猶賊たばかりて逃る事



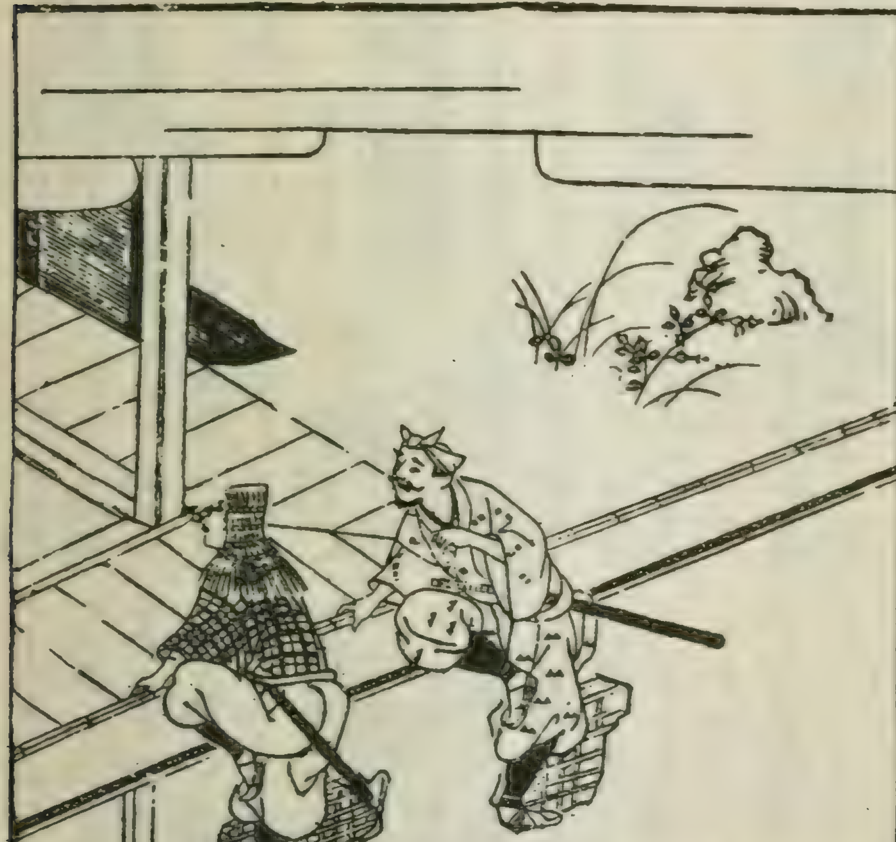
大江山花さかづき
酒顚童子出生はなし
四天王山入はなし

箱根山花の曾我
小山三郎武者修行はなし
虎御前中村生言はなし

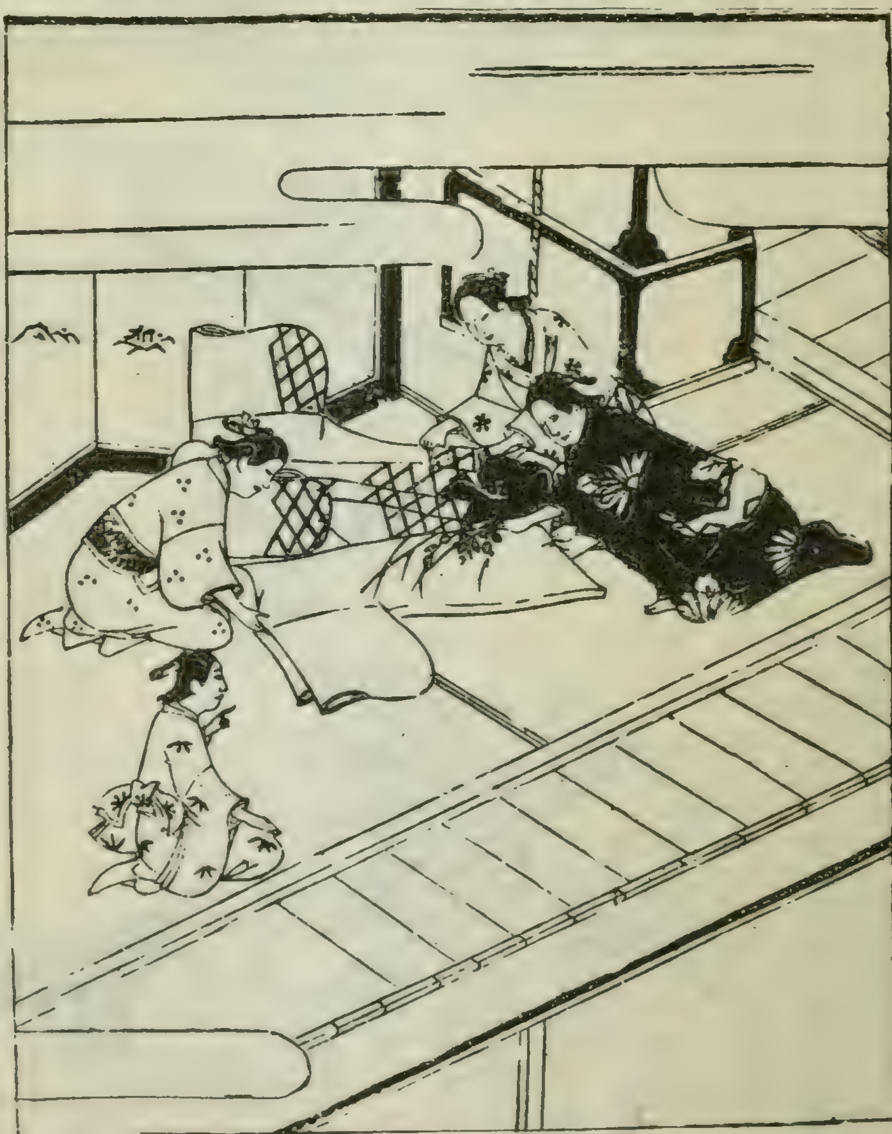
近江の大太郎聞おぢする事

瓜田不レ納レ履李下不レ正レ冠とは文選のをしへにして礼を守るの一つなり。されば人として礼義の二つをわするゝゆへ。恒の産なき時はかならず常の心なく。きのふまで人の悪さをあきらかに鏡にかけて見しものも。けふはわが身の闇つゝ闇の夜すがら門に立。人の寝息を嗅時は大に点打一物が吠々といふかけ聲に。おそれて余方をかせぐにぞ。火の廻りする番太めが棒引ずるも顔悪く。表町をば浦にぬけ路次の入口抜てみれば。大工殿より鍛冶屋が悪イ瀬戸の鎗金固どしめ。力およばずかしこへ行ば。腹に椀置古姥のこつ〳〵咳息を聞ばげに。いにしへはおどろかされし鐘の音に。待てこそきけ老のあかつきとよめる古言をおもひ出され。中流失レ船一瓢も千金ぞかし。よし〳〵今宵は醫者坊ぞと手を空しふして歸りける。その盗人の名をば大太郎と申て五畿内にかくれなかりし。古き草子に此ものゝ事あまたみへたり。常に近江に住居して同類をかたらひ。近國にかけ廻り盗する事功者なり。或時大太郎京にのぼり。あなたこなたを心がけ。なんでもかでもめつさうに人のみぬ間にもらはんと。うかゞひよるこそうるさけれ。二条堀川のあたりにあばれたる家のついぢなンども所〳〵落ける内に。男らしきものはひとりもみへず。女の限りあつまり居て物縫張物なンどして呉服屋をよび入れ。絹巻物を取ちらし心よく買置けり。大太郎立とゞまり念頃に見入ければ。折ふし風が颯ゝと南の簾を吹上たるに。すだれの中に何の入りたるとはみへねども。皮子葛籠のいと高くふつくりとして見栄あり。是を見るより賊ゝして天晴天のあたへぞと走り歸りて同類にこうした首尾といひまわしその夜丑三つ過る頃。かの家に行て先一番に大太郎築地の崩をそろ〳〵と四つ這にして入けるに。何かはしらず頭から熱湯を懸るやうにおぼえびつくりとして跡にしさり。是はざうした事ぞとてをの〳〵一所に手を組合入らんとすれども。猶おそろしかりければいかさま子細あるべし今宵は止にせよとて宿へかへり。夜明て後同類二三人もよほし品商人の躰をして。彼家にいたりてうかゞひみるに。氣がゝりなる事更になしたゞ前のごとく女房とも集居てあまたの小袖をとり出し。疊んづ開つするばかり其外別の事あらじとよくみすまして戻り。その夜かたく身

ごしらへして入らんとするに。はじめよりおそろしさまさりければこよひもむなしくかへりぬ。明の夜になりてつく〳〵とおもふに。たゞわれ〳〵が臆病神に引されてかくおぼゆるならんとて。又行向て立るに。此度はいよ〳〵おぢ氣が付てがた〳〵ふるふ様になれば。是はしたりと膽を潰しかへらんとしける時。同類の中にて小彌太といふもの申けるは。かくまでたび〳〵足をはこび何の手もなくかへらん事。さりとは無念の次第なり。さればはじめにさし出たる人のふしやうに。内に入て心みよといふ。大太郎聞てさもいふたりや尤じや是から命を二つ物がけにして入べき物をと屛をのりこしければ。跡につゞいて皆〳〵入りぬ。しかれどもおそろしさ彌増なれば。おづ〳〵あゆみよりてみるに。あばらなる家の内にともし火を挑げ。母屋の際にかけたる簾をおろしで。すだれの外に火を置たり。まとに昼の目當にたがはず。皮子なんどおほくみへけり。然るにかのすだれの内にて矢を爪寄音のしけるが。その矢來りて身に立やうにおぼえ。い



ふはかりなく可畏ければ。歸り出んとするにも猶うしろより矢の來るこゝちして。脇の下からだく〳〵と冷汗を流し。やう〳〵に迯出互に溜息つき。さて〳〵おそろしき爪よりの音かなといひつれてかへりぬ。さてその家のかたはらに大太郎か知りたる者あり。それをたづねて入りければ宿のあるじいみじくもてなし。大太郎にむかひて何時のぼり給へるぞととふに。今朝まふで來つるが久しくあはぬなつかしさにたづね申といへば。あるじよろこびよくこそとてやがて盃を出し。先はたがひに無事で目出たい。一つ參れとあるじはじめてさしければ。大太郎盃を請もちながら。此北隣にはいかなる人の住給へるといふ。あるじおどろきたるけしきにて。いまだしらずや。大矢助武信此ごろのぼりて居給へるといふに。大

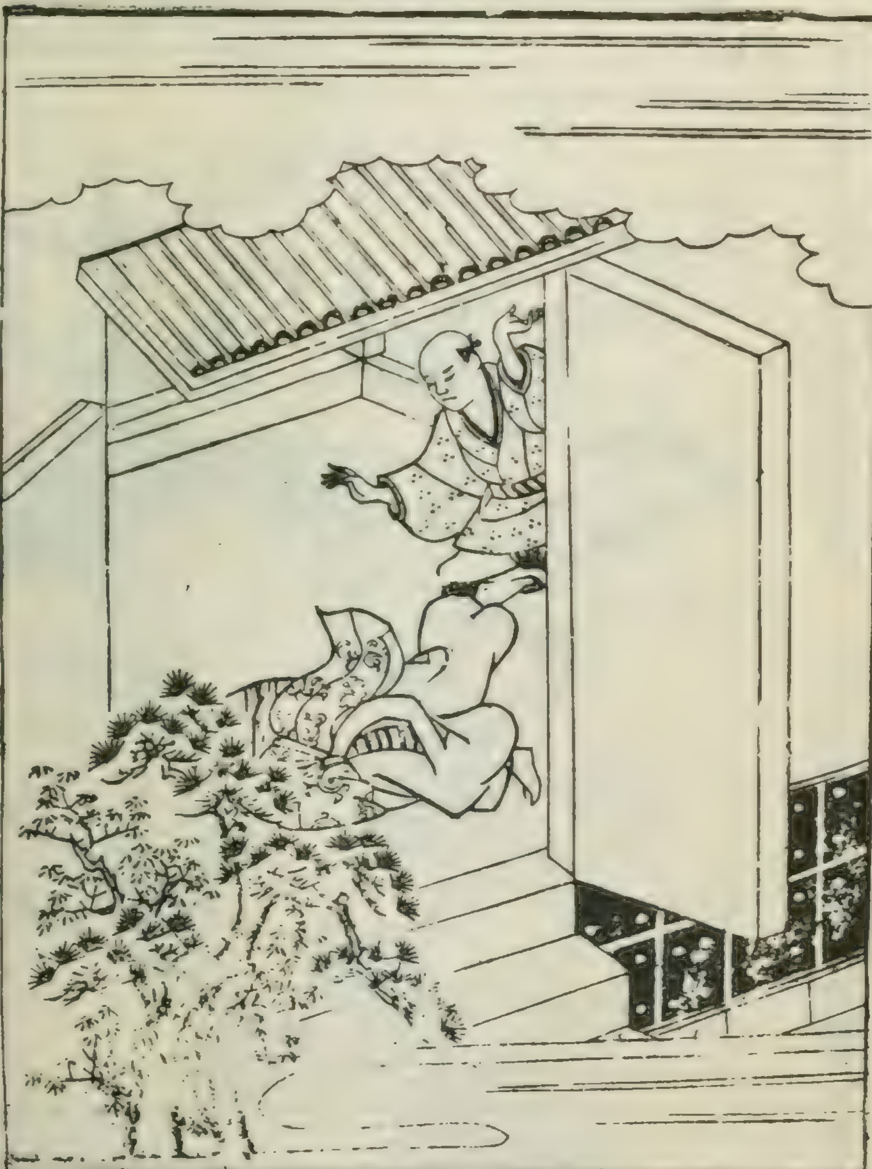


太郎さればこそ日本一の弓取。若見つけられたらば一人ものこらず射殺されんとおもひけるに。物もおぼへずわな〳〵手先振ふて。請持たる酒をあるじの頭の上にうちかけはしり出けるがうつぶしに低にけり。あるじ興をさまし。

こはいかに。いかに〳〵といひけれど歸見もせず迯ていにけり。それにもこりず大太郎盗の數かさなりて後にとらへられ。罪におこなはれけるとなり。されば君子は安に居て危をわすれず。小人は危に居て安きがごくするゆへに。かならずひよんな死をする。つゝしみたまへ世の中の人

保輔おとし穴をこしらゆる事

ことはりやいかでか鹿の鳴ざらん。こよひばかりの命とおもへば。とよめる和泉式部が夫丹後守保昌が弟に。兵衛尉保輔といふもの有けり。盗人の頭取にて姉小路の南高倉の東に住けり。家の奥に藏を作りて地をふかう井のやうにほりて。下に劔を立をきもろ〳〵の商人をよび入れて品〳〵をとゝのへ。價を払ふべき程に是に來り給へとて。頓而藏の内に引込。かのほりたる穴に突はめて上より石を投入うちころし侍る。さるによつて此保輔が家に物持て入たるもの〻かへりゆく事なし。此事を物賣どもあやしうおもひ。ある時絹



商人其家の門にいたりて日野絹めすまじきかといへば。保輔よろこび例のごとくよび込。巻物あまた取出させ幾何など丶直打して。さて代物を濟すべきほどに是へ來り給へと。かの藏にともなひてゆく時。絹賣あやしくおもひ。けふまで世間をへめぐりて廣くあきなひする所に。藏の內に入て價を請し事終におぼえず。いか樣これには子細あらんと氣を付て。藏へ入るとそのまゝかの穴を見付さればこそと思ひ。保輔先達て是に／＼といふ所を。商人心得たりといひさま右の腕に力を入れ。何ンの手もなく保輔をかの穴へ突落し。上よりとばをかけて。もはや價におよびませぬあの世まで懸ヶにいたして進ます。おさらばといふてかへりぬ。古語にいはく欺レ人必自欺二其心一欺二其心一自欺二其天一心其可レ欺。此心は欺とは僞りだます事なり。人をいつはりだますと思へどもみづから我が心をわれとだますなり。わが心をわれとだませばすなはち天道をだますなり。心は天理のそなはりある所なればいつはりだますべからず。たとへば人を僞りだますともわが心においてはぢざらんや。あゝおそるべし天の責。人心一念を生れば天地こと／＼く皆知る。善惡若無レ報乾坤必有レ私とは邵康節の金言なりとぞ

酒顚童子出生の事

世に傳ふ酒顚童子といふは丹波國大江山に住で。人民禽獸を食とし。通力自在にして繪に書る鬼のごとくなりとおもへり。是一盲衆盲を引のあやまり。そも彼が出生は越後國芦井の庄にて藤太といふ百姓の子なり。その母胎める事十五ヶ月にして產にのぞみくるしむ事かぎりなし。終に產落さずして悶死けり。母死てのち胎內より自這出て誕生の日よりよくあゆみ。ものいふ事四五才はかりの兒のごとし。よつてみる人おそれけれども親子の恩愛ふりすてがたく。五六才になるまではゝごくみ置しが。成長するにしたがひよのつねの人に替り强惡不道にして父のいさめ世のそしりを用ひず。今は中／＼もてあぐみ。かゝる邪物を見迯しにして生立をかば。後には親の首に繩をかけんもしれがたし。いまだしかと物心もわきまへぬ內。いかなる野山へも追放うしなふべしとて。ある夜ひそかに示し合五六人寄合。かの童子を引立深山につれゆき棄置てかへりながら。藤太をはじめ同道のもの。さだめて夜半にすさまじきふす猪の床の夜食にならん。

あゝ不便南無阿彌陀。佛くたと口ずさみ涙おとして戻りけり。されども山には狐狼の害なく。木の實をくらひ谷水を飲で日をふるほどに。成人するにしたがひ其長六尺餘りにして力飽までつよく。晝は山に引籠夜な〳〵海道に出て往來をさまたけ。旅人の金銀衣服をうばひとる事たび〳〵なれば。暮におよぶといなや海道に行かよふものなく。此山には鬼神が住ンで人をとりくらふよしさたして。聞く人舌をふるふておそれけり。類を以て集るならひかの童子を大將にして。さま〴〵のあぶれものどもまねかざるに付したがひ惡行をのみすゝめける。しかるに童子天性底のしれぬ大上戸。樂天。李白なんどをば腰に付べき程の器量一座に孤かぶりを低さねば不レ醉。醉ぬれば顚動悶絶して力をうしなひ。物ぐるひのやうになれり。是によつて酒顛童子と名づく。そのゝち丹波國大江山に住ンでをり〳〵都に徘徊し貴賤男女をなやましければ。帝より勅を請て源の賴光四天王をともなひ。山伏の姿に出立山道に踏まよひたる体にて童子が住家へたづね入り對面し給ひしに。その折から童子手下の者ども七八人左右にならべ酒宴して居たりける。頭は禿にして振分髮の間よりも猿眼光渡り面の色紅のごとく。大肌脱に成て左右の腕は荒木の松と繞しやうなるが左に大盃を持。右に鹿の片股を捕舌打して居たりし体。常の人にはかはりてみゆ。六人の山伏みぢんも臆し氣色なく保昌先達になりて上座に着けば。皆年の先後にしたがひ一面に並居たり。其時童子盃を下に置遊團扇おつ取膝立直し。旁〳〵は。何國の客僧にていかなるゆへにか爰に來れる。保昌手を突て是は都方の山伏なるが伯耆の大山へはじめてまふでしに。おもはざる外に道ふみまよひ進退をうしなひ。あなたこなたをさまよひやう〳〵是までたどり着ぬ。あはれ御情をかうふり是にて一夜を明させ給ひ。一日の饒をも資給はれかしと申ければ。童子聞て御手前は先達とこそ見請しに。眞の道をばおしへずしてひよんな所へ同道する事。うつそりとしたお山ごのさりとは合点まいらぬなり。何さま是には子細あらんいぶかしさよといひければ。保昌聞て眞似目になりさなうたがはせ給ふまじ。そも先達と申せばとて山川驛路の案内をくわしく知れる者にもあらず。たゞ行法をよくつとめ年功を積故に先達とは申なり。童子聞て尤〳〵とうなづき先平に居て長途の草臥をはらし給へといふ。

保昌うちくつろぎさらばその御盃を先達申賜て是なる面〻にも給させ申度候。幸又われ〳〵が笈の中には長旅の儲にとて少〳〵肴を貯持て候。くるしからずは聞しめされ候へとて。おの〳〵笈の中より丸板の蒲鉾。干大口魚のむしり物。鮎の鮨南蠻味噌なんど取出して座中にならべ置たれば。童子大によろこびたる氣色にてわれ異相なる生質なれば平生人のまじはりなし。酒を好んで飲といへども早晩かはらぬ家來許を相手にすれば。めづらしき興もなかりけるに。今日不可思議にをの〳〵にゆるりと出會申事。是しかるべくは八岐蛇の引合ならめ。こよひはしつほと酒汲で互に憂をはらすべしと。五合入の大盃をかたふけ保昌にさしければおさへましたとつきもどす。そんなら相をして給と頼光にたのみかけ。いかに者ども客僧達の知らぬ山路にまよひて。飢におよび給ふらんがいたましければ。先取あへず吸物して冷飯を参らせよといひければ。承り候とやがて膳を出しける。盛ならべたる汁菜皆獸の肉なンどさま〳〵に料理して。さあ〳〵



時宜なしにとり込給へわれらは又おの／＼のもてなしに預らんとて。引よせ／＼うちくらひさし請引請のむほどに。盃の數をもしらず。並居たるものども器量しだいに引かけて。鼻哥うたふものもあり。千鳥足して舞もあり。すでに夜いたく更ぬれば。童子も今はろれつもまわらぬ程になり。前後をわすれそのまゝ其座に醉倒高鼾して寢入ける。人〻すはや今こそと思ひ給ひしかども。末座に居たりし癖者はじめより酒をものまず座中に眼をくばり。人〻の形勢不意得氣にやおもひけん。一向要心の体にて奥の一間を補理まふけて。人〻爰にやすみ給へとていざなひ。間の障子を固とぢたり。人〻はかくまで仕おほせたるに。かのくせものに見あやしめられ時刻をうつさん事こそやすからね。よしや是ほとの蔀一重踏破て出ん事は最やすけれども。もしその音におどろき醉ふしたる者ども起合せば。思ふ儘に働事成がたかるべしいかゞはせんとやゝ思案して。賴光手を打て人やおはす。餘りにつよく醉舌が咳に乾付ぬ。水一つと乞たまへば件のくせものいまだ寢もせで。童子が枕元に宿直の体にて居たりけるが。あつとこたへて嗽茶椀に水をたぶ／＼と入て持來るを。賴光屹と目合し給へば山姥の息子公時事也がつと寄て引組だり。其間に人〻は童子が寢間へ入て仰に伏したる腹の上に賴光飛乘て。いかにや／＼喰低卒土の內に住ッで王命にそむき。人民をなやませしその罪を誅せんため。源の賴光勅を蒙り唯今殺害せしむる也。念仏申せとありし時。童子犬の吠るやうな聲を出し。南無白山醉たふりして手をとりしくやしさよと。おき上らんとせし所を。心もとを二刀刺すさゝれてなを刎返さんとするを。保昌。渡邊。卜部。碓井手足を押へはたらかせず終に首を打落す。かたはらに伏したるものども太刀風におどろき出合んとする所を。公時は已前の癖者を大袈裟に切はなしはしり出たるが此体をみて。込入らんとする者どもを入立しと。蔀一間踏はづし楯に取て。四五人うち入らんとするを。曳や／＼と押出す。是に礙られて排合たる間に。保昌。綱。貞光。季武切て出。同類八人其外の雜人十餘人一人ものこらず討捕たりとかや。くはしき事は世に普ければもらしつ。およそ積ﾚ善逢ﾚ善積ﾚ惡逢ﾚ惡仔細に思量すれば天地は不ﾚ錯善惡到頭終有ﾚ報高飛遠走てもかくれがたきものなるをや

小山三郎武者修行の事

春は木末に咲かと待し花をたづねて山〳〵を廻り。三尺の秋の霜をよこたへて。小山三郎といふもの武者修行のつゐでに相州箱根にさしかゝり。薄むらさきのつぼすみれ二しほ三しほしほらしく。花の情によはるゝ誰とへとてかよぶこ鳥。蓬が本のうづら日終にあはれならずといふ事なく。まじらの聲を聞からにそゞろに腸を断つま木こりたく山中の宿にいたりて日暮ければ。此所に一宿せばやとおもひ。物わびたる家に入てとまりける。枕もとに刀を置ともし火かすかに壁にそむけうつら〳〵とまどろみけるに。はや子一つの遠の鐘たびねのゆめをさませば。起もせずねもせで夜のあくるをまちわびし時。宿の亭主火燵の中よりぬつと擂粉木を出しければ。三郎夜着の袖口よりね入たるふりしてそら鼾をかき。つく〴〵とうかゞひみければ。そのまゝ叉手を出して心みける。されどもおしだまりて起ざりければ。此度は四五尺はかり程にみへて色あかくすさまじ氣にこしらへたる人形を出しける。時に三郎そろりとおき上り太刀をぬき。火たつのそばによりながら猶いびきをかきければ。亭主さてはよく寝入たり打ころしてはぎ取べしとおもひ。こたつの中よりひよつと飛上りける所を。心得たりと首中に打おとしその首を火たつの櫓に居置。矢立をとり出し

　ちわ箱とたれかいひけん此宿の
　　火燵の中に血は餘りけり

と書て髻にゆひ付何くわぬ顔にて塀をのり越。浦道ら足にまかせて三嶋まで

出けれは夜はほの〴〵と明けぬ

沖津白波二目録

青墓ゝ石治

夕顔か自慢

魁婆長まんが幽霊なる事

張孝観武者の僧乃事

長伴切より遊徳しける事

小判と館と智しける事

赤坂のうちゞ

今商人縁を逆つる事

牛若丸手がしらる事

大津の追剥

八尾武三郎が妻殺され事

小袖を見付敵よりし事

熊坂長伴ゆうれいの事

つゝめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひのたね。何のゆへにか浮世のやみ生死の海にたゞよひ。漕行舟の跡のしら波立かへるべきこゝろもなく。屠所の羊のあゆみは我身の外にもてはなれ。鳥部舟岡の煙をよそにみて。よしやあだし野の露と消るともそれからそれまでと諸國一見に出たる觀林といふ僧。衣の袖の露しげく夕立はるゝ夏の野を心ぼそげに竹の杖。ふし〲よはる老の身の老蘓の森の年を經て又こゆべきとおもひきや。命の程もしら雲の壁落はるかに隔たる觀音寺山にひゞく鐘音高宮をうちすぎて。一夜の宿を柏原寢物がたりを誰とかせん。なれぬ衾の下心子共の爲に身をすて



て。不貞の道もにくからぬ。山中とき ち渡り青野が原に出れば程なく日暮はの石塔をみるになみだの玉をぬく。ぬ。かたはらをみれば。ならの葉にて珠數さら〲と囬向して。菩提川をう庵をむすびてかやの編戸をおし立とも

し火の影かすか也。觀林うれしくたどりつき是は都方より出たる僧なるが行暮て候へば。此下陰に膝を入れ一夜をあかさせ給へといふ。内よりしはがれたる聲にてあらいたはしの御事旅は道づれ世は情と申せば。不自由だに御かんにんあらばこなたへ御わたり候へかしと。編戸を開て内へ入れ。風呂敷包はそこに笠は爰に。杖はむかふに草鞋をばあれに脱をき給へと念比にもてなしける。あるじは年のころ五十ばかりに見えて。髮髭なンどもそりあげずして打見にはすさまじげなるが。かゝる栖は後の世の爲としもおもへるにやと。優婆塞の身の殊勝にあはれに。ふるきすがむしろのやぶれたるを所〳〵に敷。仏前とおぼしくてかやのすを仏檀とさだめ。追分の繪師が書るやうなる山越の阿彌陀。軸も落表具もやぶれた



るをたゞ一幅かけをき。閨とおぼしき所をみればふるき紙のふすま一枚。かたはらにちいさき鍋一ッしやくしせつかい水桶ひしやく。此外からりちんときさんじな事。かゝる人倫はなれたるいさぎよきすまひ。盧山の雨の夜草庵

の内も此には過じとおぼえ。虎渓の橋に千鳥足してはな哥諷ふたるとろさく坊も是にはおよぶまじきと。おのづから悟りを得るよすがともなり。仏前にいたりしばらく勤してしりぞき何心なく仰てみれば天井に大長刀をつり置。くろがねのいぼ打たる八角の棒一本其外兵具をひつしとかけ置たり。僧是をあやしみかくも憂世をいとひつゝ法の跡とふ松風にまよひの雲をはらひ。止観の水にこゝろの濁りをふりすゝぐ御身の。一念修羅の伊達道具返す〴〵も似氣なくこそ候へ。あるし聞ておゝ尤かなよい御不審。されば此あたりに垂井。青墓。赤坂とてその宿〴〵は多けれども間〳〵の里ばなれ青野が原の草高く松の尾野上の森しげれば。夜昼の差別なく山賊どもはいくわいし。往來の旅人をはじめ里がよひの下女や小娘にいたるまで切取追剥仕る。さやうのうき目を見る時は人をたすくる慈悲ごゝろ菩薩の行にも増らんかとその長刀を引さげて。すはあまさじとかけ出るに利の劒に氣をのまれ逃散時もさふらへば。鳥なき里の蝙蝠と心におかしくおもへども。少は所のたよりにも成る物ぞかしと里の伯老伯姥よろこんでお腹で虫の鳴時は。小麦團子濁酒なんごとりしたゝめ。身共が方にとふらひ來る。げに此口のかはゆさにしばしの餓をしのがんとおもふばかりの心にて。おもてはすてし世の中のうちみに似合ぬ腕だてをさこそおかしと覺されん。さはさりながら法花にも一殺多生と説給ひ。彌陀の利劒や愛染は方便の弓を持。一たび放つ觀音の千の矢先にかゝつて。鬼神はのこらずほろびうせし鈴鹿山のためしもあり。然れば愛着の慈悲は達多が五逆にすぐれ。方便の殺生はぼさつの六度にまされり。やあれば心なきわれおもしろの長ばなしさぞ草臥給ふらん。休せ給へともろともに樹下石上の苔枕こけて旅寝のゆめ心。そこはかとなくまどろむ内に東南に風發て松の梢すさまじく。西北に雲おさまらずして月のかげくらし。今こそ時分はよけれいざやものども切り入れせめよと前後を下知し。弓手や矢手に心をくばつて人の寶をうばひとりし惡逆不道のその罪一人に歸して。修羅のちまたにさまよひ待る是御らんぜよさましやといふ聲におどろき。觀林枕をあげてみれば。あるじたちまち甲冑を帯し大長刀を杖につきあたりをにらんで立り。觀林ゆめ心におそろしながらおゐひめぐらせば。いにし此あたりえ盗の大將になり往來をなやましたる熊坂と

いふものにやあらん。しからばその時のありさまたづねばやと思ひ。僧起なをりてなふ〳〵そつじながら御身は熊坂の長伴にてましますか。いよ〳〵それにうたがひなくはちかごろわりなき所望なれど。むかしにかへる世のありさまあらまし語り聞せ給へ 長はんあらはづかしやおもはずも都の人にあふはるや。青野が原の草がくれ露と消にし身のうさを語りて聞せ申さんと十面作ツて

くまさか幼時より盗せし事

長はんさてもそれがしいにしへ江州潟田に生立て。幼き時は熊太郎と申侍る。されば乳房をはなれ出子共どもとの遊事にも自然とぬすみの真似を好き。髪置せし年に本間のぬすみを仕初侍る。その子細は近所に玉屋といへる両替やありしが。つね〳〵かの見世へ遊びにゆけば手代どもわれを愛し。手打〳〵魚の目かぶり〳〵をさせながら。是がほしくは遣ふとて小判壱両みせけるを。何心なく手に取て宿にいなんとせし時に手代めいわくがりて。今のをこちへ戻して給といへど幼心のわやくさに悪じや〳〵とやんちやいふ。そんなら是と替〳〵しやと飴を一本さし出せば。先喰物に氣がみぢかく小判を向ふに打遣て飴をねぶればかの手代。うれしそふなるかほつきにて小判を取てなでさすり。三度いたゞきけるをみてさては此黄なるものは大切な寶ぞと。はじめてそれに氣が付てほしい事じやとおもひ出し。ある時足のうらに粘をべつたりとぬりてそろり〳〵と爪立歩行。かの両がへやにゆきてみれば。見せには金銀うちちらし置けるその上を。しらずがほにて通りければ手代どもうちわらひ。やあその子。いかに欲がないとても金の上を踏からは。寶の罰が當りつゝ成人してもひたすらにおもひばかの行まじきぞ。げにや子共と仏とは無欲な物じやこのごろも。飴と小判と替る氣とおの〳〵評して居たりける人〻の目色をみてかたはらに立のき。足に付たる壱分をそろりと放して守袋に入れ。宿にかへりてみれば壱分廿七ぞ有ける。われら歸りての跡に両がへやにて。その金がみへぬとて僉議しけれども幼少なる事なればわれらには心もかけず。えならぬものをうたがふもおかしかりき。それより段〻生長するにしたがひ。ぬすみする事功者になり。一郷こぞりてわれをいやがり。うしろ指さしておそれければ。いまだ志學の

歳にして終に親兄弟の勘當をかうふり。せんかたなみのよるべなければ盗人の座入をしけるに。ある時同類のぬす人ども手別をして面ふかせぎに出けるに。それがしもぬすみの手習に参るべしとて都へ上り。さる所の八百屋に行夕顔一ッぬすみとり。それより四条河原に出辻狂言する所に大勢立かゝりて見物しける透間を見合。刀の笄わきざしのかうばし小刀なッどをそろりと拔てかの夕顔の中へさしこみ〳〵しければ。とられたる人ゞ後に氣を付てあなたこなたせんぎしけれどもわれらが所爲とはさらにおもはず。さておもふまゝに取込日も暮ければ同類のぬす人の宿にかへりけるに。待うけしものどもけふの仕合はといへば。それがしおぼこなふりをして。われはじめての事なればやう〳〵此夕顔一ッぬすみたるばかりじやといふ。いづれも興がるかほにて是が何ッのやくに立物ぞたしなめあのうんつくめとにがわらひしてしかりける。その中にも粋らしいぬす人思案して。是にはいかさま子細あるべしとてその夕顔を割てみれば。中に



は名作の小刀上手の小柄四五十本さし込たり。其時いづれも我を折て後世おそるべし〳〵。今からかやうに發明ならばのちには盗のゆるしをうけて。天下に沙汰する賊の骨長に成べし。油斷なく此道を修業すべしと褒美せし事予が十五才の時なり。あんのごとく先達の目利にたがはずしだいにその道たんれんし。もろこしの盗跖にもおとらぬほどの器量ゆへ此近國にかくれなき。今熊坂の長伴とて七福神をはじめ疫病の神にいたるまで。わが名を聞てはおそるゝなり。すでに年五十に餘るまでぬすみする事千二百十六度。人をころす事四百余人におよべり取たくはへし財寶はあの西南にみへわたる。南宮山と長くらべさせても負る事よもあらじ。しかれどもおのづから道にそむきし渡世ゆへ。貨悖而入者亦悖而出とかや。あるかとみれはかげろふの。夕には賭奕をうちあしたは口に栄耀食。左をあげざる時なけれは。一升入のふくべにていつも一升是切に。あれば有たけつかひすて。なければ餘所の財寶を此方の物じやとおもふゆへ。何ンの苦もない心からそれをたよりに長伴が當呑の數かさなりて。つゐには天の責を請かゝるうき目にあふはかの。青のが原に骸をさらし悪名を万代に殘し侍るこそかへすゞ〳〵もくちをしくこそと。髭くいそらしてなみだをながす

金商人難をのかるゝ事

僧さてはうたがふ所もなく熊坂の幽灵にてましましけるかや。さもあらばその長刀にてくる〳〵と。めぐる因果はをぐるまの牛若君と御げんの時。うきに絶せぬ命をかけ。あらそひたまひし諸わけはいかに　長はんさても三条の橘次信高とて。金商人有けるが毎年あまたの寶をあつめ駄荷四五十ほどこしらへて。奥仙臺へ行かよふとて此赤坂の宿にとまるよし。聞とひとしく同類共あの松かげにさしつどふ。與力のものはたれ〳〵ぞ。狐三郎焼舌小六。河内の角助。すりはり太郎。三条の右衞門。壬生の小猿。あそふの松若。三國の九郎。此長はんは頭取にていざおしよせてうばひとり。當年中の酒手にせん智略はいかにそれこれと。せんぎ評諚とりゞ〳〵に音高し〳〵夜は何ン時ぞ丑三ツ。時分はよきにはや入れと。くつきやうの手がらのしれもの七十人。おの〳〵得物を引さげ〳〵橘次が旅宿へおしよせ門を破て内に入れば。草臥ふしたる下人ども此さはぎに目をさまし。

何事やらんとおどろきながら下帯をもしめあへずうろたへまわる所を。めつ法界になぐりたつれば。片息に成て奥の間に逃こみけるを。つゞいて悪徒みだれ入り間のふすまを踏やぶる所に。天狗の若衆牛若丸おぼろもよふの小袖をかづき。障子のすき間物あいのそよとゐするを心にかけて。小太刀をぬいて待請給ふ。ぬす人とも一間に入り續松ふりあげみれば。ときならぬ雪のはだへのうるはしく。かすみの眉のたをやかに。かづきすがたのしほらしくみへ給へば。遊君なりと心へて。みぢんも是に目もかけずさあらぬていにて通りしを。やり過してうしわか丸跡にさがりしぬす人の。ほそ首中にうちおとせば。同類是に氣をのまれ二の足踏でためらふ所を。元よりうし若無双の手利秘術をつくしてたゝかひ給へば。おもてにすゝむ小ぬす人十五人おなじ枕に切ふせられ。其外手おひ太刀をすて命から〳〵逃るもあり。其中に焼舌の小六あらはらたちやさるにても。女とおもひあなどつて焼手に逢し口をしさよおのれ生けてをくべきかと。三尺あまりの大刀まつかうにさしかざしいきほひかゝつて打所を。横さまにとびちがへ肩さきより乳の下かけはらりずンと切ておとす。時にそれかし膽を消しあのものどもを手の下に打とる事。人の所爲とはおもはれずぬすみも命のあればこそ。あらおそろしやにげんとて此長刀をふりかたげうしろねたくも引けが。つく〳〵と思ふやう。物〳〵しやわつはめが切といふとも何ほどの事かあらん。それがし秘術をふるひなば鬼を手取の鐘馗をも中につかんでみぢんになし。うたれたるものどものいで孝養に報せんとて。門口より取て歸しかの長刀を引かいこみ。蔀遣戸を楯にとりまなこをくばつて待居たり。うし若すかさず太刀ぬきそばめ。小かげよりおどり出わたし合切むすぶ。それがしいらつてさそくをふみ。すそをはらへば飛上り弓手を打てはめてにこし。追かけすかさずこむ長刀に。ひらりとのればはむきになし。しさつてつけはうけながす。こはいかにむねんやとおつ取なをして無二無三に切かくれば。小高き所に立かくれ給へば。こゝやかしことたづぬる所におもひがけなきうしろより。具足の透間を礑を切るなむ三寶だまされける事よ。今こそ運命ここにありと長刀かしこへなげすて。大手をひろげてつまり〳〵を追かけおひつめとらんとすれど。うしわか丸もとよりも少年なれば身はかろく。とに熟せ

し剱術の奥の手出してはたらき給へば。中〳〵そばへ寄つかれず。今をかぎりと冷汗をながしもみあひけれども。次第〳〵に重手はおひぬ。たけき心もよはりはて青息ついてためらふ所を。弓手のかいな切おとしかへす太刀にて打はらふ。いんぐわはめぐる車切二ッに成てわかれゆく。此松がねの苔の露あはれはかなき夢ものがたり。是まで也と夕附の鳥も鳴鐘も聞へて程もなく。夜もしら〳〵と赤坂の人氣もなき松陰に宿りて。観林猶うつゝ心なく夢のおもかげをわすれもやらず

苔衣きてあふはかの草まくら
夢路にぬるゝ袖の露かな

と口ずさみ極重悪人無他方便唯稱彌陀得生極樂とゑかうして行過けるとそ

八尾甚三郎が妻殺されし事

晨風鳴二北林一熠燿東西に飛。浮雲日千里安知二我心悲一と漢の李少卿が蘓武が別を贈りける。その心ざし今さらにおもひしられ。文明年中兵乱の時。都をばかすみとゝもに立出て。西海におもむく人は八重の塩路をわかれてゆき。あるは磯邊の楫まくら烟の波に日をかさね。東に下るともがらは遠き山路をおしわけて。霧のはれ間に嶮をしのぎ駒にむちうつ人もあり。琴を絶たる友どちも山川万里を隔たるこゝろの中こそかなしけれ。爰に津の國の住人八尾甚三郎といひし人。山名氏の手にくはゝり東國に落下りける時。年ごろ都にて相なれし女房の所に暇ごひに來りて申けるは。日ごろはたとひ味方の人ゝ弓おれ矢竭てちり〳〵になり都を落る事ありとも。御身をばいづくまでもともなひ申さんとこそ存ぜしがども。今かくなりていへば。はるかにとをき道芝の露のさはりは別人のおもはん所もさすがなれば。ひたすらこゝろにまかせず。そもじは女の事なれば世に情を懸る人も有なんたゞ今の間は心しづかに何地へも身をかくし。しばらく左右をまち給ふべし。路のほど都の中も此まゝしづかならば。やがてめでたふかへり上るべしもし亦わが身道中にて討れ。本のしづくと先だつならひもあらば。さだめて世にもれずといふ事有まじ。そのをりからはいかなる人にもあひなれて行末のはんじやうを祈り給へとなく〳〵かきくどきければ。女房聞とひとしくむねつぶれなどやかくうらめしきとの葉にはきこへ給ふ。

日比は死なばもろともにくされ付てと契りし物を。たとへいみじからん道にもせめておくれずとだにあらばうれしからましに。たのむかげなき木の下にすておかれ。一日片時が程とてもながらふべきとおもひきや。命つれなくうろたへまわりもしやかたきの手にとられ。いやな男にあひさつしてうき目にあはゞいかゞせん。げに〳〵みすてゝ下る氣ならば先みづからを害しつゝ。そのゝちはともかくも心まかせにしくされと。なきこがれたるありさまをみて。八尾もさすがに岩木ならねば。したふわかれをすてかね男泣していたりしが。さてしもあるべき事ならねば引ふる袂をふりはなし。門外さして打出けれども。すゝむはなみだぬるゝは袖。ゆく先くらき玉鉾の道はさだかに見えねども駒にまかせてあゆませゆく。さてそのゝちにけふと過きのふとくれて飛鳥川。はやその年もあら玉の。春になれども東より。いなせの音づれあらざれば。かの女房立居につけ朝なゆふなに戀草や。あるにあられぬはゞ木ゞの心もしらで東路に是非ともたづ



ねゆかばやと。乳母とひそかにいひ合せ夜半にまぎれてあこがれ出る。心中の見事さはかの祐成に大礒の虎が石よりかたい事。かたしや末をおもひやり限りもしれぬ道すがら霞める春のおぼろ月。かたふくまてに歸りみれば住なれし宿の梢かすかにして。清水寺の鐘の音明ゆく空に横はる。金谷園裏の春の花一朝の嵐にさそはれ。四方の空にちり行らんも。角やとおもひしられつゝあはれは更につきせず。せめて都の名殘をしさに所〳〵にやすらひて。行もやり給はざりつるが白川の橋を過るとて

　水のあはれによるかたそなき
なかれゆくすゑはいつくとしら川の

粟田口關山のほどいと心ぼそうおぼえ。夜をこめて鳥のそらねとかこちたる清少納言が事を思ひ出て

たつねきてゆきあふ坂の關ならは
　こひしき人をとめやしなまし

とていとゞなみだもせきあへずいそぐとすれど行なやむ。道はかどらぬ女旅八町坂を下る時。向ふより六尺ばかりの大入道　海道に立ふさがり。こりや〳〵女。兩人ともにわんぼをぬげ酒手にするぞといひければ。めのとかい〳〵しく女房をうしろにかこひまいらせて。小袖をぬげとは何事ぞ。われ〳〵は大津坂本にて百姓の使女なるが。山科に知る人有てきのふあれへまいり。たゞ今在所にかへるなり。わやくな事をめさるゝな。後日の爲があしからん除て通しやといひければ。盗人中〳〵合点せずいふまい〳〵女ばら此海道にはいくわいして。幾千ゝの人ゝの風俗をみて取て。目の肥たる奴なれば。その手はくわぬ。そのやうな伊達もやう色よき小袖をあたゝかに。百姓づれの女ばらみた事もおじやるまい。もふあらそふなそちたちは都も都大内がた。しかも下部の女でなし是非脱ぬかと小がいな取。帶引ほどきくる〳〵と丸裸にするのみならず。こりや是までがやはらかな紅じやといひさまあいだてなく二幅迄引はづし。かしこへどうとつき低せば二人はわつところゑを立。やれ人ごろしよ出あひてなせたすけぬと呼はれば。かの入道はらを立ゑゝめんどうなといひさまに女房のみだれ髪弓手の方にくるりとまき。たゞ一刀にさしころす。めのとわつとさけびしを己もともにくたばれと横腹よりずばとさし。むかふにかつはとつきはなせばあつとばかりに息たへぬ。ぬす人今は心やすしと小袖を肩に引かけて足ばやに大津の方へ迯行時。八尾甚三郎東よ

り。夜を日に次で歸京する道にて礑と行あひ。入道がかつぎたる小袖をちらとみとがめ。みればみる程こはいかに去年の春それがしが物好にあつらへて。女房に送りしそめもよふに。少もまがふ所なければあやしくおもひ。行ちがひさまに入道を取て押へおのれは必定山賊と覺えたり。此小袖はいづくにてぬすみ取りしぞありのまゝに白狀せよさなくは首を打落す。さあ〳〵樣子を語れといふ。入道ふるへ聲を出し右の子細をあからさまに申て。命の所は御免といふをそのまゝ引立行て。女房の死骸をみるゟ目闇心も亂けれど。先敵をとりしからは此上の本望あゝ今一足おそかりし故。あへなき死をさせけるよな。ゑゝ無念千万おのれ鱠にしても飽たらぬ奴かなとて。かたはらなる榎に胴中をしばり付はしり懸ッて左右の腕を打おとし。何ンと痛か因果は早く廻る物ぞ能思ひしれ大賊め。惡し〳〵といひながら又兩足を切て其後耳鼻を削。なぶり殺にして泣〳〵京に歸り入ぬ

沖津白波三之目録

鳴磯乃海面

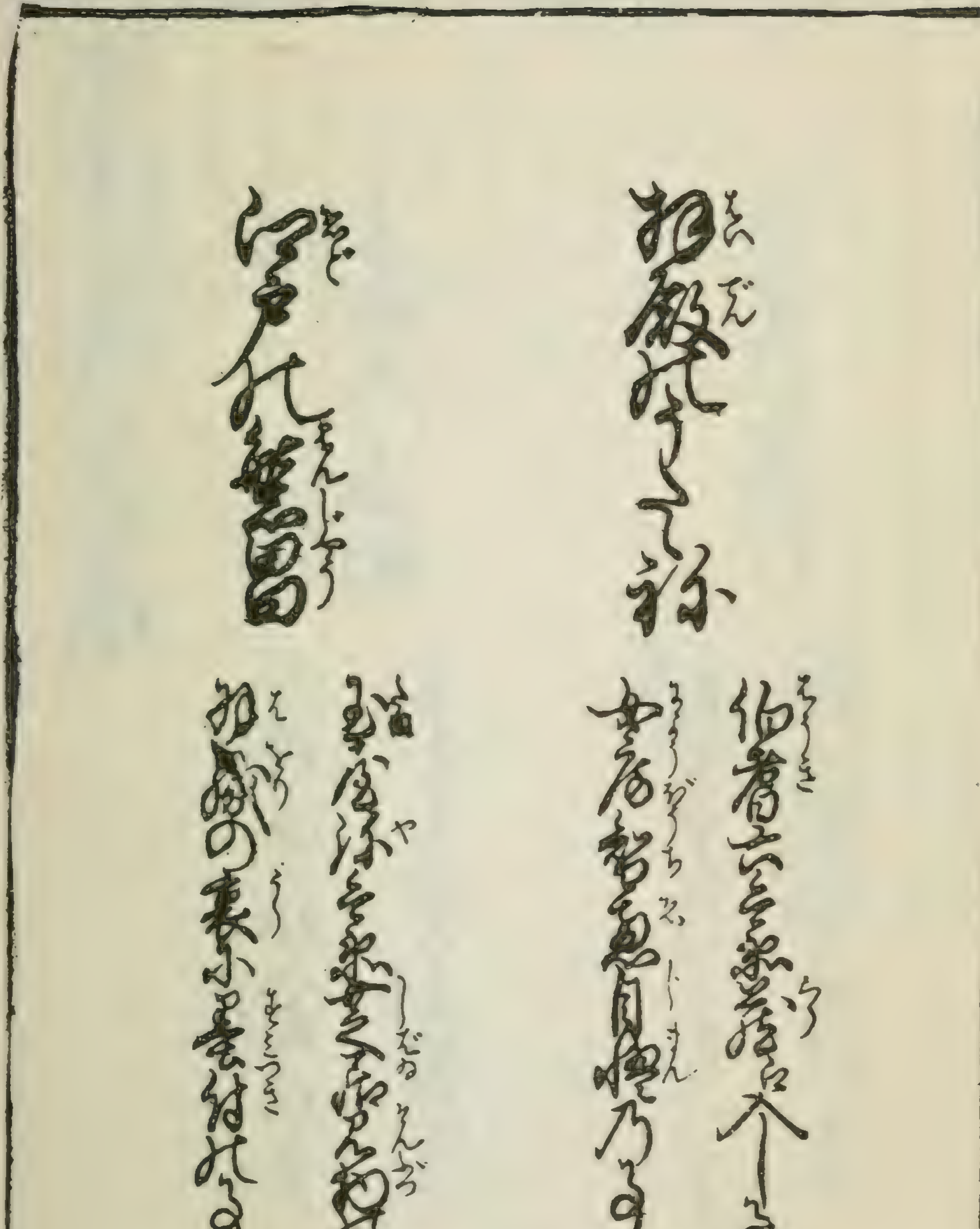
山手れのさけ

山神中ね入かゝる

京ふ〳〵れ乃るす盗賊ある

東太郎たゞくきらる

都上臈かばされる



山科中將入水の事

いつのころにか有けん年号も月日もとんと打わすれ侍りけるが。先何にもせよ天下久しくみだれ。行末とてもさだめなき世の中をおもひやるに付て。なみだは袖にせきあへず。むかしはさしも玉を礲てつくりならべし家屋敷兵火の爲に燒うしなはれ。あるは多年の間にこぼちとられ。その外洛外の在家一宇もつゞく所もなく。たゞ離々たる郊原のほとり。疊々たる白骨叢にまとはれて有し都の跡ともみへず。市朝互に交易し城闕皆荒丘となりぬ。さればぬしなき宿の花は露に泣る粧をそへ。ちりぬる庭の風までも秋を吟ずる聲をのむ。こゝに山科中將とかや申けるは。和哥管絃の道に長じ繪書花むすびにいたるまでこまやかに心をつくし。よろづめやすくくらし給ひし御身なれど。うちつゞきたる兵乱に財寶はと／＼く盗賊の爲にうばひとられ。年貢官物も今はすたれて。譜代相傳の家來も皆ちり／＼に逃うせしかば。かくては都の住ひもかなひがたくしばし世のしづかならんまではとて西國の方に落下り。緣をもとめ二とせあまり光陰をおくられけるに。さすが都もなつかしく。今は世間もやすらかにおさまりけると聞しより。國のあるじにいとまこひ。北方その外下女こしもと若徒中間かれ是上下八人。一ッ舟に取乘て都をさしてのぼられける。海路ほどなく藝州高砂の多田浦といふ所に着けるが。折ふし浪風あらかりしかば。しばらく此浦に錠をおろし順風を待けるほどに。此人の不運にや有けん。いかに待ども風もさだまらず。むなしく七日七夜をおくり過されけるこそいとをしけれ。いとゞしく身の行すゑもさだめなき都も今はかへつて旅とおもふから。とにもかくにもよるべなくきしかた行先おもひかこつにも。そでは泪にひぢまさり波の立音もいと心ぼそく沖の白洲に鳴千鳥。海士の戸渡る楫の音。をりから哀やまさりけん。しほやくけふりかすかにたなびき。とりあつめたる所のさまもつねよりはなを物がなしくおぼえて中將

　そこはかと風にまかする舟の上の
　　波のよるせに名をやなかさん

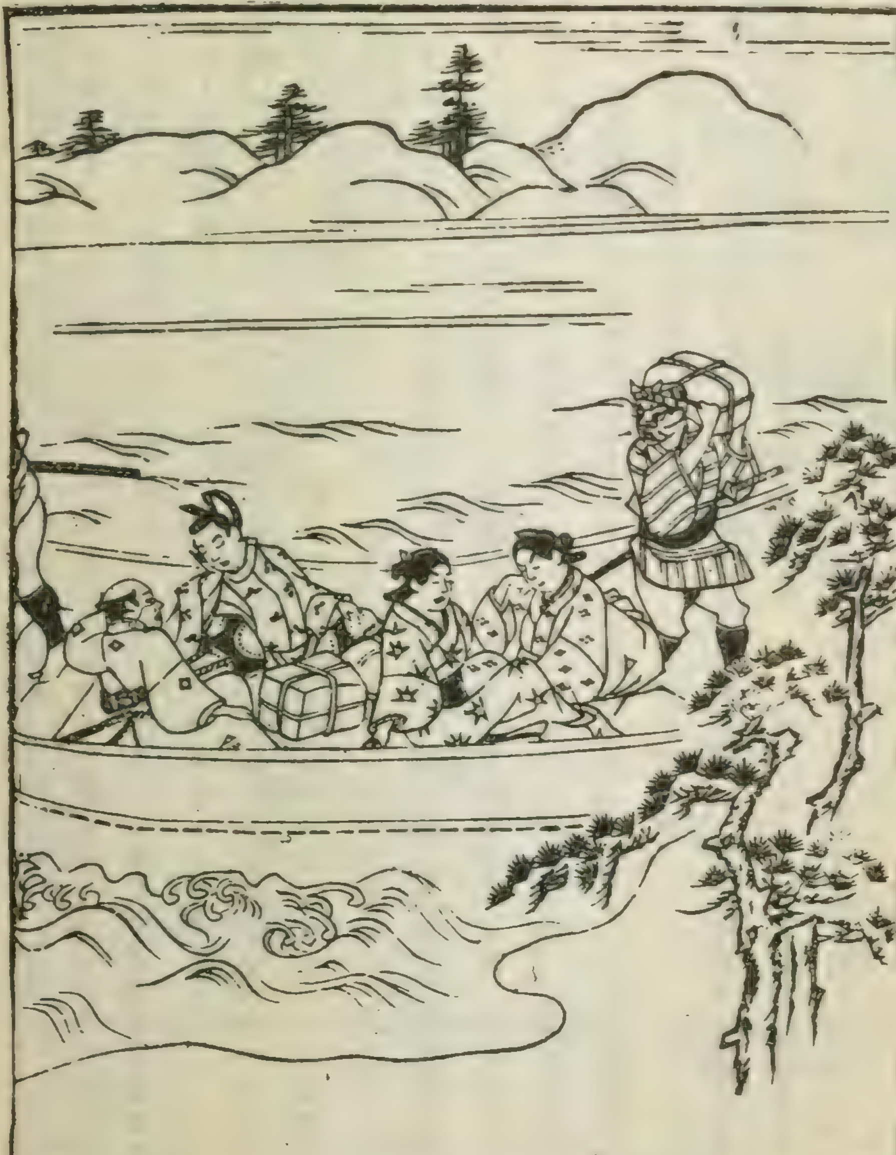
北の方あぢきなきすさみにてかいやりたまふ

　波まくらうきねに苫をかた敷て
　　うらふく風にものおもふらん

時しも秋のすゑつかた弓はり月の陰さ

やかに深更空夜閑にして苫屋の床の楫の露も。涙に袖をあらそひて。たゞ物のみぞかなしかりける。さなきだに旅の空はいづくもといひながらましてかかる時こそ忍びがたけれ。中將北の方もろともにその夜は別て都方をおもひ出るなみだに。われから曇りてさやかならず。いにし九重の雲の上久堅の月におもひをのべしゆふべも。いまのやうにおぼえてなつかしければ。網引舟に躍魚。木にのぼるいきほひも實とおもはれ。都には又めづらしく爰で肴の喰飽せよと。鯛鱸あまたとゝのへ。あるひは味噌こくにてといひ。又はやいてと面ゝに料理ごのみして。頭に上る田舎酒とり出し。たがひに酌かはし下部にも酔ほどのませ。かれ是たのしむ所は。赤壁の生酔にもおとるまじと小哥なンどうたひてなぐさみたまへり。

しかるに此舟の水主は長八と申て是より半道ばかり奥。夷嶋といふ所の海賊なりしが。年六十におよぶまで追剝押入を業とし。舟にて人をころす事その數をしらず。放逸無慙の大ぬす人にてありけるが。此間つくゞ\と人ゝのて



いをかんがふるに。いかさまゆくさきもたのみなき零人よとみすましてげれば。かゝるあぢきなき人にめぐりあふこそしかるべき天の引合なるべし。一ふ捕へて海に突はめ財寶うばひとらばやとねらひけるこそおそろしけれ。さ夜もやう〳〵更過て浦人みなしづまりしかば。今こそ時分はよきぞとおもひはしりよりて。先中將の供人何心もなくふしたりしを取ておさへ。一〳〵海になげ入れけり。中將は此ほどの旅つかれにとやかくとおもひくづをれ。その上酒の醉ごゝろ前後もしらで寢入給ひけるが。此物音におどろきふと起あがらんとしたまひける所を。長八うしろよりはしり懸ッてなさけなく。千尋の底にどうど蹴込けるにぞ。北の方たゞ夢うつゝともおもひわかで舟底にたをれふしわつとさけびたまへは。長八今



は心やすしとため息つき。北の方の側近く寄てさのみなげき給ひそ。わごせをばたすけ申ぞさいわいわが惣領の太郎に婦もなければはいひ合せ申べいぞ。あの都人の痩男を相手にしてはたんのうするほどの事はあるまい。それが太

郎はがいに肥く生れついて。わごせが爲には抱力が有てよかんべいにさ。よろこべ〳〵とかた言まじりにおもふ事あからさまにいひちらし。夜のうちに舟の財寶と〳〵くとりしたゝめ。北方の手を引ておのが家路に歸りける

夷の太郎たばかられし事

そも中將の北方二世と頼し夫にはおくれ給ひ。ゆくへもしらぬ嶋の夷の手にとらはれ長八が家に入り。消もやられぬ玉の緒の何ながらへてあぢきなき。かゝるうき目にあふ事やらんとひたすら目をさへみあげたまはず。よろづ夢の心地の外はさしてわきまふ事なし。つねに目にみへ耳にふるゝものとてもむかしはかりそめに名を聞もおそろしかりつる賣炭の翁。舟さす長のあらけなき戎どもなれば。遠慮得釋もあら礒のみる目もうとき蜑の子なんどあまたさし集ひ。樽肴打かたげて長八が家にとふらひ來り。あな目出たや是の家には都上臈をむかひとり婦とし給ふ事。果報いみじきあやかりもの。かゝるふしぎの緣に參りあふたる太郎殿こそうらやましけれとて。口々にことぶきざざめきければ。北方にはいよ〳〵息もたゆるばかり心ぐるしふうたて物うくおぼされけれども。あいさつせずはかへりてなさけなきしかりにやあはんずらんときのどくさに。たゞ何となくにでやかに皆様よふこそわたらせ給へ。わが身は此ほどうちつゞき心やましく候所に。けふはとりわき例よりはいとなやましく候へば。ろく〳〵いらへも申されませぬ。それでゆるりと御茶まいりませあゝくわんたいをばゆるさせたまへと。そのまゝ奥にとぢこもり衣引かづき人しれず明くれ涙の床にふししづみ給ふ所に。是ぞ惣領の太郎とみへてじまんくさいかほつき色は土人形の弁慶のやうに節瘤立たる男。北方のそばへつか〳〵とよりそひ。なふ是いかに都上臈なにをかさのみなげき給ふぞ。こよひは月も円にとさら赤くはれわたり。秋も最中に候へば浦の者ども明月に貝を拾ふて。海士の世渡るいとなみをいたしあそび申がおもじろく侍る。少とんばかり踏出して心をもなぐさみ給へ。そのやうに臥入てばかり居れば氣が朽て虫が出るものぞ。是非〳〵そんな事も嫌じやとおもふて我がいふ事をもちひたまはぬならば。是から猶〳〵遠き嶋はるかの國のはてに賣送て遣らんず物を。人商人といふは何ンぼうおつかないものにて此方らがやう

に得いたはり申まじきぞ。其時は我ばしうらみ給ふなと一度はなぐさめ一度はおどしなどしければ。北方とかく此者をすかさばやとおぼしめし。いかにもうちとけたる風情にもてなし給ひて。げにもかくそひなれまいらするからは何に心を置候べき。一樹の陰にやどり一河のながれをくむも。みな是他生の縁と聞なる物を。われはもとより都のものながら今とては親もなく便りもなきものなれば。そもじ様の眞實にかはゆがりて下さらば神ぞ命はいとひませぬ。二世かけてのちぎりなれば人の信偽をば心ながくみ給へかし。さりながらたゞ今は心地例ならず候へば。ともかくも御心にまかせ申がたく候。さればそのいにしへ都にてかやうになやみさふらひし時は。淡路の嶋に人を下して。紫の少貝とやらんを幾計事取あつめ。其中より眞珠を拾ふて用れば此病たちまち愈侍りしかども。かゝる田舍の住ひなれば今は何事もおもふに甲斐なしとうらめしげにの給へは。太郎つく〴〵是を聞それこそやすきのぞみなれ。わごせが爲とならば天道八まん阿蘭陀咬𠺕吧に渡りてなりとも願ひをかなへ申さでやはあるべき。ましていはんやそれ程な事をば千駄も万駄も今宵の中に引さらへて參らせんずるぞよ。心やすくおもひ給へといひすてゝ家内のこらず引つれ。海邊をさしてはしり出ける。北の方さてはたばかりすましぬとうれしくおもひて。ひそかにかの家を忍び出給へどもたゞ此所のおそろしさばかりにいづくをさすともしらず足にまかせてはこび給ふ。もしやかのものども追かけ來る事もやあらんと胸がだくつき。一足も先へと心をせかせたまへど東西さらにわきまへず。そこともしらぬ遠き野の道をしるべにたどりゆく。荻ふきをくる風の音。草葉にすだく虫のこゑ〴〵までもぬす人の追來るやらんと。肝たましゐも消るやうにおぼゆ。されどもしかるべき天のあはれみにや有けん。夜すでに明がた近くなるまゝに里遠からぬ後夜の鐘ほのかにきこへければ。いかさま此あたりに寺こそあるらめと鐘の音をしるべにてやう〳〵たづね入てみたまへば。一村立たる林の中に杉の袖垣しつらひていとかすかなる尼一人閑に念誦していと殊勝なるよそほひ。北方息もつきあへずしてもし〳〵といふ聲に尼君ふり歸りみて。こはさていづかたよりとてぞわたり給ふにかととひ給へば。北方かくさば中〳〵あしかるべきと右の次第をねんごろにかきくどき給ひ。もし

もかゝる値遇さふらはゞ是を善知識にて。髮をおろし戒さつかりまいらせ。うき世をいとひて中將のなき跡をもとふらひ。おなじ蓮のうてなに生れあふべき菩提の道をもたづね申さばやとかくあさましながら。つれなき命ながらへ是までのがれまいりてゝ。あはれ仏の御ちかひにもそむかせ給ふまじくは。今はひとへにたすけさせたまへと。さめ〴〵となきたまへば。かの尼なさけふかき人にて。かい〴〵しく是をかくしいたはりよにいとをしみ。やがて出家になしまいらせ。名を妙譽とぞ申ける。いまださかりなるすがたを引かへ。そのまゝ墨染の衣にやつれ給ふ。かねてより是を本意とはおもはざりけれども仏種は緣よりおこる事なれば。是も又得脫はおなじく望有けりとおぼえて。一たび遠離穢土の願を發し。一向專念の窓に入しより此かた。すみやかに愛執戀慕の妄念をはらひて。ながく欣求淨土のつとめおこたる隙なかりし。しかるに世間の常なきは猛ものものこらず慳貪なるものも遂には此責をのがるゝ事なし。かの夷嶋の長八かり

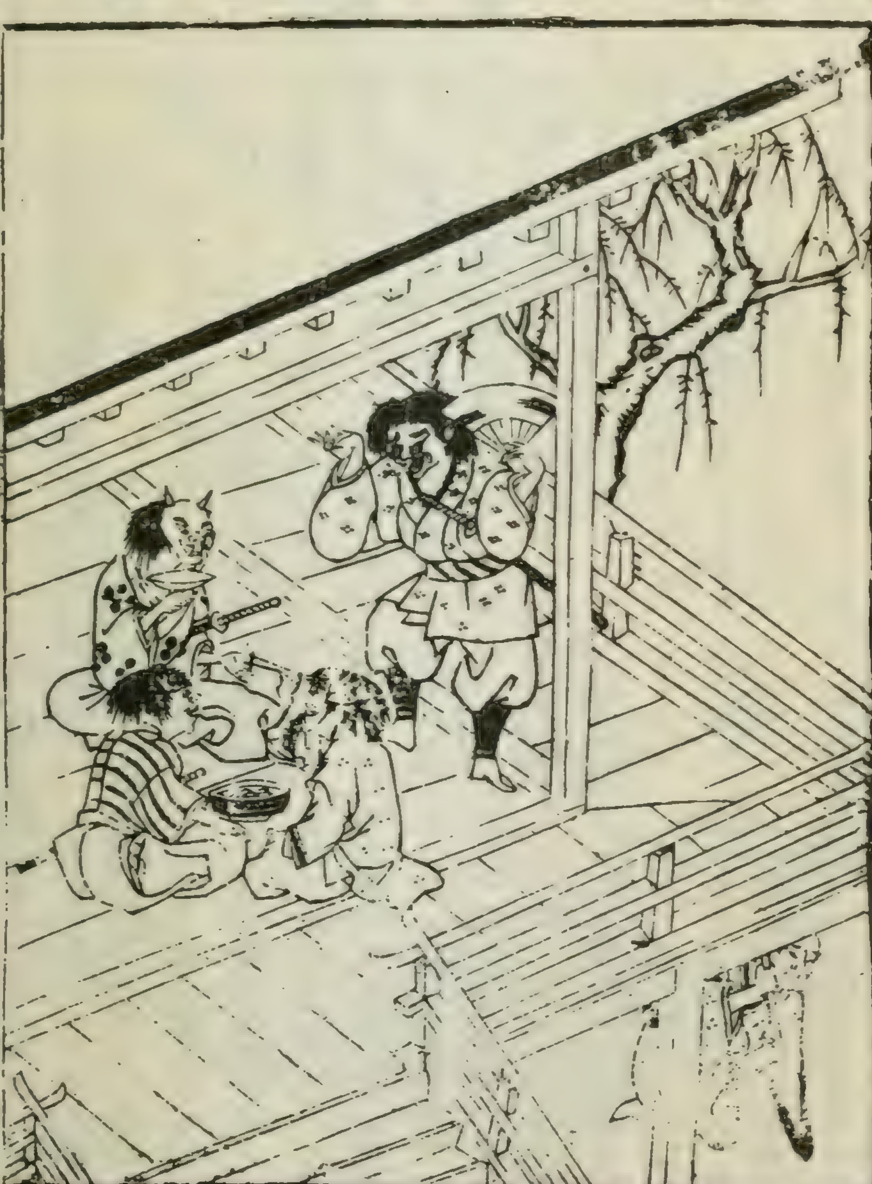


そめに風の心地といひて。うちふしける日より湯水も喉を通らず。五体火のどくに熱しあら熱やたへがたや水をかけよ。水をかけてくれよと大聲上てわめきければ。看病するものやるせもなく。大柄杓にて瀧のをつるやうに水をくみかけゝれども。その水たちまち湯のごとくにわきかへり猶あつさいやまさり。手足をうごかし身をもだへ。病付て三日めに終むなしくなりぬ。かゝるやまふはむかし清盛入道のなやみ給ひしより外かたりも傳へず。もろ〳〵の醫書にもみへずためしすくなき事なり。是長八わかき時より惡逆不道にくらしけるゆへ。天の責をうけてくるしひける物ならんと。みる人おどろきをもへりそのゝちむす子の太郎は。釣に出ておもはずも鰐魚の爲に命をとられ。いくほどなくかれらが家ほろびうせける。報ひの程こそあらおそろしや。たしなめ少人

伯耆六兵衛藏に入し事

元祿十三辰の年ひとへに風のめづらしく。衣がへする夏のころ播磨國佐與郡に源右衛門といふ百姓。道一里山をく佐與姫の社にもふでけるが。俄に雨風つよく吹降にあひ。雨具の用意もなければかへるべき方便をうしなひ。しばらく社の拜殿にやすらひ。晴間をまち合せける内に日暮におよび。雨いとゞはげしく落て。佐用川の水かさまさり。ふみもかへさぬ丸木橋おのづから流ければわたるべきたよりもなし。今宵はこゝに明すべしとおもひ。乾ならべたる麥藁を引よせ枕にしてうちふしけれど目もあはず。ほつ〳〵ときしかたを案じ寝ぬにあけぬといひおきしゆめばかりなる夏の夜をあかしかねたる所に。山寺の鐘心ぼそく聞えかぞへてみれば十に一ッたらぬ比ほひに。大摩山よりおほき人聲して。をの〳〵明松を提げ近くみへ來る。源右衛門是に力を得て。かく物すごく神さびたる所に。たゞひとり居のうかりしに。うれしや人のけはひのしけるは。さもあれ近所のものならんよびかけて様子をたづね。情をうけて一宿をたのまばやとおもひ起揚りてみれば。右のたいまついよ〳〵近付よりて其間わづか十間程になり火かげにうかゞひければ。いづれもかたちは繪に書たる鬼のごとく。額に角生たるもの數十人引つれて出來れり源右衛門膽をつぶし蚤取まなこに成て拜殿の板敷の下に這入り息を殺し口の中にて名号をとなへ。忽死入やう

におもひ居たるに。かの異形のものども拝殿にうち上りて酒盛するていなり。そのあいさつ人間に替らず。さしたおさへた相をしましよ。お手本をみましてなどゝしやれた口上。さらば肴をいたしませうと一人の鬼つゝ立上つて。聲をかしく拍子をとり。戀し〱と鳴蟬よりも。なかぬほたるが火をとぼすしやうがへと。おもしろくうたひければ。したり〱とほめのゝしる程にやゝ有て鬼の大將とおぼしきもの。いかに面々いざや此醉機嫌まぎれに一勝負して。明日の酒手をもふけばやとおもふはどふじやといへば。並居たるものども皆尤と同心して引つれて立出ける時に源右衞門椽の下よりはひ出。溜息百ばかりつき髪をきして此かたかくあやうくふしぎなる目に出合ふたる事なし。とてもの事にかれらが行先を見とゞけんと尻を三圖までからげ。九寸五分の耳くじりを力にして七八間跡より。明松に付てそろ〱あゆみ行ければ。道の程十町餘りも行すぎぬらんとおもふころ。かのものども門構したる家に近付内のていをしばらくかんが



へ。やがて扉をこぢはなし大勢内に入けるに折ふし此家の亭主は下男を不殘引つれ堤をふせぎに出ける。留主には女房と十はかりなるむすめ一人。下女二三人緒うみ糸くり夜業して居たる所え。ぬす人どつと入來り先かたはしより縄をかけ。さて女房にむかひて此家には金銀おゝくたくはへたる事世に聞えかくれなしいそぎその有所をおしへよいぎにおよばゝ一々さし殺んとあらけなくいひければ。女房少もさはがず何がさて命さへたすけ給はゞ金銀をばのぞみしだいにまいらすべし。先いましめをゆるしたまへ金の有所をおしへ申さん。ぬす人どもよろこびおの／＼縄を解て。さあ／＼金を渡せといふ女房申けるは金銀をばあれなる藏の二階に。ためぬりのたんすに入をき侍る。その外衣類にいたるまで大かた二階の長持につめ置ん。是／＼手柄しだいにとらせ給へと。藏の鎰をわたしければ。ぬす人信ぞと心へ藏を開て我先にと皆／＼二階に上りけるその隙にかの女房下女をともなひ藏の戸をひし／＼とさしこめ錠をおろし。さて表へ出ける時門口にて源右衛門に礑と行あひきもをつぶし是もぬす人の同類ならんと迯歸る時源右衛門聲をかけ。かまへてきづかひし給ふな。それがしは少も胡乱な物ならすあのぬす人の首尾は最前よりとくと見屆侍り。さても女の身として事急にのぞみかゝる才智のはたらく事。古今ためしすくなしいざ是から我等を證人にして公儀に申上給へと。直に所の代官へ訴へければ。さらば時刻うつさずめしとれとて取手の人ゝ數十人弁に一村の百姓うごき渡りかの藏を取廻し夜の明るを待て藏の窓より鐵炮を打入ければ。ぬす人どもことゝ／＼くめいわくしておの／＼大聲を上ヶ命をはたすけ給はれすみやかに罷出べしといふ。さらばとて藏を開戸口に火蓋を切て。さあ／＼出ぬか／＼とさいそくせられ。手を合ながら腰をかゞめわな／＼ふるひ／＼出ける所を一々からめ取ける。其中にて頭取のぬす人をば伯耆六兵衛と申て中國にかくれなきあばれ者也けり。夜に入てはさま／＼異形にさまをかへ。鬼の面などをかふり人をまどはし在ゝを騒動させけるとぞ。やがて六兵衛をはじめ同類九人引張切になり侍るよし。かの源右衛門直に語りき

玉屋彌兵衛芝居見物の事

朝の六つからずゝずと出がけの八文

字。鬢付とろりとはけ長に。茶加賀の羽織打かけて八所とぢの編笠引込。江戸伊勢町兩替の面手代玉屋彌兵衞といふもの。霜月朔日の事なるに中村が芝居にはいりて顔みせをけん物しけるが。後より盗人玉やが羽織をねらひけるが。芝居はてゝ木戸口を出る時。盗人つゞいて跡に立かの羽織の裏にそつと印判を押たり。彌兵衞かくともしらずふきや町の方へ行けるを。盗人つか〳〵と寄てひしと取付。おのれは何とて身共が羽織をぬすみたるぞ。はや〳〵脱で歸せといふ彌兵衞思ひよらざれば大におどろき。こは人たがへかそつじなる事を申さるゝはいかなる故ぞととがめける内に。はや大勢人だかりして町の者もさはぎあへり。彌兵衞申けるはそも此羽織はもとより拙者の着用にまがひなきを。して御手前のじやといふ證據があるか盗人おろかな事をいふ人かないかでかそつじをいひ懸べき。それその羽織のうらに我等の印判高といふ古文字を印に押たり。さあそれでも爭か玉やあきれて裏を返してみればいかにも印判居てあり。されども彌兵衞わが物に極りたれば少もさはがず。さて此羽織をば其丈そこの何屋といふ仕立屋にて縫せたれば。いかほどそちがもがりをいふても。段〻いひ分ヶは此方にあり。あの印判は先程芝居にてお手前が押たるにまがひなし。よし〳〵此上は四も五もいらぬ。それがしがぬす人か其方が大賊か。たがひに宿へ付届して善惡を沙汰し申さんといひければ。何がぬす人のくせとして中にぶらりの雲助いづくを宿と定ねば此あいさつにほうどこまり。よし〳〵此上は町所のせんさく迄もいらず。身どもが損さへすれば別なる事なし。當年の厄はらひじやとおもふて。其羽織をばおのれにとらするぞといひすてゝ逃んとせしを玉や盗人の袖をひかへ。人をぬす人にする上は是非とも其方の宿をもあらため。われらが所をもみすべしといひければ。町の若者ども口〳〵に。扨は其印判は木戸口にておしたるにまがひなし。やれそれのがすなといふ所に。宿なし御せんぎの御役人通り懸らせ給ひ。何ッの手もなくはや取ッたり

沖津志ら波四目録

阿部(あべ)の[illegible]

石川(いしかは)五右衛門[illegible]

[illegible]

生(いき)かへし火葬(くわさう)

[illegible]

七条河原[illegible]

大坂乃飛脚

文は長崎似せ状の名なり

見る所の為人の[illegible]なり

京都の屋己

[illegible]は[illegible]なり

松村清[illegible]なり

石川五右衛門渡世の事

山に手杵をみて置た餅の米春荒仕事。踏はねたる邪ゝ馬をもたゞおのがじゝ引まわし。黒木賣する大原女も聞とひとしくぞつとして。四方にその名を流したる石川五右衛門といふ男。生國は遠州濱松の者にてむかしは鞍に腰をかけ。六分の弓に肩を入れ眞田喜八とよばれしも武家の盛衰さだめなく。今牢人の身となりて名さへ惡らし穴冠。牛か午かと書けば牛馬に荷付てはる〲と河内國石川郡に。山内眞底といふ醫者坊にゆかり有て妻子を引つれ此所に來てその者をたづねけれども。移り變る世のならひなればたのむ木の下に雨もりて。淵は瀬となる石川の水くさき眞底坊中〲介害にする覺悟にあらず。さりとて又他國に身をよすべき所もなければ。先爰にしばらく滯留して時節をまち。然るべき奉公にも有付ばやとおもひ。石川邊に小家をかり則名を石川五右衛門とあらため。親子三人居喰にして半年ほとくらしけるがもとよりたくはへあらざれば。しだいに竈さびしくなり烟をたつるよすがもなし。さすが又此まゝ飢死も口をしき次第おちぶれし時には。いかなるいやしき業をもして今日をおくる事みぢんも男の疵ならず。もろこしの伊尹は有辛といふ所の小便替になり。わが朝にも源九郎義經は金商人の馬追になりて。五十三次を上り下りし給ふ。しかれば一たび下輩た所作をすればとて死までそれがくされ付て居る物でもなし。とにもかくにも今日の身業こそ肝要なれとて。女房には百匁を五分づゝにて綿をつませ。五右衛門は海道に出て駕籠を舁歩行荷を持。肩の上にてかせぎけれども此邊の道筋は往來の人もまれ〲に。五日に一度錢とれば十日は隙にてくらすゆへ。中〲渡世も埒あかず。是ではすまぬとおもひ寢の起ふしにつけ思案すれど。元手を入れずにまふけはなし。とやせんかくやとおもひめぐらす内に。人しれず惡智惠が出來て女房にはふかく隱し。宿からは駕籠のかせぎに出るふりして。おなじやうなる惡姓もの惣吉といふ男をかたらひ。たゞ二人大わきざしをよこたへ手鑓をさげて。夜な〲阿部野ゝ堤に出跡さきに待ぶせして追剝するこそおそろしけれ。ある時堺よりの魚荷ども夜の明がたに二人つれ。咄し仕以て通りけるを五右衛門向ふにまわりてこりやまてさ商人素手では爰を通さぬぞ酒手

を置て行ヶといふ。魚荷聞て立とゞまり扨〳〵無理なお人かな。われ〳〵は朝夕にかよひなれたる魚賣なり。勿論錢の有ならば進してもおしからじ。しかれども只今は大坂に賣にゆけば。是〳〵み給へ明財布ちやんが一文候はず。ヱに生物さがりては大分損を仕るはや〳〵ゆるしてやり給へと手を摺てわびいへど。五右衛門惣吉聞入れず二尺八寸するりとぬけば。商人大におどろき籠を打すて逃にける。さて〳〵弱ィやつばらとどつと笑て兩人先籠をとりひろげ。なんでも朝込仕合よしそちの籠には何ふある 惣吉 先是は鮗 五右衛門 やあ門出に此しろ取ル事侍の二たび世に出ん吉相 惣吉 こりや是をみよひち〳〵はねる鱸どのいけ取たりやぬす人の手長蛸じやといひければ。五右衛門にがひ顔してやれだまれ鹿相もの跡さきしらずにものいふな。此ふつゝかな魚は何もけふは仕合よし。ふく汁〳〵あたゝ 惣吉 それこそ河豚の横飛時分がらよかまるねぶかそろへてどぶそへて。跡ろふぞはやく歸りて料理せん。何ンで新酒をどぶ〳〵とふたりつれ立さあ



〱宿に宿がよければ名もたゝぬと鼻哥うたふてかへりけらしな

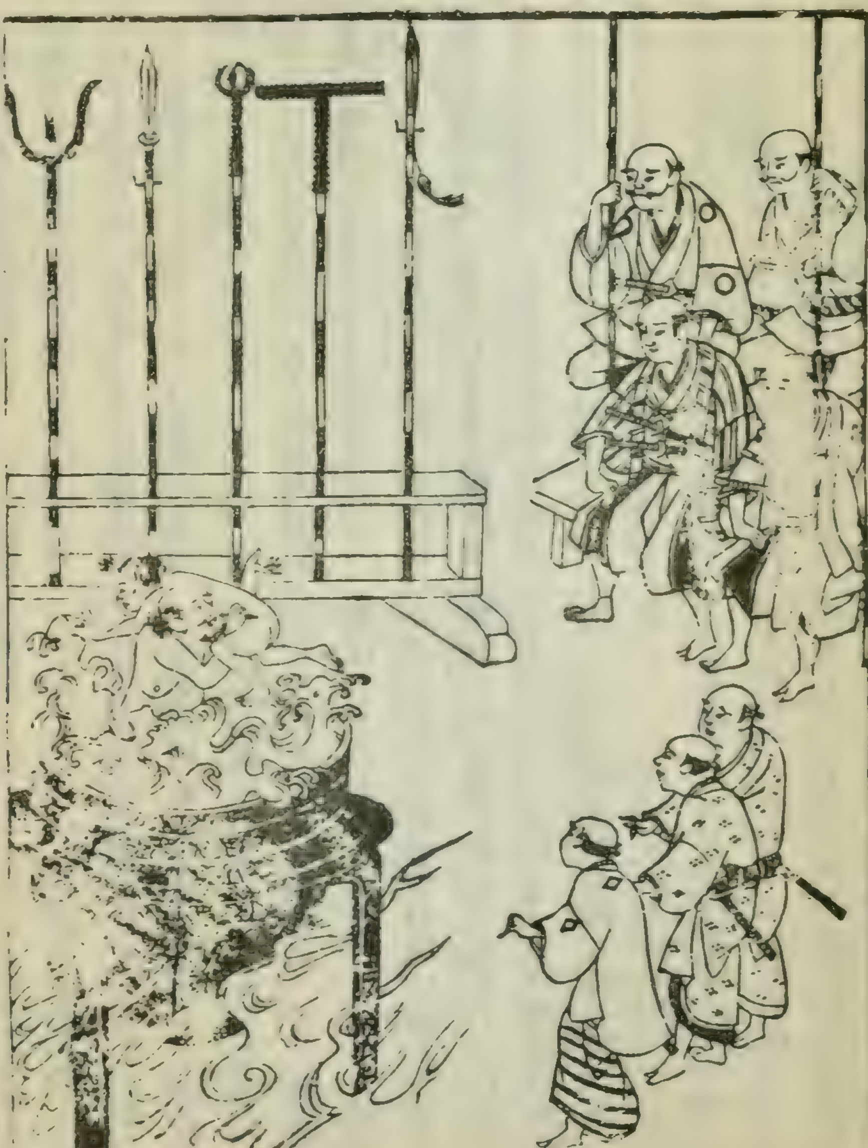
参宮の女殺されし事

おもはずも常の產なきうたてさに。さながら飢も死なれねばうつる月日のやるせなき石川五右衛門さりとては。道ならねども所作として人の物とるうれしさに。惣吉をかたらひてあかしくらしてゐたりしが。阿部野は用心惡しとて行かよふ人しなければ今はとて。かりにふしみの里つゞく藤の森の邊に引こして。淀橋本やひらかたのとまり〱の旅籠屋を心がけ旅人の泊りを見届けて。おし入追はぎ切取してくらしけるこそあゝ笑止。ある時よしある人のぬけ参りとみへて爪端きよげなる振袖。下女に油箪脇懸をさせ橋本の宿にきたるをりふし夕陽西にかたふき赤まへだれの聲おかしく。袖引戻し手をとらへめつたに奥に引ずり込草臥をはらす夢の世の。くらきにまよふ人心五右衛門是に目をとめて惣吉をちか付ヤア此宿の田丸屋に色よき小袖きつれたる女郎二人とまりてあり。きやつらがて



いのよしあしはいかさま難波の腹ふくれ大盡のむすめなるがぬけ參りするようす也〇をばしつかと持べしと手の指曲てみせければ。惣吉うなづき日比案内はよくしりぬすでにその夜も子一ッ過る比ほひ田丸屋が浦にまわり塀の壁をこぼち。雨戸をそつと引はづしやがて座敷に忍び入。ふしたるようす着替の有所をみとゞけともし火ふつと吹けし。二人の寢巻を引まくればこはいかにと目をさまし狼藉ものよとわめく所をおのれ聲を立るかと小がひな取てねぢふせ。胸のあたりをさし通せばあつとばかりに二人の女夜半の霜と消にけり。此音におどろき宿のあるじ下男。やれぬす人と起あがり棒よ熊手よ帚よと。闇さはくらし目くらうち。かなたこなたとうろたへける内。五右衛門惣吉浦口より足をかぎりに迯行ける。爰に五右衛門が女房はわが世渡りのいとなみに。手なれぬわざをしならひて露の命をつなぎとめ。ゆくすゑながくさかふべき運の來るを松が枝にかゝるたのみを藤の森。晝は茶見世に顔さらしゆきゝの人に休まんせ。お茶まいらんせと會尺して夜は夜業のいとかせを。心わくせくくりかへし糸よりほそきあたひをとり。ならぬ世帯を送りける心中のほどいとやさし。さて五右衛門が運は天まだ天命にはなされず。あやうき所をのがれ出ゆたんにつゝむ色小袖よそ目をしのび立歸り。女房にむかひ小聲に成て是をみよ此四五日はおもはずも福徳の三年目。よき大盡に目をかけられ撞木鳴原おろせ駕籠かけ特にするがやのふじ様といふ松の位を。根からすほんと引ぬいて内に入んとしたまへども。首尾あしくして心にまかせず。よつてかの女郎を少の間此方にあづかる筈に請負た。そのよろこびの引出物そちのお女房に着せよとて大夫の寢巻を下さるゝ。こりや是をみよまめ板に山吹そへてそれがしに寢酒呑とてもらひたり。さあよろこべと實らしくたばかりけるをさすが又。女心のあどなくて先取あへす神酒をあげ。さて段〳〵に指折て米を三升味噌五分薪五六抱その跡は木綿半端とゝのへ。むす子の次郎に正月物仕て着せませうとよろこびあひける所に。取手のものばら〳〵とおし込何の手もなく取たりと女房ともにいましめける。五右衛門大におどろき是何事ぞときしよくする。やあおのれおぼえあらん夜前橋本の宿にて夜盗に入り參宮人を切ころし。財寶うばひし天罰立所にめぐる事かくのごとし。扨同類はとたづねられしに。その矢風

を聞て惣吉は行方しらずなりぬ。五右衛門をば引立奉行所に出れば前代未聞のあぶれもの洛内外を騒せ。おほくの人をころしたる重罪いそぎ七条河原におゐて親子共に竈煎にすべし。女房が事はいさゝかわけをしらざれば死罪をゆるし近國お払なさるゝなり。有がたく存じ早〻國遠仕れといともかしこき御政道。理非明らかにさばけゆく科のしるしの紙のぼり馬の眞先におし立町〳〵小路を引わたす。ひつじのあゆみ程もなくも七条河原に着にけり。かくてひろく地をほり三方に石をたゝみ。其上に大竈をすへ下に柴をつみかさね。さて科人の繩を解親子のものをやがてかまに取て入。そのまゝ薪に火をかけしは仏家の方便にたとへたる。焦熱地獄のうつしかと身の毛動てあゝおそろし。次郎盤一はいになふあつやゆるしてと七才未滿のわらんべが何心なく歎を聞けば。子ゆへの闇とこそ申に親ゆへうき目に大がまの底に引敷五右衛門次郎が上に乗て



石川やはまの眞砂はつくるとも
世にぬす人の種はたへせじ

と高らかに聞にその年三十七にして生ながら火葬の手本となりぬ

宮の長藏似せ荷を作る事

ながらへは又此ころや忍ばれん。うしとみし世ぞ今は戀しく古郷を。又おもひ寝の床の夢。美濃に妻持尾張に住ける長藏といふもの先祖より高持の百姓にて有けるが。打つゞき不仕合さしつどひければ。ゆづりうけし田畠一畝も殘さず賣拂。今はさりとも火を吹べき便なく。女房をば舅に預け長藏は同國宮といふ宿の問屋の方に。いづくの雲もさはりなきかげも丸とし十年切て。銀子貳百目たしかに手取の身は駕籠を舁。馬追歩行荷の差別なく。親方のいひ付をつとめさせもが露ほども奉公に如在なく。門はき瀬戸はき庭の掃除にいたるまで骨をおします働事。すでに四年か程は眞妙に勤けるが。げに性惡の仇名をば馬形舟頭お乳人といひふるしたる世話にはづれず。かの長藏そろ／＼明徳くらくなり。いつの間にやら惡性募て往來の旅人をうかゞひ。小賊を仕ならひけるが。ある時御用御引替銀と會符にしるして十貫目のむしろ包三ッづゝ馬に付け已上七駄。大坂三度才料して江戸へ下りけるを長藏みるより。天晴此内一駄われらが手に入ルものならば。一代女房とふたりして居喰にしても有餘。何とぞ此荷をはづさばやとおもひつゝ旦那の馬をやりばなし。策追綱でたゝきたて。夜を日に繼で宮より二日路ほど先にゆきぬけ似せ荷を作り。舞坂と濱松との間なる松山にかくしをき。さて海道に出て銀荷の來るをまち居たり。案のごく三度飛脚眞先に。こく／＼と居眠りながら乗通れば。跡よりつゞいて銀荷七駄はなをそろへてみへ來るを。長藏はなさぬかといへば先の馬子付てこひとてやがて長藏が馬に銀を付させ。上りの旅人にむかひ舞坂に安ふして戻り馬遣ふとて右の馬子はかへり過ぬ。さて長藏半道ばかり馬を追て三度の才料にむかひ。もし是旦那わしが馬に粥をのませ申べし少の間お待なされといへば 才料 そちの宿はどこぞ 馬子 あの右手の松ばやしに七八間並たる内に棟の高ィ家で御ざる。これからみて御ざれといへば 才料 身どもはあそこの茶屋に休で居るほどにはやくのませておじやれ 馬子 心得ましたとて林の中に馬を引て行けるが。かねてたくみし作り荷をやがて金荷に取かへ前の會符をそのまゝさし。さあらぬていにて茶屋に來り。さあよ

う御ざりますといふ時。才料又馬に取乗て半道ほどゆきける時長藏綱をはなし。馬の跡より是成ちくしやうめ。はてもな。あゆびをれと策にて散〻追かけ。小家の前にいたり沓を買ふりしてそれより行方しらずなりぬ。さて才料程なく濱松に着てかの馬子を待ども來らず。いかにしてかはおそき事ぞと一所につれたる馬子にようすを問へど。いづれも此あたりにてはみしらぬよしを申す。さて〳〵合点のなき事かなとおもひながら。馬をば殘しをきぬわが荷物には相違なければさのみきづかふべき事もなく。日暮て見付の宿に着旅籠やの門に挑燈出し置。夜半まで待ども馬子たづねきたらず。いよ〳〵ふしぎにおもひ銀荷を段ゝあらためけるに。本より會符に違はあらねど。荷を持あげてみるに外の貫目よりはことに輕くおぼえしかば心許なくおもひ。一包切ほどきみれば中にはこと〳〵く石を詰たり。時に飛脚仰天しそのまゝ問屋に付こたへして。西は荒井の御番所に斷。東は天龍川を限り南北に手分をし。御の字の光を以てせんぎしけるによつてわが日の本に隱れ家なく。其翌日舞坂の松林よりたづね出し。やがてうき目にあふ田河原といふ所に烏の餌と成て長藏は惡名を殘し侍る

田舎のものにかたられし事

花の都におせやれおのこ。色やつさ浮て來た宮川町に三郎兵衛とて取賣を家職とし。生としいけるものには野良泊人巾着なんどをつかみ出し。心なきうつはものには珊瑚珠の椀をはじめ古釘の折たまでかれが手にもるゝ事なし。よつて見世には八百万の古道具をならべをき。朝夕の出し入に心をつくす世渡りの品〳〵おほきその中にも。取賣をする事はいやらしき物になんありける。ある時田舎もの某に小便替ンと云て門を通るをよび込浦にゆきてみ給へといふ。小便替うれしくおもひ内に入て。先煙草を一ふくふるまはれよといひて。はなしなんどしけるつゐでに小便替申けるは。われらは山科の者なるがみればおもてに掛物とやらんいふもの有。われらも親代〻のゆづりに一休和尚様の御手にて繪を書せられ。その繪の上に字と假名とまぜていろはのやうな眞が御座る。又印判を大きく奴ろさの紋所のやうに四角にして丹にて染たるが二ッ迄おして御座る。親仁中〳〵秘藏がられたとへ田畠を賣はなすとも。それをばうるなと遺言にしておか

れましたけれど。今にしてはわれらも身代がつゞき申さぬによつて。少々ても金にして年貢にたて申たく。村の庄屋殿にみせ申たれば小判十両に買ふとお申しやれど先見合て居申スといふ。三郎兵衛聞ていなかものなればよも僞にはあらじ一休の筆ならばすてゝも百枚道具。いかにも方便して買取べしとおもひ。さて今の咄しの通いよ／＼賣る氣ならばわれら小判十五両に買取申へし明日持て來てみせられよといひければ。小便替よろこんで歸りその翌日約束を違へずかの繪賛を持來る。三郎兵衛本より古筆の目利はしらねども何さま料帋も時代めき。欲に目くれてほり出しせんとおもふ心から。必定一休の正筆におとしつけ代金をば明日相渡すべしと約束して戻りぬ。すでに小便替やどへかへり付べしと思ふころに。

お江戸生立の撰／＼男に鑓もたせたるお侍。黒羽の小袖引かさね紫竹の杖をつく／＼と取賣のみせをながめ。いかに亭主何ぞめづらしき古筆はなきかとたづねしに。三郎兵衛してやつたりとおもひ。さん候此間さる方より一休



和尚の自畫自賛の掛物が参りました。お目に懸ませうとてかの一巻を取出しみせければ侍とくと披見して。いかさまにも凡筆とはみへぬ一休にまがひはあるまい。扨〳〵めづらしき物かなして價はとヽへば金子百兩ぞといふ。侍五十兩にはならぬかといへばいやまけは御ざりませぬ。今少持こたへますればたしかに三百兩にはなります侍そんなら七十兩に買ふべしといへどもまけず。七十五兩から九十兩までに付ければ。亭主能かげんじやとおもひ。まけましたしやん〳〵と手を打ッ。しからば明昼過に取に参らふ折ふし金子を持合せねば。少ながら是を先手付にとて小判二兩相渡し。かならず手付を渡ス上は外にやり給ふ事なかれと口堅してかへりぬ。さて明日朝小便替來りて申けるは。きのふのかけ物を在所の者に咄しければ。その外やすくうりたるとて皆〳〵しかり侍れど。もはやそなたへ約束したる事なれば今さら變易もならずはやく代をこされよ。それとても是非心にそまぬ物ならばこちに戻して下され。そなたの付直ほどには何等も買手が御座るといへば。三郎兵衛いよ〳〵此詞に乗て仕すましたりとよろこび。すなはち金子十五兩取出し相渡して。はやくかへられよといひければ。小便替心の内には賊〻してうれしけれど。面には殘多げなかほつきして。安ィ物じやとつふやきながら行がたしらずなりぬ。さて三郎兵衛は昨日の侍來るかとその日も明る日も首を永ふして。侍てど暮せど音信なければあまりふしぎにおもひ。かの掛物を古筆目利の所にみせにつかはしければ。似せも似せとりわけ下手の似せたる物にて。三文にもならぬぞとてかへしければ。取賣あきれはてそもきやつめは語にてあるべし。手付に小判二兩置しは慥に思はすべしとの方便也。小便替も侍も同じ穴の狐。賊の骨長。さても七十五兩の德すべしとて十三兩の損したる事も欲のふかきゆへにや。後によく聞ばかの小便替は和州山本料松村彦太郎といへるものにて。又侍に似せたるは彦太郎が弟清兵へとて墨筆の取賣して。油小路丸太町上ル所に住けるが語りの大名人にて。いかなるものも一はい宛喰ぬといふ事なし。是等は幸にしてまぬかれたる物か行末いかにとさる人かたりし

おきつ白波大團[illegible]

丹波[illegible]屋

[illegible]

吉田[illegible]がうち

[illegible]うち

吉田[illegible]うち

[illegible]うち

[illegible]

血刀の水葬

九の内[illegible]

九両[illegible]

悪人の一家[illegible]

古田孫兵衛が事

本屋 此ごろ事林廣記が和板に出來ました御覧なされませい 都の錦 叢書の中に有て唐本の時はとの外風行し物なるが和板に起ては如何あらふぞ。して直段はいかに 本屋 本替卅匁銀賣廿五匁と定め申しん 都の錦 廿五匁に又五匁增補すれば九軒の揚屋で（大坂新町のあげやなり）今川を抓よせお茶は下され次第に一昼夜のたはふれ。千年を延るといふはふるし万年も長生するやうにおもはる。是にくらべてみれば書物ほど高直物はない。金を出して癆痎病にはなるとも養生にはならぬ物じや 本屋 して又學者の腎虚する事は御ざりませぬ此病は何から發りますぞ色では御さらぬか。學問してほまれをとりし人はあまたさふらひけれど。色狂して名を揚しものは聞ませぬ 高ふし。心中して山勝か名四方になが といふ 都の錦 いやるな一得一失はおな れ今にいたるまで年季〳〵を芝居にて じ事傾城ぐるひして椀久がやうに名を つとめ。おどりくどきにまでうたひ侍



る。さすがの道春闇齋ごき學者なれども芝居にて評判なければ女童の口にかゝる事なし。しかればほまれはそしりにおとり侍る　本屋道理其所のけ無理が通るといふ貴様のやうな人に出會ふて口を酢にしていふ程が損じやと笑ふてかへりぬ。さてかの事林廣記を披てみるに飽煖なれば生二淫欲一飢寒なれば發二善心一といへる言を考てみれば。今やわが身にひしと思ひ當あゝ慮外ながら。むかしは紋薄布の蚊帳に匂の玉を下。銀の茶椀で砂糖水をのみ。小判百兩より鳥目壱貫を大切に思ふ心から財欲はみぢんもなけれど。色欲はもつはら甚しく。色好みのあまりに紫が筆のかゞやくふぢつぼ。菱川が書たる小町のうつし繪に似たる女もがなと夜ひる肺肝をくだき。人のそしりのよしあしも難波なる西鶴法師が口にかゝり。



好色一代男の名をや流さんと思ふばかりなりしが。日本の神もつて今はその過をあらため至善にとゞまりて道徳を積ゆへに。少もそつとも不レ畏二凶邪一本より貧賤に居て飢寒の憂なければ。顔子の樂をうらやみ。子路が勇をこゝ

ろざして冠萊公が悔もなく。たゞ世の中の運盡ども百歳の命をもつて枉て千とせの計をなす。乱臣賊子の身の上が氣の毒澤山笑止にて。何ンとせうぞとおもひ寢やうつゝにだにも籠耳の。まして一夜の夢ものがたりなれば所さだかに聞とめず。僞か實かしらねども先都より六七里西北に當て丹波の國中に。古田孫兵衛とて小村の庄屋なれども富は俵にみち〳〵。負ず借りずに子三人惣領傳七廿八。次男次郎助廿三。次は女子にて十九才になりしが。去年の春同村に源正寺といふ眞宗に妻合せ置ける。さればたゞかの孫兵衛。阿弥陁の印相を以て民の口をふせぎ一向に庄屋風を吹せければ。髄から火取瘦百姓彼が錢の綱に取付て。一村は不殘手の下にまわらずといふ事なく。横に車のふるまひは丹波の助太に◎を懸たる我まゝにて。雞を割時も牛の刀を用ひ來り。曾て後車のいましめをしらず。彼が弟に古田九助とて別家に住で親からの勝負分に田地四五反ゆづりをうけ。はじめは兄の身代と荷負ば棒につり合けれど。一とせの洪水に上田過半押ながされ。つゞいて稲病二三年肥肉の牛を二疋迄たゞ一月に見殺し。藏の中の財は夜盗の爲に盡しはて。日を積月をかさねて不仕合なりしかば。田畠さらりと賣てかし。今は持分下田四五畝。骨を砕て作れども年〳〵未進に追立られ。妻子を育に不足親は泣寄をたのみ。折〳〵孫兵衛に無心いへども兄弟は他人のはじめ。一度こそ二度こそ。すは三度にもかさなれは和田に重匁とる古田親仁小判に竹釘少もきかず。今ははやおもひ絶なんとばかりを人傳手にいひよるべき便なければ。とやせんかくやあらましとけふはきのふにかはりにし。時の變化をうらみながらつく〳〵おもひめぐらすに。江戸本町二丁目呉服所の表手代四郎兵衛といひしは。女房の爲にゆかりあるものなれば。それをたのみに東に下り。一先手代奉公に出て辛痨する物ならばかせぐに追付貧乏の種も。薄くやならんと取つ置つ他人雜ずに夫婦相談示し合。誠にそもじと相なれて。いく年月の手枕にくみかはしたる　。奥底もなき夫婦が中に。あの小女郎を生立上せめて十にもなるならば跡に案じはあるまじきに。乳房はなれぬ二ッ子をみすてゝ國を出ていなば。世のありさまを人しらで心かろしといひやせん。よしやそれとも前世の因果。仏神にさへみすてられずは。むさし野ゝひろき御めぐみにあづかり猶立身の有まじきものなら

ず。かまへてこゝろをつよくして行末ながく松が枝の。さかへさかふる時節を待て娘を養育して給れ。さすが血汁の端なれば孫兵へどのにも如在はあらじ。江戸に滯留の間は不絶みにて音信して小遣錢をば上すべし。心やすくおもはれよといと念比にいひふくめ。扨は路銀の用意とてわづかの田畠屋敷まで書込。孫兵衛手前より銀八十匁借り請。江戸より一左右するまでは先是をつかひ合せて居給へとて。右の内弐拾匁女房に渡せは 女房はてわけもない事わが身は地して居ますれば。どふなりこふなり有合に麥粉喰ふても通ります。いふても久の永旅路海川の難多ければ。あてはめたやうにはならぬ物で御ざんす。少も余慶持んせと。包のまゝにかい取て無理に九助が懐に入れ。随分道中御まめに。いふまでもない舟川に乗いそぎをばなさるゝな。宿は夜深に出ぬもの心ゆるして道づれに少も物を預ヶぬもの。旅に出ては朝〲に胡椒一粒つみ給へば水にあたらぬものぞかし。大豆が出來たらしつかりと。きせるを燒て當さんせと小賢しくいひおしへ。落るはなみだぬるゝは袖やがてめでたふさらばへ

九助江戸下りの事

元祿五年五月雨のあやめもしらぬ初の旅。道つれもなく唯ひとり腰に弐百の錢を挾。木賃泊りの用意とて女房が手づから故广味噌に。味をこめたる竹の杖ふしては夢に物思ふ。旅のそら音をくだかけの。鳴てしらする明ぼの山。俊成卿の古郷にほどちかしとてながめけん誰が式嶌の哥の池。いつか在所に立歸りいとしと思ふ妻や子に粟田の山をふりかへり。みれば諸事世話かさなりてあゝくたびれたと腰かゞめ顔を皺める老の坂。子安と聞ばたのもしく娘が身の上息才に守らせ給へと念比に。地藏に願を掛日森。梢に蟬の聲たてゝわが爲にとか鳴蛙。井手の山吹青葉にて。ちりにし花の名殘ぞと思ひくらぶる色瀨川。げにあだし野ゝ露と消往生院に詣つゝ。色道心中の本尊祇王仏が石塔にむかへば。いにし戀風身に入てそゞろあはれに袖ぬるゝ。時雨の亭のゆかしさに。跡なかりせば小倉山いづくに老の身をかくさまじと。うらみ給ひし爲家の其名都に愛宕山。今靜謐に治て草木も是非を岩がねの。弓は袋に太刀は鞘。甲は塚に太秦の安堵が橋を打渡り。暑氣一天に虛空藏腕まくりしてをがみゆく。ひとへに汗を帷子辻

きせるや町にけふりたつ。名も白川の瀧の糸むすぶの神を祀拜し。藪の下行はしり井や池の川の名物。あはれ上りならば一箱買て女房に。土産に下谷と是やこの。ゆくもかへるもわかれては。しるもしらぬもあふ坂の。關はなけれどとまらんせ。蚊帳借しませうと袖をひく。赤まへだれの出女に大津の宿で旅寢して。諸行無常の三井の鐘はや撞たりやあかつきの。是生滅法界にかしましく無明旅籠やの夢をさませは。目をすり／＼出立喰又此宿に上り來て。泊らん事も片田の浦。妻に粟津の名も惡に。血氣の勇の殘りたる。雪や正月の末つかた深田に馬を欠落し引どもあがらず。打どもゆかぬ望月の駒の頭もみへばこそ。こは何とならん身のはてせんかたもなくあきれはてと。うたひながら跡をみかへりければ諸子川より

前右の在家に。木曾義仲の塚と石に刻　胡籙に矢をつがひ威勢をふるふ弓取



沖津白波　五

てしるし有。末つゞく松原より二三町　も。又は蘭麝を袖にうつし秋風の名殘

ゆけば兼平が塚も田の中にあり。げに　を送る品物といへども。無常の斷いや

といはれず。轉變憂喜手のうらかへす世の中。名はとゞまりて姿はみへず花に先だつ白露おちては更に跡もなく。花又日かげに隨てしぼみ日は虛山にかたふきぬ。あゝ夢じやもの南無あみだとむかしの人に忍かうして。みれば湖水に影うつる。石山寺の觀世音こよひは八月十五夜と。須广のまきから書そめし筆のゆかりは紫式部。此山に籠りしとは跡かたもなき方便川。みな口〳〵につとらごり昼食入れて參宮する。伊勢や尾張の海づらをみるにつけてもいとゞしく。過にし方の戀しさとよみしは爰に在原の性惡公家のはる〳〵と。きつゝなれにし色衣花の名所の跡も今。田ばかり殘りかきつ葉はなし。又有會ともいさしらすかの宿過て。浪の荒井のわたし守此浦舟に帆を揚て。扇をひらき舞坂や濱松の音ざゞんざと謳わめいて杉ばやし。急度見付て是いくら。小夜の中椀で十二匁。命也けり大井川。をりふし水かさまさりつゝ渡りかねたる川の瀬が。あふない合点じやしつかと取付給へと。川越の聲を力にしてながれわたりにするがなる。富士の柴山時しらぬ此炎天にむら〳〵と。かのこまだらに白妙の雪を三嶋の明神に。祓給へきよめ給へと再拜し。あはれお江戸で立身を千貫樋と聞からは。銀を箱根にしつかりと小田原の外郎程に家を作り。大礒の虎にも負ぬ心中のよい在所の女房に。むかひの駕籠を上せなば。何ほどかやよろこばんと大きな願ひかな川や。今は巾着ちんからと。鈴の森の茶屋に腰かけ胸算用すれば。てんと八幡八十匁の路銀遣殘てわづか八幡十五匁の事也かぞへてみるに丹波より日數十四日目に江戸入。さりとはあぶない品川。町はづれにて月額して本町にはどふ參ります 道通り 是から東に向てそれから南にそれ〳〵と。道〳〵たづねてそこはかと。ゆけばゆく程むさし野ゝおつひらいたる廣小路 道通り 爰が本町二丁目で御座る 九助 柳屋と申ス吳服所はいかに 道通り あの左がわ紺の暖簾に輪違のある家なり 九助 忝なふ御ざりますとおしへにまかせ內へ入てみれば。見せに手代數十人三露盤を栖につき。筆の鉾先をならべ時の聲をあげて。純子三本紅五疋。綿の代七百匁。尊丈某樣御用御召木平百反此代八貫目なンどゝ共日の賣物をしらべける。そのいきほひさすが又日本の大湊。京大坂奈良堺を一ツにからげて一年の地賣も御當地一日の商賣にはかけあはず。僞でない四日市の乾物問屋で毎日十貫目づゝが南蠻を賣る事。阿蘭陀人もみ

て舌をふるふ 九助もし〳〵頼みましよ 手代何ンで御さる 九助此内に四郎兵衛と申仁は居やりませぬか 手代いかにも是の家につとめてじやが。今朝御用に付てお屋敷方に行れたやがて戻らるゝてあらふ。して何ンの御用て御座る九助あらまし様子を語れば手代聞てしからば先浦に廻つて足をあらひ休息さしやれ。四郎兵衛も追付みへましよ

九助が女房袖ごひする事

天道人を殺さずといへる凡夫の世話自然と道に叶ふ物かは。しかるに九助けふとくれきのふと過て飛鳥川一河の流れに身をよせて。一樹の陰に柳屋の四郎兵衛が口入にて。深川といふ所の材木問屋に有付山出しなれど小ぎりめに。物も少書算用するを取得に壱年を五兩とさだめ。髪結賃湯錢の外は。油はながみ足袋たばこあしだ踏雪にいたるまで切米の內身のいれたてと。請人出て判を居金子三兩慥に手取の身のまわり。先高宮を茶にそめた一重羽織をするが町。三井が棚で現金にとゝのへ。さて中間にひろめの酒大名けんどん九人前。奴豆腐の江戸肴。さし引殘而壱兩弐朱是を在所に上せつゝ身の落付をよろこばせんと。思ひをみに封じ込上書をば舍兄に當それより年〳〵給銀を弐兩。壱兩。三分。弐分女房におくるこゝろざし本より律儀眞法に骨をおしまずつとめけるその天命のいつとなく。主人の目銀明らかに五六年のはたらきを以て。九助を手代頭にいひつけられける。されば人に與る善言は暖なる事布帛のごく。人を傷る詞は深事矛戟のごとしと荀子がいへるも宜ならずや。

しかるに古田孫兵衛明日をもしらぬ老の身の穴のはたのぞきながら欲心は大江山より高く。金銀を抓たがる事は茨木が甲を取たる手つきにもおとらず。年〳〵九助方より女房にみつぎに上せし金銀を横取にして。江戸へは中にて間似合の返事すてに元祿申の夏より巳の春まで中年十年に。金子五十弐兩かすめ取ていかな事九助が妻には鐚半みわたさねば。今はさりとも女房朝飯のけふり跡たへて綴布子たゞ一重一子寒からん事を歎ども。蘆の穗綿も才覚ならずおとろへぬれば朝顔の日影物じやとあな取て古田の親仁かまひもせず。ある時孫兵へ九助が女房をよびよせその方が田畠家屋敷は。九助東に下る時七物に書入てはや十年にならざかや此手形にて算用すれば。利にもたらざるその田地されども一家の情にて。金

にもあはぬ七取て九助が爲を思ふといへども。年ゝ彼が未進たゝまり今ははやお代官へ斷も立がたければ。近日そちの家屋敷を賣て。地頭へ勘定立ねばならず。さりとも不便におもひながら負た子より懐た子背に腹は替られず。此方にも介害多ければ引取て養ふへき方便なし。此上はいかにとも身共が思案におよばず。家屋敷をば今日の中に明て渡せと代官とのより仰付なれば。いそいでその覺悟せよとどうよくなる一言をきゝ。たのむ木の本に雨のどくなみだをながし。さりとは情なき心躰是に付てもうらめしきは九助どの。江戸に下るとそのまゝ一左右をばさしやる筈きのふけふとはおもへども十とせの秋にならのはの。風の便りもあらざればもしや旅にてむなしくなり誰とふものもなかりしか。そもながらへて



住給はゞよも一たびはすてみなりとも　ならん淵瀬にもしづみはてんとおもへ
上し給はぬ事あらじ。よしやうき世に　ども。さすがむすめのおとなしく十チ
ながらへて物おもひせんよりは。いか　といひつゝ一ッ經し。猶ゆくすゑのあ

ひなだのみわが身ひとつに思ひあまり。死は安ふして生はかたし命ながければ蓬莱にあふといふ古言もあれば。一旦恥をすてゝ食を乞時節のいたるを待てみん。一ッは夫のゆくゑをもいざよとはんありやなしと名にしほふ。たのみをかけてみしめなわ。大神宮に参らんと娘のかねが手を引道／＼乞食て同行二人

九助在所にたづね行殺さるゝ事

命なるかな貧賤。時なるかな富貴人間の盛衰は一睡の夢。きのふまで百錢に事欠たる九助も今日は小判を首にかけ。むかしの恥をすゝがんと旦那より暇を取。下に鎧しきから嶋蒲團。ふとんばりして小者をつれ今や古郷へ錦きてかへり近江の草津の宿を過る時。旦那様一錢下されませと馬に付そひ半丁程來る。そちは何國の者ぞとふりかへりみれば。丹波の國何郡何村同行二人ぬけ参りと笠の書付をみて。さてはこちの在所の者丹波と聞ばなつかしく。妻子のありさまをもよそながらたづねばやとおもひ。馬子まて／＼と馬より下り目をみ合てこはいかに。女房じやないかと手をとれば。いや／＼わしには夫なくみへた通りのぬけ参り。宿もなければをのづから此海道にたゝずみてゆきゝの人に袖乞する。お情あらば一錢とやつれはてゝは有ながらうろ／＼涙の物ごしを。きけば聞ほどうたがひなくわが女房にきはまれども。人めをはぢてかくすとおもひ。よし袖乞にもせよ何にもせよ。在所のものと聞からは少たづねたきようすあり。先是に来られよと小家成旅籠やの座敷を借り。女房をむたいに奥に引込たがひになみだをおさへ。やゝためらひて九助。して是は奥がるすがたいかなるゆへにかこのていにはなりたるぞや　女房厚顔してよふいはんすの。かたるまじとはおもへどもいはねば腹のふくるゝゆへ。此年〻のうらみの數。つらい月日をおくる内誰とふ人もあら夷孫兵衛どのに情なくあたられ。たのみなき身のあさましく朝飯のけふり絶／＼に飢を凌んよすがとて地下百姓に手を入れて。田の草取て親子の者あそこゝにてもらひ食。しばしの飢をたすかりしに。いつの比孫兵衛殿よりよびに來り未進の勘定に立らるゝ問家屋敷を明て立退べしと権柄にいひ付られ。寝耳に水の入るごく俄にあはてゝ家を出かうしたていになりはつる。さりとては兄子様ど

うよくな御心躰。それにつけてもそなたから此年月が共間すてゐ一ッも下されぬは心つよき御事ぞと朝夕それのみうらめしく。それは〳〵留主の内辛苦かんなんせし事を了簡して下されよと。人目もわかでなきさけぶ。九助段々ようすをきゝさて〳〵合点のいかぬ事。われ江戸におちつきこうしたとの仕合ゆへ早速知せてよろこばせんと金子入の状を上し。其後給銀取度に少づゝおくりし金子。ちりつもりて當春迄五十二兩。一度〳〵に孫兵へより慥に自筆の請取手がた。返事のたび〳〵そもじか方ゟ念比な入筆つど〳〵にいふ迄もなし。しかるにわが身此度さるお大名に普請の入札を落して小判百五十兩もふけしかば。うれしや是を土產にしてはやく在所にかへりそちたちによろこばせ。人手に入たる田地をも請戻して安樂に暮さんと思ひ親方に暇をもらひ。こうした首尾で上りしに。あきれもせぬ出會さりながら二世の縁つきせず此所でめくりあふ事仏神の引合。さて娘はとゝへばあそこの辻にねて居ますといふよりはやく九助が小者



たづねに行ともなひ來れは。猶おさながほうせずよろこびなみだの對面。其夜は草津に一宿してよもすがら親子三人きし方のゆめ物語。夜明て九助宿の亭主をまねき子細段〻咄してきかせ。所の名主に付こたへ丹波に立越せんぎの上代官所に斷存念をはらし歸る迄は妻子どもをかいほうして給はれと。荷物幷金子ともに亭主に預け下人八助をともなひ。草津より二日目に在所に着て兄孫兵衛所に案内しければ。折ふし孫兵衛家には追善する事有て聟の源正寺。その外他事なき地下の者かれ是五六人寄合非時喰ふ最中に。江戸より九助罷歸るといへば孫兵へ聞とひとしくおどろきながら。その色目をさとられじと何くわぬていにもてなし。なふ九助か是はしたり先息才て珍重。さて〱久しぶりにての對面日比の氣性はど有て段〻の立身。いかい手柄〱して替る事もおじやらぬか。九助さあらぬていにて手を突誠に長〱滯留の間妻子どもの御世話別而かたじけなくとかふ御礼申つくしがたく候。定てかはらず暮し申てあるべし先女共が方に參りて休足仕。何かの事をばゆるりと御物語申上んと立所を。傳七袖をひかへはて氣の短かい久しふて逢まするからはたがひに祝ふて盃事しましよ。さあ是に通てやすみ給へと奥の座敷に袖引入れて。それ〱小まん水風呂仕かけよ飯こしらへよとゝちめんぼうふつてさはぎ廻り。孫兵へ親子胸が八人附して何ンとせうぞと鼻つき合せ相談の上にて。其日寄合し者共はいづれものがれぬ間。ことに孫兵へより銘〻金銀相應に取かへ置ければ。その〱古田がたのむ事いやといふ事ならぬ分にて一間にとり込耳と口との内談示し合。さて九助が供につれたる小者八助には腹一はい喰せ酒たらふくのませて。傳七立出申けるはそも此所には親類の外他の者とては一夜もとめる事なかれと公儀より堅ィ御法度。是より半道西に茨原といふ宿あり是但馬海道にて寢泊心やすき所なれは。それへ立越とまり給ひ明日又來らるべしと云。八助さすが江戸なれたる者なれば日本の事は丸呑。四も五もくわぬ男にて此口上に氣を付。合点のいかぬいひ分ぞと心得ず思ひながら。承りましたと歸るていにもてなし浦の木部屋に立かくれ内の樣子をうかゞひける其時すでに暮六ツ。惣領傳七奥に行水風呂が能御ざる入らせ給へといへば。明衣引かけ何ごゝろなく湯殿に入て水風呂に片足踏込所を。傳七すかさずうしろより山刀にて突通

せば。九助大音上てこはいかに何ンとするゑゝ口をしやだまされた。無念〳〵とわめきながら飛出んとせしを一身のものども立かゝり。物ないはせそはやく仕廻と手ごに刄物切かけて。さあとまつたといふ聲の騒〳〵しきを聞すまし納屋に忍びし八助。夜中に爰をのがれ出足をはやめて翌日草津の宿に來り。右の次第を語るとひとしく女房わつとさけび。猶夢うつゝのさかひをしらず所のものども力をそへ。いかに歎てもかへらず此上は早ゝ丹波に立越代官に斷り。時刻うつさず夫のかたきを取給へ。われ〳〵もともに罷登始終のありさま申上んと。三枚肩にて半日一夜に丹波に着代官所へ訴へければ。前代未聞の悪徒それ召捕と取手の役人みだれ入り。孫兵衛一家をはじめ一身同心の者八人ばた〳〵と引っくゝり。孫兵へ親子三人をは木のぼりとさだめ井娘聟の源正寺其外同類ともに十人。國中を引廻し國境にいたり同音に念仏のこゑを殘ス。其後丹波の地頭より九助女房が貞節を感じ給ひ孫兵衛一家が田畠家屋敷家財ともに女房娘に下され。次に女房を預りし草津の宿はたごやの亭主彌平次といふものにも褒美あまた給はりアヽありがたしといふ聲も。歎の中のよろこびはつきせぬ御代の御政道。理非明らかにさばけゆく時は元祿十四年巳の秋津洲するゑながく万ゝ歳と祝ひおさめた

此一巻を歌仙盗人といへは凡夫の眼には卅六品に極ルかと思ふべけれとさにはあらず万葉の三哥仙古今の二哥仙同六歌仙後撰の五哥仙チはじめ十十二十六十八より五十四八十六まで哥仙の名ありしかれば卅六とは限らずかうやうの事チバ和哥の達人にたづねて疑を殘ス事なかれとしさいらしく斷チ申ながらその分ケは予もしらず爰にはたゞ河内通の一ふしを

賊取て
哥仙と
申す

元祿十五壬午梅雨吉鳥

京押小路通堺町西へ入
上原半兵衛

劒樂堂

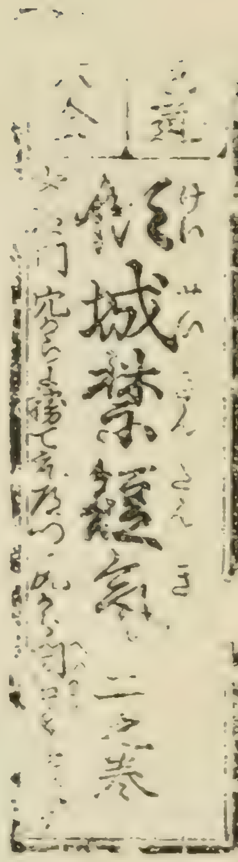
大坂心斎橋筋
村田治兵衛 梓

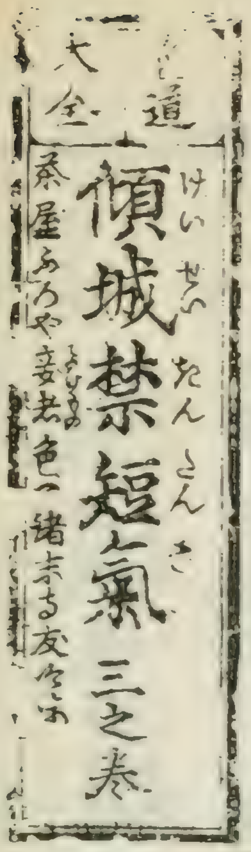
色道

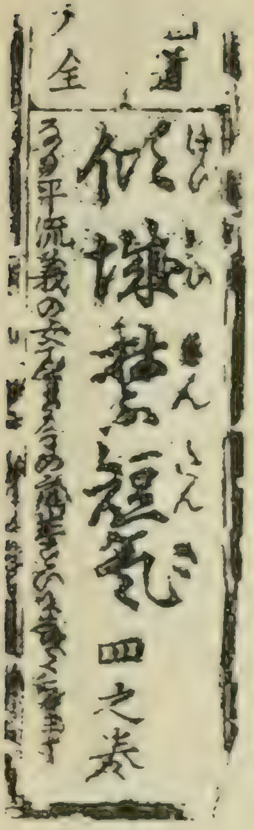
傾城禁短気　一之巻

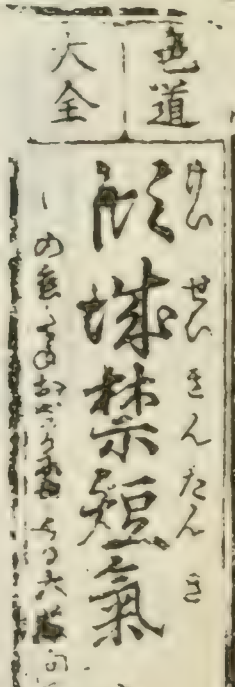
全

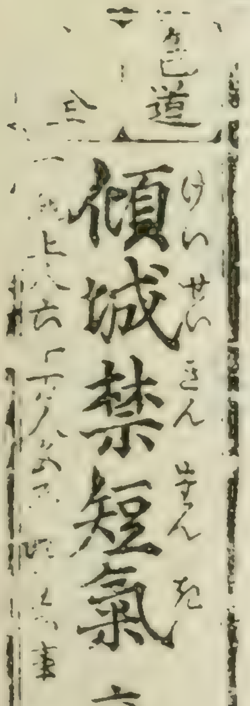
大坂 [illegible]


色道大全
傾城禁短氣
二之巻


色道大全
傾城禁短氣
三之巻


道
全
四之巻


色道
大全
傾城禁短氣
五之巻

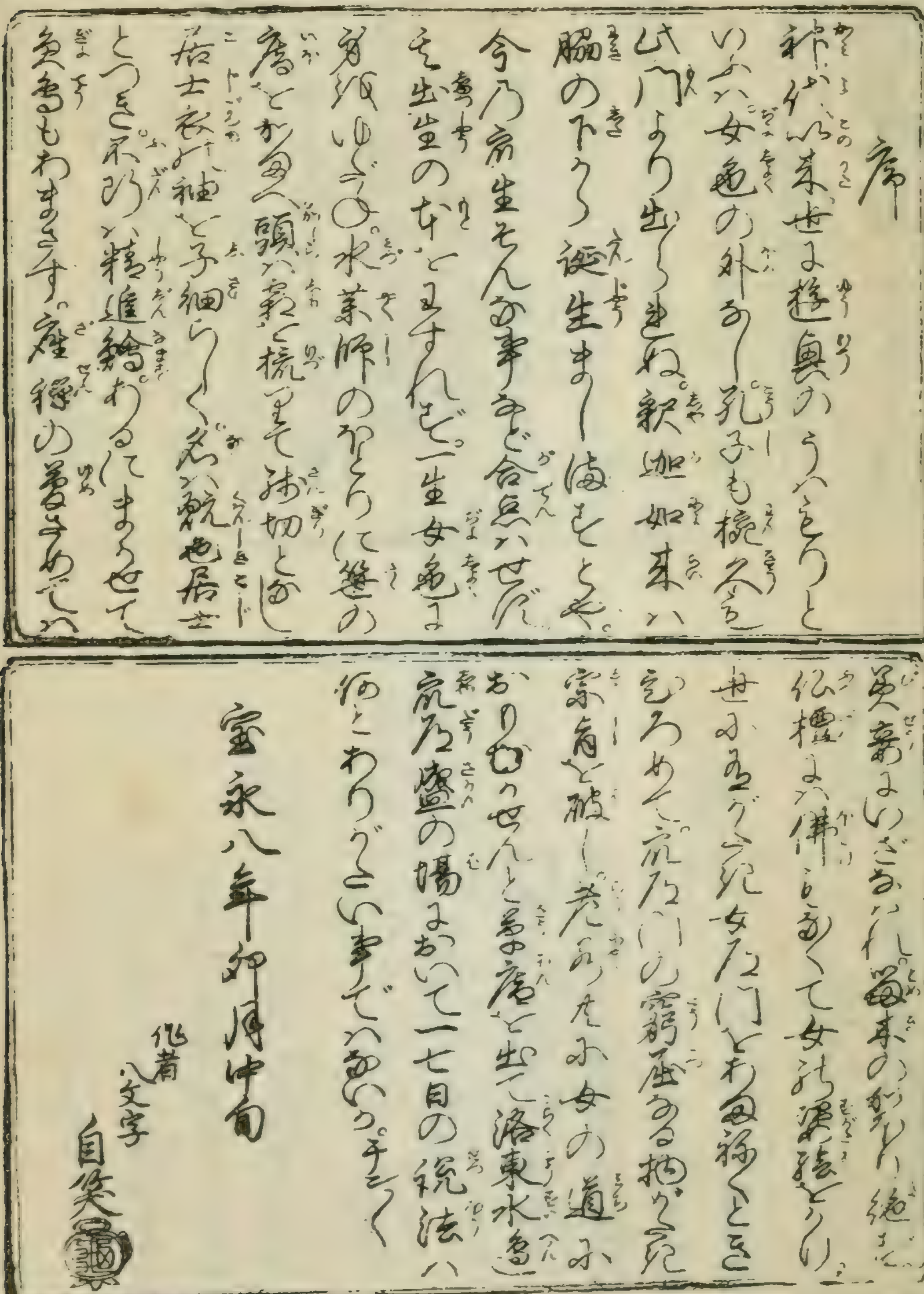

色道
傾城禁短氣

序

神代以來、世に遊興のうはもりといふは、女色の外なし。孔子も椀久も此門より出られぬ。釋迦如來は脇の下から誕生ましますとや。今の衆生そんな事など合點はせず。其出生の本をわすれず、一生女色に身をゆだね、水薬師のほとりに笹の庵をかまへ、頭は霜を梳りて殘切となし、居士衣の袖を子細らしく、名は翫色居士とつき、不斷は精進鱠、あるにまかせて魚鳥もあまさず、座禪の夢さめては美妾にいざなはれ、留木のかをり絶ず。佛檀には佛もなくて女の姿繪をかけ、世に有がたき女道門をあまねくときひろめて、衆道門の窮屈なる物がたき宗旨を破し、老若共に女の道におもむかせんと草庵を出て、洛東水邊衆道盛の場において、一七日の說法は何とありがたい事ではないか。チン〳〵

寶永八年卯月中旬

作者　八文字自笑


序
神代以來世に遊興のうハもりといふハ女色の外なし孔子も椀久も此門より出られぬ釋迦如來ハ脇の下から誕生ましますとや今の衆生そんな事など合點ハせず其出生の本をわすれず一生女色に身をゆだね水薬師のほとりに笹の庵をかまへ頭ハ霜を梳りて殘切となし居士衣の袖を子細らしく名ハ翫色居士とつき不斷ハ精進鱠あるにまかせて魚鳥もあまさず座禪の夢さめてハ美妾にいざなはれ留木のかをり絶ず佛檀にハ佛もなくて女の姿繪をかけ世に有がたき女道門をあまねくときひろめて衆道門の窮屈なる物がたき宗旨を破し老若共に女の道におもむかせんと草庵を出て洛東水邊衆道盛の場において一七日の說法ハ何とありがたい事でハないかチン〳〵
寶永八年卯月中旬
作者
八文字
自笑

傾城禁短氣　一之巻目録

第一　嶋原の女郎方便の一枚起請
付り　太夫の内證は真実報恩講

此段ハ　不情男上もえ女郎狂ひにかかりあう人
わる性の我を折ます女郎の眸に入
おもねと既ニの嘆も読かせ女郎られて
どうまるけんとかくて言を記す

第二　三野の女郎安心の男請
付り　あげやまで離るる千番の君が後光

此段ハ　お方ある實子も大女郎にしたてまん
とそつぺの金を荷ちわり事をいれ
御経にも女房と得浅と読かす女郎にも
よその方に換せぬ仕掛こと事を記す

第三　難波の太夫良身捨ての成仏
付り　十寄ニひかれて彼岸不動の大白

此段ハ　素ニさせ見永く末海一連の楽を定
あん実の男請と言ふ寄心男すけと
ふへ浮気もうつつも恋もあわれを見る花
中宥ニまよふ三つのふかと言を記す

第四　女郎實想回向の淀本町
付り　眸の数化まぎるる乱気

此段ハ　下んとまよつて迷ふ事をあり
万事を了観と見てうけつけど
念んの実と見えたる眸のまぎる見
肝にいとつぶさまよ事ニ記

第一　女郎方便の一枚起請

付り太夫眞實報恩謝

それ人と生れたるしるしには、色道をしり女色のおもしろきといふ事をさとるべし。むかし〳〵二神夫婦となり給ひて、天の浮橋の下にて、鶺鴒といふ鳥の尾を土に敲きけるを見給ひて、始て此よい事を知給ひ、喜哉可美小女に遇りと睦語をのたまひしより、夫婦男女の道すたらず、世に廣く弘りてより次第に睟なる艶女、ばん〳〵に出世し給ひ、いろ〳〵の諸分をときひろめ、衆生の機縁にしたがひて、無量の手管をほどこし給ひ、傾城白人茶屋呂州巾着比丘尼夜發など、八宗九宗にわかりてより、さま〴〵位に高下ありといへ共、もとはひとつの　涅槃の床に至つては、いづれか上品上味の喜悦の所にちがひはなし。然るにいづれの時よりか、高野大師を祖師とあがめ、衆道門といふ窮屈なる宗門をおこし、男と男の契りをむすび、兒少人にくるしめをかけ、是を男色若道宗となづけ、僧俗をいはず、むしやうにすゝめ、有難き女道門を妨げんと、てれん上人といふ此宗旨の尻持、あながちに女道宗を破して、傾城無間茶屋傳馬白人諜客風呂獄卒と、諸の流身派の女道門をうつ事、至極の僻事笑ふにたへたり。其上流身派は、なべて僞りかざり更に實なしとなじりて、女郎未見眞實といへるよし。可笑かな、前巾着の小錢を以て、でつち小者をたらすやうな、小乘の若道宗が口さきから、廣大無邊の流身派の沙汰、近比慮外の至り。數万兩の功を積て上品女郎屋の座敷に至らずして、何とて傾城の實不實の評判思ひもよらぬ事。惣じて女郎に實なしといへるは表向一通りにて、内證にいはずして眞のある事中〳〵おの〳〵方のはした金つかはれしぶんにては、有難き西方女郎の内心の眞を、いかで見つけたまはん。かりそめながら此說法はむつかしき事ながら、勤女はなべて僞りばかりいうて、實のないものと心得給ふ、愚癡無智のやぼたちの爲くはしくといてきかせ申す。大事の所ぢやとくときいて悟道せらるべし▲女說實顯論に曰、昔日都室町通りに熊本屋といへる肥後問屋、いづれ長者に似たり。皆客の物にて外聞つゝむ丁銀每日宿に山なして、勘定はあはずと女郎にさへあへばと、お池の久左衛門がしのび駕籠のりかゝつてとめどはなく、一文字屋の古唐土になげがね、紋日役日もひとりしてつとめけるが、此大臣本は貳百兩

もつて熊本屋へ入聟。いまだ養子親堅固にて近所に隱居し、娘おぎんと妻合五年以前に面家をわたされしに、養子聟の惣助けしからぬ嶋原狂ひに肝をつぶされ、一家をよせて家を追はらふ相談。娘おぎんひとりかなしみ、私異見を仕り向後ふ通にやまるゝやうにいたすべし。此度の惡狂ひは若氣とおぼしめして、御堪忍下さるべしと涙をながして段〳〵の侘言。さすが娘の心入不便さに、然らば以來西通ひをやめさすべし。此以後一度にても嶋原へ足ふんごみしときゝなば、汝共に勘當ぞと是をいひ仕舞にして隱居へかへられ、一門衆も隨分おぎんどの御異見なされと皆〳〵たゝれし跡にて、おぎん思案するに、つれあひ惣助今水の出ばななれば、異見の堤をついたり共、急にはふせぎがたかるべし。何とぞ是にはとめやうのありさうなものと工夫し、卸の久左衛門をひそかにまねき、きゝめのつよい鼻藥をもつてとくとたのみ、もろこし方へ內義こま〴〵しき文をやられしに、太夫ひらいて見るに、惣助入への身なればよのつねの勘當とはちがひ、家を出されてはふたゝびかへり給ふ事ありがたし。さすれば永きわかれとなる事、何ほどか我身のかなしさ思ひやらるべし。世間の女のごとく嫉妬の心にてかくいふにはあらぬ證據は、是にて察せらるべしと外に一通、客氣心にあらずとの諸神をかけての誓紙をそへて、今おやたちぶき



げんの間、其里がよひをしばらくやまるゝやうにと、筆に眞をこめてかゝれたるふみ文躰見る方、唐土心にこたへ、命にかへて此節此里がよひをとめまし。御心をやすめ參らすべきよし返事をおくり、惣助が通ひの遠ざかる仕様を案じてゐる折から、不斷の揚やから惣助さま御出と人ばしがかゝるをわざと勿躰付て急にはゆかず。惣助は待退屈して亭主太夫はまだ見えぬか、家質おいでかりたる銀で紋日つとむるやうな大臣と、此男を同じなみにあてがはるゝは迷惑。一日拂に氣骨ををらせず、いうた事のちがはぬ客には、朝から來て待てゐやつても大事ないはずと、大きにむつとがる所へ太夫さまお出と申せば、大臣ひぞられてくわしやを相手に、惣じて女郎に勿躰のつくも、後に根づよき大臣柱のすわつてあるから也。賣物にこしらへおきたる女なれば、其時の相場のよき人におもひつかるゝが、あきなひ上手といふもの。いひにくけれど皆の衆が悦ぶ上をする霜先の男、どうなりと氣を取てつなぎおかれなば、正月のつかひ物になる大臣、急によい鳥もかゝらぬ物ぢや。かしらにばつと出ても跡のない新規の客より、なじみの慥な男にまはられたが、よからうやうにおもはるゝとあてといへば、太夫はそれにはかまはず、めしつれられし末社の與平次が耳つかまへて何やら私語るを、大臣手前めいわくがりて、大キ



な聲しておつしやつても大事ない事を、何かありがましうおさゝやきあそばす事よ。いかにも〳〵お出おそしとて旦那先程より御機嫌わろく、よつぽど御取なし申てをりしといふを、さりとは晬めとすりたての月代たゝいて座になほり、捨てある盃取あげ一ツのみて、わしがおそいが今日に見えたやうに新しうござんすの。全盛の太夫と思うていたゞいて下さんせと、わづかな言葉の中に千万のおもはくこめてのいひまはし。よい機嫌のなほし塩と、ちと待身にして見て、此退屈さを思ひしらせたいと、是から口がほどけて來てしばらくの酒盛。夕飯過て口も西に座敷も入めな時分、人顔もそろ〳〵見えず、勝手には燈火の用意する比、大臣用にゆかれかへりに、庭の作り木詠めて立てゐらるゝ後から、太夫はた〳〵と來て是與平次さま先にいうた通り、玉さまへ是をひそかにしんじまして下されと、かさ高に封じたる文一通大臣の懐へ入らるれば、是はと其ふみ手にもつて、さてこそお性根がしれて來たと、ねぢむかるゝ顔を見て唐土くわつと氣をあげ、時ならぬ紅葉面にあらはし手持わろき有様、見ぬさきより大臣腹立眼になつて座敷へかけあがり、封じめといて燈火の本にてひらき見らるるに、外にあふ客はたとへ馴染をかさねても是正眞のつとめ心、誠はこなたと二世の契約、おもはぬ方へ根引にあふ共、命にかへてぬけ出ぜひに夫婦と成べし。此事たがへなば我身はいふにおよばず二親もろ共奈落におちまし。此世は日本あらゆる大小の神〴〵様の御罸をうけと、身の毛もたつ程の誓紙。當名を見れば玉さま參る唐土と血判すゑて、さりとは憎き心入、兼而は我等と二世の約束起請迄取かはせしに、それをやぶりてかゝる所爲、今迄うか〳〵鼻毛よまれし悔しさと、太夫が髻をとりてふんづたゝいつ、花〴〵しき大くぜつ。是は旦那日比とちがひ蓮葉成御仕方、まづ御心をしづめられよと與平次が取つくを、おのれも同じ穴の狐ととつてとばし、もはや里通ひも今日切と牙をかみていかりければ、太夫髪かしらみだるゝ心を取なほして、それはおろか成仰、勤する女がお一人ばかりまもりて何とたつべし。二世三世と約束申はこなたにかぎらず、あふ客毎に申事と手をはなしたるいひかた。惣助是を聞て、明た口をふさぎもせず大キにあきれて、女郎に心をつくすは世の中のたはけなりと、今迄の身をかへり見て、それより此里狂ひ物の見事に

やみぬる事、是唐土があてどもない方便の一枚起請を見せて、實のない仕形をして見せ里通ひをとめたるは、内證の眞實、心中をたてゝ、末〴〵まであひとほせしより、遙にまさりし心いき、身の爲になる客を取はなし、我身をぶ心中者になして大臣に思ひきらせし所、女郎に實がないとは申されず。是表向は僞りあるに似たれ共、内心の眞何といづれも、有がたい心いきではござらぬか。なむあみだ

第二　三野の女郎安心の身請

付り揚屋に有難がる千兩の光後光

▲女郎方便品に曰、人間遊山のうはもりは色里に增事なし。此有難道に入て、八宗見學女色一遍上人のすゝめに、女郎買は抑より太夫にかゝるがよし。其故は叉此上もなき職なれば、かぎりを知てとまる事はやしと、むまれながらの水道の水のみこみのよい大臣、身上は根つよい礎、石町の丸七さまとてかくれもなき女郎買。始て吉原へ通初られし日より、三浦の太夫職花紫に色濃も染付、毎日のよね狂ひ血氣の團助が貳挺だて、上下弍人めされし舟の、いつもよりかくべつあし入て、櫓はいそげども遲きを不思義たづれば、大臣下人にもたされし風呂敷包の中より、革財布を出されすこしの物が重りにかかる事よと、取出し給へば裸金にて千五百兩。是は何になる小判と、船頭肝をつぶしておたづね申せば、されば〳〵かよひ盛て花紫といふ花を、根引にする身請金よと仰けるほどに、船のあしの入もとわり、思ひあまりて引かきたまふ金なれば、さもこそあらめといふしほの、さすが武藏野のひろき人心とて、是にさのみ我もをらず、とやかくいふ間に船が着て、日本堤の道鉄が扣鉦きけば、無常の煙右の方に見すて、自然と鬢に氣をつけ形をつくる衣紋坂をおりて、大門口にさしかゝれば、跡より袖をひかへて、ちと申度事ありといふ程に、ふしぎさに見かへれば、色白き男の身には淺草嶋の幾度か水へ入て、中綿の表へ透て、しかも所〳〵釘裂してやぶれ編笠、丸ぐけの細帶とりしめもなき男、小聲になつて申は、貴殿は石町の丸七といふ、三浦の花紫にふかい大臣にあらずや。我も其太夫に水あげの日よりあひそめ、末は夫婦に成べきとの、勤はなれて嚴しき誓紙取かはし、かよふ程にけるほどに五年が間に、親の讓金に家迄そへてやつてのけ、今は一門共に迄見かぎられ、此身はかゝらふ嶋もなき船町の喜田といふ

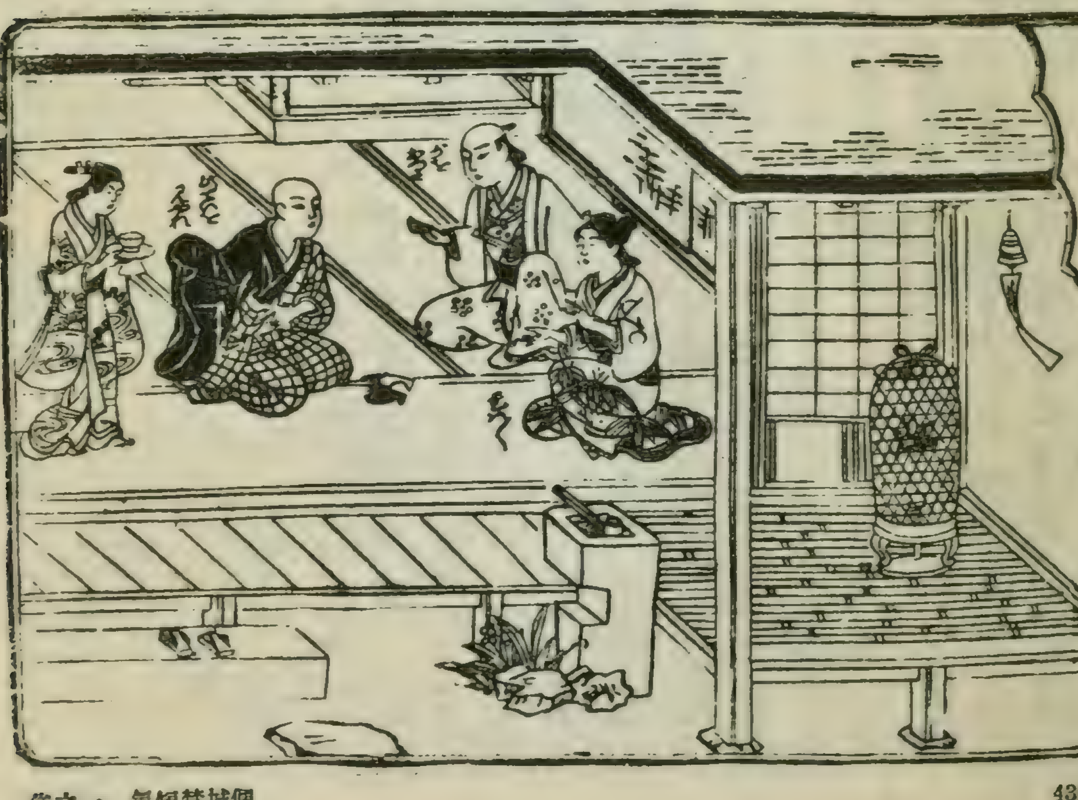
男なるが、きけばそなたはけふ太夫を千両余にて身請せらるゝよし。それは別家にをいて、折節の通ひ女にとつておかるゝ思案か、但しすぐに宿へむかへて、本妻にする合点か心入が聞たさに、最前から此大門口にまちかけてゐたるが、心底はどうぞといへば、是は珍しい事をとふ男がある物かな。千金にかへて請るからは、何にせうと我心の物好次第、それを聞切て何にすると、一腰をひねくりまはしてむつかしき顔つき。さりとは此里通ひする程にもない、角のとれぬ男かな。さのみりきまるる事にあらず。我等只今たづぬるは別義にもあらず、若本妻にもする合点ならば、大キ成思案ちがひかならず無用にいたされよと、それをとめうばかりといへば、その子細はと尋れば、最前もいふごとく、花紫と我等は太夫成の口明より、大方は他の客にあはせず、五年が間はひとへに妻女のごとくなれなじみ、互に偕老の契りえびや半兵衛座敷にて、其初秋の七日の夜空をながめて、たとへ此身天竺牢人の身となる共、見すてまいかはるまい、命のうちに一度は夫婦になりてと、天にちかひし二人が指の血をしぼりて、神〱を證人にたてゝ眞のあるほど書つくして、灰にしてつけざしの酒の肴となし、ふたりが腹の中にをさめおきぬれ共、つかひくづして今一錢もなき身となれば、あふ事稀にして互の心ばかりを筆にいはせて、今朝迄も便りをせぬといふ事なし。然るを貴殿金の威光にまかせ、太夫が花の姿は請られても、底心は我等が請ておきぬれば、女房にせられてから底きみはようあるまじ。尤のぼりつめたる客共には、望にまかせ誓紙もかいてやるよし。是は勤の中七十五枚迄は、ならひあつて書起請、佛神もゆるし給ふとや。若そんな本心のぬけがらの誓紙を眞請にして、請出さるゝなら大キなはまり成べし。太夫が眞の分は此男が皆さらへこんでおいたれば、實に二ツはない筈、いか様見れば貴殿も壽命はながゝらう、鼻の下がながいほどにと、よい機嫌聲でわらへば、大臣以ての外にせきが來て、首にかけし守り袋より、太夫が起請取出しさん〲にひきさき、地へなげつけてふみにじり、今迄たばかりし太夫めに、遺恨ありとはいひながら、女なれば相手にはしがたし。汝花紫が夫と名のり出るこそ幸なれ、覺悟せよと脇指に手をかくれば此男さわがず、誰も盛た時はさうした事もあつた。そんな所がこなれいでは本御女郎買とはいはれぬ。今迄何ほど

つくされしかしらぬ共、まあ四五千兩ほど打こんで執行めされ。女郎は客をだますが商賣、それをそなたは今迄眞ぢやと思ひつめてかよはれた所が殊勝な。万それから無性に腹が立ものなり。其方本の睟ならば、何となく常の調子で揚屋へゆき、太夫をよびてふな町の喜田といふ男と、末は夫婦になる筈の約束あるよしきゝしが、我に請られ本妻になりても喜田にそふ心か、但し思ひきつて我と二世迄もそひはつる所存か、其心底をつゝまずあかし、喜田が事慥に思ひきらるゝならば、我疑ひのはるゝ程の事を仕手見すべしと、こなたから模様このまずに打出して、女郎の心を探り見て、其上でのみこまぬ所あらば、さらりと身請をやめて、一家の太夫の中を頬あてに引ぬき、太夫に鼻をあかさす程の意趣がへしは有まじ。日影ものゝ我等を相手にして、あたら命を世間へ出ぬ義理にすてられては、世にいふ損耻なるべし。かうした模様はそち達のやうな、礒なよね狂ひ達は出ぬが道理と、手を打てわらへば、腹立の中にも是は耳にとまり、いかにも〳〵是は拙者が卒忽、御免なれと面をなほし、互に一禮の腰をかゞめて海老やへ丸七大臣は御來臨、太夫さま今朝から御出にて、此里の名殘も今日をかぎりと、お暇乞のお盃ど、年がまへな女郎さま方はあやかりたいと、遊行上人の御札いたゞくやうに、御盃を頂戴あそばす事、何とて旦那おそきお出と、御きげん取の男共取まはしてそやし申せば、遲きには子細ありと、下人にもたせし皮財布を取よせ、千五百兩の金を、五包づゝ三ならびにならべ、太夫是はさもしき物ながらも、命の替りにもなるは是ぞかし。此大切なる金銀を出して、そなたの身請をする我心底は、實か虛かいうて見やとあれば、太夫につこりと笑うて、是は改つたる御一言。眞の御心あればこそ、うき勤する塀の苦患をすくひ、此里をお出しなされて下さるれ。そもや實なくてかゝるお心づかひのなるべきや。それは申さぬとてもしれてある事と、小指をそらして小盃取あげ、かうした座敷でこなさまと酒のむもけふばかり、コレ旦那どのあげましよとさす盃をおさへて、まひとつとひたい事あり。我等眞の心底は今のでしれたが、そなたが實の脈本をききたし。我にそうて一代碇をおろす心か、船町の喜田に末はつながるゝ心底か、此思ひ入が聞切たいといふ時、大夫座敷をたつて、さういはず共身請の返替は成べき事なるに、淺ましきお巧。

皆さまおさらばやと歸らんとするを、大臣はしりよつて袖をひかへ、身請の返替とは丸七に疵をつけるやうないひやう。小判の山をついてくる男に返替とはどうした言分、そんな上手はいゝはずと、喜田とそはねばなりませぬと眞をあかせ。大盗人と兵庫曲の髮を抓んで、ふみもしさうないきほひ。一座の末社宿の嚊も、大臣の袂にすがりおまへのが御尤、太夫さまの只今のあそばしやう、慮外ながら御ふ出來〳〵、我〻お侘言申あげますと、今朝からの酒のさめる程笑止がれば、時に女郎座について、コレ丸七さん、喜田さまはおまへにおめにかゝらぬさきに、たんとおせわに成まして、今とてもわすれぬおかた。その男の事思ひきらば請出さうづ、さなくば御思案あるべきとの御言まはし。そもやそも身請が何程うれしいとて、馴染をかさねしお客の事を、思ひ切ましたといはれうものか、御了簡なされて見て下さんせ。若又思ひ切たと申た時は、我身の榮花を思うて大切な客を思ひきつたとは、つめたい心いきの女郎ぢやと口がましき廓中の沙汰にあはゞ、ぶ心中ものとしれてあるわしを、女房になさるゝこな様が心よからうか。あれは心中ものぢやといはるゝ女郎をこそ、一生そうてござつておもしろうもござらうけれ。是は我身へ難題を仰かけらるゝと思ふゆゑに、身請の返替と推しましたが、私があやまりかと、



さすが所から二本さす客にもまれ給ふほどありて、義理づめのいひほどきに、丸七も至極せられ、なじみの客をすてぬ心ざしからは、身請してやるほどの男は猶以てわすれぬはずと、日比に十倍かはゆさまして、命〳〵と悦びの大酒盛。相生の盃を根引にしながら、さすが我宿へは一門の手前をはゞかり、先本庄の石原といふ所に、かり座敷して入おき、親類頭の重手代をだきこみ、本妻に入レたきねがひ披露させしに、いづれも別義なくすみて、母方の伯父霊岸嶋の江戸屋道斎老親分になられ、近日あらためて婚禮ある筈、花紫も悦ぶべき所をさはなく、大晦日に算用のあはぬ顔つき。是は太夫さま御一生のかたまる時節いそ〳〵あそばせと、つき〴〵の女共いさめ申せば、おれは大分心あてのちがうた事ありと、髪頭さへなり次第に、櫛のはも入ずみだれ姿、何共よめぬ太夫が仕形と、丸七不審をなす時、太夫申は私おまへの奥様となります事ならば、心に籠しねがひ事あり。是を御聞入下されぬ内は、御手にかけらるゝとあつても、おかさまに成事はなりませぬと、思ひの外成事を申出さるれば、丸七もさすがの粋にて、夫婦になりて一生我内をまかすからは、心底にすこしにても隔ありては打とげられず。成程願ひあらばつゝまずあかして、何事も心にかゝらぬやうにして、本妻になほすべしといへば、近比かたじけ



なき御心入、申出すも恥しながら、船町の喜田様とは末々夫婦に成べき互のかため、誓紙迄取かはして今とてもわすれがたし。身は賣物なれば金にしたがうて、いづれの宿へもなびきゆくはならひながら、外におかれて當座の花とながめらるゝぶんは、金が敵の世の中それは是非なし。極つてお内義様とよばれては、いひかはせし男の貧なるを見すてゝ、榮花の家の奥さまとなりしと、喜田さまに思はれては、たとへ大名の御前さまになりてから本望にはあらず。ねがはくはおかたなりの前に、喜田さまにあうてぬしの心底きゝ、互の起請を取もどして、心よくこなさまと夫婦に成ましたいとの願ひ、あはせにくい物ながら、此おもはくの心算用をすまさせいでは、千里が野邊に虎をだいてねる心、底きみすぐれねば、ともかくもとゆるして、喜田がかくれ家へ入をやれば、此男も來にくき所をおめず參りて花紫に對面し、太夫こな様をよびましにやりしは別義にあらずと、いふ口上のさきをとりて皆迄いふまい。そちなればこそ此節に人おこして、一通りのいひわけ一生そうた同前、いひかはしたる一言をたてゝ、是非夫婦にならねばならぬと、立身するそなたに邪魔をなして、我等昔の起請をいひたてにして、無理に我宿へともなひゆけば、手鍋をさげさせながく貧苦のくるしみをかける、是眞の情にあらず。かう落て來るからは、志は互にかはらねど縁がないといふもの、すゐぶん丸七氣に入て、見おとされぬやうにし給ふが肝心也。我事その方の請られし日より、男をたてゝはそちが行末の障りと思ひ、かうした姿に様をかへたれ共、取かはしの起請をかへす迄は、仏神のおそれあれば付髪をして、今日迄表向は男をつくつてゐたりしが、是より後は有がたき身の取おき、見をさめに見給へと付髪とればすりたての青入道、淺草嶋の破小袖肩をぬげば、下には鼠色の木綿衣、爰より信州善光寺ニ參り、それより上方へ參るなれば、菩提のさはりと誓紙取出して太夫にもどし、我等が起請はそこにて燒てすてゝたべ。命あらばかさねてあふべしと、とゞむる袖を振切て立出ければ、太夫しばらくは狂女のごとく啼くるひしが、我と心を取なほし、俄に機嫌をつくり、首尾よく婚礼すみて、二月ばかり過て、段〳〵亭主に出家の暇をもらひかけ、つひに身を墨染となして、鎌倉の尼寺に、おこなひすましていまそかりけり

【第三】難波の太夫即身根引の成佛

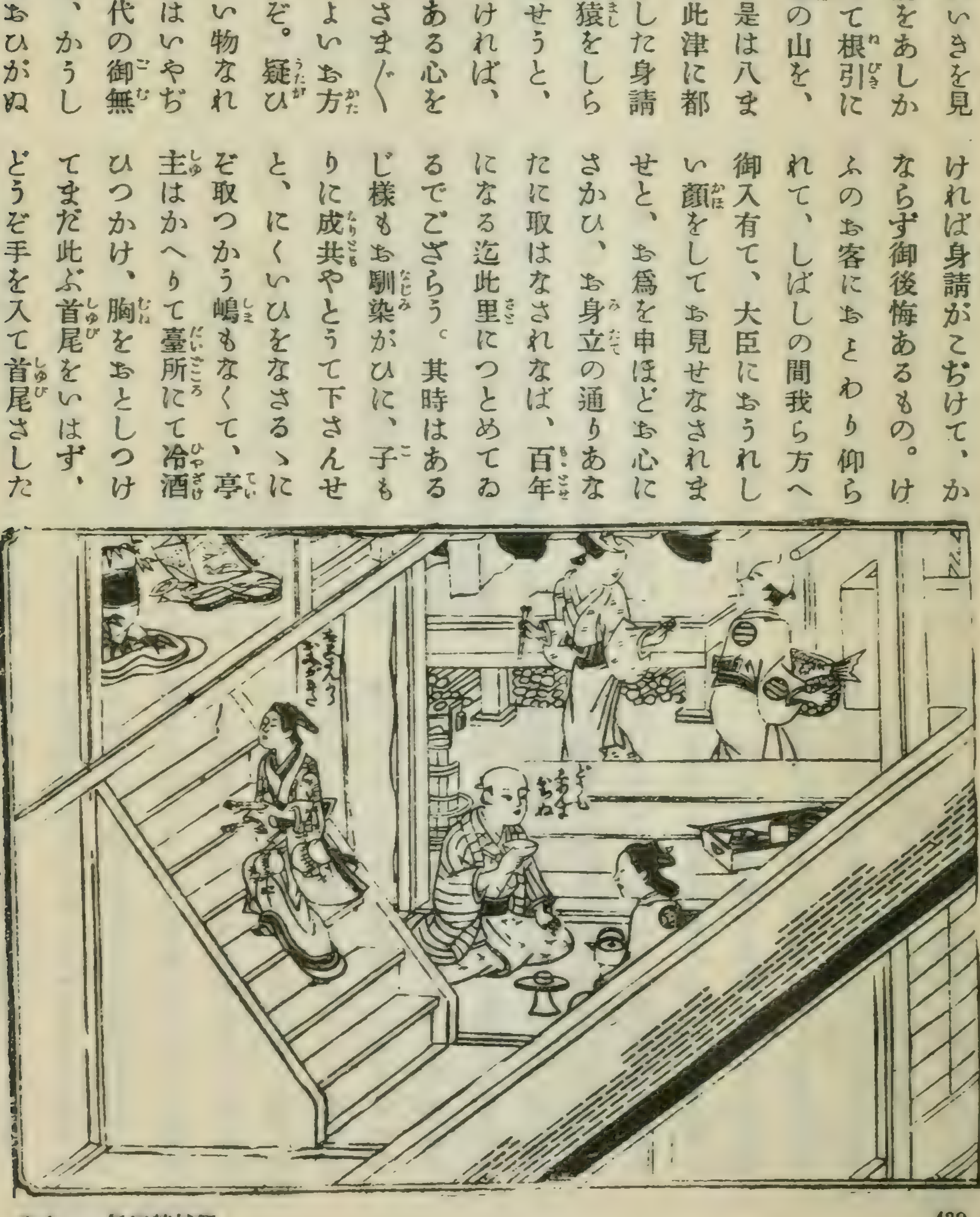
付り引舟にひかれて彼岸に至り大臣

▲下心僧都の興女要集に曰、女郎に嘘の眞眞の嘘といふ事あり。是傾城買の大事、肝心肝門の所でござる。いづれもよく聞せられい。たとへば女郎のいやと思ふ男なれ共、勤とていやなる顔もならず、折ふしはいとしいふりして善哉〳〵よい男め、諸事あまるわなどと焼手を見しらし、のぼせのぼされ此女郎にそはでは、浮世の中にすんだかひはないぞと、力瘤を出し根引にして、遂に夫婦になつて永くそひはつる所を以て、嘘の眞と申。又眞の嘘とは末は夫婦にならうと、八枚起請をかいて心をかためても、思はぬ方へ根引にせられては、いひかはせし事も嘘となる。爰を以ていにしへの睟たちも、眞の嘘とはとかせられた。何と有がたい事ではをりないか。此類の事ちかきころ難波に、ありまやの山といふ大臣、女郎は新町の茨木やの半太夫を物ずき、一日も宿に枕をさだめず、毎日〳〵通ひつゞけて、三年は爰に住吉屋の、二階ざしきを不斷あけさせ他の客を入ず、南の堀の口がるな役者二三人めしつれられて、ずゐぶんと思はれ自慢。太夫は名におふ手だれ、客をのかせぬ仕かけの名人、かしらはいつとても口舌にして、中ほどは　　　　二三度もありて、跡は男を涙もろくしてたんとうれしがらせ、始は金銀ありまやの山と、高くのぼりし身なれ共、此女郎に坂おとしにせられて、今は山も麓に見おとされて山水なるありさま、一度はさかえ一度はおとろへる謠うたひの、中間はづれのやうな紙子姿。是程おちても九軒町を昼歩行は、分のあしからぬ仕舞と、揚屋に引殘りある大臣共が、ほめたりしもとわりぞかし。ある時半太夫都の銀大臣におもはれ、全盛むかしに十倍、白銀のふき出し見るやうな枇杷色した顔ばせ、人めなくば御ほゝげたへくひつきたいほど、うまさうなる所躰、山はやぶれし編笠の中よりまもり見て、是太夫樣こなたはかはらず御盛でめでたい。我等は替りてかうした姿になりても、輪廻きたなく耻をすてゝ、せめてはお姿成共見てなぐさまんと毎日參るが、今とても昔の情はわすれ給はじ。我とても僞りならぬ心ざし、今に絆の種となりて、親の呼でやらうといふ女房を嫌うて、親一門にうとまれかくはなりぬ。せめては我が志ばかりをうけて給はれ、あらば何かをしかるべしと、

かすかなる前巾着より文錢一文取出して、いにしへの百兩より今此大切な所、一錢はかろくても、心底のおもき所をもらうてたもれと差出せば、太夫涙ぐみて、かゝる中にもまだすてたまはず、おせわ成お心づかひあだにはぞんぜずと、往來の人にはぢらへる氣色もなく、彼一錢をおしいたゞき禿をまねきて、大事のおあしぞよくとつておけ。死て冥途へ行時六道錢となして、あの世迄お情をわすれぬ種にと大事さうにわたせば、山は是を見て我ををり、初心成女郎ならば赤面もすべき所を、半太夫なればこそ大道の眞中にて、ようはいたゞきし事ぞ。是はもうたまられぬ所おやと、挾箱持し下人をよびよせ、蓋を取て五十兩包を出して、今の一錢の替りに是くれなゐの、ばつとしたるしこなし。太夫さらに悦ぶ氣色もなく、手にとるより五十兩の小判大道にばらりとまきて、眞ある一錢にはおとりし物と、見かへりもせず直に越後町の扇風方への御來臨。此見事さ夕霧以來の御太夫さまと、山も我ををり住吉屋にかけゆき、我しばらく親の勘當をうけて、兵庫に忍びて居たりしが、近い比親父はてられ、跡取べき子とては我ひとりにて、母一門より人ばしかけて、ふたゝびよい身になりぬれ共、太夫が以前にかはらぬ心ざしか、見とゞけての上に引かき、一代地をふませぬお家様と、そなゆべき心入にて、此比かうしたやつしをせし



が、けふといふけふ見事な心いきを見て感にたへたれば、親方手前をあしからぬやうに、なんぢはからひて根引にしてくれと、挾箱の中なる金の山を、亭主に見せてたのまるれば、是は八まんない圖、そも／＼仁德天皇此津に都をさだめられし此かた、かうした身請はきかぬ事。太夫樣へも此荒猿をしらせまして、お心用意もさせませうと、扇風方へ參りて內證を吹こみければ、女を見ちがへられて、しれてある心をさぐられ、お姿をやつされて、さま／＼心をひいて見らるゝ疑のつよいお方に、何がうれしうてゆかれうぞ。疑ひのつよい男は必あきがはやい物なれば、末のとげぬ事に埒を出るはいやぢやとの返答。是は太夫さま一代の御無分別、今大臣のきれめな時分、かうした大氣なお客は稀なもの、きおひがぬければ身請がこぢけて、かならず御後悔あるもの。けふのお客におとわり仰られて、しばしの間我ら方へ御入有て、大臣におうれしい顏をしてお見せなされませと、お爲を申ほどお心にさかひ、お身立の通りあなたに取はなされなば、百年になる迄此里につとめてゐるでござらう。其時はあるじ樣もお馴染がひに、子もりに成共やとうて下さんせと、にくいひをなさるゝにぞ取つかう嶋もなくて、亭主はかへりて臺所にて冷酒ひつかけ、胸をおとしつけてまだ此ぶ首尾をいはず、どうぞ手を入て首尾さした



がるは商上手といふもの。心にすゝまぬ笑ひつくりて、太夫さまをかりにやる其間のさびしさをくろめんために、おちかづきの女郎をあれこれかりまして、酒事つのり野都にひかせて、二ッ井小太夫に上るりをのぞみ、しばらく興をもよほしけるが、肝心の君さまお出なければ、大臣どこやらさびしさうにわたらせ給ひ、いにしへめをかけられし末社共を、近所の揚屋よりさがし出して、是は旦那めづらしの影向や。月すみよしやでお目にかゝるも、久しぶりぢやと口あひ申て、さまぐ\のもんさくつくし、大臣も熱まはりて、花めづらしく打ちらせば、さながら座敷は山吹の瀬を爰にうつし、辰巳あがりの聲して、是は旦那昔よりはお智惠があがつて、見事成あそばされかた、どうでもいとしい子には旅をさせいぢや。少しの内の田舎ずまひに、是ほど分がようならせらるゝ物かと、そやしたてる所へ、半太夫さまから御文が參りしと捧申せば、大臣ひらき見給ひ、何ぐ\けふの客は田舎のかたい衆にて、少しの間もうごきがとれぬとの言譯狀。奥迄見るにおよばず、かうした所を名譽呼よせるが我等が得物ぢや。ちと見ておけと自慢たらふく仰られて、硯取よせ返事かきてやらるゝを、亭主下心あれば罷出て、はゞかりながら何と仰つかはされますとうかゞひ申せば、されば半太夫そもぐ\新艘の開眼我等いたして此かた、末は根引のやくそく、おそらくいふではないが、ひろき難波にあの女郎を、ひつかきさうな大臣外に覺えず。請出さうというたらば、さんたもしさうな物が、少しの間勘當せられて、おちたと見すゑたかして、兵庫から度ぐ\文していひつかはせしは、我身勘氣にあふはしばらくの中なれば、追付ゆるされめでたう立かへりて、約束のごとくうけてやらうというてやりし返事に、かならず我事おぼしきらせられて、たゞ御首尾よくおかへりのみをねがふと、身請の事とてはなほぐ\書にもかいておこさぬは、迚もかへりてからが力におよぶまいと、あの女が見すゑた所がにくさに、此比立かへりて以前の身に成ぬれば、わざとあさましく姿をやつし此里へ來て、きやつが心底をさぐるに、どうも實を見つけぬ故、けふ一文の錢をあたへて心を見しに、あつぱれな所を見出したれば、最前も汝にいふごとく、今日中に親方手前を埒あけ、明日は此里より新しき乘物にのせて、我方へ直にのりこます合点なるに、其方に此方内證を聞ても、今

迄爰へ來ずに、をさめてゐるがにくいと、よつぽどむつと氣なる所へ、田舍の堅い客でいかれぬとのとゞけの文、八まん强過て身請をしそこなひ、今の間に格子の柱に、指の先に唾つけて、のゝ字かいて後悔してゐらるゝを見るやうな。それで返事の御出成がたきよし、さゆはゞ身請の事も成がたくゆはん。我身しらず樣まゐると三くだり半にかいてやると、さら〳〵とかいてひきむすび禿にわたせば、亭主さし出て申度一言あれ共、旦那の今の御機嫌いかゞと、はからひかねて思入を胸にもつて罷しさる。禿はくだんの返事を取て、扇や方にかへりて太夫さまに見せ申せば、御披見あり。こちが心はさうではないにと、しをれ給ふを其日のお客は都の吹出し大臣、此返事を取て見給ひ、弓や八まん我あふ女郎にひけをとらす無念さ。過し年より此太夫に我等がかゝつてゐるとは、おそらく西三十三个國にはかくれもない所に、けふ來ずは身請の事も成がたいと、おのればかりが銀持がほに推參千万。たとへ太夫一代此里を出ず墎の土となればとて、此返事を見て彼奴が所へどうゆかるゝ物ぞ。定奮はゐられぬか。只今茨木方へゆきて、此太夫を金と背くらべさせて、今身請の埓をあけて來らるべしと、有合の金子三百兩先手付に相わたされ、殘り明日と事急成身請の相談。何時も金の浮世、今いひ出して早速相すみ、御旅宿より乘物取よせられて、太夫さまを箱入にして其夜に取てかへられぬ。さりとはきみよし是でこその都の大臣なれと、難波の水をのんでゐるすゐ共が、我國ならぬ京をほめけり。山はかゝる事はしらずして、今の返事を見たらば太夫がさだめしとんで來るでござらう。所を我等は物いはず少しひぞり姿に、もとをらぬ三味線ならしてゐやう程に、あるじは笑止がる顏して、申太夫さま何をしてござります。お前は貧乏神と念比してござるかして吹付る仕合をうしろから澁團でまねくやうな事。私が先程からあまい口のすうなるほど、お前に成かはつて侘言いたせど、中〳〵旦那の御機嫌がなほりませぬ。太鞁衆をおたのみなされて成共、なりかゝつた身請のさえぬやうにあそばせと、實らしう申べし。其時末社どもにたのみますと取かゝらば、私共が力におよびませぬ。取次よりは直訴あそばせとつきはなせ。然らばせう事なさに、例のならひの涙をこぼし、ようごさんすわしさへしぬればよいものといふ。てつきり恵ごかしであらう。

そりや人音がするだまれといへば、太夫ではあらで、やあこれのさごろもといふこんはくはしり來つて、半太夫さまは都の吹出し大臣様が金とつりかへにして、只今抓でおかへり。お前へ一筆のこされたき御心入なれ共、もうかうなるうへからは、さだまつた男ある身、旦那どのゝ手前遠慮すれば、何事も見た通り心得ましてくれとのお言つけを申に參りました。何としておまへには遲蒔にして、なじみの女郎をよその花にはなされし事ぞと、申出すより山大臣、神鳴に臍をとられし心地して、大キに肝をつぶされ、最前の言合せも、正眞の樂やで聲をからしてのけ、是はまづどうした物であらうと、三里さがつてもがいて見ても叶はず。末社共も指のまたをひとつによせて、手をつき御尤というてゐるより外はなくて、座敷の興とともに夜もしら〳〵としらけてのけ、おかへり品のぶしゆび、勝曼の方をうらめしげに見やりて、我と太夫が二ッ紋の挑灯かけし契りも、今こそは眞の嘘と成てのけけり

第四 女郎買物回向の鐘

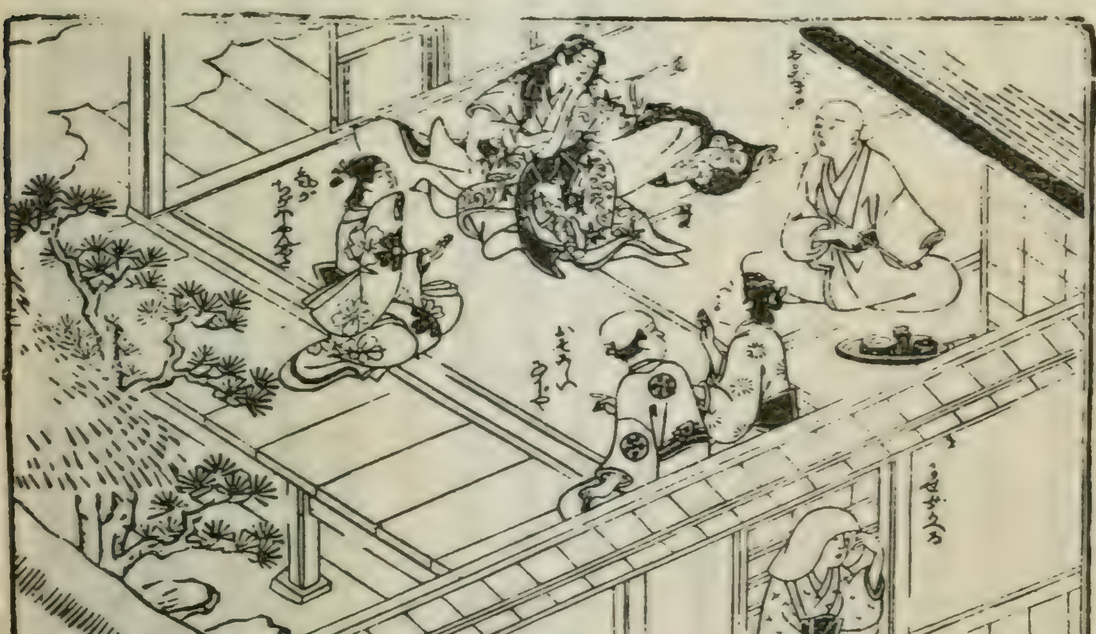
木町

付り醉の敎化にしづまる乱氣

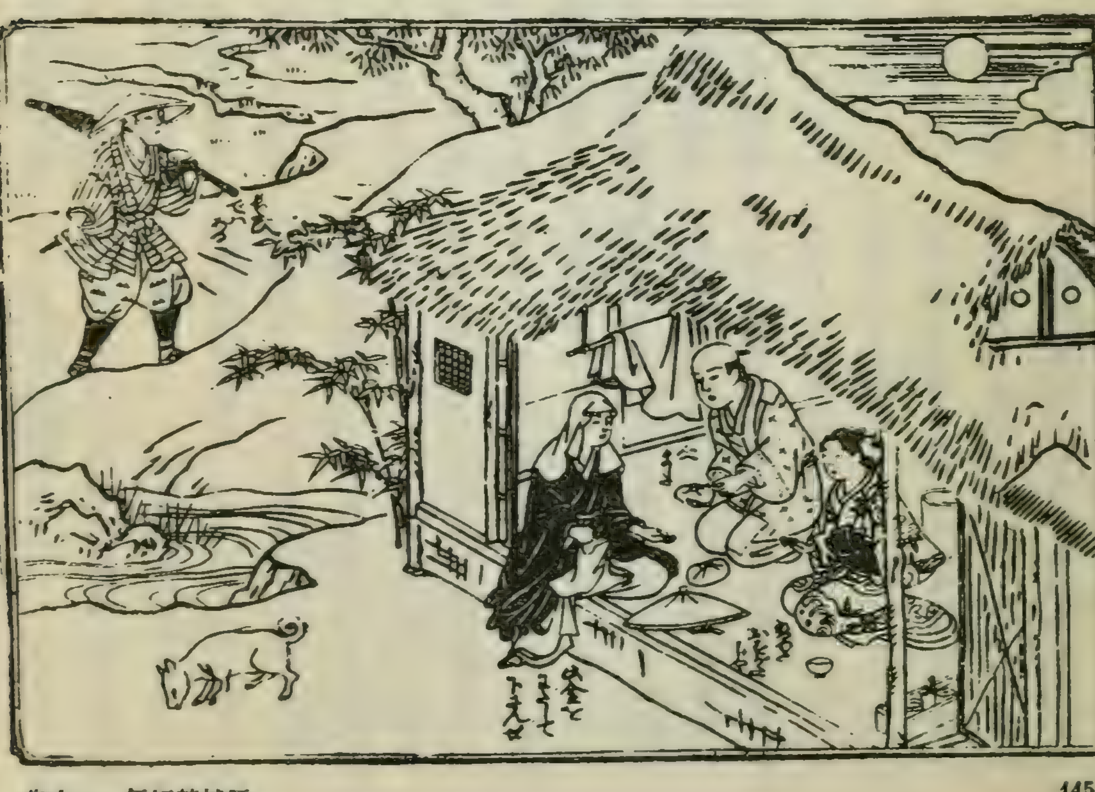
椀久大師の語に、傾城狂ひによい程といふほどなし。一切の買手俄につかひさかる時は、頓而燈のきゆる戀の闇路とはしれて、女郎もかなしく共客いとしく、御宿の不首尾を異見して、少は遠ざかるやうにしかけぬるは、あふ女郎の馴染だけにて、神ぞ〳〵みぢん僞りのなき所なれ共、男はあしく聞なし猶しきつて毎日出、事によつて外の女郎にかはりて、こなたへ見せる全盛に、せいでもくるしからぬ大騒に、程なく身躰たゝむ人、三ケの津に何程か多し。とかく此道ばかりによいほどといふほどはなし。とかくつかはるゝだけはばた〳〵とつかうて仕廻まだしき時に分別すれば、差替の一腰も茶入の一ッも殘る物ぞかし。ぺん〳〵とやりくりするうちには、一色〳〵皆になし、手と身とに成てのをさまりは、我等がやうに浮世にすてられ坊主となつて、鉢ひらきをするより外はなし。昔より身躰に應じ、松梅鹿の位をわかち、分際相應に、それ〳〵の役〳〵の女郎に縁をむすび、器量ほどにあそべば、永く天竺牢人のくるしみはうけず。頭から力にもおよばぬ高き位に上りつきて、終おちるに間なし。もろ〳〵の粹達是を不便に思召して、天神といふ位をこしらへ置給ふ。是よいかげんの中位なり。

世間へはさのみ奢ともいはれず、又ひけるにもあらず。此心は勸進能を、正面の疊に座して見る成べし。名もなき人の棧敷も目立、酒作りて片見せにてらふそく質など取人ぐらゐの、編笠ぬがす追込にまぎれ、人のきせるなどかる見ぐるし。とかく商の道は心ながう、遊興は短くばつと出て、しやんとやむが此道の至極の悟道と、椀久末期の名言をのこされぬ。されば近年伏見の鐘木町繁昌仕出しも、十八匁より上の位なければ、ずゐぶん奢てからが高のしれたる事と、太夫を買ふ心をもつて見ては、氣のはらぬよいあそび所と、都の歴〻夕暮より忍びかご、のりかゝつてから、かさ高になるは此道のならひ。室町の井文息災なるむかし、大橋にかゝつて力瘤を出し、此里にめづらしき太夫となして、礒ぜゝる大臣共に肝をつぶさせ、名を末の世に殘さんと、親方末社をよせてのもくろみ、ちとさはる事有てすこし猶豫の中に、此所の桃の花に咲まさつたる梅の位一夜の中に十一人、くつわにて臨時の除目おこなはれ、天職とへあがり給ひ、今の全盛金の鐘木と申あへり。爰にいにしへ烏丸通りに、あかねやの半七とて棟高き大質屋、金銀はいつも澤山にある物と心得、あるにまかせてつかひ出し、嶋原の太夫左門に肩かへずしてあひ自慢、しだいに淺からぬ中となりて、つひには根から引ぬき女郎を我物にすると、我家が人の物になるとが一度にて、住なれし町所を立はなれ、しばらく白川邊にしのびしが、半七從弟に、伏見の丹波橋に少六といふ男、是も血すぢとて色の道にかしこく、商の道にうとければ、內外やすりでおろすごとく、急に手銀を皆になし、是ではすまぬと、世間思うて內證の虛成をくやしがるかと思へば、打こみし鐘木町の八雲といふ女郎を、都の名葉法師とはりあひ有顔せし最中なれば、女郎の手前ばかり思うて世帶の費、入かたの日影のごとく次第に足もとからくらくなり、ともし火の消る迄世をはることそうたてけれ。八雲共比の替名を雲八といひて、名葉法師の御意に入三百兩で廓を出し、よい置所をきゝ付て耳塚の前に、ひそか成裏座敷かりて、外の人に見せぬ身となせしを、少六あこがれ身上のならぬよりは、此女郎の事のみ苦にして、晝夜工夫せしが、色の白き生つきより思ひついて、俄に鉄漿付て女の所躰をうつし、丸綿かづきて夕暮方、八雲がしのび居る裏座敷へしかけ、あんないこうで、八雲が在所山科の姉じや人から、とづかりて

まゐつた。此文直に八雲どのへわたして下され。わしは隣の少六が嗅ぢやというて給はれ。御返事なさるゝなら、今宵は六条のじゆず屋町に一宿します。明日晩方に參りませうと、くれぐ\いうて下されと、腰本づかひの女に文をわたして歸りぬ。八雲此ふみを見るより、何か書てありしや、俄に泣出しひとへに狂女のごく、わらひつわめきつさまぐ\の身ぶり、つきぐ\のをなご共おそろしがりて、つけおかれし助右衛門に此段ゝをいひて八雲が様子を見せければ、是たゞ事にあらず。最前の在所の嗅といひしは、まぎれもなき狐成べしと、近所の山伏祈禱坊を頼み、色ぐ\といのらすほど口ばしり、髮おしみだきおそろしき有様。其夜のあくるを待かね、名葉法師方へ人ばしかけてよび申せば、法師さらにせかずして、翌四ッ過に來られ何をさわがしうするぞ。山伏などの祈でゆく物にあらず。我らが睟の秘密にて、此狂氣をなほして見すべしと、座敷へ通り給へば、眼すわり息ざしあらく、うつくしき姿はなくて、すさまじき躰相、はぐろつけし歯をならして、さまぐ\のたはとさくに身の毛もよだつ斗。法師は少しもさわがず、たばこ盆引よせ心しづかに一ぶく煙らせ、おどしつけて是八雲、所に居て多くの客にもまれても、まだ睟といふ人を見しられぬと見えたり。なぜ打破て我身には深いいひかはせの男あれば、お情にそれ



にそはせてたまはれと、つゝまず心底をあかし、我手前を首尾よう隙はもらはれずして、さわがしい狂言をはじめ、あかれて隙をとらうとは、そりや前方なる若手の男にして見せられたがよいはず、此古法師はそんなちよろい手をくふ事にあらず。ねん比な男は郭にあるか客にあるか、ありやうに白狀めされ。出しおくれになつて長狂言せらるゝと、そちが身は買切ておいた物なれば、しなるゝ迄座敷籠におしこめ置、月日の光も見せぬが、なんと雲八返事はどうぢやと星をくはされ、覺えず足手が一所へじんじとよつて、ほろりと涙をこぼし、何事も今迄のお情に御免ありて、御きげんよう御暇下さるべし。深間の男と申はいたづらにもあらず、我ゆゑ代々の家をつぶして淺ましくなられし、丹波橋の少六といふ大臣に、そはいでは心中たゝず樣子は是にと、少六文を懷より出し涙片手に見せければ、見る迄もなし外に心ある女を不便がるは、らうの破てある煙管で、たばこのむやうなもので、煙がわきへもれて我口の慰にはならず。そちゆゑ身代つぶしたる男を忍ぶは情の最上、すなはち今より暇をやると、二念なく隙をやられし法師のさばき、あつぱれ至極の分知と、今につたへてわるうはいはず。それより少六と夫婦になりて侘しきくらし、殘るものとては郡内嶋の綿入ひとつを、互にぬぎかへ外をつとめて內のさびしさ、卯



月のはじめつかたになれ共、人並の衣替もしらず、青葉なる藤の森のあたりに住所をもとめて、土細工の狐殿も福の神のつかはしめといへど、身代の化をあらはしくるしき渡世の中にも、互に情のふかき手鈞瓶をくみあげ、薪を小割して友かせぎ、一合の油をもとむる便りもなく、軒もる月を燈と心樂しむ二ッ枕に、ひとさきて表をたゝく音、たれぢやときけば少六が宿は爰かとたづぬる。今時分我を尋るはふしぎ。まづ今日は晦日でなしと心をおとしつけて、とられう物もなければ、盗人の用心できびしうとがめるではないが、若むかひの米屋殿なら、女房共が留主で錢の置所がしれませぬ。明日ござれと一寸のがれをいへば、いや／＼そんな氣づかはしい者ではない。そちが從弟のあかねやの半七ぢや。まづ爰をあけてくれいといふにおどろき、絶て久しく音づれもせず、今夜中に尋來るは心もとなしと、戸をあけ内に入って樣子をきけば、高がそちと同じ身持なれば心もとない事もない。つくし／＼てかからう嶋がなさに、親はなきよりとやらで、厄介になりに來たと、粹なるいひまはしに少六我ををり、なんぼう程つかうてそのやうにむごうはなりしぞ。さりとはたしなめいかに若いとて、よい程といふほどをしれといへば、半七わらひて、そちもおれもその智惠が、まあ五年はやう出れば、燈なしに寢ながら月も見ねど、おそい斗に夜中に一門の欠をたづねにあるくわと、後は大笑ひになつて、扨ひだるいが何ぞ喰物はないかととへば、ある共／＼、田樂がよい加減にやけてある。それ女房共半七は此邊ぶ案内なれば、此前の田樂茶屋へ連行、腰錢のかぎりくはせてこいといふにぞ、扨は御内義樣それにござるも存ぜいで、御挨拶も申さなんだ。お顏は見えねど、さだめて雲八殿とよい中かといへば、此女ゆゑにこそかくはなりぬ。是程ふたり眞ある中はなけれど、世間の人のいふごとく、勤した者には子がないといふが虛言にはあらず。どうした理屈で子がない事ぞ。今の暮しではないも增かといへば、せつかく子種がたまつてからが、元ながれの身といふ義理なれば、たまりてはないはずと、たはどいうてさびしい腹をまぎらかし、扨我事も太夫左門を請てのち、次第に下り坂となりて、ふたりが口を過かね、互に合点づくにて隙をやりしが、我にはなれて女はたてんとて髮を切て出行、わかれてから二月あまりになれど、便りのないはしんだもしらず。

悲しい時は身一心、ひろい都で口が一ッすぎられず、去屋敷方へ歩行若黨の奉公にありつき、明日江戸へ罷立暇乞のため、ひとつは左門がたづねこん時、此様子を咄してもらはんために來りしが、追付立身してじや〳〵馬にのつて上るべし。今目のさめた物語にすかして見れば、大小をさしこはらかし佐佐木田半内と名のるよし、眞の情知とはいはれず。せつかくおもひ入て根引に迄せし女郎を、身が過られぬとてあかぬ別をする事、傾城買の風上にもおくものにあらず、早こそこを出てくれと手を取て引出す。成程〳〵尤ながら、色あるうちに隙をやりしは、我至つての情なり。思案して見よといふにぞ、誠に世の中ぞかし。有德なる人にかこはれながら、貧なる男をしのびて、暇をもらうてくる女もあれば、友に貧苦をさする事をいとひ、形のかはらぬうちに隙をやる男もあり。いづれ品こそかはれ皆是情の至極也と、夜ととも咄してあくれば暇こひて、半七は江戸へ下りぬ。今は大津迄も行べきと思ふ時分に、絹ちゞみに練の白裏付て、龍門の夏帯右の脇にむすびて、本紅の二重なるふたの物して、薄紫の帽子加賀笠ふかくかつぎしは、またあるまじき若比丘尼、是に心をとられ目もはなさず見てゐるに、彼女法師やさかた成聲して、此邊に少六さまといへるお方はと尋るを、見とむれば太夫の左門にまがひなし。是はさて今少しはやくば、半七にあはさうもの、挊の爲に江戸へ今朝ほど下りしが、其御方の事のみくど〳〵申て出けるが、不便やとなき出せば、さりとてはおいとしや、もはやあひ見る事は成まじ。我事三六さまと申歷〳〵人にくどかれ、破戒の身となり明日も鳴瀧のお下屋敷へ參るはず。是も身の爲ばかりにあらず、眞は半七さまの貧苦をすくはんために、是が敵の世の中と、兩袖より五十兩包二ッ出し、お情におひつき、此金をしんぜまして下されと、涙ながらに一筆を金と共に殘してわかれぬ。少六夫婦心底をかんじ、すぐに打たち跡をしたうて、江戸まで行しに終にあはず。又立かへりて其身のくらし隨分悲しき中にも、此金一兩も手をつけず、半七を心がけて近きころまでたづねしは今の賢人と知たものは感ぜり。左門は其のち鳴瀧の梅林に花のあぶらをのせて、終に極樂へ根引にせられぬ

一之卷終

傾城禁短氣 二之巻目録

第一 野郎傾の安宗わかしゆ論

付り 出家は裏は表 抱よわらぬ論

式臣八 女郎方の立抱とわか衆を安んじ
ぶさいは気生の者よりねる論争
聞同志のつどひし中ある破れ入
座とすいて委く爰ニ記ス

第二 身揚りはくつわの方便

付り とくけの文は執りんせの花籍

式臣八 一代男気分をまおしくは女たいけ
真はわる者ハ二十三勅女子もんくかおさハ
あわてハ悪所ニ気てすさた学を無
大臓問答の埒ニ委ニ記ス

第三 異香薫ずる女郎の内傳

付り 血脈うけて心中の指切

式臣八 達ひの紫手をも初て為女郎
拵身の縁をからう指気を為して
実地のあとの事を大きよかよう覚とる
手管の奥義を爰ニ記ス

第四 女宗ニおゐて気郎門廃りし開口

付り からしき世界の智段

式臣八 廣大無辺の女色門のひろきを安て
気郎門の皆記宗旨と云つら弟へ
読びへしお勢を捌て皆女郎宗ニ
改宗さるおりと爰ニ記ス

第二 野傾の兩宗あづち論

付りお裏お表一物にあらぬ評

老若ともに翫色居士の、女道門の色談を聽聞して、腎の臟にこたへ感涙をながし、衆道門にかたふきし輩、のこらず改宗して、此時に至つてすでに、男色の一派絶なんとす。是によつて若衆の道にてうかみ來る抱親をはじめ、こんがうの稻光の傳助、此色談の高座のちかくに立はたかり、いかつげに申けるは、此比述らるゝ色談の中に不審あり。たづぬべきが、こたへらるゝや否といひければ、翫色笑つて、ぶすゐの輩に對して、色論すといふ共勝劣あるべからず。然るべくは誰にても、男色一道に達せし、晬の上人を同道し給へとありけるゆゑ、子共やの親方共申合して日を定め、男色女色の色論すべしと、則てれん上人を頭として、四條川原寺の日展、大坂南江院道頓、其外此道を好者共八方より馳集りければ、女道宗にも諸分知の開山、金沢山大分院計案和尚、并ニ嶋原寺朱雀上人翫色居士、三人心を合して出らるゝ。かくて色論の日限にも成ぬれば、其比都にかくれなき、婬乱居士といへる、若女兩道を兼たる色道者を判者と定め、女男の兩宗立わかつて、各座につかれて後▲計案和尚問ていはく男色一道の中に賣若衆ありや▲日展答て曰賣若衆あり。上品なるを名づけて、太夫子無臺子板付といへり▲計案いはく賣若衆あらば、なんぞ傾城無間茶屋傳馬、白人謀客風呂獄卒といふ異名を付てあざけるぞ。其惡さまにのゝしりし、異名の由緒をきかん▲日展答て先傾城無間とは、世間浮氣の大臣、傾城にたらされ身代をつぶし、ほどなく乞食に成ゆゑ、傾城買ものは乞食に間無といふ心にて、傾城無間といへり。又茶屋傳馬とは、一切の茶屋の游女、座敷へ出て客をつとむるは、たゞ傳馬にとられしごく思ひ、戀も情も、いきもはりもなく、眞實の契りにあらずといふ事なり。白人謀客とは細にいふにおよばず。白人といへ共内證はすさまじき黑人にて、しろとらしき顏をして、客を謀といふ義理也。風呂獄卒とは、風呂の湯娜共が、客をやいだりはめたり目をぬいたり、偏に罪人をせむるがごくするゆゑに、獄卒といへり。されば勤女にかぎらず、一切の女眞なく僞りおほく、よく人をまよはし、身上をつぶさす大魔王なり。世に女道あるゆゑに、うつけし人種つきず、かしましき赤子のこゑ、兩隣を難義がらせ、是よりして

取あげばゞ、仲人噂も出來、嫁入の長持葛籠、親々のやつかいとなり、吝氣喧ひに道具をわり、月水に家內をけがし、老て山の神と變じて下々をしかりまはし、腰ぬけて鬼婆々となつて嫁子をいぢり、一生もてあつかひかねて、男の難義するは何ゆゑぞ。是皆女道のわざならずや。男色にはかりにもかゝるわざなきは、實あつて欲なきゆゑ也。然るに女は第一大欲ふかく、眞すくなき證據は、世盛の時は其夫が心にしたがひ、姑にもおそれて孝をつくし、ながく緣ある事をいのり、万の始末も心から大事にかけ、人にもよきといはれたき嗜、下アにあしくあたらず、世の業に油斷もさせず、朝とく起て髮ゆふかたちを見せず、夜の行水闇をおそれ、夫の疑ひをやすめぬ。かゝる身持は其家榮ゆるによつて我欲をふかく思ふゆゑぞかし。少し身躰薄く成ては男に毆もつけず、世の挊をやめて下女とあらそひ、長寝の爲に病ひをつくり、五節句にも髮頭をみだし、亭主に裾の破れし着物を其儘にてきせ、揃うた皿を九枚になし、諸道具を手あらく、大黒柱にはぐろ吹かけ、塗枕におしあて灸箸をけづり、腰張をまくつて糸屑をつつみ、繼木の初咲を用捨なく手をり、書院の軒端は洗濯物の竿持せとなし、迚も人の物と成ゞ賣家と住あらし、肴掛の鯣も煎じ茶の菓子に引さき、何もなければ共通りに朔日廿八日も精進にして、仏壇の下も書出し



の置所となして、内證ゟ其家をつぶすやうにするは、欲あつて實なきゆゑにあらずや。愛を以て衆道の祖師弘法大師も、女を捨、男にかたむくべし。若契淺からずして、毎夜あひあふといふ共、子を孕といふ事なく、たゞ眞實のたのもしづくの念比にて曾而欲なし。欲なければ人の家をつぶすべき道理なし。若衆は天性の美形、女色は紅粉を以て面を彩大つくろひもの成ぞ。かゝる淺ましき女道門の口さきより、かたじけなくも一切衆道の有がたき道を、捨閉閣抛と捨るはいかに。すべて男子出生して十四五才迄は、前髮をゆひて貴賤共に若衆の形なり。その若衆を捨るならば、女宗の分は、なぜ生れおちから剃下髮の男にはせざるぞ。なべて若衆を捨ば世に男といふ物はあらじ。男あらずば何を以て女道門をたつるや。返答はとつめかくれば▲計案ずがおろかや若衆を捨よといふにはあらず。いわけなき少兒をとらへてくるしめ、子孫相續　無益の事につひやす、衆道といふ若衆とのかたらひを捨よといふ義なり。又世に男あらずは、何を以て女道門をたつるやと云ふらん。しからば汝等がいやしめる女なくんば、いづれの所より人間出生せんや。近比かたはらいたし。其上傾城買は乞食に間なしといふ心にて、傾城無間とさみする条、野郎狂ひの大臣は乞食にならざるや。傘一本にて寺をひらかする類多し。女は欲ふかく



實なしといへ共、傾城遊女ほど無欲成ものはなし。藝子の欲ふかく僞り多き品は、古來より經〻に大分ときおかれた、野郎虫といふ書に、山本万之助を評して曰、此子客をたらしてとる事は好、とらする事は大キにきらひ。哥に、おちやの湯で何とかせんや万之助、せばかうたいのいとぢやわんにてとあれば、欲ふかくして情の道かけたり。傾城には一座のいきわろければ、恨て重而來ぬをいとはずふる事あり。是はいきぢとて、根本は戀路の切なる所より出るなれば、何程ふりつけても心ざしにくからず。若衆の　て、その事きらひとて客に　は、氣随我儘とて、女郎のふるとは黒白のちがひ、奉加して金取込て、堂たてぬやうなものなり。其上女道門には、遊女夜發の輩迄客にまかす身なりとて、みづか

事なし。衆道門には若衆として、念友　から、らるゝと見えて、野郎あまのじやくといふ書に、さる少人を評して小哥うたはるゝといへ共、つれ〳〵の慰に、きにくしとあるからは、ひとり慰をせらるゝには極まれり。しかる時には女道に合しては、心ざしいやしく卑劣なる物ぞかし。しひてあらそひ陳じられなば、野郎げち〳〵、同立聞等のもろ〳〵の古き睟達の、説おかれた書物を出して證據を見せん。今はしらず昔〻の藝子、天性の美質とはいはるれど、女より増に面躰に白粉をつけ、鶏卵の淸をぬつて、随分お顔のそこねぬやうに、朝夕とぎみがきにかゝつてゐられても、內證には七ツを頭にして、男女の子共五人ある上に、留守居どのゝ腹

を見れば、福嶋の雀鮨見るやうになつて、生れぬさきから襁褓のせんさく、樂屋を見ぬが花こんな事しらぬ大臣があればこそ、一夜も宿には居給はず。いかにわしが年はもゆかぬものぢやとて、無理な事ばつかりと、かいつくらるゝ顔つき。なんぼうそちの宗旨の元祖ぢやと、あがめらるゝ高野大師も、石磨の目をおどろかさるべし。田舍の素い客が、若衆といふにめんじて、金銀はさもし、花車道具も何かお氣に入べしと、いろ〳〵思案して高い伽羅をかうてやらるゝ、此心ざしうれし悲しく、一度も燒てはきかず、囉ひためて近所の香具やへやすく賣て、銀にしてしこだめ若衆の手づから十露盤はぢき、物際に肴やよびつけ、通ひの高じめがちがうたと、正眞の生男聲を出してにえかへられ、みづからかねかけてわたさ

る丶に、秤目せらるゝ程こそあれ、四拾弐匁弐分の內にて、壱匁五分五リンかるいとて、とられぬとはどうした事ぞ。六十弐匁小判にして金弐歩に、は銀そへてとられうよりは、銀の方がそなたの取徳といふ物ぢやといはるゝ。魚屋もにくさに、お若衆さまにはあんまりむごいはらひかた、お情でなければたちませぬ。むかひの太夫さまからも、百目參る所へつねに出入する物とあつて、小判弐兩つかはされ、過上は春通ひの頭につけ出しておくせと、やさしく大やう成せんさく。殊に內方はおなじみふかしとたしなませば、コレあの衆はまうけどりでのびる身代、こちとらは、なくとくはうといふ子共が五六人もあれば、大やうにしては間があはぬと、美しい顔をあかめていはるゝ所へ、井筒やから只今御出と、かごの者が申てくれば、いかにも行うが、子共衆はおればかりか。誰ぞ外にゆく衆が有かと尋られし。かゝる身にても自身子共衆といはるゝは、やさしきとやいはん。女郎にかやうの事を見きかず。天竺にては、男色を非道婬戒とていましめ給へば、根元道にあらず。蟻の唐渡りの道をかへて、今より女道門に改宗し給はゞ、永く窮屈成目をのがれ、痔の道のわづらひなく、情の道をよくしられん。をしいかな血氣のお上人達

第二　身揚りはくつわの方便品

付り届の文は顔見せの花の種

▲川原寺の日尾すゝみ出て曰、男色の至つて面白きは、年ゆきの若衆なり。高野六十那智八十といふ事をしらずや。汝等がたつとむ女道門の上品太夫職の心いきのつめたき、むごき所をいうてきかすべし。たとへば難波の色里にて、おくれをとられぬ名題大臣、いうた事の微塵ちがへぬ客には、たとへ作り倒れの百性のやうなる男にも、こなたよりなづみたるふりして、指切爪をはなしてやる事、見聞人の手前も恥ずやうはする事なり。惣じて傾城遊女は、形をつくり、容色を事とすれば、男の方よりなづむは斷に過たり。然るになんぞ、色なき生男、老年の禪門に何のおもはくがありて、美形の女の方より、指爪を放しやるべし。是僞りの第一也。男色には妾の艶なる少人を見て思ひこがれて、腕を引指を切など、武士町人の中に多き事なから、表だちてしれねば、しらぬものもあるべし。すでに三个の津の芝居にて思ひの切なるまゝに舞臺へかけあがり、指を切て思ふ若衆につか

はせし事、あまねく人のしれる事なり。是はその艶なる容に愛て、心ざしをあらはす眞の至極なり。いかに商賣なればとて、菊石にて引つりひつはつたる男の、生れて終に歯枝さへつかはぬ、ぶたしなみ成大臣、きんか頭にて、闇の夜にも挑灯のいらぬやうな法躰仁などに、どこがほれ所ありて、指切爪髪をきりてはやる事ぞ。かやうの事をして、人を誑してとらうよりは、捨身の行腕香など燒て、我身に疵を付て歩行人行に成共なつて、錢をむさぼらば、せめては後世の助共成べし。まだそれよりもきついは、其女郎に執心かけ、命にかへてさま〴〵の才覺して、かり調て銀つかふ男を、いかに根のとけんがしれたとて、そこ〴〵にあしらひ、首尾する　一世一代の事のやうに思うて　男、今晩は十八日、何とぞふられず首尾いたしますやうにと念願、觀音經を一巻よみしまへど、身拵に隙を入、上する女共申太夫様、少しの程　御機嫌よう、　下されませいと、七八度もいへど、きかぬ顔して寢てもあんじらるゝ、きのふきいた謎を思ひだして、なんのかのそれの是のというて見て、はてしなく隙をとれば、男待兼て目覺しにのむ煙草、火皿もたちまち湯となるばかり、ひとり物思ふ此くるしみ、ひとつは罪にもなりさうなもの、初對面から自由になるかこひがましぢやもの、よしなき太夫にほれだし、せめては一代の咄しの種にもと思ひ、謀反をおこし此迷惑さ。たとへふられても跡引て、此裏を仕懸る身代の器量があれば、此道の一景なり。二割半にまはる借銀の内を、戀なればこそすてけるに、親の讓を請取おもふまゝの大臣と、貧なる我等と同じ事に思はるゝはむごしと、内證はいはれず、障子越に様子をきけば、宿の内儀が聲して、ちつと　、お行水なされまして、生漬の茄子に醬油かけて、おめしまゐつてかへらしやれませいといふ。それから立　、事は思ひもよらず、そこへ横になられたばかりが六十目が所。男おづ〴〵詞かけても、慇懃なる返事に取付所なく、思　。終に男の足をもたされた事がない。塩湯でもまして參りませうと、いひ立に出行、それより兎もおこさず、お客お立なされませいのこゑ〴〵。寢てもゐられず、起て人並に手水つかひ、自然の用にも立べきかと、ときかけて置た　、衣紋をつくりながら、つく〴〵算用して見るに、一時が弐拾

目づゝにあたるぞかし。三番太鞁迄遊びてから、つもりの有事なり。四座の棧敷を金壹枚、是は大勢の中間借りもなる物、今夜ほど高い物に當る事はあらじと、無常を觀ずる大臣、宵よりいふ事みぢん僞りなく、お情に預りたがりて　大事の日を欠爰に來り、利くひの銀を出してなげく男を、末がしれてある客ぢやと、かゝるむごきしわざ、女郎といふにはあらで夜叉なり。是が情の眞實のといふやうな段へ、ゆきとゞく事にはあらず。　くらべては、紙子のふんどしと、縮緬の頭巾ほどなちがひ。難波の戸川早之丞は、勤子なれ共同じ役者に念友ありて、此兄分が仕過しのたゝまり、大晦日に一度におこつて來て、借錢ゆゑに一命すつる眼色を見て、念者の命をたすけんため、初狂言の舞臺衣裳、其外の道具迄質において兄分の難義をすくひ、其身は正月二日の朝、衣裳なくて、しばゐのつとまらぬ事を思ひやり、念友の役者の方へ一筆をのこし、あへなく自害してはてぬ。しかも此兄分末の役者にして、我を引まはす程の爲になる男にもあらぬにかゝる志、女宗の方にはけがにもあるまい。但し勤の身をすてゝ、男をたすけし例やある。日比勿躰つけて墨も禿にすらせ、奉書も引舟に持せおいて、ありべかゝりの文章さら〳〵とかいてつき出し、太鞁女郎に封じさせて、上書ざつとしてやるわろが、盆正月節句などいふ大紋日の仕てのない時は、小隅へよりて手づから墨も濃すり、奉書五枚ほどに、三嶋暦ほどこまかう、いとしいの思ふの、忘れぬの命はそなた様へまかせておく身などゝ、二三百もかいて、不繁昌の芝居の紙札くばるやうに、心當りの客共へ賃出して、足の達者な男共を、五六人もやとうて方方へくばらるゝ。それも馴染を重ねし大臣達へやらるれば、まだしもなり、田舍の初のぼり、請取普請銀山の中間遊び客十人の中へよばれ、ふり鬮にあたつてあはれた男迄に、今に〳〵御うつりわすれまゐらせず思ひ出し、御なつかしさ神ぞ〳〵をかきちらして、紋日をくゝりつけに配符を廻すやうに、毎日五六十の届の文。是でも仕手のにぶい時は、先からこのみもせぬに、おし付て二世迄契約の誓紙をかいて、、血判してくばらるときいたが、今の世では中〳〵くふまい事と存る。いふではないが、藝子の方に先紋日の役日のとさだめて、銀を取こむ欲な穿鑿みぢんもなく、身あがりとやらいうて、我からだを我金出

して、かはるゝやうなむさいいきは、あかつきの夢にもない事、我宗旨にこんな事があらばいうて見られよ。おそらくない事と座を打てのべらるれば▲計案和尚ふき出し給ひ 女道門には、戸川がやう成心中は、埒の掃溜のごもくよりは多き事なり。男色方には早之丞より外になきゆゑに、いかう稀なるやうに嚴しういはるゝこそをかしけれ。又紋日前に、届の文を客の方へやるとのあざけり、それは若道にも顔見せ前に俄に情ふかく、かなはぬ手にて、べん／＼と長き文章をかいてやらるゝ。無筆の若衆は、杉原一枚の書ちん壹分づゝ出して、親方とても他人の事。末迄居どほし候身にもあらねば、なにはにつけて便なく思ひまゐらせ候へば、諸事其方様を、憚ながら血をわけし兄さまと心便りに仕り候へば、いつ迄も御見すてなく、御念比たのみあげ参らせ候と、我より五ッも年の若い息子共へぬらしの文躰、そばできくさへ顔火がたかる事ぞかし。其上身あがりとて、我身を買ふとの悪口。是は同じ女郎共の威勢くらべにて、宿にゐられぬやうに、前／＼より仕なし置たるは、かやうの時の爲にもと、不斷客をそまつにさせまじき、くつわの方便にて欲にはあらず。たゞ身あがりより、そつちの宗旨の野州達、まうけた金出しあげらるゝげな。愛を以て役者立聞には、後をしろなし、前をはごくむと評したぞ。我身をかう



て外聞をつくろふと、我身を賣てかくし事をするとは、いづれかまさり、いづれかおとる、よく觀念をして見らるべし。されば高利の銀をかり、太夫にあうて床に入を、末のとげぬ大臣とてふりつけるは、むごく情なきとのいひぶん、其方達が眼のつけ所があしきゆゑに、むごくおもはるゝはよわり也。男女共に我にほれらるゝと思へば、其人を見ね共にくからぬ物なり。增て大切なる金を出し、隙をかいてその太夫をと、名をさしてあはるゝ男を、何しにむごうすべきや。利を出して我にあはんとて、銀の才覺せらるゝ、貧なる客に情ぶかうあひなば、身上のつぶるゝもわきまへず、急に通ひて目の前に、手と身にならるゝ所をいとしうおもひ、是程に思ひおもうて來る男を、さりとは胴欲なと、一度にて思ひきらせ、重ねてかよはれぬやうにするは、其男の身上急につぶれん事をいとひて、つらくあたるなれば、是至極の情なり。野州は我が心にあはぬ大臣か、又は鼻の高い坊主客かには、

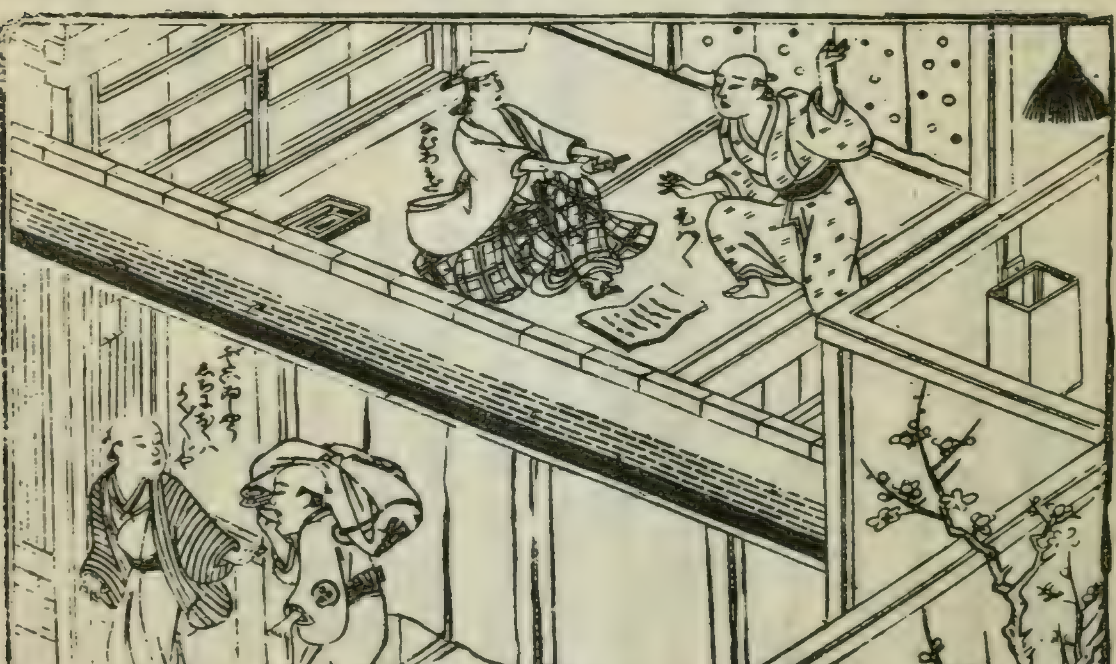
、

、ひたのぼせにのぼさるゝよし、是をむごい共情なしともいふべし。

、

ある時斷をいうて遠慮す。是は斷をいふもよし、きくもよし、たゞ向後は

をおこなはるゝ事遠慮あるべし。戀にもあらず、情にもあらず、客を欺くといふ物なり。女郎にはかゝ



る事けし程もなし。ふるとは各別の思はくちがひ、對する事にあらずとあれば▲南江院道頓くつ〳〵と笑ひて女郎の物にならぬといふ客をふる事、其人の身上をいとひ、わざとむごくしなすは、情の至極といはるゝ段甚心得がたし。誠に其男の身をいとふならば、心よくあうて、かさねてあはぬいひまはしいか程も有べし。それにせつかく金銀を出し、それ一種をたのしみに來る人を、よい事させずにかへすといふは、鵜に魚をとらせて、喉をしめてはかするどし。眞實に身上をいとひふつてあはれぬ心ならば、其日のあげ錢を太夫から、客の方へまどうてかへさるれば、實共情共いふべし。あげ錢をとつてそれ一種の床を、不首尾にせらるゝは、代銀取て賣物をわたさぬにひとし。情にはあらで横道なり。されば

にもせよ、其事をとゝのへ、　かへすは情なり。殊に法師の身は、其事稀にして、今宵を千夜の心地、西王母が桃を賞翫するやうに思はるゝを、　別れをなすは、切なる心ざしとしらるべし。價ひを取て我まゝをはたらくと、　にもせよ、お情にあづかりしと思うて、よろこばせてかへすとは、いづれが情ぞや、分別して見らるべし。女郎の方にはかゝる事なしとは、　の事か。然らばおろか成いひぶんかな。女は其道心よければ、好む所成ゆゑに、　のせんぎはのけておいて、次而にお供の衆もあらば、御一所に奥へお通りなされといふおとし穴と、　物をひとつ口には、分和尚ともいはるる計案には、ぶすゐかな〳〵

第三　異香薫ずる女郎の内懐

付り　血脈かけて心中の指切

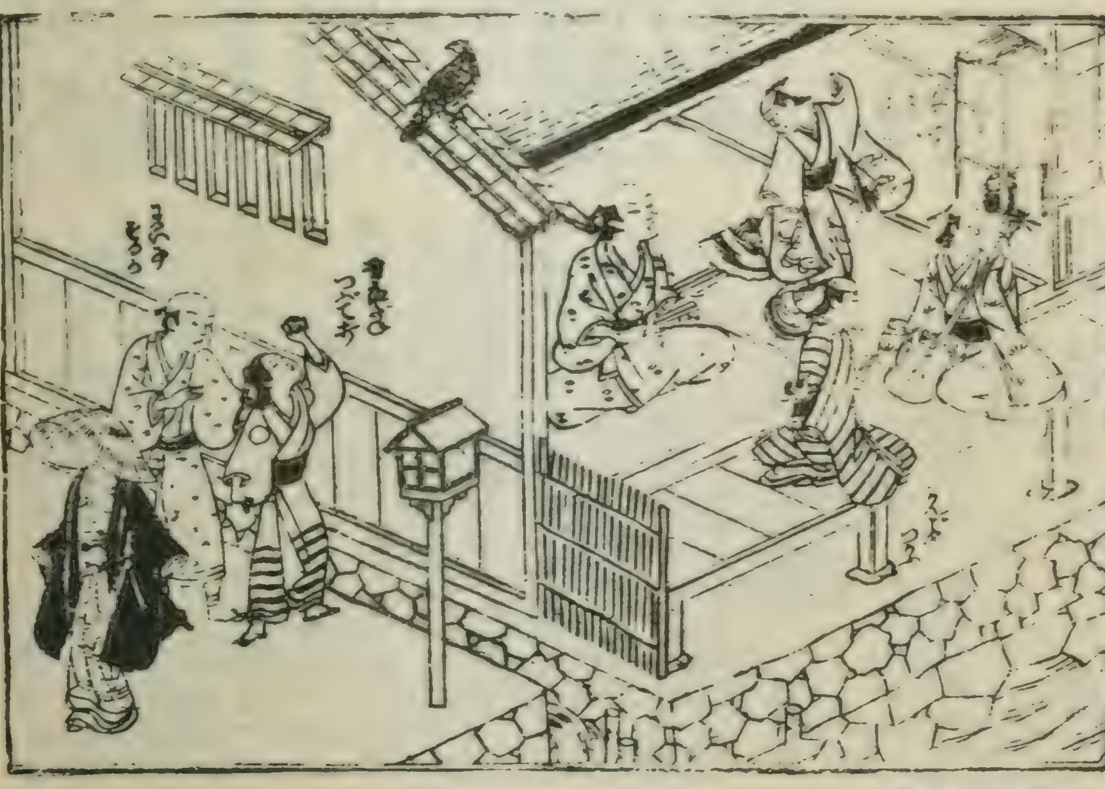
▲大分院計案のたまはく元來女郎と野郎は、凡夫の生立の仕入からちがうた物なり。先女郎禿の時は、姉女郎につけて、歴々の大臣、至り末社共が座敷ぶりを見せ、十炷香哥がるた茶の湯、又は哥の讀方をしへさせ、琴三味線を引ならはせ、万花車事のぶんは銀にあかせてもみこみ、手は太夫職の中の能筆を手本にさせ、をさなき時より、大奉書を用捨なく書よごさし、不斷行義づよくそだつるゆゑに、かりにもあがり膳に氣をうつさず、夜ふけてもゐねむる顔を見せず、物見見物に人をつけてつかはし、町の女中のよい風を見せて、立居はしたなくぞんざいに身をもたさず、憚ながら

上つかたの御息女よりは、大事にかけて養育するゆゑ、太夫になりてもせちにあらずして、大やうに勿躰ありて心いやしからず。野郎の下地は是に引かへて、をさなき時は木綿の古布子きせ、諸職人の弟子よりはいやしくつかひなし、酢醤油とうふ、一文が糊、三文が芥子迄を買に歩行かせ、其片手には子守をさせ、薪の小割味噌つく迄に、杵を持せてあらくつかひ、透があれば釜の前にて、火箸で灰手習、ねぶたく思ひ參らせゆ、かしくをかしくかきちらし、瘡頭にそろ〳〵油をつけて、月代なしに二ツをりの髪の曲、おくれをぬきそろへて耳せゝの垢をおとし、すこし見よげになれば、其家の太夫分の樂や入の供をさせ、昼食の弁當さげて、このなぶしをうたひ、戀も衆道もわきまへず、犬をけしかけ、犬やねにとまる鳶烏に礫をうち、廿日鼠をとらへて、ちひさい錢箱に綿切敷て入おき、是にうつゝをぬかしぬ。それより少し大キになれば、子守小買物の苦患をのがれ、三味線を引ならひ、十六番の扇の手、目の舞ほど稽古して、若衆らしく成と、學問僧の初のぼり、伊勢講中間の出し合の座にまねかれ、其時ゝのはやり小哥、扨は扇引手がへし　　、若き客を相手に追かけ狂ひ、扨はむかし　　、宿〳〵の化物咄し。夜食過る　　ほき雪隱　　、　　、しばやの二瀬が屏風立るを見ると、座敷とらくして罷出、女郎とちがうて伽羅とめると云事もなく、　　習の通り　　、出るよりはやう又雪隱へかけゆき、手水つかうて座につき、あうた客に盃さしずてにしておかへり。明ると届の文とて、場のせばき杉原にあて字まじりの文躰、馴て見るほどそだちがらにて、ひすう賤しき事ばかり。是も若衆の科にあらず、抱親の抑からの、そだてあしきからなれば、女郎とは大キにたちがちがうてある事、今さらいふが管なれども、女道門の有がたきをしらず、衆道門になづみゐるが不便さに、說てきかすぞ。されば野郎に能筆は稀也。女郎は下品下劣の局菩薩迄、筆のあゆみのあしきはなし。結縁の爲女郎の書ずてを拜ませう。ちと太夫分の舞臺子達へ、いたゞかせておきやれとあれば▲日尻大キにせきこたへていはく我門にてほえぬ犬なし。不斷女道門にまぶれ、是より有がたき事はないと、外をしらぬから、女宗を力にして長ぼえをする。誠に井の中の蛙和尚とは汝が事ぞ。女郎には能筆があれ共、藝子にはなきとのさげしみ、是が一ぺんに物を極

むる、外見ずといふ了簡よ。今世間かしこく成て、だまさるゝ浮氣大臣なく、きのふ迄肩で風きつた歴々の太夫どの、けふのさびしさ、かきつかふ所もなく、庚申の夜も内に居て、親方の當言いふも、聞猿のひそもんだやう成顔付、まじ〳〵としてうご〳〵と成次第にくらし、油火も費と、くらがりに追こまれて、せんじ茶の呑たきにも遠慮して、聲ひくに下女をよんで、ぬるうても大事ない、一ッくんで下されと、下々にも結構に詞つかひて、此隙の中せう事なさの手ならひ、おのづから筆數かさなり、能書と成は本意ならず。野州は机にかゝり、物半日打かたぶいて書てゐる隙がない。昼は芝居の藝をつとめ、夜はそれ〳〵の智音御出おそしと待かけぬれば、宿に若衆の尻のすわる間なく、まだ其間に替りめのいひあはせ、長口上、しあひをどりの稽古、此中にもようは奇特に、假名文の一ッよめる程にはかゝるゝ事ぞと、心ある人は稱美こそすれ、汝等がやうにそしるはない。女郎共も藝子ほどの役めあらば、あたゝかにいろは字もうごきはせまい。すでに女は神代此かた、縫針の仕事するがさだまりぢや。それに手のきかぬは、わづかの勤する隙がないから、ふくろび一ッぬふ事がならず。それゆゑ請出され、人の妻と成てはずがあはず、大形は針手のきかぬ槌の子は、遣手に成てはつるも多し。又若衆は伽羅とめぬとの事、是も女はわるくさい生れつきの、ぎらかさんが爲なり。有がたきは、みぢんないゆゑに、伽羅の力はたのまぬ、天性持た美少人の香、梅花のにほひもおよばず。其上幼少より、兄弟子の太夫達に、つらくあてられた事なく、情を以てなづけぬれば、假にも古郷をしのばず、正眞の無念無想にして、何の罪なし。ようそだつと自慢いはるゝ禿は、姉女郎納戸食をたべ過られ座敷へ出て取はづし、禿をねめつけ、人中でぶ仕付な、どうした不行義な事ぞと、煙管にてどがなくたゝかれ、へはおひながらいたいめする事、度〳〵なりとかや。殊にをさなくして、太夫がいたづらの使をし、間夫とのやりくり、よからぬ行義を見ならひ、金出す客をそりやくにするのみか、隙な日は傍輩打より煙管くはへながら、めん〳〵があふ大臣の文を、寄合よみにそしるをきくに、是皆見て笑や。おれを請いだす談合をすると、誠らしうかいたではないか、ほんに室町のたはけがあぢをやるぞ。此節句を勤た

金も、我居宅を質に入て、弐貫目かりた内からするなりをして、ふとい事をいうてありかす。内の女房は片足みぢかいげなが、五十兩の敷金にほげて持て、その上りんきぶかいに迷惑するとや。いやはや、いた顔付をして見すれば、俄に鬢先の白髪をぬいて、紅のかくし裏がいやぢやまで、迚も根のつゞかぬ男、急にやいて此盃をくゝりつけ、はやう勝負見せて片付けてしまはう。そなたの此比髮切てやりやつた、先のぬく助は、なんぞはずんだ事したか。氣の毒は帷子時分で、くれるわろの勝手にはよからうが、もらひての方には損な時分ぢや。晒五疋でからが高のしれた事、同じ手間なら、お性根でおこせばよいがの。こちも四条ののらに爪はなしてやつて、小判の五兩もしこだめねば、呉服やの庄兵衛が絆縮緬の代のわけがたゝぬ。來月迄は澤山につかはうと思うてゐた延の紙を此中替る〳〵借りに越す客が多さに、大かたつかひすてた。いづれ女郎のかし借りは、いひ合て中間法度にしたきもの。旦那どのはかまはれぬ事、こちらが身にして、十年つとむる中の損は、何程かつもりがたし。鼻紙やの事思ひ出す度に、かして只の事つらく思へり。横をきらしたとて、今時の大臣うなつた事もせぬもの、せめて紙代取てかしたい物と、此影口のむさゝ、きたなさ、男色の方に横などきらすといふ事なし。いかに其身賣物なればとて、其日あふ客は、かりにも一日の夫なり。それにかりにくればとて、　跡を當日の大臣へそなゆるといふは、非道成せんさく。若衆にもかすといふ事はあれど、盃斗にして、いか程ふかい念比の客にても、手もろくににぎらす事にあらず。殊さら指切爪をはなしうるはしき髪を切てやりて、男をのぼらすこはい仕掛はなき事。是をそつちの宗旨にては、心中といふげな。是は最前もいふ通り、切賣といふもの、間夫さへせく親方が、抱の女郎のそろうた指が、なかつたり、五ッの爪がはなしてあつたり、女のかざりの髪が切てあるなど、知らぬ顔はしてゐぬ筈。是も內證をきけば、爲に成ゐんつうありの大臣、口舌してのがるゝ時、誓紙血文は前〳〵より書てやつて、どうも此客とりとめやうのない時、此度はいたい事ながら、此大臣取はなしては、明日から淋しうなるが悲しさに、指一本切て心中だてをして見せねばならぬ場の時、親方夫婦姉女郎やり手迄よせて、此段〻をこまかにはなし、手管男間夫などには、夢〳〵

切てやるにはあらずと、親方へ誓紙書てやつて、惣寄合の談合の上で、いかさま此大臣がのいたらば、めつきらと淋しう成べし。どうぞ細小刀で爪を薄うへいでやつて、とめられうならばとめて見るべし。それでものくにきはまらば、是非に及ばぬ、共內用にたゝぬ指を切てやるべしと、僉議の上で切ん指に、血脉袋をかけさせ、不斷出入の醫者をよびよせ、氣付などの用意をたのみ、味噌汁こしらへて初産するやうに、万の支度こしらへおき、目をふさいで切てのち、香箱に入てやるよし。かうして切ておこせし指を、心中ぢやと悦ぶ大臣は、いづれ鼻の下がながうはあるぞ。こんな大臣は男色の方には、薬にせうというてもなし。第一藝子には、こしらへて客をはめるといふ方便なく、いづれにあうても念比に女在なく思ひ、情に重い輕いといふ、惡がしこき手管をしらずといへば▲嶋源寺の朱雀上人面色かはつて答て曰何野州には手管なしとや。すでに金剛としめしあはせ、客おもしろく遊びてゐらるゝ座敷を見合せ、夜食過るとお迎に參りましたと、たてせがみに催促すれば、今しばらくと名殘をしがるを、是から脇へのお約束あれば、是非只今おたちあそばせとすげなく申を、さりとは氣の毒爰より今から參る先は、田舍の初のぼりの手あらき出家衆、お出入の衣屋の親父をつれて、わしが顏ばかり夜のあくる迄、ながめてゐらるゝ此くるし



さ、ほんに覺えて壽命がちゞまるやうな。かうした睟な座敷にゐてこそ、つらい勤の中も、せめてものたのしみなれど、狂言にうれひあてつけてゐる物師なれば、調子びくに下音で、さながら悲しさうなる聲いろ、大臣の胸にひしとこたへ、太鞁持の役者にさゝやき、先の約束を何とぞ若い者がはたらきで、へんがへし二ッ詰にして、爰にとめ舟の碇をおろして遊びたいと、內證をいはせば、どうもならぬ事ながら、旦那の仰おもければ、一働きはたらいて見ませうと立かへり、暫して又參り、中〱先さまに御腹立あそばせしを、色〱と手練をつかひ、首尾ようへんがへ仕りて參りました。仮令先のお客、旦那ほどにぞんぜねばこそ仕廻せて參れ、今兩の手のやうに存る大臣樣なれば、今宵のやうなしがくは、いかう私めが氣骨が折ますと、鬼の首も取たやう成いきほひ。とかく汝でなければかゝる時の役にはたゝず。今夜の太儀賃と、盃にそへて壹角給はり、それから末は何座につめうもしれず。是は手管にあらずや。此類の手くだ事、何程か古き男色の書物に出ぬ。私にいふ事ならず、疑しくは證本を出して見すべきと、席を打ての〻しれば

▲南江院おつ取て曰 たとへ男色の方に、手管あるといふにもせよ、跡のつまらぬ僞りをいはず。たゞ女郎は欲と嘘とでかため、人をそこなふ宗旨なり。かたじけなくも若道は、意氣と情で立たる宗



門、僞りかざる女色とひとつ口には勿躰なし。第一衆道にかゝつて、身代仕失ふ人は稀也。是はふかく藝子になづみ、年を重ねてあふ中に、男色の花うつろひ、生男と成ゆゑに根をひかずして、異見なしにとまる事はやし。さるによつてこちの宗旨には、よい程といふ程がしれて、身をうつ事曾而なし。只女色はいつ迄も根ふかく、程のしれぬ宗門、親一門の異見でもやめぬは女郎狂ひ也。誠に傾城無間と、祖師上人の御書に、書殘されしも斷成かな、權化の名言

第四 女宗にあうて衆道門尻から閉口

付り分らしき野郎の替紋

調子に乘ても物は前方にいふべし。よくいひおふせんとて、かならず虎に角を書て、虎にならざるの類おほし。今衆道門の我法を稱美せんとて、却而失をつけたりと、計案和尚手を打て笑はるれば、日夙その故を尋らるゝ▲計案答て曰されば只今おの〳〵は男色にそみては家をつぶさず、異見を請ずしてほどを知て、早くとまるとの自稱腹筋をよる事也。それは衆道門に志て入て見れ共、ふかく有がたき所なきによつて、早く信心さめてとまるといふものなれば、是は若道衆の恥辱ぞかし。たゞつくしてもつくしあきなく、通ひても通ひとまられぬは、

有がたき所あるによつてなり。よしは僞りにもせよ、女の身として髪を切指をきつて、心底の眞をあかし、あまねく諸客を濟度し給ふ。我聞衆道門には、兄分腕をひき股をつき、或は指をきるなど、折ふしはある事とや。曾而若衆の方より心中とて、髪一筋ぬいてやられし事はなきよし。何を以て若衆の方の、心中のしるしとはするぞ不審。起請は何百枚かきても、あながち眞を見する心中とはいひがたし。但し兄分、又は大臣にもせよ、あはるゝ度どに、印籠紙入、金拵の脇指、扨は衣類の無心いはるゝが心中にや。若衆の指切しとは、弘法以來きかぬ事也。名をとる舞臺子ほど少年成は稀也。しかればをさなくして其わきまへなく、指をきられぬ共思はれず。とかく分別盛の年故に、若輩らしいと、おとなしき思案にてきられずや。然らば日剃の髭くひそらして、若輩らしう、客の内懐へははひられぬ筈也。何共此段心得がたしとあらば▲日夙答て曰少人に欲なし。欲なければ僞りかざり、人を誑かす巧なし。たゞ念比する人に身をまかすを眞とす。心に

眞あるゆゑに人の疑ひをしらず。女郎は內に僞りあるゆゑに、あふ男の疑はん事を知て、指爪をはなして眞と思はす作り物也。そのよしあしは、難波へかよふ都の商人、新町のさる太夫に二月ばかりの馴染を重ねし中に、指を切てこなたならでは我實に思ふ人はなしと、こまぐ\しき文をそへてこしぬれば、此男悅び、我宿の京にゐる空なくて、又大坂に下り船、伏見の乘合に一間かりて下りしに、同船の男おなじ京の者とて、心やすく物語して行しが、もの堅き咄しは根がつゞかず、氣をかへて京大坂の色咄し、いづくの者も馬があうて、今迄あくびしたる人〻、一所へこぞりよりて、鼻つきあはせて語りけるに、京の商人船中の人の風躰を見て、高が十五より上をかはぬ男共と見極め、大ひれに出て、世に高い物のわろきといふ事なし、勤女は實なく、僞りにて堅めたるやうに評判すれ共、太夫などゝいふ物は、月をかさねて念比すれば、一生つれそふ女房よりは實のあるもの。我旅なればこそかうした輕い姿でござれ、難波の宿屋へ參れば、新町通ひにばかり着て參る、當世仕立の小袖何程かこしらへおき、今宵つくと其儘着かへて、すぐに九軒へかきこませ、伽羅くさい懷へはひりて、けふ一日の窮屈なめにあうた草臥を取かへし、それから旅宿へかへらず、逗留中は九軒の吉田屋に、太夫と羽子板の繪を見るやうにしてたのしみて、いつも京へ歸ります。此太夫が實はひろき大坂の客にきらぬ指を、十三里へだてゝ居る拙者へ、物の見事に爪ぎはから切つてくれました。いづれもわたもちの太夫が、生指といふ物をごらうじた事はあるまい。緣にふれゝば稀な物ををがませますると、紙入より香箱出して船中の人〻にいたゞかし、乘相の中の大將、判官といふやうな顏して見すれば、弁慶ほど色の黑き男、香箱の金粉の紋所をちよつと見て、こなたは太夫の玉かづらにおあひなさるゝ大臣か。我等は河內の者でござるが、身共もその太夫に去年からあひまして、此正月を仕手やりしが、私ならで外へは切てやらぬと申て、是そのごとく香箱に入てくれてござると、腰に卷し打替から香箱を出せば、最前の大臣赤面して、弓矢八まん此男を一ぱいくはせたと、船底のぬける程、ぢだんだふみて腹を立るを、そばなる後世もつぱら願ひ時分の禪門袖をひいて、是あまり腹立めされな。おのぐ\は若い衆なれば、末に請らるゝといふ見込もあれば、切て

やるがにくうもござらぬ。見らるゝ通り半分あの世へふんごんで居る此禪門にどこに思ひ入がござるやら、跡の月御門跡様をおくりまして、大坂の御堂へ參り、逗留の中同行衆にさそはれ始て新町へ參り、死で閻魔の前で咄しの種にもと、老をうかして太夫を三人ようで、酒のうで遊ぶうちに、此度御堂の御普請に、わづかなれ共千兩指上ましたと、揚屋では似やはぬ咄しをふと致してござるが、それかな太夫の耳にとまり、よく〱殊勝に存ぜられたかつい指切て、是おの〱と同じ香箱に入てくれられましたと、珠數袋から紋付の香箱を出されけるにぞ、大かたならぬ肝をつぶしぬ。是さへ大キに我を折しに、後から慥に百性と石印うたぬばかりの男のびあがり、あり様達も指いたゞいた衆か。身共は是が高い物についてござる。それ故おの〱とはちがうて、君ならでたれにかきらん中指、爪をも血をもしる人ぞしると、自筆の添狀がそうてござれば、正眞にまぎれはござらぬが、女郎の指はおそろしい物でござる。切てはなれた指先の力で、持つたへた野山竹木迄かきよせられ、今は在所の住居もならず、京の姨が許へ合力請にのぼつたれど、中〱はげしい姨で、今迄打こんだ太夫に合力してもらへと、たたき出されて、又すご〱と津の國へ罷歸ると、合羽の烟草入より、香箱に自筆の一首取そへさし出し、物



はためし、在所へかへりて畠に此指を植て見たらば、蒔た種ぢや程にはえうかと存ると、その律氣さを見たて丶、かかる仕掛にあはれぬと、何氣もない乘合の男、手をた丶いて笑ひければ、指をかづきし四人の者共、ひとつ所へより合て、わづか十人斗の乘合の中にさへ、一人の太夫が指を一本づ丶かたげて四人あれば、四ッの指此連中の外、何程かいたゞいたもの有べし。然れば人間のゆびの惣高、どうつもつて見ても、一人前に十より外はない指、是はがてんがゆかぬと、とられて跡に氣がつき、四人船よりあがり、手を廻して此太夫の內證を聞しに、季指一本此前浮氣で、手管の男に切てやられ、それから其指の一本不足したをいひたてに、野墓其外ゆきだふれの死人の指を買廻し、すこし面長成大臣共へ、心中の遺物にせらる丶と、色里にかくす秘事をきいて我をばをりぬ。然れば女道門に自慢せらるる女郎の指切も、根をきいてからは有がたからず。すべて生得傾城のむごきといふ證據には、吉原の夕暮に四十あまりの地女房、髮はならずまげにして、うすよごれたる木綿布子、破れかかりし絹帶、古き高崎足袋に足をくろめ、三ッばかりの娘の子を年切女にだかせ、揚屋にたづね入て、ちとせ様といふ女郎に、少しお目にか丶りましたいと、ひそかにいふ。何事ぞと太夫立出られしに、彼女涙をこぼし　こなたの姿を見る



も恨ながら、思へば勤の身なれば科なし。はづかしながらいはねばすまず。そなたに鼻毛をよまるゝ、紙店の清九郎が妻子成が、こなた故に大ぶんの身代を皆になし、しかも今日は此娘が姉を、去屋敷方へ妾につかはし、道ならね共世渡りのたより共思ひしに、その取替銀を取て、はや昼から是へ参るよし。いかにながれの身にて、跡はかまひ給はぬとて、此始末の男に身を賣給ひては、後の世とてもおそろしき事ぞ。もはやよい程に取て、爰へ來ぬやうに、今迄のなじみがひには異見をして下されと、涙片手に語れば、太夫は笑止な顔もせず、されば遊女の身と成て、人の身代つぶさせ、又それ〳〵の内儀方の、執心恨をかまひましては、此勤がなる物でござるか。しかもこなたの御亭さまには、ふつ〳〵いやながら銀ゆゑの浮世と、跡は小哥で取あはねば、此女房うらめしさうに、顔をながめてかへりぬ。かゝるむごき女の心底、ふかく見る程おそろし。たゞくどけれど、男色ほど美なるもて遊びはなきに、女道といふ宗門にまよはされて、此妙なる所をしらず。若道のふかき事、和漢に共類友多し。悉くいひあらはすべきも物堅くなれば差置也。たゞ欲と嘘との女道をさつて、有がたき衆道門におもむけと、座を打てすゝめらるれば▲嶋源寺の朱雀上人頭をふつてのたまはくそれ程汝等が、いやしみきたなむ女道門を、何とて男色門の野郎に女のまなびをさせ、女形といふ一派を立てしぞ▲日尻答て曰女の躰をまなばせしは、男色の一宗いまだ廣く、ひろまらずして、女色にかたぶく人多ければ、是を我宗門におもむかせんため、當分歸依する女色の形を見せて、是より法に誘引せん、手がゝりの方便なり。さるによつていにしへは藝子町の女の風を似せ學びしに、今は町の女皆芝居の女形の風を似せ、帆の丸をはやらかし、宇源次染など名づけて、専女色より學びぬれば、男色の至つて有がたき所は、是を以て知るべし。されば世間の人口をいとひ給ふ、歴々のお寺方の大黒は、若衆髮に中剃して、男の聲づかひをならひ、大小をさして昼の内は、不斷下袴を着し、人の見ぬ所にて、小用をする迄心をづかひ、共まゝの美少人を似するぞかし。今よりしては口利の傾城共額ぎはに、紫帽子をあてゝ、鉄漿はがし、みがき砂にて歯を白くなし、脇指なしに廣袖の羽織を着て、おぼろ富士といふ、野郎笠の肩迄かゝるをかづき、八文字をやめて若衆の足どり、きつとした道中にて、壺煎の替りに赤

客をし、　　涅槃に入
べし。見よ〳〵今に茶屋風呂や迄、野
郎の身ぶりをうつし、男色一まい平等
に成べしといへば▲計案打笑て芝居の藝子
の風俗を似せて、さながら舞臺の出端
のやうに作りなすは、地女又は傾城の
せし事にはあらず。今汝等がいふ藝子
の風を似せるといふ女共は、近年巾着
山白人寺にしろとゝいふ新宗ヲ取た
て、ひろめはじめに氣をかへて、藝子の
粧ひをまなび、はした銀つかふ衆生を
すくひとるとこそ聞つるが、其外に女
色の中から、男色の宗躰をうつすとい
ふ事さらになしと、詞をはなつて申さ
るれば▲日尻重てその白人といふは女宗な
らずや。名目は白人といへ共內證は、
傾城遊女にまさるすれものゝよし。男
色の方に影子飛子下地とて、初心の者

はあれど、　　白人と
名づけし事なし。いはれはいかに。誠
に白人の名今きくがはじめなりと、あ
ざわらへば▲計案和尚又いはく白人の名は只今が
開始とや。しろとゝいふいはれをきか
んと思はゞ、外をもとめず、我男色の中
の藝子に問べし。今二个の津にあまね
く太夫子共、かくし女房又は妾にして、
事女色門をたつとみ、古來よりの役者
付にある紋所をやめ、皆白人の紋に付
替てありがたがる事汝しらずや。衆道
門此返答に能はず閉口す▲計案又曰白人は
野州の內佛、たつとみ尊敬する女色を
すつるか捨ざるかと、扇を以て扣とい
へども、猶擬儀す。其時判者婬乱居士
を始、滿座一同にどつと笑ひ、前髮を
切て男女の形をうしなひ、則女道門色
論に勝たるしるし、末の世までのこす
べしと、男色方の負たる者共の中間よ

り、揚屋の床入の間の板敷を楠にて
いたさせ、末代までも損ぜぬやうにこ
しらへさせぬ。まことに女色門はんじ
やうのうき世ぞときこえける

二之卷終

傾城禁短氣 三之巻目録

第一 巾着山白人寺に弘る新宗

付り 色茶屋の焔かいびやくの大事

武恵八 釈の果知るものハかぶ色人なり
お網をさゝまするとてもいふ粋も
但とわりせねばこの発明の流女郎
成仏ある事を記せり

第二 流義で立る色の法来る友の仏法

付り 粋ぞへ半分で我と身に知り

武恵八 をいかに女郎といふ同類様の
教のごとく恋を浮世に悟ぞろして
仕掛の海とあまた永く傾城の淵に
沈倫する所を記せり

第三 妻は仏の白人金色の光

付り 後のまけぬ塗師屋の手くだ

武恵八 天人の女妻とて金銀にもある女といふ
痛苦わい此身をまことぬけ出るまで
金の為浮気と貪りて此身の功者と成
肉徳の秘事を明せり

第四 情ふかい誓言の海よりふかき男

付り 無の闇に溺より座頭の思ひ

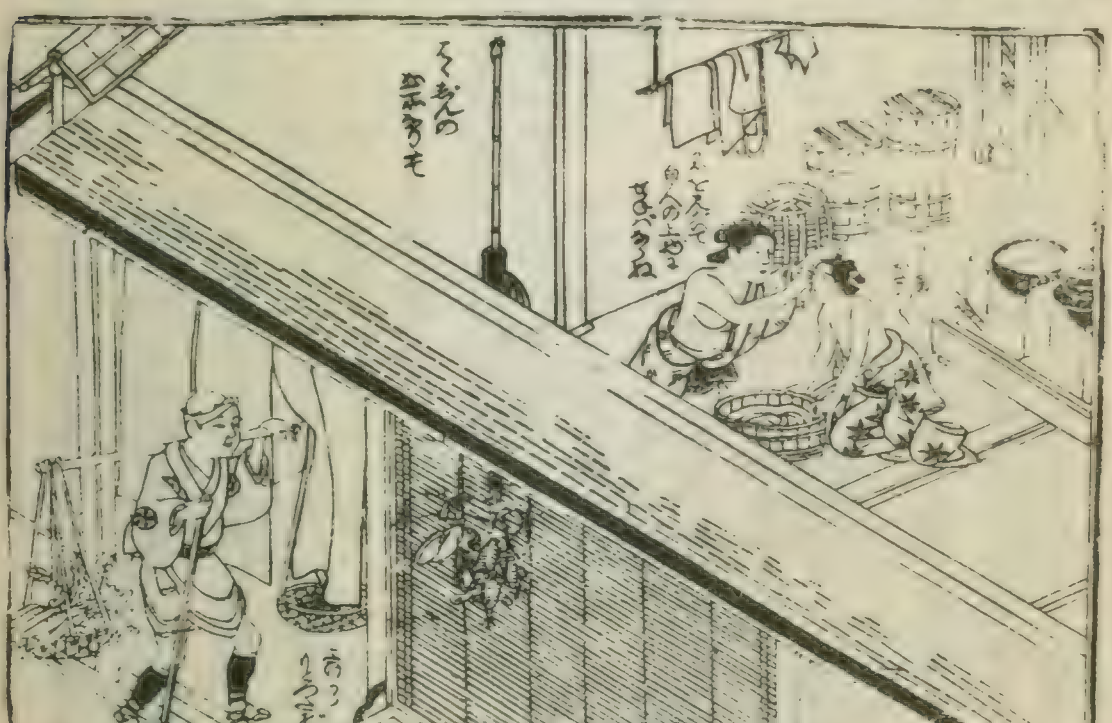
武恵八 九まの實子の男として女郎を
かゝる我と身上の思案と悲しがる
たとへ大名何様男を卒まるで女郎の
名あるといふ分を苦しみる事を記せり

第一　巾着山白人寺に弘むる新宗

付り色茶屋の娘開闢の大臣

抑當院巾着山白人寺と申は、陰嚢五十二代金玉天王の御宇に、空より唐皮の巾着まひさがり、天竺牢人の最愛の妻の懐に入より忽然として懐胎し、ほどなく一女をうめり。此娘むまれだちより品をやりて、たゞならぬ粧ひ、末に至つては色道一種を、あらたにひろむべき婬婦の美相ありと、新三本の木を切、土手をついて、此寺を建立せしに、はたして白人といふ新宗をひろめぬ。此一種傾城にもあらず、茶や女にしもあらぬ遊女の一躰。此土手の西筋にあたつて、大黒町鉾田町、袋町新町といへるあたりの裏借屋に、東の野作り、又は大根賣駕籠舁日雇取の娘、或はすこし顔だちのよき子の、父の極らぬ下女のいたづらからまうけてやり所なく、給銀の中から廿匁付て、親しらず子しらずの堅めにてもらひ、そだてあぐる共品をきくに、朝夕の烟もほそ〴〵としたる、黒木など取あつかはせては、きめにしみこみ、指のふつゝかになるをいとひて食はたかせず、大和豆の漬た小買しにはやらず、同じ年ばへの子共近所におほけれ共、物にせぬ鼻垂娘共とはあそばせず。第一ちひさき時から人に見しらるゝを遠慮して、十一二より外へ出さずせいたうして、せまき内にたゞもおかず、うそぐらき片影の、突上窓の鱗形したるあかりをうけて、矢はずにかけて眞綿ひかせ、髪は壱匁棹の羊羹見るやうに長き嶋田にゆひならはせ、爺が若い時小相撲取し晴にしたる、加賀の下帯の古きに、嗅が黒き帽子の切など綴りて、肌のよくなるためとて常に下着にさせ、布子もよごれぬをきせて、からこの糟は顔の色黒く成と、大角豆を粉にして吹出しの銀みがくごく、歯は白玄が匂ひみがきにていつとなう白く成、雪の夜も二親はさむきをいとはず、破し袷を着てねれ共、娘には古夜着させて、十五六に成を正月待やうにたのしみてそだてあげ、成人すると彼白人にしたてゝ出し、拵も貧家の娘、公界勤さすべき衣類なけれど、都の自由それ〴〵の請込屋有て、貸着物とてなんとやうな寸尺も、拵置てかす事なり。しかし是も始ては、貸着物屋の亭主來りて娘の器量を見て、白人に出してお人の合点するやうな生れつき、そだてがらにあらねばのみこまぬ事ぞかし。床の諸分は、いかにそれにしたつれればとて、母親の

口からをしへもならず、近所のそれになりきつて、功のいた娘をたのみ、又は相借屋の嚊が、相互とて、あんばい、男へのあいさつ、身振の品、其外あらまし唇そらしてしやべつてをしへ、新艘のげん、ゆかなどいひて、諸方の遊び宿へつかはし、物どあどなく初心に作りなしぬ。是白人一種開闢の時節の風義成しが、近年は初心風をすてゝ、あたまから晒たるしこなし、かなしいかなや、此道末世になりて白人といふ一種の名にそむき、黒人眸の風俗となれり。此一種をひろめはじめられし、元祖の法色にそむき、かくなりゆきしは、近世巾着といふ一色交りて、白人寺の色法みだれぬ。其巾着といふ一種の來由をくはしく尋奉るに、元は物縫腰本、中居などのいたづら成腎張の女共、奉公勤る中に、さまぐ〜叶はぬ急用のいひたてを拵へ、盆正月の藪入の外に、一夜がけのお隙をもらうて小宿ばいりをし、其家の手代、又は町内に勤る若いものと手筈を取おき、宵から爰にて出合、に、、末は夫婦にならうといふ、おもしろづくの契りにもあらず。一花浮氣の沙汰にして、一度〳〵にあふ花代といふ算用もさだめず、正月着物してもらふ若旦那もあれば、盆帷子の心當の手代もあり、櫛かうがい二布、抱帯の約束の親仁もあり。一年中の髷白粉つゞける知音、小遣銭くれる久三も男



つきにはかまはず、戀も情ものけて置て、取思案のみふかゝりしが、是も近年心當の手代仕過して、請人にあづけられ、盆帷子もちがへば、正月小そでの約束せし若旦那も、傾國の至つた所へ通ひ出して、こんな礒な色などに、詞かけるも外聞わろしと見むきもせねば、中〱物などしてやる段へはゆきとゞかず、あれも是もの心當共ばらりとちがひ、不斷あてにして買懸りせしつばめあはず、節季に難義してもらひためし小袖共を質に置て、是ではならぬと世智賢きお物師、問屋はすはの欲功者の入し、前のはげし古狐共が、小宿のお嬶と談合して、顔の出來に應じてをきはめ、銀壱兩三匁と相場をたてゝより、遊女のぞく男の數にあうて、てつきりこに銀を取て、小宿へ内引わたし、懐の巾着へをさめられしより、巾着と名づけぬ。されば此巾着へ銀をしこだめるは、在所のならぬ親〱の助にみつぐか、但宿ばひりの時分敷銀にして、よい所へよめいりする、兼而の心がけに、かく金銀をほしがるかと思へば、さうした實な欲にもあらず。出替りの中宿遊び、女ながら美食を好、肴やよびよせさま〱の料理させて、同じいたづら中間打よりて喰つくし、奉公の口はきかで歌舞妓芝居へかごでやらせ、當座拂のかり桟敷、見て歸りての役者なづみ、帆の丸抱蝶むかふ梅、丸に封じ文は喜世三さまと、無用の紋所をうつし、妾つく



るに一生夢の暮し。人にうかされて親の日をかまはず、兄弟の死日にもあそびかゝつてはゆかず、身はぞんざいに成て、たまかなる奉公いやに成て、二三日勤て精がつきたと小宿にかへりて、そのみち屋の名酒取よせ、德利切にのうで仕舞、横寢すると高鼾して、奥さまと御契約申、少しの間といひてかへりし時刻ちがへば、敷居高く歸りそゝくれ、儘よ此季は牢人してと、おのが心まかせに身を持、是より本間の奉公つとむる心はなくて、巾着をよい事にして、次第に顏の皮厚く成て小宿をはなれて、盆の時分は祇園八坂の踊にゆきて、鬢の厚い男をつり出し、煮賣茶屋へさそひ、大キなもめをつけてかへし、それからそろ〳〵目見えの妾ものゝ小詰に罷出、いつ共なしに白人中間へはひりて、よい所も見ぬなりしての晬顏。是正眞の惡晒といふしやれにて、歷々人のもて遊びに成物にあらず。元來白人寺建立の思ひ立は、世間に强手成大臣共、遊興よりは　つをたのしみと心がけ、勤する女は人の數にあたれば男にあきて、

○同じくはそれにこしらへぬ、地女の首尾するのがあらば、すこし花代むつかしからうと、望といひ出せし客共多く有しより、扨は店屋物でない、白人女を好事よと、此故に元祖白人寺をたてゝ、しろとといふ新宗をひろめ給ひぬ、然るに此古巾着共、勤女よりは繁く男數にあたり、黑人寺になす事淺ましきかな。此道の末になれるしるしと、此宗門に歸依する人々は、かなしみの涙に下帶のさがりをぬらし、猶手入ずの法をしたひ、懷子を尋られしに、誠に此道廣大無邊にして好所にしたがひ、衆生心信する共氣に應ずる法を說あらはして、導給ふぞ有がたし。爰に色茶屋の家々に、養子娘の手入ずをこしらへ、襟付の厚い上大臣に仕掛、亭主くわしやはしらぬ分にして、一家の山州情知顏にて、ひそかに取持手などにぎらせ、人なき所にては、口のおもはく迄はすませて、いまだ　を殘して娘も此大臣ならではと、深くなづみたる躰を見せかけ、透もがなと心がける有さま。いつぞの首尾には、とつてしめてと、しげく通ひていよ〳〵つのらせ、さあ客がもがきが來る最中ぞと見れば、年がまへ成色州、分別らしく申は、あのお子もおまへの事は、いとしげに影でもあしうはおぼしめさず、首尾もがなと年のゆかぬには、さま〴〵のかしこい心づかひ共、おるいさま共申て、さりとはおいとし

い、どうがなしてあはせましたいと、色〳〵思案して見れ共、花車さまは御存知の熊手性、旦那どのは此商賣には似やはぬ堅いお人で、中〳〵かくしてみだらな事など聞てはゐぬ、行義づよい片氣なれば、ひよつとした事耳へ入ては私共の難義よりは、第一おまへのお名の出る事、とかくはあかして花車さまに申まし、聞耳立らるゝ耳の穴を、小判で蓋する思案より外はなし。それも旦那どのゝ耳へ入ては、當座の事ならば、ほつてもならぬと、末々の落付のお仕形をきかれずば、迚も同心は參りますまい。さあれば大分お金の出る事、とにかく內義の片つらの耳を、五はいづゝでふさいでおき、きかぬ顏させて、ひそかにあはせらるゝ御分別ならでは、何ほど每夜お出なされても、本の首尾はとゝのひますまいと、微塵も笑はず眞顔に成て、實らしくおためづくを申時、何がのぼりつめては居る、娘はとかくさうして成共あなたに眞の契りをこめたい、どうぞそなた達情にたのむと、調子ひくめてうれひがゝりの身ぶり是が跡先の思案が成ものか、明日はえんぶの塵共なれ、十ぱいなどは風前の埃、よいやうにたのむと、耳ふさぎ代十兩、是がつのりて大金に成て、引ぬく衆もあるぞかし。今時の浮氣大臣ども、なるよねはをかしからず、たゞならぬ物をくひたがらるゝゆゑに、道行に物つかうて、あげ句に大分のはまりあり。それしやの色宿にかきらず、町の貧家の娘にかゝり、余所の男の種をかづき、或は筒持せにあうて、大分の金出しながら外聞をうしなふなど、皆かはつたる思ひつきより事おこれり。むかし〳〵有原の業平時代に、三十字一文字の哥をつらねて、欲しらぬ大內の女中がたをなびけられしとはちがひ、今時金づくでなる女色に、仕掛ものでなきはなし。やすい物には第一戀も情もなし。おなじ勤といひながら、太夫などには馴染かさねて、いきさへよければ、歷々の地女よりは、情ふかく眞あり。色道は遊興と心得給へ。眞實の情ぜんさくあると、深入するはしれた事なり。今の世には有德人の息女、深窓の中にやしなはれ、かりそめの物參りにも、乘物にのりて、奧からつき〳〵の女共にかき出され、下々にみぢん姿を見せ給はぬ娘たちにも、懷子の白人のといふは稀也。眞の男の分こそしられね、大形心が睟で氣がしやれて、昔の物せし娘よりは、今の懷子が功者なる時代に、男の中にまぶしておく下〳〵の女、待ては

ゐず、自然其中に、年たける迄りちぎに此道しらぬわろは地もちあげもならぬあはう成べし。それは容うつくしいとて戀してからが、蕎麦切に湯をかけて、くふにひとしかるべし

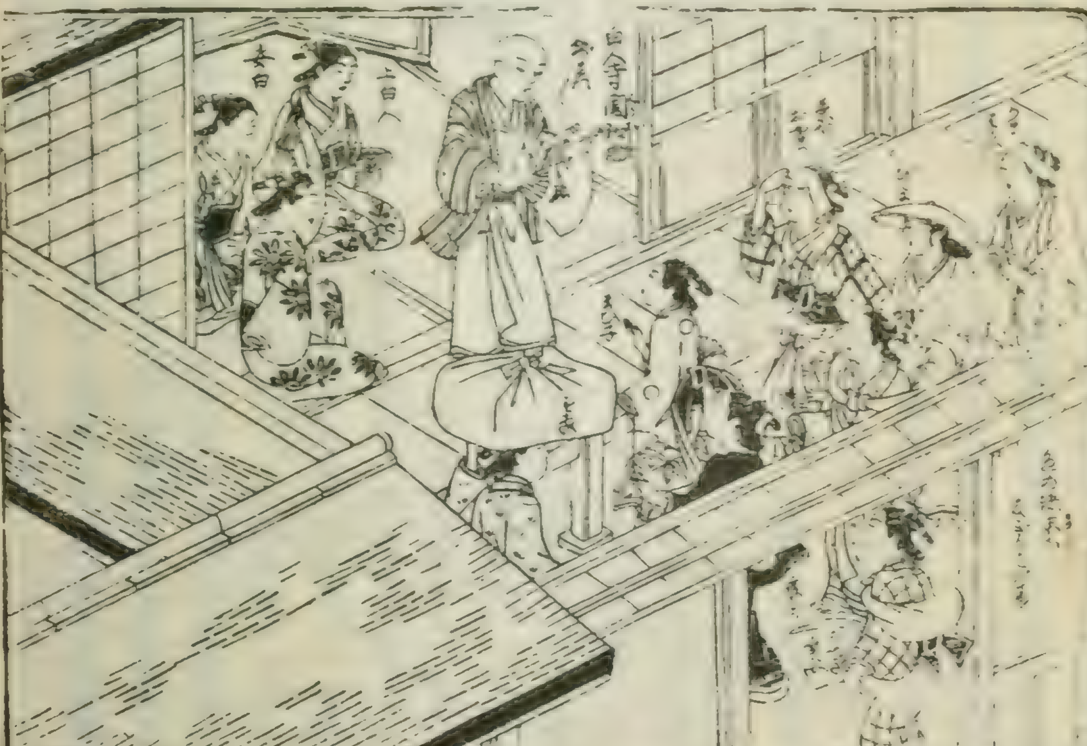
第二　流義を立る色の諸末寺友吟味

付り酔だては半分聞て我と手ばまり

近年白人寺の色法、元祖艶好大師の流義にそむき、黒人派を雑一種混乱すると聞て、三个の本色は申におよばず、諸國遠境橋〻、裏〻の小錢色遊の諸末寺、我先にと追〻に土手の白人寺に着せり。先都にては、祇園の八坂石垣穴奥藪の下、縄手清水五条坂、北野稲荷の茶屋をはじめ、扇や組屋綿帽子や、すあい女、鹿子ゆひ、舞子比丘尼竈秡、其外念仏講〻道心者、惣嫁夜發坊、ふんばりかへつて並居れば、他國の末寺、勢州古市中の地藏のあんにや寺、北國のしやくかんひやう、西國船の伽やらう、納屋の影の十錢寺、切死丹ついころびの、惣堂の夜鷹坊迄聞傳に馳登り、巾着山のしめ口迄つめかけ一種をみだし、白人といふ名号を、混雑せしむる、子細をきかんと聲〻にのゝしれば、白人寺の功頂和尚、日の本の事はさておき、一歳入唐までして唐瘡をゆるされ、勤一通りはくらからぬ闇和尚、ちつともさはがず、寺中の上白安白、出相者、仕懸者の名人共を連られ、静に本堂の床にあがつて申されけるは、我江口流のながれをくんで、元祖の法色を守り、白人一種の新色をたつる所に、黒人派をまじゆるとの咎、一向に初心なる事と思はるゝ。今時の衆生悪洒になりて、大形の事にてはすゝめがたし。此ゆゑに白人の新色に方便をくはへ、此道を磐昌させんとするのみ、さらに元祖の遺誡をそむくにあらず。此一種に不審あらば尋らるべし、速に其理を説てきかせん。又愚僧もおの〳〵の立派に心得ぬ事あれば、次而ながら尋といて、我胸中をはらさん。一種の頭分の流身の能化一人宛是に來りて問答あれと、大勢をしづめての給ひければ、寺内門前に群をなしたる諸山州共、尤と同じ、十四五年づゝも先を見ぬいて、四も五もくはぬ一種のすれもの一列にならび、互の惡をいひあひけるこそ聞事なれ。▲水邊茶屋上人問テ曰　白人といふは、專しろと風をして衆生をすゝむるにはあらずや。然るに風俗端手にして、道中天職鹿戀の品を似せ、傾城同前に近年正月買といふ事をはじめ、先元の三ケ日昼

夜の花代飯代、白人への祝義に銀五兩、しかも打の出る細がねにて、宿へ銀子五兩、下の者へ銀弐兩、それにかるた錢とて弐百文寳引錢とて百文、布袋屋のかるた代壱匁弐分、手鞠代七分五リン、羽子板代が壱匁と、さま〳〵のかゝり物を書立、大臣にもめをつける。是しろとゝいふべきや。諸色の本寺嶋原寺を學事そのいはれなし。是をそのまゝにして差おかば、紋日をこしらへて毎月いろ〳〵の物入かざみ、衆生一度に目をぬかして、たちまち此一種すたるべし。其上不斷も遊びをみじかうしかけ、　いそぎ、宿屋へ内證をふき込、來ぬ迎ひを來たといはせ、お暇乞の太鞁をはやめたがるは、はや又外へ賣つけ、一夜に二ッも三ッも座の數をかさね、花代十弐匁九分を三座かさねれば、一夜に天神の位より高くのぼる。大坂にては三切の惣高廿壱匁、是又鹿戀の上に立ば、本寺嶋原寺の歴〻の能化達のゆるしもなくて、九品の蓮の花代に高く至る心ざし、且は傾國をはゞからざる行跡、頗本意にそむけり。其上土手の中、宮川寺の邊、わづか壱町にたらぬ所にても、壱匁五分の駕籠代を取事、男色野州門の流義にして、女色門には紫衣色衣の太夫職にさへ甞て是なき行粧、皆以て元祖の掟に違せり。是にてもしろとゝいふ宗門にて有哉否。▲白人寺闇和尚ちうこたへて曰中古は衆生前方にして、勤の人數に當りたる女をしのばず、人なられぬ白人を好めり。是は其比の客共、黒人はこなしかねて、我自由に廻しよき初心者をすけり。此故に親の手前より外をしらぬ娘なれ共、牢人の世渡りなくて賣買となしに、ひそか成事なればとの事ゆゑしのびに是へまねきよせ、密〻にあはせまする。かならずお友達樣方へ、御噂は御無用と、眞らしう宿の嚊が申を實に請て、律氣に白人と合点いたし、此方から無心申さぬに、　細銀などくれられ、ほらな事の有しに、近い比よりは衆生眸に成て、中〳〵初心にしかけても、いかな〳〵請つけず。是ひとつまゐれ、のまぬとはしろうとらしい。かうした勤する衆の下戸と、念仏ぎらひな道心者とは、よび手がござらぬ。かうした公界なさるゝからは、酒參ると、笑はせらるゝと、　いやな顏なされぬが、商上手といふもの。慥こなたは大坂で見たやうに存るが、京むまれとは、跡の月からの事でござるかと、おしこなして白人顏をさせず。そこをこたへて其まゝ初心めけば、大事の銀を出しておの〳〵がたをよぶは、おもしろう酒

をのうてなぐさまうためばかりおや。種の望なれば、御から手入しておいた、內の噂が氣がはらいで、しかも眞あつて、皆の衆つやうに天井の板數よんでござるよりは、大分增な相手を手池にいたし置ぬれば、此邊へは參らぬ。花代お取なさるゝからは、其夜の客の氣にいるやうになされたがよいはず、どれよばうとまゝな世界、御不承ならばいんでもらひませうと、早よびかへる顏つき、せう事なさに白人めく風をやめて、自然と黑人な風になつてつとめて來りしは、此道のはやく絶ん事をなげき、京も大坂も粹がましうはなりゆきぬ。扨二ッ詰三ッ詰にせんために、座敷をいそぐはにくからぬ、內證上下の小袖帶脚布迄の貸代、一日一夜が十弐匁九分、火の雨がふりても出さねばならず、それに花代の內四匁宿へとられては、一座勤たぶんにては、まだ手前からそへてやらねばならず。是故に二座つとむれば、少し息がなり、三座つとむれば見事な身、いつとても秋の夜の長いにあきはない。爰は歷々の太夫衆も、紋日役日其外無心の種蒔に、寶て居ながら橫をきらせにゆかるゝ。本寺さへかくの行作あれば、末寺の色方にあるは斷と見ゆるし給へ。是は互爲といふもの、正月買は此方より極めたるにあらず。念比の客がたからお心ありてなさるれば、あながち定たる事でもなし。茶屋の宗旨から、白人寺へ改宗せらるゝ名女



達多し。おの／＼我等ごときも、其職に久しうあれば、氣がかはらでをかしからず。名をかへ所をかへて色／＼と化して、白人にて得道すべき者には、白人と化して客の爲に謀を說、茶屋呂州婆ものにて、得道の客には、其氣に應じてかへて見ねば、同じ顔しておなじ所に、幾久しう勤はならぬ物ぞかし。額の小さんは綿屋の勤、それから京へ上り、今神風をふかさるゝに、誰か古しといひ手もなく、難波入江のあしからぬ評判、とかく商見せは所を替ず古きがよし。勤女は所をかへて顔のあらたまるがよいには極れり。されば町方のむまれ子、やう／＼這ほどになりて物いひならふにも、大形がうば婆ゝなどゝいふに、色里の幼稚子共には、かりにも是をいはせず、姨／＼とのみいひならはせり。かりそめの事ながら氣を付るも尤なり。縄手は色茶屋と、常の商賣人と打交りの所なれば、髷屋の幼子が、むかひの茶屋に抱て行、年かくして細眉にふり袖着て、花をやつてゐらるゝお山州にむかうて、婆ゝ／＼といふは恥辱をあたへる道理、万事氣をつけねばならぬ。時代とて揚屋に鼻毛鑷をたしなまず、野郎宿に年穿鑿を用捨し、色茶屋に酒の醉の醒る藥をもたぬも斷ぞかし。大臣の醉をさましてはよびにやる無分別やみて、是には大キな損あるべし。今時の色宿の男女、巾／＼氣轉なくてはならず。今も云し額風呂の小さん勤



らるゝ門口へ、乞食來りてひだるい腹をたゝき、額の小さんはナアわたやの勤と、こゑおもしろくうたひしを、這出の男さしあひを氣の毒がりて、とほれといへどうたひやまねば、此男腹を立て、五十年も先にはやりし小哥を、あたらしさうにかしましい。とほりをれといひ放て、跡でひとり赤面せしも、氣がつき過て迷惑、いかに氣轉なればとて、藝子の居る町に、痔の療治の看板も、あんまりあてじまひとけうとがりぬ。ある時難波の遊人達、濱側の茶屋にゆきて、我々がしらぬ顏の、あたらしい白人共があらばよびよせよとて、指紙僉議して見し内に、朱鞘の小龜、名物のお石といふ二人、名を聞も今が始、是等を急によべとあれば、下男承り、御存知なきは斷、やう／＼此四五日以前から、此川なみにばつとお出、元は牢人衆の娘御達とやらと、はやしのばしく詞のこして、廻しが方へはしり行。ぐめんして立歸り、追付御出と申もあへぬに御兩人、昔衣裳のしつこい模樣の褄どりして、御來臨ありがたく、酒おもしろうのむうちに、篠塚が當り狂言、四十八人の敵討の咄しを仕出せば、名物のおいし、盃下において、涙ぐむこそくせ物なれ、一座の客共見とがめ、四十八人の噂聞て、落涙の躰は心得ずとふしんたつれば、私は此咄し聞たびに、とゝ樣の事が思ひ出され、悲しう成て包むとすれどこぼるゝ涙、一座の興をさますとは思ひながら、是計はゆるし給へと、猶々しきりになげきの躰、何れもお石といふ名に氣をつけ、人の行衞と水のながれはしれぬもの、若其四十八人の兵の衆のゆかりかと、根をおして尋れば、おいし涙をおさへ、いかにもよき御推量、其四十八人の衆中相果られてのち、大分の石塔出來、私親は其石細工名人にて、東の石屋から聞およびてよびに參りしを、細工の冥加にかなひしと、はる／＼の道を經て東へおもむき、いまだ武州へ下りつかれぬ内に、かりそめの煩ひ、次第におもりて、かなしやしらぬ國の土となられ、母ひとり過しかね、かうした勤の身とは成ぬと、さめ／＼とくどきぬ。是は大キな石ちがひと、なげきが客がたの興になりて、きかぬさきからはや合点して、手ばまりの大臣是にかぎらず、何程か多き世界と笑うてはたしぬ

第三　表向は仏の白人金
色の花代
付り　あとのはげぬ塗師屋が手管

▲呂州猿如上人間テ曰　白人巾着暗者出相者は、一

躰か別躰か。▲白人寺答テ曰別躰なり。白人は幼少より大名奉公を心がけて、二親主の子をそだつるごく大事にかけ、小哥三味線舞をしへ、立ふるまひ端手めかず、のつしりとゆたかな成風俗、顔色すぐれたるにはさのみ諸藝はもみこまず、器量中位の娘には、藝をいひたてにして、御奉公に出す合点なれば、舞子にかはらず仕入、度〳〵の目見えに縁遠く、顔をさらし、成人するにしたがひ、近所の若い者に目を付られて、ちひさき時から世話と金とを入し娘に、虫がつきさうにて、内にはおかれず、町家の歴〻へ、地道の奉公に出さんとすれば針手がきかず、文箱持て顔むき出して、町を歩行事もいやな事と、前〻より目見えしらせに來し、肝煎の嚊が爲づくいうて近所へ沙汰なしに、つい白人に化する事也。又巾着といふ

はいたづら奉公人のすりがらしにて、内儀のない若むす子、二番ばへの手代などに、此方からしかけて物をとり、半季滿足につとめず、家内をさわがし、いつとても出尻あらして數百軒も經めぐり、後はいひつぎ迄お出入の家のふさがるを恨、出替り時にも口つぐ者もなく、大かた人も見しりて奉公すべき行先せまくなり、牢人せねばならぬやうに成て、たゞもゐられず、いつともなしに暗宿へ立寄、巾着といふ癖者には成ぬ。暗者といふは奉公の心がけもなく、不斷小宿に見世出して、あたまから賣がつてんの女、物見遊山に入立のある所へは、風俗つくりて浮氣さうなる男を見かけては、歩行拍子、け、是にうかれて男詞をかくれば、こはさう成風をして、行を、

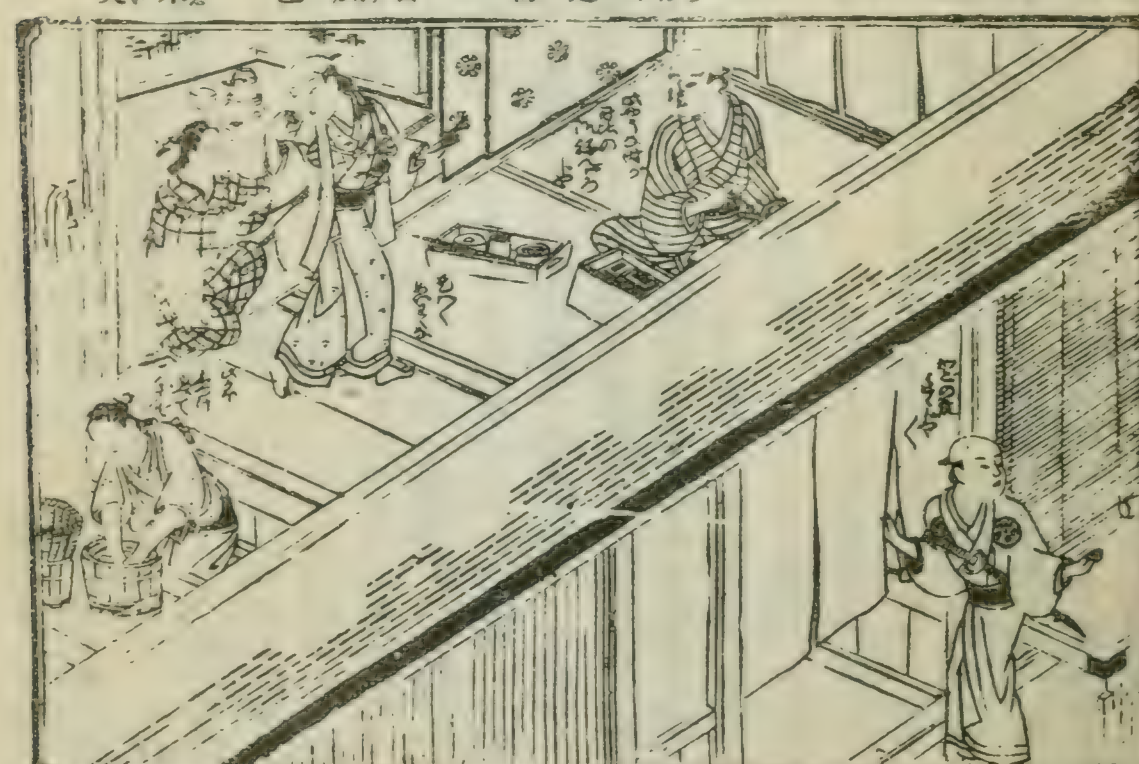
是は釣さうな物とそろ〳〵ついてゆきて、其身のつらる丶事はしらず。我等がいひまはしでは、てんと白癩、いかな女もつらぬといふ事ないと、いはぬ斗の顔つき、是をつなにして度〳〵あうて、大きにしてやる女なり。居者といふも一躰、仕掛者共いふぞかし。扨出相者といふは、奉公してゐる先〻の傍輩の手代など丶約束し、欲をはなれて末〳〵の宿ばひりの時、一所につれてと互に夫婦の契約、みぢん外の傍輩には手もにぎらせぬかためにて、盆正月の小袖帷子、其外小遣銀迄もらうて、人目をしのび宿を極めて、ひそかにあふを出相ものといへり。是も一人はまぶつてゐぬ事ながら、巾着のやうにあらはして、男數にあうて、錢とる女にはあらず。すべて此類にかぎらず、今時の扇屋の折手、すあひ綿つみ、糸屋鹿子

結等、皆白人寺の末寺ともいふべし。是等は爾前の賣女とて、本色の遊女の座にはならべがたし。自今以後此類女は、當寺の末寺たるべしとあれば、▲扇糸綿鹿の歡女嗔て曰我々を白人寺の末となし、しかも爾前の賣女といひて、本色にあらぬといふはいかん▲白人寺答て曰たとへば、辻立の藥賣、兵法物まね曲手鞠、さま〴〵の藝をそへにして、藥を賣に同じう、色をそへて商をし、表向はまんざら白人めきたる仕出しにて、遠國の侍町人の歷々、遊山作病の逗留の、借座敷を心がけ、目にたゝぬ色つくりて、相手次第の御きげんをとりて、浮氣を見すまし、酒の友となりて醉にもてなし、九夕五分の抱帶一筋、十八夕に賣も買人も其合点づく、お國へおかへりの餉は置土産とて、壱歩の二切ももらふ事、

此一軒にもあらず、川原町樵木町、智恩院の門前町三条の宿屋町、毎日五軒七軒賣廻りて、手をしめ口のおもはく、又は早業の首尾、旦那どのへ取いらんとては、賄人にそへてやつて悦ばせ、ほらなる商する事も、色といふ添物があるゆゑなり。此色粹らしく、しやれ仕立にては、買手の旦那あたまからこはがつて取つかず。さるによつて隨分田舍衆にあふやうに、白人めいて大口いはれては上氣して見せ、手を握れば隣へきこえぬ程に聲をたてゝ初心なる仕掛、是白人の躰相を第一に學ぶにあらずや。然る



時は我寺の末寺にせんといふも、いはれなきにあらず。又爾前の賣女とて、本色にあらずといふはすべて勤をする女、鳥屋をせざる中は、本色の遊女とせず、いづくの色商賣する方に抱ゆるにも給金やすし。鳥屋をしまうたる女は本色の遊女とて、給金高く出し、召抱て重寶しぬ。さるによつて鳥屋せぬ女は、爾前の賣女とて遊女の中へはいれず。鳥屋といふは一切の勤女、男數にあへば、必定て濕氣を煩ふ。此病中を鳥屋といへり。是遊女の玄海灘、ながれの身の大事ぞかし。養生あしければ命をうしなふ。冷藥妙藥の强藥を飲で急に本腹すれば、間なく毒藥の爲にむまれもつかぬ腰ぬけ、鼻なし聾になりて、一生すたる身となれば、此鳥屋をしまはぬ女は、高給出してかゝへがたし、何時わづらひ出さうもしれず。是によつて親方共鳥屋を仕舞し女は、年永く切て高給を出し、きづかひなしに先金を大分出して抱ゆる事也。此煩をしまうたる女は石　　、しかも　　し。此ゆゑに鳥屋をしまうたるを本色の遊女といひ、いまだ是をしまはざるを前方な賣物とて、爾前の賣女とは名づけぬ。爰に此道に錢銀を皆に梨子の木町の邊に、勘風といふ蒔繪塗師、水邊の色茶屋のかんといふ山州と、年をかさねて念比し、行末は夫婦にならうと互の契約、布きせの堅うきはめ、



角〻迄もこくそかうて、水ももらさぬ中と契り、商賣の塗師細工もやりばなしに、請取物もぬつたりはげたりいうて間をあはせ、おかんに皆打込て買掛もすまさず、人にはすり漆のやうにいはれてもかまはず、毎日通ひてたゞ此君をよしのゝ花とながめせしめ、いよ〳〵つぎ物の離れぬ中と成しに、いつの比よりか五条の古手大臣、おかんにうらなく思ひしみて、あたまから心の底を引とき、僞りならぬ腹綿の、包でない所を見せて、今一年の年を親方に三十兩でもらひかけしに、是はよい鳥がかゝつたと欲にはきりがなく今すこしのぼせなば、五十兩は出しさうな大臣と思ひ、只今あの者が一人が働で、家内も日〻ににぎはひますれば、根からお前へしんぜます事も、差當つて迷惑。あれほどの器量者の替りをおかうとぞんじますれば、中〳〵はした金では參りませぬによつて、かしこまつたとは、當分どうも申がたしと、いはぬ顔して金をせりあげるいひ廻しある袖の古手や大臣、此上は五十はいで、こりやあるじうなづけとそゝり出せば、然らばどうぞ相談いたして見ませうと、亭主が口ぶり大形同心なる躰、是は悲しやとおかんは筆をはやめ、さら〳〵と書て出入の男をやとうて、塗師やの勘風方へしらすれば、南無三方とぬりかけし重箱の、ふた〳〵としてはしり來り、段〻の様子をきいて、智恵にも力にもおよばぬ金ぜんさくひとつに、脉のあがつた顔して、二人しめりなきに泣より外はなかりしが、勘風涙をおさへ、此場は古金買に見せても、よい心中の仕所ながら、見えもせぬあの世だのみに、大事の命をすてゝ、万一所に手を引あうて死手の道をこえぬ時には、勝手もしらぬ來世で、まよひの上の迷ひ、高が命をすつるとさへ合点して、そちと我等が心さへ眞あらば、どうぞ引とられずに、古手大臣を、手ぶり大臣と、させやうのありさうな物と思案して立かへり、其夜又來て、ひそかにおかんに蛤貝を渡して歸りぬ。

それより一日過ておかん惱出し、面躰手足に瘡出て腫あがれば、親方おどろき、そちは鳥屋しまうたといひしゆゑ、高給出して長年切しに扨はまだしまはずして、我等に一ばいくはせたなと、顔色かへて腹立てからが取かへしはならず、さりとは物は見切が大事ぢや。古手殿の先度から、三十兩でくれといはるゝ時分に、大欲おこさずやつてしまへば、此鳥屋はかづかぬもの、出入六十兩のちがひがあると、齒切をして

後悔する所へ　古手大臣御出にて、おかんは氣色があしいとあるが心もとない。尤女在はあるまいが、功者な醫者衆に見せて藥でものましやるか、病氣は何ぢやととふにつらさ。亭主にがい顏しておもい事ではござりませぬ。風ぼろしで身内がかゆいと申ます。爰元はよい醫者の稀な所で、殊に客がしげければ、寢臥する所もなく、今朝からもおかんが五条の古手さまの所へとをやつて下さるれば、同じ煩ふにも心づかひがなうて、ゆるりと養生するにと病氣の片手に、第一それが苦になるさうにござりますれば、迚も御ふびんがります女の事、人の眞といふはこんな所。たのもしう引とつて、養生さしてやらせられねば、かならず水くさう思うて、末〳〵をかしうない物でござります。私もかやうな所が情ぢやとぞんじますれば、五十兩とは申ましたれど、廿兩はあれが養生代に、はゞかりながらお前へ私がはづみまして、三十兩で一年の年季を肩てあげませうと、急ににじりつけたがれば、成ほど〳〵たのもしづくといふは、病いたみの時ぢや。おかんにあうて樣子次第に引取ませう。まづあはしてたもと、裏の化粧部屋へゆきて樣子を見れば、むかしの顏はなくて一面に瘡出、目の上はれて中〳〵二目とは見られぬ有樣。是はまづけうとい煩ひ成が、瘡ではないかやと、古手大臣も傍近くへは、ちと斟酌心にてよりつかれず、遠くからとはるれば、おかん鼻へ聲を入て、古手さん私ははづかしい事なれど、年〳〵の濕氣のおどもり出まして、惣身はかやうに瘡にみしやれ、目は見えかね耳は遠くなる、鼻も追付おちませうが、よい中へは早ううつるものぢやと申せば、うれしい事はこなたさまと末かけて、お約束の通りそひましたら、女夫ながら鼻がなうてくさい物身しらずと、ふたりが中がよからうと思うて、悦んでをります。爰へ來て抱ついて下さんせと、山升魚のやうな手をあげてまねけば、古手大臣身をふるはして表へはしり出、亭主〳〵今迄は色にめでゝ、金にかへて引ぬかうというたが三十兩出して瘡うつらうといふ約束はせぬ、勿躰ない事斗と、走ばやにかへられぬ。あるじ氣の毒の頭をわつて思案する中におかん殿は耳が聞えぬさうな、イヤ目がそろ〳〵見えぬ、鼻もおち下地かして、今朝よりは一倍ふが〳〵ぢやといふ程の事、亭主が胸にこたへ欲の段はのけておいて外に座敷をかりて出し、此仕舞の付やうを案じふくれてゐる所へ、勘風本

りおかんが事をとへば、あるじかくさす鳥屋の次第を語れば、勘風聞てそなたの咄の躰なれば、たとへ息災に成てからが、どこぞは片輪に慥に成事、日比のなじみは爰ぢや、いかにしても不便なが、何とおかんをたもるまいか。我等覚えた湿気の妙薬に、二つ物がけといふ薬あり。きけば一年たゝぬ中に本の物にはなれど、髪筋残らずぬけて、すぼろぼんに成なり。又あたればたゞ一服にて物の見事にころりと死ぬる妙薬、迚もようならぬ煩ひを、久しう苦痛さしてもいらぬもの、二ッ一ッの薬のまして、はやう勝負を付てとらせたさに、おかんをたもらぬかといふ事、若相果なば親兄弟あらば、我等が女在なう看病した次第を語り、此方から野送りもしてとらせうと思ふが、同心ならば今から駕籠にのせて我等方へおくりやといへば、あるじ届澤の最中なれば、請込手のあるを悦び、さりとはお若いには御奇特千万、世の中の慈悲と申はこんな所、迚の事に万々一息災に成て、ずんぼろぼんの頭になつたと、見すてずに、世話になされてつかはされませ。ほんにおまへは男ぢや、おたのもしうござりますと、出入のかご舁よびよせ、おかんをのせて勘風方へおくれば、さあしてやつたと、生た蟹の甲を剥て、餅米とひとつにして、おかんが面躰手足にぬれば、忽腫引てあけの朝はむかしの花の顔と成て、銭いらずに手池にして思ひ出をやりぬ。是勘風が智恵袋の口をひらき、手の物とて漆を貝に入て、おかんに此くみたての方便を吹こみ、面躰手足にぬらせ漆にまかして、暫時に瘡を生じ、前方より抱の女共、鳥屋で舟して手を燒し親方に、一ぱいくはせ、目が見えぬの耳が聞えぬの、鼻が半分おちかゝるのと、いやがる事のみきかせて睟の亭主をこかしぬ。蟹をみしやぎて、餅米をかみくだきひとつに合せ、漆にまけたる者に付れば、即座になほる事神のごとしといへり。此妙薬より増つたる手管、誠に色茶屋の氏神もしられまい、奇妙〳〵

第四　情ふかい誓ひ海におはまりの男

付り 戀の闇に迷ふ座頭の思はく

▲白人寺重テ曰　惣じて今時の大臣共、世智がしこう悪睟に成て、先智恵を廻し、女の方から寶をもつてゆけば、何ぞ無心いはうといふ下心にて、俄なる念比ぶり、爰は遠のいて様子を一先見るか、但しひかけた時手をよくはづすいひ草に、前方から遠過行れし親仁を、内に

まざ〳〵ゐらるゝやうにいひなし、此比は何が目に見えたか、こくうに親仁がにえかへる。余所の親のやうに昔作りで堅いばかりなれば、小膀のとりやうもあれど、其くせ若い時礒ぜゝりして來たわろで、四も五もくはぬ睟だけで迷惑すると、末ではまらぬ前垣をして、何ぞもたれめいた事いひかけると心よう當座は請て立かへりて、佛になつて持仏堂に、抹香喰てゐらるゝ親仁をいひたてにして、どうもぶ首尾ならぬと筆の先にて返事仕捨、それから又所をかへてゆかるゝなど、中〳〵今の勤女うつかりとしては、客に眉毛をよまるゝ事なり。然ればふかうはまる大臣もなく、ふかうおもひ入る實のある遊女も稀成べし。此行末は方便事や、手管事をやめて、何事もしらけて、万をありのまゝに語りあひて、客も不斷の　これまゝに、身の立事を第一にせんしやうらしき事、曾て有まじ。すべて色所はせんしやうをはなれし大臣は、のぼすにのぼされず、どうもせう事のないもの、是色里のもてあまし客とは是成べし。又來て遊ぶ大臣も、せんしやうといふ氣でこそ面白うもあつた物なれ。我身代より物毎内幅にいうてはをかしからず、此まへ都のひんがし門前町に、世盛の過た大臣借宅して、京中に賣殘しの家一軒の宿代を万の當にして、腰のふたへになりしめくさり婆々一人つかうて、妻子のない身は心やすく友達がさそへば、たとへ大晦日に長崎へなり共飛歩行浮氣男、持つたへし道具も大形皆になれど身の廻りは今見ても大臣なり。殘る物とては、いひつけしむかしからのせんしやう、此身に成てもやまず、世にある時よりおびたゞしきせんしやういひにてありしゆゑ、せんしやうの上をいふとて、異名を万しやうとつけて色里にてをかしがりしが、ある時色友達にさそはれ、水邊の料理茶屋にて夕飯くうて、其上の酒が長じて、よい機嫌にまかせての無分別氣ざし、まづむほんの思立に、三味線引の役者二人めしよせ、酒のつのるにしたがひ、つい夜になつてのけて、大臣手をそろへて白人三人とりよせ、二人はなじみの御方、今一人は万しやうのお相手、はじめての御げん、お名はときけば、おのが名におの字をつけて、おきちと申ますとはや口がましき末社共が、片影に寄てさゝやき、何と久しぶりぢや、万しやう殿をて珍しいせんしやうを一ふし承るまいかと、太鞁持身の大臣をなぶつて、面々がたのしみにするもをかしかりき。

其中に文平といふ末社、あなたは以前から、我等がそやしつけて口あひ覺えてゐるなれば、せんしやうの口明此鼻にさせてくれと罷出て、コレ旦那、あの女郎はお見しりなされませぬか、おまへ程のお方が御ぞんじないはふしぎ〳〵とそやしかくる。其時万しやうおきちが顏を穴のあく程ながめて、さりとは世には似たる人もある物かな。近い比迄我等になづみて、てんと女郎の指切は珍しからぬとて眞の心中見せんため、右の足の親指切ておこせし難波の太夫職、花紫が引舟の小てふにそのまゝ、こなた卒爾ながら兄弟ではござらぬか。似たりや〳〵杜若、花むらさきのゆかりと見て、其親指きつた時の、我等がすさまじうもめのついた事思ひ出さるゝ。今〳〵の大臣共が大キな顏すれど、身共がしたやうな思ひ切た事は中〳〵せまい、先足の親ゆび切賃に十貫目箱二箱。其箱常ではをかしうござらぬによつてたがやさんの木目の見事なやつでさゝせ、内を朱塗は古いによつて、蠟色に春正が月夜の松のとぎ出し蒔繪、かうした見えぬ所に金をいれいではをかしうない。てんと白癩其時の入目こまかう算用して見たらば、小千兩は入べし。何事もむかし〳〵といふ時、文平につこり共せず、誠にさうあつたとて、此春旦那衆のお供申て大坂へ下りし時、新町へ參つたれば、今に咄しいたして、其時の銀箱、いかにしても内の蒔繪の模



様がおもしろい。是を其まゝ銀入て置はをしいとあつて、太夫さまのお物好で、十貫目箱そのまゝで盃に御用ひなされ、今もつぱら揚屋で、銀箱酒盛で、天王寺の浮瀬がすたり、大分四郎右衛門がおまへをうらみてゐるげな、いかさまあぢな事をなされた旦那ではあるぞ。扨其指はどうなされましたととへば、それは金のむくの香箱に入て、身をはなさず大事にかけておくとあれば、文平手を打て、皆の衆是にも替つた事がある。太夫花紫どの床へ入られて喜悦の時分には、十三里へだてゝあなたにある、足の親指がびり／＼として名譽そるげな。いづれ女の執心はおそろしい物ではないかと、口上手な者共がよつてそやせば、そやされて心の儘にせんしやういうて、白達もそれ／＼に迎が來てお歸り、三人の大臣も身ごしらへして、しづかに臺所へ出かけらるゝ時、万しやう文平が袖をひかへ、そなたが囃子で今夜は心ようせんしやういうて、近年にない慰をいたした。大臣は心につもらるゝほどな大やうながよし。大鞁持は有智恵をかくして、我より鈍い客にまはさるゝがよし。必末社の智恵過たは、身過のかひに成物、かうした所へ智恵をみがきに來る人はひとりもなく、高がたはけをつくして、めん／＼の命を洗濯する、爰は遊び所ぢやと異見をいうてかへられしが、いかさま大臣はかしこ過たより、ちとおも長な方がよ



く、大鞁持の智惠ばつたと女郎の晒過たは・ぶ繁昌のもとゐ、人のにくむ物ぞかし。遊女は物やはらかにすゝどからず、人さへ見ずは末社にも手をにぎらせ、出入人にも情らしう詞をかくれば、物もらふ欲をすてゝ、客の手前へよしなに申なし、藁燒人あれば身にかへてひく物なり。ながれをたつる身は万人を請てつとむる物なれば、親にも見せぬ　よしあし迄、人中で噂せらるゝ身ぞかし。全盛なる時なればとてそれを鼻にかけて、座頭又は太鞁もち、宿屋の夫婦下〻迄に大平にしてにくまれ、わろく云たてられて、はやりやみし女郎多し。必初心成時には、下〻迄に詞をかくるは其身に勿躰なく、人がかろしむると心得て雲上に斗かまへ、曾て情らしき品なく、身に覺えぬ惡き評判にあふ物ぞかし。備前から三味線稽古に上りし野羅都といふ座頭、都の大臣に召つれられ、土手町はんじやうの時、廣座敷の宿屋に至り大酒の乱に、野ら都酔にうかれ我を忘れて、大臣に不便がらせらるゝ、小ざつといふ白人に品だれかゝれば、わしは手引ちやござらぬ。人に取付うより、似やうたやうに杖に取付給へと、さりとは色ある身には情なき一言、すぐに喉ぶえに喰付たき程に思へ共、お世話になされくださるゝ、旦那の手前を思ひやり、胸をさすり其夜は歸り、明ると其儘、三味線の弟子に、高なしの三ぶといふ、惡智惠の上はじりした男をよびにつかはし、夜前小ざつが情なきにくいひの段〳〵を語れば、三味線もひき方と、共に腹をたてゝ、是は聞て堪忍のならぬ所、今宵我等其白人をようでから、酒をしひて酔した上に、床をとらせてこなたをよびよせ、

して、其上で耻辱をあたゆる仕様あり。万事我等にまかさるべしと、日ごろ遊びに行色茶屋へ暮かたよりおしかけ、小ざつをいうてやれば、さいはひお隙にてお出うれしく、花車出てお盃の引あはせ、おさだまりを申て勝手へはひれば、三ぶはもとより巧て來る事なれば、あたまから無理をいうて小ざつに酒を強出し、今一つ參つたら、終に出さぬ私が三味線、お肴に引てきかしませんと調子あはして、野羅都が彈出した、暮の山といふ一手、色音其まま野らいちが風がら。扨は件の座頭が弟子なるが、夜前の我つらき仕形の咄しを聞て、三味の師匠の恨の返報せんために、態〻今夜爰へ來りし物成べし。是ぞ宵からの無理酒の、謎がとけたとはやのみ込て、すこし醉たるふりにも

てなし、三ぶが側へちかよりて、世に勤程をかしき物はなし　我いやな程思うて下さるお客には心とまらず、態逆うて無理仰らるゝ殿子のしたはしう成は、縁といふは大抵、よく／＼の因果なるべし。何いうても勤する身の悲しさは、皆僞りと眞ある心をさぐられ口をしき事のみ。夕部もさる不便がらんす大臣、座頭をつれてお出なされしに、田舍座頭とて酒をすごし、お客の前にて私へのぬれかけ、勤の位いやしきとてこなしたる仕方といひ、殊さら其夜の大臣に對しての不禮といひ、旁よからぬざはい。京風をしられぬとおもひ、心に思はぬ苦口いひしが、さぞや我身を憎う思うてかへらるべし。たとへ目の見えぬ人ぢやとて、我に心のある人をどう憎う思ふべしっ實からのおもはくならば、人なき所か、又はひそかにしれる人を以て通じ給はば、我方から手を廻してあうてやる心底なり。座頭なればとて人間に違はなし。難波の夕霧は、此職の極官松の位なれ共、座頭に一度の情あり。およばずながら我とても木石ならず、戀ならばいか成者にも情をかけてこそ、うらめしさは同じながれの身ながら、至らぬ遊女の位、界境こそ淺ましけれわしが今宵の心ざしを、竹ならば打割て見せたい人が、ちかくにあるにさてと、じろりと尻目で見て、おもはくらしう、頤を襟の中へさしこみし粧ひ、三ぶが魂へきつしりとこたへ、扨は我等に來てゐるかと身に嗜出來て、鬢さきをなであげ、人の心は鏡のごく、眞がうつれば此方にも憎からずと、それから無性につかみつく程かはゆうなつて來て、心の底を打あけ、今そなたの咄されし、夕部の座頭の我等は三味線の弟子成が、坊主殊の外に恨て我等をひたすらたのむゆゑ、今宵そなたを爰へよびしは、酒に醉せてうつゝのやうになられし時、野らいちをよびよせ、一せ、小ざつこそ座頭と手管して人しれず出あうたと、ぱつと浮名をたてゝ一分をすてさす其巧の、我等は今宵惡人方をつとめに來りしが、何事も見ると聞なり。今の咄しの通りなれば、さりとは見かぎり果た法師が所爲、明日から師匠あげてのけると、折角たのまれた座頭を、却而そしり出すこそをかしけれ。とかく爰に長居して、野らいちが來てからは不首尾なり。是からすぐにそなた一所に宿がへして、外でひそかに遊ぶべしと、花車をよびて、小ざつが跡をつめてもらひ、少と氣を替に此君をつれて、外で一盃たべて參ら

う。自然是へ野らいちといふ座頭が、我等をたづねて來る事があらう程に、今宵三ぶは爰へは見えぬというていなしてたもれ。ひよつと太皷につれたれば、行先々へおひかけ來て、いつとても取つき虫に、ほうどこまりはてる事、かならず、汝らも我等が來たと申すなと、二瀨料理人までの口をとめて出行ぬ。是をおもへば賢しい今ぢやとて女のいひまはしによつて男はどのやうにつかはうとまゝな事なり。とかく女は智恵あつて、晬ならずしてはつとめがたし、しかれば向後烏屋をせぬ山しゆは此勤の青き山州達なれば、青山派とわかるべし。又烏屋をしまうて客何百人にあうても、

、　とさだめ、互に今より申合して、女色執心の衆生を平等にすくふべしと、中なほりの盃して白人寺にいとまごひ、諸末寺は里〴〵へかへられぬ。

三之巻終

傾城禁短氣　四之巻目録

第一　吉原寺四十八願の教見世談義
付り　高尾の紅葉色に出るうかれ男
此段八　武蔵野の限りも無き此君に打揚して濡上名字とも無気仕上合郭女霊相の真なるわけをしんてにとえねくかどの勝手なる者を記せり

第二　紫雲の源氏袖女郎の来迎
付り　きまへが深く縁ありて持る恋上
此段八　念仏を施し花とふりも好色の勝手気まゝに其しるし永く無間地獄の大罪の男とありて無くの執心とせしは大罪の果はしれぬ事を記せり

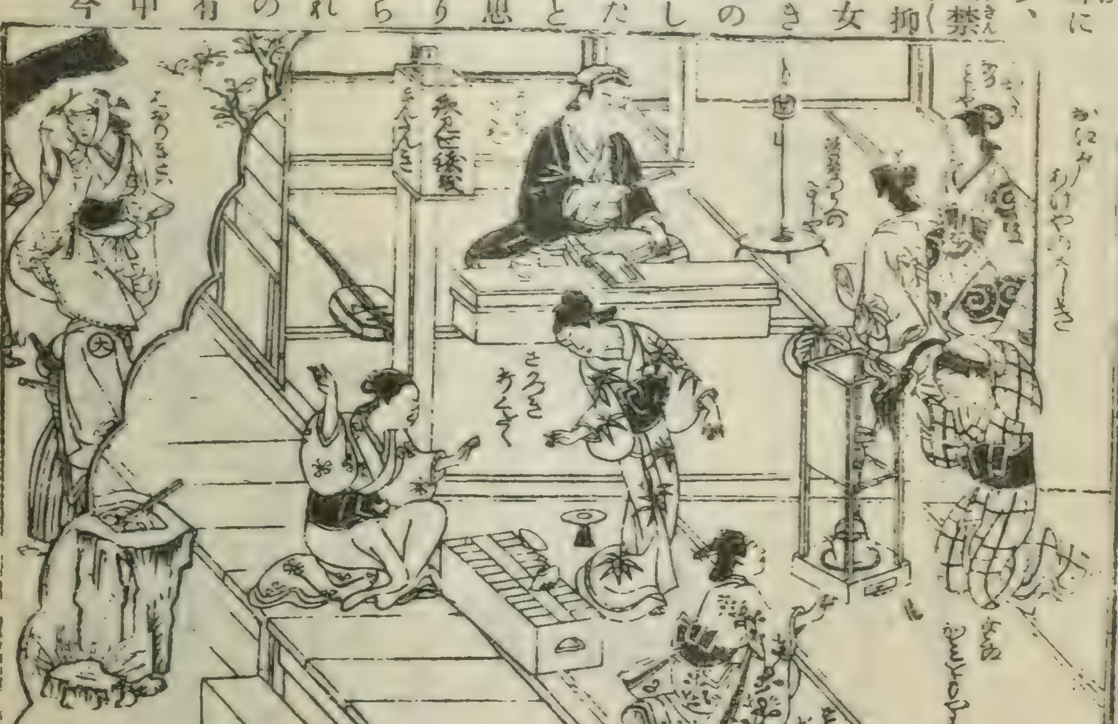
第三　功徳円満釈迦の私金
付り　痛くも無腹さぐりまはる悪所の手柄
此段八　八方四千挑の末社共付出の荒生薬他力本願の飾と見て自力まかせと見とふけふ勤めておのづと見ゆる事を記せり

第四　欲の誓籠まのの竹の蓮
付り　おまへの肌につけさする金佛
此段八　因果の道理と志めして仕果たる事に心得べき事と云ふ事を記せり

第一　吉原寺四十八夜の夜見せ談義

付り高尾の紅葉色に出るうかれ男

諸客來迎の衣紋坂を過て大門をかまへ、常住不斷伽羅の香たえず、揚屋の座敷には金の花ふり、繁昌の一廓、是三个の本色の隨一吉原寺といへる張のつよき一派、幅なき衆生は中〳〵おそれて、上品女郎の床に至つてふるひぬ。此比爰において、四十八夜の夜見せの說法はじまり、新丁がしのつぼね迄足の踏所もなく群集して、是を聞人隨喜せり。斷成かな今日本堤にかくれなき三野上人とて。いきぢのよき說法者、薄雲どりの金山の袈裟をかけ、濃紫の衣を着し、聲は高雄のもんさく上人に增り、詞に花紫をさかせ、初ぎくの者の耳をおどろかし、皆眸にせうとの珠數をつまぐり、發端の金を打こみ、傾城禁短氣をぞのべられける。抑二万翁西鶴、一代男經に女郎の短氣をいましめ、よき客をとりはなすは、全盛の時我身を高ぶり氣儘をして、たてまじき事に腹をたて、前方成大臣を初心なとふりつけ、衆生に幾世の思ひをさせられ、程なくはやりやみて、太夫からういつらいめに青暖簾の住居せられし女郎かぎりなしと、氣の短きを禁め給ふは、何と有がたい事ではないか。心中をして死するといふも、今すこしのこらへぜいなく、



多くは短氣からなす事、たゞ堪忍づよきが勤の肝心、よくわきまへてつゝしまれたがようござる。然れ共むしやうに長いも氣がなうてわろし。たゞ一概にはいひがたし。女郎は寛濶にして短氣なもよい事あり。上がたの三木といへる大臣、おちやのよいと聞えし上林の金太夫にあひぬ。いや共おうともいはれぬほど美しきもの、二三座首尾して後、亂酒の上にて一歩壹つ取出し女郎におくれば、是はとうれしき顔つきにて、ひそかにいたゞきけるを、何が都のしやれ者ちらりと見て、さも有まじき事なれど、此太夫のすたる程さもしく見えける。それより四五日も過て熊谷の大ぶり成金の盃と、珊瑚樹の盃とかさねて太夫にとらせければ、更に悦ぶ氣色もなく、金盃は庭はく男にとらせ玉の盃は双六盤の下に敷てみぢんにくだき捨ける。罪も欲もなき此心をかんじ、是ばかりの思入何の子細もなく請出しぬ。又長崎の鹿といふ大臣、太夫の吉野と年をかさねてあひけるうちに　酒きげんに我儘をいひける。つね〴〵物とがめせぬ女郎と手に入て、身振に嶋田の髪先顔にさはりしに、髪あればとてさのみ美しうも見えず、我思ふまゝならば、坊主にして抱てねたいものといふ。吉野耳にかけて、かたさまは髪のないがお好かといへば、いかにも頭のまるい髪のないが望といふ。お氣に入はやすい事と床より飛出行燈のひかりに髪先



もやしける。大臣おどろき色々わび事してもみけし、此心の手づよい所を見出して、千三百兩に根引の奏、相生のお内義さまとあふぎぬ。是を思へば短氣なも事によりて見事に見え、思ひの外の仕合に成ぞかし。されば此吉原寺の中興のぬれの開山高雄といふ女郎は、衣裳に紅葉の錦をまとひ、姿に花をさかせて、盛なる時揚屋の昼をつとめて、身仕舞に御歸りの道中ゆたかに、胸高帶に身をすえての足取、又上方とはちがひ、一きは目に立ちのつしりとして、ちかづきにも詞をかけず、右左に對の着物きたる禿を引つれ、やり手六尺までも御紋の紅葉、夕日にてりかがやける粧ひ、眠れる程靜に位をとつて、其至つたる風俗、往來のぞめき者共も身をはぢて腰をかゞめて通る、くらゐ、同じ勤の女郎共さへ、高尾さまのお通りときいて、引かけた三味線やめ、くはへた煙管下において、なりをしづめて執しぬる。此太夫が全盛古今有まじと、心の廣き武藏野の人さへ目をおどろかしぬ。爰にそのさま十貫目ありなしの身代と見えすきた男、日野着物に茶小紋の古き一重羽織を着て、こいかうじの皮足袋はき、作らば當世風の大臣とも見るべき器量を、態いや風に仕立て此里に入事、大かたの胴骨にては成まじ。しかも歴々さへ手おちせらるゝ高雄が至り道中を待かけ、近くになれば此男、お手をとりてじつとしめるに、いな顔つきもせず、麁相な衣裳にも心をつけずありける。何と私のやうな貧な男めにもお情ありやと云へば、貧な男にあはぬとは、誰が申て名たてがましや。こなさまは何にもせよ、情の道に貴賤のへだてはなきもの。況んやおなぐさみにこしらへてあるわしが身、お目にとまらば不便がりて下さんせと、につこりと笑うて申されける。遣手のたま先お手を取はなし、継を兩方へわけて、太夫さまは宿へお歸り、男はすぐに松葉や善兵衛方にゆきて、此揚屋におめかけらるゝ一谷の歴々方、客にいたして御馳走申せとの添狀持て來て亭主にわたせば、狀を見て姿をおどろき、よねぐるひあそばしますはお前でござりますかと、念入てとひかへすもをかしかりき。我等は靈岸嶋のちひさい商人なるが、老ての語り句に此里の太夫職にあはせてと申さるる。あるじ、承つて、太夫様がたは半年も前から申こまねば、中々心よき御對面はかなはず。格子女郎と申もさのみ太夫様方にかはらぬ御器量、お心やすう是にあそばしませとあてがうて

申。いかにも／＼さうこそあるべし。しかし只今是へ參りがけに、紋所に紅葉を付たる女郎に行あひしが、慥お宿へお歸りと見えたれば　今宵その君を此所へ是非にむかへましてとたのむ。それは高雄さまとて、東三十三个國にかくれもなきはやり女郎、俄と申はおろか、今から申込置ましたらば、來年の今時分首尾いたしませう。さりとは宿仕ります私がわるい事は申ませぬ、ひらに格子女郎にあうて御覽とすゝめるを、成程その格子とやら連子とやらは、かさねての事にいたして、たゞ其高雄樣とやらに、今道中でお手をとり、お情と申た貧な男めとしらしましてもらうてくれと申す程に、亭主ならぬ事とは思ひながら、お客の仰もだしがたく、遣手にかくというてさま／＼と賴んで見れば、高尾此樣子を聞もあへず、思ふ子細あれば今宵のお客に斷申て、松葉や方へ行べきよし、先今夜の大臣へ斷の文つかはしすてゝ、善兵衞方へ御來臨、是は古今になき有がたき仕合、亭主夫婦悦びの色をなし、お座敷へ罷出て先御引合の酒事、いつにない太夫さまの、初會にお盃の數をかさねられ、お顏の色も御紋の紅葉にまがひ、はじめてあへる男の膝を枕に、すや／＼おやすみなさるゝ。此里のならひとて初手は寢道具さへ出さず、床などの事思ひもよらぬに、太夫方　　つい

、

、其上に暇乞の盃迄してお歸り。是は合點のまゐらぬお客、此里はじまりてよりこのかた、つひに初會にかうした圖はない事、若はゐもりの黑燒にてもおふりかけなされたかと、揚屋一家不審するも斷ぞかし。此男太夫が仕形を感じはやるこそ斷なれ。おそらく日本にかゝる太夫は有まじ。貧なる男にお情ありやと、貧といふ字に對して今宵の首尾、あつぱれ御女郎、諸事あまるわと是をふかく思ひ入、我も又世の中の大臣共がせぬ、圖にはづれた事をせんと、亭主夫婦をまねき、凡高尾は何程で親方がくれうぞ。內證を聞てこいと急に仰付らるゝ。承はつてあるじくつわ方へ參り、委細に聞て立かへり、千兩余ではくれさうなる口ぶりと申す。それは思うたよりは心やすいせんぎ、今宵の中に諸事の埒あけ、明日此所を出すべしと、手代方へ一筆かいて揚屋の男に申付て我宿へやらるれば、しばらく有て手代弐人夜道とて用心し、下男三人に五百兩づゝ持せ來て、あげ屋の座敷に千五百兩ならべおけば、さながら小判の小山を見るがご

く、ちひさい目からは肝をつぶして、氣を取うしなふも斷ぞかし。かくて万事を仕舞ざゞんざうたうて、夜の明がたに太夫もろ共我宿に立かへり、身上小躰に取おき、內證の世話なき暮しやう。きのふは上野の花の幕に、水いらずの二人づれ、今日は角田川の月に舟をうかめ、女房共に酌さして此味甘露の盃事、命をのぶるとは、此たのしみの外あらじと、見る人舌打してうらやみぬ。昔は太夫其身の重さに、目替にして代銀わたしけるさへ、世間の取沙汰又もなき事といひしに、今此高雄はしかも小づくり女、十三貫目ありなしの姿を、千五百兩に身請おつ取て銀になほして九十貫目なり。七度目にかけての重さなり。時代とて是にも奢とはいはざりき。大臣高雄請出して三年目に算用して、右の九十貫目あげづめにして相濟、今々末々大分の銀まうけと悅び、一日も長生する程德のある事なしつて、若い時から好でくうた鰏汁もやめし、二八月に灸をすゑて夜道をあるかず、町內の喧嘩にも人より跡に出、平生身の養生おろかならねば、命の爲にも德あり。よく／＼思案して見る程高き物にはあらず。此差引をして見てや、近年三个の津の松も梅も根引にする事はやれり。此賢き世の人、うかとしたる算用にて身請はせぬ筈なり。思へばむかしの大臣は、かゝる十露盤をしらず、女郎請出すといふ事稀とし られたり。其時は女郎もうか／＼年の明迄勤ける。今時は遊女も身の行末を思ひ、中ぐらゐ成身躰の、內義のない男にしたしく仕かけぬるも、盜人の昼寢ぞかし。銀さへあらば思ひきつた色遊びは、若い中にして見給へ、かならず初心な中から利口だてして、錢を大分出さぬやうに立廻れば、末々迄もその形氣うせず、あそびちひさく成て物每小せり、本大臣には至らぬと心え、隨分金銀をしまず、ぐわつたりとした遊びをして、色里にも名をのこす程に味をやりて、しやんとみじかう通ひやむが、此道の眸と觀念して、たゞ明ても暮ても金銀をまうけためて、大キなあそびをして往生せんとねがひたまへ。南無あみだ／＼

第二 紫雲の染小袖女郎の御來迎

付り太夫が姿繪物くはぬで持る身上

扨昨日も說申た通り、とかく色里にいつ迄もいひ出すやうに、見事なあそびをしてしやんととまらるゝが、色道安

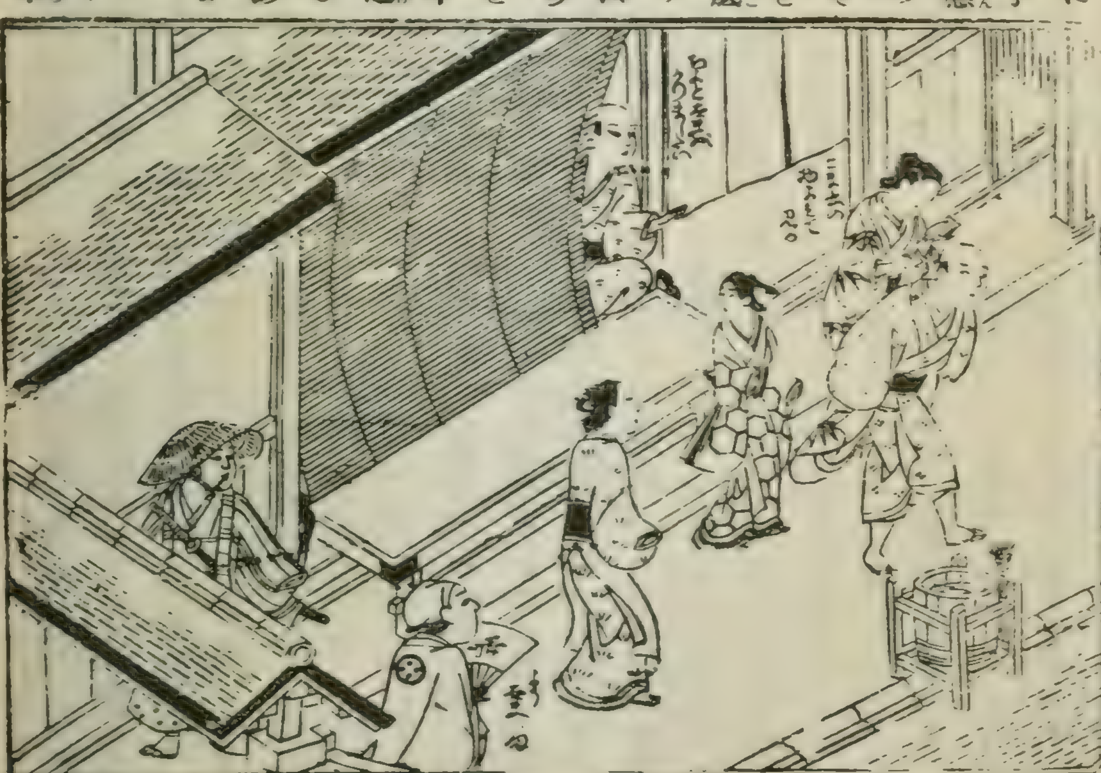
心の晬と申ぞ。廿より中のさわぎは此道に入皆足代と、二代目の世傳上人も說おかせられた。それより十年大與に入て、太夫の有がたい所をおぼえ、四十より内にとまる事をさとらすは、揚錢の淵にしづむ事まの前なり。爰に本町によき絹商ふ春路といふ大臣、親の目をぬき我物を盜づかひのはかゆき、二年半に一万兩つかひすてゝ、親父始て目をまはされ、一家町中の嗳をきかず、永く勘當せられて、今鎌倉に引込、内證から母のみつぎを請てかすか成暮し。夕に米がらとをかすり、朝に薪たえて、何喰まいとも儘な中にも、太夫の浮雲事をわすれず、世にありし時、菱川に筆力をつくさせし姿繪を表具して、是を床にかけて不斷我たのしみとなして、物いはず笑らはずとなげかれし、むかしの人こそおろかなれ。是を繪と思うて何かうれしかるべし。其儘生た太夫と思うてこそ、あれ、只今につとお笑ひなさるゝわと、偏に狂人のごく、ひとりよろこび打過ぬ。女郎はまゝならぬ身とて、心にはとびたつやうに思ひぬれ共、其身行てあひぬる事も成がたく、籠の鳥かやうらめしき、塀のすまひ、ことさら繁昌して、一日も隙なく戀したふ人しげく、此君を見て始末氣をわすれ、たとへ身をつめて十千貫目ためたればとて、迚も死では持てゆかず、帷子ひとつですむ事、人間万事は夢の見殘し、只緋綸子の長枕誠の極樂遠きにあらず、紫雲と見えしは江戸紫のそめわけの、上がへのつま、風にひらめき、浮雲さまの御迎に作助が參れば、ひらりと背中へ乗うつらせ給ふ粧ひ、しま黄金の肌胸高にあけかけ、緣ある衆生は、あの御懐にすくひ入給ふべしと、有がたく、簾越に茶屋よりをがみ奉り、知れる人のこゑして詞をかくれば、ゆたかに見かへり久しいなア。後にへと、すこし訛のある二聲を聞人感にたえて、御うしろ影の見ゆる迄見おくるは揚屋町の名殘ぞかし。大門筋の辻越てかはゆらしき伽羅の香まさしく我を負ぬる作助が、わづかの髪に留し匂ひなり。是はと氣をつけ後から頭を見れば、髪の曲にちひさき文はさみしは心にくき男と、そつと取て扊れながら讀て見るに、一寸四五分の紙幅に、厯よりは字ほそく、心をこめて我におもはくの段々、下々にはやさしき心入と、むしやうにかはゆうなりて、そちはおれにほれてゐるが實かとはれて、おそれながらと跡はいはずして、むくつけ男のほろりと眼に露をうかめぬ。しからば折を見てひそかにあうて、そ

なたが思ひをはらさせてやるべきが、其替りには我望をかなへてたもるべきやとの、御意迄もなし、私めが一命成共御用ならばさしあげたしと、僞りのなき心底を聞すまし、とかくあうての上に、我のぞみをも語るべしとの、仰うれしく夢路をはだしにてありく心地して宿にかへりて、太夫手を廻して人しれず、　ひそかに作助をしのばせ、先取　何かなしに

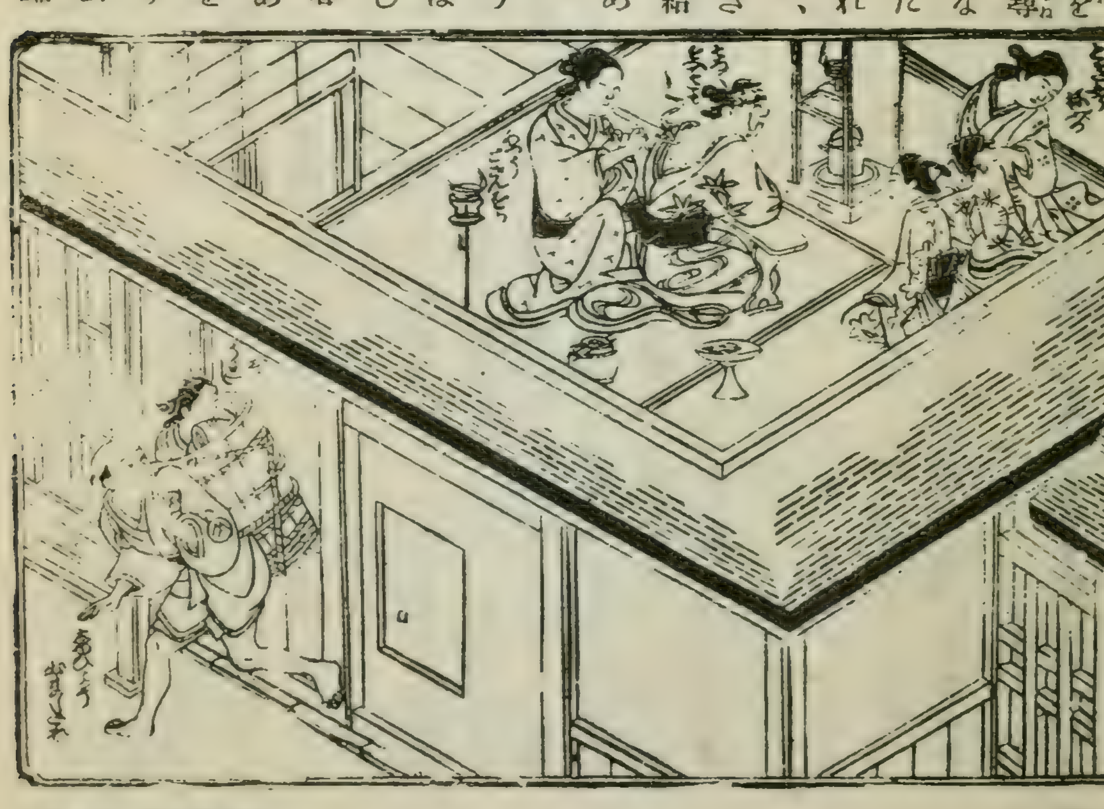
、　有し時、

此男ふるひ出し、是までのお情にて、もはや枕をかはせましたも同前、此上は人しらぬうちにお前の望を仰きかさるべしと、中〳〵さもしき所作などする氣色なければ、さりとは心よわい男かな、其わけたてとは我望いふ事にあらず　、

、作助行義を持くづさず、割膝して、たとへ御機嫌にちがひませうが、先御様子をきかぬうちはと、猶々慇懃にかまへて、ぬれのうつる仕出しにあらず。扨はそなたが心入は、此太夫がどうした望をいひかけうも底がしれねば、なまなかあうてから、いやとはいはれぬ義理をわきまへ、聞てから我心におよぶ事ならば分をたて、およばぬ事ならば、今迄のおもはくをすてゝ、迯うといふ所存にや。さうしたさもしい心底ならば、あうてからうれしからず。よしない人にたばかられて、女の一分をすてたる事のくやしやと、睨まれし眼の中



に涙をうかめ、身をふるはして恨らるれば、作助胸をたゝいて、先程から道すがら申あげし通り一命をさし上るといひし詞、今とてもちがへはいたさぬ男め、いかに賤しき奉公いたせばとて、さやうのぶ所存成心をさげ申べきや。お情にあづかりたる上にて働き申ては、私が眞の心がしれませぬ。まだ眞の契りをこめませぬさきに御用に立ましてこそ、眞實におもふとも申べけれ。抑ほれそめまゐらせしより此かた、命はお前からあづかつてをると、ぞんじつめたる作助め、何事も御遠慮なく仰聞され下されかしと、實なる心底面へあらはれ、たのもしく見えければ、太夫悦びしからば様子を語るべし。我ふかういひかはせし春路さまと申せし大臣、親御の勘氣をうけさせられ、今は鎌倉にわびしき住ひして、朝夕我をこがれ給ふと聞しゆゑ、廓をぬけ出鎌倉とやらんへ、尋ゆきたく思へ共、勤の身なれば心のまゝにも成がたく、思ひくらすばかりなれば、こなた我をぬすみ出し、その鎌倉の春路さんのござる所迄、おくりとゞけて給はらば、生々の御恩ならめと涙玉をなして語らるゝ、次第を一々承り、さうなうてはかなはぬはず。拙者は眞にこなた樣へ心をかけしにあらず。元來私はその春路の下人にて、旦那世にある時から、殊の外ふびんをくはへくれました志をわすれず、何とぞ此節の御奉公に、浮雲さまを盗とり、鎌



倉に罷ある旦那へわたし、行末ながうそはせませうと存じ立、此くつわへ當三月から下男にありつき、透もがな此様子お耳へいれんと思ひぬれ共、御盛の躰を見ては、中／＼旦那の事などは、おぼしめしわすれし事もやあらん、然る時は私やたけに存じ、盗出さうといたしてからが御本人のお心ざし替りては、思ふやうにも成まじく、却而仕損じ、主人迄の名を出してはとぞんじ、冥加なくも旦那の御憐愍ふかいお前に、執心なと申かけ、御心底の實ふ實をさぐり、いよ／＼過しに替らず眞あるお心入ならば、命をすてゝ此里をぬすみ出し奉んと、はゞかりながら心をがけしと申あげしは僞り、眞は旦那へ一奉公仕度存念と様子を語れば、扨もたのもしき心入、此上はくどういふに及ばず、どうなりとして此所を連て、立退思案をたのむとあれば、何がさて其御心ざしなれば、いかやうにも此里はつれまして出らるゝ事、まづそれ迄は遣手にも、ずゐぶん色をさとられぬやうにあそばしませとしめしあはせて作助は我部屋にかへりぬ。それより四五日も過て、稀成隙の夜をさいはひと、浮雲は取籠りて灸をすゆる由にて、哥三味線のなる末の女郎を一兩人まねき、灸の伽にいろ／＼の音曲つくさせ、すゑしまうて此熱き跡のひらつき忘るゝ程、酒のみてまぎらかさんと、伽の女郎にもむりいひかけて酒をしひ、我身も醉た風して三味線の筒枕に咄し寢入宵に聞し小哥は鼾と替り、一家の中の女郎の心やすさ、それなりけりに小夜着打きせ、親方女郎の數改めて門口しめさする時、作助表に出て高聲あげて、やらぬぞといふを内より聞つけ、作助ではないか、喧嘩さすなと親方せいたうして呼こめば、内へはひりていや喧嘩は仕りませぬが、何者か内かたの軒下に、いま／＼しい早桶をおいて迯てかへりましたゆゑに跡から聲をかけて一町斗追うて見ましたが、いづくへかくれしか見うしなうて殘念千万、先は夜明て人の目にかゝらば、口がましき此里の、若い者共が評判もいかゞ、今宵の中に何方へもすてゝ參らうと申せば、親方聞て、親一門もなき貧なる亡者は、寺へつかはすべきも、錢の出手なくて、それ程の世話はしかねぬものゝ門にすてゝ、夢にもしらぬ死人のやつかいをかけぬる事、いにしへもありつると、年寄衆の咄し今おもひ合されぬ。此門へすてしも、其死人に我等が何とぞ因縁ありての事成べし。中戸へ入レ置明方に早〻持行、矧柴の煙となして

こいと、さすが大勢つかふものは、心さばけてさつぱりと了簡して、早桶を中戸の外へ入させ、人の事をすると思ふな。面〱の後生ぢや、作助太義ながら夜明前に持てゆけと、燒賃の鳥目迄を渡して、親方は内にいりて休ぬ。夜明前に作助起て、大戸をあけて出る音傍輩の男共寢ながら聞て、作太義ぢや、次而に一七日は精進してやれといふ、聲の下から鼾かいて寢ぬ。扨夜も明て下男共起て見れば、中戸の外に夕ァの早桶そのまゝにてありぬ。是はしたり作助が今朝とく持てゆきしと思ひしに、寢過していまだゆかずや。旦那殿の耳に入たら、大ていの事では有まい。作助起して持してやるべしと、寢所見れ共作助が夜着はあれど主はゐず。是はふしんと早桶に手をかけて見れば、かつかうかるし。何共合点がゆかぬと親方にかくといへば、いかさますまぬ事と、眉間に皺をよする時、奥から浮雲さまが見えぬといひ出す。是はたゞ事ならぬ事、まづ其早桶あけて見よと、繩切ほどき蓋こぢはなし内を見れば、亡者はなくてよいかげんな石を、紙屑にてうごかぬやうにつめおきぬ。扨は手管して、太夫と作助日比出あひ、手筈を取て早桶をこしらへ、門にすてて迯たといふて内へ取こませしは、曉方に太夫つれてたちのく、門の戸を心やすう出ようといふ方便にて、親方に早桶一ぱいくはせた物也。弓矢白山地をうがちて成共尋來れと、追〻に追手をかけしが、行衞しれねば尋かねて、皆〱かへりて色〱と詮議すれ共しれがたし。作助は親方を思ふやうにたばかり、女郎をつれて鎌倉にやう〱ゆきて、主人春路にあうて次第を語り、浮雲をわたせば、數〱の悦びの折から、本町の親仁さま、去月廿日におかくれなされ、御家つがるべきお子様とてお前お一人、御袋様御一家と御相談あられ、我〻共に御迎ひに參り、早〻お供申てかへれとの御事と、手代共四五人來りて申入る。是は思はざる外のさいはひ、然らば迚の事に太夫一所に歸りたし。其旨母に尋くれて、自然同心なき時は他人に家をやられうが、ふたゝびかへる心底ならずと、思ひきつたる申ぶん。其段もお心の粹なるおふくろ様にて、定て太夫を請て一所ならばはひらう、さなくばいやといふであらうほどに、すぐに請出しふたりづれで歸り來るやうに、我〻に差配仕れと、金子千兩御わたしと、さいふを出しお目にかくれば、八百兩では自由也。作助是から三谷にゆき盜し品を語り、八百

兩をわたして來れ。殘り弐百兩は、此度汝が比類なき働の褒美にとらすと現金にて下さるれ、鎌倉より二人そろへ駕籠にて本宅へのおかへり、是ぞ仕合のなほり時、人はたゞ心ながう何事にも時節をまつべし。盲龜も時にあふ浮雲が仕合、今は奥さまとあふがれて、居すはり雲となろぞうれしき

第三 万徳圓滿釈迦の私金

付り 痛うもない腹さぐりに來る太鼓が方便

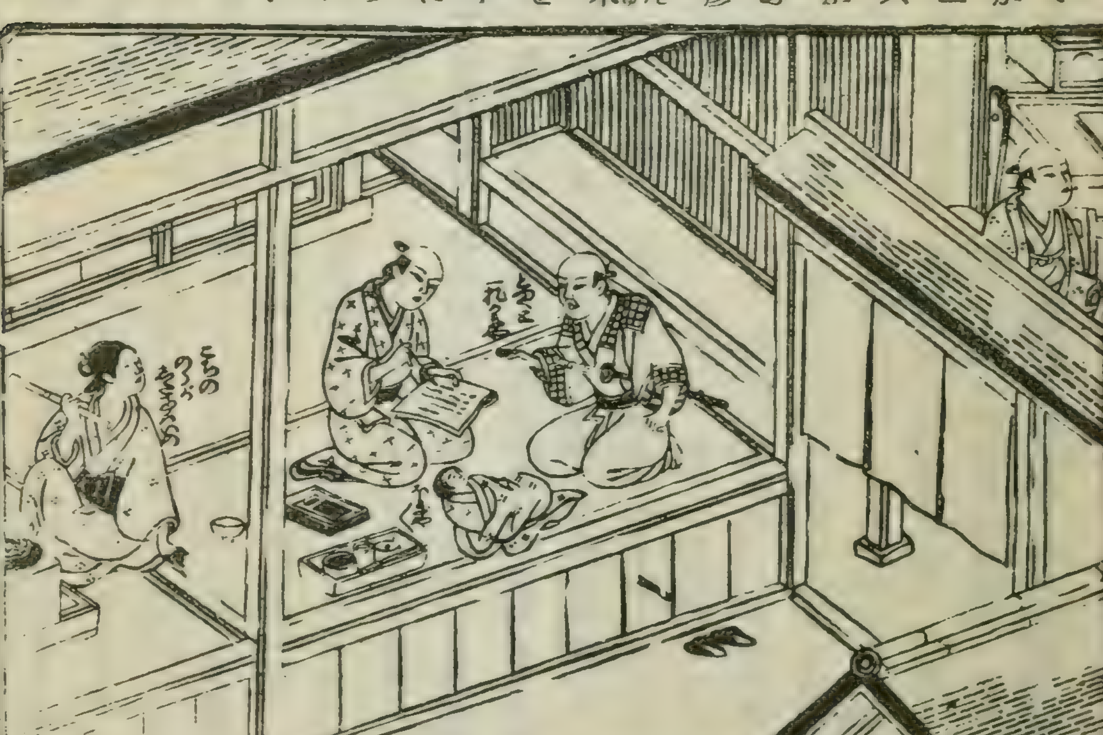
弘誓の二挺立に乗て彼岸に至り、御機嫌取の末社まじりに面白う酒のんで、壹歩小判は山吹の實とばかり心得、始末の二字をわすれ、万を大名氣になつて、寄ほどの者にそやされ、金の花をまきちらして餘念なき遊び、爰を以て極樂とは申ぞ。されば一切の女郎買、明日の事を案じてはをかしからず。米狂ひせぬとて身上のつぶるゝ物はつぶれゐぞかし。轉變の世の中、才覺さへならば此ありがたき吉原寺に、金銀を打こまでは、人間に生れし甲斐はなし。又此世に生れて來る請相手はない物、みじかい浮世に、あたら月日をうか〳〵内に居る筈はない事、爰へ來ればこそ替つた噂もきけ、なんと〳〵太夫の小もんどが、久しく引込勤ざる子細をしつたか。成程〳〵此御腹に若君一人おはしますと申ス。是はならぬ、我等ずゐぶん新しい事を聞出したと、すこし自慢の噂を、はやい奴かな、何者がしらせけるぞ。此子種つき籠し主を知つたか。此男は大かた推して、十が九ッさしちがへまいとあれば、末社共口をそろへて、それは仰迄もない事、お前のお連の万徳さまのお子に極つた御事と申せば、いかにも〳〵我等が推も其通り、から寄た者共の目利にかけて、万徳が子と極めて折紙出すからは、正銘にはしれてある、正しき種を廓にて産する筈は有まい。万徳にいうて太夫を引かき、町にての平産、人も聞て尤らしう思ふべし。汝等は何と思ふぞ。八まん旦那の御了簡至極〳〵。第一太夫さまのお腹躰の、あれ程にならぬさきにお請なさるゝ筈を、今まで万徳さまの御延引、日比物參る事にお氣のみじかいとはちがうて、是はあんまりおそまき、慮外ながら明日と申せば手延な詮議、今宵の中にあらかたの形をつけて、おきたい物と、分別らしう申せば、我とても同じ心、定而今日も万徳は清十郎方に遊びてゐるべし。汝等行て此旨を咄し、つれて爰へ來れとあれば、承る

と末社の茂兵衞、乱遊法師いさみにいさんで清十郎方へはしりゆき、間もなく歸りて、あなたにもおぬかりはない。はや今晩此里を出され、すぐにおぬしの御居宅へ御入、塚の名殘目出度づくしの大酒盛。御祝義とあつて、ちよつと參つた私共にも一兩づゝ下され、大分のお悦び。太夫さまは夜に入てから、おかごにて御出なさるゝ筈、万德さまは追付こなたへ御立寄あそばし、せかぬお顔で跡からおかへりなされうとの事と申せば、始ぶしやうかまへてお使に參らざりし、平田蜘の勘八壹兩づゝを聞て、私もお悦びに參つてまゐりませうと、たゝんとする所へ、万德大臣御出にて、只今はお氣付られて、歷々の末社衆を下され忝い。元來帶の祝ひをも、此方へ引取てから致さうと、存じつれ共、申ても勤の女、世間の噂を聞合して居るうちに、貴殿の推量の通り、此比は頻に我等が子種にまぎれなき評判。尤拙者其おぼえはござれ共、妻子のない我事なれば、此たび生るゝ赤子が、たとへ女子でござらう共、跡取にいたす合点なれば、心を付て念をいれる間がとれて、今迄の延引。此座中の人人も此里の粹たち拔目のない御推量、ずゐぶんかくしたるによくは御ぞんじ有事と、又爰にての悦びの御酒盛、御平產の御祈禱に、御茶引てござる、惡米達をあげてつかはされ、物もらひはづした太鞁共に見事な事をなされなば、非情の大赦おこなはるゝよりは、大キな善根、たしかに玉のやうなをの子こが御誕生あそばしませうと、平田蜘の勘八永〴〵しう口をたゝけど、もはや大臣は宵からの大酒にゆきつき給ひ、外へお心のつく氣色はなく、一代一世の損金、千秋樂も腹たて聲に申をさめ、御機嫌よくお歸りあそばし、お內方にては奥様びろめ、取揚婆々さへ六七人づゝ御勝手につめかけ、來月の御產月を、三十日手前から上下にえかへりて、悦びをまつ賑ひ。生れぬさきの襁褓定め、金銀の胞桶に松竹を畫、誠にめでたい最中に、たのみませうと表に子細らしき聲つき。見れば當世じたての男、黑羽二重の小袖に、仙臺嶋の袷羽織を着て大脇指をさし、つひに目なれぬ人。どなたでござりますぞと、手代罷出て尋れば、くるしうないもの、万德殿にちよと御意が得ましたいといふ。お名はときけば、遊山所で御目にかゝりぬれば、名を申てからがお覺えはない筈、別にきづかはしい事でもこざらぬ。さう申て下されとあれば、手代內に入て旦那にかくと申。万德聞て、さだめて

それは惡所で出相し色友達、此度の樣子を聞て悦びに參られつらん。玄關へ通しませい。咄しがしまばかるい吸物して酒を出せと申付て立出、見れば近付ならぬ男。どなたでござるととへば、いやくるしからぬもの、拙者は堺町近くに罷有る橘六と申者、此度貴公請られし小もんどゝは、久しいなじみにて起請なども取かはし置、二世の約束をも致しぬれ共、金銀づくにて自由のなる勤女、さだめてこなたへ請られて參る事、何程か氣の毒に存るではござらうつれ共、親方と金に勝事がならいで、心ならずこなたへ參つたでござらう。しかし大分の金銀に替て、引取給ふ太夫事なれば、どうした私がふかい約束をいたし置ぬればとて、こなたの物になつた女郎に申分はないが、腹にやどつてをる忰は、拙者が種にまぎれござらぬ。外の種を斷なしに、御自分の子になされうとあるは、おしつけ業のやうに存る。こなたで平產させられて、出生の子を此方へつかはさるゝか、但し此方へ母共に預り、手前にて安產いたさせ忰を取て、產だからを戻しませうや。御ふびん加へらるゝ太夫事なれば、外へつかはさるゝ事は心もとなう思召さう。其段は拙者も同事、こなたの種でないとお聞なされたらば、おのづから疎略に思召して、食物何かに御心つくまい。然る時はどうした喰合で消產いたし、大事の私の種がながれてしまはうもぞんぜ



ぬと、氣づかひ致すも一致なれば、此段を直に相談いたさうと存じて、只今參つた、こなたにはいかゞ思召しますといはれて、万徳當惑して返答出かね、とかく太夫にさやうの覺がござるか承つて參らうと、すべり迯にしてはひらんとせらるゝを、是〻万徳殿、それは御人躰に似やひ申さぬ。今太夫におたづねなされたとあつて、こなたのお影て榮花の身となつてゐれば、さしつけて成程さうしたおぼえがござると、どう申物でござらう。こなたのあげづめになされて、他の者にあはせられぬは、過し五月からの事、拙者があうたは四月末かた迄度〳〵の事。しかれば懐胎いたしたと慥にしれたは五月、其前に數度　男でござれば、腹の中の子は、身共が種にまがふ所はござらぬ、太夫にお尋ねなさるゝにおよばぬ。此方へ引取て平産をいたさせうや、こなたにおかせられて産さるゝや。此二ッの中とくと分別して、只今仰きかされよと、むつかしうねりつけるを、日比お目かけられてお出入申、彦六右衛門といふ牢人、こんな時こそ御奉公なれと、朱鞘に大鍔かけし、大脇指をさして罷出、最前より勝手で委細を承り、千万御尤に存る。旦那太夫にたばかられ、こなたの種を孕ながら、主人にかづけて身請せられ、此家の奥様とならうとふづくりました女を、うか〳〵爰にさしおきませうやうはない。御自分にはよく〳〵



ゝふかう中かはされました證據には、子迄たまる程のお中、他にさしおかるゝは御無念にござらう。御勝手次第に太夫をこなたへお引取なされ。爰はよい直上所でござれ共、さういたしては足元を見るやうであしうござれば、旦那請出しました通りの金高、九百兩遣はされ、誰ぞ手代三人あなたの御宿へついて參られ、金子請取てかへられ、小主人は我等が金と引替にしてお供申て參る。なんとよい了簡でござらうが。是にはこなたの申分はない筈、早〻金子つかはされよといへば、此男ぎよつとして、いやさ身が子をほてつぱらにやどしおきながら、身上の手厚に目がくれ、日比の契約をたがへ、万德殿の子種と拙者を見すてゝ、こなたへ參るぶ心中な女めは、此方に望はござらぬ。世の諺に腹はかり物と申せば、ぶ所存成女の腹にやどりましても、種は私がに極つてござれば、どの道產おとしますと、子は此方へ請取り申ス。こなたで平產させられうならば、必子の滿足にうまるゝやうにたのみ存る。少でも疵がつくか、又はながれたなどと仰らるゝと、外の人は相手にとらぬ、万德殿何時もお相手でござる。安產の時分は左右をなされ。又近日見舞に參らうと、いやな一言を殘してかへりぬ。万德內に入て太夫に此次第を語らるゝに、日本の神をかけ、更〳〵さうした覺はなし。しかし爰に存當る事は去お歷歷について參りし、橘の六郎平といふ太鼓持、我身に執心成よし、大臣の目顏をしのび、しつこい程くどきぬれ共、女郎をなびけ自慢の眸だてがにくうもあり、又ひとつには、我身を不便がらせらるゝ大臣の、召つれらるゝ末社と、うしろぐらき事をして、若あらはれては、戀の品にはならで、惡性の仇名たち、此身の一分すたる事を思ひわきまへ、終に心にしたがはざりしが、そのにくしみに、今わしが出世の障と成程の事をいひかけ、こなさまにあいさうをつかさせ、此家を出さんとの巧かと存じます。成程春中は、折節そのお歷〻に六郎平がついて參りぬれ共、二親を誓言に入て、ほんに手を一度握らせた事がない。さりとはにくいいひかけ、お前の思召も迷惑と、淚をながしてのよわり。何がさてさうした事であらうと思へり、是には何とぞよい分別がありさうな物ぢやと、不斷お出入申末社共を殘らずめされ、汝等が知た中に橘の六郎平といふ素人末社はないかとあれば、牛込の和平といふ男が、成程それは堺町邊に罷有者、則私が家請に賴ん

で慥なもの、元來は金椙に、隨分さむう暮した奴でござりましたが、われ〳〵が中間寄て、先橘の六郎右衛門が後家へ、後づれに肝煎、三年以前から、堺町の家を我が物にして、此比はよほど身持あげを仕り、中間でもあんまりようは申ませぬ。あいつをきめさせうなら、六郎平が外に念比してゐる、ふかい女房があると、內の嬶につげますと。其まゝ家鳴して、山の神がおこり出し、裸で出てゆきやと、それは〳〵物の見事な大口舌。いかな六郎平も、ひるに塩とはなせば、万徳悦び、是はよい事をきいたと、件のお目かけらるゝ牢人彦六右衛門をまねき、和平今の咄をしてきかされ、どうぞかうした事について、一思案して見られよとあれば、畏て工夫し、さいはひお出入の日雇が女房、夕ア產をいたしたと、爺が內かたへ鰹節をもらひに來たと聞より、其生れ子をとりよせ、懷に抱て堺町の六郎平が所へゆきて、案內なしにつつとはいれば、六郎平それと見るより、ずつとたつて表で樣子を聞んとするを、それ此方に合点ぢやと、態內へ入て、是は御內義樣でござるか。此子は六郎平殿のふかういひかはされて、女房にも思ひかへぬと、いとしがられます、女郎の腹にやどつたぬしの子、さきほど平產いたした故に、お約束の通り赤子樣をつれて參つた。慥に請取ッたとの一札をしてこされよといへば、六郎平は迷惑さうに尻が下におかれず、コレやくたいもない事ばかり、女房が誠ぢや思へばわるうござる。じやれともよい位な事がよい。日比そちがおれを大切に思うて、悋氣ぶかいをしつて、腹立さしに惡功な衆ぢや、はやう連ていんで下されとじり〳〵とまうて氣の毒がる。彦六右衛門小さみよく、いや是六郎平、それはどうしたいひぶん。最前態〻來て、子は此方の女房共が手そだてにする程に、疵のつかぬやうにして連てこいとはいはれぬか。契約の通り連て來たに、太儀なといふ男への一礼もいはず、どうした事ぞと臺所へにじりあがれば、花車はくわつと上氣して、眼をすゑ齒をならして、コレたはけ、又外で女房三昧して、子迄でかしやつたの。どこの牛の骨やらしれぬ、女の腹からすべつたがきを、おれに取てそだてとや、そりや成まいわいの。とかくさうした惡性な男を、此內には一日もならぬ。其上な鼠小紋の布子も、こちで出來たのぢや。それぬいでいんでたもれと、隣むかひをはゞからず、大ごゑ上てわゝり出せば六郎平迷惑し

て、彦六右衛門にさま〴〵侘言し、重て此事について御家へ足をふんごむまいと一札して、やう〳〵と彦六をかへし、跡は花車への斷、脚布でしばられたもしれずゝいかに色の道なればとて、分際に不相應の戀はせぬもの、ぬれもよいかげんに、相手を見てしたがようござる。必若い衆ようきかせられい

第四 敎の駕籠にのりの道連

付りなき骸の肌につけた千兩の金仏

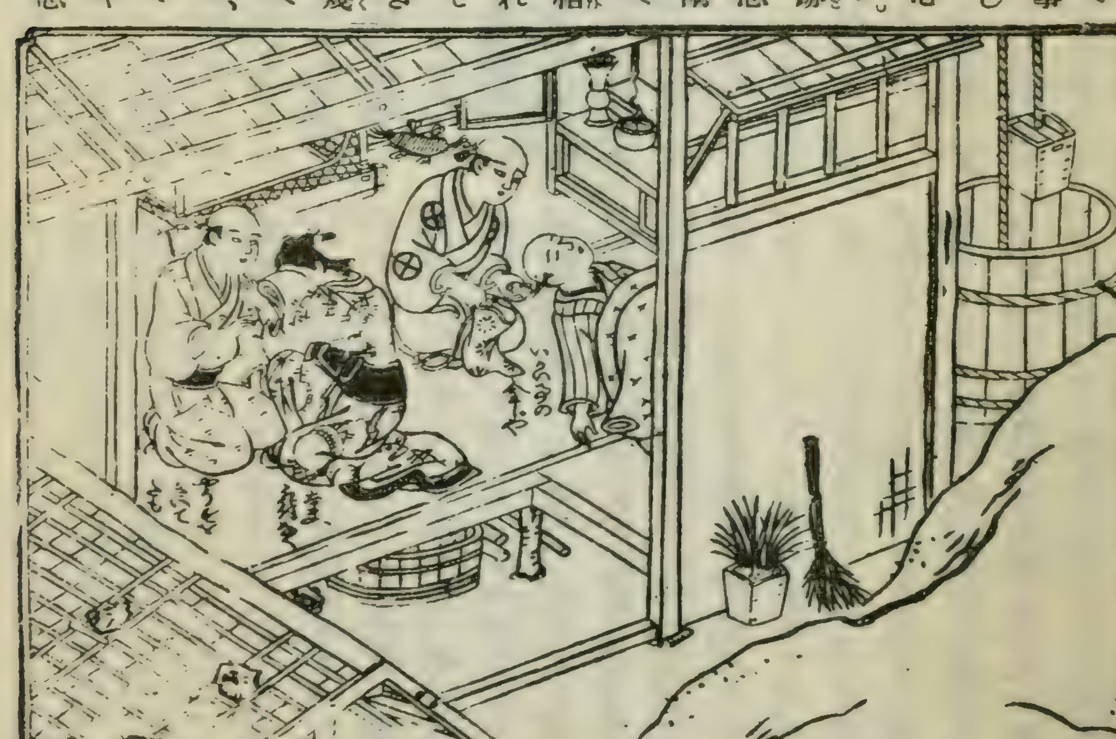
色道因果經の中に、上がたの大臣の事を引て、女色信心の輩に、好色因果の道理を、說しめされた、有がたい要文を粗說て、聽衆眠をさまし申さん。惣じてながれの身にかぎらず、一切の人の身の行末はしれぬ物ぞかし。ことさら今時の大臣きのふは揚屋に高枕して、寢ながら太夫に鼻かませ、引舟に足の指を一ッ〳〵ひかせ、太皷女郎に哥を望ながら、それには耳もかたぶけず、末社あつめて至り咄し、隨分高う吹上し風も、けふは梢の落葉ひろうて薪とするごく、其日の煙をたてかねても、柴や町狂ひをとまらず、家藏諸道具身の廻りを皆になして、今といふ今、くはねばひだるいといふ事をしつて、小皷かたげし肩に、駕籠の棒をおひて、大津海道をゆくもかへるもこれやこの、下職はなりよくつゐ駕籠舁の六兵衛となりて、相肩の七兵衛と姿も心も同じ年ばへ、札の辻には腹からの睟の舁手共が集り居て、中〳〵乗手を素人の手にはわたさず、おのづからの雲助、つけずてにして行旅人を、跡から走井にて追付、三条の大橋迄貳百五十に買て、暮相より乗て行に、次第に通りうすく、替かごも見えずして、是は大はまりと、乗手の業のやうにつぶやき、日の岡を過て、遠寺の初夜をきくにつけても、けふの仕合をうらみ、足をはやめて蹴上まで來て、仕舞かゝる茶屋の軒にたてゝ、茶たばこになやみをたすけ、迚も見合てしめてやつてから、最早替もこまいに、御約束の橋迄ゆきてしまはうと、かごをかきあげる時、此乗手思ひの外慈悲者にて錢出して極めたればとて、橋迄心なく乗ても行れまじ。是から汝等には隙をやるぞと、かごの前の風呂敷包手づからわゆがけ、草鞋しめはき茶の錢拂うて出らるれば、かごの者共夢見たやうな仕合、世の中の御善根と申は外になし。有がたき御心入と悦び、すぐにかご引かたげてかへるにつけても、昔をおもひ出

し、をさなき時はあらき風にもあてられず、かりそめの物まうでにも、お乳やめのとにいだかれ、若子〳〵とそだてられし其むくいかと、過にし事思ふに付て、床しき姥がふところといふ所を通るに、比しも霜月八日の夜、月うすく物の色はたしかならねど、京の人の聲して、からかごならば八丁迄たのむぞ。一足もひかれぬとなげくを、二人共にあはれに思ひ、迚もかへる道なれば、いかにもやりましよ。三百ぢやが合点かと、かごをおろして件の旅人をのせんとするに、嵐はげしく北時雨もいたくふりて、手足もひえわたりて、此乗手をちこちのたつ事も成がたく、世のかぎりなる聲して、汝等にいひおく事のあれば、近くへよれといふ。氣の毒なる人を無用の欲にて乗けると、後悔跡へも先へも行がたし。さりとはよわき御事、今すこしゆけば人家もあり、養生成べき事なれば、是口をあき給へと七兵衛はうしろよりかゝへ、六兵衛は岩根のさゞれ水を手にすくひて參らせしに、此男息をつぎ、我は今宵親の金をぬすみ、柴や町の女郎をひそかに請にゆく心ざし、元來病後なれば寒風にあてられ、空しく爰にて相果るに極りぬ。京の所をいふ迄もなし。死骸をもかくし、又は其女郎も身請して、郭の苦患も助けてくれ。此肌着に小判千兩と、委細の様子の書付をぬひつけてあれば、すぐに二人にとらする間、柴や町の哥仙といふ女郎、大かた三百兩では身ぬけなるなれば、其余は汝等が徳にして、我跡をとぶらひて得さすべしと、是を最期にしてはかなく成ぬ。六兵衛は肝をつぶし、是はまづ何とすべきとうろたへ、死人の耳元へよりてよびいけんにも名をしらねば、旅の旦那どの〳〵というてからかへらず。さりとは氣の毒なる目にあふ事と、頭をかけば、七兵衛はそれにかまはず、かすかなる懐より、金襴の守り袋取出し、其中なる書たる物を出して大道になげつけ、土足にかけてさん〳〵にふみにじり、僞りもの、やけ傾城め、此姿に成しは誰ゆゑなるぞと、歯ぎしみして腹をたつる。やれ何をいふ、まづ此亡者はどうするぞ。おればかりに世話させずと、とも〳〵思案をしてくれい、いらがやうに身は腹からの駕籠舁にあらず、近い比迄色道一通りにはおそらく垢のぬけた、風呂やの關の万作といひし大臣のなれのはて、柴や町の哥仙とは、によつと郭へ出し日より我物にして、たとへどんな身に成ても、末は

火の中水の底迄も、はなすまい、はなれまいと七枚つぎの起請を取おき、此身になりても年の明をたのしみにして暮せしに、京にかうしたふかい男のある事を、今迄我につゝみ置て、ぐつすりと請られ、我等が事は空吹風のやうにのせをつた所がにくいと、眼をすゑて腹をたつれば、六兵衛手を打、扨はそちは聞及びし万作大臣か。我も哥仙が片腕にも成程な米や町の俵六といふ大臣、それ日外揚屋やり手に金づくめでのみこませ、哥仙をつれて石山の螢見も、尻もむすばぬ糸で、針を積でもたまらぬ騒に、すつぺりほんの棒一本、女郎にのせられた替りに、人をのせる身過とはなりぬ。其時汝は氣を持て、一日置イて明の日、高観音の舞臺にて、暮かけての凉見の趣向、我方へ見よかしの全盛、世にある時は名のみきいてあはざりしが、ふしぎの縁で相肩になりて、今迄いはずかたらず、さりとは我もふかい物ぢや。兼てはそちもきいて居よう、我哥仙を請出さずば、ふたたび此町へ足をもふんごむまいと、はちげんをはなし急に引ぬく思ひ入なりしに、うらめしきは御天道様、俄に風雲丑寅の方ゟ矢をいるごとく、是は一勝負と買こむ程に、藏〳〵は大かた我等が米であつたに、翌日からの上日和、浪靜に、松枝をならさず、次第にさがりにおちて來て、うけうと思ふよねは買こまいで、思はぬ米の買おきに、五千兩の損金。下



帯迄もはづし、三歩半に侘て、今此躰になつてのけ、哥仙が手前面目なければ、我は女郎にすこしも恨はない事と語れば、万作も息杖のをれるほど地を打て我をヽり、しらぬとて今迄無益の咄しをして來た。とうからしればこんな昔物語して、年をよらせぬ事ぢやにと、互にいにしへを語りあひ、扨此死人所もしらねばいづくをそこ共しらせがたし。なまなか人にきかせなば、肌つけ金に目をつけ、我ゝふたりして打ころしもしたるかと、却而むつかしい難題にあふまい物にもあらねば、たゞ沙汰なしにとりおくが上分別成べしと、死骸をかごに打のせ、つれ節に六字つめの念仏申てかへる道すがら、六兵衛身ぶるひしてかごをおろし、大地にどうどゐすわりて、すゝりあげて啼てい、七兵衛見て驚き是は六兵衛在所風で、一升啼をして見るのかといへば、さら〳〵さうした事にあらず。近比いふも恥しい事ながら、世につれて心迄が是程に淺ましう成物か。何をかくさう最前から、跡肩をかきながらつく〳〵思ふに、汝とつれずは、千兩といふ金我一人の物と成べきを、うらめしき今宵の相肩、所詮そちを此野はづれにて打ころし、ひとりして丸取にせんと邪なる欲氣さし、先から此杖を後より幾度かふりあげしが、思へば人間わづかのかりの浮世、目前に亡者を見ながら、いくばく生のぶべき此身ぞやと、我心からあさましく思



ひ、しきりに涙がすゝみ、思はずも汝にとはれて、面目なき懺悔物語と、聲をあげてなげゝば、七兵衞もけしからす啼出し、息杖を持て六兵衞が前にさし置、是にて我身を思ふほどたゝいてくれ。さりとはそちは心はづかしい物かな。何をか我もかくすべき最前御廟野にて、とけもせぬ草鞋の紐がとけたとて、むすびなほすふりをせしは、汝がよそめをするうちに、眉間を打わり此金をひとりしてせしめんと、杖取なほし打つけんとしたれ共、そちもその心がけゆゑか、油斷の躰も見えざるゆゑ、首尾あしくて打そんぜしが、是非此末ではおのれやれ、聲たてばたてしだい、思ひこうだる此小判、我徳にせではおくまじと、今迄も思ひ込しに、そちは我より罪あさく、はやく懺悔をせし事、近比はづかしき心根、汝がさんげをきかずは、中／＼我は大欲の思ひ立やみはせまじ。口をしや貧になれば是程心が邪にも成物か、我元來は都立賣の三代長者、子林靜閑といふ有徳人の妾腹の子なるが、靜閑は親ながら婬乱なる天性にて、すぐれし美妾を二十人召抱、子やどればそれより倦て、平產すると男子にても女子にても、すぐに母につけて百兩づゝの敷金そへて、他所へ緣につけられし。我は靜閑秘藏の第三番めの妾、おるりといへる腹にやどりて、風呂屋の關の万助方へ母ぐるみにゆきて、万助跡目をつぎて万作と名のり、兩親はてられてから讓のぶんを皆になし、かくいやしうは成たれ共、本種は町人ながら、京そだちの歷々仁に筋めとして、かゝる淺ましき所存をさげける事の恥しやと、涙と共に語れば、六兵衞大キに肝をつぶし、我もその靜閑の五番目の、お花といふ妾腹、則ぬしの手代米屋町の俵八に、我と共につかはれ、跡職取てなくなし、養父はしなれて母は都へ立かへり、靜閑かたの臺所の世話やきてゐらるゝよし、是は大かたならぬ因緣、まづそなたはいくつにならるゝとゝへば、承應二年三月十七日にむまれて、今年三十三といふ。我も三十三なれ共四月十八日が誕生日とて、母のいはうてくれられしを思へば、こなたは我より一月先に出生あれば、我が爲には兄上、しらぬとて只今迄の慮外共、御高免くださるべしと、地にひざまづき執すれば、是はふしぎの對面、まづ／＼爰は途中なれば、宿にかへりてあらためて盃せん。おもへば是も此亡者ゆゑ名のりあへぬれば、兄弟の緣をあらたについでくれられし、恩ある死人そまつには成

かたしと、又駕籠に打のせ、兄役なれば時宜なしに、其まゝ先肩かくぞと、是方詞をかへて、我宿に立かへり、死人をかきこみ火をともして、先肌着のぬひめをほどき金子を出せば、一通の封じ文あり。上書を見れば、京立賣子林靜閑樣、同名乙次郎とあり。是は奇妙な事共、まづひらいて見るべしと、封おしきつてよみて見れば、我等此度金子千兩盗取、御家をしのび出候事、至惡性にて取出候には無御座候。御めをかけられ候末の女、おみきと申腹にやどりし娘おかんと申は、母共に坂本へ緣に付られ候所に、先の男よからぬ勝負わざに田畠を打込、あまつさへ父御の種の娘おかん迄も柴や町へ傾城に賣つかはし、今は哥仙と申よし、大津に此沙汰有之よし、腹こそ替れ現在の妹を傾城に仕置候事世間へ面目無之候＝付、度〳〵私母へ此妹請出し、何方へも緣に付られ下され候へかしと願ひ申候へ共、母義は本妻にて候ゆゑ、妾共の子共の義は他人の樣にぞんぜられ、打すておき候へと、曾て承引無之候ゆゑ父の御恥一家の面目をすゝぎ申さんため、金子千兩盗出申候。私義本妻腹とて末子ながら、跡目に御立下され候御高恩有がたく存候へ共、假にも親に斷なく、まさなきしわざ仕能出候上は、ふたゝびかへり申心底にて無御座候に付、爲御斷如此に候以上。兩人よみをはつて一度に手を打、扨は此亡者は我〻が爲にも弟成が、はからずも兄弟が手にかけて、野送りのまなびをせしこそふしぎなれと、まづ釣仏壇にみあかしともして其前に死人をなほし、香花をそなへ廻向してのち、七兵衛いへるは、もはや生ては居られぬわ。いかにしらねばとて、現在の妹にちぎりをむすび、そちと我とが買論、其上に誓紙迄かゝせて畜生同前の所行、汝は我に面目有まじ、我は汝に面をあはすもはづかし。いざさしちがへて死なんといへば、いかにも〳〵御心底察し入て至極せり。去ながら、哥仙を請ずにさし置なば、弟が存念たち申さず。草の陰から恨めしうも存ずべし。まづ妹を請出され、其上にていかやう共、三人一緒の相談次第に、覺悟を極め申すべしと、斷をつくし申ければ、成程是も尤なり。然らば汝かの里へ立こえ、首尾よく請て來られといへば、それは兄がひにこなたござれと、此せりあひしばらく成しが、七兵衛しあんを仕出し、いにしへつれし石橋町の、なたの四郎兵衛といふ末社をよびよせ、此比の風空に思ひの外の仕合して、六兵衛とくんで大分

の德を得、俄長者となつたれば、兼而の執心此時はらさうと思うて、哥仙が身請がね三百兩のけておいた。分あしからぬやう取持て、しゆび能請て來てくれ、祝の水はのみこんでゐると、先一兩いたゞかせば、是は忝じけありまの湯、ふつてわいたやうな仕合、明日御左右申べしと、此男が取もつて埓へゆかずに、女郎をまんまと請出し、はにふの宿につれ來れば、是はしやれた侘ずまひ、万さん思ひの念力がとゞきまして嬉しうござんすと、七兵衛にもたれかゝれば、口比とちがひてにがい顏するも、をかしかりき。先以そちが陰ぢやと、四郎兵衛には又三ばいの祝ひをとらせ、宿にかへして、其後六兵衛も裏より内へはしり入、靜閑娘のわけをはなし、死人乙次郎がなき面影をも見せければ、哥仙段々の様子をさゝ、乙次郎が死顏を見てなき出し、三人一緒に身の上の因果、死ぬれば世間に沙汰せられて、親に耻をあたへる道理と、死ぬるにも死なれず、三人一所に髮をおろし、小關に草庵をむすび、乙次郎を其庭に葬り、印を立てなき跡を吊ひぬ。されば各々我等が身の上に、かうした事の有まい物でもござらね共、そこがしらぬが佛と申でござる

四之卷終

傾城禁短氣 五之巻 目録

第一 難波の新艘が身の上の新談義
付り 姉女郎も色道の奥義まで手をとりての指南

此段ハ 女郎功者なる手くだにて揉み有頂天の身の上を語りてひとつも色なき新艘を仕掛の極意にて新艘がふる葬りに見ゆる

第二 外面似菩薩内證ハ極まる女郎
付り 一寸者ハ情あるをのぞむわけ
おもハくの秘密を記せり

此段ハ 黄金の力にて旦那の上へむかふ事とも又けなげに付くれし出議にとりまぜたる縁あれど流生に時ならぬ事どもなどにおもしろく記せり

第三 女郎の手管し迷ひの元じや
付り 紋日とくらさ枕の中にちやうもく

此段ハ あるまき流生紋日物日に女郎の知恵の細かなるまことの方便にて物語る事にあおぐ事を記せり

第四 身もふる上をかくる女郎身上物語
付り 内々の分別わるき新町の客

此段ハ さのみ下が下生れがわら膳に目をつけ一生んの事も女も大臣の果てに見えけるな偏に依りて白き事どもしてそれを施し記す

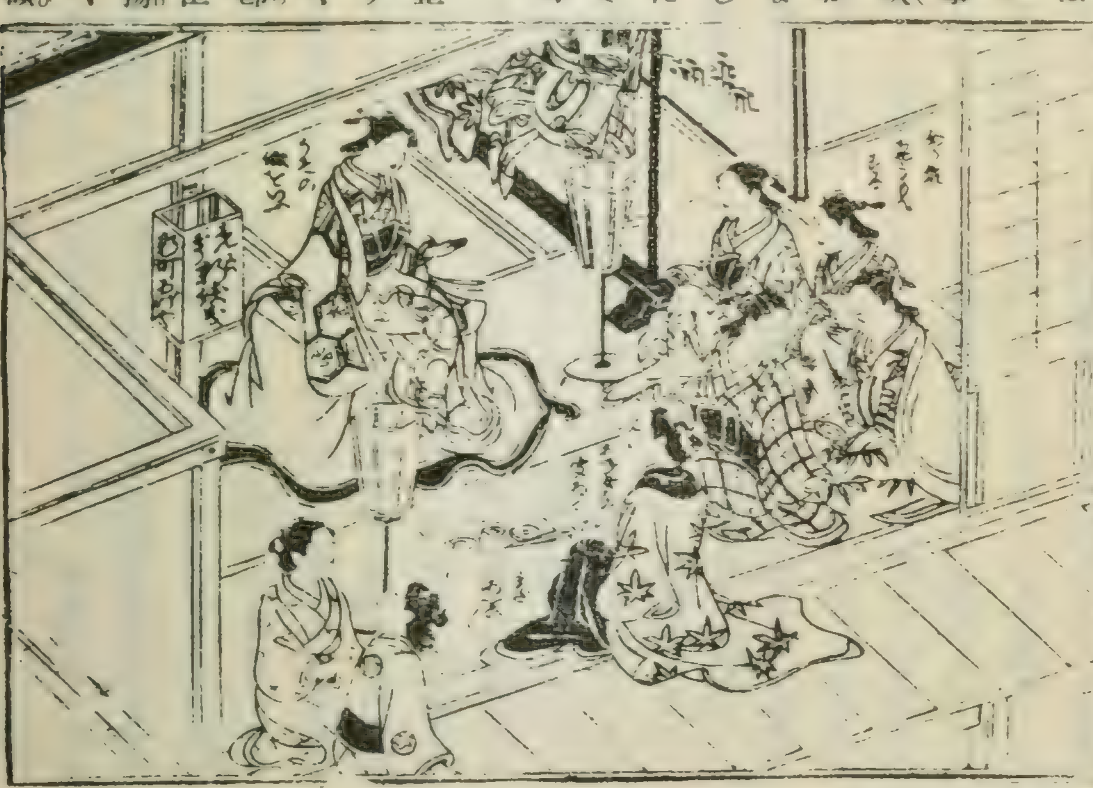
第一 難波の新艘水上の新談義

付り姉女郎色道の奥義手管の指南

難波西横堀新町の一廓、川流山瓢箪寺に、名題の太夫にもみこまれし禿、出世して松の上座をゆるされ、今日水上の新談義ありと、夜見世の燈明かゞやき、寺中九軒の其一个寺、吉田院方には五ゝ三の高盛、嶋臺の松に小判の花咲、衣桁に十二の小袖をかけ、夜着蒲團錦の山をかさね、一ッ家の女郎十一人、衣裳くらべの花をあらそひ、次の間迄に居ながれ、千秋万歳の千話箱火燵に、唐織の蒲團をかけ、能化の姉女郎寄掛て聽聞あり。敎おかれし客をおよがし、節供正月をくゝりつける方便、退客をとめるとめやう指爪髮起請の書時、泣て見せるしほあひ、ふるとふらぬの身拵、色道至極の奥義をしめされ、今日口明の初談義、聽衆は睟の女郎共、頭の白き碩學の遣手、耳をすまして聞居たる。新艘子擧屋にのぼって發願の紐をとき、紅舌をうごかし述られける。▲夫戯言經に曰、三界無庵遊女裸とてながれをたつる女は、請出す男なくして、勤る中は我家とさだめて住する所なく、まんざらの丸裸にて、親方からの仕着の衣裳も、我物とはさだめがたし。はやらぬ時は位をおろされ、或は所をかへられ、三界を經廻り、無緣法界の客に身をまかすを以て流女といへり。然るに同じながれをくむ女の身とむまれ、三个の津の色里に出世し、居成に勤るといふは、遊女冥加にかなひたりと、有がたう思うて間夫狂ひをせず、心まめに客衆の氣をとり、女在なくつとめば、追付黄金の光とともに身請せられ安樂國に座して、西方のみだい所とあふがれん事疑ひなしと、内方のくわしや如來の御敎、何といづれも有がたいおしめしではござらぬか▲姉女郎問テ曰何と花車如來の敎にまかせ、そなたは間夫狂ひをせぬ氣か、但しする氣か▲新艘子答テ曰抑けいせいの身は、まづしき親の爲に、あまねく主取をする事、親方も金銀に替て世を渡る業はいづれも同じ。それに疎略をして勤をかき、かくし男をこしらへてあふ事はもつたいなし。客さま方は心をなぐさめる爲とて、さりがたき日を爰にくらし給ふに、其氣はそむきて我物つかうて間夫狂ひ、浮名の基、勤の妨、さらにする事にあらずと答られければ▲姉女郎歎て曰弱氣かな新艘子。其律氣さでは太夫の職は久しくもてまじ。尤今時金つかふ大臣は稀なるに、それには女在して、

我物をつかうて男不便がるを初心な女郎は、うつけのやうに沙汰せうけれど、間夫する程の女郎に、昔から弱きはひとりもなし。勿論ぬるき人の隠し男はならぬ物なり。惣じて間夫せぬ女は、物の哀もしらず、おもしろき事もなく、又全盛もせぬものぞ。都の吉野さまは鉄職に枕をならべ、江戸の尾崎さんは病難人に身をまかせ、此里の夕霧さまは座頭に一度の情あり、これらこそ誠の太夫ぞかし。色を事とし、情を商賣とする女郎が、貴賤にかぎらず執心なといひかけられ、親方の手前がこはいの、やり手が聞がおそろしいとて、つれなくいはゞ、戀しらずと噂せられん。是を思ふに、ひかゆれば一ぶんよわし。つのれば身もすつる程に濃なる、此よい加減といふ事を悟るが太夫職の肝心ぞかし。親方の手前をおもひ遣手がきくをはゞかり、一生悪性せずに、旦那の氣に入事斗心にかけて、客のいふやうにおろ／＼とまはりては、晬なる大臣は、とろい太夫と見すかし、つひ余の太夫に仕替て長う繁昌はせぬ物ぞ。數ある客の中に、根づよく見ゆる大臣あらば、是を取はなさぬやうにつなぎおきて、外のはい／＼客には張つよく出ると、おのづから手に入れたがりて、我人戀しのび、おてきの方からあき日をたのみ、したうて來るは知れた事。かう勢にのつて來ては、したい事しても浮名は立ながら、三十日に四十五づゝも賣ば、親方の儘にもならず、やり手も見ぬ顔して、太夫さま／＼と八方から用ひて、威勢を見する事ぞかし。親方やり手が手前をおそれ、浮名をいとうては全盛はならぬ物なり。客に内甲を見られしこなさるゝと、太夫の位がなく、張がきかぬものぞ。大臣の方から機嫌を取ほどに、しこなさねばうれしからず。又物にもならぬものなればよく是を勤學せらるべし。扨正月をはじめ年中の紋日をくゝりつけて、夜やすくねるうちに、約束の大臣宿にかへりて熱さめ、十盃機嫌で請合て戻つた事の悔しうなり、時の間の風のなびきに替るは潜上大臣の心、忽に女郎へ難義をもつて來て、くぜつ仕舞に、手をよく紋日をのがれんとする男を、どうしてそなたは又本の物にして、其儘紋日をくゝりつけるぞ、此仕掛聞たし。新造子の水上の新談義といふはこんな事を稽古させうためぢや。其しこなしを説てきかされよといへば▲新艘子それは其大臣、女郎に何にもせよ、難題をいひかかる時、さりとはさもしき御心底。よしや我身にあやまりあるにもなされま

せ、今口舌して御退なさるゝと、九月の紋日の御世話をやかましう思召しての事と、口がましき遣手のかめが廓中をふれあるかば、わしがわるいとは申さいで、お主さまのお名が出ようとぞんじて、たんと氣のどくに思はれますと、紋日のへらつかはるゝための仕掛の口舌ぢやと、耳こすり申なば、おのづから恥て、よい／＼いはふと思へ共、今いへば物日がいやさに四の五のといふとさげしまるゝが無念な、見事に節供しまうてから申さうと、出なほしますはしれた事でござるといふ▲姉女郎かぶりふって曰いひ廻しの魂膽が若い／＼。たとへば大臣無理をもつて來さうなる顔つきの時、しみ／＼とふかうしかけて、今申もいまめかしき事ながら、尤外にも不便がつて下さんすおてきさまも多けれど、わしが身の上の事打とげて語り、心便りにいたしますお客はぬしさまのけて外にないゆゑ、ちと御相談申たい事があつて、此比はそよと吹風の音信も、もしやお出かと心待して居ましたに、ようこそけふは來て下さんした。すこし御内談いたしたき事は、此程兩度住吉屋てあひまする、西國の大臣が、此方いやな程のぼりつめ、髮を切たらば、九月から正月迄上づめにしてあはうと、無分別にいひつのるを、いづれも爰は切所ぢや、節供ひとつさへしかねる大臣おほい時に、半年ぢかう揚づめの大臣、又はできまじ、是非に切と遣手の龜が、額



たれの剃刀あてがへど、たとへ根引にする大臣なればとて、氣にいらぬ男に切事はいやぢやといへば、我儘な太夫さまぢや、指髮切に女郎のならひぢや、身に疵つけずに勤がなる物か、手柄にさびしうないやうにあそばせ。男好してよい客を取はなし、はやりやんで太夫から二疊敷の住居、今まで幾たりか見た事、房付枕が丸太の引切枕に替るは浮世、今見るやうなと、人中でやり手の鑑が、扨もむごい事をいひまする。私も太夫といはるゝ身ぢやもの、すいた男なら髮はいふにおよばず、命でもなんの惜かろと、男のひざにもたれかかつて、習の涙をこぼし、人も聞程に泣出せば、大臣胸元がしわ／＼としてきて、是はあちらこちらの詮議に成ける、けふはなんでも見事に口舌をしかけて退か、さなくは髪か指かをきらす心底にて來りしに、思ひもよらぬ事をきくは何日ぢやぞ。我を便りにして、かく打あけて語りかゝるこそ因果なれ。爰は八幡見捨がたしと、まんまと一ぱいくうて、數ならねど我等がゐるぞ。そんなたはけぬかす客は、はねてはねちらかせ。節供も正月も此男が請込からは、世界にこはい物はないぞと、頭から大キに出て、我ひとりして万事を勤るものぞ。仕掛ばかりにて男はどうのぼさうとまゝな物なり。つゐすたる文引さき、かい丸めて是を打つけ、分あるやうに見せかけ、男によろこばすやうなしこな



し、不斷心がけて上手をつくさるべし。されば客によつてしたゝるきを好むあり、しやんとしたをすく人あり、大勢の付合の中にて、手入た風をして見せ、ひけらかしたがる男あり、連の手前をはゞかり一座はさらりとして、　　しめやかにはなしたがる大臣もあり。此替りめの人〻の好める風は、二三會出あふと大かた樣子のしるゝ物なり。しやんとしたを好み、　　　　、くを悅ぶは粹なり。したゝるきをすいて大勢友達　　　　　　　　、しな　　、　　　　じやら〳〵いひたがるは、いかう前方な素い人と心えべし。此したゝるいを好むわろは、しら〳〵しうべつたりとした事をいへば、殊の外悅ぶものぞ。こんな男は女郞の氣骨をれず、どのやうにまはさうと、のぼさうと、手に入よき物ぞかし。

たゞしやんとしたを好み、いつも位を取て　　　　、こちからいひさうな事を、あちらから皆いうてしまうて、是は我等をつもるさうながと思ふ事があつても、てきめんにそれをうちこまず、却而その調子にのつて請返答して、女郎につもらしたいほど、つもらしておいての擧句に、なんと太夫おれをそれ程前方なものおやとおもやるか、こちは一ぶん粹のやうに思へど、そなた達の目からは、まだ薄ら見えるかして、折節は持遊びに成事、神ぞ腹はたゝぬが、同じ手間ならば實を互にあかしあうて、末ながう面白うお目にかゝりたい、我等願ひなれば、向後は勤の氣をはなれて、打とげあうてたもるまいかと、眞綿で首をしめるやうに、じりり〳〵といためて來る此迷惑さ。かうした格な物馴た大臣にあうては、手を取事多く、我心から心はづかしうなつて、顏があげられぬ物ぞ。こんな首尾になつた時そなたはどういうて舞をさめるぞ、いひかたが聞たいとある時 ▲新艘子答テ曰 お前のやうな粹さまを、わしがやうな靑い者が、前方なと思ひましたら罰があたりませう。さぞおあひなさるゝ度毎に、初心な女郎ぢやと思召しの程もはづかしい。今仰られたお詞、若偽りならずは、末長う何かお引廻しなされて、粹にして下さんせと、たしなませてやりませう ▲姉女郎重テ曰 それは當つていよ〳〵粹はむつとする事なり。元こちが粹を見そこなうて、あたまからつもりかゝつて、はまりを取たものなれば、そこをいひなほさずに、直にはまつたなりで、こな樣のそれをきかうばかりに、先程からつもるやうな事をわざと申ましたが、手ぼめながらわしも目高ぢや、

お前のやうなお方の此里におなじみの女郎の、ないといふ事はないはずぢやが、てつきり口舌がなされて、ひそかに私に乗かへて、様子を御覧なさるるであらうとぞんじます。それをしらずにうか〳〵あひました時は、我身の不調法に成事、中は釋迦に經なれど、とかく世になじみ程、かはいらしい物はござんせぬ。どなたか女郎はぞんじませねど、わしがお取持申まして、本へもどして中をなほさせませうと、こちがはまつた顔をせずに、直に粹をすゐにたてゝ、かうつけいらねば粹の心はとれぬ物也。第一客を見こなすは女郎の大疵、ぶはんじやうの基と心えられて、勤らるゝが肝心〳〵

第二 外面似𦬇内證は振に極た女郎

付り 一番太皷は情しらずのばち當り

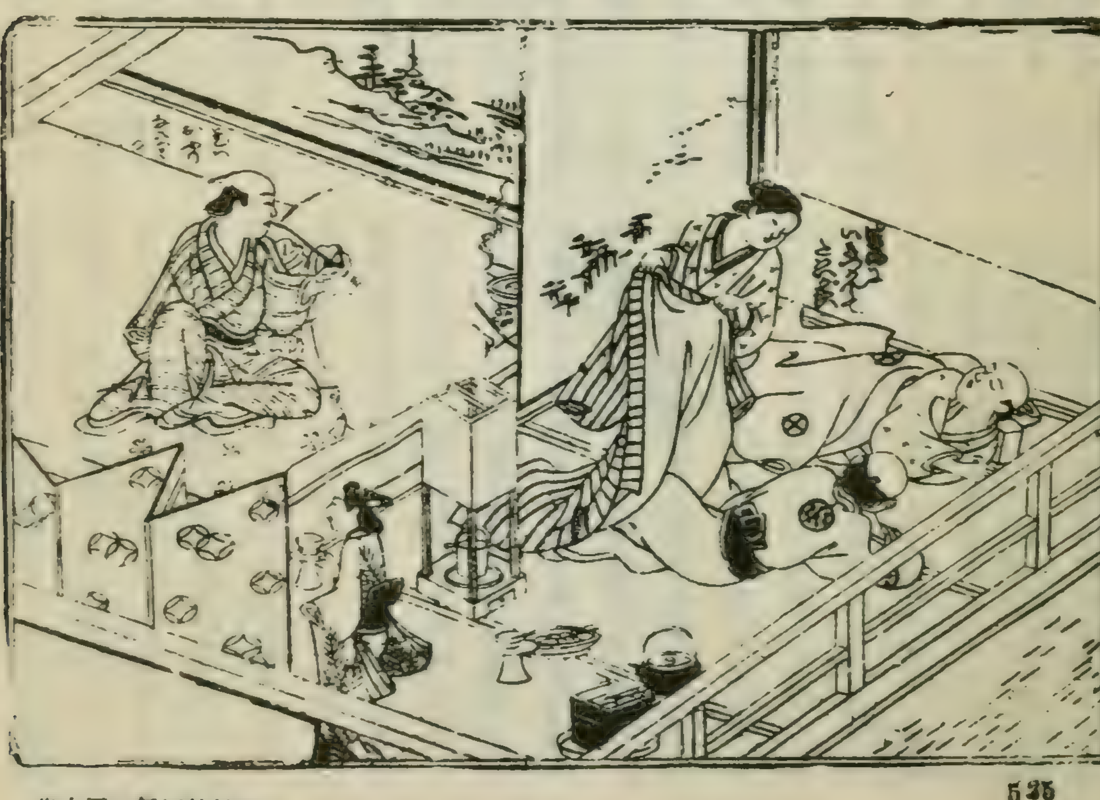
新艘子水上の新談義も大方に述らるれば、最早公界をつとめさせても苦しかるまじと、姉女郎に深間の大臣、表向の水上をしてやらるゝはずに極りぬ。然れば今すこし手のとゞかぬ所あれば、迚の事に高間和尚をたのみ、勤の功者談義を一七日といてもらひ、今出の初心な女郎衆をはじめ、此新艘子の後學にきかせおき度とて、姉女郎の世話として此里の年も明て、祇奉公つとめてゐらるゝ高間和尚とて女郎のすゐこつひを招提せられ、今日より一七日が間、色道奥義の説法つゞまやかにのべ給へば、ひとへに江口の美君再來あつて、愚癡の遊女共を、粹に引導給ふかと有がたくおぼえ、廓の中はいふにおよばず、此津の橋々にかくれなき、名題の呂州遠如上人、歴々の住職をはじめ闇者の月妾坊、葉守の惣右衛門迄未明ゟ詰かけ功者談義を聴聞す。誠に好色はんじやうの時とぞしられける。高間和尚松の位の高座に身あがり遊ばして、万客に嘗させし舌をうごかし、說法有こそ有がたけれ

△情世間分里の遊女、生れながらにして氣の通るにはあらず、禿立より是に身をそめ、此道の粹とはなれり。風俗も古代都六条の三筋町見し人傳へて今の嶋原各別に色増りて、諸分次第にしやれて、万の事も見よげに成ぬ。殊更江戸の色町も、よしや吉原の全盛の時より三谷にうつして、よねの衣紋もむかしとは大キに替りぬ。此里も昔日又市町に有し時は、さのみ遊女めきた

る事もなかりしに、今此新町に改めて、繁昌の時を得て、すぐれたる遊君出生して情のはじめ戀のたゞ中、夕霧大橋せやま朝妻小琴こざつま越前和州半太夫小太夫、是に續て金吾あげまき吉田井筒荻野など、腸明の時めき難波の梅迄も色香あらそひ、初雪土佐河内長谷川遠州、小藤初花もんど、是等は風義心ざし、太夫職にもおとらぬ仕出し女郎といふ衣裳つき此時ぞかし。心も是につれて寛濶に成ぬ。是むかしの世間に金銀多く成て、よい大臣の此里に入込たまふゆゑに、いづれの太夫天職も、根づよき男を頼みにおのづから張つよく、我氣にあはぬ前方な客共はむごくふりつけ、かぎりの太鞁に起別るる時も、それなりけりに上手もいはず、臺所へはいらるゝは勤の法にそむけり。當分慥な男あればとて、其心ざしにてはさびしうなる物ぞかし。惣じて　ふるは、あたまから我心にいらぬ男をふりつけるを、はりがつよいといふにはあらず。ふるに二ッの秘傳あり。漸ゝ取出の大臣はふられても其儘捨ず、いつ迄も手に入迄末社にも内證いはず、あふものなり。かうした男は追付上ゝの粋に成下地と心得、随分眞めいておもはくらしうもつて參れば、なじみてから女郎の爲に成事多し。又ぶ粋なる生れつきは、ふると面白からずと、女郎を替て、こなたの頬當にしかも跡ひく物なれば、あつたら大臣を余所の寶にする



といふもの。すべて初心な客をふるは、情の道にたがへば女郎の本意ならず。ふるといふは、終に太夫にあうた事もない男が、新地堀江、或は道頓堀邊の、儀ぜゝりの學問のぶんせきにて晬顔を仕り、初對面に太夫にあうてもおめずして、よくしこなすといふふりをする晬だてがにくさに、三匁取の遊女とは、各別ちがひのある事をしめさんために、　むごうふりつける事ぞかし。是も座敷から其顔を見すれば、敵かんづいて却而　　てから、こなたのはまる事あれば、成程一座は晬だて殿に廻されておいてから、　見事に見せつけてやるものなり。しかし此晬だて、紋日をも勤めかねまい大臣と見ば、ふつての上にこちの秘傳で、又來るしかけあるぞかし。是等は初心の女郎衆はよう聞ておかせられ、大事の所でござる。扨くだんの晬だてを思ふ程ふつておいて、一番太鞁うつてお客たゝしやりませいといふきいて、身ごしらへして立出るにつゞいて出て、相客の見る所にて耳とらへて小語は、今宵は子細あつて態しみ〴〵としたる　をもかはしませず、かへしますには譯ある事、重て御縁もあつてお目にかゝらば、其時にはしるゝ事、誓文くされよねのすく此頭つきと、ひつしやりぽんとたゝいて、足早に臺所へ出れば、其跡にて連の客共氣をつけ、始てとはいはるれど、今の分ある様子では下地から懇で我々には始た分



にしておけ抔と、こちらをちよろまかすのではないか。いかにしても初會にはすさまじきしこなしと、連だつ友の我ををるやうにしかけおくゆゑ、此男ふられた事はいはずに、どうした事やら始てには、大分の廻りやう、急にま一會出ずば成まいと、宿へ歸りても、是のみ大事の事のやうに工夫して、ふるならば斷にはおよばぬはずぢやが、子細あつて態　　、重而緣もあつてあうた時に、其わけがしれうというた一言どうした事ぞ。是がよめぬと、なんぞ物の有やうに小語ておいた、戻り品の詞を不審がり、とかくま一度あうて見ずばしれまいと、間もなう來るものぞ。もうさう道がつくとこちの手へ入た物なり。扱ふらうと思ふ時は、肌着も古きに仕替ず、袖口ばかりに伽羅とめて上着も其儘きれい成を打かけて　　禿に燈心かゝげさせ、其あたり明らかになし、たばこすひつけ、べん〱となんぷくものみて後、吸口のごうて參りませとさし出し、　　大抵なり。かうした　　、　　て、　　うにしこなす男は稀也。大かたの男座敷では、口がしこく粋のやうに見えて、　　、　　、たま〱いふ　　、我物ら、　見ゆるぞかし。詞かけなば成程慇懃に請返答して、こなたから物數いはず、　結目の堅きあしらひに取つく嶋なく、つい太鼓時分になれば殘念さうなれど、是非なく人並に起て出て、屄目にかけてうらめしげに女郎を見て、友達共の戀をしむをせはしくよびたて、ひとりと歸りをいそぐものなり。我公界をつとめてまだ間もなく未熟成し時、京の野風さんのいとしがらんす、新在家の芳助さまといふ大臣、北濱の千石さまの御誘引で此里へ始ておこしなされ、扇風方にて、あれこれ太夫達を見させられし中に、我身お目にとまりしとて、其夜お目にかゝりしが、京にて分よき大臣共しらず、紬のうこん染の肌着に、手織嶋と見えて糸ふときかすり嶋の着物、其仕立の律氣さにあはせては粋らしき座敷つき、都の祇園町より外しらぬ人であるべきが、座馴たるふるまひ、さらば一ふりふつてこまらせてやるべしと、寢前の身ごしらへに、外の女郎たゝるゝをもかまはず、盃の納り所を改め、座配よく見せて座敷に隙を入、扱例の煙管をくはへ、煙の輪など吹て隙を入、禿をよびよせて何の子細もなき

事を、耳雜談など仕掛、とやかくして隙を取しに、案のごく此大臣座敷での見事さとはちがうて、　有様中〳〵愚なるせんさく、さもあるべしとをかしさを胸に納めてそらね入して、其夜はふつてすましけるに、猶すてずして明の日もお出、夕部に替らぬかうとうなる仕出し、花色紬に茶小紋の日野の羽織、隨分いや風なる出立、地の人ならねば跡をひかれてからが、高がしれてあると、中ぐゝりにくゝつて、又今宵も物の見事にふりしに、さのみ恨らるゝ躰もなくて、明日より十日が間は、此家にお約束申せと、主に仰わたされ、替らずお出、此比の風俗とは各別世界の至り風、千筋染の黄むくの上に黒羽二重の紋付なゝこ織の羽織に、七所拵の脇指、此里にて名をしられし、座摩の前の椀箱といふ末社、其外南の堀の一枚看板にのりし役者一兩人、おぬし共に四五人づれにてお入なされ、其酒あひの面白さ、人形も衣裳とはいへど、是程にちがふ物か、位あつてすゝどからず、ゆたかに座して、一ふしうたはるゝ、小哥さへ、中〳〵うなつた穿鑿、おのづと我身に嗜出、此二夜ふりまゐらせし事のはづかしく、位とる事は脇になりて、機嫌をとる心に成りぬ。夕飯過て小盃にててんがうのみせらるゝ所へ、京ヶ願西那倉鸚鵡乱酒の名物男、御機嫌うかゞひの爲昼舟にて只今着仕るの由、夜前此四人嶋原へわざ〳〵罷越、太夫さまに御目にかゝり下へ參る段申あげたれば、やり手を御見廻におくだしなされたきとの仰を、われ〳〵共さし心得、さやうに遊ばしましたらけがで長逗留なされませう程に、御書簡ばかり進ぜられませ。私共すぐにお供申て、淀から鳥羽海道を經て、柏が本へ直におかごをいれませうとお約束を申、遣手のくにをさしおき、御文ばかり請取て參りました。爰元の御遊山の樣子、繪圖になりともいたして覺えてかへつこお物語申せと太夫さまのくれ〳〵仰付られましたが、先此比のおなぐさみはどうしたもやうでござりますぞと、野風ふみを奉れば、大臣とない御機嫌にて、封じめといて、文おしひらき見させられ、我等此里へ此度がはじめといふ事、誰がつたへて太夫が耳へはいれしぞ。かへりなば新町行のなれこ舞をさせませうと、どれ〳〵もおのぼりをまつてゐるとの文躰、なんぢらなれこ舞の仕樣を、もくろみおくべし。扨是なる女郎こそ、見てやみなん高間さまといふ太夫職、我等逗留中との外お情にあづかつた。皆の者もお近付

になつてお乱申てくれとあれば、彌七おつ取て申上るは、かたのごとく旦那は涙もろうござりますれば、大かたにお情かけられまして、折ふしは京へもおのぼり遊ばしますお心のつくやうにたのみあげますと、是を都の者共が詞の口明にして、さあのみだしてとめどはなかりき。扨　るに、大方

かへりをくふものぞかし我つく〴〵思ふに、今宵　けても、大臣此中のかへしに、慥にあなたよりふらるゝはしれた事、爰はなほ〳〵手づよきがよい筈と、分別かため　、今宵は珍しき都の殿達とのみあひまして、おびたゞしう酔ぬればぶ仕付ながら御免　、大臣　て酔たる躰　、芳助我をゆすりおこし、こなたは今宵で三夜おふりなさるゝが、迚の事にそのいはくを仰られてふつてもらひましたい。様子をぞんぜねばおわびと申手がゝりもなくさりとは此二三日は痩る事でござる。根からいやと思召す男ならば、御ゑんりよなくさう仰られて、是程に物をおもはせて下さるゝなとの述懐、勿躰ない何しにお前をふり申べし。都の粋中間でお笑ひ草の種とならん事のはづかしさにと申せば、鼻もうごかさずに手のよいぬけ句を仰らるゝ。いつ迄もお情にあづからぬ中は、爰に暮して京へとては歸らぬ男と猶なづましき申かけ、それ程嘘らしう思はれ　たら、何のために　、我らは今宵精進でござると、此程の　は見えた事と、推する程　、　あのゝものゝにて、つひ夜は明て　もしらけてすご〳〵とのおかへり。かうこじけたをあぢに仕舞し此跡は、明日説てきかしませう、早朝より參らせられい

第三　女郎の手管に迷ひの凡夫

付り　紋日をくゝつた枕の中込

・ちやかす〳〵

▲高間和尚弁を述て扨今日はきのふのきかけておいた、三日振て四日めの、つめひらきの段でござる。どう思案しても、ふか〳〵とあはれぬ所、此方の弱身を見せると、それからつけ込て、此程のふり返しをするには極つた事、其上常の客とはちがひ、都の嶋原大臣といひ、つき〳〵の末社は三个の津にかくれなき粋共、始旦那をやすう見てふりかゝり、後に御小袖からつきものゝ

末社共からの様子がちがうて、野風さまの噂など申たゆゑに、扨はよい大臣ぢやと俄に女郎が面をつけかへ、それから大分旦那に廻り、灸の蓋せい畏つた、　心得ましたと、それは〳〵後にはいたはしい程の廻りぶん、是一ぱいの難波みやげと、口のきいた惡くち中間が、尾鰭をつけて京の揚やでいひ立るはしれた事、さすれば都のあらゆる粋共の口の端にかゝり、わらはれんも無念なれば、爰は一代一世の大事の所と、姉女郎にひそかに此仕舞のつけやうを相談せしに、姉女郎きかるゝと、まづそなたは昨日どういうておかれしぞと有しゆゑに、大臣のいはれしは、今宵で三日ふらるゝは何とぞ様子もござるか、お氣にいらぬ模様をぞんぜねば、おわびと申さう手がゝりがないと申されしゆゑ、勿躰ないおまへのやうな粋様を、ふるといふ事がござらうか。都へお歸りなされて笑ひ草の種にもならうかと、はづかしうぞんじてと、返答をいたし置しと申たれば、姉女郎おびたゞしうしかられまして、さやうのよわき返答があるものか。其大臣三日ふられても腹もたてず、結構にいうて絶ず來るはくせものなり。初會にふられし恨を、今宵は〳〵と三日迄つられたもの、そこを心よわくなりて打とげると、大キにはねらるゝは目前にしれたる事也。此客そなたが打とげると、其儘返報して、すぐにその翌の日都へのぼるは、見えすいてある事なれば、いかやうの上手いはうと、ふりづめにするより外は有まじ。仏の顔も三度とやらにて、いかな氣のながい大臣もむつとして來て、是は太夫どのあんまりでござる。身共も數ならねど、京の太夫にも相應にかはゆがられて、揚屋柄も握る者が、大坂の高間殿に五日つゞけてふられたの、十日ながらはねられたのといはれては、何共男の一ぶんが立ませぬ。かうした譯ゆゑつゞけてふつて、眞の　をかはさなんだとある、分の立すべを仰きかされて、都へもどつても一分のたつやうにして下されと、むつかしう出るは極つた事。その時居直り、さう思召すは斷、成程此程ふりましたる分をたてゝ、御一分のたつやうに仕りませうと、剃刀出して、指か髪かを切てなげだし、此間私がふりました譯は是でござるといふ時、肝をつぶし是はどうした御心入、いよ〳〵ふしんに存ると、けうとい顔をして尋る時に、さればお始てお目にかゝりました夜よりさりとは面白きおかたさま、どうぞ末ながうお目にかゝりたい物ぢやがと、どう

した縁やらおもひ入れしに、つれだちてお越なされた、北濱の千石さまのお引合に、都のお方にてしばらくの御逗留の中、おなぐさみにお出のよし。然れば今宵あひましては、ついおのぼりの程もしれず、爰をふつて氣をもたしましたらば、つゞいてお出なされうものとぞんじ、あひましたいは首だけなれど、何とぞ此地に長う逗留させまして、一日成共日をかさねてお顔を見たさにふりましたればこそ、都の野風さまといふ花に、しばらくもはなれて、今日迄もお越なされて下されたり。初會に心よくあひましたらば、京に増花のある御身なれば、何しになじみもなき私に、何がお心の殘りて、つゞいてあうて下さるべきや。此心ゆゑ此間はわざとつれなう致しました。かう心底を打わりますからは、此程のにくしみに、たとへ裸身にして、あげやの門へつきだされましても、苦しうござんせぬ。今宵はどうなつと方樣のお心まゝに、此身をまかせますしるしに、髮を切てお目にかけしは、今いふ此心底に僞りのない證據、心中では切はいたしませぬと、いひをさめて襟元へ顔をおし入ると、いか成肆もうれしがるしかけぞかし。かう名乘かけて此中の返報に、丸になつとなされ恨にぞんぜぬと、題を出しておくからは、いかやうに返しせられ



ても、こちの恥辱にならず。其上かく女郎にいはれて、腰骨のをれぬ男は一人もなし。先さまが粋ほど、よう請取手ぢやと、姉女郎のをしへを請て、其通りにもつて參りしに、案のごくさすがの粋なれど、是は思ひの外成御心底。よし僞りにいたせ、お心入を反古にはいたされまい、しばらく此里に逗留いたして飽れてかへりませうと、又つゞけて十日のやくそく。其夜しつぽりとあうて、上手のある程つくせし程に、大分の悦びにて、おのぼりの節みやげとて、今の世の鹿戀女郎の身請の成程金下されて、近い比迄かはらず念比にして下されしが、是は初會に其客の樣躰を見ちがへ、粋だての男と思ひ、にくさにひよつとふり出して、どうも仕舞のつかざるを、功者成姉女郎の智惠をかりて、上首尾にせし事也。然れば女郎は仕掛が大事と心得て、常住不斷、たゞ有がたき方便の仕掛を工夫し、月の凡夫をすくはんと心がけらるべし。粋の客はすゞばけを以てこかすべし。月の男はなづみたる風をして、のぼらすが肝要なり▲新艘子紋日役日問テ日の仕手のなき時、素い客にくゝりつける仕かけ、沖の事に相傳あれとのぞみければ▲高間和尚答テ日成程それにはさま〳〵の祕傳あり。大概紋日をあてがうてもしかねまいと思ふ大臣あらば、兼て遣手としめし合せ



ておいて、心あての御客來りて、よほど酒も肩越時分、遣手が伏見町の正さまからお文が參りましたと、つくり文を女郎へわたす時、ひらいてよんで見て、色を替て腹をたて、遣手を相手にして、さりとは正さまといふ人は日比とちがうて、ふづまりなお方ぢや。俄に田舍へ下るといの。貧からなされて下されぬお心入ならば、今少前方に成共かういうて下さるれば、さし當つて難義はせぬに、さりとは〳〵聞えぬなされかたぢや。こちは身あがりして成共つとめうが、井づゝやのあるじさんや、花車樣に迄、堅う約束なされて、今かうとあつては、ぬしさまを人のやうにいはれまい事が、何程か我身にしては聞ぐるしう無念な。あひまする殿たちの事をとやかういはるゝ程腹のたつものはない。此ふみ井筒屋へもつていて、正さまからかういうて來たが、そこへも此通り斷がいうて來たかと聞ておぢやといふ時やり手こはいつくり顏して、お前は結構なお氣ぢやなア。是程つまらぬ事をいうておこすのんひんを、人にとやかくいはすが聞ぐるしいの腹がたつのと、まだいとふやうな事をおつしやる。あげや迄もないわしからがいはずにゐませうか。人の皮かぶつたものゝ今時分こんな事いうてあるかすものではござらぬそれ程當のない事なら、こちからたのみもせぬ紋日を、外へいやんな我等いたすでござると、人聞よいせんしやうがいやぢや。太夫さまのお爲に成お客ぢやと思へばこそ、あの二才にはい〳〵というて廻れ、横平くさいやい玉よ、我が宿もつたら、亭主に見せ出さす程の元手はかしてやらうぞ。隨分ぢとめな男を見たてゝもてと、子細らしい置頭巾でのびもせぬ髭ぬきながら、ようも〳〵いはれた事ぢやまで、世の中の女郎買のかたりと云は此客づらが事でござる。もう此わろも手が見えたれば捨ておいて、かのたのもしうおつしやるみめのよい鼬堀の、六さまの方へ頼みにやらしやれませといへば、十盃機嫌の客が聞て、玉何の事ぢやととふ時、女郎はいやお前のお聞なさるゝ事ではござんせぬ。さあ〳〵今の盃をおさへておいたが、ひとつあがりましたかと、よの事に態とそらすを、遣手は此客に、お前なればこそ大事なけれ、まあお聞きなされませ。太夫さまのおたのみもなされぬに、此來る紋日をいたしくさるとおつしやつて、今壁に馬のりかけたやうに、田舍へ行程に外へたのめと、是がまあ言はるゝ場でござりますか。

それに太夫さまの今のごく、まだとやかくと人のそしらう所が氣のどくぢやと、是程のふづまりなお客を、おいとひなさるゝによつて、はたから一ばい腹が立ますと、角めだてば、大方十人が九人迄は是はつまらぬ、そちがいふ通りさう堅う約束して、今へら所ではない。世間にはふづまりな男もある物ぢやと、同じやうにそしるを、ハテ何を玉はわけもない事をいやるぞ。御用があらば田舎へござるまい物ではないと、遣手がそしるを女郎はとめる風をするがよし。其時此客睟顔にて、そのにげた客をそしつたとて、紋日の埒が明でもあるまい。我等が思ふはまづ差當つて太夫の苦勞にないやうに、外へたのむやうの思案をはやうしやつたらよからうと、分別らしう申さるゝ時、さればそんな事をお客方へたのみにやらせらるゝ事を、第一此太夫さまはおいやがりますによつて、さしづめのこんな時に御迷惑なされます。何と太夫さま日比私が申ますれば、お客ばかりいとうて、そこへいへば早速なれ共、こちらからねがうておせわに成事はいやぢやと、おれが致さうとあつちから引請ていひ手のないうちは、めいよお客へ無心をおつしやれぬ太夫さまぢや。四方八方へお頼みなされておかるれば、かうした手筈のちがうた時の爲に成ますに、たゞ私が申事は欲がふかいの熊手ぢやのと、お聞入なされませぬが、何とわしが申が惡うござりますか、お前聞わけて下されませと、客を聞手にする時、成程〳〵是は玉がいふが尤ぢや。しかし太夫身にしては又道理があるわ。我も人も世に無心いふほど、いやな物はないによつて、いひかねらるゝも至極ぢや。爰は我等聞ずてにはならぬ場なれば、拙者たしかに仕る。その伏見町の正とやらいふ大臣のやうに、かういうてからは筈をちがはす男ではないぞと、念入てあつちから釘の裏迄かへして、見事にかづいて勤るものなり。是にも目かりがあつて、かの謗噂を聞ても、耳ふさいできかぬ顔して、禿相手に今うたうた小哥の出しは何とやらぢやな。あのこはい夢見るといふあたりがよい節ぢやと、中〳〵こちらへ顔もむけぬ男は、背のはげた睟と心得て大かたにしてそしりやめてしまうたがよし。こちらの咄しの頓着させうとて長〳〵しう云と、是太夫おれは大切な日をかいてそんな事聞には參らぬ。內證の談合事ならば、一歸りかへつて來て、內でして來てもらはう。誰ぞこい座敷がさびしい、亭主

に出てひとつのみやといへと、ふくれてくるものぞ。とかく女郎のこんたん事は變に應ずるが專要、手過ぬれば裏をかゝるものと心得て、隨分信をとつて嘘をつかるべし

第四 禿も水上してから卽身上物

付り 内からの分別あらたまる

新町の入口

▲新艘子問テ曰 惡じやれの大臣過し物日は手をよくへらをつかうてのがれしが、此來る節供さしづめ、我等にいひかゝるはしれてある事、此度はたのみかけられては、もはやどうも拔句がないによりて、此節口舌をしてしばらく退て居て、外のとろい客が請取、見事に節供をしまうた時分、外の女郎にかゝつて見て、おもしろをかしう、此女郎に取もたせて、又本へもどればひとつはなぐさみ、ひとつは物入をのがるゝ爲ぢやと、口舌の種をこしらゆるに、差當り何もいひたてにして口舌すべき種なく、さいはひ此二三日田舍の素い客が取つき、吉田屋にけふも明日も約束して隙が入といふ事を聞て、是さいはひの口舌の種と、さしあふをしらぬ顔で揚屋に來り、是非けふあひたいとならぬ事をいひかけ、それを口舌の種にせうと、内からもくろんで來る大臣を、あぢにいひまはして、節供迄さするやうの仕掛は、いかやうにいたしたがようござんすぞと尋らるれば ▲高間和尚答テ曰 成程惡辟なる大臣の手うすいわろに有事也。其時はその男のゐる揚屋へ行て日こそ多きにけふさしあはいでは、さりとは氣のどく千万、しかも今日のお客は、田舍の侍衆にて物がたく、どうももらひもならぬお方でござる程に、明後日御出を待まする。わしもちとあひまして、ゆるりとお物語申たい事もあれば、先今日はさゝでもあがつていんで下さんせ。左吉さまぬしのさびしうないやうにして、いさめてお供してつれましていんで下されといふ時、其ならぬを合点で口舌しに來た客なれば、もとより斷を聞いれず、イヤそのならぬ所をもらうて遊ばねばをかしうない。是非に今日はもらふ氣ざしぢや。亭主日比念比にする馴染がひには、こんな所をはたらけと、ならぬといふ程つのつて來る。それはどうなり共お前の氣まゝになされませ。かうわりくどきを申ますに、聞わけのないからは、此うへは替りを進ぜうより外はない。さりとは日比とちがうて、ぎやうさん無理をいは

んすとおどしつければ、ォ、その替り好ました。我ら指圖をいたさう程に、此方望の女郎をおこし給へといふ時、ちとせき心に見せて、イヤこなさまの望の女郎は私がいやでござんす。しからば替りも成ませぬ、左吉さま早うつれましていんで下されと、腹たて顔していふが、男にせいた風を見すべき女郎の計畧なり。時に男は、扨こそ我等がつもりにたがはず、よい口舌になりかかると、いよ／＼氣をたてさすやうに、是はあたらしうござる。こなたのやうな御全盛の女郎に、我等式の貧びん僧都が、お目にかゝらうと仕れば、いつとてもお差合でおめにかゝる事がならぬ。さるによつて向後貴公にあはぬからは、おせきなさるゝ事はない筈、こりや左吉、此中越後町でお詞にあづかつた、彼方にいたさうと、太鞁を相手にしていふ時、すこし肩にて息をするやうに大きにせきの來た身ぶりをして、何わしにもはやあふまいとや。聞えた／＼外によい太夫どのを見たてゝおいて、それにあだぼれして、けふわしが身のならぬをしつて、むりをいはんす物ぢやの。此上からは白癡わしが手にもらうてあふ。ようそんな自由な事をさしませうにやと、床柱にもたれかかり、足なげ出して尻をすゑて見せる時、やり手あげやの花車などが、此手を大方合点なれば、尤太夫さまのが斷ながら、さやうでは吉田屋が手前が悪うござります。とかくは私共がお侘事申ます、先今日は旦那にはおかへりなされて下さりませ。他のお客ならばこちの人が働でもらひまして成共あげませうづれ共、田舍の堅いお侍さまで、明後日お國へお歸りあそばす由にて、今明日はどうもならぬ所は神八まん太夫さまの御女在ではござりませぬ。先太夫様には吉田屋へお歸りあそばしませと、中酌に入ば、イヤわびとはわしがしておきました。それをきかずにあの様な無理を仰せらるゝからは、是非にかなひませぬ、ぬしもならぬ事をいはんす程に、わしもむりにならぬ事をして見せます。たとへ吉田屋から抓に來て、腰は半分切てやつても頭は爰におく覺悟、女でこそあれかういうてからは、日本の神ぞ／＼、うごきはせぬ。さあならば余の女郎にあうて見さんせと、眼をすゑて貰らしういふ時、遣手のたね取ついて、太夫様こりやなんでござります。けふのお客は様子によつて、節供もなされうとある見事大臣、旦那も太夫さまをおいとしう思召しますなら、今日明日過てから御出でなされう

とは仰られいで、お心にもない外の女郎の事をおつしやつて、太夫さまにお腹をたてさしますやうな惡口、ちとおたしなみ遊ばしませと、兩方をなだめにかゝれば、爰が女郎の男をこかす肝心の一句の所ぢや。いづれもよう聞ておかせられい。コレたねそなたのさはいが氣にいらぬ。たとへぬしさまは心がかはりて、あんな水くさい事いはしやらうと、おれは少も替らぬ氣ぢや。今日の吉田屋の殿たちの首尾があしうて、節供の事はおいてけふぎりであはしやれぬとて、ぬしさまにかへはせぬ。かうした氣儘が親方どのゝ耳に入て、どんなきつい目にあふとても、あなたゆゑなら本望ぢや。今迄あひました中に、何を見おとして外の女郎にあはうとはいはんした、胴欲なお人ぢやと、ほろりとないて見せる仕掛・隨分の肆

が請取ル事也。是からあげやの亭主にもせよ、上手の花車にもせよ、入所ぞかし。花車罷出、扨〳〵結構な御心中かな。あのやうな女郎を、旦那がきつうわるうござります。先太夫さまには御帰りなされませ。旦那とは私中立仕りまして、中〳〵のがしはいたしませぬ。是非におかへりなされませと手を取ていぢばるを、むりに引たて、コレ旦那さまちと笑ひ顔を見られまして安堵させてかへして下されませといふをしほにして、



大かたの男がよい〳〵、今日は堪忍いたす。明後日おめにかゝつて叱つめひらきは仕る。こりやたね同じ事なら、先の首尾のよいやうに、早うつれてゆけと、大口舌の事は忌れて、むずをれがして女郎をいなす物でござる。時に歸り品に男には物數いはずに花車さまさらば、ぬし樣の事たのみますといふて出て又小戻りして左吉様、わしがゐぬとてあんまりぬしに酒しんぜて下さんすなと、いひずてにしてゆきし跡にて、花車がのぼす一句あり。まうしあれおきゝなされませ。今のほど胴欲な事おつしやつても、お前の事をたのむに酒をたんとあげましてくれなのと、半分より大め爰にお心は殘つてござんす。鼻のさきに親父がゐられますけれど、女夫の中でも今のやうなあいそづかしをいはれては、ほんに亭主の顔など二目と見たうもない物でござりますに、たとどうした御縁やら影でもお前の事ばり仰られて、一日二日お便りがなければ、禿をたづねに下されます。かう申せばいな物でござりますが、ありやうが、あなたがそれ程の全盛のお身でもなければ、おまへ程の福な旦那を取はなしてはと、欲でおつしやる共ぞんじませうが、皆お客方から、あさ日をおたのみなされて、お隙というては微塵ない御盛のお身で、お前おひとりにあのお



心づかひは、どうせ此世ばかりのついの緣ではござりませぬ。惣じてあのついてをる、遣手のたねといふものがそれは〳〵、熊手のこれ〳〵でござりまして、跡の紋日もお前にあてがへと、やかましい程申ましたを、太夫さまの其元をおよけなされて、長堀の去村木大臣へおたのみなされましたに、又今度はさしづめお前ぢやと、中〳〵影での惡口、御贔屓にぞんじます、お客の事をきいては、腹のたつ事ながら、申せば旦那のお名迄を出さねばならず、だまつてをりますが、それを太夫さまにも氣の毒に思召して、今日の吉田屋のお客にも、お心にそまねどおつとめあそばして此節供をおあてがひなさるゝ御心底でござります。あなたのお身にしても、お前の事を、なんのかのと遣手が耳こすり申ますを、お聞なされてはお道理、私のやうな者さへ役にたゝぬ事ながら、おやぢとも申てあのたねが影口を見事にとめたい事ぢやと、憚ながら引たてるやうにぞんじます旦那の事ゆゑ、ひけたのよい手ぢやのと、あしう沙汰をいたします時は、あげや冥理かけて、私共迄が肩がすぼるやうにござりますと、そろり〳〵と眞綿で首しめるやうに、遠間から、節供の赤の食をくはさうと、わなこしらへていひまはせば、内からして來た思案とは、ぐわらりとちがうて、必氣を持、跡先なしに節供も請とり、やり手のたねめが影口を引さいてくれうぞと、力瘤を出して、自身はまつておよぎ出すものなり。惣じて今時の大臣惡智惠はしりて、あたまから違い思案の仕置をしてから、近い事にはまり多し。女郎は客とひとつに成顏して、やり手宿やに万を燒付させて、ひとりのぼす仕掛がよし。昔のやうにいとしう思ひますの、あはねば命もないやうなのと、べつたりとした事をいうて、今時の客は請つけぬ物ぞかし。直化にしらな事をいうてよろこばす仕掛を工夫せらるべし。起請を望さうな大臣には、かう深うあひます上は、互の心中がために、誓紙の五枚も十枚も、かいてやりさうな物なれ共、それは勤の身と思うてあふ客衆の事、こな様とわしがやうな眸同志の、勤はなれて念比いたす中に、初心らしい女郎の習の起請を書てしんぜては、それ程おれを素い客ぢやとおもやるか、誓紙など取あふやうな挨拶ではないわいのと、お氣に入まいかと思うて書てしんぜませぬが、何と私が見たての通り、かゝして取氣ぢやも有まいがなと、敵を〳〵たてゝそやすれば、いかにも〳〵それ

は大抵の中の事、そちとおれが互に心中を見ぬいてあふ中に、何の起請がいるものぞと、たしなまされて、書してはとらぬものなり。女郎の大事は、あふ客の氣を見てとるが肝心なりと、高問和尙の色談義の、種〻の仕掛の秘密を聞て、新艘子たちまち手管の悟をひらき、禿の苦患をのがれて、上品女郎の松の位にのぼり給ふは、有難かりし出世とかや

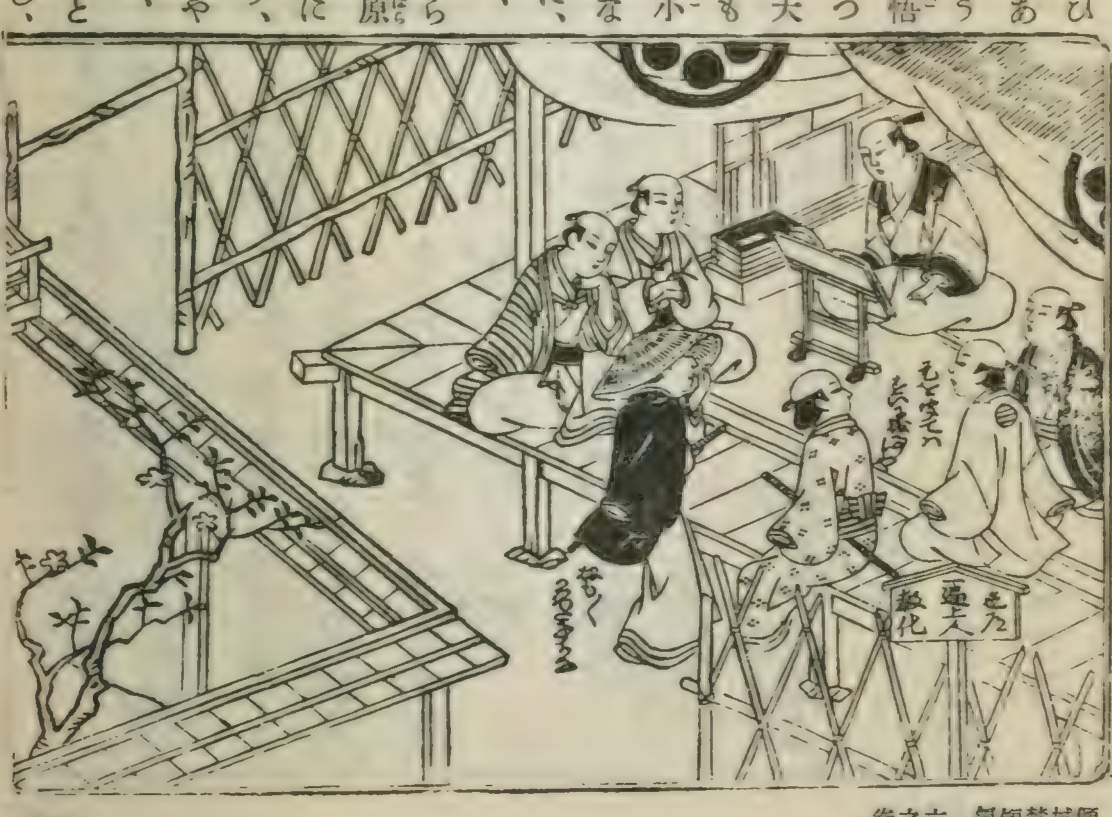
五之巻終

傾城禁短気　六之巻目録

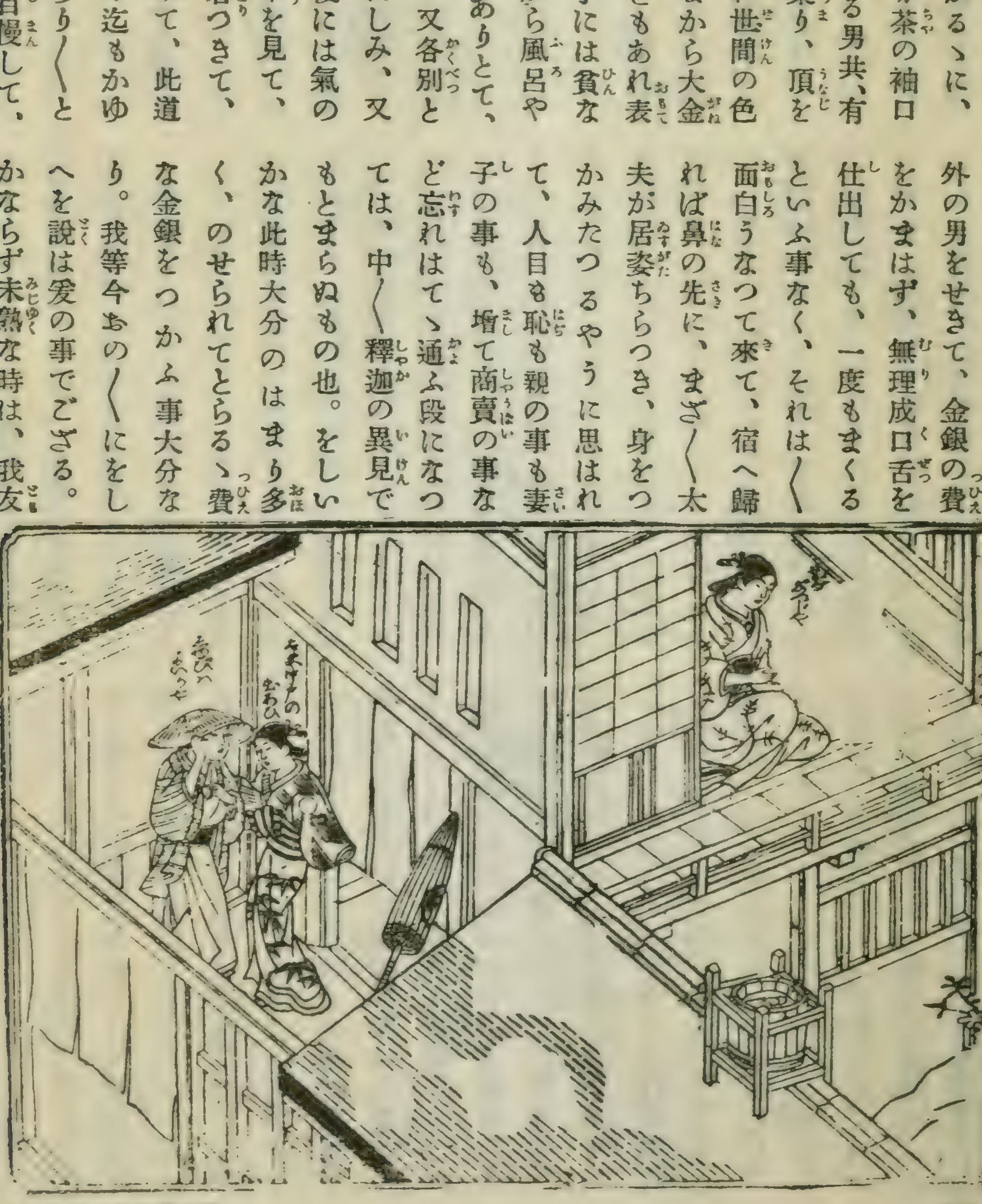
第一 色里一遍上人大臣共へ色道の敎化

付り初會の詐だてはふらるゝ基

敎への道も一色の〳〵。女色を四方にひろめん。是は好色の功者一遍と申粹にて候。我若時より三个の津の色里へ通ひつくし、兄弟一家の異見をきかずに、自身よいほどといふ程を知て、今黑白の粹となり、一切女郎の仕掛を見出し、揚屋も見えぬ客の內談をたのみ、やり手も氣に入顏して見せかけ、町からの友も、色里のさはいの指圖を請、出口の門番も聲を聞知、物やらぬ末社迄もつきしたがひ、色町の物もらひ迄見知て、はひつくばふ程にしてなし、今さのみ物をもつかはずして、慰のふかく成し此修行の功は、親より讓の六十万兩決定皆になして、此一重紙子になつた所が、傾城買の思ひ出、親一門の異見も、物のある內は聞物にあらず、かうした姿になりおふせねば悟道はせぬもの。さるによつて世間の取出のぶう〳〵大臣共に、いまだ家の一軒も賣殘し、見せつき仕直し小かまへに商賣もなりさうな程、つかひ殘しもある中に、よい程といふ程をしめし、皆にせぬ中に粹にしてとらせんと、此度思ひ立、嶋原ちかき水藥師といふ邊にて、女郎買の粹になりやう、太鞁持の諸大臣に氣に入やうを敎、猶信心の輩には、色道五重相傳をいたさうと存立て、則諸方へ札を出し、



もろ〳〵の遣ひ手共をまねかるゝに、扨も色の世の中とて、素見〻茶の袖口かけし、大臣仕立の衣裳を着る男共、有がたがりて聽聞の爲諸方〻集り、頂をさげて聞侍る▲分里一通上人示して曰それ世間の色の道に立入浮世男共、あたまから大金を遣ふ物にあらず。内證はともあれ表付のよい、親にかゝりの息子には貧なる太鞁がつきて、茶屋遊びから風呂や者をすゝめ、是もさもしき所ありとて、おし出して十五女郎を買初、又各別とおもふ時、禿の木綿布子目にしみ、又は襟垢のつきたる衣裳も、後には氣の付折節、天職のゆたか成道中を見て、又是に心をうつし、次第に奢つきて、人も名をしる太夫職になじみて、此道にしやれる程、揚屋の下〳〵迄もかゆき所へ手の行やうに、ぐわらり〳〵とうれしがらせ、太夫を手に入自慢して、外の男をせきて、金銀の費をかまはず、無理成口舌を仕出しても、一度もまくるといふ事なく、それは〳〵面白うなつて來て、宿へ歸れば鼻の先に、まざ〳〵太夫が居姿ちらつき、身をつかみたつるやうに思はれて、人目も恥も親の事も妻子の事も、增て商賣の事など忘れはてゝ通ふ段になつては、中〳〵釋迦の異見でもとまらぬもの也。をしいかな此時大分のはまり多く、のせられてとらるゝ費な金銀をつかふ事大分なり。我等今おの〳〵にをしへを說は爰の事でござる。かならず未熟な時は、我友



達の、智音の女郎に、あふ事を聞出してせき廻り、是を口舌の花盛として、身上の散をいとはず、あなたに五日つづけてかへば、こちに十日とめる氣ざし、縮緬の小袖してやれば、おのれにまけうかと花色繻子に素縫の衣裳、万事人より上をせんとかゝり、女郎も悦ばぬ大分の金をつひやし、末社揚屋に物やりながら影で笑はれ、あのたはけでは久しうはこたへまい。寄てそゝり上て急にもみつぶせと、女郎に手管の拵男させて、追うてから大はまりをさす事ぞかし。かまへておの〳〵勤女にりん氣するはおろかな事でござる。我一人をまもりては迚もゐぬ身をせくといふは薄い事、粋は大かたの差合は、たとへ見ても聞ても大やうにしてかまはぬは、第一ちいんの女郎によい身な男が澤山あれば、盆正月又は、節供〳〵物日などいふをかつがぬ物でござれば、我爲には勝手よくて、女郎は全盛して兩爲に成事。其上こんな事いひつのりて大口舌しては、女郎を品に依てのりかへる首尾に成もの、是又大キに面白からぬ事でござる。新規にのりかへた女郎には、なじみて手に入る迄はよほど費をせねばならず。つひえをしてから、女郎も心の多い大臣と見れば、末たのみなく思ふゆゑに、ふかうなつてからが、親の所迄打あけて咄ほどには、打とげぬ物でござる。かならず〳〵、金銀をむしやうにつかふばかりが分知とは申さぬ。さう心得て費をせぬやうにしたまへと教らるれば、聽衆の中ら

▲取出の大臣すゝみ出テ曰 上人に申べき事の有。只今の御教にては、けいせい買ふには費をせずに、始末してあそべと仰らるゝ事にや。此段何共粋法のをしへとぞんぜず。始末しては片時もをかしからぬ所、費をいとふ心からは女郎買はずなし。内に居て十露盤なやみて、味噌塩の僉儀するが増也。大臣といはるゝからは万事大やうにかまへ、今日はいつかぢやと、いふ程になくてはうれしからず。ぬかれまい、たらされまいと、遠國の順礼か、京の町で買物するやうな氣をもちて、万にひすらこう立廻りて、傾城買て何の益があるべき。いまだ上人にも皮のとれぬ所がござると打わらへば

▲上人重テ曰 こなたは初會二度め迄も女郎にふられさうな人ぢや。それが世間に多い、粋だてといふのでござる。費といふは、金をつかふなといふしめしではござらぬ。こなたの聞やうな費の事なれば、色里へによつと足ふんごむからが、費でござる。さうした譯ではをりない。むだづかひとて女郎も宿やも、

悦ばぬ金をすて給ふなといふ事也。つき〴〵の末社、又は遣手揚屋の下〳〵迄につもられて、阿呆にしてそやし立られてとらるゝは腹のたつ事ぞかし。よい事は粋にしてとられて、物入ばかり此方にかづくを費といふ義也。かくいはゞこなたのやうな粋だては、今時の色遊びうつかりとはならず、遣手が笑ひかゝれば、扨こそ花をしてやらうとの、會釋と心得、今日は太夫に急にあひたい事ありてつい出て來て、紙入さへおいて來て、さりとはふ自由千万と、銀もちあはさぬうつりをしらせ、太鞁末社が近づけば、汗はかけ共羽織をぬぎおかず、宿の男が山上參りいたすと、いひもはてぬにさりとはやめにせよ、鐘かけの飛岩、取つき石の大行、匆躰なやなうとおどせど、浴衣菅笠も此通りと見せければ、是非なくもはやたまられぬ所と、どうで銀でとらしてからが、錢買て持であらうによつて、そちが勝手のよいやうに、亭主、錢三百取かへてやつてたもれと、せちがしこう立まはりて、遊びが次第にちひさくなり、末社はうとみ、やり手はにくみて氣のつきるせんさく。本粋といふは、すべき事をくわつたりと目にたつほどしておいて、小まかしき事には一向目もやる物でなし。たゞ惡がしこいいきかたは女郎のすかぬもの、いづくでもふらるゝ下地と心得たがようござるとあれば▲いまだ前方な大臣問テ曰 傾城のふると申はぶ器量の男をふる事にや。但し我等式のやうな、幅のない大臣をふる事にや。此様子承りたしととへば▲上人答曰 惣じての男ふらるゝは、初對面からしこなし顔にてふらるゝ也。京も大坂も替る事なし。始ては、あなた次第に、物いはぬがよし。内證は人のしらぬ事也。うそで成とも拝うで成共分をたてぬは心がゝりな物なれば、粋といはれてふられうより、月とおもはれてふられぬ方が、さし當ての徳ぞかし。世に我物つかひながら、女郎狂ひほど氣ぼねのをるゝ物はなし。生れつきたる風俗を俄につくりなほしても、鼻欠はなほらず、よき風の羽織も着たし、わつさりと物も仕替たし。いかにはやればとて、明ても暮ても似せ八丈の羽織見せかけて、女郎買とはいはれじ。三枚袷きる程になくては、奥ぶかには見えず。いかに女郎の爲になれはとて、末社もやめにして、其物入を太夫に内證でやれば、上を下へとまはる事きみよしと、たゞひとりゆきして、さしに咄こそ面白けれと、卸がかごにものらず、沙汰なしにゆくなど神ぞかうした事では、

曾てをかしからぬ事ぞかし　大臣とも
てなさるゝからは、一座ものつしりと、
つき／＼の末社に面白う酒のませ、を
り／＼袖に燒すて、　もあぢやるこ
そ分知なれ。女郎に位をのまれ、廻す
はずの身がまはさるゝやうに、あちら
こちらになつて來て、大臣の至はたゝ
ず。かならずこんな男には横もきらせ
ぬものぞ。つい聞た時は、心のいやし
いやうなれ共、よこきる程又此道の中
の一興はなし。されば人のつとめる日、
其男の來ぬうち、此方の物にしてあそ
ぶなど、おそらく長者でもいやは有ま
じ。其心を昔からしつて今に替らず、
客引込て、女郎の道具おとしは是なり。
かづくまいと思ふ大物日も、つい請合
氣になつて來て、千度の文より、一度の
よこが能利くとは、いか成發明の女郎
万客の心を見すかし、晦月共に末代迄
もいやといはれぬ仕掛をしておき、年
中の紋日身あがりなしに、それ／＼に
してが絶ず勤て通りぬ

第二　女郎買大善根の施主の企

付り　虵も太夫さまに間夫の氣さし

▲色里一遍上人曰　扨おの／＼我等は有がたい國にむまれ出たと思召して、一日のあそびも、かならず仇に思召すな。遙遠國にも色さわぎのありといへど、所／＼の氏神のたゝりを思うて、替りたる事は成がたし。人をおそれず我儘に色遊びするは、三个の津の町人の德ぞかし。上京に玉手箱といふ大臣、祖父から三代商賣は仕舞た屋にして、二十余人の男女、心にまかせて年中を暮し、万事手代まかせにして世渡りの事心にかゝらねば、不斷何を心にかけて思はるゝ事ぞと思へば、色里の事のみ。つら／＼嶋原の女郎高下合して凡八百人の余も有べし。此女共毎　にてつかひすてる　共、銘ゝ買にする事も不便なれば、杉原延半紙塵紙、西洞院漉のほくろ紙迄打こんで、一人　づゝに積りて、一年中に三十貫余にて濟事なれば、中道寺に家を一軒借りて紙見せを出し、太夫　は杉原を、松原の紙子屋へ誂へてもまして取よせ、　の合力。但し　きらせにゆかるゝ時のは冥加の爲に相手の客にあてがはせて、此方からは見ぬ顏也。天神に　、鹿戀女郎に　づゝと、太鼓の久德が指圖。是は汝十五女郎の中に、念比なるが有ゆゑに、贔屓の沙汰と思へり。太夫天神にさへ　づゝ成に、十五の分にて　とは奢とあれば、さすが下品の女郎に

おあひなされぬ大臣様ほどありて、を御ぞんじない。鹿戀女郎より又局女郎は、一日　　ではぐるし。太夫天神にあはるゝ大臣は、さのみ　ばかりを　　くる人は稀なり。あそびを第一になさるゝゆゑなり。鹿戀女郎を咄すくらゐの男は、それ一種でわせれば、　　　各別ぞかし。局女郎北向は、一日　　に　　か知ず、是はおつもりの外と申せば、誠に是は久徳がいへる通り、假初のやうな事ながら、是にて年中に五貫目のちがひあり。しかし思ひたちぬる上は、いよ／＼永代　　寄進すべし。此功德によつて、又の世に傾城の好男に生れて間夫となり、女郎に金出さして、手もぬらさずにたのしむ事もあるべし。諸山の靈地に常燈をともし、しれぬ道に印の石をたて、橋なき川に橋をかけるも、心ざしは同じ事、まだ此方がふかき慈悲と成ぬべし。大形に聞えて、心の廣き大臣の積りにしては、又心安き事ぞかし。たとへばあそぶ銀五百貫目、是を惜成兩替へ、月八にして預け、其利銀にて成事と、前代未聞きくもおよばぬ大善根を思召したゝれぬれば、勤する女共是を聞て、万の世話を此大臣に內證から賴み申あげ、身あがりのくるしみ、吳服やのきつしく成氣のどく共、大かた引請て世話にしてやられければ、色里にてはしるもしらぬも、此大臣をやつかい長者とあがめ申ぬ。明暮十露盤枕にしてまうけためる事を第一に心がける、手代あがりの旦那が聞ては、たはけのやうにいふべけれど、色柄握りて此道に身をゆだねる男共の中間にては、此氣でこそ大臣なれ、まうけ溜るより人に物とらす程心のよき事はなし。とかくやらいではをかしからぬ所なり。畢竟遊女狂ひの至極は、十貫目の銀百度につかはうより、十度にくわらりとつかうて仕舞跡迄もいひ出さるゝやうに、しやんとやむるが上分別なれど、未熟な中は人の異見でもとまる事あり。粹になつて女郎の方からも面白がる程にしこなし來ては、中／＼とまられぬ物ぞかし。世の中の粹に愚成生れつきはなきもの、皆智惠まん／＼と、人の善惡をも沙汰する程の、一器量ある者共が、合点して居ながら、うか／＼と通ひやまぬを以て見た時は、此道より外に、世界に面白いといふものゝない事を得道すべし。鼻紙袋の中にある、ねぢぶくさに入った小まがねをつかうてたのしむ中は、異見いうても聞めのあるもの。十文字かけた五百目包をときそめ、板銀でさばき出す段からは、

町衆の苦勞にもかけねばとまらぬもの也。爰をおの〳〵能分別して、かならずはした銀で粹にならうと思召すな。跡をかけて見るやうな、余慶のない懷では、中〳〵本粹にはならぬものと、心えられたがよいと、粹になりやうの要を示さるゝ時▲よほど座なれて見ゆる當世大臣曰 しからば金銀なくては此道の粹にはならぬに極りましたか。是にはすこし不審あれば、推參ながらおたづね申す。たとへば万兩ある大臣にもせよ、借屋の者にしたらば、豆の粉からしの粉など賣べき小男、紬のふとりを花色にして幾度か洗濯袖も奥口にぬいなほし、肌着は腰切に白木綿の單物着て此いや風な男、昔は女郎の一座する事も嫌ひしが、近年は金の世につれて、かたよまじりの高咄を聞てをかしさを胸にをさめ、名題の太夫膝をまかして枕にさせ、禿に腰をうたせ、宿の嚊に酒つがさせて、寝ながらのみてさま〴〵の我儘申、若い女郎をよびつけて革足袋をぬがせといふ大臣、いかに金の威光にて自由に太夫をするといふ共、是等を粹とはいはれまじ。其女郎勤とて、いとしい顔はいたされうが、根をおしてきいたら、定て此客にあふ事はいや成べし。粹といふは金銀をつかうたつかはぬにはよるまじ。金もたぬ男にも女郎の思ひつく證據は、我物遣うての間夫狂ひ、大分つかふ爲に成客よりは、各別に愛しがらるゝときけば、金つかふ大臣かはつかはずにか



はゆがられて、眞の情にあづかる錢なしの間夫が睟成べし。いかさま自由過たより、盗あひの女郎程世におもしろき物はあらじ。然る時は睟といふは金蒔ばかりをいふにはあらず。是ばかりは上人の御心得ちがひと存ると、不審をうてば▲一遍聞て答テ曰愚成かな大臣。盗あひの女郎を面白がらうかは、何とぞ福な大臣に成かはつて、女郎を人にぬすまれて遊ぶ身に成給へ。たとへば銀かりてすまさぬ心と、借損してもいたまぬ程の違ひあり。盗て中戸のくるしみより、うつけに成て床とらせて燈火で顔見て、

、禿にはこばせて茶をのむ自由こそ、面白き共いふべけれ。茶人の根から叶はずぶしに、侘數寄とてたのしむよりは、自由のなる身代にて、たらはぬ躰をして侘たる茶事こそ、たのしみもふかゝるべし。中京の烏徳丸といふ大臣、過しかをると七年の馴染をかさねてあひけるが、次第に面白がりて、常の遊びとはちがひ本戀となりて、女郎も外の客にはあふもうるさく、隙日を悦び、あはぬ日は千度の文をやりて、片時の間もおとづれをきかでは心にかかり、此男へ書つくして外へは、屈の文さへやらざりければ、いつとなく客絶て、物日の淋しきを皆請取て、至り穿鑿になつて、烏徳ひとりにかたづき、此心の眞成所を見とゞけて、千金にかへて請出し、近所の下屋敷にかゝへおきて、夕暮毎



に通ひしが日比お目かけられし太鞁共、太夫さまの御機嫌うかゞひに、お屋敷へお見舞申せし中に、色川原の末の役者宇内といふ美男、旦那のお影を忘れず、おも屋敷へは舞臺で人に見知る身を遠慮して、度〳〵下屋敷へお見舞を申せしに、屋敷預りの武兵衛が旦那に申上るは、宇内度ゝ裏のお座敷へお見舞申上る事、旦那御出の時分はくるしからねど、女中斗ござる所へ、あのよい器量で節ゝの見舞、何共猫に鰹節、お見舞をだしにつかうて、太夫様などにかき付てから、にやんが糞ふんだ顔して、をるやうに存ぜられます。憚ながら向後宇内にかぎらず、男たる身の旦那お出でなされぬ中は、御見舞御無用と仰付られ然べしと、何がな奉公ぶりに申上れば、烏徳大臣つく〳〵と聞れ、少もくるしからず。太夫心底を見すゑて根引にせし上に、宇内と不義の心ざしあらば、我等目金ちがうてはまつたと云物也。随分氣を付、少しにてもしだらく成やうすあらば早ゝ我にしらすべし。男をせいたうしてよせつけねば、太夫が不義する志か、心ざしでないかしれず。かまへて此事人にいふなと、大やう成心の廣さ、あつぱれ大臣といはるゝ程の器量各別と、武兵衛も我ををり、宇内が見舞に來る時分には、氣をつけてうかゞひしに、太夫と宇内いつとても、敷居をへだてゝ慇懃成あいさつ、中〳〵旦那の御出の時との挨拶とは堅い事なり。ある時太夫、庭の草花をながめに、馬下駄はいて出けるに、蛇の胴中をあやまつてふみけるゆゑ、苦しさに蛇足にまとひつきて、しめける事はなはだし。つき〳〵の腰元はしたおどろきぬれ共、女の身とておそろしがりて、あれ〳〵とこゑ斗たててちかづかず。お物師のぬひが、是宇内どの男で居てからぬかつた。とつてしんぜて下されといふを、太夫しめつけられて苦しき中に、いや〳〵宇内どの御出御無用、はやう旦那どの方へ申やれと、宇内をそば近くよせずして、大臣の御出を待ぬる段ゝ武兵衛見とゞけ、烏徳殿に申せば、さも有べしと座敷に行て、何としたるぞとの詞を聞て、旦那さまか、宇内どのに仰付られて此蛇とらせて下されといふ。是は今迄それを取らせぬこそ不敵なれ。それ宇内とれとある。畏て頓而庭におりて件の蛇の口にたばこの脂をさしこめば、くるしみて木のごく成て、まいたる足をひとりとはなれて死ければ、太夫夢のさめたる心地にて座敷へあがりて、何事もない祝ひに、てうしもてこいと、お

ちついたる事共。何とて最前より、宇内にはとらせざりしぞと、烏徳丸とはれしに、おぬしのござらぬに、たとへ一命を蛇にとらるればとて、男の手してわしが身を、いらはせます事ぶ遠慮とぞんじ、おそろしながら御出まで待しとの、此行義成心いきを聞て、さうなうてこそ、我等目がねにちがはぬと、殊の外の褒美なりしが、大抵の人ならば、屋敷守の內證を聞ては、我來ぬうちは、男の出入無用ともいふべき所を、太夫所存を見ぬきせいたうせられて行義をたしなむは本意にあらず。行義といふは、平生のしだらくなる中にある事といはれしは、尤成事ぞかし。間夫せうとせまいと、それは女郎の心入次第、請出して我物にせず、廓の中にゐる間は、內證はどんな事があらうが、我氣にあひたる女郎ならば、面白う遊びて、見えぬ所迄かぎ出しての吟味は、本粹のせぬ事、盜てあふ人より、ぬすまれて氣がねせずに遊ぶが、面白さはまさるべし。いづれも隨分ぬすまれて成共我思ふやうにして、明で遊ぶやうにし給ふべし。是が命の本の洗濯

第三　不審を打たる太皷の善惡

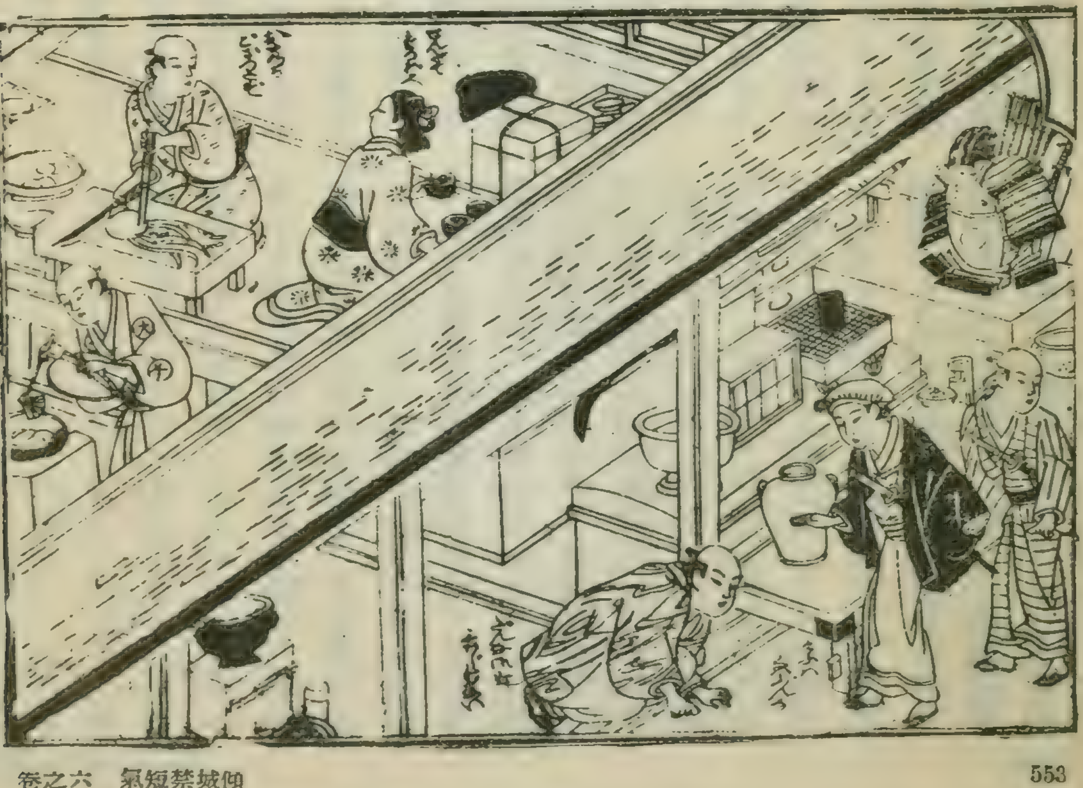
付り　無明の酒株さめてくやしき約束の銀

▲色里一遍上人日　扨今日の色談は、上下京の素人末社衆ゟおたのみで、太皷持の大臣へ取り入やう、一座の目かり、無心のいひかゝり、地の客と田舍大臣へとの、廻りかたの敎をといてきかせとの望によつて、先只今說ますは、太皷一通りの要を申でござる。指のまたをひろげて、旦那是〳〵とをかしき手つきを仕出したは、いづれも聞およんでござらう、花垣左吉と申至り末社が、都の遊山所で大分あてた所作でござつた。此男もそのむかしは、肩で風をきつた大臣でござつた。さるによつて座配万事が、しつとりとしてざわつかず、疊ざはりの各別な物で、歷々の御意に入て、今に其名が高うござる。惣じて今時の太皷持は、上るり小哥のはした物をおぼえ、役者の物まねの、すこし似移るを元手にいたして、御きげんとりにまはらるゝ。第一一座やかましう、大臣より先へ酒にゆきつき、旦那の羽織を足でふみ出し、おかへりさへしらずに、ぶ仕付成身持にて、太皷をもたゐるさうでござる。其上智惠自慢して、旦那の指圖をもどき、賢だてを仕り、御供申て參る先々にて、あつぱれの御奉公ぶり顏をして、花車が出やうがお

そしの、銚子がぬるいのと、二瀬料理人をしかりまはし、隣座敷の上るり小哥を笑ひ、供先で旦那にひけをつけぬ氣で、やゝもすれば臂まくりして、喧嘩眼になつていかつを出し、大臣のあはるゝ女郎の癖を見出し、同じ太鼓と一座にてさゝやき、又は女郎に思ひつかるゝ目元拵して、人しれぬ情にあづかる下心、くだされものがおそいと、しら／＼しい壁訴訟、もらふとけうとい廻りぶり、皆是今の細工末社の風俗でござるが、是等は至り末社共の嫌にいたして、中／＼忌事でござれ共、大臣が本大臣でござらぬ故に、太鞁といふ物は、皆こんな物ぢやと思はるゝによつて、それ／＼に口過して通るぞかし。上ゝ至り末社といふ物の心いきを、説てきかさう程に、小太鞁でも持來は、ようきいておかせらい。爰に似たりの市兵衛とて、昔は何某の二男にて、萬にかしこく、其身持いやしからず大氣にして、人のにくまぬ生れ付成しが、あぢな事知過、親類先は金銀にうとまれ、先祖の名を埋、堀川の下に、わづかの古道具見せ出しても、はかどらず、世渡りの悲しさに大臣の御機嫌取となつて、以前は下目に見し人に、様の字を百もつけて、お出入いたしお臺所にゐれば、脇詰着た小坊主が我を見たてゝ、提たばこ盆の掃除をあてがふ。無念ながら氣さくに、心得たと仕てゐる内に、中居が是其棚の物おろして下されと、はしたなく



いふを、是もきかぬ顔はならずおろしてやれば、いつともなく煮方する男も、心安立出して鰹などかけといふ。いやといへば當事うたてく、やりばなしにかく所へ、若子樣をだいて來る。是は若旦那樣御きげんでござりますと、ぐるり高な顔をほむれば、今日をはれと着かざりし、一ッ着物の上がへゝ、むさき物をしかけらるゝ。是はきたなしと立てぬぐへば、乳母が顔ふくらかして、けい〲しい何が是がきたなうて、内かたへ出入なさるゝからは、此お子のしゝばゝは、いたゞいてござらにやならぬとぬかす。口惜けれど笑ひつくりてお座敷へ出れば、膳おそくすわるさへあるに、脱捨の小袖たゝめと、足でおし出さるゝ。是はと腹にすゑかねて眼すわるを、側に居る塵古といふ古き太鞁が見て取て、ひそかに勝手へまねき、そちは今のを無念がる樣子ぢやが、たとへ昔は公家のおとし子にもせよ、今末社で口をすぎようと思ふからは、さうした事では間があはず。未てなられぬ所あれば、我等師匠の虛悅と云、至り末社の方へつれゆき、此所作の一通りを傳受さすべしと、すぐに其夜虛悅方へともなひて、向後弟子になされて御指南たのみ入といへば、虛悅樣子を聞て、先以人がらよく立振舞もいやしからず。なんぞ藝が有かととへば、上るり端哥すこし仕ると申。酒はととへば底がござりませぬといふ。それは氣の毒、太鞁



持て身をすぎようと思はれなば、禁酒と合点せらるべし。一ツなるふり見すると、あひをいたせ、おすけを仕れと仰付られ、いやはならず、度〻盃かさなりて、お客より前方にかたづけられて、一度であかるゝ物ぞと、又各別成をしへかたと、市兵衛も心の中に感じてゐれば、喜悦かさねて、きけばそなたは古道具をあきなふ人とや。さいはひの事、是此赤繪の皿を今朝程藪の下でかうて來たが、拙者心にはおそらく堀出しをしたかとぞんずる。目利して給はれと棚より皿を出して見するに、市兵衛取てひねくり廻し、おもとめなされた直打をさして見ませうかと云。いかにも何程に買ふと思はるゝぞ。されぱこなたのお買なされうなら、高〻で銀壹兩・五匁迄ではござるまい。六匁にめしたらば、大きなかづき物といふ。其時虚悦打笑ひ、その氣轉では旦那衆のお氣にはいりかねられう。それを、きかう斗に此皿を出して見せたり。成程目利の通り四匁五分にもとめしが、四匁五六分と見られたら、是は銀貳兩拾匁にめしましたかと、心の中で四五匁も、笠をきせてそだてる氣にあらでは人の心はとられぬもの也。いかな万貫目持た長者でも、堀出しした といはれては、滿足せらるゝはしれた事なり。四匁する物を、四匁するというては、永代人の氣にはいれらず。とかく此職に成からは、賢だてをやめて我より鈍き人に、いかいたはけ物ぢやとなぶらるゝでなければ、御機嫌取にはなられぬ物ぞ。無念なの口をしいのといふ氣がきざゝば、太鞁持に貧乏神のあやかしがついたと、觀念すべしといはれしは有がたき敎ならずや。惣て太鞁持の役目は、色里の者共大臣をむしやうにのぼしてそゝりあげ、大分にはめさうな時、心をつけて、無益の金を遣さぬやうにするが肝心ぞ。しかるに今時の素人末社は、ひとつになつてそだてあげ、つひ大臣をもみつぶしてのける事、大キ成ひが事也。其上男つきをかざり、色たる身に思ひつかるゝ仕出し、是又太鞁の本意ならず。たとへば大臣かはつたる羽織をめさうと、氣をつけてほむべからず。大臣の身にしていかう聞ぐるしい物ぞかし。旦那女郎と口舌なされてのかせらるゝを、御異見申て、中なほりをさせますがよし。但それも女郎の方無理ならば、引舟やり手にさしこみて、侘言を致さすべし。女郎いまだお出なく、お座敷しめつて見ゆる時、もんさくつくして一座の興をなして、にぎやかにすべしと、段〻

の魂膽をのべられければ▲下京の素人末社が申はありがたき御教化信服いたし候。しかし爰に氣のどくは、惣じての女郎買一座の輿に、太鞁の者共迄に、鹿戀のひとつも買て下さるゝ事、何共おぼしめさぬさうなれど、此銀とても拂ひは同じ事なれば、此十八匁をねがはくは、一角生で給はるが拙者共が勝手なり。此時に至つて此心のつくやうに大臣への言廻しを、迚の事にをしへてたべと願へば▲上人答テ曰各〻にかぎらず、前〻よりもう合点なる太鞁衆がさう申さるゝ事でござる。其日鹿戀を我爲に買てもらふと合点せらるゝゆゑに、正味でほしがらるゝ欲が氣ざす事也。さら〳〵太鞁持の爲に買てやらるゝにあらず。太夫引舟の外には、女といふもの座敷になく、皆生男の寄合なれば、一座に色をならべて、賑にしてあそばうと思召して、大臣のお慰の爲、それ〳〵に天神鹿戀を呼で下さるゝ事なれば、面〳〵の慰とおもはるゝは大きなちがひ也。太鞁なしに大臣一人行れても、女郎はかはるゝなれど、五人三人の費をいとはず、そなた達のやうな太鞁をつれらるゝも、お慰、又此上に五人三人女郎をよばるゝもおなぐさみ、然れ共相手なしには、女郎も來てから一座がをかしからず。ひとりづゝ相手にあてがはるゝと心得らるれば、生で一ッ角といふ欲はおこらぬ事ぞかし。本大臣の大腹中といふ物は、端太鞁の目から見ては、氣のへるやうな事多し。女郎をあげておいてゆかず、芝居の棧敷をからしておきて、道寄の腰かけ酒がおもしろいとて、三番續の果るもかまはず、ゆたかにのんでゐらるゝなど、此すたる銀が何とほしいとは思はれぬか。是も皆達に女郎呼でやらるゝも、費は同じ事なれど、上棧敷二軒に、提重吸物茶弁當、ゆかれずにすたるは、おの〳〵は、何とも思はれまい。是も今日は樂遊びに、汝等ばかり芝居見物にゆけと、皆の衆へと名がついたら、同じくは今日の芝居の入目を、我〻が中間へ生で下さるゝと、うるほふ事ぢやがと、てつきり欲が出るであらう。鹿戀女郎もいづれもがたへの爲にはあらず、大臣の慰になさるゝ其遊興をやめて、其代を下されといふ。末社の口から願ひがならうものか、とくと思案をして見らるべし。惣躰人に物もらふを當にする商賣ほど、世にあやふい物はなし。ある時長崎の底ぬけといふ大臣、遣放の勘吉といふ太鞁持に目をかけられ、京都にて買物なさるゝ御逗留中は、膝もとさらずの御意に入にて、外を欠て此大

臣に勸めけるに、ちと勘吉によべとある。是は冥加にかなひ有がたき仕合ながら、私方は見ぐるしければ、はゞかりながら、旦那御指圖の方へ招提仕りたきよし申せば、きけば家持とある。ちと存寄あれば、是非に我宅へと再三の仰もだしがたく、借り道具して申請れば大臣いらせられて、是は思ひの外せまき住居とて、早速作事の指圖をして、五十兩斗でしまふやうにとよき事仰出さるれば、勘吉いはれざる欲心、住居は是で今迄勘忍仕來れば、迚も御合力にあづかるならば、身過の便りと成事あり。此程去歴〻の酒やたふれて酒株道具共に賣るあり。是を拵ては末〱人の御機嫌とらいでも、夫婦樂〻と世をわたれば、一代御恩はわすれじ。今すこしの事、三貫五百目迄は買ふ人有。四貫目には成事といふ。それこそ汝が望次第、聞合せて參り調次第申て參るべし。其時銀子四貫目とらすべきとの御意ありがたく、氣をはつて段〻御馳走申ければ、御機嫌よくお歸り。其座に居合し、獅子頭の乱齋といふ太鞁の功者がつぶやきしは、さりとは素人末社かな。先もらはぬといふ事手ぬるし。替りやすきは當世の大臣心、それは〱あんな所の取やうは、物見た古い太鞁持の、小ぎりめな利發見せたしと、ひとり無常を觀じて歸りけるが、此大臣思ひの外仕過しせられて、長崎へ買物をして下されぬゆゑ、國元の親父不審して俄に僉義にのぼられ、惡所狂ひの段段を聞て、卽座に勘當せられ、身代は底ぬけ大臣となつて、いづく共なく逃て行れぬ。おやぢ京の問屋に恨をいひ、腹立して長崎へかへられける。あはれや勘吉が酒株、のまぬさきから醉はさめてしまひぬ。とにかくに約束して物もらふも、手にとらねば當にならず。紙花のびるとてせはしうも申がたし。下されなば宿へ斷申て、壹匁引て取替てもらふが手廻し成べし。冬空と大臣の心は、時の間にも替れば、日和を見て手延成せんさくは、かならず〱無用なり。扨色道信心の輩には、五重相傳を仕らう、　の內陣へ入せられい。南無阿彌〱

第四 女郎買五重相傳一重紙子

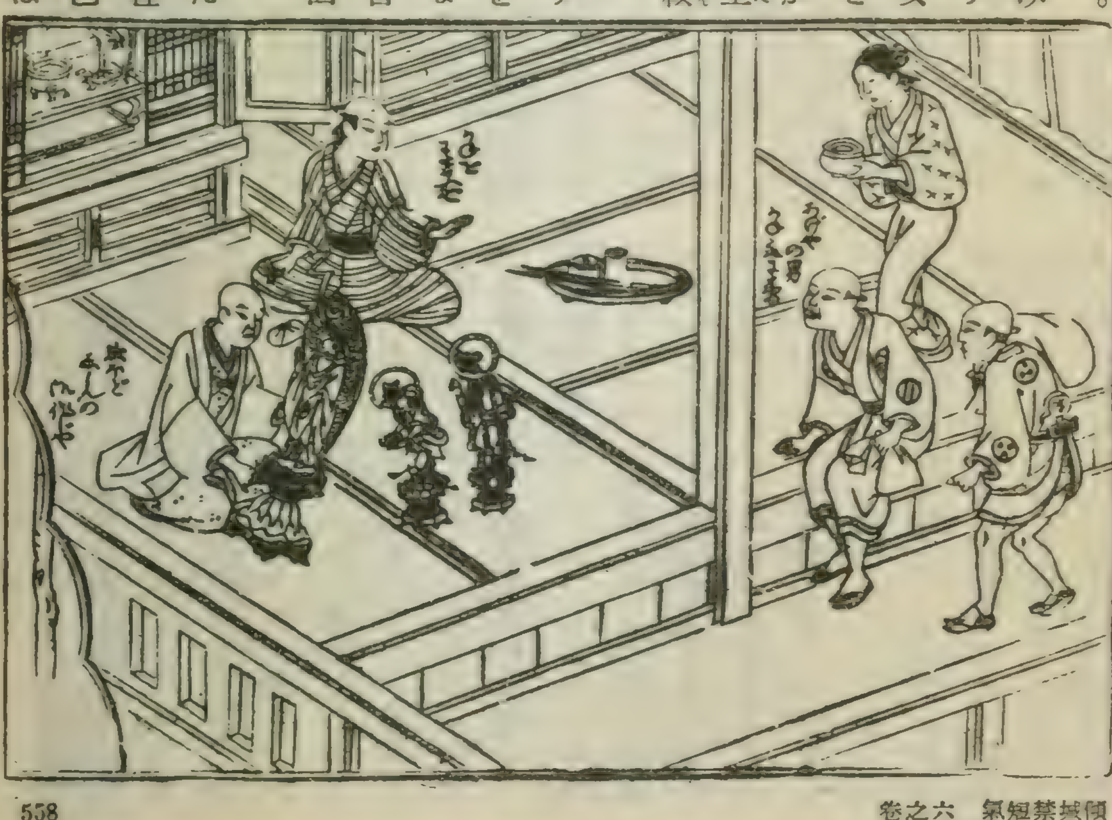
付り 仕掛の淵に深入せぬ大臣の觀念

色里一遍上人曰、夫女郎買五重相傳と申は

▲一ツに金銀有ッてこはい親なく、主思ふ手代死で悋せぬ女房を持、不斷隙

にて家業にかまはぬ大臣
▲二ッには都にて人も知名題の町人、ちひさき時から秤十露盤の道を知ず、諸藝に達して男付能　女郎も我あふぉてきと、はうばいにも、ひけらかすやうな生れ付
▲三ッには一座の興に成ぬ嘘はつくとも、金銀づくの約束に、嘘をつかず大筈いはぬ男、しかも下戸で無理いはず、物毎大やうなる仕出し
▲四ッには　らずしめやかに、しやんとしてしつこからぬゆきかたせんしやうぶらず、内證でひそかに金をやつて、名聞をこのまぬ大臣。納戸食間夫狂ひ、女郎の影の間の仕事を、大耳にしてしらべぬ男
▲五ッには病ひ氣なしに　もなつて、その事のあながちにないわろ。いかに用なき身なりとて、朝とくゆきてをかしからぬ所は揚屋也。夕飯前からのり込、夜も人の歸る時分立てもどつて、女郎のねむがるを合点して了簡づよき大臣。出口の門迄おくり出るに、大かたの客名殘をしみかねて、冬空のはげしき風もいとはず、執心ふかう立ながら隙入は、薄う見えてよろこばぬものなれば、是もさらりとしたがよし。いふ事のすこし殘りたるは、明日の慰の種にも成と、いつとてもをしまるゝ程にして、かへる心いきの男
かうした五ッの个條の中に、のらざる男は本大臣とはいひがたし。さるによつて此五重相傳をせざる大臣は銀あつて蒔すてながら、女郎も思ひつかず、宿やの下ゝも、もらうてようはいはず。必眸のいきかたをわるうのみこんだる大臣、今洒分に成て、太夫にあへる身をもち　末社もつれず、時の風俗とて、木綿の仕立着物で出かけぬる人あり。此氣からは神ぞ傾城かはるゝは無分別なり。女郎狂ひといふは、人も見かへる程の寛濶なる衣裳をかざり、色つくるこそ其甲斐あれ。同し米をつかずにくふやうにおもひ、賣物ながら女郎もいやがる事いふ迄もなし。女郎の着物に襟をかけるさへ、能目からはよほど氣づまり也。髪つき斗大臣にて、日野の洗濯着物、ふんどしのかきがへもなき人、行所にあらず。表向の五重相傳の外、第一の相傳は是なり。通ひ出して馴染のかゝる程、遊び大形になりたがつて、いかな賢き男も跡先なしに遣ひはたして、我等がやうに紙子一重に成は間もない事也。いふかいはぬか、今時の大臣何の子細もなく、銀に氣骨ををらず、心よく通はるゝ大臣は、廣い都に物が五人と有まじ。跡は火に

成事もかまはず、おそろしき口入に書付を出し、かたり半分の借り銀、あるひは手をよく呉服物を買がゝり、是を賣損して揚屋の付届をしたり、又は切ののびる薬種砂糖を買請、其藏ながら質におき、虎の子わたしにはし給へど、鰐の口をのがれず、納りのしれたる事に、一日さわぎの大臣、さりとては氣づよし。大坂の娘がよい世とて、合力もせぬものなり。江戸も摑取の當所にはならず、此暮には慥に夜ぬけと高くくりして、万を大幅にやつて、親父の願ひ入おかれし、惠心の作の三尊を、拾両に賣て物日をつとめ、妻子の事はわすれて、女郎に思ひつかせたき仕出し。人の親類はいづくいか成者にもあるべきに、現在の伯父の雪踏屋はかくして、謡の弟子傍輩に、兩替やのあるを近き一門に申なして、色宿に來ての世間氣、皆こんな事ぞかし。とかく傾城遊女はなぐさみ物と心得て、何の事もなう買て遊ぶべし。かならず女郎に風なる仕出しして見せて、思ひつかさうとするからおこつて、外の客より上をせうと高うのぼつて、紋日物日もひとりして請取、心よう女郎の氣にあふやうに勤めてとらしては、針を藏に積てもつゞかぬものなり。參りもせぬ伊勢大神宮を、僞の相手にたのみ、堅固なる姉を病死といひなし、三十五日も里通ひをやめたり、又は雪隱のやねふく程の事も大普請するなど、色色に身ぬけしてさへ、嘘は



女郎の商賣なれば、つひにはしかけられて、有ほどはとられてのけるが、此道にかゝる者のならひぞかし。かくならぬ中に思ひ入の女郎請出してしまうて、惡所の通ひをやめたが上分別といふ人あれど、それは岡のつもり也。其身に成ては請出した女郎をつれて又彼里へさわぎに行など、却而むかしの大分物の入事也。惣じてすこしの張合にて、せんしやう一遍にて請出し、我宿のお內義さまにする事、是又大成無分別也。女郎はあの里にてこそ慰にもなれ、請ては常の女に少し取なりのよいぶん。世にある人の請ると云は、下屋敷に入置折ふしの通ひ女にして、飽の來た時金つけて家督のある所へ、緣につけてしまふべし。是も心やすづくとて必手代にとらせて、朔日廿八日其外もお見舞申、たえずお出入して、顔を見する所へはやるべからず。人の花に成ては、しのばしう成は世の常の人心、必後にはひよんな事が出來て、主從の中あしくなり、ばつと世上に名のたつもの也。よく／＼分別して、濃ならぬ中に見事な事をして、やめるが至極の要なりと、此道の元祖のをしへなれ共、かならず金銀手にある時は、此里の諸分前方にて氣のつかぬ事多し。万事人の指圖を請ず、かしこくなる時は、內證ふ埒にて心斗至りて、ひとつも物にならず。たゞ此ふたつをよく／＼工夫して、長うたのしむやうに取廻しせらるべ



し。江戸はゝりあつて、つよくして情ふかし。難波は禿だちの太夫斗にもあらず。同じ大坂にて心安く御意を得たお方も、どうした果にてか、松の位に至り給ひて、諸分のはしたなきせちな女郎もあれば、よい共あしい共其女郎にあうて見て、あんばい知ぬ中は、なべて此風と定めがたし。たゞ遊女は物やはらかに、客に身をまかせ、氣に入物と覺えてさもしからず。都の風俗にいづれかますべし。一切の本地も爰なれば、此道の學文の嶋原にて、十年斗に諸分覺え給へ。十万億はたゞ黄金也。爰に古今女郎の開山吉野の名君上人の、一枚起請といふ物あり。此度おの／＼へ結縁に拜せ申と、蒔繪の掛物箱から一軸を出しかけられける

女郎一枚起請

もろこし我朝に、諸々の女郎達のさたし申さるゝ、ねんごろの念にもあらず、又やりてたいこにならひて、文の心を學してやる文にもあらず。たゞ大臣いさめんためには、何心もなく打とげて、うたがひなく念比するぞと思ひとりて、ありのまゝを申より外、別の方便候はず。但しさま／＼やき手と申事の候は、皆けりやうにしていつはりなく、念比する義と思ふ中にこもり候也。此外おくふかき手くだをぞんぜば、大臣のあはれみにはづれ、物日にもれ候べし。ねんごろに思はれん人はたとへ一座の客たりといふとも、一もんふちの新ざうのかぶろあがりとおなじくして、ちりやくのふるまひをせずして、たゞ一向にねんごろすべし

うかれ坊主が心企、是にすぐべからず

されはいきがよいの、わるいの、いとしいの、にくいのとさま／＼に品はかはれど、つゞまる所は、　るひとつのたのしみと、觀念の床に千話の法問をなし、上人みづから今迄のばされし鼻毛をほつすにして、終には無師自悟の石佛となつて、堺の高塀の外にもたれかゝつて、毎年十月廿四日には、禿共が手にかゝつて地藏祭に花をやりぬ。誠にさとれば睟まよへば月、八万寶藏の金を以て此道をあきらむべし。おのづから無量の手管をはかり見る、分知とはひとりなれり。たゞ夢の浮世に無念無想にして、

遊ぶ所が極樂／＼

六之卷終

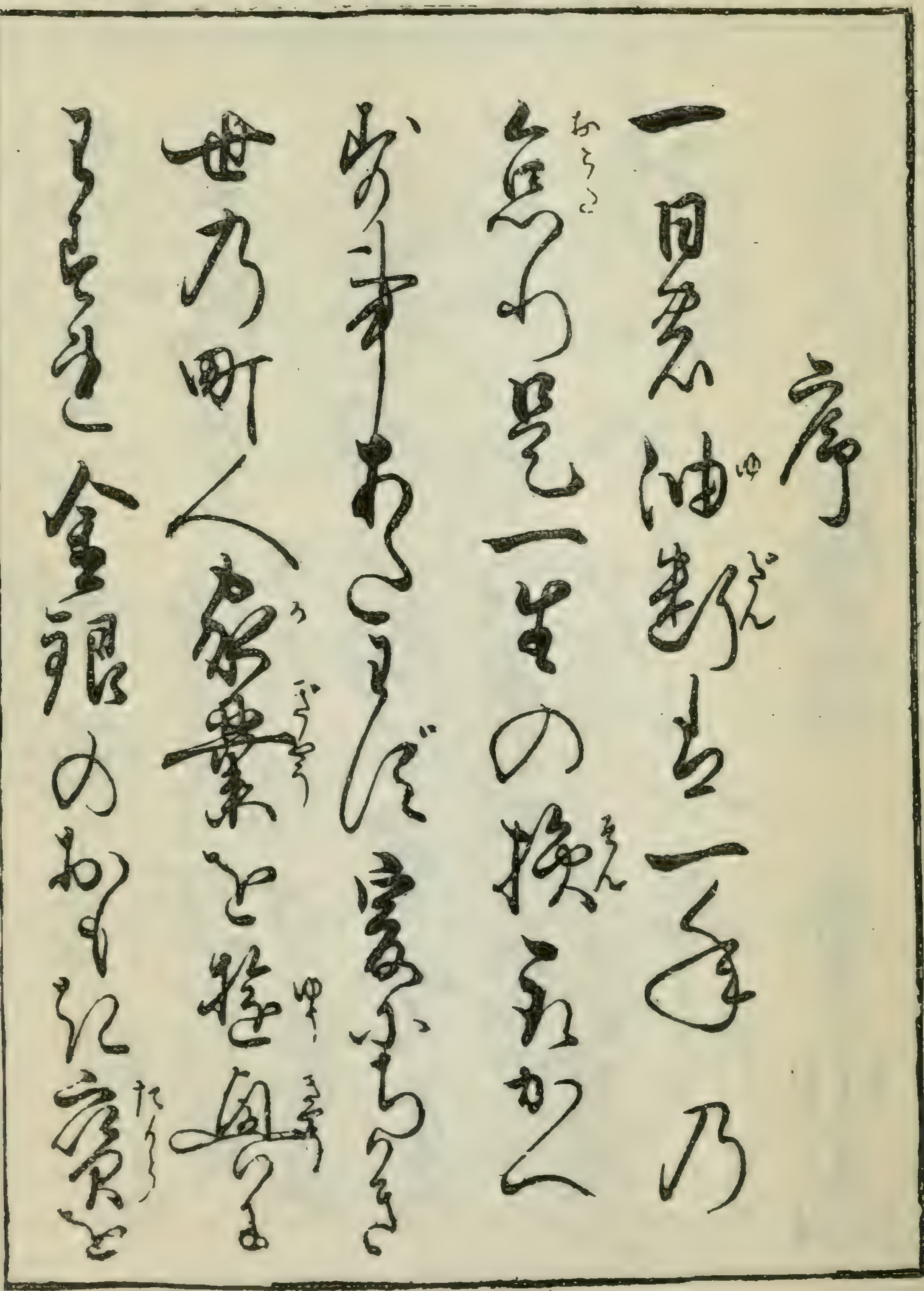
日本

新永代蔵

今世長者體

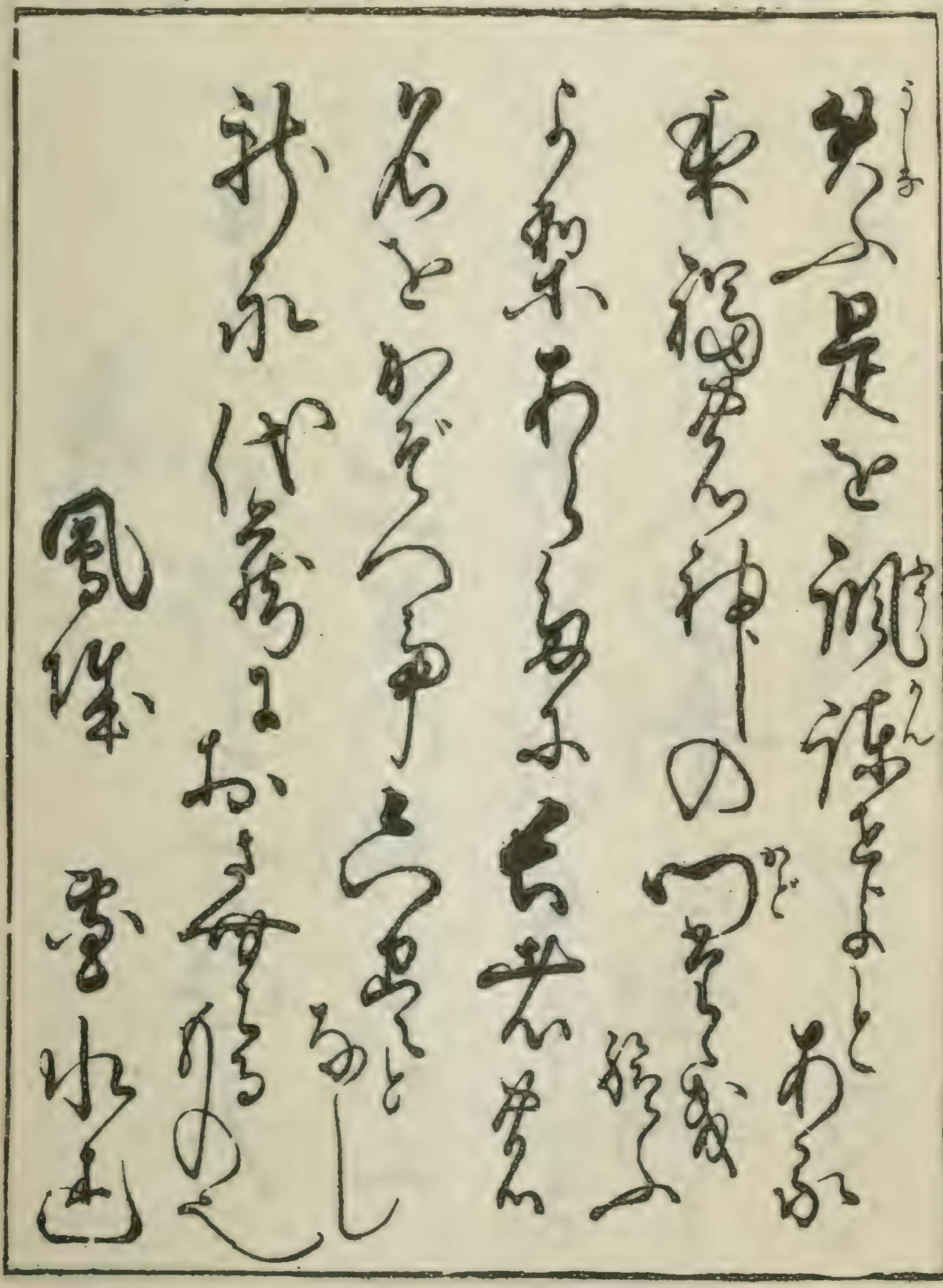
序

一日の油断は一年の怠り、是一生の損、取かへす事あたはず。爰にちかき世の町人家業を遊興にわすれ、金銀のおもき寶を失ふ。是を



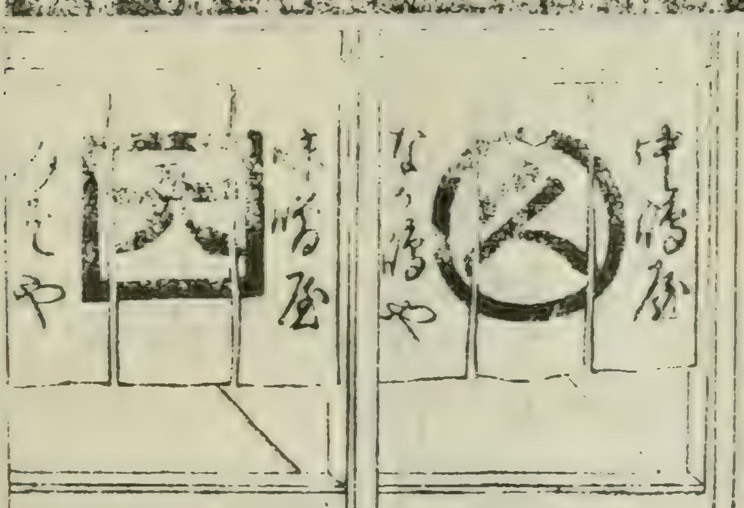
諷諫せよと、ある夜福の神の門たゝき給ふより、あらたに長者の名をかぞへて六巻となし、新永代蔵にをさむるもの也。

鳳城
團水述

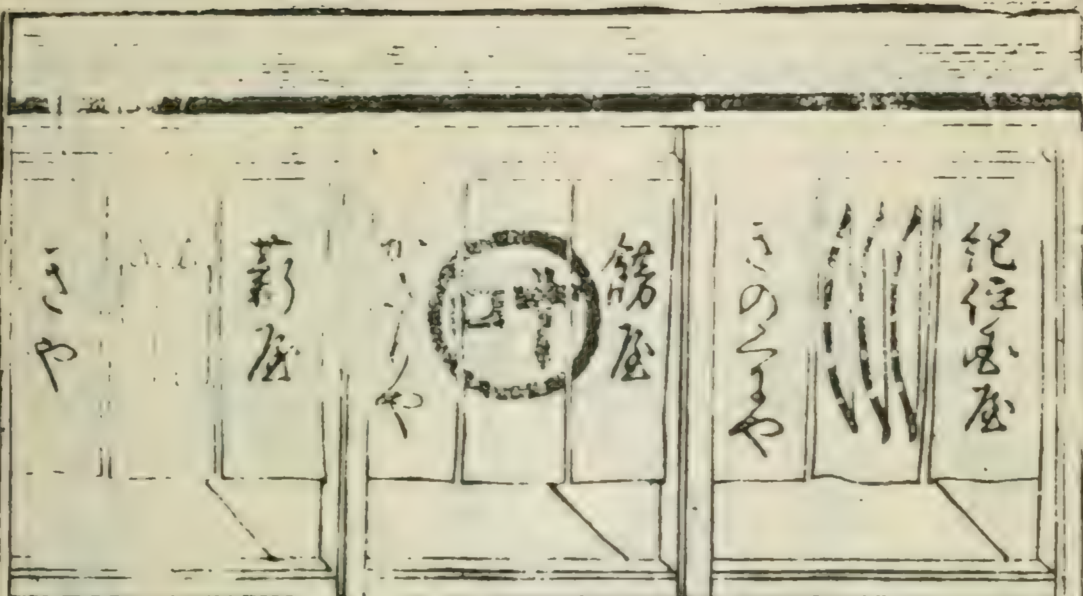


日本新永代蔵巻之一

目録



白銀百枚灘亀が御祓
大坂よりこれをうつして大仏の願頂
泉州堺の孫観歓代々の縁
五文乞餅を一日小鬼曝庵
縁板よ行衣寺の叙級噺
毒酒と薬酒と茶酒力一つ



地獄の釜の蓋［illegible］
一粒万倍乃種と新田の［illegible］
斧鋤の角を［illegible］
二年間の［illegible］
［illegible］
［illegible］
手［illegible］
［illegible］
月［illegible］

日本永代藏卷之一

白銀百枚歳暮の御祝義

國に憲章あり。三千條の罪、今太平の御代に生れて、糧に勞れ寒に患るは、大きなる科人ぞかし。分際相應の稼ぎ、それを勤めず、油斷して徒に日をつひやし、無益に夜を深す、さりとは不覺悟千萬也。いにしへより士農工商共に、出世立身のはじめをきくに、いささかの事をたねにして、功をつみ勞をなしたるしるし、しかもながき事にあらず。わづか十年のうちそとにて、家業の仕似せ、慥に元手づきて、人にへつらはず、過言を聞ず、かへつて禮儀をうくる事なり。是何ゆゑなれば、年月實體に身をもち、いつはりをいはず、他借の返辨、律義成をもつて、人のした手につかず、され共して出る迄は、成ほど大商人の、羽がい下につき、分別のある人にしたがひ、他の仕合を借事なり。第一人は慈悲善根の忘れず、かりそめにも、わやくに利をむさぼり、邪をたくむべからず。かならず其身一生は強氣によつて隱惡の罪をのがるるといへ共、子孫にむくふ事眼前也。過したためし今に其、善苗の福田千町にこえて、榮る津の國や中嶋といふ在鄕より、大坂に出て銅の商賣せし人あり。其比京の大佛殿を造改ありて、御佛の銅を買請、是にて大分の利德を蒙りける。尤なるかな、外の商人は、佛を鑄崩す罪を恐れけるゆゑ、此中嶋屋一人に買はせて、あらそふ人なかりし。中嶋屋は商賣のうへ、何の祟かあらんとて、鑄崩して賣はらふに、いかな此銅を買人なし。長崎にても賣あぐみて、せひもなき仕合かな。餘國の山銅迄、此中嶋屋が手にわたりたるは、かの佛を鑄潰したる銅なり。それにて居風呂釜などをこしらへて、むさきあし手にかけん事勿躰なしとて、かつふつ商賣のさはりとなり、日比の頓欲邪氣をとなへ觸して、金銀取やりをせず、惣領に娌をとらんといへ共仲人なし。二番めに娘ありて、是に入聟をとたづぬれ共、世間に取あへず、自然とあしき名をよばれて身躰をつぶし、揚句のはてに、惣領は集錢出しの饅汁蝶といふ毒に喰あたり、頓死してあはれや憂

めを見る事、是らを不仕合のはじめとして、樣々の思ひ事打つゞき、身上分散ののちは、法躰して秋甫といへり。又備前の岡山より妹の末子をもらひて、中娘と從弟女夫にして、祝言のうへ、うごきのとれぬ身袋をわたし、一町苦わらひして、千秋樂も聲びくにうたひぬ。秋甫年來の心だてもひるがへして、無道の商賣をせず、其まゝ銅のみちしりて、功者といはるゝを笠に着て、泉州堺に通ひ、錢屋宗安といへる大商人の機嫌とりとなつて、下人分の手形して、金銀を借うけ、しかも堺より手代數多入こみ、商賣はさせながら金銀の指引はまゝにさせず。され共此銀親のかげにて、商賣は以前より手びろくして、他人の金銀をやとはず、堺の錢屋ばかりに腰をかゞめける。扨も秋甫覺悟には、かく丈夫なる銀親ありて、商賣手びろくするうへは、我何に不足なし。尤自分の金銀ならねども、銀親の爲に、一奉公なりと、朝夕仕末能、聟にも子共にも、絹ものを身にさへさせず、帳合勘定の外には、手習子の筆の軸をもらひためて、竹暖簾をこしらへさせ、是を賣て其價をもつて八木を買、毎日門にたつものに施しける。秋



甫工夫のうへ、茶釜の蓋を切ぬかせて、其うへに銅の茶瓶をかけて、茶釜の湯氣にて、自然と茶瓶の水ぬるみて、何時にても、大勢の手代共の、月代の湯わざと涌さずして、不時の用事を達する事、又朝夕の汁の味噌を石臼にて引せ、吹子祭にも燒物なしの一汁二菜、膾に豆腐の濃味噌、これにて萬事の看略いふに及ず。是ほどに銀親の爲になる仕かた、世に又と聞ず。されば銀親の宗安も、滿足いたされて、白銀百枚歳暮の祝儀として、秋甫へ送られける。秋甫有がたし、誠に錢屋宗安老と申しては、近代隨一の仕末者、其おかたより、看略の御褒美として、下さるゝ銀子、商人の感狀、冥加にかなひたる仕合、是を私の用要に、つかひ申べきやうなしと、折ふし八木高直にて、今に人のいひ出して、おそろしがる辛酉のとしの、餓死をすくはんとて、御廣間へ願ひ、大坂下寺町、大連寺にて粥釜七ッ本堂の庭にならべて、施行せし事かくれなし。此外の善根、人の知たる事いふに及ず。宗安も秋甫もめでたき往生の素懐をとげて、互に子と聟の代になりて、金銀利足の事を、公事に取むすびて不和になりぬ。宗安跡は八千七百



貫目、一子作左衞門讓をうけて、不覺悟にて身袋潰れぬ。秋甫跡はいまだ宗安よりの預り、七拾五貫目の借銀を、智久左衞門へのこし置しに、此男萬事に油斷なく、いつまでか人にこしをかがめんやと、金銀かりちがへの工夫をして、銀親の手をはなれ、舅の借錢をいたゞきながら、肝ふとく最上の銅山を見立、泉吉と相支にして、ひとのしのして自身に江戸にくだり、足尾山の請負、南部の鉛を買こみ、晝夜油斷なく十年かゝらぬ内に、四千貫目と世間に見られ、慥成商のみして、世帶をひろげず、人につき合ず、藝をならはず、芝居を見ず、二町にしにある女郎町の門をくゞらず、終に萬貫目もちといはれ、堺普請の家を建なほして、大坂やしきの軒の松蘿、かくれなき家のしるし、丸に久しき分限者ぞかし

五文取の餅一口の鬼味噌屋

人上の貧福、皆前世の果によるといへり。され共當來にて、直なる心をもつて、他にまじはり、平生油斷なき時は、天道是をめぐみ給はで有べきや。かならず人間の立身、若き時のみに極りたる事にもあらず、五十に及んで、仕合を得るたぐひもあるぞかし。是をおもへば其人の行跡、佛神感應あつて、幸をくだし給ふ也。くれ〴〵若輩の時分、ずゐぶん人より稼はたらきても、立身なく、萬事ひだりまへなるとて、男ざかりに剃髪して、眞實おこたらぬ佛緣をもとめ、口をしく廻向鉦をたゝき、開帳寺の繪説いふなど、淺ましき人のなれのはてかな。かならず退屈なく、死るまでの立身と思ひ、我とさきを見きる事有べからず。四十五十迄、何にても勤めたる功は、天道人氣に空しからず。眞那道三といへる、近代の良醫、三度迄京へ出られしに、其器量を知人なし。たゞ庸醫坊主とあなどりて、療治をたのまず。不仕合にして田舍へ立のき、在京のたくはへをこしらへて、又京へのぼるに、猶はじめの如くにして、世間もちゐず。ぜひなく又は田舍にくだり給ひぬ。世には片かなさへろく〳〵に覺えぬ者の、天窓をこしらへ、羽織をながくして、鍼醫本道なりとて、ゆゑもなき名字を付て、おそろしや大切なる、人の命をうけとつて、家業とする、多く此族に殺さるゝ人、數をしらず。去良醫の、新しき石塔をみて、又去年よりは、庸醫者出來けるよと、なげかれしは宜也。扨も道三の家來に、

八助といふものありて、思案して申しけるは此たびは一定京に居止り給ふ、才覺こそ侍れ、ぜひ京へのぼり給へよとすゝめける。道三も三度迄出京して、不幸のうへは、我のがれざるの天の責ありと、諾ひ給はざるを、八助たつていさめて、道三四たびめの京登り、居住は三條下ル堀川の西、しかも邊土なり。心安き借宅細竹の打附格子、宿札もひらがなにて、さりとは似合ぬしかたながら、年來如在なき家來の、八助がいふにまかせて、格子にはくらんぐすりと、かんばん出しぬ。扨も己も、醫者の家に久しくつかはれて、片言をぬかすと、道三しからるゝをかまはず、くわくらんをはくらんと書て、賣ぐすりのかんばん出しけるこそ方便なれ。扨例の如く、誰か道三をしる人なかりしに、八助毎日、京中をあるきて、眞



那道三といふ醫者殿は、此あたりにてはなきかとたづぬるに、元來聞もおよばねば、しらぬ〳〵と、はじめはいひしが、いつの比よりか、扨も田舍より

ちかごろのぼられし、眞那道三といふ醫者、上手にてはやればこそ、ひたとたづねにくる、それは何所にか居らるるぞといふに、我もそのとほり〳〵と

いふ中に、誠やそれは、三條堀川にて、宿札を見ける、はくらんぐすりのかんばんの、出してある竹格子の所よと、しせんと京中に、道三といふ名を聞おぼえ、所をもしりて、療治をたのむに、元來上手なれば、難治必死の症と、並醫者のすてたるも、手ぎはよく、不日に功をあらはし給ふ。扨も扁鵲の再來、道三の療治にあづかりて、死るものも得度して、娑婆に執着せず、親類も悔まず、終に天下に名をあげ給ひ、衆方規矩といふ書物を遺されて、今もかるき事は、藥種屋も調合のたすけとはなりぬ。是八助が才覺ならずや、商人も此覺悟有べき事なり。いかに手練の道なればとて、世間に諾はざる時はせひなし。伏見海道の味噌屋、子共の小買にきたる味噌の中へ、一文餅をわざとならず入てやりて、是にてひとはやりはやらせぬ。上京のさる貧地の寺の住持、人とちかづきになるはじめに、拙僧寺よりは、奉加帳廻し申事、かたく禁制と、先々の住持遺誡にて相守るのよし、あいさつするに、人ごとにふしぎなる掟とはいひながら、まづはちかづきになりても、氣づかひなしと心をゆるしぬ。人はたゞなじむにつけて、寺道場の事はすてゝおかれぬもの也。これらはみな、當流の寺持といふ成べし。近き比見事成普請、しかも人の恩にきぬ仕樣、世間は模樣ひとつにて、樂にゆく事と、かしこき人のいへり

地獄の釜の蓋曙染の羽織

酒中花の細工人、酒に入て、此花ひらきて興ある事を、たくみながら、その樂しみをしらず。十露盤屋は、百千萬億刧の目安はもれ共、其金銀を夢にも見ず。扨も同じ世に住ながら、身袋高下の違、口をしき事かな。さらば貧家に生れて、元手なければ、いかなる商人の手だてを、もくろむといへ共、其術成がたし。とかく分を守り、己をしつて、一錢を千兩に貴み、手ちかく仕末をよくして、相應の立身を願ふべきものなり。かならず心はやりて、抓取の分別して、よしなや身を風來者になし、諸親類に見かぎらるゝ、たぐひあまたなり。誠に大器のれうけんは、かくべつなるものかな。武藏にかくれなき、紀惣といふ大商人は、子共を京にのぼしぬ。扨は花車風りうを、見ならはす事かと思ふに、さらく〜さにあらず。しかも所は大佛の耳塚のあたり、洛外といひ、

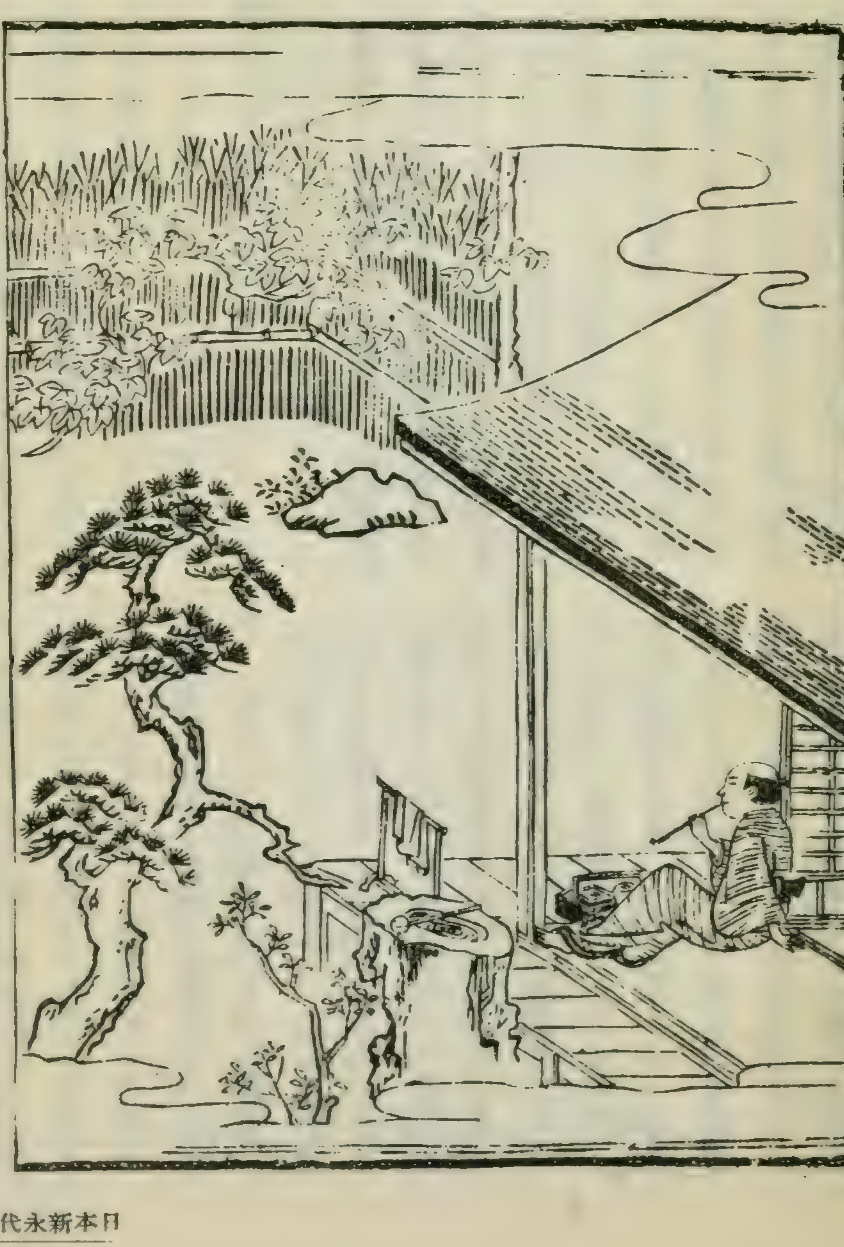
小家軒をならべ、扇のほねをけづり、けふの手間賃を、翌のけぶりの價にして、正眞のたゝきやめば、喰やむとは爰の事ぞかし。すでに春の櫻をみず、秋の月はもるやねの下臥に、夫婦のかはせ枕、子のある事をかなしみ、互に合點づくのうへ、年にひと夜の契さへ、さま〴〵分別して、佛神に祈誓して、あはれ子だねをたちて給へと、心中に念佛題目、是ほどに心をくるしむる事、なんの面白き事の有べきぞ。夫婦一所に罷有と申、御公儀様への申わけなり。當町の名主の悴、十八にて大きなる好色もの、第一町人の身として、過分の侈者也とて、南北の隣町、會合のうへ、舊里をきつて追はらひぬ。其やうすをくはしく聞に、當正月十六日、地ごくの釜の蓋さへあきて、大罪人一日かしやくをのがるゝ。これによつて此世にても、十六日遊びとて、主人のゆるしを請ざれ共、でんどはれて仕事をせぬ日なり。是何ものゝいひ出したる狂説ぞや。誠地ごくの釜、ふたあきて罪人遊びにあるく事ならば、一千年があひだ、眞倒になつて、罪人落ると聞、八大地獄へは、つひにおちつくまじ。毎年の正月十六日に、地ごくの休み必得がたし。よし地ごくのさたは、我々の及ぬ事、此世にて大せつなる一日を、仕事せず、あまつさへ念佛講中の懸錢、百五拾文を三度に盗み、伽羅の油もとゆひを買もとめ、大器なる事は、半紙一折をしげもなく、ふたつ折にして懐中し、一文取がへの房楊枝、親仁の丸ぐけの帶を、いつのまにやらちよろとはづして、こしうちにまきたて、ひら野北野より、高臺寺清水坂迄の、色茶屋をのぞきあるき、母の姪入の時、大願おこして買たる、はちくの皮草履を、きらしあるきて、はらのへりたるまかせに、二日ほどの物をくらひ、歌ざいもんの正本をもとめ、何べんか、ふしのゆかぬを、氣をつくしておぼゆる、是ほどの侈、昔のはかたや小左衛門、今の代にきこゆる大臣も此うへの樂しみ有べきや。かゝる好色ものを見ならひ、いかなる侈者か出來んとて、追放しければ、いづれも子にはあらず、敵とおぼしめせとのあいさつ。さりとは一日のやすみさへ、肉身のわけたる子にゆるさず、まして相應に弟子をかゝへたる親かたのつかひやう、おもひやらるゝぞかし。全く邪見といふにはあらねど、近年高き八木に、下直なる職、すこしも油斷しては、たちまち咽の乾事ぞかし。是を見ならひたる紀惣が悴、金銀の大切なる事をおぼえぬいて、お

江戸にくだり、大拍子なる家業の、材木屋なれ共、一錢の墜をいとひ、次第分限の楠木、石に鳴尾の新田をひらき、諸國の作だふれの百姓をまねき、是に鋤鍬の農具を、賃をとつて借し、荒畠をうたせ、それ〳〵に人をすくひ、其身もにくまぬ金銀をまうけ、長者の名をとりし也。是親の紀惣、つましき京の風俗を見せ置し、慈悲のあまりならすや。同じ京にも、よい事ばかり見させたる子共の、するにいたりて、たゞ金銀を、澤山なるものとおぼえて、ない所に事かくを知ず、終に金銀のみやうがにつきて、淺ましきすがたを、世にはぢぬもあるぞかし。とかく身の過がたき事を思ひ、今日安き時をよろこぶべし。雨の日木履傘、是を天氣のよき時取おかざれば、又の雨天に事欠は眼前也

二年めの蕣の花只工夫たね

朝ねは福の神のお嫌ひ、若き時身過に疎く、西南の不夜城に、居びたれのいきつき酒、耳にちかき百八の鐘をうらみ、明てしらむ雲をさへ、うるさやと遣戸さゝせ、窓ふさがせ、蠟燭をならべさせて、世上の晝をよるにして遊ぶ。金銀につかへぬ身からは、さりとは是も、人のかまひにならず。され共つきる時には、つきやすき金銀、光りをみがきし錺屋とて、日本長者の六代め、今は百貫目にたらぬ身袋、是にて中々、今迄の格式成がたしと、急に分別極めて、家材を親類へあづけ、有銀を持て、代々の住所を立のき、大坂の福嶋に坊主行儀の世帶、北に見わたす野山の氣色、さりとは物の入ぬなぐさみ、百貫目の利銀にては、今すこし出かけらる所を、いかな〳〵心を心にいましめ、なまなかの遊びを思はず、たゞ花鳥に物好をあらためて、ちかき方なれば、宗因の孫西山昌札の門弟になりて、連歌をしならふ。扨も嶋原にて聞を悦びし時鳥も、今きかぬ初音に五文字をたくむなど、人のするほどの義は、仕りしなれのはて、折から葭垣のもとに、いつのこぼれだねやら、朝がほの二葉、土をはなれて、我亭を捨ぬといふ、發句の趣向、日暮に水そゝげば、時としていよ〳〵此草、蔓手をのばし、とりつく便りありて、はや文月のはじめ、ひと花咲そめて、しろき匂ひに露も猶をかしう、七夕の名をすてぬしるし。是に心をよせて、いつしか癖の朝ねをわすれて、紐とく花のすがた見んと、

蚊帳をはなれて一ぷくの煙草、心ちよく、手づから井の水くみあげて、寝顔の匂ひ洗ひすて丶、四方山見るに、さりとはくやしや、是程一銭つかはでおもしろき風情ありし事をしらず。もたれたる遊びに、金銀つかうて無益の年月を送りしと、今ぞ観念のほこりをはらひ、座敷掃て庭の塵とり、身もこなれて、朝飯す丶み、昔のつかへを忘れて、無病の楽しみ。是朝がほのおかげ／＼と、愛して翌年の夏をまつに、去年の花よりおほくのたねのこりて、さりとはあまた生出て、蔓の比はさぞかしとおもひやらる丶より、此男倩れうけんするに、たゞ一もとの草、其たねのたゞ一年にて、かく多くひろがる事、天地の萬物同じ事なり。はじめはわづかのしづくが、するにいたりては、大河うみをなす。たとへ目前也。此道理にて、



我今少分の元手なれども、一稼ぎはたらきしうへは、以前の大身袋に、立もどる事、遠きにあらず。無用の隠者かなと、其日に金子頤ヶたる方へ、ことわりをいひこみ、密々に商を見たつるに、とかく大廻しの船、勿論海上ある事ながら、綱碇を丈夫にして、檜木造のうへは、いさゝか難風を乗のがる丶

事、古き沖船頭のいひぶん、尤におもひ、九百石と八百石の新造をこしらへ、律義なる水主、船頭をのせて、羽州野代にくだしけるに、思ふまゝなる仕合して、二年めに萬事さし引殘て六十貫目の利分、是より商の拍子にのつて、米木綿の買込、塩濱の思ひ入、ひとつもはづさず、さいてとる鳥飼の里より、養子して猶是に指圖して、近代の分限、以前にまさるめでたき家の印、叶の字かくれなし

千貫目持の印判おして深き心

上古御上洛の御時、家持にばかり、金子をくだされて、借屋の者共へは、御さたなかりき。是はいかにと、時の賢臣の裁斷、有がたくこそ聞えぬ。すべて天地のうちのもの、己が身をいるゝ程の、家をもたざるはなし。がうなはちひさき貝に宿り、みさごは荒海に宿す。しかるに人として、我家といふ物をもたず、人の軒のあまりを無心し、借宅する不覺悟、物の用にたつものにあらず。此道理をもつて家持の外には、金銀下されぬ事也。是何とぞ家業油斷の町人、向後人の家に、借宅する事を、口惜く思ひ、朝夕精を出し、相應のやしきをもとめ、安樂に住居せしめんが爲の御めぐみ、佛の衆生をおぼしめすに異ならず。扨借宅のもの家持に成事、全く遠きにあらず。大津より薪を荷ひ、毎日京へ出て賣、市助といふ男、肩背の汗のあぶら銀、わづかの事ながら心がけよく、五年があひだに、貳百七拾匁喰のばして、是を所に、代々の分限者、河合又七といふ人の、庭につくばひて、お家へ對して申せば、誠に塵ほこりとや申さん、私儲溜の銀子貳百七拾匁、何とぞ御あづかり下されなば有がたかるべしと、手をついていふを、又七庭に飛おり薪賣の市助を上へあげて、さりとは奇特千萬かな。當時身分の口ばらひさへしかねて、人の物を負借て、不埓にて逐電捨身さま〴〵の中に、其方しれたる薪賣にて、是程の儲溜、いかな江戸大坂の、大商人にも劣らず。百目も千貫目も、道理はもつて同じ事也。成程慥に預り、一年一ぶの利足相違なき條、證文念のうへ、自筆にしたゝめ印形をすゑて、市助へわたせば、此男少にじり書もして、とくと手形を讀で見て懷中して一禮いひて、宿にかへりぬ。扨も無念成事かな、百匁たまりし年預ヶなば、一年に拾匁の

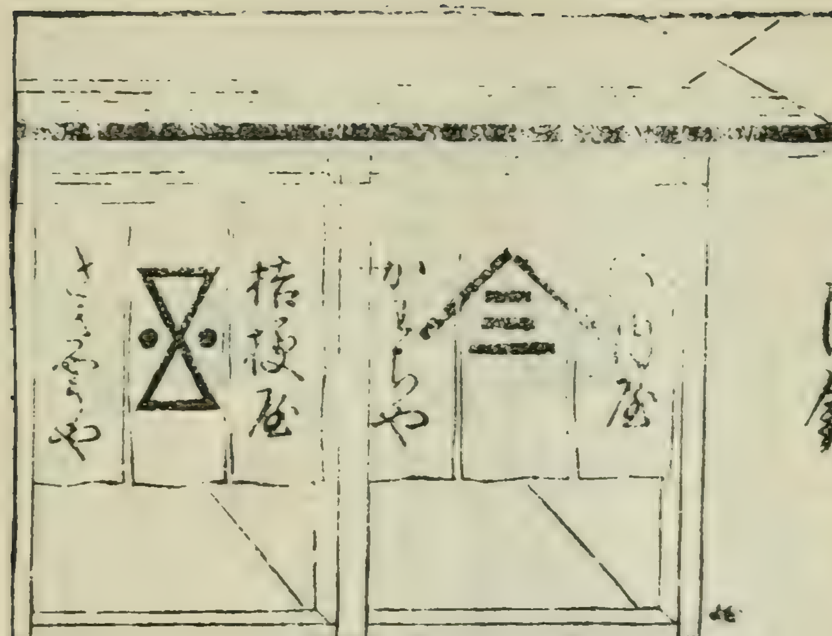
利足、凡心づもりに、拾六七匁の一代の損、我世間をしらぬゆゑの油斷なり。はづ貳拾七匁當年より銀の利を取そむる事、出世立身の門出よしと心をいさみて、銀のある貌もせず猶今までの如くに、あしたの星に枕をはなれ、夕べは日の岡の峠に晩鐘を聞て、人より遲く仕廻、はやく出る其はたらき、常躰の事にあらず。ある時上京に薪を賣得意、しまうたや三利とて、諸國のお大名の、御用金をうけ給り、家内三十七人の暮し、世間の節季物際も、こゝのうちは揚弓の格音しづかに、小玄關の次には、不斷呑の薄茶を引ねぶる坊主、物を苦にせぬ大ぐち、廣敷には中居飯焼、艶白粉のよしあしの穿鑿、上臺所にはこしもと四五人、四條の役者評判、さりとは浦山しき渡世かなと、市助つくづく庭の角に、薪をつんで是を見て觀ずるに、さのみめづらしき事にあらず。皆金銀にてなる事、人は精次第なり。すでにちひさき所とはいへ共、日本にかくれなき、大津の河合又七、凡千貫目の分限といはるゝ人が、わづか貳百七拾匁の銀子をあづけんといふ我をうやまひ、幾人かある手代にもかゝせず、自身に證文したゝめられしは、是此市助をうやまふにあらず、貳百七拾匁の銀子の光りなり。千貫目の分限者だにかくのごとし、我要用に一錢つかふ時も、いたゞきて出すべきと、冥加を思ふ折から、下男燭臺挑燈の掃除して、ながれつきたる蠟を、塵塚にすつるを、市助是を、私にくだされませといふ。大所につかはるゝ下男、いらばとつていきやと、おとがひにてゆるしけるを、市助ながれをあつめ、奉書の反古を、四五枚もらひ、是にやう／＼と、包あまるをとかくして、一禮いひて、大津へもどりがけに、京極の蠟燭屋に立よつて、是を賣んといふに、元來上々生蠟のながれなれば、三百七拾文につけるを、いろ／＼としひて四百三拾五文に賣、蠟をわたし、反古は入なりととつてかへり、是程錢になるものをむざむざ塵塚にすつる事、世間に此たぐひ有べし。心がけてひらはゞ、ひろはるる物おほからんと、くだんの反古の皺をのばして、是もなんぞにならんと見るに、金千疋の折紙の、一歩ひとつ取のこして、今市助が手にあたりて百べんもいたゞき、是ひらうたるもの同前にて、立身のかゝへし者のさのみ好まぬ事ながら、我反古なりとばかり心得て、大やうに蠟燭屋にすておかば、此壹歩らふそくやが寶とならん。さある時は無念のいたり、立身のさきをれ也。

いよ〳〵是を思ふに、藁一すぢにても、澤山にすべき事にあらずと、猶萬事に心をつけて油斷なくはたらき、其年百五拾匁喰のばし、又河合へ預ケ、元利合四百四拾五匁の新手形にして、毎日京へ薪を荷ひ賣、大所にては氣をつけて、すたる木の切、竹の割、古莚古繩迄をもらひ、年々に金銀を儲溜て、既に河合に廿七貫匁の預ケ銀。二代めの又七不覺悟にて、身袋潰れける時薪賣市助も負せ方にて則河合がやしきを買取、相續て薪と米との大商買、女房は以前辛苦せし時の事を忘れず、人に高ぶらず、身もちあげせず、夫婦榮花は金銀ののびるを、月雪にながめ、世の商人の手本とぞなりにき。河合が親貳百七拾匁の時、手をとつて上へ直し、千貫目の身上より此人をうやまひしは、げにや見所のありてや

日本新永代藏巻之一　終

日本新永代蔵巻之二

目録



六十余州紙の暦

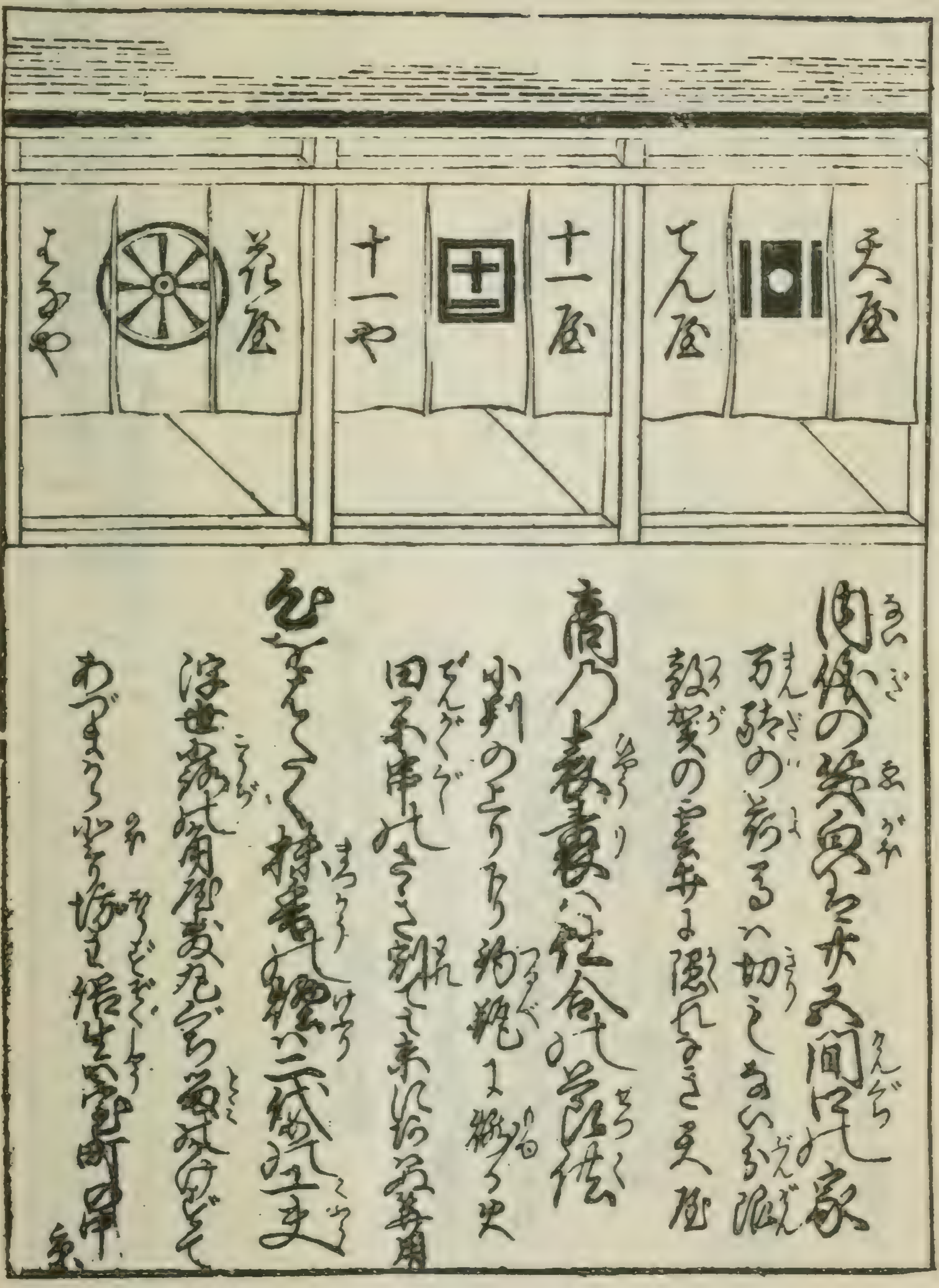
難波ましの地形を見立て繁昌

大坂に過れぬ質屋のむすめ

佛の箔を削る悪欲の絶

留守の家を照らす朱塗の蝋燭

江戸に隠れなき孝行な息子



天屋
十一屋
十一や
花屋

日本新永代藏巻之二

六十餘州紙の來歷男

泰平なれば世廣し、人おほくして當代何事にも、共潛ありて、中々通例の事にては、商を人にしおとされて、埒の明事にあらず。萬事元直を買手にしらせて、やう〳〵さき樣のれうけんにて、相應の働賃をもらふ事也。以前は間間高利の仕合ありて、存外成金銀をまうけし物がたり、かならず今の商人さやうの事を耳にかくべからず。とかく停儜ぢみちにかゝりて、得意をはづさぬ調義、取わけ利功だてをいふ商人は、相手次第になくなりて、身上をもつ事かたし。爰に大坂に河内屋善兵衛といふ者あり。元來三人兄弟にて、惣領は親の仕似せ、金襴巻物の商賣、妹は親類中へ縁につきて、さきさまは質と兩替にて、そゝけぬ商、末子の善兵衛は分家を起して、相應の家やしき、普請もまづ當世がゝりの、江戸格子の二階造り、元手銀六拾貫目、慥にわたして、是にて紙みせを出させ、女房をむかへとらせてのち、親仁は隱居して、三人の子共の世話をはなれける。此善兵衛生得猿智惠にて、前後そろはぬ分別を高ぶり、紙買にきたる人に出合、諸國の紙の出生、來歷由緒をかたり、我より外に、此道の商を、知たる者なき口上、さりとはちかき比よりの紙商賣、あれほどにおぼえらるゝものかと、人かへつて欺り、高が聞はつりし事も、なめてとつたやうにいふ、扨もいき過もの、いやな商人かなと、世間ににくむをも知ず、終に商の得意をもたず、次第に紙見せ隙なるまかせに、道頓堀へ入こみ、粋に付合、いふ詞ばかりは覺えれ共、ねからこなれぬ、しろうとの分として、工面事にかけあるき、皆がつかはれものになつて、博奕の方便にのせられ、六拾貫目の現銀に、三拾貫目の借銀出來て、建て間のなき家を負かたへとられ、女房には憂めをみせて、大坂屋といふ人の手代となり、主人をたふすたくみ、なまなか工面ごかしに、のせんとせしを、此家の長手代に嗅付られて、着のまゝにて追出され、うへ町に影をかくし、よな〳〵君がねまきはよしなか染のつき者となつて、

死れぬ命をつなぐ事、さりとはかゝる不覺人、世にためしなき身袋の潰やうかな。百貫目に及ぶ金銀をなくしながら、太夫のさかづきをのます、藝子の枕をしらず、連誹茶香鞠揚弓打拍子かつてぶ案内にて、大酒に喧花好して、いかもの喰の食悦、木戸の德左衛門がねぶか畠に、晝中にむしろしかせて、手にあたるを引ぬき、やう／＼土ふるひしまゝにて、酢みそに是を甘がり、湯ず酒に舌うちして、墓の寺の、石佛をぬすんで、鮓の重しの地藏菩薩、氣のかはりたる事よと、生玉の蓮池、花ちるあとの水遊び、己が女房をだまして、長門の遊女町へ賣てやり、兄の七左衛門が土藏に夜切をして、したゝか悉物をぬすみ、親のねくび迄かゝんとせし惡人なれ共、駿河屋久左衛門といふ男と無二の懇、扨も人にはあひくちもあるものかなと、世間是さた也。此久左衛門は當代世間の見たて、壹萬兩の分限、其はじめは鰹座といふ所に、歷々なる銀借あり。其手代に四郎右衛門と



いふもの、弟傍輩の太兵衛、亂氣して、なんの意趣もなきに、四郎右衛門を切殺し、其身も自害してはてぬ。此兩人より、久左衛門金子千兩餘、當座がり

に預りけれども、世間に知人なし。親方も兩人の長手代喧嘩してあひはて、請借の帳面譯らちなく、大かたぐちぐちにすみける中に、久左衛門は右の仕合にて、思はず元手丈夫になりて、商賣に勢つき、すでに六七百貫目の身上とはなりける。されども一文不通の男にて、僕の年季手形文言さへ、書つらぬる事成がたし。よつて善兵衛を、久左衛門目からは、案者分別ものと思ひけるゆゑ、他事なき懇切、內外の相談相手にたのみける。それに扨もうたてや、久左衛門女房と、いつのまにやら不義の密通して、律義なる男に、毒をまんまとのませて殺しける。思へば久左衛門みちならぬ金銀をかすめ、今分際の名をとるといへ共、因果のめぐる所おそろしやかなしや。され共町內より、善兵衛義よろしからぬ心底を、かねて存じのうへなれば、久左衛門が葬禮をおさへおいて善兵衛はもと此家のかゝり人なれば、亭なき所にはゐられまじ、後家も心よからぬはず、早々出られよと、手代共も同意していへ共善兵衛さら〳〵合點せず、我是迄の懇意殊に久左衛門義、頓死にて萬事仕廣げて藥袋なし、詮度の時節なれば何事をも片附、其うへにては、後家心底次第にいたすべしと、はや久左衛門跡式を丸めてのんだる貌つき。おの〳〵後家と馴合て、世に有まじき仕方とは、明らかに知ながら、さして身にかゝらぬ事に、人死の出來ん事も無益と、町內よりはかまはず、家內の手代小者迄も、親かたの野送りして、もどる道より銘々に、取がちぬすみがちに、半年たゝぬ內に家ばかりにして、おもひおもひに主どりして、かたづいて仕廻ぬ。善兵衛と後家は、夫婦になつて家藏を賣て、金銀のあるほどは高原といふ所に、古かね見せを出してゐけるが、是もつゞかぬはずにて、天道罪をゆるし給はず、終に善兵衛は盲目となり、女房に手をひかれて、乞食せしを見る人、心ちよくおぼえぬ。たゞ實体ならぬ金銀にて、富るはあやうし。うかべる雲の朝夕に心をあらたにして、律義を守り、正直をもとゝすべし。是はよき人のいましめぞかし。扨善兵衛が前妻は、大坂の人に請出されて二たび生國へ歸りぬ。され共夫善兵衛にだまされて、遊女となりたる事をいはず。其心を感じて死したる親の名までを世にほめぬはなかりき。是石灰町の賢女とて、大坂の人の自慢咄しかくれのない事ぞや

佛の箔を削る頓欲の鉋

大坂に生れて江戸に稼ぎ、京に隱居して、若ざかりの苦勞を樂しむ事と、長者通用記にしるせり。いかさま天下のお城下、諸國の人の集り、京の千日參、大坂の住吉祭にかはらず毎日の繁昌、此御時の君が代に、何をしたればとて、貧乏すべきはずはなし。みな晝夜の油斷、己を勤めざるゆゑぞかし。とかく人は一錢もおとさず、我又ひろふべきやうもなし。たゞ一身のはたらきならで、老後の安堵有べきや。長崎に郡内嶋をめづらしがり、江戸に鮒魚を悦ぶ。かならず所々に其かはりめありて、高利のとられまじきものにもあらず。西國の日照をかんがへて、大坂より瓜蔕子のかうのものをならづけにして、長崎へ積送り、大分の銀まうけして家買

木柯枝の桔梗屋とて、今冬木三文字屋にも、肩をならぶる商人、以前に身袋



たる人あり。北國の水損を聞て、苫を江戸に廻し、是にて一廉の立身して、材

の時のはなしを聞に、あぶらがはらけの鑄物をこしらへ、内を朱にぬらせ、

永代土器と名づけて、賣出しけるに、さりとは常とちがひ、まづ奇麗にて見よげに、掃除のたびごとに油すたらず、光り一だんつよし。是朱に燈の照あふゆゑ也。しかも油のへり各別すくなし。世の調法、天下の寶なりとて、買はやらかしてわづかの事より、五百兩の身上となり、それより次第分限にして、商の相手おほく、請負普請に手ぬきをせず、律義なる名をとつて、のち〳〵は入札なしに、お大名の屋敷をも、此桔梗屋に仰付られ、商の重をして、おかげをかうぶり、身上仕末よく、廿年此かたに、三萬兩と世間の指圖、此人ばかりは相違有まじ。第一老母に孝行をつくし、家來にいたはりふかく、他に僞りをいはず、佛神の事をもおろそかにせず。人の人たる人と、廣き所にてさたあるぞかし。是にかはりて、近き比洛東の眞如堂を請とりて、造りし大工、いかに手ぬきがなればとて、寺僧諸旦那をだまし、さま〲のてれん事して普請成就し、徙移のゝち三十日たゝぬに、本堂の來光柱ゆがみ、軒の桁をれて、諸人驚き侍りぬ。さりとは一宇建立には、人相應の金銀を奉加し、現當二世をいのる事なるに、淺ましくも瞋欲邪氣にして、是ほど佛縁にはづれ、萬人の氣相にたがふ、其罪いちじるしく、無病の男ざかりに、腰ぬけとなつて耻をあらはしぬ。いかに慈悲專元の佛なればとて、是ほどの事なうてはと、あはれむ人はあへてなかりき

内義の笑貌は廿五間口の家

商人は何によらず、毎日相場を聞て、手帳にも附置、心だまに忘れまじき事也。惣じて人の若いもの、律義過て、何事もうちばにかまへて、人の跡につきて物いふ者、利得る事かたし。又大氣にして、主人に損かけぬるほどの者は、取過しの引負をも、埋む事はやし。爰に若州敦賀は、北國の長崎にて、春はきさらぎのするゝ、秋はなが月のはじめ迄、諸國美産の萬人、此湊に入きたり、銅鉛、米紅花、靑苧蝋の子、いりこ串貝、にしん其外さま〲の商賣、問丸軒をならぶる。取わけ越後屋、茶屋、山本、數馱の荷物を出し入して賑敷商、誠に長者に似しといへるもさる事也。就中天屋といへるは、はじめはわづかなる人宿にて、萬事賣買の相場も、此門にたつ事なく、外の問屋の下手について、やう〲日和待船頭の、私ものをさばきど、埒の明事にあらず。

しかるに亭才覺ものにて、近年次第に家榮、諸國の商人を引請、敦賀に肩をならぶる人なき大問屋となり、彌三右衞門といふ名をしらざるはなし。表口廿五間、裏行五十五間を、家と藏とに建つゞけて、臺所の有様、はじめて見る人の目をおどろかしぬ。米味噌の支配人、薪炭の請取、酒肴の奉行、料理煮方の役人、椀家具の部屋をあづかり、菓子のさばき、たばこの役、茶の間の役湯殿役、又は使番追廻しの男、商手代勝手役、金銀支配方、帳附手代、相場状書諸事一人に一役づゝわたして、物の自由をとゝのへ、いさゝかつかへる事なし。亭主年中袴を着て、少も腰をのさず、内儀はかるい衣裳をして、居間をはなれず三百六十日笑がほして、腹のたつ事を知ず。さりとは上がたの問屋とは各別、人の機嫌をとり身過を大事にかけゝる。座敷數かぎりもなく、客一人に一間づゝわたし置、京がゝりの風流女を、廿人かゝへて、是に朝夕の給仕をさせ、寢間をとらせ、内證の



わけは、其人と合點づくにて、京大坂の蓮葉女といふにはあらず、落つきたる品にて、人はわりなや、是に戀をもとめ、三國の女郎に、うしろむくもお

ほし。諸國より爰に、入こむ商人の心心、又千差萬別にて、馬おりよりまづ時の相場を聞て、賣買に工夫をするもあり、件の給仕女の名をたづね、年までくはしう、いらざる親もとをきいて、女にふかく思ひ入たる風情して、酒の吟味京よりとつてきたりし、あたらしき小謡、三味線のあひの手を自慢して、商は牛の涎萬事せかぬが大器也と、すましがほする男ら、福の神の、かぶりし給ふ事をしらず、終に人に先をこされ、賣にも買にも損をして、うめかねては博奕にかゝり、手代は親かたを倒し、直に國もとへ、よしなき借錢を土産にするぞかし。たゞ商人は寢た内も、夢なりと見て、うつかとはあそばぬ事也

商の表裏は仕合の節供

戀に身を燒付られ、女郎にこがるゝ名のみ柴屋町、昔は京より爰に四人肩をはしらせ、君がまつ間をあんせしも、よしや時うつり折かはりて、今ぞ車借、馬かたの喧嘩所とはなりぬ。全盛は、よねの風流のみにもよらず、取しめたる、根づよき大臣あれば、其光にて、高下ともに口をきくが傾城のならひ、藝子とてもさの如し。以前爰の色町繁昌の時、上京柳はらよりかよふ男、ひとりは十加、ひとりは濱太とて、同年にて若ざかり、互に武者ぶりをあらそひ、かけまくもいせ屋のみをぎに、十加戀のめじるしゝて、日ごとの通路、濱太も同じ家中の、岡山にいひすごして、する〳〵は宿の妻と、ながめん心底を見とゞけて、岡山も此男につとめをわすれて、紋日をたのまず、内證を苦にさせず、人めの關をくるしみの、いかばかりのなさけ、傾城は買ものにしれたる事を、是を銀入ずに樂しむ事、此うへのよい事又有べきや。十加はこれに引かへて、疾歸りし客の、あととても女郎をからず、間夫などといふ事、怪我ないかな事、三年以來に一度もなく、たゞ有べかゝりに、買て遊ぶ事、しかもみを木かたに、誠なきかといふに、それは〳〵女郎の、まづならぬ心中を、いくらかつくす、中にも、其身かたちをつくらず、風りうをすてゝ、髮ゆはず、寢卷に伽羅とめず、外の客にふみを送らず。是十加より外に、男はないといふ、心だてをみせける。指爪、入ぼくろなどは、若輩なる女郎もする事、それを下に、見おろしたる心中、しかも年季のうへに、親かたの借錢だけをつとめて、廿七のあやめふく、

節供のよひに、しゆびよく大津より、京へのぼり、おもふ十加と夫婦になりて、商賣の錢見せ、少々のしすごしも、尾をみせる事にあらず。晝は人めをはばかり、夜々賃とつて、餘所の縫物して、身袋を大事にかけて家を守れば、十加も昔より、猪眞實のある事をよろこび、商にのみ心をよせて、一とせ金子高下のくるひにも、一度も損をせず、あたる所にて、思ひ入を合せ、しゆびよく間金をとつて、人しらぬ金銀をまうけ、次第に家を買増、普請して世の思はくよろしく、きかぬ銀の預ヶ手、見せにきかさなり、此商人の根つよき事を見こみ、人よりはやしたてゝ、銀儲をさする。是を思ふに、商人は一大事のものなり。夜食に七五三の料理をあぢはひ、緞子の夜着に寢たればとて、さのみ世間にしる事も有まじ。され共天道物いひ、地形事を聞なり。十加が女房、勤めせし女には、奇特成事かな、よな〳〵人に隱して、賃仕事するなど、定めて萬事の仕末思ひやらるれど、人



は堯三に、物をいひふらすものにて、十加は自然と分限になり、⊞の印を、一條通にひるがへし、年々たつる門の松に、壽福をいのらずして　身袋よく

なれば、煩ふ事なく、あんまとりも、此家の敷居を廿年もこえず。子のなき事見きつて、佛光寺通の、同じ商賣屋の次男を養子して、身袋讓りける時、町中立合けるに、七百三拾貳貫目、但し外に半分に成べき手形銀、拾七貫四百三拾貳匁、住宅の外に家三ヶ所、人の思ひしと違ひしは此人の現銀なりと、有事をいふ秋田玄庵といふ、小兒醫者のかたられし。又岡山といひかはしたる濱太は、心にみぢん如在なきながらも、たゞ女郎をぬすんで、たのしむ事ばかりに氣をうつし時をかんがへ、ある時は宿に二日三日もかへらず、商賣におこたり、手代に引負れ、近所の火事に物をぬすまれ、萬事の拍子ちがひて、憎なる小質のみせを、いつほしとなく、請仕廻にして、住所を立のき、まだも岡山に通ふ手くだの便り、ちかきこそよけれと、しらぬ松本に住宅して、手前の物七ぶに、買道具三ぶのがらくた屋、是ともに、晝夜宿に居ねば、商事なく正眞の賣喰にして、やう〳〵岡山が借錢、五步のあつかひにてすまし、大津の道具みせをも仕廻ひ、日の峠に田樂やして、以前はきはめて、勤めの身の、外の男に色ふかきことばつき、さいてさへ、吟味して何ほどかいじりけるに、今は女房におちついたるものゝ、手をしめられ、尻をたゝかれ、もしはうしろさまに、抱付程の事は、三百目御合點かと、じやれになしてわらうて、一膳飯も賣氣轉。思へば跡やさきの、今の堪忍かなと、能知たる人の、頭かきしも尤ぞかし

心をはたく抹香の煙は二代めの工夫

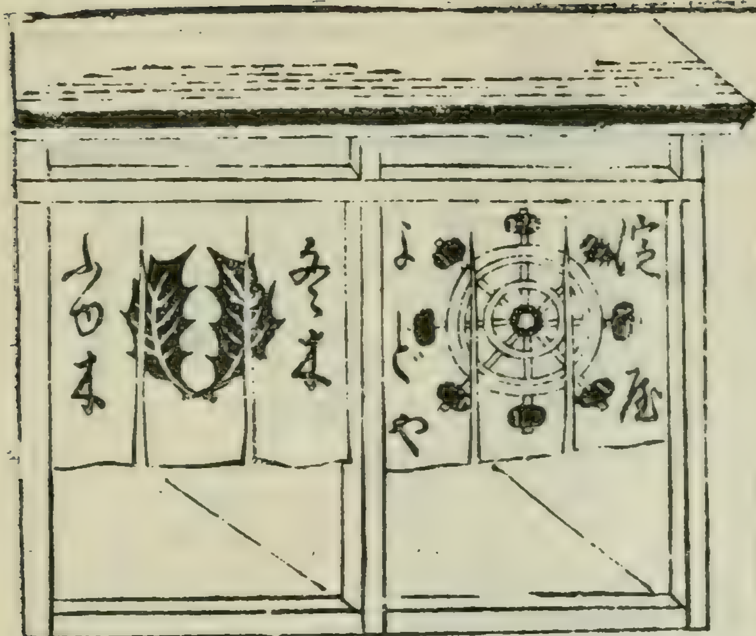
常におもふ、江南三月の裏、鷓鴣啼所百花香しく、お江戸は地廣く人多ければ、身は過易き、所とばかりおもふは愚也。其代りに、諸國よりよろづの道に練磨したる、商職人こみ、中々通例の才覺にて、及ぶ事にあらずと、一たび國もとをしそこなひし男、播州姫路に歸りて、一門親類にさま〴〵歎きけるを、母の妹にて、此男が伯母二階町、山屋といへる呉服所の隱居にて、安樂な身なりき。姉の形見といひ、甥子の事にて、あはれみふかくかけ給ひ、何とぞ世をわたる事を分別せよ。少はみづからが珠數袋の底をふるひて、合力せんとの御情、誠に身は身ほどありて、有がたくおぼえぬ。さらば何をか見たてゝ、口過のたねにせんと、晝夜肺肝の苦めけれど、今の世に五百匁や三百匁にて、

いかな〳〵取付て、すぐに渡世のいく商賣なし。半年もあんじ暮す内に、水な月も空にながれて、盆にちかき墓參、古きあり、新しき石塔、多くは少年と、無常を觀せしも、所にあたりて、其感猶ふかし。此男ちやくと、兼好が詞を思ひ出し、商人はかりにも、無常をおもふべからず。置て行はしれたる事なれど、今日なくて叶はぬ金銀、是をまうける才覺、世は萬年のたくはへと、いひしこそおもしろけれと、心のあらたまる所へ、福の神や宿り給ひけん、おほくの石塔の樒、水疎く日に枯て、見ぐるしきを方丈へ斷、殘らず石塔に、忌日彫付てあれば、毎月樒をたてかへ、水をあらため申、掃除料おの〳〵より八錢づゝ、御意にかけらるべしといふ。是は一だんなる事とて、早速旦那かたへ觸て埒明ぬ。扨其枯たる樒を、抹香にはたかせて、是を賣に、元手入ずに、あたまから三人口、心やすく次第に、寺々おほく請負、のちは十人して、はたき抹香をこしらへ、上方へも登して、大分の利を得て、寺町の門際に、小錢見せを出し、萬布施の包銀ありと、看板出し、金子百疋より、白銀貳兩、壹兩、三匁貳匁壹匁迄包置、壹匁ニ付、二錢づゝの包賃にて、封じめに我家の、印判をしてつかはしぬ。常の所にて小玉拂底の時分、懸合するに、面當大かたならず。さても氣さんじな事と、皆此みせに立寄て、日ごとの商、京の三井が、現銀見せにもまけず。たとへば、貳匁の包銀、壹匁八分九分ありても、此家の印判を證據に、其寺々より貳匁にして跡へもどる事、いよ〳〵出家しゆと示合、談義の參錢、蒔米を買込、溜銀を預り、又寺の入用を仕送り、十年たゝぬ内に、三百貫目の身躰、姫路寺町の花屋といふ兩替は是也。

ひとへに知ぬ國にては、稼がれぬ事を見きつて、はやく本國に立かへり、伯母の詞を便りにして、晝夜心だまを、見過に入たるしるしぞかし。同所の塩屋といふ男は、江戸にくだり、一たびはお大名の御用聞となつて、袴着て、大草履とりをつれて飛あるきしが、木引町の日の出の藝子に、覺悟をみだし、當もなき金銀をしすごし、屋敷のしゆびあしくなりて、自然と江戸にもあしをとめがたく、本國へ歸る路錢につきて、さんさぶしをうたひ、袖乞して京迄やう〳〵着しを、以前の色友、森尾但馬といふ烏帽子折にかくまはれて、すぐに樂坊主となり、指相撲の行司して、西嶋東岸の酒に裸を常とし、肘附踊のもんさく、人の懐の壹歩を念がくる、扨も雲水を便りの身過こそうたてけれ

日本新永代藏卷之二終

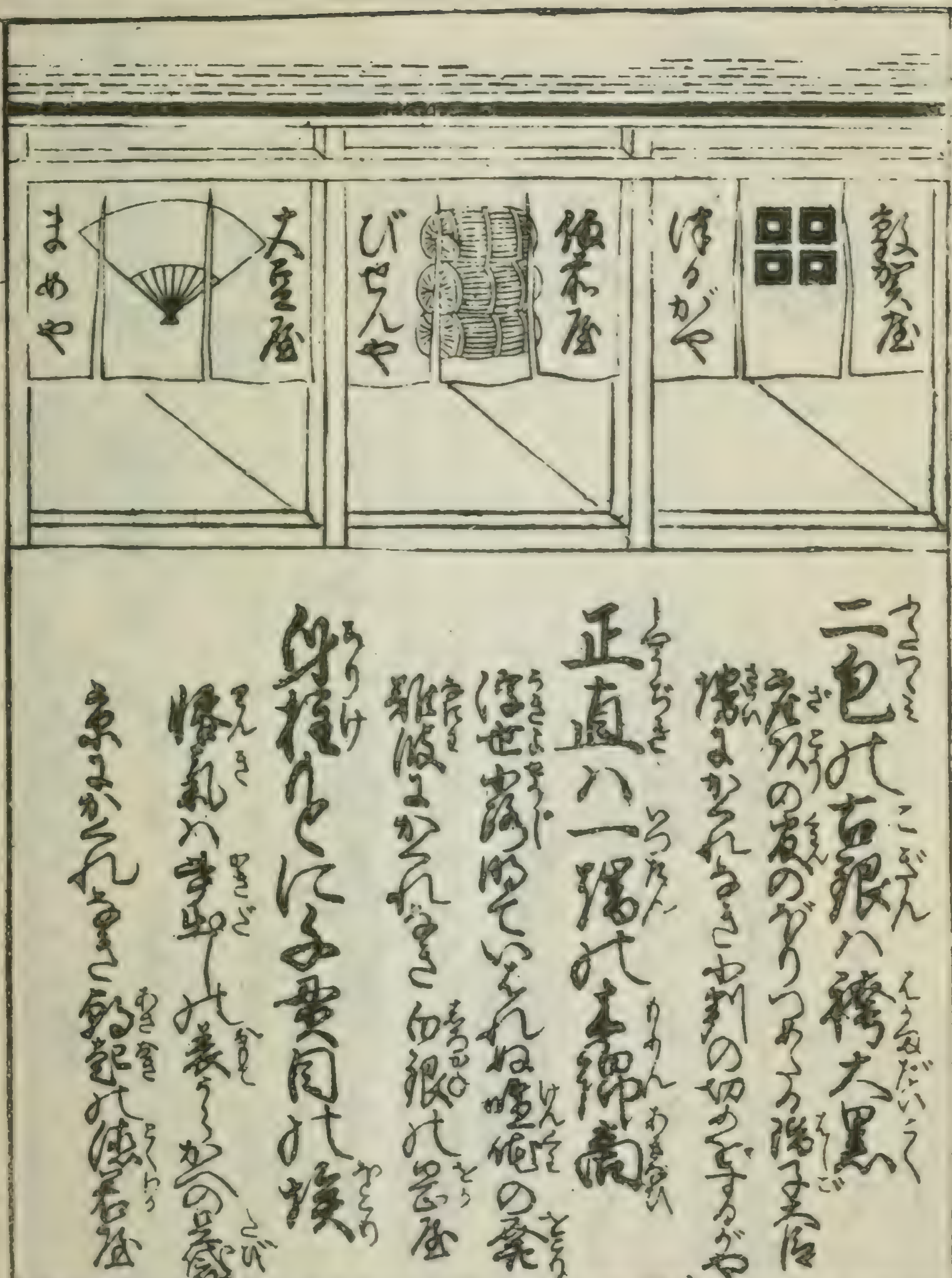
日本新永代蔵巻之三



目録

十二代眼義して鶏の曽根
作の菩提なる名残あれながら
大阪よりかられざる金の鶏屋

養仕金丸にて拾年の日当
身ハ接木の梅郡と両代の家藏
心よりかられざる大神宮とて財ハ八箇


敦賀屋
びぜんや
まめや

日本新永代藏卷之三

十二の銀藏に鷄の空音

商人は根をさめて、隨分氣を廣く持事なり。昔は八幡の人にて、伏見繁昌の御時代、淀堤の御普請を請負、其身の才覺萬人にすぐれて、大分の金銀をまうけぬ。扨も一代に立身して、子孫に分限の名を遺す人は各別なるものかな。四十八町の長土手を築、是を奉行するに、何ほどかけあるきても、隅々隈々に目のとゞくものにあらず。しかるに此男、切のこしたる並木の松のえだをうたせ、のぼりて腰かけらるゝやうにこしらへ、是にあがりて、ひとめに東西を見わたすに、幾帳場も手にとるやうにて、下知をなしぬ。さるによつて、六千五百人の日用、一人も油斷なくはたらきければ、世間より損金有べきと、推量せし請とり普請にお影をかうふり、大坂に出て、北濱大川町にて屋敷をもとめ、淀屋三郎右衞門とてかくれなし。代々金銀をもつて金銀をまうけ、次第分限にして、十二の銀藏、四十七の代物藏をいろはづけにして、何にても下直なる物は買込て、いつ迄も相場のあがるまでは賣ず。三代以前に買置のとたん壹丸百三拾六匁なりしを、例年店おろしの有物帳に付かへたるばかりにて、是を見し手代さへなかりき。すでにとたん高直に成て、壹丸四貫三百匁といふ時、八百六拾丸賣し事かくれなし。萬事かやうの手びろさにて、金銀のふえる事、古市算助も、えつもらではたしぬ。惣じて買置の思ひ入、商人の家にうまるゝ者、大かた九分拾分にはあはすれ共、金銀に手づかへ持こたへがたく、賣はなして人奉公をする也。此淀屋のしかたをよいとは知て、まねられぬ事ぞかし。され共此長者の家もほろぶる時節にや、五代めの與茂太郎、法躰して故齋といへり。此男酒婬の遊びに命をけづり、四十一才にてなくなり、一子辰五郎に身躰を讓り、後見は手代勘七、萬事の指圖せよとの遺言なり。爰に同町に淀屋秋庵とて、先代よりのわかれにて重縁となり、故齋とは、さしわたしの從弟也。辰五郎大分の跡式を取て、所務分をせざる事を内心にふそくして、うはべを

つくろひ、辰五郎がうしろ見、勘七一人にては心もとなく、七月極月の大勘定を、我にも聞せよといひけるに、物ありと見て、勘七是を合點せず、いかにも身不肖成私主人の後見仕る事、おぼつかなくおぼしめすだん御尤、しかし辰五郎殿はいまだ十二才なり。讀書をはじめ、おしわたりの男藝をならはるゝやうに申迄の事にて、さりとは、身躰向に氣づかひはなし。いかなれば十二や十三の若旦那が、野郎傾城ぐるひ致さるべきやうなし。親旦那は身躰相應とは申ながら、年中の遊銀五十貫目餘、是はしかも御存じの事にて、今年相果らるゝまで御異見もなく、同じやうに遊所へもお出にて、今さら辰五郎殿を苦になさるゝだん、其意えがたしと、理屈につめられ秋庵返答につまり、とかく身共が辰五郎には見所ありていふ事也。親故齋は根をしめて遊びしゆゑ、身躰の障りに成ほどの事はなかりしが、中々心えがたきは辰五郎、かならず其方後見をしおふせてみせよ。

あしくして、大坂一番といはるゝ淀屋の家を滅亡さすなといへば、勘七ちかごろ無用のお氣づかひかな。拙者うしろみ仕るからは、辰五郎殿を世間の人



にいぴもさゝさず、人品見事に、身躰は親旦那の代より一倍にして御目にかけん。いかにもそれを見ん、みせうといどみあひて、是より一家義絶し不通になり、秋庵は朝夕辰五郎によそより目をはなさず、あはれかし仕落しをせよかし、是勘七めが無調法なりと、世間へいひふらして、淀屋の内を追出し、我身辰五郎がうしろ見になり、大分の金銀を自由にせんとぞ願ける。勘七も是を推量して、いさゝか油断せず、辰五郎次第におとなしく成につけて、行儀つよく、をりめだかにしかけゝるを、十八のとし新参手代のうは氣者共にそそなかされて、放埒なるあそび、世間のさたにのらぬ内にと、勘七是を異見するほど、逆馬にのり出して荒てとまらず。秋庵は此事つのれがし、勘七をとつておとさんと、はや公事だくみの



最中、辰五郎は遊びにつのる。勘七が訴訟申上しに、扨もうたてや、いまだ廿にたらぬ身として、大分の金銀をし難義爰に極り、とかく悪心のすゝむる新手代共を、お上へ申あげて、淀屋のはたす曲事とて、辰五郎を追放仰付られ、さしもみがきかゝやきし淀屋の家家を退、主人辰五郎を本心になさんと、

此時潰れ、勘七は是苦にして、病死して名をとゞめぬ。かゝる起りのもと一家の秋庵が邪氣より、高名の商家を失ひける

給仕盃丸年廿年の奉公

聞て心ちよき物、番匠の鑿音餅突音天秤の音、是ぞ世の樂しみの基、一生秤の皿のうちをまはり、廣き商を知ず、女子算用にて埒のあく身こそ口をしけれ。惣じて三人口迄を身過とはいはず、五人より世をわたるといふといへり。猶も下人一人もつかはず、旦那といふものもなく、朝夕も通ひ盃なしに、女房の盛手をいかに腹ふくるればとて、本望と思ふは無甲斐なき事ぞかし。これをむねんに思はゞ、片時も家業に油斷する事なかれ。金銀は廻り持成ほど、念力によつて分限に成まじき物にあらす。今のお江戸にかくれなく、町人の鑑と世に光る冬木の何がし、先代はさのみそれほどの長者ならねども、若年より身を稼ぐ事におこたらず、大器にしてしまりよければ、身上慥に成ぬ。男子三人、惣領を彌平次、二男小平次、末子喜平次は別腹也。此彌平次親よりの讓金を心底にのけおき、我一分に稼出して見んと、そも〳〵廿二の年より心願をおこし、正道をもとゝし、家業の材木山を稼ぎ、其中より人をめぐみ上をうやまひ、遊樂をはぶき十露盤を枕にして、夢にも商の工夫をわすれず。終に十五年があひだに、四十萬兩の分限と人にさしづしられ、末期のゆふべ、別腹の弟喜平次に身躰をゆづり、同腹の小平次には親よりの讓金十萬兩、符のまゝ請取し如くにてわたしぬ。此時はじめて人しりて手をうち、此商人の心底を感じける。あはれかし、此男長命にして身上を稼なば、百萬兩の分限とは成べきに、ぜひもなきは無常のあらし、是をふせぐちからには、金銀も德なく、中陰の夕べ、出入人も袖に雨して、かゝる分限に成ほどの果報、いかで短命なる事ぞとくやみける。されども貧して長生して、一門諸親類の面當となり、無益に世をせばむる人にくらべては、はるかにましぞかし。いかにも長壽は人のねがふ所、養生の心がけ第一なり。しかし稼ぎざかりの身を、少しの病氣を世間人いひたて、若隱居法躰して、大勢の家來に暇を出し、外なる主取させ、すゑたのみしかひなく、難義にあはすなど、是らを人の本意とはいはず。いかにも身一分は小前に身

躰を取まはして、家來の一人もおほくつかはざるは、苦勞すくなし。され共商人の出世といふはさにあらず。ずゐぶん商を仕廣げ、手代あまためしつかひ、我家名をゆづり、身躰を仕分るこそ誠なれ。歩廻しのよき家をもとめ、かし銀の利をとりて暮す覺悟の人には、あたら金銀の持せおくは、世の墜ぞかし。いはゞ金銀の德うすくなり、友過の世界にはづる〻くせもの、商人の風うへにもおくまじ

二包の古銀は袴大黑

ひすらこき人の出世立身したるためしなし。商人は隨分手堅く律義にすべし。一旦はいかにも手ぬきのなるものなれ共、一代する家業に疵をつけられ、得意相手なくなり、自然と身躰潰る〻物也。泉州堺ほど大商人のありたる所はなけれ共、爰の人氣とかく世智賢く、廻り根性にして人を疑ひ、懸商ひを得せず、次第に土地衰微して、昔にも似ざる人の內證、敦賀屋の何がしは、末子に敷銀して、大坂へ養子につかはし、間もなく身躰もつれけるよし、負せかたへ斷、三歩にたらぬ分散して身躰を洗ひ、長町に引込、のけがねにて年にも似合ぬ、扇屋の太夫を請出して、酒婬に樂しむ。さりとては、か〻る人も世にたてる事と歎く人の中に、天王寺綿屋町に出雲屋とて、わづかなる木綿の問屋、平野深江を引請て數年口錢をもらひ、律義に世をわたる商人、仕末よく十年此かたに、五貫目の銀をのばし、預所をさま〲吟味しける。堺の敦賀屋慥なるよし、いふ人の詞にかたられ、一年一歩のやくそくにて證文とりおきしが、半年た〻ぬ內に、此男銀の入用をいろ〱といひまはし、別條なく利銀迄算用してとりすましてのち、九月めに敦賀屋身上のもつれ、歷々の商人見そこなひて、無念や三歩の分散をとりしに、出雲屋は仕合かな、銀の入事なくば取もどすまじ。天晴立身の首途といふ時、出雲屋堅く銀子の入事ありて、取もどしたるにあらず。敦賀屋が身躰潰る〻所を見極しゆゑといふ。それは何をもつて、見付たるぞと聞に、されば敦賀屋居宅八間ぐちの隣、三間ぐちをむりやりに所望して、近年堺にめづらしき賣券、三貫五百匁に買とり、手のか〻らぬ家を俄に普請して、圍を建、口切の茶湯、毎日客をまねき、座頭に官をさせ、出入の道具やに、鹿の

女郎を請出して女房にもたせ、伊勢に大々を拍、旦那寺を建立す。皆手のよき事、身躰手あつく思はるゝしかけ。しかし長崎にて百丸の白糸を、大坂の銅屋と相合にして札を落し、又京にて本寺〳〵の貧堂銀を借りたきよし、案者に賄ひして頼まるゝ。是内證くつろぎたる證據。それをかくさん爲に、僭上なる事を、いくらかめさるゝと見えたり。第一潰れ下地なるたくみは、大坂へ養子につかはしたる末子と、親子の根元をきりて、互に出入なし、是まさかの時に、我子に役介をかけまじき謀事と存ずるゆゑ、急にせがみ立てたり。五貫目の銀子を請とつて、かへりてあらたむるに、案の如く三貫匁は丁銀、貳貫匁はこだま銀にて、しかも貳包古銀あり。しれて歩の出る小玉古銀を、よく〳〵事欠て取まつべたればこそ、銀錢三文迄ありぬ。様子次第に、めおきぬとかたりければ、いづれも當又もや預けんと思ひしに、此集銀を見世見せかけの商人ありて、人をふづく



ては、身柱もとふるはれて、ひらうたらん爲に、町の衆を舟遊びにさそひ、物のやうに、我銀をいたゝきて、をさ琴引女をよびよせ、女房の一門をいさ

め、初鮎淺瓜のはしりを、直段かまはず、見せさきにて買取、無用の所を、久七に明くれたゝき庭にさせて、奥深に金屏をひからし、よそよりこのもしがらせ、やがて賣家となるに、千年もすむやうに穴藏をこしらへ、内井戸の井づゝを、石に取かへ、人の物をか

正直は一端の木綿商

人間一生に浮沈あり。かならず怠りはあらねど、物事ふ手廻しになる年あり。又仕損じも上々の仕合になりて、吹つくる幸あり。爰において商人の心入有べし。よき事もつゞかぬ物と思ひ、銀まうけのある時節に、仕末第一にすべし。仕合の向たる時に、ひとのし、のさゞれば、一代大身袋にはえならず。又ひだりまへなる年は、よく／＼心をしづめて、萬事出過ぬやうにして、肩

らるゝほどはかゝりこんで、帳面をこしらへ、身の取おきをあぢにもくろみ、四歩にあたらぬ分散して、さらりとよろづをすます調義、さりとは手をさし出してするぬす人にもまさりし人心、油斷有べからず

のよき人にならんで、商の思ひ入をすべし。ねぶかく不仕合を案ずべからず。仕末よく墜をはぶき、身躰うちはにくらすうちには、かならず肩なほりて、仕合にむくものなり。くれ／＼氣みじかに商賣をしかへ、住宅を立のき、知ぬ所に引移り、身を持さげて、稼がんと思ふほど、埒のあかぬ物也。少々の事にては、商人はふりをかへぬこそよけれ。墜なる外樣つき合は、無用にして、さのみ世帶むき、ちひさくするはわろし。又仕合の圖にのりかゝりたる時も、商をしひろげ、世帶を大きうするもよからず。爰に備前の津山、昔の城主の時分、所にて手廣き商賣をして、岡屋何がしといふ男、少の樣子ありて、身躰もつれて、商相續成がたきおもはくを、負せかたを集め、ことわりけるに、皆々驚、くはしく勘定を聞に、負金三千貳百兩、有物は三千兩、しかればふそくは貳百兩、是程の事は、年の廻りあはせにて、出入有べき事也。いづれも數年の取やり、取たつる人一人もこれなし。ひたすら身躰を立申されよと、一同のいひぶん、まづもつて御心底かたじけなし。しかし身上立がたしと存る子細は、當年わづか貳百兩のふそくとは見えけれ共、來年よりない貳百兩に利銀かゝり、十年の内に、

七八百兩ふそくに成べし。しかる時は、おの〳〵損金大分にかゝり、めいわくなり。とかく貳百兩のふそくの只今分散なされ下されよと申ぬ。あまり神妙なる商人の心をかんじ、負せかたへ有金を請取、おの〳〵配當して、扨仲間より金子三百兩合力しけるを、いくたびか禮をいひつくして、岡屋のあるじ大坂へのぼり、一かせぎするがてん。これらは所をかへて身躰をやつし、身をもちさげてはたらく覺悟、一だんの思案ぞかし。此津は米穀凡六百萬石の賣買、毎年かはらず、渡海の大船數萬艘の出入、げにや八木の山見る都は爰也。米百石の入銀貳百匁に極めて、いかほどにても賣買する事也。しかれば銀子貳貫目にて、千石の米の買置、日限の定めをもつて、それまでの勝負を、空さだめなき雲いきをかんがへ、風雨を寢た間も忘るゝ事なきは、米商人の魂ならめ。岡やも此北濱の邊、浮世小路といふ所に、小座敷をかり、なんでもかゝる大場において、商を見たてんと、朝夕日夜、人の鼻息にも心をつくる折から、禰の神やしめし給ひけん、ふしぎの事をぞほの聞ける。抑此浮世小路といふ所は、南は高麗橋筋、北は今橋筋の眞中に、細き小路ありて、爰ぞ手代の隱し宿、又は問屋葉栖女の身まゝになりて、相應より奇麗に住居する譯はといふに、奉公人の出合宿也。當代の中腰本中居、茶の間食燒の女に至る迄、半季にわづか主人よりの給分、三拾匁四拾匁五拾匁を高にして、天窓のぎり〳〵より、足の爪さきまでを仕廻ふ事、夫にいかなれば冬は白無垢きうこんの下着、中着は紋はぶたへを時時のはやり染、うへには八反がけの八丈菊田摺十反がけ隨分麁相なるが、綸子飛紗綾の染小袖、是にて萬事いふに及ず、何とて是を才覺するぞと、さりとはふしぎ千萬。いづれも奉公しながら、男の知音を、いくたりもこしらへ、月に四五度の假枕、又は泊りのけいやく、それ〳〵に大かた直段を極て、遊女同前のふるまひ、さても男ほど役にたゝぬものはなし。女はさのみ身をはたらかずして、金銀をまうくる事、今の世のすがたぞかし。岡屋が隣座敷をかりける、灘のこはつといふ葉栖女の果、今は件の色宿となりて、おほくの人の出入中に、堂嶋の龜湯の亭同道にて、江戸の大坂屋が手代、爰にきたりて、かねての知音の女を呼よせ、ことの外ゑつぼに入て悦ぶ事かぎりなし。其子細を岡屋壁に耳をよすれば、今度お江戸にお悦び事打つゞきて、諸大名

衆よりの献上、數多の卷絹御用也、追付直段あがるべし。是を身共が親方、樞機あつてはやく承り、此度京大坂にて、唐物今織にいたるまでを買込、御用の時節、諸はうの呉服所よりたづねん、其時注文に合して高利をとつて、賣出さん。此義につき、今晩夜ぶねにて、京へ登る事なれ共、久々あはぬいとまごひながら、こよひ爰に遊びのあぶらをのせて、夜明て早々陸をのぼるべし。扨大分の買物なれば、此うちにて、貳百兩三百兩の私商は成やすく、利のあるにはしれたる事、かならず日比いひかはしたるに違なく、奉公の隙をとつて、夫婦となつて仕覺たる商せん、首途の祝義なりと、宿屋へも鼻紙入をうちあくる事をきいてうなづき、岡屋俄に思ひたつて、其夜に京へのぼり、三百兩が卷絹買込、大坂へ下して貳百兩が質物に入、又貳百兩にて買、それを又、百五拾兩の入質にして、百五拾兩にて買、又百兩の質物にわたし、又百兩にて買、七拾兩に質置、又買こみ、



五拾兩の質に置ては、五拾兩が卷物を買、三拾兩に質に置、その金子にてすぐに買、廿兩に質に置、都合九百貳拾兩が卷物を、元手三百兩にて買込しは

手がら也。是大坂の北濱にすんで、金銀のやりくりを見覺ししるしなり。果して大分に上りを請て、三千貳百七拾兩に殘らず賣切、目出度十露盤を詠めけるぞ心ちよけれ。是より所の商のいきかたをのみこみ、次第に思ひ入をはづさず、金銀を仕出來し、備前屋とて北濱過書町にかくれなし。又江戸の大坂屋が手代は、其夜酒興のうへ、鹽湯の仁兵衛と詞とがめして喧嘩になり、小鬢をはつられ、是を隱便に養生して、浮世小路に十日しのびて逗留して、京都へ登りて卷物を買はんとするに、はや岡屋千兩ばかりの買物したる跡なれば、織模樣氣に叶はず。惣じて上々樣の御用の卷物は、さだまつて、寶盡獅子牡丹唐菊これのみ也。蓮華仙人落花の換樣、いかほどありても、右の思ひ入にかなはず。よい事を人よりさきへしりながら、一錢もまうけず。是己が遊びに心ひかれて油斷せしゆゑなり。すべて商人は遊ぶ時もあそんで、はたらくべき所にては、一ぷくのたばこをものまぬ程に、一すんの隙ををしむべし、是天の誠ぞかし

身柱もとに千貫目の埃

當代至極むつかしきは、商の取つきなり。心狹して懸商をせず、現銀にのみ賣んといへば、皆敷得意なく、のちには商しまふより外なし。又いかに商があればとて、掛さきとゝこほりては、利元も人にとられて、むねんや身袋を潰す事、とかく眼玉を見出して、能々人を見たてゝ、一錢もかけまじ、又はのしきつて賣がけて、勝負をも見るべし。昔ふうの人のいへるは、まづ人に十貫目あづけんとおもはゝ、最初に貳三貫目あづけて、其すみくちを見て、のちに五貫匁あづけ、扨其五貫目のすみぎはによつて、十貫目あづくべし、それにては仕損じなしといへり。是いうたる所ばかりが理にきこえて、誠商人の覺悟にならず。それは身一ぶんのれうけんにて、さきの心底をわきまへぬといふものなり。中々人もかしこく、今日元手なしに、他借の金銀をもつて、商賣を仕續、まさか損したる時は、人の物を取こんで、分散せんと思ふ程なるものが、通例の思案するものにあらず。成ほど貳三貫目の時も、五貫目の時もずゐぶんすみやかに、しかも人の正直に思ふやうに、すますものなり。やがて十貫目と高ののぼりたる時、分別して横にねるものか、又は其身の仕

合によつて、他借をすましきつて、誠の元手に取つくもあり。とかくさき様の不仕合はかしかたの不仕合、まんざら人をたふさんとのみ、ふんべつするもの一人もなし。ぜひに及ばざるの、やけふんべつ也。是をかんがへて、とかく人の身躰をよく〳〵見たつべし。拾匁の商も、百貫目のあづけ銀も、もつては同じ事なり、負うたる人も、まさかの時は、高下にかはりたる事なし。同じくるしみなれば、いかぬ身上と見るより、取こむ思案出來るものなり。

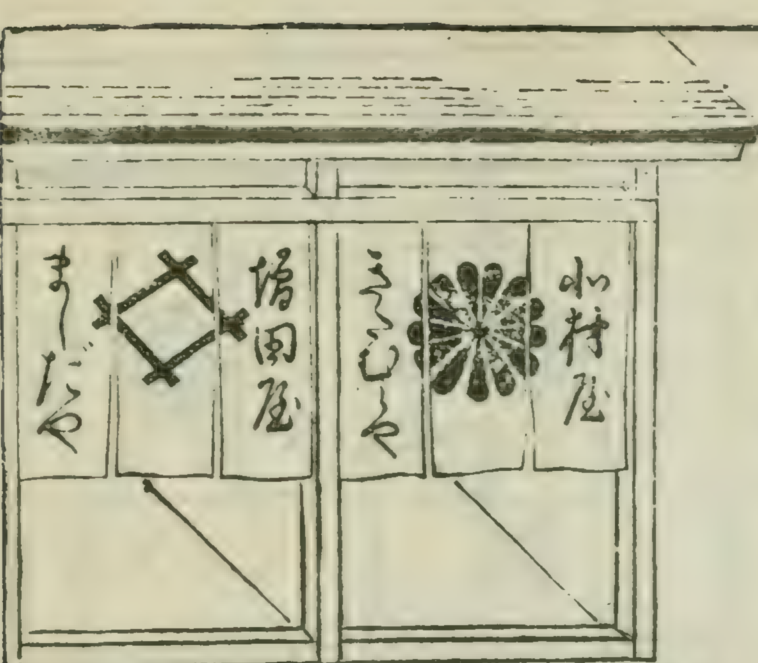
爰に上京千本通に、してやつたの作兵衞といふ米屋あり。元來西近江の生れにて、切通の材木屋に、十年の奮功、三年の禮奉公迄首尾よく勤めて、相應の者を女房にもち、宿ばいりのはじめ、夫婦碓に寒の中の汗をながし、突米の小賣を油斷なくしける。近所の小家壹匁より、五匁迄の當座銀、もしは壹斗の懸商、置がへの得意數十軒にて、高が五百目にたらぬ書出しを、女房にかかせて、節季の一日をつひやし、はしりありきて、是をあつむる事、さりとは世の中かな。此作兵衞に書出しを請ながら、内にぬく〳〵として、のちにのちにと一日を暮し、夜に入ては出違ふ人おほし。是とても心よからぬはずなれど、負ふ人にむかひ詞なくして行所もなきに、我家を出て、女房に懸乞をあてがふ男の身にしては、腑甲斐なく、さぞや氣毒に有べし。それものち〳〵貧乏なれては、其まゝ宿に居て、頰の皮を厚うして、なりませんといひはなす。是も又心づよいといふものにあらず、誠にならぬうへはぜひなし。され共節季晦日をけふのみと、俄におどろくゆゑ也。平生節季也、不斷晦日也、少も油斷すべからず。油斷あれば、件の如く行あたりて、節季晦日の難義かならず人の知たる事にあらず、皆其身の怠りよりおこりくるしむなり。かゝる人に賣かけたる人は、我ものゆゑに足をはこび、隙をつひやし、詞をならぶる事ぞせひもなし。米屋作兵衞はいかなる人に賣がけても、とりすまさぬ事なく、其子細は借錢負たる人より、喧嘩にして書出しを砂にせんとするに、先をとつて作兵衞方より、さま〳〵の惡口をはきちらし、何共堪忍ならぬしゆびにしかけ、喧嘩になればがつてんにて、頰のひとつもふたつもたゝかれ、それをとりこにしてねだりかけ、家ぬし町の名ぬしにことわらんといふを、隣家より裁人出て、いろ〳〵に侘言して、書出しのおもてを請とつて、かへりしなには、頰はたゝかれたれ共、銀は

してやつたといひにげにしけるゆゑ、してやつたの作兵衛といへり。此男小商の時分より、ずゐぶん人を見たて丶掛さきに損をせず、夫婦稼ぐにおひつく貧乏神と、中たがひして、次第に元手づき、商賣を仕似せ、男僕をめしつかひ、大米屋となりて、子孫大黒柱にのらざる事をむねんがりぬ。か丶る氣情によつて、近年するほどの事に利德を得て、家をもとめ藏をたて丶、猶行末の繁昌世にたのもしきは、か丶る人の身躰ぞかし。生得花車遊藝を見ず聞ず、元日に着たる袴、町内の葬禮にも、羽織にてすまし、奉公せし時の革足袋、一冬に二度とはかねば、はなをずれもなし。要をこよりにてく丶りし扇、六年此かた盆の寺参りにおふせをのせてさし出せしに、小僧長老へ是を披露するとて、おやぼねのはしの折めより破りぬ。扨も麁相なる人かなと、事々しくしかりける。作兵衛が心には、此古扇いかばかり大切にや思ひけん。人は冥加を知べし、いかになる身躰なればとて、物を償はみな侈ぞかし

日本新永代藏卷第三　終

日本新永代蔵巻之四

目録



鑿井戸は三代の相傳

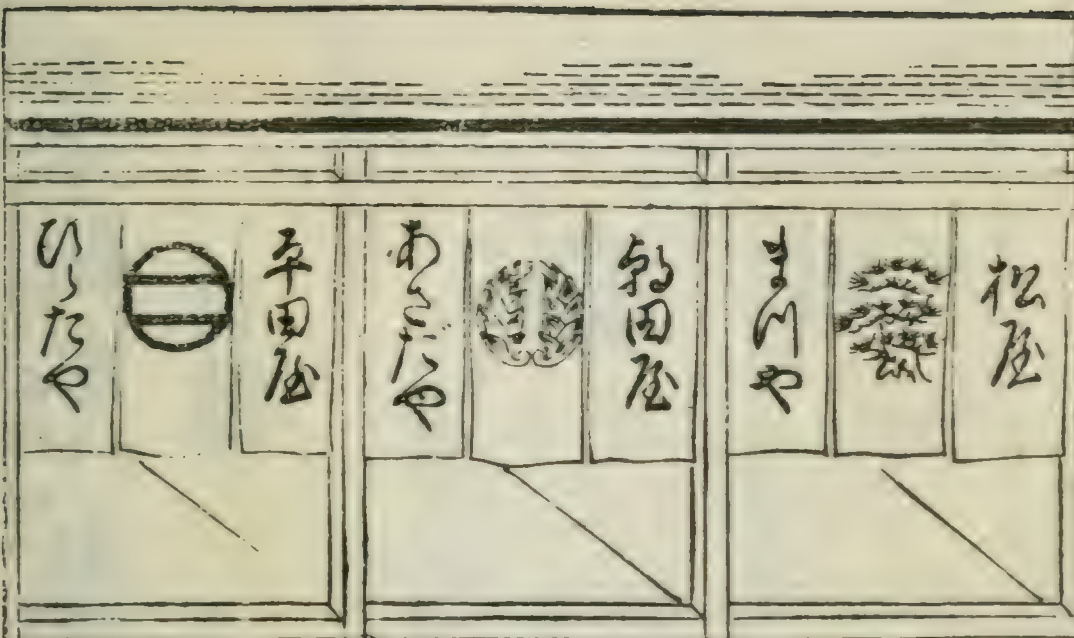
花も実も有明の焼物は二錢大やき

中将家筒はまかなすき福入は小村屋

千里を跳ぶ鎌草履一足

身物の屋根投出し身神

世渡よかれ気を金銀を増田屋



松は常盤にあやかる袷羽織
消炭にねかく紫のさや縮
京染にかくれなき万屋の天秤
鯛は戎の細指錦紗嵩
身代は親方に換と無恨なきまでぞ
望まかくれなき銭の穴より天窓の利生常
百人一首を八十八の手習
嫁りに身をやつす兄弟女丈
難波にかくれなき宗匠に深への
唄翁

日本新永代藏卷之四

鑵井戸に立聞の相場状

淡しくちるとはいへど、芥子のひとへをそだて丶、實をとる事をおもひ、櫻より李花の詠め、もろこしには此木をさして、花と稱せり。ことに秋にむすびて、熟する實は外の物よりもすぐれて、人の賞翫すればとて大庭に植て、世間に知ぬ、銀まうけせし隱居の昔は、泉州築濃といふ所に、かくれもなき分限者、代々六右衛門といふ名を讓りて、二代の長者、味噌造り酒造り質とつて金銀をわしり、其の家の風義看略を忘れず侈を知ず、身ぶんを持さげ、他人に横平をせず、さのみ嗔欲にあらず、慈悲をもと丶して、よく手代をつかひ、舊功ある者共へは、毎年店おろしののち、相應に、金銀をとらせ、自分の家をもたせけるゆゑ、攝泉兩國において、北村といふ暖簾、近年見るにおほし。是者六右衛門より出たる者共なり。今の隱居榮齋は、ことに世にならびなき利發者、しかもす丶どく見えず、うはべ溫和にして内心ははやがねつく如く、萬事にゆだんなく、相場を聞合せて、何によらず買込、商の思ひ入をはづさず。是何ゆゑなれば、朝夕商に心たまを入て、人のせぬ所をかんがへ、いさ丶か油斷なきゆゑに、飼鳥をさす如くに、金銀をまうくるなり。爰に堺に鑵井戸といへる名水ありて、朝ごとに此水をくみに諸方の下男共あつまり、下々のくせとして、まづさしあたりたる、用事は勤めずして、己々が主人をそしり、傍輩を妬む、其雜談の中に、親かたの藏に、買こみたる藥種のしなじなを、我しらずかたり、又金銀取くみの手だてを聞はつり、見及びし事どもを、なんの用捨もなく、の丶しりちらすを、榮齋毎朝たち聞して、世間の物おと、人の身上の内證を知ゆゑ、少も預け銀に損をせず、代物のありなしをも、かんがへ合せて、利德をとるこそ道理なれ。いかにも商人の身上は、みなからくりにて、内證へはいりて見れば、思ひの外なる事おほし。此六右衛門は世上の見たてよりは手あつく、身上に物の入ぬ仕似せ、是大將の軍の備へをよくたて丶、小勢にて大勢とた

たかふに同じ。今の六右衛門萬貫目の身上として、無妻の時分は、銀貳匁、りんとかけさせて、高須の局女郎をたのしまれし事かくれなし。それともに月に六度の外はかつもつて身をかためて、血氣ざかりをつゝしみ、商事に精を出せしゆゑ、其身四十に及んでずゐぶん息災にて、金銀に事かゝざれば、すゑながき老の樂しみ也。かならず人わかきうちは、いかやうにもくらさるるものなれど、四十は老のはじめにて、五十にかゝり、めつきりと、手足のはたらきふ自由に成て、氣根よわり、物に退屈して、中々一立身せんと思ひても、心身ともにつかれて、若き人のやうには勤めがたし。かならずはたちより卅迄に、大かたにかせぎおふせて、五十にては安樂にすべき事也。いつも人は達者なるものにあらず。これらは人のおぼえず、後悔する事なれば、若き人々の、よく〳〵思案有べき事なり。むかしより何の藝者にても、廿より卅迄に、名をとりえたる人こそ、老のすゑに、銘人堪能と、天下にゆるされしぞかし。四十以後まで、人にそれとしられぬ藝者は、役にたゝず。されば萬



事四十迄は、次第に上手に成ものにて、又四十すぎるよりは、日ごとに下手になるには、きはまつた事なり。されども四十迄の藝古、其つとめ德によつて、功者には成ものなれ共、誠に花やかに上手といふは、四十迄の事也。くれぐれ商人も四十迄が一大事也、是迄に立身せずしては、大かた一生の肩しれたるといふもの也。それともに四十よりもかせげば、老の坂におひつきて、安樂の暮しはするもの也。奈良の具足屋といふ酒屋は、四十八の時、鳥目三貫文をもと手にして、そこね酒を買あつめ、是をくすり灰にてなほしおぼえて、上酒となして商ひ、六十一の本卦、店おろしの時、五千兩といひしためしもちかき事也。とかく人は心がけひとつにて、長者には成ぞかし。ちかきころもむさしの小鮒町にて、歷々なる親のゆづりを請て、いかなたじろかぬ身躰を、無用の茶の湯に、侘好を仕出し、あらゆる器物を買もとめけるに、さりとは京の粟田燒のにせ茶碗、又は嶋ものといふ手間ものをかづき、千兩が道具、拾兩にも成ず、分散の時はじめて夢をさましぬ。孝のみちをよく／＼おもはゞ、親もめん布子にて、一生をく

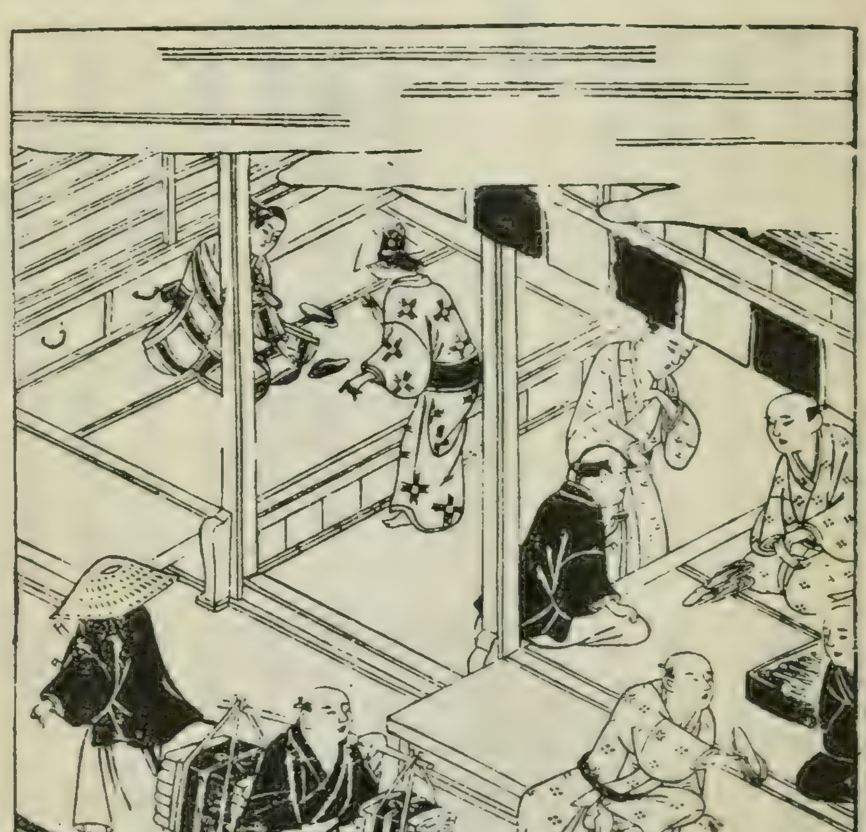


らされなば、その子何ほどの身躰に成たりとも、絹物を身にあつるはずない事なり。それに親は足に草鞋をかけて、人の庭にこしかゞめ、はおりさへろくなはもたず、身をかせぎ、仕末の中より、まうけためし金銀を、いかにゆづりを請て、我ものなればとて、菊田摺の中着に、紅鳶のふたへ染、御召のはぶたへを、ふ断着によごする事、不孝といひ、侈といひ、十年たゝぬ内に、五千兩の身袋をうしなひしは尤也。ひろきお江戸の住ゐ成がたく、此男京にのぼりて、茶の湯の師をせんといへば、さる人のいはく、それは極樂の入口にて、念佛を賣んといふやうなもの也。京こそきやしやのもと、風りう物すきの所へ、あづまからのぼりて茶道の弟子とらん事、あたまから人の請とらぬ事と、是をきけばもつともに思ひ、お江戸長口上の指南とかんばん出して、まきじたのひねりやう、何ほど久しく、ざしきにかしこまりても、痺のきれぬゐやうの傳授、かゝる事も、身過のたねにすればするものにて、身をこらして、二三年つとめければ、あたりより見たてゝ、取たてゝ手習子共をあづける。かならず萬事つゝまやかにして、久しくつとむるにしくはなし

千里を踏皮草履一足

人むまれて八才になれば、小學にいたる。當時とても子共には、まづ讀物させて、手をかゝすべし。十六七に成たる時、あしき友にまじはり、いつたん惡心をさしはさんで、一生の覺悟をわするゝといへ共、讀物したるかげにて、人の異見かくべつよく耳に入て、心をとつてなほして、まことの人に成ものおほし。讀書にうときものゝ、ふと心だてあしくなりたるは、中々善心にかへりがたきものなり。商人の子共は、すゐぶん損德の事を、少年より能わきまへさすべし。今の京にかくれなき、桔梗屋の何がしは、五つ六つの時より、もちあそびの人形を、疎末にせず、猶九つ十の時分に秤目をおぼえ、絹もめんの尺をしり、世間取やりの、銀手形の文言を書ならひ、其外借屋請人は家持、爲替には添手形を取事、無筆の人の書判は證跡にならず。其外壹歩小判の目をしり、平野目、唐目、日本目の一斤をおぼえ、さら／＼人にたぶらかさるゝ子共とちがひ、大丈夫の商人の萌ありけるとかや。これによつて、親

よりも次第に金銀を仕出來し、幾度の長者記にもはづれず、尤目出度男ぞかし。爰に長崎の増田屋といふ大商人あり。はじめは十善寺のまへにて、わづかの燒物商賣して、夫婦かけむかひのくらし、是ほどはんじやうなる所にすんで、櫻鯛もみぢ鮒のあぢをしらず、金襴緞子を、いくらか商ふ所なれども、五寸のきれさへ自由に金銀なうては手に入ず。此男京大坂堺の商人の手廣きをうらやみ、今の身の暮しをむねんに思ひ、明暮商賣に心を入て、ゆだんなかりしが、ある年所の大商人、刀屋はかたやなどいへる人々、伊勢參宮の道中、はなし伽にとたつてさそはれしを、此男かねて太神宮を信心して、參宮ののぞみもあれば、さいはひ路錢入ずの伊勢參り、一だんの事よと、同道して下向に京に立寄て、おの〳〵二三日の逗留の内に、四條通松屋にて、八竹の皮草履千足買、長崎へまはしぬ。此皮



さうりは、長崎にてめづらしく、ことの外買はやらかしぬ。それより毎年、伊勢參宮にかこつけて京へのぼり、布袋屋がかるた、御影堂の扇、寺町の青貝細工を長崎へ廻して、よいほどに利をとつて、京へ商ひ、又大坂長町の唐

櫛も、此男がまはしはじめて、のちのちはする人おほし。これらもかねて心がけなくて、さつそくに氣のつかぬ事なり。商事はやりて、利徳をえるにしたがひ、猶仕末第一として、所にて下直革足袋を、切ぬきにして京へのぼせて、仕立させて高利を取事、大かたの商人、存じの事ながら、長崎にくだれば、無性に大器に成て、細々に氣を付ず。まづ上がたよりくだりては、唐人謳をならひ、丸山のいきぢを嶋原新町にくらべ、酒の善惡料理の物好に氣をとられて、波濤千里の海をこえたる甲斐もなき、商人おほし。增田屋は參宮の下向に、新規の商を思ひつきて、次第分限となつて世にかくれなし。かならずあしもとによい商のある事を知ずと、福の神の仰せを人間油斷の耳に入ざる事のせひもなや

松は常盤色あげぬ袷羽織

世帯の仕末は成ほど有べき事也、くれぐれ氣をつくべし。ひそかに見るに商人の臺所ほど、物入のおほきはなし。身躰相應にくらべては、武士の世帯かたに物入すくなし。それよりは又堂上がたの御臺所、中々奇麗にして、しかも物入のすくなきはいかなるゆゑぞや。とかく商人は晝夜じだらくにて、物の墜を知ず、仕末疎なるゆゑ也。ずゐぶん銀まうけに心をつけて、其うへに看略せざれば、何ほどのまうけも跡へぬくるはしれたる事也。され共仕末〱といひて、看略にのみ、氣をくゝられて、銀をまうくるすぢを見つけぬ者あり、是を日南に氷貧乏といへり。一生身をちゞめくるしめながらに、身躰をはたす。かやうの不覺悟ものは、立身をのぞむ人の、風うへにもおくべからず。小家の釜の下にて消炭をするたくらあり。その火をとりて炭に消よりは、薪をおほく燃さゞれば、物の烹ざる事を知ず。筆一本をこらへ、棒の樣なるをつかひ、紙の大分入事を知ず。よき筆にてこまかにうつくしう書ば、帳面又は仕切、狀文にても、紙すくなく入てみよげ也。かやうのたぐひ何ほどか、人の身躰大小にかぎらず、おほくある事なり。古人の詞に、一文をしみの百しらずといふ事を、よく〱存ずべき事也。又十文が油をとぼして五文がゆふなべせよといひしは、人いたづらに宵寢して、身をじだらくに持事をいましめし也。とかく覺悟をよくして、貧

乏すべし。覺悟だにくづれねば、ながく貧乏はせぬもの也。爰に都四條を柳馬場に、松屋何がしといふ長者あり。是世間にさのみ知人なくて、扨々慥なる身躰、大坂屋久左衞門も及ぶまじと、內證をよく〳〵知たる人のいへり。いかさま先祖より持つたへたる金銀に、利をとつて、七八十年此かた、京にて此人の一錢、損をしたるといふ事を聞ず。第一その身實躰にして、京にすんで吉文字屋のおげんを知ず、升屋のざしきにあがらず、料理は道場の壹匁五分を至極におぼえ、紬よりうへは、町人は着ぬことゝかくごし、親仁の中脇指、今にその時代の竹子柄を巻なほさず、色つくらず、僭上いはず、そも〳〵元日より大晦日迄の世帶に、貳百五六十兩にて埒をあけて、借銀の利足、店賃きはまつて、七八十貫目づゝ、毎年格式にかはらず、取こんで世間にかまはぬ身躰、次第〳〵に此家に入たる金銀、外へ出ずして利に利をとつて、まうけためる銀藏、たのもしきといふは、此松屋殿ぞかし。大かた千貫目もてば、萬貫目の綺羅をやり、百貫目は千貫目と見せかけん爲に、無用のつかひ、年々にはりて、下々迄大腹中にて百二百の錢は何共おもはず。是によつて京の長者次第に內證よわりて、二代め三代めに逼促する人おほし。何とぞ身躰の格式をきはめて、武士行義に臺所をまかなはゞ、百貫目よりの身躰はくつろぐ事有まじと、作十郎殿の申されしとかや

鯛は戎の脇指鍔際の商

身をつくし難波津の入船は、木がらしの柳吹有さまを、四季ともに爰に詠め、取わけ生駒が嵩に出る朝日、花やかに霞の匂ひ川つらにうつりて、又とたぐひなきは雜喉場の朝市、取わけ春は魚嶋の肴、はや船五手の櫓に、汗玉をみだして問丸の岸に着。猶又前の魚といへるは、堺浦より和泉のかた、又は淡路がた明石の鯛、生て鰭ふるいきほひこゝちよし。毎朝數千兩の肴商、もつともなるかな。大坂の廣きのみにもあらず、京の錦上の棚下の棚へ付送る魚荷、又いくらといふ數もしれず。げにや君が代の有がたき事は、町人とても金銀次第にて、お大名よりさきに、時々の初肴を賞翫仕る事、とかくに金德銀威こそめでたけれ。此雜喉場魚問屋の手代共、その給銀は外なき定めにて、世にかはりたる事なり。朝ごとに一番にはせ付たる荷物のうちにて、

ずゐぶんちひさき魚を一尾取事也。たとへば一尺、二尺三尺迄の鯛をとらずしてやう／＼五寸にたらぬ小鯛を取、是を直打にすれば、壹分五六リンがもの也。扨二番めの荷物のうちにて、七寸ばかりの小鯛をとり、最前五寸の鯛をかはりにつかはし、又三番めの荷より一尺ばかりの鯛をとりて、さいせんの七寸の鯛をかはりにつかはし、ひたとかへ／＼するにしたがひ、最初五寸の鯛、市の仕廻ぎはには、三尺四尺の大鯛となつて、すぐに賣に凡廿五六匁也。是を手代の徳用にして、ずゐぶんと市のうちに心をはたらかし、荷主へ直段よく賣てやる事也。はじめ五寸の小鯛、のちに四尺の大鯛となる事、此雜喉場のみにもあらず。商人の心がけによつて、少分の元手をわづかの内に大分にふやし、子孫繁昌の家をならべ、近代長者の指折に入人あり。中にもむさしの朝田屋、ちかき比までは、上がたにて、さのみ人のしる程の両替にてなし。近年此男一はたらき精を出し、商をつゝまやかにして、しかも江戸に似合ぬ、看略を第一として、朝夕油断せず、大坂今橋に出店をかまへて、西國お大名の參勤交代に、金銀の入用

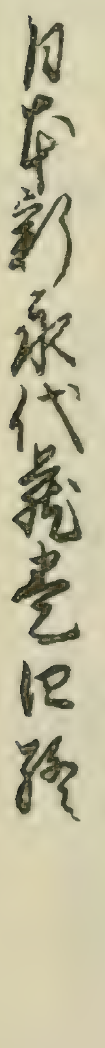


錢の上り下りを、此もとにて見極め、江戸へ早飛脚をくだして、人よりさきによい所を買、又賣もしつ、前後鋸切商にて、尤金子一兩にて、五リン七リンのかすりとはいへど、毎日商の重おほく、利德をとつて手もつれなし、のち〳〵には金銀をもちかけて、此家にあづけんといへ共、中々他借の廻し、事やかましきとて、取あはざれば猶も步合にもかまはず、兩替といふ物かやうに人にのみこまるれば、何よりもつて金銀はまうけやすし。京にも萬治といふ男、近年新銀の入かへを請とつて、久しく銀座に腰をかゝめて、數年何の德もとらずつとめしが、時節あつてよい仕合とは成ぬ。是も此親仁氣ながく年中つとめて、人に氣ばへをのみこまれたるゆゑ、兩替町よりもすてず、世には其時々をさばき、たゝはぶりのよいかたにのみ付したがひ、くだり坂と見ゆる大商人を、見たふすやうにするものあり。さやうのものなどの、つひに立身したる事をきかず。七條の錢座も、又いかなる事か、のちの事誰かはかりがたし。大功をなす人の心は、かくべつ成ものにて、五人三人の釜のまへにて、分別するとは大きにちがふものなり。小商人は大商人の心をしるものにあらねば、無用の人の身上をつもらずとも、己が一ぶんをよく守るべし。仕末にてとゝかぬといふは、千貫目よりうへの身上なり。一萬兩迄の身上は、ずゐぶん〳〵釜の下の大燃男部屋の有明の燈に心をつくべし。墜は其一家にのみかぎらず、天地のうちの寶をうしなふ事、天德かならず恐るべし。くれぐれ無益の義を、晝夜油斷なく見出して守るべし。分相應を怠れば墜おほし。奉公人などをたのみにすべからず。今時の手代などは、小宿をめい〳〵にこしらへ、すはといふ時の覺悟のみして、主を思ふものは希也、それゆゑ皆天罰のがれがたし。十五年此かたの世間を見るに、人の手代相應に親かたより、身躰をしつけられるをまつもの無數し。むかしは親かたを見たてたる冥加によつて、一ぶんの世帶の時自然の幸きたりて、身躰を持つゝけ、のち〳〵は親かたよりもねづよき商人となり、すでに當世の長者のうちにも、此たぐひおほし。己が分をわするゝ事、ゆめゆめ有まじ。千貫目の身躰にて太夫を請出して妾とするよりも、一年に白銀貳枚取手代の、三匁五分の茶や遊びするは、分に過て侈といふもの也

百人一首を八十八の手習

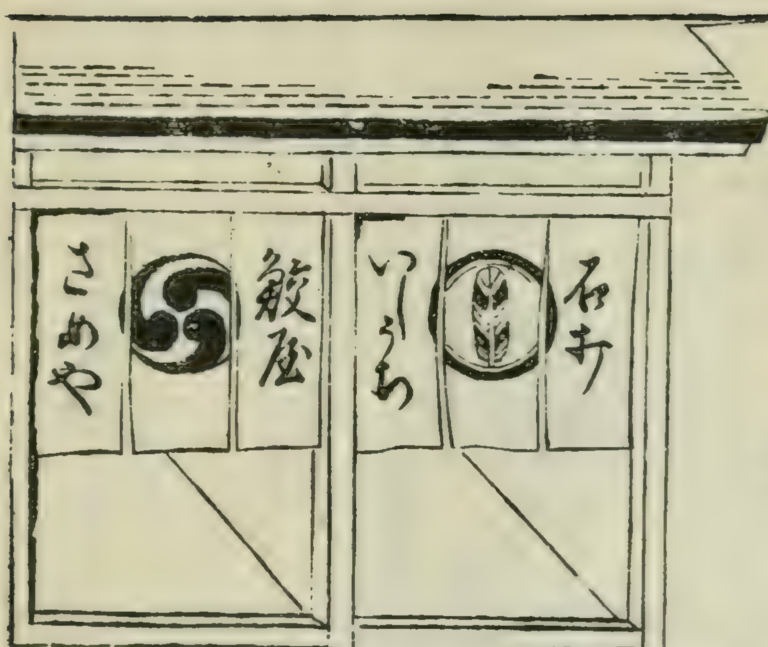
商は互に相對のうへなれば、百倍の利分を取たるとても、是を科とはいはず。たゞ邪に人を謀、職人は直段の外に手ぬきして、商人はすりかへて手本より、悪敷ものをつきませるなど、さりとては有まじき事也。ことに今日身相應の家を持、三文にても商をする身の、盗などは有まじき事、おし出しての盗賊にもこえたる科人なり。夜ぶねのくだりがけに、牧方にて大錢の出たる時分、十六文に大錢二錢つかはし、四文のつりとらんといふに、はやなら茶舟を漕出して、つひにこれを横着にしける。わづかの事ながら、さりとはにくきしかたなり。四錢の事に大勢乗合たる舟を、とゞむべきにもあらず、其ぶんにてすみぬ。かゝる性ねをさげたる横着もの、いくらか此たぐひおほく毎夜の積悪天にとゞきて、ふびんや氣違となり、乞食して我とくちばしり、なら茶を商したるものなるが、旅人のはした錢をかすめ、互にくらがりにて、顔をも見しらずといへ共、其罪あきらかに、今人罰をかうぶりて、あしたに飢ゆふべに寒く、ひとへに此世の餓鬼道どくるひ死にせしと、見し人おほく心ちよく、又はあはれにぞかたりぬ。又むさしの本庄のすゑに、もめんを商ふ男、棹をみじかくこしらへて、人をまどはし、利德を一たびはとるといへ共、つひに長病をわづらひ、飢死したるぞかし。とかく正路をもつて、身一ぶんをはたらき、天理をえて立身すべし。わやくに金銀をまうけんとする事、人の道にあらず。畢竟金銀は一生のもちあそびなり、おほくありて事かゝぬと、なくてたらぬとの差別也。されども世をわたるうちは、此寶なくては、子孫のすゑおぼつかなく、又さしあたり義理をかく事、是貧乏をするゆゑなり。しかれば義理をたて、人をいつはるまじき爲に、まうけためんと思ふ金銀を、よこしまのたくみによつて仕出來んとするは、大きに了簡ちがひ也。むかし大坂にかくれもなき平清といふ男、代々の分限にて、又と肩をならぶる長者なかりしが、其身不覺悟にて、古き手代の異見を用ず、西南のあそびに身躰を潰し後には、丸にふたつ引の暖簾を、世のさたに謳はれけるぞ笑止なれ。此下男に三介といふもの、親かたの身袋、潰れくちを心がけて、萬事をひそかにへづり、身をあちに取置、道頓堀に

て酒を作りて、相應の女房を持、夫婦晝夜の油斷なきしるしに、次第に金銀をまうけためて、平三とてかくれなし。されども其身第一頓欲にして慈悲を知ず。今の世のすがたとて、か丶る人にも諸人こしをかゞめて、ことばをへつらふ、是金銀の威光、さのみ借人ばかりにもあらねど、まづ町内にて身躰のよき人を、上座になほしうやまふ事、京も田舎もかはる事なし。金のかねをまうくる世のならひ、平三きはまつたる商賣の外に、借銀の歩をとり、宿代よろしき家を見たて丶買、何かに銀の入事のみにて、出る事いさ丶かなし。元來下男食燒の成あがりものゆゑ、高砂や此うら舟の小謠も知ず、百人一首の秋の田も、繪ばかりならで、あき目くらなれば、何の藝なく、又たのしみもなく、明くれめのこさん用にて、銀ののびるをよろこび、すでに七十に及んで、兄むすこ八十郎に、京の室町より娌をむかへ、又妹のおかねに、同じ町より藤三郎といへるを、養子にしてめ合せ身躰四歩六歩にわけて、兄弟へゆづり、其身は隱居して、扨も殘る所なき老のいりまい、世にうらやまぬはなかりしに、兄の八十郎女房、產前にて憂別れを見そめ、つゞけて聟の藤三郎、杉燒の餅にあたりて、三日めに浮世をあとにして、年寄になげきをかけぬ。され共誠の子共無事なれば、家のたじろぐ事なかりしに、世にもためしなや、藤三郎後家と八十郎いつのまにやらくるひ出して、扨もわけもなきねすがたを、家來の者共見るより、いくたびか八十郎に、異見のすれども聞入ず。是誠の兄弟にて、不義をはたらく事、前代未聞の因果、すでに町所の評判ふせぎがたく、平三夫婦はさすが恥をしりて、ふかりの川へ身をなげて、七十六才と六十八才の老のいんぐわ、是むかし親かたの身躰を見たてず、あまつさへいかに斗方なければとて、主人平清の物をかすめ取しとが、卅年にならぬ内にむくいけるこそ恐ろしや。其後八十郎おかねも、大坂に住がたく奈良のかたへ立のき、兄弟夫婦になつてくらすともいへり。か丶る惡心の出來しも、皆親の頓欲よこしまに金銀をまうけしむくいぞかし。いかにも金銀はまうけがたしといへ共、あまり無道のふるまひはせぬ事也。此平田やにかぎらず、出生あしき金銀にて榮たる人は、いまだ聞ず。とかく身をはたらき、心をたまかに、世の仁義を守り、佛をたつとみ、神をまつり其中より立身すべし。さなくては二代つゞかず、一代もあやうし〳〵



日本新永代蔵巻之五

目録



千人前は此居風呂桶

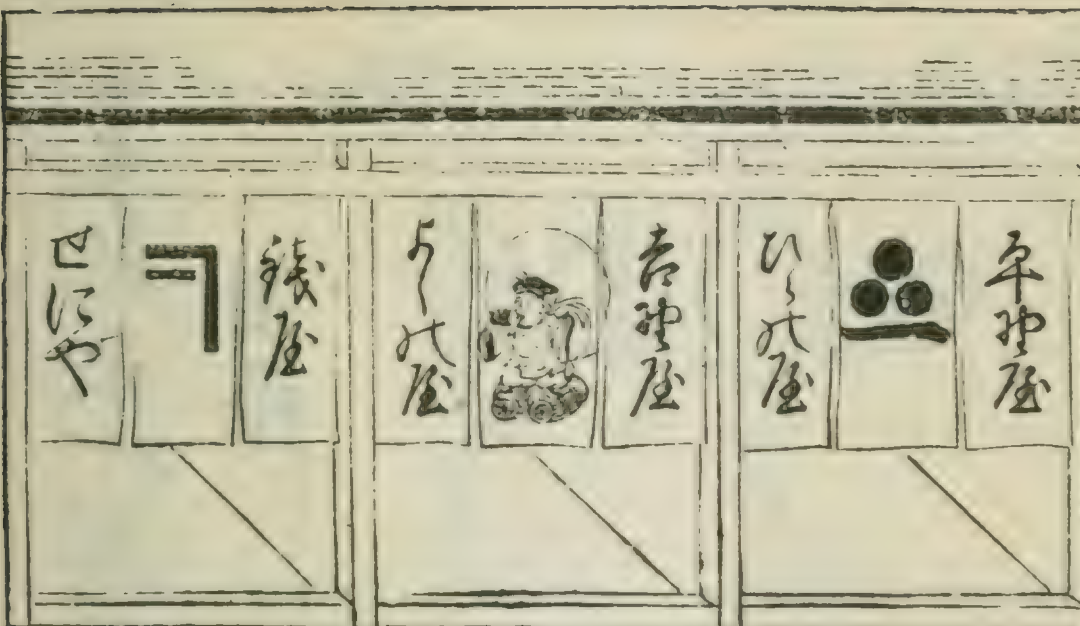
大文字は歳暮手本出し

何方よかれ書ちらしの石蔵

廻て燈籠は細切

松茸十本揃よかけて進上

京よかれ書きも渡唐むらさき屋



小判三合の冥加は十万両
釜の下の工夫は塗師の謙
大坂よりかくれなき末広の扇商
敷銀は悪女の家相続
悋気の責でも今は同じ大分限
京押小路よりかくれなき世の人の薬屋
草袋は備後の鈍機
三幅一対の工夫男あり
京よりかくれなき寿ぎ里でこの

日本新永代藏巻之五

千人前の居風呂桶

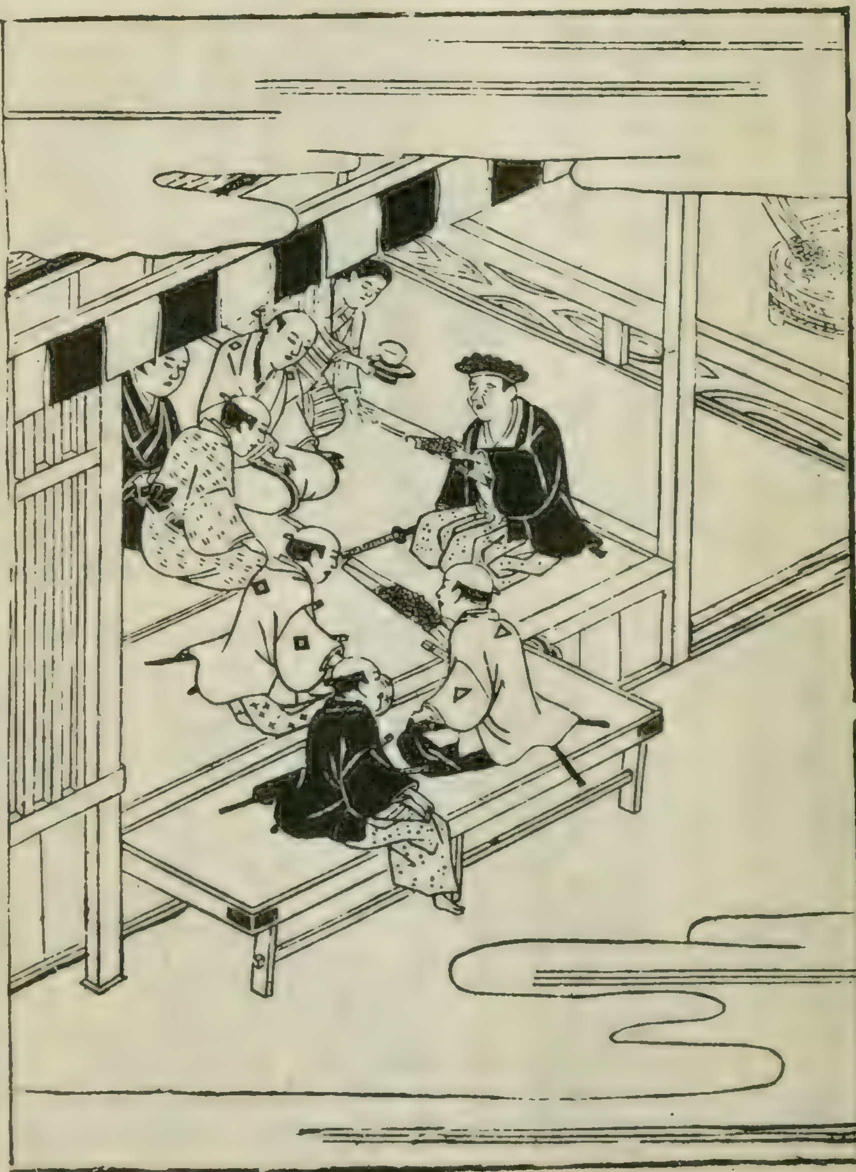
上智と下愚とはうつらず。誠に心くらきもの丶いひぶんに、果報はねてまてとあれば、さのみ人にすぐれて稼べきにもあらず、かならずあをち貧乏といふ事にて、中々立身は成がたしと心得ぬ。扨も不覺悟千萬なる事かな。九分十分の人の智惠、急に立身せんとすれば、とかくまがるにちかし。一生の立身とおもひ、不仕合を退屈すべからず。たゞ果報をながくまてといひしを、誠にねてまつものと合點して、身をあそばし、心をゆだんする事、扨々愚痴のいたりぞかし。されば家業の事は武家も、大名はそれ〲に國につたはりてねがひなし。すゑ〲の奉公人、親の知行をそのまゝに給はるを、その通りに今日を送る事、さら〲本意とはいひがたし。自分に一器量、奉公をつとめて、家祿を申うくるこそ、出世とはいはめ。まして町人は親のゆづりを、ぬく〲と懐手してもらひ、生れながらの分限者といはるゝは、さのみねがはしからず。何とぞ身一代に稼出して、そのさかえを子孫にのこす人こそ、有がたく目出たけれ。むさしにかくれなき石打何がしは、身一代に金銀を仕出來し、家門のいらかをみがき、手代いくたりかしつけ、手下の小商人を取たてし數しれず。かゝる人こそ、商人の守ほんぞんともいはめ。此親仁月ごとの精進日に、居風呂をいくつか焼ならべさせて、是に近所の貧家の者をよびよせて、なんの時宜あいさつにも及ず、錢湯同前に風呂に入て、寒夜の難をすくひ、夏もくだんのごとくにして、汗をあらはせて暑氣をたすく、此善根さりとは莫大也。金銀持たる人のうへにては安き事なれ共、外の人はえせず。此四郎右衛門こそ大慈悲者といへば、親仁かぶりをふつて、我慈悲にあらず。子共や手代共に世をわたりかぬる貧家のありさま、その物がたりを湯入共の打よつてするをよくきかせて、身におぼえさせてすこしも侈らせまじき調義、是此方の徳のいく事にて、いさゝか損にあらず。慈悲善根といふは、をしき金銀ををしげもなう人に施すを第一と

せり。我は湯を焼て人をいるゝかはりに、大き成徳をとるといへり。さりとは無漏の善人と、是を聞人ごとにかんじぬ。もつとも成かな、此親仁の申さるゝ如く、湯入にきたる者共、それぞれに身の過がたく廣きお江戸を一日稼あるけ共、錢百おとす人なく、ひろひし事もきかず。とかく身に應せぬ果報をねがひ、無用の神たゝきして、片時も隙をうしなうこそ、世中の損はなし。いかで一ぶんのはたらき人にすぐれずして、金銀のたむる事は成がたし。され共身躰の暮しに上手あり又下手あり、是も心えのあしきから也。わが物ながらも小づかひ帳をつけて、一年中の店おろし迄をまたず、毎月晦日に算用して見る人、たしかに金銀をまうくるなり。借錢のすましやうも、まうけのうちより半分とか三歩とか、のけおく仕様ならでは、人よりおうたる物をすましえがたし。今貧家の人のはなしの内にも、質はおく事安くてうくる事成がたき物なれば、前後の算用をして見て、



一向責きつてその代元手にして、小商のしかた有べき事也。貧乏人は利にまどひて、年中人奉公をするもの也。扱買がゝりはせぬにきはまつたり。ずゐ

ぶん現銀にて、なくばなきまでにくらすべし。節季の書出しにおどろく事、思ひは臨終のゆふべにかはる事なし。とかく人はゆだんはしやすく、精は出しがたきものと、いづれも同じやうにいへり。爰に今四十斗の男、さのみ爪はづれいやしからず、いせんゆかしく聞えて、ことばもさのみふつゝかならざるが、人の仕損じは皆我心に好事よりおこるなり。ずゐぶん人は我心に好ぬ事をつとめて、好なる事をせぬにしくはなし。ことに商人の諸藝に器用成は、貧乏神に、見いれられたると心得て、はやくふんべつすべし。我親の身躰手厚く、大名借をせず、買置をせず、拾貫目をつばにして、町人の慥成を見たてゝ、しかも利を世間より心安くして、金銀をまはし、取ほどの利につもり合せて、世帯を仕廻、さのみ世をわたる事に苦勞なかりしに、我七才にて大文字を書事、是より親仁はじめてよろこび、十才の時歌をよんで中院殿へ御目に懸しに、有がたや點をくだされ、鼓も十五の時、傳授事を仕廻、能は本間佐兵衛に底をたゝかせ、茶の湯は眞の臺子迄を心安くおぼえ、鞠は京にておつめに出し事十九の年也。いづれもは



たちよりうちにて、大事ゆるしを取たる事世にいかめしくおもひ、かんじんの商賣のみちをわすれ、手代に引おはれ、肝煎にだまされ、諸藝を好たるゆゑに、いつとなく心高ぶり、十露盤のかたち何とやらふつゝかなれば、あれを餘のものしてと、明くれ無用の雲上せんさくして、金銀のみやうがにつき、卅二にて身躰をはたし、親をはごくむ便りつきて、むかしの諸藝を賣んとするに、扨も藝能ほど安きものはなし、習し時は千兩も入たる拍はやし、今僖に銀壹兩には成ず。一生をかんがへて、人は老のたのしみに成ほどに、諸藝のはし〳〵をおぼゆべし。かならず器用なりと人にほめそやされて、藝者を下に見ん、道者をなじらんとして、基を取うしなひて金銀なき時は、何の藝にても身は過がたし。藝者ははじめより、それにて身をすぎんとするゆゑ、身すぎとはなれり。爰はよくがてんすべき事はとかたりける。四郎右衛門子共にも手代にもよくきかせて、京の若山屋といふ分限者、かねて懇意なれば、此男が物がたりを一々書しるして、御子息藤四郎殿、諸藝の御器用、今はうへ様へ御出の事なれば、もはや日本にかくれなし、はやく御無用になさるべしとの異見、京の親仁もさすがにて、はやく合點して、御異見かたじけなしとて、萬事の藝をやめさせて、商のみちにのみ精を出させける。それゆゑたのもしく世間にさたし侍りぬ。人は何事にてもあしきときかば、はやくあらたむるこそ、上々吉の人間なれ。拜がかりの雪隠とて、それはちがひたるというても、がてんでをがむと、かたいちに我をはる男つひには身躰ゆきつきて、他人にも損をかけるもの也

廻り燈籠は初夜切

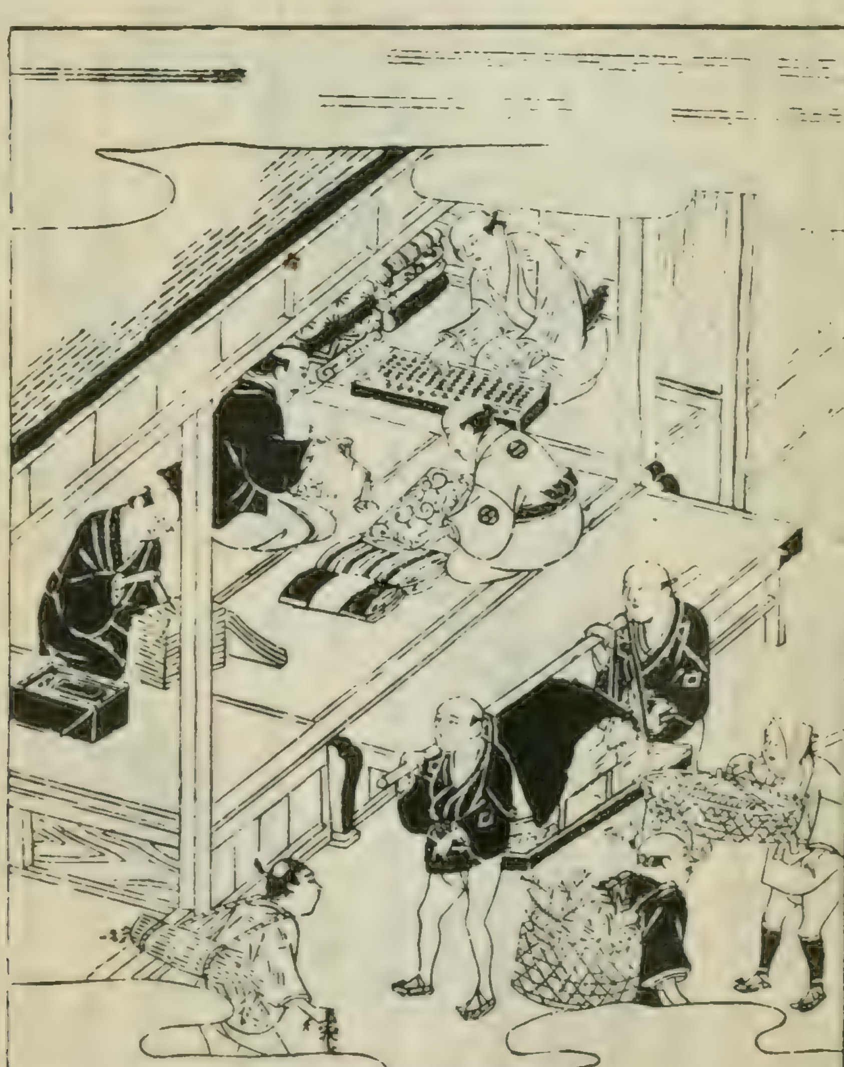
御靜謐の御代に住んで、町人百姓ゆたかなるにつけ、次第に世間の風俗内外ともに花麗に成たり。ちかく廿年さきを十年いぜんにくらべ見るに、萬事の賣買高直也。猶十年此かたの物のあがりやう、一ばいにこえたり。それにかつて人いたまず、飢死もなし。昔は八木百匁なれば、あたらしき乞食おほかりしに、今京は百四五十匁の米を喰て、しかもいぜんよりは綺羅をやりて、いさゝか難儀の躰とは見えず。しかれば相應に商ありて、身の過らるゝ所あるゆゑ也。され共うはべよりは、内證のいたみ、殊の外つよし。その證據は、

正月の松かざりいせんの如くになし、盆も通町は四つ迄、外は初夜にもならぬに燈を消て踊らず、河原の涼みもあるくばかりは錢の入ぬ事とて、人だちおほし。中々的屋藥見せ、水茶屋、まして夜食の料理など、喰人はまれ也。まだしも田舍衆を目あてに、市懸の茶屋は出るといへり。とかく世間に償をせず、我人がちに仕末を第一として、銀まうけにゆだんなし、それゆゑよく身躰を持つゞけると見えたり。元手拾貫目、貳拾貫目、あるひは五百兩、七百兩の商人、五人七人十人の口をやしなひ、大晦日に銀五百匁のびるといふ身躰、京大坂をさがして十人とは有まじ。そのうへは千兩よりの商人は、成程毎年銀をのばすと見えたり。是いかなれば十年此かたに、ことの外銀の歩あがりたるゆゑ也。取くみの兩替より、不斷借に成人は、いかほどの商しても、さん用づめにはたらず。なまなかの小商人は、朝夕安樂にもなく、銀持の手代となつて、利を出して仕廻ふ也。是を思へばかゞ絹の小袖を紬にやつし、紬をもめんぬのこにやつすべし。勿論せずと當分事かゝずば、根から無用にすべし。銀百目の利足、年中つもればおびたゞしき事、其うへ十年のちを見るべし。二條通の鮫屋の親仁、一生何にてもこしらへんとおもふより、五年まつて、のちにこしらゆれば、代銀は其銀の歩にて、たゞ物のとゝのふ事を知ずやと、手代どもへ申されしは尤也。此男若きよりかくごよく萬事に氣をつけて、麁相に物をせぬ人にて、ふ斷皿秤を側におきて、魚を買ふにも目をかけて、是を何ほど、それはいくらにと、直を付し人也。ある時緞子一卷を半分宛長崎やとわけて、器用にとられけるが、長崎屋より半分取たるとて、殘りおこされしを、鮫屋の親仁かけて見て、廉直成なされやうと申されしとかや。此卷物も、いつのまにか、はや一本の目をかけおきて、おぼえてゐられしと見えたり。秤にて物をかける事は、もつともなる道理也。大坂にては松茸を、一斤半斤とてかけて商ふに、京のこみち成所に似合ず、目分慮に五本十本と賣買するは、松茸大坂よりは澤山にて、やすきゆゑ成べし。しかし何ほど下直に澤山成物にても、鮫屋殿の如く、目にかくるは慥成事ぞや。とかく此親仁のまねをするには德有べし。大分の金銀をしかも實躰成商にて、まうけためて、子孫繁昌の家居目だゝずして奧ゆかしき內證なり

小糠三合の冥加は十萬兩

今の世の手代の身持ほど、うたてけきはなし。いせんにかはり、私商を陰にてしかけ、しかも分不相應成金銀の取くみ、しおふすれば己が德として、損がゆけば親方へ難儀をふりかけ、揚句には欠落して、身の落着を見せず。是何ゆゑぞといふに、皆好色よりおこる私商なり。さはまつたる傾城にくらべては、白人ほど高きものはなし、しかも下卑たる遊び、何のはりもいきかたもなし。當世十露盤にかしこき人、此くら女をいかでもてあそぶぞと思ふに、一座の遊び、二時にかぎりあれば、親かたもちたる若いものゝ、しゆびを合するによきゆゑ也。其うへよごれぬのこ着のまゝにて、あそばるゝを取得と思へり。惣じていせんより衣服をあらため、あたまつきをたしなみ、色ぐるひするわかいものは、物の恥をわきまへるゆゑ、身ぶん不都合になれば、人よりいはれぬさきに、我とあそびをとまるものなり。しやれすがたなんどとのゝしりて、鬚だらけのかほをあらはず、垢つき着物にてあそびあるく者は、何に取つきてやむ事もなく、うつらうつらと手にあるほどをつかひすて、身のくせとて宿にゐられず、のちには百二百文にて、埒のあく所へもゆくものなり。かやうの人屑を我手の代と思ひ、たのみにしてつかふ親かたこそあはれなれ。大坂に名高き平五といへる人のむかしも、人の手代なりしが、傍輩にすぐれて、旦那を大切におもひ、取やりの金銀は勿論、釜の下迄をれき〳〵の手代として心をつけ、手づからこぬかの吟味までをして、内の物の外へ出る事をかなしみ、外よりは反古一枚にても、取こむ思案、晝夜の奉公いさゝか私なかりしゆゑ、自分の見世を出すをまちかねて、諸方より得意あまたつき、次第に商事かさみ、實躰成さん用あひに、いよ〳〵世間の思ひつきあつく、百萬兩の小判、今買んというても、のちともいはず、包をそろへて商、千貫目の入かへも、心得て人をまたせず。かやうに手廣く商をする事、皆一心のたまかさを、天しり地しり、人しらずといふ事なし。人は人にたすけられ、金銀は正路をあゆむ道理目のまへ也、かならず主への奉公と思ふべからず、己が身の爲にすぐに成事、たとへば白人遊女の懷に、おもしろくねたればとて、いつ迄も其たのしみ殘るもの

にあらず。畢竟かれらは賣ものにて、金銀にて買ふ時は、旦那様とあしらひ、なきといふ日になつては、さりとはむごく見かけもせぬもの也。實なきかりのことばに、一大事の身のうへをわすれ、うか〳〵と金銀をつかふ事の不覺悟さよ。かならずおもしろきゆゑにつかふといへり。なぜにそのおもしろき所へゆく事ぞや、我ゆかざればつれにもこず。とく〳〵と身の一生を思案すべし。人には病といふものあり、又年よるといふ事あつて、わかくさかんなる時に、すこしにても金銀をまうけためて、たくはへおかざれば、ゆきあたりて難儀するにいかにせんや。此時日比に懇意の人をたのまんとすれば、さきにもはや無心とがてんして寄つかず、親類一門兄弟をかぎつて、金銀の無心はいはれぬもの也。むかしよりかなしき時は、身一つといふ事を書て、ふだんむかひてくわんずべし。若きうちはかやうの事中々がてんゆくものにあらずと、長者たち詞尤也



敷銀は悪女の家土産

貧者は貧にして、分限者は次第に富り。さるにても極月十三日は、むかふる春の事はじめとて、家々に煤を掃、神に膾の折敷あたらしく、際の仕廻はしれねども、餅米毎年の如く、踏や碓のあがりさがり、心びやうしのちがふは、此月のならひ。取わけ小にあたる年は、たゞ一日ながらも百日のせばまりとおどろき、田舎上りの金銀をつもりあはせて、年をとるなどさりとては、さだめがたき冬日和の舟便宜心もとなし。さすが大家には、事はじめに竈を仕廻商をせず、是より取やりの勘定にかゝり、廿日迄に埒をあけて、扨それよりは小ばらひして、餅つきの祝義、釣臺に鰤の尾をあまらせ、年越の爲に雉子つむぎ一番銘酒熨斗昆布、取そろへて殘る事なし。又衣くばり淺からず、桑染の黄小袖、綿子は餘寒の心づかひ、其外足袋雪踏下々迄へのいはひ、かくぞおもやより隱居へ送る人は、京の曆曆玉屋家原、是ぞ世に住たる甲斐ぞかし。さるにても晦日の夜迄、懸乞の燈挑に胸をおびやかし、内上ゲのせりふ、埒のあかぬにきはまつて、松の過る迄と、當座ばらひに十五日迄にいひのばす、かゝる身は世を渡るといふにあらず。むねんやいかにも喧嘩にすべき事をこらへ、人の機嫌をとつて、こよひのふくる夜をよろこび、鷄の音とともにねもせぬ目に、若水の口嗽して、同じ若戎の賣ごゑはきけ共、心は其まゝ節季にかはらず、此くげんをのがれて、夫婦心よく初夢の枕に、高わらひせん事を明暮ねがひ、抑元日より片時も油斷なく、稼しるしに、中京にて大黒屋とて、近年の出來分限、吉野屋にもおとらず。とかく人は念願を起し、朝起して堪忍をたもち、仕末を能々すべし。物をかんがへぬれば、大なり小なり德を見出すものと、此大黒屋の詞なり。据風呂をわかすに、皆水を半ぶん入て、湯の湧次第に水をさして、いつぱいとする。是大き成損にて、第一湯遲く湧ゆゑ、時の間にあはず。まづ風呂へはじめより、水をこす〳〵に入てわかすべし。大かたに湧たる時、中をかきまはす事有べからず。いかなれば湯氣うへへあがりて、風呂の湯はうへあつく成ても、底は其まゝ水なり、それをかきまはせば、いつ迄も湯にならず。大かた湧たるとおもふ時に、穿をぬきて、底の水をながしすてゝ、湯に成たる所ばかりをおけば、もはや風呂にいらるゝなり。猶又居風呂よりは、湯風呂が德なり。湯風呂のしかけやうも、かくのごとしとをしへられし

とかや。其外氣をつけて世帯をすべし。五人よりうへのくらしは、仕末にてよほど、店おろしにちがふものなり。第一此大黑屋の内義の身もちをきくに、世の手本たるべし。ふだんもめんぬのこにて、臺所に出で、朝夕の事をいひつけ、手代小ものゝわづらひにも、手づから藥を煎じて、食事に氣をつけ、出入のものにも、ことばやさしうして、しかも物はやらねども、かたじけなしとおもはせ、正月の禮より外に、内を出ざれば下女こしもとまで、ないきる物の裾をきらさず、芝居を見ねば、内にてじだらくなはなしもなし。ひたすら家をまもる事をもとゝして、女の諸藝しかもなんでもしらぬといふ事なし。かやうの人の嫁に成人は、世の果報ぞかし。當世の商人身躰をつぶす事、おほく内義のわざぞかし。外にたとへ心あればとて、我夫よりは、したしきことばもかはされぬ身を、はすはにふうぞくをこしらへ、髪は茶屋女をまなびて、二のわげを引出してしまだもとゆひひろく、下作成事をはゞからず。八もんじをならはずに、鰐足にあるき、すわらぬ腰をそりかへりて、土佐繪を見るやう也。しかも芝居をたび〳〵見



物して、心をいたづらになし、氣のとほらぬ癖に、はやりことばをつかひ、野郎の紋所をさしぐしにつけて、我男をたはけになし、時々のはやりゑざうしを世間はゞからずに買に出し、遊女模樣の染小袖を着ちらかして、世帶をかまはず、身だしなみに一日かゝりて、出入人へのあいさつなく、無禮なる事を知ず、酒をのみならひ、三味線を引、とかく身を賣ものゝまねをして、めしつかひまで、いたづらにしなす。扨々かやうの女房につれそふ身の、まなこくらみ身躰をあづけて、つひに借錢の淵にはまり、身の難義と成時分は、氣をつかしていとまをねがひ、三くだり半をとつて、親兄のやつかいとなり、其うへにもいたづらの名をたてらるゝ女もおほし。とかく妻女は身躰の爲につれそふものにて、まつたくあそびものにあらざれば、心底をためしてはやくいとまをやるべし。むかしは女房の敷銀をこのみしが、是大き成れうけんちがひなり、銀をもつてくる女房に、直なはないものなり。いはゞ立身をせんとおもふ男が、女房の敷銀などをめにかけて埒があくべきや。敷銀のぞむ男も、是ゆだんものゝくせものなり。元手はその身のはたらき次第にて、他人よりもちかけて借もの也。是いかなればさきにも利をとる事にて、しかも慥成と見るうへは、銀親になりたがる事目のまへぞや。くれぐゝ商人の元手はたましひなりと置頭巾の長者のいへり

革袋に諸藝の傳授

紅葉は錦といへ共、着られねば目ばかりのたのしみ、花はかをるとほむれども、飯釜の下にたかれず。とかく萬事目ふるまに埒を明る金銀こそ至極の詠めもの、自由自在のときは木、冬がれせず、日やけせず、晝夜四時の花ざかり、樂しのもと長命のはじめ。凡貧苦にせまりて、生涯をくるしむる事はかりがたし。はやく死たきとうそながら天道へつらあて、皆心にまかせぬよりのことば、今日人の物をおはずせがまるゝ方もたざれば、此世ほどおもしろき所はなし、極樂とてもかたくろしき付合ならん。今中京室町の東、新長者の巣といへる、四町のさたを聞に、まづ風俗雲上て、世界のはつものを爰にはこび、諸藝の達人をまねぎよせて、一時に秘事奥義をきはめ、珍器麗種あつまらずといふ事なし。ひたすら銀徳の光りほどつよきものはあらず。かゝ

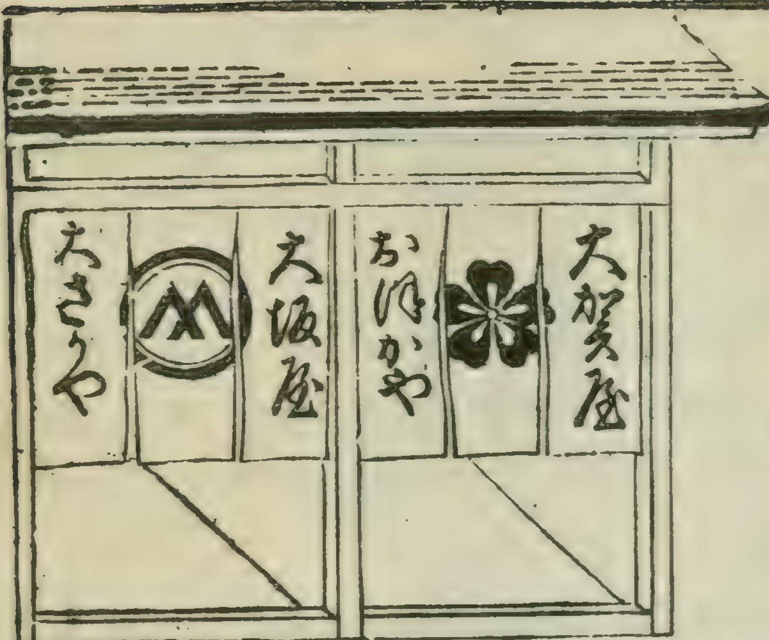
る世を暮ば、片時の命もをしかるべし。され共生死は富貴をへつらはず、をしきさかりの人をころして、聞人袖を五月雨、親の心をさつしぬ。かくあれば金銀ありても何の益なし、六道の遣錢より外は、おいてゆく事と、無常になづみて、頓欲をすつるものおほし。さりとは又さにてなし。ふるきたとへに、人は百年のたくはへこそ、あらましけれといはずや、商人の心に無常を觀ずるは、大き成あやまりなり。此人もよろしき身躰にて、若死をせしゆゑ、諸人なげきをしみぬ。身躰あしき人の若死、いくらか日ごとに、あみだが峯中山の墓に、送るうちにもおほかるべし。され共それををしやとはさたせず。しかれば金銀の光りによつて、しらぬ人にまで、其名をとむらはれて、あはれを殘す事、是其身のほまれ、第一は親の手がら也。此人も其むかしは、身躰よろしきかたにあらず、身一ぶんの器量をもつて、いくたびの江戸通ひに、粉骨をつくし出世立身して、長忠中九とて、世の人のかゝみとはなれり。かならず人は精を出し、器量をみがき、家につたはりたる商職を、たまかにつとめて立身すべし。是をとやかくとさたするは、灰鷹といふもの也。己は鳥をえとらず、馬の古沓なんどを、やうやうにつかみながら、本鷹の鳥の取やうをなじる、ひとつも心ある人の耳にはいれぬ事也。金銀をまうけ、身躰おちつきたるうへは、つかふべき金銀なれば、其人のかつ手次第也。身一生に銀拾貫目と、まうけたる事もなき小腹中成商人、分相應のれうけんをもつて、人をなじる事、みやうがにつくべき事也。三井何がし廿年いせん迄、自身に袋をかたげ、西陣の買物にまはられし事、みおぼえて久しからず。其時分より中々外の絹買と違ひ、朝とく出て暮におそくしまひ、今宮のおたびのうち通りながら、外へ目をやらず、千本念佛の狂言に群集して、京中參るといへ共、商の道さきにて、一足もよらず。まして川東の土を草履につけず、嶋ばらの門に裾をさへず、年中家業の外に無用の道よりをせず、もめん足袋を千貫目に成迄はかず、萬事仕末と精出すとにて、一生に五六千貫目と世間よばれ、大商人の卷頭とはなれり。さりとてはなみ〳〵のはたらきにて、是程に立身はしらるゝものにあらず、ずゐぶん今の小商人よく心得て、やがての長者記にのり給へ。扨金銀もまうくるだんには、仕失ふよりは、はやき物といへり。いかさま當年壹貫匁のまうけ、

來年は慥に貳貫匁成はずにて、次第に一倍にふえて、十年には大分の事なり。商人はねざめにも心の内のそろばんをわすれまじ、かならず人のせぬ所に、おもひの外なる仕合あるもの也。元日におこし米を賣はじめし人、皆心のゆるがせ成時節にて、さのみしつこくねぎらず、高利をとつて荷に有ほどをうちあけて、賣てしまひ、これより此男人のせぬ所をと、思案仕出し、錢の小賣を仕歩行、毎日壹〆貳〆三〆の商、貳匁三匁の内にて、五リン七リンのはねめをとつて、つもれば大分の事にて、大商人となり、後には宗休とて、お大名の御用迄をうけたまはり、都に數百軒の手代をしつけ、家名をゆづりて家門廣く、目出度商人の格式、次第分限にてそも／＼の商より、一錢の損を知ず、世にあやかるべきは此親仁ぞかし。皆人せつなき大晦日をこゆると、はや元日よりゆだんおこりて、かせぐ事にあらず。爰をよひの大晦日氣になつて、かせぎ出せし、身代のおこし米、有がたくぞおぼえぬ

日本新永代藏卷五

日本新永代蔵巻之六

目録



金子はわかき紙子身上手機商人

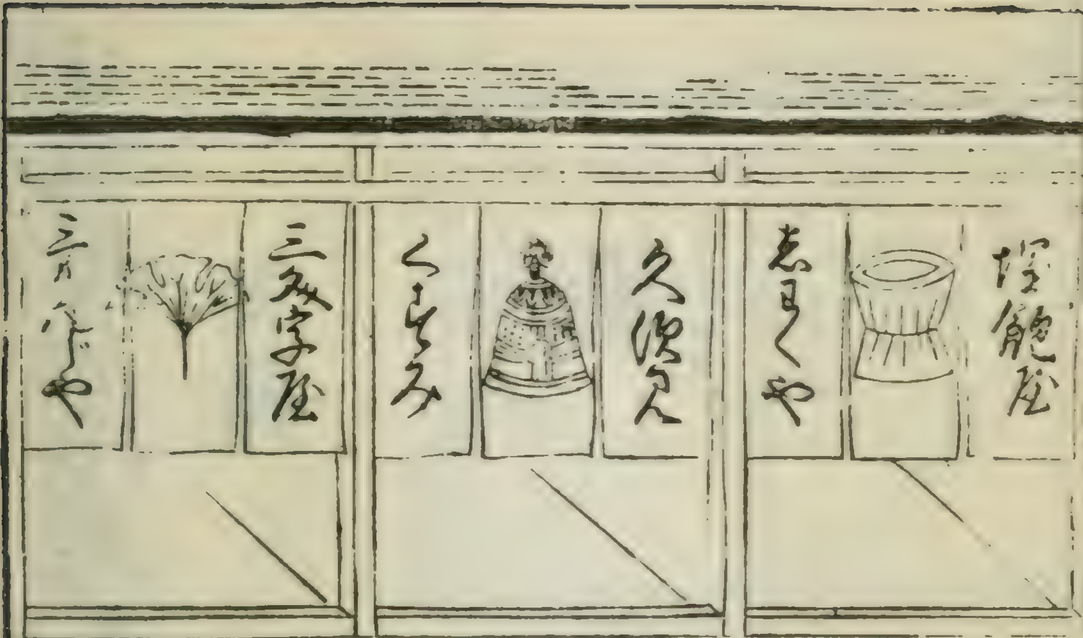
人魚の吸物吟味する同士は山

白魚は隠れなき一口五十両の大阪男

商は氣の廣いむさう男

明は寝とはでき一夢をこへ銀箱

見まるよかれあき三氣情のつまい



鞠も身体のたより
御入は若隠居の思案老へ
大坂西船場にかくれなき材木問屋
銭の穴より天の恵
身体をつくる紙屋の親
京大仏にかくれなき仕出し女房
火燵にも黄金目貫の捌
長者の分限懐日記
江戸に隠れなき分限指南者

日本新永代藏巻之六

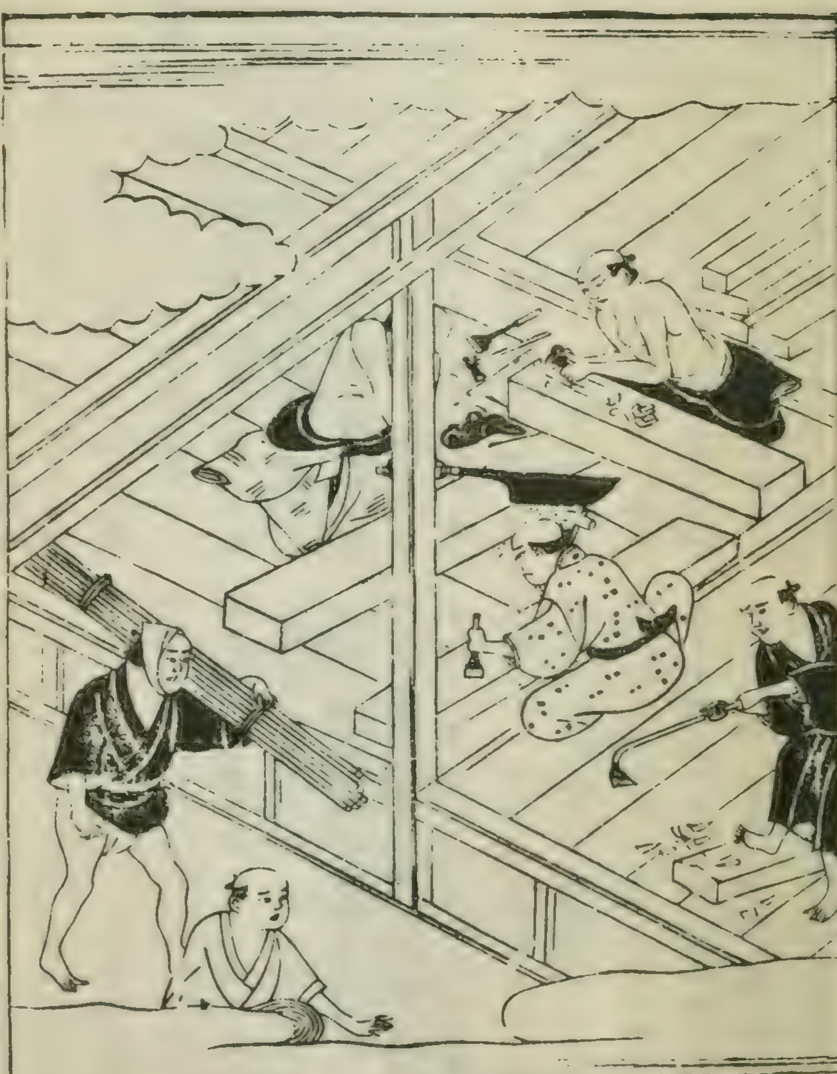
金子の折紙正直な伊勢商人

いかに利發貌しても、手前のならぬ人のいふ事は聞ものなし。文盲にても福人のする事は、よきにたつなれば、闇からぬ人の身をすぎかぬるは、扨も口をしき事ぞかし。今程金銀の澤山成事はなし、それにどこへとつておく事やら、ない所には七八分の豆板さへとぼしく、ふだん貧苦に心神をつからかし、年よりもふけて見ゆる、又身躰くらしかねぬ人は、成ほど若々として、しかもわづらふ事なし。是人魚の汁を吸たるにもあらず、銀のゝびるがおもしろく、朝夕心ゆるきゆゑなり。淫酒遊樂はかりの事にて、老のたのしみあらず、金銀こそ齢をのぶる不老ふ死の仙藥、手ぢかく目のまへなる事を、我人わすれてしばらくのあそびに、永代の損をしらず。佛法の悟りといふも、別の事にあらず、ふかく物に取つきて、しふぢやくすれば、まよひて心あきらかならず。はなれてよく/\おもへば、野郎傾城も、さしておもしろき物にあらず、粧たてしすがた、花車のことば座配のめづらしきのみを見るゆゑに、我宿とは妻とは、かくべつにちがひて、たましひをうばはるゝ也。かれらも内證のふだんすがた、それは/\見ぐるしき事也。いろ香をはなれたるせんさく、こみち成錢さん用、手づから野郎の自前に成ては、客帳をひかへ、草履取が節季に、懸とつてもどるを引合せて、をりのりをさばくなど、そのすゝどき躰たらく、紫帽子をかけて、太夫様といはれ、ざしきにきたる時とは、みちがへて世にすさまじし。かならず賣ものなれば、なん時にても金銀にて埒のあく戀路、通ふは無分別、手まへを大事に稼ぎて、妻子に安堵させて、似合の樂しみいくらも有事也。伊勢の白子大賀屋何がしは、親の讓金貳萬五千兩を得て、終に野郎傾城に一夜もたのしまず、しかも商賣の爲に、京大坂江戸へも毎年くだり、問屋の馳走にいくらか此しゆびありつれども、たつて辭退して一座はなかりし。是いかにといふに、我親宗圓は、わづか銀六貫目をもと手にして、貳萬貫目の分限とな

りぬ。此間の稼ぎ、中々通例の事にあらず。みなおもしろき事をかんにんしてあそばず、いやなる朝起夜詰に勘定おこたりなく、艱難苦勞をして、まうけためて、我にゆづられしに、我いまだ親仁より身躰を引請て、金壹萬兩はえのばさず。しかれば不孝の第一冥加おそろし。我も親仁の如く、一生に貳萬五千兩まうけしのちは、遊樂に金壹歩などは、つかふまじき物にあらず。まづそれ迄は、一錢のあだづかひ、身にこたへておそろしくと申されぬ。此心ざしの誠によつて、八右衞門一代に、三萬兩の金子を仕出來し、都合五萬五千兩を、一子八左衞門へ讓られて、隱居のゝち、京にて山本かもんをまねき、一夜遊興のはじめにて、是又一生のをさめとて、河東にあつまる機嫌とりらを、のこらずめしよせ金子百疋づゝ、しかも折紙につけて送られける。人ははをはづし、たいこもちの藝をぬすみ、かくぞ誠の遊びといふもの也。おほくもんさくをたゞにしてとほす人、陰には手のまはらぬうすき內證をうはべにてきかれぬほどにそしらるゝぞかし。かざり、物やりさうにしては、そのきさりとは淺ましき性ねかな。宿によひ



より引こんで、それ〴〵に家來に用事をいひつけ、其うへにて竈將軍、高枕してこしもとに煎じ茶をはこばせ、僕にあしをさすらし、妻女にかしらうたせて、世中のものがたり、かくあれば女房の機嫌よく、内證をさまつて仕末よく、遊びに出ざれば、世帯の外なる書出しを節季に見ず、宵ねするうへ朝もはやく起られて、商賣のひやうしぬけず、相應に利をとつて、さまで人をぬかいでもくるしからず。店おろしの帳じり、おもしろくなつてくるより、いよ〳〵心まめしく精出されて、四五年がうちには、家も買れ、十年たてば見事成身躰となり、人にへつらはず、あなどられず、よい事のみつゞく事を、うたてや無用の遊びに、夜をふかし、妻女には物思ひをかけ、家來はおのづとのらになし、商のまをぬき、節季節季のせつろしさ、みな心ひとつのまよひなり。くれ〴〵夢をさまして、分限に成べき悟りをひらき給へよ



商に氣の廣いむさし男

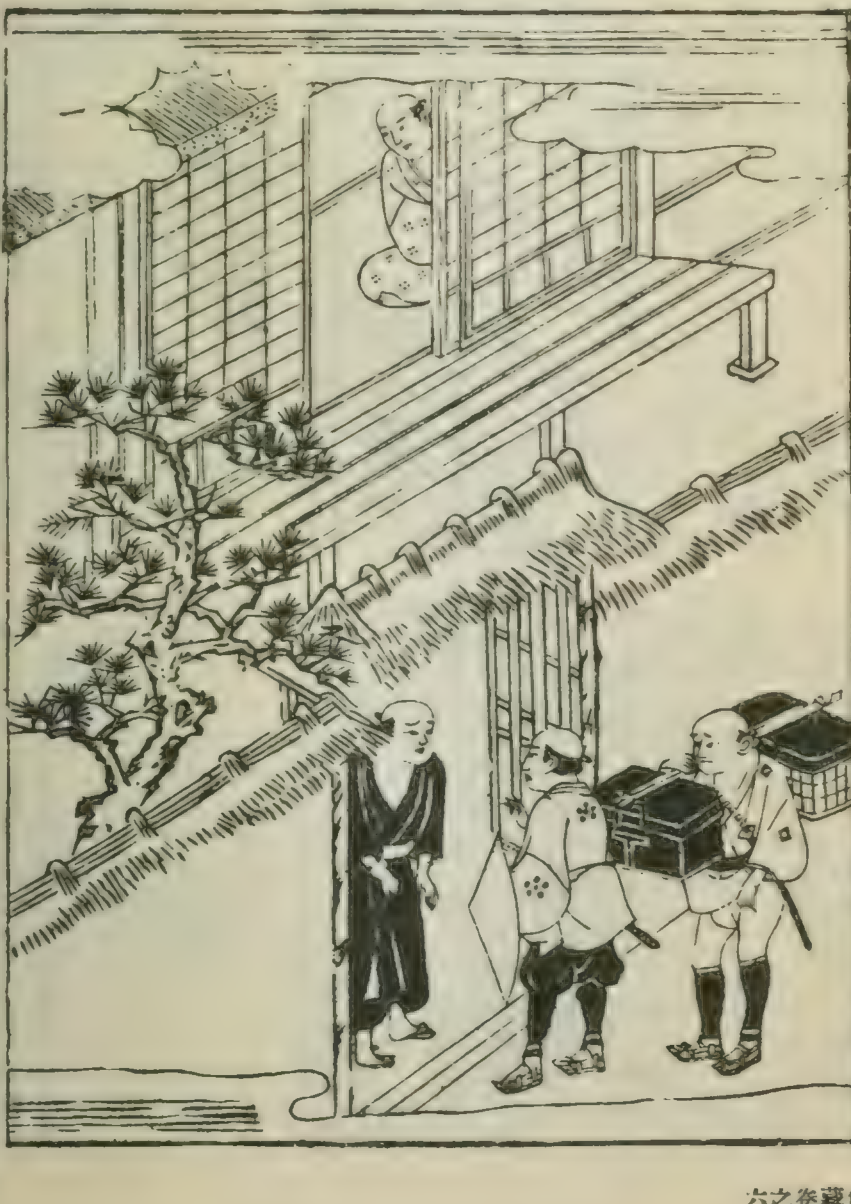
町人の家業それ〳〵にあつて、世界の廣きゆゑ、何をしても賣ずといふ事なし。され共心がけのひとつ、大事の場あつて、一生に四五年は不仕合もつゞくもの也。又四五年はよい事のみにて、思ふやうに身躰の柄まはりて、楫の取よき時節あり、爰にてかならずゆだん有べからず。ずゐぶん算用にたましひを入て、取こむ分別のみにて、藁一筋にても、自由には出すまじき事ぞや。そのうちにもうしろだてになる大商人へ、何とぞ懇意にしかけて、金銀の當座がりに事かゝぬやうにすべし。昔は借宅にて千貫目の身躰、是をことの外稱美しけれ共、それは時々にて、今の世にはひとつも合ず。當世はまづ何とぞして家を買て、是を世上のかんばんにして、慥にありものゝしれたるを見すべし、さなくては中々人のがてんする事にあらず。たとへいかやうに銀の入用ありとも、いつたんもとめたる家を、なまずにてはなすべからず。家を賣て其代銀をもと手にして、利のかゝらぬを徳とおもひ、こまかなるさん用して、取つゞく商人は、埒のあくものにあらず。家をはなせば、たちまち世間のおもはくちがひて、金銀の取やり、ことの外不自由に成て、中々もとの家もちと成には遠し。惣じてもと手なしの商人は、うそをつきてなりとも、人の慥におもふやうにすべし、ありやうばかりにても、世はわたられぬもの也。むさしの須田町大坂屋の何がし、もとは大坂京橋天王寺屋といへる、綿問屋の末子にて、若年の時分、ことの外身もちあしく、遠き新町へはや駕籠をかよはせ、道頓堀に遊びの夜をあかし、親兄のもてあましものなるを、江戸の大坂屋のぼられし年、此男を見て養子にせんといふ。扨も是程の役にたゝずを、どこにおもひ入のある事ぞや、ひらさら御無用にと、さま〳〵辭退ありしを、ぜひにと所望して、すでに江戸につれくだられしを、親兄は鬼に瘤を取れたる心ちして、わづか銀五貫匁をみやげとしてつかはしける。むさしの親仁江戸に歸りて、そのまゝ身躰を此わやくものにわたして、隱居いたされける。扨請とつて身躰を見るに、みせかけは慥に貳三千兩の有金と町内とてもさたしけるに、存じの外なる事かな、帳面かりとかしとを指引して、有金貳百兩にはたらず、是を養子にわたす。親仁の思案かくべつ成所をのみこんで、さすが傾城ぐるひして氣のとほりたるかげにて、此養子無性に僭上をいひちらし、此度身共が持參金千兩、かつ又

大坂に、年中に三百兩づゝ、宿代のとれるやしき、我らへ實父よりの讓にて、此金子極月には毎年兄がかたよりくだすなりと、扨もあとかたもなき事ながら、世間をつくろふばかりに、心にはづかしきいつはり、神は正直にて人をかたらぬ虚言はゆるし給へと、商賣の魚問屋、一大事に精出し、無用のつかひをせず、三谷も同じ傾城にて、見ねどもしれたるなぐさみ、さかひ町木挽町の野郎も、大坂より入かはる事にて、花代の高いといふまでにて、さしてかはらぬ遊興と、廣い江戸をひとのみに、腹中にたゝみこみ、眼玉をひつくりかへして稼けるしるしに、八年めに誠の三千兩と、江戸にて三百兩、宿代のとれるやしきをもとめ、店おろしのうへ、いまだ我千兩の持參金といひしがたらずと、猶ゆだんせずつひに十年めには、人にいつはりたる金高の如くに、まうけためて養父にもよろこばせ、實父へも此祝義として、はじめて江戸より歳暮の付とゞけ、さりとは手がらものかな。ひとへに養子にせんと見たてし、江戸のおやぢも目水昌と、大坂にても一門のよろこび、かくれなき善七算とて、八算もしらずして、地算にて萬事埒のあく、大商人の心かくべつなるものと、むさしにかくれなし

鞠は身袋のうつぼ

祖父辛勞、子は樂、孫乞食と、昔よりのたとへの如く、一生家業に油斷なく、仕末殘る事なく、大分の金銀をまうけためて、子に讓れば、是生れながら長者にて、銀のまうけがたき事知ず、なんの苦勞なしにあたまから、雲上身持して、向上成事のみをわきまへ、身躰にものいりおほく、其身一代は親のかげにて、けつこうにくらすといへ共、其子の代には、金銀へりたる所を請取、しかも世躰廣ければ、次第に出かたばかりにて入かたすくなく、自然天然と身躰つぶれ、空大名となる事、世におほし。さりとは今の長者たち、よく心えて家久しくつゞき、何とぞ子孫のたえざる仕様を工夫有べし。人の身躰に物の入事は、次第に無用の人付合ひろく成、僭上つよきによつてなり。親のととのへおかれし器物、むかしふうにて當世にあはずと、ものずきをあらため、さして事かゝぬ道具を新しくこしらへ、又家普請もとかく非難をいひ出し、往昔石に根つきの楠の木作りかたくろしく、瓦葺はおもくれたるとて、今風の

長板のやねうらを見てこそと、なんの役にもたゝぬ、茶の湯者に指圖を賴み、一々無益の造作、それよりして疊の表、戸障子迄を吟味して、金銀を入て、ひとつも商賣のかつ手にかまはず。かゝる費かさなりて、身躰くつろぎそめて、損のゆく事ばかりにて、德を取事すくなし。是親の心を背き不孝の第一、いづれ冥加につきて、はやく身をほろぼす事尤也。爰に大坂西舟場に塩九といふ男、親代々より材木商賣にて、手廣く大分の跡式を請取て、其身理發もの成が、次第に世間廣く付合、傾城野郎ぐるひも人よりはひけたるさばきをせず、下やしきいく所にか、鞠がゝりの四本竹、一ふしある物好見せばやな、利休の平庭をうつし、南天の花も實もある風流、安喜庵の數寄屋をまなび、七ッの窓に青嵐白雪の詠め、口切木地の爐ぶちより、風爐の茶の灰も、たくみなくして直なる手まへに、所望の來客絶る日なく、其外天王寺の立花の會、住よしの和歌會、天滿の連誹、うへ塩町に十種香の源平、又銀座衆と古筆の會、萬事雲上なる身持、冠着ぬお公家樣ぞや。されはいつとなく身上不かつ手になり、思ひがけなき分散をとり、



北國にて舟火事にあひ、買置にもさがりありて、何共取なほしがたき身躰也。此男元來利發ものゆゑ、此節分別して、家ふるき手代へ內談委細にして、其身は伏見の兩替町へ、銀貳貫匁にて小屋敷を買、若隱居して、五才になる九十郞へ身躰をゆづり、諸色をかまはず、され共內證よりはぬけめもなう下知して、商賣躰かはる事なし。此をとこ大坂を逼促して、伏見へ引こみしゆゑ、世間付合の物入かつてなし。おのづからまうけるのみにて、つかひ減じけるゆゑ、四五年がうちに、身代の楫を取なほして、大船をつくりかけ、江戸廻しに利をえて、毎年店おろしよろしく、七年めに大坂へもどりて、九十郞うしろみ、慥に世間よりかんじ入て、いよいよ金銀の自由をまはしぬ。とかく身躰の廣がりたるはなんの子細もなきに、すぼめられぬもの也。それをせひすぼめんとすれば、世間よりすは內證うすきとて、身躰をうたひ出してもみつぶすもの也。其まゝに世間をはれば、內證のいたみ、年々につもりて、次第に元手うすく成也。爰を九兵衞工夫して、一たび伏見へとつてのきけるは、よき手だてぞかし。此男大坂にゐぬゆゑ、下やしき共をかし屋にして宿代をとり、日ごろの付合もふしみ迄、たづねてはこず、たまゝゝの京のぼりにたづねよれば、坊主義式のくらし、又は此間大坂へくだられたるとて、るすのよし、しからば心えてとばかりにて、皆々打通られ、少も物の入事なし。惣じてかたぶく身躰を、ろくにゐなほすはならぬ事也。扨も手がらものかなと、年寄たる人も、此男に分別を、折節はかられけるとかや

錢の穴より天道の惠

身過は草のたね、つきる事なし。今一町の長兵衞といふもの、京の仕出し也。江戸や大坂飛脚の狀くばり同前に、袋をかたげ、繩手、石かけ、祇園藪の下、八坂宮川建仁寺町のするゞゝ、白人おやまのある、家々に表より、御用はござりませぬかといへば、心得て白人おやま、知音のかたへの送り文、所書をしてわたせば、是を長兵衞請取て、それよりいく所のもひとつにして、それゞゝに客の手へくばりわたしぬ。此狀ちん一町を一錢にさだめて、毎日毎夜遊女のかよはせ文、いかなとゞこほる事なし。此ごろは長兵衞一人の手にあ

まりて、下人ふたりまでおきて、三人
して状をくばるなり。遊女らも身一ぶ
んの文ひとつ、客のかたへ送らんと思
ひ、わざ／＼人をつかはせば、大ぶん
の駄賃のかゝる事にて、たび／＼のせ
わやかましく、此長兵衛が文くばるゆ
ゑに、自由に客のよすがを、もとめす
しての幸便、世のさかしさならめ。か
やうの事にても、思ひつけば、新しき
身過はあるものなれば、よこしまに世
をわたるは、さりとては人の人たるみ
ちにあらず。往昔むさしの淺草ちかき
所に、佛具を商ふ佐内といふものあり。
はじめはわづかの元手さへふ自由にし
て、懸ては一錢の事も成がたく、氣の
つまりたる商人なりしが、四五年がう
ちに、さりとはたまればたまるものか
な。家を買、普請立派にみがき、家來
大せいめしつかひて、世間よりもあい
さつむづかしく成て、扱もうら山しか
りしが、いかにうたてや、此佐内金銀
をまうけし手だてを聞に、諸山諸寺の
出家、佛具の入用とて、きたらるゝを
馳走してもてなし、ひそかに鰹の入た
る、とうふのすひものよりおとしそめ
て、鯛の難波烹、鯉のさしみ、鳫の汁
かまぼこのあつ／＼、玉子のなべやき
に、はらひかたのせんさく、姪の伯母
のと名をつけて、美形つめ袖に腹をさ
すらせ、無分別に三衣をよごさせ、思
ふやうにおとしたるうへは、資堂銀を
預りてすまさず、弟子には師のものを
ぬすませ、住持には重物靈寶を質にお
かせて取こむ。此鉦屋にたゝきあげら
れて、其比の法師ら、欠落捨身、自然は
盜賊の罪に、おこなはれしもありしと
かや。此事かつてせけんに知ざりしに、
佐内が積惡、天道も今はゆるし給はぬ
時いたりてや、亂氣して我と身の事を、
國中にふれまはり、靈寶々々と口をた
たけば、きく人ごとに扱はあの分限は、
さもしき心底より、珠數の實をむさぼ
りし、金銀いまはしやと、あはれとい
ふ人もなく、醫者をよべ共ゆかず、お
のづから次第よわりに、湯水のかよひ
たえて、あはれや最期に及んで、我今
生の思ひはらしに、湯を一くちとなみ
だをもらす。女房さらばと茶碗を目に
みせても、咽に因果の關すわりて、息
も引入時、内藏の金銀取出させて、跡
や枕にならべ、我死たらば、此銀は誰
物に成事ぞ、養子をせざる事の今さら
くやしや。他人の入ては、日ごろの坊
主おとし、内證しれるかなしさゆゑ、
やらうものもなき金銀ためて、今さら
殘しゆく事の、をしやかなしやとしが
み付、泪にくれなゐのすぢ引て、貌つ

きはさながら角なき青鬼のごとし。面影屋内をとびめぐり、落入をおしつくれば、よみがへりして銀をたづぬる事、三十四五度に及べり。のちには女房も愛想つきて物すごく、病家に行人もなし。二三日もして、音せぬ時大せい立かさなりて見しに、死人金銀に取つき、眼をひらきながらにおち入たるふせい、皆たましひをうしなへり。其まま乗物におしこめ、野墓に送りける。折節小春の日かげしづかなる空、にはかに黒雲立まよひ、しぐれ嵐をさそひて時ならぬいなびかり、天火のり物におちて、佐内がなきがらを、けぶりになさぬさきにとつてやゆきけん、明乗物ばかり殘て眼前火宅のくるしみ、おの〱にげかへりて皆菩提心にぞ入にける。其後佐内が女房は髪をおろして、金銀遺物寺へあげて、其身ははちをひらきて、世をわたりければ、人又是をあはれみて、慈悲の手のうち鉢にあまりて、堅固に道心をつとめけるとかや。かゝるためしを聞に、今の京にも寺々を謀りて世をわたる、佛具やあらば、心をひるがへして正路に身を過給へよ。さりとては因果のめぐりきたる事、遠きにあらず。久須見何がしの先祖は、かくれなき大慈悲者にて、此以前寅年の飢饉に、烏目壹貫文づゝしのびて、貧家の人につかはし、是にて八木の下直に成迄取つゞけよとのなさけ、此恩にあづかりて、幾人が難義をのがれ、後ののち迄も、此家の家人譜代と、式日には禮をつとめし事、さのみ遠きにあらず。今の隠居身躰逼促して京を仕廻、洛東に引こまれけれども、いさゝか人に損をかけず、我金銀をへらしたる迄なり。とかく人は運によつて榮え、又はもつれたる事もあるものなり、かならずよこしまにて身を過金銀をためんとする人は、鉦屋佐内が因果物がたりきゝてたしなみたまへ。出家をおとする其罪は、おびたゞしき事ぞや。くれ〲うかべる雲の金銀、きえやすき淡の世わたり、かならずよこしまの道をして、一端利をうるといへども、つひには天道の恵にはづるゝ事、むかしよりおほしとかや。これらも人をたらし、本意にあらぬ銀まうけ、いかでつゞくべきはずはなし

火燵松千貫目の翠

天徳あきらかに地の理直なれば、今日立身せんとおもふ人は頓欲をやめて、

其かはりに身をかためておごるべからず。金銀は世界を廻りて、かならずとどまる事なし。第一商人の愼むべきは、短氣朝寢、色狂料理ごのみ、小謡三味線、博奕武藝、長居大酒分別立、人言泣言、僭上仕末咄、夜あるき目利だて、藝自慢無禮、馬鹿慇懃芝居好、寺參り友だち付合拍はやし、これらをまづ無用たるべし。扨すべき事は、朝起夜詰、薄着小學文、算用帳台、此外はせずとくるしかるまじ。むさしにかくれなき三もんじやといへる大商人の身もち、大かたかくのごとし。惣じて天地のうちにかはりさへあれば、くるしからぬもの也。もろこしのかしこき人、道にて錢をひろひ、其かはりに賣ものゝ籠をのこせしためし、是少し愚なる事にきこえぬれ共、物の道理はかくの如し。狐つりに狐の取つかねも、親妻子をはごくむ爲なればくるしからず。武士は軍役に命をすつるゆゑに、常はさのみ苦勞なしに知行をとり、出家は人をみち引て、惡心のやめさせ、其かはりに施物をとりて、世をわたる。とかく身をあそんで金銀のまうけらるべきやうなし。わかき内かせぎたる人は、老て安樂也、かせぎざ



かりにゆだんしたる人は、老のくれ難義に及ぶ、爰を思案して、老の樂をねがふべし。爰に京二條邊に、身躰よろしき人の三男を、出家にしてすでに關東の學校に入ければ、中々發明頓熟にて、紫衣の望みありけるが、俄に天魔や見入けん、破戒無道の所存、たちまち學校をぬけ出、京にのぼり羽織すがたとなり、かねて學文の料に取置ける金銀ありたけを、祇園町の娘に打こみ、手と身とになつて、爰の首尾さへよろしからず、夜ぬけにして又江戸にくだるに一錢のたくはへなく、比しも極月小の晦日の空くらきを、ふりつむ雪にあしもとをたどり、藤の森の松にふりしこりて、寒き坊主あたまをかくすべき頭巾さへいつしか、袂よりおちてやくたいなし。此時ものをおとすは心のうつけたるゆゑと、放心の工夫はじめてつきぬ。それより本心に立もどつて大悟をひらき、まんまと三州岡崎なる大地にすわられしとかや。かゝる沙門の身にさへ、いつたんのあやまりはあるものなり、人ははやくねぶりをさまして、まよひをすつるこそまことなれ。いつ迄も野郎傾城になづみ、身躰をつぶすほどに成事さりとては有まじき事ぞや。ちかき比難波に川庄といふ男、色事雲上事に身躰をはたし、しかも太夫にゆびをきらせたるを、くつわにねだられて手錠迄うたれ、そのゝち何とも大坂に住がたく、越路をさして無分別にくだり、何成共見たてゝ立身せんと、心ざしのつよきから、江州山中村にて一尺にたりたらぬ高さの小松を數千本、しかも下直にとゝのへ、これを越前越後能登の七尾をかけて、火燵松と名づけて家々へ商ひける、此おもひつき、さりとは才覺男かな。北國は九月のすゑ初雪を見そめて、十月より雲を知ず、平地を見ず、都をふかくたてこめて、誠の冬ごもり樹木を見る事なし。ふだん爐邊にゐよりて隣とも出合ならず。かゝる所へ此小松をもちかけ、冬中火燵のほとりの鉢の木どして、都をおもふ詠めものと、いづれも買ざるといふ事なし。川庄大ぶんの利をとつて、すぐにやまゆのいとを買、京へのぼれば、是迄紬にてこそのぼりしが、糸にてはめづらしく、西陣の辨柄糸の織ませに買はやらかして、鋸商大分の德をとつて、又北國に通ひ、空鮭を買江戸へくだりて賣に、次第に金銀をまうけためて、住居をむさしにさだめ、若きうちのしすごしを取かへし、名をあらためて、北國屋とてかくれなし。人はわやく成もよし、し

かれどもあしきをあしきにとほる時は、役にたゝずならずもの也。いでや口をしきと、おもひなほして、分別せば其あしき所、又よき事のたねになつて、火燵松の仕出し商も、有まじきものにあらず。それより今に越前越後には、かゝる小松の商する人おほし。はるばるかみがたよりくだりて、所の人に一商をしへけるぞかし。くれ〲立身は日夜朝夕にあり、少もゆだんなく稼べし。かゝる君が代の商人、いかで分限にならざるは、東恩の知ざるに似たり。萬歳不易の松のえだ、十かへりかへる花のみやこ、月のむさしのにあまる長者たち、あら〲新永代蔵にかぞへ入ぬ

日本新永代蔵巻之六終

文武百物語　全部六冊　近日出来仕候

江戸日本橋南一町目
須原茂兵衛

正徳三年己正月吉日

浪華書鋪　大坂淡路町難波橋筋瀬戸物屋
村田屋吾衛門

新板

世間女



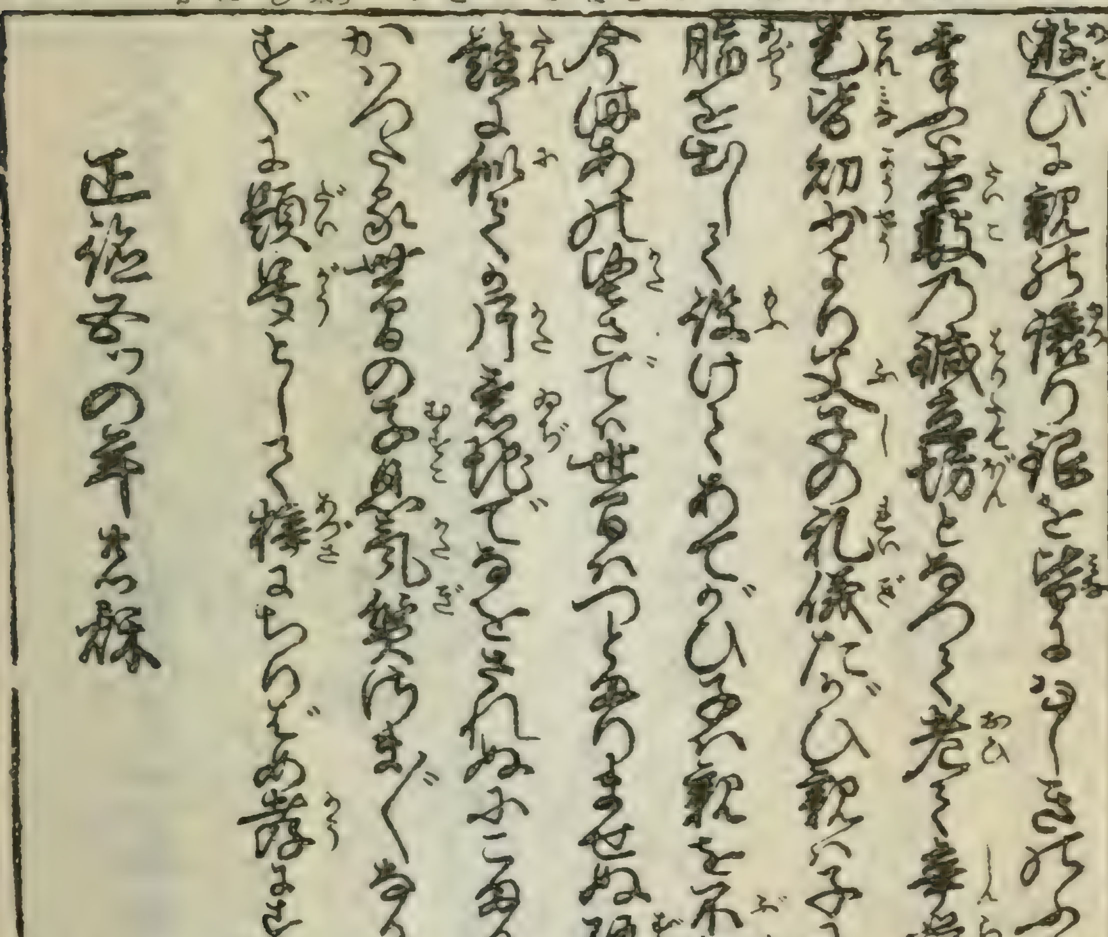
人生れて八歳より小學に入、十有五にして大學にいたるいにしへの法なり。今時の子共を見るに八歳にて烟筒をくはへ、十有五にして死一倍をかつて傾城を請出す魂膽、是人たるもの〻道とおもへり。むべなるかな、教ずして人生れながらに知ものにあらざれば、若子さまともてはやされて我儘にそだち、むしやうに高うとまつて、おのが家業に心をよせるは至らぬかなといやしめ、諸藝色遊びにか〻つて放埒に身を持を、銀持の風俗はかくこそと思ひ込で、自非をあらたむる心はなくて分際ふ相應の奢遊びに親

人生れて八歳より小學に入、十有五にして大學にいたるいにしへの法なり。今時の子共を見るに八歳にて烟筒をくはへ、十有五にして死一倍をかつて傾城を請出す魂膽、是人たるもの〻道とおもへり。むべなるかな、教ずして人生れながらに知ものにあらざれば、若子さまともてはやされて我儘にそだち、むしやうに高うとまつて、おのが家業に心をよせるは至らぬかなといやしめ、諸藝色遊びにか〻つて放埒に身を持を、銀持の風俗はかくこそと思ひ込で、自非をあらたむる心はなくて分際ふ相應の奢

の讓り銀を皆になし、きのふ迄は大臣と呼し男、けふは太鼓の鐵立坊となつて、老て辛勞する人あまたなり。是皆幼少より父子の禮儀たがひ、親は子に孝行をつくし、身の脂を出して設けてあてがひ、子は親を不粋なりと見くだし、今時あの堅さでは世間はつとまりませぬ。隨分異見いたせど誰に似てか片意地でなほされぬにこまるとあちらこちらにかはつたる世間の子息氣質、さま〴〵なる事を書集めて、すぐに題號として梓にちりばめ、孝にすゝむる一助ならんかし

正德五ツの年の秋

其磧



世間子息気質巻之一

目録

勘当を請太刀親の異見競ぞ侍形氣
町人の矢先も角を折ぬ我儘
敵は身をとらぬ所掛の稽古
友達は喰ものつゞく暮る上の苦労者

取付世帯を表向は強く持ち者敷形氣
白人にあゝ結ぶ合鍵の夜をやらぬ女郎屋
木綿織の大の鳥飛ぶ手習の抜作
無分別な大風一飛を免れ大道筋の末日

第一　木賊賣は心を磨正直な百姓形氣

むかし誰かいひけん、親苦勞する其子樂する孫乞食すると。世界の子共の行跡を未然にかんがへ、いひ置し言葉は拙けれ共まことなる金言今なほ是を感じぬ。世に愛する月花にも心をよせず、胸に十露盤を忘れずして常住香の物菜此外にはいかな〳〵三月の櫻鯛を壹枚、松茸十本貳分する時も目に見るばかり、咽がかわけば白湯に香煎、油火も眞中に一つともし、是をねさまに消して、鼠があれても膳棚にたしなみの肴おかねば氣遣なく、盆正月に着物せず、夏冬内では袖なしの繻絆一つで暮し、年中始末に身をかため、金をのばしてとらしたやと、子ゆゑの闇に黒き髪の白くなるまで其身を使ひ悴子に榮耀させて、我は手代同前にはたらき、萬貫目の銀に世間の面白き事を見せず、藏々にうめかせ一生狂ひ死にして、一家一門家來迄着古しの布子一つ、形見とてやる事のきらひな親父なれば、箸かたし外へちらさず、金銀家藏釜の下の灰まで手もぬらさず一子讓りを請て、仕にせおかれし商賣、又は棚賃かし金の利積りして、是ほど年中はいれば商せんとて、世間をつとめ大勢の手代を引廻し、氣骨ををらでも緩りと暮さるる世を、親仁無分別にて無益の世話をやかれし事よと、高ぐゝりして二十の前後より商賣やめて無用の竹杖、おき頭巾長柄の傘さしかけさせ、世上かまはずゆたかなる顏附、いかにおのれが金銀つかうてすればとて天命をしらず。人は十三歳迄はわきまへなく、それより廿四五迄は親の指圖をうけ、其後は我と世を拵、四十五迄に一生の家をかため、遊樂する事にきはまれり。なんぞ若隱居とて男盛のつとめをやめ、多くの家來に暇を出し外なる主取させ、末を頼みしかひなく、難儀にあはし世の人の請拂する二季の際に、手飼の座頭に三味線ひかせ、女房に琴腰元に茶をはこばせ、萬しまうた屋の氣さんじ、心づもりの算用よりは毎日の奢に、親の儲けためられし金銀そろ〳〵減出し、程なく内證に穴のあく屋根をも葺ず、孫の代には古家一軒殘らぬやうになつて果てる物ぞかし。爰に奥丹波より都へ木賊賣に出る親仁、本卦にかへる年迄夫婦の中に子といふものなくて、我等女夫は一代者と觀念して、物をたくはへる所存なければ、其日拂にして心の樂み、世にいふ清貧とは是なるべし。

けふも木賊荷うて京の方へ賣に出しが、去年よりは辛勞に覺ゆるは、一つも寄年の加減と老の坂に杖してやすむ所に、十一二歳成小賢しき小坊主、大きなる鼻毛拔を持つて跡より來る。不審に思ひ近づけて樣子をきけば、此小坊主木賊賣のおやぢを見て、そなた身には辛勞すれ共心に勞する事なく、女夫中よく惡念のなきは、子といふもの丶なきゆゑなれば、產ずの內儀を馳走めされ、御身正直正路の人なれば我眞をあかす。予は是其所々の產宮につかはる丶小步行の小法師なるが、氏子は千金にもかへじと大切に思召す子共を、あいたてなく育あげ、成人させて後我儘いうて、親の手にあまるとて勘當帳につけて舊里きる、親々の鼻毛をぬいてまはれよとの、氏神達の神勅を請て只今都の方へ赴くといへば、木賊賣合點ゆかず、是は何共のみこまぬ神使かな。すべて一身の外に太切に思ふ物は、世界に子といふものより外にはなし。其太切に可愛い子を、勘當しておひ失ふは



能々不孝にして、親の心に背くゆゑなれば、其子は大罪人にして親に科といふ物なし。何を以てか氏神は、其勘當する親々の鼻毛をぬきには廻さるゝぞと、不審さうなる顔つきをすれば、小法師答へて、司馬温公の語に、子を養ひて敎へざるは父のあやまちなりとかや。今時の親心愛におぼれて左の手して箸をもてど、後には我ともつ物となほさず、鐵槌にて茶釜たゝき割るを見ても、あの思ひきつた氣の強い所が男ぢやと却てほめそやし、餘所の子の五歳にて大學讀は耳にいらず、我子の十一に成て茶碗たゝいて歌祭文の眞似するを、あのゆる節の所の思ひ入をきいて下されと、客のある度に語らせて悦びぬ。其親の叔父たる人見兼ねて、尤そなたの子は發明なとはいひながら、むかしから走る馬にも鞭といへば、ち



と折々は行儀を直されよと、身の中とて心をつくるに、皆迄仰られな。惣じてをさない時に躾をしゆれば入目に成て病づき、虫など出て後々迄の煩ひ

となれば、幼少の時は息災なを勝にして、ありたき儘にそだて骨身もかたまり、物の心もわきまへる時分より、萬の事をしゆれば早く合點し、異見もよくきゝ入る物なりと、それなりけりに育てあげて、後には持あまして勘當する事、是皆親の科ぞかし。木竹をつくるにも、若き内よりそろ〳〵揉つくれば思ふごとくなれり。ひねて後ためんとすれば、枝をれ枯しぼむがごとし。又其子成人しておのれと耻かしき事を知り、惡曲を直さんとすれば物うく、元氣をへらし或は窮屈にて癆瘵となり、親より先立ち父母一生の思ひとなれり。又おのれと發起もせず、異見をも用ひざる時は、親は怒り子は恨み、互に憤り惡人となつて、家を失ひ身をほろぼす人多し。およそ世界の惡人親の仕業ならずして、誰が業といふべき。ことさら近年は親の心もちはかぶきになつて、身代ふ相應に奢り、子共に遊藝をはげませ、家業の事は親父がさばき、年中打囃子にかゝらせおき、町參會に、御子息のお鼓、此中東山の稽古能で承りましたが、中々扶持人の役者も及ぶまいと、是のみ評判でござつたとほめそやすを喜び、いよ〳〵親仁のつて來て内縁を求めて貴人の御能の役をつとめさせ、家の面目世の外聞と、無性に金銀いれて習ひ事を傳受させ、身共が悴子はもはや亂道成寺をゆるされましたと、子自慢せらるゝ中に、此若子樣よい事にして不斷よい衆づきあひして、浮世の拵をしらず、打囃子と好色に身をそめ、數年親の貯へおかれし金銀我物を盜づかひ、隱居の心當の小判迄に手がつき、是はと親仁始めて驚出し、日來愛せし細目も猿眼にかはり、ふ便氣さつて一門町中の侘言も聞入ず、勘當しておひ失ふ。是皆幼少より有たき儘にそだて、をしへずして惡人になすは、偏へに鳥の見ざるやうに網をはりおきて、今勘當の苦みの網にかくるがごとし。殊に近年こらしの爲の勘當とて、諸一門示しあはせ、鹽をふませて倦じさせたが後藥とて、直さうための方便の勘當、是なほ惡道へ歩まするぶ思案なり。勘當せらるゝ程のふ所存になりたるむす子なれば、此時に目を覺し先非を悔て心をあらたむる悴子は稀なり。かならず勘當面白いと逆になつて、更にわろびれたる躰もなく、惡所友達太鼓おろせが方にゆけば、おまへの御身代で千兩や貳千兩おつかひなされたとて、御勘當とは、親仁樣がせちべんな。お氣づかひなされますなと、それより善い者にはつきあひ絶えて、次

第に悪黨中間へ誘引せられ、さま〲もがり分別を習ひ得て町所をさわがし、親に瞋恚を燃やさせ、かりにも正道なる心は出ず、奴形氣となつて見事親が合力せいでも、乞食は致さぬわと、おやまゝ奉公の肝煎して分一を取り、筒もたせの挨拶人になつたり、新田金山の形もなき騙事をこしらへ、むかしの形氣に百倍わるうなつて、後々勘氣ゆるされてからが善い人間とはならぬものなり。そなた子がないとて味氣なう思やるな、あつてからが讓る物なければ、ない方がはるかに仕合〲といふ聲の下より、はげしき風につれて親仁さらば〲

第二　勘當は請太刀親の家を鞘走る侍形氣

見せかけ珠數に世話と念佛をくりませて、人目に後生ねがひと思はするも商の一手なり。是正眞の鬼に着せたる衣の棚、家造きれいに袈裟衣の商賣手びろく、江戸大坂に店を出し次第分限となつて、何不足なき身上なれ共、年久しく子のなき事を歎き、諸佛神へ祈誓をかけ、たま〲男子を設け、花にも月にも眺め大事にそだてし甲斐ありて、十六歳にて元服させ、甚七と名をあらため、おとくいの知行寺其外問屋方をありかせ、あつぱれ器量の若い者と、ふたりの親は我子自慢して此上の富貴に何にても望なし、此子が娌に成べき容儀もがなと、是を聞たてらるゝより外なく、成人の子を甚七〲と猫撫聲にて寵愛かぎりなかりしが、甚七町人に似合ざる武藝をこのみ、我内に木馬をこしらへ知恩院門前に馬上の達者の牢人あるを師とたのみ、朝暮馬に乘ならひ、秘傳の手綱の大事を傳はり、是より兵術を稽古し座敷の疊をあげさせ、板敷にして毎日手代小者をよせ品拷打の相手とし、萬事をやめて此藝をはげむ事大かたならず。ある時は卷藁をたて弓を射て手前を試み、是がつのりて御幸町の具足屋へ鎧甲をあつらへ緘たてたる物の具を大床にかざり、平生も武士行儀に身をかため、湯風呂へ入にも一腰をはなさず、軍書を讀ていにしへの良將の軍立をさみし、甲斐の信玄は智謀武勇を兼備へて、思慮ふかき名將といへども、信州川中島の合戰の時、山本勘介を賴みにして、いたづらに謙信の陣を西條山に見やりて、川端に備へをたてられず、夜の間に川を謙信にわたされ敗北せられしは油斷に

あらずや。其時我等ゐるならば、いふではないが、おそらく北越無双の猛將と聞えし長尾の謙信の首をとつて見すべきものを、近比殘念の至りと腕をなで、話すをきかれ、愛子の事なれば今までは見ぬ貌してゐられしが、此比けしからぬ行跡、親父もはやたまりかね、おもてへ立出甚七をよんで、汝は知行取にはなるまいし、無益の武藝をたしなむこと曲事千萬、殊に家業は衣屋にて出家衆を相手にせねばならぬ商賣、其かはりに佛書でも見れば、僧正衆のお咄しの伽にもなつて御意に入、七條の袈裟でも幢幡の一流でもつい請取まい物でない。向後柔術兵法をやめにして、袈裟衣の注文を請取やうに致せと、嚴しく異見して奥へはいらるれば、甚七親父の跡を見送り、若い手代を近付今のおれが居ずまゐを見たか。氣のみじかい親父なれば異見の上で烟管でもふり上られまい物でない。所をしやんと身を捻れば、此方には三分の強味あつて親仁方には六分の弱味あり。面



食はさうとせられても、あの構へでは中々食はさるゝ事でない。是が黄石公が秘せし一打退身といふ虎の巻の大事ぢやが、なんと身共が心がけの程を見ておけと、額に皺よせて臓をゐんでせられし異見は他所に聞き、只兵法の自慢して、いよ／＼さかんになつて來れば、寵愛の悴なれど、親父分別して見らるゝ程おそろしうて夜がねられず。世にある若氣の至りとて、傾城ぐるひ野郎あそびは、金銀を皆になし末々身代がつぶれうかといふ案じより外になし。然るに我子の甚七が行作はあすが日どのやうな血臭い事を仕出來て、親の首に縄を掛けうも知れ難しと、是より氣遣ひ絶えずして町衆を頼み異見して貰はるれば、淺ましやたま／＼うけ難き人身をうけて町人となつて朽ち果つる事、此世に生れし甲斐はなし。是



ばかりは釋迦如來がお出なされて、四十九年が其間長々しい異見を述べつゝけに仰せられても、聞こむ甚七ではござらぬ。手前商賣の衣の墨が白うなり、

木馬に角が生て跳あるかうが、男と生れ一旦思ひこんだ事をひるがへす物でない。夫れ勇士の本意は心を變せざるを義とす。素町人等が分際で一方の大將もせうと思ふ甚七に向ひ、武藝は商賣の邪魔でござるとは推參なと、爲思うて異見せらるゝ町衆にむかひて切刄まはせば、年寄も組中も我を折つて、さても一騎當千のたはけもの相手にはならぬと、親父にむかうて、大事の御子息でござれど、甚七殿をお手前におかせらるゝ御所存なら、御親子共に他町へ御ざつて下され。あの無分別の旗頭を此町におきましてはどんな災が出來て、年寄組へ難義かゝらうも存せぬ。勘當なされう共内證勘當の分では、親一門の難義は遁れますまい、御思案なされと會所にて口々に申さるれば、親仁も覺悟きはめて子をもたぬむかしと思へば悲みもないと母親にも諦めさせ、世間はれての勘當、身から出した錆身の脇指一腰ばかりで親の家を立離れ、伏見の片脇に崩れ次第の家を廿五匁五分でもらひ、漸々爰にひとりずみ、かすかなる朝夕の煙をたて、蚊屋なしの夏の夜をしのぎ、蒲團もたずの冬をおくり、扇の要を刻みて三年三月の日數を經る中に、西國大名のお通りの折柄、御秘藏の名馬と見えて馬取七八人口について來りしが、何にか驚きけん、馬取共を跳たふし、一さんに駈け出し崩れかゝりし在家へ入て跳まはれば、祖母嬶稚い子共ども怯ち怖れてこけまはれば、馬取ども追々に馳來り、止めんとするに止まらず、あぐみはてゝゐる所を、甚七罷出、御ゆるされも候はば憚ながら私乘しづめて進ずべしといへば、侍分の者跡より來り、あの馬はいにしへの小栗判官さへもとねにしかねられし鬼鹿毛に似たるとて横山栗毛と名付られ、主人の秘藏是に首尾よく乘る者は、廣い家中にわづか一兩人ならではなし。しかるにおのれ賤しき身として乘しづめんとは慮外千萬、え乘しづめずば此馬の餌食とするが合點かと睨み付れば、成程乘損じましたらば如何樣にも御存分に成べしと、木綿布子の裾端とつて腰に挾み、寄よと見えしがひらりと乘つて、雨鐙をしつかと踏へ、秘傳の手綱をもつて引しづむるに、さしも猛かりし馬よわ〳〵となつて自由になれば、侍大きに感じ、殿のお乘物にはしり付、御近習衆をもつて右の次第を申上れば、其者もし奉公や致す承れとの御意有難く、御乘物の前にかしこまつて早速御目見え仕り、假初ながら主從の御契約申上栗毛甚七

と召れ、すぐにお國へ召つれられ、だん〳〵御意に入て願ひのごとく五百石取となつて、年月たしなみし武藝の功今此時にあらはれぬ

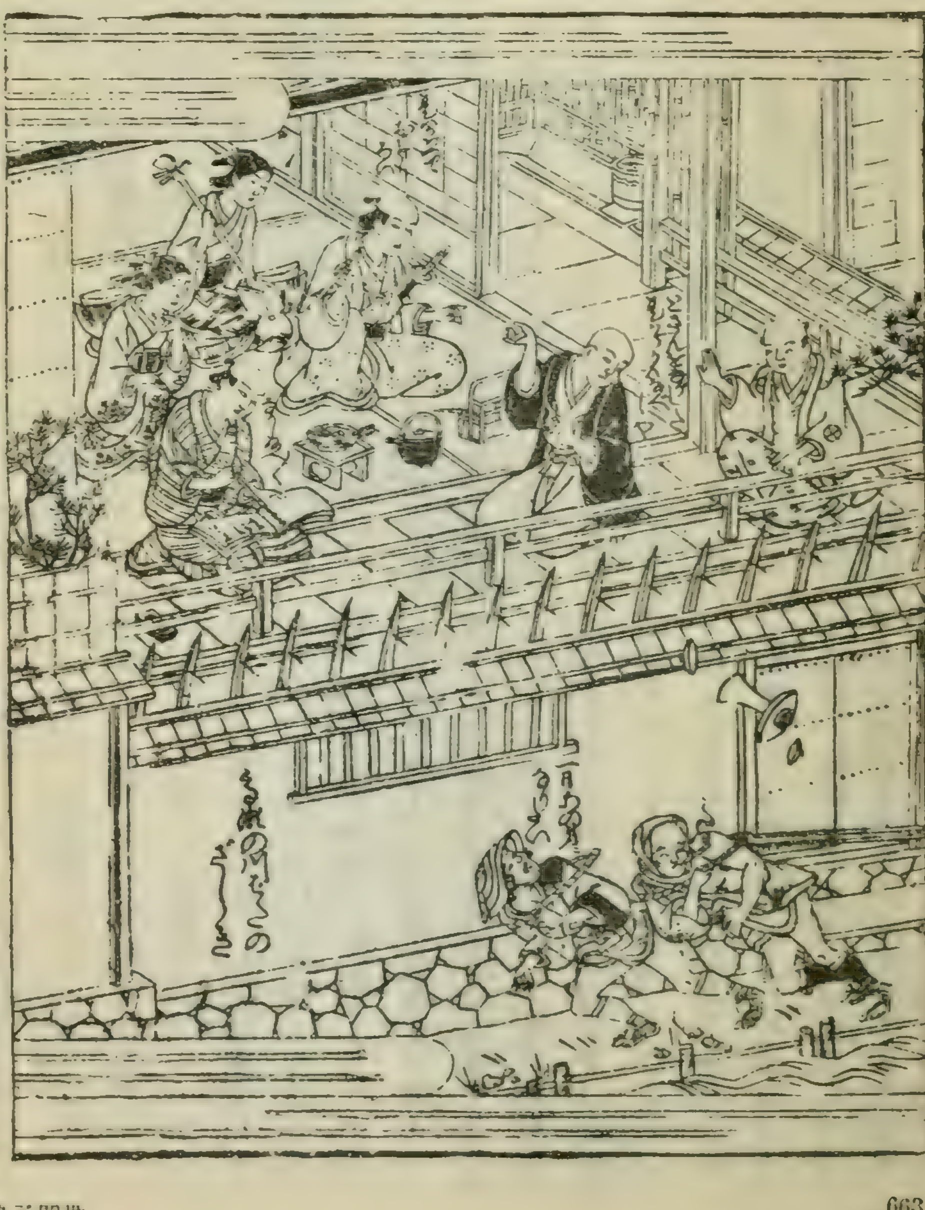
第三　取付世帯は表向を張てゐる太鞁形氣

世盛の金花、山吹色の眞劍商ひ、兩替店に紺の長暖簾さげたる家の主人、預け銀にて壹匁も損せず、肩のよい人と呼ばれ、次第に繁昌の軒をならべて隣を買たし、十年以前とは格別の暮し、加賀笠着て下女につぎ〳〵の袋もたせて、物參りせられし内儀は、おく樣と呼ばれて假初にも大乘物、兩脇に花やかなる腰元連れて、年がましき手代がつき萬事を花麗に、上かぶきなる最中に生れあはせし惣領の萬助が至り形氣、稚い時から辛目を見ず豐にそだちて、おのが家業の日廻し銀の算用さへ知らず、覺帳は上書する時に見たばかり、讀おふせても公家にはならぬ三十一文字に首をかたぶけ、韵字をふみて花をながめ、釜をにやして雪をたのしみ、裏借屋を毀つてかゝりをこしらへ、夕暮の鞠に魯陽が戈を羨み、楊弓の射場で大金貝の看板にのつたとて、一町へ强飯をくばり、旦暮の遊事の透には西東の色狂ひが仕事、今日は靈山の稽古能見物の歸りに、祇園町の文字方へ御立寄、例のお側さらずの太鞁共、お出と聞よりまねかざるに集まり來りてそゝり上げ奉る。中にも倚ぬかしの傳七といふ末社が、此比西川端に宿を持ちてはたご茶屋を仕る、あはれ見苦しくとも旦那おかへりにお腰をかけられ下されなば、外聞かた〳〵有難い仕合と、額を疊にすりつけて申せば、御機嫌のよい折にて幸ひ此座の色まじくらになりこむべしと、すぐに一座の者共を殘らずお供に召しつれられ、傳七方へ御來臨かたじけなき仕合と、亭主は槌で白人まじりに、さま〴〵の饗應、取つき世帯の借道具此椀折敷の見苦しさ、さらりと仕易へてくれまいかと、堪へ性なき旦那の御意、かしこまつて御側にひかへし飛上りの休古、分別なしにすわつたる吸物椀、前なる川へばつと流せば、面白の有樣やと、大臣浮かれさせ給ひ、とてもに折敷も流して見よ、氣がかはつて可笑かろと、むしやうなる御機嫌、是はよい事仕出したと仕澄し顔に休古は又折敷をも流さんとするを、亭主驚き勝手より走り出、こりや家主からたつた今借つて來た道具ぢやに、よい年をして何事ぢやと、

むつとしたる顔つき。大臣見玉ひ借物でも金でかへしたら否とはいふまい。今の流れた氣色の面白さ、何よりの馳走ぢや道具代は出さう程に、まそつと流して見せてくれよとの御意。何が扨道具代とてお金をつかはさるゝからは、此家なり共お望み次第におながし被成ませ。いづれもておふざおふになされて、道具の混亂せぬやうに景氣よう流しませうぞ、いか樣これは變つたお慰みと、物馴た透さぬ亭主なれば、半紙へしをり帳に綴ぢ硯引よせ、へぎめの折敷五枚代金壹兩、さあ帳に付いた流した流したと聲をかくれば、一座興をなして手に〱川へ投げこみ、罪も酬も知らぬ顔つき。亭主は道具に倍うつての直打書、此赤繪の皿十枚銀貳百拾五匁、かん鍋が五十九匁さし枕九つ三步貳朱、昨日もとめて未だ鰯一疋きらぬ柳まな板代八十六匁、杉箸百ぜん廿三匁、友治盃金貳兩、煙草盆煙管五本そへて壹兩壹步、米かし桶六十五匁、すりこ木壹本代八匁、杓子三本拾匁、女



房共が櫛箱おはぐろ道具一式合て五兩壹歩四匁五分、さあ是ぎりで家内の道具は、御眞向様の表具が殘つたばかり。帳の付次而に隣の取揚婆々の世帶道具も、一所にお流しなされまいかといへば、殘りの末社詞をそろへ、汝が日來旦那衆に貰ひための花を入おく、前巾着も出せと取つくを、是は許せといやがれば、扨はしこだめた壹歩が有ゆゑ出さぬか。壹歩ぐるみに代付して旦那から申請れば同じ道理、大鞁持の前巾著はよいお衆の土藏同然ぢや。それを流させねば可笑からずと、厭がる程面白がつてせがめば、傳七手を合せ、何をかくさう此内には女夫が物を預けおいた質の札が廿三枚、流すといふ縁が惡い。汝等が世話やかいでさへ、流れさうで氣味がわるいと大笑ひになつて、跡は亂酒のむしやう立、おかごに乘せまして直にお宿へおくらせ申、さあ仕合の時の間の道具代金銀合五拾三兩貳歩川ながれと亭主算盤はじいて見るに、貳朱と、大黑棚の悦びの鈴を鳴らす所



へ、料理人下男濡れたる道具をさし措にして、松原からかたげて歸るは、此趣向はじまると亭主其まゝ川下に人を出しおき、箸かたし迄溲さず上げさせ、振付の代金は此川に手も濡らさずの儲けと聞えぬ。されば人間一生のうちに、一たびは色狂ひに取亂さぬといふ事ひとりもなし。何卒面白き中程にて、神佛の御ひかへあつて此遊興をやめさせ玉へば、居宅も賣殘し商賣物も小躰にして、渡世に取つゞき、身をすてゝ働きければ、町内世間の人親類のすゑずゑ迄も、今迄は若氣と了簡してゆるしぬ。かならずさう善方へは歩まずして、大かたが貧乏神に腰をおされて、迚もつゞかぬ身代今から通ひ止んだとて、遣ひすてた金銀が戻る物ではなし、僅かに知れたる此世界つまる所は腹切仕舞と覺悟きはめて、通ひ〳〵て行當つた所では必ず死なぬものぞかし。萬助親父が表向きびしういうても、內證の甘い所の高を見すかし、僅か貳參千兩などつかうたとて、耳やかましう異見〳〵が聞とむない。ちと方便の狂言して、重て異見せられぬやうに、こらしめのため親父にちつと鹽を踏ませうと、箔置の木刀こしらへ、御の仁兵衛が婆々の血脈をかりて來て、白小袖二つに百八の珠數一れん、はさみ箱に一つに入蓋をして封をつけ、腰元のくめに袖の下から黃なる物を握らせ、我身の上の狂言の仕組を吹込み、女共の髮ゆふ二階につくね食を上げさせ置、四五日は一寸外へ出ずして、朝食晝食夜食、時々に据ゆる膳に向うて、苦い顏して一口もくはず、先いやぢやとさしおきて二階へ上つて、件のつくね食をしたゝかせしめ、腹の城郭たしかにして置、すわる膳は佛樣か白人にすゑたやうに其儘さしおき、物案じ姿にて折ふしはあくびをし、をかしき事があつても隨分こたへて笑はねば、母人は目をつけてお物師のぬひ、腰元のくめを招き、萬助が此比の躰は合點がゆかぬ、どこも惡いとは云はぬかと、氣の毒さうに問はるれば、お物師腰元口をそろへ、お心わるいとは仰られませぬが、朝御膳夕御膳、お夜食ともにみぢんもあがらず、人の見ぬ所では淚をこぼしてござります、と云はせも果てず、それを今迄こちらが耳へ入てくれぬは胴慾ぢや、正眞の世界に子といふものは繪にかゝうというても、あの萬助より外にはない。旦那殿の朝から晩迄世話やかしやるも、有るうへにも金を殖やして、あの子にやりたい〳〵と思うてのお世話ぢやに、いつからやら少々

金をつかふ故、がみ〳〵と云はるゝも、あれが物が減らうかと、皆萬助をかはいさのまゝ仰しやる事ぢや。まづ何にもせよ、それほどふ食しては身がたまるまい、あの子が好物の料理をして、まづ食をおましてたもと、母人の心づかひ。是を何共思はぬ悴子は、立所に罰もあたり冥加にもつきさうな物ぞかし。腰元のくめ萬助と仕組なれば、とても生てゐぬ身ぢやもの、何ゆゑに食くはうと獨言をおつしやりましたれば、何してあげましたとあがりはなされますまい。から申たら萬助樣の、口がまめなとお叱りなされうも知らね共、おぬしのお部屋に挾箱に封つけて、大事さうに取まはしておかせられますは、私は胡散に存じますと口びらそらして申せば、それは心もとないと萬助部屋にゆきて、件の挾箱の封切つて見給へば、死ごしらへの一式なれば母親驚き、此比は心中がはやつて荒神川原で米屋のむす子とやらも死ぬる、唐崎濱にはびやうぶやの娘、鳥部山祇園林、あなたこなたに名を流して、死んだ者が多ければ、是もてつきりそれであらうと、親父の耳へいれらるれば、子がゆすりといふ仕掛をしらぬ、時代ちがひの親父驚かれ、外聞かた〴〵家の破滅、悴子がすいた女房なら、卑しい者の娘であらうが、命にはかへられぬ、今なり共呼びむかへて取らすべしと、おも手代にいひ渡し、萬助に樣子をたづねらるゝに、太夫花崎身請してそひたいとの願。世にない習ひではなし、隨分直切つて請けてやれと、千兩の小判耳をそろへてさいたり〳〵、むす子が心中の狂言

世間子息氣質巻之一終

世間子息氣質巻之二

目録

開帳もしらぬが仏有難ひ出家形気

いかほど仏の罰も思ひもせず京の酒屋

[illegible]をしらぬ山寺おわりくれよみがるき

一生女嫌ひ人[illegible]子を捨て紙宿乃綿が物

大力も見えぬ瘢身代をなげき相撲取形気

相撲奉大[illegible]食[illegible]て[illegible]をも[illegible]迎[illegible]まもる銀借屋

大関と名[illegible]て角力[illegible]稼するる力自慢

世[illegible]止その[illegible]好[illegible]一[illegible]よ[illegible]つめて身代

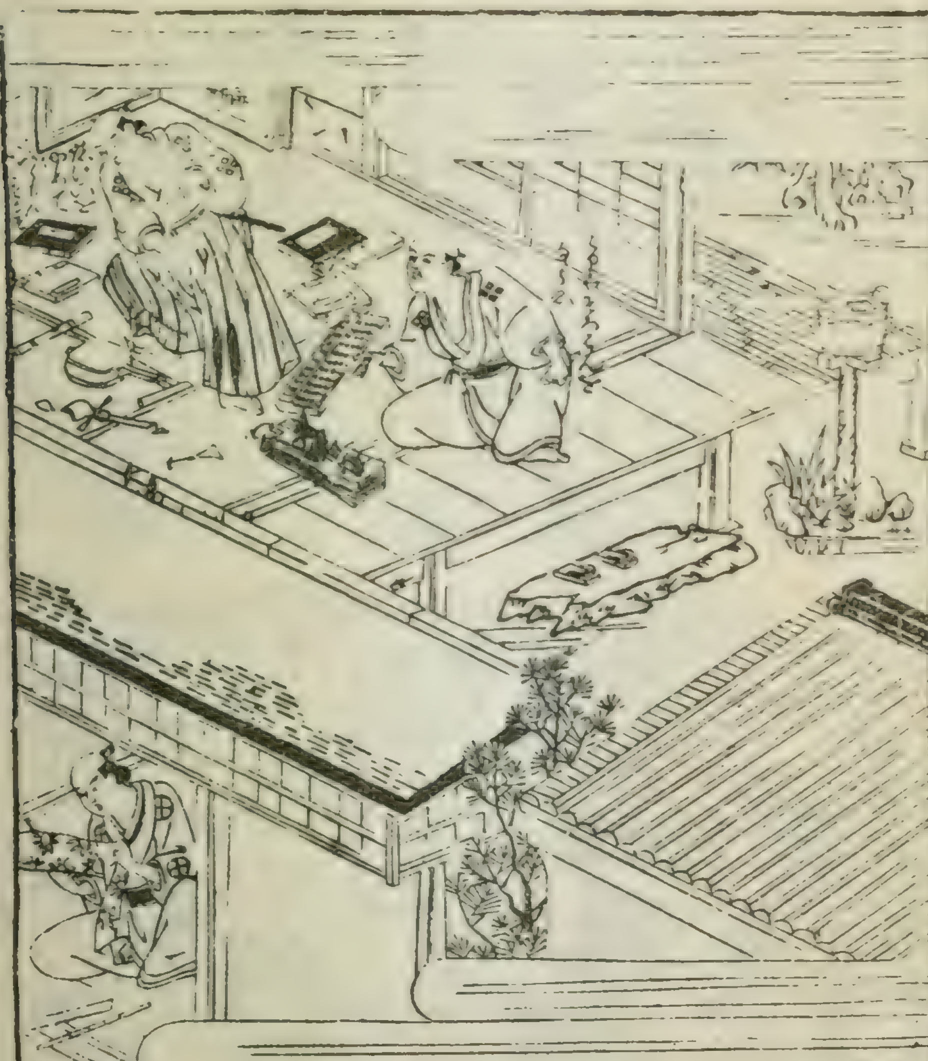
第一　異見はきかぬ藥心をなほさぬ醫者形氣

倩世間を見るに親より其子萬事におとり、其孫おろかに、親にまされるは稀なり。第一今の人間往古とは氣根劣りて、諸事の藝者も極意まで習ひ得る事難し。醫學も一年にたらずして、俄剃の頭をふり、武士の具足と思ひこしらへたる淺黄縮緬の長羽織に、小脇指藥箱、丁寧にこしらへ、我を見しらぬ他國の大場に住居して、名字を仰山なる張札門柱にあらはし、化粧づくりの玄關構へ、押出しての療治するなど、人の命は大切なるものなるに、此生死の境二つ一つの大事、藥師人を殺すとは是なるべし。又茶の湯は和朝の風俗人の交り、心の花奢になるのひとつなり。是に入ての德は、常住萬事に氣のつく所格別なり。今の町人茶事は榮耀と心得、諸道具に金銀をつひやし、數寄屋長露路に商ひ繁昌の地をせばめ、美食を好み、衣服をあらため、萬に淸らを盡し、此奢に家を失ふ人、かしこき都にも數多なり。さはいへど此事わきまへなきは、人間ふつゝかにして口をしき事のみ。或は欠茶碗にしても其心ざし一つなり。元これ作意なれば、一通り手をひかれ其上の道理さへつまらば、何事にても苦しからず世のたのしみなるに、皆人心つくせし振舞にあひながら、其座を立てば花の生やう炭の形をそしりぬ。是を習ひ得て茶入の名を付て見る程には、おつ取て十年の稽古なくては成がたし。すべて連誹立花ひとり狂言、かやうの類は銘々の自慢、差當つて善惡の沙汰もならざる事ぞかし。手跡鞠音曲などは、忽ちに知れて人に目あり耳あり。殊更世間に有德仁と、もてはやさるゝ程の子息の惡筆なるは、內證にどんな藝があらうが、見おとさるれば、人たるべきものの嗜むべきは、第一は筆道修行の後、學文の外なしと物知れる人のいへるを、子息殿聞て歸られ、今迄百色も習ひかかりし藝能をさらりと止て、俄に書物とゝのへ、牢人儒者の許へ通ひ、四書の素讀大方にすむと、我等儒學仕ると、はや鼻の先へあらはし、人を非に見て我智をふるまひ、おやぢ朝暮の看經を聞て、何をたはけをつくさるゝ。極樂の地獄のといふ事、今日口を食うための賣僧のいへる虛言といひやぶり、佛法を異端と貶め、今迄の形氣と變り、無性に子細らしうなつて、出入の者が銀借りに來て、是は若旦那には此お日

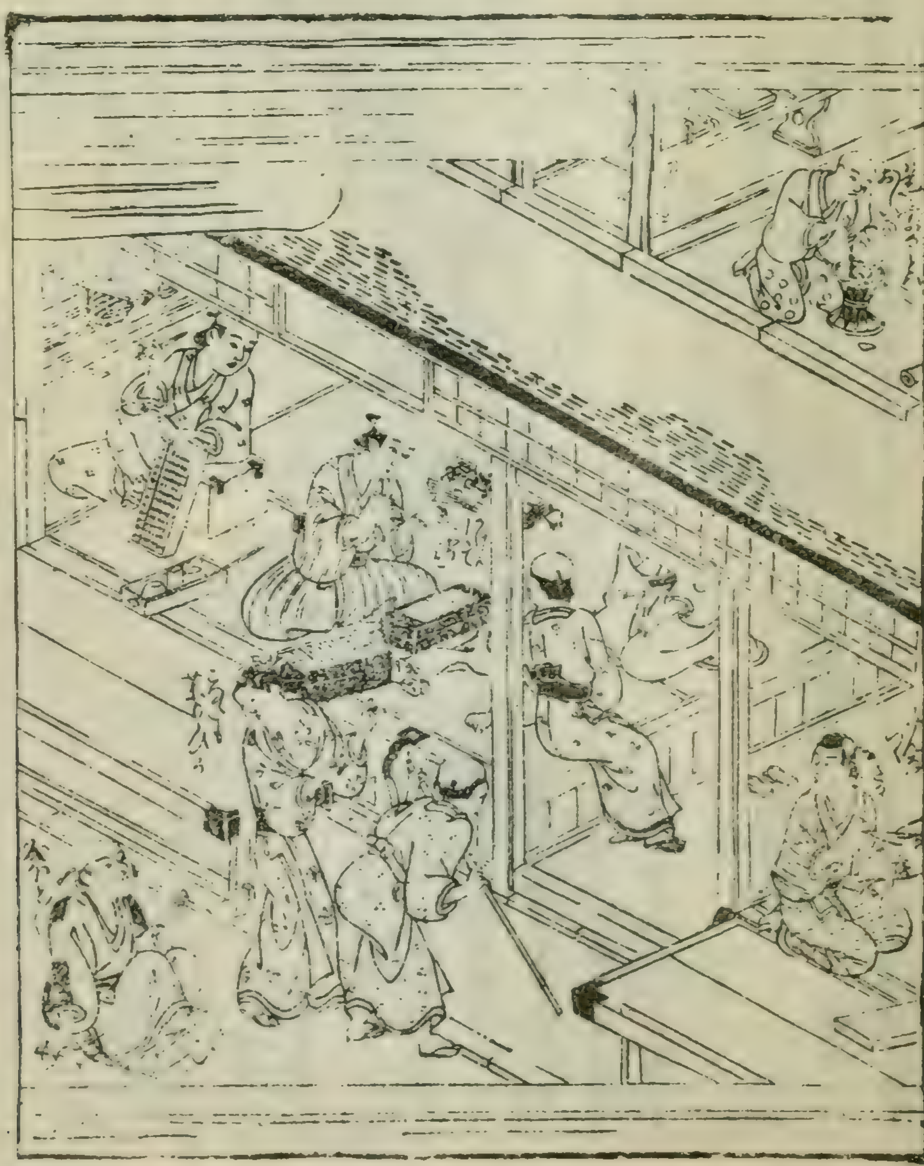
和のよいに、どれへもお慰みにお出はなされませぬぞ。内かたに斗ござりましては、お氣がつまりませう。さりながらお前の事は、近所の御子息方の身持の手本と、陰で人毎にいかうほめます事でござりますと追從をいへば、其返答はせずして唐扇をしやにかまへ、巧言令色鮮矣仁 といううて、其方がやうに輕薄を本とする者は、我本心の德を失ふ、表裏者とは汝が事ぢや。手代共が見習へば惡い、重て出入無用といひて、をかしげなる顔をすれば、數年入來る者もそいよりなくて、盆正月の禮にさへ來にくがり、賑かに有し家めつきりと淋しうなりて、手代共氣の毒がり、若旦那の學問は此家の破滅の基ぢや。何やら五倫の道だていうて、壹分も商ひの助けになる事はせいで、子曰 仰せらるゝ手間で、ちと十露盤を稽古なされたら、お家のお爲にならうと親旦那の耳に入れば、親父尤とうなづきむす子をよびつけ、汝學問だてをして、商賣の道を脇にするは大きなる誤り。其上儒道を學ぶ者が、夕部も茶屋へ行て夜半八つに歸り、おのれが酒きげんにまかせ、湯の水のと寢てゐる家來共を起し、たはけをつくすが儒者の敎か、論語讀みの論語知らずめ。重て書物を止にして、帳合を大事にかけよと、額に皺をよせて叱らるゝ詞の下から、むす子はまた物知顔をやめず、父爲レ子隱子爲レ父隱直在ニ其中一といふは孔子の語なり。父の罪をば子として隱し、子の罪をば父として隱すは、親子自然の道理にして、人の心の至極せる所なり。道理に從ふを直とす。然るに今手代大勢聞く前にして、茶屋狂ひする子の罪をあらはし玉ふは道理にそむけり。いかんぞ直とせんやと言へば、親父苦々しい顔にて、猪口か皿か知らぬが其ちんぷんかんぷんが家業の妨ぢや。假名で十露盤稽古めされよと、敎訓を致されぬ。ある時讀書の師匠件のむす子に向ひ、伊川先生の語に、貴賤ともに生を請たる程の人は、醫道を知らではかなはざる事とあり。其子細は我親又は子共などの病わづらはん時其身其道理にくらくして、藥師の善惡をも見しらず、無學の醫者に打まかせ、療治させんは、誠に比類なき不孝ふ慈なりと、いひきかされしを聞て歸るや否や、俄に結構なる藥箱をこしらへ、さまざまの藥種を調へ、療治の手習に家内の丁稚久三郎、下女のたまなどを反故として、いたうもない腹を擦りて、無性に藥もる事を月花にかへて面白がれば、藥代の出ぬを悦び、お名人とそ

やしたて丶借屋の亭主、出入の婆嗅療治を頼みに來れば、おきかけた十露盤すて丶脈をとり、仕懸た商ひさしおいて薬を合し、家業を外になし、療治にのみ心をつくせば、商ひ見世へ夜明から物買に來る人かと、手代手水もつかはず立出て何が入ますといへば、昨日のお薬をたべさせますと、えづきが出まして足がひえて、小便が通じませいで難儀仕ります。どうぞあの世へ參られませぬやうに、加減をなされて下さりませというて來れば、又そこへ横町の駕籠の七兵衛が女房が來て、夕部のお薬から腹がしきりに下り出しまして、大熱がさしまして、狭い所を夜中くるくるまはつて、昨日の旦那殿はよいお人で、奴茶屋で酒のめとて、両人へ廿づ丶増を下されたと、譫言申されましたが、夜明がたからがつくりと成て、

もはや寝がへりも得いたされませぬ。あれ程にはかに弱られませうとは存じませなんだ、どうぞ元のやうになされて下さりませというて、見世先に腰を



かけて待つてゐる所へ、かし屋の嚊が涙片手に、いかに借屋風情の子ぢやとて胴慾な、一服で物もいはずに、目を白黑してゐるやうに、あたる藥をのまさしやるものか。貧乏人の子は殺しても大事ないか。なんぼ大屋殿でもあの子が死ぬれば通しはしませぬ、相手でござると涙と共に喚けば、手代氣の毒がり、只今は若旦那寢てござる。起られたら樣子をいうて、主の手に及ばずは、名人の小兒醫者を此方からかけてよいやうに致さう、先いなしやれと賺すれば、人の大事の子を殺しかけておいて、朝寢してゐらるゝ場か、起しまして下され。賴みもせぬ藥を無理に盛つて、慰みに殺して見るといふやうな、世界にむごい事はござるまいと、隣あたりへ聞える程高聲あげて泣きさけべば、親旦那耳に入、これは大かたならぬたはけを盡しをる事と、近所の手前を思うて、寢所からすぐに勘當〱



第二　內證はしらぬが佛有難い出家形氣

むかしは少年より見立て發明なるを出家になすが故に、名僧も出來て衆生を利益有しが、今時は智惠才覺にはかまはず、武士の家にては弓馬の藝に疎く、又は病者にして公儀勤り難きを勸めて衣をきせ、町人は算用おろかに秤目おぼえず日記付さへならざるを、迚も商人には思ひもよらず、世を樂に墨染になれと、親類了簡の上にて髮をおろさせ、法師となせる事なれば、衆生を勸める事はおいて、其身の取置さへ覺束なし。沙門となれる見せしめには衣着して、表向精進つとむる分ぞかし。爰に若い時ぶ仕合打つゞき、生國大津を分散し、身代しまうて都に上り、やうやう鍋一つにて釜の座に小家を借り、門はしるしの杉をなびかし、わづかなる酒商賣をせしに、正直をもつて世を渡る事、ゆく水に數かく通帳も集ひ來て、十年あまりによい身とはなりぬ。仕合に從ひ味ひ外より勝れ、猩々もちろり下げて來、劉伯倫も得意と成、次第に笹の葉しげりて、竹の林にあらねど、七間口の家をもとめ、京の住人となつて銀借中間の座につらなり、二條より下にて福人の名をとれり。成人の男子二人あれ共、未だいづれを跡目とも定めず、黑き筋なき頭をふつて、親父世間を勤めしが、ある時女房に近づきいへるは、我若き時大津にて身上しもつれ、妻子を引つれ爰に來て、僅なる酒を商ひしに、先妻果報なくて乏しき渡世の中に相果、惣領重四郎をねり粉地黃煎にて育てゐる時、合借屋の內儀が、其方を肝煎りくられて夫婦になつて、次男重五郎をまうけ、兄弟共にわけ隔てなくいつくしみ身を捨てゝ共に挊でくれられし故、今此富貴の身とはなりぬ。さあれば是からは其方と一所に法躰し、未來迄も一つ蓮と後の世を願ふが女夫の本道なれ共、添はれぬ子細あれば、其方には只今隙をやつたれば、ふしようながら此家を去て、尼法師に成ともなつて、後世をねがひなり共、又は相應の年寄男成共持て、暇の世をたてなり共心次第にし玉へ。印には是を參らすと、小判千兩ならべたて、此外衣類諸道具何にても欲しき物は、心まかせに取て行かれよと、思ひもよらぬ一言女房輿をさまし、廿餘年の艱難を經て老のいりまい時分に、俄に隙をくれうとは、目にあまる見落し無くてはいはれぬ筈、家富榮え榮耀

のあまりに、妾あしかけ置かる丶とて、悋氣する氣でもなし、とかくは暇を下さる丶樣子を言うてきかされよと、泪を流して恨ければ、親仁聞て今いとまをやらうといふは、世間の人に其方を惡ういはせまい爲、そちを思うての離縁なれば、構へて我を恨み給ふな、樣子をいうて聞かすべし。惣じて世間の大法なれば、家の跡目は惣領に繼すが極たる事なれ共、身共が家督は次男重五郎にゆづり、惣領重四郎は出家させて、一代樂にくらす程金銀をつけて、寺役のない寺の後住につかはさんと、分別を固めしが、さうした時には惣領は先腹ゆゑ、繼すべき親の跡を繼せず、今の嚊に目がくれ弟に家を繼せたと、世間に評判あつては、其方は繼母の惡名をとり、我等はまんざら妻子に迷ふ鼻毛といはれ、人に後指をさ丶れん所が氣の毒さに、離別さへすれば夫婦の代繼にならぬものであらうと、何の讃



者に難がなく、惣領が器量なきゆゑ、もつかずにすむ。其方の目にもかゝつ

てあらうが、なさぬ中のゑ遠慮していはれぬと見えたり。兄重四郎は町人の家業なる、天秤の懸引帳面見るものにてなし。盆正月になればとて、世間の若い者のやうに悦ぶ氣色も見えず、頭は髮結次第にして衣裝も好まず、人が誘へど芝居へも行かず、不斷持佛堂の香をもりかへ、夏花を摘み身をくらふ蚤さへ殺さず、あさましき者が酒買に來れば、錢とらずに量つてとらし、假にも嘘つかず酒のまず、葬禮の通るを見て、世は皆あれぢや物と無常を觀じて、常に物も高うはいはぬ生れつき、歷歷の寺から干鱈もつて、禮にござる程の出家に落ついたる形氣。弟は是に變つて渡世の事に精を出し、大勢人を使へど旦那顏せず、朝から晩迄胸前垂をかけて、とうち並に働き、帳日記に心を付て、商賣人に生れついたる器量者。是に此家督を渡せば、明日目をふさぎても跡の事に氣遣ひなし。さるによつて惣領重四郎は幸ひ北山の近里に、永代寺領のつきし所あれば、敷金もたせて後住にやる約束して、近日旦那寺の和尚の御剃刀を頂かせ、新米坊主にする筈なれば、此相伴をしてこなたも尼に成共なりめされて、重四郎坊が寺に行き、世話なり共やいてたべと、所存の通を話さるれば、女房納得して廿餘年そうたる亭主に離れて、河内の道明寺へ行き、尼になつて後の世をねがひぬ。かくて重四郎には此旨を言ひ聞かせ、俄に頭こそげさせて、約束の寺へ後住にありつけ、九族生天と親一門、悦びの入院振舞事濟めば、其身も日比より願ひのまゝの道に入しと、心まめに朝水手向お經讀み習ひ、心に何の欲もなく世間に十露盤はぢきて、金銀の取遣する物前にも、木ばさみ持てゆたかに、庭なる白槙龍に作つて、天にも到りし心になつて、不憫や下界の人間共書出し時分に氣骨ををり、夜もろくに寢ぬ事よと、今此身をば滿足せり。されば光陰流水のごとく、花散る梢に蟬なきて、萩の枯枝は雪にうづもれ、年々速かに暮て重四郎法師になりて、六年たつての春、跡とりの弟重五郎に手代の加兵衛つきそひ、此寺に來つて重四郎入道に對面し、扨も重五郎樣已前のお志とかはり、商賣の事をお構ひなく、御宿には尻がすわらず野郎狂ひに晝夜出歩行給へば、親旦那目がねが違うたと、以ての外の御腹立にて、御勘當なさるゝ所を、我々やう／＼宥め申、御機嫌のなほる迄先此御寺にさし置、御町衆を頼まし、お詫言を申て、首尾よく御家へ歸しませんと、手代共

相談いたし是迄お供は仕つて參たり。御世話ながら暫く御寺に置かせられて、其内もよく御異見をなされて下さりませといへば、法師聞て近比ふ孝の至り、向後心をあらため隨分家業を大事にかけて、無益の金銀を費さぬ樣に致されよと、眞なる教訓、さすが御出家と申兄御樣ほどありと手代も感じ、其夜は加兵衛も逗留して、夜と共に異見を加へ、夜更けぬれば一間に入て休みぬ。重五郎は親父が怖い顔を思ひ出せば目もあはず、寢られぬまゝにこそ〳〵と出て見れば、客殿に大勢の人聲する。何事かと引手のぬけし襖の穴より覗いて見るに、大蠟燭をかゞやかし、近邊の百姓又は血氣の道心者、車座になほつて壹歩小判をまきちらし、重四郎入道諸肌ぬいでどうを取り、かるたを戴き南無釋迦牟尼佛、娘の子でも苦しうない、まあ一番見事な事を賴み奉ると、興のさめたる躰たらく、是さへ肝がつぶれしに、蛸蒲鉾を手して摑み、茶椀酒を引かけ、此うまさが下田村の彌八が女房に百倍と、舌打する所へ外門あらけなくたゝき、小枝村の五郎作母長病なりしが、今宵相果申されしに、思ひまうけし死人なれば、夜の中に野邊へ送り申度との使なり。重四入道聞て頭をかき、邪魔な時に業人めが、今夜でなければ死ぬる夜さはないか。野布施の壹歩や貳歩にはかへられぬ、和尚は晝から京へ出られて留主ぢやというて、西念坊其方行て、よいかげんに經讀んで來てくれいとあれば、私は宵から大分負てをります。如齋坊をやらしやりませといへば、納所坊腹を立、そなたがいかぬ癖に、人までの差圖をしやる。愚僧はお身達のやうに手味噌はつけず、正味の負が夥しい、こなた行きやれと睨めつくれば、佛は見どほしぢや。手味噌といふものは佛祖かけてせぬ坊主ぢやと、ふ仕合の兩僧負腹たてゝいさかふを、和尚しづめて、內に居ながら見す〳〵留守つかうて、旦方に下ぬきもくはされまい。ちよつと燒香して歸らうと袈裟衣を引かけ、それ乘物よと三枚坊主、七二小僧等をつれて乘り走らかしてゆかれぬ。重五郎此躰を見て、是に合せて我等が科は淺い事。兄坊と罪の輕重をはかつて見ば、亭坊地獄へおちらるゝなら、我等は揚り屋にゐる程の違ひと、身を顧みて親父の勘當を恨ぬ。其夜あくれば手代加兵衛は早朝より重五郎を起し、亭坊の前へ出て申は、若旦那を此所へつれまして參りしは、しばらくも御寺にござらば、殊勝なるおまへの御行儀に恥

させられ、おのづとお心も改まり、むかしの正道なる御形氣にもならせらるるやうに、御異見をも致して貰ひませう爲　お供して參りしが、夜前の行作のおまへに預けて歸るは、ひとへに上戸に封せぬ樽をあづけ、歌祭文の上手な美男な手代に、若い内儀の供させて、松茸狩に山へやるやうな物で、惡性な若い旦那を片時もおかるゝ寺でなしと、重五郎を伴ひ立歸つて、親旦那に兄重四郎入道の身持の樣子をつぶさに語り、法師樣の御行儀にあはせては、重五郎樣は聖人でござります。一年に五百兩など御つかひなされた分では、御身代のいたみとも成ますまい、たゞ我々にお任せなさるべしと、手代中詞をそろへ申ければ、しからば隨分五百兩の上を遣はせぬ樣に致せと、思ひもよらぬゆるしを請、心のまゝに遊びしが、元來重五郎女ぎらひにして、一生婦妻をもたず器量よき前髮達を置きならべて、愛する事甚だし。其後親父果てられてより、おも屋を手代に渡し、一年に千兩づゝのあてがひを取て、知恩院門前の下屋敷に引こみ、目にいりし歌舞妓子を請出して、たはぶれの餘り相手になつて狂言し、又は淨るりの會に日を暮し、思ふまゝ成榮花の春、たのしみつきぬ男世帶、律僧衆さへ女をすく浮世に扱

第三　大力は身の疵身躰投た相撲取形氣

中京に棟高く大名借の惣大將と呼ばれ、利、日々に繁昌して世の人の用ひ強く、二業講の正座を張つて、銀借中間の口六十餘州の名物の土産は、お出入申御大名より拜領し、御紋付の時服は江戸鑑を衣桁にうつし、和漢の書畫何百軸といふ事を知らず。曜變建盞井戸三島、粉引熊川などの茶碗は繩からげにして、幾箱の内と書付し、名物の茶器は長持に押こみ、古金襴の夜着蒲團印金の褥、印子の狸百疋、珊瑚樹の棒百本、白銀の天目百盃、玳瑁の箸百膳、金銀米錢はいふにや及ぶ、ひろき都に肩をならぶる人もなく、男子三人榮耀に育てあげられて、いづれも智恵の足らずぬは金銀でをしへてゆくを、其苗の大いなるを知らぬ親の眼からは、利發な子共と心うれしく、追付隱居して老後のたのしみを極めんと思はれしに、惣領孫太郎いつの比よりか嶋原に通ひ初、晝夜をわかず三枚肩にて脇目もふらず、一文字屋の唐土船に乘て來て、沖をこいだる大騷ぎ、しかも其身器量よく不

斷のたしなみ、當世衣裳に名の木をとめ、花奢事をもつばらにして女のすける風俗、太夫が方から賃かいてなりとも逢ひたがる美男に、ゐんつう自由の身なれば、いづれか女郎になづまぬはなくて、戀のきく最中なれば、こんな面白い事天竺にも有まいと、算用なしに遣ひすつれば、親父驚きおも手代を以て、さまぐ\異見せらるゝに、惣領殿女郎にもまれてより口賢うなられ、富で足事を知らぬとは親父の事なり。京で一二番限の銀持といはるゝ身をして、まだ此上にも欲を構へ、朝は星を頂きて、お屋敷方の留守居衆へ下袴にてつとめ、大分の金銀を御取替申て、濟迄の中の心づかひに命をけづり、又は高利に目がくれて、家書入ての證文の通には、わたりかねたる世のならひ、反故一枚ひねくり廻しても金にはならず、あかの他人に多くの金銀を、苦勞してねられうよりは、現在の子ぢや程に、せめて面白い程つかはしてくれたがよい筈、親の慈悲といふはこんな所をいうた物ぢや。今迄手形箱にある、いかずの古證文の金銀の高ほど、まだ己は遣はぬぞやと、異見を聞いれる段へはゆかず、却て思ふ程につかはしてくれぬとのふ足いうて、中々とまる氣色なければ、親父詮方なさに一門と相談して、遂に内證勘當して、三井寺の伯父坊方へ押こめおきしに、燃え杭に火はつき易く、近ければ柴屋町へ入浸りて、湖の首だけおよぎぬ。惣領かゝる身持なれば、親父名代にお屋敷方の勤を、次男孫次郎にさすべしと、呼びつけて其旨を言わたさるゝ。此孫次郎は兄が美男に似もやらず、色黒く背高く、手足の筋節くれだち、ちひさい時から力自慢して、軟取手扨は相撲取事を好みて、勸進相撲はいふに及ばず、近在の祭に在郷の力強に出あひ、一度もふ覺をとらぬとの自慢。下帶に綾絹をして朝夕のいか物喰、兩の腕は反故染を見る如くごとくいろく\の入ぼくろして、額は眉間尺の如く拔きあげ、久三小者を取つて投げ、近國に隠れなき荒浪孫次と名のつて、下屋敷の鞠場の柳を拔き土俵を並べて、かりそめの遊にも相撲取共を招き、是より外に人間の遊興はなきと、四十八手の外を工夫し、大名の金は濟まうが濟まいが、相撲にさへ勝ばよいと、外の事にはみぢん目をもかけざれば、親父額に皺をよせ、惣じて人のもてあそびには、琴碁書畫の外に茶の湯鞠楊弓、謡などこそ汝等が慰ともいふべきに、なんぞや裸身となり五躰あぶなき勝負を面白が

る事、大名借する歷々の町人の忰子が所作といふべきや。自今是を止て相應の遊びをいたせと、いろ〳〵異見せらるれ共、たゞ世の中に相撲とるより外に、何か遊興なしと中々やむる氣色なければ、父母一門談合して、とかくは縁組をとりいそぎ、艶なる妻をもたせなば、おのづから心ざしも直るべしと、中立賣の呉服所の息女をもらひ、祝言めでたく事濟で後、一度も部屋に入事なく、父母氣の毒の頭をなでゝ、嫁につき來る乳母を以て此事をいはせければ、孫次郎氣色をかへ、女と枕をかはしては、男盛に力がおちて相撲がとられぬ。愛宕白山身が燃て女は厭といひ切て、あたら花娌を生ながら後家にして淋しがらせ、我ひとり寢間の戸の明暮、相撲より外に樂みなしと、いやましに肉食を好み、筋骨逞しくなりて、廿三の時三十四五ばかりに見えて、前の形はなかりき。かゝる身持にては御大名方への勤はさせられまじと、次男も舊里切て追出し、三男孫三郎に名代



をさすべしと、手代共と內談きはめ、此男を跡目にしたてゝ見るに、兄々の如く惡所へもゆかず、力業もせざりしが、幼少より今に人形まはしが好にして、八疊敷の我部屋にあやつり芝居の如く手摺をかけて、金襴の幕を張り、平次が作の人形數多調へて、金入染込さまぐ\の衣裳を着せ、町の髮結に淨瑠璃語らせ、常來る瞽女に三味線ひかせ、出入の肴屋靑物屋豆腐屋の丁稚共を呼び集め、童のごとく親の役にもたちさうな時分、さりとては罰當り太鞁敲立て、始りぐ\と朝から晩まで人形使うて躍跳ね、いつが盆やら正月やら、現の如く此慰に氣を奪れ、夜も蠟燭點したて、しぐみになぞらへ代り淨瑠璃の人形稽古、さる程に世の中とてさまぐ\のたはけ有。いとしや親父はれきぐ\の男子三人持ながら、跡目にたつべき者もなくて、一家の中より養子をし、三人共に見かぎつて近所へも寄せられねば、惣領の孫太郎は常なる世を渡りかね、宮川町に間短商ひして、親



父こそつれなく共、せめて手代共は馴染がひに、此方客になつて御出を待と、主が家來にこれ旦那と太皷口をたゝきて、逆なる暮し、正眞の冠を沓に白人のしまひ物を女房に持、世にありし昔を思ひ出して、今の噂に唐土が道中の風ををしへ、傾城事してたのしめり。さし次の弟孫次郎は、數度の異見に相撲をやめず、遂には親に小膀を取られ、土俵よりまづ內をつき出され、いかなる手取も親にはかたれぬといふ事を知て、詫言しても門口に大關すわつて寄せつけられねば、日比自慢の力もおちて、便るべき方もなく身の廻りを賣喰にして、今といふ今本の丸裸になつて、まだも昔のゆかりとて、ちぎれたれども緞子の下帶一すぢに、相撲を好た奇特とて、此身に成し因果のめぐり車づかひに雇はれて、下鳥羽に住みはてぬ。三男孫三郎は榮花のあまり我儘に使うて遊びし人形なれば、操り芝居の間に合す、かゝへて無ければ內證のからくりの糸きれて、やう〳〵に見世物の木戸番にやとはれ、しわがれ聲を出し、さあ錢はもどりぢや、評判の三男孫三郎といふたはけものは是ぢや〳〵

世間子息氣質卷之二終

世間子息氣質巻之三

目録

世間持人は鼻毛をよむ囲碁の奇人形筆

宵をはや学気の男ものやつしかかむかつゝ 家

親孝道知ての彰ではよき息子の蔵立諸

帳面をみてびよよむ嘘の一声を知る奇丸友達

正直な親父と一番よき上戸形氣

小判ならずとも淀過ぬ人の錢なきぞ錢屋

芝居の沼に浮沈み通ひ百疋丸を以て素人新役者

智恵があまりて一盃の手はれし親父乃手盛

勘略な世帯薬とて過し始末形氣

商人の仲で人を手にせし男一疋乃絹屋

欲に氣を尽くかきし集めし手習反古

銀相場で一生稼山嶋の有財餓鬼

第一　世間の人に鼻毛をよまるゝ歌人の形氣

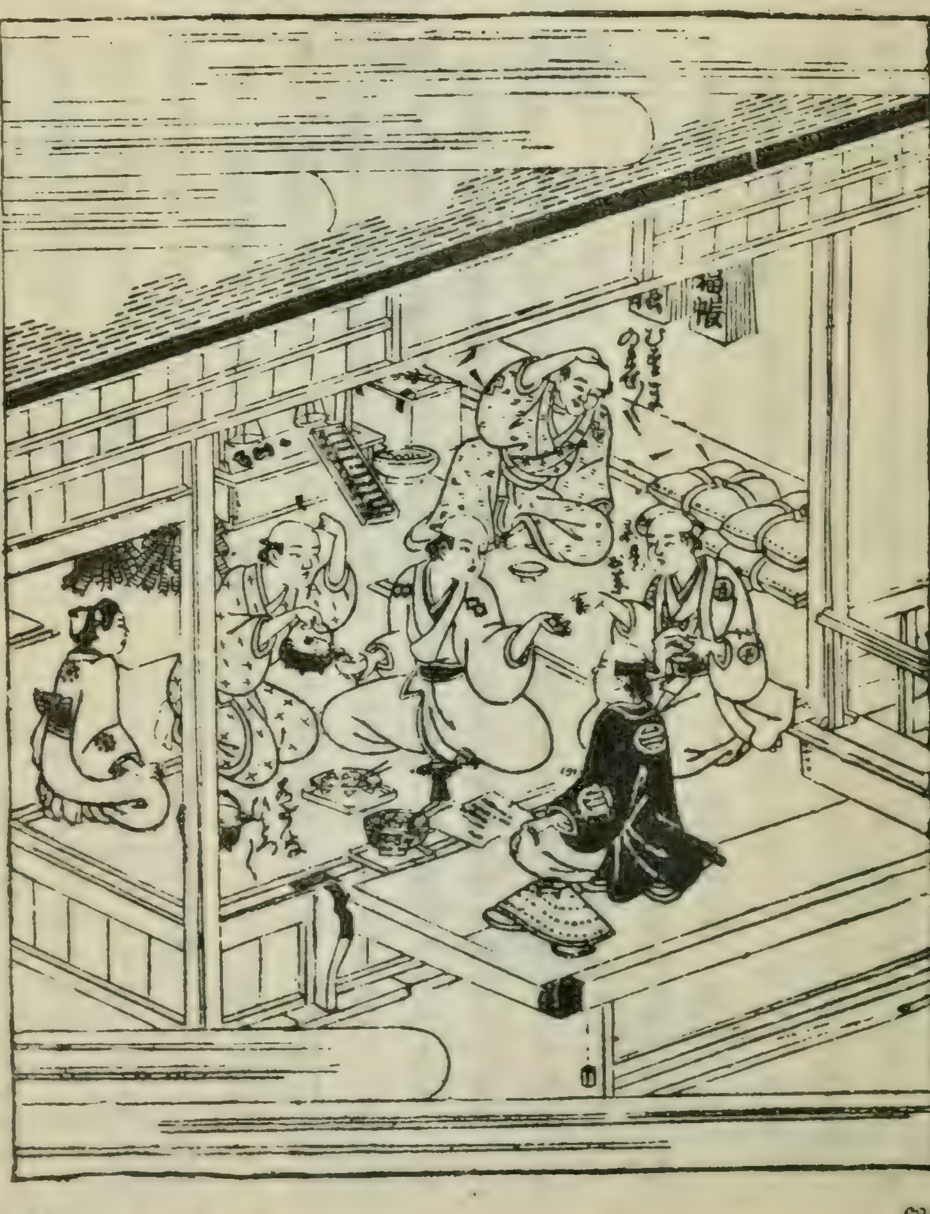
武藏野の廣き心の商人、晝夜家業に油斷なく、我と我心に鞭打て傳馬町に綿棚を出してより、暫時もたゞ居せず命かぎりに拵ければ、天理にかなひ、次第に分限になりて、助太郎といへる子を持ける。ひとりも獨りからと利發にして、親の氣を助け諸人の讃られ者、親の身にしては一しほ嬉しかりき。十八の暮に元服して器量隣町にならぶ者なく、發明にて身躰よし。何に不足なければ、聞傳に諸方から花聟にほし月夜、鎌倉河岸の材木屋の美なる娘と縁あつて、婚姻首尾よく相すみ、此上に思ひ殘せし事もなく、表屋の裏に座敷造りて、親父是に引込、萬の鎰を助太郎にわたし、商賣は數年勤し律義なるおも手代二人に後見させければ、此身代鬼に金持せ根强い事かくれなし。此むす子性よしにて、三野狂ひの事はおいて隱し色女のある所さへしらず、渡世を大事にかけ費なる銀をつかはず、二親の悦び若き子共の手本となれり。他へ出ねば惡き友につきあはず、常に歌學を好み廿一代集を殘らずそらんずる程になりぬ。ある時隅田川の船遊山に舅より誘はれゆくに、夏川の涼しく所がら武藏野の月水にうつりて、此景氣どうもいはれたものでないと、舅方より馳走人に付られし出入の者共、酒をすゝめて聟殿をもてなしける。助太郎すける道とて、月のいと面白きに心をよせて一首つゞりけるを、道鐵といふ太皷醫者、酒機嫌にまかせてこくうに讃そやし、私も醫を學ぶ暇には、敷島の道をしたひ、及ばずながら耳底記にたよりて歌の讀方をも心がけ、上方に有し時よりお公家樣方の御歌を何ほどか承りましたが、只今の御詠歌ほどなお歌を聞かず。あつぱれ秀逸此まゝ讀捨になされん事は、珠を泥に隱すにひとし。さいはひ我等女房共は、都去公家方に宮仕へいたした者で、今に奥方から便毎に御懇なる御文にあづかれば、此お歌を上方へのぼせ、此御公家樣の御目にかけ、迚の事に御添削をおねがひあつて、次而に撰集の中へ入てお貰ひなされませぬかと乘せれば、助太郎のつて來て、何と地下人の歌でもあなた方の撰せらるゝ、集の中へ入事がなるかと問へば、ハテさて古今集に三國の町とあるは其時の遊女なり。いやしき流れの女さへ入らるれば、お前のやうな銀持はなほ以て確な事。惣

じて讀人知らずとあるは、皆歴々の町人の歌人達の事と申せば、それがならう事なら生涯の思ひ出、千萬兩の金にはかへられぬ有難い事ぢや。然らば御内方の文のぶんでは覺束ない、かりそめながら大切な事なれば、太儀ながら御自分京都へのぼられ、彼御公家さまに直にお賴み申てたべと達而賴めば、私京へのぼりましては、しかけた療治が缺ますといふ。其段は我等合點ぢや、と、路金として道鐵に五十兩、留守の中賄ひは此方から致すといへば、さやうならば明朝たつて參るべしと、契約申て船よりあがり、俄に旅用意して都へのぼりぬ。それより助太郎萬事をすてゝ此左右を待けるに、四十四五日過て道鐵、京から戻られしといふ。知らせを聞より心うれしく、人ばしをかけて呼びにやれば、道鐵旅裝束其



まゝにて來り、扨都へのぼり女房共奉公いたせし御公家樣へまゐり、御詠歌を早速賢覧に備へしに、しばらく再吟あそばして、歌の心は面白けれ共、さ

すが地下人とて歌のたけ高からず、自然といやしき所あり。町人はふ斷渡世の事に心をこめて利欲にかゝはり、明暮是を思ふ事はなはだしければ、歌のさま無下にいやし。文屋の康秀が歌のさまとは違ひ、商人のよき絹着る迄はゆかず、布子着て沈香をきくに等し。只返すぐもをしき事と仰せられて差おかれぬと、京の寺社廻りて內裏の御門さへ見ずに來て聞にあひを申を、助太郎眞實に聞て感心し、其方を京へのぼした程の德あつて至極の御指南を請て、自今の歌のよみやうを得道いたしたと、是より商賣は大きなる歌の妨と觀念し、手代が勘定おきゝなされと見世の帳を持てくれば、助太郎腹をたて十露盤はぢけば一首の躰いやしうなる。向後我等に商の事とては微塵も耳へ入る事なかれ。給金やつて抱へておくは、



商賣の事は汝等にさばかせ、主人は好る道をもてあそびて樂まん爲ならずや。損がゆかうと德をとらうと、かまへて我にきかすなど、出るやら入やらこぼ

つやら、渡世の事には目もやらず、奥に取籠つて心をすまし、歌を案ずるより外はなし。親一門異見すれども更に用ひず、剰へ心も形も公家にならではと月代のばして、儒者やら按摩取やら知れぬやうに、惣髪になつて歯黒をつけ、堺町に伽羅の油屋に俄に商賣仕替る、白粉屋の受領を買取、一首よむでは武藏の大目藤原の安文と墨ぐろに書て悦び、和歌といふ大病におかされ、親父死なれてより間もなく身躰つぶして、金椙といふ所にかすかなる裏棚の長屋住居、ちはやふる紙子さへ破れて、久方の天竺牢人となつて、あふさきるさに借錢しちらかし、鬼一口にくはうものなく、猿丸太夫のやうに、顔に皺よせて案じてゐても濟まず、あら金の土をおこして、三十慈をになうて、根ぶかき歌好の心ばせを賣て通りぬ

第二　正直な親父を一呑にする上戸形氣

曾子は鈍魯けれども道統の傳を繼、石川五右衛門は利發なれども釜煎にあふ例し、身上よき人の餘り發明過たるも心もとなし。少斗愚なる方こそ益ならめ。利發あまつて大氣を出し、智惠だて、無事なる家をつぶす人あり。とにかく智あるも愚なるも、持て出た果報にて相應に世を渡つて、通町中橋邊に上文字屋とて錢見世出して、若い者數多使へる手前しやあり。若い時から始末の二字を忘れず、人の身を持ちそこなふは、酒に増たる物はなしと、三十年來禁酒にて我内には燗鍋ちろりはいふに及ばず、壺平皿の蓋も盃に似たる物とておかれず。念佛講の同行の中に、酒屋があつてつきあふが迷惑とことわりいうて、講をのかれしくらゐなれば、五節供朔日廿八日氏神の祭、えびす講にも神の棚へ御酒さへ供へられず、子共が寺からあがつて手習師匠に習うた通、猩々の謡うたふさへ神鳴嫌の稲光見るごとく、其まゝ両耳ふさいでお念佛申てゐらるゝ程なれば、ねんごろして來る人々も心得て、酒の咄は随分除てせぬ様にしたりしが、いつの比よりか我子の十助とて、廿五六なる若い者にたゞ酒を飲めと、わざと比目をつくらせ、蛤の貫身などの肴こしらへて、朝も晩も親父自身に強て飲さるゝよし、是は家來共が僞りで有べし、いかにしても誠しからずと、酒嫌ひといふ事前々よりしつた近所の親父共、上文字屋へ來て様子を見らるゝに、親父立出でよい所へお出なされた。悴子

に一つ食べさせうと存じて、引裂鰯の綿あへを致した。あれを肴に各々も參り、むす子めにも大きな物で一つ飲して下されと、家來をよびて酒肴を出させ、十助に來いといへと座敷へ招き、盃は小さい、そこな茶碗で一つのんで、お客へさせとあれば、十助客衆に挨拶して扨親父に向ひ、私が考が違ひますまいひらに三千兩お買なされ。おまへの不同心ならば私が一分買込ます。上るは知れてある小判を、弱氣を出してうぢ〳〵なさるゝといへば、さてそれはどう成共思入しだいにしたがよい。まづこんな時は一ばい飲うで、きおひにかゝつたがよい程に一つ飲んで、左次兵衞殿へ進せいといはるれば、むす子氣をせき、ゆたかなも時によります。半時しれずに狂ふ相場、もはや日午ぢやと氣をもめど、親父少しもせかれず、一つや二つ飲む間に、さのみの高下も有まい。まあ〳〵飲めと茶碗にうけさし、丁とつげと一ばい飲まし、左次兵衞殿の代に己がこゝにおさへうと又一つのまし、さあ左次兵衞いたゞいて下されと、むす子にさゝすれば左次兵衞日比と違ひ、酒屋とさへつきあはぬ親父が、是は合點のゆかぬ事と、此盃御亭主へ慮外申さうといへば、身共は若い時から御存の通、かざかぐ事も嫌ひなれば、悴子に戻して下されと、又むす子に一ぱいのまし、其上にて親父、何と十助小判はいよ〳〵三千兩かうて見ようかと問はるれば、人は大欲でなければどか損はせぬものでござります。御無用になされませと、さいぜんとは格別違うたる返答。親父つのつて出て、若い者のそんな弱氣でなる物か。ま一つ飲んでとくと思案を固めよと、又一ぱいのまし、おれは三千兩はすくない。五千兩かはうと思ふがどうぢやとあれば、むす子色違して、そんな大氣な事承りますと、身の毛がよだつて寒氣立ちます。左次兵衞樣、親父に御異見なされて下さりませ。千里一はねの買置事にかゝるは、申にくい事なれど、私等程にない身上の者がする事でござります。年に似合ぬ蓮葉な事を申されます。私はあんな事聞ますれば、身がちぢむ樣に成ます、ゆるりと是でお遊びなされませと勝手へ入れば、親父指をさして、私のきらひな酒を悴子にたべさせますいはれはあれでござる。あの者十八九の時から、とかく生れ付て大氣にござつて、小判市にかゝります故、異見いたしてとめますれば、米油扨は、唐物藥種の買置、一夜撿挍になるやうな、どか儲をすきまして、今迄あいつ

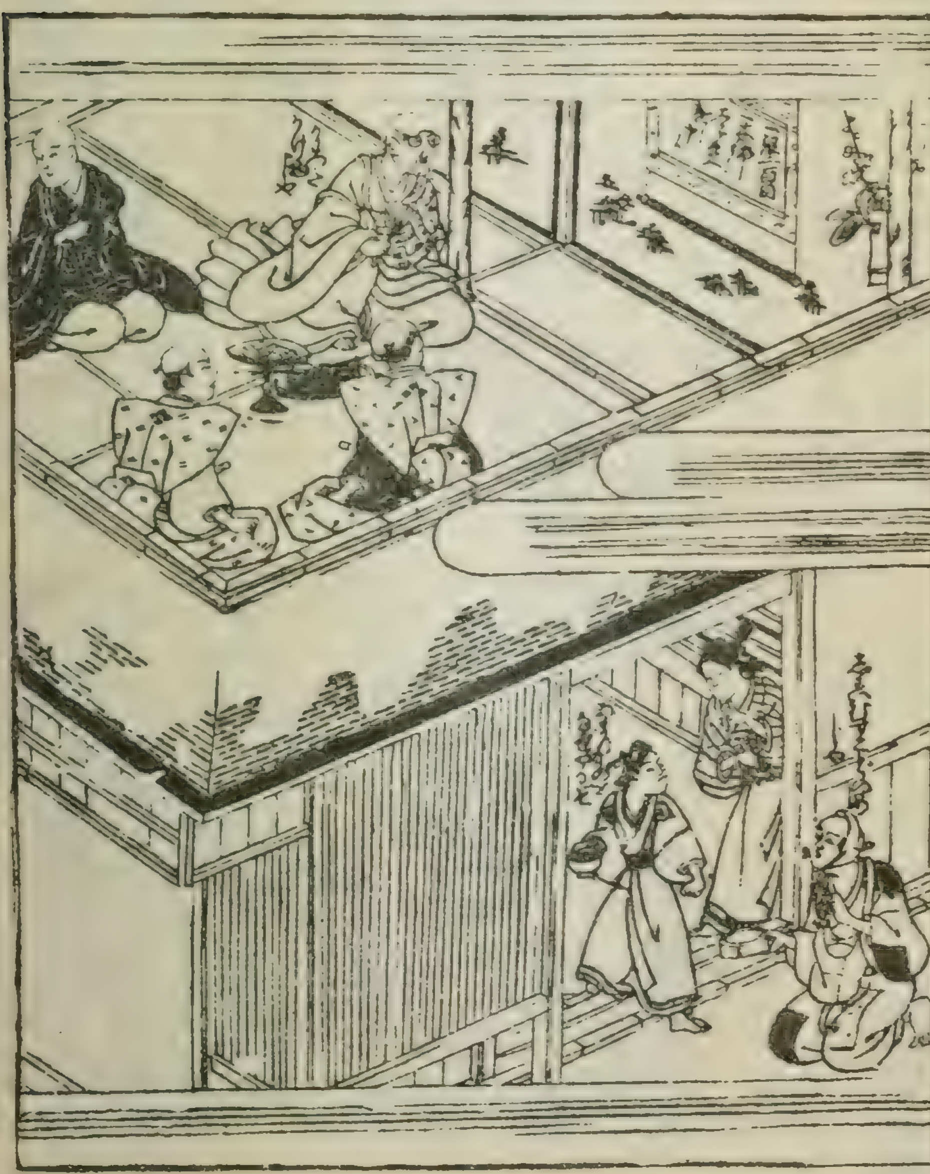
が損金は三千兩や四千兩と申事はござらぬ。傾城狂ひ賭博業に此半分減しましたら、今迄勘當せずには置きませねど、商人の儲けうとて致す事なれば、勘當も成ませず、氣の毒に存じた所に、人と變つて大酒致せば平生とは格別に氣がめいり、そばで聲高に物いふさへびくつきますによつて、それから試して見ますに、氣象に人のいふ事を用ひず、持病の買置がきざしさうな時分、酒をもりかけますれば只今の通で御ざる。何と是も大きな病ではござらぬかと、親父はなしに酒強らるゝ不審ははれけり。ある時十助堺町の歌舞妓芝居の太夫本と、銀親の相談かため三千兩かす筈にて、契約の手を打てしまへば、それではまだ五百兩足らず。どうぞ御酒をあげまして御機嫌のよい所を見すまして、三千兩の上をまあ五百はいこぢあげまいかと、頭取と諸役者內談して酒を盛り、聲よき子共に歌うたはせ、二挺三味線引かけさせ、銀親大臣とそやしたてゝ盛る程に、十助數盃傾けてより、例のごとく氣がめいり、此樣に馳走にあうては、跡で禮がむつかしからうが、わけもない所へ來まいもの來まいものと、口の中にていふ時、是は旦那には御酒が足らぬと見えまして、大晦日に拂ひせぬ我々がやうな風情にならせられた。いづれも旦那をうかしませうと、詰囃子の血氣者共扇子にて煽ぎたて、いさめ申せどたんだよわりに氣が弱り、次第に眞面目にならるれば、太夫本覺束ながり、いよ／＼先程御契約申た通、三千兩の金子お違ひなう、明後日お借下さるべしといへば、十助聞てさいぜんからよく／＼思案仕るに、素人の私、芝居事に大分の金をお取替申さうとお請合仕つたは我ながら無分別、宿へ歸つて親共とも相談致し、此方から御返事致さう。先それ迄はあてになされなと、始とは格別の申方。太夫本むつとして、扨は粋方共を素人のこなたが、なぶつて見るのか愛宕白山堪忍せぬと、一腰に手をかくれば頭取おしとめ、あなたも通町で人のしつた御身上、何しにおの／＼をなぶりにはお出なされまい。さいぜんから十助樣の躰を見るに、御酒も大分あがつたに次第に御氣勢よわく見ゆるは、隱者上戶と申て、世間の酒呑に此一手が御ざります。私前方長崎の客衆から、百杯丸と申て奇妙に醉のさめる藥をもらひまして、懷中してをりまする。あなたのめいりは醉のさかりに募つたで御ざります。物の試しに進せて見ませうと、丸藥取出し十助にのますれば、

忽醉さめ元のごとくかす筈にて、明後日金受取に頭取同道にて參らるべしと、約束して立歸れば、太夫本は悦び契約の日に手形したゝめ、上文字屋へ來て十助に逢うて、證文に判するを手代共見て肝をつぶし、やがて此旨親旦那の耳に入れ、如何仕らんと伺へば、親父おどろく氣色なく、又悴子が持病がおこつたゝいつもの通濃酒を熱燗にして、大盃にてたてかけて盛れとあれば、畏て手代共かんなべ盃取もたせ、親旦那のあなた方へ御酒一つ進せられとの仰付で御ざりますといへば、十助聞てどうでも老功でお氣が付く。一つ參れと盃を差出せば、太夫本此中の樣子に懲り、頭取合點かと膝をつけば、そこらは其意を江戸櫻、紙入開いて嗜の百杯丸取出し、旦那是は御氣力を增藥、先日もお心よいと仰られた。御意に入の丸藥と毒味して進ずれば、いか樣どうやらよい樣に覺えたと、十粒ばかりのんでから、さあ盃を亭主役に我等から始めうと、一つ飲み出しそれから酒になつてくれば、親父立出で、十助いよいよ太夫本へ金かすなと問はるれば、成程町方へかすよりは格別まはりのよい事ゆゑ、只今三千兩つかはしますと、素面な時と同じ調子に返答すれば、こりやまだ酒が足らぬさうな。手代共客衆はともかくも、十助にあびをして、まそつと強よと下知せらるゝ。承つてわかい者共茶碗と取替もりかけるに、百杯丸の藥力にてちつとも醉ねば氣もめいらず。親父幾度問はれても、いかにもかすと丈夫にいへば、親父ふ審し、あれ程飲んでもめいりのこぬは、手代共が太夫本と一所になつて、悴子に酒でもない物を呑しをるには極つたと、惡い方へ氣をまはし、それ燗鍋持つて來い。飲うで見んと引うけて、つひに飲まれぬ一口の酒に亂れてたわいなく、十助芝居へ金かすなら、顏見世の棧敷は定めてたゞであらうなと、むす子より親父うかれて、つまる所は太夫本の仕合せ〳〵

第三　勘略は世帶藥きゝ過た始末形氣

旦那寺の一山を申請、親の三十三年忌を叮寧に弔らはれし、其齋の座敷の床に、時代切の表具にて珍しき掛物をかけられしを、和尚何方の御筆ぞと、懷中目金出して見給ふに、銀貳百目木綿嶋の夜着蒲團一ながれ、江戸の吳服町に奉公してゐる、末子太郎兵衛に讓るものなり。我死後に相違なく相渡すべ

しとの文言。是はお物ずきとて緩つたお掛物とあれば、亭主太郎兵衛申さるは、私は元來生國敦賀の者、兄弟多き故に十一の年御當地へ奉公に來りしが、そもく\は中橋邊の數珠屋へ參つて、後生大事と三年勤めて、是は隨分しおふせて、旦那程の身代になつてからが、いきだけの知れた商賣と見限り、十年の年をさまぐ\に斷り申て隙をとり、十四の秋から駿河町の兩替屋へ、ゆきしに、隱居の禪門我を見て賢過たる小者なれば、金銀蒔散しおく商ひ屋には好かぬ奴なり。角入ぬ先に隙を出せと、此度は主人方から暇を給はり、それより一年牢人して呉服町の此家の先祖に勤めしに、旦那三野へ通ひそめられ、見世の商ひはあふまいと、女郎に逢へばよいと、十年あまりの色狂ひに、此屋敷傳りの諸道具迄も賣拂ひ、妻子とわかれく\になつて行衛知れず。我も其時十年の舊功無になし、仕着の布子まで御主のお役に立ちて、正眞の手と身になりし所へ、今日の親在所にて



はてられし由にて、此自筆の譲状に銀貳百匁、夜着蒲團兄弟共よりもたせ上せしを力に、木挽町邊に店をかりて、はじめての宿ばいり、わづかの絹見世出して、歌舞妓役者の衣裳を請取、段段仕合心のまゝに成て、十年たゝぬうちに百貫目といふ銀をのばし、古主の家を買戻し、此家にすんで廿年餘、當正月の棚おろしに、代物のけて金銀の高凡千貳百貫目、一代の出來分限とは拙者が事、親の譲は御覽の通の高なれ共、是をくれられし故によつて、是程迄の身上とはなりぬ。さるによつて此比表具致して、今日の年忌の佛事にあはせ申す。是私の家の系圖の巻物、定家の色紙百枚よりは重寶と披露せられぬ。此太郎兵衛貳百匁のゆづり銀を以て、今千貫目餘といふ身上になりし事、町人の出世商人の手本ともいひつべし。



幼少より親の手を離れ艱難を經て、一代の中に是程の身代に成し男なれば、萬に拔目なく一子太郎市に諸藝を習はせずして、小さき侍より十露盤を彈か

せ、なみ〳〵にて世はわたられぬといふ事を、骨も固まらぬうちから身にしみつく程いひ教へければ、親の世智成形氣を見ならひ、八歳より寺入して手習するにも、よその子共と違ひ、清書に書損ひとて判紙壹枚麁末にせず、墨に袂を汚さず、雪踏のはなを踏切らず、大勢の子共の毎日つかひすつる、反古のまろめたるを拾ひ取、一枚〳〵皺のばして、日毎に屛風屋張貫人形の細工人方へ賣て、人しらぬ錢をまうけ、其錢にて内より持來る外に判紙をもとめ、紙つかひ過してふ自由なる子共に、一日一倍增の利にて是を貸し、萬事惡ひすらこくふ斷も臺所を離れず、食たき男が朝夕の餘り物を、澤山に乞食にとらす迄の制當をし、其小頬惡き仕形、親父ばかりは悦びて一生身を持損なふ者にあらずと、手代共に末々たのもしく云わたされしに、いよ〳〵十六七の比世の人に變りて、とかく外へ変る事なく、義理を缺きて細かなる算用して、ついにあだ錢一文つかはず。七歳の時書初に桃色のふんどし買て石町の姨よりおくり給はりしを、今に其一筋にて埒をあけ、朝起るから寢る迄始末の事をいひ止ます。鹽肴も目にかけて直段をし、計芋も百を何程と數よみて買、親の仕來りし家來出入の者までの、盃正月の祝義さへ費の至と止めさせ、隅隅迄眼を配れば、大勢の召仕ふ者も一日物見遊山に出る事もならず、命あつての奉公とつぶやくを聞て、煩へば奉公を缺くといひ藥代を出さねばならぬ、夜隙な時隨分炙をせよと、ふ斷炙箸で目をつく如く、小道なる事をせか〳〵いへば、番頭をはじめれき〳〵の手代共愛想をつかし、大家の旦那に似合ざる心ざしと見かぎりぬ。下人の角介が在所の親へ貢の爲に、給銀四十匁借度よし、手代を以て若旦那へ申入れば、太郎市十露盤控へ、あの者は當三月より九月まで八十匁にておいたれば、一ケ月が凡拾參匁三分五厘に當れば、今五月の初に四拾匁貸しては、未だせぬ奉公の給銀を先へわたすの道理、なるまじき事ながら汝が取持なれば、聞屆けて貸してはやらうが、三四の兩月分廿六匁七分引落して、殘つて拾三匁三分は壹歩半の利をかけて九月節供の出代りの時、給銀の殘りにて利足算用して引て渡すべし。それが合點でなくば、勤めただけの兩月分より外は、五厘も餘計を貸す事はならぬと嚴しく申せば、手代若旦那の頬を眺め、さてもむごい心根これは世間にない事、下々は主人の惠なくてはたゝぬもの、利なしにお

かしなされませと達て断申せば、是は角介に限らず、汝等も以來は此通と微塵情といふ事を知らぬ男。朝夕の食物ゐ飯汁の外、朔日廿八日にも菜といふ物させずして、親達にさへ盆正月にも、生鰯一疋進ぜず、寺參りも履物がたまらず、佛は何處のも同し事、外へ出らるれば、費なる錢をおつかひなさるゝもの、持佛堂の如來樣を願ひ給ひ、腹の減らぬやうに靜にお念佛を申されよと、何かにつけて此ふ自由さ。身の油を出し、一生に千貫目餘拵出して、親父死際に腐つた鯛さへ、目に見る事の叶はぬ苦し、鬼界が嶋へ流されたとも、是よりはまそつと榮耀に暮すべきに、因果な子をもち此世からの有財餓鬼、引よせて異見せらるれ共、金のばすを無用とは、親父樣變つた異見で御座るのと、逆目になつていよ／＼せはしく申程に、大勢の手代ども末頼みなき無慈悲の親方と、見限りはてゝ申合して暇をこへば、親々も我物ながら自由ならぬにくたびれ果て、一家一類うちよりてさま／＼に異見すれども聞入ず。これでは家がたちにくしと、一門集り内談して、太郎市に一人扶持とらして、ながく勘當してしまひぬ。世に始末すぎて、金ためる悴子とて勘當請しは、神武このかた是が初物

世間子息氣質巻三之終

世間子息氣質巻之四

目録

女郎乃嘘ハ徳に廻る大臣氣

素掛くに三種立毎日乃三艘舟ハ唐物屋

乳母も貫わずけ乃様に御奉加帳

祈りハ徳とつく山伏わげり乃親孝乃晩

愚子が智恵を上手で箱入の娘持形氣

閑雅な丈夫の中に鶯の巣入材木屋

聞ふかい酒樽の筆を仕合の揚桐

欲の深い井戸茶碗掘出し形も道具ね

欲も人に禍を身に引籠気の荒無形気

職分根を商売に骨をおり出した木綿屋

表向を欲を切らぬ内儀の黒髪

偽りの起請はすれ死人の誓

第一　女郎の虚言につき廻る大臣形氣

氷は水より出て水より冷く、大盡の嘘は女郎に習うて女郎よりすさまじき世の姿、狐が人に化かさるゝにて知るべし。傾城ぐるひに尾を見せず、毎日の三野通ひに石瓦より澤山に蒔散らす、白銀町の辨七といふ大臣、よい親持たる身の仕合、しかも風俗すぐれて女たらしの上手者、三浦の濃紫を手に入れ自慢、粹の女郎にもまれぬれば、分里の事知となつて、此大臣のいひ廻しには、歷々の太夫格子も欺され、手をとる勝にて面白い最中、近付ならぬさんちやも笑ひかけ、物やらぬ太皷迄もつき從ひ、今の全盛いふではないが、我等に續く者あらじと、其鼻の高き事金龍山も下目に見て、八十末社を召つれ、伊勢屋久左衞門座敷を我物にして、萬自由の遊び、とかく色里は江戸も駿河も、小判まかねばをかしからず、向上にかまへし太夫職も、金の光について廻り、眞實から手に入て揉むやうに、どのおてきより大事にかけて、召替のお小袖も手づから着せて帶までして進じまし、後へ廻りてお腰の皺をのばし、背中をたゝきて、今此お町へ通ひ男其數を知らず。其中に薄雲さんの逢んす本町の清樣とかた樣と、此お二人に御器量の續くはなし。お目の上の出來物小さいとて、其儘おかんすが惡いと、みづから藥穿鑿するなど、僞にしてからうまい仕懸。是と親父がむつかしい顏して、異見するとを見くらべては、女郎の方を捨てうとはいはぬ筈なり。辨七此里に通ひ馴て粹になりし德には、似合しい嘘をつきならうて、一見の女郎にも指を切らす程に泥ます事を得て、幾人か人知れずお情にあづかり、是を自慢して晝夜新しい嘘をもくろめば、もろ〳〵の末社共は、其大臣の自慢せらるゝ事を見てとり、それを讃そやして取入る鍛錬、天狗道に等しく熱鐵の熱燗を飲んで、指の股を廣げ、旦那程珍らしい迂詐を上手におつきなされて、お歷々の太夫樣方を、お手に入らるゝ粹樣は、おそらく廣い世界に有まい。何と皆達あなたのやうに我々が甘う僞をつかうならば、金銀の摑み取では有まいか。中々其方がいふ通旦那の半分嘘つけば、今時分は乘物にのつて太こ商賣仕る。あつたら藝がいらぬ所に有ではないかと唆したてられ、次第に嘘に實が入て、色里離れた一門つきあひ、友達中間の出會にも、自然と癖になつ

て、嘘をつかねば口につが溜り、頭痛がして來て座にたまられず、始の程は少しづゝ輕い嘘にて氣を補へば、人の耳にもたゝずして、手を打程の事もなし。ある夜懇なる家に行て、二三人咄しゐる所へ、勝手口の暗がりから、牛込の旦那寺の弟子坊首さし出し、亭主にいへるは上葺の奉加しか〳〵付ては無けれ共、どの道させねばならぬ事故、屋根屋瓦師の方へ參つて注文させましたが、高で金が四五十兩足りませぬによつて、次而に立寄御相談申といへば、亭主聞て瘦旦那に談合なされたとて、煙草の滅ぶんで隙入てから金の出所がない。淨土宗はふ信心なる自墮落なり、身に引懸て世話やく旦那がなさに、雪隱ほどな堂の上葺が埒があかぬといふ時、辨七さし出只今は見世の商ひ世帯まはり、我等一人してさばくゆゑ親常心は隙にして、金銀入てなり共、佛の事が世話やきたいというてゐらるる程に、我等に聞たと仰られずに、明日でも御ざつて打かけて親共に奉加の事を賴んで見給へ。親の事を申は自身の取合のやうなれ共、寺の事には隨分情を出す人で御ざる。頃日も谷中の法花寺へ唐鐵で大燈籠を六つ迄寄進致されたといへば、其座の若い者聞とがめ、其灯籠は本町の呉服屋から親の十三年忌にあげられて、身共も其日參りて、非時乞食うて手傳うて歸つたが、外に目にたつやうな燈籠は無かつたとふ審がれば、此方の親父は何を寄進せられても、人の目にかゝる所にすれば、正眞の名聞ぢやとて、隨分參詣の氣のつかぬ、後堂に大燈籠が六つ迄ならべたてゝ有が、氣がつくまいと眞顏になつていへば、亭主聞て見えぬ所になさるるが眞の志と申物ぢや。先智元坊あなたをお引合申さう、あれは白銀町の辨七殿と申て、かくれもない身代よし、あんな旦那が此方の寺に一人あれば奉加せずに濟む事、さいはひ親御にお世話させませうと仰らるゝ、お言葉を力に明る早々御ざつて、御親父樣をお賴みなされたがよいわ。今夜持佛堂の御明に、いつない灯花がたつたは、此方の寺にこんなよい寄旦那があらうとの如來のおしらせであつた物ぢやと、亭主も我寺の事とて、ひとり悅びしは殊勝なる事ぞかし。明れば智元坊大杉原壹束に三本入の扇子箱取そへ、案内こうて常心に對面し、上葺の奉加の事永々と口上捻つて賴み入ば、常心腹立てそもやそも日蓮宗が、他宗の奉加について法義がどう立つ物ぞ。いま〳〵しい此進物共早くとつて歸らしやれと、

以ての外の挨拶。智元おどろき、夜前御子息辨七殿に伊勢町の七兵衛殿にて御目にかゝり、親常心に頼めとの御指圖を請て參つたと、顏をあかめて申さるれば、常心いよ〳〵立腹して辨七を呼つけ、身共が堅いを知ながら奉加を頼みにござれとは、どううろたへて申たと齒のない齦をくひしばつて、夥しく叱らるれば、されば夜前七兵衛旦那寺から奉加の足らずめを、四五十兩貸せとせがまれ、何共返答に迷惑する間、私に間に合をいうて、あの坊主を歸して呉れよと、達而頼まれました故、當分座なりを申たを、眞實に請て參られたと見えました。是御出家此方は代代堅い法花宗で御ざる。たとへ我等が奉加につかうと申たとて、念佛無間といふ方から奉加を請させられては、御寺の御本望では御ざるまいと、夜前とは各別の口上。とかく聞えぬは伊勢町の七兵衛ぢやと、智元は面目うしなうて我本坊へ歸られぬ。其跡へ下谷筋の屋敷方から、歴々の侍。尋ね來て、常



心にあひ此方には奇妙な疱瘡の呪を覺えて御ざるよし、御子息のお話で承つた。しかれば拙者主人の子息一昨晩から夥しい大熱で御ざる。小兒醫者衆に見せますれば、大方疱瘡でもあらうかとの見立ゆゑ、幸ひと存じ此方の噂を致したれば、輕うしまはれますやうに私に參つて、どうぞお賴み申して御同道致し來れと主人申付で參上仕つた。御老人の御苦勞に御座らうずれ共、御出なされて呪うて下されなば、いか程か滿足に存せうと、武士の慇懃なるあしらひ、常心難義し、私は文盲な者で、さやうな呪とやら祈禱とやら申義は、ゆめ／＼存じませぬとあれば、成程秘して廣うなされぬと申事は、辨七殿御噂で御ざつた。外へ沙汰は致すまい、平にお出を賴申と達而いはるゝ程迷惑して、又辨七を呼つけ身共がいつ



呪をして、お歴々様へ阿房口をたゝくぞと腹を立らるれば、辨七さよろりとして、是は長五左衛門様、ようこそお出なされました。其疱瘡の呪は親父

と同名で、常心と申て小石川に引籠うてゐらるゝ隠者でござりますが、陰陽師身の上知らずと疝氣の妙薬ぢやとて鰒の腸くうて、あとの月ころり小石川の砂になつて果てられました。親父と同じ名ぢやによつて、御聞まがへは御尤と、いうた顔もせずして年中嘘をたのしみにして、さても變つた慰。後にはあまねく人が知て、千三つの上ぢやとて、萬三つの辨七とて名題者になつて無事に暮せり

第二　末子が智恵は上々箱入の銀持形氣

扶桑第一の大湊人の心も大氣にして、それ程の世を渡る難波橋より西見わたしの百景、數千軒の問丸甍を並べ、繁昌の表藏旭に映りて、夏ながら雪の曙かと思はれ、豐なる御代のためし松に音なく、千年鳥は雲に遊び、限りもなく打開き、蜆とる濱迄も小借屋建つづき、それ〳〵の家職して朝夕の煙たてける。爰に長堀の流の末に木曾山の材木を請て、抓取のある時節思ふ儘に儲けこみ、大坂瓦の軒高く三十餘人の手代を抱、近國の木山をうけ心の海廣く、仕合にのつて來る帆柱の買置に、願ひの儘なる利德を得、身躰根强き楠分限商ひの軍法者、世帶の掛引拔目のない親父なれば、不斷ためつけて三人持し子共が智惠をあたつて見、いづれ成共商人にそなはりし器量の悴子を見極め、庶子なり共惣領に立、此家を繼がせんと、行末迄も身代の傾かぬ工夫をし、長町の下屋敷へ三人の子供を呼びよせ、惣じて商人は日夜に心を配り、萬事に氣をつけ、儲ける事を考出すが肝要なり。我此座敷の亭へ上り、西南の野を見わたす中に、儲けらるべき種を見出せり。汝等三人亭に行きて見出し來らば、末子成共我家の跡取とさだめ、金銀家財を殘らず讓るべしといひわたせば、未だ廿より下の三兄弟、親の御意をうけて亭に上り、西南の野邊を眺め、三人一所に座敷へ下り、見出して參りましたと詞を揃へて申せば、親父うれしく先惣領源十郎が見出したる儲けの種は如何と問へば、向うに生えたる唐秬の根を見るに、南の方へ高く生え上れり。是いにしへから米買の考て申傳へる風年にきはまれば、北濱の米問屋と相談して、八木を思ふ程買置より外なしと、手にとる樣に申せば、次男源九郎が見立は如何と問はれて、此比は天氣打つゞき田畠日やけす

ると見えて、百姓共畠中に井を掘り、水澤山に汲みあげてかけるゆゑ、夏畠濕ひ見るうちに生々せり。然れば掘出して水を得る所に眼をつけて見る時は、掘出しをして銀をまうけ、身上をうるほす思案第一と存ずるなり。尤も今の人間ぬかりはなきといへ共、世間をしらぬ奥山家、世智になき在郷へ金銀を持せつかはし、古き道具金物類、破れし屏風の煤びたる押繪、短尺色紙などを買はさば、其内には名物の茶器狩野家の繪歌人の筆、祖師の墨蹟あるまじきものにてなし。我等が工夫は今の世でも掘出し〱といへば、三男源八が見込は如何と尋れば、私は兄々達のやうに當分何をと見きはめたる事もなし。併し南の方の大角豆の垣に蜘の巣をかけ、飛蚊の折々かゝるを己が食物として楽む躰なるに、それより少し片わきの榎の木の梢より、藪の茂りし竹の末へ又大きなる蜘一疋、糸筋をはへて是を渡らんとしては、風に切られて中程より落ち、又傳うては嵐にあうて吹きられ、五六度もかけては落ち〱、後には溝川へ落入て流れて失せぬ。これを思ふに蚊の少き卑き垣根に巣をかけし蜘は、嵐の恐れなくて其身も全く巣も破られず、折節毎にかゝる蚊を楽みて食とする。又蚊の多き高き梢を望んで巣をかける蜘は、度々嵐に落され其身も終に溝川に流れて死し、家と頼む巣も風に破られ跡もなし。是蚊の多きを目がけて大欲をおこして、高き所に巣を張る蜘は風のために身を失ひ、欲にかゝらず蚊の少き卑き垣根に巣をかける蜘は、無事にして樂み深し。人間も左の如し、一時に大分儲けんと大欲にかゝれば、必ず身をうつ程の損をするもの。只大きに德をとらうと思はず、地道にして損せぬ調義をすれば、いつ迄も家は久しかるべし。上手の碁は勝事を思はず只負まい〱と打といへり。是則勝なり。損をせまいと思ふが是儲けなりといへば、親父手を打我今六十に成て汝が詞を聞て、始て我一生の運のよき事を知りぬ。若時より欲深くして千里一はねなる買置事にかゝつて、程拍子よく一度に利を得てどか儲けせし事度々なりしが、今の蜘のたとへを聞て以前の事を思ひ出せば、天柱もとがぞんぞとする。今よりは末子源八が金言を用ひて、殘る兄弟共もかまへて買置する事なかれと、有銀貳千貫目を、千貫目庶子の源八に材木商賣つけて本宅を譲り、殘る千貫目を惣領と次男におしわつて、五百貫目宛に外の屋敷を一ヶ所そへて與へられ、其身は法躰し

て世を樂にして往生せられぬ。末子源八は親の跡をふまへ、一つも變つたる事にかゝらず、親の仕にせおかれし材木商賣ばかりして、段々に銀を儲け、所のよき大屋敷共もとめて宿賃をとり、大和の中に慥なる田地を買置、此作徳にて年中の飯米を仕舞、世を樂しく暮しける。惣領源十郎は好物の買置にかかつて損をし、又は新田鐵山芝居事に加つて年々の損つもり大分の引負出來、二歩半にて見事に身躰分散して、所にもゐられず上町の裏屋へ引込、無用の智恵あり顔して、むつかしき山公事の談合相手になつたり、借銀の侘人に雇はれたり、或は夫婦爭ひの事迄も嗳ひにかゝり、詞ならぶるを人の賢きは是と思ひ、一筆書を幸ひに目安訴狀に氣を盡し虎落といふ惡名をとつて世をあぶなく暮しぬ。さしつぎの源九郎は、朝暮掘出しせんと欲に眼が見えず、取賣共がつき付る道具共を戴き、何によらず正眞とさへいへば、求めて悦びける程に、世になき珍物集れり。三條小



鍛冶がうつたる鐵鍔、狩野の古法眼が書かれし六字の名號、利休の削られし鼻捻、後藤祐乘の彫られたる印判、皆紛なき正銘正筆正眞にしてから、何の役にたゝざる道具共は藏に滿て、有銀は皆消えて行淡路町の家一軒、命にかへて持こたへしが、生得古き道具を好癖失ずして、時代物とさへいへば是程にかづいた上でも、まだ求むる心やます。是を見すかして欲に情しらぬ谷町の古道具屋お見舞申て、古き五器茶碗を出し、是は東山殿銀閣寺にて百服茶をたてさせられた時、高麗よりわざと取よせ玉ひし五器茶碗の根本、持主手づまり判金五枚に賣てくれとのお賴み、私が金があれば入手にわたさず買切て、中の嶋の肥前屋へ隙を入て賣ますれば、三百貫にはたしかに致すが、金が急で私の力におよばぬがお前のお



仕合、お飽きなされましたら、何時成共、五十兩には賣て上ませうと、金五枚にして括りつけて歸りぬ。其跡へ伏見町の唐物屋が古き花氈の小きを持來

り、是は昔神功皇后三韓を退治の御時、船に敷かせられし花氈、おそらくは是程古き物は御所持の御道具の中にはござりますまいと、大分に賣付て歸れば、松屋町の夜市の振手する辯舌者が是をきいて、これや一儲けして來うと、古き紫竹の杖を持行、神功皇后の花氈は人王時代にてねぬけとは申されませぬ。今此杖は天神七代の時代物、國常立尊龍宮へ御用あつて、御來臨の時つかせられし神代の御杖と、是も騙りつけてよい直にして賣て歸れば、源九郎は狐にばかされた樣になつて、持こたへし家も賣、今といふ今差詰り死なれぬ命是非もなく、三韓退治の花氈を背中におひ、右の手に神代の杖をつき、左の手には銀閣寺の五器茶碗を持て、袖乞に出けるが、此身に成ても古きを好心やまず、お助に古錢があらば一文下さりませ

第三　欲ゆゑに禍は身に引掛る虎落形氣

人は正直を本として身を働き商に精を出せば、禱らね共神の惠にあづかり、仕合は吹つける神風や、伊勢の鳥羽といふ所より、お江戸へ挊に來りて、はじめは本鄕六町目の裏棚に、ひとり住して萬屋勘九郎と人に見しられ、晝は木綿切を賣ありき夜は草履草鞋をつくり、馬の沓して賣など誰しらざる者なし。され共其身一代に挊ぎ出し俄分限となり、通町に大屋敷もとめ饒なる暮し、故鄕の母を迎へとり孝行を盡し、我弟勘七勘介も幼少より親の手を離れ、近在にあさましき奉公勤めてゐたりしを呼寄せ、子共なければ性根次第にいづれ成共子とさだめ、此跡職を讓るべしと、まづ兩人共に手代分にして家を治め、日にまして榮行末のたのもしかりしに、さしつぎの弟勘七兄に變りて萬しどなく、商賣そこ〳〵となして、しかも色ごのみなるより、商事にかこつけ三野の色町に通ひそめ、二度の節季の帳前度每に三五の十八はらりと違ひて、次第增のふ足積れば大きに虛所ありて、勘九郎も度々異見するに聞入ず、はや彼所初川といへるを請出すに極りしと、わきより是を告しらせたるにたまりかねて、內證勘當して追出しければ、外に行かたもなく哀にさまよひ步行しを、母のふ憫まさり勘九郎が目を忍びて、死なぬ程のみつぎして、同し所の傍に、裏棚借らせて置ぬ。かくて年月重なり、ある時勘九郎つれづれなる雨の日淋しく、日比將棊好にて

むつかしき詰物の圖を案じける程に、朝の四つより七つ半まで眺め入、さても今合點がいた是で詰む物をと、吐息つきながら呻きける音したるに、何事と女房駈付て見れば、はや目を見つめて寒汗瀧の如く、なむ三寶といふ聲に驚き母勘介も下々も、是は〱とばかりに醫者よびにやりて口を開かすれ共開かず、鍼立血をとりても出ず、一握灸すゑても音なく、終に息たえて脆きは人の命、是はいかな事というたばかり、各々呆れはて老母の歎き一方ならず。女房も四年の馴染なれ共子の一人もなく、まづ近所の同行四五人駈集まり、是非なき浮世の中一度はかうなるに定まり事、歎きてかへらぬに念佛の一聲がもはや此上の爲なりと、老母内義を慰め、まづ片脇に押よせ、屏風引廻し、燈を上げ寺へ人やり、脇指に紙を巻中通の女は經帷子を縫など尻もむすばぬ糸、あはれに靜りかへりし所に、勘七周章敷子の勘太郎七才になれるに、戻子の肩衣に裏付袴の大き成を胸高に着せ、自身横に抱て微塵も氣の毒なる顔はなく、座敷の眞中に勘太郎をおろし置、今宵の位牌をもつてからは此家屋敷を皆我が取程に、嬉しう思へとしかつべらしき貌してあたりをきつと見廻しける所に、其弟勘介涙押拭て進み出、さてもふとい人、此方はいつ勘當ゆるされて來り給ふぞ、兄者人死なれたとても、筋目なき事はなるまじ。我かくて有からは此跡職を誰かとらん。是非欲くは死人と中直りしてからの事といへば、勘七眼を見出し其方はしるまじ。過し七日の夜ひそかに勘九郎殿來り給ひ、今迄の勘當は御公儀へ訴へたるにもあらず。されども一端町の宿老へ斷りたれば、十年のうちは表向往來なき分に待過せ、もし明日が日死んでも子はなし、勘太郎は甥子なれば、おれが跡をやるべしと、頭撫られかたがたの約束。さうなきとて兄親に理屈だて、はや敦賀に賣られ筒落米ひらひし事を忘れたかと、伸上りて氣色するを、女房此有樣を見て奥に走り込、衣類手道具何やかや心にかゝる欲い物、どさくさまぎれに取集め嫁入時の長持に押込、錠ぴんとおろして何の氣もない貌して、姑の見る前にて髮くる〱と束ねて切かくるを、老母押とゞめ其方の心底尤なれども、未だ若き身なれば我分別あり待給へといふを振離し、もはや私の髮の入御分別はふつ〱厭で御ざりますと、無理に挾み切てなげ出す。勘七勘介は互に大聲あげて顔をはりあふばかりに立騒ぐを、同行中取

さへ先しづまり給へ。此穿鑿は跡にてもなる事、死人には手もかけず野邊の衆も宵から詰掛て聞かるゝ、外聞もよろしからずと、老母諸共宥めけれ共勘七聞入れず、何のむつかしき事はなし。今宵の位牌を誰なり共指でもさしたるものは相手に致すと、脇指捻くり廻す。勘介成程己が持つて見せんと問答果てざるに、同行も扱ひ草臥れ、とかく我我は日比のよしみに、まづ沐浴をして仕舞べしと昇出し、頭に湯を一杓かけると、吽といふ聲と共に息出て、やれ蘇生たるわと水を口に洒と勘九郎目をひらき、偖も氣がつきたやら、永々としたる夢を見たりと、前後見廻せば、大勢立騒ぐ。是は何事ぞと段々聞て肝を潰し、まづ勘七めは何處にゐるといふ聲に驚き、はや僞りの顯るゝかと勘太郎を倒に懐て迯出ける。さて腰を探りて見れば金藏の鑰なし。これは誰が取たるといへば勘介私が取ておきたると懐より出すに、汝誠のこゝろざしあらば、母には何として渡さゞるぞ。其心底より此うれひを顧みず跡職の欲論せし惡人め、向後勘當と叩き出せば、あやまる道理に責められて、一言の返答もなく立出る。次に掛硯は誰がなほせしといふに、老母をはじめ知りたる者なし。よし〳〵鐵火を握らせて穿鑿すべしといふ時、女房赤面して聲をふるはし、それは私が長持にと、しを〳〵と取出す誑惑なる心底いはずして現れ、勿論剃髪の心ざしより、卽座に元結拂ひたるさまの潔さには似合ざる仕形、さりとては水臭き心根、行末思ひやられぬ。これまでの緣なるべしと夫は此世に有ながら、後家姿となりて直に親里へおくられける。皆これ欲心より起りて、慚愧の甚しく、つく〳〵觀ずれば既に財寶も黄泉の旅の糧にならず、今より死したる心になりて、有銀三百貫目祠堂銀に入て、常念佛を執建、老母諸共に後の世の願ひ、本來の都に歸る山のほとりに、庵をむすびて行ひすましける



世間子息気質　巻之五

目録

道具に落魄て書體より外隱居親仁

何万両の身代かはかくされぬ茶問屋

茶の湯の種は古めかしい雲鶴の図の一節

年代記もかんがへぬ親は父の了簡

福人にある世忰が身の上知れぬ占形の氣

贔屓のつめつたと身代に驕の兄弟の木葉屋

〆の上くも附行此子の親まさるを

孝行の継代かるかと驚く始れる表筵

第一　⿰女色にやかれて火にくばる大名形氣

銀持衆にありあけのと夜明からよい機嫌の聲して、南江の至り茶屋にて小判を逆手に持て、大勢の役者末社を呼集め、太鞁に三味線引かけて飲んだり舞たり踊たり、手拍子揃へて朝から晩迄變つたる遊びもなく、戯れ遊べど、現のやうに踊るより外なく、あたら金銀を雨の降る如く笠屋町にて大さわぎ、一家の女郎を引つれて向ひの茶屋へ伴ひゆき、半時ばかり躍ては又其家の色共を殘らず揚て隣へ移り、そこの山州衆の女郎、一町廿八軒の色茶屋を踊廻り、其家々のおやま共を幾人あらうと一日揚げ、引つれて行程に、二軒目では十人になり、三軒目では十五人に成、打どまりの茶屋にしては、遊女ばかりが九十餘人、それに役者太鞁持家々の亭主共打まじりて踊る程に、狹き座敷にては此大臣申請がたく、半分は隣の座敷に殘しおき、二軒して踊る時もあり、誰に思はくといふ事もなくて、其身は酒を飲んでぶ拍なる踊を見て、是より外に面白い物はないと、年中茶屋町を宿とさだめ、我内には狐がすんで嫁入事をするやら、梟が來て洗濯するやら、遊び出しては歸る事をしらぬ大臣、廣き難波に見事な名をとり、吉野屋の庄五右と誰しらぬ者はなし。異見するとは脉のある子息の事、腹中に相手なければ怪我せずに銀つかはるゝをよいにして、二親のない氣散じは、誰引しめて敎訓する人もなくて、心のまゝに遊ばしぬ。ある時踊大臣役者末社を召寄せられ、額に皺よせ氣の毒な事がある。皆の者共智惠袋の口をあけて、一分別してくれと一子細あるやうに、小聲にて申さるゝ。いづれも目と目を見合心の中に算用して、極月が近付ば銀の才覺ならぬ程に、茶屋共に諸拂をまたせて呉れとの事なるべしと、いひ合さねど面々が心に高ぐゝりして、お前の事ならたとへ一際か二際つかはされませぬとて、待まいと申者は一人も御ざりませぬ。そこらはお氣を入られず、さあいづれも用意がよいかと、はや手拍子を打かけて分別なしに踊り出せば、大盡しばらくと扇子をひらいて鎭められ、茶屋共へは來年中あそぶ程は先金やつておきぬれば、そんな事に屈澤は微塵もない。汝等が智惠がかりたいといふは、此中左吉がいへるは師走の廿五日からは、面々請拂を仕りますれば、お客の事でも算用合の邪魔になれば、

素遊びは各別踊は正月三ヶ日までは、御無用になされて下さりませと、惣茶屋中からお前へ願で御ざりますといふによつて、廿五日から正月三日まで踊をやめずはなるまいかと、今からそれが胸先へつかへて苦になつてならぬ。どうぞ此師走の末に至つて世間にかまはぬ踊場は有まいか、それを思案して呉れと大事さうに言はるれば、高なしの末社共、案に相違の旦那の御意横手を打て、是は御苦労に思召しますが御尤千萬、かりそめながら大事の思案ぢや、いづれも近うよつて愚案をめぐらし、大臣の宸襟を休め奉れと、額を合せ笠付を案ずるやうに、ない智恵を出す時、南の役者が申は我等は悪い癖で、金氣を見ねばよい思案が出ぬといふ。汝もさうか此方も小判のかざをかゞねば、出る智恵が引こむ程にの。いかに



もいかにも、分別も金の拍子で出た物ぢやと、口々に申せば大臣聞かね、家來にもたせし財布を取よせ小判の花を降らせば、笠屋町に徘徊する小働きの

女迄、思はぬ金をいたゞきぬ。時に太鞁の新七が申は、廿五日から三日迄川口の大船をかりて、思召すまゝの踊場にといへば、役者の城右衛門かぶり振つて旦那は船がお嫌ひぢや。天王寺の廻廊がよからうといふを、彼處は夜踊らせぬと打込む。然らばどこにかと又吸物させて一杯づゝしてやり、手を組で案ずれば、座摩の前の椀箱といふ末社が上分別を出し、日本に構ひ手のない心のまゝの踊所を存じ付ました。來月事始の日から爰許をたつて、有馬へ湯治なされませ。盆も師走も構ひなく、年中慰半分の病人たえぬ所、どんな事して遊んでも時を嫌はぬ榮耀所、先氣が變つて面白うて、ついて參る我々迄大晦日を遁るゝといひ、氣散じな遊び所、何と旦那上分別でござりませうが、此智恵代霜先なれば壹兩にして負てあげますと、欠伸するにも欲を申せば、大臣一段御機嫌にて是究竟の踊所、い



ざ今からゆくまいかと俄に旅用意させて、際なる役者太鞁持、此極高でしま

はれぬと金の足らぬ茶屋の亭主、彼是以上十八人肩を揃へて通し駕籠、旦那の御影で借錢乞の顔見ずに、大晦日を越ゆる事、辱け有馬の湯に入に病なし共、打そろうて行より早く萬事をすて、二階座敷で踊出せば相客の病人共、枕にひときて折角癒つた頭痛が起ると腹をたつれば、奥には耳が又鳴出ると苦しがれば、宿の亭主氣の毒がり二階へ上り、皆様には血氣よう踊らせらるるが、此所は弓手も妻手も御病人で騒しいとて、最前から何方も難儀なされて御ざります。有馬はじまつてこの方お前方のやうな、御氣象な御病人はござりませぬ。皆様はまづ何病ひで此所へ御養生にはおこしなされましたぞと問へば、末社の新八もとより口輕な男なれば、我々は此踊が病ぢやが何と湯が當つて、ねいもにはなるまいかといへば、亭主もすれ物にてねいもになつたら、有馬より湯の尾峠の孫じやくしをお頼みなされと笑うて立けり

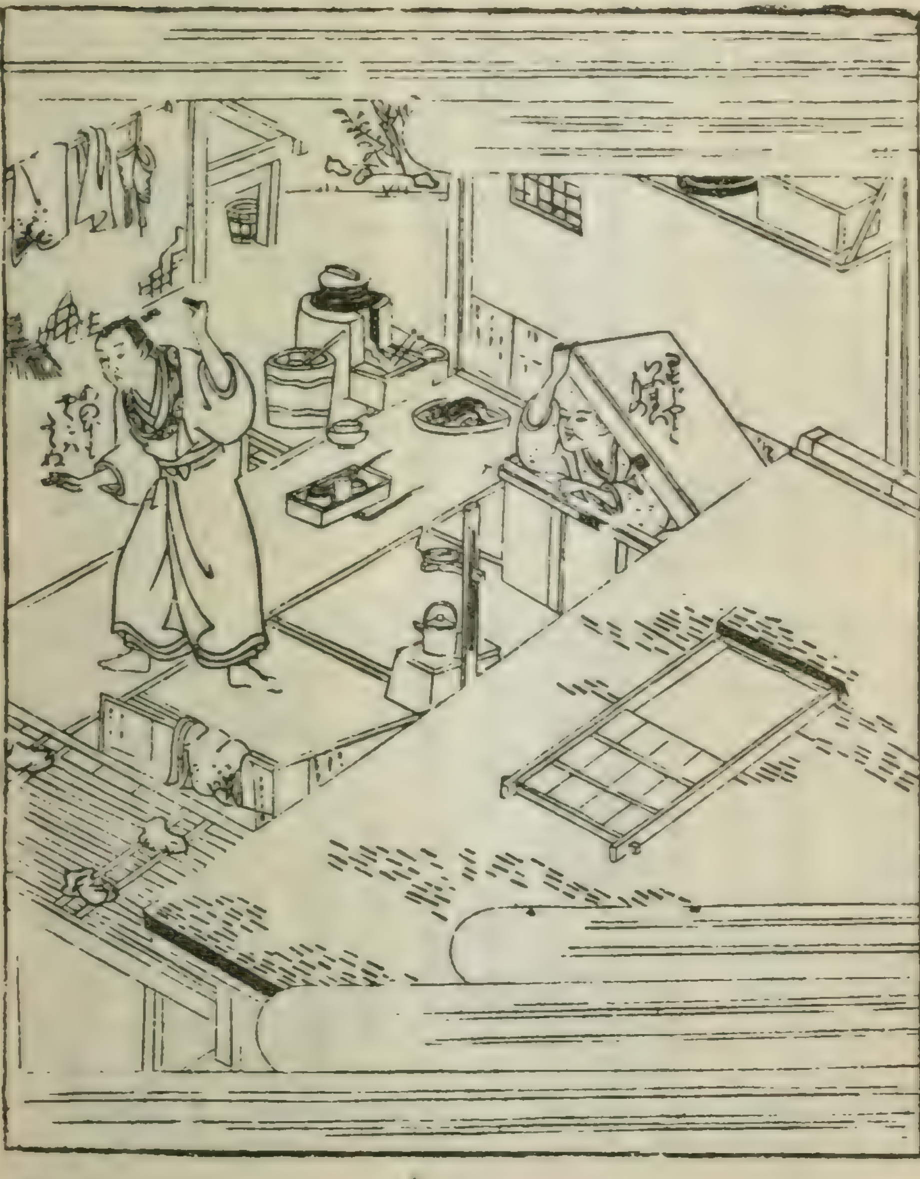
第二　遊興に草臥て養生に引込隠者形氣

世界の若い者一度は直通のならぬ街といふは、色里の事ぞかし。脇からの添智惠にては、中々さとらるゝ道にあらず。自身工夫の心の駒の手綱、一世浮沈安否の戰場油斷する事なかれ。此意域に至る事稀なるゆゑ、只一向に無用無用と諫むる人の親の心くみて知るべし。中庸をしりて遊ぶ事節あらば勿論なりと常に申さるゝ、隠居夫婦ともに法躰して、本屋の地尻に座敷をしつらひ是にかたづき、おも屋は幼少なる悴子一人を、性よき手代共に後見させて世を樂に暮さるれば、若代は幼少にて公儀はらねば、めきめきと銀ふえて、現銀二千貫目と外よりの積り違ひなし。此子天性美男にて、しかも器用はだへに女のいとしがる風俗は、身についた寶なり。振袖は衆道のおそれありて早く脇つめ、十五の暮に角入ければ、年より大形なるによく似合て、親の若名を譲り玄右衛門とて、たまかなる性よし遠く遊ばぬ白鼠にて、近所なる謡の師春藤作兵衛と、儒者の晦元方より外のまじはりもせざりしに、春日屋の何某諷講よりそゝのかし、江口の生身拜ませたい事かなと夕まぐれ、扇風方を陣所と定よねの勢ぞろへ小太夫に目利相すみて色の初枕、男の水揚今夜より聲やかはるらんとをかしかりき。此事家老の久兵衛聞くより氣毒がり、下にては中々すまぬ大事の前の小事ぞと、眉

に八字の皺をよせて隱居道伯にかくと申上れば、道伯うなづいていかにも其方達の、此家を大切に思うての注進、臣たる者の道至極せり。さりながら我等丁簡とは各別なりよく聞かれよ。惣じて若い者の惡所に遊ぶ事めづらしからず。是を折檻する事一向なるゆゑ、けつく逆馬になりて外にて銀を才覺して、高歩を出し人目を忍ぶ心から、生れつかぬ僞いひ習ひて明徳を暗まし、行所宿も語らぬゆゑ不時の用の間にあはず。友をかくすゆゑ不善の連を誘ふもしらず。是みな子を育つる便しらずの文盲親、世間に多きゆゑ却て子の心をひがめ、重代の家を亡させ身を沈むる事此類數へ難し。此方の身躰は其方も知る如く、有銀二千貫目餘の店おろし、此銀を一年一割にまはして利足貳百貫目餘あり。此利にて世帶の入用五拾貫目引て百五拾貫目のびるなり。此內にて玄右衛門が遊び代を引て見るべし。ついでに其つもりして聞かすべし。あれがあふ女郎は太夫か。しからば此太夫が客玄右衛門一人ばかりでも有まい程に、一月に十五玄右衛門に買すべし。其跡は手柄次第に外へ賣るやうにさすべし。此入用六拾三匁づゝ十五は、九百四拾五匁よな、是を十二合して、一年に拾壹貫三百四拾匁也。扨五節句に金貳十兩宛太夫にやるべし。凡八拾匁金にして一年に八貫目なり。此外折ふし宿への付屆け、太こにやる花代、供の者の料理代駕籠賃など、百兩ばかりにてよし。扨連には手代共の內一人宛ついて行べし。是には梅君を月に十づゝかはすべし。此代一年に三貫六百目、惣高〆テ凡三拾壹貫目也。是を延銀の內にて引おとせば、殘銀百拾九貫目は毎年のびるなり。利に利をかけて見よ。鼠の子算用方圖もない銀高、死だる時は此銀を持てもゆかず。銀は生前をたのしむ道具なるに、愚癡の衆生は是を集めて却て苦を求む。其心は貧僧より遙かにあさましき有財餓鬼といふ者なり。人間の身上は現銀五百貫目までを願ふべし。五百貫目になる時工面よくすれば、一生樂に過るなり。それより千貫目になるも手間いらず。高歩をのぞまねば損もなし。かならず大銀をわしるとて大仰なる事取組、其筈違ふ時はたちまちにほろぶ事なり。不定世界にすむ人の證文、暖かに慥成事があらうわいの。然るに常住の思ひをなして、米先納の手形握つて嬉しがるもをかし。梢に常の色なく月に缺る光あり。咸陽宮も一炬に野原となる。ましてや火桶ほどなる町人の身上は、

飛鳥川の瀨に踞てゐると思ふべし。萬貫目持の葬禮も薪一掛帷子一枚の外は、終時ふ隨者ぞかし。玄右衛門に大分の家財とらせたり共、老後には野外に行倒れて果なんも、死の緣無量なれば測り難しと、埒の明たる說法に番頭も泪をこぼして、御尤といふより外なくて罷立を、これ〳〵と呼戾し、揚屋の酒はかならず惡うて毒となる。此方より古酒の輕きを遣はしおきて、過ぎぬ程飲めといはれよとの言葉叉たふとし。玄右衛門も世間の親仁とは違うたる了簡に、誰憚ることなく通ひしが、此里は人目を忍び首尾を求むるにてこそ面白きに、餘り打はれたる遊びに拍子拔して、結句可笑からず。もはや色里いやになりて何とぞ氣の詰るやうに、寺參りがしたい事ぢやと歎かれける

第三　福人になる世悴が身の上知ぬ占形氣



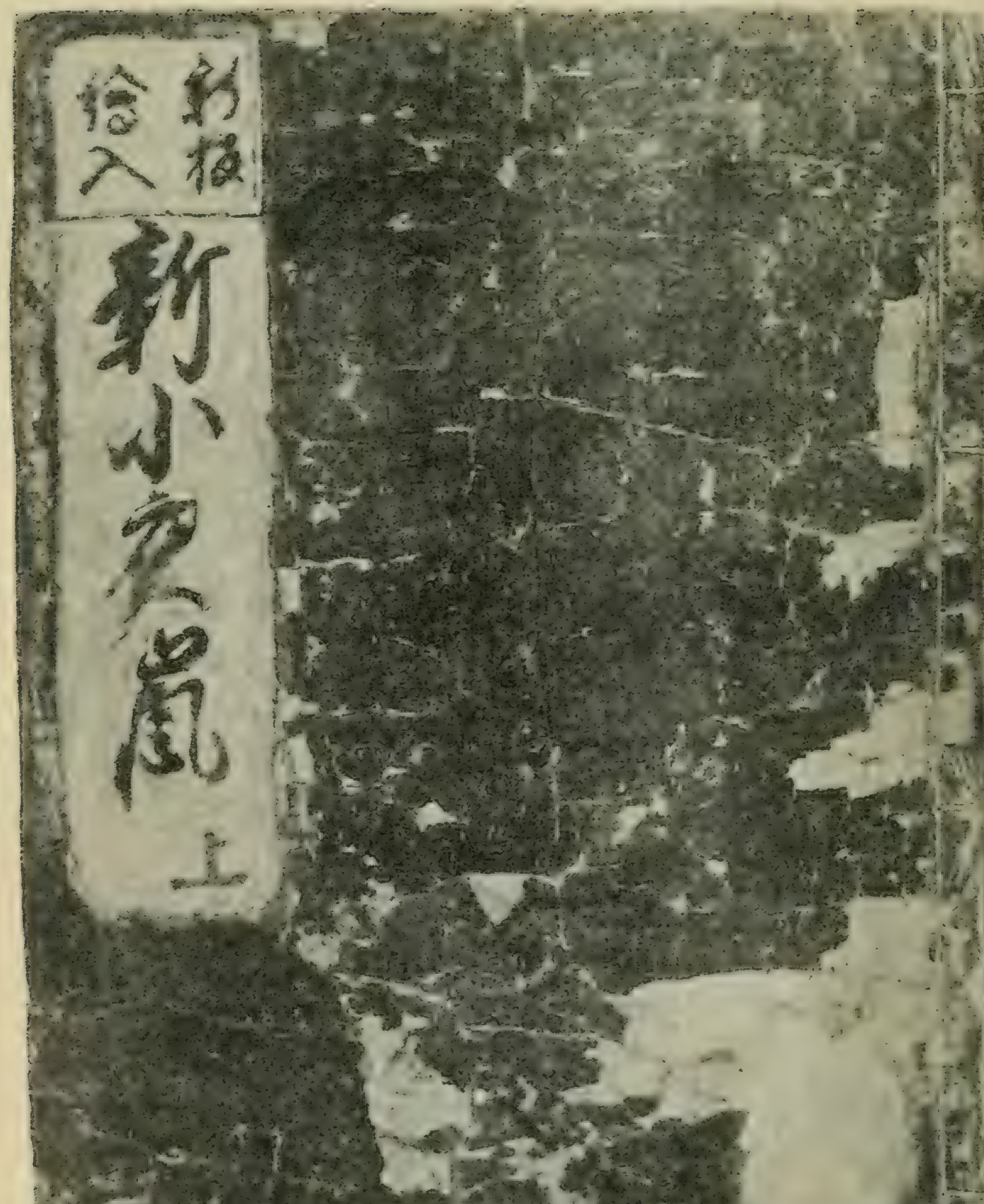
富貴にして苦あり、貧賤にしても樂みあり。今時の人間應ぜぬ分限を願ひ、急によい身にならんとて思はぬ損をする者多し。長者になれるは智恵才覺にてゆくものにあらず。備つたる有德人の大銀儲けるを羨み、生れもつかぬ運にまかせて千里一はねの買置物に損をして、ふ仕合かさなればおほやけなる天をも恨み、罪なき人をも咎めて心を碎き、魂を惱す事きはめて愚なる見解なり。其身善果なくしてはいかほど願ひ禱りても、貧者が俄に福者にはならぬものなり。貧福は天地の道具にて、駕籠に乘る福者あつて、是を舁貧者なくては世界は立難し。硯になる石あれば火打になる石もあり。いづれも石の役はつとむるぞかし。人もそのごとく銘々の役をつとめ死するが人なり。いづくに住ても儘ならぬは、身躰のよしあし難波の大湊繁昌の場は、宿賃高くて小谷といふ所に裏屋かりて、久しき浪人孕石浦右衛門とてぎつはなる男なりしが、近年孔子頭にかへて名も無塵



と改めける。不幸にして寄年の口をしく奉公の望も絶て、六十歳にて入道し其後は丸腰になつて、武士の顔つきもせず木綿着物、上に縮緬の單羽織をかけ、三十年の夏を勤めし古編笠、折目を裏より紙子にてつゞくり冠れば日影者と言はれて、我身の善惡は知らぬ人の身を占うて、それを渡世の種にして毎日町へ出けるが、一子丹三郎にもさすべき業なくて、占文の一道を傳へ親子して大坂の町中を、占ひさんというて廻りぬ。易道を知たにもあらず昔日伏見に鑓屋孫左衛門といふ者、醍醐の聖寶尊師より夢中に授りし、花月の占とて調子を聞て吉凶をしる事神の如く近國に名を取し其術を傳へて、大方に占合すれば少の錢になりて、その日をおくりぬ。ある夜表の戸をこと〳〵と敲く者あり。無塵聞て丹三郎を呼び、今戸をたゝくは何事に來れるぞ。勘へて見よといへば、丹三郎首をかたぶけ時は初夜にて五つ、戸を敲く音はことこと〳〵と數三つなり。時の五つと敲く數三つと合せて八つなり。たゝく戸は木なり。八木と占へりと申せば、無塵點頭きいかにも汝の考の如く米なり。彼短金長木の卦體を、斧と鋤との變あるが如く、占ひの外に氣轉といふ物第一なれば、米は米なるが何ゆゑに夜に入ての八木ぞそれを考ずしては占とはいひ難し。其氣轉を聞かんといふ時、丹三又工夫して、此長屋か、向の懇なる方に、夜に入て俄客ある故に夜食の米をかりに來ると察するといへば、親父かぶりをふつてそれでは心もとない。今日を過ぎかぬる素浪人とは、近所の衆は內證をよくしりぬいてゐらるれば、此貧家へ米など借りに來る事あらず。我つく〴〵考るに、跡の晦日に米屋の銀を過半のこし、二三日中には必ずやるべしと一寸のがれを云おき、けふ廿日に及べども錢の溜りなき故に一錢もやらざれば、晝は親子占をふり賣に歩行ば、夜宿にゐる所へ仕掛け、嚴しく米の殘銀催促せんため來れるに極まれり。占知つたはこんな時の調法、親子共に遠方へ參られたと留守をつかうて歸せと、一人つかふ下女をよんで言含め、間所もなき狹き家なれば、隱るゝ隈もなくて、親子明長櫃の中にかくれ、心中に道切の祈念して、汗を流してゐたりける。下女は戸を明米屋殿か極の日かなんぞのやうに、夜に入て何事ぞ。御親子共に遠方へ御ざつてお留守ちやと素氣なくいへば、これはしたり贔屓に思うて嶋屋町から爰まで走つて來れり。去有徳人の奥様より、

娘御の御縁邊の事につき、相性その外考へて貰ひたいと、我等をお頼みゆゑ唐にもない上手のやうにいうて、一廉禮銀をとつてやらうと思ひ、わざ〳〵と呼びに來た。留守なればせう事がない、是から谷町へゆき占明院なりと同道してゆかずはなるまい。戻られたら嶋屋町の木八ちやが、よい銀とつてやらうと思ひ、辛勞した甲斐もなく、お留守で殘念なといふてたもれと、表より戸をさして歸りぬ。親子の者は長持の中から是を聞て飛出、どちへ行きやつた、今歸られましたと、跡から追かけて行けど、下女を走らせければ闇の夜なれば行方も見えず。扨も占倒れにたふれた。木屋の八右衞門とて日比懇にしてくれらるゝ人にて、皆人家名と其名の頭字ばかり呼で、木八〳〵といへるが、八木と上下へ考ぞこなうたは、米唐櫃がひつくりかへつて、よい銀を取外さう、卦体の悪い占ひやうと親子目と目を見合、舌打して殘念がれど是非もなし。其後丹三郎われと我所作を見かぎり、易道にもはづれたる鳩のかいの商賣して、一生よい加減な嘘をつきて世を渡らんは、人たる者の本意にはあらずと、書置殘して少しの知邊を便にて、長崎へ下りはじめの程は十禪寺の日雇中間へ入りて、唐人の小使に雇はれ、丸山の文の通路、或は、上方の商人共の御用うけたまはりて味にしこなし、三四年の中に働出して五十兩といふ金を溜て、是より此津の形氣となつて、てんほまゝよの買置事、木香宿砂の思ひ入を合せ、荏荷に商ひのまんよく、大坂より殘銀見事なる仕切狀を下しければ、僅か五六年の間に五千兩の小判の身となり、それより一株たてゝ唐人出嶋のきらひなく、運にまかせて強氣を出し、諸方の商人に齒切させければ、段々手まはしよく儲け溜たる金銀を、大船五艘につみかさね、都にのぼり二條通に棚出して、鮫藥種の商賣手廣く新長者とあふがれて、大坂より親父を迎へ朝夕孝行をつくし、人のためとなり慈悲善根をして直なる世をわたり、發明なる子供をもちて、世に不足なく京に安住して、なほよろこびをかさねける

世間子息氣質卷之五終


新板
絵入
新小夜嵐
上

死所も多きに爰は扨

浄土の春なれや、銀つかふてあそぶうちこそ生佛なれ、寂光の都嶋原かよひ、一心白道の朱雀の野中東門より入そめし戀の山臙とりは爰ぞかし。殊さらけふのぬれ日和雪めづらしき富士の姿をたとへて、廿のうへ有とは見えぬ若男の、なんぼかくしても田舎めきて、裾の山道紅うらのみつかさね、ひとつ前に見せかけしは、いやなほど目にしみわたれどしやれ過て、棉物を椛茶染にして帥さまのめしたよりは、素人のふるき物好のきれひなる衣裝付こそましなれ、此御大臣の國元を聞は、駿河の府中の人にて、然も後家親にて獨子市太郎様と申せしを、悪所の替名は今業平様といへり。其むかし男は東の方へくだりし、是はひたものにのぼして京の仕合になしぬ。出口の噂町の茶屋揚屋の男遣手禿引舩迄、のせる言葉をうれしがり、霜先の小判を霰のごとく蒔ける。すこしさもしきやうに見へつれども、此里はどの道にももらはねばならぬ所なれば、ふたつ取には紙に書付、有は又移り斗にて珍重がらせて、後にはその沙汰なしに成事、幾度か身に覺へてかなし。それよりは近道に此君にまはれ〳〵、是ほどの大じん折ふしは稀なり。されども此かたにかしこき太皷のつかぬは、いまだしらすや、此客の長羽織を川原鬼が取殘せしは不思義なれ。此大臣すぎし神無月の比迄は、野良の僞りを誠にして、色あそびつのりし中に、御機嫌を見あはせ、宮川町に幸の賣家ありとて七貫目の無心、明の日はやく遣しけるに、間もなく㒵見せ芝居ちかづき、俄に太夫本するのよしにて、金子千貳百兩借給へと床入しての長物語、聞に身ちゞみあがりて、霄のおかしさ此時覺て、不首尾に起別れ、扨もおそろしき物かな、紋日もおはず、よき物と思ひしに、一度の大願こりやならぬ〳〵と、慰替て傾城ぐるひになしけると、智恵自慢の當座咄し、御利發なる御事やと各〳〵輕薄笑ひして、向後歌舞妓子ぐるひやめにあそばせとやう〳〵に進め入て、此人の金銀は中間の年取物に定めばや、太夫さまの正月を頼み、しらすな、今都に冬めきてきれ物は、大晦日の拂ひも此客を心當に落付、女良も宿屋も內證のよろこび事、余所へ東山の郭公と女良買、大事に懸奉る御寶前、むすぶの神に立願して、金子の有うちおこゝろの替らぬやうに祈れ

迯、先東方に賣子宿、千里が外へ拂ひのけ、只西方へ毎日待宵の空も物の淋しき十二月廿三夜氣色、あげ屋町には春のちかきをなげきながらのなげぶしも絶て、連引の三の糸もきれ次第に捨置、すゑ〴〵の女良五人三人片寄て、初買の殿定め、今となりて時移り品くだりたる事ぞ、むかしは九月の菊酒より大かたは約束せしに、嶋原にはひけたるせんさくぞかし。今もわけらしき當世界の通ひけるが、京の銀はどこへいた事とぞといへば、近年大名借にあるほどは明藏になして、お袖判の手形ばかりになりぬ。當分の用に書た物は役にたゝぬといへども、歴〳〵の太夫さまがたは筆に隙なく、かさね紙に常の僞雜の文章にはあらず、皆實成事ぞかし。此たびの正月のを一代の御恩、庭銭は此方にて才覚いたしましてなりとも、外聞なれば男分に頼みたてまつると、断さま〴〵に書おくられしに、其男のかたより返事なしに、俄に尾州へ勘定にくだらせられ、お留守のよしにて、せつかく書つくせしふみ、そのまゝにかへるも有、又は此夏西瓜に今當



られ、萬事の枕なりと、ひさしきしよくしやうをいひ越もあり。此冬まいつた鰒汁はたゝらぬかと、陰にてたんとそしつても、何の爲にもならず、女良買の僞は江戸も大坂もさのみ替る事なし。もはや春といふても日數のなきに、それ〳〵に客をこしらへ、くがひ勤めけるは、色の道なればこそ調ひもすれ、只の人はならぬといふからは、壹匁にでも出るかたなく、大年の暮のせはしく、家〳〵の懸乞にあわぬ算用聞ば、百貫目たらぬも有、拾貫目明も有、壹貫目で濟も有、百目あれば世にこわひものがなふと云もあり、拾匁持ば神の松山草まで買といふも有、貳匁五分ですつきりと仕舞といふも有、浮世を渡る其ぶんざいの樂しみ、此宿にも餅有數の子あり、なるやうに年はとるものなり。只やめがたきは奢、又おごらねばおもしろからぬは色町なり。彼駿河大臣市太郎様も、日本一のそゝりなれば、名山の煙立のぼり、燒とまる時節は有まじ。されどもしれぬは人心、隨分取つくせとおの〳〵談合半にこの大臣きたり給ひ、よねぐるひもさしてき

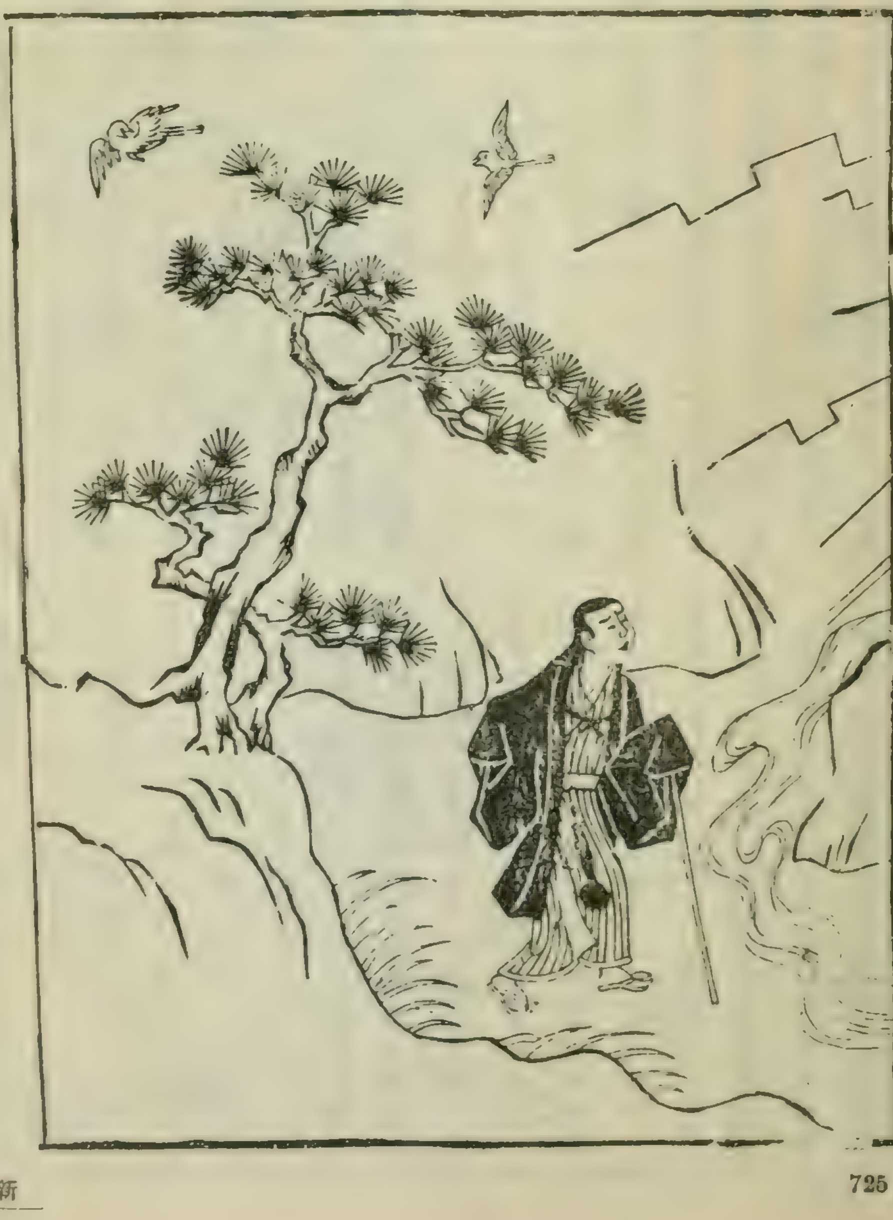


れ替たる事にもあらず、うか〳〵と爰に蒔ちらす金子を、人の爲になるべき四条川原のくずれ橋をかくるか、南都大佛の奉加に付か、末の代に名の殘る事をといひ出さるゝを、さりとてはかなしく、いづれも口を揃へて末代迄殘る事ならば、太夫樣を年の明迄買づめにあそばせかし、今迄請出す人はあまたなれども、是はつゐにせぬ事と申せば、名さへ殘る事ならば夫にせんと來る春より七年の間買づめ、前金千五百兩、請取ばかりに祝儀申納けるに、此大臣皃色違ひ眼を見つめ、足手ひへて脉所をにぎるに、いかな〳〵なひに極り、皆〳〵おどろき、幾藥をあたへ針をさし、いろ〳〵にしけれども、さらりとうき世の隙明、よぶやら泣出すやらわけなく取亂しける。是ぞ氣がゝりなる、烏丸通三条下る町に、此人のお宿あれば是をよびよせ、駿河への早飛脚、其内はなきからをかたよせ、世はしれぬ正月を待事ぞかし

見ぬ世の人にあいまして



室町の井筒屋といへる絹賣、嶋原へ數年商をせしが、萬懸帳もたせ年の暮をいそぎてゆくに、中どうじの辻にて揚屋のよしといふ女にあいけるに、此下女うろ〳〵泪にて、日外の紫鹿子の帯せつかく、くけてまで置しが、中綿をそんにしてこなたへ歸しましよ、此節季の心當、手に取たるやうなる事が違ひましたと、面目もなき斷り、丸口拾八匁が物やるにしてから別の事なく、何としてお仕舞がならぬといへば、去ば駿河の大臣さまに、すくなふて貮角は給るにしておきしに、頓死あそばし、内にも是をなげかるゝなり、我〳〵殊更かなしきと語る。此ごふく屋すこし醫心有て、夫はいつの事ぞ、きのふの暮かたにといふ。間のなき事其人を見るべしと彼揚屋に行て、時分からに氣毒と悔みて、扨死人を見せ給へと屏風ふとんをとりのけしに、不思議や此人生根はつかねども、手足折〳〵うごかしけるにぞ皆〳〵力をゑて、此うへの願ひ二たび御本復ましまして、御約束いたせしそれ〳〵の物を給る事になれかしと、慾の先立皃つきおかし。



此人いまだ頼みある所を見つけし、野送は四五日も待たまへと申て歸にけるぞうれしかりき。人の命ほどもろき物はなし、現なり幻なり、夢路の旅にさしかゝり、今業平市太郎是なん娑婆に聞し死出の山なるべし、岩角けんにして諸木も立枯て、其葉色なく、松柏にもあらず、峯に心の猿さけび、幽に無常鳥のおとづれ、雲うがち風腥く、眼もくらみ、息の通ひも次第に細き谷の下道をゆくに、ひとりの法師立嶋の布子に十徳を着て、前巾着の緒をながくさげ、竹杖にすがり、やせおとろひて來るを、人めづらしくうれしかりしに、近くなれば口ばやに、汝六道錢の内壹文くれぬか、弓矢はちく〳〵といふ。是何とも合点ゆかず、いかなる御かたといへば、此法師大笑ひして、其方も見た所か半師そふなが、愚かや我をしらずや、女色男色にかくれなく、難波の浦に名を流せし椀久が二世の面影と語る。其お名の高き事、富士は生國駿河にて聞傳へしなり。我事清見屋市太郎とて、片里にてすこし色道にわけある若ひ者、此程取出し衆道になげき、都へ執行にまかり、名の立あそびもせぬうちに、西嶋に移り替り、遊興の床に眠かごとく爰に來りし、いかなる所ぞと尋けるに、椀久横手をうつて、爰は黄泉の旅路、然も地獄の道筋と申も果ぬに泪ぐみ、偖も是非なき身とはなりぬ、うき世に何もおもひ殘せし事もなし、されどもかくなるとしらば、大分の金子一日の間に遣やうの有し物を、無用の始末して是ばかり悔しや、さぞ跡に殘せし小判が我をうらみんと、是をのみなげきける。椀久此心ざしを感じて、それほどの大臣を、世をはやくせし事の情なし、色里の力落し思ひやられける。汝さだめて願へる後世も有まじ、鬼の食になるべき事のあはれ〳〵、我とても佛頼むにもあらず、念佛申さず、むしやうといふ身なれども、ちや屋風呂屋揚屋惣じての花代殘る所なく濟しければ、ゑんま大わうも數年の帳を見あはせ給ひ、若ひ者にはきさく成仕舞とおの〳〵りやうけんあつて、椀久はつとめし稱名もなし、然ば極樂に緣なし、身に惡事なければは地獄にもやられす、律義千万まるきこき虛なれは、是より山越て佐伊田羅畠にやるべしと、鍬壹丁わたされて、こゝろまかせの作取、ゆるりと独過はすると身のうへをかたるとき、西の天より黒雲立さはぎ、火花ふらして俄に車軸して、鳴神ひゞき渡り、山も崩川も逆浪たつておそろしく、魂ひ消おもひせしに、こくうに

聲していはく、おのれ未前生に縁ふかし、是よりかへれとの給ひ、又青天になりぬ。市太郎夢にゆめ覺して、よろこび立歸るを椀久引とゞめて、不慮に此世に御越、そのまゝのよみがへり、又ためしなき事なれは、竊に色道ぢごくを見せてかへすべし、浮世にしてすゑ〳〵のかたりくにといへば、いかにも〳〵またくる事のならぬ所、あらまし見せ給へと、いやな所に心をとめて、椀久に身をまかせ行はすかぬ物也

又來る事のならぬ詠め

我最後よりけふ迄日數折れば、極月廿八日かと覺しが、春の事ども拵へる沙汰もなく、書出しの取やりなく、只ぼうせんとしたる住家、千草萬木四季のわかちもなく、梢の楊梅見れば水仙の花さかりに、野は秋萩のみたれ、松には藤のちりかゝり、茄子畠に唐辛いろづき、さてもわけなき所ぞかし。椀久



草庵とおもふ所の内に入て、折節雨の夜の淋しさ、むかしを今かたり慰むより外の事なし。去ば諸色の遊興、いき

とせ生る人、またもなきもてあそびなれば、此かぎりはしらぬ事、我も人も見えぬ所ぞかし、それがしも死替てから、漸く身のうへ、人の事までを見すかしける。先以此正月新町の有さま、それ〳〵に賣た良はしたまへども、大かたは身揚宿屋の悉戚ながら、かしら三日は請合て、他人を祭客にやうだやうなるかほつきおかし。女郎の身にしてもせんかたなきは、いかに賣物なればとて、夜市に出してないか〳〵とてふられもせず、おもひ付男のあるまて待賣にするなればとけしなかりき。ねだんの定まりし物をおしなべてさげられもせず、ねぎられもせず、今の八木に見あはせては、すこし相場をかへたき物なり。有目かしこき人のいへり、むかしに替り太夫職、ことの外に見さめして、位のないばかりにあらず、身躰の女ひなびたる様にいへり、いつれさも有べし。以前は時花によつて天職を太夫にもなしぬ。此程は美形の女良も稀なれば、無理やりによろしからぬ天神の御作を、下手佛師の地藏なをしに太夫にすれども、良丸く色のしろきばかり當世女にして、風俗腰つきゆがみなりにしやくし定木のたぐひ成べし。是をおもふに今の世に能大臣のなきゆへなり。子細はわけある男次第に傾城ははりもつよくいせいもつく物を、此比の首尾を見しに五七度もかかりて、さしづめに一日も出るなれば、女良只の勤めに隙なく、たま〳〵初對面の客にあへば、銀拾ふたよりうれしく、ふる事も仕掛もとつて置て先へ氣をのまれて、酒振もお定まりの外は出來かね、何とぞ機嫌をとりて、今一日も賣たき心入ばかり、是ではおもしろからず、又時節も女良もむかしに替る事も有べし。江戸も京もそれ〳〵に色あそびのするなり、しばし此道をやめたまひ、當座切に野良ぐるひしたまへと、しらけたる物語、聞うち明かたちかく成て、南の方に太皷のせはしく音なして、泣聲の聞へしは、あれなんしゆらかとたづねければ、あれこそ惡所のおそろしき事なれ、男色野良のおごくとて、前生にして芝居子に遊んで諸分のわるき大臣、後の世まで其罪をたすけず、それ〳〵に身をせめられしと、掩久案内して殘らず見めぐりける。

秤は情の掛そこなひ

諸色の中に野良ぐるひは戀の外ぞかし、子細は是等におもひつくのはじめ、舞臺に出て其面影のうるはしきのみ、

藝の取まはし諸人惱て、名をさへ山家者はしらさりしに、誰に問ふともなく、心を懸しそれ〳〵の君の紋揚枝を持事のやさし。是は錢壹文のたのしみ、札錢廿四文、半疊の錢五文、たばこ火繩三文、彼是錢卅三文にして、一日見物して何の用捨もなく、その子が名を高聲に、やう〳〵命取目、尻つきころしをれ、まそつと笑ひをれと惡けに云けるも、みなりんき心よりいふなるべし。迚も叶はぬ銀壹枚、集禮か何ほど入事やら、しらぬが無佛世界の人なり。只見たばかりの當座の花、罪もむくひもなかりき。又此堀に名を流し、有增の役者もお良見しる程の大臣、定茶屋より二軒目の棧敷をとらせ、毛氈色をふくませ、南にしれたる末社めしつれ、冬編笠を子細らしく被き、鶸色の羽織、鼠糸の長柄を見せ懸、小提ひらかせて呑出し、初瀨などいへる名の木を大割にして燒かけぬれば、諸人の心是に棄れ、此棧敷に氣を移しける。なをかつにのつて樂屋入の役者を呼懸、旦那お出といわせ、あたまをさげさせ、威光をふるひける。狂言はじまりせりふのひまに、太夫子棧敷遠目をつかひ、良つきに戀を篭らせ銀にするおもわく、外より見て是を浦山敷、我も又あの子を只はおかじ、銀でなる物に拵へし事なればと、一念におもひ付社因果なれ。此遊興中〳〵はした銀にして、ふんどしに取つかるゝ事にはあらず。一度二度にてやめかたく、はや三度にも床かさなりければ、遊女に各別の色增りて、何ぞとらせたく成事にして、脇指を作り、茶箱をおくり、こんがう呼出し貳角はづみ、亭主は座敷へ出の山吹、花をちらするとて摑出しての一步、是にましたる事あらしと御前を罷立ば、鼻目入替り御機嫌を見あはせ、袷時まで綿入着て、おもくれたる風俗見かねて、太鞁氣をつけて、お内義今はやる千筋形の袷なふては叶ふまじと、又金子一兩うちける。露もまだひぬに槙といふ娘の子、疱瘡かるうしまふて、四五日跡に酒湯かけまして、かほうつくしく、敷銀なしに花聟とると、母の親が自慢すこし姦く耳を背きしに、是もだまられず、末社が手ひろげて、旦那よりさつさりとお祝ひ、岸の堂參の駕籠賃と貳角なげければ、諸願成就めでたし、觀音も同座に、亭主が弟も宵から膝立て、根太のいたむを堪忍して、無用のかる口ひとつも新しからず、蘆の立疊のうへに長居するは、さながら何ぞはしそふに見へける。こなたへがと左少と一角とらせば、是ぞ福德の百年目、蒔

た種ははゆる大臣長久、まづ懐へ納、我等はお座のさまたげと勝手に引込、其後は廻りあしき酒のあいせよと呼ご空鼾して出す。次第〳〵に酔の御機嫌を見つくろひ、料理人の九助迄當座嶋臺拵へて、大かはらけに御紋をひからし、旦那御出世の末松松山、道頓堀に浪は越とも、御客様の髪先ながく結ぶが縁と申物、九助が上髭の赤ひ鳥の鳴迄も、いのと御意なされましても神八幡留る男、難波の鉄眼の鐘がかぎり、呑やうたへやよいさゝさつと取ませの重口、よく〳〵一歩がほしければなり。是も聞ぬ良もならず、萬事氣のつきるかつ〳〵、下地子の布子、下女が割しさしみ皿まで、皆大臣の迷惑となつて、いつとなく銀がさあがつて、書付に一夜の夢をおどろかし、是切とおもへどやめがたく乱て、柳はみどり花代はつもり〳〵ておのづから済さぬやつを、爰にとらへてちんともかんともわん共いわせず、上目に懸て取事ぞ、是をおもへば色あそびも前日がよし



銀にならざる笹の浮世

花は盛に月は廿日あまりを詠めとや、それは律儀なる古人の言葉、今時はうまき物は宵にといふ事口近し。明日の祭はしれぬ世の中、命つたなし日和定めがたし。折節は八月十五日、難波の三津寺の神事なれば、毎年氏子の竈にぎわひ、御燈光きよく御寶前にこすまひ、夜もすがら人立さわぎけるに、おもはざる秋雨しきりて、あたらそらを水になしける。南横町の飛子抱へし者の宿にして、それ〴〵に四五人あつまり、雨夜の物語せしを聞けるに、惣して大臣と見るとも、花代かさならぬうちに取べし。其子細は、いかなる人もはや金子拾両ともつもれば、今此もうけにくひ事を分別し、一日のはじに出しかね、又新しき宿を替、京からつけめしの陰子をよびて、名のしれぬやうに慰む事ぞし。銀見付し時取越て無心



を申べし、お爲に成良に始末してやる事なかれ、其銀のべて遣ふ物にはあらず、一夜に千兩でも有切にすべし、夢の

覺ぬうちぞといへり。それはそふなり、此銀が濟ぬとて云事にもならず、浮世かな、母親のよしなき事を余所に見るに同し若衆の親かた、あれほどの智惠ありながら、月三割の利銀を借はびんぼう神が引てまはると見へたり。去ほどに色なればこそ、身に替る金銀遣ふに先が見へず、かくいへる椀久も今こそ思ひしられし、さりとてはく〱爰にて人の見へすきて、かなしきとも耻しきともいふかたなし。あれに見えし大臣の中に、としかまへなる男の眼ざしすぐれて取まはしかしこく、堺にかくれもなく、世帯がたに工夫深く、夕朝の釜の下へ生薪を燒せず、疊のへりをなめし皮で仕出し、臺碓もはじめて拵へ、我才覺にて住所も求めけるに、人はしれぬものぞ、ゑびす嶋へ狂言つくしの芝居まかりし時、くばり札をもらいて見初しより、松岡九七郎といへかよひなれて、五年立ぬに貳百三拾貫る若女形におもひつき、其分にはとま目、殘る物とて住吉の松の風、曙淋しらず、次第に板付にのほりて、大坂にく、後には三枚肩をやめて步行路に家



質置て、其銀會所よりすぐに道頓堀に沉ける。是程迄はよくもはまりける物ぞ、沙汰なしにあの貞つきを見てかへり給へ、死でもまだ經帷子に其子が定紋おかせたし。今の難義は前生にてわきまへなく、外聞はかりのあだはなを出し、人〳〵に嬉しがらせ、其付屆せぬによつて、惡やとおもふ一念の泪のかゝり、小笹は紫竹の林と生じ、其根を灯心にてほらせける。扨もとけしなきくるしみ見るに哀れ深し、紙が銀になるはむかしの正直大臣、今の世は手に取まては慥ならず。あゝほしや銀のなる木を千本程、から花はとらすまじきを、しんだい落花と成て元の木阿彌

毛貫もあはぬ昔の貞つき

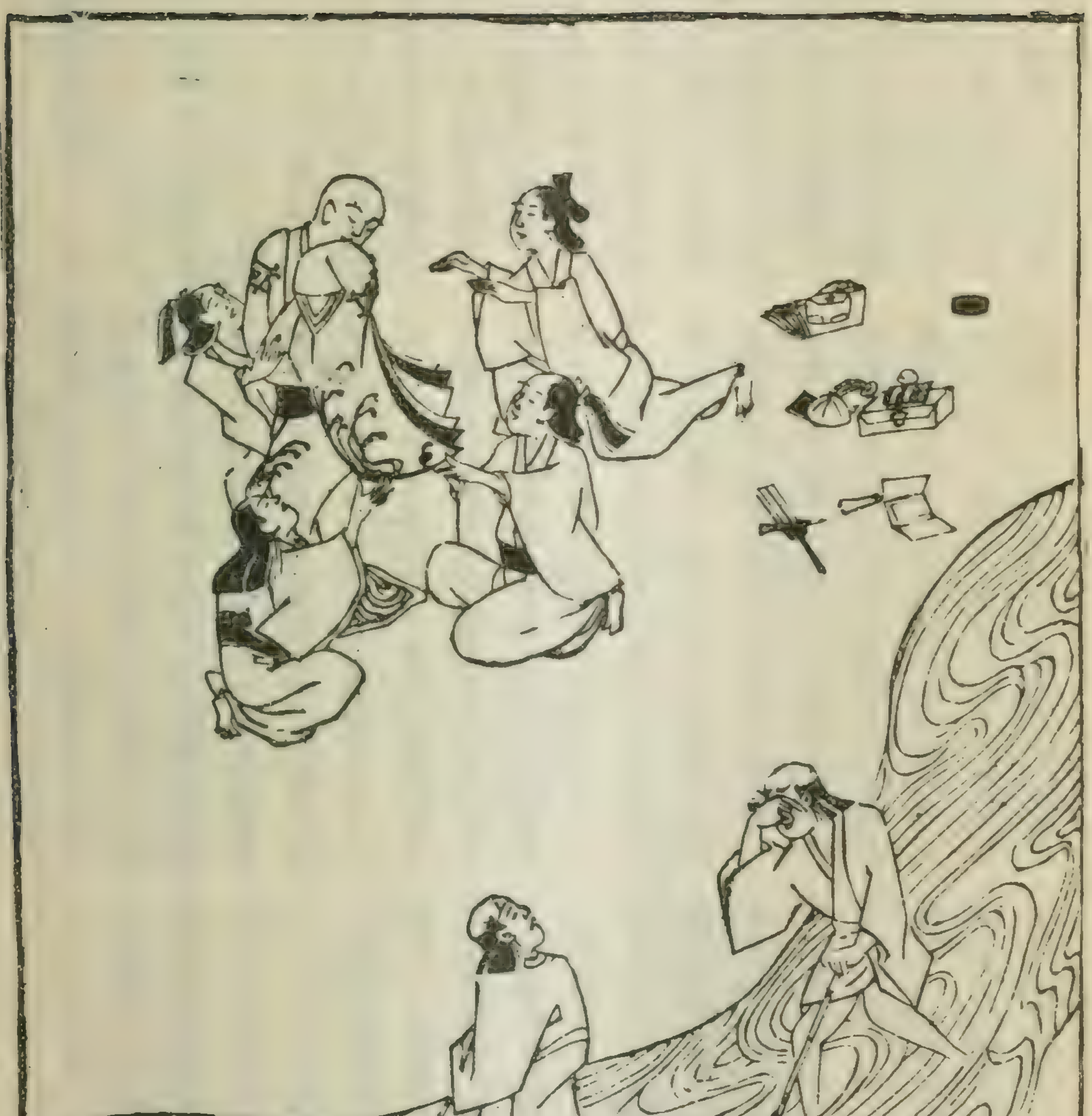
常樂我淨の心になりて、親仁が溜置し大分うけとりて、世間におそるゝ人もなく、毎日あそぶに隙のなき大臣、外より浦山敷見るとは違ひ、其身なりては、四条川原の水に魚のすめるがごとく、何の心もなく此所を慰み宿とばかり覺へて、宮川町の奈良茶、豆腐に



置鱠、三十入の干鰯、當座づけの淺瓜のかうの物、此分にて貳角の集禮壹歩をかむやう成事といへり。伊勢の宮川にて、宵朝三匁五分とさだめ、二の膳居るをおもへば、神國は都より正直と、町からつれし末社が申き。爰の事は世上とは各別の所なり。米買かゝれば熊野の相場や、七分の下酒は通ひ付て壹匁貳分、萬吏內證はこうした事なれば、蒲鉾一切、榧一粒あだに喰事なかれ。したしく成て壷入自慢になれば、後には嬋娟なる風情の帽子をもせず、不斷着の袖みぢかく三尺帶の前結ひ、雪隱から鼻紙わすれたといふやら、わけもなふ心やすくなりておかしからず、とかく野良は身こしらへ淸く座配ひとつぞかし。いま又くざくいふまでもなし、しれた事なり。大臣もつやをあらしてなひ事いわるゝうちが花なり。ひがし山の春にもならば、八坂の塔の前に假屋を打たせ、每日やり捨の提重百組宛とゝのへて、輕く出たる人の爲に賜らんとや、餘よい事過て聞へける。扨は祇園町より大和橋まで、車輪の明地を申請て大座敷建て置、誰によらず遊山所に貸べしといへば、いづれも茶屋の迷惑、こりや御無用と淸水に響く程笑ふて果しける。この客も次第に賢く、今日は千本念佛にまへり、明日は妙心寺の寺中にて、揚弓の會有て行など、錢のいらぬ所にして日を暮しぬ。偶惡所に出も十日斗の事を一日に慰み、人に貰ひ置し紬縞を引立て歸り、嫌かる惡口を云盡し、直化になりて身に構はす、其若衆の勤め程久しき狂言の事を思ひ出し、橫手を打て氣を付け、脇顏をつら〱詠めける。髭見らるゝ事の其悲しさ、子供の身にしては死でも忘るゝ事なく、恨をこゝに淨玻璃の鏡にうつせば、大臣泪をこぼし、さりとては覺へもなき事をせめ給ふは情なし、おの〱寄年にして髭のはへ給ふ貞を、なにとてあらそひ申べしとさま〲にちんじけるを、若鬼とらへて姿見に懸れば、忽に若衆のほうさきへ大臣毛貫を當て笑ふの所、有〱と鏡にうつりぬれば、今は大臣是非なく、かく有へきともしらず、更過たる野良に物好せし事の後悔といへり、さも有へし。我身より燃て螢のごとく、歌舞妃子も見た所の屁の光ぞかし。取入て見ておもしろからぬ虫なり。かまへて〱若衆のくすねにて、貫事、沙汰したまふな、又の世こはやと楓久耳ちかく寄て小語し

言葉の輕行張貫大黑

夫三途川遠からす、都のひかし難波の南に二川流れける。然も清水にして舟有、橋をかけ、人の心も見え渡るほとの淺瀬なるに、爰わたりかねしは大惡人なり。人に無用の約束して其跡かたもなく、日ざしを違へ又はやる物をやらす、おのつから此道筋せばくなりて、夜通るさへ其役者若衆の門を火宅よりはおそろしく、提灯けさせて足はやに我と氣をせめける。又昼のかなしさは、町役に出るそうれいに編笠もきられず、人の中に立かくれて、野墓迄行うちのくるしみ、戻りには太左衛門橋の道を替へて、松屋町筋に大まはりするこそおかしけれ。惣して神無月のはしめつかたより、芝居子の宿へたよる事、ふかひ戀の淵をしりなから、水心しらぬ人のおはまりなり。誰眞言より藝子の僞をうれしく、おもひのかさなるうちに霜月の良見せ近つき、野良の外聞爰ひとつ御取持あそはし、花は吉野初瀬より道頓堀が今が盛とたのまれ、隨分聞ぬ良しけれ共、口を口近くよせてたはふれまきれに、またも、御無心申も迷惑なから御りやうけんと、こんがうがおしへにまかせ言葉に花をいひ懸られ、是非なきは人間に耳の有こそうたてけれ。いやなから請合、今まで有ふれし衣裝揃へ、臺に付たる小判もおかしからす、我等がおもふは何とぞ新しき物好をして、張貫の大黑殿を作り、槌の下より素ひ客をうち出したる所を貳間臺につみて、日用は其方からやとひぶんにして出されよといふ。いつれも横手をうつて大臣の仕出し、我をれく去なから、是は目に立過て世間をはゝかるなり、只かさびくに舞臺衣裝をふたつ、大臣と太夫とのならべ紋、思ふまゝになされてから、貳つで七百目、いふてもやすひ事、是は手を打てよいくよい機嫌を見合、硯紙出して雛形を極め、神八幡旦那の御定紋、北濱にならびなし。買置の米は、次第くに上羽蝶と、座興もおもしろおかしく、酒とさはぎに其夜は夢、明れば覺て別れさまに、鼻紙袋をたづね、扇のかはりたるを惜み宵から待せししのび駕籠遠き近きにかまはず、銀貳匁に定め置しにおとろき、思案良して乘さまに皮草履のせんさく見くるし。大臣の心宵と朝にかゝ替るそかし。諸事約束せしも其沙汰なしに、良見せ前より南の方は金神にもあらぬにふさがりになりて、若ひ男の只もいられず、はるか





なる玉造の稲荷のしやれあそひ、云てもいわひでものかる口、おそらく鳥居を越たる師中間、此明神も此方より眉毛よむ男小女をあいてにして、はたかけの盃に呑懸、火箸にはさみてあたためし鳥貝の蒲鉾を喰た友達、堀の衣裝は其なりけりにやらさる大臣、此川に待請、心ざしは姥に成替りて、爰にて小袖をはぎとる所、すかぬ事ではなひか

頭はむかしに替らぬ赤馬

其曉や算用にくらからぬ商人、高野山の小田原町に香具の出見せして、愚なる兒出家をまねき、年ひさしく世渡りを爰にてせしに、元より當山は佛法古今の靈地なれば、精進明かにして繪書し女も見へず、ましてや小鮹のかほりさへ絶て、明暮かはらぬ里芋こんにやくにて月日をおくれば、おのづからに勝手よく金銀大分たくはへて、此所の棚を引ける。此男住なれしは、今の都寺町通り本能寺前の者成しが、むかしに歸り京の心に移り替り、萬に付て



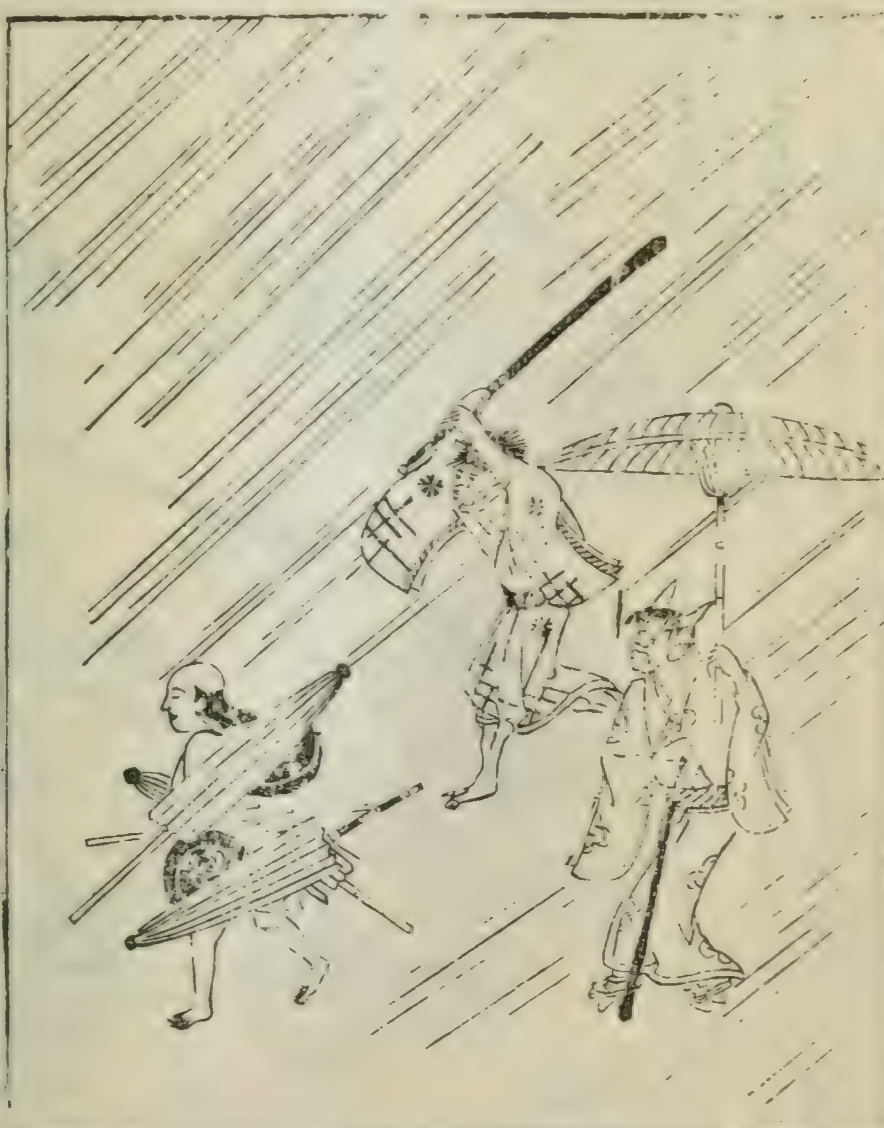
奢出て風俗かしこく、朝夕も北國のむし鰈、桑名の目ざしを喰馴て、後には色道に身をなし、伏見通ひのしげく、有ほどのかねはたゝきあげたる鐘木町の十五くるひになつみける。是を思ふに高野にてせつかくもうけ溜し銀を、女ぐるひに遣ふゆへに、間もなく消行と合点をして、それより男色に仕替ける。高野に住て衆道の分をもこまかにたんれんしながら、野良に用捨もなく無理床をうらみ深く、其念力爰にあらはしかしら斗は人間にして、からだは牛馬のごとく、大臣むくひのかたちを、執心の鬼、尻から追立昼夜のわかちもなく、責つかはれてうきめを見せける。いかに勤めの若衆なればとて、あらけなく當る事なかれ、あれ見たまへ

くだけて物おもふ碓



大津奈良屋に居りやこそ踏も習ふたよ
碓をと、けはしく小哥の聲はいまだ若衆めきて、頭は黒鬼の足元つよく踏れて、臼の中なる人は、かなしやくだけますると泣さけびけるはいかに、椀久聞てあれは京大坂の親懸の大臣、死一

倍も才覺ならず延米を連判借して、其米にて諸分を立けるに、何にても濟をよろこび、請取て年取物になしけるに、此米年をふりければ、大かたはこくうぞうとなんいへるむしさしてみなそとになりて、たとへば壹石の物貳斗七八升になりぬ。此迷惑さ、わすれがたく、此事ゐんつう持の本大臣にはきかす事もうるさし。とかくは衆生のためにかゝる客目がたちをおくなど、細に踏くたきて、ひたり、ふるうたり、七度迄さいなみて、其大臣を粉もなひやうにしてすてける。いたはしや此男とものしつた事にはあらず、是皆物にかゝりの虎落の仕業ぞかし。抑百石借米を口入判代萬事にひきおとして、かしらからやう〳〵六拾五石わたしけるとや、手形二三度仕替るうちに、三百石になる事、間のある事にはあらず、此算用は商の道の外とや、銀のある親仁が有程出してつかはせぬは無分別、是を借しやうよりは



車軸の難義かゝる迷惑

うき世の闇とて客に挑灯からるゝほと物のかなしきはなし。燈さしの蠟燭もやられす、借度に胸を燃ける。それのみ雨の夜の傘なをうたてかりき。春雨五月雨露しくれ霜雪の暮〳〵、一とせにつもりては此そん山のごとし。暦〳〵の人は供の用意有てさはなくて、稀に出掛たる金銀内大臣のくせに、届けはそこ〳〵にして傘挑灯も借とりに萬不埒は悪し。是下〳〵の業ならず、主人の氣を付ぬゆへそかし。自分勤めの子のかなしき汝思ひしれと、いふ言葉の下より身しる大雨頻にふり來て、五躰に諸〳〵のからかさ挑灯取つきて、前生の科をあらはす

聞ぬ良は夜明の釣鐘

むかし山崎に住ける法師の、泊り客人は下と書れしを、都近くに居て是を聞ながら曙の鐘突迄勤め座敷の長遊び、さりとては心なし。有時三井寺の御坊と逢馴しに、芝居過より酒に暮し、初夜より床のはてしなく、うきなから身をまかせけるに、明日の舞臺のうと〳〵



敷をもかまはす、いつとてゝ明六つのなる迄、家内是をなげきかなしむ一ねんの外へはゆかぬはずや、せめては地衣裝のひとつもしてくれし人は、其おもひやりも有に、なんぞ花代ばかりを捨坊主め、おのれ前の世の眠を覺せと呵責しに、忽に釣鐘背中に落かゝり、骨をくだき、宮川町より三井寺へいのふ〳〵とおめきし

紫は兩頭のみだれ髪

酒のうへにて夢大臣となつて、諸事申せし言葉のたかふは世にあるならひにして惡からず、人の心降照町に替り恩案橋をわたる足もとから、おもひの色の移氣とはなりて、けふは此芝居を見しや、何心もなく棧敷よりかりそめにうち詠めけるに、藝よくこなして、哥



かざりの出端、幕をあぐるより、其若衆の名を呼て是堺町の名物命とりめ、何の産れ替りあのうつくしさ因果目など、諸人の譽口しばらくやむ事なし。是に浮されて此太夫に逢事を好み、日比のよしみの野良を見捨、明暮外なる

色に惱しに、又情をかさねしを種として、恨文のもたしがたくて折節は是を勤め、有時はあれへしのび、其後には兩の手に花紅葉、月雪の朝夕ふたおもひに氣をわづらい、我物つかひなからよしなき戀に責付られ、當座ぬけの僞其身にのがれず、後の世のくるしみ貳寸八歩の舌をぬかれ、おもひ草にかくれかねたる武藏野のむらさきのゆかりの藝子貳人、兩頭のくろ髮を亂し、互に欲づくのおもひ人中に立たるはしらのごとくからまれ、むかしの下帶は蛇となつて腰を卷しめられ、此かなしさ絶入はかりなり。我いろくるひの諸分、金銀は殘る所もなく、おそらくはよろこはせけるに、それさへ是なれは、不埒の大臣來世の事おもひやられて哀れやと、椀久市太郎か聞ともしらずさけびける

燒づらが思ひは袖香爐に留る

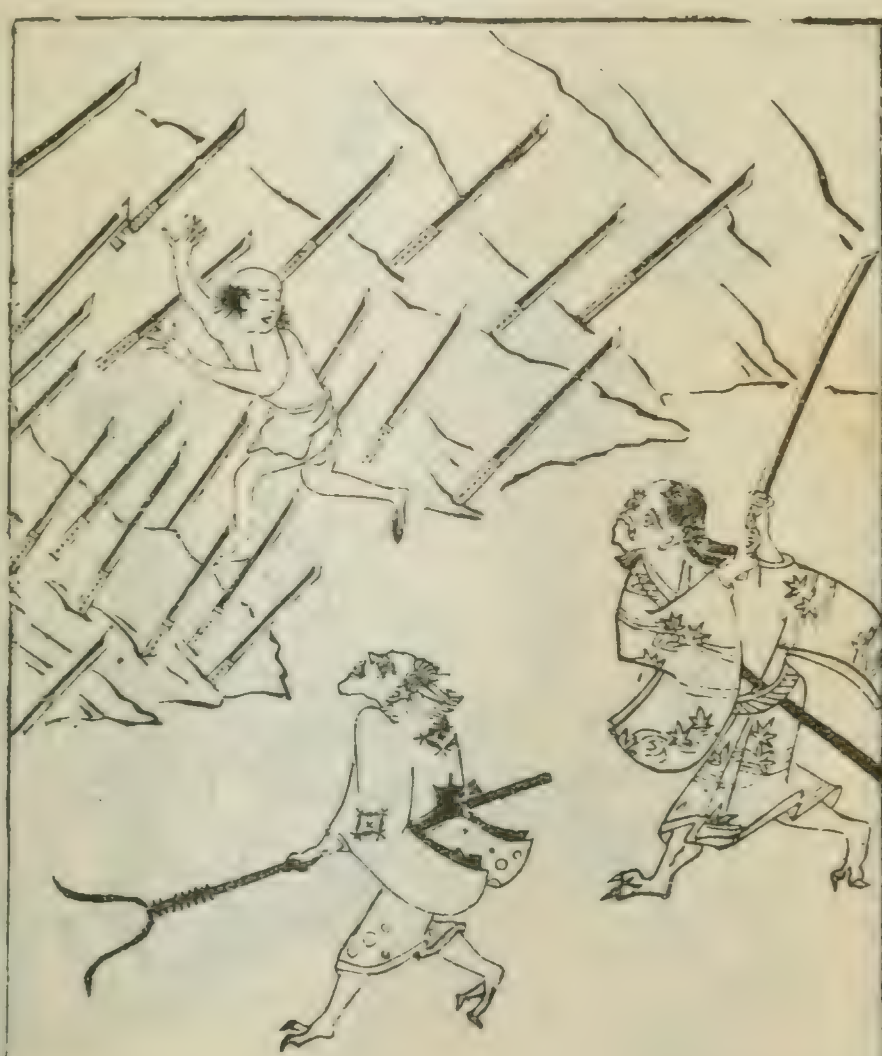


夜に三度日に三度燃る所と指さして詠めしに、不思義や初音に増る伽羅のかほりせしが、すかりたる野良いまた大

振袖を着て、火の車にやつれたる客を來て出しが、右の手に香箸、左に敷銀を持て、名香聞飽て鼻血たらし、さりとは娑婆三十双倍のくるしみ、おのれ若衆のたしなみにやう／＼一木の伽羅を無理もらいにして取て歸る。あまたの付合なればいやとはいはれず、其時のせつなさわきへゆくへきか、火かけんよはしと髭の有口をあきて吹立しに、哀れや此大臣のかたち、塵も灰も殘らずなりける。是をおもふに野良の物を取はつはひとつもなし。何によらずあれ成べし

約束のそら鞘

せめても勤め子にふるといふ事なくて、安大臣のなくさみにもなりぬ。遊女のごとく床にて子細らしく持てきて、四の五のいはゞ帶とかすまての仕懸、女よりはたんとむつかしかるへきに、かしらから尻は人の物にして、御意にまかせ是また氣さんし、かるゆきなり。殊更紋日といふ事もなくてまたひとたすかりなり。然ども二度目より



床にて似合しき御無心をいひ懸られ、それのみ親方がゝりの子は脇指に小柄さゝずに出るもおそろし。蒔繪類の印籠、ひかりよきさんこじゆ、かりにもさけましき所なり。女良はさしあたつてもらはるゝ物なし、若衆は追付入物とてほうろく頭巾鐘木にてももらはねばおかず。されども仕合せは年は寄とも振袖なれば、客の羽織をとられず、丸袖ならば床より裸にしてかへすへし、惣して素人大臣、をのれが分限に應せぬ借上をいひちらし、いやといはれぬ無心かならず迷惑したことなれとも、腰の物の金拵へを請合、手前にありあふ鍔目貫を取てかへり、むかしの劔今の算用入金に分別し、我身のさひをかまはす、其脇指をかへさぬむくひ、今荒砥山におひのぼされ、一寸あゆめばさつとは切、貳寸歩めばすんと切、壹尺七八寸の劔の山、目前のかなしみ、野良なればとて尻のはけるそら鞘いふましき事ぞかし



むねひどく太鞁食次

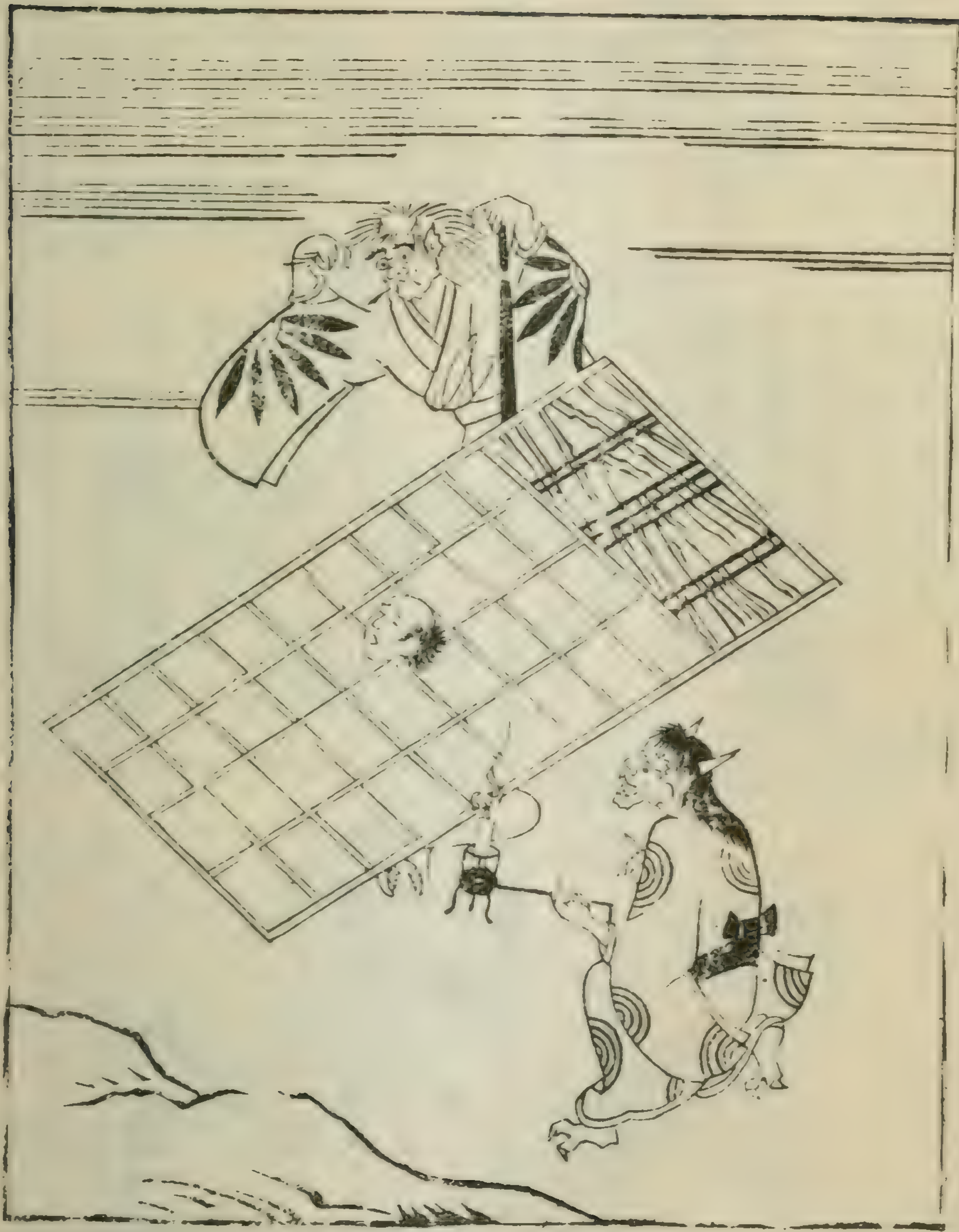


爰にまた足つきの肴臺に、焼烏賊蛸ひだらの糸筋、蒲鉾からすみいろ〳〵取揃へ、黒ぬりのとさんに金ぶたの間鍋有て、いかさま大臣らしき人、呑んとすれは、たちまちにくはゑんと燃あがり、くびをのばし咽ならし、手をふるはしてかなしむ。是を下戸の目からさへ哀れに見しに、良おそろしげなる若衆、くろがねのしやくしをもつて、ごく盗人めとさいなみける。是を何事と尋ねければ、椀久箸持かたへゆひをさしておしへける。あれは色茶屋にしてさま〳〵の菜好み、鱸の白煮たひらげのあへ物、鴨食膓のさしみ、むづかしき事どもさせて、其銀すまさぬをとらへて、しやくしてあてかふ所也

指は切目に塩よりむごし

身過程いつれの道にもかなしき物はなし。世の中を渡りくらべと讀しをおもへば、鳴戸の浪風よりは人住家の水壷さはかし。鍋尻焼は塩味噌米薪、一色かけても下帯かゝぬ若衆のごとし。外からは見えずして内證きのとくのみ、心の海のうき沉、あまの仕業とて、千尋のなる岩根をさがしてあはひなご取しに、かならす惡魚有て五つの指をくひきらし、世わたりとて戀にもあらぬ身に、疵を求めける。むかしは勤めの女、是非もなき口話になりて、指を切、爪をはなちける。是さへ見くるしきに、いつの比よりか芝居子、わけよき大臣に指を切て遣しける。かくあるからは其身見捨がたく、家買ほどの合力のほりつめになりぬ。よく〳〵合点して見しに、欲なればこそ切もすれ、心中にて切らるゝ事にはあらず。それを情もなく切せて、する〳〵音信もせす、あまつさへ其指を包紙に名をしるして、大勢の中にて耻をさらし笑ひの種となし、此指ひとつ大分の銀目杯と遣ひもせぬくせに、名をたてらるゝ事こつずひにとをつてうらみなりと、其大臣を爰にさいなみて前生の指を切かへす所、見給へおそろしや、是をおもふに、うまれつきたるを口すきなればとて、よくも〳〵切ける。夢〳〵むやうの沙汰、舞臺子の名をしるほとの人、切する事にはあらす、身に覺のあるなり。壹筋つゝ上髭を心まかせにぬきていたさをしるへし

しやうじは明りを走る首かせ



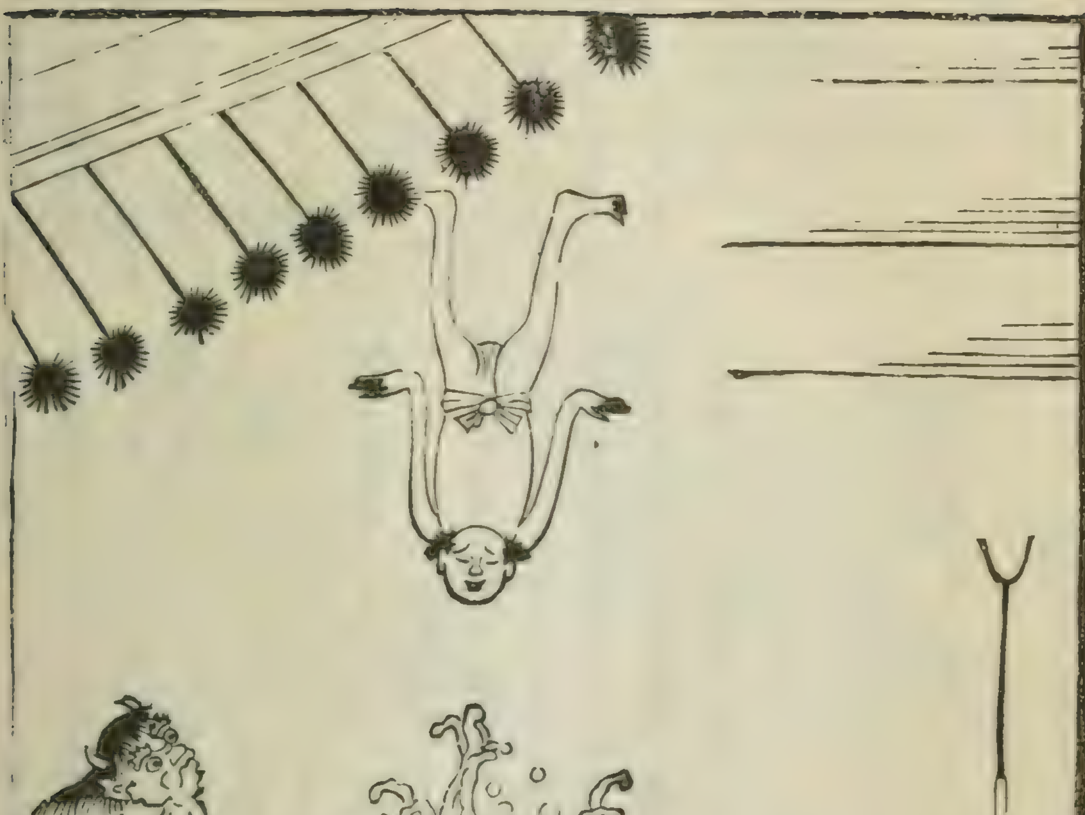
舞臺子はまたもなき世の業なり。諸人のおもひつくやうにとて愛染を祈り、氣のそまぬときも笑ひを作り、昼の役目を大事に仕舞ば、夜はまた色宿によばれて、その人にあふまではいかなるうきめにかと心をなやまし、長座敷をかためけるに、すこしの事をとがめられ、わるごう當言をいはれしも、耳に銀一枚と合点させて、むねんなから御機嫌をとりけるに、酒長じて不足をいひ出し、立さまに科もなき疊を切さき、屛風障子にあらしける。是本大臣のせぬ事なり、國土のつゐへそかし。今また汝おもひしれと、身をいため骨をくだき、腰障子の首かせ、おのれうごひても見よ

買掛りは絹袖の泪

しゆらの太鞁やくらよりまつ逆まに落る大臣あり。あれはいかなる事ぞ、したはしやうねつの大釜にへかへる戸川瀧川の水、たちまちに湯玉燃あがりぬ。すかぬ事こはやといへば、椀久語りけるは、あの男ども色の客にはあらず、南郷への諸商人なり、今あのごとくせめらるゝは、時分世帯持の子ども、萬不自由の臺所なれば、客を見かけて物調へけるに、肴屋は三月の中鯛を三匁五分と付、青物屋はさかりの西瓜を二匁五分、橘柑十を壹匁貳分、鳥屋からは小鴨一羽を七匁と申、玉子一つを四分づゝと書付、此通ひ見ては、りやうぢに野良宿にて湯つけもくはれず、此米も世間に四拾目の時七拾五匁ばかりの賣掛、細漬のかうの物一本も四分か五分にあたるへし。是皆錢をかむごとし、定りの集礼あはぬ客なり、内證聞ほとふびんまさりぬ。殊更呉服物は着ねばならず、しれた郡内嶋一疋を百拾匁にうられ、飛鹿子の紫帶壹筋三拾五匁、万事此通りなれは、身は勤めにやつれ、金銀は人の德になりぬ。さしつまれば三割半の借り銀、あたまの上る時節なく、枕うらみて勤めかなしく、明暮の大節季、是非もなき借錢つもりて、世の義理をおもひ、くるしきむねをいため、乞立らるゝ買掛に断りも聞わけず、むごきさいそくに命をすてさせける。是をうらみる泪は袖にもあまる呉服ざしとや

本大臣成佛金銀の花の臺

夢路はるかに高山岩の岨づたひに行は、色の地獄もかきりを見つくし、おのづから惡心ひるかへし、二たび浮世



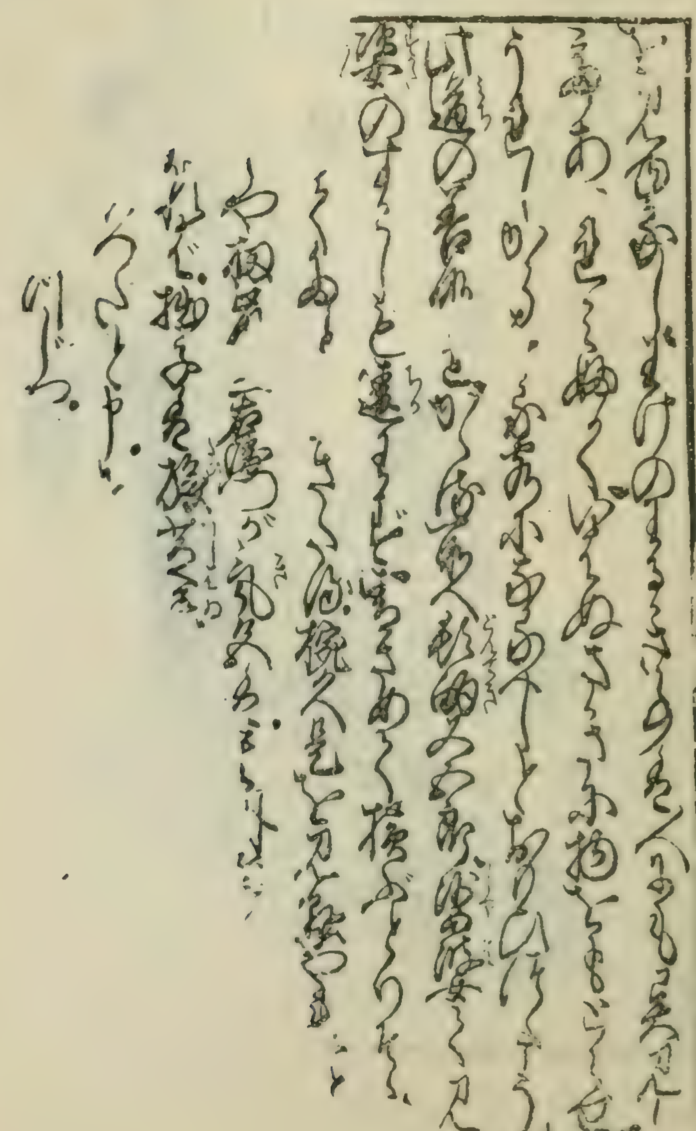
にかへり、野良のさはぎするとも諸事を見ゆるし、わけのわるき事は人にも異見して、あはれみふかくいはぬさきに物をもとらせ、うれしからする客になるへしと、おもひつくこそ此道の善なれ。かゝる所へ頓的又五郎、娑婆て見姿のすこしも違わず、青さめて横ぶとり、そ　てたと　きたる。椀久是を見懸、やれ　しや扨、嵐三右衞門が氣色は、其外

れば、拙子は旅芝居

つたと申す、そ

つじや

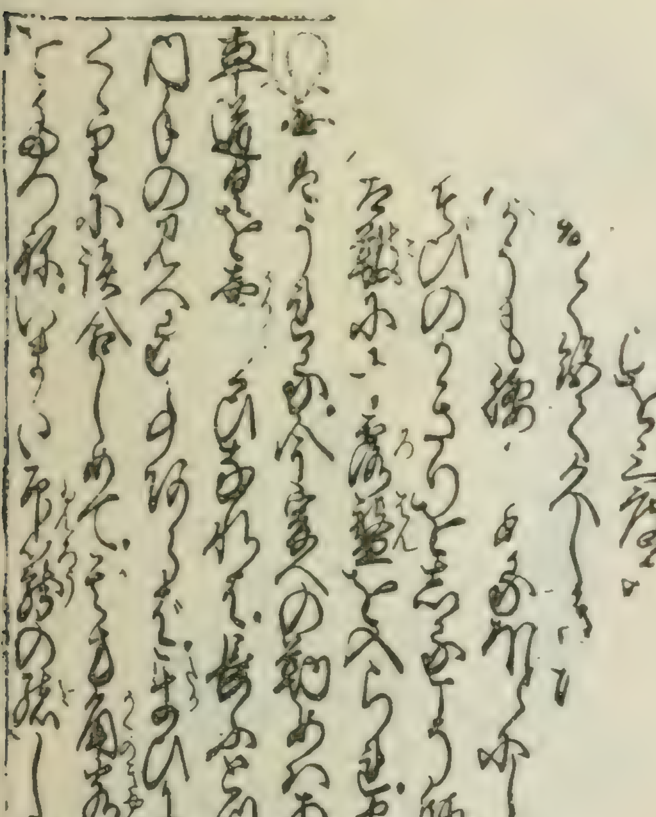
分



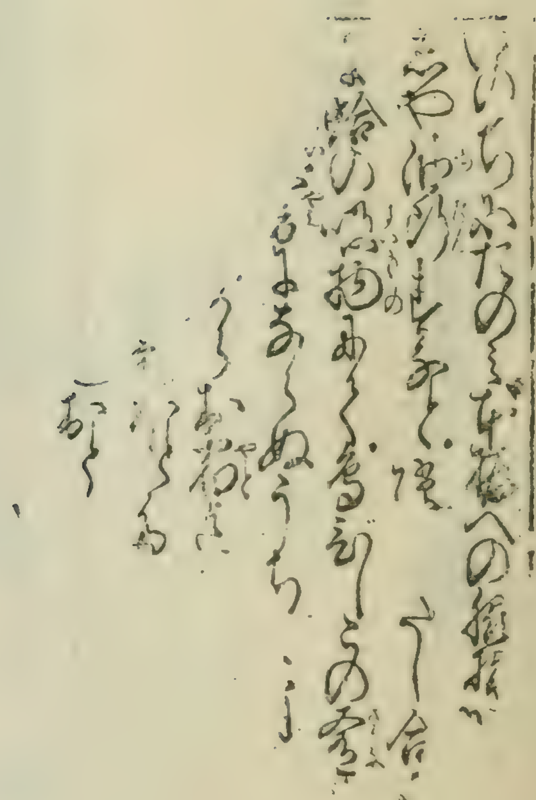




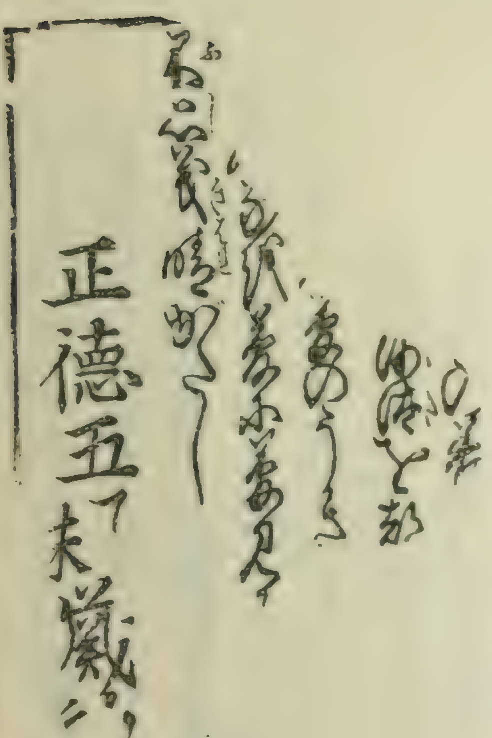
ひを三度
て絶て久しき
かうも腰　ぬるほとにしてや
そびのかきりをしるこそ師大臣と
太鼓に十露盤を入られ、家は質
の蕪はうれる。今爰への勤めはありふ
れし花車道具を賣　ひなれは、長ふ
とつて今四五度、其内手の見へる事あ
らば、互ひに内證いへと高く〳〵りに談
合しめて、其方　角客に手前の様子を
たつね、いまた印籠の緒しめの玉の有
を



いのちにたのみ、本拵への脇指
じや油断す、なと、隙　さし合
に蛤の吸物にて、鳥びしこの肴
闇にならぬうち
からお宿迄
是ほとた
おと

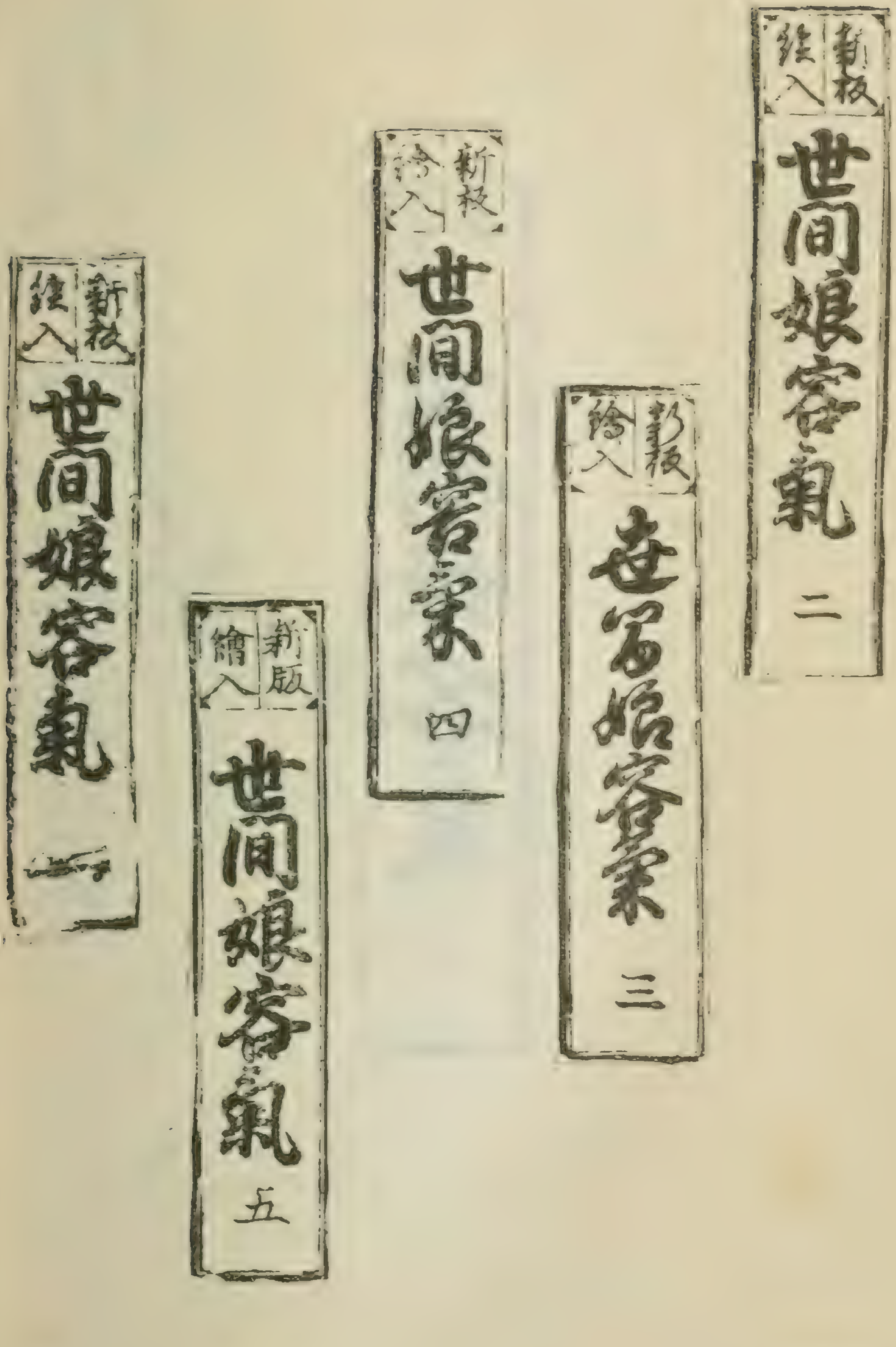


の
沙汰を都
夢のうき
なを夢に夢見
不思議晴がたし。
正徳五乙未歳



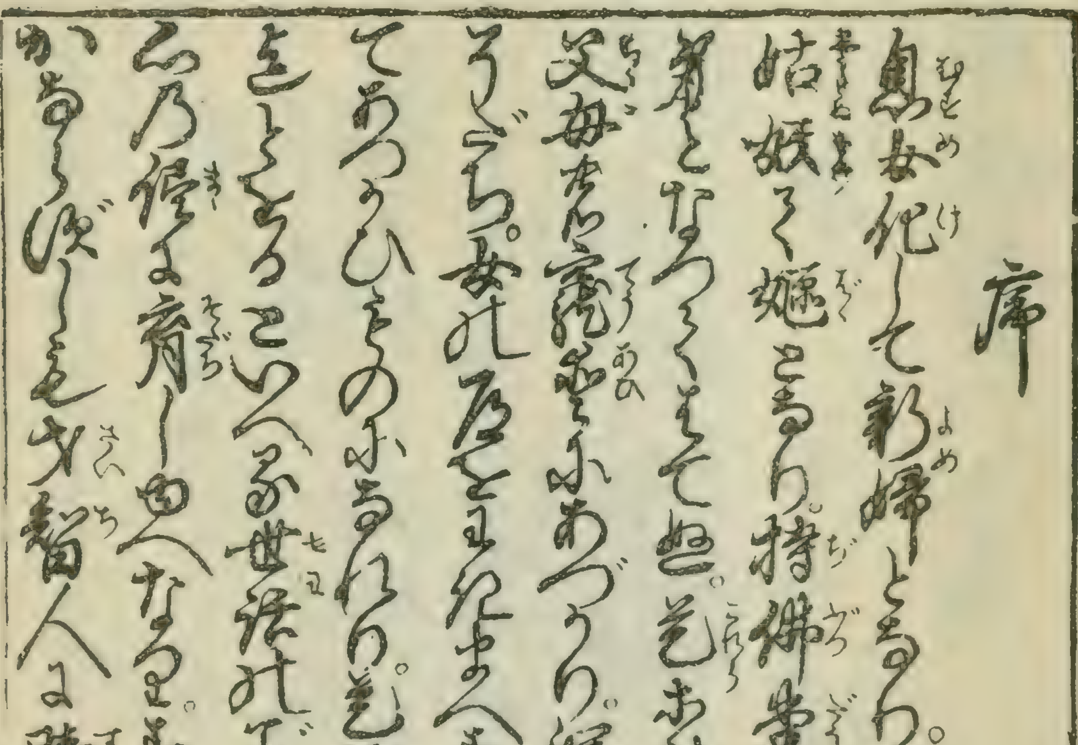
新板
繪入

世間娘容氣 一


新板 絵入 世間娘容氣 二
新板 繪入 世間娘容氣 三
新板 繪入 世間娘容氣 四
新版 繪入 世間娘容氣 五
新板 絵入 世間娘容氣 一

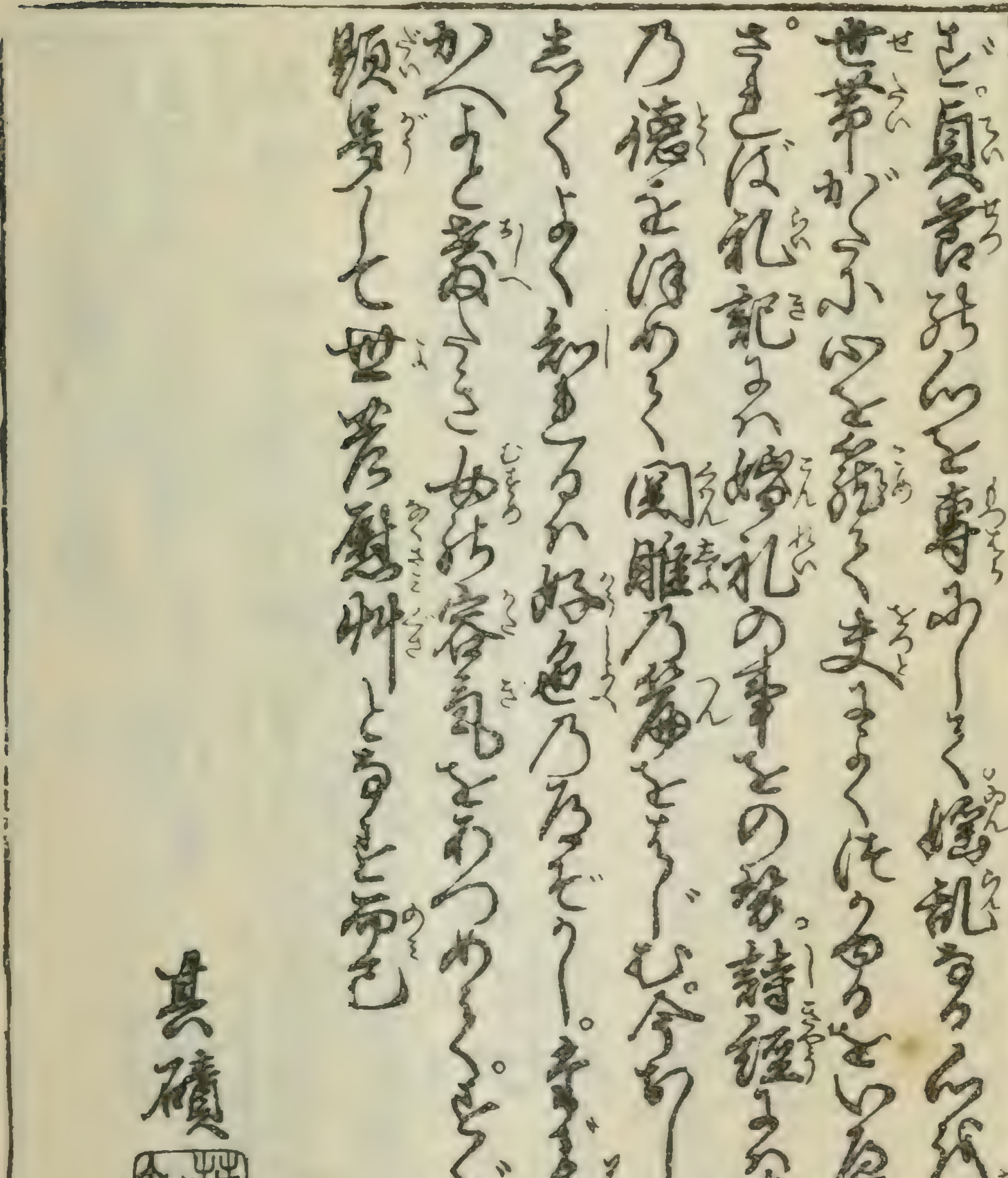
序

息女化して新婦となり。娌變じて姑となり。姑妖て嫗となり。持佛堂とひとつに置所のない身となつてはてぬ。是等の嫗は幼なき時より父母の寵愛にあづかり。深閨の中に我まゝにそだち。女の道をわきまへずして一生孫子のもてあつかひものになれり。是皆三つ子の智惠八十迄とをるといへる世話のごとく。幼少より教を聞ず心の儘に育しゆへなり。すべて女の道といふは。かならずしも



才智人に勝れたるをいふにあらず。貞節の心を專にして。婬亂なる心を退世帶がたに心を籠て夫によくつかゆるをいへり。されば禮記には婚禮の事をのせ。詩經には女房の德をほめて關雎の篇をはじむ。今をしへずしてよく知れるは好色の道ぞかし。たゞ色にかへよと敎たき女の容質をあつめて。すぐに題號して世の慰草となす而已。

其磧


さ貞節なる心を専にして婬乱なる心を退世帯がたに心を籠て夫によくつかゆるをいへり。されば礼記には婚礼の事をのせ詩経には女房の徳をほめて関雎の篇をはじむ。今をしへずしてよく知れるは好色の道ぞかし。たゞ色にかへよと敎たき女の容質をあつめてすぐに題号して世の慰草となす而已
其磧

世間娘氣質一之巻

目録　　子息氣質追加

男を尻に敷金の威光娘

女房あつかひハ悪合縁気をくる花見小袖

継と娘始末なあつかりげ肌只ハ瘦の黒木賣

孝への踏違智恵のまはりつゝさうる老娘

大神楽は郷を見まくねのかし

世間(せけん)にかくれ乃なひ寛濶(くわんくわつ)な驕娘(おごりむすめ)

女は女郎ひハ栄耀(ゑいえう)に餅乃皮むくような贅物大臣(だいじん)

やぼでゆひ西瓜乃わたれ喰色ハやあよ簫乃笛

に祇園よなう一座(ざ)に呉服(ごふく)の三人(にん)遊女(ゆうぢよ)は懺悔物(さんげもの)

百乃銭(せん)よりみ道てつる青好(ずき)乃娘

世につれて替る色の紫式部(むらさきしきぶ)が目前男

奥乃差ては女の猫よかくり遊女屋手紙

かた盃汁の三千一字てハ吉気ハ分別顛

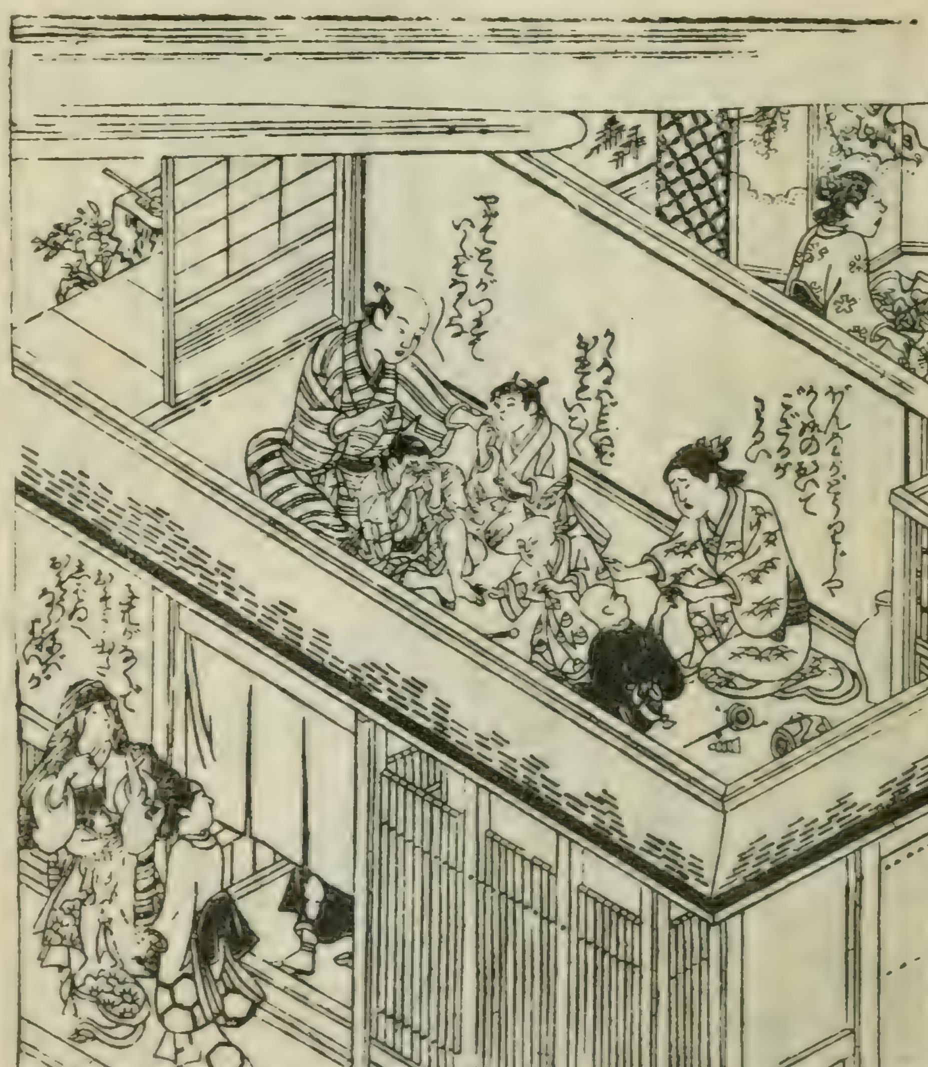
男を尻に敷金の威光娘

往古は律氣千萬なるを人の娘氣質と申待りき。近年は人の娘内儀もおとなしからずして、けいせい遊女しばゐの女形のなりさまをうつし、籠持ぬ靈照女の繪を見るやうに、胸高に帶して男のすなる袖口ひろく、据腰蹴出しの道中我身を我儘にもせず、人の見るべくを大事にかけ、わき顔にむまれつきし痣をかくし、足くびのふときを裙長にしてつゝみ、口の大きなるを俄にすぼめ、いひたい物をもいはず、思ひの外なる苦勞をするは今時の女ぞかし。つれそふ男さへかんにんせば、鼻の穴の内つら迄みがきをかけずとくるしかるまじ。生たがる首筋のおくれをにくみ、産毛迄をぬきそろへて、立砂もらぬばかりの掃除、見るを見まねに上をまなぶ下とて、つぎ〳〵の腰元中居、右の手に酌子の跡ある食燒迄、かつをかきの小刀にねた刃をあはせ額を剃りあげ、ぼんのくぼの芋毛を刈て、茶袋の古きに米糠を入て、入たがつて待てゐる傍輩の手前かまはず、湯風呂に長入してめつた磨きにみがけど、きめ所をしらぬゆゑ結句たゞれたやうにてむさくろし。いにしへは女の伽羅の油をつくるといふは、遊女の外稀なる事成しを、今は娘の子の臍の緒迄に伽羅の油をぬる事にして、毎朝あたまに五兩入の曲物一づつ、飯米の外の入めと算用せねば、うつかりと女房はもたれぬ浮世ぞかし。色の白きは十難かくすとて、生地にてかんにんのなる顔にも白粉をぬりくり、目のゆかぬ所はそれなりけりにして、顔と首筋と安樂庵の袋見るやうに、片身がはりなるも見ぐるしかりき。されば當世の娘の風俗洒過て、遊女のごとく端手になれるは母親の鼻のさきぢゑにて、大方なる器量なれば娘自慢して、めだつ衣裳をきせて人立多き寺社へつれゆき、浮氣男の見かへし立どまるを悦び、おそらくこちのやうな娘持たものは世界に有まいと鼻高うしてゆかるるはにくからず。十三をかしらにして五人迄年子にまうけて、母ぢや人といはるる家主の身を持、物見物參りに遊女のごとく品つくり、端手なる衣裳着かざり、かゝ樣ゆかうかと聲々に啼わめいて、跡追ふ子供を内にすて置、子のない顔して世間の男に見られにゆくなど、たとひ心は貞女にしても、子に

かへて伊達を好み、人立多き所を心がけてゆく氣からは、內の事も子の事も親の事もわすれはてゝ、大臣めきたる當世の美男に、自然と心はうつりにけりな、いたづらの浮名たつ基ぞかし。惣じて今時の女の風俗猫の目と同じ事にて、時々にかはるといへり。氣を付て見るに今朝出立の姿とかはり、花見歸りの夕暮手ばしかく木綿足袋をぬぎて袂に入れ、銀の笄を楊枝にさし替、玳瑁の櫛も鼻紙袋にをさめ、緋ぢりめんの內衣を內懷にまくりあげ、上着の衣裏をかなしみ、首筋をとりのけ衣被は挾箱に入させ、加賀笠につきたる白ぬめのくけ紐は、汗づかぬ鼻紙手拭まきそへて供の下女にもたせ、宵闇うれしく植女の田の草取にゆくごとく裙まくりあげ、どれが奧樣やら食焼やら打まじりて風俗亂れ、酒きげんに貴なる聲音の歌ざいもん、八坂八軒繩手の茶屋の戸をたゝきて、遊女の見して歸るなど、男に增つて京の女ほど大膽なる事はなし。むかしは八瀨小原の黒木賣、



女ならでは脚絆といふものははかざる事なりしに、近年の女世智がしこくなつて、歴々の奥様まで小袖の裙をいとはせられ、紅の脚絆蹴かへしに見えて、其女中の下心おもひやられてさもしかりき。後は花色紬の首巻して、衣裏のよごれぬ用心し、油堅のかうがひ曲のの髪に、埃のかゝらぬ工夫して合羽の烏帽子こしらへて、人の見ぬ野中ゆく時は鹿島の事觸見るやうに着てありかうもしれず。近き比は武家方の女中を見ならひ、都に雨合羽着る女も見えける。とかくはさかしき世とて七つ八つになる小娘も人まかせの髪結姿氣にいらず、髱なしのなげ島田に、隱しむすびの浮世元結をかけてと、こましやくれたる物好、古代は緣付の首途には親里の別れをかなしみ、泪に袖をしたしけるに、今時の娘おとなしく仲人をも



どかしがり、身ごしらへ取急ぎ乗物待かね尻輕に乗うつりて、悦喜鼻のさきにあらはなり。殊更都そだちの娘は、外の國より心はやくしやれて、情の道

をわきまへ、誰がをしへねど前後を見て、身をたしなむ事ひとり知れり。かゝる盛の世に、かゝさま赤子はどこから産れますと、十六七になつても親の懷そだちとて戀の道にうとく、男は恐しきものとばかり覺えて、かりそめに人手をとれば上氣をし、袖褄引にも遠慮なく聲高にして其男手持わろく、今の世の戀しらずめと是をそしれど、人たる人の小女はかく有たき物ぞかし。爰に室町の呉服屋の秘藏子、きりやうすぐれて見る者魂をうしなひ、諸方からいひ入ある中に、新町の酒屋へ緣さだまつて近々に送らるゝ筈、此人の聟になるもの前生にして、よく〳〵よい戀の種を蒔おいてかゝる仕合にはあひけるぞ、しかも美人に千兩の敷金、どこの國にも有まじ。唐への投金するも、これは商の手廻し利を得る事もあるに、娘の子につける物ははじめからうせ物にたつぞかし。定紋染こみの覆ひかけたる長持簞笥、五六町もつゞきて近所目をおどろかし、美人にかゝる美々敷こしらへして、千兩の敷金付るはあんまりよい事過て、却て娘に贅がつき、內證にわるい病があるか、さてはろく〳〵首か、いかさまにも子細なくてはと、法界悋氣の世の中、いろ〳〵に評判しけるに、やまひものでもろくろ首の類でもなく、三十二相打そろうたる美人、みぢん疵氣のないやうす、內證しつたものゝ話に、聞く人のどをならしぬ。扨祝言の夜のことぶき、獻獻の盃事をさまり、お部屋にはお床とりて長枕釣夜着の下に嫁君臥し給へば、つゞいて乳母も御そばはなれず守りゐる所へ、聟はすこし男自慢のむまれつき、鬢先かきなで今宵を千世のはじめと、釣夜着の下にはいつて、姥きづかひせずといてねやれ、祝言の夜をいかゞと心もとながるは、百年いぜんのとつと氣のとほらぬ昔の事、今時ついてゐるなどとは初心の至りと、はや我物にして近寄れば、嫁御はむく〳〵と起あがりて、乳母モウいなうとあるを、お道理〳〵お乳あがつておよりませと、をさない子をするごとく膝の上にかきよせ、乳房出せば十七になる娘御、大ぶり袖を着ながら乳母が乳くはへてずい〳〵とすはるゝこそけうとけれ。聟殿あんまり興さめて、乳母こりやどうぢや、いつもかうした事かとあれば、成程御兩親樣おちいさい時より御秘藏あまり、萬此お子のお心にさからひ給はず、御幼少の時の御癖がやまずして今に此通りのお身持、お五つの年お乳の人を緣に付られましたれば、

御うばをしたはせ給ひ、當座にお目を見つめられてから兎角乳をはなしてはならぬ子ぢやと、それから五年三年づつ今に至る迄、乳のあるものがおそばに添乳いたさねば、御きげんがわるうござります、お前にもあんまり聲高に物仰られて下さりますな、ひよつと寢付にわやくが出ますと、石臼箸にささうでござります、コレいと様、わやくおつしやれずと靜かにおよれ、ねんねこ／＼と脊中をほと／＼たゝいてゐれば、聟は大かたならず肝をつぶし、こりや女房ようだではなうて、乳のみ子を養子したやうな物ぢや、こんな事なりや思案があると少し腹立めいた顔つき、そこを御不承なされますかはりに此御器量に千兩といふみやげがござります、二十にもおなりなされましたら、かうはござりますまいといふにぞ、此聟も見分よりは内證にたらぬ所あるか、千兩の土産といふに胸をさすり、乳母と同じやうにむかし／＼爺と姥との話などして、とも／＼に嫁御をすかすぞをかしかりき。よめは父母のあいたてなくそだてられし、いとけなき時の調子今に改めず、聟が耳喧しういふをきらうて、乳母あの人を彼方へやりやといじり出すこそ氣の毒なれ。先御機嫌のなほる迄は御勝手へ御出なされて下さりませ、お腰元衆いと様のねそゝくれて御機嫌があしい、起てござれといへば、臥したる腰元共起あはせ、いと様是は夜ざといのと、塗長持から高蒔繪のおかは取出し小便やるなどけうとかりき。いざ御機嫌なほしに太神樂事していさめませうと、御手道具の中から箔おきの太鼓出して、獅子頭つかうてさわぎまはる。臺所には是をしらず明日部屋見舞のお衆へ、御馳走の料理をこしらへゐたりしが、太鼓の音をきいて、よい衆の祝言の作法は、お部屋へおいりなされても各別、太鼓うつだしの故實と、物知顔する番頭が感ずるも又をかしかりき。

世間にかくれのない寛濶な驕娘

朝貌の盛は朝詠こそ一しほ涼しさもと、宵より奥様の仰られて、家居はなれし裏の垣根に、腰掛をならべ花氈しかせ、重菓子入に切飯品々の肴このませられて、杉やうじに蒔繪の小盆、茶瓶に梅尼の出し茶を入よ、明六つのすこし前

に行水するぞ、髪は三つ折に帷子は瀧縞に、桃色の裏付を取出せ、帯は鼠繻子に丸づくし飛紋の白きふたの物、萬に心をつくるは隣町から人ものぞくものなれば、つぎ〳〵の腰元共にもつぎのあたらぬ帷子を着せよ、釜の座の妹が方へは常の起時に乗物むかひにつかはせよと、臺所賄ふ家久しき女房に言付られ、ゆたかなる蚊帳に入給へば、四つの角の玉の鈴音なして寢入給ふ迄、番手に團の風しづかなり。我家の裏なる草花見るさへかくやうだいなり。惣じて世間の女のうはかぶきなる事是に限らず、はやり芝居に三軒つゞきの棧敷とらせ置ながら、長樂寺の開帳場の歌ざいもんに立寄、是に聞入て芝居は見ずにかへり、十種香歌がるた琴三味線繪かき花むすび、すべて女のなぐさむ程の事は見はて仕つくし、今日は眞嶋原の相撲の初日、七五郎雷電が勝負是は見ずにはおかれまいと、内に金砂子に秋の野かきし乗物にのりはしらかし、女のすまふ見るといふ事むかしは沙汰にもきかざりし事ぞかし。世間一切の男、女房に甘うなりて、何をいうても細目してうなづくゆゑ、成敗者見に粟田口へ辨當してゆくなど、興のさめたる穿鑿なり。是を思ふに殷の紂王の后妲己は、慰につきて、炮烙の法を見て目をよろこばしめ、周の幽王は褒似にのびて烽火をあげて見せられしも、皆女房になづみて目の見えぬゆゑぞかし。奥様の御用とて西瓜の代三百六十五匁、新小判にて八百屋が請取てかへれば、ところてんの代二拾八貫三百廿六文、大男がさしになひにして四條の彌吉が所へすましにゆくなど、是を以て外の驕を思ひやるべし。むかしは女の煙草のむ事遊女の外は怪我にもなかりし事なるに、今たばこのまぬ女と、精進する出家は稀なり。爰に町人ながら能衆とよばれて、其名都に立賣の有德仁、代々家職もなく名物の道具つたへて、雪に茶の湯花に歌學朝夕世の事業をしらず、亭主は萬事大名氣にて臺所を見ず、内儀はやごとなき御方の殞し子にてならびなき美人、歌道は其家の流に心ふかく、しかも音曲の業妙にして簫の名人、六月に冬の調子をふきて霜をふらし、壽命の調子をふいては夫の鼻毛をのばさせ、藝といひ氣分といひ萬を花車でかためし身、夏の夜は蚊除の間とて薄絹の障子の中に、五尺四方の盆石に水行燈をしかけ、宇治勢多の螢をとりよせ、暑氣をしらずにくらし、冬は八人詰の火燵にあたりて、鬢切したる女童子に足の裏をさすらせ、

夫婦ねながら名所香をきいて、富士淺間室の八島煙りさま〲袖にとまりて、匂ひ立賣の伽羅さまとあがめて常住寛濶なるくらし、此人の親仁いかなる富貴の種をまきおきて、今子の代に銀のなる木の山をなし、利銀請取針口の音いやしき物ながら、貧家に鼓の音を聞ておもしろからず、此宿大節季に懸帳をさげたる者ひとりも見えず、萬事霜月のはじめに正月の來て門松立てぬばかりなり。此暮しにてしかも夫はわけしりの美男にて、廿四孝の中にもない、母よりは女房に孝行なる男是諸果報なれば、何か此上に外なる願ひはあるまじき事なるに、女の身にて我女の姿をきらひ、なんの因果に女と生れて、瘦たる男ひとりをまもり、自由なる遊びをせぬ事ぞと、是のみ案じてゐられしが、思ひ切て亭主に訴訟し、笄曲の髮を切て、二つ折に髱出して若衆めきたるたてかけにゆはせ、不斷の風俗も裙みじかに裏をふかし、八反掛の羽織に金ごしらへの中脇指、おぼろ富士といふ大編笠きて亭主とつれだち、毎日諸方への遊山長じて、高野へのぼつて女めづらしがる法師の心だまをうかして見たいの、熊野浦で鯨つくを見せて下されのと、さま〲のねがひ、いづれ夫の威なくして、今時の奢女房の心まかせにまかれなば、入唐して今はやる國姓爺が城がまへ見たいといはうもしれず、男は元來女房にあうて目のないわろなれば、內儀が男の風をまなぶを替つた物好とよろこび、女房つれて島原へ出かけ、花菱屋が座敷へとほり一、我等御臺所がしやれたる姿を拜見せよ、恐らく唐にもない物好、何とかうした器量は口きかるゝ太夫衆にも有まいが、しやれるか〲と內儀にも名どりの女郎よんであてがひ、餘念なきあそび、天上の娛樂も是にはおよばじ。ある日女夫づれにて祇園町のはやり茶屋にゆきて、太鼓まじりにさま〲の大さわぎ、亭主內儀の藝自慢して、女房共に簫をふかして聞すべし、なんぢら黑白の粹共につきあひ、いろ〲の音曲はきかうが、名人の簫をきいたる事、おそらく祇園町はじまつて有まいが、中々天竺から祇園殿此所へ宿ばいりあそばしてからついにない事、緣によつて稀なる奧樣の簫を承る事、よい時節に生れあはせて有がたい仕合と、あるじ夫婦疊へ額を植ければ、大臣てうしにのつて、さあ御臺所迚の事に奇妙をふいて聞されよと、玄宗の顏して床柱にもたれかゝり、鼻高うしてゐらるれば、內儀は元來簫の名人、時は秋なり秋風落

薬して旅人故郷を思ふと云、漢楚の戰ひの時九里山にて張良が嘯たる一手、上手をつくしてふかれければ、隣座敷に今まで高なしにさわぎたる血氣の客共、俄に陰氣になつて、親父が身から脂を出してまうけられた金を、わけもない事につかひはたすは冥加もない事と、言付し夜食喰ずに歸りたい心になつて來るこそ奇妙なれ。座敷の興によばれたる冶郎は、實の親のかち荷持して、今日をくらし兼らるゝ故郷の事を思ひ出して、三味線抱ながら泪ぐめば、親方がかりの白人はよぶ人もなくて、三十日ながら内にゐる時の事思ひ出せば、茨の上に腰懸たる心地して、よその女共はこつならしにゆくに、此方のは尾の多い烏賊幟で尻があがらぬと、嗅が當言いふもきかざるのひへもんだ顔して、無念ながらうじ〳〵として油火も費と、暗がりに追込まれて煎じ茶ののみたきにも、遠慮しておのづから肩身すぼりて、悲しき隙日の時をかたつて泪をながせば、自前の白人は相撲



取ほど裸になつて働いても、付飯の飯料と呉服代に引れて、際々のくるしみ是でなければ世渡りはない事かと、よんだ客の手前もかまはず、互に身の上をかたりあうての忍び啼、太鼓持は間のある節季をおもへば、此暮は欠落か首縊仕舞と、もんさくやめて、アヽあぢきない浮世ぢや、たいこ持の役とて無理酒のあひをさせられ、埒もあかぬ大臣の端歌を讃、我よりは鈍い客にたはけものといはれ、虫に入ぬ事にも笑ひをつくり、女房共のかくす事まで人中でかたらせ世に身過ほど悲しき物はなし、かくお氣に入ても五度程召しつれられた上で一角、よう下されて二角ぢや、此廣ひ世界に小判の降國はないかと、指のまたすぼめて無常を觀ずれば、慾の深いあるじ夫婦も何となくむじやうに後生氣になつて、どうぞ虚言



つかぬ商賣もがなと、簫の一音をきいて心亂れて、思はぬ涙をこぼせば、奥口の客共はいつも面白い座敷が、今日はいな事で鬼界が島へ流された心地が

するとせつかく金出して慰にようだ白人と、浮世のならぬ世帯咄して、不憫さに二朱ひとつ合力して袖をぬらして茶やから歸りぬ

百の錢よみ兼る歌好の娘

闕々たる雎鳩君子の德を助くといへり。唐土の宣帝は無塩君といへる醜き女を后と定られ、此智を借つて政道を執行ひたまふに、齊の國大きに治れり。是を今時は爺嚊とて笑ふ事にして、たまたま女房がよい事いうても、女の鼻の先智惠と頭から打こみ、妻女のいふ事をもちゆるは耻辱のやうに思へるは大なる誤ぞかし。世に女房をやしなふ顔して、女房にやしなはるゝ亭主多し。おのれが智惠の曇りを磨ぬ、鏡屋の愚平次とて久しき町人、代々小家をもちくづさず、落もせず秀もせず、いつも一尺の鏡の中を廻つて小さい弟子二人に腰をつかはせ、借錢せぬを手柄に世をわたる律義者あり。縁とて此者の妻は御所方のお歴々のすゑに召使はれて、歌書の御文庫預りし、四人の中の其ひとりの女なれば、今町人のせはしき世に住ながら、ありし昔の玉かづら色つくれる面影常にかはり、不斷紫に紋なしの小袖いくつも同じ重ね着して、其色の後帶朝見る姿殊にうるはしく、諸人何となく氣を移して鏡やの紫式部といへり。大内山の花の香どこやら自然と備りし所ありて、もとより琴をひき歌の道に心ざしふかく、万花奢なる行かた、擂鉢のうつぶせなるを富士をうつせし燒物かとながめ、釣瓶取を小船の碇かとやさしく見なし、同じ油火も松明すゝむるといひ、一文菜の鰯をおむらさきのおぼそのと、首筋もとばかりせゝり箸して、手元に延紙おいて一口喰ては口のごふなど、物毎やさしく糠味噌迄も酒塵と見るを見まねに弟子小童まで言葉あらたまり、亭主が片言も女房を恥て大かたの事はいはずにくらし、我ばかりよい物持た顔付にて、妻女を浮世のたのしみと、手の物の髭ぬき鏡取て見れば、跡の月より鼻毛も餘程ふとくなつたと、女房自慢にいつとなく家業ぶさたに成行、内證はからの鏡屋となつて、花奢事好んでたしなみふかく、寢所から鏡見て亭主に寢顔も見せぬ、紫式部も、身代にからまはされて、うば玉のとよみし我黒髪もそこ／＼にして、諸肌ぬぎて脇腹に

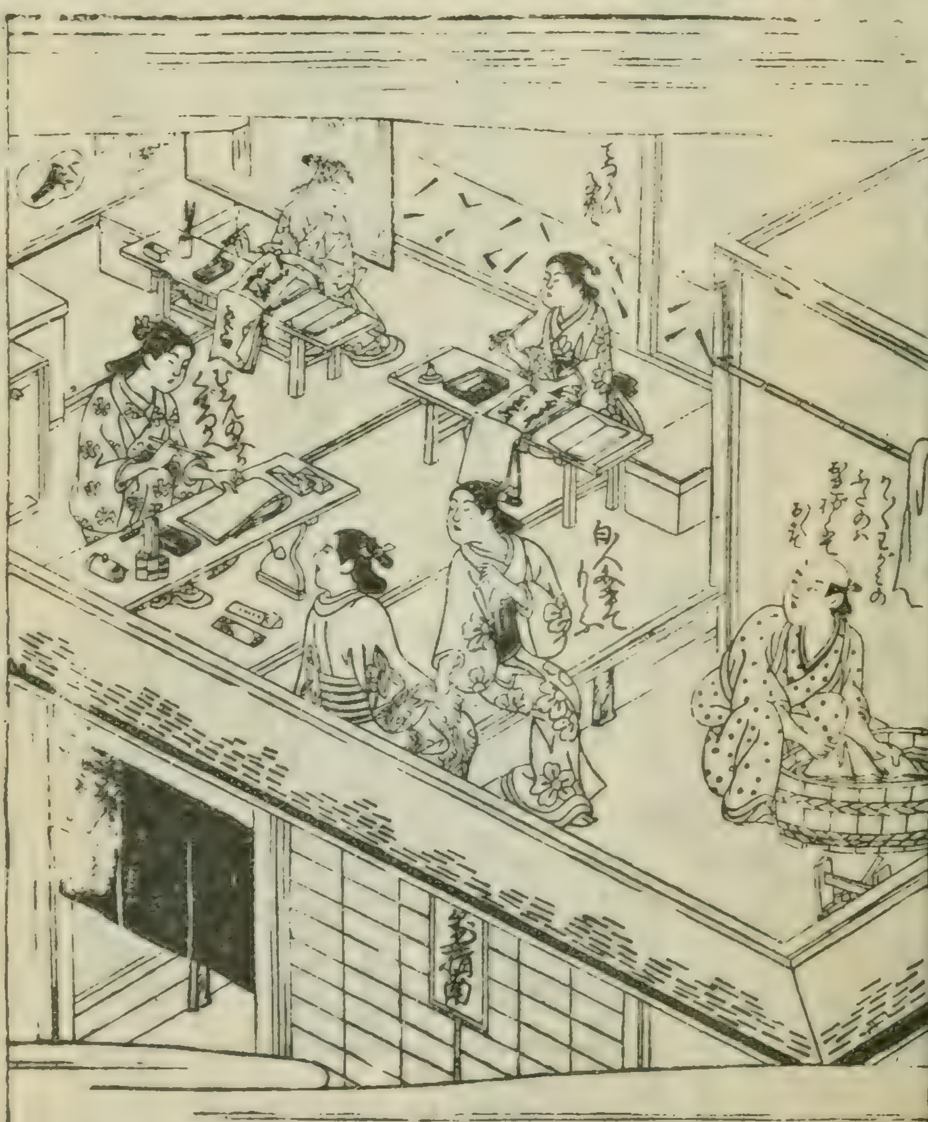
ある痣を見出され、ある時は樣子なしにありきて、伊勢が歌のみじかき足をあらはし、いにしへの遊樂の琴の音も碓にひきかへ、小麥の粉の白きを富士の雪と見たてしも、いつしか鹿の子まだらに上置食を引かゝへて、五六ばいとは女の食にけうとし。夫はもとより下地からたらぬわろなれば、なほ此節内外共に不足して百の口の尻からぬける身代、分別せうなら今ぢやがと、女房が氣をもたすれど、さしあたつて商賣かへて拵で見やうも望姓なく、一倍智慧の鏡屋もくもりはてゝ水かねさへなくなり、是では此まゝくちはつるといふもの、こなたの思案を待うちには、身代の日がくれて夜ぬけにして此所を立さらうより外はなし、爰は妾が一智慧出し働て見るべしと、おもての柱に女筆指南のはり紙して、近所の女子をあづかり手習を教へけれど、俄に弟子もあつまらず、是も急なる助にはならずと猶又思慮をめぐらし、無筆なる茶屋風呂や、白人が客の方へのとどけの文の祐筆して、奉書で五分杉原で三分、物前の無心の長文章は客から合力の金高にあはして十分一をとる約束、元來女筆は勝れて自由なる筆のあゆみ、いさぎよくながるゝ水のごとく、宮川筋石垣祇園の遊女より隙なく頼みて、人のしらぬ金をまうけて、亭主をはじめ五人口をゆるりと養うてとほりけるに、愚平次一家の堅い親父ひそかに鏡屋をまねきて、其方の内方は近所の若い衆と一人ならず、大勢と密通して數通の文の取かはし、我等内儀の能筆を見知てをれば、見そんずる事でなく、たしかに見屆けおいたゆゑ其方に今耳をうつ、いかにしても一門の頬よごし、離別こそいたされずと是ばかりはやめらるゝやうに、ひそかに異見をせられよと小聲になつてしらさるれば、愚平次胸にこたへ、御しらせの段かたじけないと一禮いうて立歸り、女房共もはや此商賣も末になつた、やめねばならぬ子細ありと、おもはくちがひの文の沙汰をはなして、世間でかうとなへられてはやめずにはおかれまい、今日からさらりと遊女の祐筆やめにして、何ぞかはつた思ひつきで錢儲ける思案して、我等を養うて給はれ、其代りには食燒てするゑそなへ、洗濯物も我等してあがひ、寐道具のあげおろしも拙者いたして、其方の手にはかけまい、どうぞ此城のもてるやうに頼むといへば、いにしへ兼好の高の師直に頼まれ艶書を書て名をたてられしといふ事、今身に覺えて尤とひとりうなづき、是より願

ひ訴訟の目安を書ならひて、女案者と名をとり、事にもならぬ少しの言分を手がかりにして、公事沙汰の腰をおし、後にはさま〴〵の虎落分別、女には又ためしなき行跡なり。是も根が世間しらぬ女の案なれば、我儘なる思案多しとて、次第にたのむ人なくて今は筆の命毛もきれる折ふし、町の年寄先月はてられ、其跡がはりの役目をつとめさせう人なし。智恵才覺ある人ぢやとて新規の人にはもたされず、とかく町久しき人なれば、鏡屋殿を無理に今からのお年寄様に頼入と、袴代とて銀五枚つゝみて、家持借屋迄御見世へ來ていやとはいはさぬ頼みかた、文盲な私で苦しからずば何がさてと、明日罷の食くはうとまゝ、まづ五枚の包銀にとびつき、其日から正座になほつて燒物の大きなるをすわつて、俄に分別らしい



顔付をかし。或時町内檜物屋へ壹貫五百匁の預け銀不埒につき、近日表向へおねがひ申との屆によつて、俄に寄會ふれさせ、會所へ町衆集り外樣事にな

れば先むつかし。とかく先様を侘て内證ですましたがよからうと思へ共、お年寄様の御思案を知らねば、我々が分別にも定がたしいかゞ仕りませうと組中伺ひ申せば、鏡屋子細らしう打きいて曖うたもよからうず、又出たもよからうず爰は宿老の一世一代の分別の入所、おの〳〵ざは〳〵おつしやるなと、硯とりよせ鼻紙に一筆かいて、仁介々々と用人呼び付、宿に失念せし事あれば、はやく此状女房共にわたして返事とつて來れと、事有さうに我方へやりければ仁介彼状持て鏡屋へゆき、内儀にわたせば女房ひらき見るに、町衆はわびたがよからうとあるが、我等は茲にて何というたる物にて有べく候や、分別御申越と書てあり。女房心得あらまし思案を書付て是を主へそつとわたせと仁介へやれば、急ぎ會所へ立



歸りお年寄にわたせば、其まゝ用事にゆくふりして脊戸口にてひらき見、隨分忘れぬやうに四五遍讀みてふところへ入、扨もどり、身共は若い時からわ

るい癖で、雪隱へ參らねばよい思案が出ませぬ、いづれも扱はうと仰らるゝが、借主のひちのや殿は何程でわびてもらひたい心ぞ、先其佗銀の員數を聞て其上で詫をする相談にいたさうといへば、いづれも是はお年寄樣の御意御尤と、ひ物屋をよびよせ其段をたづぬれば、元此銀は百五十匁にて四割半の利足を、五節句に一度づつをどり、七年以來になつたと申され、當春手形もあの方からしたゝめて參られ、判をおしたばかりで算用はどうあるかもわたくしもしかとは覺えませぬ。とかく元銀百五十匁なれば、是を三分にして四十五匁で、おわびなされて下さりませと達てたのめば、町衆詞をそろへ內證のわけはとも角も、先手形のおもてが壹貫五百匁なれば、四十五匁ですまして下されと聢くひそらして、町中の口からはどうも申されぬ。しかしお年寄樣にはいかゞおぼし召ますぞととへば、年寄は彼女房が返事のおもはくとは相談ちがうて當惑し、仁介〳〵又大儀ながら女房共かたへ取につかはす物あれば、此文一つ持てゆけとさら〳〵と書てひんねぢ用人にわたせば、役人もをかしき奴にて今からお寄會は、會所では御無用にあそばし、御思案の勝手のよいやうに內かたでなされたらばようござりませうといへば、するさんな下としてて上をはからふ慮外者、一町のたばねもするものが女房のちゑをかつてなるものか、たはごといはずとはやういてこいと、赤面してにが〳〵しうしかりければ役人こわきにわかして、にくさもにくしこまらしてくれうと、鏡やへゆかずして上の辻までゆき戾り、內かたへ參りましたれば、御內儀樣は遠方へ御用があつてござりましたが、中々急にはお歸りなされまいと、御家來衆が申されまして、御狀をとつて歸りましたとさしおけば、年寄あたまをかいて、身共が寄會へゆく時は、どんな用でも宿にゐよと、日比いひ付おくに公用をかいていづくへゆきし事ぞ、いづれも相談は明日の事にいたさう、女共が何用でいづ方へ參つたぞ、內が心もとなうござれば拙者は罷立ますと、のみかけしきせる下においてかへられければ、町衆あとに殘り是では諸事の相談が埒あかず、向後寄會に御年寄は女夫づれでよらしやれと、お宿老殿の氣のたゝぬやうに、仁介にいはしたらばよからうと、重ての寄合には御年寄樣より、先お內儀樣を先へよびて談合を極ぬ。後には御白洲へも女房がかいぞへして、年寄是にをりますと、尻をついていはしけると笑ひ種となつてはてけり

世間娘氣質一之巻終

世間娘容気二之巻

子息形気追加

目録

世帯持ても銭銀より命を惜まぬ侍の娘

牢人の楊枝見世ハ身を売るかくれ宿

思ひ隔のならぬ気女房ハ人の臆病者

盗人も舌を巻伽羅屋の妻女ハをそろしき

小袖箪笥を人手に出しては見られぬ悪性娘

髪の見れ芝居見物に親の目を忍びて提重の酒

呑過しては小袖を我儘に被衣を着て下ん

一門つきあひも今から止めて賃仕事

哀なる浄瑠璃に節付れたるは材木屋の娘

媚びの身のまはり憂への種あり村上が御挨拶

ゆかしき静かに暮したき思ひの種あり縁談

常は出ぬ外へは盗見風俗を覗き上戸

世帯持ても錢銀より命を惜まぬ侍の娘

上野の櫻咲て人の内儀の容躰自慢、色ある娘は母の親ひけらかしてひとつある着物の裾のきるゝをもいとはず、花は見ずに見られにゆくは今の世の人心なり。いづれ器量さへよくば連て歩行まじきものにもあらず、美目は果報の基といへば、歴々人に見そめられて、思はぬ仕合に乘て來る玉の輿、氏なうてもおく樣になるは美形の一徳、嫁入盛の娘は商ひ物と同じければ花をかざつて見するも又にくからず。爰に呉服町の卷物屋の半四郎とて、有徳人のむす子、店商は手代に任せて毎日の野遊山、けふも櫻の盛に愛、檜の前によいきげんして歸らん事をわすれ末社まじりにうたひかけて、見歸る女中をこちの肴に、是はのめるはとどよみつくつてよねんなき中に、むかし鹿子に金糸のぬひ紋ふり袖のちひさきを其まゝ着せて、年は十六ばかりと見えて白歯の娘、面躰いふばかりなく上々飛切、風俗しやんとして端手めかずさりとは萬そろうたるむまれつき、母親らしき人、いくたびか洗濯せし日野のきる物着て娘の尻について脇目もふらず、男の聲をきいて足ばやに通るを半四郎見初めて、世界に女房といふものあの娘ならではと、しきりになづみ、出入の者をあとからつけて宿元を見させけるに、本郷の裏店かりて楊枝けづりて其日をおくる牢人ものの娘、母おやも歴歴の侍の息女なるが、むかしをすてゝ朝夕の米をかしぎ、手足もおのづから荒たる宿に娘をやしなひ、此子が出世をねがふばかりに夫婦手いたいはたらきをしてをしからぬ命をながらへ、うき年月をおくるよしとつぶさに聞て歸りて物語すれば、半四郎手代共に申付、萬事こなたより嫁入道具美々敷こしらへさせて、むかひとりたきねがひ思ひ入て段々いひつかはしければ、親父きゝとゞけて娘おいくを半四郎かたへよめらせけるに、貧家にそだちぬれ共さすが武士の娘とて町人の子とはちがひ、行儀たゞしく。かりにも賤しき業なければ、多くの手代共もおく樣とかしづき、親里のわびしき暮しを誰いひ出す者もなくて、人は氏より育といへど、姓はもとをあらはし、爺親の由緒ある形氣を繼て、聟の一家の内儀連に出合てもすこしもわろびれたる躰もな

く、自然と位あつて人皆種姓をかんじぬ。馴染にしたがひて心やすうなるは世界の女夫の中ぞかし。ある時半四郎女房おいくをつれて、堺町のかぶきしばゐを見物にゆく催し、常の女ならば此思ひ立やまぬやうにと、いつにないしほの目して亭主がきげんをとるべきに、おいくは人に替つてきのどくなる顏つきにて、お言葉をそむくは不禮ながら常々親共の申付しは、月雪花のながめはかくべつ、其外の見物事は四座の能の外は女の見る物にあらず、殊さら當世の歌舞伎狂言、いたづら事を第一にたてゝ不作法なる行跡をして見すれば、人たるものゝ娘の見る事は勿論、又咄しもきく物でなしと堅きいましめ、是ばかりは御免あれと達而辭退すれば、半四郎大きに腹立して、夫がつれてゆかうといふしばゐを見まいとは我儘千萬、今の世に芝居を嫌ふはむまれぞこなひといふ物、たはけた事をいはずともはやくこしらへよと詞荒にいひければ女房聞て顏色かはり、いかに男なればとて諸侍の娘をむまれぞこなひと惡名を付らるゝだん、いかにしても女の一分すたつて、先祖の佳名迄汚す事口をしき次第也。身不肖なれ共わらはが先祖は、長尾景虎入道謙信の家臣、三輪兵部太輔俊貫が子孫、世につれて町人風情の女房になるさへ無念なるに、賣人にむまれぞこなひのたはけものとさみせられては、親達迄の恥辱なれば、近比相手には不足には存れ共、夫婦のよしみに相手に致してしんずれば、うれしいとおぼしめし最期の御用意なさるべしと、長持より刀とり出し、さあ此方から打かけませうか但しそなたから打かけらるゝかと鍔元くつろげゐあひ腰になつてつめかくれば、元來半四郎臆病もの、是はめいわく女夫の中の心やすだて、何事もかんにんと手をあはすを、さて／＼みれんのふるまひ、相手より果し狀を付られ返事の遲ささへ武士道にはおくれたりと笑ふ事なり、ましてこなたの女房に討はたさうといひかけられ、かんにんせいとは男に似合ぬ比興の至り、尋常に勝負あれ、女なれ共まさかの時首をくゝり剃刀わざなど見ぐるしとて、爺親の秘藏の刀、男子なければみづからにゆづりおかれ、自然の時には是にていさぎよく相はつべしと給つたる一腰、來國俊が百日精進してうつたる銘の物、先祖三輪の何某信州地藏峠の合戰に、さしも手強き武田がたの甲兵を引請、たゞ一人ふみとゞまつて此刀をもつて大勢を三度迄。峠より下へおひおろし、

武勇のほまれをあらはし給ふ高名の刀にて、素町人を切て刀をよごさうかとおもへば、正月小袖の紅裏の裾のきるるよりはかなしいと泪をながし、今は是迄と引ぬいてふりまはせば、こりやたまらぬはと半四郎二階へ迯あがりおり口の戸をさして口には觀音經からだには大汗、生たる心地はなくしてふるひゐるこそことわりなれ。家内のものおどろき馳あつまりておいくをさまざまなだめけるに、むまれぞこなひとあるからはわらはを片輪者にし給ふといふもの、女の身にかゝる疵を付られてどう堪忍がなる物ぞと中々聞べき様子見えねば、町中をたのみ名主年寄月行事ふしやうの下袴着てさまぐ\の噯ひ、向後亭主に口過させまいと一札かいて町中連判して、是を以てやうぐ\に侘てすましぬ。それより亭主は女房に強みつきて睦言も鬼とざれごといふやうで打とけててんがうもいはれず、ひとへにばてれん組の男伊達と同船する心地にて、夜の樂みつきて女房を仕替たい心なれど、いとまといはゞ又二尺三寸をひらめかしてよもや我等を生ておかうとはいふまじ。前生であれをいためた報いでがなあらうと思ひあきらめ、主の子あしらふやうに朝から晩迄女房のきげんとつて、さりとては氣のつまるせんさくなり。適々小袖の談合しかけぬればけうといかほして、諸侍の娘が手ぬるい針仕事などするものか、其爲にお物師とて針手のきいた女に切米やつてかゝへおきぬれば、縫物の事ならばおゐまと相談なさるべし、いかに浪人の娘にて貧家にそだちたればとて自身糸針持て手づから物などぬうた事はござらぬ、近比口惜御ざる自身物をもぬはう女ぢやとお見たてにあづかる所がはづかしいと眼色かはればハテそなたにぬうてたもれといふ事ではない、人の女房ともあらうものがなんの自身物ぬやらうにや　そりや聞様がわるいと口すぼめてきげんをとるこそきのどくなれ。すべて女のするわざはせずして、平生軍の沙汰して大裏の庭に眞砂を聚、城取して軍のかけひき、魚鱗鶴翼のそなへ、正月着物の模様の事はいはずして具足屋の岩井大和をよびよせ、春の晴に花見鎧をあつらへ、小櫻縅こそ見よけれと、具足のたしなみ、神事のねりものゝ役にたつより外はなし。比は十月廿日恵比須、商人のいはふ日なれば、旦那をはじめ手代小者まで終日酒きげんにて門の戸のあいてあるをもしらず、半太夫ぶしに頭をふつて語り、寝入にするをりをかんが

へ、面躰を墨ぬりにしてくつきやうの夜盗八九人、ばた〳〵とおし入亭主をはじめ。小者下男下女迄に縄をかけて、猿つなぎにして大黒柱にからめつけ、中にもなま酔の手代一人をくゝらず、むなもとへ刄物をおしあて、金銀の有所まつすぐに申我々を案内して其金共をわたすべし、さもなくばたゞ今さしころすがと白眼ば、手代わな〳〵ふるひて旦那の居間の戸棚にも入つてござる、又藏の中にもいく箱かかさねてござれば、力次第どちらの金から成共御きげんようおとりなされて、わたくしが命をおたすけなされて下されと泣聲にて申せば、さらば先土藏の銀からかたづけんと藏の鍵を取出させ、手代を先へおしたて、我ものいらずにらふそくあまたともしたてて、藏の戸おしあけこみいる所へ、内儀くだんのたしなみ具足着して長刀よこたへおく座敷よりをどり出、命しらずの盗人共一人もあまさじと藏の戸外よりしやんとたてて、臺所へ出て見れば亭主朝からの酔



さめて高手小手にいましめられ、なげ首してゐられしが、內儀の躰を見て六道の辻で地藏ぼさつに御意得た心地して、こりや女共油斷すな味噌部屋に貮人のこつてをるぞ、日比の軍法此時なれば、あつぱれなはたらきして爺が難儀をすくうてくれ、まづ繩といて水一ぱいのませくれと蘇生たる氣色にて、じだんだぶんでよろこべば、女房やがて亭主をはじめ手代小者のいましめ切ほどき、用心にかけたる棒共おろさせて味噌部屋をかり出せば、つくり髭の大男さいぜんの氣色とかはり手をあはしてをがみゐるをたゝきふせていましめ、藏の前へ引すゑ、さあ尋常に是へ出て勝負をせよと女房長刀かまへ藏の戸明させまちかけゐれば、此いきほひに藏の中の盜人共も手をつかねて命のねがひ、かさねて此邊にはいくわいせばのこ



らず首を切ならぶべし、先此たびはゆるすとて、殘らずつくり髭とらさして首代に棒にてしたゝか打擲して追はらひ、門の戸とくとしめさすれば亭主

悦び、日來は麁抹に思ひしが今といふ今女房の徳あらはれし、重賓のおか樣と扇をもつてあふぎたつれば、女房さらに滿足なる躰もなく、正月の蓬莱かざる三方を取出し、其上に紙卷の脇指のせていさんでゐるていしゆが前になはし、男と生れ夜盗の手にかゝつて縛められ、のめ／＼と生て永く人に顔を見られんとは口惜御所存かな、もはやこなたは男の一分すたつたればせめていさぎよく爰にて切腹なされ縄目の耻辱をすゝぎ給はねば武士の法をしつた三輪の何某が娘が妻と成ながら、夫に切腹すゝめざるかと世の人口にあづかるも無念なり。跡の事は氣遣なされな、わらはがいきのこつて家には疵を付ませぬ、はや／＼腹をとすゝむれば亭主大きにけでんして、町人のかたじけなさはふまれても耻辱にならぬ、無念ならば大儀ながら男のかはりにそなた切腹の名代たのむ荒いま／＼しいゆるし給へと、いふかとおもへば夢さめて同じ枕に内儀は鼾の最中、扨もうれしや夢なればこそ女房がだまつてゐれ、誠ならばおそろしや／＼

小袖箪笥引出していはれぬ惡性娘

今の世の風義を見るに手前よき人表向をかるう見せるは稀なり。諸事其分際よりは華麗を好みずゐぶん世をはつて子に能をさせ、娘に不斷惣鹿子をきせ鞠楊弓に日をくらし大やうに見せかけばかり、去とはおそろしい。同じ丁銀を天秤響わたる程日には百度もかけ、廣庭にはのべ米をかりて積重ね、まだかんにんのなる面向の屋ねを葺かへ慥に思はせ、手形がりの金銀を取こみ、人めには大やうなる顔つき、内證は氷の上に炭火おこして田樂やいてくうやうなあぶないたのしみ、か樣の人もわざとたくみて身代をつぶすにはあらず。其分限に物毎仕過し、大かたは女房家主奢て無用の腰元中ゐをかゝへ、歩行でゆく方へも大乘物をざゝめかし、花見紅葉見開帳まゐり、扨はしばゐのかはり／＼に棧敷をとらせ、手前からこしらへさせてもたせ來た提重の外に茶屋へさま／＼の料理を言付、提たばこぼんの火入に伽羅を焼かけ、朝日山といふせんじ茶を臺天目にてはこばせ、狂言の善悪いうて、内にはていしゆが借銀返辨の日限相違と催促つけられ留

守つかうて佛檀の間にとぢこもり、むねをいためてゐるもしらず、おもはくの役者見て氣がはれたときげんよくおかへり其まゝお風呂にいらせられ、小豆の粉に麝香入たる洗粉袋へちま瓜のをかしげなるを取そろへて持てまゐれば、白きが上の身の中を二時ばかりかかつてあらはせられ、おあがりなさると御へやに入て夕げしやうなさるゝと、はや日も入て御居間に蠟燭たてつゞけ、お夕食あげるなど商事はつぎにしておく樣の御用大事にかけねば旦那の御きげんわろきと、萬事をすてて上下共ににえかへる事ぞかし。すべて盆正月衣更の外臨時に衣裳をこしらへ、用捨なく着ぶるし、ほどなく針箱のつぎ切となりてすたり、又はお出入の尼嚊々に着おろしを下され萬大やうなる至りぜんさく、ていしゆも是ではならぬと思ひながらも、かう取ひろげては中々我身代ながら自由には成がたし。是身上善惡の堺町に材木屋の杢兵衞とて有德なる町人、今世盛の棟高く內儀は立賣の呉服所の惣領娘身代半分入てのこしらへ、時代蒔繪の手道具に、小袖は手の物とて工手間のかゝりし素縫織紋地なし鹿子の美をつくして仕付られける。夫婦中よく五年のなじみをかさね一子をまうけて寵愛かぎりなかりき。身代よくなるにしたがひ歷々の親類緣者ひろくなり、日每の一門付合に互に花をかざりぬ。さればいづれの家にもそろうてよい親類ばかりあるものにもあらず、其中には虫喰の一家ありて、かならず世話にせねばならぬ浮世とて、此材木屋の姊の娘におつやとて嫁入盛の美形の娘、てゝおや不仕合にて江戸の土となられ、後家の手にて人並にはそだてがたく、萬事材木屋のやつかいになつて今年十八、十人なみにすぐれたる器量のよし聞およびて、筋目さへよくばこしらへなしにもらひたいと伊丹にて名高き酒やの身代よしから申かけ、其家の乳母とおも手代娘御の器量見に計わざ〲のぼれば、材木屋杢兵衞ためには一人の姪近き比より手前へ引とり養育せられしかば、是をきいてさいはひのえんと悅び、自分の娘分にしてこしらへも大概にしてやるべしと約束大かたなりよりて。けふ姪がむまれつきをあの方より見に來ればずゐぶんかざりて目に入やうにしたしと、內儀を招き右のわけをかたり人形にも衣裳といへば其方のおりもんと地なしの小袖を、すこしの間姪にかして着せてたもれとあれば、成程やすき事ながら其小袖どもはわたくしが乳母が

娘近き内に御所方へ御奉公に出る其お目見えに入よしにてきのふかしてつかはし、手前にはござりませぬとめいわくさうに申さるれば、しからば地赤のさる物と紫がの子のぬひ入の小袖をとあれど、それも此中妙安様の法躰ぶるまひの時油と酒がかゝりまして今ときほどきてあれば俄の用には立がたしと、とかくかしとむない口ぶりていしゆむつとせしがおししづめて、大事にかきやる小袖をおれが姪にかしてやりやといふがわろい、こりや油小路の妹が所へ此文をもつてゆき、小袖二つ取てこい久三に挾箱なり共柳ごり成共もたせてつれてゆけと年季のこしもとに口上あらまし申ふくめてつかはしけるに、妹から内儀へむけての返事にあに様より小袖の事共仰こされ候へども、爰元は此比おしこみはやり用心あしく候ゆゑ常住着ばかりのこして、皆々御隠居様の方へあづけ置候へば急なる用には立がたく候間、御きげんそこね申さぬやうによろしく御とりなしたのみ入の



よしこま〴〵申來れば、亭主此返事見て、おのれが爲にも姪の事なれば自分に持ずばかりとゝのへても役に立べき道理なるに、女の性はいひあはさね共いづくもおなじ事と內儀へ耳こすりいうて、柳馬場の姨御の娘おかん事は日來の生れつき寛濶にして物をしみせぬ大氣な女、殊更いしやうもちなれば、此かたへ申つかはすべしと文したゝめて取にやられけるに、是からの返事にも仰下され候小袖共は、先日おぎん樣ひざなほしの圓山振舞の時庭阿彌の築山へこしもとのりんをおひかけあがり、躑躅の枯枝に裙引かけて、三つながらさらりと引さきのふから物屋へつかはし今の用には立がたし、たま〴〵の御用にお役にたゝざる殘念さと、是からも斷りばかりにして小袖をしみしてこされぬこそきのどくなれ。姪はかしこき娘にて、一家の內儀達我に衣裳をかす事不同心と見きはめ、俄に氣色あしきとて一間に引込、今日伊丹の乘へ見えられまゐらする事、此氣色にてはな



りがたきよし亭主にことわり申されれば、あるじ此心入をさとつてふびんに思ひ、しからば迚の事に氣分のすぐれし時あつたがましと、見に來る伊丹の人の方へことわり申つかはし、扨いもとをよびにつかはし我女房とならべおき、ひとりの姪に衣裳をしみしてかさぬ卑劣の心入をきびしく異見すべきとて奥の間へ引よせ額にしわよせ談義の口あけせらるゝ所へ、柳の馬場の姨御様お見舞と申程に先意見事やめにして內儀も妹御も臺所まで出むかひ、よくこそ御出なされましたと奥座敷へともなへば、姨御は奥におしなほりていしゆをまねき、姨が今參つたはそなたゝ姪のおつやとへ侘言に來ました、けさ娘がかたへ小袖かりにこされしにかさぬやうすを聞しゆゑ、それは外とちがひ一家の事なれば此度姪の祝言にはそちにも小袖の十ばかりもぬがし、夜の物の三流も進上にさせうとおもうてゐる所に、借りに來た小袖をかさぬ心底ふとゝきの至りと段々しかつて僉議したれば、九十貫目入て何ひとつ不足のないやうにこしらへしてよめらしたに、廿ならんだ小袖簞笥に衣裳の事はおいて白紙が一枚なく、おそろしいほど肝がつぶれ數々の長持共をあけさせて吟味せしに夜着蒲團すゝしの蚊やびろうどの長枕、手道具迄どこへやりしか一つもなく、高蒔繪の文宮の蓋のならぬほど質の札の入たを見て、扨はていしゆが內證ならず女房の道具を質物につかはせしかと身代の樣子をうかゞひ見るに、けふも西國のお大名さまから急なるお金の御用とて、時の間に貳萬兩とゝのへ出し、見世も居間も小判の山をなす事、よもやかうした身上にて女房の物を質にもおかれぬはずとおもひ、聲山だてゝよしない事をせんさく仕出し夫にまで見かぎられてはと此上ながら娘ふびんさにしかりさへせずして是迄ことわりにまゐつた、女の身でかゝるわざは詞にもつくされぬと、齒のないはぐきをくひしばり淚をこぼして腹だてらるれば、亭主是を聞てこちのわろもさうした事かしらずと、內儀の道具に僉議しかゝり、簞笥共吟味せらるゝに紙が一枚入てなし、是たゞ事にあらずと油小路の妹が方も穿鑿あるに、いづ方も着のまゝにて夏冬の物一つもなかりき。扨も我のをれたせんさくと年季のこしもとせたげて樣子をきくに、近年御親類の女中づきあひ夥しき奢にて、替りめの狂言に六間つゞきの棧敷あけさせ、役者子共への付屆仕出し茶屋のしはらひ、萬事の物入かうある

はずと串程に一門の亭主共手を打て肝をつぶし、向後親類づき合はいふにおよばず、親の日に墓參も無用と乘物に封をつけ、扨此質物面々が働にて、まうけ出して、一色成共請もどすべしと申渡され、歴々のおく樣たち洗濯物を請取、冬の日のつめたいもいとはず、打かけして糊つけ物をなさるれば、紙びいなの首くゝつて千を十文づゝの賃仕事、つみわたかけ物仕立物、尻もむすばぬ糸ぞかし。何成共して錢まうけせよといひわたされし中に、眞苧うむ事は無用とていしゆのいみしはをかしかりき

哀れなる淨瑠璃に節のない材木屋の娘

因幡の國に何の入道とかやいふものゝ娘、かたちよしときこえて人數多いひわたりけれども、此娘たゞ栗をのみくひてさらによねのたぐひをばくはざりければ、かゝることやうのもの人にみゆべきにあらずとて、親ゆるさざりけりと、つれ／″＼草に兼好がかゝれしが栗よりは丙午の女は男をくひ、けいせい遊女は歴々人の身代をくうてしまひ、男を虚大名にするぞかし。惣じて婦人には氣鬱よりして醫書にもないさま／″＼の異病を煩ひ、醫者に枕をわらす事なり。栗ばかりくへばとて嫁入させずに持くさらかしにする親父こそ無分別ものなれ。容さへよくてつれそふ男がかんにんせば、たとひ火をくはうとまゝ婚禮して男をもたせて見たきものなり。かならずかやうなもの堅きが美形の娘を持て大事にかけ過し、若い娘の度々出ありくは浮名のたつ基ぢやと二階へおひこめ、縫物摘綿の外は今時のはやり草紙はいふにおよばず、伊勢物語さへいたづらの智慧づけと、半枚もよませず罪なくて配所の二階に糸屑そろへてゐるがごとく、むざんや陽氣の盛の娘に當世の日のめさへをがませずしてつひ癆咳やみにしてのけ臍をかんで悔むおやぢ、何程か此粋の世におほし。異樣なる煩ひも、男もたせば大かたはなほる物と氣の通りたる女醫者の申されしはことわりと思ひ侍る。爰に長堀のながれの末に、木曾山の材木屋せし有德人の息女、美形當流の釣島田、針がね入の匕髻かしらから常の仕出しに替り、光琳もやうに手をこめ、紅のかくし裏ほのかに十三がはりの寄島帶、おまん樣むすびも、よしや花車づくし

の抱帶、くれなゐの二重内衣氣をつけてよき上をかく作ればすぐれて目にたち所から難波のよしあしいふ悪口中間の若い者も魂をとばしぬ。此娘きはめて哀なる事が好にて、ちひさい時から日ぐらし太夫が歌説經をきいてまたなくあはれがり、それより出羽しばゐの阿波太夫がうれひぶしに打こみ四十八願記の三段めをおぼえて、ひとりなぐさみにかたつては泪をこぼし延の紙さへ一日に一束づゝ入て、ふだん目のはたおもばれてよからぬ事と、母親の異見其身も尤とは思ひながら、半日にても泪をこぼさねば食がすゝます、頭痛がして目眩心にて氣もうかざれば、煩ひには替られぬとて後は親達もゆるして、あはれなる淨るり小歌をきかせけるに、次第にあはれなる事高上になつて來て、淨るり小歌祭文は元來作り物にて眞のうれひ事にあらず、かなしよの至つてかなしきは、人間死の道の別れに越たる事なしと、思ひきはめて門を葬禮が通ると、是こそ眞の哀れが通るはと乘物舁俄によびよせ、いそがしさうに打のつて此葬禮の跡について、あるひは飛田千日の燒場へゆきて、死人の一類なげくを見て其身も袖をぬらし、是ぞ眞のあはれなりと、心から泪をこぼして悦び、葬禮の通らぬ日は手代にいひ付大坂中をありかせ、門さして敷居に簾のかけたる家を見せさせ、こなたの御葬送は今日何時でござるぞと、ゆくさきの寺迄とはせて、其時分に乘物にのつてさきの旦那寺へゆきて、葬禮の來るを待てゐる心のたのしみ、月花しばゐにはかへぬ程の悦び、二親も興をさまし、あのごとく葬禮虫がついては、嫁入させても聟の手前いなものなり、何とぞ葬禮見ずに哀な咄しばかり聞て、泪をこぼして慰んでくれまいかと、氣に障らぬやうにあしらうて教訓せらるれば、しからば御異見をもちひて葬禮場へは參るまじ、其替には大坂中の死だ人の方へ、直に訪ひにやつて下されとあるを、乳母が中分に入て、天王寺の神子町にて内證を賴み、ずゐぶん涙のこぼるゝやうに口よせにて御湛應なされて下されと、やう〳〵神子の口よせに葬禮を替て、毎日神子町へゆきて、一家一門はいふにおよばず、水茶屋の同じ床机に腰かけたる人迄思ひ出して、口をよせて泪をこぼしけるが、葬禮ほどにしみ〴〵と眞底から、哀にかなしう泪がこぼれぬとよほど不足なるを、それ程の御堪忍遊ばす所が、親御への御孝行と申物ぢやといひなだめける。とかく哀傷を好んで泪

をこぼすは心氣のつかれなるべしと、老功の醫者が考て、益氣湯に加減してもつてみるほど、いよ〳〵泪しきりなれば、祝言して男をもたせなば夫の手前を耻てなほる事もあるべしと、一門談合して高麗橋の紙屋へ縁につくる約束、何程泪こぼされても、商賣が紙屋なればさいはひの所と、吉日をえらみおくりけるに、白き小袖に綿帽子着たる我姿を見て、やがてとゝ樣かゝ樣のお果なされて灰よせにゆく時、かうした姿でゆくであらうがかなしやと、ばら〳〵と泪をこぼしはあ氣がはつきりとして心よいと、乘物に打のつて出れは、跡には門火燒て下々が聲して、ついでに娘御に此門火をおめにかけて、おなぐさみになかしましてやらう物と笑ひぬ。紙屋には待女郎花をかざつてなみゐたりしが、それ嫁御の御入と乘物すぐに手ぐりにして、奥座敷へかき入て愛敬の守り取かはすなど、貝桶わたし奉公雛の置所、腰巻したる女長柄加への品を盛、千代重ねの白むく皆ぐれなゐの小袖に着替させ、御祝儀の島臺嫁御の御側へ持て出れば、嫁は臺の物の尉と姥との人形を見て、此年まで手助の子がないかして、自身木の葉かきかたげて、松の木下を掃除せらるゝ、年寄夫婦の心入がさぞあぢきなからうと、思ひやられてかなしうござると、待女郎の見るをもかまはずさめ〳〵と啼出せば、座中の諸一門肝をつぶし、あまりの事にあいさつもなくて互に顏を見あはせ是はけうとい行跡といはぬばかりの氣色、娘の親達氣の毒がり、いづれもさぞけうとくおぼしめさん、娘こと幼少より小氣に生れつき、見る事きく事につけて涙もろく只今の仕合なり、かう取むすびいたすうへは聟殿を頼入ます、心を付られ何とぞ形氣の大膽に成やうに、そろ〳〵と御異見をたのみますするとあれば、是にて座中安堵して、泪もろきは仁心のふかきゆゑなれば、下々出入の者迄に慈悲ふかゝるべし女中の形氣には重疊の御事と取なし申て、盃もをさまりめでたく婚禮とゝのひぬ。なじみかさなり異見しても此癖やまねば、聟はさま〳〵工夫して、とかく生れつきの小氣を、大氣にもたす方便より外有まじと思案し、惣じて人の心を大氣にするは酒に増たる事なしと、手代の女房出入の嚊共に、すこしも酒のなる者どもをよびあつめ、内證をいひきかせ、ずゐぶん女房共におもしろをかしうしかけて、酒をすゝめ啼さうな時分は、脇からむしやうに笑ひ出して、うれひ事ををかしい事に

轉じかへて見る療治なるぞとひそかにいひふくめて、朝から晩まで酒事にして泣出しさうなれば、をかしからぬ事にいづれも手をうつて腹をかゝへて笑うて見すれば、娘は呑にあがつて次第に酒がなり出、啼上戸へこけさうな所を相伴の女共爰こそ大事と笑ひかけて、つひに笑ひの方へ心をかたぶけさせ、後には泣事笑ひにうつりて、年來の泣病大かた笑ひになつて、親達姑聟の悦び、娌も年のゆくにしたがひ泣事を耻て、どうぞ是をなほさんと我心からもたしなみて、心しをれてうれひ氣になる時は、酒取よせて茶碗にて引かけむりに笑うて見る心になつておのづからいつともなく、定癖やみてゑしやくにあまり、はじめとはかくべつににこやかな嫁御様、御家はんじやうの瑞相と、家内の外出入もの迄悦びあへり。ある時お里より手代の半兵衛けはしくはしり來りて、お袋様俄に持病のお痞さし發、灸鍼藥の驗もなく、只今御臨終と見えますれば、はやく御出あそばし、此世のおいとまごひなされませと旦那の仰付られと、口上もあとさきにせき切て申ければ、嫁御は是をきいてむかしならば人一倍もなかるべき所を、今は以前と心の持やうかへられ形氣かくべつに、うれひを聞と其まゝむしやうにをかしうなつて何かゝ様はそれほど急に取つめしか、今にもおはてなされたら、とゝ様のさぞさびしいとて、よい年をして跡おうておいおいというてなかしやらうとおもへば、をかしうてたまらぬと手を打てわらへば、是はけうがる笑ひの段ではござりませぬ、おのりものにめさずとも、はや／＼お出とせりたつれば、ハテやかましい母様のつね／＼、あの子がなかずにきげんようわらふかほを見て死にたいとおつしやつたは、そなた達もきいてゐやつたではないか、をかしかろは今年の暮ぢや、極樂で年とつてござつて、其身は佛になりながら、此きはの鏡餅はちひさかつた、鰤も丹後ではなささうなと、蓮花の上にのつてゐておつしやつたら、たまらぬほどをかしうは有まいかこりやどうもかんにんがならぬと腹をかゝへて大笑ひ、手代半兵衛我をおつて是はあまり俄事ゆゑお聞なされて、はつとおぼしめしお氣がみだれた物ならん、まづお心をしづめられよと制すれば、聟は此やうすがきいておくより出られ、半兵衛／＼きづかひせられな、女どもは狂氣もいたさぬ、うれひの持病の療治がきいてあのわらひは養性のいのり過ぢやと、聟

もあんまりでもらひわらひをして、まづ此たびはわらはうとまゝ、其ぶんにしてつれてかへつていとまごひをさせらるべし、かさねて此方母ぢや人の死にぎはには、あつぱれ見事に啼して見せうといな事に自慢をせられぬ

世間娘容氣二之巻 終

世間娘形氣　三之巻

目録　　子息氣質追加

悋氣はもとらるゝハ刃乃翔白歯若娘

迷惑な雛の首尾はきぬ出しハ和尚の念見

窮ある親の袖からむ思ひうらき勘当子

今ぞ世帯が母の前にし繰戻へ頭が包み分職

不器量で身を髭抹香屋乃娘

同じ町女房のよしみ意見に姉妹縁切

呉服所より抱小袖さゝくなき黒乃頭子

肉桂へかてける饅頭乃あん油とる

物好の際少し継ぬ花へ咲分見立乃娘

狂言の種よ婿をとる桜木屋乃花娘子

悪性な娘後果へ居棚へ千両也志る金

養子君の種より老衰ぬくむつと脱髪よ剃下奴

悋氣はするどい心の劔白歯の娘

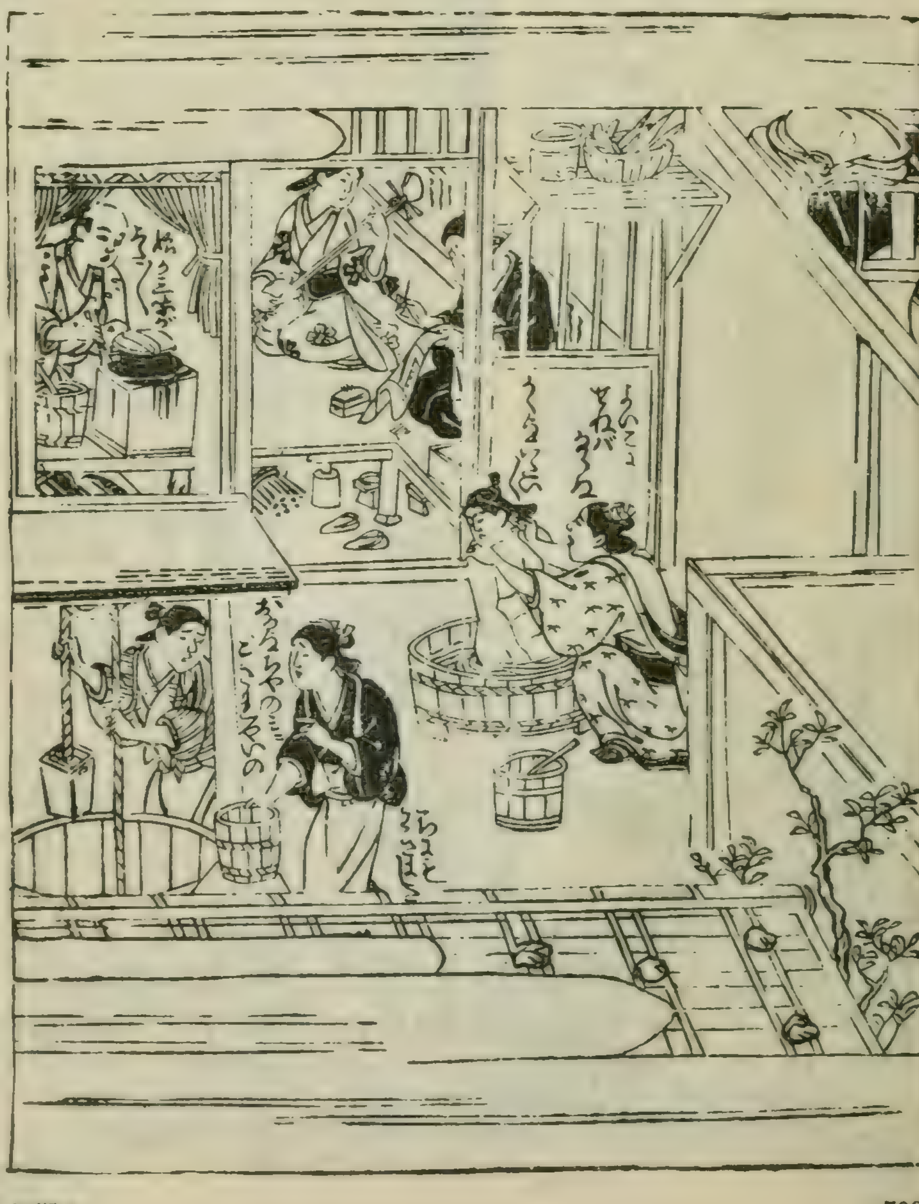
大坂は思ふより人心大氣にして、末の算用あふもあはぬも花麗を好めり。娘の親は相應よりよろしき聟を望み、息子の親は我より棟の高き緣者を好み、取むすぶより無用の外聞計を繕ひ、聟の方には假普請、娌の方には衣類の拵へ、一門の女談合親父が高利の銀借て身代の間をあはす、內證の事はしらず、それでは成まい是ではおかれぬと、ぬり樽が斗樽になり鯛をやる所が鳫になりて、膝なほしせぬ中に横にねゝばならぬやうに成て來ることぞぶ思案なれ。娌をとるも子孫相續のためなれば、相應よりかろくして、幾久敷家をつたゆるこそ人たる者の本意なれ。こゝが分別の堺筋に、近年商物に利のまはりのよい生薬屋道齋とて、五十に及んで始て女子をまうけ、大かたならぬ重寶名さへおいとと付て、夫婦のいつくしみ、五つの年袴初せしより、天性て悋氣ふかく、乳母をはじめ物ぬひ、腰本、中居、下女に至る迄、色つくるを腹たて鏡なしに髪ゆはせ、身に白粉ぬらせず、いやしからぬ生れつきをあしくなし、此勝手しらぬ新規の下女、世間なみに身嗜すれば、此娘まだろくに舌もまはらぬ形をして、そちは誰がゆるして尻ふつてありくぞ、飯鍋をみがき過て白いが氣にいらぬ、我きはすみの仕様はどこにはやるぞ、手足の指がほそうなるが合點がゆかぬと、不斷の遊事をわきにして是を慰にいひくらし、二親きげんのよい時分、打よつて寐酒など飲みてむつまじき躰を見ては、はやむつとして母親に顔ふくらかして見せ、二日も三日もふりくすべて物をもいはず、雛祭すれど女雛の分は首をぬき、或はけつこうにみがきたてたる衣裳びいなの顔に墨をぬりて、是ではよもや殿の心がうつるまいと悦び、はご板の繪に殿と女郎の中よきさまを見ては、むしやうに機嫌わろく、小刀にて女郎の鼻をそぎ、出入手代の女房がこちの人よばはりをきいては、奥からはしつて出て、何もしらずにおまんのこちの人こちの人とうれしがりやれど、こちの腰元のはつに、來てはてんごういやるあんな男は急度仕付して、きかずば藏へいりやと餘所の事まで悋氣して、静なる家內此娘ひとりにて朔日廿八日も、それは／＼やかましき事ぞかし。

父母も此躰をみて次第に我ををり、是では成人してから聟をせがみ殺すであるべしと、いろ〳〵教訓せらるれ共中中聞入ず、いよ〳〵悋氣ごとのみいひつのれば、二親こまりはてゝ寺の和尚を頼みて、五つ子に嫉妬の異見、神武以來ない圖なり。和尚此子に近づきて、むかし六條の御息所は死して鬼となり給ひ苦みをうけられ、髭黒の大臣の北の方は物くるはしくなられしも、是皆妬ふかきためしとて、今の世までも名をながされぬ。女の第一たしなむべきは此道なり。唐の法には女を離別其一つの言立にする事なれば、かまへてかまへて今の心をあらためて、悋氣嫉妬の心をやめられ、成人してのち聟を迎へられた時、中よくして外の女に夫が心をかよはすとも、大目に見てゐたがよいと、三十女房に異見する如く引言いうて教訓せられしに、娘聞いて其御異見を同じくはかゝ様にして下さりませ、夕部もとゝ様のうたゝねしてござれば、かゝ様のよい年をしていやらしい裾へ小袖きせて、腰うつてしんせうかと、いかにわしが小さいとて鼻のさきにゐるに、あんまり踏付た仕形でござんす、是がなんと腹が立てずにゐらるゝものぞ、胸がもえて乳もろくにのまれませぬ。腹が立てたいとてひとりたてらるゝ物でもなし、相手のもたす氣ぢやによつて、とかくかゝ様のわしをないがしろになさるゝからぢや、今朝も起〳〵とゝ様とらへて何やらさゝやいておしやつたは合点がゆかぬ、いふ事があらばおれが聞まへでいはしやれば疑はぬに、向後はわしが氣のたゝぬやうに、かゝ様へとくと御異見頼みますと、ひんとしてひぞつたる顏付、こましやくれてけうとかりき。和尚大かたならず我をゝられ、二親にむかひ段々異見申たが、とかくおふくろへきついりんきでござれば、あの子が心のひがみのなほるまで、夫婦別々になられ、しばらくお袋にはかり座敷して成共、親父殿のそばにござらぬやうになされ、もはやおの〳〵もよい年なれば、すこしは娘御の手前も遠慮なされたがよい筈と、和尚も異見にうろたへが來て、思ひもよらぬ二親にしみ〴〵と異見して歸られぬ。成長するにしたがひ物妬ふかく、つぎ〳〵の女どもはいふにおよばず、出入者までいひたてければ、此沙汰大坂中にひろまり、欲の世の中なれど此家へ養子聟に來るものなくて、十八の春迄祝言のさたなく、此家繼さだまらず、二親六十にあまりて明日をもしらぬ老の身、今はよろしき

聟のねがひをやめて、貧家の息子成共此家の聟になつて、娘を不憫がつてくれるものあらば、土産にも筋目にもかまはぬと、諸方の仲人嚊をたのまれしに、谷町の古道具屋のむす子、當年廿五に成けるが、悋氣強きを合點にて、聟にならんといふや否や、吉日選て聟入の祝儀と丶のへ、一家一門悦びの盃事をさまり、娘の部屋に入て幾千代かけての閨の盃、取結びのをりから聟は娘にちかづき、そなたが座敷で三番目になられた男に盃さしたは、なんとも合點がゆかぬといへば、娘けうとがり、あれはわしが伯父様で、萬事今から家のお世話をたのまねばならぬお人ゆゑに、盃をさしましたに、お疑ひの深いと笑ふを、いや／＼心得がたい事共おほし、尤親父様の事なれば別條は有まいと思へ共、胥からそちが親父を見る目はいかにしてものみこまぬ目つきちや、親し過て合點がゆかぬといぢれば、娘氣の毒がり、さりとては日本の神々樣を誓文に入、とつ樣と何のわけがあ



るものぞと、眞顔になつてことわり申し、其身の悋氣すべきだん迄にはおよばず、聟に悋氣の先をこされて、日比いひつけたる我悋氣の所へはゆかず、却て聟へのいひわけ、物には仕樣もあらう物なり。聟はそも〳〵此家へはいりてより以來、萬事をやめて朝起るから寐るまで、娘をとらへて、今の小者に物の言付やうが疑はしい、手代の九兵衛と目を見合たがうさんなと、毎日毎日いぢりゐれば、娘は家來に物いふ事もならず、耳やかましうこまりはて、ちひさい時から仕付しりんき心さらりとやんで、たゞ夫のうたがふ斷のみに打くれて、後には女ども近付、同じ男持ならまそつと悋氣せぬ殿子を吟味してもたうものをと、時節とて悋氣にこまりはてしはをかしかりき。聟は元來悋氣の先手を打て見るがてんなれば、娘をそばに引付置、一寸もいごかさず人にすぐれて悋氣強い男なりと口出しして觸ながし、用事にゆくにも跡からついて行程にすれば、増てや物見遊山芝



居の替り目などは、いかな／＼思ひもよらぬ穿鑿、平生羽子板の繪を見るごとくならびゐれば、娘ほうど精をつかし、是ではどうも命がつゞかぬ、何とぞ主の目に入たる女もあらば、給分の外に我等が着ぶるしの小袖帷子は何程もやるべし、どうぞ主にたはぶれ氣に入やうにして、わらはが手がはりとなり、すこしの間成共傍をはなれて息がしたしと、手廻りの物ぬひ腰元を頼み聟へ濡をしかけさせ、其上にまだ道頓堀新地の色茶屋へ、なぐさみにござつて下されと臍繰銀を出して、夫に詫言して色狂ひをすゝめ、妾にみづから膳をすゑて聟に氣に入やうに、随分頼むとうつて替ての心入、世には術の仕様もあらう物と、聞人手を打て是を笑ひぬ

ぶ器量に身をはたく抹香屋の娘

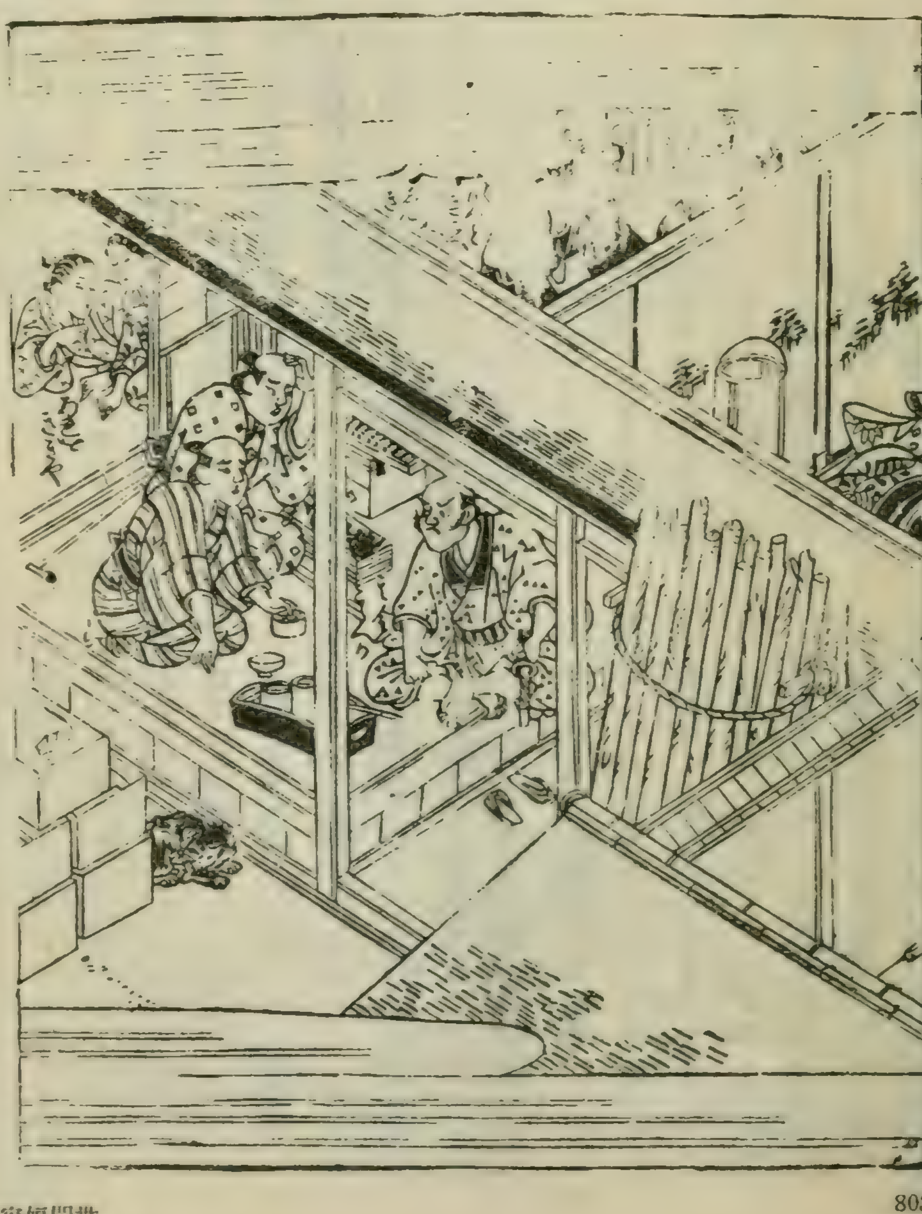
人の親のならひ、我娘のかはゆさに顔つきのむつかしき聟のきげんをとり、大分の物を入敷銀まで付て、しかも懐子にしてさむき風にもあてざる娘を、夜のもてあそびものにやりながら、さられぬやうに年寄男のお髭の塵をとり、横槌で庭はく事、是を思へば母親十月のくるしみも、生るゝ時取揚婆の骨折も、餅も鰹も味噌汁も同じ物入なるに、すこしの思ひ入にて娘の子をよろこぶ程、一代の損になる物はなし。せめて人並にそだちて當世風俗に色づくりて、裸で成とも貰ひたいといふほどなれば仕合なり。かならず意地のわるい浮世とて、男の子はうつくしく、女の子は大かた顔ふくれて胴あひみじかく、尻大きにだゝ廣く無景にして千丈が嶽をあらはし、鬼の住家へは人倫さらにゆく事なく、縁どほくして幾春か櫻に耻をさらし、二十二三まで白歯にふり袖、一生親の氣づくしになる事なり。さはいへむかし玄宗皇帝の時代には、萬民女子をまうくることをたつとみ、男の子が生るれば切のないからだに虫持た心地して、人のおたすけを待てゐるばかりぞかし。是を思ふに皆欲の世界にて、其比楊貴妃といふ美形の娘を持て、馬嵬が原の裏屋かりてゐる、僞媒女といふ人おきの嗅が肝煎、玄宗へ妾奉公に出し、それより一家一門うかみあがりて、男伊達の上米とつて物にかゝりの楊國忠が、俄大名になりしをうらやみ、欲から女子をノむ事を悦びぬ。いか様

下々は力の強い男の子をもたうよりは、大かたに生れついた娘の子をもてば、思はぬ老のいりまいよく、昨日迄は我肩にかけて舁てまはりし辻駕籠に、今日は紫ぶとん敷て置頭巾に、花色紬の首巻してのつて來る仕合、うまずの嚊は顔だちのよい疱瘡までしまうた、二三歳の女子をやしなひ、是を末の樂みに女夫は襤褸着ても、此娘には絹の小切つぎ合せ、肌のやはらかなるやうにと萬に心をつけて、判金廿枚の鶯を飼ふよりも二親の世話大かたならず、七つ八つより琴三味線を習はせにつかはし、朝夕糠袋の底のぬけるほど磨たてゝ、あたりもかゝやくばかりの娘となして、おそらく萬石どりの御大名を聟にとつて、若殿の祖父様祖母様と敬はれ老のたのしみをきはめんと、夫婦心うれしく世にない寶を持たやうに秘藏するもことわりぞかし。其隣に花抹香をして賣る女夫在しが、是にもひとりの娘あつて末々物にせんと隣を見ならひ、五つ六つから手入をしけるに、天性顔の道具共置所違ひ、名所古跡の多き面躰、第一地色樂焼の茶碗にひとしく口廣をさないには稀なる大食、しかもあぢない物の贄ぶとりと、七つの年疱瘡おもく、やう〳〵命は取止めぬれども其跡一面に雲紙を見るごとくなつて、物くひのよい古金買に見せても、つぶしと外みえぬ娘、兩親思ひの外に思案ちがひて、とかく一升入袋には、一升の抹香に樒ならぬ餘の葉をませて、業をはたきけるむくいかと過去未來の事迄思ひやりて、隣家の娘日々にうつくしくなれるを見て羨、迚もこちの娘はたゞの奉公に出しても、中々悋氣強い女房の所にさへおかぬほどのぶ器量なれば、兩親筆をすてゝ手習縫つみ針仕事、すべて女の業をやめさせ、近所の名を得し腹さすりの上手の方へ按摩習はしに通はせ、高が身についた貧乏神と覺悟きはめて、捨物にしてやしなひける。隣の娘はよい仕合の釣竿にめでたひがかゝつたと、夷川の妾肝煎のなべが嚊がきゝほうて來て、立賣の呉服所へともなひゆき、召抱にのぼられし侍衆に目見えさせけるに、百三十五人の中の勝ものとて早速に此娘きはまり、俄に乘物しつらひ縫箔の小袖の中から目を見出し、今といふ今仕合の花開き西國へ下りしなに、暇乞がてら抹香屋が方へ乘物にのりながらおとづれ、二親は低い鼻をいからして、兩はたについてひけらかし、こなたの娘御もあのやうにしておかずとも手入をなされよ、とかくなんの道にも、元手と氣骨を

折らずしては、こんなよいめにはあはぬ浮世、追付おさんが若殿まうけて、我々をお國のぢい様ばゝ様と、迎ひの乘物來る時にこれの娘も介添につれて下りませう、たのもしう思うて待てござれと、勇みいさんで二親は、稻荷の前迄逆つてかへり、捨金にて萬の質物を請戻し、ふいはひの鱠して相借屋の婆々鼻よんで、小半酒でもてなしぬ。同じ娘をもちながら、器量の善悪によつてむやくしい事をきくと、人のしらぬ心腹たてゝ、ひとへに焔魔のくやつた抹香やの女夫は顔ふくらかし、牛は牛づれがよい、わづかな賃とつて索麪の磨挽にゆく身で、大名聟にとつたとの廣言、かならず罰のあたる物ぢや、ぶ器量な娘もつたとて、宿替といふ家主もないものぢや、捨銀とつてはつく〲とつかやつたら、跡に算用があふまい、笑止な事ぢやと呟きしが、まだ二月もたゝぬ中に隣の娘、西國からかへつたと、兩親氣の毒の頭をかいて、外聞わるさに戻つた沙汰もせずに、すぐに丹



州の歴々の方へ、又妾奉公に出しけるに、此所にも半月ろくにゐずしてぐるりと立戻れば、是ほど十人なみにすぐれたる美女の身として、行先々に尻もためず其まゝ歸るは內證にあしい所が有かと、父母ねんごろなる人をたのみて僉議してもらふに、さる程に兎の毛でついた程も疵のない娘を、いかなれば早速につきもどすぞと、吟味せし懸なる人も不審をなしけり。いづれ女の都ながら美女は稀なると見えて、北國の大名より御國上﨟をたづねさせられ、上下京をさらへて見せさせらるゝに、此戻り娘ほどの器量なくして又此娘にきはまつて、脇明の大袖を振て雪國のお大名へありつき、二月に瓜を喰六月に櫻をながめ、華淸宮のたのしみ。殿樣此娘のきりやう御心にかなひ、晝夜御側におかせられて御出頭の近習衆、



お出入の町人をめされて御酒宴をはじめらるゝに、浮氣の町人輕薄ある程申て、京の君樣おそれながら殿樣へ爰は一つあげさせられて下さりませといへ

ば、此娘しさいらしい顔して、たゞもさへ飲酒といひて佛はいましめ給ふ、増てやおいやとある物をしひてまゐらするは、三世の諸佛の心にそむき、大きな罪なる事飲酒をやぶれば、邪婬妄語もろ共にやぶるゝと佛のいましめ、御無用になされませと眞顔になつて申さるゝ。是は堅い穿鑿今此世界に酒のますに、何が外になぐさむわざのござりませう、飲めやうたへや一寸さきは闇の夜と、扇をかざへて音頭をとれば、美しい唇をうごかし、酒を飲みて心もたゞしう慈悲をもなし、善道に入人には佛在世の時にも、ゆるされたると見えて、祇陀太子末利夫人などは、常に酒をのみたまふと未曾有經にも侍れは、過ず心も亂れぬ程は佛もゆるしたまふ。いやが上におさへたの間のと、むしやうに進ぜらるゝは更に善道とは思ひませぬと、實から腹のたつやうな顔つき、殿樣けうとく思しながら、お叱りあらば時の興もさむべしと、その色目も出されず、らんは京そだちには堅い事いふ、身が心をなぐさむるが役ぢや、ちとやはらぎ給へと振袖よりお手を入られてたはふれ給ふを、おらんおさへて近比あさましき御遊興、男女の婬樂は互に臭骸をいだくと、東坡居士の申されしごとく、人の身ほど穢らはしきむさき物はなし、皮一重下は臭くたゞれたるものにて、中々きよきものにあらねば、此なぐさみにてなくとも、何とぞ濁らぬ清淨なるあそびもあるべき物をと、佛説引出し御異見申せば、殿今はこたへかねさせ給ひ、推參なり女の身として一國一城の主にむかひ、經文ひいての異見だて、おのれらごときのいやしき女をはる〴〵よびくだすは、我心をなぐさめんためなるに、歴々の家老共さへ身が前では遠慮していはざる異見を、くわんたいなる女め、早々屋敷を追立よとすぐに其日に追出され、ぶ首尾にして都へまた歸りぬ。惣じてゆくさき〴〵の大名方をしそこなひて、又しても〳〵立戻りしは、なぐさみものゝ身としてとかく佛沙汰いうて、一座の興をさますわるい癖があつて、突戻されてかへれば、親一門打寄てさま〴〵と異見するに、其身も得心しながらとかく酒盛婬樂の時に至つては、我しらず佛經を囀る事、つひに止ずして大名奉公の手がきれて、あたら器量をうづもらしぬ。是一朝一夕の事にあらず。此娘もと養子にて實の親の穿鑿すれば、ことわりなるかな去お寺の大黒の生みすてし娘とかや、誠に念は生をひくといへり。其後は妾奉公

の口もなくて、裏寺の墓守の女房となつて、むかしの形かはり淺黄の古袷。の右の片袖紙子ぬひつぎたるに、霜月比の風をしのぎ、觀世ごよりの帶して髮はならずまげに爪きらず鐵漿つけず、こわつきも舌ばやにうらがれ、かくもいやしくなる物かな。又抹香や惡娘は其身面躰にて錢のまうけられぬといふ事を我とがてんして、按摩に心をつくし、十四經をよく覺えて其上に天性苦手といふものにて、小兒の虫痞をさするに妙を得て。上手の名をとり、お歷々より乘物にてむかひに來り、療治にひまなく次第に金銀たまりて、むかしの貧家を去て今は長者町に玄關作りの大屋敷をもとめ、門前に療治人市をなし、酒肴くだ物菓子の音物たえず、二親を安樂にやしなひぬ。是を思へばぶ器量なる娘を持しとてなげく事なかれ。美女持たる兩親はあさましき姿となつて、むかし相借屋のよしみをしたひ、此按摩取りの方へ合力のねがひはかどらず、次第〳〵に見にくうなりしが、さすが大黑の娘養子にしたゆかりとて、今は親仁は此界の人でなし、天竺浪人となつて、其後は一に俵ふまへて、六十にあまつてから臼踏して三條の裏町に一枚敷かつてござつた〳〵

物好の染小袖心の花は咲分た兄弟の娘

所から武藏野の廣き心の商人、少望姓の時より大きなる請取普請にかゝつて、年々大分まうけためて、今世盛の金の光り、軒にかゞやく星月夜、鎌倉河岸の材木屋の木曾右衛門とて、かくれもない新長者、十六と十五になる兄弟の娘を持しに、二人共に都にも稀なる器量、惣領娘おはるには、通町の中橋邊の有德人、龜松屋の次男久米三郎を養子むこにして、家督をゆづる契約、妹おなつは姉の婚禮すみてのち、身代よろしき方を聞たて緣につくる思案にて、まづ惣領娘の祝言をいそぎしに、久米三郎病氣によつて延引を親父迷惑がられしは、盛だちたる妹をいづかたへとも緣さだめなく、嫁入させぬ内に脇ふさぐ程の年にもならばと、後のつかへるを氣の毒がり、大かたに本腹あらば、先表向の聟入の祝儀をすまし、其上にて心まかせに養性いたされよと、親と親との談合にて、日柄見るにもおよばず、俄に今宵祝言と諸一門をよびあつめ、出入の手代數十人麻上下をぐ

わりつかして、家内は萬燈のごとく燈火をかゞやかし、聟殿お出をまつ所へ、聟の所より追々手代はしり來りて、久米三郎殿此間聟入の御心ごしらへに氣をもまれしゆゑか、但し四五日養性藥たべられざるかげんか、唯今門口にて目をまはされしが、氣付も鍼も叶はず、聟入の行所ちがうて、地の下へ永くゆかるゝ身とはなられしと、泪と共に申てかへれば、家内あきれて詞もなく、手代共が今宵を晴と三井が店で仕立させたる麻上下、直に葬禮の用にたつとは、不定世界とはいひながらあんまり變りし事共と、親父胸をいためらるゝもことわりぞかし。姉娘はかくと聞より涙雨袖をひたし、夫におくるゝも世のならひとはいひながら、是程はかなき憂目にあふは、前世の因果なるべし、たとひ一夜もそはぬとて、夫婦の契約するからは、女をたつるはずはなし、姿をかへて過さりし夫のための後世菩提の道に入べしと、一すぢに思ひさだめて、さげ髮の中程を思ひ切かゝる所を、二親乳母取つきてぜひ思ひつめたらば、四十九日目にいかにも尼になすべしと、やう／＼いさめて其夜は過ぬ。是より姉は髮容にもかまはず一間の奥に取籠り、外なく念佛申て暮しける。親たちはとても跡めを入ねばならぬと、又聟取の內談有しに、はなれきつての出家ののぞみ、いろ／＼とめても聞入ざれば、後には異見の品をかへて、なんぢ孝行の心ざし僞りなくば聟をもとめて此家をたつべし、妹おなつははや本町の呉服屋へ契約し、たのみまでとりたれば、變改して此跡をつがすべき事もならず、そちが心ひとつにて此家を退轉させ、親迄に先祖への不孝をさするか、家を潰し親の心をそむき、身をたすかる佛法ありやと道理にせめられ、あやまつて思ひとまり、其後靈岸島より歷々人の三男を入緣にとり、萬事をわたして親達は近所に隱居屋敷を建、是へ引込世に思ひのこせる事もなし。姉娘は入聟にはじめの夜心底のほどを語りて、親孝行の爲かく夫婦のかたらひなすといへ共、さりとは心にそまざりき。まつたくおぬし樣を嫌ふにあらず、身を觀ずれば夢なるかな、錦の褥をかさねても、人間つひの煙はのがれがたし、とかく後世の心入つどつどにかたり。至極の涙にしづめば、入聟是を感じ心やすかれ其方の望みにまかせ、二親一生の中はずゐぶん懇にあたり、死去の後勝手次第に出家さすべしと、表向は夫婦分にて內證は嚴しく、かりのてんがうさへいはず、あね

の手廻りに久しくつかはるゝ、もんといふ眉目よき腰元を椅りにねやへつかはし、それは〳〵行儀正しき身のとりおき、いな事で孫がおそいと二親内證しられねば、待兼らるゝもことわりぞかし。是にかはつて妹のおなつは、本町の呉服やへ縁につきしが、下々と密通あらはれ堪忍せぬと血氣強き息子が、血眼になつて腹をたつるを、親々異見し其上に谷中の旦那寺の和尚までをかけて、さま〳〵佗言して世間沙汰なしにいとまの状もらうて立歸り、すこしも是を耻たる粧ひもなく、若い手代をとらへてはじやら〳〵とてんがう口、兩親の目にあまり又も浮名のたゝぬうちにと、縁の口のあるをさいはひに、其まゝふり袖きせてすこしも年のひねぬ様子に見すべきとて、細眉つくらせ白粉濃紅つけてあま棚のぬり物屋へ、明日の夜よめらす契約、二度めなればとて千兩の敷金にて、前々の疵を埋、こしらへも大概にして送らるゝ用意半へ、紺の單衣着たる剃下の草履取、角鍔の大脇差さして案内なしに臺所へつつとはいり、おなつにあひませうと大平に申せば、手代共輿をさまし、こちの内におなつといふ食焼はないといへば、イヤサこれの妹娘のおなつにあはせて下され、身はおなつと二世迄の夫婦の約束いたした、角助といふおなつが夫、承れば明晩何方へやら嫁入いたす實說でござれば弓矢白山堪忍いたさぬ、おなつをお出しなされと脇指ぬき出しむつかしうかゝれば、番頭の杢兵衛腹にすゑかね、推參千萬おのれらがやうな下郎にはお詞をかけらるゝ事はおいて、かりにお姿さへ見せられたる事もなき主人の娘御と、二世の約束とは大それたるねだれもの、長居すると棒ぶせにして、御上へ申上るがと肘まくりしてかゝれば、角助打わらひ、推參といふはうぬらが事なり。おのれが主の娘と夫婦の約束ある身共なれば、此角助も主筋ならずや、それに腕まくりしてくわんたい千萬、主ある女を縁につけんといふ、道にそむきし仕方を默つてゐる男でない、此方より表向へ斷申上て、おなつも聟も木の上へのぼせて見せう、是からはおなつにあふ迄もない、祝言するが實か虚か、まつすぐに申せ、眞なればすぐに是から名主年寄へとゞけて歸るが、さあ實不實を急度申せと眼をむき出しいひければ番頭聞て、先おのれがおなつ様と夫婦ちやといふ證據を出せ、證據がなくばねだりものにきはまつたゆゑ、たゞはかへさぬと、和藤内が虎をとりひしぎし勢

ひのごとく、肩肘をいきらし睨めつくれば、番頭がほしてびこ〳〵とやかましい、主人おなつが手跡は見しつてゐつらん、本町の呉服屋で二つなき命にかへて契約した、印の起請是が證據にならずば浮世は闇ぢや、よく見おけと晒の守袋より一通を出し見すれば、妹娘の自筆にて其方と密通せし事あらはれ、いかなる憂目にあひまゐらせ候とも、たがひの心かはらず來世迄もそひ參らせ候と、諸神を書籠たる起請文、番頭見て赤面し、張たる肘をすぼめて、是より手をつきさま〳〵侘して、此誓紙を廿兩にして私へ下されともらひかくれば、金銀づくにはあらず、おなつをつれて宿ばいりを仕ふ、女房共を此方へわたされよ、さなくば御町へおことわり申とかさ高に出れば、二親は物影から此様子を聞て、一身に汗をながし、さりとては外聞わろし、百兩が貳百兩でもあの者めが滿足するほど金をとらして、書た物を取戻せと、餘の手代にいひふくめ番頭が耳へふきこますれば、無念なる金を十分にとらるゝ事の口をしと、齒がみをなせども性惡の娘のしぞこなひ、今さら取返しがならず、だん〳〵つけあげ貳百五十兩にして起請の外にかまひないといふ一札させて、此上の口留して酒までもつてかへしぬ。同じ胤はらひとつの兄弟とても、姉とは格別の生れぞこなひ、是とても親の身で指がきたないとて切てもすてられず、家内出入の下々までに沙汰するなといひふくめ、契約の尼棚へ嫁らせしが、夜ふけて門の戸の鳴毎に、妹めは何事も仕出來はせぬかと、二親肝をひやさるゝもことわりそかし

世間娘形氣三之巻終

世間娘容氣四之巻

目録

気儘に衣通姫の両親調へかねる難儀や乃娘

親仁が異見の耳をつく針手いれさりとて見事な縁

聟をうち殺妹が隠密を二両より茶屋名類

あひそを月額な釜ぬかれさ婿がきんでい

胸の火に伽羅の油解てまいる四年娘

嫁入を日待に浄瑠理の語はさぬ二人が中

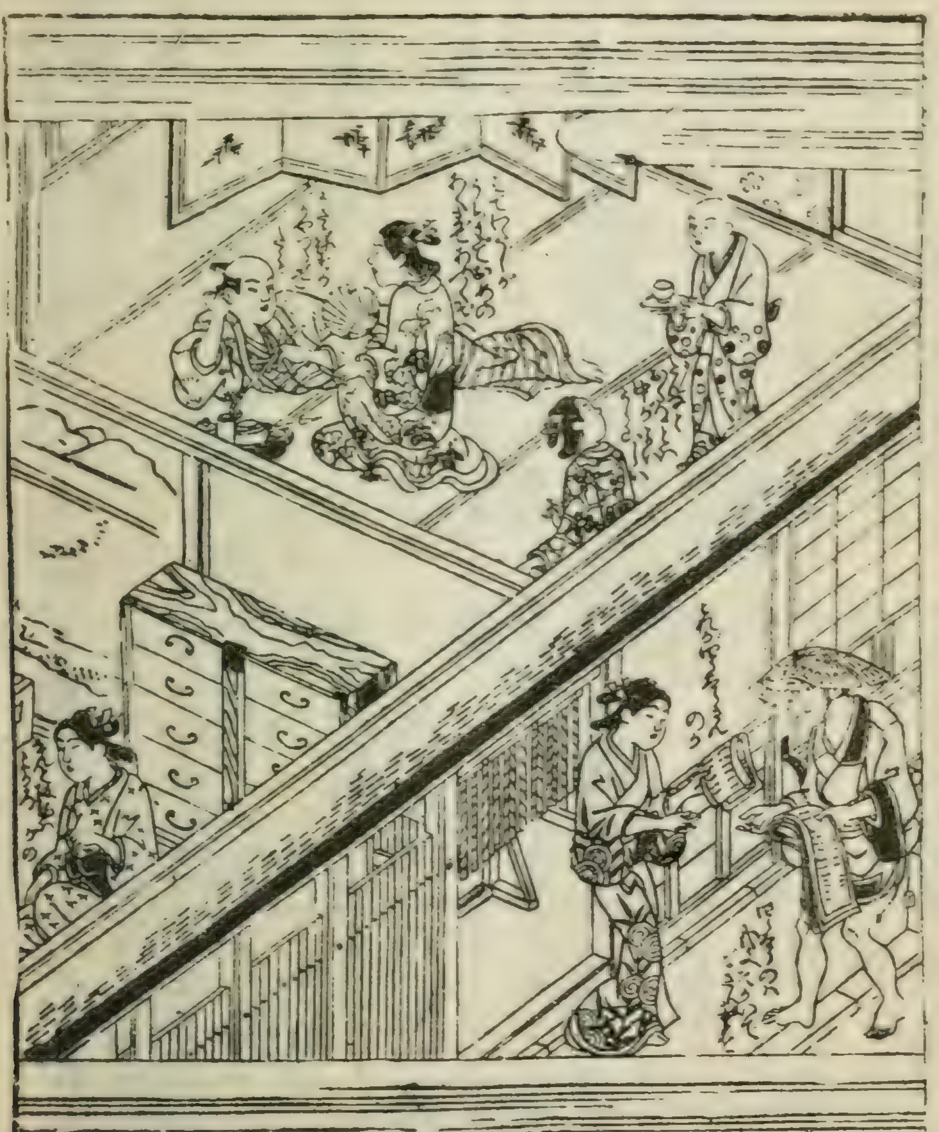
義理といはれぬ無理殺し迷惑な浮名をおひ女房

仕合の世生八十八の祝ひけ切て論を重れさ娘

器量に打込聟の內證調て見る鼓屋の娘

淺草の御下屋形にて殿樣七十の賀の御いはひの御能首尾よく相すみ、太夫役者狂言師迄御金を下され　益御きげんよく御酒宴はじまり御肴に御扶持人の小鼓打、松林音右衛門を召出され一挺御所望冥加にかなひ、しゆびよく打をさめて御褒美の御言葉數々のうへ、音右衛門も五十有餘と見ゆれば悴に藝を傳へてをりふしは替りをつとめさせ、休息仕るべきの旨有がたき御意生前の面目と袖にもあまる身の悦び拜領の五十枚をもたせ白銀町の宅に歸り先神棚へあげて此上の仕合をいのり、さて惣領の音五郎をよびよせ有がたき殿の御意を申聞け、いよ／＼鼓のけいこをはげむべしといひわたし、翌日より暫時もたいゐさせずをしへけるに羽衣の曲舞一番何ほどをしへても覺えず、親音右衛門も鼓の外に手を打てあきれ、さて／＼親に似ぬぶ器用もの是では藝者の家たゝず所詮他所より養子をして。おのれは打切てしまはうかと、嚇しのかけ聲かけてもいかな／＼覺えのかひないよりは、生得不拍子で間にあはず親父きのどくの首をかいて寢食をわすれ、起るからねる迄をしへて見れ共聾に物いふごとく。一つも役にたゝざりき。然るに此音五郎が妹におむめとて今年十五の月の顏花の容又ならびなく兄に優つて天性拍子よく鼓をすきて、親の打ほどの事をならはずしてよくおぼえ、亂道成寺の傳授事迄聞覺えて、うたせて見るにしかもよく鳴て聞のよい事親もおよばず。さりとは浮世とてまゝならずその器用を音五郎に半分やれば家はめでたう續くといふ物なるに、何程上手にうてばとて女の小鼓は、出家の兵法鍛錬して印可をとつたと同じ事にて表向へ出されねば、名人に成ほどつらし。あつたら藝をうづもらする事の殘念さよと女房にしみ／＼と語ければ、內儀聞て兄より妹を讃させらるるは大きなるお目ちがひ、妹のむめは緣付させても世帶など中々持ものにはあらず、あのやうなぶ器用なむすめの子は、ひろい世界に又有まじと產出した母が目にあまれば、他人はさぞや指さして笑ふべし。女は貴も賤きも針持すべしらずしては一生立がたし。さるによつて十の年から我膝もとへ引付置針仕事をしゆるに、今にふくろび

一つぬふ事ならず、女の役にもたゝざる鼓にきゝ入、あれではないと末々は米にもせうと思うて稽古さつしやる歴歴の弟子衆をそしり、女の口からひとこなしにいひまするが、其手間でせめて兄の音五郎が三分一針手がきけばわらはが氣だすけ、ぶきようなとこなたはしからるれ共音五郎ほど器用ものはござらぬ、誰にならはねど我着物は人手にかけず、我と仕立てきるのみか、此中こなたの御屋敷へ着てござつた裏付の上下は音五郎が仕立ましたが、口利の羽織屋が手ぎはにもおよばぬほどの仕立際、世界の重寶といふは兄が事たゞ苦になるは妹が手槌、うつてもたたいても役にたゝずで行末が案じらると、額にしわよせしんきさうにいはるれば、音右衛門かぶりをふつてそなたと我等とは大分のおもはくちがひ、



妹が針手のきかぬよりは兄めがつゞみを打をらぬは、先さしあたつて此家の退轉、其家に生れて曲舞ひとつきかるる程に得うたぬこそ道理なれ。男と生

れてぬひ針の道に心をよせるからは、本道の人間といふものにあらず。燕石を玉と見て琢ごとく百日千日藝をみがき入ても元が光りなき石なれば世話やき損といふものとかく急に器用なる鼓に心がけある若い者を養子とし、いもうとのむめとめあはせ我後をつがせ、兄の音五郎はおのが得手の羽織やへ弟子奉公につかはすべしと所存きはめて入縁の事を聞立しに、八丁堀の薪屋のむす子、此おむめを過つる十八日に淺草の觀音まゐりに見初、うか〳〵と物をもくはず思ひこがれしを、後見の手代十右衛門此譯をきいて娘の親商人にあらねば、ちとふ同心ながら、あれ程に旦那の思入られし上はたとひかごかきふぜいの娘でも、よびむかへずはなるまじきに、增てや扶持人の藝者一門にならせられてもはづかしからずと、さいはひ弟子の中に主人の友達ありけるを頼みて、自然嫁入のこしらへなど



に屈託あらば其入用は手前から何程もつかはすべしとねんごろにいひつかは

せしに、此方は聟をとる所存なれば他へ縁組は思ひよらずとの返事を、薪やのむす子聞とひとしく、なほ〳〵こがれてあの娘とそはでは此まゝ思ひ死にするといふ物。しかれば命にはかへられず所詮商賣を後見の十右衞門にとらせ、鼓打の養子になつて藝者になるぶん、入聟に肝煎て給はれと肝煎かけし友達をたのめば、晋右衞門方へゆきて右の段々はなして聟に參らんとの事、同じ養子をなされうならば御息女にあれほど思入、身代さらへて持てこうと申深切なるものを、聟になされたがお爲かと存ると達てすゝむれば、いかにも拙者身分には少々過たる聟なれば祝着にも存ずれども、宗旨を承れば法花宗ではなきよし、それなれば千兩萬兩持參金があつて、何程に器用な生れつきでも、聟にとる事はいやでござると

いひきれば、立歸つて薪屋へ此よしをかたれば、ハテあの娘ゆゑに地獄へ落たらまゝよ、代々淨土なれど宗旨を今日からかへませうと、俄に妙法寺を賴みて總の長き數珠に持かへて、是を又晋右衞門が方へ友達を遣はして、今朝御經を頂き改宗せられしといはすれば、晋右衞門ふしよう〳〵に根ぬきの法花でなければ信ぶうすく、白墮落な物なれど、それ程までに娘が事を忍ばるゝ上は成程聟に取りませうが、不斷一所に居ては互に窮屈にて、飽めも見ゆればいかゞなり。幸ひ此裏に明地もあれば、我々夫婦が氣休め所をあの方から急に建らるゝやうに賴みますると、是より内外の入用共書付にて取よせ、吉日えらみて聟取の日限もはや一兩日になれば薪屋の息子は灸するゑて山見る心になつて嬉しく、男つくつて悦ぶを、一

門さては後見の十右衞門詞をつくし、藝者と醫者は商人とはちがひ其身生れついて其道にはまり、天性の器用にて名をとる事なるに、十露盤の外藝能もたしなみ給はぬ田夫の身をもち、名人の藝者の世繼にならんとは無分別の至り、其上代々仕付來られし家職をすてて金銀入て他所への入聟、拙なき世話に小糠三合持てさへ入聟すなとは申に、かた〳〵不思案の至りと異見すれ共聞入ず。其日になれば思ひ焦れし美形の娘の顏見ん事を悅び、勇みすゝんで聟入せしに、晋右衞門夫婦兄の晋五郎出て祝儀の盃取結び、肝心の姬君の出られぬを不審すれば、一昨日より大熱にて今に枕があがらぬよし、是はと自身懇なる醫者の方へ走りゆき同道して見するに、疱瘡の山をあげてしかも大ぶんの出もの、ずゐぶん大事にかけ

られよと薬おいてかへられぬ。聟は疱瘡と聞よりも萬事を捨ておむめに痒くとずゐぶん顔を掻きやるなと此せいたうをするもことわり、えぐ瘡とやらんにて一面に跡つき、昔の美なる容はなくて面躰黒菊石引つり、ひとへに炭火で手水をつかひしごとく、廣き武藏野に又なき惡女、しかも針手はきかず、疱瘡のたまりゆゑか左の足まで短うなり、戀こがれたる所へはゆかず、しばらくも傍にゐがたく、金銀大ぶん打こむばかりか、數年しにせし家業を捨て日來そしりし法花宗にまでなつて、是は何たるむくいぞやァ、南無妙法蓮華經〳〵

胸の火に伽羅の油解て來る心中娘

世の中に見せまじきものは道中の肌付金と、短氣な酒の醉に脇差と、それよりわけてあぶなきものは、若い後家と嫁入盛の娘の宰領に、器量のよい音曲のなる手代を付て、湯治につかはすは偏に獺をとらへて瓶の灸の蓋をさするやうな物で、しばらくも油斷のならぬものぞかし。爰に泉州の堺は千代の松原、萬歳の浦風しづかに人の住なしも表向よりは內證奥ぶかにして、京にまされる樂人あり。是皆唐へ投銀して時代儲けの分限、高麗屋の仙德とてかくれなき福人、惣領源吉に母屋わたして其身は隣家に隱居を建、仙德夫婦いもと娘おるゐとて今年十六艶顏はひとへに遠山に見初る月のごとし、髮は聲なき宿鳥にひ〳〵く、芙蓉のまなじり鶯舌の聲音、きく人五臓にこたへて立所に氣をうしなふほどの器量、兩親娘自慢にて諸方より縁付の事いひ來れ共中々大抵の所へはやるまじ、我よりまされる身代のたしかなる近國にかくれなき商賣人、宗旨は東本願寺宗にて聟の器量すぐれ諸藝に達し、色狂ひせぬ始末ものにて、身過に賢く世間にうとからず、舅姑に孝ありて人に憎まれぬ聟の方へならでは遣はすまじと、見合せ聞あはすに年月をおくりて、十七迄いたづらに深窓にやしなはれ、賽の河原の講釋聞で世をあぢきなくくらせしが、とかく盛立たる娘の子を、親の手前に長おきするは南風の吹時生魚たばひて腐らして捨つるがごとく、盥せぬ娘に虫がついては、跡へも先へもゆかぬものなり。其町に伽羅の油屋の辨

七とて店がりの若い者あり。元は大坂本町の古手屋の息子にて新町の半太夫にたはぶれ過し、勘當せられて堺の鹽を踏む爲に此所に姨の有しをたのみ、僅の油見世を出しおけども、商は假令にしてあけくれ男つくりて、ないもせぬ日野のひとつ着物きて近所をありきしが、いづれ女の好る風俗、しかも義太夫ぶしが上手にて、高麗屋の日待によばれ道具屋心中の淨るり語りてより、娘のおるゐ思ひつきそれから明暮心をつくし、魂身のうちをはなれ、辨七が懐に入て我は現が物いふごとく、春の花を闇となし、秋の月を晝となし、雪の曙もしろくは見えず。夕ざれの時鳥も耳に入ず、盆も正月もわきまへず、後は我をおぼえずして耻は目よりあらはれ、いたづらは言葉にしれて母親さとく氣を付出し、月待日待にも辨七をやとはず、あまつさへ贔屓買にせし伽羅の油さへ買はせず、辨七が方へたよりすべき橋さへたえて、文のとりやり成がたく、思ひの火に互の胸を燃し、兩方戀に責められ次第瘦にあたら姿のかはり行月日の中に、辨七胴をすゑて闇になる夜を待て裏の高塀を越、身をすてゝかよへば娘も戀より大膽になつて、猿戸の鎰を盜み出し、人しれず

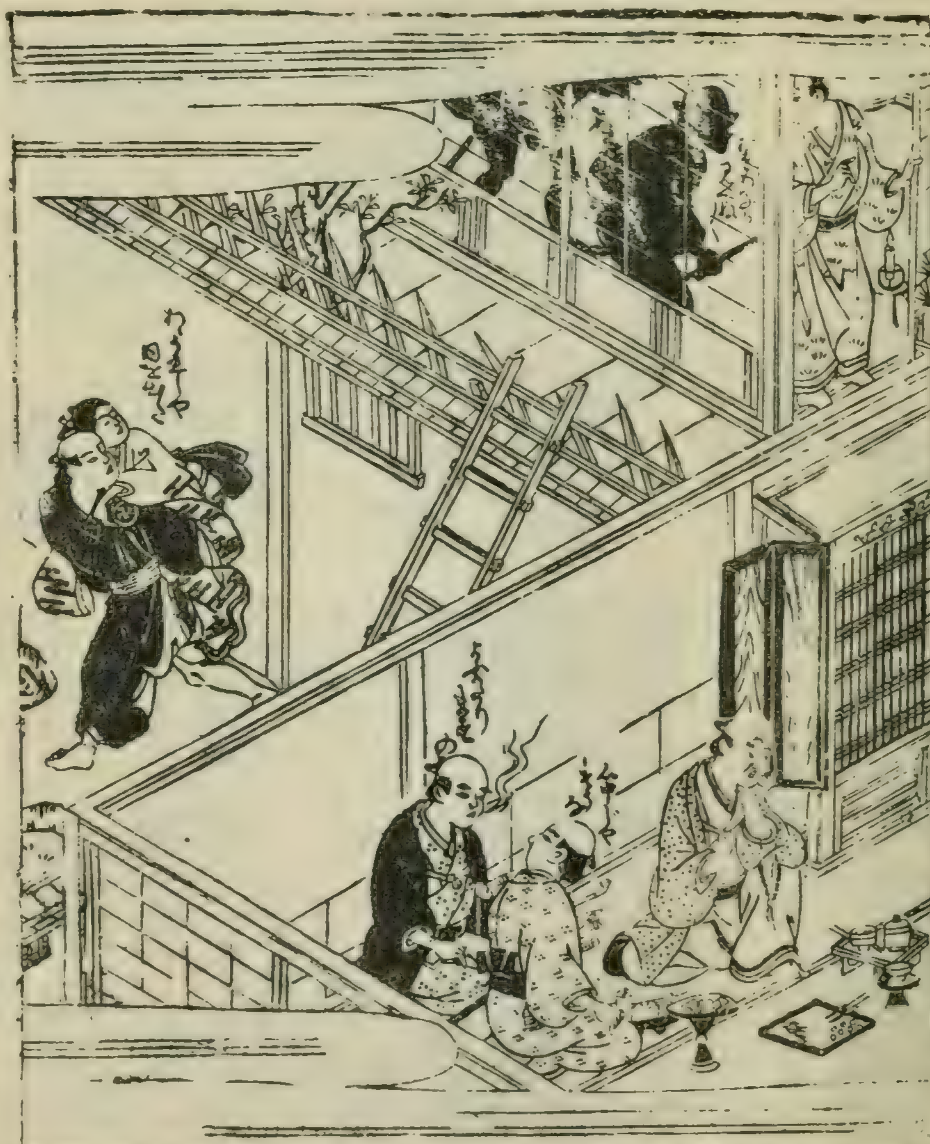
ふたりが命をかけて二世迄かはるなかはらじと、互に小指を喰切。其血をひとつに絞り出し、娘は男の肌着に誓詞をかけば、男は女の下着にかきかはして、後には戀の詞もつきて逢ふたびに物はいはず泪に更て別れを惜み、次第につのるは此道のならひぞかし。情の日數かさなるを房付の枕より外に知者もなかりしに、思ひの種塊りて八九月に青梅を好み出、食を見て嘔吐し、ぶら／＼をかしき病ひの容躰、母の親は氣遣がり縁にも付た娘ならば、惡阻ぢやと思うて安堵もなるべきが、懐子のかうした煩ひは皆鬱症にて、後は癆咳にもなるもの、ずいぶん心で養性し、早く息災になるやうにしてたもれ、御講衆の中の大道筋の和國屋塵入殿嫁に、旦那殿が約束なされて、明日たのみが來るはずにて、近々嫁入さする心ごしらへするなれば、そなたも心をいそ／＼もち、はやう孫をでかして祖母さまといはしてたもと、神ならぬ身ははや人しらず。お中に孫のあるをも知られず、娘が氣をいさめんために縁邊の極まりしを早く耳に入らるれば、おるゐはぱつと胸にこたへ、なほさら食もすゝまず部屋にとりこもりて案じわづらひゐたりし所へ、辨七方より今宵逢はでならぬ事り」とひそか

に文して言ひこしければ、さだめて外への縁組の沙汰をほのかに聞給ひ、我をうたがひ心の底を聞んとの事なるべし。おろかやたとひ親はらからの勘當はうくる共、外へとてはゆく氣なき妾が心を疑ひ給ふはきよくもなしと、暮るを待てね屋の戸のかけがねはづし、ねもやらず嵐の音もそれかと待わびて、夜半のかねを數へゐる時、いつものごとく辨七は高塀越て忍び來り、おるゐにあうて泪をながし、我事親の勘氣をゆるされ近き内に大坂の親の家へかへるにつき、母の姪とひとつにしておもやを渡さんとの相談きはまり、明日母とおも手代我等を迎ひに來らるゝと今朝乳母が方より内證をしらせしが、勘當をゆるさるゝは嬉しいといひながら、そなたと別れ思はぬ女房をもたうかと思へば、胸算用ちがうて更に故郷へ歸る心底みぢんもなし。何とそなたは我と縁をきり明日にも親の仰にまかせ、いづ方へも嫁入する心底か極意をきいて思案せんため。今宵しのびて來りしが心の底はどうぞととへば、我身はなほさら只ならぬ身祝言もちかづくよし、迚も生てはゐられぬ所、今夜何方へも立のき、もろ共野邊の露と消えたき願ひなるが、御身は何とおぼしめす生てはとかく添はれぬ身ぢやに、一所に死んで先の世でながう添うてくれうとは思うて下されぬかと、男の膝に顔おしつけて忍び音に泣く娘が有樣、魂にこたへて嬉しく淺からぬ心ざし、しからば今宵是より直に立のくべしと、此世の名殘に　　ついむく起にして、丑の刻の時計をふたりが知死期と觀念し、高塀のりこし今夜の中に飛田の墓所迄あゆみゆき、あれにて清く果つべしと北をさして行程に、比は師走の五日の夜、闇さはくらし雪はしきりに今死ぬる身にも辛くおぼえ、一向爰にて死ぬまいかと野中の雪を手してはきやり、おるゐは其處に座をくみて懷の中をさがし、かなしや未來迄ちと頼みに思ひし血脈を忘れ來れり、さなきだに女は罪ふかしときくに、ましてやかゝる無理死、後の世とても恐しし、せめては此血脈をあの世の土産とおもひしに、是なくては後世の事おぼつかなし、さあればとて取にかへらば中々とらへてはなすまじ、さいはひ明日は味噌つきとて、下女のすぎは夜半から豆をしかけて只ひとり起てゐる筈なれば、近比わりなき事ながら是よりわらはが方へ御越あつて、すぎをよび出し何とぞ僞り部屋にある血脈を取出させ、持て來て給はれと泪片手に賴む

にぞ、一しほ不便に思はれ、よしや立歸りいかなる憂目にあへばとて、我ゆゑ死でくれるもの丶、最期の望をかなへさせぬもむざんなる事なりと、いかにも取て來て參らせん、幸ひあれにすかし見れば、菜大根の市場と見えて藁葺のひとつやあり、戻る迄は是に忍びてゐたまへ、今の間に立歸り思ひこうだる最期の場所、飛田迄はどうして成共今夜中にともなひゆき、無緣法界の墓の前にて刺ちがへて死ぬべしと、市場の小屋におるゐを入おき、其身ひとり引返して娘が家へ走りゆきぬ。いづれ世の中の有樣いろ〳〵ある中に、遠里小野の油屋わづかの事に此節季を仕舞かね、おしつめぬさきに思案きはめて、借錢の方へ有物をわたし、たとへ何歩にまはらう共身すがら出て參る上は、御了簡たのみ入と書置認 雜物にそへ、九十一にならる丶母親を背中におひ、くらまぎれに欠落して、京の北野おかゝの姉聟の方をたのみに、八軒屋からまだ舟があらば乘りてゆくべしと



出かけぬるに、あまりの大雪に負たる老母のことえらるゝを痛ましく思ひ、是も市場の小屋に母をおろし、此雪に笠なくしては中々半町も參られず、さいはひ此邊に佐五兵衞とて存たる百姓あれば、其かたをたゝきおこし、笠をかりて夜のあけぬうちに八軒屋迄參るべし、しばらく待てごされと母を市場に休めおき、佐五兵衞方をやう〳〵尋て竹の子笠を一かい借りて立歸り、さあ〳〵とつてまゐつた、夜あけぬさきにはや〳〵といふ聲、母は年寄の耳疎くして更にきかれず、おるゐは辨七が血脈取て來て飛田へともなひゆくと心得さぐりよるを母と心得、何かなしに背中にかい負、八軒屋を心ざしてはせゆきける。其跡へ辨七はあやふい場所をさま〴〵として下女のすぎをたばかり、血脈取出させて請取より一散に馳



來りて、何かと思はぬ隙をとつて東がしらみ、もはや飛田までゆくうちには夜もあくべし、しかれば往來の人に見とがめられては一大事の最期の障り、

爰こそ我々が死すべき過去よりの約束の場所ならん、念佛申給へと、いとしや耳も聞えぬお婆々を引起して相口ぬいて心もとをさしとほし、すぐに其刄物にて我身も同じく自害し、思ひもよらぬ最期の有さま男は廿二おばゝは九十一、ためしなき心中と夜明ての評判、さぞや來世で胸算用がちがうて、年寄女房にもてあつかふべしと知た程のものは手をたゝいて笑ひぬ。かく共しらず辨七お袋はおも手代作兵衛つれて、親仁の勘當せられ久しく顔見ぬ我子にあふべきと悦びいさみ、堺へゆかるゝ道にて、心中したものありと大勢人群てさま〴〵の噂何心なく立寄て見て、これは正しく我子の辨七なるが、どこに見込ありて百にちかい婆々とは死んだ事ぞ、若いものなれば言かけられて引かれぬ義理にせまつて死んだ事もあらうが、よい年をして盛の息子をたらし扱もにくやと、ふしやうな最期の相伴せられて、なき跡までの無實の恨、草の陰にてさぞ迷惑に思はるべし。扨かの遠里小野の油屋は母と取ちがへてやさ形の娘をおうて、八軒屋迄來るうちに、夜があけ見てから大きに動顚し、おるゐに次第をつぶさにきゝ、すぐにくだんの市場の小屋へ立歸つて見れば、老母は朱になつて空しくなられぬ。相手も死ぬればねだるべきかたもなく、かうならるゝも前世からの約束ならんと思ひあらきめ、辨七母とひとつになつて高麗屋へ連だちゆき、娘の不義を侘言し、すぐに辨七お袋は娘ぶんにおるゐをもらひ、腹なる子を無事に產せしに玉のやうなる男子なれば、辨七と名を付油屋に後見を頼み、おるゐは北濱の米問屋へ縁に付しに、心あらたまりて聟と中よく、年子に男女の子を十一人までまうけて、しかも八十八の升かけ迄きつて、疊の上にてめでたう往生せられぬ。あぶない最期をのがれて榮花の長生、かへす〴〵もお婆々と先へ痛いめして死んだものこそ、現當二世のそんの損なり

身の惡を我口から白人となる浮氣娘

浮世のならひとて賤きものゝ娘も容にひかれて姉の死後へゆきて、年寄男持もあり、商賣の勝手づくに下人を引あげひとつにする家もあり、敷金見かけ在所より色の黒い養子をするもあり、七明年なる親どもいそがぬ事にをさな

い時から許嫁して、年たけて娘は思ひの外美形にそだち、男は兀頭にて少しおいてきたわろと、妻あはすも末は見えぬ事ぞかし。これらの娘の身にしては當世男の伊達を好む風俗中折の髪先、ぬぐひ白粉の地顏など見て、あんなを欲しやと思ふもにくからず、それさへ隱居さまおそろしく、姑の氣をかね隨分さられぬ用心して、朝とく起て髮ゆふかたちを見せず、夜の行水くらきをおそれ、夫の疑ひをやすめ、それぞれに腰元使ひもあるに、自身茶の下の薪をへしたり、眞綿ひくこそあれ、朝夕の膳にすわりても箸もあたふたとはとらず、鱠せゝらず燒物に手もかけず、萬たしなみ深く針仕事の透には、ともしびのかげを少しそむきて、伊勢物語薄雪の草紙などを中音に讀みてゐて、外へは心をうつさず、我男のうたゝねに氣をつけ、裾へ蒲團打きせ夏の夜もすがら夢もむすばず、枕ちかくゐて團の風をたやさず、鼻のひくい夫を大事にかけて人の目にかゝらぬ程の稀なる白髮を歎きてぬき、宿を出れば歸る迄夜着にもたれて床に待わび、うつゝにも男の事を忘れず、さすが懷子のあさましさは、世界の男はこんな文盲な不器量なものぢやなと思ひくらして、外を見ぬ氣さんじは、一途にこちの人のやうなは日本にないものと、はじめの程は有がたう思うて、朝鮮人參のごとく大事にかけぬ。されば一切の女移り氣なる物にして、次第に心しやれて來て、浮世のうまき色咄しにうつゝをぬかし、芝居の濡狂言をまことに見なし、いつともなく心をみだし、二軒茶屋の葭簾から安井の藤見歸りのうるはしき、立役子供の笠の內を見て、うかれ歸りては今迄大事にかけたる男うるさく、定紋のつきし扇子手拭、又は下着に二つならべのかくし紋、腰元相手に其役者の噂のみして、一代やしなふ男の事を嫌ひ出し、とかくさらるゝ分別より、萬の始末心をすてゝ、大燒する竈を見ず、いらぬ所に油火ともすもかまはず、麻上下の皺は寄次第にして簞笥へおし込五節句にも朝寢して髮ゆはず、氣がつきて立ぐらみがするとて、晝も高枕して物いはず、朔日廿八日にも機嫌わるう顏ふくらかし、口がわるいとて朝夕茶好して、はだてゝ煮燒させ、襖障子引さきて紙捻にし、色付の柱に齒黑ふきかけ、床の塗縁にあてゝ楊枝けづり、書院の軒端は洗濯物の竿もたせとなし、接木の初咲を用捨なくへしをり、香の物桶の鹽入時を芝居沙汰に取まぎれて打わすれ、あたら瓜茄子をくさら

かし、替り狂言の番付賣を久三丁稚を後から追かけさせて買もとめ、門立の歌祭文に錢米をつかんでとらさせ、なんの事もない座敷を家鳴がすると言出し、夜半過からおれが所へ狐殿が見まはしやると、亭主が淺黄羽二重の股引はいて　　　　、とかく飽れる魂膽、男見かねて物いひする時、お氣に入ぬ女房を一日も見てござるがわるい、何が執心で此方がやうなものをおかさまに持て、まだら〳〵と氣にあはぬ事をながめてござると、是から二つ三ついひあうて下々の耳に入ほど泣出し、髮先すこし切て辻駕籠に打のり、尻に帆かけて親里へ立歸り、今迄はずいぶんとこらへて辛抱してをりましたが、もはや是にては命もつゞくまじく親達に此世の名殘に顏見せに、ちよつと歸りましたと泣出せば、兩親心もとながりて如何なる事ぞ、娘の子とてはそちひとり、いづくの浦にゐても息災なといふ便りをきけば滿足ぢやに、心にかゝるいひぶん樣子をいへと尋られて、何をか今はつゝみ申さん、つれそふ男大酒を好み毎夜醉て歸つての慰に、刄物をぬいて私が胸元へあてらるゝ時は、もはや親達には二度お目にはかゝるまいかと魂きえ〳〵として生たる心地はいたさず、夜に三度づゝのくるしみ、毎夜の事なればアゝ癖ぢや物と隨分こらへてをりましたに、此中は荒繩にて裸身をいましめられ、床柱にくゝり付て、わしを科人にして責るまねぢやとて、玄關に用心のため掛おかるゝ鑓の鞘をぬいて、脇章門のあたりをひイやりとさせらるゝ時は、眞の事では有まいとは思ひながら、一度〳〵で肝にこたへその恐ろしさ、かうお話し申やうな事ではなし、是は嫁入して參りたるにてはなく、たゞ罪人が責られに萬の道具に物入て持て參つたやうなもの、姫ごぜの祝言してから立歸るは世間のとなへもはづかしく、是まではこたへて見申せしが、酒の上にてひよつと手がまはり、どんな所をつかれて死ぬまい物でもないゆゑに、今生の暇乞ひに忍びて參りましたと跡かたもない狂言こしらへ、しく〳〵泣て語れば親父牙をかみて、大きに腹をたて出し、秘藏の娘を責てもらはうとて大分のこしらへして嫁らしたか、去年の師走にゐ頼んでこされた事と思ひ、手代共を手配して廿九日の八つ時分に、三十貫目調ひにくい銀なれ共、適々聟の方からといふものを調へてつかはし、あの方の身代の、間をあはす程にする舅を蹈つけ、毎夜娘を責さいなむ事、手前で養ふ

事がならぬ、貧家の捨てるやうな娘にしても、さやうの事をさせておかうか、弓矢八幡町中はいふにおよばず、御上へ此段訴へて、白晝に取戻し、今の聟に十倍増た所へ縁につくるぞ氣遣ひすなと、じく／＼をどつて腹をたて、おも手代をよびつけ聟の町へ斷にやらるゝを娘おしとめ、御耳に入たら左樣に御腹を立られんと、それが悲しく今までだまりゐ申せしが、理非をもわきまへぬ腹立上戸にて、かやうの事をきかるるとぬき刀をして親であらうが打つける無法な男、とかく何事も仰られず、わらは病氣づきしゆゑ養性がさせたければ、まづ本腹いたす迄當分の暇をやつて下されと、うつくしう詫をとつて、あと／＼迄もあんな無法な人には怨みられぬやうになされたらば、此上わしが又いづ方へ縁につく共、禍が御ざりますまい、かゝさま爰は大事の分別所ぢや、とゝ樣を宥められて浪風のたゝぬやうに、とかくさらりと埒のあくを此方の勝になされたら、代とりの兄樣の爲までがよからうと存ますといへば、二親うなづきヲ、そなたが思案若けれ共至極ぢや、どうして又外へ縁付さする身ぢやによつて、おのれが非道はいはずして、却てそちを恨み先々へどうした怨をせうもしれぬ、とにかく爰は上手をつかうて暇をとるが上分別と、神ならぬ身とて二親は如才もない聟をうらみて、娘を戻さすさま／＼のこしらへ事をいひつかはし、隙をねがひて遂に埒明、扨兩親は手前の惣領にも近き内に嫁をとれば、それより先に此娘を宜しき所へ仕付たいと方々をきかさるゝに、元來娘は芝居者に思ひ入あつての男にくみなれば、外へゆく氣はみぢんなく、そこは法花宗、爰は姑むづかしそれは商賣が氣にいらぬ、是は男が鈍いげな、今度戻つては私はもはや名がたちて浮世をたてゝはゐられぬ場、今迄の縁組より大事の所なれば、父母の無性にせいて念も入ずにはやう仕付たがらしやるが聞えぬと、是より作病かまへ、腰元としめし合て、朝晩晝三度の喰物時分には、膳にすわりながらとかく氣相がわるうて、食事を見るもいやと箸をもとらず、二階へあがり打臥てゐる所へ、腰元そつとつくね食してあてがひ、かくして兵粮つめおけば、十日たつても表向き、何喰いでも苦しからず、不斷鉢巻して頭痛がするとの作り顔、親の因果とて大かたならず氣遣がり、針立よんで痛うもない腹をみせ、とかく是は久々氣をつめ、聟に責めなやまされし、精のつき出たる物と了簡

して、先嫁入沙汰をやめにして、東山の見ゆる景氣よき先斗町の座敷をかりて養性に出し、心次第に毎日何方へ成共遊山に出よと、家久しき年寄の手代を付置、心儘の養性、親をたばかりかゝる仕業、惡人の女大將といふなるべし。くだんの腰元召つれて毎日の芝居ゆき、茶屋を頼んで彼おもはくの役者の方へ文をやれば、すべてかやうの色の道、役者仲間の法度にて、互に嗜ぎんみ仕あふ作法なれば、町方からの艶書は手にもとらぬを、媒する茶屋が中にて返事をこしらへ、あはぬ先から絹布の無心又は金子の合力など、さま〴〵の事いひかけて娘のかたから取こめば、役者に戀するは大分物の入物と思ひながらも、仕懸た戀を今更止られもせず、親本へいかに養性なればとて、ゆき所のしれぬ大分の金を取りにはやられず、お出入の絹屋をちか付、親が讓りもせぬ衣棚の家を今度嫁入すれば二度目ゆゑに、此家を妾につけて近日縁に付らるゝ筈なれ共、家がついてゆくといふ欲を目がけてもたうとある。聟の方へはいかにしても實がなうて、妾が更にそんな所へゆく氣はなし、しかればあの衣の棚の家を質に入て、金を百兩ばかりとゝのへ、おれが思ふやうな當世模樣の衣裳をこしらへ、毎日〳〵着かへて出ありき、あの娘なら何が付ずと欲しいといふやうな、男の方へ嫁入する心ゆゑ、かうしてゐるうちに思ふやうな小袖を好み、そなたと談合してこしらへたいに、家質にして百兩かつてたもれと頼まれ、是は一商賣した物と、呉服屋の手代請込、主人の金を百兩持て來て、衣棚の家書入たる證文とつて、小判わたして立歸れば、是から算用なしに水づかひといふものに遣ひはたして、其身も後には常着物さへなくて是より二親氣をつけだして僉議して見らるゝに、女の惡性さま〴〵なる中に、讓らぬ家を書入しての金の才覺、世間に息子の性惡が死一倍をかるといふ咄はきいたが、女の身としてかゝる行跡、又ためしなき娘とて親一門見かぎりはてゝ、衣裳をはいで一重紙子に着替させ、勘當帳に迄つけて、舊離切て追出しければ、此身になりても戀をやめず、それから突出しの白人となつて、其役者と一座する事をよろこび、とうから此身であつたものと、身をそんざいにしたい事して世をわたりぬ

世間娘氣質四之巻 終

世間娘形氣五之巻

目録　子息家質追加

絛入出袖書を言はする山雀娘

不解縮けぐ佛とる箇条居丸言主

奇て見る重症に年中一万で札継む御勧進

親方より見捨らる名誉の

傍輩の悪性はなほらぬ浮氣娘

平生中への御客大分きをつかふてなれし生まれつき

貧家に生るゝ人は世の借錢をまひ此地獄

娘の不孝今もいひ白身てなれ茶屋の浮口

善悪共同前なれ鏡にうつしひ鏡のらん心

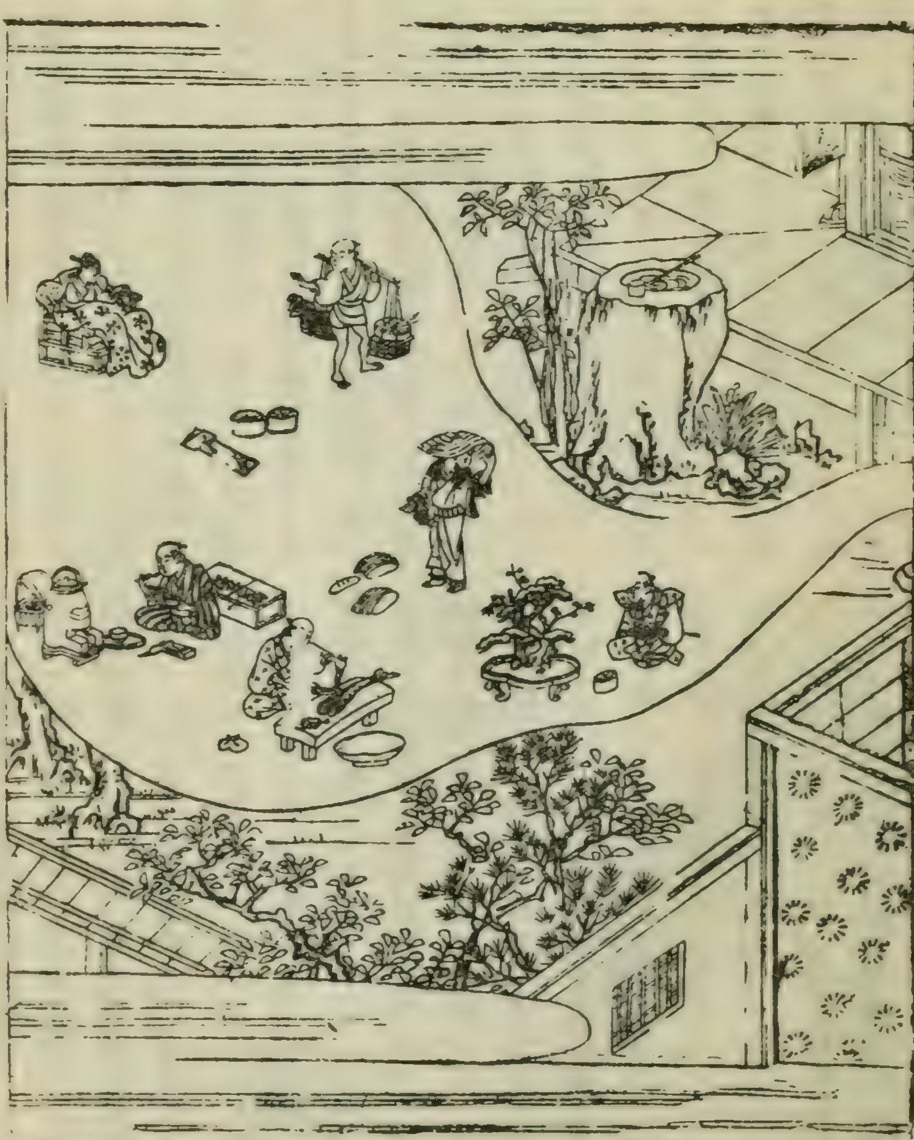
嫁入小袖つまを重ぬる山雀娘

去ものは日々にうときならひとて、二世と契りし夫の若死せし時は、卽座に命をすてんと思ひし女房も、泪の中にはや欲といふ物つたなく萬の財に心をうつし、あるは又出來分別にて、息も引とらぬうちより後夫のせんさくを耳にかけ、其死人の弟をすぐに跡しらすなど、又は一門より似合敷入緣とる事、心玉にのりて馴染の事は外になし、義理一遍の念佛、香花も人の見るためぞかし。三十五日の立をとけしなく忍び忍びの薄白粉、髮は品よく油にしたしながら結もやらずしどけなく下着は色をふくませ、上には無紋の小袖目にたたずしてなほ心にくき物ぞかし。おりふしは無常を觀じはかなき物語の次手に髮を切、浮世を野寺にくらして、朝の露をせめては草のかげなる人に手向なんと、縫箔鹿子の衣裳取ちらし、是もいらぬ物なれば天蓋はた打敷にせよといふ、心には今すこし袖の小さきをかなしみける。女ほど恐ろしきものはなし何事をも止める人の中にては空泣しておどしける。されば世の中に疝氣もたぬ男と、後家たてずます女は稀なり。名聞の寺參り見せかけ數珠の玉にもぬける柳原のあたりに、米屋の俵左衞門後家とて廿六の年夫に別、惣領俵七妹おゆき、五つと三つになる兄弟の子供を養育して、若いには奇特になさるもたらで、下女下人と同じなみに働き、亭主死なれて十三年の春秋を挊とほして、心のおよぶだけ亡夫の遠忌をとぶらひ、兄俵七を元服させ親の名にあらため、俵左衞門とよびて公界をさばかせ、昔よりは金銀もたまりて相應より過るほどに嫁入道具をこしらへ、いもと娘おゆきを緣に付るこしらへ、器量すぐれぬれば我人嫁にほしがる中にも、上野の花見の折から見初て、あの娘を女房共というて、枕二を浮世のたのしみにねて花をやりたいと、麴町の乾物屋の與吉郎しきりに仲人を以てもらひかくれば、聟の人柄身上のたしかなる內證を聞て、米や後家は幸の緣と悅び、たのみ取交して霜月朔日に娘をおくりぬ。與吉郎は元來おもひかけぬる女房なれば、世界に我程果報なものはあらじと、萬事をやめて女房の顏をながめて、片時も傍をはなれずまもりつめて、五十年のたのしみを三十

日に取越、一門一家のひざなほし振舞の場にて、吐血してより夢中になつて、翌日をしい女房を跡に殘して此世をさりぬ。おゆきは當座に自害をもする程のかなしみ、一門殊には母の親とゞめて、いまだ祝言して二月もたゝざれば、後家たてさすべき馴染もなく、此跡とるものなくて、親類それ〴〵に配當して身代をわけ取にし、後家にもだまつてはおかれぬ所と、おゆきに百兩そへて親里へ戻しぬ。廿年餘も後家のあんばい覺えたる母親、若い娘を後家にして、賢しい浮世に暫くも置く物にあらずと、急に緣の口を聞しに是ぞ渡りに船町の魚屋、去年內儀死なれて臺所とりじめなく、器量さへよくば裸で成とももはやく呼入たいと、何がなしに早速聟にとりすましたと、しやんと祝儀をさめて五ヶ月もたゝぬうちに、嫁御の腹躰をかしく、是はと亭主肝をつぶせば、乾物屋與吉が仕入の胤なりと言分たちて、表向は病氣ぶんにして母の方へ引取、平産させて誕生せし男子は與



作と名をよび、母の手前にて育て、おゆきは七十五日もまたで魚屋へかへり、姑の氣をとり内外の下人下女迄も詞にて湛應させ、夫の友達に挨拶するも利發を鼻へ出さずぼつとりと見せかけ、世帶がたの始末野菜かふ迄も拔目なければ、おのづから德に隣ありて、一門中の賢女の鑑とあふがれ、先妻の事いひ出す人もなく、氣に入すまして最早是ではとお雪も少し安堵する時分に、亭主手の物と料理自慢の庖丁の燒が胸へまはり、鰒汁の仕ぞこなひに客も其身も大きにあてられ、是は〳〵といふうちに、河豚の汁椀持ながら、すぐに新精靈となつて、母の歎きお雪が悲しみ大かたならず、尼にも成べき覺悟なりしを、一門さま〳〵異見くはへて中陰を無事に勤めさせ、扨跡目の穿鑿するに、一家の内にお雪と娶すべき相



應の人もなくて、姑の弟の子、今年十になるを養子として家相續の談合に相極、はたちにもならぬ人に後家たてさせ、此子が後見さする事も行末心もと

なし、さあればとて身持になられては、や七月の腹をかゝへてゐる人を、其まゝも戻しがたしと、親類相談して腹なる子たとへ男子にても女子にても、すぐに其方にて成人いづかたへも遣はして下さるべしと、銀五貫目懐妊のおゆきに付て、段々の斷りいうて里へかへせば、母の後家せん方なく又手前にて平產させ、此子にも乳母とりて養ひ、さいぜん乾物屋にて儲けたる子と兄弟ぶんにしてそだて置、花の盛のお雪を又ひとり身にして抱ゐるも年寄てせいたうむづかしと、諸方を聞て、此度は前前の男にこり、器量はあしく共ずゐぶん丈夫な、若死しそむない聟の所を聞立しに、世界は廣し好みのごとくたしかなる生れつき、筋骨ふとく肉のつて、鬼鹿毛のやうな傳馬町の綿屋の息子、無病にして灸のあとさへなく、赤子の時分五香を七夜が內飲みたるより外、藥といふもの小田原の外郎さへつひに齒にのせたる事もなく、名さへ腎八とて健なる若い者、しかも身上よければ重疊と兩方に悅びて、近所へ沙汰なしによびむかへ、二親の滿足大かたならず、腎八に母屋わたして近き內に本店へ隱居せらるゝ談合半に、腎八三野へ通ひそめ、一日も宿にゐねば親達おどろき、さま〴〵異見せらるれ共中々耳へも入ず、けつく逆うて始よりしげ〳〵かよへば、今ははや異見もつきて、外ざま沙汰になつて勘當帳に付て追うしなひ、跡へは日本橋の妹聟を夫婦よび入て、家をたつる相談にきはまり、又爰にてもおゆきに斷いうて戻す談合、つれあひ勘當せらるゝ上は是非におよばぬ首尾なれば、歸るまい共いはれず、此所でも懷に祝言の塊だかへてたゞならぬ身、平產いたさば此子はこなたへ、御請取なされて下されと淚ながらに申せば、妹夫婦を跡目にたつれば、そなたも知らるゝ通年子に五人迄、くつきやう成子供あれば、其上に養へとは如何に親なればとて、聟の手前もあればどうもいはれず、腎八が形見と思うてそなた一生養育して給はれ、それ程の心付は我々がいたさうと、隱居銀の內から銀百枚そへてかへされ、又其子を安く產で母の苦勞にさせけれ共、一嫁入に銀子をしたゝか取て歸れば、欲といふ兵に出あうては老の辛勞もわすれはて、其まゝ一所に抱姥とつて育てぬ。

されば世の中に借錢負も嫁入するも同じ事にて、外聞わるいの耻かしいのといふはずんと前方のせんさく、度かさなれば面の皮あつうなつて、近所のおもはく世の人口いかな〳〵耳にかゝら

ず、かゝ樣太儀ながら子供が世話をやいて下され、今四五軒嫁入して歸りなば、およそ都合百貫目ちかうは取らうと思ひますれば、今度嫁入の口きいて下されうなら、ずゐぶん病者なわろか、扨は六十過てちと腰のかゞんだ、あの世へ片足ふんごんでゐるやうな年寄男のぞみといへば、母も同じ氣になつて、血氣な若い者は子をうましてあと迄の厄介かゝれば、大黒屋の肥後方へ內證たづねにつかはし、地黃丸を通ひでとる所へやるべしと、又仲人を賴みて娘もたび／＼亭主のわかれに憂目を見て、大ぶん病ひづいたれば、男の達者な所へは遠慮してくれといふ、親の身にしていふも道理と、心入が不便さに此度は廿三十年がゆきて、たとひ頭がはげてあらうが、鬢先が白かろが男つきにはかまはぬ、藥鍋を枕にしてゐるやうな聟もあらば、肝煎てたもれといへば、さいはひ六月にも皮足袋はなさず、いまだ卅にもなられぬ身で、一町ゆかるるにも杖をつき、追付親に跡やらるべき生れつき、しかも片目神田筋違橋邊に上丸屋とてかくれもなき質屋から、廿四五の發明なお內儀樣をほしきとのお賴み、お年かつかうと申し御器量發明あなたのお望の通なればと、つい言ひ出して早速首尾し、千秋萬歲と謠ひしまうて半年もたゝぬうちに、ねがひの通ころりと往生めさるゝと帶の祝が一時にて、又是にても所務分拾貫目あたたまりて、立歸るとはや定まつて得意の取揚婆々がお見まひ申て、お雪樣のお歸りと聞まして、定めてお土產がお腹にあらうと存じて參りましたといへば、お袋も粹になつてうるさい事はまた喰溜て戾りましたが、此度は質屋の子なれば、同じくは流れてしまへかしと思ひますと笑うて打過、ほどなく安產して七十五日の忌もあかぬ內に、又も嫁入をするが町の錢屋へゆきて、間もなく孕めば亭主は都へ用事あつて花の三月から七月迄逗留して、歸らぬこそことわり京の祇園の茶屋の娘を請出し、宿の妻にとのぼりつめて、下スけしきはなくて出入の嚊々をたのんで、此わけをお雪にいひこみ、迚も末かけて思はぬ人にそはぬ所存なれば、腹な子ぐるみに貳百兩つけて、首尾よく戾したいとの京からの御狀と段々ことわり、皆迄きくにおよばず貳百兩請取て、さらりと其處も立戾り、又產おとして須田町の靑物屋の親仁所へ緣について、爰でもめでたう年寄男を佛になして、わすれ形見を持てかへつて、年中產と嫁入する程にかゝつて、抑糀町の乾

物屋より口切して、今四十六才迄廿七所縁付して、男女の子供廿七人儲けて、我内は繼子たての繪を見るごとく、卅疊敷の二階に四方一ぱいの蒲團二つに綿厚く入、ひとつの蒲團の上に子供をぐるりと丸く並べてねさせおき、其上に今ひとつの蒲團をきせ、夜も暖にねさせて、扨夜があけるとひとり〳〵起出て、茶漬くはうといふもあれば汁かけ食をと望むもあり酒を飲まうといへば、おれも飲まうといひ出し、蚊のなくごとく口々に好みくひて、腹のよいうちは外へかけ出し遊びありき、暮かたに歸る時分母親帳をひかへて、太郎松は戻つたか、五郎介はおせんおかや岩之介はと、答を聞て帳面の名をけし、以上廿七人都合があうた二階へ上つてやすめと、大勢をかひそだて丶段々に成長し、盆の魂祭とて精靈棚を飾るに、廿七人ながら腹はひとつにて皆父がかはりて、卒都婆さへ廿七本戒名もまぎらはしく、こなたのとつ様は法譽道三といひます、方譽道圓とはおれが



と丶様ぢやと、蓮の飯をせりあひ、麻がら持ての戰ひ殊勝にも又をかしかりけり

傍輩の悪性うつりにけりな徒娘

桃や柿や梨の實是ぞ蓮の葉商ひ、七月十三日より諸一門の聖靈、亭主が拂ひの心當違うて馳走機嫌でない所へ、心なくも來て造作になる合點は、近比佛達には聞えぬ仕形と思ひながら、聖靈とらへて物前に借錢乞と一口にいひぶんもならず、つい出來合の念佛ふるまひ、あ丶南無阿彌陀佛迚もあはぬ算用、いくたび十露盤おいて見ても、三五の十八角豆、茄子青瓜せめても煮燒せずに其まゝ供へ、錢なき宿にも門徒の外は、家なみに世になき魂を祭る業のあ



はれは秋こそまされと、ひとしほ物がなしく、過ゆかれし夫の事を思ひ出して、露に泪に兩袖の湊難波橋筋に、福岡屋の五右衛門後家とて不束なる生れ

つきなれ共、心正路にして人に憎まれず、夫の仕付し西國への小間物商賣ひ、總領五兵衛につとめさせ、毎年宮島の市より近國を賣まはりて、盆前には定まつて宿にかへり半季の買がゝりを算用して濟す事なるに、今年は七月十四日迄文の便りさへなくて、母の親心もとなく、嫁のおそめ妹娘のおたつ諸共、いかゞと案じやるほど波の上の仕合日和さだめがたく、心にまかせぬ海路とは思ひながら、此きはの危さ阿波の鳴渡より渡りかね、悴が留守ぢやとて借錢の淵はゆるさず、賣懸したる人々庭に立ならび、節供前とは各別、否でも應でも百貫に塗笠一かいと母親せがむにぞ、身も置所なく悲しく戻らぬむす子を恨み、せめて斷文なり共のぼしぬれば、おの／＼さまのお腹の立たぬ事ぞと、手を合して侘言やう／＼に聞わけ、四十五六人の掛乞とても濟ぬ事に隙つひやして立歸りぬ。其中にきかぬ生平の島や町の搗米や、朝夕の飯米代なれば。中々に取らでは歸らじと、一人跡にのこり角なき鬼の貌つきして、埒があかぬと鍋釜ぬくと、廣敷に座をくみていつとなく眠の出、人の物いふもうつゝにきゝぬ。母親他人のある共しらで、日本第一の大湊に住ながら、我ほど淺ましき者また有べきか、連合の佛棚もかざらず、蓮の飯を祝ふべき始末もなく、把木も絶て今朝から簀子の竹をぬきて燒など、煎じ茶きれて煙草なく燈火の油も事かき嫁の轆轤引より雫をしたみしが、今の間の光りにて賴みなし、是よりさきに命消たしと、母の嘆きをかまはず、娘のおたつは庭におりて身振に色科やつて、明日の晩からの躍の稽古、いかに若きとてさりとては心なし人の手前世のおもはく、身の程もはぢぬべし、そちが年も十七嫁も十七なれど、世間の思ひやりありてあのごとく身をすてゝ內證を隱し、親里へも是をしらせずかゝる前後を凌がるゝは、女の鑑にも末々迄しらすべきいとほしき人なり。いまだ此春緣組して半年もたつやたゝぬに、衣類手道具迄をなくして、嫁なればとて面目なし。そちとあの人がやうに心ざしもかはる物かといひもはてぬに、娘ははきたる席駄を親に投つけ、不斷の寢間にゆくを母も今は堪忍ならず、手元にありし爪切持てたゝれしを、嫁のおそめ驚きて抱きとめ、漸に是をわびすまして、片陰に立忍び、美しき髮おさへの挿櫛笄をぬき出し 玉子色の帶を細き組帶に仕替て、此三色持て出しがしばらく有て歸り、右の袂より錢百四五

十取出し、左の手にさし鯖三つ素麵二把、懷より白き餅を出し姑に與へければ、四五度もいたゞき泪をながし此恩いつ報ずべき、嬉しやそなたの御志と丸團にて嫁をあふぎ立〳〵喜ばれしを、掛乞宵より段々見て袖をひたし、かゝるやさしき嫁の有べきか、扨も扨もと感じ闇より出ければ、おの〳〵是を忘れて驚き、夜の明る迄まし〳〵てから、只今才覺もならずと。又斷を申時、掛乞泪にくれて不孝なる娘もあるに、此嫁御の心入さりとては肝に銘じて何と讃べき言葉もなし、此上ながら懇にし給へと、財布の口をあけて錢貳貫と小判壹兩あるにまかせ、此嫁に進ずるといひすてゝ歸りぬ。孝あるゆゑに天のあたへ憂き所を凌しうちに、むす子の五兵衛例年より仕合して立歸り、買懸りこと〴〵く濟して、くだんの島や町の搗米屋へも、二貫壹兩に日算用して利足相そへ自身持行、御情ゆゑに、母人にせつなき盆をゆるりとさせましたる此御禮、車に積みてもあきたらずと、段々の禮をのぶれば、米屋曾て此錢金を請とらず、是は嫁御の姑へ孝心のふかきを感じて、合力したる錢金なれば、取戻すべき道理なし。留守中の米代百拾五匁二分五りん、殘らず渡さるれば出入ないと、何程いうても請取ず、仕合は眞ある女房をもたれて頼母し、しかし不遠慮ながらこなたの妹御は内儀にかはつて又なき不孝者、田舎あきなひなされうなら、お袋の側につけて永留守は御無用と、目顔に皺よせいひければ、五兵衛我ををり母は私の手強く折檻いたさうかと、それ程の不孝の娘なれ共親の慈悲とて申されず、女共は猶以てよしなに取つくろうて惡き事を耳へいれねば、みぢんも留守中の妹めが不孝の次第を存ぜなんだ、近比御眞味の御しらせと悦び、立歸て引よせ嚴しく異見をもせんと思ひしが、生得の不孝ものなまなか異見して口ごたへなどしをらば、だまつてはゐられぬ首尾、志のなほる程打擲せば片輪にならうもしらず、さある時は母に思ひをかくる道理と異見をやめて、とかく人中を見せなば自らひとり世間を知て、孝行なる心ざしも出來べしと、人だのみして北濱の大所へ中居奉公に出しければ、傍輩のすりがらしの下女共が惡性を見ならひ、誰が敎へねどいたづらの道を知て、二度の藪入にも親元へは歸らず、小宿こしらへて爰にはいり、盆正月に母の顏さへ見ずに、きのふは嵐が芝居見に、けふは集錢出しの濱燒、やきたての蒲鉾に生醬油つけ

て板ぐち囀、腹ふくるゝまゝの晝寢、罪とも酷いとも命勝負とも、跡先しらずの身となつて、後は浪人して口をもきかず、主なしの思ひ出に毎日のうかれありき、身をぞんざいに持なし、女ながら針持すべさへしらず、氣をつめてちとめなる奉公は迚もせぬ心なれば、上問屋下問屋へ蓮葉女といふいたづら奉公つとめ、諸國の商人の夜の慰みものになつて、果は新地堀江の二瀬にながれわたり、仕舞は白人まはしの駕籠の者とひとつになつて、辛き鍋尻を燒て半分は嘘で浮世をわたりぬ。福島屋

は女夫中よく母に孝を[illegible]せし天理によつて、次第に仕合よく、家に家を買ならべて裕なるくらし、母をねがひのまゝに安樂にやしなひ、めで度う往生さしぬるに、妹のたつは道ならぬ奉公をせめても恥て、我方から敷居高くなりて、母の死目にさへあはず、冬も木綿のときあけひとつ着て、夫に見はなされて今日の命をつなぎかね、夜歌うたうて濱側の納屋の陰からそつと出て、往來の袖をひかへて拾文づつに情の切賣、不孝の身のはて隱居もしさうな年ばへにて、振袖着てのたはぶれ淺ましの身やさて

世間娘氣質五之卷 終

世間娘容気六之巻

目録　子息形気追加

悋気は標的の勝負に智の仕業

男の鼻毛は長物の庭前へ入舞乃

夫を三下り半の書置に空へ入て出家の千寿

一年忌の幾く捨物がたりの身ずから

貞女は操を守り刀切りんのよひ出世娘
宿之裏日継一乗わつされぬ勘当身と
登兄親に悦をひ名付の娘が家出
夫婦の中よあんばいよき仕合のまゝり同
読つゞきて眼精敷くれ悦びを
千秋万歳楽

心底は操的段々に替る仕懸娘

千早振神代には鹿芦津姫、
　に忽ち御懐妊なされしを、天孫
は　にてやあるらんといぶかし
がらせ給ひ、人の代となりては釆女な
りける女の、まだ十六の春の夜の夢ば
かりなる　、其まゝ皇子や
どらせ給ひしを、雄略天皇その手は
と綸言有しとかや。偽りしらぬ古
さへ色には心のまはるもの、ましてや
今の奢女房、一代やしなふ男を尻に敷
きて、自由なる遊びこちの噂は嘘つか
ぬ者とばかり心得て、下ぬき喰るゝ人
おほし。七人の子中はなす共女に肌を
ゆるすなと、悪七兵衛景清が観音經よ
みさしての世迷言、今もつて道理ぞか
し。爰に生國播州に武家奉公をつとめ
し傳七といふ男、たまかにつとめて切
米のばし、すこしの金にしておひま申
請、難波にしるべあつて谷町に住居を
定め、鍋尻やいて夫婦世を心やすく暮
しけるが、古郷をさつて五年めに、い
にしへの主人の娘御中間の角平一人御
供にて尋ねさせられ、是はと傳七肝を
つぶし、かろ〳〵敷御なりにてはるば
るの御出心得がたしと不審すれば、娘
御おとわ泪ながら口をしやおれが嫁
入した所の舅太夫殿、とつ樣と口論し
て闇討にして立のかれ、難波に所縁あ
つて此處へ立のかれし由、其口論の発
りは皆みづからが事ゆゑよりと聞つれ
ば、舅なれども妾が敵を打ずしては、
武士の娘の一ぶんたゝず、それゆゑ此
角平はそなたも知てのとほり、季をか
さねて久しき家來、たのもしくも後見
して親の敵を討おほせて参らせんと、
かひ〳〵しくも是迄ついて來りしが、
敵を見出すその間當地に借宅したきね
がひ、其才覺頼むとあれば、傳七泪を
こぼし御幼少より疊の上からすぐに御
乗物にめして、つひに土をふませられ
たる事もなき御身にて、しかも御供ま
はりさへなく、此所まで御出のお心ざ
し、近比おいとほしき御事、わたくし
爲にも御主の敵、とも〳〵心を合し御
本望をとげさせ奉らんと、たのもしく
夫はたばこ切さし徳利さげて酒屋にゆ
けば、女は木綿嶋織すて茶の下焼付、
心一ぱいもてなしけるに、一夜をあかし
て見しに中々氣遣たえねば、何とぞ我
宿とさだめて少しのうちも暮したきね
がひとあれば、さいはひ近所に此程迄鍼

立の住れし空家南請に菱垣のきれいに、相借屋なくて人の目のゆかぬ所、是にしばらくござりませと、二つある鍋をぬいて持ゆき、米味噌までの世話をやいて主従二人を移し参らせ、大かたは商賣やめて朝晩御機嫌うかゞひに参りけるが、一月あまり過て播州の古主につかへし傍輩の侍二三人、傳七方へ尋寄主人の娘御おとわどの、同じ家中の歴々へ縁につかれしが、出入の玉都と云ふ聲のよい座頭と、度々の不義あらはれ、すでに手討にもせらるべき所なりしを、侍の女房を目のない者に盗まれたと家中に沙汰あつては、武士の一分すたるを悲しみ胸をさすつて何となく不縁のよしにて、穏便に戻されければ、主人も内々此噂耳に入てあれば、心よくおとわ殿を請取、近々南都法花寺へつかはし尼にせんと、御兩親相談なかばに仲間の角平と狂はれ、夜ぬけにして二人づれで所を立のかれしが、我々に近國を尋めぐり、見合次第に兩人共に討て來れとの仰付なり、若や此所へ



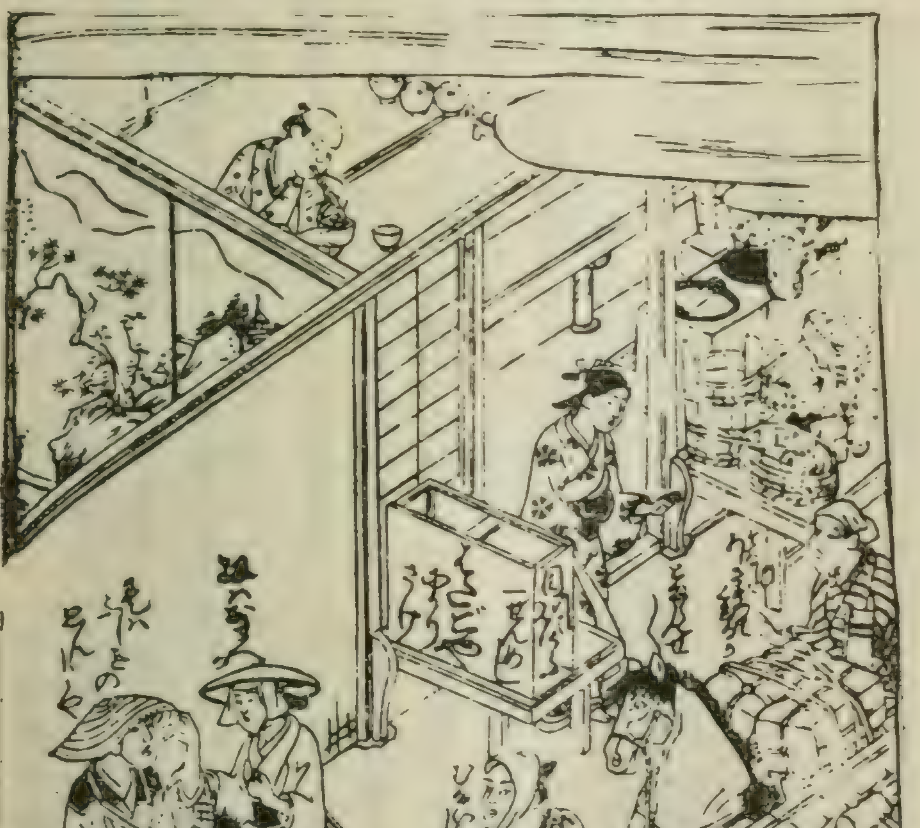
などうろついては來られぬかととひければ、傳七女夫目を見合てぎよつとせしか、傳七おしゝづめて、我口ひとつで眼前二人迄の殺生と、そらさぬ顔にて堅い旦那の娘御に、そんないたづらものも有物か、此邊へ來らばたゝき出してやるべしと、にがりきつて申せば、討手の侍詞をそろへ、此所へ見えなば賺しおいて早々國元へ飛脚をたてゝしらさるべしと、よく／＼たのみて立歸りぬ。傳七今迄よしなき不義者共に一ぱいくはされ、此間をしき骨ををつたる事のくやしさよと、其後は二人が來ても物さへいはねば、扨は身の惡しれたる物よとかんづきて、おのづから此所に尻すゑがたく、夜の間にぬけて高原といふ茶碗燒あたりに、わづかなる賤の家かりて風の神放下師とあひ住居して隱れゐたりしが、近所の紙屋のむす子すこし男自慢にて、鬢付の厚き若いものらしい生れつきと、通るたびに目を付し角平が女房を見て、貧家の妻にはしををを女房見とめて、夫の角平にさゝやき



けるは、我々世間せばく成て思ふやうに挊がれぬゆゑ、朝夕の煙さへたてかね、大かたは餅買て一食で暮し、はや明日のおくりやうを案する身なれば、道ならぬ事ながら、紙屋のむす子が妾になづみたる目つき、是に戀をしかけて筒もたせで、かたまつた銀をとるまいかと、女の智慧からおそろしき巧、貧につれて角平も同心し、是は佛さまの付ぢゑなるべし、究竟一の思案しからば是へ何とぞつりよせ、帯紐とかせていやのならぬ所を、我等是なる賣殘しの長持の中にかくれゐて、そちが相圖をきいてとび出、隣家へ聞ゆるほどに聲山たてゝ物にせんと夫婦しめし合、どうやらかうやら紙屋のむす子をふづくり出しまんまと我家の内へまねき入れば、亭主の角平心得たりと明長持の中にかくれて、女房が相圖を待居たるこそ非道なれ。女は元來紙屋のむす子におもはく心底打あけどうもならぬと寄添ば、若けれどもむす子すこし思案あつて、男のある身でこなたからのおもはくとはうま過て氣味惡ろし、世間に筒もたせといふ事はやれば、神々入ての誓言でも肌がゆるされぬとかぶりふれば、さりとはお若けれ共粹樣なり、成程御推量の通夫非道の欲心をおこし、こなた樣を是へよびこみ、枕をかはすを相圖に、あの長持から出らるゝ約束、是はお前にあひたさ故に亭主と同意の顔して、ゆつくりとあうておはなし申さう爲に、長持に錠をおろしおいたれば、亭主を籠へ入おきしよりたしかな事、是見給へと立てゆき長持の錠まへ、おろしおいたる僞りない所を見すれば、むざんや亭主はかうした嚊が思案とはしらず、女房共相圖の時分ではないか、すゐぶん　と息もせずだまりゐる。紙屋のむす子僞りない女房の心底見さだめ、扨はと打とけて、又かさねて出んとする袖をひかへ、夫と見かへてかうした我なれば、此所にはもはやゐられぬ首尾なれば、いづ方へも連れてのき給へ、さもなくば長持あけて亭主にねだらすがと、いやおうのならぬいひ方、むす子ものりかゝつた女房なれば、是非におよばず、しからば是より尼が崎にしるべあれば、一先たちのくべきが、亭主が跡にておそろしい所へねがひ申さば、我々は磔道具と二の足ふむを、それも氣づかひなされますなと、硯取出し此角平と申者、主人の娘をたぶらかしむたいにつれのきゆへども、女の身のかなしく刄物ぬいておどし候ゆゑ、心ならず只今迄透を見て打過申候、さいはひの時節酒に醉

せたばかり長持に入おき、みづからは元來出家になる志ゆゑ、是よりすぐに尼寺をたのみに罷出候、播州何の何某が娘とわと書付、長持にはつて心しづかに立さりぬ。角平はかくともしらず鳴ぬ神鳴におそるゝごとく長持の中に大汗になつて待ど暮せど相圖の音もせざれば、内よりあけて樣子を見んと蓋をおして見れ共。いかな〳〵うごかねば、せう事なくて内から聲たて、隣のをば樣たのみたい〳〵とわめけど、桶の底から物いふごとくみぢんも外へひゞかず、日の暮る迄升おとしにかゝつた鼠のあばれるごとく、ぐわたつかしても明はこそ。其内に相借家の者共暮ても戸さへさゝず、夫婦の聲もせざれば、家主へかくとゝければ欠落にきはまつたと、町中立會わづかの道具あらためて書付る時、長持の内に人音、是ぬす人にきはまつたと手に〳〵棒にて取まはし、錠おしあけて内を見れば、亭主の角平夜の明たる心地して出るを、町中長持の書付見て、主人の娘をかどはかして來る橫道者、後の災一町の難義とすぐに請人へわたして家を明させてしまひぬ。すべて此娘にかぎらず世の浮氣女、かくし紋の下着ほころび我つまならぬ妻をかさね、一門までの名をよごす事ひとつは夫が愛過るより事おこれり。江戸堀に松原屋藤八生野屋の與五三郎とて、他人ながら兄弟よりもしたしく、内外共に懇なるもの有しが、行者講の中間へ入大勢づれにて山上をしけるに、藤八與五三は此度がはじめなれば、新客とて先達道々の世話をやき、高山深谷を誘引せしが、鐘懸といふ岩壁になつて、同行皆信をとつてのぼる中に、新客二人は此所において微塵でも非道の覺あらば、つゝまず懺悔し業障の垢をすゝいでのぼらるべし、少しにても隱し玉へば鼻の先へ天狗來つて、首筋もとをつかんで數千丈の谷へなげ捨、又は引さき木の枝にかけゝる事僞りならずはやく懺悔をし給へと先達の敎おそろしく、與五三郎生たる心地はなくて、私むまれてより只今までつひに惡といふ物はどんな色やら存じませぬ、しかし爰にひとつ心にかゝるは、おつしやつては下さるゝな、此度同道いたした松原屋の藤八内義おゆかと申はにくからぬ生れつき、どうぞいったらば情も有さうな物と、ふと存じついたが因果にて、さしも兄弟同前に懇なる藤八が目を拔いて、京へのぼりし留守をかんがへ、おゆかにたはふれ跡にも先にもたゞ三度、道ならぬ事をいたした、南無行者樣天狗樣、是

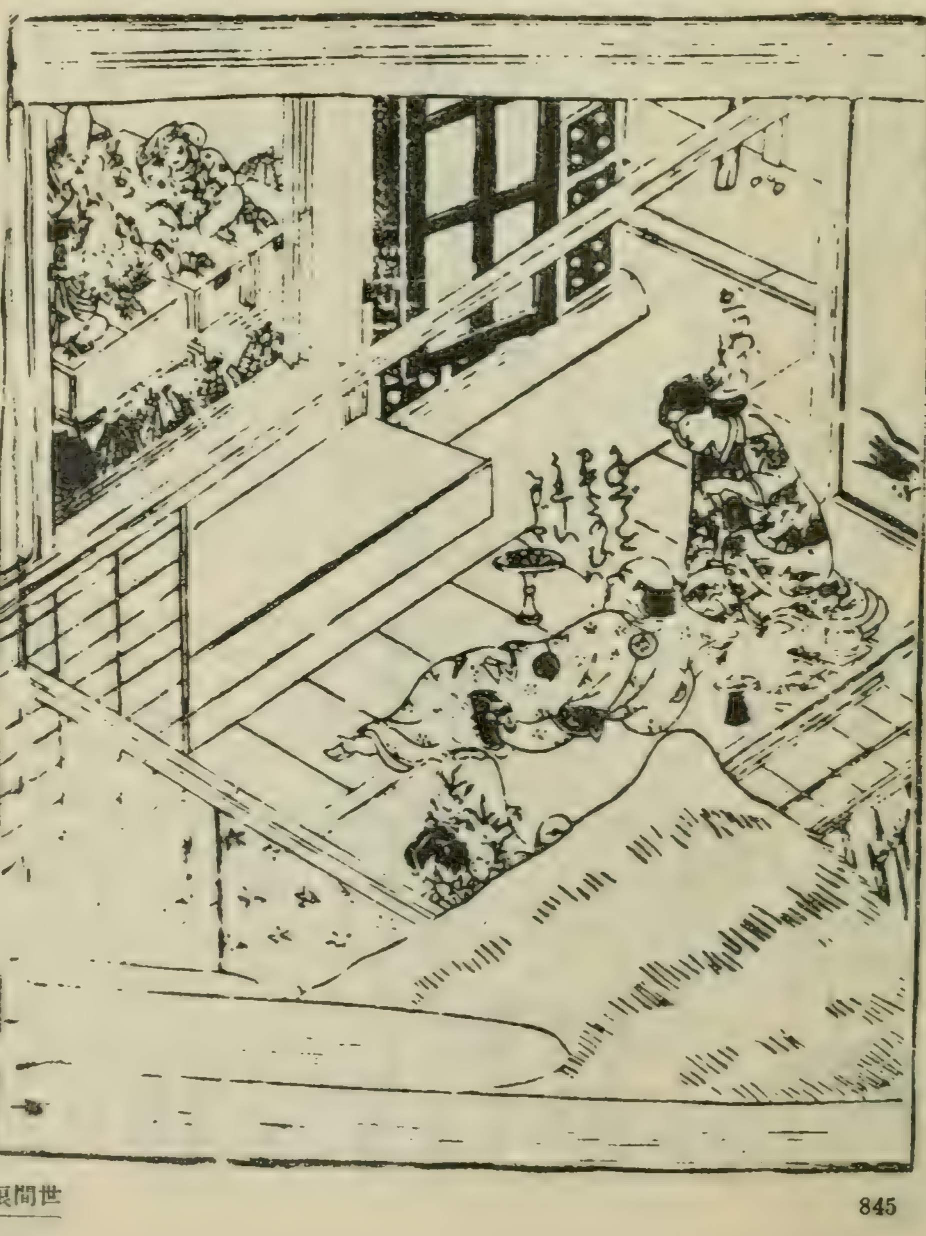
は同じ盗でも戀といふ曲者、御了簡にて怪我のないやうに御とほしたのみ奉ると、一身に汗をながして懺悔すれば、先達聞て此霧のふかき事中々常ならぬ様子なれば、それぱかりでは有まじ、かくさるゝと只今あの杉のしげみから、あれ／＼と指させば、與五三顔色土のごとくなつて、三度とは申ましたが誠は十三度あひました、是より外には身において非道といふ事おぼえなしと涙をながし懺悔すれば、先達行者へ御わび申てつゝがなく此難所をとほりぬ。扨次は藤八が懺悔の番、かつかうより氣のほそい男にて、頭からがた／＼ふるうて、ちひさい時親父の巾着錢ぬすんで、れんとび買しより外、けしほどもわるい事をいたさぬが、罪にもならうと存るは懇にいたしてくれる與五三郎が女房おはるを、五年以前の餅つきの夜手つだひに參つて、荒神の鏡を二人してこなせし時、ひよつと手がさはつて出來心で、取粉ぐるみにじつとしめましたれば、かたじけないとしめ



かへされまして、それからやみつき、大かた月に十七八度人しれずのかくし喰、かうした私を佛のやうに存じて、内外共に心やすういたしてくれる與五三が手前面目なし、殊さら與五三は私とは違ひ、平生堅い者なればこんな事など聞たらば、目前の天狗殿よりは我等を引さいても捨てうやうに申ませう、其段は先達様お慈悲にさたなし〳〵と、手をあはして拜みしはしらぬが佛なるべし

貞女の道を守り刀切先のよい出世娘

奈良坂や雨に菅笠もなく、手貝といふ町より夜をこめての旅出立、きのふ迄は木辻の里にて二三様とて名題の大臣けふは切先のわるい刀屋の宗齋といふ者の一子五三郎、諸藝に器用なりしが、鋼鐵反へまはりぬけ鞘持ての喧嘩好、親にいくたびか袴を着せ常にも不孝なれば、目せばき所より言ひだて傳



雖きらせて、其里を追出しの鐘の鳴とさ、春日野の跡にいつか仕合よく、かへり三笠山も今が見納めとなりなん事もと、なんとやら悲しく大明神を恨み、氏子は千金にもかへ玉はぬとの御事なるに、今貳朱ひとつなくて寒空に綿入の布子さへ、木津川の渡にのつて遙々の東路に〱だるを、あはれととふ人もなしと、ひとりごとの浪に聲ありて佐保の川を打わたりてと、謠を門々にて唄ひ、勸進してやう〱袂に米ばかり、おあしといふ物は一文さへなき膳所の昼休みに、旅人のしたゝめするを見て腹をふくらかすより外なき所へ、ぬけ参りの娘と見えて、十四五なるうつくしきが菅笠かたぶけたゞひとり、うろついて來るをさいはひ是を賺して道づれとなり、伊勢迄の泊々の旅籠代を拂はし其上でぬれかけ、手にも入らば路銀のあまりを望姓とし、此海道で崑蒻の田樂なりと賣て、しばし成共命をつなぐべしと、身の苦しきまゝ道にあらぬ横なる思案を仕出し、こなた始てのぬけ參宮と見えたが、此道筋にはごまのはひとておの〱のやうな、小美しい娘はかどはかして茶屋風呂屋へむたいにうつてやる事なり、正直正路の我にゆきあひ玉ふはこなたの信心づよきゆゑ、太神宮の加護にて我等にお引合と思召せ、伊勢の太夫所へ用あつてゆく身なれば、下向迄世話して連れて參つてしんぜうといへば、此娘會釋して伊勢へ參るやうな身なれば嬉しけれど、行方もしれぬ人を尋ねにあづまの方へ先參つて見ますると、心ぼそき答に自然と胸中しは〱となつていとしぼく、女性なれば何の様子の御存なく、はるばるの吾妻路へ、ついもゆかるゝ事かと思召しての思ひたち、是より末にはあらぬ筥根といふ所に御關所あつて、御切手なくては女のゆく事かなひ難し、立歸つて親達共相談あつて町中へも披露の上、御切手を申請てかさねて下り給へ、様子をかたられ苦しからずば尋らるゝ人の名苗氏をきかさるべし、我等はお江戸へ薪の能にのぼられし小鼓打と、南都に逗留の中心やすく噺したるを便りに、身の上をたのみに罷下れば、名さへ承つてまゐらば心がけて尋て參らせんと、ねんごろに申詞を聞て、おまへは南良のお生れかと問はれて、いかにも〱親一門にうとまれ、錢を一文かすがの里に取替てくるゝ人さへなく、向脛から飛火の野守も出て見よ、あのやくたいなしが勘當せられてうろつく有様をと、目狹き所とて指をさして笑はるゝがはづかしさに、武藏野の

ひろき心の友をたのみに、唯今下るとの物語、去とては世には似たる事あり、わたくしも南都の花蘭と申所のものなるが、十三の年同じ所の手貝の刀屋へ緣邊の約束、たのみの印迄請取、來年の春は嫁入して參る筈なるに、聟殿色狂ひと喧嘩好にてたび／＼の異見もちゐ給はぬゆゑ、近き比勘當のよしにて、わらはが親達の方へも其ことわりの人參り、忰勘當いたし追うしなひ申上は、今日より契約の緣きれ申せば、何方へも外へ緣組下さるべしとの口上、二親聞れて幸々兼て物にならずと聞て、おそからぬ事を早くきはめて今さら變改はならず、あつたら娘ひとりすてたと思ひしに、あの方よりのことわり、ひとへに大明神の御影有がたし、三條通の布屋織右衛門内々ほしきとの望み、刀屋よりはかくべつ身代よし、高畠の勘太夫殿たのみて刀屋の緣きれたる樣子を布屋方へ知らすべしと、兩親の悦びきくに淺ましく女の身の枕をならべねばとて、一たび賴みのしるしをとつて、夫婦の緣をむすぶ上はわらはが夫にまぎれなく、親達の爲には現在の聟、實の親が勘當せられたらば此方に引取りわらはと夫婦になして、布の中買なりともさせられ、一生世話をせらるゝこそ道なるべきに、勘當をさいはひにして他所へ緣に付らるべきとは、親ながら道ならぬ御こゝろざしと、再三申せど聞入なきゆゑ、所存を書置にのこし、あひも見もせぬ夫の行衛を、かくうろ／＼と尋ね出ましたと、泪兩袖をぬらしての物語、五三郎横手をうつて、偖はそなたは花蘭の墨屋の娘おそめか、我こそ今話されしいひ名づけの聟刀屋の五三郎、其方眞の心ざしの緣朽ちずして今此姿で始てあふ事、うれしいやらはづかしいやら、まづ祝うていだきついて互の泪、おちやうてかう寄からは、すぐにそなたを伴ひ、草をむすびて成共二人がすみ所をこしらへ、ともかせぎにして夫婦のかたらひを樂みに暮すべきが、我勘當をせられ南都を立さる時分、江戸に行て大金をもうけ、親の身上に百倍增の身にならずば、古鄕へとては歸るまじと、大明神へ誓をたて立出たる事なれば、そなたをつれては心のまゝの挊ならず、其上ふたりがそうてゐたらば兼てから兩方の親目をぬき、忍び／＼に出あひ故鄕を出る時節いひあはせて連れて立退しかと疑れては、手前の親其方の親達のにくしみ、又そちが眞なる心底も前方から人知ず、かうしたいひあはせ有しゆゑに、他所への緣組もきらひ、親の詞を

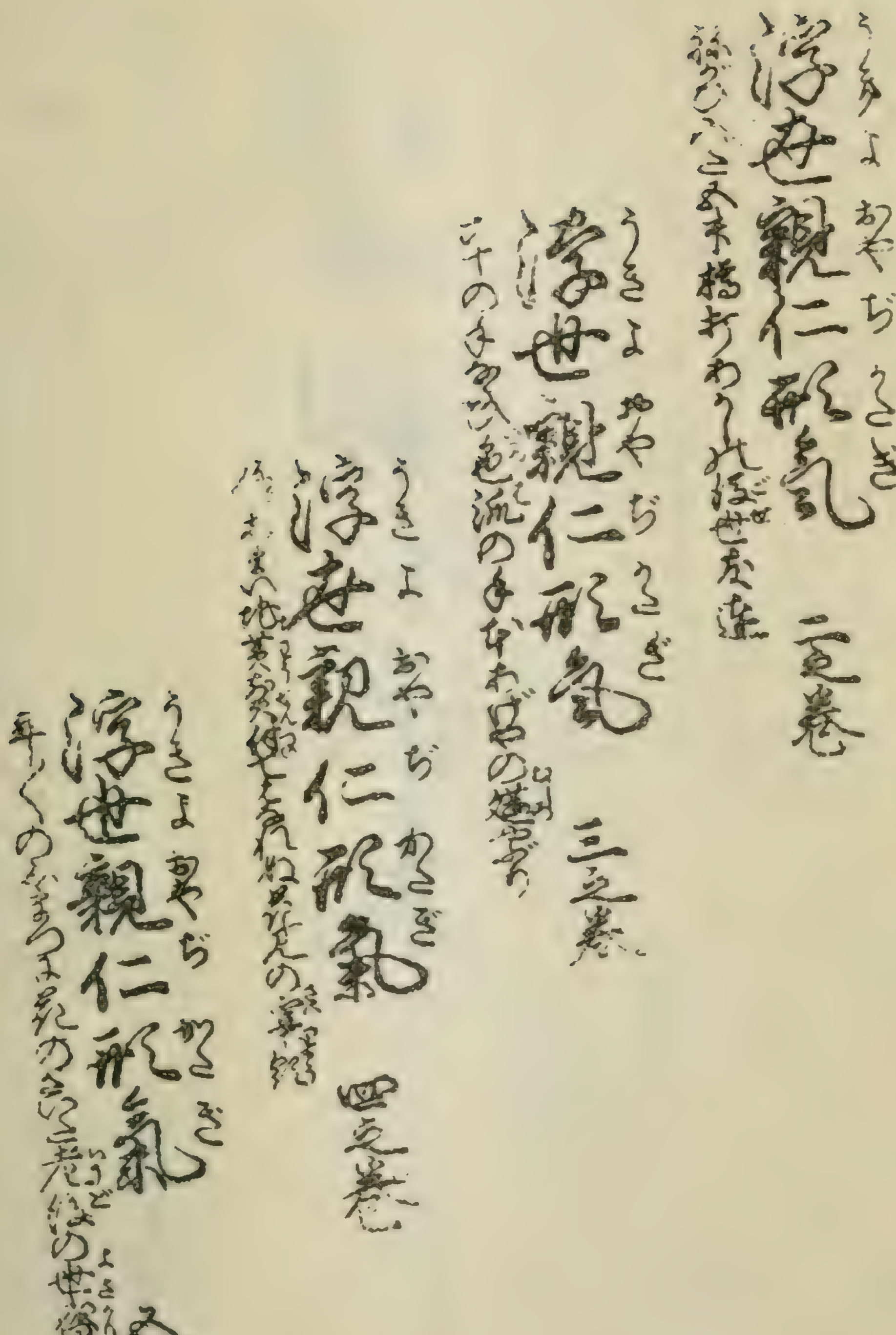
そむいて男にそゝのかされて家出をしたと思はれ給ひては、貞女の道とはいはでいたづらものと悪名をとり給はん、眞實其心ざし違ふまじき心底ならば、我出世して再び故郷へ立かへる迄、ひとり身となつて辛抱して待給へ、念願どどかず此まゝにて病死せしときかれなば、尼法師ともなりて我後世をとうてたべ、我又出世して立歸りそなたが死んだときいたらば、たとひいかなる富貴の身となり榮耀のくらしするとても、一生女といふものは奉公人にもつかふまじと、互に心底かため、旅籠屋の見世にて契約の盃して、けがに手さへ握らず、行義づよく立別れ、娘は南都の親の許へ歸つて刀屋にあうたる事はいはず、それからつくり聾となつて奥に取こもり、夫の出世の便りを心待して暮せば、はじめもらひたがりし人々もかな聾になりし樣子をきいて、それでは世帯がまかされぬと、よばうといふ者もなければ、親も一生涯つぶしの娘と算用して、嫁入沙汰なく家内にさし置ぬ。それより五三郎は白銀町の細工人に知己ありて、尋行此度の子細かたれば、哀れをかけ男の働べき所は爰なり、一挊といふにぞ力を得て腹の中から知たる道とて、刀脇指の拵所の看板出し、御屋敷方へ出入十ケ年たゝぬ内に一万兩の分限になつて、南都より契約のおそめはいふにおよばず、舅姑ぐるみに江戸へむかへ、朝夕女夫孝行をつくし、心のまゝの暮し是皆貞女の道をたてる娘の影にて、榮花の老の入まい邪なるいにしへの心を悔み、今直なる世をわたりて日本橋のほとりに角屋敷隱居おもやともに家さかえ、むかしの奈良刀今金作りにして箱にをさめ、永代松の枝を鳴らさず、此御時江戸に

安住してなほ悅びを重ねける

世間娘氣質六之巻 終

寺町 谷村清兵衛板

浮世親仁形氣



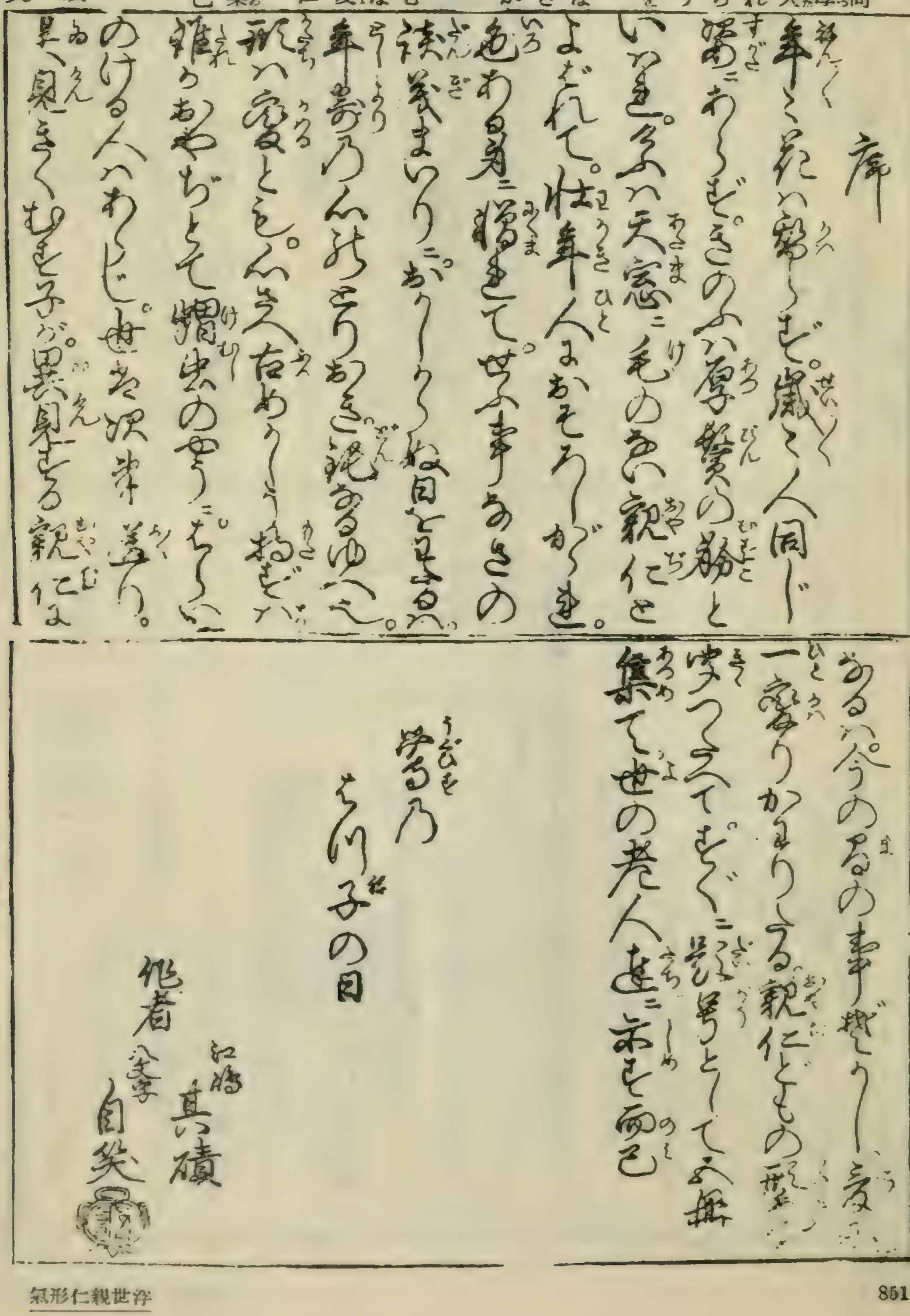
浮世親仁形氣

序

年々花は替らず、歳々人同じ姿ニあらず。きのふは厚鬢の息子といはれ、けふは天窓ニ毛のない親仁とよばれて、壯年人におそろしがられ、色ある身ニ憎れて、せう事なさの談義まゐりニ、をかしからぬ日をわたるは、年寄の心のとりおき、鈍なるゆゑ也。形は變とも、心さへ古めかしう持ずば、誰かおやぢとて蝟虫のやうニ、はらひのける人はあらじ。世は次第送り、異見きくむす子が、異見する親仁になるは、今の間の事ぞかし。爰に一變りかはりたる、親仁どもの形氣を聞つたへて、すぐニ題號として五冊に集て、世の老人達ニ示す而已

鶯のはつ子の日

作者　江嶋　其磧
八文字　自笑



序
年々花は替らず、歳々人同じ姿ニあらず。きのふは厚鬢の息子といはれ、けふは天窓ニ毛のない親仁とよばれて、壯年人におそろしがられ、色ある身ニ憎れて、せう事なさの談義まゐりニ、をかしからぬ日をわたるは、年寄の心のとりおき、鈍なるゆゑ也。形は變とも、心さへ古めかしう持ずば、誰かおやぢとて蝟虫のやうニ、はらひのける人はあらじ。世は次第送り、異見きくむす子が、異見する親仁になるは、今の間の事ぞかし。爰に一變りかはりたる、親仁どもの形氣を聞つたへて、すぐニ題號として五冊に集て、世の老人達ニ示す而已
鶯のはつ子の日
作者　江嶋　其磧
八文字　自笑

浮世親仁形氣

付リ 若い時の無分別
脱ぐい腕の入墨處

一之巻 目録

第一 菊を楽しむ連歌親父

吹付る風呂の雷盆

三弦の音い云乃脚

親の知れ膳で銚子そく

ひとところが晴小袖

行水に仕付ぬ中の絲

思ひよらぬ膳立の振舞

第二 相撲を楽しむ強力親父

大合の峰へむさし碁盤の

ちから持一指れ舞扇

摺舞乃勝小拾さる手

りき神のいろは四十八

一花おろさ力自慢往生へ

花乃方やへいぶござれ

第三 野郎を楽しむ好色親父

宮川町への遊びが過る

うごする起請文

遣手をとらへてこれは

親父さまの仕る也

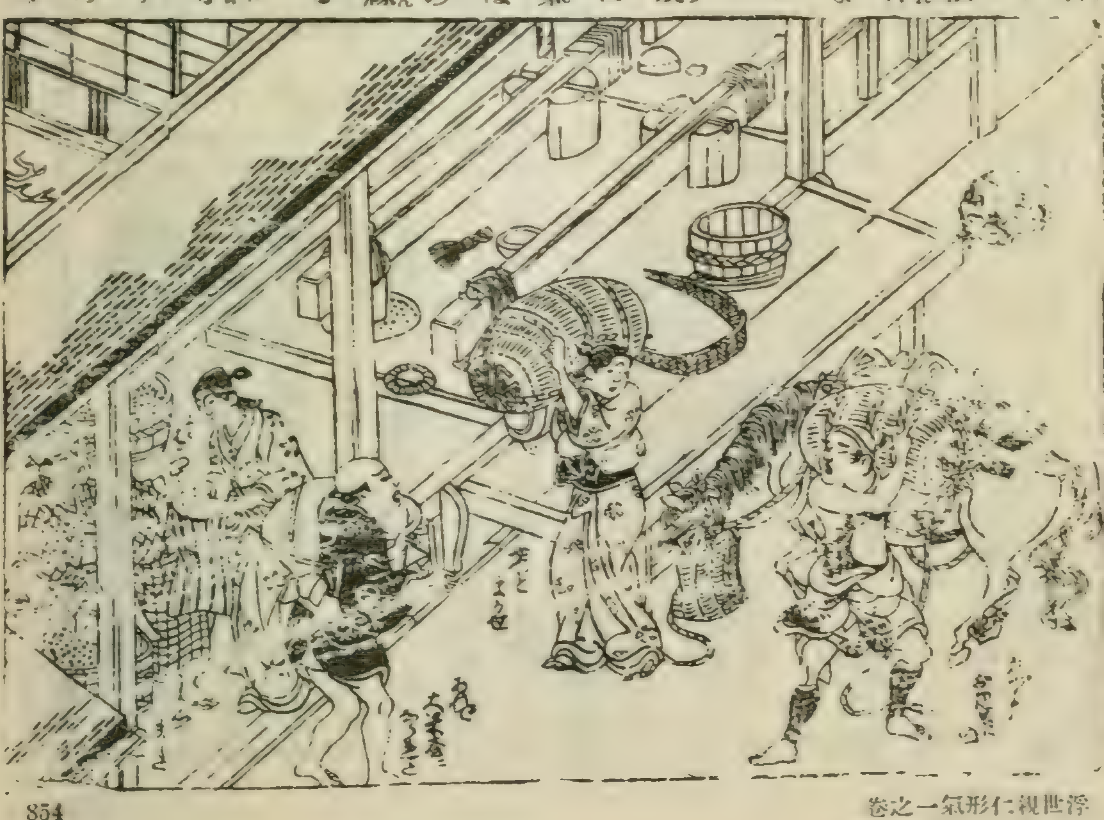
前髪への留守のかへる

宿屋れ亭主の男形氣

㈠ 食を樂む達者親父

善游者は溺れ、善騎者は墮、おの〳〵其好する所を以て、反て自禍をなすといへり。誠に川だちは川ではつるといふ世話のごとく、己が好る道によつて身を果すは人間のならひぞかし。出所は江州守山の物作りの纔なる草の屋にそだち、後家親をあなどり我儘にくらし、小力あるにまかせて農業の透には、隣郷の若いものと度々の喧嘩、所のさわぎとひとりある母に疎まれて、都の姨をたのみに夜ぬけにして京へのぼり、荒働きの奉公をのぞむも、生れつき堅くして、岩神通りの米屋にありつき、年をかさねて奉公にわたくしなく、年來の給銀のばし溜た、八百目を望姓に宿ばいり、色氣の爲にはあらで、拵の便りに我にひとしき深山木のやう成、身にかまはぬ手達者なる女房を、仲人なしにつれて來て、夫婦もろかせぎに身體を踏かためたるからうすの拍子よく、商ひ事に幸有て、米は夜の中にあがり、夢みたやう成分限に成て、次第に吹つける仕合の風、相場物に利を得て、六十八の年今長者といはるゝほどの身上、一子久五郎利發者なれば世帯をわたし、その身は法躰して是休と改め、布の十德は着れども、むかしぬき入れし額、角大師をみるがごとく、今に角の跡すさまじく、眉間尺の法師になれる躰相、心も此ごとく、世の人に金持とあがめられて都のよい衆と參會すれ共、若い時からの男伊達形氣はやます、折ふしは端手成物いひ、むす子の久五郎はよい時に生れ出で、若旦那ともてはやされ、世間ひろく公儀をつとむるにしたがひ、年に似合ぬ親父が力自慢うたてく、內證で異見すれどいかな〳〵聞入ず、久五郎が大鼓稽古して、指の先を打破りて血の出るを見て、親父大きに腹立し、同じ疵を蒙るならば、いさぎよい口論をしてこそなれ、役にもたゝぬ鼓に打負て、親のまんぞくに產付し身に、疵を付るは無分別の第一、皷の皮を買手間で、筋鐵の入た樫木の杖か、鼻捻を求ておけば、町所の喧嘩の爲にもよいにと、七十にあまつて子共への敎訓。是にかはつてむすこは、都の分限者共につき合程に、疊ざはり各別に諸藝を嗜、それにつれておのづから心も優美に、花車なる事を好む程、親父の不斷の心ばへをきのどくがり、題目講中を賴み、親共私へ嫁をむかへてくれらるゝ相談極り、則たのみのしるしつかはし、近々婚禮有

はず、むすめの親もとは大名方の呉服所にて、根生のよい衆と申、歴々の一家ひろきと承れば、祝言振舞等の一門づき合の節、親どもが兩の腕に、命入叶八幡大𦬇などの入黒痣、いかにしても見ぐるしうぞんじ、灸にてもすゑられ消て給はれと、母諸共に樣々申せども、中々開入なく、去とては人の思はく迷惑千万、おの〳〵樣仰合され、入黒痣をけさるゝやうに御異見たのむと、むすこがいふ所いづれも尤に存せられ、親是休にあうて、そなたの兩の腕に、傘の印見るやうな入ぼくろは、今の身体がらと年ばへには不相應なれば、是非にけされよとむす子が世間思うてめいわくがる段々をいひて敎訓すれば、おやぢ少も同心せず、身共は此度悴が祝言のはれに、今三つ四つも新に入ぼくろをいたさうと存ずる所に、思ひの外なる御異見、拙者は一つとして其意得ませぬ。今度取むすぶ嫁の親は、根生の歴々のよし、手前の悴を俄分限と見あなどらせまいために、われらは腕中にすさまじき入ぼくろして、おやぢは男をたてる強い奴ぢやと、新規の親類どもに見せておけば、此方を空氣にいたさぬ。悴にも膝なほし振舞の用意に、藤巻柄の人斬脇指こしらへさせ、緣者共に手をおかせうと存ると、いな事を餘情にしたがる親父を、色々宥て旦那寺の御上人ぐるみに、往生すくめにして漸と入ぼくろを灸にて燒けさせ、是から



はとかく世間の銀持の禪門達の、立行跡を見ならひ給へと、ふ食の病人に白粥すゝむるやうに、氣にあたらぬやうにいひきかし、かねて行義をなほすもをかしかりき。扨祝言首尾よく調て後、舅殿方へ聟殿親子を招待して、歴歴の親類と立交り、亭主爰を晴と持つたへし道具共を出しての饗應、聟の久五郎は万事にわたつて、心がけある若い者なれば、掛物に氣をつけ、嫁の兄弟始、若き一家のむすこ共と一所に居ならび、今日のお掛物の御筆は存ませぬが、あのさくら咲遠山どりのしだりをのと申御哥は、自讃哥の巻頭後鳥羽院の御製かと覺ましたが、先以御掛物も數々ござらう所に、私親共が壽命をおいはひなされて、此御哥をかけらるゝ御亭主方の御心づかひ淺からぬ御事、俊成入道釋阿の九十の賀を御いはひなされた御哥とやら承りましたが、手前の親共は無骨物にて、此御挨拶も定ていたすまい、慮外ながら御親父様へ御心付られし所の御禮申たと、仰られてくださりませと座馴たる挨拶、舅方のむす子共も、始ての付あひ面々ないもせぬ腹の中の店をかざり、年老の次でに、きのふ東山の稽古能に、檜垣のつゞみをうたれしは幸清の弟子のよし、慰皷にはなか〳〵承り事といへば、それからむしやうに至り咄、十種香の噂、連俳茶湯鞠楊弓の沙汰をして、しつぽりとそゝけず、人がらを作つてゐる、一間あな

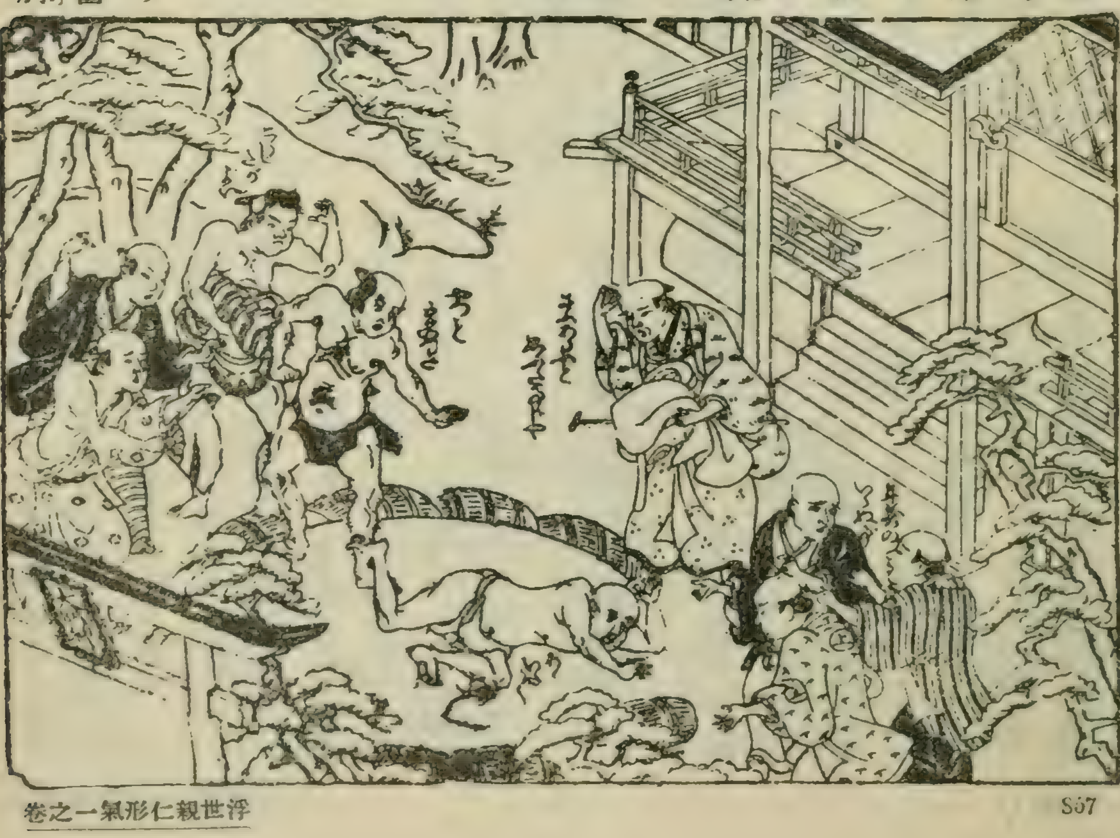


たの上座に、親の是休は貟大夫、諸一門の禪門達を相手にして、身共も、若い時は貳升の食に疵は付ませなんだが、無念にござるは年の加減で、此ごろは汁椀に一盃程はたべ殘しますと、喰自慢を高聲にはなさるゝ。一座の人々亭主の手前を笑止がりて、いざ碁にいたさうかと碁盤取よせ、野卑なる咄を碁にうつして、是休老ちと碁をあそばさぬか、淨入老は石丸門弟程ござつて、碁立が三左でござる、いざ先日の也阿彌の意趣をはらしませうかと盤へかゝるを、是休さし出、我等も血氣な時分は碁盤の角を持て、十四五づゝは苦もなうさしました、今とてもさのみ力は落ますまい、何れもの目ざましにさしておめにかけうと、片肌ぬいで碁盤の力持、老武者のかなしさは取落して、盤の角にて膝頭を打破り、今日の晴に表替をせられし疊の上へ、瀧のごとく血ながれおつれば、やれ笋樣の親御さまが力持あそばして、御怪我をなされた、石のわたよ血止よとさわぐを、是休少もさわがず、わろびれたる体もなく、いづれもは血くさい事にあはれぬによつて、是程の小疵に大ぶんの御さわぎ、此前矢橋の船頭と船賃の事に付て、是此額の疵の跡は櫂で打われしを、引抱て舟頭を物の見事に湖水へ取てなげた、其時の血などは此やうな物ではござらぬと、疵の口へ煙草付て少もひるまぬ顔つき、座中じらけて興をさましぬ

(二) 相撲を樂む強力親父

まづ是休老是へおなほりと上座に直せば、蹌踉引ながら何の仕宜もなく上へなほれば、程なく膳出て、さまざまの料理、亭主自慢の初物にも氣がつかず、大汁の鶴もわけをしらねばその儘に打くひ、是は何鳥でござるか存せね共、身どもが口には斗鯨ほどには存せぬ。御馳走の鯰鱠より、九万疋にあさつきあしらうたがよい物と、むかしの立をあらはせし客ぶり、一家衆も我を折てよい程にあしらひ、親類むすびの盃事すんで後、略の酒事興に乗じ醉に和して、亭主御肴にと、若い時喜多七太夫に習ひ置れし仕舞しをらしく、ゆやの出を舞をさめらるれば、一座同音を感聲を出し讃ければ、是休も人に肴をせられて、だまつてゐるは無藝なものぢやと、一家の出合に見立らるゝも無念の至りと、さらば拙者もお肴に、若い時みがいて置た、取ておきの藝をお目にかけんと、その儘着たる小そ

でを脱で眞裸に成て、蕎麥切色の越中ふんどし、遠慮もなく手を振て眞中へおしなほり、昔は相撲に四十八手と申せ共、今程はさま〴〵の新法の手をあみたて、凡八十八手の餘覺ぬいたる此男、なげに取ても追なげかけなげはりまなげと、永々とのいひたて、其後手あひして一人相撲に、皿鉢八寸嶋臺おさへを蹈くだき、小股取たる身ぶり、なんといづれも見事か〳〵と、ようする顔を見て、むすこはその儘消たい心、舅方にもしつぽりと汗をかいて、御年の上に御風をお引なさるればわるい、着物めしませ。久五郎殿には御果報な、おやぢ様は中々御氣力がつようござると座成にいへば、おやぢ悦び、悴がやうな脾弱い奴は片手でも樂でござると、さる程に持あましたる親父どの、異見すれば逆に成て、なほ〳〵力業をやめず、不斷の慰が、下男の久七を相手に、相撲の稽古、どういうてもきかぬにきはまれば、悴と母が內談して、迚やめられぬからは、怪我のないやうに相手の久七に負てくるゝやうにと、給分増て內證にてたのみけるが、是却て爲にならず、年若な究竟の久七めさへ、幾度取ても我には及ばず、此位にては勸進相撲に出たり共、さのみふかくは取まじと、彌增に盛に成て、力の爲の肉食、朝夕五器で水を呑、年寄にはためしなき身持、何とぞあの氣力の落るやうな藥もあらばと、出入の醫者と相談すれば、醫者分別



を出し、薬よりは若い妾を二三人置て進せられ、晝夜御側はなれぬやうにいたさば、めつきりと弱り參るべしと、さすが醫者程有て尤なる思案と、お袋世話をやいて、丈夫な妾を二人までめしかゝへ、隱居へつかはし、おやぢ様の寢道具のあげおろしに、お心安くつかはせらるゝやうにと、二人の女にいひふくめてつかはせば、それに馴たる女共、心得ましたとうなづき、心の中にそんな年寄男は、此方のあしらひ一ッなり、緣有て季をかさねてゐるならば、透間を見て脇に男をこしらへ、むつかしう成りなば其親父様の子にかづけて、御隱居の跡を我物に書置させまして、ゐながら丸取にと、二人はいはずに同じ思いれにて隱居へ參り、

ありき品にわざと見せかけ、おやじに心をうかさすやうにもつて參れど、いかな〳〵若い女と物をいへば力が落るとて、目に角立て白眼つけ、そばあたりへよせつけず、あたら妾二人共に脇にねさせてさびしがらせ、我ひとりねまの戸の、明くれ相撲より外にたのしみなしと、毎日執行つのりて、五十斗の時よりは少し力も出て益〳〵悦び、白髮金時と名乘て、松尾の神事相撲に出て、あつぱれ手がらをあらはさんと、都の名取の上手共の中にうち交り、肘をはつて前相撲を見物し、三番うちせし上久世の立石といふものと、此親父相手に成て、物の見事になげられ、骸骨くだかれてやう〳〵駕にかき入られ、うき事にあうて宿に歸れば、妻子かなしみ跡やまくらに立そひ、いたみますかと尋れば、痛い所をかゝへながらまだ口はへらず、おれほどなものをかうなげた立石めは、あつぱれな手取めぢやと、中々いたみは苦にせざれど、さすがは年の上とて、療治しても果敢どらず、次第におもく成て、今ぞ臨終と御上人すゝめに來られしが、導師はど有て此親父が日比の形氣を知ッて、枕もとへより、是休老もはや此世のお手が見えたといはれければ、おやぢ目をひらき、西の方はソレハ極樂いざござれと、相撲の手にて落入れぬ

(三) 野郎を樂む男色親父

世界に身過ほどかなしき物はなし。萬につけておろか成事もなく、見えわたりたる中にも、殊更色茶屋の亭主、心永う物ごと堪忍づよきがもとで成べし。悋氣ふかき男の此商賣はなるまじ。大かた女房は客のなぶりものと了簡して、是は旦那、我等見だい所の付ざしを召

あげらるゝは、ちよつと三百目かいと笑ひにしてすまし、近比氣のかるい亭主めと、多くの客の氣に入、宿ばいりして間もなき新茶やなれど、門前に白人野郎の駕籠絶ず、名題の茶やよりは繁昌し、軒ならびの同商買そねむ位に客しげく、女夫心よき世帯を經てきげんよく、いよ〳〵大臣達へのあしらひよければ、まねかぬに人集りて、二年たゝぬ内に卅貫目生た銀をまうけ、もはや身上かたまりしと夫婦談合して、川西の裏やにひとり住してゐる爺親をよびとり、心のまゝにやしなひ、孝行をつくしける。抑此亭主が親は、若き時分西國方に武士奉公つとめしが、主人江戸くだりの供をせし刻、鈴鹿峠にて落馬し、右の腕を打をりしより、侍奉公ならず、都に少しるべの有しゆゑに、西の京御前通りの邊に引籠り、腕を養生せし内に、今日の糧つき女房が心得として此亭主が七つの年、道頓堀の奴十内と云金剛所へ金三兩取て野郎の下地につかはし、其後女房も果ければ、なほ〳〵けふをくらしかねて、無念ながら北野の御縁日に出て太平記をよみ、又は楊枝耳かきのつきつけ賣して、喰ぬ日も多かりしに、子といふものゝ影にて、今日樂にやしなはれ、晝の内は臺所の邪魔とて花車が氣をつけ、懐辨當などこしらへてあてがひ、西山かぎりに毎日の遊行、老の果報とは是成べし。此茶屋の一客に、浦島樣とて六十斗にして子共好の親仁大臣、小哥の勘六といふ哥うたひの抱に、花村門十郎とて當年十三になるに、みぢんそらねのない小人嶋の野郎みるやうな、ちひさい若衆を不便がられ、毎夜爰に呼てたはふれ、大臣の爲には彥というてもくるしからぬものに、白き鼻毛をのばして、しかも此おやぢ悋氣つよく、中々外の座敷へかす事もせず膝の上にのせて悦ばれしが、何者か此親父の耳へ吹込、笛吹の吉太郎と此若衆念比してゐると聞て、以ての外の大くせつ、亭主女夫罷出てさま〳〵取扱しに、しからば勤の外には、役者に手をもにぎらせまじ、いつ迄も我等を兄分にたのみ、大切にいたすべきとの起請かゝせてくれよと、鬢髭白髪たる口から、おとなげないといふは大抵の事、是は見事なうまい親父とは思ひながら、御客なれば笑はれもせず、畏て門十郎を勝手へよび、大臣樣御望なれば、眞の兄弟のごとく大切に思ふとの起請を書て進せられよ。しからばその替りに何にても、そなたのほしきとおもふ物を旦那からもらうてやるべしと、公界

はすれど年のゆかぬ若衆なれば、正眞の童たらすやうに言葉をつくしいひ聞すれば、門十郎笑ひ出し、誓紙を是非かけならば書もいたしませうが、あの親父樣と兄弟分とはめいわくでござる。たゞもさへ町方では子共は年をかくして、舞臺では十四五に見ゆれど、あれももはや卅であらうと、まことの年を申ても合點なされぬ客衆の多いに、七十ニちかいおやぢ樣を兄分にたのむと書ては、わしが年をむしやうにふけたやうに沙汰せらるゝも氣毒、爰はおまへおとり持なされまして、私と祖父孫のかたき契約いたしたとの起請ならば、書て上ませうほどに、是で御きげんのなほるやうにと、至極なる事を申出せば、亭主もをかしさはやみて、自然と尤とうなづき、座敷へ罷出て、成ほど若衆誓紙を書て旦那へ奉らうとあれ共、ちと好みが御座りまして拙者への內證ありと申せば、皆迄いふな其かはりには地衣裳五重、金拵の脇指一腰進上いたす。今時かやうな大臣は稀にあらうが、すさまじき儀かと、酒きげんにまかせむしやうに聲高に申ける時、表の戸を明手代らしい男が二人づれでずつとはいり、二瀬をまねき、二階の聲は浦嶋と替名のおやぢ樣ではないかととへば、成ほどさうでござりまするが、おつれ樣なら是からおあがりなされませと階子をゆびさす。いかにもつれぢやと二人ながら二階へかけあがり、おやぢさま是にご



ざりますか、きのふから内かたは上を下へとかへして、おまへのゆくへを尋ねまはります、中々若旦那のきげんがあしうて御笑止に存ます、五兩でも十兩でも御入用ならば、なぜ私共にひそかに仰られませぬ、どうして成共あげませうに、生田屋からもどつた五十兩の金を、若旦那の用事にお立なされた間に、つい引かけてかいくれお見えなされぬゆゑ、昨日は嶋原から撞木町をさがし、けふは四しばゐを僉儀いたし、それから祇園八坂を尋ね、歸りがけに此門でお聲を聞付はいりましたが、第一は御年に耻られませい、世間には御子息ゆゑに親御の御世話をなさるゝが習ひなるに、おまへのは裏腹にて、三十にお成なさるゝ若旦那の御異見を用ひられず、毎日の惡所狂ひ、大勢の手代共の手前へおはづかしうはござりませぬか、よい年して御子息の銀をぬすんで、金の有間は五日でも十日でも内かたへはおかへりなされず、たはけをつくしてござる、昨日とけふと間もないほどに、さのみ金子は減ますまい、五十兩の金の殘りをお出しなされと、ふところへ手を入財布を引出し、小判をよんで見て、はや二日に十一兩のつかひ、去とは興のさめるおやぢさま、かさねて客にせられても、若旦那からおやぢ樣の拂はなされぬ、損せられたと此方には存せぬと、亭主に斷り引たて、歸りぬ。扨もひろい世界かな、子は三界の首械といふ



に、親を三階の藏へ追あげ、それから後は此茶やへも見えざりき。是は親ゆゑにむすこが身代たふすといふものと、女夫我ををりて咄する所へ、山もどりのお客二三人ばた〳〵とおはいり有て、是は花車久しうおめにかゝらぬ内ニ、仕合につれて大分女房仕上られ、白癩どうもたまりませぬはと、うしろ抱にするを、折ふし亭主がおやぢ膳だなの下に小ゐねぶりしてゐたりしが、客のどやめきに目をさまし此躰をみて、やがて客を取てつきのけ、人躰に似合ぬ人の女房にぶ仕付千万な、抱付とは法をしらぬお人ぢや。嫁も又ふ行儀な、あんな事するものをそのまゝだまつてゐらるゝは、つねとは見おとした心底、武家なれば生ては置ぬ所ぢやと、客共をねめつければ、浮氣大盡共肝をつぶし、二言もつがず立かへれば、亭主是はと走出て、色々とめてもかへられず。すてゝも今宵百目のまうけを、おやぢどのゝりきみで取そこなうた、是が商賣ぢやほどに、重ては何事も見ぬかほしてござれといへば、親父氣色をかへて、やい人でなし、女房をあのごとく他人のなぶり物にせられて堪忍してゐるか、身どもは若い時から武家の食を喰て來たゆゑ、あの樣なふ行儀な事は見て堪忍はしてゐぬ、商賣が是斗か、惣体われが常の行義からがわるい、來る程の者に追從輕薄いうて面をかざるは、人たる者のせぬ事だ、言を巧し色を令するものは仁鮮しと、孔子も仰置れた、向後人が來たと媚諂事は無用にせい、脇から見てゐて見ぐるしいと、眞黑に成て女夫をしかれば、亭主手を打て、こりやならぬ、茶屋にあのごとくのかたいわろを置は、酒屋に人かみ犬を飼て置と同じ事、買手がこねば我我が口がひる、こりや嗅浦嶋の親父どのが余所にはない、親父の影で身代がつぶれさうなとにが笑ひして、親の置所にこまりはてけり

一之巻終

浮世親仁形気
付　親ひてこゝろ外様
弁明しぬ世夜違

二之巻目録

第一　今が楽しむ高利の親父
今銀ハ万能の諸芸と
押て育る上手の勘
沼借中ある松をさらるゝ
振袖の細い男
かさねての京判
押付業する手形の文言

第二　悪を楽しむ血気親父
いつのまにか中て楽を詰ぶ
ノ楽屋乃伊子
大きな浪ゝをそすゝる
夜毎の盗喰
孝行ハ仕由されね
柳の子ハ継母に出合

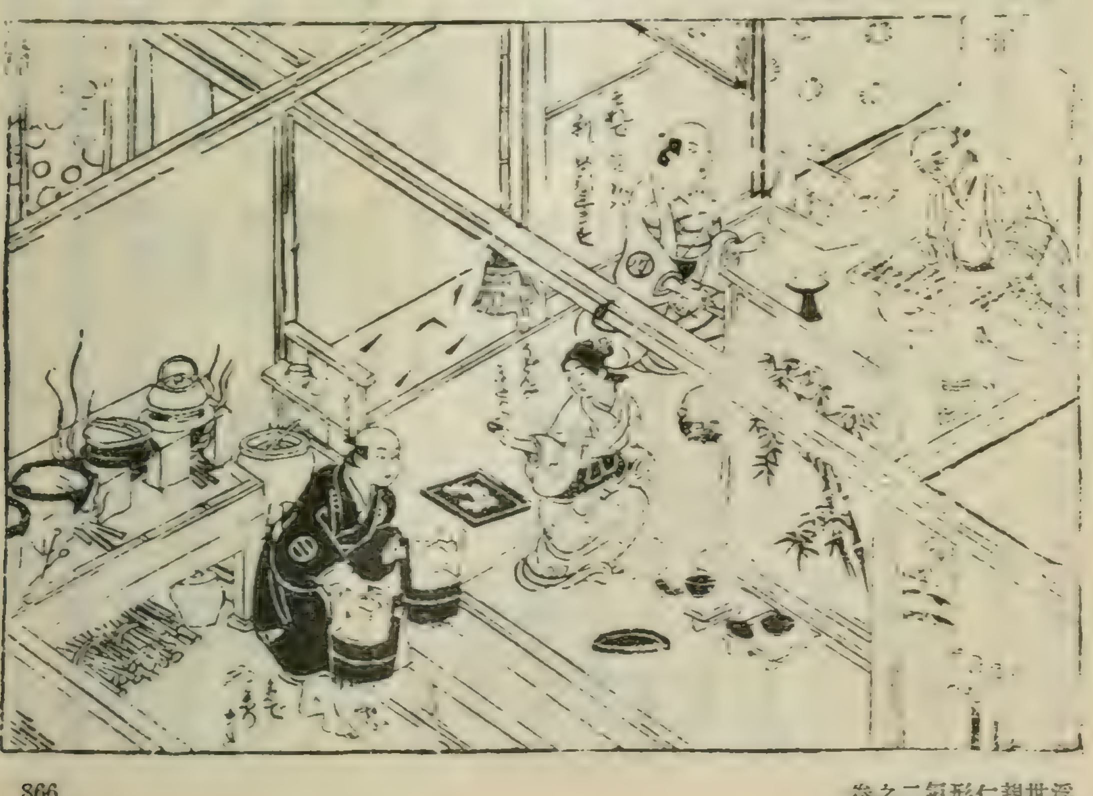
第三　殺生を楽しむ備鑓の親父
釣の糸一筋に方へ
頼の浪に浮む中将
…
喜撰心ハ商の…

(一) 金を樂む高利の親父

都の繁昌淸水の西門より詠め廻せば、立つゞきたる軒端かゞやき、內藏の氣色朝日にうつりて、夏ながら雪の明ぼのかと思はれ、豐なる御代の例、松に音なく千年鳥は雲にあそび、かぎりもなく打闢き、九万八千軒といへる家かずは、とつとむかしの事にして、今は土手の竹藪も洛中になりぬ。それ〳〵の家職つとめて、其透をたのしみ、遊山遊藝に年をよらせぬ事にして、是家業の御影にて、相應に金銀をまうけるゆゑに、妻子も樂にやしなひ、其身もこゝろをなぐさみて、よろづに自由なる京にすめば、何をならはうと諸藝の達人多き中に、たゞ無藝にしてかねためる事ばかりを樂みに、其生れつき堅き事、巖に根をあらはせし、松永貞德花咲町に、年久しくすまれし其隣に、小石屋又右衛門といふ錢見世出して、身過大事と心得たる親父あり。春みる櫻ぎらひにて、身は花色布子のつよきを考へ、明くれのもてあそびに、二十五桁の十露盤を枕にして、四十年以來同町にゐながら、貞德の俳諧せらるゝとは、諸國の目安の談合いたさるゝ分別者とばかり合點し、近い隣殿なれども、一代公事訴詔いたさねば、貞德を賴み俳諧書てくだされいと御無心申事もなしと、花の都に住ながら、かゝる親仁もあれば、增て田舍人は、たとへ衛士籠を雛の綿の塵よる物かといふ共笑ふまじ。此親仁年の寄にしたがひ、身は干鮭のぬけ目のない男、後生よりは始末を第一に心がけ、若い時からただゐせず、めげたるきせるの皿をたゝいて百錢のたしとなし、捨る塵塚迄も錢ざしにこしらへ、年來錢をつなぎ溜、今都にて大名借する、上から二番めの銀持、世間から三万貫目の身代とさすにちがひはなし。かゝる分限に成ても、そのまゝ親からゆづりうけたる、取葺やねの二間口の家を建直さず、今にちひさい小者と、いたづら氣づかひげのない、六十にちかき下女とをつかひ、常住香の物菜の外には、いかな〳〵三月の鯛壹枚、松だけ十本三分する時も、目に見るばかり、咽がかわけば白湯にこがし、油火も眞中にひとつともして、是をねさまに消て、鼠のあるゝをかまはず、絹の下帶さへせずに、不斷古布子で暮し、町振舞大名借の相談の有德人と、二菜講の付會には、此心にても少は世間を思ひて、銀をかしたる古手やにて、權づけにゆきたけのあはぬ絹

物をかりて、其家から身拵して、鼻紙迄もらひ行、歸りにはすぐに又爰に來りて、元の古布子に着替て戻り、たゞ利銀取事を、世の色人のけいせい狂ひする程におもしろく思ひこみて、橋東の茶や役者に、五割の利を取しかも、三ヶ月づゝの切に極めて、其切に返辨せぬものには、盃でなうても利足を一踊づゝをどらせ、一年十二ヶ月に十七ヶ月の利を取て、たゞ金銀の溜る事のみを悦び、頭には雪をいたゞき、都の富士の廿にたらぬ若いものより氣象に、毎日借付と催促にかけ廻り、念佛講の同行の死なれたる、葬禮の輿あつらへに行にも、一割の口錢はねて、鬼の目をもくじり、佛の箔でもはがして成とも、たゞは通さぬ欲人なり。世間の人の金銀ほしきねがひは、身を安かに相應の遊山遊興に心をなぐさみ、身の樂みを思うての欲なるに、此男第一妻子は世帯のつひえと見かぎり、女房持ねば子もなく、誰にとらすべきとて金をためけるぞ、とても死ぬるとき持てはゆかぬものを、養子をしてなき跡の、問弔をせらるゝ思案あれかし、死れば他人の物に成がと、旦那寺の和尚の敎化に、少シ心つきけるにや、甥を養子と極めながら、それも内へは入レず、そのまゝ外にでつち奉公させて、我等しぬると皆おのれにとらすれば、冥加の爲に盃正月の禮に、錢百づゝ持て來れと、中々何ひとつ存命のうちにやる氣はなくて、仕着せでゐるでつちの物迄せぶりぬ。ある時旅役者の立物、此親仁に金子五兩の無心いはんため、何かなしに呼込、そばきり振舞て追從のある程いひての上句に、五兩のねがひを申出しければ、親仁盃持ながら、のみもきらず噛も切ずの返答。此金ととのはずしては、舞臺衣裝の質を出す事成がたく、さすれば抱られし旅芝居へ行事ならずと、傍輩の役者頼みて、又々親仁へいひ込ければ、晩程參りて談合せうとの返事。のみ込ぬ事に參らうとはいはぬ筈、今宵はすこし馳走に氣をはり、いたみ入していやといはせぬ仕かけの網にかけて、鯉の吸物小づけ食に、鰻の燒物、笋に串貝の煮物など取合、御出なさるゝと、お主あしらひにしてもてなし、あたまから盞替て強つけ、御肴には先日申せし五兩の事、ひとへに御取たてと思召、是非おかしなされて下されと、手をついてたのめば、旅役者衆にはかしたる事はなけれ共、先度から除儀ないおたのみかしてゐ進せうが、こなたのいはせらるゝ霜月切にしては、當五月より七ヶ

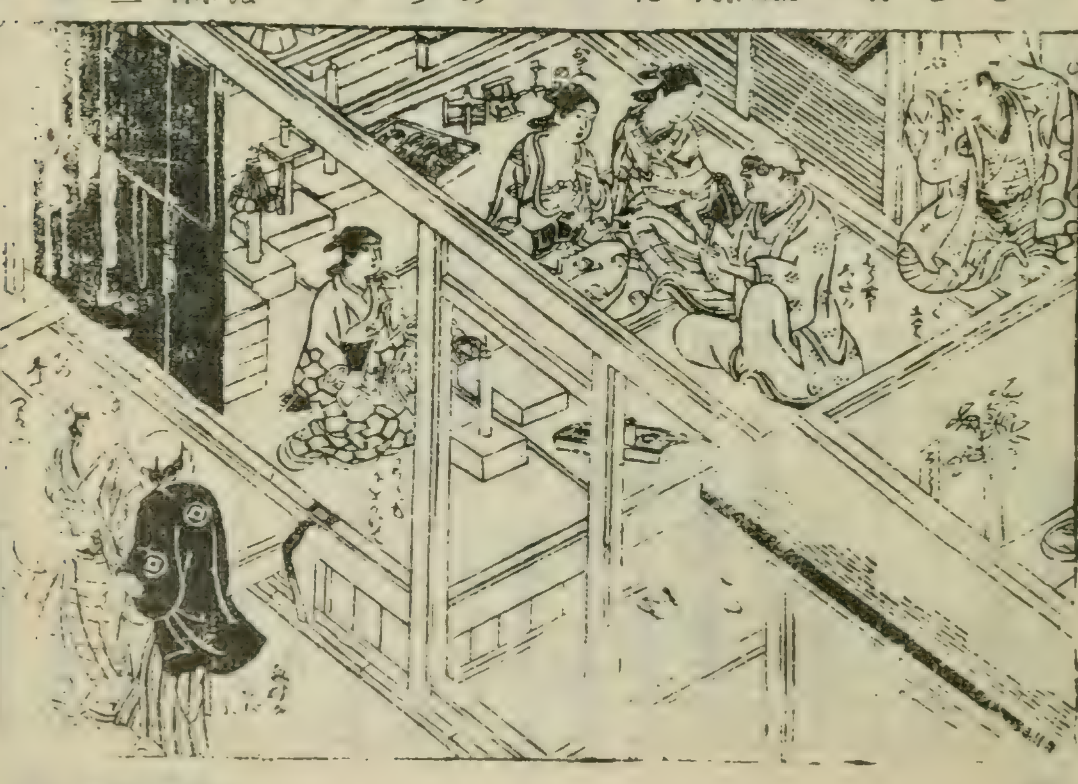
月の利足を、あたまで引て渡しますが合點でござるかといへば、めいわくながらいやといはゞ、元からやめにもしをらうかと、どうぞ御了簡が成ませう事ならば、利足は霜月に元利ともに、一所に御取なされて下さりませと頼めど、情といふ事をずゐぶんしらぬ親父なれば、いかな〳〵ならぬ事、十露盤持てござれ算用して、迚の事にはやう役に立てしんせうといふ。是はかたじけなし、すべて役者はぶ算成者なれば、いかやう共宜しきやうに頼み奉ると、十露盤を渡せば、おやぢ引取　置たてヽ、借り手の役者に呑こませ、先利足は小判壹兩に付六匁づヽと合點なさるべし、金壹兩六十匁がへにして、元銀三百目、此利一ヶ月に卅匁づヽ、是に一割口錢卅目、只今元銀の內へ引落しつかはせば、高貳百七拾匁といふもの、それに二ヶ月に一度づヽをどりをかけて、霜月迄の月數十ヶ月なれば、一ヶ月の利分卅匁づヽ、合て利足高三百目を、あたまで引て渡すやくそくなれ共、元銀貳百七十匁なればどうも引れず、まだ銀卅匁たりませぬほどに、其方から只今卅目の不足銀お渡しなされと、そろばん置たてヽ見せける。かりての役者肝をつぶし、一文もからぬさきに卅目たらぬとて、此方から出しましては、今何をお借なされて下さる事ぞと腹をたつれば、おやぢふしんがほにて、十露盤が物を申す、不算な人を相手にすればのみこみがわる



いと、つぶやきて歸りぬ。去とはからぬのみならず、氣ぼねを折て、此比雨度の振舞くはれ損に成て濟けり

(二) 色を樂む血氣の親父

京も田舍も親父といへば、滿更別の世界からも渡つた人間のやうに、若き人は忌おそれて、仕懸ヶたる浮世咄をやめて、それ毛虫よと自墮落なる居住ひなほして、俄に智惠有顏にするこそ、神ぞ年寄の身にしてはめいわくなる事ぞかし。人の親の心は鬼にあらね共、子を思ふ故に我とてもすかぬ孔子面して、いやながら不斷行義かたく、嚊にざれごといひたいさへ口を閉て、むすこにこはがらする看板世上へひろまり、ちとくつろいで色噂の中間に入てくれてもくるしうない、他人の若い奴らまで除をるこそ恨なれ。形は替り行ど、百年立ても人の心にちがひはなし。むかし伽羅の油にていため付たる頭も、白き烏丸通に、組糸やの甚五兵衞とて、繁昌の糸やありしが、中比内證の糸もつれて身代みだれ、分散にも成べき所を、むす子の甚介發明者にて、一家町内を頼み、年符の斷、負せかた聞屆て、つがなく家を立けるに、いよ〳〵甚介商賣の糸を一筋にはげみ、十年もたゝぬ内に、以前よりは各別身体仕あげ、同じ町に大屋敷三ケ所迄もとめ、中々商手廣く、江戸に新店を出し、



世の讃種と成て、娘持たる有徳人、聞傳へに乞聟にすれ共、此むすこいか成心入にや、今年卅五になれ共いまだ妻を向へず、都に住ながら嶋原といふ所は、西陣と同じ嶋を織出す織物やと心得、祇園八坂の茶屋共は、宇治からの出見世ぞと合點して、つひにあだ錢一文もつかはず、常住革足袋に雪駄で得意方をかけ廻り、商賣の外なる事は、ただ見る辻放下にも目をやらず、晝夜油斷もなう挊けるに、世には目のあかぬ親もありて、是程までに身体を立なほし、始の百双倍商ひも仕出して、しかも性よしのむすこなるを、まだおぼつかながりて、隱居座敷を悴が建て渡せしに、それへは引籠ずして、七十有餘迄法体もせず見せに出て、目がねをかけ鋏を持て糸の節を取て、若い時にかはらぬ有樣、近所からそしるもかまはず、四十に近きむすこをしかり廻して、當世にあはぬ商ひの指圖、邪魔にはなれど見世の爲にはひとつもならず。是のみ甚介きのどくがりて、題目講の相口なる禪門を頼み、世話をやめて隱居せらるゝやうに異見をさすれば、親を嫌うて追出すかと、たつた一口の返答にせひなく、そのゝちは隱居の沙汰をいひ出す人もなくて、おのが身体ねぢなほしたる顔して、我儘をふるまひ、家の作法もみだれ糸の、組手の女どもも存在に成て、晝も引籠ねふしして、仕事は假令のやうにすれば、請取物の日限ちがひ、屋敷方からは柄糸下緒をせがみに來る、寺方よりは修多羅の延引せりたて、是では商ひふはんじやうの基と、甚介以ての外に腹を立、組手の女共のぶ奉公を折鑑すれば、此月が産月なれば、腹がつゝぱつて仕事がならぬとの斷、おのれ奉公をしながら主をふみつけ、不義をはたらく段ふ屆の至り、請人へ預けると大きにいかれば、ふ儀の相手はおやぢ樣、若い身で年寄男が何がおもしろうていたづらをいたさう、毎夜〱むたいな事とは思ひながら、主と病にはかたれず、負て此通りといへば、かたはしには七月ぢやとて、福嶋の雀鮨見るやうに成てゐれば、青梅このむ女もあり、惡阻の最中にて嘔吐するも有、六人の組手共に霞のかからぬはなくて、僉儀する程相手かはれど主かはらずと、皆親父が細工なり。律義なるむすこあきれはてゝ、とかくは家の破滅と歎き、一門衆へかけ廻り、母過ゆかれて親父夜のさびしさに、組手共にたはふれらるゝゆゑ、それを鼻にかけて、私の申付る仕事をいたさず、商ひの勝手あしく家業のさはり、何と

ぞ氣にさはらぬやうに御異見を頼み入と申せば、一門衆横手を打て、我ををられ皆々打寄親父をよびよせて、異見せられければ、それは曲もない御異見、妻なしなれば道理ぢやとこそ、いうて下さるべき筈なるに、むすこが肩をもたれ、重ては女共に手を指なとは、人間のたのしみは是より外はなし。しからば向後組手共に手ざしはいたすまじ、その替りにいづれも一門がひには、急に廿四五斗な究竟の女房を御肝煎なされて、私方へ入て下されとの願ひ。是は尤、もはや四十に近きむすこなれば、娌をとられてよい筈、いかにも我々宜しき娘を聞立て、近日にきもいらんと一同に申さるれば、いや／＼悴が段ではござらぬ、先我等が女房持ねば、組手がたまりませぬとあたまには白髪糸をいたゞき、扨もつよい糸屋のおやぢと、一門衆も興をさまして笑はれもせぬ老のふるまひ

㊂ 殺生を楽む佛嫌ひの親父

室町通に御所染の絹商賣して、大菱屋といへる身体よし、子共を多く先だて、度々の愁に無常を観じ、一人取殘せし大切の一子三郎四郎に跡識をゆづり、我若き時に小鳥狩蠅頭の釣をたのしみ、大分の殺生せし報ひにて、子を失ひしとおもひ合せて、吹筒打破釣竿へし折て、大釜の下へ燒て捨、夫婦もろ共にあたまゝろめて、夫は常覺、内儀は妙覺と名をあらため、毎日の寺まゐり、去とは殊勝なる取置、先立れし子共衆は善知識といふものなりと、此仕舞をうらやましがらぬものなかりしに、ある時姨の娘果られて、七條への野送りの供して、歸りには此身に成ても死ぬる事は忌て、一家衆とわかれ道をかへて戻るとて、東川原へ廻りてかへられけるに、案山子のごとく編笠かづき、川中に立て蠅頭をおろして、鰷鱒鮇などを釣事、見る内に五六疋もその心地よさ、好の道とて法躰の節佛に誓ひし事をわすれ、しばらく立て見られしが、いまだ功者のなき釣手と見えて、抓む程ある魚のわづかにかゝるをもどかしがり、裾引からげて川を渡り、ちかづきならぬ彼釣手に、さうした釣やうにては中々かゝるまじ、我にその竿かしたまへ、おそらく釣て御目にかけんと、むりに竿をかりて、時の間に五六十釣てやられしより、罪もむくひも世間の思はくもわすれはてゝ面白く、燒て捨られし釣竿戀しく、寺參り金の内からひそかに釣一通りの道具を求め、

さすが内へは取てかへられず、墓守の方に預ケ置て、毎日談義參というて宿を立出、久三も口たゝけばと供さへつれず、墓守に水向の手桶さげさせ、小僧そゝのはかして伴ひ、荒神川原の上手に魚の溜るところを見すまし、是に針をおろすに、何程となくかゝりて、是よりむしやうに面白、念佛講中の同じ年比の禪門を、二三人も殺生の道に引導して、極樂への同道を地ごくへつれだつ下拵、惡緣の友とは是成べし。小僧は才覺出して、鐃鉢かくして持來り、是で魚をすくふ事、一宛釣よりはかゆきと、墓守に川上から追はして、數取事を悅びぬ。それより此あそびつのりて、纔から大網に成て、殺生いとまなく日毎に出れば、誰いふともなく此沙汰内へ聞えて、内義の妙覺むすこの三郎四郎異をさまし、五重相傳をしながら、又本の殺生のあそびに、法体あたまをふりたて、網うたるゝ事、世の人の笑ぐさといひ、第一は先だちたりし子共が、未來の罪をおもくせらるゝかと、内方泪をこぼして教訓あれば、禪門却て腹立し、我世帶を倅に渡し、浮世を樂にしたい事して、あそばんために法体せしを、出家同前に思ふは、其方共があやまりなり。川がりしたる罪によつて地獄におつる共、そち達がやつかいには成まじきに、重て異見無用と、それからは内へ遠慮なくおし出しての殺生、是より上の世にたのしみは有まじ、たとへ來



世は無間の底におちてもと、釜が淵に網をうち、若い時より血氣まして、今本卦にかへつて、いよ／＼罪をつくれ共、此家の大旦那誰あつておしつける者もなくて、内義とむす子未來の事より、先は、當前の世間の聞えをきのどくがり、町内の年寄五人組の内儀達を、おやぢ川狩の留守にまねき、酒などすすめて、常覺禪門へおつれあひ樣がたの御異見で、向後殺生をとまらるゝやうにと、泣しみづいてたのまれければ、宿老の内義泪ぐみ、こなたの殺生は世間の人のするわざ、おなぐさみとも申べきが、私の夫は今年六十七にて、年寄役を持ながら、町内の若いむすこたちをそゝのはかし、毎夜茶や狂ひの太鼓を持て、内に一夜もゐられず、是を異見すれば、四十五年添てゐる此婆に出て行とのあいそづかし。けふは内かたの常覺樣を頼んで、異見いたしてもらはうか、明日は御寺の御上人樣に、しかりてもらひませうかとおもひしに、世はさま／＼の思ひありと、しを／＼として語らるれば、組頭の内義笑ひ出して、こちの親父のたはけは、よい年してしばゐを好みて、かへりてはそれ／＼の役者の物まね、思ふやうにうつらぬとて、此比は吉川三郎兵衛といふ、物まね師の所へ稽古に行、戻ては藏の二階へあがつて、高聲にて山本かもんがぬれのせりふ、柴崎がこわいろ、あの卷舌の所が今少ゆかぬは、齒のぬけてあるかげん



ぞと、大圓を頼んで物まね稽古の爲ばかりに俄に入歯をして狂れます、是が七十二に成慰と申さるべきや、異見をたのまうも人様にいふもはづかしさに、一向だまつてをりますが、こちらの所のおやぢに合しては、常覺様のは實体成御遊興、是をとやかく仰らるゝは奢の沙汰と申せば、宿老脇の伊丹や元西老の內義、すゝみ出て申されけるは、こなたの親父様は後の世の事をわきまへ給はず、お年よられて殺生をお好みなさるゝとの御歎き、まゝならぬ浮世と申事ぢや、今よく合點致しました。此方の親父は佛の道を願ひ過られて、身体のさはりと成、今日の家業がつとまらぬからは、親元西を勘當致して追はらふと、忰藤兵衛腹を立て、親子いさかひむすこが道理也、いづれもさま御聞なされて下さりませ、こちのおやぢが五百戒とやらたもたるゝ、律僧衆の敎を聞こまれ、此春から持齋をするとて、曉の明星と共に起て、正食を焚せ書前に齋をさせて、しかも女の拵たるは喰事がならぬとて、わしにも下女にもかまはせずに、いらぬ雇男をして煮焼をさせて、毎日齋詰ニ五文取の餅廿づゝしてやられ、商賣の事はわきへして、朝から晩迄佛の事にかゝつてゐられし、たま〳〵見せに出て所作くりてゐらるゝ所へ、みせの道具を買に來る人が、此たばこ盆いくらと問ば、むすこ藤兵衛それは三つ道具揃て八匁五分といふを、親父目かほに皺をよせ、やい藤兵衛あれは本直が五匁なるに、三匁五分の僞をいふ事もつたいなし。五戒の內にもわけて妄語戒を佛も禁め給へば、假にも虛言を申な、八匁五分と忰申は僞り五匁でござります、南無あみだ佛といはるゝゆゑに、藤兵衛腹をたて、商人はそらねをいうて利をとらずして、何を以て今日を送る物ぞ、商の邪魔をなさるゝとしかれば、扨も凡夫かはいや、利欲の爲に僞りかざるは、佛も無間の業といましめ給ふ、あさましいかなゝげかしいかな、利を貪て地獄の種を拵る。汝貪欲の心ふかく、商はかりに精を出して、ありがたい經說をしらぬゆゑとはいひながら、一字を學ばずとも、其一心まことなるときは是佛体なり。調達が六万藏の經を誦せしも、奈落をまぬかれず、慈童が一念の悲願を發して、都卒にむまれたりとあれば、學德あらずしても、心さへまことなれば佛になる事は疑なし。たゞねがふべきは後世の一大事、觀念をこらして商ひをする共、みぢんうそをつかず、一錢にても利を取事なかれと、貧僧

を見ては、きのふ折角洗濯してきせた、布子をぬいでとらせ、けふも佛へ御奉公申たと悦び、むすこが心あてにしておく、金銀を取出しては、寺かたへ持行、こちの旦那寺でもある事か、行へもしれぬ田舍からわせた、見せ出しの開帳の奉加に打こみ、悴が精出しまうけためておく錢銀を、いつの間にやら取て出て、佛の事に皆仕果らるゝ故に、どうも是では身体がつゞかぬと異見をすれば、汝ら財寶をしんで、三寶にほどこす事をとゞむるは、是慳貪愚癡とて、佛中間にきらはせらるゝ事也。西天の貧女は、夫婦の中に一衣ならでなき衣裳をぬいで、その身は丸裸に成て、僧にほどこせし功德によつて、釋尊世にましますとき、舍衛國の大長者と、夫婦共に生れしと、賢愚經に出たり。身どもが今金銀を寺道場へなげうつは、未來でわいらを大福長者にしてやらうためなり。がさねてをしむ心はなはだしくならば、是我罪業のいまだふかきゆゑとおもうて、ずゐぶん有たけの物を出して、三寶にほどこせとて、毎日錢銀米を持出蒔ちらさるゝによつて、今晩よりむすこと談合をして、座敷籠へ入て寺參せられぬやうにいたす筈との咄に、皆々我を折、是は佛の道をねがひ過られて、妻子の難義と、妙覺おやこは此元西の次第を聞て、こちのおやぢが殺生の方がましと、よろこばれしはことわりぞかし

二之卷終

浮世親仁形氣

付リ 古今の手練色染の手管

揚屋は秘密遣破

三之巻 目録

第一 愚を楽しむ子自慢の親父

人の子は器用な事

胸を鎚で銖の曲

中直しの盃は

のみの好方は親の底

あいそげかいと町家よ

調子に着れ小袖

第二 碁打を楽しむ仙人親父

時には無茶奉行無名な

むかしは判者異員

身代よりは損徳は瞠い

憶の中へ喜れ寝所

一番のがりつめて

氣をおさ梅の骨

第三 酒を楽しむ賢人親父

智恵有智は世の中の人を

一番にとる盃

浮ちく杯に来りて盃

口提三味線

女房は煮の坊いよの味な

うつて出る郎かるいが

㈠ 踊を楽む子自慢の親父

繁昌の難波津や、入江も次第に埋れて、水串も見えずなりにき。水鳥は陸にまどひ、蜆とる濱も摘菜の畠とは成ぬ。むかし棹さして舟ならではゆかれぬ所も、瓦葺の軒高く、白壁づくりの家建つゞき、色めきたる町も見えわたりて、ながれを立るも、いにしへ川にてありし縁によれるにや、今に粋をはめる商賣の地とは成ける。抑新地始れる地ならしの時、三間口の家をたてゝ、荒物見せを出して、次第に金をまうけため、萬屋の徳左衛門とて、所にても古き人とてもてはやされ、少殘れる髪さへ黒き筋なく、年もはや家に杖つきの、のの字をだにしらず、一生文盲にてくらせど、金銀といふ諸藝をせず、調寶な物を持しゆゑに、此親父が詞を用て、町にても口を利て通りしが、本卦がへりにはじめて男子をまうけ、世にないものを我ひとり持たる心地して、寵愛ふかく我儘にそだてゝ、十三歳に成ける。ある時町衆二日寄會に、借屋中の判をとりて仕舞、組頭の立花やの淨閑隠居して、悴十助に向後町義をつとめさする、披露目の祝儀に、樽肴を出され、さいはひにかるい夜食を拵へ、能加減に酒のみ、座中打くつろいで世間咄をせられし中に、亭主分の淨閑、少酒も廻りて心よいきげんにまかせ、悴十助が自慢咄し、あいつはかつかう大躰にござれども、當年うそなしに十一に成ますれ共、おとな役をいたし、帳合算用萬事引うけいたすゆゑに、我等は表の事を構ひ申さず、參り下向にかゝつて居るが、見事見世商も仕り、その透には御宿老殿の裏座敷を借てゐらるゝ、兒醫者の得庵老方へ參り、四書を讀習ひ、論語孟子を中でやりますを、此中も齋に參られた旦那寺の宿坊聞れて、肝をつぶされ、今文殊とほめられました。是から文選とやらいふ物をよむ程に、灸するゐた賃に六臣註を買てくれよとねだりますると、涎をながして申さるれば、いづれも今宵の馳走にめでゝ、ひとりもひとりからと發明なる生れつき、子寶と申は御子息十助殿事、淨閑老にはあやかり物と、座なりの挨拶を、ねてゐたる徳左衛門聞よりむつとし、むく〳〵と起なほり、是淨閑老、いかに心安い出合なればとて、親の口から我子をほめるはたはけの内也。いうても爰は町の會所、人もなげ成むすこ自慢、此徳左衛門が悴の徳三郎程な、器用な子をもたれたらば、どのやうな人

中で自慢めされうもしれず。そちの子が物よみすれば、こちの子はならはずに鐵輪の手づま、まくらがへしの秘曲、それは〳〵はなれ切たるせんさく、荒神拂にわせる無學院といふ山伏が、此比も來て德三が鐵輪の手品を見て、あの子は飯綱つかひではござらぬかと、錫杖捨て横手をうたれぬ。此間も道頓堀の小見世物する中間から、三十日を銀五百目でやとはかしてくれと、御池通の池田やのおやぢを頼んで、度々申來れど、一〆匁ならば談合もせうというてやりしが、今年十三ではや壹〆匁ちかい銀になる悴、おそらくひろい大坂にはござるまい。自慢はいたさぬが、正眞の子寶と申は悴が事と、鼻脂をおしのごひていはるゝを、淨閑聞かね、是々德左どの子を芝居ものにして、銀をまうける分別は、今日を過かぬるものゝ、せう事なさの思案也。町内にても銀持とゆびさゝるゝ身体をして、德三郎が惡遊びの枕がへし鐵輪の曲で、銀をとらうとの心がけ、去とはあさましい所存。こりや十助あれをかまへてよい事とおもふな、町人は讀書十露盤に達し、親から仕にせの商賣をゆだんなくつとめ、金銀をまうけ溜るを人の中の人といふぞ、かならず德左むすこの德三郎を見習ふな、我年ばへで我程に手を書、物をよむ子共も、此津にては稀なぞ、精出して自慢せいと、左扇子をつかへば、德左衛門腹を立、身共が悴を見習ふな



とは、大事の子に疵を付るいひぶん、物よみならはせて末々では人だちの所へ出し、太平記の講釋さする思案であらうが、一文二文の編笠錢ははかどらぬ物ぞと笑へば、淨閑腹にすゑかね、身が秘藏の子を太平記よみの物もらひにするかと、してゐたる木枕取てなげ付れば、德左衞門もきせるおつとり、淨閑が法躰あたまをみしらし、後はよい年をして兩方つかみあふを、町衆中へおし入て是は一興としづめらるれ共、たがひに片意地のはつたるおやぢども、中々聞ぬと角めだつを、年寄制して漸になだめ、又改て盃を出し、双方の子共もよびよせ、町内の事なれば、たがひに子孫まで念比になされねばならぬ間、向後魚と水とのごとく中能いたさるべしと、德左淨閑中なほしの盃事、めでたう十助肴に小諷うたへと、淨閑指圖すれば、悴畏て四海浪を獨吟にうたひをさむれば、年寄きげんよく、どうでも十助は器用な、第一聲がようてとほめられければ、德左衞門せいて來て、德三郎十助に負な肴に鎗をどりして、町中の目をおどろかせと、みづから臺所にかけてある棧櫚帚取て來て、我子にかたげさせ尻もつまげてとらし、ずゐぶんあぢをやつて親の名まであげてくれよと、ふらして出し、おやぢは扇拍子取て、歯のない口をうごかし、しほからい聲をはりあげ、長い刀をさしたはおさきと、地をつけてうたひ出すこそをか



しけれ。むすこは愛を大事とかたひちいからしをどりけるを、心ある町衆は笑止がりて、側からさへ汗をかゝるゝに、親仁は餘念のない顔にて、まひとつかへしてふれさつさと、しらがあたま打振て、子故の闇にねもせでまようたヤツサ

㈡ 飛行を樂む仙人親父

攝泉の堺は、千代の松原萬歳の浦浪しづかに、人の住なしも表向よりは内證奥ぶかにして、京に増れる樂人あり。物毎内端にかまへ、身持しとやかにして、十露盤現にもわすれず、諸事こまかに、見かけ奇麗に萬の義理をたて、随分花車に世智がしこく、始末を第一にして身の養生よく、澤山成饂を喰ず、大酒を好まず、色遊びに錢をつかはず、男は紬嶋の綿入羽織一つ、卅年も洗濯せず、襟垢つけず、そでぶくりんも紅皮にして、編笠も破れを内より厚紙の反古にてつゞくり、幾夏か是をかづきて、灰よせの時もあたらしきをきる事にあらず。女も又よめいり着物そのまま娘にゆづり、孫子迄もつたへて折目も違はず、費をわきまへ、鼻紙も二枚かさねて、幾度も火にあぶり、重さ百目に成迄は、紙屑籠へ入ぬほどに、萬事に氣をつけて、元日より大とし迄を一度につもり付て、其外は一錢もあだにつかはず、諸事の物年々に拵て、備成世帯なれば、身体の事さりとは苦もなく、奢がましき遊興もなければ、不斷宿に在て物の本見て、心をなぐさむる人多き中に、藤井元德といへる有德人の親父、つねに列仙傳を見て、仙人の身持は第一世帯に物がいらず、好色をはなれ、美食をくらはず、世路に氣をつひやさず、松の葉などの麁食を喰、正月ぎる物も木のはのつゞれにてすまし、髭月代もそらざれば、髪結賃を出さず、行たい所へ物のいらぬ雲に乘て飛行する事自由なれば、仙術を行うてたのしみにせんと、興風思ひこまれしを、手代のうちに目のさやのぬけたるゆだんのならぬ男が聞つけ、さいはひの事と罷出て申けるは、旦那には兼ゝ仙術を學ばんとおぼしめしたつよし、はゞかりながら御自身、千年万年御工夫なされたればとて、何とておひじがたし。昔も此道に心をよせて學ばれし人々、皆々深山幽谷に分入て、それ〳〵の師匠を取、又は秘書を得てよく見きはめて、仙人に成たる衆中、

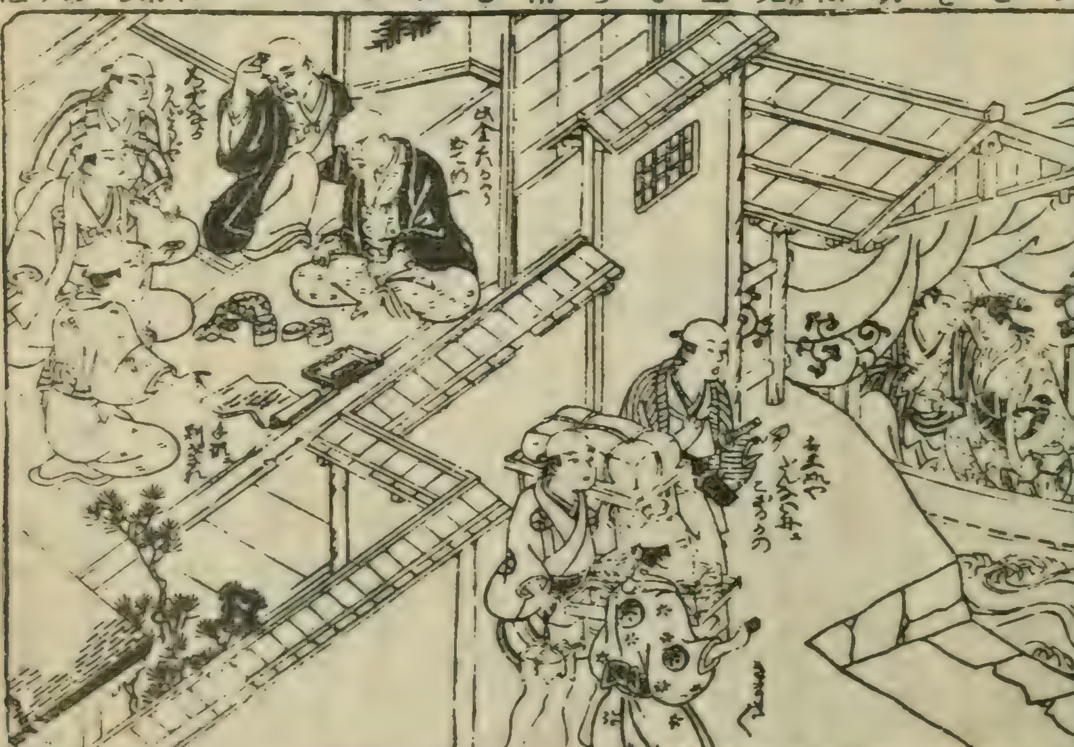
日本にも多く見えたり。役の行者久米の仙人、宇治山の喜撰法師、扨は現に私母方の伯父が、江戸の三井店にしばらく奉公いたしてをりし時分、心願有て富士禪定いたせし砌、常陸坊海尊にあひ申、判官殿の惡性咄、辨慶が女房嫌ひの噂、伊勢三郎が道中で護摩の灰に成てゐて、熊坂の長範が方へ上米はかりし、昔物語聞にあかず、しばらく足をとめて聞たる間が、我しらずに五日立たと、去年の春伯父がのぼつて咄をいたしました。その時分拙者に、仙人の手代にもならば、海尊方へ肝煎てつかはすべし、今入の新米仙人は、霞を喰事が日向くさうてくはれぬ物ぢやと、常陸坊が語られしゆゑ、私伯父が申せしは、只今は年を切て主取いたしてゐる身なれば、重ていとまをもらひ、瘦世帶でも持た時分、大晦日に借銀乞が來てせがむをり、世帶道具を腰に付、鶴に乘てこなたの方へまゐらうと約束をして、仙術の秘傳を書し一卷をもらうたよしにて、今に伯父が所持してをりますれば、旦那の御所望ぢやに、我等にさづけてくだされと申さばいやとは申されぬでござりませうと、見た樣にうまう咄せば、元德悦び、誠に學ぶ門に書來るとは是なるべし。我久しく仙術の願ひふかければ、念願とゝいてはからずも、汝さいはひ咄し出せり、かゝる大切の秘書を、たゞ披見せうと思ふ邪の心有ては、あたまから仙人の心にたがふべし、是を以てかりて來れと、百兩ををしげもなく渡しければ、手代うけとり其翌の日、伯父の所より取て參りしと、古き一卷を渡せば、元德是を見るに、いかにも仙書と見えて人間界のわざをはなれて、自在の術あきらかに載て有。それより俄に茯苓を呑、兎絲子茅根を求て朝夕の菜になして喰、髭おのづからのばし、身に唐織をまとひ、人のつきあひをやめて、我宿ながら諸木しげれる奥座敷に取こもり、專ら仙術を行ふとて、三年あまり氣をすまし、大かたは春秋の時節もわすれて、只茫然として夢のごとし。此心ざし軒ちかき雀も見馴、梢の烏もちかより、朝夕の飯をわくれば手よりすぐにはみける。扨は仙家も爰になりぬ、諸鳥我をおそれぬ事是ためしなり。いよ〱學びて異見せし悴手代共をはじめ、一門一家扨は知音ちかづきに目をさまさせんと、身上苦にならぬ身なれば、明くれ此道に氣をこめ、その心になりぬ。されば唐土の玄宗皇帝は音律の名人にて、二月の初に花の咲ぬ事を遲しと、樓臺にのぼり羯鼓を打給へ

ば、餘寒拂て梢の花開色見せけると也。又鄒燕は筆に妙を得て、六月に冬の調子を吹て、霜をふらせし事も語り傳へり。我も仙術の心見にとて、ある時身をきよめ、秋の夜の月くもりなく、堺の南北一目に見わたし、三階藏のやねへつぎ階子さして、七十にあまりて達者にもない足をつまだて、漸屋ねへあがりて、住吉の方に向ひ、觀念の眼をふさぎ、一代の大願此時也、今心ざす所は生駒山迄の飛行ぞと、両の手をさしのべて飛ければ、棒樫の枝をこすり、捨石のたゝ中に落かゝりて、そのまゝ腰をぬかし、やれ仙術が生煮にて、まだよく熟もせぬに飛で、腰骨を打をつたわ、こりや目が眩は出あへ〳〵とよばゝる聲に、家内の者共おどろき、手燭ともしつれ庭に出、是は〳〵とさわぎたち、おもやへ人を走らせ、醫者よ針立よ、へうたんの黒薬よと、隠居とおもやの大さわぎ、町内迄も家々に行燈出して元德仙人が輕わざの仕そこなひなされて、腰の骨がをれたげなと、堺中に此沙汰ひろまり、それより大坂につたへて、是はかはつたせんさくと、今に咄のたねとは成ぬ。されば此元德、若き時より俳諧をこのみて、其名ひろく手鑑にもしるして、表德號を社樂齋と申ぬれば、及ばぬ事をする者をば、しやらくさい事と、世話にいひしは此因縁ぞかし



㊂ 酒を楽む賢人親父

何事も其人によりて、風俗のかはりたるも一興あり。むかし連哥師の牡丹花は、牛の角を金銀の箔にだみて、紅井の引綱付て、心の行所へ乗廻られしも、人がらそれに備り、世の人指はさゞりき。津田休甫が紅鹿子の女小袖着て、白晝に大坂の町を通りしも、其身道者の徳あらはれ、目にかくる人もなし。此人々はその心より發らずしては、まねてならぬ事ぞかし。見ぬもろこしの親仁共、竹の林に遊んで、浮世を實に見かぎり、肴もない酒をたのしみけるとかや。和朝の難波津や、八間屋といふ所に家榮えたる伊丹やの何某、富田やの何某とて、同じ心の友二人住ける。その身世に有程の事にかしこく、しかも若い時に挊置て、今老のたのしみ、兩人共によいこゝろな子息あれば、我におとらぬ棟たかき方より嫁を取て、おもやを渡し、商賣は律儀なる伴頭の手代に後見させければ、此身体鬼に金持せたるごとく、根づよき門柱うごかぬ家と、所がらうらやみぬ。伊丹富田の兩親父は、隣町に隱居屋敷をしつらひ、二人共にいひ合せての法体、夏は殊更涼しく、川岸に竹の腰かけをなほさせて、按摩取の座頭、はやらぬやぶ醫者、儒者に成ぞこなひのなでつけ、彼是心まかせの目下成友をあつめて、いつとても七人唐



様にかまへて、あたまは中がりにして髭剃ず、朱骨の扇に風をまねき、しゆろ竹の杖つきて、居士衣の紐を高くむすび、茶瓶に面々天目を手にふれ、言葉に子細をこめて、古文めきたる顔つきして、法躰の後十年餘りもくらされしが、世の人此心ざしを耻て、しばゐ遊興の咄さへふかく遠慮して、是ぞ和朝の七賢組とて、物がたく見えしに、ちくら儒者が申は、我々が事日の本の七賢人としらぬものなく名をとりしが、晋の七人親仁どもは、酒を友として不斷たのしみしに、伊丹富田の二先生は天性の下戸、是唐土の七賢と相違せり。とても七賢人をうつさるゝからは、向後餅菓子をやめられ、酒をまゐり習て樂となしたまへと、ひとつなる口から酒を讃たる詩を引出し、辯にまかせて申ければ、兩禪門聞込、いかにも七賢人を學ぶからは、下戸にてはすまぬ事と、先保命酒の甘きより呑初、師匠なしに次第に左あがりて、後は生酒の辛口成を好みて、中椀が茶碗と成、下地からの上戸より増に呑出し、是よりしばらくも酒なくては、精がつきるといひ出して、いつもの川岸に毛氈しかせて、素酒をたのしむ折から、川舟に紫の帽子かけたる野郎あたま乘て、詰囃子の役者まじりに、都の大臣を夜もすがら、佐太の天神迄送るよしにて、のみかけ、引かけ、しやみせん四挺でをどり哥、水主迄も顔の色入日にうつろひ、猶てりて赤き頭を振て、義太夫ぶしをうなる。此酒きげん潯陽の江の心地ぞかし。又少し跡より、小御座の幕をしぼらせ、いかにも大臣顔して北國者と見えたる奴が、眞中に座しゆんでめてには、新町のわけらしき女郎禿取廻して、伊丹やの四季延命酒、春桃花夏は菖蒲、秋は菊花冬みぞれ酒、さま〴〵呑さわぎて、あたりに人もなげにあれける。心を付てみるに、根引して行女郎を、新町の揚屋やり手末社、是迄送ると聞えける。挨拶は國もとの母親も、ながう取て今年來年の内には、極樂か地ごくへやるべし、したらば此君をおか様といはして、大黒柱にもたれかゝらして、わきから見るやうなといへば、いづれもその仕合を、此上ながらねがひ奉るといさめける。いづくも金持の威勢にて、かゝる浮世のおもしろい事にあひぬ。七賢人も餘所の亂酒につれて、手前の酒もいつよりは染、間鍋で通ふ事もとけしなく後は七りん取よせ、五升樽も大形にかたぶく月の須磨の山の端に、今少しと見しまでのみ遊びしが、詞ではどうもならぬ此風

景、世のたのしみとは是成べしといへ共、眞實心には、宵の舟遊びの色まじりの酒ほどの、半分も身に染ておもしろうないには極れり。富田やの親父つく〴〵世を觀じて、此身をかへりみれば、今迄の作り賢人のたのしみは、ひとへに氣ちがひの沙汰也。世間に金をほしがるは、宵に見しやうな榮耀をせうが爲なるに、我等金銀事かゝぬ身にて、七賢人とそやされ、名聞にしばられ子細な顔して、をかしからぬ無色の酒にくれて、此儘死なん事人間に生れたる甲斐はなしと、そろ〴〵六十の莚をやぶりかゝられし時、伊丹やの法師がほつといきをついで、今もしれぬは人の身、月雪花は假令のたのしみ、哥をよみ詩を作て、我人しさいらしい顔はすれど、根をおしてからの無分別に極る所、人間の榮花此外になし。拙者は今宵悟道いたした、明日から此七賢中間をのがれて、今より思ひ切たる色遊びして、世を心のままにさわぐべしと、思ひつめたりとあれば、富田屋の禪門うなづき、我等も其通りに思案きはめてござると、たがひに此年までかためたる身を忘れ、兩法師いひ合せ俄に色狂ひの思ひ立、面面の內義達肝をつぶして、成人の子共の前も恥給へと、あたまから古格な異見、是では氣がひけて思ひのまゝなる色遊びは成まじ、とかく婦妻は戀の邪魔成ぞと、いひもあへず三十四五年添たる女房に、いとまの狀添て、皆々親里へ歸しぬ。定がたき世や、二人の內儀は白髮いたゞいて去れて歸り、又外へ緣付する年にもあらねば、すぐに尼に成て墨染の身となられぬ。諸しらが迄馴染、しかも世帯を大事にかけて、子細もなき女房を去事、道を背きし奢の初ぞかし。今迄は夢に見し事もなき新町通ひ、是六十の手習、半太夫かをる此二人を毎日の續き酒、役日も常も外へやらず、前より逢馴し男を淋しがらせける。兩法師のむすこ共、親仁が金をほつく故、何程まうけても兎も結ばぬ糸にて、針を藏に積でもたまらぬと、二人の子共申合て、町內の年寄組中へ斷、むすこが形見分として、金子千兩づゝ親仁にくれて、親でない子でないとの證文取て、二人の親仁を勘當してのけ、家を無事にかためける。前代ためしなき浮氣親仁と、笑うたもむかし〳〵

三之卷終

浮世親仁形氣

付り 娘に耳は地蔵顔
生れ恋は親の覚悟

四之巻目録

第一 薬楽しむ寿命親父
始末の寿合気骨の
知れぬ精を合
息災のさまく
明日も知れぬ命に精合
下女の小判
耳を抜て遣也
先生乃薬指

第二 始末を楽しむ遊山親父
若い時は幕をはりて
りんやう自慢の景色
傾城の内緒構へいらぬ
つらつらしよう
姿は変れど歩行振は
一生緒に鹿と古布子

第三 無法を楽しむ陽氣親父
武士の常に刀屋へ
風呂でも難義一縁
若者の争ひ好む
紙子浪人
浪人乞し施にあそぶ
角を打見て同升液

㊀ 薬を楽む壽命親父

世の中に身に應せぬねがひをするものは、却て災をまねくものなり。殊更人間限ある一命を、いづれの神に頼みをかけたればとて、それは〳〵一日も生延る物にては有まじ。人は四十より内にて世をかせぎ、五十からたのしみ、世を隙になすほど、壽命ぐすりは外になし。何ほどに御多賀大明神を祈り、はる〳〵の江州に歩をはこびても、世の業に心をくるしめ、分て借銭乞に命をせつかれては、祈りてもをがんでも、其願成就せずして、あらた成多賀大明神を、虚言つきにしてのける事ぞかし。爰に水音殘溪といふ、鹿毛頭のなでつけ醫者、常にかはりしもえぎの十徳の前を合て、きらめく金物にて胸もとをしめつけ、さながらすがたは唐と日本の堺筋に、長崎より來りしとて、玄關がまへの家をかりて、名苗字を筆ぶとに張札門柱にあらはし、壽命長遠の靈藥を調合して、いのちをしむ人人にあたへけるとて、よしあしいはずに難波中に此評判、一服にて十年づゝの延命、十服のめば百歳の壽命を保つよし、證文書ての賣買、是慥成事ぞかし。いづくも欲に目の見えぬ銀持の親仁どもあつまり、諸國の大名衆へ御用銀の借入の内談を、酒宴遊興よりは増たる、世の慰と思ひさだめて、寄會座敷もいろ近き所を去て、下寺町の客庵をかりて、毎月銀もうけの僉議にくれて、命の入日かたぶく老体共、後世の事はわすれたゝ利銀のかさなり、富貴になるを樂みけるに、一人の親仁が此壽命藥の事を聞出し、いづれも御歴歴への預け銀、十年符の斷を聞屆て、慥成證文は持ながら、七十八十に成て、今十年の皆濟迄の命心もとなし。是を飲で今四五十年も生延なば、高利にして廿年符の、あたまからなしくづしの借やうに、魂鍛の有べき事と申出せば、それは慥に藥の影にて、命をのぶるに極つたる事ならば、五匁や拾匁の銀はをしまじ。去年去お大名様から、稀成ものゝ由にて、西瓜の大きさに見増ばかりの御所柹五ついたゞき、その核を塩町の下屋敷の庭に植させ置ぬるが、昔より桃栗三年柹八年といへば、八年過なば其柹のなるを見て、彌もらひしごとくに出來なば、壹つは御門跡様へ指上、殘りは大坂のない物くはうといふ榮耀人に、壹つ三歩づゝで賣うと思ふ胸算用なれ共、命の程は始末しても私ならぬ物なれば、おぼつかな

く思ひしが、延命薬にて慥に長生する事なれば、柹に限らず新田の願ひ、又は水つきのあれ地に借やたて〻、末々繁昌の時に至て、高家賃取やうなまうけの道のもくろみに、大分益の有事なり。いざ是から其殘溪とやらいふ醫者の方へ行、まづ心見に一服づ〻買てのむまいかと談合を極て、堺筋の醫者にあうて様子を聞ば、若き衆中なれば薬料大分取に及ばず、命の根つぎに手間をとらず。津液燥いて元手のすくない老人達には、元をたすに大分の薬味入なり。おの〱かたのやうなる銀を持たる人は、何商賣に取つかれう共さのみ手間も入ず、氣骨もをれまじ、元手のないものはその取つきに隙の入事、面々けふの世渡りにてなぞらへしるべし。今十年早く仰らるれば、金壹兩づつにて調合いたし進ずれ共、元手すくなく、しかも此内に當年中にいきつく老人も見えわたれば、おぼろげにては成がたしと、氣にか〻るやうに申せば、此内に今年中に死ぬる老人もといふにつけて、面々おれが身の上かもしらずと、闇の夜に鐵炮の音を聞ごとく、どれにあたらうぞとたがひに顔を見合せ、むしやうにきづかひに成て、少々高き分はくるしからずと申せば、一服金十兩づ〻と申出す。いづれも肝をつぶすを、さのみおどろき給ふな、六十目小判にして六百目、十年の日數凡三千六百日を、小割にして一日いくらに當ぞ算用をして見給へ、一日の命壹分七リン五毛づ〻にあたれり。おの〱の家の紙屑の錢にて、一万兩にもかへられぬ一日の命をのぶる事、いやならば御勝手次第、此方から外の賣物のやうに强はいたさぬ。病ひの床について、俄に命がたすかりたいとて、一度に五百目一〆匁の獨參湯を飲で、苦痛して死で仕舞無分別者世に多し。只今も申ごとく、此内に一人は追付たふとい所へござる人あり、かならず其時命がをしいとて、私などを當になされて呼になどくだされな、其時節に成ては、薬師如來が御來臨あつても叶はぬ。さあ身代の尾が見えては、銀がかりたうても借手がないと同じ事にて、冥途へ片足ふん込だ人は、どうも拙者が療治にも及ばぬ、用心は無事成内なれば、いづれもの無分別次第といふ時、勝手から人手代と見えたるわかきものが、下袴を着しまかり出、今朝も伺候仕りました、北濱の熊本やの手代でござります。今朝ほど申置て歸りました通り、當春旦那こなたへ御薬申請に參られました時分、當年中には死病ひに取つかるべし

と、未然に仰聞されしを疑れ、御藥代高直成とて、ぶ調法を申て歸られし所に、御見たての通り、今月始つかたから重病を受られ、大坂中の名醫達、六七人に替申せども、更にしるしなく次第に重りて、今は臨終を待斗の仕合、妻子一家の氣づかひがり御察しくださるべし、然る所に病人おもき枕をあげられ、日外殘溪さまの仰られし事をうたがひ、一服十兩の藥料ををしみ、今死とむないに冥途へおもむく事、去とは殘念千万、いひ出すも面目ない事ながら、私に參り御侘言を申て、せめて二三年命ののばはりますやうな御藥があらば、百兩貳百兩でも藥代の高き分はかまひませぬ、今此節の命のをしさ、金銀にはかへられぬと申て、血の泪をながして申付られました。以前のぶ調法を御免くだされ、十年のびませぬ事ならば、一兩年にてものがれますやうに、延命の御藥を御意にかけられくださりませと、手をついて餘儀なく申せば、殘溪聞て、藥代はほしけれ共、もはやさう煩ひつかれては、どうも拙者が手には及ぬ、近比殘念の至り。われら當春申たる時、十兩出して一服まゐれば、十年が間は風をひとつひかるゝ事ではないに、何をいうても歸らぬ事、此方へ叶はぬ事をねがひにござらうより、寺へ人をつかはされ、こなたの御主人の御身体も、千貫目と取沙汰いたせば、それにちがひはござるまいが、わづか十兩でをしいと思召家財を捨、いとしいとおもはるゝ妻子を置て、冥途の初旅さぞくらうにござらうといへば、藥買に來りしおやぢ共むねにこたへて、扨當年中に死さうなと仰られます者は、此内ではどれでござりますぞ、ちよつと仰聞られてくださりませと、勢のよい親仁共ぐんなりと成て申せば、命よりは金を大事に思召おの〳〵には比興なおたづね、亥の子の餅はくはぬと覺悟なされて、當月來月の中に書置でもなされ、跡に公事みやのないやうにしておかるゝが肝要といへば、すゐぶんしわいおやぢ共が、此仕かけにあうて、しかも新金十兩づゝ出してつくばひ、禮までいうてさてもいのちはをしきものかは

㊁ 娘を樂む遊山親父

商人の心は、ひろき武藏野の生れ、十一にして親の手をはなれ、傳馬町の綿商賣する人のもとへ、丸年十年切て奉公に出しより、主人の爲になりて、年は明ぬれ共此家にをしまれ、又十年の

年をかさね、卅三にてはじめて宿ばいり、親かたより望姓として銀貳〆匁もらひ、家業にゆだんなく晝夜挊出して、六十に及て大分の身躰と成、通り町に大屋敷を求め、今老樂に節季のねざめも氣づかひなしに、明ゆく春をいはひぬ。殊更ひとりのむすめ美形にして、おつやと名付て夫婦の寵愛、ことわり成かな鳶が鷹とは此娘、二親の不器量にはみぢん似たる所もなく、其うつくしさは吾妻そだちには稀なる生れつき、わけてよい世に生れあはせて、腰もとつかひはした迄大勢つきそひ、歴々がたの息女にかはらず、ゆたかなるそだちなり。母の親の才覺にて、京より御所方の作法心得たる女の、諸禮者をよびくだして、おつや十一歳の比より是を付置、萬事都をうつしける、物ごし迄やさしく、かりにも訛らず、風俗花車に見し人思ひの種とは成ぬ。嬰兒あげまきの程過て、當流のなげ嶋田、女は髪かしらといひ傳へしごとく、此娘十五の秋の盛をみては、中々角田川の月も及ばぬ、ひかりわたる艶顔、おつやとはよくもつけしぞ。わたやの角兵衛が四角四面な顔して、あんな娘はどうしてまうけしぞ、親に似ぬ子は鬼子といへど、是は鬼の子に天人なるべしと、江戸中にて名をしられたる、有德人の嫁にほしきと、時分とて母の親の返答に迷惑せらる丶ほど、仲人を以ていひ入ければ、申來りし中にてすぐれし身代宜しき先々を、



十六間書付、親角兵衛におつや縁付の事、此内いづれへやらるべきぞと内談有しに、角兵衛かぶりを振て、我娘ながら今の世の美人といふはおつやが事也。それを外へつかはし、荒男の慰ものにさすべきいはれなし、いつ迄も大事にして内におかれよといへば、しからば手前へ養子聟をとりて、此跡をゆづる合點かと、母親かさねて尋らるれば、美人に大分の家財を添て、何聟にやる物ぞ、跡めは仙臺に居る甥の、杢三郎を呼よせてする合點なれ共、おつやを女房などには、もつたいない事、持する事にはあらず。さあ又あんな娘を、まひとり産で見ようとおもやつても成まじ、世界にない物を、人手に渡さうとは心のない事をいふ人ぢやと、中々縁付の相談には取のらず、たゞ外へつかはす事を惜み、ずゐぶん姿をかざらせ、世にはやるといふ程のもやう衣裳を、一番にとゝのへ是を着せて、品をやらせけふは上野の花見につれて出、明日は淺草の觀音へ伴ひ参り、下向の浮氣男共にこれはと肝をつぶさせ、立とまりてうつゝをぬかし、扨もよい娘と魂を失ひ、うか〳〵ついて來るを世になきたのしみに思ひ、少も人立のある所へは、風俗を作らせ年中つれて歩行、人にひけらかす事を悦びて、十六七八の盛過ぬれ共、いかな〳〵縁に付る合點にあらず。堺町木挽町のしばゐを見せては、京くだりの女形の風俗のよいを見ては、



あの如くにすがたをうつせと、毎日座敷をよい物着せて、あるかせてみて、今少腰をひねりて、足どりこせらず大様にあゆみて見よと、野郎やの親かたが、新部子に女形の風を敎るごとく、萬事を捨て娘の所躰を指南し、菱川がすがた繪を買てあてがひ、おのが娘を賣物のごとく、身嗜にかゝらせ、縫物綿つむなどいふ、女の藝はみぢんもならはせずして、上つかたの御息女の御慰になさるゝ、花車事の藝に師匠を取てならはせければ、哥の道もおぼえ、手もつたなからず書て、聞傳に短尺に哥を書てもらひたいと、所望に來れば、親仁悦び、ずゐぶん結構に拵たる色紙に、哥を書せ、こちの娘は器量斗でござらぬ、手跡も是程には見しらしますと、後は寺社の繪馬に、むすめが細工にせし衣裳繪に哥をかゝせ、通り町綿や角兵衛實子の娘つや筆とあらはし、世間の人のおめにかけ奉る御寶前、參詣の男共是を見て、いよ／＼戀忍ぶものおほかりき。內義をはじめ一家の人々異見をして、いまだ振袖の中にいづかたへ成共緣に付らるべしと、しきりにいへ共承引せず、世界に我娘のやうな美人に、かけあふむこがなし、あたら美女に男持せて、所帶嶋にする事、いかにしても惜しと、たがいうても聞入ず、只あけくれつれて出て、人の見かへすを、金銀まうけるよりは滿足がりて、次第に娘自慢つのり、若い時からゆかぬ三野に行て、今の花紫が道中を見て歸り、小袖も太夫が着るやうな仕立にしたしとて、廓へ出入するお針をやとひ、腰に綿入ず、すそひろがりに裏をふかせ、しんなしの大幅帶をしどけなくつゐむすばせ、緋ぢりめんの下紐みゆるやうにありかせ、三つがさねの衣裳ひとつ前に小づまをとらせ、素足にろくろ繩ほどな、ふたつなひの鼻緖の太夫雪駄をはかし、八文字の足どりを敎へさせて、祭のねり物のごとくさきにたてゝあゆませ、親父跡から編笠にてついてまはり、歷々人が立とまりて、あれは上がたの傾城か、三野では目なれぬ女郎、何にもせようつくしいものぢやとながめ入ば、おやぢ跡より、おつやにしづかにゆけ、爺が追付かねるといへと、腰もと共を呼かへしていひ付るは、我等娘といふ事を見る人にしらすべき僣上、扨行先の寺社にて、毛氈敷せ幕もはらずに、わざと諸參詣に見せるやうにかまへ、花なき時にも古哥など短尺にかゝせて、木の枝にかけさし、色も香もある娘ぞと、人にこのもしがらする一ぱいのたのし

み、酒の上にて琴三味線一節切までふかせて、尺八ほどな涎をながして、親仁自慢に眼も見えず、後世も渡世もわすれ果て、娘をつれてひけらかす事を、又もなきたのしみにして、つひに身体棒にふつて、通町の屋敷をはらひ、後は芝の神明あたりに、わづか成小家を借、娘は卅二になれども、そのまゝ白歯に細眉、脇さへつめさせずして、二文が糊かひにやるにも、跡からついて行、むかしのごとく人が見るかと氣を付しに、其時とは立とまる人の見やうがちがひて、夜鷹にしてはつまはづれが尋常な、品川邊のおちやれ〳〵かと、遊女よりは一段おろして見る事はしらずして、布子着せても美人には人が目を附る、くさつても鯛とはよういうた物ぢやと、此身に成てもひとつゐうて二つめには、こちの娘々と娘自慢で、身代仕舞したる親父は、ひろいお江戸にも是がはじめと、かたりつたへて笑ひ物に成てはてけり

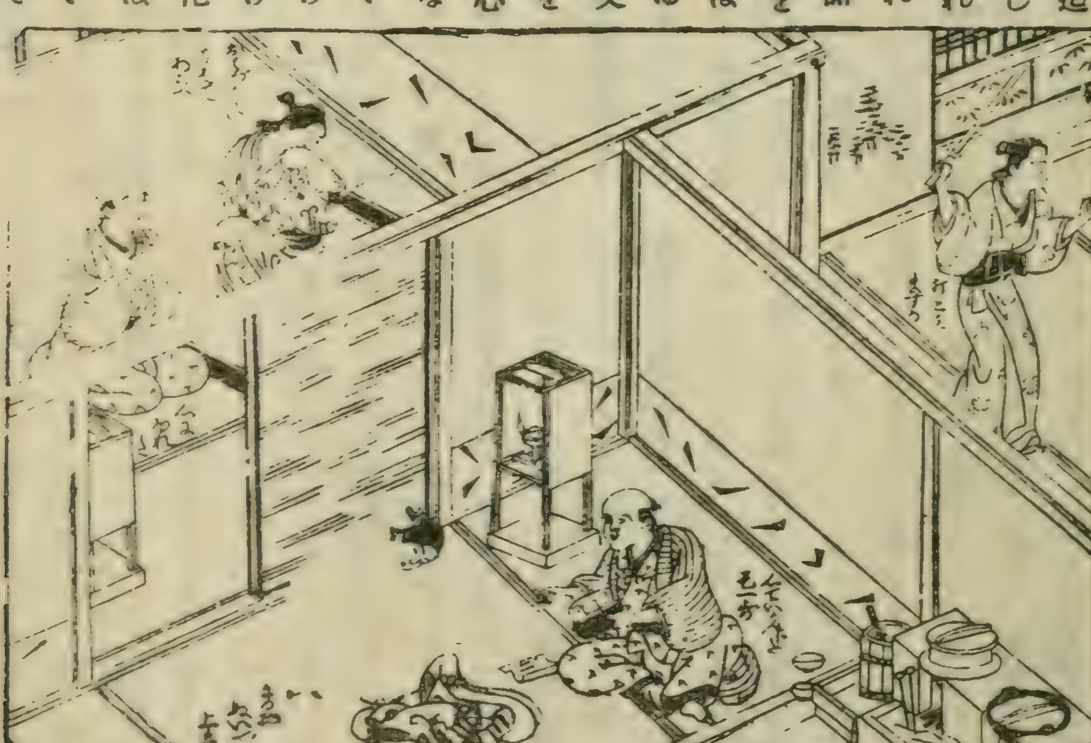
㊂ 兵法を樂む陽氣親父

親の代から武家方へ出入て、まうけ溜たる白かね町の、刀屋治五右衛門とて、富貴にして子共三人持ける。いづれも利發者にて、渡世にゆだんなく精を出しけるに、親父治五衛門幼少より御屋敷方へ出入、武家の行義を見て、男ならば武士也、さりとは商賣人といふものは表裏をもつて世をわたり、殊に平生の行義じだらくにて、人たるものゝ身持とはいはれずと、その身も腹からの町人にて有ながら、町人を疎み、惣領治五平を跡目に殘し、次男三男を足輕奉公に屋敷方へ出し、我もふ断侍行義に、一腰をはなさず、水風呂へ入にも湯殿に脇指を立かけ置て、敵持同前の行跡、行義がたうて町人の付あひたえて、商賣のためには宜しからぬ身持と、女房きのどくがりて、念比成相口の人を頼みて異見をすれどもきかず、刄物を賣て過るものが、武士をまねるが僻事か、書物やの亭主が文盲成は、兩替やの十露盤しらぬにひとし、その道にて今日を送るものが、其職に心をはめぬは本意ならぬ事と、更に聞こまねば、それは不了簡といふ物、しからば酒屋の亭主は大酒して醉狂し、けいせいやの親方は婬亂にして死べきや、刀を賣て過ればとて、その刄物のきれあぢをためさんとて、人を切て見らるゝか、町人は町人のやうに、となりありきは丸腰にても、人の笑はぬ事なれば、向後侍形氣をやめらるべ

し、下細工する職人共もそなたをおそれて、ま一度問かへしたき細工の物も、きめつけらるゝをこはがつて、そのまゝうけとり歸るゆゑに、好みとはちがうて、又仕直させたがひにつひえ成事おほきとて、むすこの治五平や、內儀などのきのどくがり尤に思へば、詞つきもなよらかに、かりそめの事にも一腰を取まはさぬ樣にいたさるべし、且は家業のためなりと、段々道理をいひ聞せど、いかな〳〵耳に入ず、木馬にて手綱の稽古をし、小砂をついて城取の形をなし、兵法居合を習ひに行、女房に品柄を持せ、やつとうとのけいこしきりなれば、むすこ治五平難儀がり、夜中思案して、朝むく起に牛込の旦那寺へ參り和尚を賴み、後世にもとづき急に法躰せらるゝやうに、御すゝめ下されといへば、和尚もつ共と同心有て、其あけの日刀屋へゆかれ、親父に對面して、けふは御近所の米屋に往生人がござつて、今臨終をすゝめて參つたが、日比達者な亭主にて、米商賣は力業が第一ぢやと、よい比なむす子のあるにおしのけて置、年寄て俵物をもちなやみ、七十に成ても力の落ぬ所を、悴共もみておけと、五斗俵の中縄つかんで、持上るとて取はづし、むねをうたれ、それが病の元と成て、胸痛と云煩ひで、三日三夜うめき死にめされた。人間も其身の年の程をかんがへて、六十過なば萬事子にわたし、法躰をして後の世をいのる



心がけが肝要でござる。米やの親父も達者をたのみにして、ふ断力業のみにて、佛共法ともしらずに死なれ、臨終の時もむしやうに空をつかまれしが、笑止や地ごくへ參られう。人事ではござらぬ、若いとてもたのみない浮世に、殊更年寄て名聞斗にさま〴〵の事をなして、一大事の臨終に空をつかまぬやうになされ。こなたももはや六十七なれば、高がしれてある、萬の事を御子息にまかせて、ちと談義參りでもなされ、わづかにある白髮を結せらるゝも、何とやら浮世に心が殘るやうで見ぐるしう見えます。よい法躰時分ぢや、皆死で行ますぞや、かまへて遠い事と思召なと、しみ〴〵と敎化せられければ、親父聞て、むすこの治五平に向ひ、今和尙さまの御物語をきいたか、日比身どもが兵法稽古を、町人のいらぬ事とわいらをはじめ、女房共迄無分別ものゝやうに云しが、其米やの親父が、われら程に兵法の心がけあれば、五斗俵を取はづした時さそくをきかし、うけ身を以てむねへこたゆる程にはあてぬ事也。兵法しらぬゆゑに、俵と打死したる親父は、よいたはけもの、是を思へば汝等も向後兵法を心懸よ、米やの亭主がやうなもろい死はせぬ事ぞと、いよ〳〵一腰を大事にかけて、立居にも兵法の心がけを第一にして、和尙の敎化もむになりて、法躰の事はおいて、白髮が見ぐるしいと、和尙のいはれたと、そ



れより鬢髭を墨に染、侍行義をやめざれば、此後は異見する人もなくて、其年も暮になりて、むすこかけ共を集めけるに、跡月貢たる本郷の浪人者が、刀脇指の拵代三百六十五匁、今に留守とて一文も渡さぬゆゑ、家來を度々つかはせ共、ふ埒成返事治五平聞かね、自身行てせつぱし、銀代成共取てこんとかけて行しが、程なく立歸、かさねて浪人へかけ商は無用にせん、何をいうてもなうれんにもたれかゝるやうな。春に成てせめて百目内上ゲすればよいがといふを、親仁聞より表へかけ出、なまぬるい悴がいひぶん、武士の浪人におぢて此商賣がなるものか、首をおさへてなりとも、取てうせぬは臆病からなり。若い奴等につよい所を見すべし、その浪人が拵代を取てかへらずば、ふたゝびむすこ共に面をあはすまじと、渡邊の綱が羅生門へ行たる時も、あれ程にはあるまじきと思ふほど成いきほひ、日比腰をはなさぬ鮫鞘の大脇指、白髪あたまに天巻して、裾引つまげ飛出るを、內儀すがつて怪我でもあつては、外聞共に宜しからずと、さま〳〵とゞむる袖をふり切、本郷の浪人方にかけゆき內へはいれば、浪人は留守にて、女房か娘かはしらず、廿四五なるよい器量な女が、さらにさわぐけしきもなく、刀やさまか扨々わづかな事に度々遠い所をあゆませまして、めいわくに存じます。兄様も一門衆の取持にて、來春は古主へ歸參いたされます筈にて、昨今はその相談に、一家衆へ參られ、留守でござります。正月には相違なうすまされませう程に、御ふ祥ながら今少シの間お待なされてくださりませと、しとやかにことわりいへば、おやち眼に角をたて、有つかれてから代銀取うといふ約束はいたさぬ、留守ならば釜でもぬいてかへる、出世ものぞんでござる浪人衆ならば、町人に鍋釜ぬかれたとあつては、御一分が立ますまい。外の代とはちがひ、お侍の魂を拵てしんせた刀脇指の餝代、しばらくも待ませうと申了簡はいたさぬと、言葉をあらせば、此女きのどくがり、となりあたりへ聞えては、兄様の御一分もすたります。御了簡がなくば、此著物を其代に取ッて下さりませ、仕立てからきのふけふ、二日ならでは肌につけず。是で御ふそくならば帶も添てしんぜませうと、ぐる〳〵ととひてなげ出し、指あたつて銀子もなければ、是にて御堪忍と涙ぐみて、丸はだかに成て紅井の二布斗に成し、其身のうるはしさ、しろ〳〵と肥もせず痩もせず、

炙の跡さへなくて脂ぎつたる有樣を見て、白髪金時からつり取やうな親父も、じた／＼とふるひ出して、そもやそも是が取て歸らるゝ物か、風がな引うと思うてと、かのきる物を取てきせしなに、思ひの外老をうかして、尻をちよつとつめり、御浪人とあれば諸事御ふ自由にござらう、是で正月の拵なされと、前巾著から壹歩二つ出して、是には限ますまいと女に渡して立歸り、是よりなづみ出して、兵法けいこに行よしにて宿は立出、此らうにんかたの仕かけものにはまつて、刀屋の燒がむねへ廻、七十古來稀なる好色に身を持ぞこなひ、侍行義も綿のやうに成て、今はむすこにしかられても、まじ／＼して聞てゐる心になりぬ。とかく人の心は、棺桶へ入ル迄は定がたき浮世／＼

四之卷終

浮世親仁形気

終り幸ひの始末に

苦みに嘻て楽なの世盛

五之巻目録

第一 独楽む偏屈親父

一門はうるさい短端よ

ゆる君妻の時宜

手代が倒した身代へ

小恕い三男れ分散

身代いんでき桃析

むら気てゐるくの語掛

第二 傾を楽しむ律儀親父

宗旨より茶の湯で座頭

拝み付けてみる頭目

取りも直さず評判押付て

頂いす八軸の好典

三千両より五百両わ損来迎

待てゐる仏当

第三 世を楽しむ果報親父

氏子みて玉のこしに

来て来る仕合者

月庭守るの茶筅酒

一ッ代よ儀兵衛

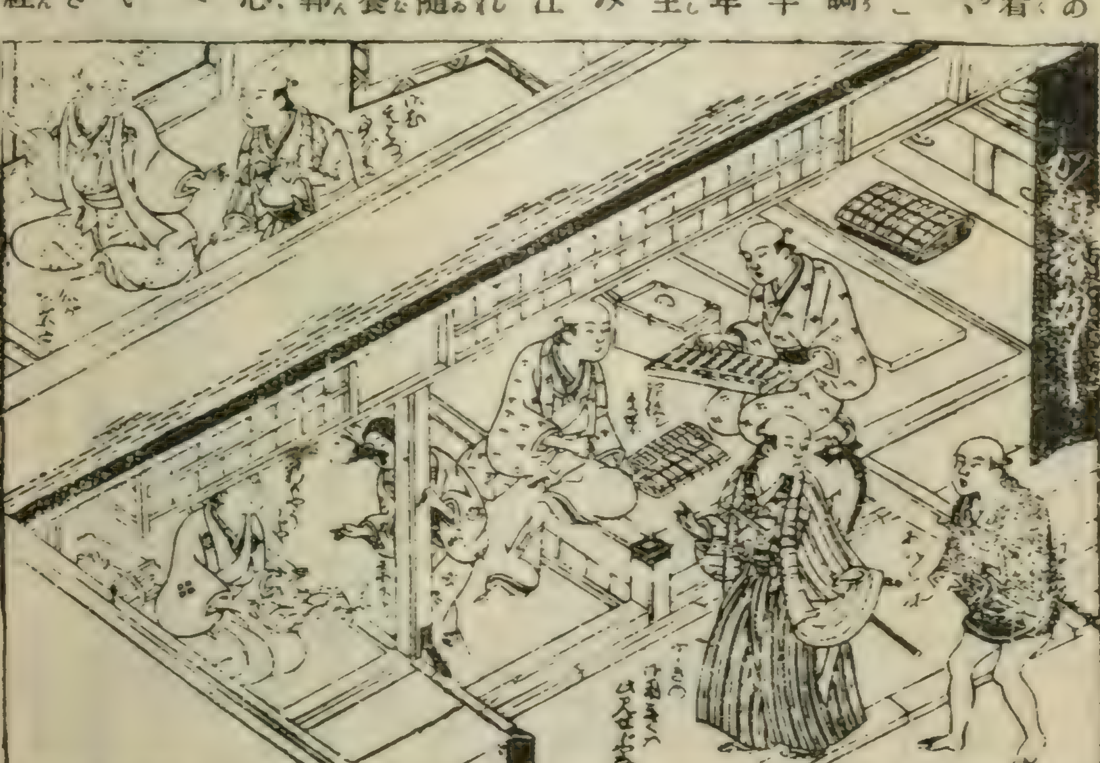
八十八の米ちけならさる

知行れ新米

一　獨樂む偏屈親父

人の行衛と、水のながれはしれぬ物也。王城を去て津輕に世帯して、妻子をはごくむものもあれば、奥丹波の猿と跡をさしてねた山家ものが、花の都の室町に家を求めて、壺の口切とて人を招き、しをらしき手前にて、茶を立てたのしむ人も有ける。爰に難波の本町に、古手やの太郎右衛門とて、貳百貫目あまりの身上とは、人の指さすにちがひもなく、ゆたか成くらし、兄弟二人の男子成人して、惣領太郎助は智恵才覺成替りに、色の道に目が見えず、晝夜新町がよひに、おやの身代半分明て、舊離きられて此家を追出され、諸親類へもよせ付られぬやうに、親父からきびしきいひ渡し、立寄影もなくて、惡性友達中間へ奉加帳を廻し、金子貳兩二分の合力を得て、これを腰に引つけ、終に見もせぬ江戸へ下り、親の手前に有し時、古手を賣し本町の絹やの手代をたづねて、身のぶ首尾を打あけ、御當地に何奉公して成共、足をとめたきとねがへば、此手代一とせ大坂へ行て、古手を買し節、太郎助案内にて、新町の夜見世を二三度見て、少しもめられたる恩もあれば、心やすくうけ込、つとめゐる主人に、太郎助親の身上向をかたり、當分のこらしめと存ずれば、勘氣ゆるさるゝまで奉公人分にめし置れて、去とは役に立生れつき、種姓よければ、他人の金銀など取て走るやうな者にはあらずと、取つくらうて申せば、さいはひ手代共も一兩人さはり有て濵を出し、人もない時なれば、汝さへのみ込だらば、先五年の年を切て、只今より召抱へと、早速に埒明此家につとめて、奉公にゆだんなく、古參の手代共よりは、旦那に大分金銀まうけてあてがへば、主人悦び、太郎助といふ名はいはずして、白鼠〲とよばれ、十年無事につとめしゆゑ、親方近所に店をかりてあてがひ、望姓貳百兩とらせ、同じ絹布やをさせられしに、年五年立ぬ中に、貳百貫目といふ銀をのばし、手代四五人つかひて、次第に家さかえける。旦那死なれてから忌日〲に主人の家に行、持佛堂に一禮して、年忌〲の弔にも、主人淨土宗なれば念佛の中で題目もとなへてゐられずと、代々の法花宗なれ共、先のちの世をたすけ給ふ日蓮上人よりは、今日かやうの有德の身となるも、皆是旦那上人のお影なれば、親方の宗旨に改宗して、主人の法義に成が道と、主人の寺

を旦那寺にたのみ、念佛申て朝暮親方の位牌を拜みける。段々仕合能て、本町の店を居成に買取、萬心のまゝになつて、大坂の親に勘當のねがひを、手代を以てなげきつかはせしに、親太郎右衛門は次男太郎八に跡をゆづりしに、兄とはちがひ色狂ひはみぢんせざれども、その替りに智惠うとく、商賣に無精にして、手代共にぬすまれてはたし、二三年の間にばた／＼と身代つぶれ、太郎八も是を氣にして相果、おや太郎右衛門一人、松や町通にわづか成裏借やかりて、片目のない小女童ひとりつかうて、かなしいくらしの所へ、勘當ねがひ申來れば、太郎右衛門はひとへに、七世の孫から便宜せし心地にて、勘氣ゆるすの、ゆるさぬのといふ所にはあらず、あつぱれ手から者也。然らば爰を仕舞て、太郎助が方へ行たいが、いかゞせんと談合あれば、それは猶以旦那祝着いたすべしと、早速に旅立、身代のちひさうなつたもこんな火急な思ひ立には調寳、疊四疊鍋釜三つ、明半櫃にやぶれ夜着一つ、壹年半の宿代の滯の方に家主へ渡して、古郷なれどもみぢん難波に心とまらず、江戸に行て太郎助に對面すれば、泪をこぼして悅び、隨分孝行をつくして安樂に養ひける。太郎右衛門は邯鄲の枕して、よい夢見たる心地にて、野でも山でも持べき物は子なりけりと、古い事をいうて悅び、うれしさのまゝに難波で立品に看經



したるまゝと、心の落着につきて後世の事を思ひ出し、朝とく起て手水をつかひ、見あかしをあげんと持佛堂を開きて、大きに肝をつぶして、ねてゐる太郎助をけうとく起して、今佛壇を開てみれば、あみだ如來がゐらるゝが、汝は何者にすゝめこまれて、代々の經宗を改宗して、無間の業と日蓮大丼のきらはせられた、念佛宗には成けるぞ。我等先祖代々法花宗にて、他宗の物さへ遠慮して、むさとは請ず來りしに、もつたいない宗旨をかゆるといふ事がある物か、早々あの佛だんを打碎き、此方の有がたい多寶如來にうつしかへ奉れと、顔色かはつて申さるれば、太郎助聞て、樣子をしらせ給はぬゆゑ、法を替たる御とがめ御尤千萬ながら、私事はすでにおまへに見かぎられ、御勘當をうけ、一門一家までよせ付ざるによつて、乞食同前になつて御當地へくだりし所に、本町の旦那ふ便をくはへてやしなはれ、大分の望姓迄を給はり、今日五千兩ちかい身上に成しは、皆もつて主の御影、その御厚恩の旦那の問弔を、親かたの宗旨でない題目ではとぶらひがたく、御恩送りに主人の法にまかり成申たれば、拙者が事は自今以後、淨土宗ぢやと思召て下さるべし。こなたの義は御恩もない主人の宗門に、改宗なされうやうなければ、佛だんは別になされて、代々ねがひ入られたる題目をとなへ給へ。佛だんの 拵 料はいか



ほども進ずべしといへば、おやぢあたまをかいて、ふ便や我主人から無間に落てゐられうが、何と旦那の妻子方へわれらをあはしてくれまいか、法花の有がたい事を申聞せて、此方の宗旨をすゝめんとあれば、太郎助親仁の堅法花を知てゐるゆゑ、木をりにならぬというては、わせてから間もなきに、親子喧嘩に成ては、家來の思はく外聞わろしと、成程そろ〳〵と御すゝめなされてくだされと、さからはず挨拶して、別に法花の持佛堂を拵てあてがひ、親の心をやぶらざる、孝心の程を聞人感じあへり。ある時太郎助二大名の御息女、御婚禮の絹布一色請取、縫箔鹿子染物類其外唐織の類ひ、京大坂へ手代共をのぼせ買あつめさするに、大分の金子入用によつて、駿河町の兩替より、小判八百兩かり請る契約して、手形したゝめ金子請取につかはすべき、手代共も諸方へ出て宿にゐず、近比御太儀ながら、おやぢ様するが町の兩替やへ、此手形を持てござつて、金八百兩請取て來て下されと證文を渡せば、おやぢのみ込、下男をつれて、兩替やへゆかれ、表の手代共に、太郎助口上をいはるれば、手代共承りて、只今旦那内用ござれば、しばらくの内御待なされて下されと、見世の次なる玄關へ通してまたせ置内に、亭主看經すると見えて、鉦の音しきりに、願以此功德申納て罷出、こなたには太郎助殿の御親父とや、以來は太郎助殿御同意に、御心安うかたり申さんと、初對面の挨拶濟で、手形請取手代共金子八百兩包たてゝ渡す時、親父兩替やの亭主に向ひ、只今待て居る内に承れば、念佛の音がいたしたが、こなたの御宗旨は淨土宗でござるか。忰太郎助と御念比とあるによつて笑止さに申、無間業因の念佛をやめられ、うかみがたい女人迄成佛いたす、題目となへ給へ、忝なくも日蓮大𦬇下化の衆生をすくひ、成佛せん事をさま〴〵に苦勞なされ、法花經をゑらび出し給ふ。此御經こそ、釋尊一代顯敎の中の經王なる事うたがひなし、されば信解品にいはくと、いそがしい中におしなほつて、經文を引てむしやうに法花宗にすゝめ入んとするを聞て、是々親父殿、それは何を仰らるゝ、御覧の通り商賣殊外いそがしく、宗門所ではござらぬ、金子請取て早早かへりて下されといへば、おろかや無間の業人、今でもゑんま王からむかひに來らば、商賣がいそがしいとてゆかずにゐられうか、一切諸佛秘藏の法、但し𦬇のためにその實事を演、我しか

も斯眞要を說とあれば、早く其念佛無間の宗旨を改め、題目をとなへて、寂光淨土に至り給へと、ふところの中より守り經のちひさき八軸を出し、亭主があたまをたゝき、今身より佛身に至る此經をよくたもつべし、南無妙法蓮華經とむりにいたゞかしてすゝめければ、亭主以ての外に腹立して、おしつけわざなおやぢがある、そちがたつとがる日蓮坊こそ、念佛をきらへり、諸宗の名僧古今念佛を信用したまふ事、諸書に顯然たり。されば法花經の所々に、以深心念佛と說給へる事をしらずや、親父、其方達は謗法邪道の癖者といふものぞ、いま〳〵しいに早々かへつて、くれられよとにが〳〵しういへば、親父大きに腹をたて、忝も上行井の御再誕なる、大事の祖師をおのれごとき大凡夫の口から、日蓮坊とはすゐさんな、ま一言いうてみよ、あたまをはりくだいてのけんと、氣色してかかれば、亭主も片意地ばつたる淨土宗の宏才者、かしかりのせんさくはわきにして、ゐだけ高に成て、じやらくさい、上行井の再誕とは慥な證文があるか、こちは兩替證文のない事は胡亂に思ふ、日蓮坊が我身を慢じて自身上行井の再來といひなば、自稱顯他は人倫の法にあらず、我慢强狂にして他宗をそしり、餘經をないがしろにいひなす、謗法の賊と取やりせん事穢はし、手形はかへす手代共向後絹やの太郎助とかしかり無用、小判表へ持てゆけと、色を變ての〻しれば、おのれがかりてくれよと賴んでも、無間の業人が金はたゞでもいやぢや、いま〳〵しいかりはせぬと、證文引取亭主をねめつけて、題目をきらふは追付分散にあふべき前表、南無妙法蓮華經とたからかにとなへて歸れば、亭主耳をふさぎ、題目で家内がけがる〻、手代共箒で掃出せといかれば、若い者共見世にあつまり、けふは法門諍ひの相場が立た、法花宗が二リンがたもよわかつたと、手を打て笑ひぬ

㈡ 經を樂む信心親父

親の心子しらずとは是なるべし、むすこの太郎助かく共しらずして、十露盤ひかへ諸所へ渡す金のつもりしてゐる所へ、傳馬町の綿やより、お金を少シかりたいと手代が來て申せば、節句前の歩を引て、先百兩渡さうといへば、貳百兩お借なされてくださりませと賴む。しからば二歩半の利で渡すべし、後程請取手形したゝめて來られよと手

代をかへし、是は何を駿河町に隙入てゐらるゝぞと、少〻は待かねあくびする時、親父ぶきげんにて立歸り、いまいましい念佛めが所へ金かりにいてのけて、一代にない宗旨の耻辱を取た、重ねてからあいつが所よりは、たゞくれうといはう共かる事は無用ぢや、あんまり日蓮大井をわるうぬかしたゆゑに腹が立て、かりずに歸た、是そなたの手形ぢやと指出せば、太郎助化轉し、今金がすりの最中に漸と斷いうて、七恩八恩にきてかる金を、からずに歸ッたとは興のさめたるせんさく、惣じて商人は手廻しひとつにて利を得るものなるに、筈にはめたる八百兩を、役にもたゝぬ宗旨せんさくでからずに歸らしやつては、どうも太郎助が身代の尾が見えて、世間の人に內かぶとを見られ大分身上の障りと成ます。人の內證は張物挑灯、たゝんだやうにつぶれた時にはこなた迄が難義ぢや、此金が參らねば、義定した所へふ埒に成て明日より商がならぬ。われらが參るはやすけれ共兩替に手を見られては、かりたい時に猶かさぬ物也。こなた太儀ながら今一度駿河町へござつて、日蓮をたとへ一れん半といふ共、虫をしなし斷いうて借てござれとあたまをかいて申せば、淨土宗にむかうて手をつかね斷をいふ事は、首足をもがるるというてもせぬ。此金が調はずして身代がつぶれたら、それこそ宗旨ゆゑの滅亡本望の至也、不自惜身命とて、法義の爲には身命を惜まぬが、此方の宗旨の掟なれば、身上つぶして成共、宗門を守り淨土の兩替から金からぬは、日蓮大井への御奉公ぢや。第一つねから他宗とかしかりするが、聞えぬと思うてゐたに、雨降て地かたまると、今からあの念佛門の兩替やと、念比がさけうとおもうて、是程滿足な事はないと、むすこはなげ首して案じてゐるに、親父はいさんでひとり悅び、酒のかんさせ手酌にて引うけのむを、太郎助見て、酒をまゐつたら是非兩替やへござつて下され。御年よられたれば、宗旨を大事に思召はことわりながら、こなたをやしなひまする私がつぶれる事ぢや、ひとへに子をすくふと思うて、何事も堪忍なされて、どうぞ金子を請取て來てくだされ。さなければ眞實明日から家業がつとまりませぬと、心には聞えぬとおもひながら、親の事なれば述懷もいはれず、うつくしうあしらうてたのむに、いかな〳〵親仁ゆく氣色にてなく、こりや今もいふ通り、親代々の宗旨の爲にたふれてしまへ。八

百両の金のたらぬくるしみよりは、高祖さまの龍の口にての御難を聞ぬか、法の爲に首の座迄になほらせられた、此有がたい御心ざしを思うては、身体分散にして、丸裸に成ても御報恩は謝しがたし。両替で金からうよりは、又もとの法花宗に改宗して、万事をすてて首題をとなへなば、たちまち空より七字の題目の、極印の打た新小判が、千両でも一万両でも、望次第にふつて來る事ぢや。身代を苦にせずと珠數を切て、ひらに親の宗旨になれと、彼懐中の守り經を出し、いたゞかしにかくれば、至孝の太郎助もむつとし、啼子も目をあけといふ事あり、家を立ての宗旨也、此金がとゝのはねば、身代をしまはねばならぬと申に、心もない題目所でござるか、無間へ落てもくるしうござらぬと、着物きかへめいわくながら両替やへ、自身ゆかんとする所を、おやぢ引とめ、高祖は一切衆生を憐みて、妙法をすゝめ給へり。我も汝が不便さにすゝむるを、無間に墮てもくるしうないといふ、その片意地に染込だ、南無あみだ佛の垢をすゝぎ、法花のありがたい宗門にすゝめこむが親の慈悲ぢや、われらが息の通ふ内は、淨土宗の両替で金はからせぬ、是非にからうと思はゞ、我を殺して其上にて借用せい、若い時から命を法花經に奉れば少シもいとはぬと、筈にはめた金をかりにやらせぬ親父の、ねちれん宗にはこまり果ける

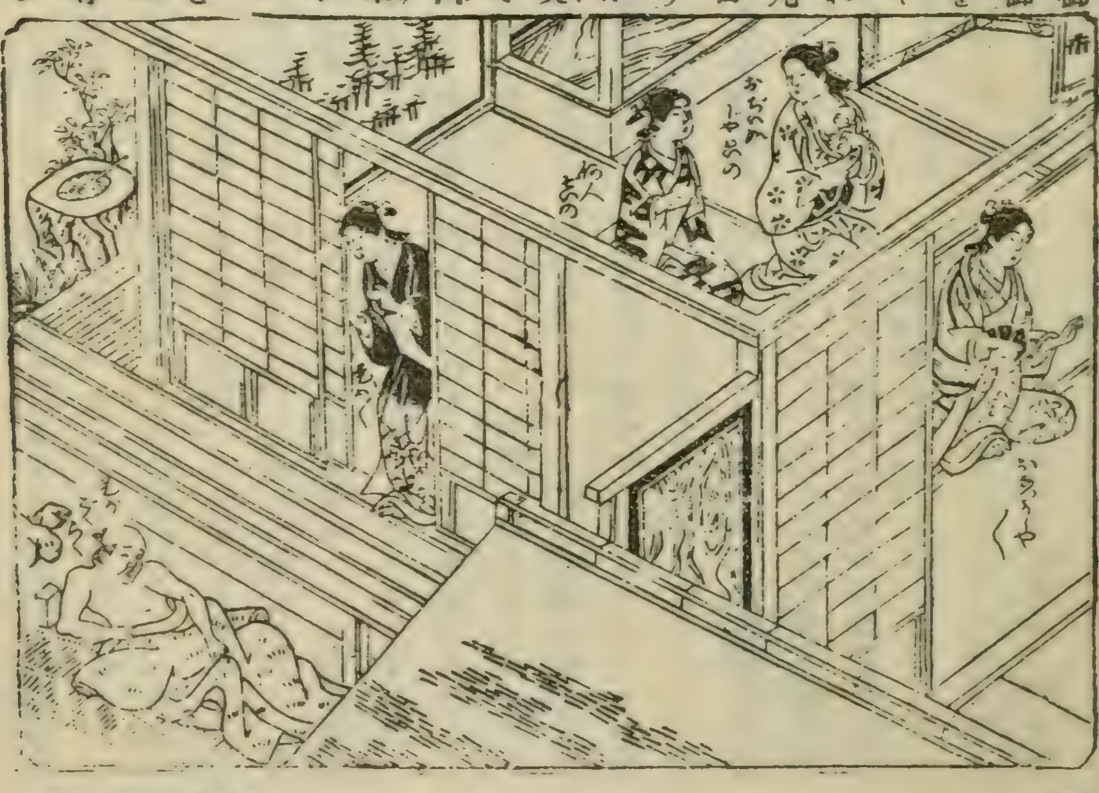
㊂ 老を樂む果報親父

惡女の娘を年子に産し、母親の述懐ごとを聞に、十月のくるしみも生るゝ時、取あげばゞの骨折も、餅も鰹もみそ汁も同じ物入なるに、少の思ひ入にて、娘の子を悦ぶほど一代の損はなし。我子のかはゆきまゝに、顔付のむつかしい聟のきげんを取、大分の物を入敷がね迄付て、夜のもてあそび物にやりながら、さられぬやうにとおひげの塵をとり、五節供の祝義物に氣を張臺所賄ひの口のわるい古き婆に、をり／＼の心付して吉品に取なしをしてもらひ、年中の氣あつかひ、母の親の癪のたねとはなりぬ。せめて人並に生れつきて、當世風俗に色作りて、裸成とももらひたいといふ程なれば仕合なり。必ず男の子はうつくしく、娘の子は大かたかほふくれ、鼻ひくゝ胴あひみじかく、尻ひらたうひよつと出て、耳のちひさき物ぞかし。是一槩なる母のいひぶん、世に男子を調法して、其子惡事をなし、

夢にもしらぬ親まで難儀に及ぶ事を思へば、取方には悪女の方が増なるべし。男の子の玉のこしに乗て、親一門うかみあがりし事を聞ず、中より下の町人は、器量の善悪はかくべつ、娘の子には世話すくなし。郭巨が金の釜よりは、寶をほり出したる鋤鍬の金椙といふ所に、日雇取をして其日をやう〳〵に過ける、中椀の又兵衛とて律義成男あり。一人の娘を持しが、手入してからが迚妾ものに成ほどの器量にもあらず、是喰つぶしと觀念し、十一二迄なりやひにそだてし所に、本庄の姨が世話にて、去御大名の御家老の屋敷へ、十三より御奉公に出しけるに、奥様の御意に入、野菊と名を呼れて、十年餘りつとめし内におく様お果あそばされて、おつれあひの御家老御歎きふかく、月日たて共今に妻女の事わすれ給はねば、おのおの内談して、せめては御思ひばらしにもと、色盛の艶女あまた取よせ、御寝間のあげおろしに、風情つくりて出しけれ共、更に御心もかよはず、あたら姿のいたづらに過行ける。殿さまには御江戸詰にて、此御家老御國の御留守をあづかりよろづの指引、人皆悦びて直なる仕置者と稱美しける。豕子の夜は御家の御作法とて、御一門集て御祝義の酒盛、きげんよく御立ありて、その跡は俄にさびしく成て、東の方の書院に出給へば、宵は月見しに空さだめなく時雨て、軒の松無用の嵐をおとづれ、釣灯籠



のゆらぐを、誰かははづせとありしに、野菊かいどり前して御意にしたがひ、灯籠をおろし立歸る面影、何となくしめやかににくからぬ身ぶり、あづまそだちの女には、尋常成やうに御心うつりて、後帶の端をとらへて、我にいふ事有と、口ばやに仰られしを、何の御用やら知もせずして、もつたいない事をとにげんとするを、だきとめられしが緣の始にて、それにこしらへて夜の御伽の合點にて、御奉公にはる〴〵の都からくだりし、妾ものどもには御目さへやられず、さしてよい器量ともいはれぬ中椀の又兵衛が娘の野菊に、灯籠の夜から御不便くはへられて、度々御部屋へ御入有て、此上の果報、程なく懷妊して、旦那の滿足がり、四十餘に及ぶ迄子といふものゝなかりしに、出來したずゐぶん身を大事に持て、安産をいたすべしと、殿の御扶持人醫者をかけられ、御祈禱の山伏に、子安の祈を仰付られ、月重りて玉のやう成をのこ子をうみければ、一家中の悅び、幸若丸と名を付られ、御家の跡目とかしづきける。それより野菊はおくさまひろめ有て、御前樣とうやまひ、奥方の親御さまを、御屋敷へ入奉れとて、家來沼田瀨平治旦那の御意を承つて、乘物にて野菊が親を迎に來り、金杉の賤が家の、半分ちぎれたるなはなうれんをあげて、中椀の又兵衛樣所はこれにてさふらふかと尋れば、折ふし又兵衛中間の



日雇取二三人寄て、たがひの草臥やすめに、酒五合買て伊勢天目の欠たるにてのんで廻し、世に是よりうへのたのしみあらじと、餘念なき所へ、見なれぬ侍びゝしき躰にて尋ね來れば、又兵衛動轉して庭へ飛おり、私身において何も咎を仕りたる覺なし、去年吳服町の大文字やの普請にやとはれし時、穴藏をほりしに、赤銅の鯰の目貫を片斷なしに拾ひましたより外、人の物は錢壹文ちよろまかした事、日本國中の神々を誓文に入ござりませぬと、手をすつて申せば、瀬平次をかしく、いや〳〵御氣づかひ成事ではなし、御自分の御爲には大分よい事なればお悦びなさるべし。御内方樣御堅固でござらば、さぞおうれしうおぼしめさんに、去々年お果なされし段、奧樣にもいか程か殘念に思召、委細の樣子は御やしきにて申上べしとて、つゞれを着たる又兵衛を乘物に打のせ、飛が如くに屋敷へ歸り、すぐに奧へ入申せば、多くの女中がた乘物を手ぐりにして、奧樣の御部屋へかき込、乘物の戸明れば、又兵衛人心地はなくして、卽座に氣を取失ひしを、漸に呼生、氣付などなめさせ心をとくとしづめさせて、奧樣側へよらせらるれば、現在の娘を見違へ尻しざりして疊へあたまをにじり付、何をいふも耳へ入ず、御慈悲に御たすけなされて下さりませと、ほろ〳〵啼て申せば、是わしはこなさんの娘おきくでござると、詞をかへして申さるゝに、漸台點して、扨もおきくか、生をもかへず其やうにも成物かと、是より安堵して悦びぬ。さらば親ご樣＝御小袖召替させませうと、黃むくの下着にくろ羽二重の紋付のきる物、御肌の帶も仕替られませと、龍門の下帶をあてがへば、おしいたゞきてかきかへ、始めからしてゐる虱のわいた、木綿のふんどしを袂へ入るを、それはお捨なされませと、女中がた笑止がれど、是もたゞでは出來ませぬと、小袖に着替て俄に身をふるはしてくるしがる躰、何となされましたと野菊氣づかひして尋らるれば、我等に馳走ならば、此小袖をぬがして、今迄の木綿の袷をきせて給はれ、身中がこそばうてどうも着てはゐられぬと、色靑うしてくるしがれば、召つけて御肌馴し御着物なればさも有べしと、下にはその儘木綿の襦袢を着せて置ぬ。扨昔から御酒がお好とて高蒔繪の大盃を出せば、是よりは茶碗でと望む程にいかやう共御心まかせと、其日は行義を改めず、段々野菊が作法共をいひ聞すに、とかく本の

住家へ歸して給はれ、爰にゐて朝夕結構成生食を喰て、疊の上に荒働せずにくらしては、中々命が續かぬと、夜もむらさきぶとんの上にはねず、人寢しづまれば音せぬやうにそつとぬけ出、庭に荒筵一枚敷て、裸身付て是極樂と悦びぬ。然れ共若殿の祖父様なれば、家來の人々も此振舞を笑ふ事もならず、とかく御きげんのよいやうにと、様々もてなす程苦しがりて、たゞ古巣のはにふへ歸して給はれ、美食を食てたゞゐるゆゑ、骨々いたみめいわくいたすと難義がれば、然らばお慰に千本築をさせませと、俄に墨塗に高蒔繪の地築棒こしらへ渡せば、是々と悦び、身には小袖をまとひ、置頭巾にて、ヤアレ、天滿の、ヒンヨエと、月花にかへておもしろがり、一生安樂にくらし、八十八の升掻切て孫の殿に奉り、百歳まで堅固にて、おほくの人に御いんきよ様とかしづかれて、大果報の親父、猶繁昌の時にあひて心のまゝの榮花、めでたかりける老の入前

五之巻終

浮世草子集

大尾

昭和三年四月十二日印刷
昭和三年四月十五日發行

日本名著全集
第一期出版 江戸文藝之部
第九巻 浮世草子集
（非賣品）

編輯發行兼印刷者 東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

發行所 東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿七巻及追加篇二巻 書目豫定一覽

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一巻 第二巻 西鶴名作集 上下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑・○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懐硯 ○近代艶隠者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土産 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれづれ ○一目玉鉾

第三巻 芭蕉全集

正篇 ○蕉翁一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句評 ○紀行 ○消息 ○遺語

外篇 ○冬の日 ○春の日 ○初懐紙 ○曠野 ○ひさご ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○續猿蓑

附錄 ○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四巻 第五巻 近松名作集 上下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新暦 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上臈 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河浪鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧徳 ○五十年忌歌念佛 ○艶狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川

○心中天網島　○津國女夫池　○女殺油地獄　○信州川中島合戰　○心中宵庚申　○關八州繫馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上 下

○暦　○本海道虎石　○心中涙の玉井　○金屋金五郎浮名額　○金屋金五郎後日雛形　○枸久米松山　○富仁親王嵯峨錦　○お染久松袂の白しぼり　○鬼鹿毛無佐志鐙　○愛護若塒箱　○傾城思升屋　○八百屋お七　○心中二つ腹帯　○大塔宮曦鎧　○須磨都源平躑躅　○鬼一法眼三略巻　○壇浦兜軍記　○蘆屋道満大内鑑　○苅萱桑門筑紫𨏍　○敵討襤褸錦　○釜淵雙級巴　○ひらかな盛衰記　○御所櫻堀川夜討　○鶊山姫捨松　○夏祭浪花鑑　○菅原傳授手習鑑　○義經千本櫻　○假名手本忠臣藏　○双蝶々曲輪日記　○一谷嫩軍記　○本朝廿四孝　○奥州安達原　○關取千兩幟　○近江源氏先陣館　○神靈矢口渡　○妹背山婦女庭訓　○攝州合邦辻　○新版歌祭文　○伊賀越道中雙六　○近頃河原達引　○絲櫻本町育　○繪本太閤記

第八巻 歌舞伎脚本集

○參會名護屋　○兵根元曾我　○源平雷傳記　○百夜小町　○傾城淺間嶽　○成田山分身不動　○中将姫京雛　○丹波與作手綱帯　○傾城壬生大念佛　○鳥邊山心中　○嫗髮歌仙櫻　○心中鬼門角　○伊勢音頭戀寢刃　○漢人漢文手管始　○五大力戀緘　○金門五三桐　○四谷怪談　○與話情浮名横櫛

第九巻 浮世草子集

○新小夜嵐　○好色万金丹　○御前義經記　○傾城色三味線　○傾城禁短氣　○日本新永代藏　○世間息子氣質　○世間娘氣質　○浮世親仁氣質　○沖津白浪

第十巻 怪談名作集

○伽婢子　○狗張子　○怪談全書　○英草紙　○繁野話　○雨月物語　○唐錦　○莠句冊　○垣根草　○漫遊記

第十一巻 黄表紙廿五種

○金々先生榮花夢　○親敵打腹鼓　○長生見度記　○啌多雁取帳　○狂言好野暮大名　○大悲千祿本　○江戸生艶氣樺燒　○莫切自根金生木　○文武二道

万石通　○孔子縞于時藍染　○心學早染草　○卽席耳學問　○廬生夢魂其前日　○馬鹿長命子氣物語　○世上酒落見繪圖　○桃太郎發端話說　○十四傾城腹之内　○金々先生造化夢　○忠臣藏前世幕無　○世諺口紺屋雛形　○稗史億說年代記　○御誂染長壽小紋　○的中地本問屋　○人間萬事吹矢的　○人間萬事吹矢的（草稿）

第十二卷　洒落本集

○傾城買四十八手　○契情買虎の卷　○嫖客三體誌　○娼妓絹籭　○遊子方言　○月花餘情　○百花評林　○大抵御覽　○異素六帖　○鄽中奇譚　○辰巳の園　○和唐珍解　○通言總籬　○辰巳婦言　○令子洞房　○寸南破良意　○仕懸文庫　○猫射羅子　○道中粋語錄　○聖遊廓　○錦の裏　○三教色　○契國策　○眞女意題　○甲驛夜の錦　○田舍芝居　○婦美車紫鹿　○起承轉合　○梓町甲閨　○古契三娼　○滸都洒美撰　○夜半の茶漬　○志羅川夜船　○穴學問　○狂訓彙軌本紀　○娼妃地理記　○遊僊窟煙の卷　○女郎買糟味噌汁　○美地の蠣殼

第十三卷　讀本集

○櫻姬全傳曙草紙　○昔話稻妻表紙　○本朝醉菩提　○三七全傳南柯夢　○占夢南柯後記　○天羽衣　○飛驒匠物語

第十四卷　滑稽本集

○風流志道軒傳○古朽木○阿多福假面○指面草○人遠茶懸物○無彈砂子○小紋雅話○奇妙圖彙○浮世風呂○早變胸機關○客者評判記○浮世床○人間萬事虛誕計○同上後篇○假名手本藏意抄○一盃綺言○古今百馬鹿○八笑人○七偏人○柳巷訛言○市川評判圖會○室の梅○福來雀○一雅話三笑○言葉の花○鯛の味噌津

第十五卷　人情本集

○春色梅曆　○春色辰巳園　○春色惠之花　○英對暖語　○梅見船　○閑情末摘花　○假名文章娘節用　○八萬鐘

第十六卷　第十七卷　第十八卷　南總里見八犬傳　上中下

第十九卷　狂文狂歌集

○古今夷曲集　○萬載狂歌集　○萬代狂歌集　○四方のあか　○四方の留糟　○千紫萬紅　○萬紫千紅　○めでた百首　○かくれ里の記　○（石川雅望の作では）狂文あづまなまり　○吉原十二時　○（風來山人のものでは）風來山人六々部集（前篇）○（風來山人六々部集（後篇）○風流志道軒　○（手柄岡持のものでは）我おもしろ

第廿卷　第廿一卷　偐紫田舍源氏　上下

第廿二巻 第廿三巻 膝栗毛其他 上下

○東海道中膝栗毛 ○續膝栗毛 ○續々膝栗毛 ○南總記行旅眼石 ○江戸前噺鰻 ○落咄彌次郎口

第廿四巻 第廿五巻 和文和歌集 上下

○賀茂翁家集 ○にひまなび ○歌意考 ○天降言 ○うけらが花 ○琴後集 ○楫取魚彦家集 ○ひとよはな ○東遊日次記 ○藤簍冊子 ○志濃夫廼舍家集 ○蘆庵六帖詠草 ○桂園一枝（景樹）○言道歌集 ○良寛歌集 ○女流歌文集

第廿六巻 川柳雜俳集

○武玉川十八篇 ○柳多留三十一篇 ○誹風柳多留拾遺十篇 ○川傍柳五篇

○第廿七巻 俳文俳句集

○五元集（其角）○五元集拾遺（同）○五元集脱漏（同）○雜談集（同）○類柑子（同）○玄峰集（嵐雪）○其袋（同）○去來丈草發句集 ○ひとりごと（鬼貫）○鬼貫句選（鬼貫）○七車（同）○とくとくの句合（素堂）○讃寒（許六）○風俗文選（同）○葛の松野（支考）○笈日記（同）○雅文消息（許六・野坡）○蛙合（仙化）○俳諧職人盡（蓼和）○鶉衣（也有）○蕪村句集（蕪村）○蕪村文集（同）○新花摘（蕪村）○寫經社集（同）○十番左右句合（同）○明鴉（几董）○續明鴉（同）○新雜談集（同）○井華集（同）○太祇句集（太祇）○春泥句集（春泥）○三春日記（蓼太）○芙蓉文集（耳得）○白雄句集（白雄）○骨書（樗良）○俳ざんげ（大江丸）○はいかい袋（同）○曉臺句集（曉臺）○佐渡日記（同）○おらが春（一茶）○一茶句集（同）○鼠の道行（成美）○成美家集（同）○蔦眼集（道彦）○鶴芝（士朗）○斧の柄（乙二）○續繪歌仙（宜麥）○屠龍の技（抱一）

追加篇 第廿八巻 歌謠音曲集

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段）○艶容女舞衣（下の巻・酒屋の段）○戀娘昔八丈（下の巻・鈴ケ森の段）○桂川連理柵（下の巻・帶屋の段）○廓文章（吉田屋の段）○傾城戀飛脚（下の巻・新口村の段）○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段）○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段）○木下蔭狹間合戰（七つ目 竹中陣屋の段）○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段）○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段）○八陣守護城（八の切・正清本城の段）○生寫朝顔日記（宿屋の段）○壺坂靈驗記（澤市内の段）○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段）○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切・碁立の段）

○河東節

○松の内　○神樂獅子　○隅田川舟の内　○禿萬歳　○炎すゑ巖の疊夜着　○酒中花　○水調子　○うかぶ瀬　○ぬれ扇　○亂髪夜編笠　○助六所縁江戸櫻　○常陸帶花柵　○道成寺　○淨瑠璃供養　○邯鄲　○熊野　○泰平住吉踊　○浮世傀儡師（外記物）　○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季　○松づくし　○泰平船づくし　○高砂松の段　○神樂高砂　○罌繪の島臺　○萬屋助六心中　○自然居士過去物語　○源氏妹が宿　○夕霞淺間嶽　○尾上雲賤機帶　○源氏十二段　○賴光大江山入　○鉢の木　○與作小萬夢路の駒　○道行三度笠　○鵜飼石和川　○お夏笠物狂　○競牡丹　○源平妹脊の鶏合

○常磐津節

○老松　○子寶三番叟　○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）　○積戀雪關扉（關の戸）　○四天王大江山入（古山姥）　○兩顔月姿繪（惣寶）　○戻駕色相肩（戻駕）　○帶文桂川水（お半）　○倭假名色七文字（源太）　○壽靭猿　○松色操高砂（太神樂）　○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木　○寄罠娼釣髭（釣狐）　○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）　○恩愛瞳關守（宗清）　○顧絲絛苧環（おみわ）　○忍寄戀曲者（將門）　○花舞臺霞猿曳（新うつぼ）　○新負雪間の市川（新山姥）　○乘合船惠方萬歳（乘合船）　○其扇屋浮名戀風（夕霧）　○景清　○勢獅子劇花籠（勢獅子）　○釣女　○戻り橋　○三保の松　○松の島　○三世相錦繡文章（おその六三）　○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）　○四十八手戀所譯（相撲をし鳥）　○百夜菊色の世中（關寺）　○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）　○其俤淺間嶽（淺間）　○道行戀飛脚（梅川忠兵衛）　○ゟ連理橋（蟲賣）　○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）　○花川戸身替の段（身替お俊）　○春夜障子梅（夕霧）　○新曲かぐら獅子（神樂獅子）　○徒髪戀曲物（松風）　○茂懺悔睦言（扇賣高尾）　○道行念玉蔓（長作）　○幾菊蝶初音道行（忠信）　○拙筆力七以呂波（乙姫）　○草枕露の玉歌和（玉川）　○奈須野　○御代榮益穗富種（豐の前）　○高砂女夫

○清元節

○梅の春　○榮能春延壽（長生）　○北州千歳壽（北州）　○四季三葉草　○其小唄夢廓（權八）　○絲の五月雨（小菊半兵衛）　○深山櫻及兼樹振（保名）　○御名殘押繪交張（鳥羽繪）　○月雪花名殘文臺（玉兎）　○詠梅松清元（茶筅賣）　○色山解深川（待人）　○大和い手向五字（子守）　○色彩間刈豆（かさね）　○法

花姿色同（山歸り）○月花玆友鳥（山姥）○籠花手向橋（吉原雀）○復新三組盞（大山參り）○道行浮塒鴎○道行旅路の嫁入（八段目・おかげ參り）○六歌仙容彩（文屋・喜撰）○彌生の花淺草祭（惡玉）○おどけ俄煮珠取（玉屋）○道行旅路の花聟（落人）○再春菘種蒔（舌出し三番）○初霞淺間嶽（淺間）○〆能色相圖（神田祭）○造鈨菊睦言（菊畑三菊）○菊嬉闇睦言（お岩）○倭假名色七文字（手古舞）○重褄闇の小夜衣（白絲）○明烏花濡衣（浦里）○梅柳中宵月（清心）○日月星晝夜の織分（夜這星）○初櫓噂高島（三人三吉）○貸浴衣汗雷（夕立）○忍逢春雪解（三千歳）○色增艶夕映（雁金）○花雲助相肩（雲助）○青海波○助六曲輪菊（助六）

○新 内 節

○二重衣戀占（花咲綱五郎）○若木仇名草（蘭蝶）○千日寺名殘鐘（三勝半七）○眞夢血染抱柏（花蘭平三）○歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）○傾城音羽瀧（おとは七郎兵衛）○膝栗毛「赤坂の段」○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪（浦里）○明烏後眞夢○累身賣の段

○薗 八 節

○道行相合巨燵（梅川）○桂川戀の柵（お半）○鳥邊山○花街の色糸（植木屋）（○道行菜種の亂咲（お花半七）○江戸の綸姿（おひな吉三郎）○道行綠花房（お花半七）○口舌八景（小いな半兵衛）○小春治兵衛巨燵の段○夕霧

○江 戸 長 唄 （めりやす大薩摩を含む）

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流相生獅子（相生獅子）○二人椀久○英獅子亂曲（枕獅子）○百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）○高尾さんげの段（高尾懺悔）○天人羽衣○京鹿子娘道成寺（娘道成寺）○英執着獅子（執着獅子）○風流妹脊の杜建（杜建）○門出京人形（水仙丹前）○亂菊枕慈童（菊慈童）○鐘入解脱衣（解説）○劍帽子照葉盞（劍烏帽子）○柳雛諸鳥囀（鷺娘・うしろ面）○初咲法樂舞（法樂舞）○ねこのつま○乗掛情の夏小立（與作）○鞭櫻宇佐幣○百夜車○姿の鏡關寺小町（關寺）○春調娘七種（七種）○童子戲面被（めんかぶり）○衣かづき思破車（やれ車）○童獅子○教草吉原雀（吉原雀）○相生獅子○嫐染分紅葉（うはなり）○隈取安宅松（安宅）○御代松子日初戀（小松曳）○其容形七枚起請（こもそう）○關東小六後雛形（淡島）○其面形二人椀久○黑かみ○女夫松高砂丹前（高砂丹前）○菊壽の草摺○勢五大力○吹雪の雛形（雛形狂亂）○三重霞嬉敷顏鳥（三重霞傀儡師）○舞扇薗生梅（舞扇）○濱松風戀歌（濱松風）○ゆかりの月○美面より○七枚續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）○遲櫻手爾葉七字（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲甕）○戀男調松風（調松風）○再春菘種蒔（舌出し三番叟）○戀民奇掛合（犬神）○四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）○問玆姿八景（節季候・心猿・晒女）○正札附根元草摺（正札附）○寄三津再十二支（小原女・乙姫・四つ竹）○其九綸彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）○

○新獅子　○三升猿曲舞（猿舞）○石橋（外記の石橋）
○老松　○不動　○七所御攝初鐵漿（西王母・藪入
娘）○大和い手向五字（官女・牛若）○外記猿　○
復新三組盞（初雁の傾城）○廓三番叟（廓三番）
○歌へす〴〵餘大津畫（藤娘・關三の座頭・關三の奴）
○月雪花蒔繪の巵（月の巻）○拙筆力七以呂波（芝
翫の傾城・供奴・浦島・瓢簞鯰）○八重霞賤機帶
（賤機）○後の月酒宴島臺（角兵衛獅子）○御歳玉海老
手遊（とんび奴）○吾妻八けい（八景）○六歌仙容
彩（業平小町）○姿花後雛形（小鍛冶）○初子日
○俄獅子○外記の傀儡獅　○初しぐれ　○巽八景
○花翫暦色所八景（助六・景清・新鶯娘）○勸進帳
○花兄弟十二月所作（若菜摘・鍾馗・雷）○島臺　○
軒端松○士農工商○秋色種○雛鶴三番叟　○
花見車○手習子○織どの○常磐庭○鶴龜
○五色の絲○今様小鍛冶○柳糸引御攝（裸三番
叟）○壽○鞍馬山○翁千歳○三番叟○廓丹前
○菖蒲ゆかた○喜三之庭○紀州道成寺○連獅
子○時雨西行

○歌澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加篇 第廿九卷 **謠曲三百番集**

○脇能物

○高砂○弓八幡○志賀○淡路○御裳濯○
代主○佐保山○松尾○養老○老松○白樂
天○放生川○鶴龜○東方朔○白鬚○大社
○寢覺○源太夫○道明寺○難波○鵜祭○
輪藏○富士山○江島○賀茂○嵐山○氷室
○逆矛○要石○和布刈○竹生島○九世戸
○岩船○金札○吳服○西王母○右近○繪
馬○鱗形○玉井○内外詣

○修羅物

○田村○八島○箙○忠度○俊成忠度○經
政○通盛○兼平○賴政○實盛○巴○清
經○朝長○敦盛○生田敦盛

○三番目物

○野宮○井筒○芭蕉○采女○東北○梅
○佛原○墨染櫻○身延○半蔀○夕顏○定
家○江口○揚貴妃○雪○二人靜○千手
○六浦○藤○杜若○羽衣○誓願寺○小鹽
○雲林院○遊行柳○西行櫻○陀羅尼落葉○
源氏供養○大原御幸○吉野靜○住吉詣○松
風○熊野○草紙洗小町○山姬○祇王○胡
蝶○吉野天人○鷺○葛城○龍田○三輪
○卷絹○檜垣○關寺小町○鸚鵡小町○姨捨

○四番目物

○三井寺　○櫻川　○柏崎　○百萬　○飛鳥川

○雲雀山○隅田川○蝉丸○花筐○班女○
加茂物狂○水無月秡○籠太鼓○富士太鼓○
梅枝○玉葛○浮舟○三山○卒都婆小町○
碪(砧)○求塚○水無瀬○藍染川○竹雪○
鳥追舟○籠祇王○室君○初雪○花車○女
郎花○戀松原○善知鳥○阿漕○藤戸○松
虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○雨月
○鐵輪○葵上○道成寺○木賊○景清○弱
法師○俊寛○攝待○鉢木○土車○高野物
狂○芦刈○盛久○春榮○小督○七騎落
○仲光○切兼曾我○安宅○木曾○元服○
曾我○小袖曾我○重盛○楠露○櫻井○正
行○藤榮○放下僧○花月○自然居士○東
岸居士○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲
○枕士童○菊士童○天鼓○咸陽宮○大佛供
養○夜討曾我○橋辨慶　○湛海○忠信○錦戸
○禪師曾我○關原與市○現在巴○正尊○草
薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

○五番目物

○鵜飼○野守○鍾馗○昭君○松山鏡○壇
風○烏帽子折○熊坂○鞍馬天狗○車僧○
善界○大會○第六天○葛城天狗○殺生石
○小鍛冶○鵺○舍利○谷行○雷電○國栖
○春日龍神○大蛇○龍虎○愛宕空也○飛雲
○現在鵜○大江山○土蜘蛛○羅生門○安達
原○紅葉狩○船辨慶○山姥○項羽○碇潜
○一角仙人○張良○皇帝○融○須磨源氏
○絃上○海士(人)○當麻○來殿○松山天狗

○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々○翁○大
典閑曲曲舞獨吟○護法○豐千○千引○常陸
帶○空蝉○鵜龍田○阿古屋松○榮式部○鶉
○松浦物狂○鵜羽○布留○丹後物狂○牽牛
花○十番切○笠卒都婆○隱岐院○明智討
○柴田○北條○吉野詣○高野詣○池贄○
鞨○恭
其他

以上日本名著全集、第一期出版「江戸文藝之部」全廿七巻及追加篇二冊は、第十一巻黄表紙廿五種を第一回配本として毎月一冊乃至二冊宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の增大に件ふ多量製產の利得を以て、益ゝいゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別。從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）

